



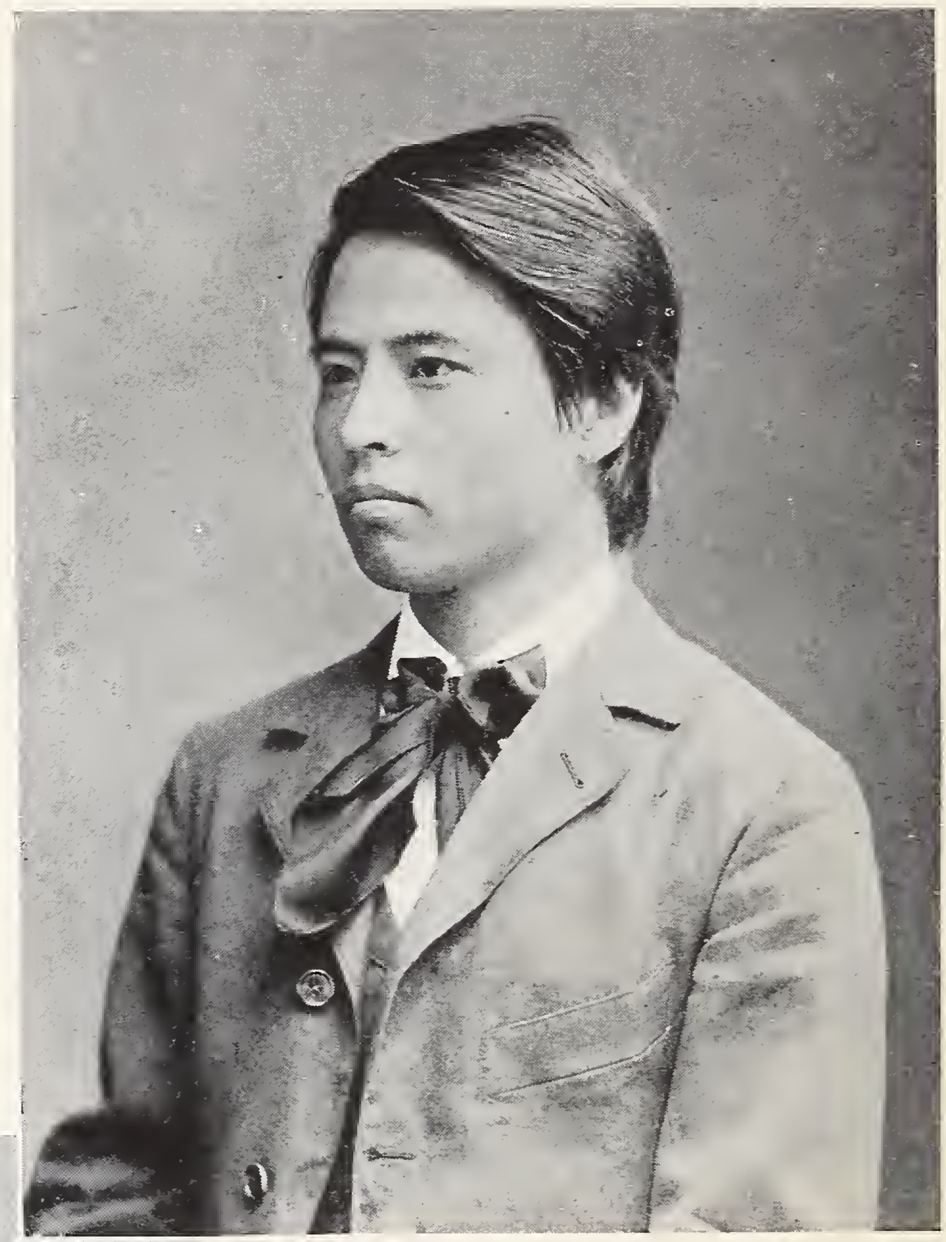


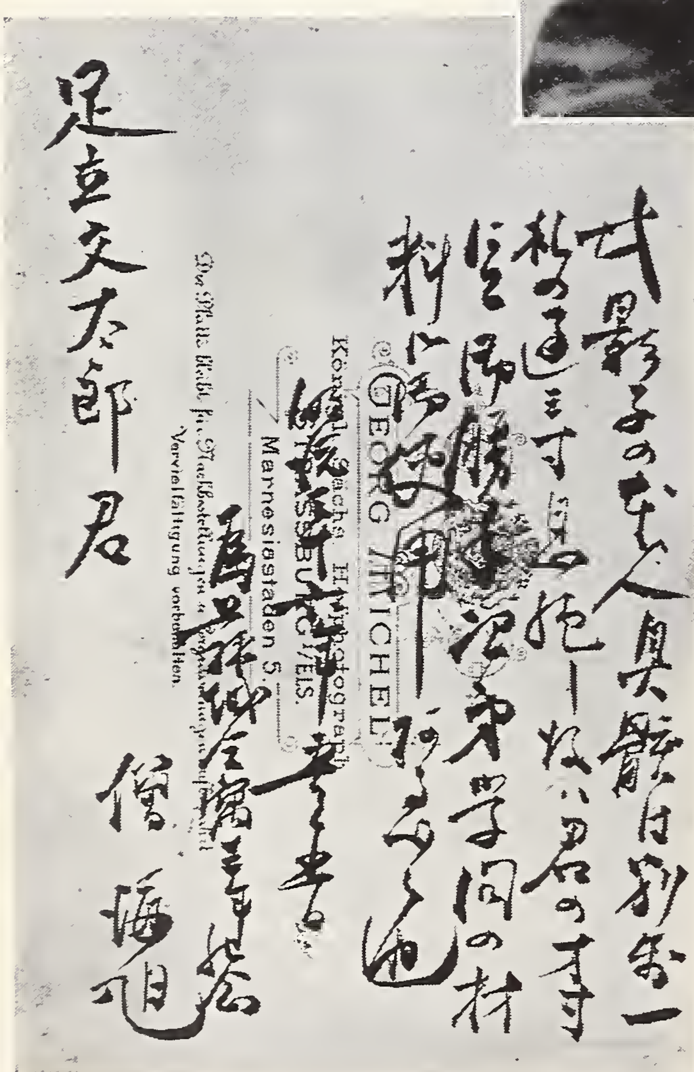
『渡邊海旭遺文集』

壺月全集

下卷

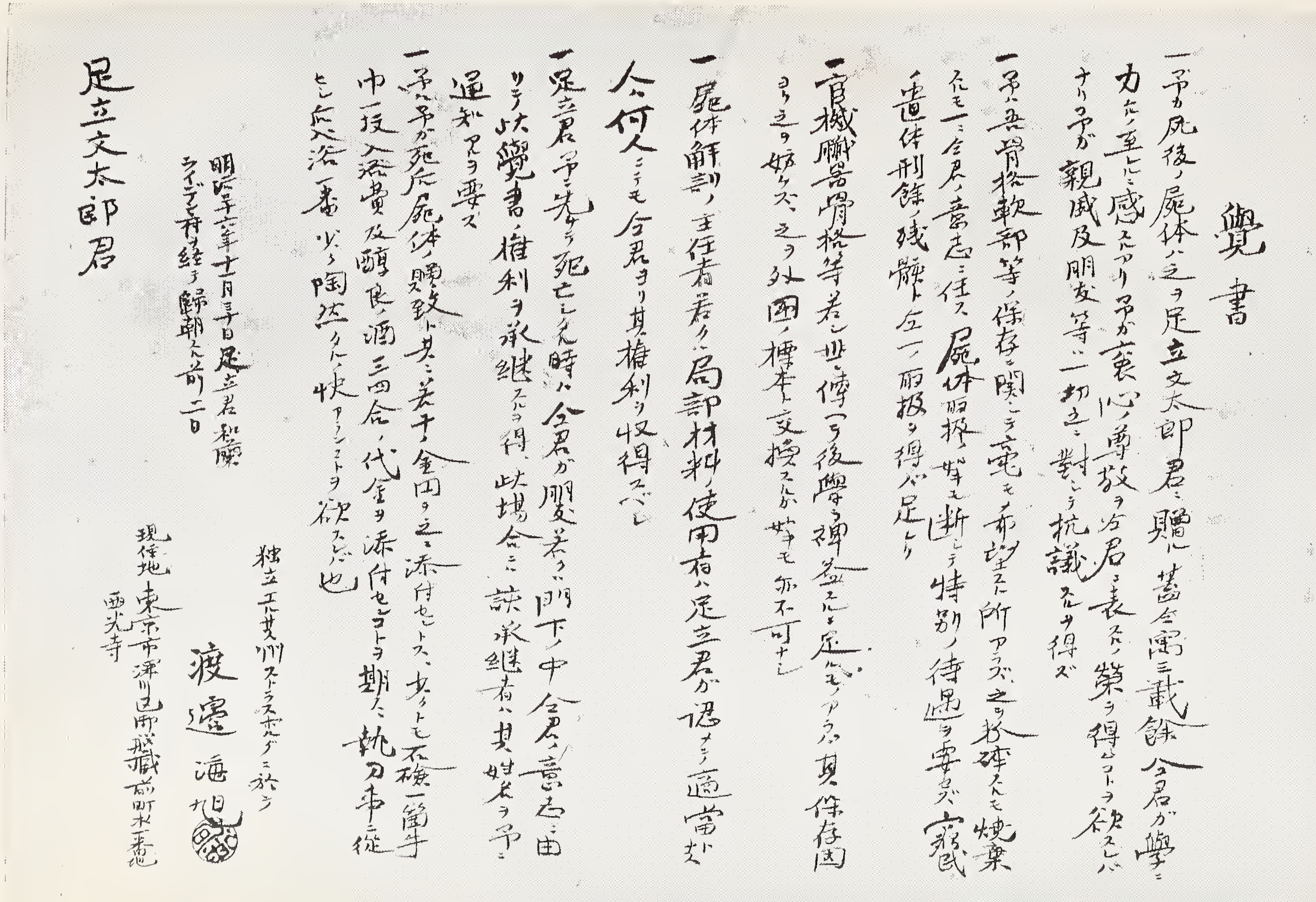
壺月全集刊行會





△上圖は明治三十六年撮影にかゝるもの。左圖はその裏面にして即ち故人が死後の遺骸を學問研究の爲めに解剖に附すべきを約せられたるもの。

（次の覺書參照）



覺書

一 予ガ死後ノ屍体ハ之ヲ足立文太郎君ニ贈ル 蓋シ仝君ガ學ニ力ヲ至セルニ感スル所アリ予ガ衷心ノ尊敬ヲ仝君ニ表スルノ策ヲ得ンコトヲ欲スレバナリ予ガ親戚及朋友等ハ一切之ニ對シテ抗議スルヲ得ズ

一 予ハ吾骨格軟部等ノ保存ニ関シテ毫モ希望スル所アラズ 之ヲ粉碎スルモ焼棄スルモ一ニ仝君ノ意志ニ任ス 屍体取扱等ニ就テ特別ノ待遇ヲ要セズ 寧ロ遺体刑餘ノ残骸ト全一ニ取扱ヲ得バ足レリ

一 官機臓器骨格等若シ世ニ傳ヘテ後學ヲ裨益スルニ足ルモノアラバ其保存ハ固ヨリ之ヲ妨ゲズ 之ヲ外國ノ標本ト交換スルガ如キモ亦不可ナシ

一 屍体解剖ノ主任者若クハ局部材料ノ使用者ハ足立君ガ認メテ適當トナス人何人ニテモ仝君ヨリ其權利ヲ收得スベシ

一 足立君予ニ先ダチ死亡シタル時ハ仝君ガ門人若クハ門下ノ中仝君ノ意志ニ由リテ此覺書ノ權利ヲ承継スルヲ得 此場合ニハ該承継者ハ其姓名ヲ予ニ通知アランコトヲ要ス

一 予ハ予ガ死后屍体ノ贈致ト共ニ若干ノ金円ヲ之ニ添付セントス 少クトモ不検一箇年中一技ノ溶費及醇良ノ酒三四合ノ代金ヲ添付セシコトヲ期ス 執刀者ニ從ヒ之ヲ入浴一番ノ後ニ陶然タルノ快アランコトヲ欲スル也

明治三十六年十一月三十日足立君ライデンヲ経テ歸朝スル前二日

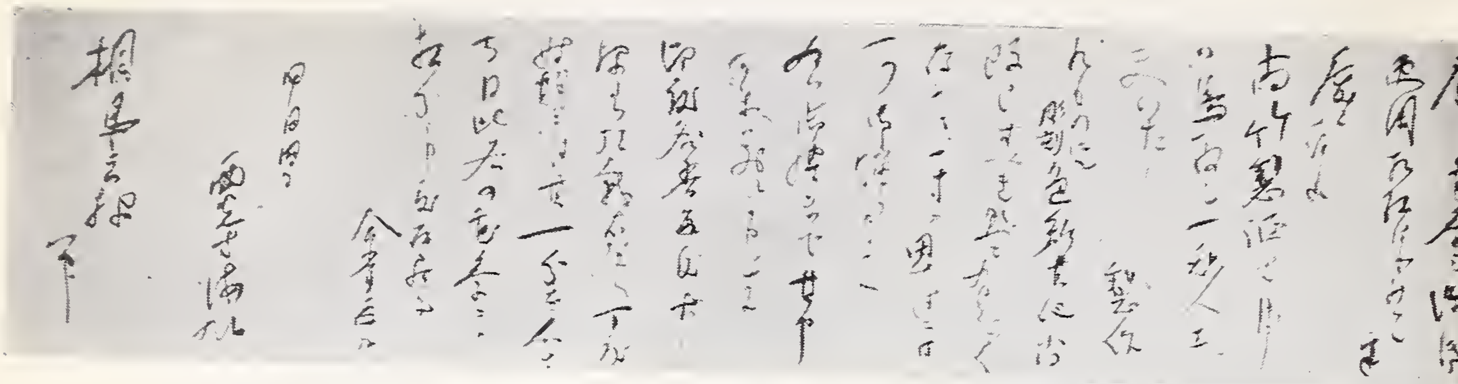
独立エルザス州ストラスボルグニ於テ

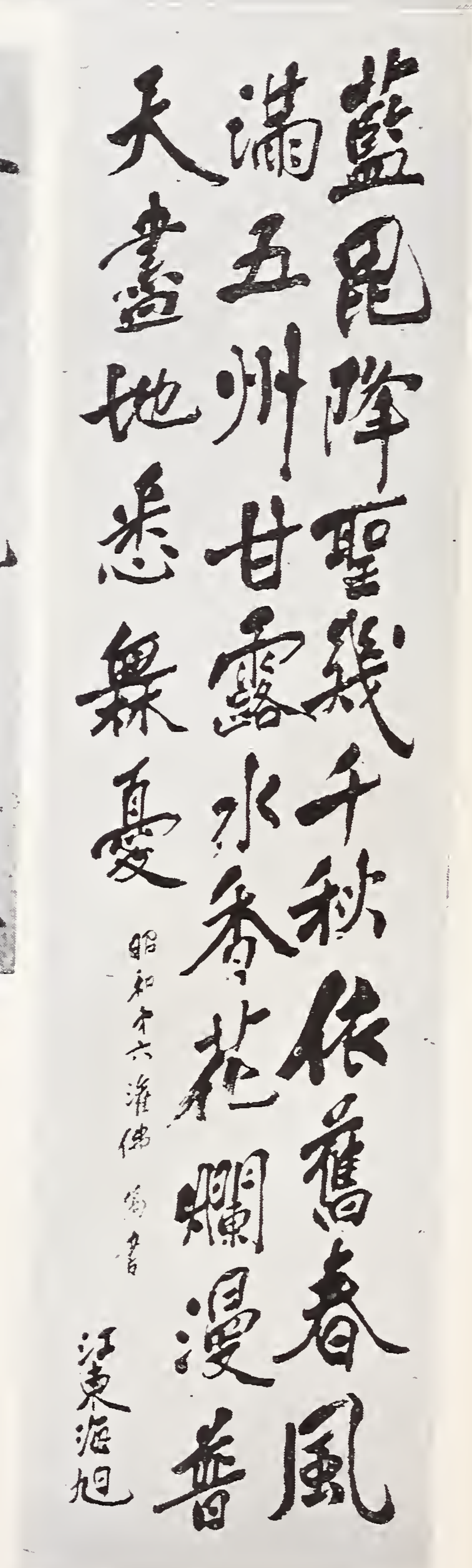
渡邊海旭

現住地東京市深川區[illegible]町十一番地
西光寺

足立文太郎君

足立博士に手交せる解剖依頼の覺書（前掲寫眞參照）此の約は三十一年後の昭和八年二月二十八日即ち遷化後三日にして東帝大病院にて足立博士執刀の元に果されたのである。

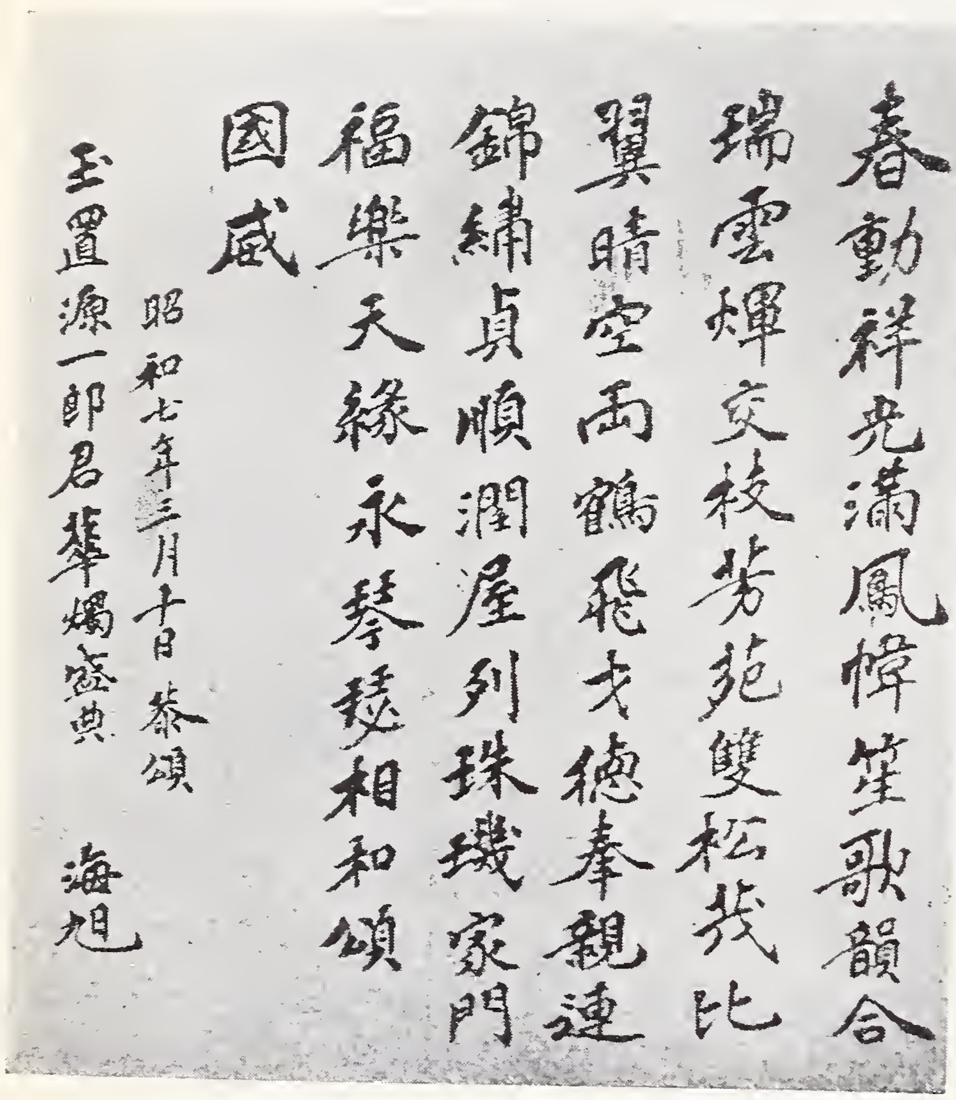




藍毘降聖幾千秋依舊春風
滿五州甘露水香花爛漫普
天盡地悉無憂

昭和十六 灌佛

江東泥旭



春動祥光滿鳳幃笙歌韻合
瑞雲輝交枝芳苑雙松茂比
翼晴空兩鶴飛戈德奉親連
錦縟貞順潤屋列珠璣家門
福樂天緣永琴瑟相和頌
國威

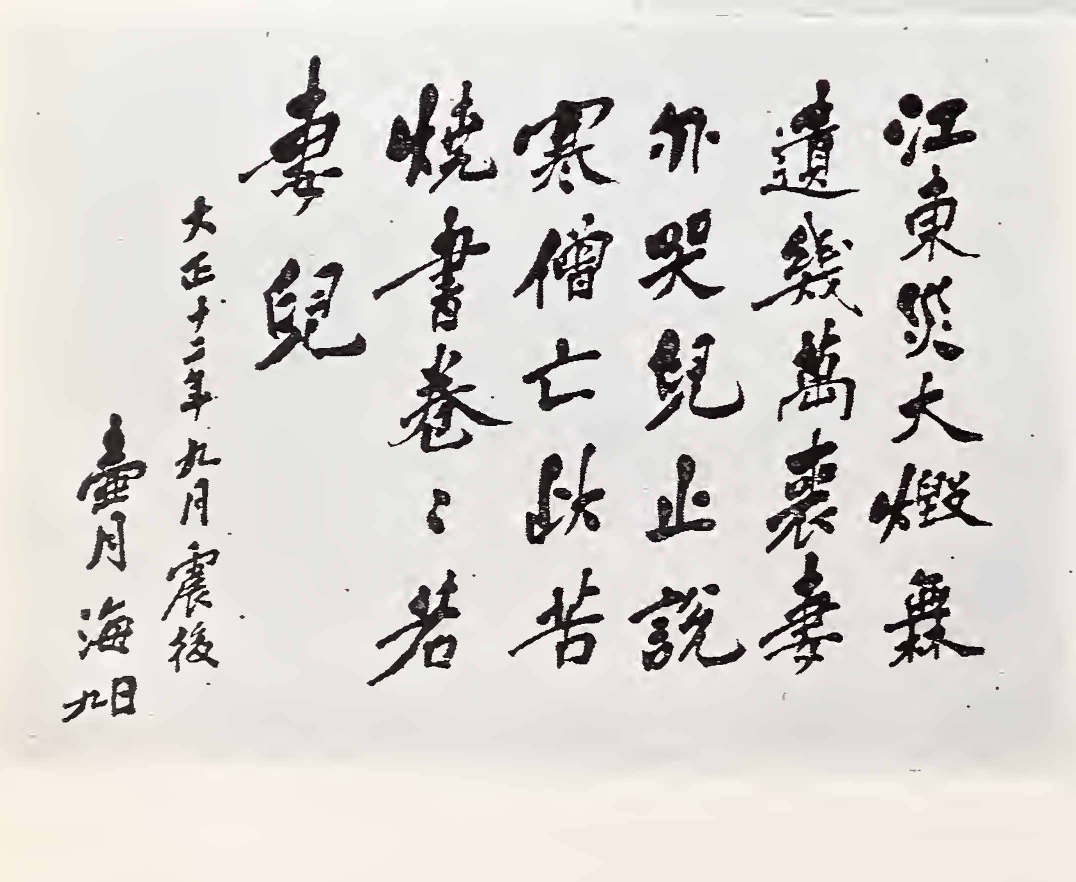
昭和七年三月十日 恭頌

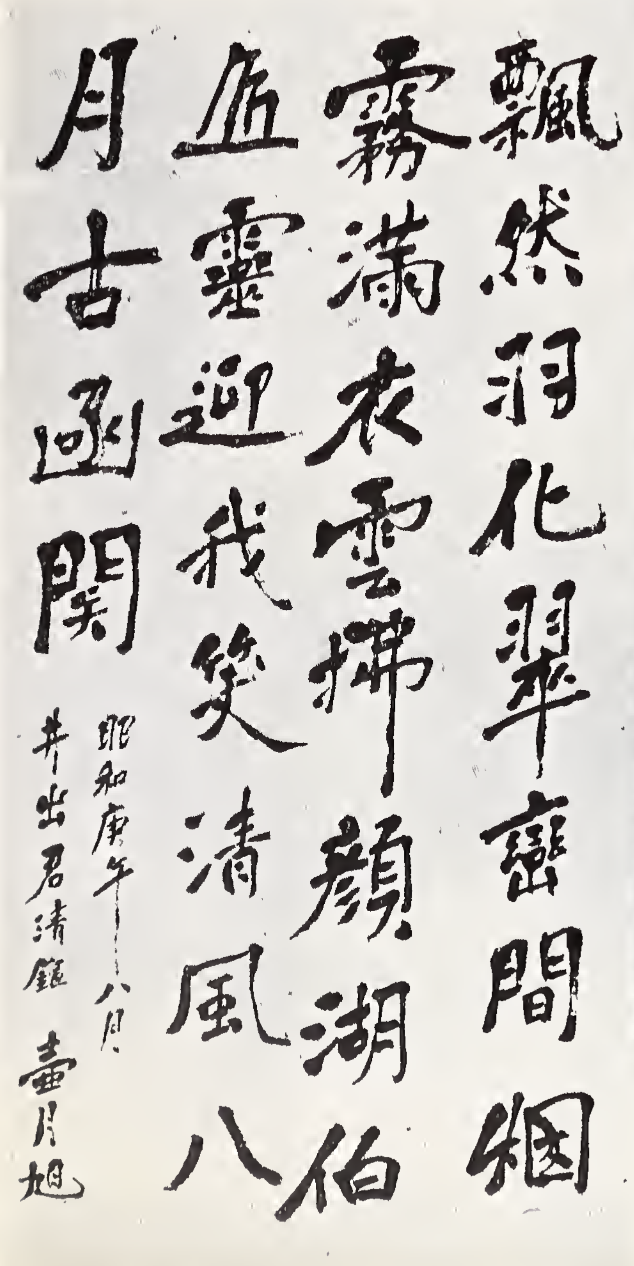
玉置源一郎君華燭盛典 海旭

上掲、相馬氏宛書翰の一節
右は灌佛偈（岩野氏藏）
下は西光寺檀家總代玉置氏令息華燭の典に寄せられしもの

故人の筆蹟。下圖は大震災に於て自坊の一切を燒燼せられし時の感懷を詠じ記されたるもの。

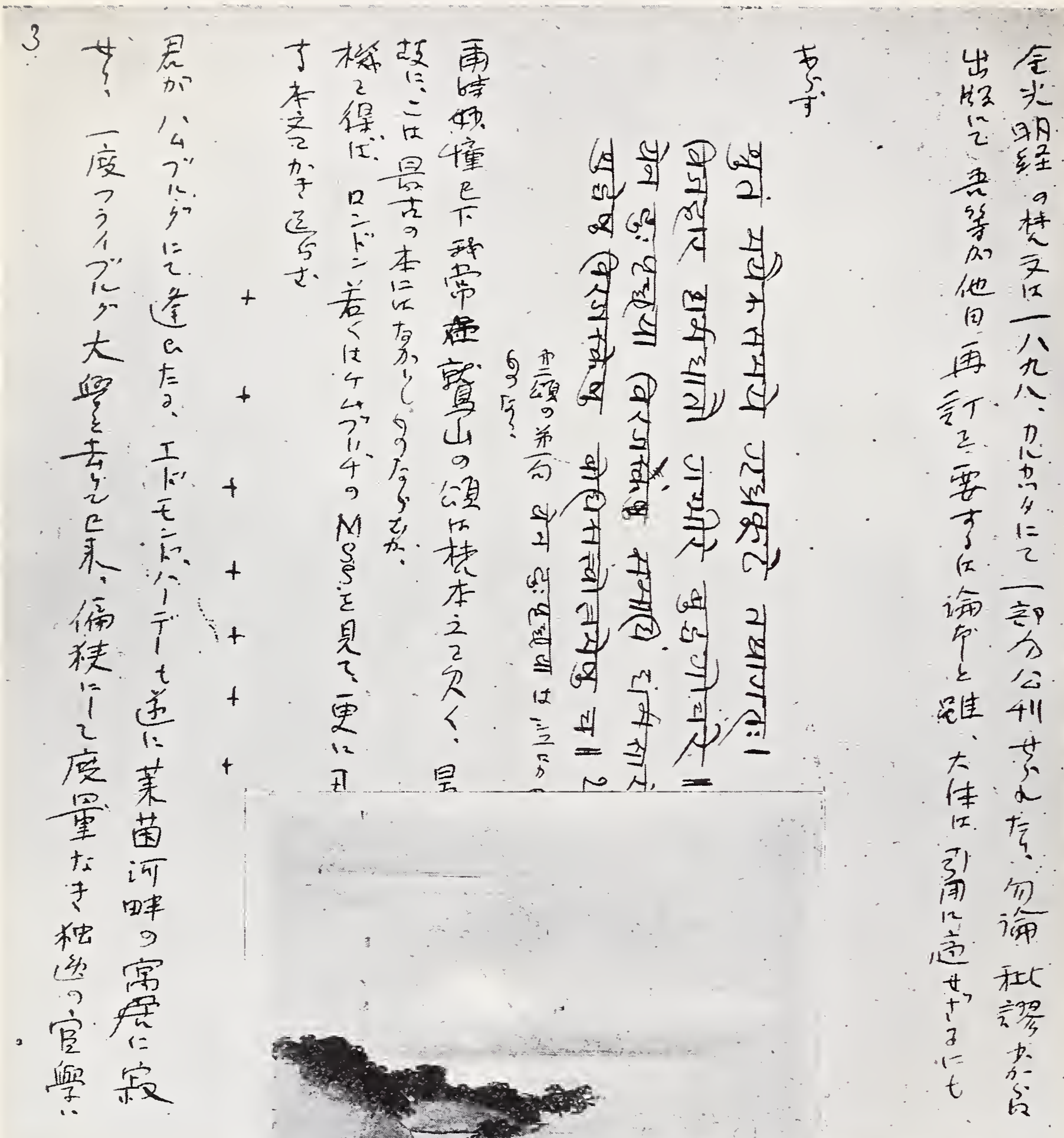








故人の晩年（大正八九年頃より）愛惜せられし箱根町本還寺を中心とする芦の湖畔の風光
毎夏必ず居をこゝに移され此の山水を友としつゝ「山上のつどひ」や「青年聯盟」の集會
などをしで居られた（中央より稍左林の中の三角形に見ゆる建物が本還寺）左の詩文は同
寺總代井出氏に寄せられしもの



金光明経の梵文は一八九八、カルカッタにて一部分公刊せられたり、勿論秕謬少からず
出版にて吾等が他日再訂を要するは論なしと雖、大体は引用に適せざるにも
あらず

寿量品の第一句

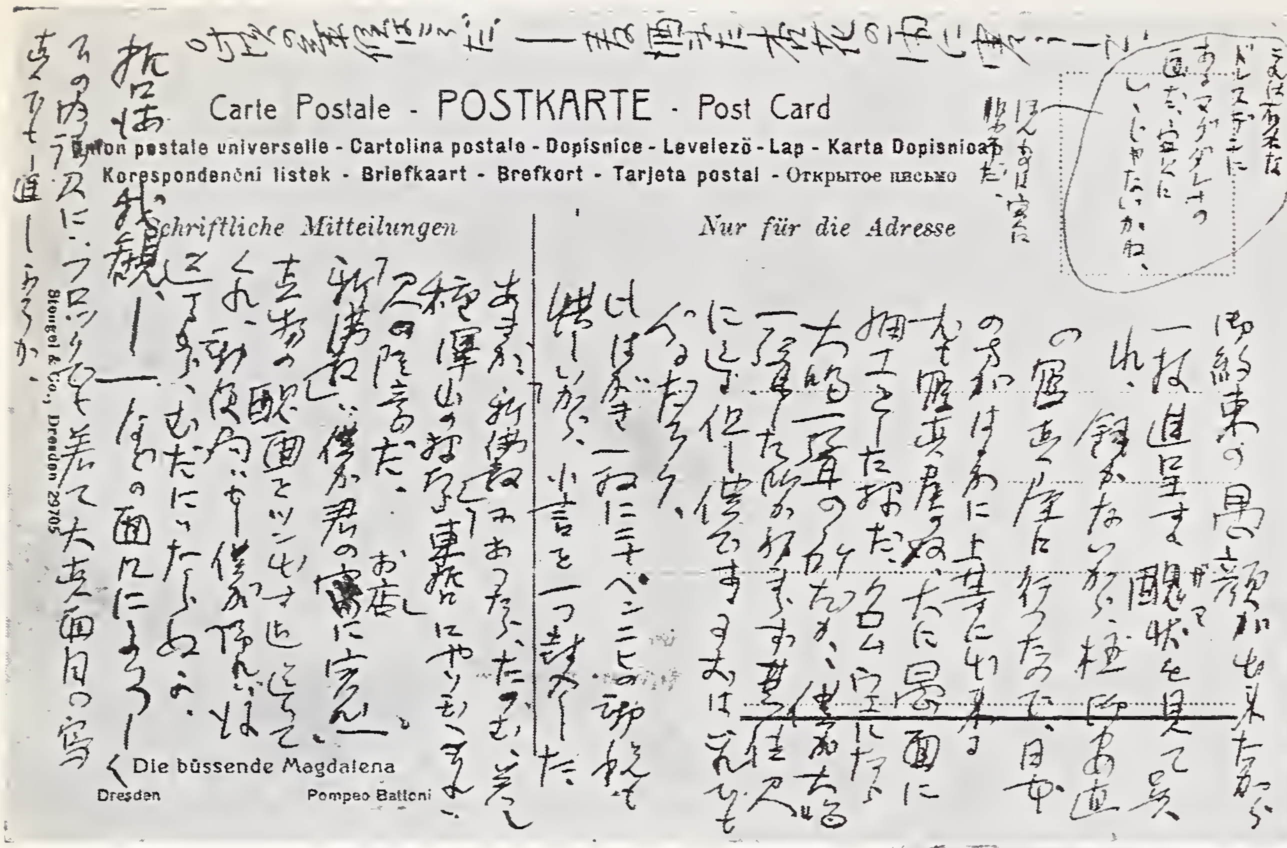
両時妙幢已下…寶山の頌は梵本之を欠く、是
故に、これは最古の本にはなかりしものならんか、
梵本を得ば、ロンドン若くはケムブリッヂのMSS.を見て、更に
す本文をかきて送らむ

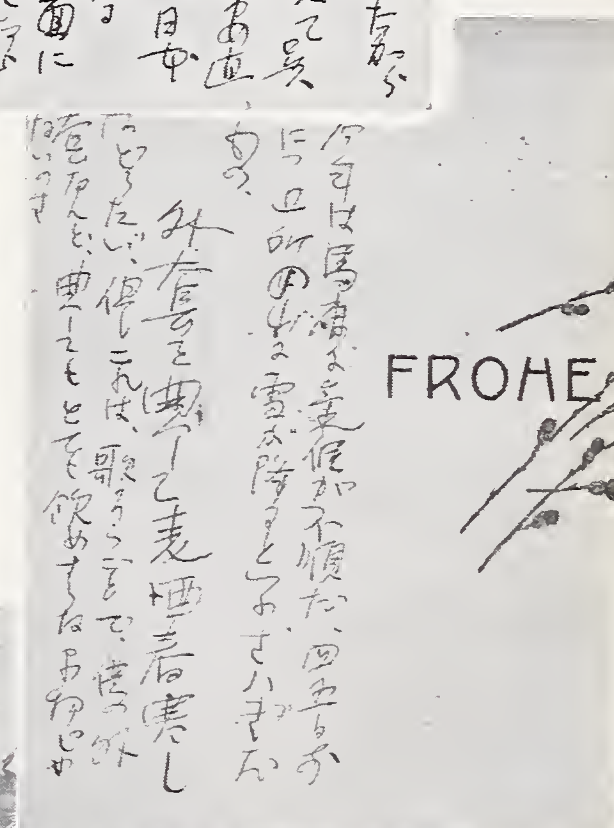
君がハムブルグにて逢ひたる、エドモンド、ハーデーも遂に萊茵河畔の寓居に寂
せり、一度フライブルグ大學を去りし来り、偏狭にして度量なき独逸の官學は

上圖、明治三十七年十二月二日獨逸より姉崎正治氏へ寄せられたる書信の一節



右圖、繪葉書明治十年三月獨逸より姉崎氏へ寄せられしもの





三葉共明治卅七八年頃獨逸より高島米峰氏に寄せられたるもの　斯様な情味掬すべき書信は數十通に達してゐる。上揭の裏面は名畫でそれを寫眞に添えて送られたもの。下揭は杉村縦横（楚人冠氏）と長谷川醫博との寄せ書き。





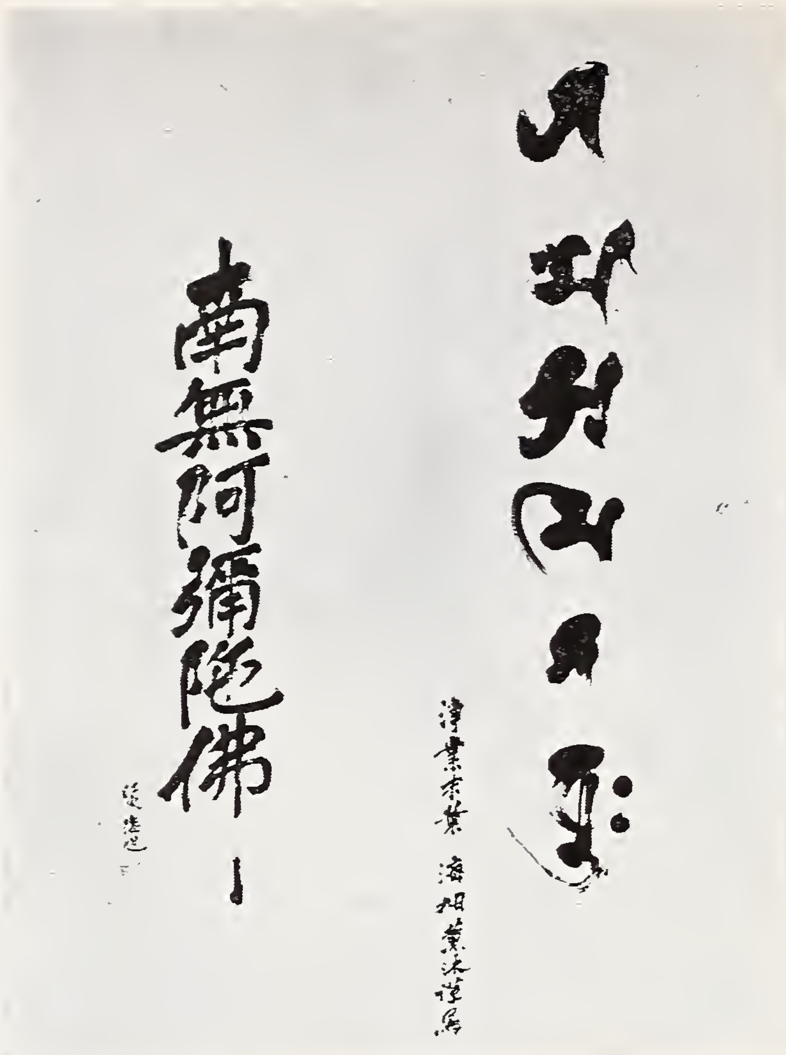
大正十二年九月大震災の無礙を喜びて故人を圍む親戚
（右より大島氏二男泰淳君・大島泰信氏・故人・大島氏長男泰雄君・大島氏長女眞百合孃・大島鶴子夫人（故人令妹）赤尾光雄氏
赤尾光雄氏母堂（故人令妹）



雜誌「佛教」發行時代の撮影にかゝる　前列向つて右より平子鐸嶺氏・境野黄洋氏・釋清潭氏・安藤弘氏・故人
後列　右より梶寶順氏・鷲尾順敬氏・結城素明氏



大正五年六月三日國士館に於て　前列向て右より徳富蘇峰氏・故澁澤榮一氏・故野田卯太郎氏・頭山滿氏　後列柴田德次郎氏　故人



右掲、梵字名號（裏辻倫道氏藏）。漢字名號は昭和五年十一月筆（石田海彰氏藏）

下圖、昭和八年五月四日、故人の法號と寫眞を印度初轉法輪の聖蹟卒堵波に埋藏するところ。中央沙彌の捧持せる白き楮は法號、その右は署名入りの影像。その右の洋裝は野生司香雪氏。此の日午前九時初轉法輪寺（ムラガンダクテビハーラ）比丘衆埋藏會の讀經ありて後ち納む。



故人葬儀の實況

（上）芝中の敎へ子一千二百に護られ靈柩大本山增上寺山門より大殿に向ふ。
（中）靈柩哀愁の裡に自坊西光寺を出づ。
（下）會葬者無慮八千增上寺大殿の內外立錐の餘地なく香煙濛々たる中 大導師道重大僧正の下炬。



凡例

本全集下卷には、上卷の學術的研究論文以外の全部を收むることになつて居るので、明治廿五六年代より現時に至るあらゆる關係文獻を涉漁する一方、各方面の方々に材料の提供を依賴し、幸ひ續々その貸與を得、小品文範、遺墨斷片に至る迄、その數頗る多きに達し、それがため編輯を約半歲延期して專らその全貌の體系を整ふるに努めた。

然し愈々編輯に着手するに際し、直ちに逢着した難事實は、もし夫等一切の文獻遺墨を收めつくしたならば非常に尨大なものになるは勿論、同一論旨の論文感懷等も頗る多數に上つて、內容上可なりの混雜を來す事であつた。蓋し故師は學者であり、德者であり、事業家であると共に、終始一貫操觚者であつた。卽ち學生時代より長逝に至る迄、在獨時代をもこめて淨土敎報、新佛敎、敎學週報、勞働共濟等の雜誌に直接主筆、或は有力な寄稿家となつて關係する一方、あらゆる方面に健筆を揮はれた。故師に執筆を得る事は非常な難事とされて居つたが、然し斯樣に遺墨を蒐めて見るとその浩澣にして多方面に亘る點、眞に驚くべきものがある。要するに故師は確か

その警世時言の如き、順を逐ふて繙讀して行く時、故人が社會教界宗門に寄せられたる警策熱意には、その一言一句悉く襟を正さしむるものあるを覺ゆる。然して又一面、『新佛教』等に寄せられたる隨筆消息等に至つては、その不羈縱橫にして而も情誼溢るゝ風格が躍如たるものあるを思はしむる。眞にこれ明治大正昭和の教界三時代を通貫する大文獻たるを失はぬであらう。

上下兩卷の編纂に着手してより正に十一ヶ月、漸くその業を終へて、早くも月餘の內には壹周忌を迎へんとするに際し、感懷更に切なるものあるを覺ゆる。

嗚呼、此の全集の成る今日の昨年の頃は、教界到る所に、その豁達な巨軀が運ばれて、教界、思想界を中心に、現代日本は故人に俟つもの頗る多くあつたが、一年の後には、斯くも幽明境を異にして、全集上下兩卷が作らるゝとは誰か之を想像した事であつたらう。昭和六年一月、門下生等が故師の還曆祝賀の計劃をなした時、直ちに其を謝絕して書を送つたその中に、

「文集出版などは無益の事に候。良寛でも行誡でも生前には一つの歌集一つの詩集無之、これが僧家の面白味に候、念々無常、今年か來年死亡の後に集めてよろしきものは集むが宜しく、これも勿論無益の事に候も、物ずきの御方々の御骨折にまで死人は口出は出來申すまじくと存じ候」……(下卷五九六頁參照)

に多作の筆の入たるを餘儀なくされた形であつた。斯様な次第でその季節により又問題により掲載場所を異にするのみで同一論旨のものも相當にあるので、之等は悉くその代表的なものを選び、同時に內容に於ても所謂本格的な主調をなすものを撰ぶ事とした。但し詩文は全同なもの以外はその全部を收めた、然し組版後發見のものも一二あり、幾分不載錄のものもある筈である。消息はその大多數は在獨時代のもので、歸朝後は多く極めて簡略な用件を記したものゝみで、それらは私事に亘るものと共に掲載を省略した。

斯くてその全般を、

一、講說論策　二、警世時言　三、感懷隨筆　四、詩藻文範　五、牘箋消息

の五部に分ち、その附錄に略歷、素描集、年譜、諸家哀悼文等を收めた。

右樣の編輯方針をとつた關係上、蒐集されたものゝ內、その二三割に當るものは採錄を見合せ、その草稿は全部整備したまゝ、本會に保存する事となつた。故師の偉大なる文績に對し、斯く取捨を縱にした事情を述べて、故師並に江湖諸彥にその諒承を希ふ次第である。

本卷の成るに際し、上下兩卷を通じ今更ながら故師の文績芳躅の偉大なるに驚歎せざるを得ぬ。

目次

講説論策

慧澄和上と行誡上人（明治二九、九、十、佛教）……一
奮つて聖典原文の研究に從事せよ（明治三〇、二、十、佛教）……八
日露戰爭と獨逸の輿論（明治三七、七、十、淨土敎報）……一三
大乘婦人の理想（大正二、五、一、精華）……一六
現代感化救濟事業の五大方針（大正五、二、勞働共濟）……一七
勞働と藝術（大正五、九、勞働共濟）……二三
世界大戰と宗教思想の現在將來（大正五、九、淨土敎報）……二三
精神外交の要（大正六、二、日印協會々報）……三三
佛教の國家觀（大正七、二六、淨土敎報）……三九
社會問題の趨勢及其中心點（大正七、一二、二五、勞働共濟）……四一

と記されたが、此の文意が偶然にも適確に死期を豫言された事は驚くの外はない。而も天下の物ずきが寄り集つて遂に此の遺稿全集を刊行するに至つたのであるが、今頃は西方淨土の蓮の臺で、例の超然とした苦笑を續けて居らるゝ事であらう。

本全集刊行については計劃當初、門下生等平素故師關係の事業に關係ある人達が編輯方針等を定め、直接編輯刊行事務には、材料蒐集事務に武藤叟氏、材料整備事務に四湖山秀暢氏、總括的編纂に栗本俊道氏が當られ、その間、高島米峰氏は所藏する多くの雜誌消息文を貸與さるゝと同時に幾多の指示を與へられ、小林正盛氏は病中ををして詩稿全部の校訂に當られ、又金子全應氏は明治四十年以後の淨土教報誌全部を寄贈せらるゝ等、その外あらゆる方面より甚大なる便誼を寄せられた事は深謝の外はない。——その芳名は卷末に掲載の榮を得た——茲に深く謝意を表する次第である。

昭和八年十二月八日佛成道の日

壺月全集刊行會

代表者識

宗教の飢饉と其對策（昭和四、五、教育と宗教）……一五一
婦人に寄する言葉（昭和五、八、婦女界）……一五四
本尊の中にある吾等（昭和六、十二、淺草寺講演）……一六〇
救世の三德（昭和六、十二、東亞青年居士會叢書）……一六八

× ×

小金井觀櫻記（明治廿二、本校一年の作文）……一七九
評高麗之夜嵐（明治廿八、七、）……一八〇
高等專門科卒業式答辭（明治廿八、七、）……一八〇

× ×

警世時言

內務省の三教會同計劃を評す（明治四五、一）……一八二
活施餓鬼を修すべし（明治四五、七）……一八五
現代富豪に望む（明治四五、七）……一八六
先帝陛下御追恩（大正元、八）……一八八

人類最高の二大理想（大正八、二、増上寺日曜講演集）……四五
宗祖中興二祖の教義の異同と現代の淨土宗（大正八、五、淨土教報）……四九
佛教より見たる勞働問題（大正八、十一、二一、淨土教報）……五一
戰後思想及生活の指導としての法然上人の教義（大正九、九、増上寺日曜講演集）……五九
大乘佛教の精神（大正十、一、増上寺日曜講演集）……七九
現代救濟と涅槃の理想（大正十、三、増上寺日曜講演集）……九六
絶滅か希望か（大正十、十二、増上寺日曜講演集）……一〇三
祈禱を要せざる宗教（大正十一、二、無礙光）……一〇八
釋尊降誕の意義（大正十一、四、東光）……一一三
現代布教の中心問題（大正十一、八、二五、淨土教報）……一一六
哲學と宗教（大正十一、九、淨土教報）……一二三
佛教々典に現れたる排酒の制條（長野縣禁酒聯合會講演）……一三二
正信と邪信（大正十一、九、東光）……一三九
感情生活の完成……一四三
法然上人の教義とその十大特色（大正十三、三、東光）……一四八

淨土宗全書の完成（大正三、三）……二〇六
大岡文相の新任を評す（大正三、四）……二〇六
黄金萬能の惡夢（大正三、五）……二〇八
時　言　數　題（大正三、七）……二〇九
海軍問題と口錢の處置（大正三、七）……二一〇
世界大戰を前にして（大正三、八）……二一一
世界戰禍に處するの道（大正三、九）……二一三
世界宗教一轉機の時（大正三、十）……二一四
宗教大學の佛教古經書畫展覽會に寄す（大正四、五）……二一五
浦鹽開教と支那布教（大正四、六）……二一七
宗門布教退嬰萎靡の兆あり（大正四、六）……二一七
外人の佛教新歸依（大正四、七）……二一九
大谷光瑞師を評す（大正四、九）……二二〇
博士となれる椎尾辨匡氏（大正四、九）……二二一
河口慧海氏の西藏尼波羅將來資料（大正四、十）……二二二

各宗先づ人物を獲よ（大正元、九）……一八八
布教家に寄す（大正元、一〇）……一九〇
歳末と佛教行事（大正元、十二）……一九一
人事忽忙（大正元、十二）……一九二
元老を論ず（大正元、十二）……一九三
吾々は尙佛教徒たり得るか（大正二、一）……一九四
一宗公僕主義の實行（大正二、五）……一九五
小林芳次郞君の「念佛たばこ」（大正二、八）……一九七
乃木將軍の一週年を迎へて（大正二、九）……一九八
宇井、神林、池田三氏を送る（大正二、九）……一九九
增上寺山內寺院の活用に就て（大正二、十二）……二〇〇
江原素六氏に言ふ（大正二、十二）……二〇一
加特力教の威力を論じ增上寺再建運動に及ぶ（大正二、十二）……二〇二
大古の中大新あり（大正三、一）……二〇三
布教時言（大正三、二）……二〇四

選擧卽傳道（大正五、十二）……二四六
矢吹氏の歸朝を迎ふ（大正六、一）……二四七
淑德高女廿五年記念式（大正六、一）……二四八
夏季寺院の活用を期せよ（大正六、七）……二五〇
大學と風紀肅淸運動（大正六、一一）……二五一
基督敎徒の陋態（大正六、一二）……二五二
新戒律主義を提唱す（大正七、一）……二五二
時局傳道會議に際し布敎家の自覺を促す（大正七、三）……二五五
尼僧活用の途（大正七、七）……二五七
細民の父母たれ（大正七、九）……二五八
宗大生に望む（大正七、九）……二五九
外資による敎育事業の狂態（大正七、九）……二六〇
原內閣に望む（大正七、九）……二六一
大鹿中島兩法主晉山の意義（大正七、十一）……二六三
美の京洛は信の淨土たれ（大正七、十一）……二六四

大典參列と法衣着用禁止問題（大正四、十）……二二三
人口問題に於る宗教的解決（大正四、十一）……二二五
功勞者旌表の批議に對して（大正五、三）……二二七
神社對宗教の問題（大正五、三）……二二八
宗大佛專卒業生を迎へて（大正五、三）……二二九
教育の缺陷とその責任者（大正五、四）……二三〇
帝大佛教講座の設置（大正五、五）……二三二
宗教大學の三十年式典（大正五、五）……二三三
タゴール翁の來朝（大正五、六）……二三五
日露新協約と佛教（大正五、六）……二三七
信洲善光寺の係爭問題（大正五、八）……二三八
法主選擧の醜爭を誡む（大正五、九）……二四〇
教化洽及策とその中心點（大正五、十）……二四一
佛教護國團の成立に際し（大正五、十）……二四三
九十老法主の化導（大正五、十一）……二四五

萬國日曜學校大會に寄す（大正九、八）……二八九
黄金散盡敎歌舞（大正九、十）……二九一
萬國日校大會場の燒失、佛徒の大乘的態度（大正九、十）……二九二
大本妖敎隱匿の暴露（大正十、五）……二九四
宗敎大學圖書館の起工（大正十、五）……二九六
冬民長谷川君の滿鮮視察（大正十、五）……二九八
中央佛敎會館成る（大正十、十）……二九九
東西兩本願寺と大學の昇格（大正十一、五）……三〇一
敎育界の醜狀（大正十一、五）……三〇二
鮮人敎化の急務（大正十一、六）……三〇三
青民と白嶺（大正十一、八）……三〇五
片山禁酒翁の志操に學べ（大正十一、九）……三〇六
權田雷斧和上の延壽會を慶して越智專明老師を偲ぶ（大正十一、十）……三〇八
節約儉素慚愧報謝あれ（大正十一、十）……三一〇
羅馬法王廳使節問題と敎家將來の覺悟（大正十二、二）……三一二

寺庭家庭教會の設立普及を計れ（大正八、一）……二六四
一の奥村瓜生女史なき教界（大正八、一）……二六六
兒童教化事業の革新を期すべし（大正八、二）……二六七
女子教育機關の充實を計れ（大正八、二）……二六九
勞働問題の興起と寺院の對策（大正八、九）……二七〇
都市の發展と寺院の將來（大正八、十）……二七二
中等教育私見（大正八、十）……二七四
新傳道方策（大正八、十）……二七六
人材の育成と宗門の將來（大正八、十）……二七七
我等に御名あり（大正九、一）……二七九
二月廿七日を迎へて（大正九、二）……二八一
ニヤナチロカ長老を迎ふ（大正九、五）……二八二
佛基兩教徒と國際問題（大正九、五）……二八四
迷信妖教の流行と教家の責務（大正九、七）……二八六
學士院旌表不當問題を評す（大正九、七）……二八七

呑龍信仰と兒童保護の精神（大正十五、九）……三三八
靜寛院宮奉讃法要と東京寺院（大正十五、九）……三三九
×　×
自家坊主頭の蠅を追へ（大正三、十）……三四一
寺院墓地問題の現在（昭和七、八）……三四二
×　×

感懷隨筆

壺中乾坤（大正十五、讀賣新聞）……三四三
光壽無量の新春（明治四五、一、淨土教報）……三五二
天上の薔薇（大正三、一、精華）……三五三
病後漫錄（大正七、五、淨土教報）……三五四
光りを仰ぎて（大正八、一一、淨土教報）……三五六
春が來た（大正十、三、東光）……三五八
理智より信仰へ（大正十、三、東光）……三五八

東西諸本山の御忌法會を革新せよ（大正十二、三）……三一四
道重信教氏の增上寺瑞世に際し（大正十二、六）……三一六
盂會の盛行を期すべし（大正十二、六）……三一七
大震災の襲來（大正十二、九）……三一九
大震災と宗門對策（大正十二、十）……三二〇
各宗派宗議會を評す（大正十三、二）……三二二
開宗紀念大會に寄す（大正十三、二）……三二三
門主引退說の一掃を期す（大正十三、三）……三二六
隣の糂汰がめ（大正十三、五）……三二八
教學週報創刊に際し（大正十五、七）……三二九
宗教法案に對して文部當局及佛教徒に云ふ（大正十五、八）……三三〇
教學精神の實動を促す（大正十五、八）……三三一
日華佛教徒の親善と光明大師の遠忌（大正十五、八）……三三三
講習會の流弊を改むべし（大正十五、八）……三三五
佛教梵文學の研究と巨匠の精進（大正十五、九）……三三六

趣味の食物と實用の食物（大正十一、五、料理の友）……四〇三

×　×

渡歐に際して告別す（明治三三、四、淨土敎報）……四〇六
香港より（明治三三、五、淨土敎報）……四〇七
新嘉坡より（明治三三、六、淨土敎報）……四〇八
コロンボより（明治三三、七、淨土敎報）……四〇九
日想觀樓雜感（明治三四、五、淨土敎報）……四一一
濫讀半日（明治三七、二、新佛敎）……四一五
無用の辨（明治三七、十一、新佛敎）……四一八
マリヤ祭の夜（明治三八、二、新佛敎）……四二〇
たん壺（明治三八、三、新佛敎）……四二四
ラインだより（明治三八、十二、淨土敎報）……四二六
殘雪點々（明治三九、六、新佛敎）……四二九
壺中乾坤（明治四十、一―五、新佛敎）……四三一
「新佛敎」の諸兄に寄す（明治四十、二、新佛敎）……四四九

法悦の春（大正十二、一、東光）……三六三
新春漫錄（大正十五、一、芝中校友雜誌）……三六八
四つのL（昭和五、一、芝中校友雜誌）……三七〇
塵餘殘筆（昭和五、二、敎學週報）……三七三
消夏兩題（昭和五、七、芝中校友雜誌）……三七六
秋窓閑筆（昭和五、九、敎學週報）……三八〇

×　×

獨有荻原雲來氏の歸鄉を送る（明治三八、八、淨土敎報）……三八三
梅原融君の逝去を悼む（明治四一、二、新佛敎）……三八七
ヴイゴー、フアウスボヱール先生を哭す（明治四一、六、東洋哲學）……三八八
リヒヤード、ピツシエル敎授を弔す（明治四二、三、東洋哲學）……三九二
牧師ベツヘル氏を想ふ（明治四三、五、淨土敎報）……三九六
嗚呼マハテロ、スマンガラ師（明治四四、七、新佛敎）……三九八
薄伽梵歌譯主戸松學瑛氏を紹介す（明治四四、十二、新佛敎）……三九九
吾が米峰（昭和二、十一、佛敎思想）……四〇〇

牘箋消息

獨逸より……五四七
雲箋小片……五四八
歸朝後……五六九
×　×
普選と僧侶參政權につき……五九九
學生時代の書簡……六〇〇
×　×

附錄

傳記……六〇一
發病より本葬まで……六〇八
諸家の哀悼文……六〇九
素描集……六〇九
略年譜……六二七

滯獨雜感（明治四一、三、新佛敎）……四四三
萊江雜信（明治四一、九、新佛敎）……四四六
漫言數則（明治四二、六、新佛敎）……四五一
× × ×
足立文太郎氏に與ふる屍體贈呈の覺書……四六四
× ×

詩藻文範

漢詩……四六五
俳句……四九三
慶弔文範……四九四
碑文……五一六
序文……五一七
趣意書……五三九

講說論策

寫　眞……「在獨時代影像並解剖に關する消息」。「解剖に關する覺書」。「函嶺と故人」。「遺墨（その一）」。「遺墨（その二）」。「消息三篇（その一）」。「消息二篇（その二）」。「故人並その因戚」。「雜誌新佛教同人の集ひ」。「國士館に於ける故人とその關係者」。「筆蹟名號並初轉法輪寺埋影の圖」。「葬儀の圖」。

講説論策

慧澄和上と行誡上人

天保の末年より嘉永安政に及び、幕政の紀綱漸くに弛み、緣山の盛觀隨て衰微の色を呈し、台德公の廟前、一莖二莖の雜草を留めんとし、堂裡の香火漸く疎にして供花また鮮かならず、白眉の老僧、燈前に嗟嘆して元祿繁華の昔を談ず、然れども山內幾多の僧房學寮、性相の研究未だ昔日の風格を墮さず、講鐘朝に響き論鼓夕に轟きて、三千の學僧、惠解の研磨は尙了的廓山當時の餘影を忍ばしむ、而して此等紛々雲の如き衲僧の中に、嶄として頭角を露呈し、鼎立對峙、各其長する所を擅にして緣山の叢林を江湖に重からしめしもの三士、學寮の新參古參寒夜爐邊を圍みて放談快話に嘖々嘆說するを聞けば、儒者徹定、天台圓海、道心行誡と。

風雲倏變、世態忽ち王政維新の春を歌ふて、百般の事物許大の激變に逢着し、驚濤怒瀾は敎門を漂蕩して法運實に危殆なるの間に立ちて、此三傑僧は各其特秀の面目を開展し、特有の長技を揮擢して、明治初年の佛敎史に陸離たる光芒を留めぬ。一は六尺豐肥の一大漢、學識博雅、百般の學藝に該通し、能く勁拔富膽の雄文を作り、宏達の度量廢佛毀釋の當時より、大敎院の成立に及びて、益其の價値を天下に識られ、次て西都の華頂山を董して、一時各宗の管長社會を橫行したりし養鸕徹定師。一は長身七尺、鐵の如き筋骨を有し、眼彩奕々、音吐朗々、深邃なる學問、靈活なる識量の外、一種の熱血熱淚と經世の技量とを有して、或は兵を東臺に論じ、或は財を南都に埋め、和敬會の創立者として、明道協會の精神として佛敎演說の開祖として、天下を聳動したる熱椀神原精二居士。他は則ち瘦身骨立、衣に勝へさるか如く、風丰淸奇、溫雅たる面容、無限の學識を藏めて、隆然たる德望、海內を風靡し、大內、河瀨等許多の好漢を感化して德澤尙今に章々たる福田行誡公、三者は實に明治の佛敎史上に於て特筆すべき偉人なり、緣山學席の定紋、昔より三星を以てす、三傑僧

て世尊に比するもの、蓋し偶然にあらざるなり、天台の圓中敬師和上の像に賛して曰く。

卓矣我師　神契廓然　學該大小　顯密普宣　闢幽明道　聲振玉泉　卓錫兩叡　深徴因緣　模範四王　法祖十禪

著書百卷　刊行盛傳　壽八十三　說法卅年　卓矣我師　彷彿金仙

贊固より溢美の詖評なるにあらず。

和上の名聲、旣に此の如く大也、今此に贅せすと雖、世皆之を知る、而も海は深を厭はす、山は高きを厭はず、日は明なるを厭はず、刀は利を厭はす、善は數するを厭はずといふ、則高德和上の如きの傳や、朝誦夕讀、見ること千回するも固より厭ふべきにはあらざらむ、文辭固より拙陋、然れども事の偉大なるに至りては、われ深く大方の一たび眼を勞するを信じて疑はず。

和上諱を痴空といふ慧澄は其字、愚谷と號す、安政九年十二月滋賀の仰木村に生る、傳へ云ふ父母横川の慈惠大師に祈りて得る所と、幼時蒙然として痴呆なるが如し年十歲、叡山安樂院の大雲律師を拜して祝髮す、幾くもなくして師の寂に遇ひ、文道沙彌を以て依止の師とす、學に力むる精勵晝夜を別たず、憔悴骨立、夷然として知らざるが如し、其義を論ずるや、大體を達觀して瑣細を問はず、理に敏にして事に暗く往々迂なるが如し、而も其言の遠大正明なる、往々にして驗あり。故を以て師と合はず、去りて正脫沙彌に從ふて江尾の間に遊學するもの數年、學業漸く圓熟の境に入る。

文化六年叡山大衆の請によりて倶舍頌疏を無動寺に講ず、是和上が法輪を轉ずるの嚆矢とす、翌年に至り東遊して東臺に留まる六年、玄義と文句とを講じ、講了るや師跡安樂院に歸りて具足戒を受け、次て傳法灌頂を受けて都法大阿闍梨の位に上る、時に和上年三十九。

文政の六年和上年四十二、叡麓の世尊寺に於て摩訶止觀を講じ及び四教義を學徒に授く、誠公の初めて和上に謁せしは實に此時なりき、

予歲十九ノ五月、西京ニ遊學スルノ日、始メテ叡麓ノ世尊寺ニシテ謁ヲ賜フ、當日幸ニ四教義ノ講莚ニ列ス、山法師鞋ヲ着ケ、笠ヲ戴キ來テ聽講スルモノ、凡七八十員ナルベシ、中心深ク感ス、山家ノ餘德台門ノ佛法ニ於ケル今日ニ

は實に明治初年に於ける光芒萬里の三星たるに耻ぢず。

予や福薄し、終に松翁公と熱梳居士に謁するを得ず、唯年十一二日々老師に『明教新誌』を讀むを課せられて、大居士の訃音に大息し、松翁公の詩文を讀過するに困じたるのみ、誠公に至りては嘗て深川高橋の隱栖にありて選擇の講莚に侍せり、依稀尚記す、公の高弟循誘上人、予を前方に導きて懇に講義の箇所を指示せられたるを、爾來數へ來れば已に十數年誠公墓畔の樹木は已に拱せんとし、誘師の齒徳亦漸く高し、而して顧みれば予か狂態依然たり、阿蒙依然たり、書して此に至る千百の感慨、覺ゑず油然として生ず。

三傑僧の中、松翁公は今言はず、他の一碩徳と大居士とに至りては、其學術の精、識見の大、實に根源を東臺の大德慧澄和上に取れり、前者は和上の講を聞くもの十有餘年、其學の根底を叩き其識の宏大なるを禀け、所謂天台圓海の嘉稱も、後來南船北馬、東西各處に横說竪說したる活佛法も、皆悉く和上の賜なりき、後者に至りては和上に師事するの年更に長く、其學問識量の外、亦克く和上の風格精神を傳へ其渇仰尊崇、和上親化の弟子よりも更に大なるもの存す、天台門の學匠にして慈熏、普潤兩僧正の如き、亦和上に師事して其衣鉢を傳へたるもの、而も眞に和上の皮肉骨髓を了得したるものは私に他門の行誡にあらざるや否やを謂ふ、誠公の學大體に通じて煩鎖に亘らず、漫に古人の舊套窩に甘せずして活識自在なるもの、其宗我の見に墮せず、氣宇海濶、敎に律に禪に密に隨機勸說滯る所なきもの、其溫良恭儉、節約自ら持し、德風自ら人を動すもの、蓋し固より公か天禀に賴むべきは明なりと雖、而も之をして箇の如く大に箇の如く美ならしめし所以のものは何ぞ和上感化の力に賴らざるを知らんや、今や和上が二三の小傳と梶老兄が集めたる貴重の資料と及び循誘上人と談話とによりて、聊か和上の小傳を記し、兼て誠公との交接如何を討査して、以てこの珍藏百襲すべき卷首畫の解に代ゑんとす、可ならむか。

和上學問の博大、眼識の宏濶、德行の偉大、敎化の普及は少く指を佛典に染めんもの丶皆知る所、その台密兼明らめ、禪律共に精に二百五十戒を嚴持し念佛往生を贊說し自行には五萬已上の祕密供を修し、化他には四十餘年の講說、百卷の著書、加ふるに授名傳戒の弟子千已上に上るものを見る是豈常鱗凡介の得て企及すべき所ならむや、當時の人皆和上を以

御氣がツカネバ何にを云ふても愈々僻みを增し果ては取り所ろなき人がデキル樣に相成候此段を御心得御考へ（此處一字不明）所をナルホドと思召候はゞ其上にて御答は可申上候其御心のツカザルに答をするは無益に御座候千萬憚多き申分ナガラ貴僧樣の御爲めと存じ候へば無遠慮申上候　頓　首

月　六　八　日　　　　慧　澄　敬　具

圓　乘　坊樣

今の世、人動もすれば少許の學識を恃みて、紛々として是非を諍ひ、眞如を辨せずして起信を論じ、因果を瞭らめずして佛教を誹詆するの類、滔々として皆是なり、謂ふ此輩膚淺僻狹の徒、和上をして之を見せしめは嗚呼果して何とかいはむ。

和上、固より台密の奧旨を極め密供を修し、法華を誦し、戒珠光圓かに、定水湛然たりと雖、深く「諸經所讃、多在彌陀」の祖訓を遵奉し、淨業を策勵し、徒生を勸奬する甚だ力む、其一代の講義十席とすれば、五席は念佛の法門を敎へ、常に行人の徒らに向上に奔りて、自家を返照するの明なく、口圓頓を說き、手白拂を掉ひ、玄と說き妙と談し、或は甲の密供或は乙の懺法、唯其名を高くして道力の甚だ弱く、實修の眞に載きを戒勗し、愬ろに易修の法に付きて一生に初住に入り一生に妙覺に轉ぜんことを勸む、而して其說をなす尤も公平、尋常念佛門の僧徒が夢想し能はざるの卓言なきにあらず、

成佛ノ道ハ天台大師ノ御說ニテ足レリトス、淨土往生ノ一路ヲ示スニ至リテハ法然上人ニマカスベシ、其中安心ノ邪正中邊ヲ論スルコトアレド夫等ハミナ文字上ノ說話ナリ眞實ニ極樂ニ往生セハヤト思ヒ定メタル人カ必ズ往生スベシ、安心カ結搆ニ傳ヘテモ淨土往生ヲ等閑ニスル人ハ六ツケシキ也。

囂々として四流六派の異同を論じ、一念多念、信行の紫朱を論じて些許に口角泡き飛ばす、世固より乏しからずと雖も、宏遠の眼光、實着の修地、和上の如きものは遂に之あらず、和上の著『後世路枝折』は、實に此眼光と此修地とを以て、詢々行人を指導したるもの、紙葉僅に十七八帋に過ぎずと雖も、和上一生婆心の存する所は實に此にあり、學佛のものは會らす一瞥を要すべき也。

シテ盛大カクノ如クナルカナト　（誠公手記、和上小傳一節）

當時の狀況歴然として眼前に躍出す。

天保五年、紀州侯の請に應じて粉河十禪院の開基となり、幾もなく東臺の淨名律院を董して自在心院宮の侍講となり、職にある十三年、後少時十禪院に至りて淸規を定め、亦淨名に歸りて普賢行院宮及嗣宮に講を進む、當時和上年旣に八十童顏仙骨老て益壯に孜々として書を講ず、此を以て門室の尊敬前後其比を見ずと云ふ、文久三年二月、微疾を示し病む旬日、三月二日に至り、起坐珠を捻り、大衆と共に唱名し珀然として終る、年八十三、叡岳に開講せしより易簀に至る、其間約五十四年諸部の講述每歲虛日なし、法華玄義を講ずる七回、文句、玄義共に四回、十不二門指要抄十三、金光明玄義一、妙宗鈔三、四教義十三、戒疏五回に及ぶ、其他の諸小部の講述枚擧すべからず、講每に講錄を發刊するもの廿八部、殆んど百卷に上り、皆學佛者の南針として光を遐代に垂るゝものあり、而して其解義の功此の如く盛んなると共に、また大に觀行修禪の德高く、金胎、求聞持等の理修四萬坐に越ゑ、事供五千八百坐の多きに達し、其他法華の讀誦、日々の唱名の如き、數ゑ來れば測るべからざるもの存す、嗚呼、和上の如きもの、眞箇に僧寶の標式模範と稱すべきかな、誠公はその小傳に贊して曰く、

竊ニ惟ミルニ解行ノ兼備、二利ノ圓滿セル指シテ眞ノ僧寶ト稱スヘキニ足レルヲヤ、蓋今日衰世ニ當テ本師ニ代テ五十年ノ轉法輪相ヲ示現スル者ハ、獨此師ナリト云ハンモ、亦誣言ニ非ルベシ。

われ固より何ぞ敢て茲に一辭を贊せむや。

和上、學問の風は都て大體に精通して煩鎖に關はらず、力めて邊僻の弊に陷るを斥け正平を持して說を立て、宏大以て其論をなす故に其著書皆赫然として不磨の光輝を留むるもの存す、今の櫻木谷慈熏僧正、少壯の時、和上の門にあり、犀利の眼光、好んで辨難攻擊を設けて和上に當る、和上乃ち一書を與へて之を砭して曰く、

御出精結搆奉存疑難の御書拜見仕候餘程骨を折御考へと相見へ候、乍憚申上候如是の御學問被成候ては學問が皆僻み申候此のヒガミのツクは何からツクぞと云ふ事をトクと胸に手を置き御考へソコニに御氣が付候はゞ分り可申ソコに

叩クカ如クニ覺エタリキ。

誠公の和上を訪ふ、和上亦欣然として出て迎ゑ、法談數刻に及ぶ、而して和上の自室に退くや、侍者か進むる所の茶を餘すもの半椀許、これ和上か常癖なりき、而して誠公は毎に恭しく拜して之を飲むて辭し歸るを常とす、和上寂するの後にあたりて、誠公の珍畫奇籍を得るや、必らず先づ和上の墓に謁して、跪きて之を捧げ毎紙展開、恭く之を示して後、自ら之を閲したりと、其の和上に渇仰したるの狀は以て想ひ見るべきにあらずや、而して是皆循誘師の當時親く誠公に侍して見たる實歴談となす、誠公の手記に曰く、

東大寺ノ珍海已講菩提心集ノ開卷ニ、世ノ人ハ吉野ノ花、更科ノ月見タランヅ、人ト生レシ思ヒ出ナリト云ヘケレト、我ハ佛法ニ逢ヘルコソ世ニ生タル思ヒ出ナレトカ、レタリ、予行誠ハ幸ニ佛法ニ逢ヘル中、特ニ此和上ニ逢ヒ奉リシヲ以テ人界ニ生レ出タル思ヒ出ト思侍ルニナンアリケル。

と其和上に對する所以、和上を崇敬する所以、以て見るべき也、而して此崇敬渇仰の情を籠めて、後世に顯出したるもの、之を此卷首の圖幅とす。

誠公菊池容齋翁と友とし善し、故に和上に乞ふて其眞を寫さしめんと請ふ、事再四に及ぶも固く許さず、乃ち一日窃に容齋を拉して講場に伴ひ、障陰より和上の眞を描かしむ、而して和上之を知らず、縱横の談論風發して停まる所なく、眉昂り氣滿ち、得々として說き去り說き來る、而して畫伯障後に慘憺經營、毫を銜み紙を展べ、且窺ひ且筆し、稿を改むる三回、漸くに成る、則卷首の圖なり、當時畫稿の一は靑巒居士の珍藏する所と傳ふ、誠公の匣銘に曰く、

容齋族菊池、名武保、舊幕府臣、善畫不讓古人、聲聞天聽、賜日本畫士之號、人適得先生之畫、則九襲祕重、若護隋珠、予固知已、一日誘先生於和上講場、先生欣然展紙寫眞、所以斯成也、謚和上天下有德之人也、先生則天下有名之士也、苟非先生之筆、奚克寫和上之眞、由記。

時に弘化三年、六十二歲の夏なりき、圖上の偈文は和上の自筆に係る、蓋し圖成るの後、誠公の示すに逢ひて、破顏大笑、率然毫を抽きて錄したる所なりといふ、原圖、素練を以てし、表裝頗る美を盡す、今や誠公の高弟循誘師の珍藏する

和上の勸說によりて、東西兩叡の學徒、念佛を修するもの甚だ多く、一時東臺の學徒は槪ね淨家の二連數珠を携ふるに至りしといふ、勸化の至る想ひ見るべし、誠公の贊して

昔ハ横川ノ僧都往生要集ヲ製シ、顯眞座主ハ大原ニ勝林院ヲ造レリシ先蹤モ、思ヒ出ラレテ世ニ尊クナン、

といふもの宜哉。

和上、また頗る詩藻に長ず、其製する所の文辭を見れば往々にして、雄健高雅、稀に出す所の詩、高古朗々誦すべし、歌また諧謔に富み、幽旨中に汪然たり、

羽織着たる男の手を拍ち躍り居る繪の贊に

何事もなるよふになる世の中を祝ふて三ツ手を拍て見よ。

また往々句を出す、自畫背面達磨贊にして、

本來の面目見たらこちら向け

是豈、尋常俳人の一字も口に出すを得る所ならむや。

和上、旣に東臺の四門室に師とし、禮遇太た渥し、而も其平素着する所の衣服、用ゆる所の器什、極めて素朴儉素、衣帶の如きは時に破綻垢膩、宛かも乞食僧の如くなりしと、其高風實に欣慕すべきにあらずや、其寂するや葬儀は實に簡素を極め、淨名律院の一堂、棺前に一木几を置きて、木牌一箇唯「慧澄和上」と題するを安し、香華燈燭左右に列り、前に一爐を備ゑて、弟子山僧等悉く黃衣を着し、大衆齊く一卷の寶篋印呪を誦し終りて、各肅然として香を行し、以て去る、是皆和上が嚴に弟子輩に遺命せし所ならんといふ、式中一淨門の僧あり、破衲一枚の鼠袈を擐して跪きて且つ泣く、一雛僧ありて之に從ふ、是卽ち誠公なりき、その雛僧は卽今の福田循誘師。

誠公の和上に親炙せしや頗る長く、其師弟の情誼また實に濃かなるものありき、誠公の手記に曰く

……東臺ノ淨名院ニ住セラレシコト前後凡ソ二十九年、予亦礫川ノ傳通院ニ居ス、是ヲ以テ三大五小及ヒ其餘ノ講莚ニ列リ歲月亦久シ、其虛往實歸ノ法澤ニ潤フヤ尤モ寡カラストス、來往二里ニ足ラサルヲ以テ步馴レ路熟シテ隣房ヲ

の四日を現じ、羅什玄奘を出し、天台賢首を興すの盛なるは未だ至らざるなり、而も此偉觀や盛運や、會らず當に見るに至らしめさる可からず、乃其方法を論じて之に備ふるを考ふる豈無益の贅事ならんや、聖典原文の研究は實に此盛運を完からしめ、偉觀を充すに於て的確緊切なる方法の一たる、洵に誣言にあらず、次に少しく其說を申べしめよ。

竪に歷史討究の側より見るも、橫に教義比較の邊より考うるも、正確適切の方法は、そが根本資料に泝るにあり故らに言を要せず、根本資料とは經典に於ては原文を意味す、飜傳の正しきものに於ては、之に依る素より捷にして利ある明なる所と雖、而も其醇にして粹なる、一到直入本旨の存する所を知得するは、終に原文に若かざるを如何せむ、昔者羅什其富贍の才學を以て大に經典を譯す、其章句の美は千載の下奕と不磨の光あり、而も自ら喟然として嘆して曰く、梵を飜して華とす、哺を含みて吐出するが如し其味の美なるは唯含むものにありて存するのみと、豈に千古の至言にあらずや、各國の語各固有の美あり、桃紅李白其趣き各隔歷たり、其趣の異なるところは、他國の語が敢て侵犯すべからざる所、此侵犯すべからざる所に固有の思想構逸するを見る、昔遍學印度にある十有餘年天稟の惠解、多歲の研究を加ふ、其飜譯する所の經論、辭句爛熟、自口より出すが如く、周密愼重、字句概ね印度の語法に則る、而も讀み來り讀み去り、意通せず、沈思方めて默會す、紗窓を隔てゝ名花を望むが如きもの、往々にして之あり、衆賢の正理其他の如き特に然りとす、謂ふ親しく梵文の論に依らば更に益するところ多からんかと、其他諸三藏の飜譯嚴密にして、一字も忽緒にせざる、史傳に見る所の如しと雖、尙二三の楚夏を免れずして時に義の通せざるもの之あるにあらずや、原文の研究にして今悉く絕望ならば止む、苟も望あらば則ち力を盡して研究する、方に今時の急務にあらずとせんや、經典原文の研究は、古來區々煩鎖の解を一掃して、革新、研究の實蹟を與ふべし、而して其言語學上より得る史的考證の偉大なるは更に完美の効果を收むることを斷言するに憚からず、歐西の學者か佛教を討究するや力を盡くして根本資料の討究に力む、其勵精の切なる實に人をして驚嘆せしむるもの存する也、デヴヰツト、ヲルデンベルヒの巴利經典に於けるを見よ、チョーマ、キョフペン、ワシルエーフ、ホッヂソン等の西藏經典に於けるを見よ、ビール、アイテルの支那經典に於けるを見よ、而して邦人は此等諸家の說を臚列排陳するは少からずと雖、溯りて其根本資料に眼を着しるもの幾人かあるや、間梵語西藏語に潛心するも

所、梶老兄の懇請に頼りて特に縮寫を許したるもの、大方の看官希くは等閑の思をなすなからむことを。

誠公の和上に於ける交涉は略上の如し、苟くも一たび誠公に謁し、若くは其遺誠を讀みたらんものは必らずや自他宗派の門墻を設けず、眼界濶大、拘束する所なく、胸底萬卷の書を蔵めて溫然として春の如く、素朴簡素、超然として仙骨秋よりも淸き大德なるを知らむ、而して是實に和上の大に誠公に賦せし所にあらざるか、而して誠公が禪後課餘、興來り神動ひて揮攉し來れる數首の和歌、幾篇の詩、二三の俳召が其趣味句法に於て、著く和上に類似せるもの、また焉くんぞその感化によるに非ざるを知らむや、誠公戲歌あり、自畫の洗濯圖に題して曰く、

法の身はたらゐですませ墨ころも物ほしさをの慾にかゝるな。

月に題する句あり、

鬼の目も涙は圓し秋の月

前に擧ぐる所の和上の歌句と對比せば、自ら默會する所あらん、記して左券とす。

八月三十及三十一の兩日、忙間を竊むて江東の俗寺に濫筆す、書し去りて畏友岡村夢庵、中山櫻雨兩老兄の叡岳普潤僧正の許にあるを想ふ、台學興らさる今既に十數年、人意を强ふするもの唯二兄あるのみ、二兄乞ふ加餐せよ、三十一日夜、蚊軍漸く衰へて、秋聲自ら燈下に生ずるの夜。

（明治二十九、九、十、佛敎第百十八號）

奮つて聖典原文の研究に從事せよ

曰く歷史的討究、曰く比較的考察、此等新研究の方法は、今や汪洋放肆の勢を馳りて佛界に張溢し來れり、苟も多少眼識あり、手腕あるの佛徒は、酸口禿筆、此等の潮勢に叫び、以て偉大の成果を翹望して止まず、滔々たる大勢誰か得て之を壅塞することを得んや、然れども是れ唯潮勢なり、輿論なり、氣運なり、其汪洋の勢を湊合し、放肆の流を朝宗し來りて、雲濤天を沒し煙浪地を捲くの偉觀を作さしむるは、未だこの濃雲盛霧の大氣運に乘じて騰龍奔虎の威を逞うし、明治

何ぞ少く其學徒を奬勵して、這般の好問題に着手するの宏量なきや、紛々たる小事業に奔走して笑を世界に取るは識者の爲すべき所にあらず。

聖典原文の散在するもの、尼波羅に大般若、密嚴、十地、三昧王、楞伽、法華、如來秘密、普曜、金光の所謂九部の大乘經、悲華、賢劫、孔雀王等の顯密諸經ありて現に英國の書庫に珍藏す、其他、大小乘諸論の一二の梵文西藏尼波爾に存する尠少にあらず、而して此等の中西人の研究を經たるもの亦多しと雖、其玄妙幽玄なる大般若の如き、楞迦經の如き金光明經の如きは未だ研究に着手せしものあるを聞かず、巴利の阿毘達磨はテヴヰット博士研究に着手せりと傳ふるも其結果は未だ發表せられざる也、凡そ此等は吾邦佛徒か堅實の研究をなして資益を大世界に與ふべきものにあらずや、佛典原文の討究に利便なる吾邦佛徒の如きはあらざる也、盍ぞ奮躍一番大に大般若の原文を讀み、楞迦の梵文を披き、俱舍の梵頌を研めて、眞研究の基を開かざるや、馬博士一たび東方聖書集を編して、英語は頓に學術界に重きをなしたるにあらずや、吾邦の佛徒にして、縱橫に聖典原文の討究に從事し、善美の結果を收めん曉は卽ち日本語をして世界學術界に重きをなさしむる甚難きにあらざる也、卽ち其結果は啻に佛教教義の研究上新生面を開きて牢固の基礎を與ふるのみならず、亦皇朝學術の爲に大に氣燄を大世界上に吐くを得可けん、其結果豈太だ愉快ならずや、見よ皇朝の學者哲學界に於てハートマン、スペンサーを壓せしもの現に之あるか、文學に於て雄をアーノードに競ふべきもの何人ぞ、是れ皇朝學術の爲に恨深き所ならずや、餘輩は佛敎討究の一方面に於ては會らず當に泰西の所謂東方學者を凌駕するもの佛界に出で、ハーデー、ビール一輩の徒をして走り且仆れしむるの快を見むことを欲して止まず、世既に此種の研究に心を潛むるもの兩三あり佛徒寧ろ臥榻の下に他人の鼾唾を容すべけむや、餘輩は滔々たる佛界裡學術の爲に一身を犧牲とせしチョーマの如きもの必らずや是あらむことを信ず、二十世期の玄奘を出して大に皇朝佛敎の爲に萬丈の虹霓を吐くもの必らずや是あらむことを信ず、佛界人多し、豈一箇半箇の鳳雛龍兒なからむや、

上來言ふ所太た迂に似たり、唯新研究の聲頗高きに感じ、粗所懷を書して同志の人と共に此愉快なる研究に從事せむことを諮るに過ぎざるのみ胸中の妄想を亂書する所笑ふべきもの太多からむ、四方篤學の士、幸に微衷の存する所を諒して

のあるも、學佛の徒は概ね冷眼に看過するにあらずや、思ふ、歴史的比較的研究の聲甚高くして其効果の比較上甚擧らさるもの主として之に依らずむばあらずと、亦思ふ皇國學風の稚弱淺薄毎に歐人の後に瞠若たるものも實に之を以て其大源とならずむはあらざるやと、嗚呼門外にありて衒學口を糊するの徒は予甚だ之を責めず、而も身佛徒として學解を研磨するものにありては、宜しく大に牢固堅實の討究をなし、奮うて根本資料に溯り、以て偉大なる討究を聖典の原文に試みよ、支那譯の經典を以て、滿足すべきの秋は旣に過ぎぬ、巴理の小乘經文大に研むべし、梵文の大藏經典亦大に研むべし、西藏の二大藏も討究すべし、其討究の結果は實に大なる者あらむ也、且く大聖世尊の傳記に見るもハーデー、ビカムデット、ロツクヒル、アラバスター等を對照するも尙大に益する所あり、況むや、此等根本資料に依りて其同異を比較するの利なるをや、西人の佛教を識らざるもの、手に出づるものすら、尙資する甚多し、況んや親く佛教に通して之を研究するの太た利なるに於てをや、巴利の諸本生經大に討究して之を在來漢譯の本生經と對比する豈味深からずや、西藏の諸密軌、講究一番、之を不空法天等諸譯の密經と校量する豈至大の効果を奏せずや、尼波羅所在の大乘諸經論を討究する至美の實蹟を擧げざるか、凡そ此等の講究は實に佛教講究に於ける緊切至要なる事業たる也、佛典原文の講究は現代佛徒の双肩に荷負せざるべからざる偉大なる責任なり、乞ふ紛々たる蝸牛角上の紛爭、區々たる小名利の念を絕ちて、大に此絕大の討究に從事せよ。

眼を放つて世界の學者が如何に佛典原文の討究に其全力を傾けしやを思へ、淨土の寶典原文はマクスミユーラーの手を着くる所となり、法華經はビユルヌーフ、ケルム等の功果を收むる所となり、巴理の本生經及律藏は、デヴヰツト、フウスペル等之が先鞭を着け、西藏も尼波爾も暹羅も緬甸も大抵歐人の研究する所となり了れり、古來羅什玄奘等の偉蹟を思ひて今代佛徒の爲すなきを思ふに憤慨に勝へざるもの存するなり、吾人佛徒たるもの何ぞ此間に立ちて大に奮はざるを得むや、嗚乎聖典原文の討究は實に佛徒の至大責任なり、眞言宗徒よ、願くは紛々の鬪爭を止めて少く尼波羅の諸密經にその眼睛を轉ぜよ、法華宗徒よ、區々たる格言問題の甚愚なるを擲ちて、少くビユルヌーフ、ケルム等に嚴正なる批評を行ふの勇氣を奮へ、不生產的事業の忠魂堂に、全力を集中する俗淨土宗徒、小權謀を賣弄して一時を彌縫する愚一向門徒、

東亞の戰雲は黯黑彼の如く、雷轟電激、風怒り雨狂ひて、天破れ地摧けんとするの觀あるも、此地には「美はしき五月」復り來りて、綠樹雲の如く芳草煙に似て、百花映發千禽和鳴する所、白衣の少女、新帽の青年は亦南阿弗利加の戰塵を意とせざるか若し。彼處には獨逸の殖民政策破綻して蠻族の忿怒を買ひ、官軍の遠征約半年に垂むとして未だ戡定の功を收むる能はざるに。

吾は此間吾が學の爲に奮戰したり。吾は一枝の鐵筆を劍とし、圖書館の机を封鎖艇として、及びむ限り吾が駑に鞭ちぬ。吾は無名のヘーゲルとなりて、彼がエーナの砲撃中靜に哲學を講じたるを習ひて國家と宗門が我を戰場に要する迄、孜々として吾梵筴を繙かむ。時來りて劍と三部經とを携へ、念珠と繃帶とを握りて、小なるフヰフイテを演ぜむ日までは我は眼中唯吾が書あるのみ。吾は帝國の文部省が此陣雲密布するの時に當りて尙新に哲學の爲に理學の爲に醫學の爲に留學生を歐西に派遣するを見て、吾邦家の前途に至大なる喜あり。而して之と共に吾淨土宗學が此際、尙吾が如きものをして天外萬里、靜に書卷に對するを得せしむる大なるに喜ぶ所なきを得ざるなり、大に傲る所なきを得ざるなり。

× × × ×

久しく音を「敎報」に絕てる吾は、何より筆を下さむかに迷ふ。開戰已來獨逸の態度は、ロイテルやヴオルフの電報にて、諸君の知る所なるべく、東京の各新聞が歐米諸新聞抄錄は、門外漢吾が如きもの丶筆より更に精透なるもの存すべし。開戰の當時、露國は其の辭令に巧に、讒誣に妙を得たる新聞を使嗾して黃色患と非基督敎民とを以て日本を罵り、以て獨逸の民心を挑發しぬ。而して獨逸は其存立上、親露政策の必要を認めて、日本を疎外するの傾ありしを以て、一時此地の民心は靡然として露國に傾き、新聞雜誌の日本を罵り侮るもの多く、在外の同胞をして不快の念を禁ずる能はざらしめき。

此地エルザスはベルリンよりも、パリを尊ぶの地、佛露同盟の緣故は、此地の民をして日本に敵意を表せしめ、加ふるに獨逸政府の親露政策に阿諛せむが爲に、日本を罵ること甚しき者ありき、正當なる日本の公報は文字を小にし、露に利益ある虛報は活字を大にし、或は日本の公報に批評を加へて冷罵するが若き當時吾等の特に憤慨に堪へざる所なりき。

新研究の爲めに一隻靈腕を揮ふものを出さは足れり矣。

聖典の原文を記せし書目

1、Rājendralāla mitra : The Sanskrit Buddhist literature in Nepal.
2、Hodgson : Essays on Nepal and Tibet.
3、Cowel and Eggling : Catalogue of Buddhist Sanskrit manuskript in Royal Asiatic Society.
4、南條文雄氏 : Catalogue of Chinese Tripitaka.
&c., &c.

（明治三十、二、十、佛教第百廿三號）

日露戰爭と獨逸の輿論

總督アレキシーフの公報、ペトロハヴスクの沈沒を傳へ、隻手敗殘の艦隊を率ひて、回天の慨、一世を呑み、曉名歐土に鳴りし提督マカローフも麾下の猛將謀士と共に、骨肉靡爛恨を蒼海の底に沈めしより、旅順の水軍復た振はず、次で九連の大捷となりて、黑木將軍の威風は天下を震撼し、鳳凰の陷落、旅順の包圍、丸石を急坂に轉ずるが如く、大火の枯林を燎くが如く、全局の勝算、既に吾手に落つるの日に當りて、宮古の大連に沈みし悲報は先づ在外同胞の膓を九廻せしめ、次で吉野凶變と共に、一等戰鬪艦初瀨遭難の號外を讀まざるを得ざるに至りては、嗚乎是何等の恨事ぞや。然れども滿ありて損生するは天理の免るゝ能はざる所、無常壞滅の法則、何物かよく之に漏るゝを得むや。百戰百勝の甘夢に醉ひて驕氣漸く浮動せむとする吾國は之によりて痛切なる訓戒を得べく、天祐の迷信稍兆し來り武に傲り攻伐を喜むで仁愛の心同情の念少く減せむとするの國民は之に鑑みて大に修養する所あらむ。若夫之によりて難に忍ぶこと鐵の如く、不幸に屈せざる石の如くなる元氣を鍛錬し得るに至りては一千四百萬の艦費豈惜むに足らむや。唯切に惜むべく悼むべきは艦と運命を共にせる幾百忠勇の將士のみ。

る露國の反省を待つもの丶如し。唯政府の方針は尙未だ全く親露主義の政策を抛たざるの嫌あり。彼のペテロバヴスク沈沒の際、〇〇〇は露帝に親電を發して之を痛悼し、露國の憂は獨國の憂たるを云へり。社會黨の首領ベーベルは之が甚非中立的の行動なるを責めて盛に之を議場に難詰し、宰相ビューローは百方婉曲の辭を盡して、之を救解しぬ。然れども獨逸の民心は旣に此の如く、識者の意見亦彼が如し。謂ふに獨逸政府は、早晩その政策を改むるの日あるべきか。吾國の士、乞ふ張膽明目、之を觀よ。

吾國が擧國一致、征戰に盡瘁するに反し、露國內部の睽離は頗る甚しきものあるが如し讀者は旣に吾國の新聞誌上にも多少此間の消息ありたを知らむ。露の將校某は日人に重要な軍略の祕圖を賣りし爲誅せられしもの二三ありき。露の大學生間には非戰論者甚多くして、徃々紛擾あり、而して露人は米英に屬する猶太人が日本を助けて露國に利ならざるを怒り、第二回の虐殺を行ひて三十餘人を屠戮し、少女を殺し孕婦を窓外に拋ちしが如き暴擧を行へり。之が爲猶太人の忿と怨を買ひしこと幾許ぞや。クロンスタツトに於ける一大爆發の密謀は、猶太人之が首魁たりとの疑あり。在外國の露人にして露國の改新に志あるものは、日本に同情を表して露國の敗を希ふもの、吾人日本人の甚だ意外に出づるものあり。芬蘭波蘭等の亡民が、多年露國の暴壓を怨みて機を見て發せんとするが如きは、固より言ふを待たず。絕大の文豪トルストイの如きすら、日本に同情を寄せつ丶ありといふ。唯彼等社會主義者、革命黨等は寸鐵なく、一兵なし、皇軍大に勝ちて哈爾賓の邊に迫り、露軍窮困して時機漸く熟するに至らば、或は意外の變を露國に起さんか。矧や土耳古は鴨綠の大捷に狂喜して士氣甚揚るを傳へ、澳國は今回巨費を投じて軍備に絕大なる擴張を行ふあり。バルカンの風雲亦甚露の爲に憂ふべきものあるをや。

吾軍は祖國の正當なる自衛の爲に奮鬪しつつあるのみあらず。實に人類平等の大理想の爲に戰ひつ丶あるなり。東西文明の大融合の爲に戰ひつ丶あるなり。涵容主義博愛主義人道主義の爲に止むを得ずして干戈を動しつ丶あるなり。嗚乎この大理想此大理想の爲に大主義の爲に戰ふは卽大慈悲の聖教の爲に戰ふ所以にあらずや。吾等は國民として吾が國家を衞護せむが爲に不義暴虐なる敵國を膺懲すると共に如來大慈父の子としてあくまでも偏狹頑迷人種を嫉視し、自由を壓抑し、

然れども、當時識者は公正の思考を以て時局を評論し、社會黨は政府の黨露主義と相容れざるが爲に、極力露國を罵り其失政を責め其野蠻を彈して、言の露國至尊に及びものさへありき。露國が旅順の第一攻撃を以て、非公法的なりとして泣訴的の辭柄を設くるや。此地の老博士ラバント、ハイデルベルグ大學のレントゲンなど公法學の斗泰は、公平に日本の所爲を辯護しぬ、而して一面には英米新聞の日本に對する强大犀利なる辯護の存するあり。露國の讒誣は寸効なくして一時の魔夢として過ぎぬ。吾は此際政治的の意味已外英米の同情に對して宗教的に倫理的に尊敬と感謝とを痛切に感じたり。蓋し進歩主義に自由主義なる天下何れの處か米國の如きあらむや秩序を重じ禮讓を尊ぶ英の世界に傚る所にあらずや。此二者の同情は日本が進歩自由秩序禮讓の爲に劍を拔き砲を發したるを表明するものにあらずして何ぞや。

二十世紀は暗黑なる中世、頑迷固陋なる羅馬敎會時代にあらず。露國が名もなき十字軍を世界に呼號するは到底識者の笑となるを免るゝ能はざるを如何せむや。キシネフに猶太人を屠りて敎會を富したもの、北淸に無辜の男女を殺戮して鮮血もて十字架を彩れるものゝ口より、非基督民の痛罵を發せむは惡魔をして四福音を說かしむるよりも滑稽にあらずや。日本軍の文明的行爲は之と反映をなして益露國の讒誣を價なきものとなし了りぬ。日本人の露より歸るものは讒に身を以て免れ、露人の日本より去るものは感泣して往く。敎育なく禮讓なく性質野獸の如く兇暴なるコサツクを以て軍隊の花となす間は露國は文明國民の同情を買ふ能はざるべし。露國が日本に對する讒誣はかくして全く天下の唾棄する所となれり。之に加ふるに、海に陸に日本軍が連戰連勝の報は、益獨逸の民心をして日本に傾かしめ、新聞の如きも、今は反て露國の虛僞なる公報を嘲罵するに至れり。巷間街頭「君が代」の譜を付し、日本軍艦の圖を付したる繪端書は、賣行飛ぶが如く、觀せ物の中に日本の水雷艇と稱しく彈機一たび發して巧に命中せば敵艦を破りて、賞品を得るが如き裝置は尤もよく靑年の喝采を博し、「東鄕マーチ」の如き曲が、樂堂に演奏せらるゝをも聞く。雜誌の如きも、今は露國現時の窮狀を嘲笑するの戲畫頗る多く、日本の勝利、廣瀨中佐の雄死などを描出する者亦少からず。一般の人心は、今や正に日本に傾向しつゝあるなり。彼等は日露戰爭を以て、普佛戰爭に比し、日本が新興の勢勃々として、敵を破る破竹の如きもの、正に當時普魯西が大に佛兵を破りしに類すとなせり。かく識者の大分、人民の大半は、今や大に日本の勝利を賀して、暴虐な

なかつた事は明了だ、然るに女史は事實上女子として立派に鬚髯の男子を屈服して居る、現に其遺像の周圍に幾多の名士を集めて之を動かして居るではないか、其着實と親切の實行は、學ばずして自ら近代慈善事業の重要問題を解決する先驅をなし、其熱心と忍耐は廣く且深い活教訓を殘して居る。女らしい偉大、大慈悲の權化、忍辱精進の結晶、嗚呼女史は眞に大乘理想の婦人であつた、新日本のナイチンゲールと賛美しても不都合はあるまい。

國民が眞面目に眞劍に考へ且つ働くべき時に、恰も瓜生女史の年回が來て四恩會の機關誌が生れた、これも此菩薩の餘光であらう、願くば此美しい光で現代輕薄なる婦人界の空氣を幾分にても廓清したいものだ。

（大正二、五、一　精華）

現代感化救濟事業の五大方針

我國に於て感化救濟事業が漸次に盛大に趣くの兆候あるは、社會組織の必要上、若くは國運の發展から見て、必らず然らざるべからざる趨勢から來たのではありますが、一般から考へまして、實に喜ばしき現象であると云ふて宜しいでせう。特に宗教家が現時著しく此等の事業に奮勵する樣になり、東京を初めとし各府縣に宗教家經營の各種救濟感化の機關が、日に月に新しく增加する傾向があるのは、風教上から見まして結構な事で御座います。然し乍ら、現在此の如くに盛況を極めて來ました各種の慈善事業は、果して確固たる基礎の上に立ち、一定の方針があつて出來て居るのでせうか。若しくは國家や社會の要求に餘儀なくせられて、兎に角始めて見やうと云ふ風な、無主義無方針なのではありますまいか。若くは又其精神は實に立派でも、時代の進歩や適當の方法手段を一向顧みざるために動もすれば勞して功なきものがありはしますまいか、何れに致しましても、現代の感化救濟事業には如何なる主義が其根本になつて居るか、この主義から割り出された方針は果して如何なるものであるか、これは吾々が深く研究せねばならぬ所であると思ひます。

大體感化救濟事業の精神には、古往今來變化のあるべき筈のものではありませぬ。要する所は唯一つの慈悲仁愛の至

人道に背反するものを改悔せしめざるべからず。日露戰爭は、人類平等主義自由主義の發展に甚重大なる意味を有す。光榮あるかな吾祖國。絕大の名譽を以て二十世紀の卷頭を莊らむかな、わが大日本の國民や！（明治卅七、七、十淨土敎報）

大乘婦人の理想　瓜生岩子女史を想ふ

婦人慈善事業家の理想と云へば、直ぐに夫のナイチンゲールを想ひ出す、此貴い婦人の精神と事業とは實に有難い、確に世界史上の一大光彩であらう。然し吾國の遠き昔に之に劣らぬ立派な女性があつた、和氣淸麿の姉の廣蟲卽ち法均尼は其中の一人で其崇高な美しい事業は世界慈善史の中、恐らく孤兒保育の開祖として仰ぐべきであらう、民間の婦人旣に然り、高貴の方々光明皇后檀林皇后などの偉大な御事業と御精神とは世界各國の皇妃傳中比類もない莊嚴な光に充ちて居る。是が卽大乘佛敎の精神が實現したのである。

大乘佛敎から見ると大慈悲躬行の前、大道修行の所には男もなく女もなく僧もなく俗もない。唯大慈利他の精神勝れた人が貴い、寶積經に妙齡の阿闍世王子無畏德が大乘利他の見地から單に自己の解脫を求める獨善主義の佛僧を毫も敬禮せず、大に利他の氣焰を吐いた譚がある、此精神的の意義があつてこそ初めて男女同權も云へるのであらう、聖德太子が維摩經で在家佛敎居士佛敎の本領を御發揮になると共に、特に勝鬘經を拔いて御講說があつたのは、正に大乘婦人の理想を御示しになつたので、其思召洵に甚深のことゝ伺はれる。爾來吾國の佛敎史に偉大な婦人に乏しくない、十年ばかり前に英國のダツフ夫人が印度古代佛敎婦人の活動を古聖典から叙述したが、日本佛敎史中婦人の活動は決して印度古代に讓らない、近代の大德慈雲律師の門下に女傑が多かつたのも此一例にならう、明治の維新以來陰れた佛敎女流の慈善家は決して少くないが、此中瓜生岩子女史は確に最近佛敎婦人の理想を代表して世界に誇るべき菩薩と云へる。

此偉大な婦人に就きては私は多くを知らぬ、但し瓜生女史は慈善を商賣にし廣告にする虛榮の女でなかつた事、珍禽奇鳥の羽で飾つたボンネツトを冠りて動物保護に奔走する貴婦人でなかつた事、常規を逸して狂態醜狀を暴露する女權論者

の慈愛に對して、父の嚴肅な敎育的態度といふた樣な理性主義になつて來た。是が現代感化救濟事業の主張が、著く古代と差異して居る第一の點であります。

第二の點は從來の慈善事業は其場合々々で實行するので原理とか統一とか云ふものは勿論持つて居りません。囚人を保護するにしても、貧乏を救濟するにしても、或は孤兒を養育するに致しましても、單に保護救助扶育といふ事に止まつて、其統一された原理の確立などには、一向眼をつけなかつたのです卽一言で云へば發作的斷片的一時的の行爲なのであります。然るに現代の主張では心理學經濟學社會醫學といふ樣な、諸學科の研究を基礎とした、一つの科學的の原理を確立し此原理から一つの系統が出來て、各事業はこの系統の下に統一と連絡が保たれるといふ樣な傾向になつて來ました。卽ち舊來の慈善事業は一時的の者であり、斷片的の者であつたのと、之を科學的とし系統的とした所に現代の主張があるのです。例へば勞働者の保護問題にしても、從來の遣方では原理の確定などには餘り重きを置かぬ樣でしたが、現今では各科の學問から硏究し上げた、一つの原理から割り出して、保護の方法を講ずる樣になつて居る。免囚保護にしても今は着々此根本原理の確立に努力して居るのであります。吾國現存の感化救濟事業は其精神に於ては決してアメリカや獨逸に劣るものとは思はれませぬが、然し其科學的なこと、系統的なことに就きましては尙甚しく遜色あるを免れぬ樣ですが、事業に從事する人々は特に此點に御奮勵を願ひたいものです。

第三に從來の慈善家は、唯與へる、救ふといふことを以て慈善事業の本義と致して居りました、日本ばかりではありません。英國でも獨逸でも古代の慈善事業は皆此の風でありました。慈善と云へば唯與へること救ふことで以て足れりと致して居りました。然るに現代の慈善事業の方針としては無論施與救恤は致しますが、其大體の目のつけ處が共濟と申すことにある。卽無闇矢鱈に與へることは面白くない。相互に扶け合ひ濟ひ合ふといふ精神で行らなければならぬ。大體慈善事業も一つの社會的活動である已上は社會相互の關係上有無相通の原則から割出されたものでなくては、弊害があつても効力は甚だ薄ひ、此共濟主義の慈善方針が現代の進むだ考なので、英米あたりの慈善事業家、社會改良家は何れも此論を執つて居る。今一々煩を恐れて例證を擧げることは略しますが。要するに扶けつ扶けられつゝ活かされつゝある社會組織

情、之から發現する美しき行爲に過ぎませぬ。光明皇后の諸方面に亘つた廣大の御慈善、法均尼の孤兒救助、忍性菩薩の癩病救療など、其主とした佛敎的の仁愛精神が今も昔も少しも變りはない。また現代のアメリカ邊の進んだ慈善事業と、中世フランシス派やベニジクト派の僧侶が、行つた救濟の事業とは其基督教的の愛の精神に毫末も差異がある理窟はないのである。然し感化救濟が一つの事業として立つ已上は、矢張時代の進步と文化の發展とに隨ひて、其方針が終始變化して來るのは免るべからざる自然の理です。早い話が帝國の國體は申すまでもなく、千古萬秋天壤と窮りなく渝らぬのは勿論ですが、然し國是と申すものは、文明の進步に應じ、國勢の發展に連れて、着々として進展せねばならぬと同じ理窟であります。慈善事業の中核も之と同じく、決して昔と今とで變化のあるべきものではありませぬ。然し其事業として實行さるゝ以上、其方法上から見て、方針の上には進步もある發展もある。到底昔の通りの儘では、駄目であることになつて來るのである。

現時佛教家が努力して居らるゝ各種の慈善事業は、果してよく此現代の方針と一致して居るだらうか、或はまた此方針と背馳して、奮勵の割に効果が餘り擧らぬ樣なことがあるだらうか、是は事業經營の上から見ましても、是非考へて置かなければならぬことゝ存ぜられます。

現代感化救濟事業の主張と致しましては、其可なりに複雜なる點もありませうが、便宜上、左の五箇條を列擧して其一班を申して置きませう。

第一に從來の慈善事業は感情中心主義でありました。惻隱の心之を仁といふのですから、慈善事業は勿論純潔な感情が中心となつて居るのは申す迄もありませんが、古來の慈善事業は唯可愛想だから助けてやらうといふ丈で、其原因の研究や共救助の効果の或は其慈善設備の完成を期するなどゝ云ふ點は餘り重きを置かぬ樣でありました、然るに現代の感化救濟事業は此純淨な感情を基礎として、此上に理性の判斷を必要として居ります。感情中心主義と相對したからは寧ろ理性中心主義に傾いて居る。救助の實行と共に研究が頗る重要の點となつて居る。如何にして施すべきか如何なる時機に如何なる人を救助するのが合理的で且つ最有効であるか、杯といふことを充分に研究して來る樣になつた。母の甘やかし一方

佛陀世尊に於けるが如くせよと說かれた眞意は茲にあるのです。有名な行誡上人が兩國の回向院に住職をされた時分の談ですが、上人は每日外出の時乞食を見ては敬禮される。門人は之を苦々しく感じて一日上人に苦諫した所が上人莞爾として答へられるには盜賊もせずにあゝして正直に食を乞ひつゝあるのは貴いことだ、老僧は此惡行を犯さぬ立派な心がけを尊敬するのだと誡められたことがあります。平等の佛性ある信仰、こゝに深牢の同情が湧いて來る。この深ひ固い同情が卽ち慈善救濟の根本となるではありませぬか。救濟者と被救濟者との間に區別を立てる。一を立派な紳士、貴婦人旦那樣や奥樣として、他は丸で畜生同樣に看做したのは貴族的封建的の舊思想であります。この古い古い思想が漸次に消滅して、二者の間の鴻溝が取れて來たのは恩澤と云はねばなりませぬ。

私は茲で孤兒院などが收容の孤兒に、其慘めな憐れつぽい境遇を廣告させて慈善家の財布の紐を解かせやうといふ陋劣なやり方は一の罪惡として痛擊したいのであります。孤兒に一樣の醜い服を著けさせて市街を練らせたり、演說をさせたり、音樂を奏させたり、甚しきは行商までに追ひ使ふて、慈善家の涙を搾る非人道な酷薄な擧を、全然排斥したいと思ひます。佛國や獨逸あたりでもこの古い非人道のやり方を平氣で行つてる宗教家もあります。日本でも一時は、この野蠻な非人道の慈善廣告に氣の毒にも利用された孤兒等も少くはなかつた樣ですが、今は流石に其弊風が改たまつて來たのは何より結構と存じます。

× × × ×

第五には舊來の感化救濟事業には單に實行することが主であつて、出來た事件を場合に及んで處理して行く丈のことでありました。卽ち Executive charity といふ種類に屬す者でありました。然るに現代の慈善事業は勿論種々の施設經營で各方面に亘りて實際の處理に努力しまして舊來に劣るのではありませぬが、然し其重要とする所は惡事を未發に防ぎ苦を未然に救ふといふので其大體の据りで、つまり貧窮や罪惡の原因を探究して豫防の法を講ずるのが現代斯業の眼目となつて居るのです。卽ち Preventive charity と申す種類が現代斯業の中心點となつて居ります。これは丁度現代の醫學の療法に對症療法と、原因療法とありまして脚氣とか肺結核とか云ふ一々の病氣に對し、糖を與へるとかクレオソードを飲

から、此大方針が出來たのであります。佛教では其教育上、此の精神は既に古から存在したので、彼四恩の中にある衆生恩の考などは如何にも温か味があり、且つ理義が頗る透つた立派な共濟主義を說いたもので、經文にはこれを相互饒益の四字で明に示してあります。然るに現時佛教家の經營せられつゝある、慈善事業には往々此共濟主義の大方針が缺けて居るため孤兒の救助にしても、施藥にしても、救貧事業にしても勞苦徒らに多くして社會的の貢獻が甚だ乏しい樣に見へるのは頗る遺憾のことゝ存じます。

第四に從來の慈善事業は、救濟を受くるものと救濟するものとの關係が、主人と奴隷と云ふた樣になつて居ります。否、救濟する人皆一等上の人間で、之を受けるものは殆ど人間の取扱を受けられぬ樣でありました。吾國には昔から乞食非人と申す語があるが、之は日本許りではない歐洲も矢張さうでありました。勿論救はれる人間、惠恤に預る人々は社會の敗者でありませうから別に威張るといふ理由は毛頭ないのではありますが、然し現代の救濟事業の精神と致しましては、被救濟者の人格を認める、人權を重ずるといふ點が、舊來の奴隷主義乞食非人主義と大に面目を異にして來た點であります。要する社會組織の上から見ますと救濟と云ふものは絕對的のものではありません。寧ろ相對的に價値を持つたもので、慈善家や社會改良の努力も、根本的に其對手を改善し、向上せしめて、若も石瓦を黃金となし、人間から極樂淨土の菩薩に變るといふ樣なことは出來るものでありませぬ。卽ち人間として人間に盡す丈のことなのであります。玆でどうしても對手の人權を認め、人格をして人間相互の義務といふ觀念から、また社會組織の相互責任といふ點から慈善も救濟も出來るのであります。この人權を基礎とした救濟主義が現代主張の價ある所で、玆に眞個の救濟事業の意義があります。從來の救濟法は他人を奴隷視しての施である。動物扱にして非人などいふ侮辱を加へる救恤法であります。何ぞ知らんや其救恤すると信じて居る御當人は社會の優勝劣敗の猛烈なる戰鬪場裡に纔に生命を完うした幸運兒であつて、其食を施し錢を惠む所の襤褸の乞食は、自分の爲には鐵砲よけの鐵楯ともなり、肉彈ともなり、踏臺とも胸壁ともなつた、傷き斃れし傷しい人々であるのではありませぬか。

此の現代の慈善の精神に吾々は大乘佛教思想の雄大な復活を見るのであります。華嚴經などに衆生に承事供養すること

勞働と藝術

曉風白露を吹き、虫聲明月に起り、秋光方に人に佳なるとき、帝都に於ける藝術の季節は、早くも都人の足を東臺に向けしめて、今や美術展覽會の催さるゝあり。文部省の主催も遠からず、其紅葉燦爛の盛觀を示し來るの期目睫に逼り、人をして其開會の日遲きに焦燥せしめつゝあるの觀あり。事女兒が服裝の新を趁ふと等しく一種の流行の如しと雖、趣味の向上、人情の緩和に於て、固より帝國文化の上に視すべき點なきにあらず。

然るに今や此人情の調諧、趣味の増長が上中流及知識富豪の階級に局り、特に此二者を必要とすること、渇者の飲、飢者の食に於けるが若き勞働階級が其恩澤を被る機會と設備なきは昭代の一缺點とせんか、今の帝國の藝術は、國民藝術にあらずして、一部の翫弄藝術也。世の識者富豪は宜く何等かの方法に依り、自家の享受し得ると同じき藝術的受用を勞働階級に與へ得べき方法を講じ、政府當局も之に就き苦心一番する所ありて國民藝術の意義を明にせば、勞働者德性の進歩は勿論、勞作能力の增進一層健全の發達を見ることを得ん乎。

藝術家にありても史譚風景花草美人等を描きて、一樣の葫蘆、俗眼風情に阿諛するを止め宜く人生と至密なる藝術、特に新日本の勃興に要する勞働及社會問題と藝術との關鎖に於て其生命躍々の點を捕捉せんことを希望せざるを得ず。ミレー、ホイエルバツハ等が得意の題材、勞働、工場、生活等の描寫は夫の纎巧に走り朦朧に終り粉飾に止りて何等實際人生に意義なき昔日の閑戲に比して切實に新日本の要求しつゝある新藝術たるを思はずや。

勞働と藝術。玆に摯實の人生に觸るべき無聲の詩あり。玆に國運の前途を祝福すべき、希望緊張、雄大の妙技有す。

（大正五、九、勞働共濟）

世界大戰と宗教思想の現在未來

＝淺草本願寺別院に於ける東京眞宗大谷派春秋會第二回教學講習會講演大要＝

ますとか云ふ樣に場合々々の病氣に對して其療法を按じて行く、昔は醫者と云へばこれ丈で役が濟むだものですが、今はさうは行きませぬ。卽原因療法の病症豫防の方面が現代醫學の根本精神となつて來ました。ゼンナー天然痘の豫防已來今は各種の病症豫防の法が發見されて。人民の福祉を增長して居ります。感化救濟事業も之と毫も差異はありませぬ免囚の保護や、浮浪人の救助や、貧民の惠恤や幾多の事業もありますが、然し罪惡を未發防壓し、失職者を作らざる方法を講じ、貧窮豫防の策を立てる。玆に現代要素の精神は存するのであつて、玆に來ねば徹底した慈善事業は成立するものではありませぬ。

×　×　×　×

已上從來の慈善事業と現代のそれとを比較しまして、其主義方針に大に面目を異にする所があるのを略說し、大別五つにして御談し致しましたが、此の五つの方面は何れも連絡があり關係がありまして、五つの點が別々になつて居るのではありませぬ。其實は一の點に各他の四の特點が具備されて居るので、つまり此五大方針が貫通して居るのが現代の感化救濟事業の價値のある所と存ぜられます。

然るに現時吾國の慈善事業特に佛敎家諸君の經營されて居る事業中には、往々此現代の主義精神に背馳して居るのがありはしますまいか。科學的研究的の態度で事業を經營しつゝある人は幾人ありますか。事業の統一原理に着眼して徹底した事業の經營を試むる人も至つて乏しい樣です。況や人權尊重の基礎に立ち共濟主義を根柢として人道の大本から仕事をする樣な事業家は寂々として曉天の星に似たる感があるといふてよいでせう。況やまた社會を達觀して各種の方面から罪惡を未發に絕滅し、貧窮困苦の豫防を講ずる人の如きは天下殆ど共なし人と云ふてもよいかと思はれます。寧ろ反對に或は封建的貴族主義の慈善に誇り、若くは一時的應急的の救濟を以て我事了れりとして、他に大に努力奮勵すべき方面の横はるを忘るゝ弊はありませぬか。此點から申すと吾國の佛敎主義の感化救濟事業家に今一層の奮起をして戴きたい。少くとも大乘佛敎の遠き昔に旣に懇切鄭寧に敎へて置いた精神に復りて、現代の精神を指導すべき大抱負を持ち、大精神を行して戴きたいものと存じます。

（大正五、二、勞働共濟）

クソン兩氏合輯の『信仰と戰爭』の如きが夫であらう。此書は三十餘家の戰爭と信仰とに關する諸論說を集め、特に大戰が幾多の困難を敎會に與へた事や大戰は敎會のために大打擊であつた事を記して居る。露國のルボノプスキーの『戰爭と基督敎』なども此類に屬してよからう。今一つは對敵行動を含むだ敍述で重に佛國や白耳義の舊敎徒の手に就いた報告書で、夫南の佛白各地の名藍巨刹が獨兵の殘忍酷薄な砲擊のために破壞されたことや尼寺や修道院が凌辱されたり掠奪されたりしたことを寫眞を入れて報告し如何に獨兵が非宗敎的であり非基督敎的であり非基督敎的であるかを現實的に證明して居る。之も戰時宗敎思想の一面の敍述であると云へる。それから第二の批評的の著作の中には(一)辯護的のもの(二)說明的のもの(三)攻擊的のものと三つに分けて見ることが出來る。ヲイケンやミュンステルベルヒ等獨逸の學者が思想上から獨逸を辯護したのや、ベルグソンが聯合側で氣焰を吐いたなどは先辯護的の代表としてよかろう。宗敎家の側でも隨分色々其國に都合のよい說を立てゝる人が澤山ある。就中夫の非戰論者として古來から有名なクエーカー宗徒は種々の書物や、論文を發表して同敎の位置を辯護しつゝある。グラハム氏の論文の如き其尤なるものであらう。次に說明的ものは宗敎の見地から大戰の意義を說明したもので、夫のピッパード雜誌の中に常に英國敎家の說が出て來る、五月のジャックス氏の說の如きは主戰平和ともに偏したものは聖書に合はぬと云ふて、平和を基礎とした尙武主義、武備を具足する平和主義の必要を面白くバイブルを引いて說いてある。其他獨佛露の敎家は大底此見地から筆を取る。攻擊的のものは主として聯合軍側にあるので極力獨逸の危險非人道の軍國主義を擊攻して居る其代表として昨年佛國のシャール、アンレー敎授の說を擧げれば、氏は獨逸今回の戰爭を三方面から見て一つは史家ラムプレヒトや例のベルンハルデイ等の生存保護說卽生物學的根據より來た主戰論、獨逸は戰はぬは生きて行かれぬ、人口の割に領土や食物がなくなるから勢どうしても戰ふと云ふ、これが頗危險な議論だ。二つにはモルトケ元帥や例のトライツュケ等の考で戰爭は神並に自然の意志に適合して居る、戰爭は正義の基礎で至高の德義であるとする議論、次には大柢の主戰論者が共通の論據でカイゼルの最も好まれる論だが戰爭は最大幸福が世界を支配する順序上止むべからずとする說で、此所の最大幸福とは卽ち獨逸文化を指して居る卽獨逸文化普及のために戰ふとなす論だ所謂汎獨逸主義の要點である此等に對してアンドレー氏は一々痛擊打破を

（一）『世界の歷史は、世界の裁判』

有史已來、今回の世界大戰ほど物心兩界に强大の影響と變化とを與へたことはあるまいと思ふ。舞臺の大、兵數の多、旣に未曾有の大事件である。隨て之が及ぼす政治經濟商工業其他の影響もまた未曾有の有樣となつて來る。一々統計に照らして說明を加へなくとも、此チョーク一本、此コップ一箇の間にも大戰の影響は歷々了々として明である。斯の如くしてシルレルが名言の『世界史は世界審判也』といふのを充分痛酷に味ひ得るのは實に此大戰である。此審判――火と血と鐵と毒瓦斯と爆藥の怖畏すべき大審判は二十世紀まで積み上げ練り來つた一切文化の成績を忌憚なく批判し斷定して寸毫も假借する所なく其眞價を判定して仕舞つた。而して此評價はまだ近き將來大戰後に起るべき新文化の進むべき方針を示して着々新發見や新科學が出來て來る。軍艦でも大砲でも飛行機でも皆此評價から新しい準備を急いで面目一新の歷程に進むで居る。直接影響の最も甚しい軍事の方面旣に此の如く、他の政治や教育や商工業や何れも之を平行して新方面に競ひ進みつゝあるのだ。社會問題の如きも亦直接間接此機運の壓迫から戰後の新解決を示して來た。卽ち識者の方面では、戰後新工業に關する著書も大分現はれ、戰時勞働問題の書物さへ出來て來た。教育上に於ても各國とも今や其調査を急ぎ、戰後の方針につきて新制度の確立に容易ならぬ苦心を拂つて居る樣だ。此の如くして、世界の識者は今や戰中戰後の諸問題につきて銳意研究の步を進めて居る。知らず宗教道德の研究に就きては今何處まで進むで居るか。不完全であるが一寸現時歐洲各國の此問題に對する研究の一般を調べて見て、次で管見のある所を御批評を願はう。

（二）戰時宗教思想研究の現狀

歐洲に於ける戰時宗教思想の研究の現狀は其問題の取扱ひ方から見て、先づ三種に區別することが出來ようと思ふ。

第一　敍述的著作 }
第二　批評的著作 } 戰中宗教思想の現狀調査及評論
第三　豫測的著作―戰後宗教思想の未來の豫想

第一種に屬する者は自ら二類に分れる。一つは大戰が與へた宗教上の影響如何を敍述した者で、夫のフォークス、ジヤ

茲に調和の福音が眞基督敎徒に由りて存するとするが彼の說だ。佛敎徒としても此論は佛敎にあてはめて大に聞くべき價あることゝ思ふ。

(三) 强烈なる厭欣心の發現――內面的宗敎の要求

世界の大戰は一般の基督敎會に對しては云ふまでもなく殆ど致死の打撃であつて、其平和的能力、鎭靜的の權威が寸毫も效果がないのを露骨に自白して仕舞つたと共に、一面に於ては敎會の活動が、國民的の奮起にどれ丈の貢献をして居るかゞ疑はれて來た。敎會がどの位愛國的の勢力の源泉となつて居るかも頗る首を傾けねばならぬ問題となつて來た。印度人や回敎徒やアラビヤの民族が戰場に立ちて隨分慘忍非道な虐殺を敵兵なる基督敎信徒に加へ、尙非戰闘員特に婦女子などに加へつゝある忍ぶべからざる暴惡も、聯合國は之に何等宗敎的の制裁も加へず、解決もして居らぬ。之と共にルーテル出現の基督敎國を以て自ら誇る獨逸兵が白耳義や佛國の占領地に加へた亂行惡虐は其驚くべき愛國心の强烈と平行して、頗る人の心膽を寒からしめ、茲にも基督敎に對する幾多の難問題が發生して、未解決のまゝ、どし／＼獨逸一流の『神吾と共にあり』『神の意志の實行』を其暴戾殘忍の口實として陸に海に思ふ存分振舞つて居る。斯の如くして基督敎――成立せる基督敎々會の道義的權威は確に此大戰の爲に假面を剝がれ買被りをありのまゝに白狀して仕舞たのである。

戰爭が成立敎會に與へた打撃は此斯である敎會が之が爲に被つた信用上の損害は恰ど回復が出來ぬまでになつて來たが、退いて一般宗敎心の發現を精査すると、唯一二の例に照らしても其熾烈なることが充分に判る。源平時代が吾國宗敎情操の摯實で眞劍であつたと同じく、この戰爭は人心を眞摯にし眞劍にし中心から宗敎の門に救濟と慰安とを求める血の聲、涙の聲が聞へる。卽宗敎思想の中核たるべき厭離穢士、欣求淨土の切なる中心の訴が今や火の樣な要求として聞へるものである。聯合軍側で伊國アンコーナ市の一新聞の主筆ガスパル、ピアコニーが去年の十一月十六日の紙上に揭げた告白を見ると次の如くである。主筆は當時筆を擲ちて祖國の爲に劍を取りて軍に從ふたのであつた。

戰死するに先ち予は兄上に慰籍の辭を呈せんとす。今や吾が良心は神の御前にあり、出發に際しパドヴアに於ける聖（サン）安得尼（アントニオ）の聖堂に詣で多年の間不信仰なりし罪を告白し久しく煩悶に沈みし不安の念は一掃せられ全く信仰の道に入れ

加へて居る、また英國のセシル氏が獨逸の愛國心に就き痛論し、獨逸の愛國心は非人道非道德の偏狹の愛國心であることを攻撃したるが如きが之であらう。要之教理上思想上、獨逸に對して攻撃的批評の態度に出て居るものである。尙民間通俗の安本には此種の著作が非常に多く、丸善の店頭にも色々人を引つける此種の書物が澤山來て居る。第三種の戰後に關する宗教思想論に就きては之にも種々あるが一面は全く現在の成立教會の滅亡を宣言して純然たる人道的の新教義が起ることを豫測するので、其代表者として見へきは佛國のロアシー氏であらう。ロアシー氏『戰爭と宗教』の結論として斯く論じて居る。

基督教は不死の幸福なる一場の夢として、同教特有のものとせられたる愛の法則の片影をも留めず、世界より、落謝し去らんとする乎、然り同教は落謝すべし。而も愛の法則は基督教に據るにあらずして獨立に殘存すべし。是人道の道義的意志と人道的强固の存する間は保續すべき也。

宗教會の方面でも種々の書物があるが何れも成立教會は戰後若干の變化を受けねばならぬ特に英國國教の如きも何等の改革を見ぬは止まぬといふのが何れの人に於ても點頭す要點である。此等著書中最も整然として且つ資料豐富なのは今年出版の『歐洲の宗教、及び世界の危局』で實に五四百頁の大著英國の牧師ヲスボルン氏の筆になる。基督と劍、力の意志、バイブルの政治道德、獨逸宗教及戰爭、露西亞魂、教會と社會主義の試錬、教會の基督復古、英國教會と其變轉の時期の八段に分けて論じてある、章名丈見れば何の點まで論點が進めてあるか、略窺はれよう。要する所は教會に於ける二潮流卽ち形式儀典を重ずる舊教主義と自由を主とする新教主義との調和の上に新教會の基礎を見ようとするのである、オスボルン曰く。——

不融和の舊教主義の危險は、今日偏軍國主義の獨逸の如くに一切の自由を、訓練の前に犧牲とすべし、去り乍ら不規律の新教主義は戰前の英國と同じく自由のために訓練を犧牲に供すべし。事實の性質より見て、勿論、社會に於ける總てよりも宗教に於ては、暴君壓抑（卽舊教訓練）の弊と混淆錯亂（卽新教自由の弊）との兩者中必ず一を撰ばざるべからざる必要何れにありや。

3、平和對軍國主義

4、萬國對愛國主義

先づざつと第一の衝突から說明して見ると、戰中戰後の思想界には疑もなく此二つの思想が對立して益極端に走らんとしつゝある。個人主義の英國が戰爭の警策に逢ふて、國家主義に傾き國家主義の獨逸國民中に戰爭は國家が個人を犧牲とするを考へて個人主義の議論が有力になりつゝある。宗教上から見ても厭欣心は極端な個人主義に人を導く。國家や國民全體の行動を罪惡視する結果は個人の救濟が宗教の眞諦の樣に感ぜられて來る、玆處に神の恩寵、獨り子の愛が味はれる。然し敬神正義の觀念から敎會を護り、國家の發展を助けようとすると玆に國家主義の極端な宗教が出來る。要するに戰後は倫理道德の上にも宗教の上にも此二つの主義は必らず衝突して來る。而して宗教思想の上には之が著しく鮮かに見へて來るであらう。源平の戰後にも一面には個人救濟に傾いた一派捨世主義の念佛宗と、極端な國家主義の日蓮宗の樣なのが出來たのでも判る。戰後の敎界の一面にはトルストイの樣に國家や國民を超越して純粹の個人救濟に力を入れる極端なものと、モルトケ、ケベル＝ハルデーあたりの神と君主の一致した極端の國家宗教の思想も必らず起る。

第二の衝突は科學と哲學、經濟問題と道德、其他種々の場合で衝突を見べき精神對物質の對立である。卽一面から見れば、現に交戰中科學上の新發見が日に月に盛に報告されつゝあり、戰鬪の勝敗は歸する所は經濟的の効力如何に由り、黃金と器械とが人類を支配すべき最後の神樣となるべき確信を高めつゝある。現に聯合側の持久戰策は此根底から割り出された如くに信ぜられる。黃金の萬能、物實の勝利を明に證明したこと此大戰の如きは恐くあるまい。斯の如くして物質主義は戰後何れの方面にも覇王として君臨するだらう。科學の權威は所有ゆる宗教哲學を蹂躪して玆に强固な物質主義の世界觀人世觀が天下を支配するに至るだらう。然しまた他面から見ると、今回戰爭の慘禍は要するに、物質主義黃金萬能に對する深酷な懲罰であると見られる、二十世紀の今日迄の文明も國家の方針も餘りに科學的物質的に進むだために、此至慘な罰を受けるに至つたのである。卽戰後は此反動として宗教や藝術を中心にして一つの理想主義精神主義の世界となろう。世界の人々は今や既に物質主義の慘禍に戰慄した。此上に尙物質主義を追求して慘禍を更に大にし、一層の剣苦を受

一時的ニアツカリシカ、ソノ後ノ状況知リタシ

り。（文部省報告に依る。）

理智冷靜の批評家として立つべき新聞記者は何處の國でも大底は宗教に對して冷淡なもの不信仰のものと相場が決つて居るが、ピアコニー氏は實に此階級の代表者として中心的な正直な告白をして居る。此告白は實に最無信仰の知識階級、宗教に對する冷酷理智の批評家の入信を示して、よく一般の戰時情操を證明して居る。

之と相對して獨逸の教育家ユリウス、リヒテルは『戰爭と學校』といふ論文を發表して戰爭が今や吾々に浮世の生活の不確實なるを教へ國民の多數を驅つて寺院に參詣せしめつゝあるが、此際教育家は此眞摯なる情操を一層深くすべく努力すべきことを說き、且つ曰く「若し今度の戰爭から傲慢や勝利者の誤りや輕蔑や憎惡などが獨逸國民に生したのでなく寧ろ敬神の新しい力强い潮流が國民の中に溢れ出たならば、夫の燦爛たる外面的の勝利に比して此內面的の勝利がどの位尊く且つ立派なものであるか知れない』と論を結むだ。吾々は此處にも戰爭から生じた、痛切な厭欣の至情を見ることが出來る。

宗教心の熾烈に起つて來たのは此敵味方の二例で充分であらうと思ふ。卽大戰後には此等熱烈な情操が宗教に向ふて直進して來る。內外大小の別こそあれ、夫の源平時代に法然上人の念佛宗を先驅に日蓮、親鸞等の新宗教が人心切なる要求に應じて起つたと同じ有樣となつて來るに相違ない。夫ならば、其新しい宗教はどんなものであらう。一般の厭欣の深い情操は前の樣であるが、其向ひつゝある方向は何處であらう。此處で少し宗教思想の向ふべき方面如何に就きて一言しやう。

（四）　戰後思想の四大衝突――外面宗教要求の潮勢

私は、沼津の佛教青年會でも教育問題の根本方針として時局思想の大勢を解剖して、四大方面から其衝突の起るべき所以を論斷したが此四種の教育の根本問題は同時に宗教の根本問題になつて來る。簡單に云ふと此四大方面は先づからである。

1、國家對個人主義

2、**精神對物質主義**

宗教問題の眞價はある、兩岐に分裂しようとする人性に一點の歸着する所を示すことに於て宗教の偉大な未來がある。其處で、次には此融會調和の點に就きて一言する。實に今の識者も宗教家も此融和と調節に就きては苦心慘憺しつゝあるのだ。

（五）戰後宗教の第一要務――思想衝突の調和

現在悲絶慘絶とも云ふべき屍山血海のこの大戰が早晩國際的に外交上平和條約の締結に於てその終局を告げねばならぬと共に、將に來らんとする思想界の大衝突も必らず精神的に何等かの融和を以て終らねばならぬ。此處に宗教の重大なる責任があると共に、此融會調和の能力が偉大なるだけそれだけ、宗教の未來は存在するのである。つまり四大衝突を安全に且つ確實に調和し得て新方針を指導し得る宗教が卽未來勢力あるものとなるのだ。そこで現在の二大宗教卽佛教と基督教の未來に就き簡單に一言して見たい。

思想衝突の緩和調停に必要なるは教義に具備して居る包容性と同化性の偉大なことに歸する。卽ち統攝化合の實力に富んだ融通無碍の活作用ある宗教が最も時代に適合した資格を有するのだ。世界性に富むでも國民性に同化し得ぬものや、個人救濟に能力あるも、國家補翼に適せぬものや、若くは夫の回教の如く主戰主義、純國家主義で、平和問題に極めて意義のないものは到底此大問題を處置するに足らぬことになる。此所で佛教と基督教との比較をすると、教義から見ても歷史から見てもどうしても佛教の方が包容性も大きく同化力も强い。其融和無碍の活作用に富むだ點も公平に見て佛教の特點ともすべき所で、一神教が動もすれば偏狹の杓木定規に陷るのに比して充分に汎神的に自在の解釋と實行とが佛教に於て見らるゝのである。此の如くして佛教の未來に有望なるは申すまでもない。基督教とても戰後の思潮界に雄視せんとならば必らずや、其包容性と同化性とに於て大に佛教に學ぶ所なくてはならぬ。基督教國已外の國民を劣等視し、基督教にあらざる文明を以て野蠻のものとなし、非基督教國若くは國民を蔑視するが如き、頑迷固陋偏狹の態度――一神教に生じたる猶太敎的迷信を改める必要がある。卽ち夫の獨逸皇帝が拳匪事件の當時基督教的文明にあらざるものは善美のものと雖之を破壞せんといふた樣な偏狹にして恐るべき黃禍思想は必らず之を改めて寬容自由公平な態度に出でねばならぬ。寬

け、更に嚴罰を見ることは出來たことでない。戰後は必らずや精神主義の世となるであらうと豫測して、必らずかゝる爲やうと力めて居る。此二大思潮の勝利は何れでるかは斷言出來ぬが、兎に角並立競爭し得べき理窟は何れにもあらう。

第三の平和對軍國主義の衝突も、何れにも其戰後に發達すべき理窟がある。大戰の慘禍から平和論が思想界を風靡して、戰前の平和論及び之が實行の方法などに比し餘程猛烈で且つ大規模の平和運動が起らう。列强は此大戰を最終の戰爭として相互の平和關係を親密ならしめ、以て太平の和樂を永く享有するに努力するだらう。隨つて哲學や宗教も此平和主義の基礎から其思想を確立して時運を導かねばなるまい。特に生命の存する所、其神聖なる價値は、一に平和問題に貢獻する勢力の如何に依りて定まつて來るに相違ないと考へる。然しまた他の一面を見れば、元來平和主義の英國が今や自衞の必要上軍國主義に傾き來り、アメリカ迄も海軍大擴張に熱狂して超弩級の軍艦がどし〳〵出來る。此大勢を前に見て平和主義は實に痴人の夢である。戰後に平和主義の氣焰は擧らう。然しそれは主戰論軍國主義の粉飾とし申譯として、寧ろ軍備擴張の裏書としてのみ存在すべきものである。宗教も此軍國主義の爲に力となり、此軍備中心の强い思想に勢を添へ得て始めて宗教の生命と價値があるとするのだ。

此極端の兩思想は戰後必らず並立して存在する。無抵抗主義のトルストイ的平和宗教と回教や日蓮宗の樣な戰鬪宗教とは必らず並立して其勢を爭ふて來る。

第四の衝突は萬國主義と愛國精神とであるが之は第三と關連して思想家が最も解決に苦む所の大問題である。極端な萬國思想は列國交通思想の環流から必ず生ずる。商工業が旣に萬國性質を帶びた今日、思想上萬國的のものでなければ收まらぬ譯になるは當然である。然し之と同時に現在の戰爭は愛國心の崇高雄大を實地に敎へ愛國心は民族隆興の大原因であり、之がなければ到底世界に國として立つ能はざること明に示して居る。此に於てか愛國主義中心の哲學と宗教が後來最必要となる。愛國主義を缺ける宗教は今後は無用の長物、否有害の防害物になつて仕舞ふ。

戰爭は思想上に現に此四面の大衝突を持ち來しつゝある。此衝突は戰後益明になつて來るであらう。然し思想の衝突をそのまゝにして仕舞つたら、それまでのことであるが、此大衝突を調和し融會して玆に新しい雄大な根柢を置く所に戰後

の平和論者は平和の最も惡しき敵とすべし是其性質に反すれば也。また一偏の軍國主義者は戰鬪の最惡しき成分也、是道德目的なくして戰爭するが故也。

と實に盡した說である。此の如くしてジヤツクス氏は基督敎義よりして兩者の關係連絡を說明せんと試みた。是は確に一部有力の基督敎徒を代表する議論と看做してよい。佛敎の敎義に於てはジクツクス氏の議論の如きは尋常茶飯事で旣に遺憾なく說明されて居る夫の經文として戰爭を說いた大薩遮尼乾子經の如きは此衝突の調和につき最有力にして且つ最周到なる說明といはねばならぬ。恐く諸宗敎の聖書中此經ほど痛快明晰に平和主義と軍國主義との調和を說き得たものはあるまいと思ふ經文を一々玆に申上ることは出來ぬが大慈悲心（卽仁）と不放逸心（卽義）とを以て鬪戰をなすのを法行王卽理想の皇帝であるとするのが其大體である。卽仁義の軍、平和主義を根柢とした軍國主義が此經に明かに見られるのである。第四の世界主義と愛國主義との衝突は偏狹頑迷の愛國心。他國の文明を無視し一般の道德を無視する愛國心。卽獨逸がその熱狂の愛國心のために白耳義や佛國に加へた非人道不道德の擧文明破壞の擧の如きを止めて自國のために盡すは世界の爲に盡すといふ見地から來た愛國心の發達を以て解決する。卽ち人道扶植、文化普及、平和確立の三大主義を根本とした愛國心が此問題の最後の解決となるのだ。而して之は確に普遍的な包容主義な同化力の强大にして深ひ所の宗敎の力を借りねばならぬ。基督敎も佛敎も將來の努力は實に此方面にある。蓋し四海同胞の觀念。一切男子皆是父、一切女人皆是母の思想は徹底した宗敎の信念の源泉からでなければ發することの出來ぬ淸淨の流であるからである。

四大衝突は斯の如くして略調和の見當が付いた。佛敎の敎理で大體は解決がつくことになつたが、それならば、佛敎の敎義上どんな形式で最もよく此急務に應ぜらるゝであらうか、玆に於て簡單に此點を一言して本講の結論と致すことにする。

（大正五、九、淨土敎報）

精神外交の要

第一高等學校の敎授として學德高きブルノオペツオルド博士は、故島地大等師の敎を受けて多年天台學を專攻し、其造

宏な英佛宗敎政策の側が、偏狹な一神敎的黃禍主義の獨逸を打ち負かすことが戰爭の終局とすれば、基督敎の東洋化或は佛敎化は此際當然來るべき問題となる。少くとも東洋宗敎の理解、東洋思想の尊敬といふことが歐洲の敎家に必然のこととなるは論なき所である。戰後の平和締結が萬國的のものであると共に、思想界も此東西宗敎の寬容主義の上に立たねば寸步も決して致すことは出來得ぬであらう。今は先づ佛敎の上から四大衝突の融合を一寸簡單に說明して見よう。

第一の國家對個人の衝突は一面に徹底した解脫を敎へつゝ他面では報恩行を極說しつゝある佛敎には最も都合のよい解決が出來る。敎理上から言へば佛性の平等を說き、個性の尊重と能力とを認め自由平等主義を最極まで押し立てつゝ、而も一方では因果差別の倫理主義に依りて簡明且つ適切に四恩の修行を勸めて居る所に此一大衝突の解決が確實に出來て居る。眞宗あたりの極端な個人救濟主義の信仰、卽惡人正機といふた樣な信仰の上に王法爲本といふ立派な國家主義が兩立するも此根柢があるからだ。歷史上から見ても佛敎の同化性の廣大にして且强固なことは此第一の大衝突を調和するに最都合がよい。第二の衝突の解決は基督敎と言はず、佛敎と言はず一切の宗敎が解決すべき根本問題であるから、別段に論ずるまでもないが。單に信仰主義感情主義の基督敎よりも哲學の基礎を有し知識主義の根柢ある佛敎は解決上餘程餘裕のあるは異義のなき所と信ずる。第三の問題は英國あたりでも其調和の必要は基督敎の學者に依り屢論ぜられた、ジヤツクス氏（ピツパート雜誌四月號は左の如く言ふた。）

善良なる、平和主義と、惡しき平和主義あり。善良なる軍國主義と惡しきそれとあり。戰前の英國は惡しき平和主義に毒せられて、唯生活の享樂及び善事のみを夢みたり。獨逸は惡しき軍國主義の犧牲となれり。其理想は威力の支配のみなりき。兩者の理想は共に過誤ありて且つ有毒なり。惡しき軍國主義と、平和主義とは自然の敵也。一は食用獸にして、他は猛獸のみ。善良の平和主義と軍國主義とは共通の目的に於て連盟すべし。此目的や卽人類及國民の敎育也。蓋彼等の性質は互に相戰ふべきものにあらず、寧ろ互に相合して各自の惡弊に對して戰をなすべきものなり。眞正なる武士（軍國主義者）は平和の最善より成立すべく、眞正の平和主義は戰爭の必要と及び至高の意義を捕捉したるものゝみに於て之を見るべし。是兩部分を演ずる一人のみ最貴の人及び最貴の國民は必然的に兩者を兼ね有す。之と反對に單純

通にも運輸にも、一切の經營者、實業家の悉く共に努力すべき所であると思ふ。

之を吾國の古代に考へて、交際國文化の理解と其精神的交際が、どの位外交、經濟、貿易、交通の慶福を增長したかにつきては多くの實例もあるが、就中、直に夫の足利時代五山禪徒の功業を擧げることが出來よう。彼等が支那文化の理解と同情とは日支の外交上常に利便を招來したるのみならず、貿易上に於ても例の天龍寺船の如きものが多大の福利を彼我の間に與へて居つたことは爭ふべからざる事實であつた。

玆で吾々は日本の印度關係の諸君に對して、今一層深く內面的の印度を理解し、印度の人々との精神的交際が更に根本的に更に學術的ならんことを切望して止まぬ。少くとも外交官や貿易商の中にも日本に於ける獨逸人を例として立派な印度哲學の研究者、印度藝術の專門家が輩出せんことを念願するものである。歐洲に於ける印度敎學の偉大なる恩聖の人マツクス・ミユラーは、英人が印度を共國の寶庫と稱しつゝ而も印度の理解尙乏しきに憤慨して "India, Waht can not teach us?" を著はし啓蒙覺醒の靈筆を揮ひ、大作今尙不朽の美を遺して居るが、吾々も亦印度關係諸君が貿易上經濟上の統計以外に、簿書箇牘の整理以上に、サンチやアマチヷチの古佛塔、阿育大帝の勅碑、下てはアヂヤンタの壁畫に印度美術の優秀を味ひ、ウパニシヤツドやヴエーダンタの古哲理に塵胸を洗ひ、カーリダーサの戲曲に梵藝術の幽美を賞翫するの雅懷あらんことを望むのである。ブリアン・ホートン・ホツヂソンは尼波羅に駐在した一外交官であつた。然し彼が大乘佛敎梵本の蒐集、印度哲學の硏究に於ては今に不朽の功績を殘して居る。パーリ佛敎學研究の泰斗と永遠の名あるリス・デギツ博士も一の法律事務專門家であつた。印度地理、印度古蹟の大研究家大將カレニングハムは實に一介の武辯ではなかつたか。日本人として自家の業務以外、何等一般文化に貢獻し能はずとせば、ソハ確かに大國民としての恥辱といふても誣言ではあるまい。

印度文化、印度の哲學藝術宗敎、それは決して然く粗遠のものではない。吾國の文化とは離るべからざる佛敎を通じて、印度の思想感情は日本化し、吾人の日常生活の上に米の飯の如くに吾々に親しくなつて居る。第一米の飯の糯うるちが實に梵語の Vrihi から來て居ることが言語學上動かすべからざる證據ではないか。吾々は檀那といふ敬稱を家庭に於て

旨深き獨逸近代哲學の知識を傾倒して比較剖判、大に智者、傳教兩大師の幽旨を發揚し、幾多の大著を公にした。比叡山の管長梅谷大僧正は、この奇特な獨逸學者の功勞に酬んがために、先例を破りてペ博士を大僧都の僧位に叙し、且つそれに相當する大禮裝の金襴七條衣を贈與した。

この稀有な出來事は無論内外の人々に大なるセンセイションを與ふるに充分であつた。新聞は何れも初號見出しの記事で誌面を賑かし、ペ博士がフロツクコートの上に夫の金色燦爛たる法衣をつけて上野寛永寺佛前に於ける叙位式に臨む堂々たる寫眞もまた少からず天下を驚かした。

此破天荒の嚴肅の儀式の後に開かれた茶話會に、來賓として德川公爵等と共に特に臨場した獨逸大使ゾルフ博士は其持論である東西思想の融合に就きて盛にペツォルド博士の功勞を推賞し、獨逸近代哲學特にフフィテ、シエリングの思想と天台哲學との比較をなし、其結論として左の如く喝破された。

「由來外交官は、政治、經濟、其他外面的物質的の國際事情の調査研究を主とし、其任務とする外交の如きも亦此等外面的事務にのみ局限するを普通とする。然し自分としては此等外面的の執務已外に精神文化の方面卽ち宗教哲學藝術等の內面生活の研究調査も亦外交官として甚だ必要な任務であることを痛感するものである。外交に於ても辭令折衝歡宴と共に、眞理の研究に發する理解、愛慕、同情等の精神的交際を以て寧ろ國際親善の第一要諦と確信し常に之に努力して怠らざるものである。」

ゾルフ大使の深遠なる卓見は蓋し大使が日獨文化協會の會長として、且つ伯林に大乘佛教研究所を創設せんとする首唱者として、其平生の持論を復說したものだ。我々は勿論ペツォルド博士の日本佛敎の研究が、日本の學界に如何なる刺戟を與へたかに就き、印度に關係ある諸君が等閑に付すべからざる問題たるに充分であると信ずる。然しそれよりも明敏にして且つ達識の獨逸大使の祝辭が如何に吾々に敎ふる所多きかを一考せねばなるまいと思ふ。國際親善の第一要諦は、實に交際國の文化を研究して、之より發する理解、愛慕、同情を以て其基礎となすべきは實に深遠なる要意の存する所。而して此精神的の交際は國民外交の實を擧ぐべき今日、決して外交官のみに局限すべきものではない。貿易にも事業にも交

が、何れにしても日本の將棋は印度が起源であることは實に明々白々のことで、香車や角行、龍馬などは印度起源を除外しては到底說明出來ぬこと丶なる。

日本音樂と印度文化との關係に就きては嘗て高楠老博士の深遠該博の御研究もあつた。古代から近古の文藝に於ける印度思想の影響は餘りに明白で、シェークスピーヤやゲーテを讀むに何故に新舊約書が必要だかと問ふと同一であらう。

然るに吾國に於ては斯の如く諸方面に亘り、將棋の如き遊技にまで、印度の影響甚だ重大なるに關らず、日本人が印度を知ることは、實に歐米に對するよりも疎遠である傾を見るのは何とも痛嘆の至りである。少し教育を受けた人はシェークスピーヤにハムレツトやマクベスあり、ゲーテにファウストある位は中學生でも熟知して居る。然るにゲーテが、其ファウストの大作を完成するに當り、其文章の典雅優麗結構の莊嚴を嘆賞して自己の新作結構の模範として利用した、印度の大文豪カーリダーサの「シヤクンターラー姬」に就きては、餘程の學者でないと其名すら知らない。カントやヘーゲルの哲學者たることとショツペンハウエルの近世思想上獨特の地位を占めつ丶あることは大抵の讀書には之を耳にし之を口にする。然しショツペンハウエルが宇宙第一の寶典として死後生前の慰藉寶に之に過ぐるなしと讃嘆措く能はなかつたウパニシヤツドに就きては、高楠博士及其門下の苦心の飜譯全集の嚴として存するに關らず、世間一般は講談全集ほどにも見向もせぬ。リヒヤード・ワグネルの大樂聖たることは誰でも知つて居る。彼が肖像はベートウベンやモオツアルトと共に上中流家庭のピアノを飾るのを屢認める。然し彼が大作トリスタンやパアルシフルに現はれた。印度の思想、寂靜、絕對、同情、大慈の觀念につきて大乘佛教の原典や、阿含諸經の精要を知らんとする教養ある紳士淑女は實に寥々寂々たる有樣である。ワグネルはキョツペン氏の佛教論を愛讀して之から其深遠雄大の構想を得、其幽玄微妙のモーチーブを與へられたことは、其書翰集などに屢散見する。印度に關係ある同胞の中、キョツペンの佛教論どころか、所謂南北佛教の區別さへ知らぬ人々も失禮かもしれぬが恐らくは尙多少あるのではなからうか。

吾々は之が爲に日印貿易の關係者、外交や實務に當る方々に、諸君が旣にバイブルの存在を知らる丶と共に、印度の最古聖典、四吠陀に就きてせめては、其概要の知識を有せられんことを切望する。ホーマーのイリヤツトやヲデツセーに就

も戸外に於てもよく耳にする。之も勿論梵語の Dāna 布施、慈悲の音譯で仁人とか仁者とかいふ宗教的の深義を以て紳士たるべき人を呼ぶことになつたのだ。之と正反對の莫迦といふ有難からぬ罵語もあるが、之も起源は梵語の Noha 愚痴を音譯した佛教學語であつたのだ。檀那と馬鹿との中間に種々の世相が存在する。其世相の多くは印度思想の原語や飜譯語で名付けられて居るのを見る。近代日本が英語を以て生活の各方面が少からず表出される樣に、過去の日本の生活は梵語若しくは其飜譯で表出されて居つた。かくて吾々が古き永き血液を傳ふると共に亦古く永く印度思想と共生活とを傳へつゝあるのは爭ふべからざる事實である。

近時大分將棋が流行する。どの新聞にも多くは詰將棋名人高段者の手合せが出て居るが、西洋の將棋チェッスを見ると大分吾將棋と類似の點がある。盤面の九九八十一と八八六十四は少しく差異するが、王將から飛車、角、桂馬、歩まで全體は同一の組織で各種の駒は大抵同一の機能を有して居る。日本の將棋が少し手に入れば西洋將棋は初めて之を指しても大抵の外人と相當に對局となし得る。何故かく兩者の間に類似があるかといふと其似て居るのも道理で、根本は之も印度に發して居る。西暦紀元の五世紀頃、印度の將棋が流れて波斯に入り、之よりアラビヤを經て次で西洋に傳播し中世時代の騎士や御姬樣の最高の室內遊技として歐洲到る處の城內に極盛を致したものだつた。日本のは勿論西域から支那を通じて、盤面にも駒にも種々の變遷を閱して大將棋などから現在の形になつたのである。將棋といふ將の或は象の字が Chess, Schach など〻同語源であるか將た又其譯字であるかは別問題として、西洋の棋名は波斯語のシャートラージュから來たことは學者の定論で、此語こそ、梵語のチャドルアンガの轉音である。チャドルアンガは卽ち四兵の義である。象、騎、車、歩、之が印度軍隊の組織法で、飛車だの香車だのは卽ち希臘にもあつた車兵で、總帥と獨立車兵とを代表さしたものだ。角行、龍馬何れも古代印度軍隊中の最有力なる象兵を示したものに過ぎぬ。騎兵の桂馬や、歩兵の步は言ふまでもあるまい。吾々は無意識に印度古代の軍隊組織に親しみ、亦其古き軍法に最新の科學的の頭腦を應用さして居る。英國のオックスフォードの教授マクドネルス博士は今から四十年前、チェッスの起元及其印度文學に於ける典據を論述して、大に學界の視聽を惹いたが、當時未だ日本の將棋に就きては歐人の知識充分ならず、其方面はまだ論究の餘地を殘してある

佛教の國家觀

——某青年會講話一節概要——

佛教は如何なる國家觀を取りて居るかといふことは現今の思想混亂の際甚だ切要なることである。其所で數講說した持論の一部を今日約說する。蓋し先帝の聖忌も御近いことであるから、幾分聖德讃揚の涓滴にも捧げたいと思ふ微意もあるからである。

佛教の國家觀は眞諦門の三寶說と平行して見ることが出來る、便宜上表にして見ると、

眞諦門(宗教的)	俗諦門(國家的)
佛寶	君主
法寶	法憲
僧寶	人民

佛法僧の三つは實踐に於ては同體であり三の差別はあるが體性は一つである。性體の非空非有の靈覺が佛で、其に具足する百千無量の妙德か法で、之が理事和合し、眞俗融和して不二の妙用を發する點が僧である。この三寶の同一、同體三寶說が大乘の極意である。小乘諸經の中にも勿論同體論が成立するが徹底した所は大乘の眞如法身不二般若の談に來ぬと明了でない。

この眞諦門と平行して、俗諦門の佛教の國家觀は君と法と人民との同一を教へて居る。民本とか君本とかの議論もこの同一論でなければ徹底の解決が出來ぬ。またこの三大國家的要素の三にして卽一、一にして卽三といふ眞理が、至上の國家、至尊、至强、國家であつて、正に今日思想の混亂を融會すべき最後の論斷でもある。

第一に君主論であるが、佛陀は當時印度に共和國例せば維摩居士の居た毘舍離や共他が存在したにも關はらず、御自身は四姓打破の自由主義平等主義であらせられたにも關らず君主制を國家成立の最上とせられたことは、夫の佛典に出る轉

きて其文藝價値を知らるゝ諸君に、天下の大奇書、印度宗教學術神話の大叢書たる、十萬偈三千二百萬言の大史詩マハーブハーラタあるを知られんことを念願する。歐洲に於ける美はしき幾多の譚に感興を遣る諸君は先づ雄大にして優麗天下に比すべきものなき、印度民族の聖典とも云ふべきラーマ大王の譚、卽ラーマーヤーナの英譯を一讀せられたい。カーリダーサの戯曲や幾多の叙情詩敎訓集など、豐富なる印度文學の源泉は滾々として盡きぬ資料を有して居る。吾々は趣味としても、漢、洋の文學と共に梵文學に一層の親しみと熱愛とを有する樣に、第一に日印關係の諸君に切に御勸め申したい、

交際國の思想、感情、趣味の理解は從て敬慕となり、愛好となり、同情となる。國際親善の要諦は實に玆に存するは言ふまでもない。マッチ一箱を印度に輸出するにしても其意匠に印度人の神聖とする火神アグニに關する點を注意し、其讃歌の一句にても書いたならば、印度人の趣味と嗜好にどの位刺戟を與ふるか知れない。洋傘にても下着類にても、其他の日用品、美術品にても、吠陀やラーマーヤーナやマハーブーハラタブラーナから取り來つた材料に依りて多少にても意匠を構へ表徵を考へたら其賣行の結果は自ら面目を革めるものもあらう。吾々は甲谷陀商品館に於ける日本商品に今少し多くの印度意匠と印度趣味との現はれんことを必要と信じ、隨つて交際國の精神交際は根本的に兩國民を結び付くる連鎖のみならず其發露する所實際上に種々の利益を經濟的にも生じ來るものであることを力說するものである。

由來、吾國民は印度の古語に沒頭し、古書を研究するが如きことを迂濶極まる閑事業となして實際上一顧の價だもなしと一笑し去る傾を有する。而も精神的の交際より見れば此等の事業は實に根本的の基礎を供給すべきものである。ワーレンヘスチングが印度を經略するに當り、先づ第一に、印度の最古法典マヌ法典の研究を命じたのは流石は英人で、印度の經營今日あるを致した所以と思ふ。吾々は最後に明敏卓識の外交家たるゾルフ大使の言を復正して、精神交際、文化の理解は眞に國際上の親善と慶福を招致する根本なることに深く留意し、印度研究の熱心が同志の間に一層熾盛ならんことを切望して止まぬ。

（大正六、一一、日印協會々報）

光輝を發して其本義の次第に闡明せられ。特に先帝に於てこの大理法の最も有難く拜せられたのは、我日本文である。この說明は諸君が言はずと御存知と思ふ。何處に帝國の如き君民一家の國家があるか、君民同祖の國家があるか、「義は君民情は父子」の美はしき正法の國家があるか。光榮ある歷史の實例は今之を略する。

已上御話したこの大理法を統治者の側から見ると、

王─┬獨　尊(王)─尊榮歸仰の中心としての王─有　信(智)
　　├歸　趣(法)─文明威力の表現としての王─有　力(斷)
　　└統　攝(民)─統帥平和の主腦としての王─有　恩(恩)

となつてこれが、かの之と相反した民主主義の三大缺點である所の、(一)國家的の中心威力尊嚴の道德的品位缺乏、(二)文化表現に對する統一的の國勢中心の缺點(三)統帥能力の軍事的主力の缺乏に全然反對して强大なる國家をなす所以である。更に之より人民の側から見ると、矢張り人民の三要素の具備した點から、其國家的の德義健全なる道義の實行が見られる。

民─┬誠──忠　義(對王)─國王恩┐
　　├信──遵　法(對法)─三寶恩├愛國的道義
　　└回向─共　濟(對民)─衆生恩┘

茲で一言御斷りして置くのはこれは國家論の方面であるから、この國家的の道德が卽孝であるとの斷案から、父母の恩が特別に表面に說かれて居らぬ。

(大正七、七、廿六、淨土教報)

社會問題の趨勢及其中心點

社會救濟問題は現今に於ては最も必要なる問題として考究せられてゐる。基督の「人はパンのみにて生くる能はず」と

輪聖王の說でも判る、佛敎は確に理想的の大帝を豫想して宗敎界では佛陀のある如く俗界では轉輪王を最上とするといふ思想であつた、大善見王經等にこの思想が見へる隨て國王の德卽王道を說いた御經が澤山ある例せば心地觀經報恩品、大薩遮尼揵子經。金光明經、王法正論品、勝光王經其他數へ切れぬ、論部にも彌勒の王法正理論がある瑜伽などの中にもまた王道が說かれてある卽心地觀經の十德、薩遮尼揵子經の有信、有力、有恩の三大德等がそれである。かく佛陀の王道を主張せられ、君主制を最善の國家とせられた第一理由は平等門中に差別を捨てぬ正因正果の大理法に基くのであるが、今この說明に入ると中々面倒だから、第二に行かう。

第二は法憲だが之を佛敎では之を王法といふ。卽王者の大法で、王の人格卽法であるのが其原理だ、正法王、法行王といふことがあつて、王者の王者たる所以は正法と離れぬ所にある。法行と一致する點にある。此正法とは詳くいふと澤山の箇條になるが要約すると大慈悲（仁愛）不放逸（正義）の二である。卽仁義の外には王者はない。佛陀の外に法がないと同じ理窟である、王者の神聖にして犯すべからざるは此故である。帝國の憲法が欽定憲法で、歐洲の樣な血を以て作り、上下の抗爭で漸く編成された集議の憲法と違ふ意義はこの佛敎の王者卽ち正法であるといふ根本義が了解出來ると一層有難く拜せられる。

第三は人民であるが、佛敎では衆生の自業力は王力であると說き、衆生の福德を集めたのが王者であるといふのが因果論の論據である、故に『王者民之父母』と說かれたり、『王之養民當如赤子』と敎へたり。『王者以民爲國』と示したりしてある、君と民とは一家である一族である。否同一である。民は所有德と力と能とつまり文化の全體を王者を以て尊嚴に表はして居る、故に王は民である。王の一身は全體の民であるとなる。之につき大薩遮尼揵子經には八大恩德の說などがあるが、今は短時間だから略す。

佛陀は此の如く佛法僧の國體三寶說と平行して、君主、法律、人民の同體說を敎へられた。然し印度では阿育王の統治の下、一時ほんの僅の間實現した計りで、終に純熟の機がなかつた。支那でも勿論之を見ることが出來ず。又歐洲何れの國にもかゝる例は最近まで甚だ乏しい。獨りこの雄大な徹底した理論の實際に二千年の久しき尊嚴に保たれ、いよ〳〵益

に非ずして、寧ろ貧乏人を無からしめることにある。古い救濟事業は根本的の策を講ぜなかつたが、現代に於ては、恰も、醫術が原因を探索して豫防的療法を施すのが現代の大勢であると平行し、救濟すべきものを無からしめるような豫防的であらねばならぬ。

（5）共濟と救與（Cooperation & rescuing）古代は救恤主義であつた、即救濟する、能者が不能者を惠むのであつたが今は相互に助け合ふ共濟主義の根本から割出した方針を取る。

（6）平民的と貴族的（Democratic & Aristocratic）昔の慈善事業は貴族主義てあつて、救濟すべき人と救濟せらるるものとの間に甚だしい懸隔があつた。卽ち「乞食非人」といふような語は明にこの思想を示してゐるものである。現今の救濟事業に携はる者はかゝる態度を排して、假令泥棒と雖もその人格を認めて之を救濟すべき責任を持たなくてはならぬ。

（7）私的と公的（Pubric & Prirate）昔は或る一部分の人の專有と考へられてゐたが、救濟問題は國民全體の義務とならねばならぬ。今回の米價問題に於ても若し國民全體が社會問題の觀念を有してゐたならば、かゝる不祥な事變を未發に防いだかも知れぬ。今や社會政策の實行に就いては、擧國一致の覺醒をしてその義務責任を持たねばならぬ。

（8）國家と個人（National & individual）個人的であつたのが、國家的となつた、日本の現今に於て社會改善事業慈善事業の多くが外人の恩惠に依つて居る、例せば癩病救療事業の如き佛人の多大の勞力を被つて居る國際親善の點からは結構であるが、國民精神から見て甚だ遺憾のことである。救濟事業は國民を改善することとなる故に教育と同じく兵事と同じく國民的の事業である。從つて國民が先づこの事業を率先して國家的の精神で行はなくてはならぬのである。

以上簡單乍ら八事項に亘つて新舊社會事業の相異點に關して叙述したが、其中一項から第三項まで科學主義から來。第四項と第五項迄は經濟問題に根底を置き。第六項と第七項は人道主義の立場から論じ、最後の第八項は政治的見地から主として見たもので、是が八項中で實行上の根本主義になる。然しこの根本主義には唯汎漠に國民的、國家的といふ丈では不徹底で何か現實の中心がなくてはならなぬ。卽ち國民的國家的であるといふ理論から出發して其中心を求めて來る順序になつたのである。

云つた言葉は、今更新しく云ふ迄もなく人口に膾炙してゐるが、然し、人間は靈のみで生きることは出來ない。現代は「人はパンなくしては生くる能はず」と云ふ痛酷な時代に逢着したのである。如何にこのパンの問題を解決すべきか、卽ち救濟問題の主要研究である。宗教は元來、靈の問題を取扱つてゐるが、靈の問題は肉の問題によつて徹底せらるるのであつて、夫の聖德太子や聖フランシスの如き、この精神の躍如たるものがある。先頃所謂八月事件で食糧問題に關する暴動に續き種々不祥なる現象が續出した。此秋に際して宗敎家は其本然の責務に見て一層社會問題に觸れなければならぬことを肉迫せしめられてゐる。此處で卽ち社會問題と云ふとその範圍は頗る廣いが、今此意義を極めて局部的に制限し一言にして言へば、感化救濟、慈善事業として論歩を進めようと思ふ。而してこの救濟問題は動もすれば特種の問題なるかの如く考へてゐる者があるが、實は然らずして、敎育や衞生と同じく國民としての共同義務である。若し此意識が今少し官民に徹底したら、八月暴動の如き慘禍はなかつたであらう。そこで現今の救濟事業は古い救濟事業の方法より異つてゐる點を一寸指摘して置く必要があるが大約次の通りである。

（1）主情主義と合理主義（Rationalism &. Sensationlism）昔は唯憐れみといふ感情卽惻隱の情から救濟事業を行つたのであつて、極めて簡單な感情主義であつた。これは固より人情の至致で救濟事業の根本であるが、其弊たる動もすれば乞食を作る。現今の救濟事業は理性的の判斷を加へて事情狀態の研究から來る合理主義に據らねばならぬ。

（2）斷片的と系統的（Systematic &. Fragmental）古は場合々々に應じて行ふのであつた。相互の間の連絡系統はちつともなかつたが、現今は中心點を有ち、系統を立てゝ纏められて來た。

（3）研究と實行（Inquiry &. Practice）昔時は原因結果を顧みず單に實行的であたつのが、今は研究的となつた。例へば貧民救濟を行ふには先づ貧民の研究をなすことである。卽ち原因結果を攻究して科學的の立場から救濟事業を行はなくてはその功果は擧らぬ。

（4）豫防と應急（Praventive &. ezecutive）應急策であつたものが今は豫防主義となつた。卽ち米價が暴騰したといふような事件が起ればそれに應じて米の廉賣をする如きことである。然し乍ら、慈善事業の本質は貧乏を救濟すること

る。かくて社會問題の中心點は今すべて皇室を仰ぎ、又將來も之を中心に奉戴して益國民的國家的施設の徹底を期せねばならぬ。（講演大要）

（大正七、十二、廿五、勞働共濟）

人類最高の二大理想

吾人が人生々活に於ける覺醒の第一步は自己反省である。吾人が徹底して自己を反省する時、其所には必ず自己の不完全なるを認識するものである。更に客觀の現實に眼を轉じた時には、決して世界は美でもなく、樂でもなく、淨きものでもなく、常住的のものでもなく、實に、無常、苦、不淨、無我が世界の實相である事に思ひ及ぶであらう。此の主觀なる自己の不完全と、客觀世界の濁惡なりと云ふ覺醒とより生れて來るものは卽ち厭離穢土の思想であり、此の反省の結論として起るものが欣求淨土の信仰である。

此の厭離穢土、欣求淨土の思想とは、不完全なる自己を絕對覺者に歸命せしめ、不完全なる世界よりして完全なる常寂光土に生ぜんとする向上發展の要求にして、而も此の理想追求は人類自然の歷史である。

而も現實の人生は實に不自由であり、不可能の事多く不可知の境界亦甚だ多い。然るに人間は不完全の中に完全を欲するものである。秦の始皇が長生不死の仙藥を求めたと云ふが如き、斯る不可能の事に於ても人間の思想追求の煩惱が一面を示したのである。此の如き窮屈な世界に而も不可能な大なる自由を要求して居るのである。

この要求から昔は自然は恐ろしいもの、日月星晨には靈妙の神威を藏せるものとして畏敬せしも、現今は之を使用し、應用し、人類の幸福に供すると云ふ考に立ち到つて居る。

然し科學は進んでも人間には、彼のスペンサーの所謂「不可知論」のある如く可知の境界が廣くなれば廣くなる程不可知の境界も隨つて擴大して來る。かくて吾人には不可知を無限に續けて行くのである。卽ち吾人には出來ないものがあり、知る可らざるものがあるのに、而も人間は此不可知の境を追求して已まぬもので、恰度向ふに山が見える。又登れば

國家的の中心國民的の中心抑何者であるか、卽恐れ多いが之は皇室であらせられる。これは各國ともに實際上皇室が慈惠救濟の中心であるので、墺國の如き每年皇帝が貧民を宮庭に集め親ら足を洗つてやられる儀式がある。之は一例に過ぎぬが英國でも白國でもそうである。皇室が率先して慈善の模範を示して居られる。この仁愛の模範が皇室であるといふことは、我國の如き特別の歷史と國家組織を有して居る國民には一番正當に且つ明確に實現される。卽皇室は我々の努力、生命、あらゆる光榮、卽全文化の歸趨であつて、我々はこの尊嚴の中心を仰いで人道と平和の文化開展に力めて居るのである。救濟事業もこの大なる文化の一部、國民努力の一端であつて見れば、その中心は勿論皇室であらせられねばならぬ。否、仁愛慈善を具體現として列國に卓絕した吾が皇室は中心中の中心として慈善救濟の力の源泉として仰がれるのである。前所論の八項の中慈善事業の根本主義を國民的國家的に置いた歸結は當然此處で始めて徹底する。扨茲處で一寸理論上の根底として佛敎の國家論に入るが、佛敎では一言にして言へば君主、律法、人民の三大要素の三位一體觀である。君は助法であり又人民の心である。この說が現代の徹底した民本と君本との調和になるが、吾が國は君臣同根、君民一體、一家の親である。この類例なき歷史は、この雄大の敎義と一致相應して益々皇室中心主義の慈善事業、社會事業、社會問題の解決を徹底せしめる。

吾が國の慈善事業は古くから行はれて居るが其卓越せる社會事業家として聖德太子を讃美せざるを得ないのである。太子は政治、美術、工藝等のあらゆる方面に於て卓越せる人格者であつた。而して社會事業の一つとしては大阪の四天王寺に施藥院、療病院、慈田院、敬田院を建立し給ひて大いに救濟事業を實行せられたのである。太子の此御精神は偉大な感化を與へてゐる。彼の忍性の如きは、癩病患者を救ひ、病者をも救療し殆と世界比類なき大慈善家であるが、彼は四天王寺に別當をして、太子の遺業を見て、之に感化せられたので、實は鎌倉時代に太子の事業が復活したのだ。其他古代に行はれた鎌倉から足利時代の社會救濟事業は皆太子の影響である。卽ち之等の救濟事業は皇室中心であつた。これは實に誇るべき歷史であるが、現今に於ても赤十字社の如きも今日の如き發達を爲すに至つたのは皇室の御熱心によつたものである、其他、明治大帝より今上に至りて總ての慈善は何れも皇室の恩光に依り發展し、又常に慈善仁愛の根元で在らせられ

拜なき國はない。吾人に此の光明の觀念がなくば、生存競爭の觀念は起らぬものである。火の發見は人間が他の動物に勝るゝ一大原因である。動物は決して火を使用することを知らぬ。希臘の神託の中には、プロミトイスが天下の聖智の神火を盜んで人間に來たといふ神話がある。人間が神たり得るとするならば、神の如き火を持つと云ふことである。光明と云ふものは、世界の一の理想である。宗教にしても光明なき宗教には理想がない。永遠の生命。無限の光明。此れ吾人の最高の理想である。

印度エジプト、ギリシヤ、ローマ何れの國の宗教にも悉く光明の觀念がある。基督の聖書を見ても神は世界創造の時、「光あらしめよ」と云へりと書かれてある。されば人間の理想には少くとも光明の觀念がある。

又現代哲學の中心は生命の思想である。ベルグソンも、オイケンも共に生命論者である。光明の觀念には平和論の思想が含まれて居る。

此の如くして世界の現實を眺めても、平和と云ひ、正義と稱し、人道と稱へ、自由を叫ぶものゝ竟畢生命と光明に對する理想であつて、若し此れなくんば眞の平和でなく、徹底せる正義人道でない。

更に哲學的に考察する時、人間の思想觀念の中で、何が最高にして而も普遍的で、且つ眞理なりと云ふかに對し、カントは、之れを直觀、悟性、理性の三を以て答へて居る。卽ち人間の思想上及認識上の問題に就て最高の觀念は直觀である。此れ人間の已に有する先天的超越性で國を思ふも、美を感ずるも、神殿に神の存在を意識するも悉く直觀の力である。此の直觀は時間と空間の兩方面がその最高の形式である。花は場所があつて春と云ふ時間があつて咲くことが認められる、何者を考へるにも此の二者を離るゝことは出來ぬ。而して此の時間はカントから云ふと心である。空間は外面的に宇宙をあらはす物である。時間の內容は生命であり、空間の內容は光明である。宗教上かと云ふと神である。

カントの所謂純粹哲學の形式に一層深く內容を與ふれば時間には靈魂の不滅が生れ(主觀)、空間よりは光明卽ち神が生れるのである(客觀)。

此の如く何れの宗教に見るも哲學の內容を考ふるも此の二者の理想あるは明かであるが、更に此の點に於て何れの宗教

又向ふに山があるのを、吾人が追求する如く。前に美しい花がある其所に行けば又鳥がさへづつて居る。又向ふに清水が流れて居るのを、其所其所と花に鳥に風月に美を追ひ、樂を求むる如く、到れ共到れ共道盡きず、追へ共〱限りなき自然を追ひ求め行く處に發展がある。其所に宗教がある。

政治や哲學は、理想は永遠に理想であるが、宗教には理想が現實である。吾等の淨土教の榮ゆる所以亦大に其所にある。淨土教が法然上人八十年の一大努力によつて、時代人心の歸趣となり、諸宗超過の法門として永へに世の光明となり得る所以のものは、上人の偉大なる人格によるは勿論であるが、實に淨土教に人類の思想上、生活上、永遠の理想に副ふものが嚴存して居るからである。若し淨土教に此の生命がなかつたならば、已に今日迄に滅亡して居らねばならぬ譯である。

全體宗教の歷史を見ると、人類の理想として現はれたるものは二つある。

（一）には生命である。由來人類は生命の保存に大なる努力をなして居る。卽ち人間本來の性質として、先天的に無意識に生命欲を具有して居る。獨り人間のみに止らず、凡そ生ある物として、顯微鏡で見る如き小さき蟲の心にも、必ず永生の要求は存して居る。之れ畢竟、生物には、自己保存、及種族の連續に對する切なる要求の存する所以である。

これが宗教上靈魂の不滅の思想となつて現はれた。實に此れは人間の最大限の戀である。如何に野蠻の人間にも、進步せる宗教に見るも此の思想は最も力あるものである。吾人が物質論者でも、靈妙の意識が炭の如く燃ゆるものであつたり、若しくは吾人の精神が死の儘に永遠に亡び行くものであつたなら、世界は如何に寂寞なものであらうか。つまり吾人の精神は永遠盡きぬものである。古き宗教を見ても、靈魂の不滅は人間の要求であると云ふてよろしい。

此の如く內容から云ふと、人間個々の中には、どうかして吾人の中心なる靈魂を續けたい。肉體は亡びても、靈魂の永續は欲して居る。エジプト・アツシリヤ等の彫刻に見るも、又は野蠻國の偶像の上に眺めても、確かに靈魂不滅の精神が時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、野蠻國にも、文明國にも、變りなき人類最上の戀として現はれて居る。

（二）に外面的に人類の理想を見るときは、卽ち光明に對する欲求である。

宗教の歷史を見るとき、ギリシヤでも印度でもエジプトでも、バビロニヤでも、何れの國にも太陽の崇拜卽ち光明の崇

力を認むるものである。而も宗教多しと雖も、眞に徹底的に此の要求に應ずるものはただ、法然上人の淨土教の信仰あるのみである。

（大正八、二、増上寺日曜講演集、同三月號宗教界）

宗祖中興二祖の教義の異同と現代の淨土宗

（一）宗祖の降誕を記念讃嘆する爲に宗大今日の祝祭がある、時偶冏公の五百年遠忌に逢ひたるを以て、兩祖廣大の恩徳を併せ讃ぜんも無益ではあるまい。宗大は其目的として日に日に宗祖を現代に現し奉らんとするの努力と共に、宗乘に餘乘に百科に冏祖の大力用を再現せんと奮勵しつゝあると思ふ。否、かくなくてはならぬと思ふ。玆に於てか兩祖を併せ讃する、益々無意義ではないことになる。

（二）宗祖と冏祖とは歴史的の事情が著く異なる。宗祖の立教開宗は、其勢ひ恰も無人の境を横行する概ありで、諸宗の高僧悉く歸伏し、天台も眞言も實際上雌伏したのは御傳を見ると判る、冏祖の時代は安心立命の方面では臨濟禪の極盛時で、宮庭を初め奉り、上中流の縉紳武人皆は禪であつた。夢想國師などの權勢が飛ぶ鳥を落す樣であつたのは申すまでもない。而も彼等の淨土宗に對する態度は如何であつたか夢想國師は淨土宗は小乘だと茶店問答で大膽に放言して憚らず、虎關は元亨釋書に淨土宗を寓宗と貶したのでも判る、之と共に現世の祈禱としては眞言の大勢力はこの時代に名流の輩出し大著の出たので知れる、而も文觀の立川流の邪義までも宮庭に出來る程盛を極めたものだ。

（三）此時に當りて一面無相空寂の禪と他面六大無碍の密宗を兩側に置きて、宗勢を張り外侮を禦いだのが冏師である。冏師の教義はこの二面から見て來ぬと徹底しない。性相兩頓、事理縱横、即相不退、見生無生、實義無說、無聾當、即成佛等の思ひ切つた教義は此二宗統攝の上に顯はれた、格外の宗風である。吾々は淨土教に於ける空理の自在な發揮を以て確に禪に對抗し得て、寧ろ之に超越した巧妙な判釋を頌義に窺ひ得ると共にまた四曼三密六大常瑜伽の精髓を相頓の大膽な鐵案に仰ぎて、驚く計り眞言を壓倒して立つのを嘆せずには居られない。

よりも力強く此の觀念內容を有する宗教は淨土敎である。卽ち淨土敎は生命の永遠たることに對して壽命無量の觀念を與へ、光明に對しては光明無量の觀念を與ふる。卽ち吾人が信ずる阿彌陀佛は光壽無量の體現である。卽ち三世（時間的壽命無量）十方（空間的光明無量）に遍滿するが阿彌陀佛の本體で、此れ最も吾人の理想を充たすものである。

昔から阿彌陀佛の名號を萬德所歸と云ふ。これ名號の六字に所有德と力とが含蓄さるゝ所以で、換言せば所有理想の包含であり、惣ての希望の歸趣である。まして人類の二大理想たる此の二の觀念が無量壽、無量光の二義を表示する阿彌陀の三字に攝在するは最も明白なるものである。

而して此の壽命光明と云ふことは主觀から入つて來た觀念と、客觀から主觀に來た觀念との二がある。此れが一層明にせられたのが因果關係である。卽ち佛から云ふ本願、吾人から云ふ信行、吾人から進む願往生心、佛の垂るゝ攝取、悉く此れ因果關係であり、此の二つを結合さするのが南無阿彌陀佛の六字名號である。吾人が此光壽無量を圓具せる名號を稱ふることは、絕對無限に對する戀であり。小我大我と一致する一大力である。

五劫思惟の體現は過古以來人類の理想を滿足させ、未來永劫の衆生の希望を完全せしむる根本力である。吾人が過去久遠の時代より血と涙とを以て追求せし二大理想が此に實現し得るのは卽ち佛の大悲本懷より發せし萬德所歸の念佛を稱へることでも而も之れが正道の善根であるからである。

更に印度宗敎の實體に見るも三の要點たる實在、思考、歡喜の中に於て、實在は光明であり、思考は壽命であり、更に此の二つの憧憬する處に歡喜となるのである。

實に法然上人の淨土敎は人類理想の根底をなして居る。此の二大理想の結合が名號であると知り得る處に佛陀大悲の有難味が解かる。此の信仰が淨土敎であり、法然上人の生命であつたと同時に、吾人の希望、吾人の理想、吾人の願望に副ふ宗敎は眞に淨土敎なりと斷言し得るものである。

哲學者は此れを形式とし、政治家は蜃氣樓として見るけれ共、宗敎は此れを實際に求め、共所には佛の徹見十方の大智惠光明を眺め、汲め共盡きざる大慈悲の流れより與へ給ふ壽命の悠久を慕ひ此所に人類最高の二大理想を實現する偉大な

ぬ此點に就きては第一に信の方面で單直大信を主張することで、十八通の中に此中心思想に十分見へるが、大小の十宗を解信因果の四句分別にした所などは一枚起請文と一轍である唯前にも言ふ通り直觀的と理智主義との相違が茲にも見られる丈だ。今一應の圖を作る。

解ノ解(因ノ因)	倶舍 成實 律	因分不可說
解ノ信(因ノ果)	法相 三論	
信ノ解(果ノ因)	天台 華嚴 佛心 眞言	
信ノ信(果ノ果)	淨土…果分不可說	

再び言ふと權大乘は第一句に分通し、實大乘中華天兩宗は第二句に分通するのだがそれは煩雜になるから略して置く、第二には行の方面では厭くまでも散心念佛を正宗とせられたことだ。十八通の下卷觀念法門の彼佛心光常照此人を釋して、觀念の念佛には佛の來現は影現に過ぎぬ本願の散心念佛は念々佛心に住在すると喝破したなぞは實に痛快である。第三は善導一師を指南とする事でこれは往生要集大事の下に明言してある。

(八) 已上空冏兩祖の一致した點を更に考へて見ると(一)大悲本懷(二)撰擇本願(三)萬機普益の三點に歸して仕舞ふ、之が空冏兩祖を通じた吾が淨土宗の根本思想であつて現代思想の要求に對する指導として左の通りである。

大悲本懷——人道主義
選擇本願——正義思想
萬機普益——民本主義

(九) 茲で冏祖時代と現代とを考ると二つの點がある、第一は冏祖時代は一部の智識階級即ち禪密の哲學に對して健闘

（四）然しこの巧妙な且つ大膽な判釋は鸞綽導空辨然の六師、別して宗祖の敎義とは大分懸隔のあるものにも見へる。聖道淨土難行難行易行の判敎が機根中心の實行主義であつたに比して、聲聞菩薩の二藏は敎理的組織的である。宗祖プラクチカルの所がドグマチカルに變つて來た。其他順次往生のおとなしき主張が動もすると不斷煩惱得涅槃なんて此土入聖の卽身成佛主義と一紙を隔つる際どひ所まで進んだ。又指方立相は無葦品說や娑婆敎門の禪的說明の爲に大分動き出した樣にもなつた。

（五）この理論上の奔放な統攝主義は信仰主義がスマラステツクに墮したと酷評が出る間隙がある、而して又實際敎制上に問祖の工夫した五重だの、其他法服法式の末に至るまで、矢張り當時の禪密の統攝主義から精を採り、粹を拔きて、宗徒の統制を固くし蓮宗一門の團結を鐵の如くにして、宗門の體面を嚴重にしたが、之は宗祖時代の簡易な無形式な念佛中心の敎に比べると大分のフオアリズムになつたと考へられる。この宗義上のドグマテズム若くはスコラスチシズムに對して大玄僧正の探玄抄が出た。而して宗制上のフオマリズムの弊に憤慨して起つたのが卽夫の貞極上人の五重廢立抄の復古說であつた。

（六）探玄抄は明に大師と禪師との間の相違を認めてこの撞着を融會せんと試みた。それは夫の隨自顯宗門と隨他扶宗門の妙判である。前者は經論正義、佛祖眞實の正兵であるが、他は巧說護法、建立宗旨、對辨他宗の奇兵である。卽ち護法扶宗、宗門興隆に止むを得ざる活手段に過ぎぬ、此點から見ると、問祖と宗祖及び導綽諸祖とは言はゞ表裏の別に過ぎぬことゝなる。更に今私見を以て云ふと第一は宗祖時代の信仰主義が敎義主義となり、宗敎から哲學に一轉して來たので佛陀と龍樹との印度佛敎史の前例も推される。第二には索多覽別意趣の宗祖時代の直觀主義、全體主義が阿毘達磨依法相の系統論に轉じたのだ。更に第三に宗祖時代の單直の實行が、玆に理論の說明を要する時代になつたまでだ。これは大體は探玄抄の會通を各方面から見たに過ぎぬが唯探玄抄では動もすれば奇兵の活手段、權道覇道の活作略であることゝ見られるが今は歷史的の發展で、必然的に存在する連絡であると見て來たいのが、一步踏込むだ所である。

（七）但し問祖の敎義が宗祖と一致符合してどの點から見ても異流でない點が、中心思想として必らず存在せねばなら

この三大性質に就きて佛教家の勞働問題に對する態度としては、第一に理論上、如何なる位置にあるか、佛教的批判は如何なるものであるか、第二には實際上、如何に勞働問題を處置すべきか、佛教家は果して實際上、勞働問題解決の力ありや否や、第一の難關に對しては勞働問題の中心點を述べ、第二の疑問に應じて、勞働神聖の眞意義を略述する。

本論

佛教の勞働問題に對する理論的基礎を示めし之を勞働問題の中心となすにつき、先決問題として現在に於ける宗教對勞働問題の大勢を一瞥して之を批判し云る必要がある。今、概略之を辨じて佛教的の論理基礎を示さむ。

（1）現今の宗教對勞働問題

概論すると、現今の勞働問題を論ずる者は、宗教を度外し或は宗教を敵視してゐるのであるが、大體理論から云へば、宗教と勞働問題とは撞着するものではない。今、勞働問題を人類の歴史から見れば、文化の重要なる一部分である文藝、政治等と同一であつて、この文化の一要素である已上、決して宗教を度外し又は敵視すべきものでない。哲學は人類文化理論の基礎であり、宗教は人類文化全體の活動の基礎及理想である。勞働問題も政治も、その活動の一部分としてあらはれ、理想實現の段階に過ぎぬ。若し一歩を讓つて勞働問題が第一で文化とか政治とかが、第二であるとしても原則として宗教と勞働問題と撞着する理由はない。如是きは基督教の如き人類と神との間に差別を認むる宗教にても或る程度までは云ひ得る。況んや佛教の如き平等の上に立てる宗教に於ては當然である。然るに事實上、現今勞働問題を論ずるものは、宗教と相反するか如き傾向を有するは何ぞ。思ふに是れ歴史的の順序である。卽ち一面から見れば現今辿りつつある勞働問題の經路は第一期の奴隷時代を僅かに過ぎた第二期である。卽ち卽今辿りつつある勞働問題の中心は物質にあり、勞働者の生活改善にあり、悲慘なる階級に對する奮闘の時機である。勞働者をして恒產たらしむる時期である故に物質に偏する自然であるが、これは第三期としての精神時代の來るを豫期せねば說明は出來ぬ。又性質として此丈で終り得るものでない。現今の勞働問題を見ると多くは階級戰爭である。現時の社會及經濟組織は階級的區別に立つものなることはなほ依然なとして昔時の如く、其階級間の利害の衝突に依りて、不斷の鬪爭が行はれてゐる。然し人類の歴史を考ふるに物質萬能

された。今は一般の多數卽ちマジョリテーに對して健鬪すべき時代となつた。第二には宗門の實勢から見ると開祖時代には宗門對他宗の智識缺乏から哲學的系統的の活作略が起つた。今は宗門對社會の事業缺乏の實際から經濟的事業的の方面に宗風を起さゞるを得なくなつた。空祖の時代は宗祖全人格中心の信仰時代でありとすれば開師の時代は當に教義系統中心の哲學時代で今日は多數救濟を目的とする社會事業の時代に遷つて來たことが、歷史的の爭ふべからざる事實である。

（十）吾々は玆に於て現代の念佛化を中心主義とした、社會的宗教としての淨土宗が、現時の要求であることを切言する。三十卷の頌義で、佛教全體の教系上に雄偉な統攝主義を發揮した淨土宗は、今日大悲本懷、選擇本願、萬機普益の中心思想を以て、現代思想の歸趣と現代生活の目的を的確に指導すべき時が來た。この徹底せる指導と熱烈な献身的の努力が卽ち大師と禪師に對する至上の報恩である。

（大正八、五、淨土教報）

佛教より見たる勞働問題（上）（撮要）

序論

現今に於ける勞働問題は、重且大である、刻下の政治も經濟も、勞働問題を中心として動いてゐる。現に英米佛の諸國に於ても、この問題を度外しては、政治も經濟も出來たものでない。この勞働問題は戰前に於て、其勢燎原の火の如くであつたが、戰後は特に急に其聲が高くなつた。戰後の勞働問題には三つの傾向がある。一には疑ふべからざる世界的傾向を以つてゐることで、さる大戰は獨逸に對してなされたものであつたが、勞働問題は世界を相手にしての大戰爭である。二には勞働階級の優越と云ふことである。勞働階級が總ての階級を自己の手中に入れんとする傾向である。三には頗る恐るべき政治的色彩を帶びてゐることである。是等は固より國によりて多少濃淡の別はあるが、この三傾向あることは同一である。今、是等の事件に對する批判及歷史的の考察は、ここには略して唯宗教家特に佛教は如何なる態度を取るべきかと云ふ事に就て述べやう。

な反感を持つて居る。日本にても或る者が本願寺を燒くとか大阪あたりの寺を燒くとか云ふ事を耳にする通り大に宗教に反感がある樣に見える事は事實である。（これは一面獨逸系の破壞的革命思想と、一部陰險な基督教徒の煽動的罵詈から來た複雜の思想である。）

元來勞働問題を論ずる者は新しい事を考へて改造を熱心して居るのに、宗教は舊組織を維持せんとのみ力めて居る、この點から見る兩者の折合が惡くなるは當然である。然れ共勞働問題の解決はマルクスの說に依らなければならないとか、無神論でなければ解決が付かないと云ふ必然の理由は少しもない。羅馬法皇レオ十三世は天主公教勞働同盟を作つて居る。ビスマークが國家的社會政策をなせし如く、レオ十三世は宗教的社會政策をなして居る。この政策は少くとも法皇が位にある間は勢があつたことは疑ひない。又ライン河畔の天主教の勞働者が三萬人程集まつて氣勢を示したこともある。又ナウマンは基督教社會主義を唱導して居る。ナウマンは政治上には餘り勢力はなかつたが思想上には大なる勢力を持つて居つた。又現に獨逸の中央黨が立派に基督教社會主義を標榜して純粹の民主黨と提携して國運を兎も角累卵の際に維持して居る。米國の社會主義の穩健なるものは少くとも基督教を度外視して居らぬかくの如く歷史的の事實に徵するもマルクス已外に幾多の解決法がある。佛教に於ても又此の解決法が嚴として存する。今次に之を述べて見よう。

（下）

（2）佛教教理上の基礎

已上は宗教全體として勞働問題に對して解決を缺くものでないといふことを、理論實際の方面から、極めて大略のことではあるが、明にした。次に佛教教理上の基礎論に入る。實に玆に來らなければ、宗教對勞働問題の的確の解決は出ぬ來ぬである。

佛教教理上の勞働問題解決基礎は大略二方面から觀察が出來る。

一、人文觀察　マルクスの考への如く人類の歷史は、經濟的發展の結果とのみ考へ得可きものか、卽ち人文の歷史が唯物的史觀のみを以て滿足すべきものか。是が根本の問題であるが、極めて常識的に云ふても人類の歷史は理想の追求にあ

主義を以て終れるものではない、人々相食む禽獸的闘爭で終るものでない。最後に來るは精神時代である。調和された圓滿の平和ある、即ち勞働問題も最後に來るは平和である、諸君も幼兒哺乳の中は周圍のものに對して反抗し得なかつたのであるが、これが少年青年になると多少自覺が出來る、自覺が出來るとある場合には自己の關係者に反抗する事がある、然しこの反抗は方便であつて第三には理解ある調和、老熟した平和が來る。この第三期こそ即ち精神時代である。

勞働問題の中心は現今歐洲に於ては多少異るも大體に於て物質に走つて居る。而してその思想の根抵を爲すものはカール、マルクスの學説であると思ふ。種々の系統や流派はあるが何れもこれに直接間接の影響あることは言ふ迄もない。彼の著資本論は始め獨逸には容れられなかつたが、今では殆どバイブル已上の崇拜を受けて居る。日本にても大學の連中には彼の學説を崇拜するものもあり、外國に於てもマルクスの説を研究批評する者が澤山出來て來た。今マルクス教義の根本觀念を爲すものを見るに、第一には人類の進化發展は富の分配に依り、生產及び生產物の交易が人類の歷史でありとする所謂唯物的史觀に立てるもので、第二はダーヴヰンの進化論に依り人類の發展は生存競爭に依るとするの説である。從つてその競爭は最も慘酷なものであつて、其の敗北者は漸次滅亡に陷るの外はない。夫の階級爭闘説は即これである。資本論には勿論他の根本原理はあるが宗教的歷史的に考察する時はこの二觀念を出でない。露國過激派的ボルシウズムの一派もマルクスの説から出て居る。獨逸ではマルクス以後之を祖述する社會民主黨が起つてマルクスを開祖とし尊んで居る、隨て獨逸の社會黨の人々は無神論である。それ故に宗教には大なる反對を以てゐる。又その反對の一面の理由は此純理的基礎の外に實際上から來たので現今成立して居る教會が多く貴族富豪の手にあること、之を擁護する機關であること、又舊教の僧侶は多く富んで居ることなどある。從つて是等に對して反感を持つは當然である、又基督教が國教となつて居つたことに對して社會黨の人々は宗教は各自の信念の上に存するもので即ち私事で國家として一般公的に行ふ可きものでない私物でなくてはならないと主張して居る。然しこの國教主義は今は露國や獨乙の滅亡の爲に自ら轉覆して破壞されたが共存在して居る中は宗教家の一大特權一大保障であつた。かく、現今勞働問題を論ずる者の中で獨逸系の者は少くとも宗教に反感がある。米國の勞働問題は多少の緩和されて居り寧ろ宗教的のものもあるが又IWWの如きは宗教に對して極端

調的共存の爲に今日に至つた所以を根底から覆がへさんとするのである。卽ち共存精神、特能發揮が今日の問題解決中の要點でなくてはならない。佛教の此方面に下した鐵案は前の上求菩提に對し、下化衆生の一語で盡きる。――衆生無邊誓願度の廣大な精神で盡きる。

更に少しく之れを進めて論して見る第一の上求菩提は理想の追求と實現とである、而して理想に無限の光明と永遠の生命との二がある無限の光明は人類の知慧とか精神能力をさし、永遠の生命は人間の安全なる幸福の狀態を云ふ。從つて眞の勞働問題の解決はこの理想に依つて始めて爲される。普通に佛教にては光明は慧生命は定である、淨土教も六字の名號の信行は要するに此二大理想の實現にある。第二の下化衆生とは人類相互の調和生活國際の平和聯合である。勞働問題の解決――その社會的、國家的、國際的の意義はかくして初めて完全な解決が出來るのだ。

（３）佛教的勞働解決の要項

已上の對唯物史觀及對階級戰論は大乘佛教の根本義たる上求下化の二大精神から批判的對外破邪の方面であるが、之に次ぎて必然に建設的對內顯正の實修方面を說明して來ねばならぬ。

更に是等諸問題の解決に就いて佛教には一に包容精神無我精神がある。而して自己存在以外に大なる者を認さむる時に大公無執となる。基督教にては此考は出て來ない。二には報恩觀念である。基督教の學者は報恩觀念は古い考へであると言つたが古いのでなくて知らないのである。報恩觀念は經濟的に云へば共濟の義である。國家若くは社會的に云ふと共存の義である。共存共濟主義の深き意味が報恩である。現今日米間日支間に於ける問題も相互に於ける報恩の觀念の足らない爲である。世界に此報恩の觀念あれば平和が維持される。今日資本家は勞働者に恩を感じ勞働者も資本家に恩を感ぜなければならぬ。共に大乘精神の共濟主義が必要である。この報恩の精神に依つて人類は麗はしき深き生活が送れる。三には佛教の隨喜である。ユダヤ教に於てはヱホバ以外のものは背けとあるが佛教では何宗教にても人類は光明を與へるものには隨喜する、獨帝カイゼルが靑島を取る時「基督教にあらざる東洋文明は打破せよ」と云つて居る。然しカイゼルのみを責めるには及ばない、日本の宣教師中にもかゝる考の者がある。自他の善根を隨喜する所に無限の生命がある。四には

ることは事實である。理想を追求する所に人類史の意義がある是を佛教の語で言へば人類の歴史は上求菩提であつて永遠無限なる高所に進む歴程（プロセス）である。マルクスの資本論を聖書の如く考へる人にも向上發展の精神はある。勞働階級の生活改善正當なる權利の回收皆夫れに過ぎぬ。彼等にも勿論無限の幸福を願ふ熱情がある、即ち一面人類の歴史は永遠の生命に向ひ無限の光明を追求するにある、經濟學的に見ても人類は品物を造るが人類は品物ではない、又人間の勞働は品物のみを生産するものでは決してない、國際聯盟の條項中『勞働は商品にあらず』との意義も唯物史觀では徹底の近代意義は闡明することは出來ない。要するに人類の文化の上に高遠なる理想を認め、正義人道自由の雄大の發展を前途に望むのは如何にしても、偏狹な唯物觀では不可能である。又この唯物觀の上には正義や人道や自由の徹底した基礎がない。流動した活躍がない。圓滿な調和がない。――即精神文化。靈的文明を理想主義吾々が要する次期を必然の未來として觀來つた時に、其所に、佛教の上求菩提の大精神が昭々として日星の如く輝がやいて來る。

二、人間觀察　人間の歴史をダーウヰンの謂ふ所の生存競爭、即ち生存競爭即ち生存の爲にする鬪爭の一つの表顯のみと見られ得べきか。（ダーウヰンも晩年には幾分自己の說が變つて居るが）勞働問題に此生物學的基礎を取つた、マルクスの階級戰論を何處まで推し立て行くが正當であるか、蓋し人類の歴史を鬪爭そのものと見る人は鬪爭の後に來る平和を豫料するものである。戰爭そのものは目的でなくして方便である。歐人と東洋人とは性格に於て多少異なる。平和寂靜を願ふは人間の本性である。ゲーテが晩年イルメナウの幽林に於て「林にも巖にも平和あれ我にも平和あれ總ての人にも平和あれ」と叫んだ通り、平和は總ての人の希ふ所である。然るに此大目的を忘れて、調和そのもの平和そのものが、一切の問題の根本であることを度外視しその手段方面である戰鬪のみを高潮するのが近時マルクス派の勞働論である。大體大處處から見ると、平和とか調和とか云ふものは征服でなくて共存でなくてはならぬ。或る階級或る特權をのみ偏重して、之が爲に他を犧牲とするはこの根本精神に戻る所以である。露國の過激派が此偏重邊執の行方である。レーニンが『昔は專制君主が農民を苦めたが今は勞兵が之に代つたまでだ』と傲語して、傍若無人なるはそれである。今の勞働問題の危險は此勞働專制思想である。專制思想は暴力を濫用する。他階級を獸的に征服迫害する。人類の文化が分業的特色の發揮と協

る。聖道門の教は日本の萬民悉く陛下の赤子であると云ふ國是に反する。法然上人は淨土門を開いて上は皇后を教化し下は遊女をも教化した。今日吾人もこの精神に依つて資本家佛教を打破して平等主義の佛教に立たなければならない。吾等は宗祖の散心の念佛に依つて農夫は鋤を手にしながら商人は算盤を手にしながら念佛を稱ふる所に力と生命とがある。現今やゝもすると觀念の念佛を說くものがあるが、誤れるも甚しい。吾人は散心の念佛に依つて無限の光明と永遠の生命とに生きなければならぬ。散心の念佛に現代救濟のデモクラチックな生命がある。

斯の如く觀來ると「勞働」は政治と共に神聖だ兵事と共に學問と共に神聖だ。學者や政治家や軍人の功業を尊敬するならば、勞働者の仕事も尊敬せねばならぬ。否、一步進みて、神聖と云はれる、讀經禮拜祈禱と同一の神聖さを以て勞働を見て來ねばならぬ淨土宗に於ては正信の上には何事も念佛の助業とすれば勞働は禮拜讃嘆供養と同じく立派な助業であつて、これが卽ち、佛土莊嚴の大因緣である。かく見來りて初めて勞働神聖の眞意義は徹底する。已上局限された時間に極めて重大の問題をざつと述べたが、要するに、序論に述べた現在の大勢たる、勞働問題の萬國的性質は正義人道の根本たる上求下化の雄大の大乘的根柢から之を充分に利導して行ける、その勞働優越の傾向は平和共存共和の觀念から、平等主義の見地から前述べた大乘の正見から、適當に協調的神聖の觀念に攝せられる、而し夫の恐るべき政治的色彩の如きは、前二者の解決から自然に穩健正當のものに矯正し得るものと思ふ。(大正八、十一、廿一、淨土教報)

戰後思想及生活の指導としての法然上人の教義

改造問題と淨土教

(一)

由來宗教は單に佛教許りでなく、回教でも基督教でも其他の宗教に於ても、悉く「改造」と云ふ意味を有して居るものである。古來宗教を定義するに當つて、或は有限と無限との連鎖となし、又は現象と本體との關係を說くものとなし、又

回向の思想である。自他の一切功德を集中して悉く之を一大理想の建設に向ける。願以此功德、平等施一切、我等與衆生、皆俱成佛道、茲に眞實のソリダリテーが出來、眞實の理想の實現が出來る。他にも數へれば幾多もあるが、是丈にして置く、自他反省の懺悔思想も極めて的確に義務觀念を激勵すると思ふ。斯く大乘は古い時代に通軌であつた五悔（懺悔、勸請、隨喜、發願、回向）の一部分丈でも立派に現在の問題を解決して餘りあるのであるが、更に夫の六度に觀る、六度とても上求下化に外ならぬのであるが便宜分けて見ると

檀戒忍進	對階級戰――下化衆生方面（新協調精神）――人間
禪慧	對唯物觀――上求菩提方面（新理想主義）――文化

（二）實際方面、勞働神聖の眞意義。次に佛教は勞働問題に對して實際上如何なる態度を取りしかと云ふに、この歷史的の方面の過去を推して佛教の起原を勞働問題から見れば實に大なる意義がある。佛教は其始め階級打破をなして居る、佛教已前の婆羅門教は階扱的の宗教であつた、即ち四姓の中婆羅門殺帝利毘舍は吠陀を讀むことを得又神を祭ることが出來た然るに摩奴法典に依ると首陀族は祭祀は出來ず又聖典を手にすることを得ず唯神傳（イチーハーサ）のみを讀むことが許されて居た。社會的の制限丈でなく、精神的にまで自由を束縛した、佛教は此思想を打破して佛教に入るものは同一釋氏であるとした。十大弟子の中には王族貴族もあるが優波利の如き卑い首陀族の理髮師もある。

此精神が發展して大乘佛教にては僧俗の別と云ふ事が無くなつた、即ち維摩經にある維摩の爲には舍利弗も目連も頭が上らない。又勝鬘經の勝鬘婦人の如きはその例である。大乘佛教に於ては僧俗男女の別はない、華嚴經の善財童子には五十三知識がある。この中には種々な職業の者がある、大乘佛教にては佛教には佛地見さへあればよい。是等の見地が勞働問題を解決する實際の力である。然るに佛教には赤門佛教や資本家佛教が出來た、即ち天台眞言の如き少數者の貴族學者のみが佛教に入る事が出來る。學閥財閥の佛教に墮落した。然るに如是き教を打破して一新生面を開けるは法然上人であ

ものであつて、其の着物を取り、體を解剖する時は、中には土塊やわら屑の穢なきものより外に何もない。然し私は今の宗教界を云ふのではない。斯る人形に等しき、墓標に等しきものに、生命の歸趣自己の向上を求めんとするのではない。要は原始的の新しき活動力を有する宗教の本體から云ふものであつて、卽ち儀式や形式を除き取つた、眞の宗教のエッセンスに就て、此れ「宗教は改造なり」と云ふのである。

現今の不滿あり煩悶ある人は、釋尊やメシヤを求めんとする人もあるが、此れは單に古い人を欲するに非ずして、古き精神を以つて、救濟を求むべきである。淨土教は此の古き精神を以つて、新しき人を救はんとするものである。

（二）

淨土教の目的は、苦者に樂を與へ、闇黑に光明を與へんとするものである。現今の世界は何の方面を見ても、矛盾に充ち不都合の多くがあり、罪惡が無反省に行はれて居るが故に、斯る矛盾を去り、調和ある光明の世界に化さんとするもの、此處は淨土教が改造より更に進んで變造と云はるべき點であつて、此の宗教の根本的改造なるもの、眞に此れ宗教の生命である。大死一番と云ふ言葉は禪で盛に用ひられて居るが、此れ死んで新しくせんとするものであつて、所謂自己を殺し現實を破壞するものである。其處に新なる生命があり、其處に徹底せる改造が行はれると思ふ。

私は基督の刑場の圖を見て、餘り好ましいとは思はぬけれ共、彼が所謂迫害に堪へ死を以つて救濟をなさんとするものとすれば、基督は死することは、此れ彼れが生きる所以であつて、卽ち大死一番である。大死一番とは「肉に死し靈に生きる」と云ふ換言に外ならぬものであつて、基督の死も、其の迷信や信條は別として斯く見る時に大死一番となる。

宗教は現在ある不都合、罪惡、不合理を破壞するものであつて、佛教の所謂涅槃の理想が其處にある。涅槃は此れ總てのものゝ大破壞で、此れ過激中の大過激、革命中の大革命である。然しながら此の大破壞、大過激、大革命は、決して理想なく目的なく要求なき、盲目的官能的の衝動ではない。やがて次に來るものは大建設である。佛教は實に其れを教へ、淨土教は更に徹底して此れを教ゆるものである。

（三）

は生死解脱の法と說き、又は轉迷開悟と敎へ、離苦得樂等と定義するもあり、其他各種の說明をせられてあるが、此に又「宗敎は改造なり」と云ひ得るものである。

何となれば、宗敎の目的は佛たらんとし、又は神に近づかんとするものである。換言すれば宗敎は人生を改造するものである。人間でも現在の有樣では缺點の多くを有するものであるから斯く濁惡無反省なる生活よりして、希望の生活に入らしめんとするもの、此れ宗敎の改造たる所以である。

今此に主に述べんとすることは改造と淨土敎に就ての問題であるが、單に淨土敎許りでなく、又佛敎許りでなく、少なく共人生の改造を意味する宗敎は、其の悉くが根本精神に於て改造と云ふことでなくてはならぬ。政治も經濟も、敎育も、其の改造が單に組織や形式のみの改造でなく、其の根本に於て此の宗敎的精神的の改造でなくてはならぬ。宗敎も單に、殿堂の美、儀式の體裁のみの改造では駄目であつて、現今の宗敎其者を改造しなければならぬ樣になつて來て居る。

大戰後の歐洲の天地に於ては、基督敎が此の人心動亂の危機に際し、どれ程度迄此れを安定し調和するに力あるものなるかを見る時に、今や歐洲の天地は基督敎の信賴を持たなくなつて、基督敎を改良しなければならぬ機運に到つて居る。彼のモダニスト現代敎徒は此れであつて、ベルグソンの如きも亦其の一人である。

獨逸には多くの舊敎の敎師が居るが、彼等は如何にしてカソリツクを改造せんかに苦しんで居る。日本に來て居る多くの人々は、今より四五十年の神學の硏究者許りであるが、現今は、新神學が起り舊來の敎義內容の改造を企てゝ居る。日本にあるものは稍々個定して居るけれ共、諸外國に於ける基督敎は今や行づまつた狀態に陷つて居る。

一人基督敎許りでなく、佛敎の現狀は果して如何であるか、徒らに殿堂の美麗、複雜なる儀禮、七萬の僧侶は何をなしつゝあるか、此の如き形式外觀を以つて整頓されたる佛敎も、其の七萬の僧衆は多く現今の思潮と沒交涉である、而も現代を指導し救濟し能ふであらうか、思ひ此處に到るの時、今や世界を擧げて宗敎は自ら改造されねばならぬ秋が來た。

けれ共私が今述べんとする「宗敎は改造なり」と云ふことは、斯る現今の宗敎狀態を云ふものではなく、其の根本精神に於て改造が目的であると云ふことに立脚して述ぶるのであつて、現今の宗敎は、恰も紅粉螓蛾の裝を凝せる人形の如き

皮相の改造にすぎぬ。

（四）

佛教は先づ汝の心を改造せよと敎ゆるものである。卽ち吾人の心を淨くなす時に於ては、無信仰の昔に於て恨多くして散り行く春の花の上にも、冷かに人の悲しき思を誘ふ秋の月に對しても、月も花も共に美しき世界の眞實として尊く眺めることが出來るのである。知らざる昔の山の色水の姿も、今日は山色淸淨身、溪聲長廣舌として大なる宇宙の說法と化するのである。佛敎の改造は汝自身の改造にあり、汝自身の大なる反省に俟つ。

人類は自分の缺陷を先づ反省しなければならぬ、世界の改造も必要であるけれ共、先づ自分自分の改造をすれば世界や人生は自然に改造が出來るのである。一般の改造論者の多くは自己の深刻なる反省を忘れて居る。自覺なき他の改造は竟に困難である。彼の過激派の主領たるレーニンも彼が世を改造したいと云ふ考は決して惡いことはない。又彼の人格も穴勝ち輕々しく非難すべきではないけれ共、惜しむらくは彼は自己內面の觀察に乏しいのである。若し改造を企てんとせば最初に先づ現在の否定、改造さるべきものは自己精神の改造であらねばならぬ。

然らば如何にして自己を改造し、淨土を顯現するか、維摩經には淨土の原因に就きて、三十四許り擧げられてあるが、其の初めに主なるもの三を擧げてある。其の三とは、直心、深心、大乘心である。此の三つさへ具足せば、不合理、罪惡不都合なる現實界をして、淨土と化することが出來るのである。

直心とは一言に云へば至誠である。恐らく現今の改造論者には此れを缺いて居る。卽ち黨勢擴張のため、自己發表のためと云ふ念が主となつて、其の心のどん底に燃ゆるが如き至誠の觀念がない。普通選擧の騷ぎも前述の二を除いて何があるか。至誠なきものは遂に力なきものである、至誠とは內面の沈痛なる要求である。彼のロングフエラーが「我れに自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」と叫んだ、此の死を以て貫かんとする要求こそ眞に直心ある行爲である。

深心とは換言せば信仰である。至誠あるも信仰がなくてはならぬ。深心とは深き信仰、徹底せる觀念である。此の直心と深心によつてこそ、物は眞の發達を遂げ成功が得らるゝのである。

淨土教の大破壞とは何であるか、厭離穢土の現實の否定である。淨土教の大建設とは何か、此れ、欣求淨土の光明界の大要求である。

然れば淨土教は道德智力考察を捨てよ、我欲私情を顧るな、現實界に執着するなと教へて居る。從つて現實世界、現在の自己に大なる砲火を上げて改造を企つるものである。正義人道を口にしながら而も自國の權力にのみ孜々として努むるウイルソンの美言も、其の精神に何程の美點があるか、世界各國何れの國を見ても現實界の上に何處にか理想光明の世界があるか、此に淨土教の厭離穢土の否定が起つて來る。改造せんとせば先づ破壞を敢てしなければならぬ。

然らば其の破壞とは何かと云ふと、涅槃の思想は、諸行無常なる萬有の起滅をして、平等常住なるものにせんとするもので、此に淨土教の厭離穢土欣求淨土の理想が生れて來る。

オイケンが Spring と云ふことを云つて居るが、此れ卽ち現在の世界と違つた世界に飛び込むと云ふことであるが、彼の所謂超人の思想は淨土教の教の考ふる改造の叫びである。此處に淨土がある。淨土は今迄のものが心の向け方一つによつて、別樣なるものとなるのであつて月も花も其儘が風趣あるものと化するのである。

此の消息を維摩經の中に、釋尊が「現在の世界より別に世界あるでなく、現在世界其の儘がよき世界である」と說かれた時に舍利弗が「此の濁惡の世界其儘が淨土であると說き玉ふか、何故に此の世界が黃金世界となるか」と問ひ奉りし時、釋尊が御手を擧げて地面を按へ玉ふと、直ちに其處が七寶莊嚴の世界と化した、と說かれてある。其の時に釋尊の御言葉として「隨其心淨卽佛土淨」と仰せられてある。

此の經の所說なる「其の心淨きに隨つて卽ち佛土淨し」と云ふ此の意味に於ても、其の精神のもち方によつて此の世界其儘が淨土となるのである。佛教の精神改造は此處にある。此の精神の改造を先づ第一となしたる處に此の世界其儘が淨土となり、其の精神を基となす、政治經濟こそ眞に徹底せる改造が出來るのである。卽ち佛知見、佛智慧より生ずる世界こそ淨土である。此の淨土を實現せざるに於ては、如何になすとも現實界に徹底せる改造は出來ない。されば改造をなすに於ては、根本的に冷靜に、其の缺陷を自覺することが必要である。單に改造の手段や方法をのみ講ずるも竟に其は枝末

ある、其れを美しく見らるゝものは、此れ直心、深心、大乘心の力である。

此れを修養する上に於ては、六波羅蜜、十波羅蜜等の修行もあるが、淨土教は此れを自己の力に俟たずして、改造の極致たる淨土の大慈悲の佛の力によつて進むのである。

卽ち佛とは何ぞ、此れ直心、深心、大乘心の發現である、此の佛の御名を呼び常に心に佛を念じ、心の中に於て改造の道に進むのである。此の直心、深心、大乘心を、淨土教では、至誠心、深心、回向發願心と呼んで居る。

直　心――至誠心。　深　心――深心。　大乘心――回向發願心

至誠心は虛假不實の心なく佛を信ずるのである深心は疑ひなき深き信仰を云ふのである。回向發願心は自分丈でなく、人を救ひ共に淨土往生を期する心である。

此の三心は前の三心と少しも異りはない、淨土教は此の三心を以つて佛の救濟を仰ぐのである。

然れば淨土教は先づ第一に現在世界に向つて痛切なる批判をなして、現實界を否定するのである(厭離穢土)。而して此の現實界の否定を終つた時に、此の現實界の不調和を整理し、矛盾を除き、不合理を融和することを思ふ時は、到底自分丈けの力ではだめであるから、此の平和安樂を求むるために、此に宗教の力に目醒るのが淨土教の信仰である。

自己の善惡美醜を考察する時は、事實に於て自己の愚劣を知るであらう、隨つて自分の社會、國家に其の觀察を向けるとき悉く不完全、缺陷の多くを見出すであらう、此に改造の要求が起る。此の改造の道程に常に、至誠心、深心、回向心を以つて、佛の御名を叫び、其の御力を仰ぐとき、此の三心圓滿の佛の救濟によつて、此に改造せる世界を實現するのである。此の要求が欣求淨土であり、其の具體化せる呼聲が南無阿彌陀佛の念佛である。

要するに何れの宗教も其の目的は改造である。今の世に唱へられて居る改造は枝末の改造である。外形の改造であるけれ共、宗教の改造は根本的の改造であり內面自己の改造よりして、世界の改造を徹底せんとするものである。

同じく宗教の中にも佛教は此れを一層徹底し、更に淨土教は深刻に自己を內省し、現實界を否定し而も其の上に易行の方法によりて、現實の上に淨土を眺めんとするもの、此れ厭離穢土の大破壞がやがて現實界に淨土を建設せんとする道程

而して此の直心深心を以つて國家社會のために盡す大悲心、卽ち宇宙救濟、社會救濟、人類平和のために行ふのが大乘心となるのである。此れ利他主義であつて、此れが正しく行つて行けるのが心淨である。

直心によつて不正義を止むるもの、此れ佛敎の三聚淨戒の中の攝律儀戒であり又一面から見ると破邪の態度である。

深心は善を勸むるのであるから、三聚淨戒の中では攝善法戒となる。前の直心の破邪に對し今は顯正の態度である。

而して此の破邪顯正の二方面を包含して、以つて一切衆生を利益せんとするもの此れ大乘心で、三聚淨戒の第三攝衆生戒である。

三心
直　心（至誠心）……攝律儀戒……（破　邪）……自　利
深　心（信仰心）……攝善法戒……（顯　正）……三聚淨戒
大乘心（大悲利地　回向心）……攝衆生戒……（破壞顯正包含）……利　他
心淨

（五）

淨土敎は此の三心を敎ゆるものである。吾人が自利に於て直心深心を持ち、利他的に大乘心を持つことに於て眞に美しき世界を實現することが出來る。

吾人が日々の行動に於ても、單に自己を益する許りではいけない、此れが家庭のために幸福となり、社會のために利益となり、國運の發展に幾分でも力となる考でなさねばならぬ。日本の繁榮に此れを世界の幸福のためと云ふ事に迄考へ及ぼさねば、眞の淨土は實現しないのである。

今日の政治は今日主義である。此の上にも徹底せる直心深心大乘心を持つべきである。

されば改造の極致は淨土を造ることにある。此を實現するものが三心である。此れが徹底せる處に淨土がある。卽ち此の三心を徹底するに於て、此の現象界其儘が淨土と化するのである。隨其心淨卽佛土淨の理想は此に實現さるゝ所以である。枝上一輪の梅花にも信仰の月の光を浴びて見るとき其處には云知れぬ味がある。其處には大なる希望と大なる光明が

き不完全なる有樣である。然しながら此れも精神の持ち方一つで淨土と化するのである。かるが故に佛教は斯る不潔不淨の世界をして、本來の佛國たらしめんとするものである。要するに正當なる努力を以つて道を行ふ處に佛國が實現する。卽ち精神の改造によりて世界が淨土と化するのであつて、信念の厚き時に於て其の向上する處が佛であり、其れが相續して行く處が淨土である。

世界は精神の主觀的發現である。世界に戰亂あり、諍鬪起る所以のものは、精神の不淨不潔から來るのであるから、此れを美化し、淨化せんとする處に佛教の精神がある。不淨の世界を淨くし、不完全なるものを完全にして行くことは、佛知見によつて成就するものであつて、此れ要するに、精神の改造である。

佛教の精神が、同じく、「佛の子」「佛なり」と云ふ觀念の中に、四海同胞の心となり、其處に淨佛國土の理想が實現する、黑人も白人も、日本人も支那人も、さては無智猛惡なる食人種に至る迄も「共に佛心を持つもの」と見るときに、所有國所有洲を通じての愛となる、淨土は斯くしてこそ實現する。

淨土を實現すると云ふことは、(國土を淨くすると云ふことは)要するに衆生の成就である。

（七）

成就とは不完全なるものを完全にすることであり、極めて未熟なるもの丶成熟であり、靑き果物を成熟さすことである。而して此れ佛教の根本觀念である。

故に此の成就衆生は、圓滿ならざるものを圓滿にすることであり、不調和のものを調和さすことにある。卽ち、現今の人類は不完全であつて、戰爭もやれば階級鬪爭も起す、此の如き不完全なる人類をして圓滿ならしめんとする要求である。

此の事を極めて詳說せるものは、佛教の中でも、大智度論である。此れ龍樹が大品般若を釋せる中にある語であるが、要するに、世界及人類をして、純淨なる世界と圓滿完全なる人類にせんとすることが淨佛國土成就衆生の意味である。

佛教の觀念を概說せば、外面的には淨佛國土であり、內面的には成就衆生であり此內外兩面の改造を意味する佛教の精

であつて、其の方法としては、根本的に自己を内省し、信仰の力によつて、淨土の本體たる阿彌陀佛の御名を一念一念數ふる常念主義の生活の中に、淨土を眺めんとするもの、此れ淨土教の生命なると共に、此の一念一念の中に改造あり向上躍進がある。

此の如く此の現實界を否定し、常恒の世界を憧憬し行く處に、此の世の中に改造の流れが流れ〳〵てやがて淨土を建設するものである。世の一切の政治も、教育も、經濟も、其の根柢に、此の理想信仰を以つて行ふ處に第一義の改造の樹立がある。

（六）

改造と云ふことは、單に物質上の問題でなく、其の根柢に精神上の問題がなくてはならぬ。換言せば改造は外面的であり、機械的であらねばならぬ。

宗教とは何ぞ、卽ち此れ改造である。何となれば宗教の目的は「人の生命を造りかへる」ことであつて、宗教の極致は人間の改造世界の改造にある。

更に進んで淨土教の改造は前述の如く、自己の生活の濁惡をなげき、世界の實相の不完全をさとり、完全なる淨土に在はす、大悲願王の御名を呼ぶことによつて、

罪惡のものを善良のものに改造し

不完全なるものを完全に造り直す

と云ふことが其の目的である。此れを佛教の言葉で云へば「淨佛國土、成就衆生」と云ふことになる。此れ實に佛教の根本觀念であり、淨土教の眞髓である。

淨佛國土とは、世界其のもの丶、國家其のもの丶改造であり、成就衆生とは全人類の改造である。佛教に十三宗、五十八派と分立するものあれ共、其の何れの宗、何れの派を網羅しての共通の觀念は、此の淨佛國土成就衆生の八字にある。

淨佛國土は、世界は何れも皆佛國である、然るに現今の世界は實に諍鬪に充ち干戈を交へ、生命を賭し、浮沈極まりな

釋尊の常在靈鷲山の思想は知慧である。淨土教では現在に佛の力、佛の慈悲、救濟が表となつて、救濟度生が今も行はれて居る。

卽ち淨土教は救濟が表となつて、佛壽無量が其の裏であるが、法華經は佛壽無量が表となつて、大悲は其の裏である。

法華經の方から云ふと、法身の中に、梅の木の中に花の實在を見て行くのであるが、淨土教は櫻の花の散る上にも、清き水の流れの中にも、佛の救濟がある攝取の力があるとする。前者は哲學的の智慧であるが、何等の親しき味がない。淨土教は大悲の救濟の力を認めるから其處には內面的の親しみを持つ。

如何なる聖人も、賢者も識者も、父を思ひ、母を慕ふの愛情は、智愚賢不肖の差別はない、此の深い情が人間の根本觀念にあつて其の觀念の奥底に、宇宙の大靈を憧憬する觀念がある。吾人は此れを觀ずる時に、純粹の感情生活が高まるのである。

此の吾人の前に、聖道門の理論の苦行と、淨土教の大悲を憧憬して行く方面と、此の二つの方面が共に宗教として、あることを知るのである。

（九）

淨土教の彌陀の本願はこれ改造精神の根本である。淨土教は決して理窟ではない。佛の血と涙の上に成就せる本願の上に立つものである。彌陀佛の徹底せる大慈悲を改造の根底として本願があり、其手段として念佛がある。彌陀佛が法藏比丘の昔に於て二百一十億の世界より選擇して極樂淨土を建立したとあるが、此の選擇といふ文字の中に大なる意義があ る。

龍樹が「大愛の精神、大慈悲の心は三世諸佛の本願である」と云ふて居るが、此れ今云ふ學問や科學や知識理窟でなく、精神的の改造であつて、これ實に此の徹底せる慈悲によつてなるものである。換言せば改造の根柢は大なる人道主義がなくてはならぬといふことである。

神こそ實に Regresion Reconstraction の根本である。

（八）

而して、此の淨佛國土成就衆生を、理論的に、如何にすればこれが出來るかを考ふるのが、聖道自力の考へであつて、これ何處迄も觀念を徹底して考えて、此れを實行するのである。卽ち、禪の考案、眞言の六大無礙の觀法等である。

然るに此れは一般的でない、實行方面に於て誰しも出來るものでなく卽ち普遍性を缺いて居る。此に如何にしても吾人は理論のみではいけぬし、又六つかしい理論の方面は萬人悉くと云ふべきものでない。此に淨土教は、此の世界及人類の上に向つて、簡易に平明に、誰しも爲し得る萬人共通の改造の道を示すものである。

聖道門の理想實現は、知識階級の人や特種の人には出來るであらうけれ共、萬人一同に其れに賴ることが出來ぬから、此に一般的のものに賴らなければならぬ。

此に此れを佛の悲智の兩面に就て視察するならば、佛の大智慧の方面から發現するものが聖道門である卽ち佛の智慧を思惟するものであるが、此れは主觀的に流るゝことがある。

第二に大慈悲方面、佛は之れ人を救ふと云ふ方面であつて、此の方面に來ると人間は佛の慈悲の力を仰ぐのであると云ふことが、自分を否定して、大智慧を基礎とせる慈悲を信ずるもの、此れ淨土教である。

淨土教の人か、念佛を申して極樂に往生すると云ふことは、古き宗教の人々や、同教の人が考ふるが如き、單なる官能滿足を欲するのとは意味が違ふのである。此れを解り易く云ふと、法華經の根本觀念は、「法身常在」の思想であるが、此れ佛壽無量と云ふことであつて、釋尊の壽量は無限であつて、三千年前印度に出世した釋尊は凡夫であつて、眞の釋尊は靈鷲山の上で何時も說法すると云ふ考、此れ人の智慧の上から見て居ることである。

佛知見を以つて見る時は、佛の花の中にも居れば月の中にもある、これ人の知識の多少から見るのである。

然るに淨土教は「今現在說法」と云ふ。而して、法華の「法身常在」の思想と淨土教の「今現在說法」の考とは違ふのである。

改造は駄目である。淨土教の改造は實に世界共通の平和幸福を增進せんとするためである。

更に淨土教は文化を尊重する。淨土教は念佛を申す上に於て其の助行がある。如何なる文化も宗教的事業が出來得らるゝならば助行である。如何なる方面にも文化の發展、平和の發現に努力するものであるならば共に念佛の助行である。斯く考ふる時に、商人は商業を勉强する處、勞働者がハンマーやシャベルを振ふ處苟しくも念佛を申すものにして、信仰の園の中にありて、己れの事業を發展さし、國を富まし民を利するものならば、悉く念佛の助行である。其處に所有文化が念佛の助行となるのであつて、教員が教授するも、學生が勉强するも、共に此れ念佛の助行である。

この考はひとり念佛許りでなく、あらゆる佛教の精神は其れである。古歌の

佛法は障子の引き手峰の松　火打ぶくろに鶯のこえ

と云つて居るのも、すべての中に佛教があると云ふのであるが、而も、理論と實際の上に於て、此れを證明するものはひとり我が淨土教である。

淨土教は儀禮や形式の宗教を簡ぶものである。歷史的には寺もある殿堂もあり、僧俗の差別はあるけれ共、それが淨土教の精神ではない。淨土教には寺もなく僧もなく俗もなく、共に〳〵佛の救を仰ぎ、信仰の中に念佛し、自己の向上、國家社會の淨化を計る中に淨土教の生命がある。故に淨土教は、所有文化を現はす中に其の精神が躍然として活きて居る。

現今の文化の多くは破壞的であるけれ共、それは決してよいことではない。此れ迄のクルツール、シビリゼイションも悉く此れを認め、此れを尊重すべきである。改造は單に古きをすてゝ新らしきに走るべきものではない。古き精神を知り、此れを尊重して、以つて新しき力を見出す可きである。容るべきすべてを容れ、すべてを愛して行く處に、眞の文化の建設がある。黑人の文明も其れがよければ厭ふべきでなく白人の文化も其の不完全なるものは完全に變へなくてはならぬ。乃至支那も日本も亞米利加も、決して其れが自己本位の文化でなく、大なる世界的文化に向つて進まねばならぬ、佛教は此れを教へ、分けて淨土教は此の精神の上に立つ。

此の意味に於て、淨土教はすべてに恩を認め、感謝の意を捧ぐるものである。如何なる國、如何なる人の事業たり共、

如何なる理論許りが立派であらう共、其れに實行が伴はなかつたなら人間の改造にはならぬ。人道、博愛、大慈悲の心を以つてする時には此れが容易に出來るのである。如何なる方法手段も、根柢に大愛の精神がなくてはならぬ。此が淨土教の根本觀念になつて居る。卽ち改造は人間の最大多數に向つての普遍行、萬人共通のものを以つてせなければならぬ淨土教が、彌陀の大愛大慈悲を根底とし、萬修萬人可能の念佛の行つて內外改造の實を擧げんとするもの實に改造の目的を容易になし得ると云はねばならぬ。

萬機普益と云ふことが改造の目的であり、淨土教の根本目的である。どのものも誰も皆救はれる、知識あるものも、財力あるものも、無智のものも、其の日暮しの人の上にも救ひの網が打たれてこそ皆の救濟となり、徹底せる改造となるのであつて、淨土教は實に其處に生命をもつて居る。

法然上人の以前に於ては、貴族や富豪や、造塔、寫經の功德を以つて救はれると考へた時代もあつたが、上人はそれを打ち破つて、誰も彼れも、賢愚不肖の別なき救を叫ばれた。卽ちデモクラシーが法然上人の救濟の根本義である。

改造は決して特種的のものゝ、改造であつてはならぬ。平安朝の佛教は、殿堂、伽藍、寫經、複雜な儀禮や、哲學や、研究であつた。故に特殊的の階級や、財產家は救はれる理窟であるが、其れは大智の方面丈けであつて大慈悲の方面が缺けて居るから萬機普益の教でなく萬修萬人行の救でない。淨土教は賢愚の別を論ぜず、僧俗の隔てをなさず、貴賤貧富の差異を立てず、念佛は「阿波の介の申す念佛も法然の念佛も共に彌陀に救はれ極樂に往生する爲である」と云ふ上人の御言葉が實に淨土教の萬機普益を證明して居る。

此れが又ひとり日本人のみでなく、英人の念佛も、佛人の念佛、黑人の申す念佛も等しく彌陀救濟の力となり、改造の基礎となる處のものであるから、此れ實に世界に向つての大なる文化を織りなすものと云はねばならぬ。

（一〇）

現今の改造には世界的意義がない、其處には平和の觀念がない。共に或る階級或る種族の擁護に過ぎず、彼の露西亞のボリセビズムの如き改造は單に有害無益で徒らに暴を以つて暴に代ゆる改造であつてはならぬ。斯る平和を基礎とせざる

（二）

前回は淨土教の三心の方面から改造問題を論じたのであるが、今は更に淨土教の四修の方面から此の改造の意味を闡明して見たいと思ふ。

改造と云ふことは、既に詳說したるが如く、一面に於ては精神の改造と共に他面には一歩進んで人類の世界をして淨土化すると云ふことでなくてはならぬ。此を淨土教では、淨土を說明する上に於て二つの方面から此れを眺めて居る。即ち世親の往生論の所謂

淨土 ｛器世間淸淨……世界＝物質の淸淨／有情世間淸淨……人類＝精神の淸淨

であつて器世間淸淨と云ふのは、實に淨土は不完全なる、汚れたる無理想の世界が理想實現の世界となること、所謂物質方面の文化の完全に顯現せるものである。

卽ち極樂の七寶宮殿、七重の行樹ある立派なる世界となる事である。これ不完全なる物質が完全となり、生活其他のものが合理的理想的なるものとなることであつて、三部經の中に、着物は縫ひ洗ふ必要もなく破るゝ事もなく、百味飯食自然に前にありと云ふが如き、これ詩的空想でなく、合理的にそれが完全されたるもの、此れ極樂であり、淨土である。

有情世間と云ふのは人である。これ淨土論の中の二十九種の莊嚴の中の正報莊嚴であつて、此の有情世間の中心が佛陀である。

要するに此れ器世間（物質）有情世間（精神）の完全せるものが此の淨土であつて、其れが發源の因は卽ち淸淨心である。故に器世間淸淨の方面から見るならば極樂世界の事業は文化の綜合せる理想、有情世間は人格の徹底を示すもの、卽ち一面に於ては Kultulu（文化）の問題と、他面には Personality（人格）の完全せるものである。

而して淨土教は此の二大理想を希望目的の焦點として現實界を此れに向つて改造せんとする宗教である。

故に前章の三心は改造に對する吾人の心のむけ方であるが、更に今進んで此に實行方面の上から、淨土教の四修の行法

それが世界平和、文化發展のためであるならば其は淨土教に對して大なる恩がある。
然るに猶太教の如きは實に偏狭なる精神である。カイザーの精神が之であつて、日獨戰爭の時に彼の青島の戰の時カイゼルが「基督教に非る文明を殺せ」と宣言した。實に賤しむべく、又憐むべきである。此の偏狭固陋のヱホバ主義の精神は實に世界的平和を害し、世界的文化を傷け、佛教の所謂、淨佛國土を妨げ、成就衆生を不可能ならしむるものである。眞に偉大なる精神を以つて、世界を淨化し人類悠久の平和を造り、宇宙全體の幸福を完全ならしむるもの、此れ實に佛教が世界及人類に對する態度である。

佛教に國境なく、淨土教に國境はない。人類の平和を欲する時、淨土教は人間として平和に念佛して行けるように容易にして普遍的なる救濟を教ゆるものである。

最後に協同の精神、社會性の觀念がなくてはならぬ淨土教は、すべての人類に向つて暖い觀念を持つものである。即ち法然上人の尊き一生は、實に此れ淨土教の社會奉仕の根本精神である。故に神士教は如何なる事業に於ても

願くば此の功德を以つて平等に一切に施し同じく菩提心を發して安樂國に往生せん

と、回向するのである。淨土教には、如何なる人、如何なる人、如何なる國に對しても、如何なる事業も、遍く一切に施すのである。決して利己主義者でなく、而して其の目的は、菩提心を起して極樂淨土に往生せんと云ふこと、此の「倶會一處」の理想の中に淨土教の社會奉仕の精神がある。

此の如く考ふる者に、改造には大なる慈悲の精神を發現しなければならぬ。其れ一般的に易き實行を以つて、其の理想を實現せんとするもの、これ淨土教の理想である。

要するに吾人は此の改造期に立ちて、單に輕佻浮薄なる表面的の改造でなく、根柢あり理想ある、淨佛國土成就衆生の器世間、有情世間の完全を期することに於ける大改造でなくてはならぬ。此れには佛の大慈悲を體し、萬國の平和を主眼として、全人類の精神の向上を計るために、我が淨土教の念佛生活の中に、眞に力ある文化の發展、人類の平和、宇宙の淨化を實現すべきである。

不輕菩薩が如何なる人を見ても禮拜して、「汝等所行是菩薩道」と稱へられたと云ふが如きは明かに大乘佛教の根柢であつて、此れ又淨土教の根本思想である。

現今の人々には、實に此の相互恭敬の精神がない、此の精神はやがて相互救濟の精神となる。然るに階級戰に於ては、自己中心であり、排他主義であるから此の觀念がなく、單に物質に傾きては決して人生に眞の改造は出來ないのである。吾人が物質主義、排他主義自己中心の眼から目覺めて、靈の自覺が起り、精神主義となる處に人生の眞の改造が出來るのである。勞働問題も此れが根底となつてこそ、徹底せる解決を見るのである。淨土教は實に絕對無限の佛陀を中心として、此れに向つて生命を捧げ歸命するのであるが、更に此の精神を以つて一切の人類に對するものである。單に人類許りでない、米一粒の其の上にも、此れを菩薩として尊ぶ處、草一本も眞如の實現として拜する處、此の有情非情に涉つて、恭敬愛慕の心を常に持つもの此れ恭敬修である。單に質主質主義では此の精神は起らない。故に淨土教は第一に恭敬修を教ゆるのである。即ち無量壽經の中に

天下和順、日月淸明、風雨以時、災厲不起、國豐民安、兵戈無用、崇德興仁、務修禮讓

と說かれてあるが、天下和順より崇德興仁までは一般的の考であるが、最後の務修禮讓の四字が恭敬修となるのである。即ち天下和順なることも、世界が豐かになり民安泰となることも、其れには禮讓と云ふものがなくては何にもならないのである。實に恭敬修は徹底せる平和、究竟の文明に人を導くものである。

西洋の或る人は、「現代の文化は墮落して居る」と云つて居るが、此れ勞働問題の爲めに勞働者が頭を持ち擧げて何千年以來の文化の破壞を企てゝゐると云ふのである。此れ勞働者に禮讓なきによるものであつて、先頃の獨逸の或る雜誌にも、宰相連中が、勞働者の成金の不作法を嘆じて居る一節が記されてあつたが、兎も角も、宰相大臣と云ふ地位になると、國家と云ふものや自己の立場と云ふことを考ふるけれ共、現今の所謂成金には自覺と云ふことがない、此れを換言せば彼等の心中に禮讓の觀念、恭敬修の修養力が缺けて居ると云ふことである。今日の資本主にしても、彼等が勞働者に對し慰勞や手當をやるのはよいけれ共、毫も彼等の人格を高めることを考えない、即ち勞働者の人格を認めぬからいけない

が、如何に現今の世界の改造に關係があり、又意義あるものかを略述しやうと思ふ。

（二）

四修の事は選擇集の中に詳説されてある事であるから、此れを披見すれば明瞭であるが、其の四修の名目は、一には恭敬修、二には無間修、三には無餘修、四には長時修であるが、多くの佛教の場合には無間修以下の三はあるけれ共、淨土教は特に第一に恭敬修を擧げて居る。其處に改造問題と最も深い關係を見、又其の力ある所以を知ることが出來る。

恭敬修を一言せば、宗教的信念である。人心の改造を完うし、世界を淨土と化する此の光と生命との所有者たる彌陀佛の前にひれ伏すのである。然し此の精神は現今の世界には實に必要なことであつて、此れを淨土教の立場から云ふと恭敬修に五つあつある。此れは「西方要訣」の中に詳説してあるが、

一ははは有緣の像（阿彌陀佛）教（三部經）を敬ふ

二には有緣の聖人を敬ふ（善導大師、法然上人、其他淨土教の祖師）

三には有緣の善知識を敬ふ（我が信仰の目を開き靈性の光を增さしむる人）

四には同行を敬ふ（信仰相續の友人）

五には三寶を敬ふ（佛、法、僧）

然るに現今の人には、此の恭敬の觀念がない、徒らに自己の權威を增して行く爲には努力はするけれ共、他人の權威を認めると云ふ觀念が缺けて居る、換言せば相互に人格を認めて行くと云ふ信念がないのである。

（三）

人間が佛に向つて知識向上を要求し、生命の光りを要求するためには絕對に佛の偉大なる御力の前にぬかづく心がなくてはならぬ。此の心があつてこそ佛の護念となり、自己の向上となり不朽の生命の所有者となり得るのである。

現今は「相互扶助」と云ふことばがあるが、佛教は今一歩進んで「相互報恩」の觀念を敎ゆる。相互扶助と云ふことも「勘定づく」であつてはならぬ。此の報恩の精神のある處に相互恭敬の念が湧いて來る。法華經に說かれてある如く、常

心釋の下に詳說されてあるから、今は略說するが、一人の旅人が東より西に向つて進まんと思ふと、前面を見ると二の河がある一は炎々と燃え上る火の河であつた、一は滔々と狂亂怒濤を上ぐる水の河である、其の恐ろしき二河の中間に四五寸許りの白道がある、其處で旅人が後ろを見ると群賊惡獸が我を害さんと追ひかけて來る、其の時に旅人が心の中で、我れ右を見るも左を眺むるも恐ろしき水火二河があり退かんか、我れは惡獸惡賊の餌とならねばならぬ。我れの進むべきは細く共狹く共此の白道よりは外はないと決心して二歩三歩進むときに、多くの群賊惡獸毒虫が聲をそろへて「其の道は危險だから歸れ」と叫ぶ、けれ共、其の人決心して遂に其の白道を進んで西岸に着した。と云ふ喩であるが、實に吾人の信念は此の白道である。細いながら曲らず一本道を進むのである。改造も此の如く純潔なものでなくてはならぬ。單に利己主義の奴隷となり、名譽にあこがれ、罪惡を敢てし、安逸を貪るものであつてはならぬ。純粹理想に向つて進むべきである。其處に無餘修の改造問題に對する理想がある。勞働者は勞働者の立場に囚はれ、資本家は資本家と云ふ立場に縛られてはならぬ。囚はれの生活には理想がなく、理想なき生活には向上がない。苟くも向上を理想とし、文化の刷新を目的とする改造であるならば、決して囚はれたるものであつてはならぬ。何ものにも囚はれず、眞實純眞の白道の驀進これ無餘修の力ある所以である。

最後の長時修は、前の三修の時間的であるが、此れは生命を賭して總べての淨化向上に努むるのである。「畢命爲ㇾ期」が長時修の骨子である。淨土敎の念佛を修行して彌陀に歸命し、向上を計ると云ふことも、決して一時的、部分的の修行でない。自己一生丈けの生命でなく、苟くも人生の存する限り、場所をかへ生をかけて、淨土の實現を理想とする處に長時修の改造に對する悠久的の權威がある。

（一五）

三心四修は、淨土敎の修行上の規範であるが、又此れ現今の改造問題を根本的に徹底する上に於て必要なるものである。

淨土敎は信仰を以つて自己を救ふものであるけれ共、單に自己丈け救ふのではなく、願共諸衆生往生安樂國の理想を持

のである。總ての人が、佛教の所謂「一切衆生悉有佛性」の平等の人格を認めると云ふ精神にならなくてはならぬ。淨土教は先づ此れを恭敬修によつて教ゆる。念佛は何人にも普遍的に修行が出來、何人の念佛も佛の救濟の前には變りはない、男も女も資本家も勞働者も共に同一佛性を認め、佛の前には同一の佛弟子として、互に禮讓し、協調する處、こゝに圓滿なる人生が實現するのである。

共に佛の前にひれ伏し、人の權利を認める精神こそ、實に大乘佛教の精神である。大乘佛教に教ゆる「禮拜諸佛」と云ふ意味も、單に佛を禮拜する許りでなく、一切の人類に向つて敬虔なる態度を持つべしと教ゆるのである。

現今の社會上の諸問題も、宗教的の觀念がなくては到底圓滿に行くものではない。日本國民相互の間にも、國際的にもすべての方面に於ても信仰の眼を以つてすべてを眺め、恭敬禮讓の心を以をすべてに向ふべきである。

（一四）

次に無間修は改造に向つて何を教ゆるものであるか、此れ其の目的に向つては終始一貫して怠らず努むることであつて、若し改造問題に對して此れを眺むらば、人心の改造、文化の革新、人生の淨化に向つて純潔に、間雜なく、精神の生活を續けると云ふことにある。現今の改造問題には少く共此の精神が缺けて居る。

淨土教は彌陀の名を常恒に稱ふることを修行する。卽ち彌陀の名號を旦に夕べに稱へて、精神の向上を計る、此の精神を常間修である。

昨年頃盛に各工場などで行はれたサボタージュの如き行爲も、サボタージュ共のものが目的ではなからうけれ共、人少く共人生に活動する以上、一分も一秒も生產能率を進めて行くと云ふことが主體でなくてはならぬ。目的の爲には手段を簡ばぬと云ふが如きは、「角をためて牛を殺す」の愚擧である。彼の亞米利加に起りしサンジカリズムの如きは確かに精神努力の無間修が缺如して居る樣に思はれる。

第三の無餘修は一言にして此れを言へば純一無雜である。何事も何者も餘分のものなく、其れ丈けをやる。卽ち一筋の白道（びやくどう）を見て一心にそれを賴つて進む白道主義を云ふ。此の白道と云ふことは、善導大師の御疏、及び法然上人の選擇集三

七百年の昔法然上人が、彌陀の大悲を悟り、淨土敎を開き、人類の向上、人生の淨化に向つて死を賭して確固不拔の精神を以つて弘通されし眞理は、今や全世界人類の頭の上に、救濟の光を新しく放ち、慘たる世界の現狀より常寂光の世界に導く改造の權威である。

物質主義は他を容るゝ力がなく、權利に偏するものには義務の觀念がない、此れ科學主義、經濟主義の缺陷である。尤も「衣食整ふて禮節を知る」と云ふことも眞理はあり、「恒產なきものは恒心なし」と云ふ言葉も僞でなく、社會組織の改造も實に必要であるけれ共、物質主義の裡にも精神主義を忘れてはならぬ。自己を進むと共に他の進步も考へなくてはならぬ。權利の主張も否定するものではないが、權利と共に義務の考、協調の考もなくてはならぬ。否社會組織の上にも人生々活の上にも信仰が根柢となり、精神主義が土臺とならねば、眞の徹底せる改造は出來ぬのである。

此の意味に於て宗敎的改造の精神を國民思想の上に普及し、相互救濟相互恭敬の精神から、絕へず人生の向上に志し、純眞の白道主義の生活を、悠久の生命かけて營まんと心掛くべきであつて、引ては此の精神を西洋諸國の物質主義者の上にもそゝぎ、眞の宇宙の淨化に資することが、改造問題の眞の解決であり、淨土敎が彌陀の救濟の前に自他共にぬかづき、三心四修を以つて、淨佛國土成就衆生の意義を闡明する處、實に今迄の不都合なる不完全なる、矛盾多き改造問題を解決するものと思ひ、切に淨土敎の信仰を鼓吹し、信仰中心の改造が宇宙に行はれんことを望むものである。

（大正九、九、增上寺日曜講演集）

大乘佛敎の精神

一

大乘佛敎が諸宗敎の中でも最も徹底せる、又普遍的なる宗敎であることは勿論であるが、此れ又現代の文化、若しくは新時代を造るに對して、最も必要であり、又意義のあるものである。

つ教である。單に我れ一人彌陀に救はれ、佛の國に往生せんとするのでなく、諸の諸衆生と共に向上せんと希ひ、多くの人類と共に佛の救濟に與らんと望むところに、改造問題に對する力がある。

淨土教の目的は「淨土」であつて、それに向ふために四修を實行する、斯くして出來る結果が世界の淨化である。

吾人の信ずる淨土教は淨化主義である。不斷に念佛を申して往生を期すると云ふことは、單に悲觀的厭世的なる、現代文化と何等交渉なき考へではない。

淨土教で彌陀を念じ、念佛を修する其の根祇には人類の希望に對する大なる力がある。人の理想の究極は何ぞ。此れ光（文化）（空間的）と命（時間的）である無量の光と、無量の壽との所有者たる、彌陀佛を念ずることは吾人の此の人類の究極目的に向つて進む所以である。

彌陀 ｛ 光……智慧……（文化）
　　　 壽……慈悲……（人格） ｝……悲智圓滿

此の徹底せる文化と偉大の人格の所有者たる佛が體現せる根本精神は大慈悲である。而して其の大慈悲の發現は救濟である。故に佛は一面には文化の發現であるが、他面には慈悲の發現である。淨土教には少く共此の二者の發現がある。普通に考ふる、厭世主義、未來主義、隱遁主義は其の一面であつて、「平等施一切往生安樂國」の回向の思想や、「諸上善人倶會一處」と云ふ阿彌陀經の諸相の如きに見ても、文化を進め、人生の淨化が、淨土教の大なる目的である。

（一六）

現今の世界は人をも物質的に見むとする傾向がある。又極端なる保守の觀念がある。此に對して、信仰上穩健なる人格を完成せんと進むのが念佛である。

現今の歐洲は在來の宗教の無價値に目ざめ、今や新らしき信仰を要求してゐる。

其の發展であると考へしことの間違を發見した來たやうである。

生理學的に人間を見ても、人の體なるものは無數の細胞が甲乙相互に微妙なる働きにより、相倚り、相扶けて、幾千の細胞、幾千の血脈よりして、體其の儘が一つの社會的組織を持つて居る。此處に人間の本然に爭ふべからざる社會性のあることを語るものである。佛蘭西のゼーゲームあたりの說も此れに近い。卽ち動物が其の子を保護するのは、一面から云ふと、自己なり其の血統に對する利己主義のやうであるけれども、他面には、自己を捨てゝ迄も子をかばうが如きに到つては彼等の中にも、利他的社會性を發見する。

所謂人間は、自己なり、自己の種族にのみ愛着を持つのみならず、今一歩進で此のために盡すのであつて、此れが宗教的にも哲學的にも、社會の根本となるものである。而して利己主義があると同時に、人には社會的、利他的の精神が他面にあることを認容して來たのである。

卽ち此の精神が具體化しては組織となり、團體の運動となるのであつて、隨つて國家も世界的順應として進んで行く樣になる。自利を捨てゝ利他的精神に働く處に現代文化の眞の意義がある。宗教も哲學も單に自己のみの進歩であり解脫であるならば何の權威もない。利他的であり社會的である處に眞の生命がある。

一九一二年、コロンビヤ大學の教授 Durant 氏の著「哲學と社會問題」の中に「此れ迄の哲學は主觀客觀等の死んだ問題であつが、現今は生きた問題でなくてはならぬ、又哲學は世界の Remaking Reconstraction に貢獻するものであつて、「今日斯うしやう」と云ふ問題でなく、百年後の事を考ふべきものである、又哲學の本來の性質は現今の科學は分業的で化學は化學、醫術は醫術と云ふ工合に、單に人間の體の上にも知識の羅列の傾がある。此れ現代科學研究の缺陷であつて人生に觸れて居らぬ。現代の政治家は政治の本質を餘りに考ふる事をせぬ、學者は世事に疎く、經濟家は學術と遠ざかると云ふ風で、餘りに自己にのみ傾く弊風がある。亞米利加の現今の精神は「浮草や今日は彼所の岸に咲く」と云ふが如き有樣である、哲學は實に政治と科學とを結び附けるものである、故に哲學は Individual character がなくなり Soal になるものである」と述べて居る。

現今の文化には種々の方面があるが少く共現代人が新しき文化を欲し、新しき世界の改造に向つて要求を有して居ると云ふことは事實であるが、而も共の裏面には煩悶の多くを見出すものである。

現今は日本にも西洋諸國にもあることであるが、一種奇妙なる宗教がある。吾人が常識を持つて到底信ずることの出來ぬ筈のものが、而も社會の知識階級と見做さるゝ方面の人や、名望家の間に信仰せられてあるが如き奇しき現象がある。

此れを要するに、現代は今や思想は混沌として歸一する處を知らず、而も何等のこれに對する一大救主なき所以を物語つて居る。

二

現代思潮の傾向を見るに、一般の文化と稱せられて居るものゝ上には一種の利己主義のあることを發見する。而も此れを、人生の固有のものゝ如く考へて居る傾向が見ゆる。米國の學者中にも「利己主義が人間の本質であつて、此の外には何事もない」などゝ云つて居るものもある。殊に歐洲の現代文明の中には少く共此の考が力あるものとなつて居る。此れ一般的には、此の單なる自己發展、自我發揚の考なるものは、他面には大に眞文化の策進を妨げるものである。

權利と云ふことも、それは自己や、若しくは自己の階級、同種族にのみ利益せんと云ふ考があるが、此れはマルクス等の思想をうけし過激派の精神となつて、多くの他の階級を迫害し、更に進み得べき文化の力を遮斷せるものである。此れは單に利他の精神がないと云ふ許りでなく、他人の利益、他人の權力を破碎し、絶滅せんとする思想である。

彼等は偏へに自己の名譽、富貴、權威にのみ孜々として居るものであつて、此の精神が彼等の教育、共他の方面にも顯はれて居る。

これは一面から見ると自由主義の發現であるけれ共、他面には實に大なる弊害のあるものであつて、階級爭闘の如き冷たき觀念も此に起因するものである。

近來に到つて科學の進歩につれて、佛蘭西あたりでは學者に共の缺陷が發見さるゝようになつて、人間は利己主義だけではいけぬ、人間は先天的に社會的要永を具備して居るものであつて、曾て、利他心は利己主義の變形である、若しくは

佛教の根本思想は獨善主義、寂靜主義を排し、活動主義、利他主義の中にある。こゝに現代を救ふ大なる力がある。物質主義、過激思想の中には利他主義がない。

現今の世界主義者の中には相扶互助の精神があるが、此れも經濟利益問題ではいけぬ。打算的を排し、根本的扶助の觀念より成立せるものでなければならぬ。

或る人は斯る精神は奴隷的精神であると云ふものもあるが、奴隷主義なるものは己れよりも劣等なるもの、低いものに對し之れを扶け、救ふ謂ではない。然し今の利他主義は己れより共れが上であるから頭を下げ、己れを捨てるのではない。奴隷主義なるものは「泣く子と地頭に勝たれぬ」又は「長いものには巻かれよ」と云ふのが其れであつて、今は自分は他のものよりも力があるにしても、又は高い地位にあらう共、偏へに他を救ひ、此れが利益を先にする大精神である。自分に力があり、權利ある身でありながら他を救ふものと、唯自分丈けの滿足を希ふものとの間に大小二乘の分岐點がある。

阿闍世王女經の中に、或る日釋尊が大勢の弟子を召し連れて阿闍世王宮に招かれ玉ふた。然る時に王女は此れが送迎に對して、釋尊には恭敬の意を表せられたけれ共、弟子の人々には何の會釋もせられなかつた。王が怪しんで其の由を王女に尋ねられた時に王女は「釋尊は實にすべての人の救濟主であるから偉いけれ共、御弟子方は皆聲聞であつて自利の心のみあつて利他の精神がないから禮をせぬのである。形式や修行は如何に嚴めしく美しくとも、私は大乘佛教を奉ずるものであるから、其の精神の所有者以外には禮をするものでない」と答へられたとある。實に此の小話の中にも大小乘の區分が明である。大乘佛教は、美しい殿堂の中のみになく、複雜なる儀禮の中にのみ存在せぬ。其の出家と在家問をとはず、男女賢愚の別を簡はず、苟も、自利を排し、利他を先とするものゝ中に存在するものである。

第二に現代思潮の缺陷の一は不寛容主義にある。或る國は他の國との間に垣根を築き、或る人種は他の人種を毛嫌ひして居る。日米親善の要求の裡には、日米親善の現實が曝露されたことを知らねばならぬ。而も共の源には不寛容主義が根強くあることを認めない譯には行かぬ。其の國の宗教は他の宗教に變な態度をとり、其の國人は他の國人に偏狹なる精神

我が大乘教の精神は實に此れである。自利を捨てゝ利他を先になさんとするものである。宗教で云ふ解脫も、自分一人の解脫でなく、他人を解脫せしめんためであつて、畢竟自己の解說は他の解脫である。

三

此れに就て聊か現代思想を考えて見ると、大戰の結果は、米國を除いて他の國には厭世思想が漲つて居る。戰には利ありしかど戰後財界の不安に陷り生活難に苦しんで居る佛蘭西の現狀、戰破れ資財なき獨逸の今日は實に中世紀のモンクの時代よりも一層悲慘なる有樣であると聞いた。過ぐる五月十日に獨逸人の佛教僧が三人程私の宅に來り、暫く日本に滯在することゝなつたが、其の中の一人は、二十年前に佛教を研究して後錫崙に渡り、其後戰爭のために英國の官權のために囚はれの身となり、戰熄んで許されたものであるが、其人の話によるに今や獨逸の國內擧つて厭世思想に滿たされて居るそうである。此れ一面には戰爭の悲慘から來て居るが、又戰後經濟上の困難のために起因するものである。彼等の中流以下の社會に於ては砂糖を求むることが出來ぬからサツカリンを使ひ、コーヒーの代りにいり豆を食し、パンの中に藁木皮を交ゆと云ふ迄に生活が逼迫し苦痛に陷つて居る。物質上には斯る生活難を感じ精神上には列强の壓迫を蒙ると云ふ、此の內外呼應しての苦痛悲慘は勢彼等をして厭世觀を起さしめ、人生を離れたる寂靜無爲の境地を希ふ心に導くのである。

此の如きは、彼等として已むを得ぬ實際であるけれども、浮世を遁れ山中藪林に隱るゝことが大乘佛教の心でなく、此れを轉廻せんとするものが大乘佛教である。釋尊の前生のことを書いたと傳へられてゐる本生經の中に見るに、釋尊は其の前世には肉を燒き、身を裂いて他人に與へられたと說かれてある。利他のために身のすべてを捨てゝかゝる處に大乘佛教の精神がある。ビルマやセイロンの佛教は小乘佛教であるから此の利他の精神がない。小乘佛教は、自分丈け救はれゝばよいのであつて、湛然寂靜の境に身をよせて、獨り自身が解脫すればよいとして居るものである。大乘佛教には勞働問題も、社會問題もある、皆世を救ひ人を利するものは皆佛教である。ハンマーの音、シヤベルの響き、油じみた勞働服の働きの中にも、大乘佛教は存在するのである。

四

るであらふ。日本人に今少しく包容の精神があるならば、支那に於ける排日思想も撲滅するであらう。此れを根本的に解決するものは實に我が大乘佛教の寛容主義である。

五

第三は形式主義の打破である。形式に囚はれることが現代文化の弊害である。囚はれて居ると云ふことが現代の文化の缺陷である。勞働者が其の立場に囚はれ、資本家が自己の名に囚はれる、此れ形式主義である。

佛教は、衣や袈裟は其の傳道の方便であつて、實際の精神には僧もなく、俗もなく、寺もなく、家もない。規則や儀式は末の事であつて、其の根本は精神主義である處に佛教の生命がある。

六

淨土教の精神も其れである。一例を以て示すならば、法然上人御往生の數日前に於て、法蓮房信空が上人に申す樣には「古來の先德には御入滅の後に其の遺蹟と云ふものがあります、傳教大師は比叡山に、弘法大師は高野山に其の遺蹟が定まつて居りまする、御師匠御入滅の後は何處をあなたの御遺蹟と致しましよう」と尋ねた時に、上人の御答として「蹟を一廟に止るは遺法遍からず、余が遺蹟は諸州に遍滿せり。故如何となれば、念佛の興行は愚老一期の勸化なり、されば念佛の聲するところは海人漁人の住居まで悉く皆余が遺蹟なり」

此の上人の御答こそ實に囚はれざる大乘佛教の眞精神である。

七

最後に大乘に就て七種に分けられてある。普通に此れを七種大乘と呼んで居る。即ち

- 大因
  - 一大心
  - 一大法
  - 一大解
  - 一大淨
  - 一大資糧
  - 一大時
- 大果
  - 一大得

を持つ、此處には自ら爭鬪があり反目が起る。ひとり宗教や人種のみならず學問に於ても亦然りである。此の不寬容主義のために軍國主義が起り、敵本主義が生じ、此に戰爭絕えず、爭鬪が熄まず世界は常に惡しみと悲しみの血と淚を以つて充たされることゝなる。

同じ基督教の中でも舊教と新教の爭鬪は永い歷史を以て續けられ、更に猶太敎に對する迫害の著しきものがあるが、大乘教は此れを破折する大光明である。大乘佛教には國もなく境もない。平等なる寬容主義である。此れ佛教が一面には利他主義であると同時に、他面には大なる寬容主義である。佛教の三千年の歷史の中には、基督教の如く殺戮の如き悲慘なるものはない。國と國との爭鬪もなく、血と血を交へた戰の跡もない。

若し大乘佛教の精神を一層具體的に述べるならば、申すも畏多い話であるが、這般の世界大戰亂の最中に於て、東京の音樂學に於て音樂會を開催し、皇后陛下の行啓を仰いだことがあつた。其の時の曲目は、伊太利、佛蘭西、露西亞等の曲目であつて、敵國たる獨逸の曲目を入れなかつた。時に、陛下より今日は獨逸の曲目はなぜ入らぬか、と云ふ御下問があつたので、御側の方より只今は獨逸と交戰中でありますか御遠慮申上げましたと答へ奉ると、陛下は、藝術には國境はない筈であると仰せ玉ふた爲めに、實に陛下の敵國の曲たり共、藝術に仇や敵を持ち玉はぬ、御寬大宏海の如き大御心に感泣して獨逸の曲目も入れたと云ふ話も承つたことがある。斯る事は申上げてよいか知らぬけれ共、此の御精神は實に大乘佛教が行はんとする精神である。英國の排獨の精神の中に於ても猶ほ獨人ニイチエの書は歡迎されてあるが如く、吾人には他を許し、他を容るゝ包容の精神がなくてはならぬ、大乘佛教の生命は其處にある。

佛教は、日本の神道も包容し、支那の儒教も、印度の波羅門教も包容する可能性を有するものである。然し乍ら佛教の此の寬大なる態度は決して無自覺、無批判なる包容ではないのである。彼の無自覺の徒が輕佻浮薄にも、或はクロポトキンにかぶれ、マルクスの前に我を忘れてぬかづく態度とは同一なるものではない。此の頃町を歩いても、隨分極端なる無批判なる廣告や意匠などを見せられることがあるが、此れは實に無反省なる外國崇拜から來て居る。

此れに對して佛教は批判ある寬容的態度を有するものである。日本人が今少しく寬容的であるならば日米親善も徹底す

非學者に侯つこと能はずして眞に他と共に計り人と倚つて樂まんとするもの丶爲に利他、寛容の精神を發揮するの一大指針たるものである。

九

前回に於て大乘教の根本義が、包容主義であり、利他主義であり、平和主義であることを略述したのであるが、今又更に大乘教の世界人類の上に力ある所以を述べて見ようと思ふ。

第一、佛教の根本義は無我でなくてはならぬ。世界は自分丈けでは何事も出來ないのである。一軒の家屋も棟梁椽柱等の種々のもの丶和合から成り立つもので、其れ等を分離さしては家と名くべき何ものもない。又吾人の身體も此れ地水火風の四緣和合の上に成り立つものである。故に靜かに此等の事項を究察し、此の心を發現し、此の心を活用する時に其處に、社會の統一が出來、精神の社會化が成就する。「何物も集つて成る」と云ふこと丶「自分と社會は別でない」といふところに、自我、我欲、利己を否定する社會精神が現はれすべてに向つて、偉大なる調和がある。

吾人の精神が調和によりて出來るが如く、吾人の肉體も巧妙なる組織と巧妙なる調和より成り立つものであつて、官覺精神系統、細胞と、和合調和して成立せる處、これ實に肉體が社會性を帶ぶる所以であつて、此等が四分五烈し離散不和合なる時は、遂に肉體としての要をなさぬのである。此の眞理が無我ならざるべからざる所以であつて、こ丶に社會の一致團結がある。

大乘教は實に此の無我を教ゆるものである。無我なりといふ理窟を知る丈けでは小乘であるが、大乘佛教は「無我なるが故に斯くしなければならぬ」といふ處に偉大なる精神がある。此の上に社會の一致が出來、何ものをも取り得る包容の精神が成立する。

單に佛教丈けが偉い、佛教丈けがよいとするのは我の精神である。佛性の發現なる宗教は皆よいものとして取り入れるものである。卽ち大乘佛教の包容精神の一例を擧げるならば、彼の華嚴經の五十五會の中に、善財童子が法をきいて廻つた中には、國王もあれば、異端者もあれば、甚だ卑しき婦人もある、如何なるものも、正道をふみ、正義を行ふところに

第一の心と云ふのは菩提心である。これは大乘佛教の根底であり、又利他心、寛容的態度、精神主義の基礎である。即ち上求菩提下化衆生の精神である。他を入るゝこと海の如き心である、更に此れを四分する時には

衆生無邊誓願度　煩惱無邊誓願斷
法門無盡誓願知　無上菩提誓願證

即ち四弘誓願となるのであつて、所有人類を救はんことを願じ、其のためには煩惱を斷じ、無盡の法門を知り盡し、佛果に到達せんことを誓願するのであるが、何故に煩惱を斷ぜんとするか。何故に無盡の法門を知らんと努むるか。佛果何故にこれを求むるか。畢竟これ第一の衆生無邊誓願度の大なる目的を果すためである。

第二の法は、天地萬有の法門である。此れ宇宙の森羅萬象を知ることである。

第三の解は宇宙の大法天地のすべての事を證悟するのである。

第四の淨大は此れ絶對無限の法淨に淨化せんとするものである。

第五の資糧大とはすべての商工の業も悉く佛道修行の資糧となすのである。

第六の時大とは無限の時間である。此の無限の時間を以て永劫の理想を貫かんとするものである。

以上の六を因大と云ひ、此れ佛果に到るの道である。

第七の得大これ佛果である。これ因大より來れるもの、又すべての綜合、結局、歸着、終局である、

八

要するに現代の偏狹固陋なる獨善主義を排するには、此の大乘の利他、寛大精神の三方面からして、これを匡正し、共に人類の進化、世界の淨化を計るべきである。教育も、經濟も、政治も、其の根柢に大乘佛教の精神を置くことに於て初めて徹底し得るものである。大乘佛教は實に此の利己主義を嫌ひ、獨善主義を排し、無寛容主義を去り、形式主義を否定し、眞に人生をして相互救濟の光明の生活を營ましむる力があり、殊に現代の惡傾向を匡正し善導する上に於ては、單に無自覺にして金錢を以つて萬事を解決せんとする黄金萬能の資本家や机上一邊の空論を以つて人生を說き盡せりとする似

にすべての上に愛の心が漲つて來る。淨土教は實に此の大愛の精神を教ゆる教である。無我の徹底せる曉は、一面には社會の平和、人生の助け合となり、他面には無執着の故に其の向上がある。

大乘佛教は斯るが故に「何ものも取り入れて進歩をさせる」といふことになる。卽ち勇猛精進にして、衆生無邊誓願度煩惱無邊誓願斷、法門無盡誓願知の大精神の思想こそ、實に進歩思想である。而て此の進歩思想のあるところ此に無常がある。

二

無常といふても、玆にいはんとするものは、決して源平盛衰記や平家物語にあるが如き「祇園精舍の鐘の音は諸行無常の響あり沙羅雙樹の花の色は盛者必衰の理をあらはす」と云ふが如き無常ではなく、行きづまつた冬の空から生々たる春の色にかはるのも、炎熱堪へがたき三伏の夏が去つて、新凉掬すべき秋の來るのも無常である。昨日が今日となり今日が明日となるのも無常であれば、少年から青年となり、一寒生より國家の宰相迄進んで行くのもこれ無常なるが故である。無常とは生者必滅とか、老少不定と云ふ消極的悲哀なる意味にのみ用ゆべきでなく、萬物の生育發育、向上進歩、悉くこれ無常なるが故である。ヘーラクライトスが「萬物は流水の如きもの」といへるが如く、流るゝ中に無常があり、無常なるが故に進歩發展がある。無常なるが故に精進があり、進歩あるが故に解脫がある。

花は散り、月はかくるゝが故に其の中に進歩があり發展がある。此の無常を悲觀的に考へて浮世となし、浮世をすてゝ山に入り、世の中との交渉を絕ち靜かに常住の境を求めんとするのは小乘教の考へであつて、此の無常流轉の中に進歩發展を見出し、世を利し人を救はんとするところに大乘教の無常觀がある。

三

佛教の大眞理は涅槃寂靜と云ふことにある。これを普通に考へると、涅槃といひ、寂靜といひ、共にすべてのものゝ否定であり、破壞であり、空々寂々に歸するものといふが如き意味にもなる。彼の「大學」に佛教の事を攻擊して「虛無寂滅の教大學より高きも實なし」といつているのも前述の解釋に起因するのである。或は、諸行無常、是生滅法、生滅滅已

朱熹序文

は、悉く眞理ありとなすのが、大乘佛教の精神である。「耆婆の見る時百草皆藥」と云ふ語があるが、卽ち耆婆とは釋尊御在世當時の名醫である、其の名醫が如何なる草を見ても此れが良藥の原料となると云ふことは、此れ無我なるが故である。我利、我執のあるところには眞理も隠れ、正道も顯現せぬけれ共、無我なるところには一切みな味方であり、四圍悉く友となる。

一〇

無我なるが故に大慈悲が起る。此の大慈悲が實に大乘佛教の精神である。釋尊が未だ王子の時に、我が領地を通過し玉ふて、多くの汗になつて働らいて居る百姓を憐み玉ひ又、其の時に多くの虫の死を見てなげき玉ふたとある、此れ實に大慈悲の精神である。

佛教では慈悲を三つに分ける。第一の衆生緣の慈悲は、一般に解りよい感情上のものであり、普通一般の宗教上の愛である。道を行く時に子供が井戸に落ちるのを見て惻隠の心を起して救ふてやる。これ純粋感情の發現として人を救ふのであるが、これ丈けでは佛教は物足りない。

第二には法緣の慈悲であるが、この慈悲世界理想で、何ものもなくてはならぬといふ哲學的の考察に出發する。儒教の所謂仁であつて、此の仁が荀子あたりに來ると一つの哲學となつて來る、卽ち理性を基礎としての慈悲である。

佛教の救は、理窟よりも、仁は天地の心として救ふのである。支那のある人が仁の心を詩に歌つて綠滿二窓前一草不レ除。と言へるが故く、仁は天下の道也と考ふるときに此の如き詩となるのである、或は「行水のすてどころなし虫の聲」と云ふが如く、感情の慈悲も、哲學的慈悲も、自然に起る其根柢に一つの慈悲がなくてはならぬ。

佛法はすべてのものは、すがり合ひ、持ち合つて成るものと考へて居るのである。此れ無緣の大慈悲である。單に人間相互の情ではない、親子兄弟の愛執ではない、天地萬有のありとあらゆるものゝ上に、互に助け合ひ持ち合つて行くものとなすときに、此の感情上の慈悲や、哲學的理性の上の慈悲よりも、一層徹底せる大慈悲が起る。此の大慈悲が自然の大理想である。此に無我大愛の精神があるのである。或るものに執着し、或るものに依怙を用ゆるのでなく、無我なるが故

第一には周遍である。即ち時間には三世を貫き、空間には十方に遍滿するが故であつて、此れを說明するものが、即ち四弘誓である。

大乘佛敎は此の衆生（度）乘（斷）智慧（知）果（證）に就て大なる考へを持つのである。衆生とは人類を初めとし生きとし生けるものを指す。大乘敎はこの衆生をして自分と共に究竟圓滿の佛となさんとするもの、この心、衆生無邊誓願度である。乘とは乘物である。吾等は此の迷の生死の海を乘り切つて寂靜湛然の彼岸に着くのである。これ即ち無量壽經に「群萠を運載して生死を出だす」と說かれたるもの即ち大乘の所以であつて、狂亂怒濤さか卷く生死の海より衆生を救ひ出だし彼岸に着かしむるもの、これを煩惱無邊誓願斷といふ。社會救濟の觀念はこれでなくては出來ぬのであつて、小康を保つてこれでよいといふのではない。智とは法門無盡誓願知である。法門といふことは佛敎の敎ゆる理窟のみではなく、すべて宇宙の眞理を諦める學問研究、更に進んでは精神的のものに迄知らんとする智慧の無限の發展である。第四は無上菩提誓願證であつて、これ吾人が進み進んで阿耨多羅三藐三菩提を證得するのである。以上の四を徹底してやることれを周遍と云ふのである。

第二は勇猛である。此れ大乘精神の根底となるものであつて、此れが力強く働く時に活動主義となる、小乘敎が否定的消極的靜的であるに反し、大衆は實に動的であり勇往邁進主義である。何が勇猛かといふと、願行果の三に向つて勇猛である。願とは大慈悲であり、行とは願を實行するをいひ、果は無上なる佛の境界である。而して第一第二は利他であつて、第三は自利である。即ち自分のためには無上の果に進み、他のためには願行を勵むのである。此の如くして大なる事業が成就するのである。

增上寺の經藏に一切經が收められてあるが、其の中に黃檗版の一切經といふのがある、外の支那出來では宋、或は元、朝鮮版の一切經などは、悉く時の朝廷の命によつて出來たものであるが、此の日本で出來た黃檗版の一切經七千卷は黃檗の鐵眼禪師が畢生の勇猛心から出來上つたものである。初め鐵眼禪師が此の事を發願して、東に西に淨財を集めた處が、恰度其の時大阪附近に大飢饉があつて多くの人が死に瀕したので、鐵眼和尙は、經を造るのも偉い尊いことであるけれ共

大正藏巻第三十一

寂滅爲樂といふ四句に束縛されて、空寂虚無が涅槃の理想佛教の精神かの如く考ふる人もあるが、此れは大乘佛教の涅槃の眞意を領解せぬものである。

大乘佛教の涅槃は決して虚無なるものでなく、空寂にして無活動なる狀態をいふものでもない。涅槃とは、煩惱の風や妄念の嵐がやみ、罪惡の火の消えて、唯純眞の靈光のみ輝く平和なる狀態である。彼のゲーテが岩の上に腰打ちかけ、靜けく散り行く秋の木の葉、流るゝ小川の瀬音に耳をかたむけつゝ、此の大自然に向つて「岩にも平和あれ、森にも平和あれ、水にも平和あれ、人にも亦平和あれ」と念じたといふ、此のすべてのものゝ平和ある狀態が涅槃である。

平和の世界が涅槃の境地である。狂亂怒濤の生死の大海をさほさして行く人生の、すべての罪惡を破壞し、すべての煩惱が除滅された後に來る清淨なる天地これ無我の世界である。此の無我の世界こそ、實に平和の世界である。人にして此の理想がなくてはならぬ。此に向上があり進歩があり、眞の解脫がある。

一三

現今の社會は、階級鬪爭が必要であるといつて居るが、これを手段として大なる理想がなくてはならぬ。唯に階級爭鬪そのものが目的であつてはならぬ。人にして理想なく妄動するならば何等動物と簡ぶところはない。偉大なる國民には偉大なる理想がなくてはならぬ。この理想とは何ぞ絕對平和である。其の絕對平和とは、卽ち大乘教の理想たる涅槃である。

小乘教は涅槃の上に靜的方面を考へて居るが、大乘には活動性を認めるのである。力あり、光あり、絕えざる向上が大乘教の理想とする涅槃の境地である。

要するに吾人は、社會若しくは國家の向上のために、調和、一致、包容の精神を涵養し、社會文化の發展の上に無上の理想を實現さして行かねばならぬ。これを最も大きく、徹底して教ゆるものが大乘教の精神である。

これを說明せるものは種々あるが、佛滅後七百年頃に出世したる無着の著述なる大乘莊嚴論の中に大乘の精神を縱橫無盡に述べ立てゝあるも今これを概說するに「何故に大乘に歸依するか」といふと、これに四つの理由がある。

るが如く、常不輕菩薩が如何なる人を見ても此れを禮拜し「私は敢て汝を輕しめぬ汝は當に佛となる尊き人であるから」と言はれて、自分を惡口し罵詈し刀杖瓦石を以て打擲せられても尚逃げ廻つて遠くから大聲擧げて前言を繰返しつゝ禮拜せられたといふ、これ實に大乘がすべての人を敬ひすべての佛として禮する精神である。現代人は或は自己實現といひ自我擴充と叫び自己を敬ふことは知つて居るが他を禮する道を忘れてゐる。願くば現代の社會生活の上に此の恭禮の精神を徹底せしめたいものである。人を禮するはやがて自分を禮する所以であるのに、人を敬ふことは自分を輕蔑し、又は奴隷的態度なりと考ふるが實に人類世界の文化の美花が人々相敬の上に美しく咲くものなるに關らず、單に我利にのみ偏し、自我の擴張にのみ腐心し、他を敬するの禮文なきが如きは實に現代文化の逆轉といはなければならぬ。

供養とは誰にも物を捧げるのであるが、これ大乘精神の大切なるものである。佛に香華燈明をさゝぐるのも、憐れなるものに食を施すも、吾が此の體を國家社會のために捧ぐるのも共に大なる供養である。釋尊が病める老比丘を見て他の弟子に向はせられ「彼れに藥を與へ食を與へよこれ佛に供養する所以なり」と仰せられたるもこの所以である。

第三に懺悔とは、人々の身口意の三業の上になす一切のことがらを懺悔するのであつて、此れは梵語の Protidaśa で「向ふに向つて自分を露骨に出す」といふことである。此の懺悔によつて自分の徳をすゝめる所以であつて、無量壽經の下卷に「憍慢と弊と懈怠とは以つて此の法を信じ難し」とある如く、自己の不完全を悟り、缺點を省みる處に、信仰の眼が開き徳の向上があるのである。

隨喜とは、自分の善根のみならず、他人の善業をも喜び贊同するのである。隨喜とは佛教特有の字であつて大乘教のみにある、此の事は寶積經に詳說されてある、卽ち隨喜は、人の善事や偉大なる事業を喜び、これに贊成し滿腔の誠意を捧ぐるのである。これが大きくなつて他國の文明他國の繁榮を喜ぶ心となり、引いては全宇宙の繁榮、平和を樂しむ心となるのである。然るに此の隨喜の大精神は最も現代人に缺けてゐる。他人の成功を忌み他家の隆盛を心よしとせず他國の文明を妬み、繁榮を喜ばぬのが常である。これがために爭闘が絕えず戰爭がやまぬのである。平和は理想ではあるけれ共、此の隨喜の精神が徹底せぬ間は竟に此れ永遠の理想としてのみ終るものであつて、他人を認め、他國を認むる大抱容の精

これを讀む人が死んでは何の益にも立たぬといふところからして、折角汗水十幾年もかゝつて漸く募つた金を悉く出して人々の飢餓を救つた。

第二回目に又苦辛酸澹十餘年かゝつて初志を貫徹せんとして漸く金を募つたら、又も飢饉があつたので其の金を窮民に施した。斯くして第三回目に又十餘年かゝつて遂に一切經を印刻することが出來たのであつた。實に今日と違つて交通の便もなく一字一畫悉く木に刻む其の勇猛心、其の精進の力、實に此の經を手にする人は鐵眼禪師の血と涙の蹟を思ふべきである。

又聖武天皇の時支那より來朝せる鑑眞和尙の如きも、其の當時汽船もなく、只小さい船に順風の時を見計つて乘らねばならぬ、それで鑑眞和尙が日本に來られたときは其の願を發してより第八返目であつたと云ふことである。願行は實に此の如きものであらねばならぬ。

第三は果である。卽ち前述の如く大乘は大果を求むるのであつて、自分丈けでなく人を救ふ佛果を期するのであるから、此れ又大なる所以である。

第四は不及である。不及とは何ものも大乘敎に及ばぬといふのである。これに、體、義、無限、無盡の四つの理由がある。卽ち大乘の體にも何ものも及ばぬ。理窟も大であり、なすことも無際無盡である。隨つて其の發現として大乘敎には大信、大悲、大行、大忍が必要であるとしてある。卽ち大なる信仰と、大なる慈悲と大なる行と大なる堪忍が大乘敎の人にはなくてはならぬといふのである。

實に此の大乘敎の精神が日本人すべての思想や心持の上に働かねば駄目であると思ふ。

一四

次に大乘敎の實行方面に就ては古い時分には五悔といふことを言ふてゐるが、大乘敎は道德上の實行や知識上の觀念の上に不完全なることを反省するのである。其の方法としては、禮敬、供養、懺悔、隨喜、發願、回向等がある。

大乘敎は第一に佛を禮するのである、而も佛を禮するのは衆生を禮する所以である。法華經の常不輕菩薩品に說かれた

であるけれ共、其の行は温いものである。其の論は高いけれ共、その實行は易いのである。大乘教は論は月の如く冷たき理性がいるけれ共、其の行は大悲の暖みがある。何となれば大乘教は如何なる人にも出來得る行である。其の形式は僧たり共俗人たり共敢て簡ぶ處はない。維摩の如き居士も大乘教の人であり、勝鬘の如き皇后も大乘教の行人である。實に大乘教は形式に拘泥する宗教に非ずして精神主義の教である。これさへあれば形式は何でもよい。卽ち大乘教は僧俗一元論である。「汝等所行是菩薩道」がすべての人に向つての大乘教の精神である。職業の差別は大乘教の論ずる處ではない、大乘教の精神は活動的であつて、獨善主義や猶太主義ではない。法然上人が御臨滅の日御弟子が上人の遺跡を何處となすかを伺つた時に、「念佛の聲する處は海人漁人の住家まで我が遺蹟なり」と答へられた處に、明に活動主義なる大乘精神を見るのである。

薄伽梵歌の中に、クルパンジヤラ、ワルシューナが戰爭に出る時、我れは宗教を奉じ淸き事業を營むべきであるに、戰は人を殺し血を洗ひ骨をけづる殘酷を忍ばなくてはならぬ、否進んで此れをしなければ功ともならず勝利ともならぬ。と非常に煩悶懊惱した、時に神があらはれて「劍を振ひ人を殺すことは、人を生かし人を救ふ所以である」と告げられたと書かれてある。これと同じやうに、甘粕の太郎が戰に臨む時、法然上人に向つて、念佛の行者の淸き生活と、慘風凹圍吹きすさむ戰爭の罪惡とを以つて如何にすべきかと御尋ね申した時に、上人の御答は「かまはぬ念佛を申せ」と仰せられたといふ。此の二つの問答の中に實に大乘精神が躍如として顯はれ、且つ又淨土教が人生々活の上に大なる意義のある事を見出す。

要するに大乘教は社會生活を肯定し、無我、無常、涅槃の理想の上に、大なる反省と向上とを以つて、人生に臨むものなるが故に、現代の如き、權利にのみ沒頭し、爭鬪これ事とする時代には最も適切なる教である。醍醐天皇の御勅語の中にも「日本大乘國」とある如く日本は實に我利主義の國ではない。無我の精神、報恩の精神を以つて進むべきであり、更に此の精神を擴大して世界人類の上に大乘佛教國の理想を實現し此に淨佛國土成就衆生の大目的を貫徹することが必要である。

（大正一〇、一、增上寺日曜講演集）

神が更に進んで此の隨喜の精神となつて悠久の樂土が人生に實現する。

第六の發願は、前述の四弘誓願に述べた通りである。

第七の回向は、何事も偉大なる理想にふり向けるのである。一疋の蟲を救ふにも、一枚の紙に字を書くにも、農夫の握る鍬鋤の上にも、商人が持つ算盤の珠の一つにも、これを無上菩提に向つて回向するのである。如何なる大河も其の源は一滴の水の集りである。絶對無限の理想も小なる事業の集つたものであるから、一切衆生と共に一擧手一投足共に〳〵向上發展の爲にと互に自己の事業を勵み、精神の修養を勵むべきで、大乘佛教より云へばすべての事が皆佛となる道である、資生產業悉く佛教であるからして、如何なるものも一切の人と共に無上菩提にふりむけるべきでこれを回向と云ふ。卽ち「願くば此の功德を以つて平等に一切を施し同じく菩提心を發して安樂國に往生せん」と云ふこれ大乘佛教の精神である。

これを今少しく系統づけて言ふと、

無我 ┬ 平等（理）佛も他人も自己も同じ（佛性）心佛及衆生是三無差別、此れ佛教の根本精神也、これ無我の發現
　　 └ 大悲 ┐
無常 ┬ 隨喜 │
　　 ├ 精進 ├ 行 ── 佛教進步主義の根本
　　 └ 報恩 │
涅槃 ┬ 回向 ┘
　　 └ 佛國莊嚴 ── 果

一五

此の如く、平等主義の無我と、發展主義の無常と平和主義の涅槃とによつて大乘精神が表はされてある。此の如く大乘教は大なる理想に向つて進むものであるが、そは吾人の持つ心の中の小さき反省によつてなるものである。其の目的は大

と云つて居るが如き、此れ亦、佛教の理想たる涅槃に就ての誤解から生じた言葉である。釋尊が尼連禪河の邊りに涅槃し玉ひ、佛教は一切皆空と教ゆるものであり、空寂を理想とし虚無寂滅が涅槃の理想であるかの如く考ふる如きは、大なる間違である。

涅槃の眞意、佛教の理想は決してそんなものではない佛教の究竟目的たる涅槃には大理想を有するものである。

三

前述の如く涅槃は、人生の妄動がやんだと意ふ意味であるから、卽ち人生の總てに對する否定である。

現代思潮の特徴は何かと云ふと古きものを壞さんとするのが目的である。此れ亦否定せんとする運動である。此の最も甚しき思想としては、虛無主義、無政府主義、過激主義である。

此の如き思想のよいか、惡いかと云ふことには議論のあることであるが、其の批判は別として、此の如き古きものに對する破壞運動の現代に起つた、と云ふ事實は、然しながら此れ已む得ぬ事であつて、積年の極端なる物質主義や、資本主義の惡弊の結果として、人生に起り來れる必然の要求である。

卽ち現今は、在來の不都合、不公平、不合理を匡正せんとする思想があるが、此れが往々にして、方法を誤り、道を間違へるために、種々の極端なる思想となるのである。けれ共其の原因はと云へば、此れ迄世界に餘りに多くの間違のあつた爲めに起りし、已むを得ぬ事實である。

其の一例は、物質主義のために、資本家が餘り多く橫暴の行爲があつた爲に、此れに對して一種の破壞運動が起り、又國が餘りに利己主義で、自國の爲にのみ益せんとする武斷主義、軍國主義があつた卽ち弱肉强食であつて、獨逸のカイゼル時代の如き、其れがために、不公平があり、不平等が生じ、此に免る可らざる破壞主義が生じて、遂に大革命を生じたものである。

彼の無政府主義のクロポトキンの如き議論も、此の時代の世界、現代の國家、現代の思想の間違の上に出來た苦悶である。然るに此れを匡正するに彼に高尙なる理想なく、其の根底に人道主義の血と淚が籠つて居らぬために、此れが實行の

現代救濟と涅槃の理想

一

佛教が聖道淨土の二門と分れ、天台、眞言、禪、淨土等と各宗各派に別れて居るが、何れも其の最後の理想は涅槃である。

禪の徹底せる思想も、華嚴の幽玄なる教義も淨土教の深刻なる信仰も、其の究極の目的は涅槃である。

然らば涅槃とは如何なる意味か、此れは梵語 NIRVĀṆA（ニルバーナ）の漢字譯であつて、恰度、ロンドンを倫敦と書き、ベルリンを伯林と書き、パリーを巴里と書くようなもので、涅は NIR 槃は VĀṆA である。

而して其の最初の意味は〔風がやんだ〕と言ふことである。風と云ふものは、此れがあると、萬物怱々として騒がしい、卽ち風があるために時には家を倒し、海嘯を起すこともある。見上ぐるの强木も烈しき風の爲には時に折られ、何萬噸の大艦も風のためには吹き流されることもある。涅槃は其の大風の止んだ光景を云ふのである。

其の語原から云ふと、槃は吹くと云ふ意味、卽ち英語の Blow と同じであつて涅は止んだと云ふので、合して「吹きやんだ」と言ふ事になり、俗に云ふ「大風のあと」である。

涅槃は、人生の怱々として騒がしき有樣を風にたとゑ、其の人々の蠢動妄動がやんで正當なるものになつた、所有行動が止んで靜寂に歸つた、と言ふことになる。

二

然るに、世上往々にして、此の涅槃を取り違えるために、佛教に就て一つの疑問を持つものがある。例せば彼の支那の「大學の序文」に佛教の事を批評して

虛無寂滅の敎、其の高きや大學にすぎて實なし。

然らば涅槃は如何なる妄動を止めるか、と云ふと、人間には四顚倒がある。四顚倒とは何ぞ、曰く、常、樂、我、淨に對する四つの妄見である。

(1)常顚倒　人は永久ならざるものに永久性を見んとして居る。實に人生の萬象一として常住なる何物もなく、一分一秒悉く變化の連續である。然るに人は此れを永劫不變のものと思つて居る。

これを學問上から言ふと、物質論である。此の根底は無常を常と思ふ妄見から來て居るので、此の妄見が物質論となり、資本主義となり、黃金萬能の夢となる。私が獨逸に居た今から十年前には獨貨の一留が約四五十錢であつたのが、十年後の今日は僅か五錢六錢に下つて居るのも、黃金の無常變遷を示して居る。此れを常住なりと思ふ處に常思想の妄見がある。

涅槃の思想は此に無常を敎ゆるものである。遺敎經の中に

當に知るべし世は皆無常なり。會ふものは必ず離るゝことあり憂惱を懷くこと勿れ。世相此の如し當に勤めて精進して早く解脫を求め、智慧の明を以つて諸の癡暗を滅すべし。世は實に危脆なり、牢强なるものなし。

と說示せられたる實に釋尊が常思想を否定し給ふたものである。

ベルグソンが「無常が人生の實際」と云へるのも亦這般の消息を語るものである。要するに涅槃は、物質論や資本主義は人類を害し、人生に毒するものであつて、名譽も權力も富も竟に絕對のものでなく、常恒のものでないと、現今の資本主義、物質主義者に警告を與ふるものである。

マルクスの唯物史觀を以つて、人類を統一するものとし、人生問題を解決せんと試みるが如きは誤りの大なるものである。彼は、勞働問題の如きも、富の分配等を以つて此れを解決せんとして居るけれ共黃金を以つて萬事を解決せんとするが如きは反つて爭鬪、ストライキを助成するものであつて、金錢物質の如きは人生には二流三流のものである。物質の本體は專有性である。專有性には差別は免れぬのである。私の居る處には他人は居ることは出來ない。他人の有する空間には私は座ることは許されない。此れ物質の定義である、然れば人生は差別の世界である。現象界に於て絕對に平等と云ふ

上に種々の間違が生じて來るのである。

昨年の森戸氏事件に就て、三宅雪嶺博士の辯護中に、氏は

「佛教の思想も其の根本に逆上れば實に危險なることクロポトキン以上である。けれども此れを巧みに利用したものであるから、佛教は王城鎭護となり、又は鎭護國家の敎となつたもので、クロポトキンの說でも良く巧に解釋せば決して佛教にも劣らぬ」。

と云つて居られるように思ふが、一見面白い議論であつて、佛教とクロポトキンとを比較するなど、さすがに三宅博士だけあるが、然し、惜しむらくは三宅氏には未だ佛教の大理想が解つてないと思ふ。

成程佛教は超國家的の教であり、人類平等の大理想の上に立つて居る。けれ共其の根柢には大慈悲の意があり、其の方便には大智の上に立ち、此の悲智の二方面を以つて宇宙のすべてに對して居る。けれ共クロポトキンの主張の根柢には悲智の二方面が缺けて居る。

然しながら、彼の主張も否定であり、佛教の涅槃も之れ總てのものに對しての否定であると云ふこと卽ち「現在のもの〻否定」と云ふ事は同じである。

同じ佛教に見るも、大乘教の起る時は小乘教を否定して居る。法然上人の淨土開宗は聖道門に對するの否定である。此の如く革新の前には否定がある。然しながら此の否定は、單なる否定ではない大改造の前の大否定である。

人間も時々深刻なる反省をなして、大否定をする必要がある。あらゆる罪惡、煩悶を廢すべく、些々たる事を否定して大理想を樹立すべきである。

水が千浪萬波を立てることがあるけれ共、水の本性は寂靜湛然たるものである。時々千浪萬波を起し狂亂怒濤となり、船を沈めることもあり、人畜を害することもあるが、これは水の妄動であつて、水の本質ではない。涅槃は此の妄動を止める事である。

青島の戰に於て、カイゼルは宣言して

「基督教に非ざる文明は破壞せよ」

と云へるが如きは、實に自我思想の妄見より發したる極端なる毒語である。彼が此の精神を以つて世界に王たらんとし、世界を我が有とせんとした妄想の結果が世界の多くの人類をして血を流し肉を傷けしめたる大戰と化し、竟に其の終局は彼をして自ら死地を急ぐの餘儀なき結果を造つたのであつた。實に自我思想個人主義の顚倒せる妄見なることは此の世界最近の大事實を以つても證明することが出來るが、涅槃は此の思想に對して「汝の持つ自我思想は惡いからこれをやめよ」と教ゆるのである。

(4)淨顚倒　これ形式主義であつて、涅槃は此れを捨てゝ精神主義に導かんとするものである。卽ち人生を美しきものであると見んとする形式主義者の夢を破つて、實に世は不淨なるものである。人生の總ての事實は決して淨きものと思ふのは間違つて居る。嬋妍花の如き美姬の心の底に夜叉の潛むことも知らねばならぬ。形式の美、形式の淨は實に徹底せる淨でなくて、これは表面であつて、此れを淨とするは顚倒の考であるから、精神主義にならなければならないと云ふのが涅槃の理想である。

實に此の如く涅槃は、物質主義、肉感主義、軍國主義、形式主義を破壞し、否定せんとするものである。けれ共今日の所謂破壞主義なるものは、間違つて居る。虛無主義や、無政府主義や、過激思想も、同じく破壞であるけれ共、此れには大理想がない。破壞すると云ふことと其れが理想である。涅槃が現實の些々たる事實に對して、此れを破壞し、否定せんとする態度は、此の如き理想のなき破壞ではない。其れには根柢に大慈悲の精神がある。其れには人道主義がある。

曾て「ロンドン・タイムス」に英國の或る牧師がオデッサに行つて實地に見聞したことを記述して居たが、其の中に、獨逸の過激主義者は良いものでも惡いものでも亡ぼさうとして居る。彼等は宗教を否定し、日曜を休むと云ふことは宗教で定めたことであるから、日曜は休むのをやめて月曜に休む。宗教的儀式は一切此れを廢して行はず婚禮も宗教の手を

ことは到底望むことは出來ない。不平等が人生の實際である。此の間に立ちて差別的物質を以つて人生を解決せんとし、平等を望むが如きは空想論と云はなければならない。其處に物質論者の大なる人生に於ける矛盾がある。

(2)樂思想　であるが、人は苦しいものを樂と見て居る。現今でも、一面には獨逸の如く國が疲弊して、一圓の金が五六錢位にしか通用せぬといふ國もあるし、他面には、亞米利加の如き、日本も亦成金國として喜んで居る。其の結果として、現今の日本人の頭には、極端に樂を求めよう、虛榮に憧がれんとするの有樣であるが、然るに此の樂なるものが永遠のものか、果して人生に滿足を與ふるものか、と云ふことを考へて見なければならない。

美しい着物、朗かなる音樂、紛々たる香氣の中には、恐ろしき人間の苦痛罪惡がひそんで居ることを知らねばならぬ。此の歡樂の中にやがて自己を破滅すべき魔の手が隱されてあることを悟らねばならぬ。三百年の長き、あらゆる專政を恣にし、あらゆる快樂を貪つた露西亞の王朝の滅亡に見ても樂天主義は念々刻々滅亡を呼んで居ることを知るであらう。

人は、ショペンハウエルの「人生は苦なり」の言のみならず、快樂主義、感能滿足主義者は、何時か淚と共に目醒めなければならぬ。何時か彼等の周圍には不調和の世界が顯はれて來るであらう。涅槃は此の妄見を誡むるものである。

(3)我顚倒　此れ自己中心主義、更に云へば個人主義である。小にしては一身上——これが擴大せば社會は實に弱肉强食の悲慘なる巷と化し、國として此の精神を持ちて他國に對抗せんか、此れ軍國主義となる。其の危險なることは獨逸の今日を見ても明であるが、又亞米利加あたりでも盛に黑人を酷使すると云ふが如きは、これ亦我思想から出發して居る。其他人種差別論と云ふが如きも明に我顚倒にとらはれたる妄見である。這般の世界戰亂の如きも、其の原因は矢張り自我思想の爲である。

此の思想の最も良く顯はされたものは基督敎の思想である。即ち基督敎の原因たる猶太思想がそれであつて、彼敎の神たるエホバは我性を持つもので其の神を拜するものには幸あるけれ共、他神を拜するものは罰すると云ふ暴君の如き自我性を帶びたるもので、その精神を彼等基督敎國のものは受けて居る。國として最も著しきものは獨逸の精神である。彼の

此の如く吾人は、釋尊の捨て給へる小なる智慧をすて、欲望をすてゝ、偉大なる靈光に向つて進むべきである。淨土敎は此に阿彌陀佛の信仰を敎ゆるものである。

現代に起りつゝある破壞思想は實に必然の要求とは云へ、それには大理想がない。現代思想を救濟し、自己の啓發向上を計らんとする反省を持つ吾人は、須らく、此の釋尊の涅槃の大理想を慕ひ、宗敎の目を開き、信仰の足を運び、其處に不朽の彌陀の靈光を眺め、眞の常樂我淨の光明世界を建設すべきである。

（大正一〇、三、增上寺日曜講演集）

絕滅か希望か

一

吾人が歲晩にはいつも思ひ出多き年の過ぎ去る事が何だか失望の樣な氣がする。其の一年がいかに人の力と智慧に滿ちた年であつたか、自分の經綸の失敗し、奮恨と懊惱とを呼び起した年がすぎ去る事は深い失望の感が深い。古人も「過ぎたる光陰は恢復する事ができない」と云ふてゐる。然し一方ある人は其の年になして來た自分の事業は、努力は、此の儘になるまい、何か大なるものが持ち來さるゝのであらうと云ふ大なる希望を以て進むものもある。此處に歲末を送るものに絕滅の悲しみと希望の喜びを有するものゝ兩樣が存する。

二

人生に就て考へても此の兩樣のあるもので、由來人生は普通の場合では、此の肉身の儘で靈や神がないと考へる事ができない。人生は永遠に續くもので、物質の不滅がある樣に靈もどこまでも持續して行くものだ、思想問題の葛藤は此の靈と肉の爭ひである。肉はあるが靈はない或は肉と靈は共にあるとの二樣の考が、哲學上にも社會上にも經濟上にも現はれて、社會的或は經濟的のみを考へるものと、社會問題を精神問題にも關係するものと考へる、即ち絕滅と希望との二樣があつて其の何れかによらねばならぬと焦慮する。然し此の良否に就ては餘程の疑問であつて今少しく此れを考へて見た

離れて行ふ。其他僧侶を殺し、寺院を燒き、最近まで僧侶の殺されたもの三百餘人もある。

と云つて居るが、此の如き破壞は實に破壞のための破壞であつて、何等理想もなく建設もない、唯、罪惡丈けであつて慈悲の涙もなく、人道主義の血も流れてない。

佛教が、常樂我淨の四顚倒を教ゆるものは、其處には大慈悲の精神がある。涅槃が、人生は無常である、苦である。空である、不淨であると、現實に强い否定を與へて居るのは、其の否定の裡に、眞の絕對無限の常樂我淨を建設せんためである。佛教の教へんとするものは、實に、大樂、大我、大常、大淨の理想の天地である。

佛教が此の差別の世界を否定して居るのは、其の外に、佛性平等の花咲く天地があり、永劫無限の光明の世界があることを教へんが爲めである。人類が宗教の目を開き、信仰の足を運ぶところに大なる樂がある。其處に大自在があり、永久の生命がある。最後に吾人には其處に淨土が實現するのである。これ小なるもの丶破壞によつて生れたる大なる建設であつて、涅槃の否定は此處に其の最後に大淨土の發現を意味するものである。「汝の持つものは惡いもの」と云ふ消極的否定の曉には、大なる光明がある。其の光明は、淨土教でこれを云ふときは阿彌陀佛である。

釋尊の大寂靜の目的は大慈悲の彌陀の光明の發現である。されば現代の思想を救濟せんとするには先づ現代思想の無人道なることを破壞し、其の上に

理想を持つ破壞、大慈悲を持つ破壞、大智を持つ破壞

が必要である。今日すべての社會上の問題でも、大慈悲を持ち、人類平等の大理想に立ち、我國體の由來を吾人の腦裡において、これに臨まんか、必ず良き結果を招くことが出來る。

涅槃の理想は此の如く、些々たる知識、些々たる欲望、小我の妄見をすてることである。法然上人が「智慧を捨てよ」と我等に教へられたるものは、此の些々たる知識を捨てよとの御意である。これ彌陀の絕對の大智大悲を體現せんための小なる知識の否定である。又釋尊が三千年前に大涅槃の理想を示されたるものは、信仰の前に、小なる苦痛繫縛をすてることを教へ給ふたるものである。

る、眼を閉れば宇宙は見えない。五感がなければ世間はない様に、五感即ち心だけが眞に存在してゐる。結局物質は心の變影であり寫形であると考へる。アイデアリズム即ち此れである。

此の三者は何れも不完全で、等一の唯物論は勿論偏つた見すぎた議論で、第二の物對心の併行論も工合が惡い。第三の唯心論は特に高尙の樣ではあるが此れ亦物質論と同樣見すぎた議論である。仍て此上に更に第四汎神論が考え出された。

四、物對心　此れは前三に鑑みて各々其の缺點を補ふたもので此の心の上には物があるのであるが其の物の中にも心がある。即ち佛敎が唯物論で行く樣であるが實は汎神論であつて萬有即一心一心即萬有の思想である。

以上此の四に於て道德上實踐上何れが都合がよいかと云ふと、前一は前述の如く殺風景で、先づ物に調和が存してゐない。二物が同時に同一所をしむる事ができないと云ふのは原則であるのに物心は同時に同所を示してゐる。次に人間本來持つてゐる性能に逆ふてゐる。人間は永遠に生きる事を慾するものであつて、戀愛と云ふことも人の永生を慾する本能的の慾求であり、此れが人生の自然である。隨つて物質論は慰安がなく融通のきかないものになつて終ふ。

第二物對心は此れ亦融和できない缺陷であるもので、第三に至つては理窟の上には世間はなくなつて終ふ。それで印度小乘敎徒の樣に精神的に立派になれば社會も世間も外物は一切構はないと云ふ事になつてしまふ。これ世間をぶち壞して終ふものである。

第四、物即心は一物の表裏の如く別なものでないと云ふもので佛敎は此の立場にたつてゐる。

四

斯く人間は絕滅の間に永遠の心を持つてゐる。無限の希望を抱いて大なる力を發揮する樣につとめる。然るに前に云ふ斷滅思想は死ねば靈も心もない、五十年で自分は絕滅するものだ。けれ共ある時機には人間はバラバラになつて終うと云ふ物質論者でも、自分の考へでは、生命は長からんことを念じ、其の仕事を長く殘したいと考へる。彼の橋本雅邦氏は最進の藝術家であるが、自己と言ふ考えを深く自分の藝術と人間の心に永く殘したいと考へた人である。

此の心は野蠻時代より現今迄通じてあるもので、人間の野蠻劣等の民族にも歷史上種々の宗敎は存してゐた。或はそれ

い。

一、物質論　是れは世間は物質の化合であつて、其の化學的原素の集合が人生である。靈は亦其の物質の化合の爲めにできた變形であると考える。つまり人間も此の黑板もカツプも同一であると云ふ物質萬能論であるが、只人間は此のカツプ等の荒つぽい物質でなくして非常な精美な物質で成立してゐると考える。

此れに就て生物學の發達し合理的に進步してゐるから、最近に至り獨逸のヘツケルはダーウインの進化論を進めて此れに餘程に力を與へた。

亦現今の社會主義は概ね物質論で、ヘーゲル派の物質論からマルクスが出で、ダーウインよりヘツケルが出で、其の兩人の人格も人代も異つてゐるが、ヘツケルの一元論、特に物質一元モニスト、プンドの繼承者は概ね社會主義者で物質萬能である。現今此の思想が非常に盛んになりベーメン、ルードリヒも科學的の物質論をもつてゐる。亦一方社會主義の歷史の上から見ても、既成宗教の撲滅、宗教反對無神論になつてゐる。米國等の社會主義には基督教の信奉者はあるが、獨逸等の社會主義は無神論、無政府主義となり露西亞を動かして遂に露帝國を覆すに至つた。

現今のマテリアリズム卽ち物質論は、我々人體は蛋白質により成立し、炭酸水窒の四化合の力は靈であつて、文化と云ふ事が思想上尤も美しい尤も善いものと云ふ事は物質論では工合が惡い。卽ち唯物質のみでは絕滅の悲しみがある。隨つて此れは無神論であつて、絕滅主義はぶち壞さる可きものである。

三

二、物對心　此れは物質であると同時に精神もあると云ふ說で、普通宗敎である。物質精神、肉體精神、物質對靈でパンの生活をすると同時にパン以外に精神生活のあると考へ、道德的思想人格的根據を認める、卽ち物對心卽ちセーズムである。

三、唯心論　一方の此の物對心の論は二元論であつて、大變具合が惡い。完全なるものは何故できるかと言へば矢張一元でなければ工合が惡い。此處に印度にては唯心一元論を立て丶宇宙或は物質は唯心の上より現はれた幻であり影であ

々を回顧して理想をもつた處が、宗教である。

又逆に宗教のない生活は理想のない希望である。宗教は自分の經濟上社會上學問の上にも不屈不撓の力となり信念となるもので物質的ばかりでなく靈的人格をもつてゐるものである。耶蘇の愛、佛陀の慈悲は、此の理想の上に建設された靈的人格であつて、此れに向つて進むものは不屈不撓の生活を得るものである。

六

淨土教は實に壽と光の二の希望の上に最上の理想を有し、最上の智慧を光となし、最上の慈悲を壽となしてゐる。ゲーテが「人生は光と云ふものがどの様に尊いか、無限な憧憬、無限な活動熱ある活動を生命とする」と云てゐるが、此の言や實に最上の光りと活動とを理想としてゐるのである。

此の壽光の二が合して眞の憧憬となるもので人間の有限な五十年百年の間を通じて常に斷えざる光となりて續き、無限の壽に沒入するものが彌陀の信仰である。有限なものを立派にする爲めにはある生命の光りに憧れるのが人生の基礎であつて法然上人が六萬遍の念佛を申されたのは、此の永遠の光と壽に憧れて生活されたものに外ならない。吾人の實生活に大なる力を與ふるものは、物質の滿足でなくて永生の希望である。卽ち斷見でもなく、常見でもなく此の二見を超えた正見でなければならぬ。斷見は物體精神の偏見であり常見は不徹底な哲學上の見界であつて、共に不完全なる宗教思想であつて、希望に滿ちたる生命、倍々努力すべきものが正見であり吾人はどうしても此の正見によらなければならぬ。

現今の思想問題が多く此の斷見によつて破壞絶滅に傾くか、常見によつて保守に傾くかして、偏狹となり、人間相互の關係を見ず靈の考へのないものである。斯の如きは調和も同情もなく、希望もなく發展もない。共に否定さるべき思想である。此れが調和の上には必ず正見を樹立せなければならぬ。此の上に信仰の必要が叫ばれる。而して不徹底なる偶像主義も、徒らに破壞する斷見の思想も打超えねばならぬ。此處に淨土の現相は現はるゝもので、諸行無常の上に永遠の希望を考える時、一の信念が起る。此の思想の上に正しき壽と光の永遠を希はねばならぬ。

七

が本能とも云ふ可き永生觀念を持つてゐた。人間の文化の進步は科學的に雜多であるが、一貫したるものは永生の觀念であつて、アルキメデースが比重の原理を發見した時に、此の功により永生する事を祈つたと云ふ事で、財產も家族も亡び去るも自己の存在はあると認むる執着がある。此の執着は單なる科學では說明することは出來ない。此處に斷滅思想は人間の努力に不幸を與ふるも幸福を與へないと謂ふ可きである。

此れに反して常有思想は、人間が立派な事をする時は常恒に永遠に立派な事であると云ふつまり永遠の賞罰を信ずる觀念で、二元論或は一神教の如きは多く此れで、神に背いた罪は永遠に亡びる事はない、反對に神に隨ふ事は永遠の賞であつて、此んな立派な結構な事はないが、これは理窟で事實には工合が惡るい。基督教猶太教等は大分此の氣分が多いもので道德上には不合理である。

五

最後に輪廻思想で、之は斷滅と常有の缺陷を補ふてゐるものである。道德上の規定卽ちある期間の規定により一行爲は必らずある時期に結果を受けるもので、此れは永恒に續く精神である。第二には道德上の原則に隨順するもの佛教婆羅門等によつて人間の觀念として合理的な至當な事であると思ふ。人間には本能が衝動によりて誤ち過失を犯す事があるもので、此れがある時に償はれ而して後發達するものであるで、我々のみならず、ドイツセン等も此の議論をもつてゐる。

斯く輪廻思想は吾人道德上の責任觀念と永生の觀念を發達さすに都合よく前の汎神論と相俟つて極めて好都合なものである。

彼の楠公が七生報國の精神廣瀨中佐の最後の思想等は實に此の輪廻思想の表現であると云はねばならぬ。

斯く斷滅思想より輪廻思想に移る事は、吾々の心の上に偉大なる希望に滿ち、多少の蹉跌も打勝つて勇往邁進する事ができるもので、此處に永遠の希望をもつて進む事ができるもので、此れを理想と稱するものである。

由來理想は、人間の底に持つてゐる。尤も希望といふことも美しい高いものでなければ理想にはならないもので、理想のない希望は空想である。人道博愛と云ふ事も文化に貢獻すると云ふ事も、學問をする事も、我々の希望するものが、我

して右往左往する暇なき故從つて其間自ら心身の向上發育を得る譯で、これを一面から觀察すれば確に精神的求道の至誠が其肉體の上にも諸佛の護念を誘發せしめたと言へるだらう。

斯く無上の佛陀、六方の諸佛は等しく法界の眞理宇宙の公道を求めて止まざる行者をば其誓願によつて護念し給ふが故に眞實の行者は、自體の安全、利福の增進等に關して祈らずとても唯だ自道の勇進に於て自ら諸佛の護念を受くべきである。

（二）

經の中には護念の意義に就いて書かれて居ないが、念佛を申して自己の心靈の救濟を仰ぐを其主眼とす。而して淨土教は彌陀の本願に縋り、充實せる希望を以つて永遠の生命、無限の光を體得するを目的とし自己の肉體の災禍障礙に就いて敢て顧みないのを當とす。卽ち淨土教に於ける「祈り」は心靈の向上、佛道への追求であつて肉體の安全、自家の福利には關らないのである。此の方面より佛教を觀察する時は二種となすことが出來ると思ふ、卽ち

一、自體の安全を計り現世の祝福を是れ祈る——墮落せる密教卽ち眞言の加持祈禱は是れに近い。

二、自體の安全を敢て顧みず精神的救濟を仰ぐ——禪、淨土は卽ち是れ。

前者は祈禱をなして朝夕其身の安全を計るを目的とし後者は永遠の生命の爲めには身命をも顧みざる底のもの而して淨土教は念佛の信行によりて無限の光、無量の壽を得んとするものである。

吾人の信仰行爲は肉體あるが故に價値づけられるのであるから肉體だからとしてそれを輕んずべきでないのは勿論である。然るに其肉體は外的障礙や其の他の疾病あるを免れぬ、肉體の不幸は精神に動搖を起し易い故に諸佛は「念佛を信ずるものは單に精神だけではなく肉體までも護念す」と保證せられたのである。阿彌陀經に「是諸善男子善女人、皆爲二一切諸佛ニ共所ニ護念一、皆得レ不レ退ニ轉於阿耨多羅三藐三菩提一。」とあるは則れ夫れである、一心不亂の行者が無上菩提に於て退轉せないと云ふことは一面に於て無上菩提を完成するの條件として肉體の護念を保證しなければならんと云ふこと卽ち安全にして幸福ならんが爲めには肉體の護念を必要とすることを意味するものである。但しこれは佛の方面からの觀察であ

阿彌陀佛は實に壽光二願の覺體にましします。吾人が、此の絶滅の無理想より覺めて、向上と永生との理想の中に生きんとする時、其處に彌陀の救濟が味はるゝ。

浄土教の信仰生活は實に此の理想を體現する生活である。南無阿彌陀佛の中に、一切の生活があらはるゝ時に、吾人は實に光と壽に滿ちた生活が實現するのである。

歳末の巖頭に立ちて、過去一ケ年乃至去りにし歳月を顧る時に、必ずなすことなかりしものは其處に慚愧の心が湧く。更にこれを新たなる歳に向ふ時には必ず希望が起つて來るべきである。過ぎし罪悪に反省し、來るべき時に對して向上を畫く、而もこれが光壽二つながら圓かなる彌陀救濟の中に眺めるときに眞に徹底せる大希望の人生が顯現する。

（大正一〇、十二、増上寺日曜講演集）

祈禱を要せざる宗教

（一）

祈るものは救はれ、祈らざるもののは其の救ひに與らずとは常軌である、然るに今祈らずとても救はるゝとは何？　經に諸佛の護念を說き、祖述に現生の利益を言ふ、而も其加被は同じく念佛の行者に存す……吾人は此處に選擇集第十五章が明示せる護念の意義と其範圍とを究明する必要がある。

浄土の經中等しく念佛の行者の利益に就て書かれてないものがないか、殊に阿彌陀經は最も簡明に浄土教の要旨を傳へて居る。其の經の大部分は確立せる信念を有する一心不亂の行者の念佛に對して六方の諸佛が誓つて護念證誠し給ふ事を述べてある。之れを以つて見れば一心不亂ならざる行者、即ち三心の具足せざる念佛者更に進んで信佛の心なく誠の行を勵むことの出來ない不幸者は護念に就いて除外例たるを免れぬ。浄土教が三心具足の念佛行者を救ふとは斯かる點に深い根抵を有することを知らねばならぬ。即ち自己の心中に虛僞の心なく申す念佛の行者には世間的苦痛や肉體的不幸等に關

佛教の主とする所は卽ち後者の意味に於ける祈禱でなければならぬ、眞言密敎の祈禱も若し眞實に從へば此の普遍的意味の祈禱である。前者が物質的なるに對し後者は精神的である、更に言へば前者が原始的であり、外面的であり、肉體的であるに對して後者は文化的であり內面的であり靈的である。多神敎の如き野蠻時代の宗敎の中には其の要求する所如上の如きものがあると同時に進化せる時代の宗敎は自己內面の眞實から迸出する尊い心靈の要求でなければならぬ。卽ち充實せる求道の要求が眞面目に大靈に向ふ時共處に敬虔なる祈りが顯はれるのであつて祈らざらんとするも祈らざるべからざる心の要求に基く祈りこそ大乘佛敎殊に淨土敎の中心とする所である。卽ち淨土敎の祈禱は內面の最も勝れたる要求に發するものである。例へば百萬遍によりて自己の罪障消滅を希ふが如きは一往自身に就ての祈りと見ゆる處から誤つて現世利益後生加護の祈禱として行者自身に於てする屢々考へらるゝもそは大なる誤解であつて百萬遍の行は罪惡は凡夫が眞實の自己反省によつて得たる內面的自覺から共に彌陀の救濟を仰がんとする眞面目な同行者の修行である、決して聖道門に於ける自力行を意味するのではない、他力の救濟を根據とする信念の增進行である。卽ち「念佛申す爲めに」祈る所謂信仰中心の發露である。

（五）

現代の如く一方に宗敎的要求の强烈な時に於ては他方に時代人心の趨向を利用せんとする類似宗敎の簇出するを免れぬ。是れらの多くは其出發點に於て旣に物質的報酬を條件として居る、卽ち鳥居や提燈を奉納したから福がある金が儲かる等の類である。之れ卽ち賂賄宗敎である天理敎や大本敎の如きはかゝる信者を有する大集團であつて人をして往々宗敎なりと誤認せしむる眞の宗敎は大靈に向つて眞實の自己を解放し精神的救濟を仰ぐ純眞なる心の要求に發するものでなければならぬ。吾人は局限的にして而も個人主義的なる迷信とを普遍的救濟の要求に基く正信とを辨別すべきである。自己の周圍の安全を顧みることを避け眞實な信仰を以つて進まば祈らずとても諸佛の護念は必然的に決定されて居る、故に佛は『汝端心正念にして來れ、我れ能く汝を護らむ』とこその給ふ。六方諸佛の護念證誠は阿彌陀經の一心不亂の行者の上に決定し、必得往生の記別は衆生稱念の前提の上に斷定せられる。淨土敎の信者たる者宜しく共宇宙の公道たる念佛道に

つて凡夫即ち行者自身としては肉體は障礙災厄を免れぬ故願へども其の安穏は不定である、唯だ精神に於て我れを護らせ給へと願ふべきである。佛陀の護念と行者の用心とを誤つてはならぬ。

（三）

「護念」の字は梵語で Parigraha と云つて grah「攫む」と云ふ動詞から來た言葉である。英語の Grasp も Gripe も同樣の意味である。（玄奘は之れを「攝受」と譯す）恰も母が我がいとし子を力一つぱいで抱きしめるやうに佛が其の信者の手をしつかりと攫んで離さざる貌である。

かるが故に信者にありては絶へざる求道の中に自ら佛陀より攝護的救ひを受けて居ることゝなるのである、つまり肉體の護念は眞實な求道の餘慶である。即ち『心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らむ』の強き信念の行者が當然受くべき報ひである。念佛の行者も僞らざる心を以つて深く彌陀の本願を信じひたすら佛道を歩みさへすれば現世の安穩や家内の安全など祈る必要が何であらう？　佛陀の照護が公明である限り眞實な求道者には眞理は與へらるゝにきまつて居る。古歌の眞意が「心の誠」にある如く念佛の行者は三心の具不具によつて決定される。選擇集第十五章の護念の段は即ち此の意味である。

（四）

凡そ祈禱には多義あるも大別して左の二種となす。

一、個人的（利己的）祈禱——局限性……（劣等）
二、普遍的（利他的）祈禱——一般生……（高等）

金福あらんが爲めに稻荷大明神を拜み、良妻を得んが爲めに摩利支天を信ずる等は皆利己的の祈禱である、聖天や鬼子母神崇拜等も即ち前者に屬する。佛敎に於てもかゝる現世祈禱あるを見るが之れは所謂「祈禱佛敎」として排斥する所である。然るに我が祈りは自利の滿足自家の安福にあらず利他の爲め萬人の爲めとの信念の下に或は三密を修し或は六度を行じて一切度生を念ずるは是れ後者の普遍的祈禱である。

一層深く其の大なる意義を味ひたく思ふ。

二、歴史より見たる降誕の意義

第一に吾々は歴史から觀た佛陀降誕の意義を考へる。歴史上の佛陀は言ふまでもなく、混亂した當時の印度思想界の鎭定者であつた。正義の王國の建設者であつた。彼が徹底した八正聖道の中正主義は九十五種の極端論を粉碎した。其の實行的な平明な敎義は、人生を度外視した卓上遊戯の空論を打破りて人の行くべき大道を開示した。彼の唯物主義の官能滿足や、肉慾の耽溺を警戒すると共に、迷信的の苦行や無益な禁慾說を悉く破壞して了つた。彼はかくて思想上の勝利者と共に大なる人類の指導者として三千歲の今日まで不朽の恩惠を吾々に與へた。

彼は思想界の大王であつたと共に、社會改革の大英雄であつた。最重な階級制度から來る、種々な社會の腐敗や混亂や横暴や壓制や、不滿や不幸は、彼が一たび人類平等の大福音を傳ふるに當つて氷雪が溫い太陽の前に忽ち消へ去つて、春の光が長閑に見らるゝ樣に悉く消滅し去つて、平和の春光と、慈悲の香風が天地に充つることゝなつた。

世界は彼の敎で人類の平等なることを知つた。人類は自由であることを明に自覺した。而して此の大なる敎は世界各國到る所に寛容にして仁愛に富める花の如く美しく、月の樣に淸い佛敎文化を建設した。彼の敎の到る處には決して戰爭はなかつた。印度の大帝アショカが平和の宣傳を世界に送つて以來、支那にも日本にも其他の國々にも佛敎は實に平和と文化の使として、大聖牟尼の敎を仰いだ。

『四月八日』は此の歴史的の大聖人を仰ぐ日である。吾々は此の歴史的の意味から大聖の盡きぬ感化を味つて、今日の闇黑なる思想問題の唯中に、太陽の如き大なる光明を仰ぎ見るのである。

三、信仰上より見たる降誕の意義

吾々は一步進むで、宗敎上の本尊として、信仰的に佛陀の降誕を祝し、且つ仰ぎたい。歴史上の佛陀は唯吾々が深い回想、憧憬、感謝の心の上に『四月八日』に特に鮮かに生れて來る丈であるが、然し信仰上の佛陀は現に大慈悲を具へ、大智慧を有して吾々の上に照臨し、何時でも吾々を救ひ、吾々を導く如來である。三千年前の佛陀は、この救ひ主の一つの

於て單直仰信ひたすら白道を精進に歩め、社會的効果だの自己的安全が如何たるかを慮る勿れ、正しき信行道は最上の王城に達し、朝夕の日課念佛は最勝殊絕の妙響を傳へん。（大正十一、二、無礙光）

釋尊降誕の意義

一、平和、自由、人道の徹底

天下泰平といひ、家内安全といふ吾々人類は花にも月にも平和を愛好せぬ時はない。平和主義が大戰後の大勢であることは平和博を例に出すまでもなく明なることだ。またわれに自由を與へよ、然らずんば死を與へよとまで叫び、權利の爲には生命をも賭して顧みぬのも、吾々の常である。普通選擧の叫び、民本主義の議論も要する所、この自由平等の主張に過ぎぬのである。更にまた『人は仁なり』で、人道博愛の精神は文化の進歩と共に益々明かに現はれて來た。

斯の如く平和と自由と人道とは現代思想の根本であるが、この平和の最も偉大なる根底を有して居るのが實に佛教である。また徹底した平等論を主張し、神も人も同格である、佛陀も凡夫も唯だ修行の成否に外ならずと說いたのも佛教以外の教には見ることが出來ぬ。更に大慈悲を高潮し、大愛を極說するのも佛教が、最も鮮かで且つ完全を極めて居る。

而して此の平和、自由、人道の徹底した大なる教義は實に教祖釋迦牟尼如來の降誕に於て、初めて其の崇高の光明を發したのである。聖傳には、大聖が降誕の時大獅子吼して天上天下唯我獨尊と直に叫ばれたと書いてある。また『大覺のために吾れ生れたり』と天地をも動かす妙音を發せられたとも讃してある。此の奇蹟的の叙述は要するに人類の歷史に於て、文化の進展に於て、人道、平等、平和の根底が世尊の降誕と共に初めて築き上げられた雄大の意義を顯はしたに過ぎぬのだと思ふ。故に佛教徒は勿論、苟くも人道を愛し平等を尊び自由を重ずるものは、誰とても此の『四月八日』を大に祝賀し、且つ讃美せねばなるまい。特に戰後平和記念の事業や、人道主義と自由平等の主張が日に日に鮮かに高潮されつゝある今日、『四月八日』の意義は、特に重大のものとなつて來ると思ふ。吾々は此の意味から、大聖の降誕を祝し、且つ

此の不生不滅古來常住の法身を考へて來て、其の千差萬別の顯現に眼を着けると、三千年前の世尊の降誕は、今でも同じ樣に時に應じ、所に隨つて大覺のために、天上天下唯我獨尊の爲に何時でも拜めることゝなる。佛が身を滅せられたと見るのは唯歷史といふものゝ上のことで、大乘思想の上から云ふと、佛は何時でも靈鷲山で說法されて居る。何時でも御說法があると共に常時にルンビニー園の聖誕がある譯である。否、實を云ふと、この靈山の說法なるものが卽ち聖誕の相に外ならぬのである。絕へざる創造の大用、盡きざる進化の大力、之が說法である。佛種を育て、佛子を生み、佛智を成就する。之が說法である。卽ち佛陀を生むといふ外に、全く說法はないのである。

かゝる大乘佛教の思想は其の理窟は分つて居ても、容易に味ひ得ぬものである。然し四月八日といふ緣の深い日が來ると、花も柳も、自ら喜に充ち小鳥も蝶も見る〳〵讃美の有樣をなして、此の萬有そのまゝが佛の淨らかな法身であるといふ深い教理が篤と味へることゝなる。

此處で吾々は佛陀が現に生れ玉ふた、三千年の昔の話でない、歷史上の追懷でない、實に眼の前に生れて居られるといふ靈感を生ずることゝなる。歷史上の追懷を尊び、信仰上の實感を更に尊び、然してこれと共に、吾々は萬有卽ち佛、天地卽ち釋迦の思想、換言すれば現象卽實在の正見を起して、如來の常恒誕生の意味が判つて來ると、歷史には別樣の光を生じ、信仰には一層確固たる强味と、一層底の知れぬ深さが出來て來る。

如來は何時でも生れて居る。然し四月八日には特に鮮かに生れて吾々の前に立つて居られる。否生れるといふよりも、吾々は淸淨の心と、敎虔の至情とで、此の日は各如來を生んで居るのである。昔善導大師は念佛一遍每に一佛づゝ現はれたと書かれてゐるが、吾々の如來を仰ぎ如來を信じ、如來を讃嘆する心そのものから、念々に如來が生れる。否此の心卽ち如來である。

如來の心で如來を供養し讃嘆する、之ほど立派な供養讃嘆はない。如來を生んで、生れた如來を讃美する。此れ程徹底したお祝ひが何處にあらふ。

（大正一一、四、東光）

大なる顯現に過ぎぬ。

大靈の本體は千萬年は愚か、無量の生命を有し、無限の大力用ありて、常に吾々を護つて居る。吾々の信仰のある所に此の大靈は天上一輪の月が、明淨な水に共の圓滿の態を宿すが如く、明かに吾々の心に現はれる。慈悲深い父母が、愛兒の叫びを聞けば直に驅け付ける樣に、吾々が煩悶の呻きに彼を喚び、苦惱の壓迫に堪へられず彼を思ふときに直に來つて吾々を慰安し、吾々を救護する。

實に彼は吾々人類が最高の思考を以て料り得る總ての智德を具備し、一切の善美を成滿して、吾々の理想として仰ぐべき唯一の實在である。吾々が文化と呼び、藝術と唱へ、道德と稱し、智識と誇る所の總てのものを統合した最大、最高、最尊の實在が、卽ち此の本尊である。この大實在の信仰が卽ち宗敎といふものである。「爾端心正念にして來れ、吾かく爾を護らん」と吾々人間の世界の外に超絕して、高く彼岸の極樂土に、無量無邊の光明、百福莊嚴の妙色身を現はし嚴かに且つ慈悲深く、救世の手を垂れて居るのが卽ち彼である。

四、萬有是れ卽ち佛

然し吾々は尙最後の一つ重大なる降誕の意義があるのを忘れてはならぬ。それは卽哲學の觀照の上に於ける佛陀降誕の意義である。吾々は此處で法華經や華嚴經に說く所の信仰を背景にした大乘佛敎の法身觀、卽ち宇宙萬有の中に滿ち充つる佛の相について味はねばならぬ。

宇宙の眞理、萬有を包括した最高の實體には、生もなく滅もない、同時に萬有そのものは、直に此の實體の顯現である。『花は紅に柳は綠なり菩提の相。燕語り鶯啼く般若の宗』で、蝶も小鳥も如來の態ならざるものなく、若草の露にも、散り行く葩にも悉く佛陀の光明が現はれて居る。三千年前八十の御壽命で、五十餘年の間、八萬四千の法を說かれた、釋尊は唯、此の大なる實體の一つの現れであつて、大海の水の本性は不變不滅で、時々大波小波が打ち揚げ寄せ來て、激瀾怒濤、時に大船をも覆へし、時には一碧萬頃鏡の如く平かであると同じく、唯一時の顯現である。本體から見たら、成道もなく涅槃もない。萬有そのまゝが如來である。

アにしても、戰前に於ては誰しも亡びやうとは夢想だもしてゐなかつたのである。然るに戰爭の結果は兩國共忽ちにして瓦解し、存するもの必ずしも永遠ならず、無常の迅速なるを示した。(二)又戰前の考へた人間は感能の滿足を以て足れりとする享樂主義であつた。卽ち日本の腐敗した原因も此の享樂主義(=黃金萬能主義)にあつた。然るに戰爭のために苦痛に苦痛を重ねしめられた結果、如何に黃金の力を以つてしても到底意を充たし得ぬ事を覺つた。此の點に就いてはロシア然り、ドイツ然り、イギリス然りである。享樂主義の永續せぬ事が判つたのである。而して戰後は成金が簇生して馬鹿な贅澤を極めたもので、ドイツの書を見ても米國人が來て金力に任せてドイツ人を凌辱した事などが出て居た。けれ共今では其の成金の顏も見なくなつた。(三)又從來は自我中心主義であつた。戰爭の始まつたのもそれである。誰も皆、已さへよければ他はどうでもよいといふ考へであつた。けれ共此の主義も遂に破綻せざるを得ざるに至り、資本家も大いに考へるやうになり、國家も利己主義は駄目だと云ふ事が解るやうになつて來た。そして國家組織の上には共同一致を自覺するやうになつた。享享主義、自己滿足主義共に駄目になつて來たのである。(四)又嘗ては形式禮義を重じてゐたが漸次それ等は滅じて平民主義になつて來た。從來は社會は一の法律禮儀を以つてウマク行くと思つて居たが現今ではそれ以上のものがあると思ふやうになつて來たのである。

以上は卽ち佛敎の所謂四轉倒に相當するもので、不常を常と思ひ苦を樂と思ふものである。而して戰爭は是に對して敎訓を示した。日本に於ても此所に氣が付くやうになり、本當のものを得やうといふ考へを起すに至つた。之れは淨土敎で云へば厭離穢土の思想であるが、就いては茲に見逃がす事の出來ないのは、戰爭に於て三つの思想が顯はれて來た事である。卽ち第一は將來の世界は人道主義でなければならぬと考へて來たことで、是れは博愛主義である。ウイルソンもハーデイングも皆この主義で來てゐる。現今サンガー夫人なぞが產兒制限論を唱へて居るが、是れは經濟問題から云へば立派な議論であるが一ツ缺けたところの非難を免れないのは人道主義に反してゐる點である。斯く現今は人道主義を要するのである。第二は權利の主張、卽ち正義の觀念である。アメリカが立派な會議をしたが而かも多少の非難を排し得ないのは正義に外れた處があつたからである。現今の權利思想も此の正義思想から來るのである。勞働者、婦人等に於ける權利の

現代布教の中心問題

【上】

本問題は詳細に論ずれば長時間を要するのでこゝにはほんの序論だけを述べる事にする、布教の中心は何處にあるかと云へば甚だ難問題であるが、何處にもあると云へる。卽ち葬式にも其中心があり、法要にも其中心があり、常修の稱名念佛にも無論其の中心がある。卽ち佛教至る所に布教の中心はあるのであるけれ共唯斯く云つたのみでは漠としてゐるので更に進んで云へば布教傳道の中心に就いては二ツの方面があると思ふ、(一)は理論的方面より云つて、法然上人の敎が果してかく現代布教の中心になり得るや否やの問題であり、(二)は淨土教徒が布教の中心として實際的に如何なる事をしたら善いかの問題である。卽ち(一)は教理(二)は實行の方面である。

彼の世界大戰以後世界の大勢は大いに變化して、今日は正に宗教の時代になつて居る。書肆なぞでも一昨年は勞働關係のもの、昨年は文藝もの、本年に入つては宗教ものが賣れるやうになり、佛教關係のものも相當はけるやうになつたと云ふ。是れに依つて觀るも現代人は將に進んで宗教に入らんとして居る事が解る。

さて然らば、何故斯くの如き趨勢になつて來たかと云へば、(一)大戰前は科學萬能であつた。物質論は盛に行はれ、ドイツあたりでも、ヘッケルなぞは此の物質論によつて盛んに基督教を苦しめたものである。彼の社會主義なぞも宗教はない。經濟上のみを論じて靈的方面は眼中にない。無神論は社會主義者の本領で同主義者の葬式には僧侶も立合はないといふ有樣である。斯く大戰前は物質論であつた。日本でも其の當時は科學萬能であつた。然るに、戰爭が始つては左樣は行かぬ。いかに物質文明の發達があつても、それは要するに殺人機であつて平和のために貢獻するところ少なきを悟つた。是れ正しく十九世紀科學文明の破綻を示すもので、どうでも斯うでも精神へ來ねばならなくなつたのである。卽ち物質萬能の夢は破れて無常が解つたのである。實に世界戰の人類に與へた教訓は此の無常の觀念であつて、ドイツにしてもロシ

ばならぬ。日本國家は古來君民合體で民本主義に適する國であるが天台、眞言等の盛なる時分には金持ちばかりが信仰していたので、一般はホンノ結緣に過ぎなかつた。皆同一國民であり乍ら信仰の上では平等でなかつた。然るに法然上人出でゝ遺憾なく平等化せられたので、日本國民は初めて貴族も平民も共に平等である事を知つたのである。或る人は淨土教は國家主義でないと云ふが、法然上人の敎あつて始めて臣民一般が陛下の赤子である事を知つたのであるから國家主義に貢獻するところこそあれ、決して相反するやうな事は無い。是れは誠に肝要の事であるから誤解のないやうにしたい。次に權利思想の方面であるが、淨土敎は萬機普益の方面では非常に廣いが一面自己の信仰の上から云へば非常に狹い。凡てのものを選捨して一行を選取する敎で斯くの如きは他宗にはない。是程强い選擇の敎は他にはないのである。是は軈て自己の正義を主義する上に於ては一方に大なる慈悲を示しつゝ一面には狹く、信仰のためには全力を擧げて取るべきは取り捨つべきは捨てると云ふ權利思想になつて來るのである。凡そ佛敎潤しと雖ども權利思想と結び付いて斯くも力强い選擇をなす敎は他にはない。

却說淨土敎に於ては上述の如く人道主義も平等思想も權利思想も皆顯はれて居るのであるから最も現代に適する敎であると思ふ。而して此の三つは鼎の三足の如きもので、離れる事は出來ない。人道主義の元には平等主義あり、平等主義の元には正義思想(卽權利の主張)があるので、他の敎に於ては多く其の一に偏するが念佛の法門に於ては皆是等が合致して一體となつて居るのである。

【下】

以上は理論上から淨土敎の布敎的基礎を觀たのであるが、自明の理として其確實の價値を認めざるを得まい。卽ち人道平等正義の三主義に立脚して進むならば決して間違ひないと思ふ。之れ卽ち古來宗の定義として擧げてある獨尊の義、統攝の義、歸趣の三義にも相當するもので、此主義を以つて立つならば、社會の人心は必らず我淨土敎に歸入し來るや明である。目下親鸞の如きは盛んに書かれ、盛んに讀まれてゐるが、之れやがては法然に至る前提であるや勿論であらう。

次に實際上から云へば、淨土敎に於ては前述の三つの基礎のある以上は、何でも充分なし得るだけの要素は已に備つて

主張も是れからである。第三はデモクラシー思想（民本思想）である。此の思想の善惡は別として何處にもある思想である。大きい國にも小さい國にも、資本家にも勞働者にも皆一樣にある。僧參問題も、普選問題も皆此の平等思想、デモクラシー思想の盛んになつて來たところに原因してゐる。此三思想が前の四思想の不備を補つて現はれて來たのであつて、此の三思想に合致する宗教ならば布教に耐えるのである。而して淨土教に是れあるや否やを見るに、法然上人の教理は此の三點に對し充分其の權利があると思ふ。卽ち經に『末法萬年餘經必滅彌陀一經利物偏增』と云ひ、又宗祖の御詠に『草も木も枯れたる野邊に唯獨り松のみ殘る彌陀の本願』と云つて居られるのは、我淨土敎には前に云ふ人道主義も、權利思想も、デモクラシー思想も有してゐる事を示されたものであつて、之れは實に他宗派の到底及ばないところである。何故かと云へば、淨土教は大體『諸經所讃多在彌陀』の一句に依つて他教に優越せる事を示されてゐるのだから多くを云ふ必要もないが、今佛教を分けて見れば大智惠門と大慈悲門とがあつて法華、華嚴等は大智惠門に屬する。而して法華の中に於ては釋尊の御身體は永遠のもので常に御說法があると云つてゐる。卽ち壽量品の大本が之である。然し是れは智慧の說法である。彌陀經に所謂「今現在說法」と理は同じであるが、彌陀經の場合の意味は智慧の說法でなく救ひの說法である。慈悲の說法である。此の大慈悲を說く點に於ては淨土教は佛教中の最高位に位するもので、卽ち人道主義に最もよく合致するものである。

次に平等思想に就いて云へは、一切衆生悉有性佛といふ點から觀れば皆平等であるが、實際から云へば三論、法相、眞言等は理窟の上で說くので聽き手を得ねば、卽ち腦力のある者でなければ入り得ない。然るに大慈の法門の上では信仰本位であつて、法然上人の「機根競べには源空勝ちたり」とある通り、理窟の上で比較したら勝てないが機根くらべでは淨土教が第一である。卽ち萬機普益と稱する所以であつて、これ平等主義の大なるものである。法相、華嚴、天台等は實に立派であるが、其の傳來の當時を思へば信者は皆貴族であり皇族であつた。卽ち是等の法門を信ずるのは要するに金持ちの仕事であつた。然るに法然上人一たび出でゝ法を說かるゝや貧富貴賤を論ぜず、皆平等に是れに歸入するを得た。是卽ち前述の如く平民主義、大慈悲の教であつたからで爲めに當時佛教は非常に隆盛を極めたが將來も亦斯くの如くでなけれ

るに過ぎない。

第三は理想を與へて安定を得せしむることは前述の如くであるが、此れには文化的布敎を以つてするのである。卽ち總て個々のものを蒐めて來て、政治、文學、經濟等みな相寄つて一つの目的ある事を示めし、それに向つて進ましむるのである。この個々斷片的なものを一の理想に統一せしむることは淨土敎では卽ち念佛になるのであるが、兎に角或る一の理想を與へ信念によつて凡てを整理統一せしむるは文化的布敎の本領であつて、これ人類の幸福を增進する所以である。一切の文化は淨土敎の精神から見れば悉く念佛の助業である。淨土宗は一切の文化要素をして念佛を中心に回轉せしむべきものである。

斯くて淨土敎徒は最後は文化主義（信念的統一的布敎）で進みたいと思ふ。これはみな彌陀大慈から顯れて來るのである。けれども先づ最初には社會事業が最も肝要であると思ふ。

又敎化事業に就ては現今は或る階級に限られてゐる嫌ひがある。これは須らく萬民平等たらしめたいのであるが、知識技能の方面は資力の關係上、考へて見れば止むを得ない點もある。けれども精神上ならば、平等敎化ならば出來る。一體從來の敎育には精神的訓練はない。卽ち智は發達してゐるが情の方面の發達がない。此の方面の訓練は如何にしても宗敎に依らねば駄目である。卽ち平等主義によつて是れに當るべきである。次に文化的布敎は旣に述べたやうに信仰によつて凡てが統一されれば最後は念佛になり、文化主義になるのであるが、從來は政治も敎育も商業もみな斷片的であつたが、この布敎によるならば、みな統一されて念佛中心となるのである。

敎理	平等大悲（人道）	──	融和	──	社會事業（統攝）	實際
	萬機普益（平等）	──	指導	──	敎育事業（歸趣）	
	選擇本願（正義）	──	安定	──	文化事業（獨尊）	

斯樣に現代は布敎の實行的方面に於いて（一）社會事業布敎、（二）敎育事業布敎、（三）文化事業布敎の三方面があつて、將來の敎育家は是れに向つて全努力を傾注する必要のあるは云ふまでもないが、玆に一言して置きたいのはこれからの布

ゐるわけであるが、實際問題に着手するに當つてはいろ〳〵の問題がある。卽ち現今では布教は種々の方面に關係があつて、教育問題、社會問題、政治問題等有所方面に於て布教の必要を感ずる。例へば政治方面にしても小にしては市會、府會から大にしては國會なぞに於ても大いに教化の必要があり又此等を利用すべき要もあり更に又經濟問題に就ても、昔のマーケツト(市)は寺院中心であつた、淺草觀音の市なぞも其遺物であるに見ても佛教家の經濟的活動を要する方面は中々廣い。斯く擧げ來れば際限もないが、今假りに布教を分つて見れば(一)內的布教と(二)外的布教とがある。前者は所謂布教傳道及び葬式法要等であるが、後者は主として廣義の社會事業である。而して此の兩者の布教を實行するには三つの方面があると思ふ。卽ち(一)融和、(二)指導、(三)安定である。顧るに現今は政事問題も澤山あるが、その中には多くの矛盾があるから、其矛盾を除き、又資本家對勞働者、與黨對野黨と云つた樣な對立關係の間には紛擾が澤山あるから此等を融和する必要がある。信念は必らず此等と融和するに至るであろう。

又現今一般人民は國家、社會の有樣に疑問を抱いてゐる。其赴くところ知らず恰も舵を失つた舟の如くであるから、是れに磁石を與へ舵を與へて指導してやらねばならぬ。之れが第一の要件である。

又現代は安定をつ失つてゐる事も確である。朝に甲を論じ、夕に乙を論じてゐるのは、卽ち其證據で、無理想なことを示めしてゐる。政治家、實業家、教育家みな然りである。故に之に理想を與へ安定を得せしむる事は、目下の急務である。之が第三の要件である。

此の三つは布教に對する必要條件であるが、第一に對しては、其方法として社會事業を要するのである。卽ち該事業によつて融和を與へるのである。融和を與へるに就ては、是れ以上の方法はない。又是れを行へば、自然淨土教の大慈の法門に相當するので、寺院が中心となつて、勞資、官民、地主、小作等あらゆる反感と敵意のあるものを理解和合せしむるやうにしたいのである。所謂布教傳道も無論必要ではあるが、其の根本は融和協調の理想であらねばならぬ。

第二の指導に就ては教育的布教に依るのであるが、見れは必らずしも學校の經營を意味するのではない。モツト大きい意義のものを云ふので、迷ふてゐる羊を東西各々其行くべき處に導いてやるので、現今の教育そのものは云はば一部分た

と區別すべからざるも決して少くない。ギリシヤのストイック派や歐洲中世の神秘派の哲學は前者であり、佛教の中の唯識即法相宗や倶舍宗などは實に適當なる後者の例として稱してよい。其區別は玆に於て頗る困難のことになる。區別を論ぜざるを得ない所以は玆にある。

（三）更にまた哲學は其系統極めて多く東西兩洋古今幾千歲、其書は汗牛充棟も啻ならぬ有樣である。宗教もまた之と同じ、苟くも人類ある所、其文化の高低、種族の文野、其區別は種々なるも、到る處、宗教を見ぬ處はない。隨つて其種別は下は拜物拜魂教の劣等なるより、上は世界的宗教の尊嚴高尙なるに至る迄、殆んど無數といふてよい。かくの如く宗教哲學の二者共に、無數の種類あるを以つて兩者の交錯する所も亦極めて複雜にして、東洋の如く概して二者區別なき傾向を帶ぶるものと、西洋近世哲學の如く二者全然區別の傾向を有するものと存在し、兩者の區別は實際上、常識の觀察通り然く簡單なものでないのは明かである。

（四）今日の講演は、この區別を論ずるものであつて、即ち其の主とする所は、教養ある人士として一般高等常識の上から思想問題に對する智的要求に應ずる爲であるが、然しまた吾人の精神修養人格完成の點から避くべからざる二つの問題に答ふる爲であることを一言して置きたい。それは何である乎、第一は人は哲學あれば宗教を要せざるや否やと云ふの にある。即ち個人の精神修養の上からの問題である。第二は文化の發展と共に或は宗教が哲學の爲に倂合せらるるか、或は之が爲に打滅されて仕舞ふのではないか。或は兩者ともに其特點を發揮して對立するであらうかと云ふ將來思想の大問題である。宗教哲學同異論は、此點に於て頗る重大の意義を有することとなる。

二、哲學と宗教との定義の比較

1、哲教の定義

（五）哲學と宗教との別は、其定義を比較するが、最も捷經であらう。然し兩者ともに其所謂定義なるものが區々であつて、前に述べた如く系統と定義との差別で、定義も全く差異したものと見ることになる。物質論と唯心論は其議論が氷炭相容れざると共に定義も全く差異して反對のものが、出來得る。然し大體に於て東西の學者が公認した共許の點をとり

昭和九年一月 帝大仏青ノ日曜講演ニ 矢吹博士ヲ 在家仏教ヲ 称フ

教は僧俗共同の布教でなければ駄目であることである。家族の者とも、友人とも、凡てに布教せしむるを要する。即ち教化の平等主義を要する。又從來は法衣でやつた布教であるが、將來は和服でも洋服でも構はない事である。即ち無形式主義に據るを可とし、從來の形式主義を打破し無差別の布教に移らねば駄目である。

以上、理論と實際とに渉つて其の大要を述べ、現代は理論上の根據を有すると同時に實際上には三事業布教を要することを明かにしたが、我淨土教は理論の上に於ては、現代教化の最深の根柢を具へ、其實行に於ても現代布教に好適なる實力と條件とを具へてゐる。この點に於て遺憾はないのであるが、唯、實際布教の方面に於ては、未だ遺憾な點が多いと思ふ。折角諸氏の奮闘を切望して止まない次第である。

（大正十一、八、二五淨土教報）

哲學と宗教

一、緒言　思想界の將來と個人修養の大本

（一）　哲學と宗教とは、其名の異なる如く常識上より見て、其差異あるは云ふまでもなく、自明のことであらう。カント宗やスペンサー宗が存在せずして日蓮宗、淨土宗あり、法然やルーテルが崇拜される樣に、無論ショーペンハウエルやアリストテレスは崇拜供養されて居らぬ。誰か伯林やハーバート大學教室、若くは其哲學研究室將ちて本願寺やサンピエトロの大寺院と同視する人があるだらうか。一體、此二者の區別を云々するのは或は一種の閑戯ではあるまいか。

（二）　然し此二者は第一歷史的に其發達を論ずるときは兩者ともに同一人性の至深に發した精神的の產物であり、殆んど二者區別すべからざる親密の關係がある。今でこそ二者の區別は截然として女教師と世話女房の樣になつてあるが、その始めは何れ梅櫻と判じ兼ねる雙生の姉妹であつたのである。埃及や印度の古代神話を見ると、之がよく判る。第二內容的教義的に既成宗教若くは哲學の內容に照らしても哲學にして、宗教的色彩の濃厚のものあり、又宗教にして殆んど哲學

である。卽ち之を資料として使用する外に其相互の一致的關係を明にするのである。此見方は近代の哲學者ヴント、ヘルバルド、パウルゼン等獨逸碩學の主張である。ヴントは「特殊科學に由りて人類に媒介された知識を矛盾を去りて一系統の下に統一するものだ」といひ。ヘルバルトは流石教育者丈にもつと實際的に「日常の生活と特殊科學知識の調和である」と說いた。パウルゼンのは之に對して哲學的に「哲學は科學的認識の總額」であると喝破した。近代科學の進步は斯の如くして哲學に大關係を與へ其位置が希臘の古代や歐洲の中世と變つて來たが然し此考へは單に最近代哲學者のみでなく、カントにも既に其考あり。また近代のスペンサーの如きは此の考への最も進んだ一人であつた。

（八）　哲學を特殊の一科學として取扱はんとすることは二つの方面から見られる。第一は之を道德學倫理學の範圍に極限せんとする傾向であつて、之は英國派の倫理學者例せばロック、ヒュームの如き人々の議論である。哲學は倫理科學道德科學として立つのである。この中に亦社會學も含まれることゝなる。第二は認識の科學として哲學を見る、卽ち心理學が哲學として立ち得る堅實の城廓として殘つたのだ。之はリップス、ベネケ等最近代の學者の議論である、然し更に此二方面を綜合大觀して哲學を「一般に該當すべき價値の科學」として見るヴィンデルバンドの說も之に附加して考へたら便宜であらう。

（九）　已上根本學、綜合學、特殊學の區別が哲學に生じて來たのは前說明する如く外面的に其歷史的の發展をたどると科學との關係に歸するが、然し內面的に哲學そのものゝ性質を考へると自ら此三性質を具して居るとも云へる卽ち第一の根本學と第二の統一學とは結局論理上演繹と歸納との差に過ぎぬ。隨て第三の特殊學も心理、倫理に限定するといふ考の外「一般價値學」の進むだ觀念に來ると最早他の特殊科學並といふ考へとは內容が頗る異り、寧ろ第二の統一若くは綜合といふ考と共鳴する點を見出す。

（一〇）　然し哲學は右の如く知識理性の研究といふ外に今一つの重要な任務がある。之は卽ち人性の究竟の滿足を與へ精神要求に安定を得せしめるといふの情的の方面である宇宙人の眞理人生の歸趣が了々として明なるときに吾人は精神上限りなき喜と滿足に滿つる必竟哲學は研究に出發して此最後の安心に終るのである。其學說が物質主義たると唯心主義た

これを比較すれば、大約見當だけはつくことと思ふ。先づ哲學の名義に付きては、其西洋に於ける語源は人も知る如くフイロ（愛）ソフイヤ（智）卽ち愛智學の義で、夫のソクラテスが、その學派と學問を單に生活實益の爲にのみ使つたソフイスト詭辯學派の人々と簡別する爲に純然たる思辯研究の學として旣に用ゐられたとしてある。日本では西周氏が始めて此字を哲學と譯したので、此譯語が果して適當であるか否かは疑問であるが、兎に角、當時智學とか、理學とか、性學とか或は聖學とか、譯したのが皆廢滅に歸し、哲學の譯語丈が獨り遍く一般に用ゐられて誰も怪むものもなくなつた。然し其定義に至りては諸家の定義が其根本の學說に依りて異り殆ど適歸する所を知らぬ。然し此れ等の意見は哲學を（一）原理學若しくは基礎學として見るか、（二）また統一學或は歸趣學として之を考へるか、（三）或は一つの特殊學として之を取扱ふかといふ三種に別けられる、此三種の見方は哲學對科學の關係から由來したもので、歷史的に觀察すれば、科學の發展が自然哲學の地位に變動を與へて出來た三時期とも見られる。第一は哲學萬能論第二は科學を必然的の條件基礎とした見方第三は哲學も他の科學と同列の一科學卽一の特殊學として哲學を見るのである。

（六）　基礎學若くは原理學として哲學を見ることは、哲學が萬學の王、人類一切の知識の最高權威とした考へで、科學が充分の發達をなさゞる古代にありては哲學が絕對優勝の地位にあつた。卽ち科學は無論哲學に從屬すべきものであつた。今日と雖、此考へは全く廢滅したのではない。唯心主義者や一部の神學者には此考へが今に繼承されて居るが、大體としては最早勢力が薄い。此說に屬する定義を並べることは略するが代表としてプラトンが「哲學は永遠の學である」としたのや、アリストテレスの「事象の原因を硏め原理を明むるもの」といふ定義や、ライブニツツの「總體學」フイヒテの「知識究極の學」としたのなど皆此系統に入れられる。而して其最代表的とすべきはヘーゲルが「對象の思惟とし絕對の學とした」のにある。卽ち哲學は方法としては主觀の純然たる思想で科學知識を超趣し、其內容若くは本質から云ふたら「絕對の學」であるから相對的の科學とは全く價値が違ふ崇高のものとなつて居る。

【七】　第二は哲學の成立には必然的に科學を必要とする。科學は哲學の資料である、哲學といふ此講堂の如き莊麗の完き建築は科學の棟梁や柱や床板を必要とする。亦哲學は特殊此資料相互の間に存する矛盾や撞着の點を融會し調和するの

二にはその精神的の特別の有様信仰歸依である。前者は融合攝取救濟であり、後者は安心立命悟了體驗である。茲で宗教の定義は右の兩方面から考察した結果、略左の如き通俗的な且つ概然的のものが出來る。

宗教は至高至上の對象を確立し(一)之と人類との關係を靈的に結合し(二)以て究竟の信念悟了に生活するなり(三)

この三要素は宗教の淺深、人智の文野で大分距離がある。亦其內容にも頗る差異したものを發見する、佛教のやうな非常に高尙甚深微妙の如來佛性、空などの對象と、猫や狼や蛇などの下等宗教の對象とは全く別物であり、亦其精神狀態の悟境信念に至りて禪家の大禪師とアフリカの魔術者と同一に見る譯には行くまい、然し全體として考へたならば、先右の定義で一應一般にあてはまると思ふ。

3、兩者定義の比較

(一三) 茲で宗教哲學二者の定義を比較して見る、先づ左の表を一見されたい。

哲學	宗教
1、根本原理の思惟攻究	1、至上至高の對象の確立
2、人生宇宙の統一解決	2、人類の至上者としての靈的結合
3、人性の滿足と安定	3、信念悟境の精神生活

二者を比較して見ると理論的に兩者の三要素ともに一致した點のあるのを見出すであらう。第一の根本原理も至高至上の確立も、其言ひ顯はしには、別があるが、「實在」といふ觀念としては同一の異名と考へてよい。第二は人間對宇宙の態度の確立する事である。神と人、佛と衆生との關係もそれに過ぎぬ。人生宇宙の解決も畢竟はそれであれて、要するに同一事の兩面であると見られるのである。第三はいふまでもなく安心立命であつて、其行き方には勿論相違はあつても歸する所、精神的の滿足である。斯の如く兩者の三要素を比較して見ると必竟哲學も佛教も其本體に於ては同一物である。少くとも一實體の兩面であると云ふこと丈は考へが付く。然らば茲で吾々は佛教哲學は同一であると言ひ得やうかどうか。

(一四) 宗教と哲學は旣に一體の兩面であるとしたなら其兩面である丈、其所に歷然とした異點の有する免るべからざ

るとを問はず、哲學者が其思惟し發見した世界觀と人生觀とに依りて其精神の安定確立と滿足とを得つゝあるは論なき所である、之れなくんば一箇の僞哲學者に過ぎぬ、亦其學說も自信のない薄弱のものたるを免れぬ。已上の說明によりて出來た哲學の定義（寧ろ便宜的概觀的通俗的の）は略左の如くなる。

哲學は科學知識を基本とし一切事象の根本原理を思惟攻究し（一）宇宙と人生とを統一的に解決し（二）人性理智情意の要求に對し精神的に安定と滿足とを與ふる者なり。（三）

2、宗教の定義

（一）宗教の定義を下すに困難なることは哲學に該通的的確の定義を與へることが殆ど不可能なると同一である。宗教の中最も上層に位する、基督教と佛教とに就きて之を考ふるも、兩者には全く相反した內容を有し、また佛教の中に於ても其教義組織が一見全く水火氷炭の別ある者もある。例せば禪宗と本願寺諸派の如き、甲は東に行けと教へ乙は西に進めと說くの觀がある。如來に絕對歸命するのが正か、如來を絕對に否定し破壞し去るのがよいか、有相が是か無相が非か、皮相から見たら鷺と烏の樣なものであらう。同一佛教の中に於てすら然り、若し之を種々雜多の諸宗教と比較して見たら其差異の甚しき特色の儼然として犯すべからざる、到底簡單な同一定義で律し得べきものでない樣に考へられる。

（二）此等多種多樣の宗教は一見殆ど其畫一する所なきが如く考へられ、隨て定義を與ふることは不可能にも見ゆるが、然し兎に角此等各種複雜の宗教形態を通じて兩面から通有の點を考へることが出來る卽ち、方面は對象としての崇拜目的卽ち客觀の神とか如來とか天とか實在とか稱すべきものであつて、佛教式に言ふたら所信所觀の境他面は右の對境を信仰し歸依し悟入する所の信者行者の主觀的心的狀態、所謂、能信能觀の精神そのものである。この二つのものは宗教としては何れにも通ずべきものである。然し所信の對象には固より自から高低淺深の別差があり、隨て能信の心理にも無數の階段差級を生ずるは明なる所である。然らば此概括的に見た主客兩觀心境兩者、本尊と信者とに就きて各宗教を通じた一般的な且つ常識的な見方はどうであるかと云へば第一には兩者の密接な特殊の關係狀態卽ち崇拜救濟の有樣である。第

あり人生觀であることを認める。其處で第一の異點も、主觀的の側より見た理智對情意の說明は無論便宜的のものであつて、一應の議論に過ぎぬ。刻實して云ふと、それ已上に更に深刻徹底した區別が存するのであるまいか。

（一六）第二の異點は、宗教の倫理性である。是は大體カントの論述した如く宗教の特質として頗る有利な點であるが、これとても單に道德實行と云ふ點丈で、宗教の價値が定まるとし、宗教の道德實行方面のみ見た說明は必竟不徹底を免ることは出來ぬ。何となれば宗教の根本信仰なくして道德のみ單純に行はれ得ると云ふ議論も可成有力である。儒教の如く見方によりては宗教なき道德教と見得る論なく、コムトのポンチビスムの樣な考は多數の近代人思想家が寧ろ喜んで歡迎しつつあるものではないか。斯く考へ來る時、第二の理論對實行の異點も今一層深く研究を要すべきものとなる。

（一七）第三の異點は宗教の證悟性であつて、これは殆んど間然すべからざる宗教の特質と思はれるが、然し、之と哲理上、理智の證悟と、宗教から入つた證悟とが嚴密に論じて、どの位の區別があるが、哲學から來た安心立命には果して動的の活用が伴はぬであらうか、例せば、社會運動の一つとして近時マルクス派の社會主義が勞働階級などに大分勢力を有し、而もその運動家の中には宗教家已上の熱を有して獻身的に宣傳に從ふものも少くない。是等は單純の階級意識若くは共團體觀念或は反抗精神のみの發動でなく、實はマルクス學說の理解崇奉を之に由つて生ずる一種の信念の實現と見るべきものと稱してよい。かくの如く思考し來る時、第三の異點も今少しく研究の步を進むべき餘地がある。卽ち體現宣傳の活動的要素は宗教已外の哲學にも之を存ずるは勿論、ある場合には宗教已上の力さへも生じ得るものであることが考へられるのである。

（2）充實的＝確定＝

（一八）茲で第一の特點に歸りて、考へて見ると、主觀方面の理智對情意の態度も勿論、異點の重要なるものであるが、更に其客觀對象の性質の上に宗教の方には頗る哲學と異るものを見なければならない。卽ち哲學の本體は歸納的に達し得た冷かな理體たるに反し宗教は人類の理想として至美至善至眞の力と生命とを有するものを演繹的に仰ぐのである。此の一大理想は勿論、情操感覺で想像され直觀起越の定力で體得せられるものであらうが、其行程には嚴正な理智の努力

る所である第一要素の原理對象の點では甲者が厭くまでも理智的で進むのに後者は之に情意の要素が非常に濃厚になつて居るといふのが異點として著しき所である。卽ち哲學は論理的概念的の認識寫象に止まつて居るが宗教は之に想像的感覺的の表出をなし具體的藝術的に本體の內容を活かすものである。第二の點に於ては研究と歸依との對立である。卽ち論理と實行との別である。哲學の方では人生と宇宙を徹頭徹尾解決を主として行くに對して宗教の方では之に精神的の意義を見て、二者の間に成立する歸依融一の實行的法悅を主として居る第三の點に於ても哲學は人性知情意の滿足を與ふるとするもそれは唯觀照の上にのみ存する靜的の狀態に過ぎない。宗教の方は此上に熱烈な信仰生活を現して來るのである。卽ち安心立命でも動的の狀態となつて居る。斯の如く根本に於ては大同であつても二者の現はれて居る方面では全く別のものである。理智確立の原理と情意崇仰の本尊、人生宇宙の學理論的研究と實踐的歸依、理智の靜的內面觀照と信念生活の動的狀態とは全く兩者の特色として見るべき所と思ふ。

三、宗教の三特性

（1）批判的疑義

（一五）宗教が哲學に比して特點のある所は略之を說明したが、然しこれは一應の話に過ぎぬ。第一に理智對情意の問題から茲に宗教の超越性が論ぜられることとなる。卽ち此點を單に考へる智信兩分論となり、哲學と宗教とは繩張りを異にした二つの王國であることとなつて了ふ。此二元的の見方は宗教家が常に其權威を保持する頗る便利の說ではあるが、之に伴ふ理智排斥の危險も頗る考慮すべきである。獨逸のリッチエル及其一派の神學者が主張する知信二分說は正に此の第一の特點から出發したものである。

然し現代の宗教は、此の二分說二元的對立論に慊らずして寧ろ一元的理智主義に傾きつつあることは、必らずしも加持力教會のモデルニストや米國に於けるキヤムベル一派の新神學者又は獨逸の自由基督教者を實例に出す迄もあるまい。手近ひ所では佛教に於ては著しく近代の合理的宗教の色彩が濃厚であつて、其原始の形體では寧ろ一種の科學的對宇宙觀で

二、共同利他の信仰團體――敎會
三、其宗敎人格の實現――敎祖

第一は卽ち人類の理想であり、第二は卽ち道德である。この第一の超越性と第二實行性若くは倫理性が如實に體現され不一不二に結合されたのが卽ち第三の宗敎人格である。此融合の大なる丈それ丈佛敎としては大なる力を有する。亦深遠高妙の至致を極めるのである。佛敎の語を借りて云ふと、第一法（法身）第二は僧、第三は佛、（敎祖としての）であつて、釋尊一佛の中に法僧の二つが渾然として圓滿に實現されて居る。玆で神人隔絕主義の諸敎卽ち猶太敎系の諸敎には理想と實修が敎主に於て性質上一分の體現に止まる、卽神の子で終つて仕舞ふが、佛敎の樣な心佛衆生三無差別の神人無別主義の敎に於ては全體の體現として神卽人として完全の宗敎人格を見ることが出來るのである。

體｛理想（究竟）・道德（信修）｝人格｛敎義・敎會｝用

四、宗敎の將來

（二〇）宗敎は哲學と並立して存し得べきか、亦哲學の發展と共に泯亡に歸すべきかの問題は玆で結論として一言すべく殘つて居る。この解答は理論上から見れば極めて簡單なものである、卽哲學と宗敎が前に論述した如く、其內容に形式に各其特色を有する已上は、二者ともに文化の進展と共に共に共存續を見るべきは推斷に難からざる所である。尤も現代の哲學が科學と密接の關係を生じたるが如く現代の宗敎も亦之と同じく現代人性に適應すべき內容形式のものとして存在すべきは勿論である。然し宗敎が將來を有する所以はかゝる理論的根據已外に實際上現代人性の切實なる要求として其至大至强の基礎を有するのである。

現代人に最も缺くる所のもの特に日本人に缺く所のものは高遠の理想である、現代の腐敗と不徹底と退嬰萎靡はこの大理想を有せざるに歸する。次に現代社會若くは人性の改造として必要なるは協同と同情に存する、平和といひ人道といふも要する所はこの二者に歸着せざるを得ない。而して之は宗敎に由る外はない。最後に現代の缺點は人格の空無が其弊害

が純なる情緒の感激興奮に相俟ちて居るのである。情意の特に必要な所以は茲にあり、又理想と相反せず、相對抗するの必要なく寧ろ之と相助くべき所以も茲に存ずる。此永遠不變の生命ある靈體は、宗教に於て普遍的の性質を有し絶體的のものである。

第二の特點に就きて見るに哲學から出發し得る道徳及びその躬行主義は多くは個人的となり、又多くの場合に於いて屈原が『衆人みな醉へり、吾獨り醒めたり』と呼號した樣に、自ら潔くする獨善主義となり、精神的貴族主義に陷り易い、智者には特權があつて愚者は埒外に立たねばならぬ傾がある。然るに宗教に於ける道徳は、其根柢と目的に於て既に哲學と相違した點があり、研究と歸依とで行き方を異にして居るが其共同的團體的の實行性と利他精神の强烈なることが特に第二の特點をして彌鮮かに哲學と區別せしむるに至る。

第三の證悟性も兩者成度までは同一のもので區別が出來ぬ。その發動性も時に兩者軌を一にすること勿論認めざるを得ぬが、宗教としては此證悟性こそ特に最も重要なる一つの特性が存する。その證悟そのものゝ體現である「證悟した人」卽ち宗教的人格の存在である。宗教上に於ては教主若くは救世主がそれであつて、釋尊やキリストといふ史的の人格（寧ろ神格）あることが宗教の最大特點である。教神に次ぐ、ルーテルやロヨーラや、法然、親鸞、日蓮何れも此宗教人格の現はれた天才に外ならぬ。宗教と同時に起つた數論宗は其教義から云へば宗教と伯仲の間にあり、其解脱に關する觀法や修行など宗教の先驅として立派なものである。然るに宗教は現に宗教として世界三分一の生靈を支配して居るが數論は唯哲學として研究される丈である。之は教祖の釋迦の宗教的に完全な人格と比して、カピラ仙人の此方面が著しく遜色あるに歸する。これはプラット氏なども既に論じて居る所である。

（一九）已上論じた所を總括して見ると宗教の特色は永遠不變の生命ある絶對理體、共同利他の團體實行、人格の存在であるが、此三者に由りて宗教は哲學と全く相違した文化現象を現はし、人類の一大活動として今も尙其特別の形態を維持しつゝあるのである。それは卽ち茲に揭ぐる表の通りである。

一、永遠生命の理體——教義（本尊）

外交の行詰りも、結局は日本が財政經濟の上で力が弱いからである。經濟力弱きが故にヒケをとる。國際的に我國力の振興を計るのにも、酒をやめるのが先決問題となる。政治の腐敗を革新する途も、排酒に出發する。排酒こそは國難打開の秘鍵である。

3、倫理宗教は排酒を信條とせざるものなし

世界に宗教の數は數百あるが、これを左の二つに大別することが出來る。

民族宗教……祭祀中心(一民族に限る)

世界宗教……倫理中心(世界的、超民族的)

民族宗教といふのは、或る一民族に限り、他民族には、これを秘密として許さない排他的のもので、祭祀を中心とするユダヤ教やバラモン教がそれである。これに反し、世界宗教と稱するは、佛教、キリスト教、回教の如きものであつて、民族を超越し、倫理中心である。その眞髓とするところは、道德の根本を教ふるところにある。さればこそ、世界教として到る處に教化を布くことが出來る。かゝる倫理宗教は皆禁酒である。人倫を教へ道義を明かにする宗教が禁酒となるは當然である。見よ回教は絕對の禁酒教である。その今に勢力ある所以も禁酒であることに胚胎してゐる。キリスト教の禁酒なることは云ふを俟たない。舊教の方では實際上、酒を飲んでゐるが、然しこれはキリスト教の本體ではない。勿論舊教でもえらい人は飲まない。佛教の坊さんが酒を飲むと同樣で、教が惡いのではない、歷史が惡いのみである。

4、佛教は最も古くして且つ最も徹底したる排酒教なり

キリスト教のバイブルには、勿論、禁酒の精神を說いてはある。が、酒の弊害そのものを說いてゐる點は比較的少ない回教のコーランに於いても同樣である。然るに、佛教にあつては、精神とゝもに、酒そのものゝ害惡について、最も嚴重に最も周到綿密に書いてある。二千數百年の昔釋尊の說かれた酒害の峻烈精微なる記述は、今尙ほ眞理である。古きを溫ねて新しきを知る、佛教は歷史的にも教理的にも禁酒なるが故に、凡そ佛教を信奉するほどの家庭にあつては、當然禁酒家庭であらねばならない。

災禍の根源である。之なきか爲に種々の罪惡不幸を發生するに至るのである。宗教に歸趣を求めざるを得ざる所以は特に茲にある。基督教の敎義を借りて之を云へば望(理想)と愛(協同)と信(人格)との三つが現代を救ひ且つ之を改造完成すべきものであり、佛教的に之を徹底して言つたら大(敎慧)大悲(行)悲智雙運(信)は眞に現代指導の根柢であるのである。苟くも斯の如しとせば宗教の將來を懸念するが如きは迂愚の至りであつて、寧ろ人類及文化の將來は宗教あるに依りて存すといふてよいと思ふ。

(大正十一、九、淨土敎報)

佛教々典に現れたる排酒の制條

第一　序　論

1、酒の問題は現代諸問題の焦點

今や我國は社會、經濟、保健、教育、政治等、あらゆる方面に問題が紛糾し、行詰りを生じてゐるが、それら行詰りの根源、問題の原因に溯ると、そこに酒が問題の焦點となつてゐる。

2、排酒は國難打開の秘鍵なり

社會問題の解決策には、或ひは社會組織の改革に依るべきものもあらう。然し、最も手近かで最も簡單で、最も容易なる解決の一方法は禁酒である。例せば、少年保護の問題にしても、母性保護の問題にしても、酒を存して置いては問題ではない。不良少年を作つて置いて保護するよりも、要はその原因に溯つて酒を絕やし、不良兒を絕滅する途に出でねばならない。乳幼兒死亡率の問題も、排酒によつてこそ初めてその禍根を除くことが出來やう。

更始一新の大御代、國民の新確信新覺悟は先づ酒を擲つにあり、經濟上の問題が解決すれば思想上の問題も自ら好轉する。生活の上により幸福より安定が得らるゝならば、そこに、思想國難解決の途が開ける。左傾右傾の粉々たる動搖も、恒産なけば恒心なしで、經濟問題の解決問題である。

佛教は此の時代に生れ出て、無血の一大革命を行つた。まづ牢として拔くことの出來なかつた階級思想を打破し、佛教の信仰に入れば、すべては同じいといふ大平等主義を唱え、同時に、酒を禁じた。理性を尊び道德を重んずる者にとつて酒は相容れぬ毒物である。佛教は飽くまでも智慧と道德を重んずる教である、即ち佛教は吾人の生活の上に、新らしい基礎を置いた――八正道は卽ちそれである。

正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定（八正道）

正見は正しき批判力である。右傾も左傾も、ひつきよう正しき批判力の缺除から起る、相次いで起る無節操無責任は正語なきによつて起る。人生の基礎はこの八正道に置かれねばならない。酒はこれらのものを曇らせ痲痺させてしまふ。理智の純正と道德生活の根本とは先づ酒を排するより生ず、智慧と道德の教なる佛教が嚴正禁酒たるは當然である。

二、佛教戒律に於ける排酒の嚴峻（佛教成立の教制觀）

1、小乘に於ける飲酒の禁止――對症的見解

佛教には小乘（低い佛教）と大乘（高い佛教）とある。小乘では、酒の禁止がかなり喧ましい

▽戒律に重と輕　戒律とは規律規則のことであるが、これを犯した場合の制裁の程度が重と輕とによつて異なつてゐる。重は波羅夷 Paragika といつて死罪に當り、輕は波逸提 P gatka といつて罰金刑に當る。而して殺生、偸盜、邪婬、妄語の四つを重罪として戒め、飲酒は稍々輕いものとした。それは性質が違ふからで、前の四つはそれ自身惡い事であるから性戒と稱し、飲酒は遮戒と稱して區別した。面白いのは聖者娑伽陀（Sakada）の例話である――當時印度に毒ある大蛇がゐて人々をなやましてゐた。あらゆる毒蛇退治の手段の甲斐もなく今は、娑伽陀の道力――立派な道德の力、精神の力に依る外はないといふことになつた、柳生但馬と澤庵和尚の話もあることで、道力といふことは有り得ることである處で、首尾よく娑伽陀の德の力で毒龍を征服することが出來た。國王は大いに喜んで、娑伽陀を招いて手厚くもてなし酒を出した。娑伽陀は酒を飲んだ、盃が重なるにつれて、さしもの道力もその力を失ひ、遂には居汚く醉倒れて道端に伏してゐた、丁度そこへ釋迦が御通りかゝりなつた、折柄ガマが出て來て娑伽陀の顏の上に小便をした、釋尊は弟子に向つて、

第二本講

一、佛敎の特色としての排酒（佛敎勃興の歷史觀）

佛敎は西歷紀元前五百年の頃に起つた。丁度その頃、支那では孔子が生れ、ギリシヤではソクラテスが生れてゐる。當時の印度の社會狀態は頗る紛糾を極めてゐた。四姓の階級別が儼然として存し、一方思想問題が行詰りに陷つてゐた。

1、佛敎已前の宗敎婆羅門敎　酒讃嘆

婆羅門敎 Brahmauism の聖典吠陀 Veda は盛んに酒の禮讃をやつてゐる。酒が無ければ神は動かない……といふオミキ萬能の宗敎であつた。天地萬有を支配し絕對の力を有する神は人の吉凶禍福をも司つてゐるが、大の酒好きで酒を飲む。人生の安穩幸福を願ふにはこの神に酒を供へねばならぬ。神を祈る役目の婆羅門（僧閥）も盛んに酒を飲んだ。薩摩酒 Som - 供養といふことが、最も大切な重い儀式としてある。帝釋天（インドラ）が酒を飲んで大騷ぎをやり、奥方と喧嘩をするといふ物語が、吠陀の中に書いてある。天地萬有を支配するほどの絕對力を有するインドラが、酒の爲めラチもなく神通力を失つてしまふなど皮肉な矛盾を示したものである。

2、四　姓　階　級

當時の印度には四姓階級が儼として存してゐた。四姓とは

A、婆羅門 Brahman（僧閥）學問と祭祀を司りすべての權力を有す。
B、刹帝利 Ksatriga（武閥）軍事、政治を司る士族、華族、王族の階級。
C、毘　舍 Vaisa（財閥）農、工、商の階級。
D、首　陀 Sudra（奴隷）絕對に社會的自由を認められず。

この四つの階級は、世襲的に存して、相互間の混淆交通は絕對に許されず、階級の下に位する者には自由平等の權能は全然なかつた。

3、佛敎は婆羅門敎の酒讃嘆と四姓階級とを打破し新道德を樹立せり

▽飲酒より酤酒(賣酒)に重きを置き之を禁斷す　大乘では酒の戒を重罪とし、十重罪の內に特に酤酒戒を敎へ、酒を賣ることを以つて最も重き罪とした。之れは原因療法であつて、酒を賣る者があるから飲む者が出來、飲むから樣々の禍ひを生ずるといふ見解からである。優婆塞戒經では、凶器や毒藥等の賣渡を禁じてゐるが、これらは、すべて原因に溯つて禁止してゐる實例で、酒も同樣に、飲むといふことより之を造り、之を賣り廣めることを禁止するに若かず、卽ち、大乘では、こゝに着眼して、酤酒を禁斷したのである。

酒は過失無量、若し自ら酒器を手にして人に與へ以つて酒を飲ましむる者は五百世の中手なからん。いかに況んや自ら飲むをや。一切の人に飲むことを敎へ、及び一切の衆生に酒を飲ましむることを得ず。況んや自ら酒を飲むをや(梵網經)

佛敎が斯くばかり峻嚴に酒を禁ずる所以は、酒は人間のもつ人格を無くしてしまふからである。人格は自覺と身心統一と理想とを要素としてゐるが、飲酒はその何れをも失はせてしまふからである。

三、佛敎に於ける酒害の說(佛敎傳道の敎化觀)

▽長阿含經　には、酒を飲む者は六種の失あり……とて左の六失をあげてゐる。

一には財を失ふ。二には病を生ず。三には闘ひ諍ふ。四には惡名流布す。五には恚怒暴かに生ず。六には智慧日に損ず。『財を失ひ』『病を生ずる』は說明するまでもない。『闘ひ諍ふ』ことも事實で、敎育者の會合の如きですら、酒を飲むと喧嘩をする。『惡名流布』……評判惡く不信用となるは當然で、近頃では、人を採用する場合、酒を飲む者は採らない方針に、どこの會社銀行もなつて來た。能率が違い、秘密が守れず、信認出來ないからである。

▽四分律の十大失——顏色惡し。力少し。眼晴明かならず。瞋怒の相を現はす。田業資生を壞る。もろ〳〵の疾病を增す。

益々闘ひ諍ふ。惡名流布。智慧減少。死後惡道に墮つ。

かゝる嚴しい敎のもとにある佛敎徒が、禁酒を守るは當然のことでなければならない。少なくとも、佛敎の聖日を酒無しとして守り、佛事を無酒とする位のことは、全大衆と共に實行するところとならなければならない。進んでは家庭行事

『見よ毒龍を退治した娑伽陀は蛇に呑まれるガマに小便をされた。それは酒ゆえに道力を失つたからである、酒を飲めばすべて斯くの如し』と教へられた。道徳の力を遮ぎる、卽ち遮戒の稱ある所以である。

▽飲酒は準重罪……五戒の第五　飲酒は右に述べた如く重罪とは性質を異にするが、然し、重罪を誘發する性質があるので、之を準重罪とし、また五戒の第五としてある。五戒とは不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不飲酒の五つの戒である。

▽本生經の實例　獨身者の……　今でいふなら安いサラリーマンがゐた、偶々渇を覺えて酒を飲んだ。飲んで頭が變になつた。そこへ隣家の鷄がやつて來た。好いものが來たと早速絞めて肴にした(偸盜)、やがて隣家の細君が鷄を探しに來た。酒が廻つてゐるので、ついその細君を犯した(邪婬)、そこへ人が來かゝつたので發覺を恐れてその人を殺してしまつた(殺生)。彼は法官の前に引出されて取調べを受けたが、犯せる罪を知らぬ存ぜぬと云ひ張つた(妄語)。以上この男は、不飲酒戒を破つたことによつて、他の四つの戒法をも破つてしまつた。よつて釋尊は『酒は起罪の因緣』として戒め、入道新學者には八戒、十戒の中特に之を重視せられた。(この外小乘では二百五十戒などいふものがあるが、いづれも場合場合に應じ、あたかも症に應じて療法を講ずる如き戒法である。)

2、大乘に於ける排酒——原因的見解(菩薩戒)

小乘の對症療法的なると異なり、大乘では、原因に溯り、原因そのものを無くすることに努める。

▽酒は戒の精神に反す　戒法の精神には1、止惡、2、行善、3、奉公(利他)の三つがあるが、酒は全く之を反對にし行惡、止善、奉私としてしまふものである。

▽酒は明達の慧に反し、起罪の因緣となり、顚倒酒を生起せしむるを以つて之を重罪と定む。小乘で準重罪とせられた酒は大乘では重罪とせらるゝに到つた。人の理智を奪ひ、之を暗昧ならしめ、人間のタガを外し、人を動物とする恐ろしいものであるからである。起罪の因緣とは、罪惡誘發の原因と條件とになることである。顚到心を生ずるから、尊いものも尊くなく、畏いものも畏いと思はず、暑いのを寒いと感じ、寒いのを暑いと感ずる錯覺狀態となる。まことに醉つ拂ひの實際を道破した千古の金言である。

正信と邪信

一、常識より見たる宗教の正邪

近頃社會の上に宗教的氣運が漲つて來た事は大に喜ぶべき現象であるが、然し宗教の中には色々の別があり、或は宗教ならぬものが宗教の姿を以つて人を惑はすなど、正信と邪信とについて兎角見分けがつき兼ねる有様である。單に表面上信者や寺院教會の多寡や、殿堂僧侶の多少を離れて、他に正信邪信を定むる定規となる。常識的にも首肯かれる標準がなくてはならぬ。花紅柳綠、萩には萩の色があり、松には松の色を持つてゐるが、色盲の人にはその色の見分けはつかない。如何に微妙な音樂でも聾者には、その音色を賞づる力がない。然したとひ色盲はそれを見分けず共、花紅柳綠は昔も今も變らず、聾者に音樂なしとも、耳ある人には三味の音も、琴の響きも認識する力がある。つまり此樣な事は、總て一般の上から考へて行かねばならぬ。

此のやうに全般に亘つての理解を要すると共に、又科學の上からも道德の上からも缺點のないものでなければならぬ。的確な治療法をとらずに、お水や御符を飮んだり、神おろしをやつたり、犧牲を神に捧げると云うて人を殺したりなどは科學上からも、道德上からも零である。又例へば一時流行した大本敎の『艮の金神』といふ神は、支那の宋末元初の道教の神であつて、艮は季に配すれば秋で、而も「秋は刑官なり」と云ふ處の意味で、人を殺す穀物を障ゆるつまらぬ神である。此のやうな支那傳來の陰陽道の惡神を以て、日本に置き換えるなどは宗教史からも、道德上からも、何等基礎のない愚擧迷信であると言はねばならぬ。

二、信仰の三要件

以上は一般の常識から見て極めて解り易い事であるが、今少しく踏み込んで考へると、正邪の見別けは容易につかない。第一には各國の歷史上から見た信仰と知識との關係である。

希臘のアリストートル以來、幾多の哲學者が信仰と知識との關係について頭を惱して來たが、こゝに先づ『信仰とは何

はすべて禁酒といふことにしたい。何となれば、あらゆる家庭行事は、子供を中心とするものが多い。また然らずとするも家庭の成員は子供を含み、家庭本來の目的は子供の良き苗床たることにあるを以つてみれば、一切の家庭行事は無酒にて行ふやう、佛敎徒の家庭から其の範を示し、あまねく大衆の實行を促すべきではあるまいか。

▽智度論三十五失を擧ぐ――財物虛しく竭く。衆病之門。鬪諍の本。無恥。醜名。無智。應所得物不得。得已散失。伏匿の事を人に向つて說く。事業成らず悔愁す。身力轉少。身色壞る。(十三より二十までは)父母、尊長、三寶を敬はず、惡人に朋黨す。聖賢を疎遠す。破戒の人となる。慚愧無し。克己無し。放逸。人に憎惡せらる。尊長擯棄、不善の業を行ふ、善法を棄捨す。不信用。遠離涅槃。狂癡。惡道に墮つ、爲人常當狂痴。

▽沙彌尼戒經三十六過失――酒に三十六失有り、道を失ひ、家を破り、命を喪ふ、皆悉く之に由る。父母に孝せず。長友を輕慢す。三寶を敬ふず。經法を信ぜず。沙門を誹謗す。人の罪を奸露く。恒に妄語を說く。人の惡事を誣ふ。兩舌を傳言す惡口人を傷つく。病の本を生ず。鬪諍の本、惡名流布。人に憎嫉せらる。聖賢を排斥す。天地を怨瀆す。事業を忘る。家財を破散す。恒に慚愧なし。羞恥を知らず。僕婢を打つ。衆生を撲殺す。他の妻を奸淫す。人の財物を偸む。善人を疎遠す。惡友に狎れ近づく。常に恚怒を懷く。日夜憂愁す。東に牽き西に引き南を持し北に着く(千鳥足)、溝に倒れ路に臥す。車より墮ち馬より墮つ。河に逢ひ水に落つ。燈を持ち火を失す。暑日熱亡(日射)。病寒天臥死。

▽正法念處經の偈――最後に此の偈を引いて此の講は結ばむ。

酒は能く人の心を亂す。人をして羊の如くならしむ。作すと作さゞると知らす、是くの如し應に酒を捨つべきなり。若し酒に醉ふ人は、死人の如く異る無し。若し常に不死を欲せば、彼の人應に酒を捨つべきなり。酒は是れ諸々の過つ處。恒に常に饒益せず、一切の惡道の階。黑闇の所在する處……酒は毒中の毒たり。地獄中の地獄。病中の大病たり。

(長野縣禁酒聯合會主催禁酒問題講習會に於て)

されば『宗教は哲學なり』といふこともいけぬ。卽ち吾々には宇宙に對する感情がある。然し又單に盲目的に情にのみ流るる偏狹的のものであつてはならぬ。信仰と知識信仰と感情は常に一如主義でなくてはならぬ。唯感情主義の宗教は吾々の迷妄錯覺を元にするもので、例へば彼の大本教の如きは全く之によつて成り立つてゐる。又理窟許りの宗教がある。現今の過般思想の如き、之は政治でなく宗教である。ポリセーズム、マルクス主義のユートピアから來たもので、スパルゴー、ラツセル等の言を以つてもわかるが彼等は理窟だけで、實行を顧みぬ人である。唯理性主義で、卽ちマルクスと云ふ假神に盲從する一の宗教である。斯の如き感情主義に走るもの、理性主義に陥れるものは、二つとも危險であつて、之は實に社會の平和を害し、人類の幸福をそこなふものである。

四、佛教信仰の特質

然らば如何なるものが、實の宗教であり、眞に誤らざる信仰であらふか、佛教の信仰から云ふと、普遍的のものでなくてはならぬと云ふ。然らば佛教の信仰とは何か。卽ち『篤信三寶』の信仰である。此の篤く三寶を信ずると云ふ事は、佛教共通の精神で、淨土教の如き彌陀一佛を信ずる宗旨にも猶ほ三寶に歸依する事は怠らぬので、聖德太子が國を治め給ふ第一歩として、憲法にも篤信三寶を第一にのせ給ふた。三寶とは佛法僧で、之を解り易く云へば佛とは彌陀、釋迦の如きみ佛、法とは八萬四千の法門眞理、僧とは法を弘むる宗教家或は教團である。今之を形式と內容の上から普遍的なる事を證明して見よう。

形式	統一的	神は一切を統一するものなるを要す。
	普遍的	如何なる場合にもあてはまるもの。例へば幾何學の三角形の內角の和は二直角といふが如く共通の教。
	實行的	如何なる場合も時と處との別なく實行の出來るもの、例へばモルモン宗の多妻主義は各國不共通の如し。
內容	理想主義	神の心の持やうによつて人を苦め殺す猶太教の神の如きあり。神そのものが救濟的でなければならぬ。
	理知主義	佛教の諸行無常の思想は哲學的進歩的で、その間に向上あり。
	道德主義	宗教に教ゆる所のものは道德と矛盾し、無關係であつてはならぬ。

ぞや』と云ふ事についての解釋が必要になつてくる。之を解釋するには大別して左の三要件があると思ふ。
　第一は、信仰は宇宙の本體と人間との結合一致である。その絶對無限なる神と云ふか、佛と名くべきか、それと人間との一致である。換言すれば信仰は有限と無限との一致、相對と絶對との一致をなさしむるものである。
　第二は、宇宙の本體と一致するや否やは解らぬが、少く共吾々は宇宙の本體なるものを認識し得るものとする、即ち第一は大と小との一致であるが、今は吾々の精神狀態が宇宙の本體のある事を認識する（果して此の樣なものがあるか否かは別として）ものである。何となれば人間は感情があるからと云ふ立場であつて、基督教の信仰は主に之である。その意味を明にしてシュライエルマツヘルは『佛教は吾人が神に對する絶對の服從である』と云つてゐる。
　第三は、宗教の神や、宇宙の靈は、人の考へ得るものではない。人の知識は五官の外にはないからそれはあるかないか解らぬとする。そしてそれが又二つに分ける。(1)は宗教と科學とは領分が全く違ふと云ふ宗教科學對立論で、此の說を力說したものはリツケルトである。(2)は宗教科學別なるが故に解らぬものを知る必要はないといふ、不可知論或は懷疑論と名づくべきものである。
　何れにしても信仰と科學との關係は、此の三つで解る。現今の哲學者としては、カントが之を明にした。彼は知識の方面は人が如何に働く共、限りあるもので、之は時間、空間、因果の三より起る。即ち『春が來るから花が咲く』(時間)『土地があるから家が建つ』(空間)『種子をまくから芽が出る』(因果)の三尺度は吾々の經驗の範圍には使へるけれども、他の五官を超越せるものでは解らぬ。靈魂や神は如何に理窟はつけても經驗を超越したもので、解らぬのみならず、證明も出來ぬ、然し實際上の要求としては神や靈魂を認めなくてはならぬと云ふのである。故に理論では神を否定し、實際方面には神が活きてゐる。そこにリツケルトなどの對立論が生れたので、それが滿足されずして、『神は人の裡にある』と云ふオイケン等の內在論が生れて來たのである。卽ち神は人の心の內にある。その中に信仰があり理性がある。卽ち信仰と知識とは『人性』と云ふものゝ中に一致する。されば人性に背く宗教や、之を無視する宗教があつてはいけない。と云ふ。

三、偏れる感情主義と理性主義

の佛、我れ是れ已成の佛』と說かれてゐるものが之である。
又佛教が教ふる無我の精神は、利他共同の精神、己れを完うして他の爲めに盡す佛の心、これ即ち社會進步の基本である。此の進步發展利他共同の信念が、此の佛法僧の觀念によつて生きてくる。されば科學が進めば進む程大乘佛教の信仰が了解され、科學と信仰とは違はず、矛盾せず、益々自己を開拓し、他を益し、社會を發展せしむるものとなる。

六、更に現實的に力あらしむる淨土教

上は分析による信仰であるが、更に淨土教の信仰は、之を綜合して、道德、信仰の發現に、現實的に力あらしむるものである。而もすべての道德を綜合し、すべての生活を『南無阿彌陀佛』の六字に統一するもの、この淨土教の信仰生活である。淨土教の生活は、智愚賢不肖の別なく、太智悲の發現、大慈悲の結晶たる彌陀を信じ、その本願を信じて終始一貫して淸き念佛に活き、彌陀の他力を奉じ、斯くして社會全般の進步のやまざるものを信ずる力となり、自己の向上、他の發展を共に〳〵祈るところ、そこに實に易行易修の、徹底せる正信の生活、正信の宗教があるのである。

（大正一一、九、東光）

感情生活の完成

一、感情と宗教

すべて人が安心を求めるには、知識と、感情と、意志との三方面が具合よく調和してゐる事を要し、その上で始めて永遠に覺めた光明の生活が得らるゝのである。然しその中で感情は最も我々の生活に密接したもので、その影響は甚だ大なるものがある。今先づその感情の方面から、宗教——特に法然上人が體現せられた念佛生活が、どこまで吾々の情緒生活の上に、力あるものとなつてゐるかを考へて見やう。
誰でも實際生活の上に於ては、知識も道德も必要があるが、吾々には本來、花を見ては樂しみ、月に對しては之に愛づ

右の形式內容について更に之を配合して見れば

形式 { 統一的　普遍的　實行的 }

內容 { 理想主義　理知主義　道德主義 }

宗教的（佛）　哲學的（法）　道德的（僧）

こゝに正信が成立する。佛教の篤信三寶はかくして正信を樹立するのである。

元來佛は絕對であり、法は萬物の基であり、僧は和合の姿である。之によつて信仰が正しくなり、之なくしては正信とは云ひ得ぬのである。卽ち正信は人智に全般的なものであつて、信仰解信は兼ね具へたものでなくてはならぬ。

五、一切に卽する佛教の信仰

以上の分別によつて宗教上の正信、邪信の解釋がつくと思ふが、今更に佛教の上について正邪を考へて見たい。曩に述べた宗教は皆純主觀的のものであつて、自分だけ神の恩寵を感ずると云ふだけであるが、大乘佛教は更に利他的觀念を有するもの、卽ち自利と利他とを兼ね具ふるものである。

元來佛法僧はそれであつて、心の中に一致共同の精神、和合の意味がある。道德の實行と云ひ、社會經濟の伸張といひ皆此の中に完うせられてゐるわけである。現今の進步した科學の上から見ても同じく此の三寶の精神がある。卽ち人生の無常と云ふことは進步發展を意味をるので、佛教以外の他の宗教はマホメツト教でも基督教でも皆、いつ迄も神の奴隸であり神の子であるが、佛教の無常觀念の裏には進步して『佛なり』と云ふ自覺に至るもの、梵網經の中に『汝は是れ當成

敬なき絶對服從を意味するのであつた。斯くギリシヤのジユピターの神、ヘブライのエホバの神は、父子の懸隔甚だしく、絶對的神格を現はし、從つてその間に親愛、恩義を缺いて居るが、基督教に到つては多少二者の關係に親しみの度を加へた。然しそれも神の子と呼ばるゝは、單に基督のみで、從つて基督と一般人との間には、大なる懸隔があるのである。然るに佛教の思想は、之と異り、一切の衆生皆是れ我が子なりとし、神の榮は一切衆生も、亦之を有すとする。而も此の心の現れが强ければ强いだけ、佛の救ひの力が強く現はれる事となるのである。

此のやうに佛教では、佛も凡夫も父子の密なる關係にあるのを敎ゆるが、飜つて吾々の日常生活を見るのに、眞に哀しみに堪えぬものがある。法華經の七つの喩の一である、長者とその子供との譬はよく此の有樣を語つてゐる。

その話は或る長者の子が、幼い時父を捨てゝ家を出、長じて困窮した。父は之を尋ねたが、その子は長者を恐れて逃げて仕舞ふ。之を見た長者は何とか之を救ひ出さうと、色々と策をめぐらし、先づ下男として傭ひ入れ、漸次に重く用ひて遂に己が實子であると云ふことを敎へ、すべての財産を與へたと云ふのである。今日我々の生活は實に此の子と同じく、自ら光明を蔽ひ隱して暗黑の生活を續けてゐるのである。然しもし一度夢から醒めて、阿彌陀佛の慈光に接するならば、吾々は彌陀と我々の間に、溫かき父子の情を見出すことが出來る。此の溫かき情緒の上の指導を最もよく現した力あるものは淨土の信仰である。

四、佛と人

先の世に如何なる契のありてかは　彌陀に仕ふる身とはなりける

と云ふ古歌があるが、彌陀に對して大悲の光を感得し、無限の歡喜に打たれる有樣がよく思はれる。淨土教の精神である此の久遠の父子の關係を古來多くの詩人は力を入れて讃仰し、その最も有名なのは彼の父子相迎の歌で、平家物語、源平盛衰記等に出る悲劇にも、彌陀に歸投する美しい情緒が表されてゐる。

斯樣にして彌陀と我とは父と子の關係に在り、而も此の狀態が永久に繼續する、卽ち淨土教の救濟は永久に不變のものである。斯く考へる時は、彌陀と我との間に三緣の狀態を認める事が出來る。三緣とは、親緣、近緣增上緣と云はるゝも

るの情があるやうに、單に知識や道徳の方面許りでは、人の生活はまことに理性ばかりの冷やかなものとなる。誰も彼も暖き心をふれ合ふ情の生活がなくてはならぬ。例へば春の行樂に於ては人は一齊に永劫の春を望むけれ共、春は花も名殘りを地上に止めて永久に去つて行く。こゝに惜春の情を詩に作り、歌に讀みなどするが、然しよく考へて見れば、春は無限であり、吾々の人生は無常である。今年の春は去るとも、又明年は春も來、花もさくのである。從つて人の春を惜む心の中には、自己の有限を傷むの心がある。「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」で、人は已れのはかなきにつけて一層惜春の情を痛切に感ずるのである。而してすべて此の永劫の春を求めてやまぬ所に、宗教に對する情操が湧くのである。

二、常住の樂土

元來佛教では、永劫に美しき世界、樂しき處を淨土と云ふてゐる。それは所謂眞の善と美の最頂點に現はれたもので、之を徹底してたやすく求めらるゝのが淨土の信仰である。

抑々吾々日常生活は、はかない弱い力を持つてゐる。從つて散りゆく花には永遠の花を願ひ、無常の風に遭ふては定住の光を思ふ。こゝに常住の理想界を定めた、淨土の教へが出來たのである。之によつて又吾々の情緒の上には、常に偉大なる人格を求めて止まぬ。卽ち我々の生活には、永遠の愛情と慈悲とを有する大人格がなければならぬ。此の慈悲と尊敬との間に、淨土によつて現られる久遠の父子の關係が成立するのである。

三、諸宗教の神人觀

一般に宗教は、我々の上に絶對者なる神ありと教へ、それは天に在る父なりと呼んでゐる。例へば、西暦紀元前一千五百年より一千御頃に到る間に、印度に榮えたベーダ宗教では、ドヤウス・ピター Dyaus-Piíar（天父）と呼び、此の思想がギリシヤの宗教に影響して、その國の神ジュピター Zupiter を生じ共に天父或は神父の義を示してゐる。此のやうに印度のアールヤ宗教は勿論、ヘブライ、エヂプト、アラビヤ等のセム宗教に於ても神父、天父の觀念があるので、古代宗教一般には、すでに此の觀念があるのである、然しその觀念は、已れを救ふものは卽ち神なりとするも、それは感情の上の愛

る〻。然し我に肉あり、血あり涙ある間は到底不可能のことである。法然上人も愚痴の法然と嘆かれてゐる。此の世で血あり、涙ある間は罪惡は免れ得ない。卽ち我は泥中の蓮のやうであるが、いつかは美しい花と開く時もあらうとの、望みに生くる時、次第に自己の肉體につき纒ふ泥も取り果て〻、彌陀と我と一致する時がくる。その時は卽ち此の世を終つた時、彌陀の來迎に接して極樂の蓮臺に生れた時である。斯くて宗教の芽は萠し來りすべてのもの〻價値も尊さもこ〻に存してくるのである。

六、權利義務と溫情慈悲

現代は、友人親族間に於ても、權利義務の思想、經濟的打算主義の傾向があり、特に歐洲大戰以來その弊は益々蔓つてきた。これある間は世界人類の平和は望み難い。現今喧しい勞働問題も、單に權利義務、經濟的打算主義にのみ走る時、その間は恐ろしい憎惡嫉妬を生じ、怨みの聲となり、遂に此の問題の解決は永久に望み得ぬ事となる。過激思想の根源であるレーニンやトロツキーは權力を濫りに惡用して、無辜の善民を殺戮し、社會を壓迫し、其の間に少しの溫情もない。此のやうにして國家の統治、世界の平和はどこに得られやう。

我國の貧民の家庭を見るのに、その苦しい生活の中にありながら、その庭先に植えた木を見れば如何なる所にも快樂を欲する美しい情緖のある事が思はれる。然し獨逸や英國等の貧民窟では、何等の快樂の種となるものを認めない。彼等の生活は、動物に比するも大差はない。要するに平和問題、國家問題、家庭問題等、いろ〳〵の現代に現れた問題を解決する唯一の鍵は、實に宗教的溫情主義である。

法然上人の說かれた淨土教は、久遠父子の溫情主義で、吾々の現實生活に光を放たしめるのみならず未來の希望を成りた〻しめる所に力がある。故に吾々は常に淨土往生の信仰をして現實界に及ぼし、現實生活の完備に努め、引いては現今將に破綻を生じやうとして居る情緖問題に光を與へ、民本思想に對しても、正義思想に對しても、其の他あらゆる情緖問題に對し、淨土教の信念力によつて意義あらしめたいものである。

ので、彌陀の身口意の三業と我の三業とが合致し、不卽不離の狀態にあると云ふので、換言すれば、我々が彌陀の愛に一身を歸投し專心に念佛する時そは親しく近く、增上の力ならざるはない。卽ち親しき父子の關係が完全に現はされるのである。

觀無量壽經に極樂は「こゝを去ること遠からず」と云はれてあるが、之は理論の上や、形式の上の問題ではなく、現實的な感情の上の問題である。卽ち彌陀と我とが不卽不離の狀態にあつて、まのあたりに彌陀を仰ぎ、溫かき慈父の腕に安んずる、光の生活について云はれたのである。

五、佛の迎へ

眞の信仰の問題を考へてくると、何時からその救ひに與かる事が出來るかと云ふ事が、必然に考へられる事になる。こゝに先づ起つた問題は、人の死ぬ時、卽ち臨終に佛の迎へがあるかどうかと云ふ事である。來迎を要せぬと云ふのでは、眞宗の平生業成說、或は淨土宗の聖冏師の臨終來迎不要說などあるが、又法然上人も一面に於て、十念往生說を唱道されてゐる。此の來迎不必要のあるわけは、情緒の上より之を論ずるが故で、此の點より見るとき、我々は現實界に於て彌陀の光明に浴し、その本願に護らるゝとする所から、平生にも臨終にも、別段來迎の必要はないと云ふ事になる。然し一度吾々の日常の生活を眺むるのに、無常轉變の世に常ならぬ肉體、深重の罪惡を持つて生存して行く。もし我にして慚愧懺悔し、反省する事なくば遂に向上發展の道を阻止し、出離の期を逸するに至るので、こゝに吾々は、現實の上に於て、理想界と一致せんことを願ふ必要を生じてくる。然し此の理想は此の我々の世に於ては到底不可能の事で、此の事が不可能なるだけ、吾々は此の狀態をいつかは見やうとする情が心の內に溢れてくる。丁度繪や音樂が過去に於ける美を忘れざらんとし、之を未來に發展せしめやうとするやうに、之を宗教的に見る時、無限に實現しやうと努力となる。此の無限の實現てふ點に於て初めて臨終の來迎に意義があり、來迎卽ち佛の迎へが現實界最後の刹那に於て必要となるのである。吾々の無限への絕へざる奮鬪努力の後には常に、滾々と湧き出づる泉の如き慰めを欲して止まない。是れは理窟でなく情緒の上の事實である。されば吾々の無限の父は、西方に在つて吾等の奮鬪を見、そして我等を慰安の懷に入れやうとして居ら

る。

第三 上人の教は萬人共通の教、平等救濟の教である。印度婆羅門の教は特殊階級を限りて信奉し救濟されるものとされ、特殊階級に獨占されて居つたものであるが、釋尊は先づ四姓の階級を打破し、精神上おしなべて無我平等の上に立脚せる民本主義の教を高唱され萬人等しく證悟すべき大道を示された。之は佛教の眞髓で、草木が太陽の光を平等に浴びる樣に、人皆自由で平等の恩澤に浴して悟を得るのであつた。然るに平安朝に於ける眞言、天台等の佛教は貴族特權社會の人々の教たるが如き觀をなすに至つた。卽ち塔を建て經を寫し儀式を行ふ等複雜な行儀には自然莫大な費用を要し、上流社會の人を除きて到底、他の人々に對しては許さるべき事柄ではなかつたのである。且つ複雜な哲理や深遠な觀念法や難行苦行の困難は到底、凡人の企及すべき所でない。法然上人は是等特權階級の手より、一般の手に教を移し有智無智、貴賤道俗を問はず、行住坐臥、修しやすき念佛の法門を懇に勸められ、貴族より平民に、學者より凡人に平等救濟の道を教られた。

第四 上人の佛教は直截簡明である。釋尊當時の佛教もまた極めて簡明なるものであつた。その根本要義が四諦八聖道の平明中正の教で、實行を云へば衆善奉行諸惡莫作の常識主義であつたのであるが、滅後諸弟子等の合誦によりて經律論が成立し、佛教は論理や心理の法相を按排した複雜なものになつた。かくて時を經るに隨ひ單に解脫佛教なる者が次第に研究觀法の佛教になつた。法然上人以前の佛教各派に於ても諸々の觀法修行をなし、覺りを得るには苦行難行を積まなければならなかつたのであるが、上人は單に六字の名號南無阿彌陀佛、この直截單純な願行が眞實に徹底されることに於て貪瞋煩惱の自己の胸奥には彌の陀光明が照り渡り。唯賴め救ふといふ簡明な彌陀本願に人生の最高の要求が滿足されるのである。此簡明な點、易行易修の念佛が卽ち上人開宗の本意である。

第五 上人の教は純粹である。一向專念である。佛教は元來純粹な精神であるが、それが平安朝に入るや、人々は競ふて現在の安穩を祈り、權勢を願ひ、それが爲めに祈禱が行はれたのみならず、當時の社會は兵亂相次で起り、社會人事に關する事件が多くなり、人心は益々不安を感ずれば感ずる程祈禱が盛になり、祈禱に伴つて迷信が流行し、遂に天台眞言

法然上人の教義とその十大特色

「たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には、別の子細候らはず」法然上人の教義ほど簡明にして且つ直截なものはない。この簡明直截の御教に彼此、理窟や議論を挿むことは宗祖の本意ではない。將又この簡明の教は唯實修の南無阿彌陀佛あるのみである。其處に何等の教條も論理もないのである。然し上人の教義が一般佛教の上にどんな位置にあるかといふことは一寸解說をする必要もあらう。

×　×　×　×

第一　上人の佛教は大慈悲の佛教である。一體、上人の佛教に對する根本思想は、上人以前の天台、眞言等の教が大智慧を本旨とするに對して大慈悲門の教を立てられたるにある。抑々佛教は一切苦を救ひ、一切樂を與へんとするものであつて、大智のみ專らなるは佛教の精神を失ふものである。然るに上人以前の佛教は智慧の切要を說くも慈悲の方面には頗る徹底を缺く憾があつた。之に反し法然上人は大慈悲中心で、大智慧も修業も理窟も一切之を第二とし、只管彌陀救濟の大慈悲にすがらんとする愛の佛教、慈悲の佛教を强調された。即ち如來他力の大慈悲を本位として衆生自力の大智慧を抛つた。大慈悲本願の教はかくて成立したのである。これは釋尊が主智主義、唯理主義の婆羅門教に對して萬人濟度の佛教を立てられたのと其軌を一にする。

第二　上人の佛教は實踐的であつた。之を印度の古代に見ると、婆羅門の教は徒に唯心論、唯物論等の種々の議論を弄ぶもので、實行的でなかつたが、釋尊の出世して法をとかれるや之を直に實行に移された。阿含の六十二見經など拜讀すると、かく此趣が見へる法然上人以前の大智慧を得んとする佛教に於ても、始めは可成に實行を重じ、又實修の功も顯はれたが、後に至るに從ひ、唯空理空論のみに走り、實行を伴はずやゝもすれば特權階級の觀念遊戯たらんとするの狀態を示して來た。上人は大いに之を排斥し所謂聖道門の槪念や觀念の遊戯をしりぞけ實踐的念佛の一道をたどられたのであ

れたのである。

第九　上人の佛教は人間中心の佛教である。上人以前の佛教は聖者本意の佛教であつた。上根上智の人々、上級上流の人々の佛教であつた。そを有智無智道俗を問はず、萬人の手にひきずり下して、平等の教たらしめられた。淨土宗祖の法然上人は自己を十惡五逆の罪人として、人間中心の宗教の根柢を示された。愚鈍な阿波の介の念佛も、百世の師表たる宗祖の念佛も、微塵も差異がない力强い宣明に、淨土教の本爲凡夫兼爲聖人の趣旨が日星の如く、天下に輝き渡つた。この教義は實に上人の全生涯を通じて、一貫したる大思想、大主張であつたのである。

第十　上人の佛教は日常佛教、生活中心佛教である。上人以前の天台、眞言等の教は別修佛教であつて、場所、時機を要したのであるが、念佛の教は時機を要したのであるが、念佛の教は時機と所とを嫌はず、行住坐臥、生活と共に存在するものであつて、時機場所を定めて嚴修するものでない。日常の生活に於ける不斷に修する念佛が生活と一致するものである。この點に於て念佛は生活である。精神觀念をまとめて修するのでなく、散心の念佛である。煩惱の起らば起る儘に人間の持つて生れて來た性格そのまゝに、光明攝取の生活をして行くのである。

×　×　×　×

以上十個條を擧げて略ぼ法然上人の教義の特色を述べたのであるが、上人の人格、思想、淨土教の根本思想はこゝらから伺ふて見たら、先づ正鵠を逸することはあるまい。

（大正十三、三、東光）

宗教の飢饉と其對策

一

歐米の社會は何と云つても宗教には熱心である。否、曾ては熱心であつた。寺院教會のみならず社會萬般の設備にも宗教的顧慮を忘るゝ事はなかつた。官衙學校等の建築の樣式から街頭、公園等の設計の上にも必ず神又は神使の像又はシン

の佛教は祈禱佛教、迷信佛教と化した。法然上人はこれ等の祈禱佛教、迷信佛教より、純正なる佛教に復歸せしめんとし、專念一行の教を布演された。人間を名利等のはてしなき欲望にかつてゐる不純な迷信佛教祈禱佛教より、去つて萬人に專念一行の教法によりて、眞に解脱を求めんことを勸められたのである。

第六　上人の佛教は決定思念である。蓋し上人當時の信仰は頗る混雜したもので、病氣の時には藥師如來、財寶に窮すれば虛空藏菩薩を信ずるなど、その時その場合に應じて諸佛を念じ信奉したもので、信仰は實に無雜混亂を極めたもので、確固たる安心立命は到底得られなかつた。かく上人以前の佛教各宗は雜行雜修で、決定專念の佛教の眞生命を失ふて居つたのである。上人に至つて信仰の純一を第一の要件とし、一向專念の信仰を强調し彌陀の大慈悲誓願におすがり申し、他力本願の渴仰を說かれたのである。

第七　上人の佛教は無形式――精神的である。法然上人以前の佛教は形式が發達して、僧階僧位の階級佛教となり、殿堂伽藍の形式佛教となつて、其生命は全く消磨して了た。弘法大師の高野山、傳教大師の叡山、南都北嶺の諸大寺院は壯麗目を驚し、勢威は公侯を凌ぐ有樣であつたが、それだけ弊風も非常であつた、然るに法然上人は一定の住處もなく金剛草履、鼠の袈裟で全然階級形式の舊宗教を一蹴した。一向專念の絕待信仰は眞實の生活である。念佛の聲する處はこれ皆吾が遺蹟なり、何ぞ廟堂を一所にとどむることあらんやと云はれた獅子吼は、從來の伽藍佛教、山上佛教に對して明に巷の佛教、實生活の佛教を說かれたのである。佛教の精神は富貴と貧賤とを問はない、階級もなく又形式もない。眞實に赤裸々の精神に重を置くものでなければならぬ。佛教の生命はそこに流れてゐるのであるが、實に上人は徹頭徹尾、形式佛教を排して、精神の佛教卽ち念佛の生活に生きられたのである。

第八　上人の佛教は沒我渴仰の教である。上人以前の佛教は自尊の佛教であつた。其弊として自然、個人觀、自己觀に耽つて人生の自由尊嚴を云ふ自力傲慢の風を生じて、自己執着の弊に陷つて來た。修道の第一義たる慚愧と反省はかくて頗る缺けて來た。然るに上人は信に自己を罪惡生死の凡夫なりと云はれて居つて謙虛、沒我の態度で素直に、彌陀の絕待他力を信奉して、無條件の歸依に生きられた。茲で精神も肉體も共に絕待の攝取に復活して眞實無我の佛教の本旨が顯は

研究家の一人である。然るに歐米にありては基督教殊に天主公教などに於ては意外に教權主義であつて、現代思潮や科學等に對しては依然として鎖國的の態度を示し、曾てはオイツケンの著書など教禁書目の內に入れられた位であつて、ダーヴヰンやヘツケルなどは勿論大禁物である。新教にしても仲々困難な點が少くないのである。獨乙學界の精鋭の思索と博綜の研究とを以てしても、尙ほ徹底した明確なる宗教々育の起り得ないことは、實に此如き傳統的の事情に煩はされた爲であると思ふ。

四

宗教の飢饉は如何にして救はるゝか、歐米の現狀が上述の如く宗教再建の時朝に到達してゐながらも其の救濟の活路は種々の障礙的事情の爲に容易に開拓されさうにもない。教界の學者や熱心家を以つてしても今日依然として行詰りの狀態である。

宗教の飢饉と云ふ點に於ては、我國に於ても大體同樣である。德川時代、及其晚年における佛教敬遠の思想、明治初年の廢佛毀釋論等の實行を經て、西洋心醉歐化萬能の風潮は一時基督教への傾倒とさへ思はる位に立ち到つたが、其後日淸日露の兩役を經て國粹思想の復活を見、世界大戰の影響する所は東洋思想の回想を刺戟するに至つたが、其等の經驗はやはり「宗教の飢饉」とでも云ふべき一種の寂寥感が國民の頭を支配するに至つた。大正の終末から昭和の初頭へかけての我國の精心界にはやはり「宗教の飢饉」を招來した。現下我國萬般の文化は著しき進展を見つゝあるも、其中から何となく其步みに統一がなく其言動に中心がない。政治、經濟、實業、外交、道德、藝術、學問、教育等何れの方面を見ても醜態が亂調か、盲動か煩悶かを極めてゐる。倫理化とか淨化とかの聲を聞く事は決して一二の方面のみではない。宗教界すら時に社會の指彈を受くるが如き情況である。かくして其等の凡ては一言にして言へば、無信仰、無自覺の生活に過ぎないのである。「宗教の飢饉」であるのである。我國の現狀を救ふものは「宗教の曙」の勸請の外にはないと思ふ。宗教とは何か、と言ふことは今は略するが、要するに宗教的無自覺、宗教の飢饉こそ我國現下の思想及び行動の混亂盲動を來たさしめてゐる原因であるのである。此點に於ては歐米諸國の現狀と大同小異又は同巧異曲であると云ふことが出來やうと思

ボルを見出すことが出來る。詩にも歌にも小說にも脚本にも宗教なしでは濟まされなかつた。或る點に於ては日本人よりも遙に宗教的人民であると云へる。其が十七、八世紀を經て十九世紀に入り科學思想の盛になるにつれて宗教の影が薄くなつた。そこで青年は科學に走つた。科學で滿足の出來なかつた者は藝術に走つた。然るに科學の權威は十九世紀末に至つて半減した。

青年の希望は科學丈けでは充たされなかつた。藝術も一時的慰藉としての外は効果がなかつた、朝に科學に走り夕に藝術に走つたが明日は又失望の歎息を洩らさゞるを得なかつた。玆に於て遂に再び宗教の門を叩く者が日一日と增して來た。宗教々育の曙が再び輝出した。

二

併し宗教及び宗教々育の再現は必ずしも昔のまゝでは歡迎せられなかつた。一轉機を劃すべき時機に到來した。時代の進步と青年の要求は到底在來の宗教々育の理論其儘では滿足せしめざる狀勢となつてゐた。而かも同時に一面には進化論の爲に舊宗教を捨て去り、時代思潮の前にクリストを葬り了つた一派にも宗教に對する飢の訴へが叫ばれて來た。此の要求は現代人の人格完成の上に必然的に現はれて來た。

所謂「宗教の飢饉」である。ヘツケルに趨つた彼の青年等も細胞の肉塊としての人類以上に、血と淚のある人間の惱みを感ずる秋も來やう。マルクスを迷信して之を偶像化した學徒の中にも相鬪ひ、相憎む猛獸の如き生活以上に、眞に人間としての愛に目醒むる春も來やう。かくて「宗教の飢饉」は今日歐米の一部に自覺的にも絕叫せらるゝに至つた。かやうに玆にも宗教々育の一轉機を孕むでゐるのである。

三

歐米における宗教々育は要するに基督敎々育である。今日獨乙に於て一面には舊式宗敎々育の行詰りを打開して、新宗教々育主義の下に、宗教々育の權威を明にせんとし、他面には所謂「宗教の飢饉」に對して、如何にせば之に應じてバイブルの意味を與へることが出來るかに非常に苦心して居る。フランクフルトのドクター・ワグナーの如きは其の有力なる

した方から色色な煩悶を打明けられ、その解決をせまられたことも幾回かはありました。隨つて多少はさうした事の經驗がないでもないのです。

今まで全然知らなかつた男女、或は多少とも知り合つて居た男女が結婚によつて、一緒になつてお互の如實の姿――長所や缺點――を充分に知るようになります。さうしてお互の交渉が深くなり、追々に生活の內容が複雜になつて來ると、其處に當然色々な問題が起つて來ます。

二人が一緒になるまでには、男は男として、女は女として、色々な空想や理想を持ち、結婚したら、あゝして見よう、こうもして見ようと空想の翼を伸べます。それは眞に樂しみなものでせう。そしてお互に理想や空想に對して、豫期、期待を持ちます。この豫期が相互に相容れられた場合には、二つのものが一つになり、完全な姿が現ぜられるのでありますが、若し一朝豫期がはづれて、ちぐはぐになつた場合は、それこそ慘めなものです。眞實の地についた生活に入る頃には男は、何故あんな女と結婚したのだらうか、女は何故こんな男と一緒になつたのだらうと、そろ〳〵後悔の念に襲はれて來ます。こゝから結婚の悲劇が生れて來るのです。

夫は、妻に向つて「お前はもつと理解してくれてい〻筈だ、もつと自由に考へてくれてもい〻筈だ。」と言ひます。すると妻は妻で「私がこれ程つとめても、あなたは少しも買つては下さらない。着物や指環を買つて下さるだけで女は滿足しないのです。物質よりも愛です。あなたは物質的に私が不足しなければそれでい〻とお考へでせうが、私はそれ以上に心を、あなたの愛を要求します。」

どうも私はこんな所の描寫は下手ですが、かういつた種類の心の食ひ違ひが、溝が生じて來ます。そして惡いことに、この食ひ違ひも溝も、益々大きくなる性質をもつて居ります。世の中には、この溝を抱きながら、惱んでる人が幾人あることでせう。こんなになつたのなら別れてしまへばい〻にと思ひますが、色々な義理合から、それもならず、砂を嚙むような每日の生活のなかに、喘いで居る人が多いのです。

結婚は人間の最大幸福ですが、こうなつては最大不幸と言はねばなりますまい。

精神主義ハ超倫理

ふ。

五

併し我國にありては宗教飢饉の救濟策の上に於ては歐米諸國と異りて餘程有望であるのである。大體、我國に於ては宗教に對する態度が極めて自由である。從つて宗教々育も我國に於ては歐米諸國に於て之が單に基督教々育、バイブル道德を限定的に意味するのとは全然其趣を異にし、普遍的の宗教の上に倫理と宗教との關係を明確にし得る幸運なる地位にあるのである。卽ち我國に於てのみ、最も自由に且つ包括的に一切の傳統と弊害とを離れて眞なる宗教々育の基礎を築き得ると思ふ。

實に我國は今や制度の上にも實狀の上にも、教育の一轉機に際會した。而して教育上の中心問題とすべきは、實に宗教對倫理の問題でなくてはならぬ。而かもこの問題の解決は、我國の教育界に一轉を機劃すると共に、歐米における現代教育界の一大要望に應ずる所以であらうと思ふ。要するに「宗教の饉飢」は今日東西共に同樣に襲來してゐるのであるが、唯だ其の救濟の上に於て西洋には困難なる事情が多くて其の可能性が少いのであるが、我國に於ては努力さへすれば左程困難せずとも其の救濟に應じ得る幸福にあるのである。而して啻に獨り我國の宗教飢饉を救濟するのみならず、必ず隣ある結果を持ち來し得ると思ふ。最後に希望することは此の使命を全うするが爲に、我國の教育家、宗教家が眞面目に此の問題に着意し、熱心に研究し、進んでは自ら之が實行に努めて止まざらんことである。而して尙ほそれは今回創刊さるゝ雜誌「教育と宗教」の當面の一大使命であると思ふのである、

（昭和四、五、教育と宗教）

婦人に寄する言葉

結婚

無妻の私が結婚について語ることは、いささか矛盾したことで、眞相に觸れ得るかどうかは勿論疑問でせう。然し結婚

國家社會の發達も、人類全體の幸福も、みな賢明な良き女性の力によつてのみもたらされるのです。これは否みがたい事實でせう。日本が今日の國家を持つて、世界的に進出したことは、實に過去における良妻賢母の賜といつていゝのです。

形ばかり見て內容を見ぬと、とんだ間違が出來るのです。良妻賢母は丸髷や小笠原流ではありません。精神の問題です。正しい心の問題です。婦人の人格の問題です。氣運がずんずん伸びて行く獨逸の婦人の現在を見て今の馬鹿〳〵しい生かぢりの所謂新しい女は、多少とも反省する所を見出しませう。

社會人としての婦人

良妻賢母を禮讃しましたが、良妻になるには、賢母となるには、先づ臺所に働き、着物を縫ひ、子供を育てるだけが女の務と考へることは禁物です。

こゝに私達の考へ方、理解の仕方があるのです。臺所にも頭を働かせば、いくらでも餘地があり、活社會との接觸がありきす。その他裁縫に育兒に、社會と關係のないものは一つもありません。この地上に共同生活をしてゐる以上、社會の埒外に飛び出る譯にはいかないのですから。

女は妻であり母であると同時に社會人であるとの自覺が必要です。政治のことはこれは男のする仕事だ、經濟つてものは與へられた金で世帶を切り廻せばいゝのだ、女は手を出さないでいゝものだ、思想傾向なんてことも婦人は知らなくてもいゝ、兎に角婦人は家庭にとぢこもつて、家政に育兒にいそしんで居ればいいのだ、といふ考へ方は過去のことです。この考へ方をする者は、餘りに時代意識のないものと云はねばなりますまい。これでは良妻賢母型が罵倒されても仕方がないでせう。

現代に生きる婦人は、政治のことにしろ、經濟のことにしろ、思想傾向にしろ、專門的な深い知識はなくとも、常識的なことは知つて居て貰ひたいものです。

「お前にこんなこと話したつて分らない」と夫から言はれることは、婦人に取つての侮辱ではないでせうか。

良く聞くことですが、「日本の婦人と交際するよりも、西洋の婦人と交際して居る方が愉快だ。あちらの婦人は常識が發

こういふ問題は、輕々に論ずべき性質のものではありません。が、私はその解決の一つの方法として、信仰によつて解けあつて頂きたいと思ふのです。魂と魂との無條件の結合に生き更つて頂きたいと思ふのです。

「人誰か過ちなからん」お互の缺點は、互に反省し注意して治すことに努力すると同時に、その基礎とし、信仰に目覺めて頂きたいといふのです。人間は本能や欲望や性癖から來る、種々の缺點の多いものです。その缺點を一つ一つ除いて向上する所に人間の價値があるのです。缺點のないものは人間以下の木石か、若しくは人間以上の神佛かであります。人はあくまでも缺點の反省に力めねばなりません。そしてその缺點を知るには、信仰の鏡が一番よいと思ひます。髪容のために鏡が缺くべからざるもの丶ように、心の鏡は寸時も缺いではならないのです。

結婚は正しい意味からいつて最大の幸福であります。而してこの最大幸福は信仰の基礎の上に、信仰に生きる上に、力強く、且美しく輝いて來るものです。

良妻賢母

良妻賢母なんて下らない、すべからく現代の目醒めた女性は、この執はれた考へ、封建時代の殼を打破すべきであるといふ人が隨分あります。

併し何故良妻賢母がいけないのでせうか、勿論時代の進歩で、其形式は變つて來ます。良妻は丸まげに限るとか、賢母は洋裝をしてはいけないとかいふのでない、歸する所は內容の問題です。苟くも女である以上、妻となつた以上、母となつた以上、善良で賢明であつてはいけないといふ理窟は何處にもないにきまつて居ます。若し惡妻愚母だつたら、家庭生活は果して愉快でせうか。

賢い子供を望むことが正當であり、善良な市民を要求する現代に、其母や妻が低能では何とも仕方がないではありませんか。私は何等良妻賢母がいけないといふ理由を認めないのです。

女性の覺醒が叫ばれてをります。又女性の經濟獨立もい丶でせう。婦選運動もい丶でせう。だがその前に、是非目醒めて貰ひたいのは、良妻賢母の思想です。總ての問題の解決は皆此處から來るのです。

といつてゐる程です。友愛結婚を知らないからとて時代遲れでもありますまい。否、過渡時代に於けるかゝる不自然な現象に、嚴肅な批判力と、指導精神のあるのが、眞に時代の先驅をなす人であります。

地獄刀葉林

現世で思ひを遂げなかつた男なり女なりは、あの世で、どんな目に會ふか。

源信僧都の「往生要集」は巧みに、その場面を描出してをります。

思ふ女を追つて一人の男が走つて來ます。女は捕まりさうになつたので、そばの樹にのぼり始めました。男は樹の下で、

「何故、逃げるのです。私も登つて行きます」

といつて、樹にのぼつて行きます。と今まで青かつた葉が、いつの間にか刀の葉になつて下に向つてゐるのです。男はその刀に肉を刺されながら、血みどろになつてのぼつて行きます。そしてやつとのことで、女の足に手が屆きさうになつた刹那、女は大地に飛び下りてしまひました。男は涙を流し嘆いていひます。

「何故あなたは、そんなに無情なのです。私がいやなのですか」

併し女は一言も答へず、下から手招きするのみです。愛慾の炎に燃えた男は、また樹を下つて行きます。すると今まで下を向いてゐた刀の葉が、いつせいに上に向いて、下りて來る男を刺しました。男は上る時と同じ苦痛をなめなければなりません。皮は破れ、肉は裂け、やつと下にをりたかと思ふと、女は又外の樹に行つてのぼつてしまひます。こうして結局女に近づく事が出來ないのです。

以上の話は一體何を物語るのでせう。說明するまでもない、愛慾鬪爭のはてしない永續を偶意したものです。これ以上の說明はしないで、後は皆樣の判斷におまかせした方が、味があるでせう。

不況時代

政治問題や社會問題に觸れることは避けますが、何といふ不況時代でせう。世界的な不況だといひます。馘首沙汰、缺食兒童、食へないための盜み、貰ひ子殺し、每日の新聞はこれ等のことを報道してをります。每年「今年が不景氣のどん

達してゐるから。」これは事實に近いようです。

併し、日本の家庭組織では、主婦の立場からは多少無理な注文かも知れませんが、以上の様な注意と自覺は持つて貰ひたいものです。

玉耶經の中に主婦の型として母婦、夫婦、臣婦、妹婦、婢婦の五つが擧げてあります。第一と第二は夫をも子の如く指導し、夫と同樣に何事にも協力し助言する型の婦人を云ふので、これが最もよいとしてあります。臣の如く妹の如く或は婢の如く柔順に夫に事へても、婦人として完全なものではありません。

維新の前後長崎や横濱で、渡りものゝ外人達はよく無智な日本婦人を玩弄して、一時約束の結婚をしたものであります。例の歌劇の「マダム、バツタフライ」は其一例の悲劇を示したものであります。二年ばかり前アメリカで行はれた「友愛結婚」も之と五十歩百歩のもので、何ともいやな言葉です。

友愛結婚

これは極端な性の解放で、一部のハイカラな人、社會主義者には歡迎されるかも知れませんが、いやになつたら、別れるといふのですから、「浮草や昨日は東今日は西」その結果は何度でも、好きな相手と一緒になるといふのです。從つて人間の純な氣持といふものは、なくなつてしまひます。そして社會の秩序は亂れてしまひ、男女關係はます〳〵亂脈になり、道德なんてものは全く地におちてしまひます。この結果は何が殘るでせうか。殘るものは世相を暗くする、亂倫ばかりです。

試驗結婚とか、友愛結婚とかいふものは、時候はづれの松茸みたいなもので、珍らしくはありますが、本物ではありません。こんなことを直譯的に鵜呑みにして、實行に移すことの危險なことは、いふまでもないことです。

この問題の起つたアメリカの人でさへ、

「一部の人が騷いでゐるだけで、全體のアメリカ人は問題にはしてゐません。アメリカでも、普通の穩健な結婚を望んでゐます」

つて下さる、吾々は救はれる方である。斯の如くして本尊と吾々と天地雲泥と申しますが、本尊の方は常樂永遠の天上に光明を放ち、吾々の方は醜い地上に喘ぎつゝ歩いて居るので、玲瓏圓滿な天上の御本尊と、地上の見苦しい吾々とは其の間は極端と極端との相違があります。從つて常識上から見ますと、吾々が本尊の中にある事は出來ない譯であるし、又反對に本尊か吾々の中にあるといふ事も無論不可能なのが當然である。この樣に距つて居るが本尊の中にあるといふことを御話しするのであるから、頗ぶる暴論の樣にも聞えるが、然し此處に佛教の眞理もあり、一切に超越して有難い所であるのであります。

一體佛教と他の宗教との違つて居る點は、卽ち其處にあるので、佛教以外の宗教では人を救ふ神樣は遠く天上にあり、其威力權力は絕對である。神樣が瞋れば罰があるし、喜ぶときには賞がある。而も其の神樣と人間との間には大きな溝がありまして、人間は假令神樣の恩寵を蒙つて天國に生れても神樣の從僕たることは永遠であり、何時迄經つても神樣には頭が擧がらない。つまり神樣は永遠の君主であつて、吾々は永遠の奴隷である。神の國に生れ、天國に樂を受けたにした所で、神は依然として高いもので、吾々は依然として低い者である。之か宗教學上で申すと神人隔絕教といふのであります。

然るに佛教の方では全く之と違つて、吾々と佛とは今は勿論身分が違つて居ります。佛の方は四智、三身、十力、四無畏、三十二相、八十種好を具足して眞善美聖の絕對である。然るに吾々は現今に於ては、或は煩惱があり迷があり、苦みがある。卽ち惑・業・苦の淺間しい狀態にある。乍去、吾々の有つて居る心靈卽ち佛性といふものは、之は彌陀とも觀音とも釋迦佛とも同一であつて、吾々を或る時或る時或る場合、修業さへ積んで行けば同格に出世が出來る。此の人間が段々修業を積んで行くと、最後には觀音と少しも變らぬ樣に圓滿な聖者になれる。觀音許りではない、十方三世の諸佛も吾々も違はない。これは丁度子供と親の關係と同じであつて兩者の間には立派な溫かい血派が通つて居られる總ての功德、總ての力、總ての智慧を吾々も潛在的には有つて居る。たゞ觀音は之が立派に顯れたお方であるに過ぎない。然るに佛教以外の宗教は奴隷と主人との關係であつて、奴隷は如何に賢明であり手腕があつても羅馬時代を初めとして到底主人と同格

底でせう」といひ〳〵して來ましたが、年々不景氣は深刻さを極めて來てをります。この調子でいつたら、來年はもつとひどい不景氣が來るかも分りません。この不況時代にあつて、婦人は覺悟しなくてはなりません。或點から云ふと不景氣を緩和するものは婦人であるといふてもよいのです。

物質的に節約生活に全力を注ぐことは勿論でせう。病氣をしない樣に家庭衞生に注意することも亦必要でせう。併しもつと根本のことを忘れてはなりません。それは精神的に心の落着きを失はないことです。常に勇氣と愛とを持つて居ることです。商賣しても儲からない、あゝ嫌だ、と思ふ、そこに隙が出來て來ます。心の動搖が起つて來ます。夫婦は相共に信じ合ひ助け合ふことです。

失職して日夜就職に心を碎いてゐる人もあるでせう。又仕事にあぶれて情ない思ひをしてゐる人もあることでせう。そんな時妻が夫を不滿に思つたり、夫の無力を面罵したりすることは一番いけないことです。そんな時夫はどんな氣がするでせう。それは夫を苦しめると同時に自分を苦しめることになるのです。例へ失職しなくとも、不況時代に備へる準備と覺悟は誰にも必要です。

德川家康の常語といふ「上を見るな下を見よ」といふのは多少とも人間の向上心をおさへる嫌はありますが、この言葉の通りです。上を見ても際限がない、と同時に下を見ても實際に際限のないものです。私達は下を見て、まつしぐらに、この不況時代を切り拔けたいものです。

（昭和五、八、婦女界）

本尊の中にある吾等

一體、本尊とは吾々が拜む對象であつて、其の御德は如何にも圓滿且つ絕對であります。總ての智慧慈悲を有つて居られますが、吾々はそれに對して惱み苦しんで居る罪惡無知の塊りで不完全極まつたものであります。本尊の方は吾々を救

れは何であるかと言ふと、觀世音といふお名前がそれであります其の名前の中に吾々が過去久遠劫以來ちやんと這入つて居る。此の意義の極め深ていお名前に就ては旣に天台大師が觀音主義といふ書物を書かれて、其の中に觀音と言ふお名前に就き深甚微妙の御解釋が縱橫無盡に書かれてある。が手近い所では觀音と言ふお名前は先づ此の觀音經にある通り、其の御德の方面から說かれてある。觀の方はお經の中に眞觀、淸淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀と書いてありますが、此の觀には現代の總ての科學も經濟も哲學も一切のものが統一されて這入つて居る。また音の方と申すと、妙音、觀世音、梵音、海潮音及勝彼世間音と嚴かに書かれてある。之は社會を救ひ、天下を救ふ一切のものをお救ひになる廣大無邊の御活動を讃美して其高く大に淸からな最高、最善、最美の大作用を明かにしたものであります。

さて已上は觀音樣御自身の德を讃美する爲に其のお名前を解釋したのであるが、更に觀音樣が吾々にお働きかけになつたこととしてお名前を解釋して見ませう。觀は十方三世に徹底する大きな智慧を以て千里の先でも萬里の奥でも海底でも天上でも御覽になる、之が觀であります。三世を盡して居る御智慧、御慈悲の力です。次には音ですが、先に申した所は觀音樣自身の有つて居られる音でありますが、此處では此の音は吾々の音聲である。言ふ迄もなく吾々の苦しみの聲、願ひの聲、煩惱苦痛を訴へる聲である。吾々は生活に疲れ或は病氣に取り付かれ、種々な災難があつて或は火に燒かれ、水に溺れ、四苦八苦に苦んで居る。叫び悶え、なげきやうめき、之れがすなはち此所の音であります。大體音聲には結構な音ある、眞理の梵音や最高無上の法音もあるが、亦聞くに忍びぬ極苦の音聲が津波の樣に渦卷いて居る。一方には諸佛の說法が常恒宇宙の聲として流れて居るが、亦地獄の聲もある。八熱無間の聲もある。八熱無間の釜に油の煮へたつ聲もある。飢渴に悶へ苦しんで居る餓鬼の聲も、食ひ合ひ嚙み合つて居る畜生の呻きもある。申す迄もなく不平、煩悶、呪ひの聲も盛んに聞える。不景氣に苦しむ生活苦の聲も喧々囂々として聞える。其の叫びや呻きが卽ち音であります。觀音經に「觀二其音聲一」といふのは此の音聲をお聞きになることを示してあるのだ。つまりそのお名前に吾々の苦しみを入れて御出になるのである。吾々の苦みを荷つて御名にして居られるのである。

繰返して言へば、觀音の音の一時には自分が這入つて居る。否、自分の代表である。自分そのものである。吾々は苦み

にはなれない。身分が永遠に違ふ。佛教以外の宗教は丁度この不慈な奴隷と慘酷な主人との關係である。佛教は之に反して子供と親との關係であるから其の關係は全然別のものであります。其の知識の上から見ても、經驗の上から申しても親子は比べ物にならぬけれども、子供は終ひには親になる、佛教は其の關係で飽く迄親子の間柄であります。之を宗教學上神人同教と申します。して見ると吾々が本尊の中に居ると申して宜いのである。子が親の中にあるといふても少しも變なことはないではありませんか、又逆に本尊は吾々の中に居ると云つても勿論差支のないことでありませう。

之だけ申しますと、もう問題は既に終つたのでありますが、もう少し詳しく申しますと、宗教を信仰するに就ては一體斯ういふ感じが何よりも先づ必要である。それは吾々の信じ奉る所の阿彌陀樣でも觀音樣でも、其の本尊と吾々が常に一緒に居るといふ強い感じがないと實際の信仰にならない。といふことであります。觀音樣を拜む其の時分に觀音樣が吾々の心の中に這入つて居ると考へないといかぬ。觀音樣の淸く巨大な御心の中に吾々が這入つて居る。同時に其の淸淨の御心、莊嚴なお姿が吾々の肉體の中に這込つて居ると感じなければ信仰は徹底しない。さういふ點は他の宗教でも申すことゝ存じます。但し前にも申す通り他の宗教では理論の上では此の點隨分困難なので、丁度是も猛烈な然も氣まぐれの主人と最も無智な奴隷との關係と同じやうな關係を有して居りますから、神は愛するより畏れの方が主になる。然し實際の信仰狀態からいふと、との宗教でも自己の信じて居る本尊樣、それは何でも宜しい、之が自分と一緒にあると考へねばならぬ佛教では、此の點に於て立派な理論もあるのですから、此の信仰の强さが著しく目につく。古い歌に

唱ふれば吾も佛もなかりけり　南無阿彌陀佛々々々々々

とある通り、阿彌陀樣を信仰する時分には自分が彌陀か彌陀が自分か分らなくなつてしまう。其處迄行かなければ信仰の强みはない。其の趣を最も明かに且つ最も徹底して說いて居るのが觀音經である。

觀世音には色々の御德がありますが、就中最も有難く感ずる所は吾々凡夫が始終觀音樣の中に這入つて居る。觀音信者は、觀音樣に對して萬事御任せしてお出でゝすうが、其のお任せしない前に已に觀音樣は吾々と一緒であつた。お願ひをする前にちやんと吾々の爲に影の形に添ふ樣に一緒に居て下すつたといふ事が考へられると一層信仰が强くなります。そ

廻して叫喚して居る音も聞えて居る。食物を得やうと思つても得られない場合、どん／＼自分の子供を食ふといふ餓鬼世界の咀ひの聲や、或は畜生殘害の世界に弱き者は强き者に食はれる、その悲慘な泣き聲、殘忍な咆へる聲が、觀音樣のお名前としてチヤンと聞えて居ることをお姿として之だ圓光に顯してあるのだ。然し地獄、餓鬼、畜生も實は現今の罪惡の多い世界に其の一端が現實に存するので、新聞の三面記事には子が親を殺すのもある。親が子を殺すのもある。これは地獄ではないか。生活上の苦みがある。經濟上の苦みがある。失業の苦みがある。之は餓鬼の世界ではありませんか。人が働いて食へない、勉强してもパンにありつけない、政治黨派も醜劣至極な喧嘩で持ち切つて居る、衆議院に於ても醜い暴力の喧嘩があり、毆り合ひがある。之は獸類の世界である。常に怨恨の炎を燃やして勞働階級は資本家と抗爭して居る。卽ち修羅爭鬪の世界でせう。さう言ふ風に苦みは單に餓鬼や畜生や地獄の世界だけでなく到る處に悲慘な呻きの聲が渦まいて居るがそれが觀音樣には明かに聞える。と共に靈界の電送寫眞とし直ぐにお光の中に現はれ出して吳れるのです。

觀音樣には斯の如く吾々が呻いで居るのも苦んで居るのも始終聞えて居るのですから、之がために吾々の心からの願ひ、心からの叫びは勿論直ぐ御聞取になる。吾々が「念二彼觀音力一」で一心に本尊の稱名をする心の叫びを始終聞いて居られる。かくして詰り吾々は本尊の中にあります。別に這入らうと思はねども本來這入つて居る。中に入れて吳れと申さんでも本尊の心の中に安全に且つ確實に這入つて居るのです。

觀音樣のお師匠樣である阿彌陀樣もそれと同じです。阿彌陀と言ふお名前は一體どんなことかといふに、無量と申すことです。何が無量であるかといふと、光と壽が無限無量なのです。卽ち阿彌陀樣は無量光、無量壽の佛であるのです。阿彌陀樣には今一つ大事なことがある。それは眷屬の無量です。阿彌陀樣の中に無量無邊の眷屬がある。卽ち吾々が這入つて居る。こゝに有難い所が魂に徹して伺はれるのです。其の極樂世界は詰り吾々の爲だ、吾々が信仰して行く所の世界である。吾々の存在がなければ阿彌陀樣は別に極樂淨土などを構へる必要はない。お名前の中に無量の光、無邊の壽の絕對の御德があつて、空間も無量、時間も無邊の、宗教上から見て最高の御名前であるが、この空間と時間に吾々眷屬が充ち盈ちて無量である所に一層有難い所があるのです。阿彌陀樣の眷屬といふと、吾々も南無阿彌陀佛の念佛と共にまた這入

がある。罪がある、其爲にどうも煩惱苦痛は免れることは出來ない。迚も此の惱みは救はれ切れない。こういふ場合吾々凡夫には如何ともすることが出來ない。此の苦みを大慈悲で聞いておられる。それが觀であります。觀音樣の絶對無限のお心の中には何時でも吾々の苦みが反映して居る。それがお經に詳しく書いてあります。或は火に入つて燒かれたり、或は舟が沈んで惱んだり、或は災難を受けて殺されかゝつたり、或は無實の罪を受けて牢に入れられたり、乃至は財産や家庭のことで煩惱があつたりして苦む。其の不快な悲慘な有樣をどうかしたいといふので、恰も赤ん坊が親に向つて乳を求めるやうに、純眞な心で南無觀世音菩薩と呼ぶのである。お經に「一心稱名」と書いてあるのはこゝである。

人間として現世にあるものは、金があれば有るで惱み、吾々のやうな貧乏で實に苦しい。然も之を訴うべき所がない。天に訴へても、天は茫々たるもので、幾ら訴へても其の聲は聞かない。地に訴へても、地は默々として何事も答へない。かゝる場合に絶對の都に在る觀音樣丈けがそれを如實に聞いて下さる。觀音樣は其のお名が明かに示して居るやうに吾々の聲を待ち構へて居られる、始終吾々の聲を聞いて居られるのである、大體觀音樣は種々に體をお示しになる。或る時は魔物の形、或時はお坊さんの形、或る時は王樣の權威ある相になり、居士と申して身分ある學者の姿を現じ、長者の樣な形をも御示しになつたり、美人になつたり三十三もお姿がある。こゝに一つの注意せねばならぬことは此の觀世音の圓光、お體の周圍に輝く光がある。御舟後光があらが、其の中に五道の衆生が現はれて居る。普通の佛樣の御像を拜見しますと、先づ善光寺の如來樣の舟後光には、佛樣や天人などが現はれてゐますが、觀世音の圓光には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の樣な種々な世界がその圓光の中に歴々として映じ出されて居ります。尊い菩薩の圓滿のお光の中に地獄の樣な淺ましい刀林劍山、牛頭馬頭の鬼の有樣が現れて居つたり、餓鬼のやうな悲慘な有樣が映じて居る。生殖と生活の外には全然道德も倫理もない爭鬪ばかりして居る畜生道がその儘現はれて居る。修羅と申して自分の存在のため、名譽のため、財産のために爭鬪本位で血みどろの戰ひばかりして居る所の恐ろしい社會がある。相互に常に切り合ひ殺し合つて居る。そんな風に慘憺たる惡社會惡世界が醜い姿そのまゝに皆歴々と圓光中に反映して居る。實に目障りのことであるがこれは一體どういふことかといふと、それは前申す通り觀音樣のお心の中には、地獄の呻き或は釜の煮える音、鬼が鐵棒を振り

に、自ると、尚一層信仰が強まるに至る、朝に晩に喜びの時も、悲しみの時も又はお堂に參詣して手を鳴らして觀音樣を拜する時もその中に自分の總てが這入つて居る。信仰としてこれ程確かなものはない。其處に觀音樣の徹底したお慈悲の深さが泌々と覗はれて來る。吾々のやうに不完全な缺點の多い弱點許りの人間もお名前の中に遠い何億萬年の昔から懷かれて居つた。吾々の叫びも願ひもとうから包まれて居つたといふ事に就て深くお考へになつたら其處に强い正しい天地が開けて來る。現に今、心から念じて居る自分の願ひ、自分の希望、惱みや苦しみの聲が殘る所なく本尊の聖なる御名の要素となつて居るので、この外に慈悲のお名前は何物もないのである。例へば自分に大失敗があつて惱んで居る場合も、其の叫びを聞いて居る者がある。親も親友にも話せない深い秘密がある。其の秘密に對しても、其の聲を聞いて居るものがある。如何なる事に就ても救主が聞いて居る、否、救主そのお方の御名前が吾々の苦みや惱みそのものと明かに代表して居られるのではないか。かく信仰し來ると一遍失敗しても復起き上ることが容易であるが、この信仰の無い者は一度失敗するとそれきりであります。また信仰の無い者は好運の時には調子に乘つて遣り過ぎたり慢心したりして、折角の成就を破壞して仕舞ひますが、信仰のある者は益々愼み、自分の行爲を磨いて行くことが出來る。本尊の中にある吾等、本尊と共に生きる吾等、此等に人間生活の眞實は正しい價値が始めて出て來るのです。

觀音信仰は要するに此の本尊の中にある吾等を見出すに過ぎません。それを觀音經で徹底して書いてあるのです。一體人間には苦みが多いか、樂しみが多いかといふと、どうしても苦みの方が多い。それはハイネやショツペンハウエルなど云ふ詩人や哲學者を證人に出さずとも、常識上直ぐ判ることである。而も社會が進めば進むほど種々の苦みや惱みが正比例して增加して來るが、それが始終觀音樣のお耳に這入る。そこで吾々は純な心を以てこの救世の大慈父に御すがり申さなければならない。不正直な不純な聲は本尊の神聖や慈悲と一致せぬ。寧ろ御心配を增す許りとなつて仕舞ふ。前にも申した如く觀世音の光りの中に十分の衆生が現はれて生きて居ります。實際觀音樣に聞える聲には善もあれば惡もあり、功德もあれば罪惡もあるから、吾々としては一切の秘密、煩悶、罪惡等は赤裸々に申し上げなくてはならぬ筈だ。それを飾つたり、僞つたりしは何の益にも立たぬ、詰り子供がお母樣にねだる時分に唯だ聲を擧げて乳を求め、皆な無心に純に乳

つて居るのである。觀世音の音も其の通り、佛の說法も這入つて居るが、吾々の「一心稱名」も這入つて居る、斯う考へると觀世音といふお名前には餘程力があると思ひます。此の點は觀音經に詳かに書いてある。

「觀世音菩薩、卽時觀二其音響一皆得二解脫一」と明かに示されてゐる、この大なる強い信仰が肝要であります。觀音樣を信ずる場合には切なる願をそのまゝに僞らず飾らず、何事も觀世音まかせにする。社會には飾りもあれば僞りもある。お體裁も無論ある。宇宙の眞理そのもの、萬有の本體そのものとも仰ぐべき觀音樣ではありますから、其處に何の飾りや僞りや體裁が必要であらう。心からの本當の叫び、自分の信用する父母に自分の心を打ち明けて何事も隱さぬ樣に一向にお願ひする眞劍に觀音樣に自分が這入つて居る。自分の切實なる叫び、苦しみの叫びが嚴然として這入つて居ることゝ、尊くも嬉しく信仰して叫べば必ず救はれる。自分の現狀とそのまゝ負ふてお出になる觀音樣に純に呼びかける時に、きつと救はれるといふことを斷々乎として信仰すれば尊さや強さや偉大さは終に觀音そのまゝとなる境地に迄進みます。

吾々に今迄は觀音樣は如何にも尊いもの、高いもの、吾々とは遠くかけ離れて居ることとのみ考へて居つた。然るに一度自分の樣な苦しい有樣や、賤しいものや、非常な惱みのあるものがお名前の中に這入つて居る點が明かになると何とも言ひ樣のない懷しさ、慕はしさが湧き出て來る。自分の現在、將來の總てが全く觀世音を通じて存在することが判る。或る場合には凱歌を擧げて成功の讃美を捧げることもあらう。又時にはそれとは反對に事業に慘敗し、生活に苦しんで死ぬ樣な溜息をつくこともあらう。怨みや怒りの怖しい聲で叫ぶこともあらう。其々の聲を皆觀音樣がお名前としてお聞きになる聲だと思へば、どんな場合でも慰めを與へ、力を與へて、進むべき方向を敎て呉れるといふことに確信がつく。宗教の信仰は實に其處でありまして、「自分の全體は旣に本尊の中にあり。」一切何事も本尊にお任せする。本尊と共に起き臥し本尊に懷かれて生活するのである。二六時中少しも本尊に離れることはない。かく氣がつくと大なる勇氣と希望とを有つて安らかに且つ勇敢にこの世を渡り得ることゝ思ひます。

要するに觀音經の中心も佛教の中心も其處である、それが教理上に所謂入我我入で觀音樣は自分に這入つてゐると共に自分も亦觀音樣に這入つてゐる。我れ觀音と共に覺め觀音我と共に眠る。自分の信仰がいつでも觀音と一緒であると考へ

ります。

○

第二の斷德と申しますのは「煩惱は無邊なれども誓願して斷ぜんとす」で吾々の肉體には本能性慾其の他種々のものがありまして、本心を暗まして居りますが、其の根本と致しましては、貪、瞋、癡、詰り物が欲しいと云ふ愛慾、瞋ると云ふ憎惡の感情、事物の眞相が分らない蒙昧なる愚癡と此の三毒が根本でありまして、種々の煩惱が出來るのであります。吾々も人間の皮を被つて居る以上は否でも應でもこの罪惡のあることは免れませぬ。如何に學者でも如何に金がありましても、人間として生活する以上は、其所に苦しみと惱みが必然にある。卽ち諸々の煩惱がある。社會の事情が複雜になればなるだけ、段々に煩惱が多くなり又深くもなります。其の煩惱が佛にありましては雲を拂つて明月が輝く樣に全く打拂はれ、一切の罪惡が根本的に斷除されたのが卽ち斷德であります。

○

第三の恩德と申しますのは「衆生は無邊なれども誓願して度せんとす」今、世界には幾億といふ多數の人が生存して居ますが、どれもこれも皆正しい敎、正しい道に據つて居る者とは申されません。特に昨今は大分思想問題がやかましくなつて、日本人の皮を被りながら、日本の歷史を知らず、日本の國體をも辨へず、唯外國崇拜に醉つて飜譯物や生半じやくのものを振廻して途轍もない謬見に陷つて居るものがありますが、斯う云ふ憐むべき者を救つてやる。或は社會問題に就きましても向ふは資本家、こつちは勞働者と云ふやうに階級を構へて相呪ひ相爭つて居る、さう云ふ風なものが色々澤山ありますが、さう云ふものを誰でも救つてやる、それが恩德であります。

○

以上の智斷恩の三德の根本として觀音樣の大智慧のお光りが輝き、大慈悲の御手が溫かく吾々の上に加はり三十三身を示現して、朝な夕なに吾々を救ふて下さるのであるが、扨今申し上げようとする救世の三德はこの通途の三德と一寸趣きが異つて居る。觀音經を通じて伺ふ三德は、無論通途の智斷恩の基礎の上には立ちますが、御經に行き渡つて居る觀音樣

をねだる。其處に母の愛が感通するのだ。吾々の願ひ純粹な心、小兒の心を以て御願ひする事が必要るでありませう。
以上申し上げた事は極めて平凡で簡單な事でありますが、私の樣な醜惡な賤しい聲も觀音樣がきつと御聞きになつて居られる事と確信しまして申し上げたばかりであります。貴方々の朝暮の「念二彼觀音力一」の御信仰もいよ／＼美しく、いよ／＼純になつて觀音樣が笑つて御聞になり、喜んで御聞きになり入我我入の立派な境涯に達せられん事を祈りいたします。

（昭和六、一二、淺草寺講演「觀世音の研究」所載）

救世の三德

○

私の御話は極めて平凡なものでありますが、大體と致しましては觀音經全體に亙りて其の精神のある所を御話する積りであります。詰り吾々がどう云ふ點で觀音樣を尊敬するのか、又吾々は苟くも觀音樣の信者としてその御德を讃嘆し、その御德に依つて信仰を固めて居る以上は、どんなことをしたら宜からうか右樣のことに就きまして一言申上げたいと思ふのであります。

そこで本題の三德でありますが、一體佛の三德と申しますものは、釋尊でも阿彌陀樣でも其の他十方世界に佛は澤山ましますが、其の佛樣は何れもこの三德を備へておられます。それは智德、斷德、恩德の三であります。

○

智德と申しますのは、佛樣は一切の眞理を透徹して總ての事を知つておいでになります。吾々大乘佛教の信者は朝晩四弘誓願の偈を拜讀して居りますが、其の中「法門は無盡なれども誓願して知らんとす」といふのがあります。卽ち宇宙の眞理、科學と云ひ、宗教と云ひ、種々ありまして、文化が進めば進むほど學問の分科が出來て實に無邊である。佛教にも八萬四千の法門と申しまして、教は大海の如く深く廣い。其の八萬四千の法門を皆知るのであるが、それは智慧の德であ

ります。是が文明の華とも云ふべき禮であります。此の禮が缺けて居つてはいかぬ、今學校では愛を教へますが敬は教へ方が寧ろ弱い。亞米利加あたりでも甚だ天眞爛漫の美點はあるが、敬の德は大分薄弱であつた。可成無作法な眞似も彼等は平氣でやつてのけて居つたが、昨今は大分亞米利加人も之に氣が付いてワシントン崇拜を始めて毎日小學校の生徒は例の四十八州を代表する國旗を出して禮をします。段々に報恩觀や敬禮の實行が出來て來るが日本では反對で現今のモダン連中は禮儀作法から脫しやうとする。人間から野獸に逆行しようとする。實に皮肉である。

人間と致しましては其の身分に於て其の職業に於て信敬が必要であります。國際問題でも個人の交際でも社會の應接でも、敬禮と云ふことがないと仕樣がない。敬禮と云ふことは其の間に如何にも美しさがある。禮儀は文明の花であります。此の無禮無作法の行爲が殊に學生の仲間、女學生の仲間に盛んになつて行く樣だが觀音樣の信仰から先づ第一に之を戒めねばならぬ。

昔日本では自分の敵に向つても敬禮をした、敵でも相當身分のある者に對しては「御敵」と云つた、大將に向つては、「御大將」と云つて居る、名乘を擧げるにも相當の敬語を使用して居る。如何に敵であるからとて暴慢無禮なことは決して云はない。これは平家物語などを御覽になつても分りますが、苟くも武士たるものは敵に對しても身分のある者には相當の敬意を拂つて居る。玆に日本人の良い所があつた。今では自分の親に對しても亦師匠に對しても敬意がない。私は能く申しますが、現代の日本人には敬意の念が薄い。敬禮が無いと云ふことは惡思想の元であります。絕對の信用を拂へば否でも應でも敬禮が出て來るのである。今露西亞と云ふ國は共產主義で舊習慣、舊制度は皆破壞し去り禮儀の如きものも無論ブルジョアジーの遺風として唾棄して居るが、このソヴイエツトロシアでもレーニンには相當敬意を表して帝政時代のペトログラードを改めてレーニングラードと稱して居る位です。又モスクワには所謂ロシヤの大本山クレムリン大寺院があります。其所にレーニンの遺骸が安置されて居る。モスクワに入つてレーニンの遺骸に敬禮をしないと甚だしく露人の感情を害する程である。斯の如く其の人に絕對の信を拂へば敬禮せざるを得なくなるのである。

○

の御德の說明には自然に別の三德が現はれて居ます。それを申し上げるのです。

第一に申上げたいのは信敬の德です。觀音經を拜見すると之が第一に目に付く、觀音樣は絕對の信仰を起して人を敬ふことを特別に御教へになつて居る。先づ觀音樣の御姿を見ますると、まことに萬德圓滿な御相好であるが其の觀音樣の御頭には寶冠がありまして、金銀七寶無上の寶珠を鏤めてありますが、其の冠の中に佛像があります此の佛像は何であるかと云ふと阿彌陀樣でありまして、卽ち御師匠樣で御自分の本地佛であります。觀音樣は無論立派な大菩薩であつて此の上ない御方ではありますが、併しながら恩師に從ふ、絕對信賴の模範を示して御出でになる。之が觀音經の根本精神であります。御經を見ますと此の信敬の强い御示しが何處にも現はれて居る。うかうか讀むと何でもありませんが、世尊偈の中に觀音樣を讃して「弘誓深きこと海の如く、劫を歷とも思議せられず」とありまして、其の次に「多千億の佛に侍ふ」とあります。觀音樣は阿彌陀佛ばかりではない、一佛二佛のみではない千億佛と申して多數の佛に奉侍して居る。大慈大悲を垂れる大力用の尊い御身分を下げられて只管に御佛を尊敬して居られる。其の御德を弘法大師も讃嘆されて師を信ずるの報恩の誠を說かれ、觀音樣が寶冠に彌陀を戴くと云ふことを特に說かれて居る。又親鸞上人は法然上人の御弟子でありますが、自分は地獄へ落ちても構はぬ、法然上人の仰言つたことはあくまで之を信ずるとまで極言された。又法然上人のお弟子で淨土宗の第二祖鎭西國師聖光上人は矢張り「我大師法然は釋尊である」と云つて絕對の信敬を掛けて居られる。斯の如く淨土宗の二祖聖光上人も親鸞上人も其の御師匠樣の法然上人に對しては斯くまで信敬して居られる。かくの如く人を信ずる心が必要である。自分の信仰する人に無上の信賴をさゝげ、絕對に之を信敬するのが佛法の根本であります。

現今では敬ふと云ふ心が甚だ薄い。現代思想には種々の缺點がありますが、その最も惡い點は敬ふと云ふ心が著るしく薄弱になつたことである。弟子は師に對して敬が缺けて居る。子供は親に對して敬が甚だしく至らない。其の他一般に敬と云ふ觀念が餘程減少して來た。禮儀中心の我國としては甚だ殘念なことである。是は卽ち平等主義の弊であります。元來平等と云つても、社會關係上自ら分業がある。分業がある以上は身分がある。身分がある以上は相當の敬禮が必要であ

と思ふものはない。罪あるものは猶ほ不憫である。世間の親御さんでも不具な子供や低脳の子供には一層情が掛る。罪の深いほど慈悲が深い。一切衆生は無數無量であるが之を悉く一子の如く可愛がるのである。

二は法緣、前の衆生緣は寧ろ感情に重きを置いてあります。人間の感情からは惻隱の心が起る、一寸それを指して居るが、法緣は仁そのものでありまして宇宙の大道である。天の理である。大道に從ふ、天の理に從ふ、宇宙に遍滿して居る眞理の發現として慈悲を見る。卽ち無上の眞理と云ふものは愛であります。耶蘇敎あたりでも神の愛を說く時、衆生緣はよく說きますが、哲學的な法緣はまだ說きませぬ。儒敎では稍之に近いものを說いて仁と云ふて居る。

三は無緣、之は感情も哲理も超趣したもので絕對の慈悲である。衆生緣は感情上に基礎を有つて居る。法緣は萬有の眞理の上に動いて居る慈悲であるが、第三は絕對無限の大慈悲であります。

○

かく佛敎の慈悲は三つありまして普通の愛や仁と申すよりも大分廣くもあり又大いに深いのでありますが、觀音樣は此の三つを有つてお出でになりまして、其慈悲が卽ち觀音樣の御力であります。三十三身の御示現も實はそれでであります、觀音經に書いてある一字一句も、觀音の淚、觀音の愛が仰がれぬと到底分るものでない。觀音樣の大愛は如何なる場合でも嚴かに吾々を守つて居られる。自分の悅ぶ時も哀しむ時も寢る時も起きて働いて居る時も觀音樣は其處に居られる。此の觀音經には此の大慈悲の普遍を說いて居るのであります。花にも月にも雲にも風にも、何ういふ場合にも吾々は觀音を通じて此の大愛の力が堂々と現はれて居る事を拜するのである。此の大愛の力は太陽が天下を照すが如く二六時中光々と心魂の上に輝いて居る。其の大慈悲の御力が分らぬと、觀音經の意味は無用のものとなつて仕舞ふ。詰り吾々には觀音樣が人を愛する大愛熱愛の叫びが始終聞へて居なければ分らぬ。法華經は佛敎最高の大聖典であり又一乘敎の根本聖典でもありますが、此の經典の衆生敎化の大使命は實に此の觀音經で盡きて居る。卽ち一切諸佛の救世の御力が此の觀音經に結晶して居るのでありますが、之を拜見するには先づ以て觀音樣の大慈悲を知るを第一とする。卽ち大慈悲は差別のあるものではない。平等である。あの人が可愛いとか誰に特別に目を掛けると云ふのではない。實に絕對平等でありまして、太

觀音經を拜見して先づ吾々は信仰と云ふことが必要である。同時に信仰のある以上は敬禮がなければならない。前申す通り觀音樣は寶冠の中に阿彌陀如來の尊像を頂いて居つて、自分の師匠に對しては絕對の尊敬を拂つて居る觀音樣は吾々の寢て居る所でも不淨の場所でも何時でも示現されるから、觀音樣に對しては吾々は始終尊敬をしなければならない。熊谷次郎直實は法然上人の弟子であるが、此の人は日本武士の標本であります。此の人は入道して西國から歸る時分に西方の阿彌陀に尻を向けては相濟まぬと馬を後ろ向きにして乘つたと云ふ話であります。此の時の熊谷の歌に、

極樂に强の者とやさたすらん　西に向つて後ろ見せねば

とありますが、鎌倉武士の純朴な强い力が手に取る樣です。源平の戰ひには關東隨一の强の者と云はれた熊谷も、西京から江戶地方へ來る時分には西に後を見せないと云ふ深い尊敬の心があつた。私共の先輩の或人は冬になると本尊樣の所へ火鉢を持つて行く。佛像には火鉢は必要はない、馬鹿々々しい樣ではあるが、其の心掛には信仰の尊い匂がこもる。日本人の良習慣としてはお婆さんなどが花一輪でも亦珍しいものでも來ると、苺でもメロンでも先づ佛壇に供へてチーンと鐘を鳴らすと云ふ尊敬の心、愛の心が日本の今日を築き上げたのです。

○

第二に慈悲の德、觀音經は慈悲中心であることは論を俟ちません。觀音の大慈悲、是れが觀音經全部の大精神であります。貴方方が觀音樣を拜むには先づ觀音の大慈悲を仰ぐことが最も必要であります。「佛とは何をいはまのこけむしろ大慈悲心にしくものぞなし」觀音樣は何ぞと問ふたら慈悲心と答へる外はない。佛の心は大慈悲である。木佛金佛は吾々の信仰上の一の表象にすぎませぬ。卽ち如來と申し、觀音と申すものは大慈悲であります。一體佛教の慈悲と申しますと普通の愛よりも一層深い。佛教には大慈悲を說くとき廣くは三十二種まで說いてありますがそれは略しまして、普通申すのが三つあります。卽ち衆生緣、法緣、無緣であります。只人を可愛がると云ふこと丈では佛教では濟まない。普通の宗教ではそれで宜いが、佛教はもつと深く突込んで居る。唯感情的の衆生を可愛がる丈ではないのである。

一は衆生緣、一番淺い所だが、觀世音菩薩は一切衆生を平等に愛し給ふ。特に罪人程愛を注がれる。大悲の目には憎し

んでこそ本當の勇者になります。佛敎ではそれをやかましく云ひます、一部分に勝つことは出來ますが。全宇宙の人に勝つには本當の心でなければならない。如何に偉い人間でも自分の頭の中に憎む心や或は人を滅ぼす心があるといかぬ。

不動明王は一手に煌々たる劍を握り一手に縛魔の黑繩を握つて猛烈に恐ろしい顏をしてお居でになるが不動明王は慈で救ふ。それ故に不動樣の眞言を慈救の呪ととなへる。あれが只人を切つてやらう、人を縛つてやらうと云ふのではいかぬ。本當の慈愛があつて人を活かす爲已むを得ず劍を揮ふ。貴方方も觀音樣を御信仰になる以上、御本尊の三德である信敬と慈悲と妙力此の三德を幾分でも實行する事が必要であります。

人間は信があつても義があつても力がないといかぬ。觀音樣には信と慈悲の力、內面の心の上前二つの立派な働きも外面の第三の力があるので內外相應じて本當の慈悲が出來る。吾々も之を理想として進まねばなりません。

○

吾々は唯今も申上げた通り、觀音信者として「一心稱念觀世音菩薩」と觀音樣の御名を稱ふれば吾々を救ふて下さる觀音樣を自分の親樣、師匠と敬ひ尊ぶに就きましても、吾々は先づ以て禮儀を行ふ。自分の師を敬ひ、自分の親を敬ふ。皆法華經にある通り、常不輕菩薩は生物皆佛性があると誰でも尊んで居ります。其職に於ては大臣と車夫とは違ひますが、大臣は大臣の職責があり、車夫には車夫の職責がある。けれども、各々職に就いては一つであります。吾々は其の職責に就いて信敬をする。現今の惡思想もお互に信敬し合ふと云ふ、共敬し合ふと云ふ頭があれば氣分が直ります。

岩崎家に桐馬像六君と云ふ人がある。東京では交通が頗る亂雜で電車の事故などが澤山ある。自動車、自轉車の事故も多くて甚だ危險である。だから交通の整理をして此の事故を減らさうと云ふので交通の道德を守らうと云ふ會を作つた。其の會には佛敎の人も耶蘇敎の人も入つて仲よくやつて居た。其の申合せの中に車掌が切符を吳れたら有難うとか、御面倒とか何とか云はうぢやないか、若し車掌に對して誠意を以て信敬の心でやると車掌の心持も大分變つて來て能率が擧がる事となららう。車掌も自分の職責上やる、吾々は賃錢を拂ふ、仕事をする者とさせる者兩方が信敬をし合ふ。車掌や運轉手は客を信敬する。客は有難いと云ふ禮を云ふ心がありまするると大變に能率も擧がれば氣持もよくなる。東京市民が其の

陽の光が金殿玉樓を照し、又小さな草木も照す様なものであります。

○

第三は妙力の德でありますが、觀音經を拜見しまして之を信仰することも容易である。また觀音樣の御慈悲は能く分りますが、觀音經全部の內に妙力と云ふ事がある。觀音の御力を仰ぐと云ふ事は餘程信仰を進まぬと判らない。一體觀音力といふ事は實は觀音樣の特色であります。先づ觀音經では初めに「威神力」と書いてありますが、此の威神力、觀音樣の絕體の力が現はれてどう云ふ場合でも人を救ひ世間を慰め、如何なる場合でも一切衆生に對しては絕對の救世をやるのである。氣を付けて御經を見ますと此の威神力と云ふ言葉は觀音經全部には可なり澤山書いてあります。信敬の御德も慈悲の御德も歸する所は此の妙力になるのであります。それから「觀世音菩薩摩訶薩は威神之力巍々たること是の如し」と書いてあります。最後には「觀世音菩薩は是の如きの自在神力あり」とございます。

また夫の世尊偈を拜見しますと「念彼觀音力」と云ふ御話が十三回も繰りかへされて居るのみならず次で「觀音妙智力」または「具足神通力」と重ねて說かれて居ります。是は實に觀音經の使命であります。詰り觀音樣の信敬慈悲の御德が現はれて力となつたものであるから、觀音樣の力を信ずることが實に必要であります。恰度引力があつて世界の物は引力の支配を受けますが、觀音力のある所は卽ち信仰の芽が吹く、觀音の大慈悲を仰ぐ時には、其處に誰でも此の力に攝取される、此の大救世力には誰でも掛つて居ります。觀音力に支配されて居りますが、是が必要であります。

それならば此の觀音の妙力はどうして出來たかと云ふと、前にも申す通り信敬と慈悲のある所に卽ち慈悲の力がある。吾人も信仰があつて人を憐れむ心があれば力が出ます。老子も「慈なるが故に能く勇」と云ふて居る。人を救ひ天下を憐れむと云ふのが本當から云へば勇であります。西鄕隆盛も乃木將軍も頭の中に絕對の慈愛があつたから本當の勇氣があつたのであります。此の點が必要であります。若も絕對の慈悲がないで本當の力はない、吾々が何をするのでも利己主義や人を倒してもうまくやらうと云ふのでは力はありませぬ。自分の樣に人を可愛がり、自分の樂みの如く人を樂ませると云ふことであれば本當の力があります。昨今の勇者と申します者は動ともすれば戰つて勝つそれではいけませぬ。人を憐れ

〇

最後は妙力であります。人間には力が必要であります。實行の力であります。此の力がないといかぬ。古往今來失敗したものは實行の力がないからである。此の觀音樣を信仰する以上は、吾々も妙力を仰いで一方には大きな信仰と、一方には大きな觀音力威神力を奉戴して世間に對して働くのです。どうも實行力の無いものは失敗します。人が善くても力がないと不幸な結果を見る事が往々あります。

身は一天萬乘の皇帝であつて隨分悲慘な最後をしたのは佛蘭西のルイ十六世、或はロシアのニコラス二世等を適例としませう。此の兩帝は決して惡い人間ではない、徒らにクヨ〳〵思つて居つても斷行する力がなかつた。勇斷を缺いた。優柔不斷の爲にあんな風になつた。ルイ十六世は斷頭臺に登つて死にますし、ニコラス二世は其の皇后を初め一族と共に無慘な最後を遂げました。

勿論ルイ王にしてもニコライ帝にしても自然の惡業の結果で、御仁慈の日本の皇室とは雲泥の相違、フランスもロシアも苛斂誅求して人民を苦め壓迫した代々の皇帝の積惡の報ひが來た譯ではあるが、其の一は兩帝王に斷行の强い力がなかつたから．其の身を亡したのであります。ニコラスもルイも、もつと强く寧ろ今少し人が惡かつたら或は天命を完うしたかも知れない。かく吾々が失敗をするのは力がないからである。

觀音力を仰ぎ威神力を信じて實行の勇斷の出來る樣にする事である。然し此の實行力の出て來る源はと云ふと矢張り信仰でありまして、此の確信の上に大威神力が出る。働きをするものは確信がありますれば何でも出來る。

新門辰五郎は觀音樣の境內であれば死なゝいと云ふて居りました。辰五郎は學問もなければ無論佛教など硏究しては居りませぬが、彼は生死の境を往來し水火の中をもくゞり隨分危險な事も致し、刀の山や鎗ぶすまの間も平氣で往來して、隨分猛烈な出入や喧嘩をしたが、淺草寺の境內に居つた場合は死なないと云ふ確信があつた。之で何んでもやつてのけた。貴方方も辰五郎ほどの確信があつたら宜いと思ふ。思想問題でもそうです確信さへあれば何でもないと思ひます。又社會の缺陷でも確信があれば之を立派に改良する事が出來る。今日本で一番困るのは確信がないから困るのであります。

頭で行くと電車は極樂の樣にならう。單に電車のみならず、工場でも商店でも同じことで、使ふ者と使はるゝ者と其の間の關係が禮儀を以てニコ〳〵笑つて始終頭をさげ合ふことになると變な問題は起らない。現今では頭を下げる所ではない互に鎌首になつて喧嘩する。自分勝手をやる。他人の勞力や手腕は少しも同情しない。其處に階級戰が起るのです。

國際關係も共敬と云ふ事が必要であります。今日本と支那の問題は込み入つて居ります。風雲暗澹として困つて居りますが、日支の關係も共敬の思想が支那人の間にあれば良いと思ひます。日本人を度外視し、馬鹿にすると支那問題は解決しない。また吾々もそうで、二言めには「チヤンコロ」では何事も旨く行かない。吾々の正當なる主張は何處までも主張はするが相手の支那人には相當の信敬を表するのが良い。彼を憎むことはいかぬ。宜しく觀音樣の信敬の德を信仰して社會上にも國際上にも之を實行すべきであります。

○

又慈悲もそうです。觀音の慈悲を信敬する以上は餘り迷信的に觀音樣を信じて、勝手氣儘なことも御願ひ申上げ何でも彼でも聞いて呉れると云ふ事にしては困る。一切衆生を憐れむ心がお願ひする前に先づ以て必要で、人を倒して自分だけ行かうと云ふ我利我利的なものではいかぬ。若し不正の爲に、不義の爲に、觀音樣を拜んでもそれは迷信一方であります、例せば何か不正行爲をする時分にどうか觀音樣の御力で法律の制裁を免れる樣にと云つて拜んでも、ソイツは駄目である。本當の大慈悲心を以て一切衆生を救ひ、國を救ふ心でなければならない。

觀音樣が深い情を以て深い慈悲を以て救つて下さる樣に、吾々が假令毛すぢ程でも觀音樣の慈悲を行ふときに觀音樣の御利益がある。觀音樣のお心に逆つて自分勝手なことを願つても、それは迷信です。親の命令に從ひ、親の意見に從ふこそ本當の子供である。親の命令に逆つてはいかぬ。觀音樣は自分の身體を抛つても一切の衆生を救はうと、釋尊のやうに成佛せずに永久の間自分の無上大覺の佛の位までも捨てゝ御座る。此の犧牲を味つて來て、其の上に觀音樣に御願ひする、詰り觀音信者は飽くまでも愛の心を以て、家庭に於ては相愛し合ひ、又社會に對しても社會の人を愛する心がなければ念彼觀音力の御利益はない事になる。

人を全力を以て愛する心を手始めに、敵を愛するまでの大慈悲心が出る、と同時に其力に依つて自分は如何なるものにも動かず、金にも威壓にも如何なるものも己を如何ともする事が出來ず、己の信仰は山をも動かす力が出て來ます。過去の歴史を見ましても信仰のある人は偉いことを致しますが、吾々佛教信者も觀音の力を仰いでどうか己の爲にも家の爲にも國の爲にも御互に盡したいと存じます。

（昭和六、十二、二十、東亞青年居士會叢書第三、觀音經の研究）

小金井觀櫻記

（明治廿二年本校一年の作文）

桃紅李粉色漸退。鶯吟聲緩春既深。寂然書房。獨坐無人。唯有一縷炷香繞硯邊。窓外欹耳點々細雨誘人。習々輭風促遊。於是俄然思觀花。檢瓢有酒充。查囊孔方見吾笑。余曰足以出遊。不知欲遊何處邪。東臺花已謝。墨陀花未開。嗟乎吾何遊歟。忽聞鈴響鏘々賣新紙。呼贖一葉、讀一過、拍手日咄吾忘矣。起而被蓑鎧着笠冑。荷瓢穿鞋。睨天怒雨。蹂地叱濘、喃々吟行。至新宿停車場、乘汽車。須臾黑龍蟠空、奔蛇如電。山去田田去家。家去藪。畔疇川溝如螺過。瞬間達堺村。下車雨既收、卽脫笠挾之。一遲一速大呼曰櫻與汝一杯盃來早見、語未終。擧頭萬朶香雲帶露、重垂花房一條、素練斜横、波光湧花、灼々爛々不可名狀、南黄菜靑、苗舖蜀錦、一望萬頃皆是田、北秩父翠岱烟中描景、縹緲似畫、問傖文曰地是小金井水卽多摩川也、因直開瓢、一飲一見、歩々探勝、或對瀲灩淸流酌落花、或凭盤桓古木湌香露、陶然敲瓢歌曰、

悠、悠、春水涓流、婥彩靄、漠々浮、波如碎銀花、似晶毬、
樹裡啣杯笑、林間鼓瓢謳、鳥追瓊葩輕飛、兒挿瑤薹驅牛、艶
々埋路戲蜂氈、紛々渡津胡蝶舟、坐撫老櫻差大白、不知此君
想我不、

歌了櫻花飄々來入杯、殆如酬余余大喜、去 至他、蹣跚放吟凡二里、此間唯繡霞伴予己、嗚乎何快邪、忽至一小橋、榜云小金井橋、橋邊有一老僧、吟曰君不見三百年來櫻、年々吐芳香玉英、顧予笑、予又笑花又笑、僧曰子何來邪、余曰瓊水待人、玉花誘我何不來乎、僧曰子有酒我有茶、是獨如流水笑花已、乞來我庵、同語花事、余曰諾遂赴庵、庵去小金井數步、在松樹陰與余茶一碗、宇治茗玉川水淸香可語、示文一扁題云小金井觀櫻記、其句奇絕其辭秀麗、如盆中珠以深淵龍、余嘆賞不措、問日蓮氏名何、曰無々、庵如何、曰空々、却問汝名何、余欲答曉鐘一聲妨吾言、僧去庵逝只春雨滴瀝、竹風瑟々、身在稱名寺僧堂、前日所伴、觀花同學或臥覺、手足撩亂如巴如十字知是孤枕一夢

もう一つは人を愛する心、國を憂ふる心が觀音信者になくてはならぬ。子供の悪い時分には親は何を措いても之に盡す自分を愛する心を移して人を愛する。

自分の子供に對する愛、其の心が直に觀音の心であります。母が子供に盡す時には自分の身は死んでも子を救ふと云ふ心であります。是が觀音力であります。此の心さへあれば何でも出來ます。

此の大慈悲心は信仰の上に必要である。西鄕南洲も乃木大將も此の慈愛の上にあの様な大威力が出て來た。また北條時宗が元寇の役に見事に大功業を遺したのもそうであります。一方には信仰があつて、一方には愛の心がある。家庭上にも社會上にもどう云ふ場合でも之さへあれば玆に觀音力の自から働くのであります。

觀音樣は信敬と慈悲と力でありますが、觀音樣を信仰する以上、その實行を心がければ御自分の無病長命息災は云ふまでもないし、大にしては一國の上にも大なる効果を生じます。觀音信者である以上は、觀音の慈悲を體得され、觀音の信敬の力を自分の胸に收めて自分の家庭を淨化し、自分を知つて居る者を說いて觀音力を現す樣にせねばならぬ。今日御聽聞の一百餘人の熱心家が又一百餘人の熱心家を作り、展轉して觀音三德の實現を期されたら、日本の將來は光明に盈つる事と思ひます。そう云ふ意味を持ちまして觀音樣の三德のお話を致しました。

○

さてもう終りですが此の御別れの合掌、此の合掌に就いては眞言の方ではやかましい議論があつて可なり難しいが、大體、合掌の右手は佛で左手は人間を表したもの、それがちやんとピタリ合ふ。卽ち右手佛の六根を表示した五指と掌と人間の六根卽り眼耳鼻舌身意の左手とピツタリ合ひます。信仰は其處であります。宗教は有限と無限の結合と申しますが、合掌が、之を表して居る。貴方方も此の心を忘れずに觀音樣の信敬と慈悲と妙力とが自分のそれとピツタリ合ふと觀じて自分の修養のためにも家庭の爲にもシツカリ御信仰して下さい。之が大きくなると此の妙力で國を救ひ、天下を平かにするのであります。

かゝる信仰の下に「朝念觀世音、暮念觀世音」始終觀音の信敬、慈悲、妙力を仰いで幾分でも信敬の德が現れて已の家

警世時言

也、即欲記所夢文皆既忘矣、嗟嘆把筆遂書夢中樂云。

評高麗之夜嵐

（明治廿八年七月松雨漆間德定氏に宛てたるもの）

全篇大觀。總一千一百餘偈。偈有長有短、句凡四千五百有餘五七爲調、偶對爲格、井井布敍、一絲不亂、眞是偉大之雄篇、皇朝詞壇。未曾有之大作也。唯此一已以足爲多矣、況於語句之烹鍊精鑄。造構之刻思奇絕、命意之深玄雄渾揮。揮南華龍門之彩筆。說華嚴法華之至高邪。謂古昔、西梵迦多衍那、婆須密多、婆蘇槃豆、那加閼刺樹那、阿濕婆瞿沙等、大小乘之諸大聖哲、立言濟生、概妙偈雄頌、光闡大法咳玉唾珠、粲然回章雲漢支那禪家淨門之諸德。亦以警拔富贍之歌詞。說殺活自由之旨。讚紫雲蓮花之境比々莫不然。皇朝固秀麗之邦。風光絕奇。乃擬華釆麗之詞。讚揚佛乘。實其所、廣大之理、絕妙之筆。由來不相離。實如是、所由雄風亘海。相應相待、以有烟波萬頃白濤滔天之奇觀也。今也文運奎昌之世。而釋門有文者。寥落如晨星、何夫衰之甚邪。主人躍然。蹶起于此間、揚朝陽之輝、歌圓覺之理。是僕所以一層爲多于松雨子也。以是翫賞不措。禪餘課後。每卷與來則信手評之。語々滅裂。雖無些許炬眼擇出卷中佳處、而忘醜見拙强顏示君者。以竊有期于君已耳。嗚呼由來高山流水、知音酷少矣。江湖果能有味此至文。解妙趣邪否。任他。靑山固高、流水自長、不盡乾坤。無邊風月。到處自湛然矣。六月下澣一日、粱川環翠書樓、淡々樹色、淺々山光窓下。敬讀。

高等專門科卒業式答辭

（明治廿八年七月十一日卒業生總代として讀みたるもの）

高等專門科俱舍部卒業生某等肅答、某等伏惟、方今國家之趨勢、與敎門之行運、洵佛徒宜大努力之秋也、國光宏耀、事端益滋、可施設者夫何局、宗綱將張、物狀愈亂、可經營者亦洵多矣、世道人心拯濟必務、橫疑抗難、開導歸責、嗚乎難哉、緇林之任也、某等生此多故之時、負此至難之任、辱列宗學之高班、濫受宗門之恩養、於是乎、夙夜眷々恐惟其不及、晨夕悚々憂實其不完幸、有學務提撕、先輩携掖、蹇蝸駑步、僅窺六足之門墻、斧檄規模、漸成七年、之微功、而顧佛海浪高法巓雲深講學欠精、行履多尤、酬一宗之鴻恩、副萬衆之輿望、何以當之邪、思至之、則慚惶眞不能措也、今也蓮輅光臨星客森列、嚴儀穆々盛典、洋々玆擧、卒業之式大訓煥發、先針路、慈誡交至、代開冥蒙、某等一身之光榮又極矣、豈勝感激之至耶、某等思之夫鈍刀銹斧、揮擢時可備敎軍朽木廢索補綴或足護法城乃某等難無可、取惟誠惟一幸憑佛祖之靈祐、上管長猊下法威、所加下先輩諸老援護所致、資範于英以輝敎勢習規杜礎以固法門濟民利生外應國家之趨勢轉迷開悟内乘敎門之行運焉、謹白。

警世時言

主として淨土教報、教學週報等の卷頭社說として發表されたもの。

◇內務省の三教會同計劃を評す

內務省の三教代表者會同問題、卽所謂宗教利用案は今や教界の一大問題として、教家が縱論橫議の好題目となり反抗の行動、鎭撫の術策亦之あるを傳ふ、而も最大問題の如くして實は大問題にあらず、宗徒は此際冷靜着實、其職責と本分とに努力して寸を得て寸を守り、尺を得て尺を固守せむのみ、豈漫に雷同すべけむや、豈又妄に輕擧すべけむや。

由來宗教家會同の如きは、泰西に於ても吾國に於ても吾國に於ても其例に乏しからず、市俄古、巴里、倫敦の宗教大會は言ふを須ゐず、吾國に於ける日露役當時の教家大會の如き、其效果の如何は別として、形式としては神佛耶の會同は業に既に之ありし所、今回の擧の如き抑遼東の豚のみ、而も單に國體擁護、地方自治、健全思想宣傳の如き明にして且つ簡に、何れの宗教も何れの哲學も吾國に於ては、其根本主義に於て必らず一致し、必らず實行せざるべからざる主題を捉へ來りて、會合を促すが如き會も甚だ不可ならず、會せざるに於ても抑何の痛痒ぞ、平凡なる哉會合や。

慈善事業に於ても社會問題の研究に於ても佛耶が漸く寬容主義の下に動き來り、夫の浮浪人研究會の如き動物愛護會の如き東京に於ける佛耶實際方面の接近は大に見るべきものあり、其思想方面の交涉に至りては今之を贅せずして識者の首肯する所、此の如き寬容の大勢は豈政府より令せられたる會同を待ちて方めて之ありとせむや、政府にして若し今回の會同に依りて、方めて各宗教の交際を融和せしめ得ると思考せば、嗚呼亦迂ならずや。

政府が此會同を以て教會保護、教家優待其他何等かの特遇を教家に約せむを意味すとなすも、抑又何等かを教家に命じ之を驅使し走狗として所謂何等かの利用をなさしめん

聯邦議會が該法律の撤退を否決したる理由に至りては大に內務省の三省を要すべきものあり、英佛諸國政客のジエスイツトに對する議論の如何なりしやも亦大に當路者が明目張膽に慣す、識らず內務省は此ジエスイツト派の宣教及計畫に就きて何等監督の成案ありしか。

宗教として國家に報效すべき方面は蓋し廣し、軍隊布教、監獄教誨鐵道及郵便電信局の傳道、産業奬勵の如き其所管の官廳は必らずしも內務省に局止せず、陸海軍遞信農商務等の各省に渉りて、其認許監督を必要とす、若夫吾國に於ける外國教會及び外國に於ける吾國佛教徒の宣教事業の如きは當然外務省の交渉を待たざるを得ず、內務省たるもの一面宗教にに對して更に精確明瞭の調査を第一義となすと共に、他面に於ては他の諸省に對して先づ周到の打合と熟議とを要し、各省との有機的連絡を圖りて組織的成案を以て方めて教家に臨むを可とす、然らずして輕忽躁急今回の如き會同を開かむとす其效果の薄弱にして、宗教としての報效事業に些の補ひなきを知るべきのみ、識らず內務省は今回の會同問題に於て各省との交渉及協議、周到完全なりしや否や。

書し來れば言ふべきもの尚幾個を數ふべしと雖、要するに今の狀勢にては三教會同の如きは尚甚だ早し、記者は之を機として當路者に着實なる方針を以て宗教調査會の如きものを設け教界の宿老を集めて徐に事を計るを勸告す。

× × × ×

三教會同問題は、其極遂に宗教家懇話會の形式を以て、遠からず開催を見るに了らむとす、先に管長の召集といふもの轉じて代表者の請待となり、甞て訓示と命令とを以て成れるを傳へし、所謂利用案は、今や變じて單に諮問討議の研究會となり了れり、强弩の末魯縞を穿たざるの觀なきにあらずと雖も事必らず茲に至らざるを得ざりしは識者の夙に豫想したる所、其平凡の解決、終局の他奇なき、深く批評を用ゐずして可なるのみ。

而も內務省として宗教に對する義務的の問題は斷じて此滑稽なる一幕に依りて決了したるにあらず、內務省が基督教に對する根本的に要する解決は各方面に於て尚依然たり實力尚充實せず智識未だ堅牢ならざる吾國の外交が、時に無方針の觀あり或は輭弱の譏あるに累せらるゝ內務省を責め其義務の完全遂行を逼まるは今や酷にして且愚なるべし、而も解決すべき問題の依然たるは依然たり、內務省たるもの會同問題の小康に甘じて此根本問題を閑却せざらむこと

とするも今回の如き輕忽粗雜なる會同の方法形式にては甲論乙駁適從する所なく必竟甚だしく得る所なきに終るべし。

玆に於てか今回の會同は實に平凡の會合のみ、而も其平凡なる會合が幸にして政府が遂に宗教の實力を認めざるを得ざりし證たりしは實に意外也、宗徒は玆に一段の奮勵なきを得ず。

政府に對しては此親切なる會同に先ちて更に大に宗教の現狀に對して研究調査を行ふべきを勸告し、着實周到の討究と公正堅實の對宗教方針の畫立を希望するの好機會たるを告ぐるの光榮を有す。

統監時代の拙劣卑屈なる政策の失敗よりして未だ甚しく改善し解脫せしを聞かざる朝鮮に於ける基督教徒取締の如き內地に於ける外國人を主教とし監督とせる加特力教若くは希臘教に對する監督の如き今尙常に霧裡に彷徨し暗中に摸索しつゝあるにあらずや、彼等は迎合佞便の新教各派を統御するより少しく困難ならむ、而も先決問題は實に是也、是等の問題にして解決する所なくんば、今回の如き會同は政府の對宗教策として抑何の要かある。

一般神道に對する政府の態度の如きも更に明確を要す、今にして一步之を謬らば國體上或は危險なる結果を生ずる

虞なきにあらず三教代表者會同の如きは特に此點に深重の注意を要するなきか、若夫紛々たる天理蓮門の如き漸く淫祠の脫化したるものを以て之を佛耶と同一に經世の資となさんとするが如きは世界識者の嗤笑を如何せむとする、要するに神道に對しては會同問題上尙三思、十思、百思の餘地あるべし。

× × × ×

三教會同問題に就きては、江湖識者の議論既に盡きたるが若し、其尙討究を要するの餘地甚だ廣濶にして、其準備に必らず要すべきもの未だ頗る完からざる、世論の等く認めて疑はざる所也、內務省たるもの此際宜しく識者の言論に公正の態度と寛宏の度量あるを可とす、是寧ろ內務省の威嚴也。

討究の餘地準備の不備に關し、記者は尙數行を玆に加ふるの遲からざるを信ず、獨逸帝國に於て一千八百七十二年公布の法律に依りて其定住すら嚴禁したる、ジエスイツト教會の如きも近時二三教父の有力者吾國に來りてジエスイツト大學を起すの擧ありといふ、記者は信教自由の我國に於て夫のイエスイテン、ゲゼツツの如きものを制定せよとは言はず、而も此法律制定に至りし事情及制定已來幾回か

陰險とが幸に從來の基督教界に於て今回の言動に依り誤解せられし宮川某を代表とせざらむことを切望す。是少くとも三教會同てふ保障によりて切望し得る所也。

× × × ×

東本願寺が三教會同に斷然缺席したる、其内情に於ては幾多の事情の潜伏するあるべく、其態度に於ても或は種々の批評を免れざるべし、而も其信念を標榜して威武に屬せざる氣骨は確に宗教として生命の存する所なるべし、世或は同派の態度に就きて政府との難問題生起すべきを傳ふるありと雖這回の會同は由來懇談慰勞の性質を帶び、其案内が、内務大臣親署にはあらずして單に宗教局長の通告なりし禮式上稍奇異なる形式の外毫も命令の意味を存せず、而も若此間何等かの難問題を起すとせば、是寧ろ會同問題の精神を破壞するものにあらずや、記者は政府が東本願寺詰責問題の如きは愚者の夢なるべきを笑ひ、而して東本願寺の諸君に對しては寧ろ神經の餘りに敏慧なるを緩うせむことを勸告す。

(明治四五、一、三)

◇活施餓鬼を修すべし

米粒今や黃金よりも貴く、甑釜到る處塵埃を生ずるの慘を見むとす、識者之が爲に論議痛切を極め、政府を警策し資産家を勸奬し、米價の調節に就きて苦心到らざるなく、仁人義士亦之が爲に實際救濟の業に從ひ、或は外米の低價販賣を試み、或は或種の施米事業を企て、孜々として應急の方策を講ず、而も其言議する所未だ根本の解決を得るに至らず、應急救濟の如きは寧ろ燎原の大火に杓水を洒ぐが若き憾あり、細民飢餓の悲聲、學童絕食の慘狀日に日に新聞に上り來る、縱令輿論の力と實際の活動が幾分米價の低落を贏ち得たりとするも、現狀にして底止する所あらずんば、下層の畏るべき大パニツクは遠からずして爆發し來るの虞なきにあらず、憂國の士、愛民の人此危機に丁りて豈に坐視傍觀するに忍びむや。

而も敎家が此危機に對して努力する所のもの寥々として今に甚だ聞く所なきものは何故ぞや、幾多論議の學者あり幾個紫緋の高僧あり、而も此細民死活の秋に際して半箇の

を。

既に懇話會の形式を取る、其請待すべき方面の決して性質上各宗々務の當局者に局るべからざるや論なし各宗已外各宗已內躬宗政の樞機に參せずして而も學識經歷德望寧當局已上教界に重望を負ふもの少しとせず。之を例するに大內靑巒井上圓了諸氏の如き前田南條村上諸老釋宗演黑田眞洞諸師の如き必らず選に洩るべからざるもの、此說既に江湖二三識者の唱道を見、天下公論のある所、內務當路者にして必らず會を開くべくんば先必らず此等教界の宿老を招くを忘るゝ勿れ。

×　×　×　×

三教會同問題は、世論の喧噪に似ず、彼が如く平凡に終了したり、即然く終了せしと雖、斯の平々凡々裡、東本願寺が旗幟鮮明なる缺席に依りて、不統一の缺陷を示し、天理教金光教の如き夫の「クリスチヤン、サイアンス」にも比すべき教團が佛耶兩教と比肩して招宴に趣ける滑稽に依りて喜劇更に一段の妙を加へ、而して其教理に於ても教制に於ても吾日本に於ては尙研究と同化とに幾難關を數ふべき羅馬教希臘教の代表者が此純國家主義の會合に出席したる宏量に依りて頗る溫順なる撞着を見たり此等奇異なる着彩は今回の如き會合に於ては蓋何かあらむ、寧ろ聊平凡中に警味を加へたるを喜ばむ已耳、而も此不統一、滑稽、撞着は眞に以て今回の會同が其動機と準備とに尙幾層の愼重なる注意を價すべかりし活證となすべきにあらずや、而して是又一面從來政府の宗教政策—若此の如き名を下し得べくんば—に一層の堅固と着實と精勵とを必要とするを示したるものにあらずや、今回の會同に於て少くとも宗教に對する尊重の敬意を表明し其國家に報效するの實力を認めたる政府は、實に聰明なる教家の感謝する所、而も之と共に彼等は必らずや、政府の今後宗教に對する周到着實の調杳と公正謹嚴の監督とを切望して止まざるべし。

×　×　×

華族會館に於ける三教徒交驩會の歸途直に教壇に立ちて佛教高僧の爲すなきを冷罵し基督教が後來獨り國運の隆昌に伴ふべきを說ける宮川某ありしは事實なるが如し、佛教徒にありては他山の石寧ろ玉を磨すべきのみ、而も某の言動は誠實と禮儀とを生命とする普通紳士としても尙不穩なるを免れず、矧むや宗教家をや、更に矧むや三教會同を賛したる教家をや、記者は某の擧を以て面從向脊、詭詐僞善の表明となすものあるを遺憾とす、而して此の如き僞善と

の研究に從ひ、混亂蕪穢の現代思想を疏開して、民心の歸趣する所、人性の統攝すべき所を確立せむとするの擧あり由來吾國の富豪が徒らに庭園臺閣の美を誇り、若くは漫に珍玩奇什の弄賞に巨資を傾けて、世道人心に對する痛痒相關せざる風馬牛も啻ならざりし間、此等遠大の擧を聞く、確に思想開展の一段として喜ぶべき價あり。

而も吾人は世の富豪に望むは此等遠大の擧を敢てする前に、先着實に自宅信仰の確立如何に着眼するにあり、宗教の性質狀態を討究し現代思潮の汪溢を大觀するが如きは、須らく之を他日に讓りて、先第一に實踐の門に入り躬行の地を履みて或は禪堂に三百の痛棒を喫し去るも可或は密觀に祕法を行ふも可、或は口稱の一行に單信の人となるも甚可或は神の愛子となりて天國の門を窺ふも亦妨げず、何れにしても先信念を確固純正ならしめ、着實信仰の人となりて方めて、他の閑問題を云々すべきのみ、人は人心の歸嚮を云々する前に先自ら眞面目に歸嚮する所を定むるを要し他の思想の統一を喃々するに當りて實に自ら其精神の眞統一に反省し來るを要するにあらずや、然らずんば黃金學者を釣りて漫に虛聲を博し以て社會の崇仰を買ふが如き譏生じ、財界に於ける手腕技量は又之を思想界に擅にするを得て、黃金萬能何事も成るべしとするが如き、僭越憍慢を憤るものあるに至るを如何せむ、彼等の擧美ならざるにあらず、而も彼等の燦爛たるサローンに學者を翺翔せしめ、宗教家を低頭せしむる前に彼等自ら謙遜熱心、至誠に祈禱し坐禪し、念佛するを要ある也、彼等は口遠大の事を論じ、耳幽玄の說を聞くよりも先づ專心一枚起請文を讀み、馬太傳を味うの切要あるを知らずや。

彼等が眞信仰の人たると共に要すべきは、必らず慈悲躬行の人たるべきこと是也、單に慈善團體の名譽職顧問等の虛名を擔ふを止めて、實際に慈悲の手を揮ひ同情の足を運ぶべきこと是也、國民は富豪により決して一部の哲學書一冊の宗教書を得むことの要求せず、切實に彼等が賑恤の活事業に就き一層奮勉せむことを望むで止まざる也、一條の救貧法さへ尙未だ存せざる吾國にありて、富豪の盡すべき急務は實に焦眉の急を告げつゝあるにあらずや、彼等が今盡すべきは淸風凉榻、便佞巧言の宗教家輩を饗して空言高談に耽るよりも、一片愛藏の古器を賣り、一幅珍什の名畫を販きて一宇の無料浴場を建て、一夕の無遮施米を實行するにあるにあらずや、彼等が夢想する所謂危險の思想、唯此實際の自覺と活動とに依りて、之を防止するを得べきの

鐵眼禪師なきもの蓋し日本教界の恥辱にあらずや、三教會同の如き宦學に得々綺羅を飾りし佛耶神道の諸君は其宣言の甚だ美なるにも似ず、這箇現前の大問題に對して些も計畫するあるを聞かず、先に纔に救世軍が外米の販賣を開始して細民を賑はし今や増上寺が或種の應急救濟法を發表せむとするを耳にする外、佛殿の冷風徒らに長袖を弄して都門幾千の寺院一も奮起する所なく幾多の宗務廳之に對して一片の訓令だも發せざるは抑何故ぞや。

増上寺及都門二三の有力者を後援としたる、宗教大學の學生は今や起てり、彼等靑年純潔熱烈の精神、此危機に激せられて、赤手空拳猛然として起てる也、嗚呼、慘狀は眞に既に前に至れり、教家今に至りて猶ほ袖手座視せむや、夫世が卿等が冷酷無情に對する深酷の批判を如何せむとする、奮起せよ、都門の寺院諸氏、卿等豈無資無力の學生に劣る所あり、而して何の面目ありて卿等の檀信に見へんとする。

×　×　×　×

米價の暴騰、細民の飢餓に丁りて、東京富豪の甚しく奮はざるは實に吾國の恥辱なり、濟生會の爲に幾萬幾千幾百の巨額を寄附したる紳商富豪は今や生民菜色ある時にあたりて毫も計畫する所あるを聞かず、名門華胄、亦些も倉廪を開きて賑恤の外擧あるを見るなし是實に吾國文化の爲の一大恥辱にあらずや。

都門の華胄紳商にして一たび起たんか、都下幾萬の細民を賑すに於て其效果必らず見るべきものあらむ。

教家は此際一大聯合を造り、仁愛慈悲の大道の爲に先づ紳縉富豪を動すを要す、火の如き辯論鐵の如き手腕、厭くまで之を用ゐて富豪をして一たび此死活の大問題に頭を廻さしめよ、願くば應急救濟に對する十字軍のために朱門高き所玉樓深き裡幾多ペーター、ゼ、ハーミツトの熱辯を揮ひ去れ、是營々として爾が零細の貧嚢を傾けて外米の販賣に貢獻するよりも先第一に切要にあらずや。

都門の寺院諸師此危機に丁り、少くとも盆供施餓鬼の供米一袋二袋を投ずるに吝なる勿れ、活施餓鬼を行ふ今日より急なるはなし。

（明治四五、七）

◇現代富豪に望む

近時二三の富豪が、學校宗教家と提携して、宗教諸問題

く其勢を多とすべき所なるべし。

唯記者は各宗今日の態度が少くも三年の繼續を見むことを茲に繰かへすの榮を有す、假令現在の經營其規模小に失し、其方法粗朴を免れずとするも寧ろ堅牢着實寸を得て寸を守り尺を得て尺を守り着々發展して效果を永遠に期するを要す、浮華輕薄、呼號徒らに大にして實力之に伴はざる各宗在來の弊害は此事業の開始と共に斷然之を葬り去ること尤肝要也。

各宗は今や此新經營に就きて政府に聽き學者に諮り資金の調査條規の編成等頗る苦心しつゝあるものゝ如し、甚可也。而かも此等は此新經營の實際に就きては末の又末のみ要する所は實に之に當る人物を得るにあるのみ、眞摯熱誠終世を此事業に獻するの士あらずんば千條の法規百萬の資金必竟何するものぞ

而も天下何の所にか、天然の彌勒、自然の釋迦あらむ、仁を求めて仁を得る所、人々皆堯舜たるを得べし、記者は茲に於て各宗青年の奮起を希望せざるを得ず、特に後來の處世に苦心して左魂右魄悶悶の狀にある吾宗の青年に對して痛切に時機の到來を警告せざるを得ざるなり。

當事者も亦此時機に際し力めて實傳道の要義を學徒に體得せしむるを至切とす、宗學講習會の如き煩瑣陳腐の舊宗乘を臚陳するを割きて宜く感化慈善救濟に關する實義を講習すべきのみ、是記者が甞て希望したる所、今此機會に際し更に之を再言す。

宗教大學が前學期已來感化法の講義を開始したるは頗る體を得たり記者は同大學が益此種の實力を學生に與ふるを希望する也。

各宗今や起てり、起つ甚美也、而も其起つや斷じて官僚閥族の寵兒たらむが爲ならず斷じて自派權力發展の爲ならず、斷じて名聲利慾のためならず、實に佛陀大慈の恩光を傳ふるが爲なるを要す、各宗當路者にして此事業の爲には時に自縲絏の辱に甘じて救濟の實を盡せる彼の法師春朝の決心氣慨ありて方めて免囚保護を云々すべきのみ苟くも此決意あらずんば到底有終の美を收むべからざる也、各宗當路者既に此事業に當る宜く時に錦襴を脫して印半纏を被着するの決心あるを要す、是實に事業を就すの最大基本也。

（大正元、九）

み、思想統一問題の如き迂遠の事、畢竟何する物ぞ。（明治四五、七）

◇先帝陛下（明治天皇）御追恩

大行天皇の至仁至德、今古比なく東西倫なし稱して、大帝と尊ばむと、其大以て盛德を顯彰するに足らず、讃して聖皇と崇めむも、其聖豈能大業を盡さむや、海外萬邦痛惜讃揚の熾なる前古今回の若きなく、億兆赤子哀嘆慟哭の深き實に此際に比するものを見ず。

天下思慕の誠兆民哀惜の情は今や廟社を帝都に奉奠するの哀願となり、「十一月三日」を永遠に保存するの希望となり、或は神苑謹造の議或は紀念銅像拜鑄の說縉紳識者の間に起り國民靡然として之に從ふ、孰れか是追慕の至情ならざらむ、誰か是忠誠の發露にあらざるものぞ、國民は今や切々謂らく、如何にして報恩追慕の誠を致さむかと。

吾宗は大行天皇御異例の報を承るや夙に各宗に率先して御祈願の忠誠を抽で、生者必滅の黒雲圖らずも天日を隱し諸行無常の悲風痛ましくも遠く鸞輿を運ぶや、祖山に芝嶽に八千の寺院一齊に起ちて御追悼の法會を嚴修し梵唄今や潮の如く起り、香烟方に雲の如く繞りて至心專念唯報恩追慕の涙滂沱たるものあり。

而も大に　先帝陛下の遺烈を稱揚し餘德を發揮し以て思慕の丹心を致さむとす、宜く永遠に紀念の誠を留むるの道を取るを要す、風教の振作、文運の恢興斯の如くして國家に貢獻し報效の忠誠を表することを得む世の縉紳識者の言議する所其精神謂ふに實に玆にあり。

記者は是に於て謹で闔宗に白す

冀くば紀念會堂を帝都に建立せよ

是闔宗の忠誠を表し、至仁至德を永遠に紀念し奉る最適の方法にあらずや。（大正元、八）

◇各宗先づ人物を獲よ

各宗當事者は、今や奮起免囚保護の實際に當らむとし、其態度着實眞摯有終の美を期するものに似たり、是確に大正新教界の慶事たるを失はず、吾宗當局がこの各宗協會の經營につき、終始奔走、力むる所少からざりしは闔宗の等

餘りに怠慢無能なるに憾なき能はず。

嗚呼此秋、此秋實に傳道の好機也、此好機に當りて今の傳道家に切實の修養と讀書と研究と工夫とを勸む。

（大正元、一〇）

◇歳末と佛教行事

宗教史家考古學者の研究する所に聞くに、夫の三四月の交に行はるゝ基督復活祭、及び此月末に來るべき降誕祭は總て古ゲルマン族の祭神の古式を轉化したるものにして、古代傳道者が換骨奪胎の手腕の非凡なるを窺ふべきものあり、大神ウォタンの敬畏、女神ホルダの渴仰は十字架の出現と共に脆くも根絕したりと雖、降生樹や迎春の祭典や、各種の祭式行事は尙千年已前の古風昔俗を留めて民俗の習慣は牢とし拔くべからざるを示す、而して之れを轉用利導したる古代基教の諸聖は其善巧方便の偉力、吾兩部神道の融會にも比すべく善權の妙術、東西一揆と賛すべき也。

二千五百年の古邦、風俗の醇美を以て誇る吾國に、典雅優美の祭式行事多きは固より其所、曲亭の俳諧歳時記を繙きて季題を閱しても、春夏秋冬、季として祭なきはなく、祭として趣深く優雅ならざるはなし、古代の碩德高僧は多く之を利用して敎化を播けり、否單に之を利用したるのみならず、又實に民情風俗の機微を察して新祭式を起し新行事を定め、能く國民の趣味に投合して、攝化の善巧至れり盡せるを見る、而して此善巧方便は鎌倉時代勃興の新宗教に於て特に著しきを認む。

近く之を例せむ、楓葉霜に飽きて晩秋盡き、天地肅殺、人心自ら省察の念を生じ來る今日、見よ、黃葉紅蘿錦の如き山寺に會式あり、霜風幕を動かす町寺に報恩講あり、十夜あり、晩秋と宗教、霜白き晨、報恩講の熱粥に感謝の念を高め、落葉繽紛たる夕、十夜の鐘に虔信の情を養ひ來れる吾等が古代聖者の活眼靈腕何ぞ夫深くして且つ至れるや。

泰西の趣味風尙、漸く吾國に津染するに隨ひ、クリスマスも亦年中行事の一として、歳々年々其盛大を增す觀あらむとす、古代支那文明傳播の時代にありて、滔々として支那の祭事を迎へて之を消化融會し、乞巧典に七夕祭の優雅を始めたる吾國民が今や泰西に於て漸次敎會性を擺脫して無邪氣の家庭祭となり來れるクリスマス淸新の趣味を感じ

◇布敎家に寄す

城柳宮槐搖落し去り、金風蕭瑟として白露袂に滿つる時人心自ら端肅にして、反省の念、深痛の思座ろに生ず、矧むや諒闇にありて人情の虔誠摯實自ら他時と異に、悲秋に對するの意特に痛切深刻を覺ゆるをや、方に是道を傳へ法を說くの好時機敎壇に立つもの奮勵努力すべき實に此秋の如く急なるはあらじ。

各宗派亦此好機を洞見したるか、或は布敎師大會を開き或は傳道會議を催し此千載一遇の好機を逸せざるに力むるが如く、吾宗の傳道家亦漸に動きて馬に秣ひ糧を貯へて大に軍容を新にするの狀あり、大正新秋の敎界蓋多少の慶賀なきにあらず。

而も近時所謂布敎家の爲す所を見、其說く所を聞くに其修養に於ても技術に於ても實に一層の勉强を要すべきもの比々として概是なるの觀あり、彼等談ずる所迂腐にあらざれば空疎、輕薄にあらざれば無學、摯實、痛切、淸新の感を惹くもの甚希に現代人心の肺腑に觸れ、社會精神の飢渇に應ずるもの寥々晨星も啻ならず、此の如くして道を說き法を傳ふ、其傳ふる百萬回にして、說くこと塵沙界に亘るも以て人心を指導し世道を開拓するに寸效なきを如何せむ。

傳道家の衰弊此の如く甚しく、敎壇の權威微々として振はざるもの蓋し形式主義及口舌布敎の病毒膏盲に入れるに依ると雖、亦敎家が敎化の方法、技術に於て毫も硏究する所なく、現代の思想感情、傾向嗜好に就きて殆ど無智なるもの其弊源たらざるを得ず、敎材を精選するの苦心、對機を洞察するの要意甚力むるなく徒らに舊套を墨株し一時を糊塗するもの實に是傳道無力の至大病源也。

記者時々街頭を步し電車に乘り、現代商店の廣告に苦心するを目擊し、謂らく現時敎壇の士にして若此等廣告に要する苦心の十分の一二之あらしめば卽敎壇の生氣に充ち淸新の趣を生ずる必らず別樣の觀あるべきかと、現時の廣告――之を歐米に比すれば尙幼稚とするも――が意匠の巧妙文字の精練、其苦心の決して尋常一樣にあらざるを見、新聞誌を利用する賣藥化粧品の如きものを薦むる方法が常に慘憺の苦心より得來れるを讀み、其世の視聽を惹き人情の弱點に乘ずるの術を解するを思ふ時、現時布敎家の活きたる人世に對する硏究と苦心が彼等市井の商店に比してすら

× × × ×

西園寺内閣僵れて後繼未だ定まらず、政論紛々或は官僚政治の横暴軍人主義の跋扈を憤り、或は政友内閣の不謹不忠實を罵る、而も一切の黨派爭權、感情、陰謀等の政治的云々を除去して之を達觀せば要するに積極主義と消極主義の衝突のみ、事業と經濟との喧嘩のみ、體面權威と生活問題との撞着のみ、大正の國民は今や此苦しきジレンマを渾ての方面に於て切拔けざる可らざる苦境に立てり、奮はざる可むや。務めざる可むや。

大正國民が煩悶しつゝある旋渦の中に、見よ、吾が宗門も大勢に回轉せられて大撞着大衝突の時期に刻々近くを、嗚乎見よ、現在宗門の經濟狀態果して如何、宗門が物質的の生活力今果して如何、而して今雲の如に起らんとする事業、宗門體面の爲に經營すべき施設を見ずや、憂宗の士、此痛切なる衝突の苦味を今夫如何に味はんとする。

大晦日來らんとす、此大晦日は或は快く通過し得む、而も國民の上、特に吾宗門の上に遠からず落ち來るべき恐るべき大晦日を夫如何に通過せむとする、憂宗の士西園寺内閣の崩壞に鑑み少しく警策せずや。

（大正元、一二）

◇元老を論ず

新しき内閣は元老諸公連日の會議幸にも小田原に流れず肝煎の效能漸くに現はれたるものか今や彌蓋明きといふ段取に迄進みたり、由來桂公の再起は西園寺内閣の崩壞と同時に、早晩必らず之あるべき運命なるを早く既に觀測したる怜悧兒すらあり、多少政界の雲行に通ずる者は十の八九大體其と目星を付けたる程なりしに、是すら元老連の相談を通過せず其允可裏書の形式なくては手も足も出でざることを明に示したり、何事にも新しきを好み、女房と疊といふ諺は愚、苟くも物といふ物新しからずんば承知せざる吾國民も、いざ鎌倉といふ曉は舊の又舊大舊の元老を擔ぎ出し其厄介にならざれば到底致方なきを今回の政變にて自白したり、元老の勢力今更ながら恐れ入る外なし。

元老連の勢力權能右の如くに廣大なるは泰西諸國に殆ど類例なし、我國の元老は其忠君愛國の精神老て益盛なりと賛すべきか、國家が元老優遇の有難さに吾國特別の情合ありと申すべきか、或は大正の今日新進の人々が甚意氣地な

之を歡迎せむとするは寧ろ怪むに足らず、乃ち怪むに足らずと雖も佛敎徒は此最近の民俗風潮に對し何等思慮する所なくして可なるかや否や。

十二月の行事祭式、古來少きにあらず、成道忌といひ佛名會といひ曰く針供養、曰く追儺、之に新要求の趣味と形式とを加へ時代化して敎化に資せば其人心に投ずる必ずしも舶來物の下にあらざるべし、傳道家は宜く此等舊行事の轉用利導につきて常に一隻の眼光を有せざるべからず、是目下切實に必要也。

『古壺に新酒』といふストラウスの言は敎理發展の上のみならず、實際傳道上實に善巧方便の最上乘ならむ。

（大正元、十二）

◇人事匆忙（歲末感）

森蘭丸信長の陣にあり、短兵急鋒相接し、叱地喑啞戰方に闌なるとき其文書を草するや、謹嚴の正楷一點苟くもせず人其大綏を責めて急に處する當を得ざるを以てす、蘭丸曰く急促の時、至迫の際、即是最重最大の事決す、豈夫愼重に愼重を加へざるべけむやと、蘭丸の性格に於ては吾悉く其愛すべきを知らず、而も此語に就ては每に津々の妙味を感ず、特に歲晚に於て切に其妙の甚しきを見る、大匆忙の中實に大閑の工夫を要し、大塵大俗の時眞に大超脫の精神甚必要也。

歲華推し移りて人々匆忙を極め、市井織るか如く、門巷鼎沸の狀あり此匆々忙々の中、省察生じ慚愧起り、感奮發す、之に相反するものは自暴自棄の慘あり、屈伏挫折の恥あり、甚しきに至りては桎梏の罪に陷り或は自ら身を滅すの悲を見る、歲晚は是人生の最眞面目なる時ロングフエロヲの歌へる如く一生を一場の戰鬪とせば、歲晚は是危急存亡の瀨戶際にあらずや、此眞劍勝負の處即宗敎の最必要なる時也、傳道者は此際に處して深く自ら修養すると共に亦此人生の大活劇に對し、機微に觸るゝ攝化の善巧を忘れざれ。

終日計算と數字とに勞し、奔走と算段とに疲れ、殘燈に大息し寒衾に困臥する時、一枚のトラクトあり一冊の傳道書あつて力と慰と反省とを與へば即如何、敎化の妙は實に此にあり、寺院たるもの願くば歲晚品物を檀信徒に贈ると共に切に此傳道の重要時期を逸する勿らんことを。

喝破せり。

オイケンの此著は三門より成る、第一は問題の整理にして、先づ基督敎の現在と將來との實狀を觀察し、次で近代に於て基督敎と衝突すべきもの何なるやを列擧し、最後に基督敎滅亡に對する推着點を、世界に於ける同敎の位置人類の輿望及勞働の內的性質の三面より論究して、整々堂々論陣を進めの第二門に入る、解答の根基として新生命の具象と宗敎的應用との兩側を痛論し第三門に來り、基督敎の改新的可能性を說き、成立敎會中に於ては此改革不可能なるに絕望し、最後に新基督敎興起の避くべからざる要求を述べて卷を終れり。

豈ひとり基督敎のみと云はんや、『吾々は尙佛敎徒たり得るか』、是れ實に現在日本の大問題にあらずや、而して此大問題が燎原の火、奔流の勢を以て思想界に流注し來る時、佛敎の各宗各派は高く其門墻を築きて絕えて墻外の大勢に通ぜず區々の形式を云々し煩鎖の愚階級無益の繁文縟禮に拘々焉として瘦心腐心、維れ日も足らざらんとす、而して國民は『吾々は尙佛敎徒たり得るか』と呼號しつゝあるを知らざるなり。

（大正二、一、）

◇一宗公僕主義の實行

「宇都宮新執綱に望む」、如何に沈着保守の人なりと雖、一たび新たなる地位を占むる時は、何か目先の變りたる一仕事をと云ふが、普通の人情なり、望月前執綱が種々制規の更正を實行したるは、勿論世運の進步に適應すると云ふ大方針に出でたるものならむが、其一面は確かに亦此人情の露現なりとも思はるゝ。そは兎もあれ、新舊執務者交迭の際には、尤も人氣に投じて新事業新計畫が施設さるべき好機會にして、或點より見れば此の新しき仕事を缺くときは代り合ひて代り榮も致さざる感なきに非らず、宇都宮師今や初袷快よく新執綱の椅子に倚る、定めし種々新經營の腹案あるべく、一宗もまた種々の新注文を持ち出すは必定謂ふに代り榮のある何等かの新事業が遠からず實現せらるべきことと信ずる。

就ては記者も此代り目に當りて極めて簡單なる希望を開陳するの榮に預りたし、手早く申さば別義にもあらず、宗局執務の實際をして、力めて簡捷輕易ならしめ、親切利便

きを憤慨すべきか、元老の厄介になるが有用なるか、利害得失是非の議論は且く措き、人生にて云へば既に是十二月大晦日に程もなき年輩の元老が國家最高の顧問最後の救世主として兎に角盛に奔走するを見て、此歳晩に對する時、別様の面白味を感ぜざる能はず。

政界元老の活躍右の如くなるに比し教界各宗の元老如何と見るに、是は又其凋落衰廢の狀見るも氣の毒の有樣也、講壇の元老は田舍廻りを專業とし絕へて中央の講壇に氣焰を揚げず、學界の元老は修養講話や御說教に隱れて、新研究など發表する勇氣全く零となり、新進の指導、問題の中心などは思ひもよらず、元來なれば政治杯といふ方面には老人は邪魔者となり甚厄介なる處あれども、法臘を貴び長老を重ずる宗教界には、元老生存の權利確なる筈なり、然るに現在の所、全然反對なるは甚奇怪ならずや。

教界の元老に二種あり。其一種は本山の奥深き處に祭り込まれ、金緋の木偶として活社會と沒交涉に活感化の全く之なき長老連、他の一類は姥捨山同樣生ながら教界の一隅に葬り去られて全然生存の意義を失したる老朽連也、祭り上げらるゝもの、捨てらるゝもの無能暗愚にして、捨つる者祭り込む者冷酷狡猾なるか、抑其凋落衰廢の原因如何に就きては種々議論あるべし、乍去昔時學林の小僧にして、偶には禁足や停學も命ぜられしことすらある御連中が今や時めきて横行濶步團子の丈比べに役にも立たざる喧嘩沙汰を演ずるに當り、當時の先生たりし人々袖手傍觀之れを如何ともする能はず、小言も睨も利かずとありては、今更ながら甚敷賴母子からぬこと、いふべし、横暴の振舞などありては迷惑千萬なれども、苟くも一宗の教長ともあるべきものは時にはイエスイツトや救世軍の大將軍位の實際的貫目と威力とが欲しきものにあらずや。

世は師走の霜枯時也。霜枯の寂しきは現時の教界にあらずや、行誡上人もなく日薩和尚もあらず、韶舜和尚も存せざる元老凋落の教界は嗚呼實に寂寞たる哉。（大正元、一二）

◇吾々は尙佛教徒たり得るか

世界學壇の泰斗にしてエーナの小天地に天下の耳目を集中せしめ、巨然思想界の一大巖石たるルードルフ、オイケンは去歲一小册子を出したり、題して『吾々は尙基督教徒たり得るか』と云ふ、題目既に現在の最大問題を遺憾なく

る手腕に信頼し、其平民主義、公僕主義、實行の手初めに先づ此忌憚なき無禮なる一文を寛假せられんことを懇願して置く。

（大正二、五）

◇小林芳次郎君の「念佛たばこ」

高輪淑女學校長小林芳次郎君は西本願寺の篤信者也、其經營する所の學校は同氏大信大行の現はるる所、教習にも管理にも、渾て念佛主義を經緯とし、教室に佛壇を奉安して教科の傍、勤行式を課す、眞に都門女學界の異彩也、小林氏は此の如くして同校經營に力むる十數年、校甚大ならず、出す所の卒業生多からずと雖、出す所は悉く純信貞淑よく家を治むるの淑女、奠然として紛れたる世間女學と別趣を具ふ。

小林氏は此の如くして勤勉篤行の教育家なり、而も氏の深牢の信念は至る處に發して、其親切の情。報恩の誠は自ら人を動かすに足るものあり、氏が苦心の『念佛たばこ』の如き確かに其一例となるべし。

小林氏は遍く其知人友好を說きて鋭意卷煙草の喫餘殘片を集め、空しく吐月峯中に委し塵芥に歸すべきものを救ふて、之を一箱に集積せしめ月々使丁を遣して之を受く、而して此請ひ來れる幾百幾千の殘片を氏は夫人と共に親しく丁寧に整理し、其紙を解き不潔を除き燼灰を捨て眞に殘餘の草のみとりて、且つ淨め且つ乾かして、之を煙管用の煙草に再製し、凡そ二三十服の度を以て一小紙包に收む、此の如き紙包百袋二百袋、其原料の如きは蓋し幾千片の殘喫を委するを知らず、其苦心と努力は眞に尋常一樣のものにあらざる也。

小林校長は此苦心の再製煙草に名するに『念佛たばこ』の稱を以てす、蓋し一服の間も佛恩を念ずべきの深意也、而して此貴き名は氏が愛育の女生の纖手によりて小包毎に筆蹟鮮かに題せられ、遍く下屬の同胞、煙草を得るの便乏しき人々に施與せらる、東本願寺經營の無料宿泊所の如きは其恩澤を被むる實に大に之に由りて、大いに信念と慰安とを得たり。

小林校長は吾宗に勞働共濟會あるを聞き、實に百數十包の『念佛たばこ』を惠み、既にして百、既にして二百、今や第三回の施與に接したり、舍内の勞働者は此好施に多大の慰安と喜悦とを得、封中線絲の煙草にも、自ら着實、勤儉

ならしめ、所謂お役所風御役人臭味を全然撤廢せんことを希望するに過ぎず、卽ち飽く迄も一宗の公僕として宗務屋の番頭ぞと云ふ觀念を以て文明流の平民主義を實行せられたきこと是なり。

警察のコラ〳〵がモシ〳〵に改まり、命令と階級が生命なりし軍隊に於てすら、今は國民的家族主義が教育の大方針となりし現代ならば、勿論少しく大勢に通ずる常識の人ならむには、愚にもつかぬ階級や、要もなき繁文縟禮にも拘々として小天地の中にお山の大將然と威張り散らす馬鹿々々しさは、之を敢てするお芽出度人もあらざるべし、宇都宮師は老練熟達、世故に長け、人事に通じ、圓滿着實の人なれば、必らずや京都邊の某々派に毒禍を流醸しつつある夫の階級主義や、役人根性の弊害を確かに認められたるなるべく、將又此の如く愚なる階級主義が最早時代後れの殘物にして敎運發展の爲に至大の障礙となることは其實際の經驗よりも御承知のことなるべしと確信す、而して新執綱が此平民主義、公僕主義の實行は難かしき經綸論の御說明や複雜巧妙なる畫策經營などよりも、實際上、宗門の發展に如何許り慶福を齎らすや計るべからざるなり。

尙、此問題に關し一言致し置きたきは、今期の宗會を通

過したる夫の七面倒なる職制や俸給例の事なるが、此等は成程宗門統治の必要上、秩序系統を重ずる點より設けられたる樣に見え、一應は相當の理由なきにあらず、又さして有害不都合と云ふ程のものにあらず、さり乍ら若大勢上、教學の發展より見れば、先に如何樣にても可なる底の代物記者の如き提案當時多少諷諫を漏らしたるも強いて反對する程の價値すら認めむ、其儘となし置きたる位なるが、此等の制規とても若不幸にも事理を解せざる沒分曉漢の手に惡使濫用せられんには、必らずや忌むべき階級主義を馴致し、御役所流義役人根性を益々增長せしめ、ビューロークラシーの害毒堪ゆる能はざるに至る虞れなきに非ず、然るに幸にも宇都宮新執綱の老練なる手心と熟達の取扱により新職制も巧みに活用せられ、さしたる弊害なく無事に其條項の實行を見るに至るべきか又かの俸給例の如きも或は單に宗務机上の空算に出て實際上には尙幾多の研究を要する餘地あるやうにも見受けられ、杓子定規に之を何れの方面にも運用するときは、隨分不都合不合理の滑稽を演出するなきにあらず、これもまた新執綱が老練熟達の手心と圓滿周到の取扱とを必要とするものならむ。是れに就きては、尙少しく議論もあれど、序でに一言して新執綱の代り榮あ

◇宇井、神林、池田三氏を送る

（大正二、九）

現時佛教界の通弊、浩嘆に堪へざるものあり、流毒暴融法運の壅塞を來すの慘、豈云ふに忍びんや、其禍根弊害を直し來るに一にして足らずと雖、輕薄利口の俗才を重んじ力筆薄書の小材を尙び、無學無識の守錢奴を高しとし、學問の尊嚴を忘却し、學者を輕侮冷遇するに至らざるなき、實に其主因の一たらずんばあらず、精透牢記の識見世を指導するに足るなく、重厚の風、謹嚴の德、地を掃ひ鄙陋粗野の俗滔々として群を爲すもの、之に基因す。此際洞の宇井伯壽師、眞言の神林隆淨師、天台の池田澄達師、梵學研究の爲に船を同うして渡歐の途に上らんとす。盛ん、此の如きは實に空前の事、獨り帝國の文運に光彩を添ゆるのみならず、萎靡沈滯せる吾が東洋學の爲に奮起を促すのみならず、亦佛教界の通弊を覺醒するの快擧として、人意を强うするに足る。

宇井文學士はチユウビンケン大學に懸籍し、ガルベ先生の指導を受けむとす、先生が印度哲學の造詣深遠なるは學界定評あり、特に數論哲學研究に於ては獨壇の名家印度に遊ぶこと長くして爛燦たる筆力亦獨逸文壇の雄なり、宇井師超邁の識力印度哲學の研究漸やく蔗を嚙むの境に入る、今や詩聖ウーランドの徜徉吟哦せる風光絶佳の地に於て曠世の碩學に師事す、其後來の見るべき眞に健羨すべき哉。

ラインの長江、岸兩畫くが如き明媚の山丘を通じて蕩々の淸波、怪嵯奇石と相映ずる所、ボン大學あり、教授ヘルマンヤコブ印度史詩及ジヤイナ聖典研究の白眉として學界の雄鎭たり、是吾が池田文學士が大史詩摩波羅と佛教との關係を闡明せむが爲に赴くべき所にあらずや、往け男子、ラインの長江、飛龍岩の奇勝、豈ひとり獨逸人の爲に美ならむや。

和蘭は近世文明の先輩也、英獨未だ雄飛せざりし時、露米の崛起せざりし前、和蘭は雄邦中の霸を以て居れり、ライデン大學は此和蘭全盛時代の記念學府也、瓜哇、錫蘭其他諸國より蒐集したる幾千幾萬の佛像佛具の類は尨然として大學の研究室に滿てり、教授スパイエル、此大學に在り撰集百緣經梵本の出版者として幾多佛教に關する名論文の稿者として聲名一世に高く、眞に大學者ケルヌの嫡脈たる

忍耐、努力、親切等の偉大なるを感じ、一服の『念佛たばこ』は各師碩學の訓話に十倍するの功あるが如く、教界に定評ある小林校長の信仰と德行に對しては今之を品評せず唯、記者は此『念佛たばこ』の一事が、大に吾宗教徒の痛誡たり警策たるを示めさんと欲するのみ、敢て當路と云はず敢て本山と云はず、敢て一般寺院と言はず、今の宗門は『念佛たばこ』が詮する處の着實と勤倹とを缺かずや、親切と熱心とを缺かずや、忍耐と丹精と勤勉とを缺かずや、事務の敏活、布教の皇張、學事の刷新、大に其聲ありて、其實甚だ擧らず、財政の整理、本山の再建、大に進むべくして共進めむとの色ある吾宗は或は趨りて小林校長の門に到りて、一服の『念佛たばこ』を乞ひ、且喫するの要あらざるか、如何。（大正二、八）

◇乃木將軍の一週年を迎へて

國民は乃木將軍の一週年祭を修して忠烈の氣、千古に日星を貫くを仰ぐ時、其殉死の意義が益深くして、更に新なるを痛切に感じたるなるべし。

國民は漸く沒我奉公の精神を喪失せんと欲す、將軍の死は之を鞭撻せんが爲なりき、而して將軍の死後、醜陋なる個人主義の横行彼が如し、文臣の錢を愛し、武臣の命を愛する彼が如し、外交の振はざる此弊根あればなり、文教の擧らざる此弊根あればなり、將軍の一週年を迎へて、豈無限の感慨なかむや。

國民は職責嚴守の德を缺かんとするや久し、將軍の死は之を覺醒せんが爲なりき、而も朝となく野となく、昭代の聖恩に答へて、其職責を嚴守するもの幾人ぞ、國民が將軍を思ふもの、夫家食ふして良妻の思ふの比ならむや。

國民は奢侈矯飾自ら守る所なくして、輕佻浮薄國運の衰亡を意とせざらむとす、將軍の死は之を打撃するが爲なりき。而も將軍墓畔香煙徒らに濛々として、勤倹質素の風、地を掃はんとす、嗚呼、此時誰か將軍の遺德に痛切の回想なきものぞ。

國民は共濟共勵の精神に乖きて、階級閥閱の思想を長に他人を排しても尚自ら厚きに就き功に居らむとす、將軍の死は實に此等萬骨を靡亂して、一將の功に傲るの輩を調伏する爲なりき、而も滿朝滿野、今や多くは自ら功に傲り安に居るの人、天下の將軍を慕ふもの豈偶爾ならむや。

名物たり、之に撤退を逼るが如きは、自ら公園の衰頽を招く所以のみ。

公園設備の完全は實に可なり、而も記者は風教を毀つのシヤンジエリゼーを欲せず、歴史を無視するのチーガルテンを好まず、徒らに享樂優遊の爲に市民の淸涼境となり、現に偉大の慰安を與へつつある淨域を汚瀆するを遺憾とす嗚呼、前將軍去りて未だ三十五日の忌をだに迎えず、而も市政者は德川氏重大の恩を忘れて、其祖先崇敎の記念道場に壓迫を加ふる如きは、元大江戸の市民として德義上、大に慚愧すべく此忘恩の愚擧が敎育上の惡影響、夫如何ぞや市政者よ、希くば芝公園をして忘恩違義の惡遊園たらしむる勿れ。

而も此稿を草して、大に山内の寺院諸師に警告す諸師希くは、其寺院學寮をして必らず東照神君興學護法の大精神に副ふものたらしめよ。公園内に有利の地を占むる諸師は、青年寄宿舍、兵士の家、圖書館少年少女集會場の如き、幾多の文明的設備を設けて、大いに寺院を利用し、模範的に市民に道場の威嚴を示めす便あらずや、而も今の諸師、果して市民の欲する所、識者の希望する處に副ふや否や、市政者が山内寺院を壓迫する固より暴也、而も此壓迫を招くは、或は又其罪を諸師に歸せざるを得ざる遺憾あるを思ふ。諸師希くは此際深く反省三思せよ。

（大正二、二）

◇江原素六氏に言ふ

江原素六氏、佛敎徒談話會が米國大統領に致せし大會電報の中『僻見を袪る』文字あるを忌み、之を責むるが如し、君子人の言也、而も想へ、夫の黄禍論や排日運動や、之を僻見より來らずとするの理由ありや、敎家は必らずしも辭令巧妙の外交家たるを要せず、事實を事實として眞摯に誠直に諫曉せる夫可ならずや、基督敎に於けるプロテスタンド(反抗敎)の意味も一面ならずや、極端に例をとらば、メリー女王を痛責せるノツクス、羅馬法王を罵倒せるルーテル、北條氏に逼れる日蓮、慈眼愛膓の士、亦時に此事あるにあらずや。吾人は僞善にして君子を衒ふ宗敎家を恥として巧言令色の侫僧を以つて罪惡の兒と爲す、豈詼辭、美言を弄して天下を誤まらんとするの陋に忍びんや。

（大正二、十二）

に恥ぢず、神林文學士、玆に來りて大に爪哇佛教美術の粹を捜り、祕密佛教史に於て發明するあらむとす、意氣眞に盛んなりと云ふべし。

三文學士研究の目的は眞に吾學界の須らく力むべくして未だ力めず、行ふべくして未だ行ふ能はざりし所、而して世界が切に其新研究の成るを翹望する所にあらずや、現時印度哲學と佛教との關係に於ては、纔かにマックスワレーザー氏一人を見、大史詩と佛教に於ては不肖が多少の端緒を開きし外、甚だ聞く所なく、佛教美術、特に密教々理との關係に就ては一のグリュンヴェーデル博士ありと雖、甚しく見るべきものなし、此際世界梵學界の壇上に三文學士の成功を望む豈獨り吾國文運の爲のみと云はむや。

（大正二、九）

◇增上寺山內寺院の活用に就て

東京市が芝公園設備の完きを望むが爲、其計畫に從ひて山內寺院の二三に、或は門墻の撤廢を逼り、或は位置の轉換を命じつつありとも云ふ。東京市が公園を美にし、其設備を完全にして市民享樂の便を計らんとするは其精神可ならざるにあらず、而も之を歐米市政の實例に見るに、健全なる市街の設備は歷史を尊重し風教の振作に愼重の注意を拂ふて、而して後、初めて其完全なるを見るのみ、必らずしも歐州の大都市が一古樹一古墳の微と雖、精細の保護を加へて道德的意義を涵養するの實例を示めすを要せざるべし。

緣山は德川氏崇敬の致す所、今の幽邃無二の勝地を開拓したるものにして、一寺一院と雖、德川家信法崇教の遺跡ならざるはなし、特に妙定院の如きは德川家列祖追福の爲に創設したる當念佛道場にして、淸淨の靈境今に寺院の模範を示し、鑑蓮社亦之に同じく今や盛に信徒集めて精神の慰安に力め、其中に權貴の婦人亦少なからず、或は忠魂錄を編し、或は廣く施藥に力め實に傳道の典型たるに足る、其風教に補ひある、豈言を待たんや、芝公園は此の如き歷史的の道場風教補翼の靈地ありてこそ、方めて市民の良好の感化を與ふるを得べきのみ、之に位置の轉換を逼るは寧ろ市政者の短識を海外に暴露するにあらずや、寶珠院の如き其奉安する閻魔王像は一部市民の崇敬盛に、優に市の一

めすを信ぜんと欲す。

思ふに増上寺再建の如き、社會事業經營の如き、宗門緊切に資金を要し、而も遺金寄附の最も適當なる方法、淨財活用の法今や自ら善をなすを待つものの如し、此際、豈十方僧物、三寶物を私して空しく不淨財たらしむべけむや。高德の老師等をして守錢奴、有財餓鬼の醜名を流し、遺德を汚瀆せしむべけむや。

（大正二、一二）

◇大古の中、大新あり

悠々たる永劫、天地古く日月久し、此中新春旭日の光特に新たるを仰ぎ蒼々たる天、方に淸鮮の喜色あり、大地穰々別に生々の氣、横溢するを見る、大古の中實に大新ある哉常恒不變の法身は見よ、潑溂變化の妙用を示す箇の如きを元旦先づ襟を正うして對する眞に此至境也。

此至境は蓋し大正二字の詮する所にあらずや、大は以て實在不變の體に取るべく、正は以て四時百物毫厘も差なき天則の變化を頌すべし、大古の中に大新あり、大正の二字元旦最至味津々たり。

如來大慈の敎を仰ぎ、自信敎人信を期する吾等は此感特に深く此味定に長し、大悲の慈光は無邊の至空間也、其妙體の壽命は無量の實時間にあらずや、此大光動く所、攝化十方長へに熄まず、此壽命常に活動し、刹那の微と雖、偉大の力と淸新の生命とを與ふ、元旦壯大の宇宙觀に端然として正坐するとき、吾等は佛身觀に入る、此觀に入りて宇宙更に壯嚴に新年彌尊し。

吾等何んぞ、如來の愛子にあらずや、父子相迎の誓は久遠に存じ聖衆倶會の樂、永劫に吾等を待つ、嗚乎吾等と如來一に何ぞ古き、而も如來の大慈悲を體して動くとき新なる生命湧然として出で、人生の眞義方めて明也、吾等元旦諦觀すべきもの此新生命也、此眞意義の人生也。

此の如くして元旦は純美の景、至善の德、天眞獨露の眞境、眼前に横る、夫何を以て之を頌し之を賛せむ、起ちて旭日に「御名」を呼べ。起ちて大宇宙の妙莊嚴と大力用の前に大法爾の「御名」を呼べ「御名」ぞ唯一此至大至正の境に於ける無二の詩歌也、斷案也祈禱也。

此呼ぶ「御名」に吾等の慚愧あり、努力あり、奮勵あり微々たる吾等なくば御名に依りて、國家に盡し、世界に盡

◇加特力敎の威力を論じ増上寺再建運動に及ぶ

加特力敎が現代思潮と直容れず、羅馬法王の權威は些かにバチカンの一隅に舊儀禮を殘すに留まれりと雖、而も其陰然たる勢力は尙歐州の政局を震憾するに足り、英邁のカイザー陛下をして、尙、時に秋波を法王廳に送るの已むを得ざるに出でしむるもの、豈偉ならずとせんや。

加特力敎の威力尙此の如きもの、其原因一にして足らずと雖、其一は敎會威力の豐富强固なる點、與つて力大なり獨逸聯邦中の大敎會は大低巨萬の資産ありて、寺院の修繕の如き、大抵信徒を煩さず、其各地に傳道して成績の優良なる、必らずしも神母に廣大なる建造物を有する女學校及夫の曉星中學等の好適例を枚擧するを要せざらむ。而して此强固の資産と豐富の流動資金はみな僧侶及信徒の遺産其大部を占む、一信徒死するや其遺産の全部若くは幾分は必らず寺院に入り敎會に來り、若くは慈善敎育の機關を潤澤す僧侶また同じ、是記者が實見する處、加特力敎會の富有なる之が爲のみ。

記者は加特力敎の高潔なる學僧にして、パーリ佛典の研究家なるエドモンド・ハーデー師を識れり師が增一阿含經原文刊行の如きは、現に學者の感謝する所也、師昇天するや、遺金三萬餘、之を全部ミュンヘン大學に寄せてパーリ語研究生の學費となしたり、是一例のみ、天下幾多のハーデイ師あり、加特力敎の慈善事業、社會事業が新敎の地アメリカに於てすら雄視する所以のもの、此精神と實行によるのみ。

現時吾宗高德の老師淪亡相次ぐ、聞く多くは福業圓滿の人と、希くはハーデイ師の如き擧、加特力敎信徒に劣るなき高潔にして遺德を顯彰するの擧が、着々行れ以て範を宗門に示めさんことを切望す。

此等高德の法資法孫、名を賣り、譽を衒ふを恥じて、修陰德幾多の宗門を利し社會を福するが如き遺金配與の擧が祕密に行はれたるべきも記者或は推斷する處、而も伊豆某寺の一僧が其遺産の大部を增上寺、宗大等に寄贈したるに見、且つ現時社會名流の士が其遺金を慈善事業に寄附するの美風あるに徵しても、記者は濟々たる法資に富む此等諸師の遺金が、必らず何等かの方法に依りて宗門に模範を示

せざるべからず白毫の慈恩、幸に大厦高堂の中に居し衣暖に食豊なるの幸ある諸師、希くは松皮を煎、木實を砕きて、僅に口を糊する北海の飢民、風霜家なく、家産悉く熱灰に蕩盡して路頭に泣く九州の窮生を思ふとき、豈不慳の財を喜捨して普濟諸貧苦の慈悲を行するの志なきを得むや。

記者は此際更に一宗の識者傳道家に告げむとす希くば今回の救恤方法をして周到親切有終の美あるものたらしめよ、布教團員が一笠一枝親く被害地を訪ふて慰問を與ふることは第一に必要也。孤兒寡婦窮老の伶仃頼るなきものを救護して相應方法を講じ、各方面の慈善團體と交渉し其生活の保全を圖る次に最必要也。荒蕪崩壊到底生活の方法なき地にあるものは移民方法を講究して親切に新生活の指導に當る次に甚重要也、而して此等の實行に就きては布教團員は東北救濟會の如き江湖有力の團體と連絡を取り奮ふて其爲に動き共慰問使となり、勸募員となりて充分の力を盡すを要す。此等朝野貴紳富豪を中堅とせる團體も其救恤の實行に丁りては實に宗教家の力を待つもの甚大なるものあれば也。布教團員は宜く速に此等と連絡を取りて一致行動を取るを謀らざるべからず。

記者は再たび玆に布教團員及一宗の諸師に對して更に克己自制の此際切に必要なるを思念せむことを希望す。救恤運動の期間は其嗜好する所を節約して饒益有情の爲に勉められむことを懇請す。是實に人を感ぜしめ世を動す最上乘の法也。最有力なる傳道也。記者は玆に於て府下荏原の老宿河野達民師を想起せざるを得ず、師が所住の寺院は必しも肉山酒地にあらず。唯師は克己喫煙を禁ずる十數年。之が爲節し得たるの費を擧げて嘗て宗教大學に十數卷の珍籍異書を寄附し、今春復勞働共濟會と養老院に金圓を贈りて歡を勞働者及孤老と共にせり。是豈今救恤の擧に力むる傳道者の龜鑑ならずや。禁煙既に然り、矧むや其他をや。

× × × ×

リヒテル事件一たび伯林に勃發して、世人帝國海軍に疑訝を懐くものあるに至る、蓋し昭代の不祥事也、而も官人が大厦高樓に安居し鉅財豪富、給する所に過ぎ、俸祿に超ゆるもの豈獨り海軍の二三高官に止まむや。岳武穆の文臣不愛錢、武臣不惜命に正に相反する滔々多くは是也。佛と云はず基督と云はず、教家今や此輩權貴に阿諛して佞辯を呈するを知りて、痛棒熱喝、懺悔を教へるの好漢なし。嘆ずべき哉。

（大正三、二）

し、人類に盡し社會に盡すを得むか、此「御名」一つ。茲に吾等宗徒の和協一致あり、慚奮興起あり、永遠の刷新改善あり。嗚乎大古の中の大新、大正の二字、南無阿彌陀佛。
（大正三、一

◇布教時言

武技を修むるもの、寒中三十日特に嚴重なる訓練を行ひ霜晨星光參差たる下、熱汗淋漓として龍闘虎奮の壯快を極め、以て大に身心を鍛冶し、稱して寒稽古といふ。寒稽古は獨り武道に止まらず。歌曲管絃に專らなるもの、亦此期に丁りて、殘月氷華、曉風針の若き露臺に座して、技を練り聲を修む、優倡舞妓の輩、嬌喉を破り、纎手を裂き、香血を絃管に灑きて努力奮勉するもの、甚少からずといふ。工場の徒弟が、氷星寒月、寒參りに六根清淨の聲勇ましきもの、亦是一種の寒稽古に外ならず。

佛門に於ても嘗て寒行あり。寒念佛あり禪門に於ては今尙此期待に攝心に力めて修練怠るなし、聖胎長養の工夫特に此期を可なりとし、身心の鍛練を行ふ寒中よりよきはなければ也。吾宗幸に別時行儀の嚴儀あり。此期を利して之を行ふ、蓋最修養に功を見むか。

記者は此修養の好期に丁りて特に全國布教團濟々たる勇將猛士に建言せむと欲す。希くば此寒中を利して大に身心の修養を力め、辯論を練り、素行を砥礪し、强健なる身體と堅實の意志とを育成して以て宗門の堅城鐵騎たるの素地を造るを要す。諸君は既に社會の木鐸として風敎の支持を以て任とするにあらずや、卽其修養する所豈青年武伎の徒に劣る所ありて可ならむや、豈舞伎優倡の輩に及ばざる所ありて恥なからむや、——霜晨の佛名高く澄みて大衆嚴に慚悔を修する時、寒夜街頭に大擧して獅子吼聲振ふ處是敎家生命の存する所ならずや。

×　×　×　×

今や佛敎各宗は競ふて東北及九州慘害救恤の運動を開始し訓示を發し慰問使を派し金品を勸募し其成績見るに足るものなしとせず。本宗また此間に立ちて大に濟生の爲に奮ひ東京布敎團の如きは特に率先して熱烈に義金勸募に努力し、大に江湖の同情を集中しつゝあり、事實に喜ぶべしとなす。本宗寺院たるもの此際宜しく布敎團を援護し、内外相應し凍餒飢餓の同胞を救濟し、以て國家宗門に報效を期

あらむとし所謂伴食の汚名を解脱せんとしたるは、一時の歡喜に過ぎず。依然として椅子は重みなき腰懸たるを證し、前大臣が教育に對する改善も、將又宗教に就きて尤らしき言明も、今や空約束となり、政黨内閣の均勢は、實地の所教育宗教より大事と相見へ、愚直なる教員連、朴實の坊主共をして又もや新大臣の方針如何を心配せしめざるべからざる場合となれり。凡そ此の如き文部省にして、右の如き事情の下に交迭する文相なれば、其實、縱令政友會の陣笠連の甲君乙先生を迎ふとも、致方なき所記者は寧ろ大岡氏の如き黨歴に富める領袖の來りたるを光榮とすべからむ。

大體邦人は餘りに大臣に重きを置くが抑の心得違といふべし。進歩せる國民にありては、各主務省の長官は、結局眞面目に當該機關を運轉し、嚴重公正に監督行屆き、正直に帳面尻を抑へ、機敏に執行濟の調印し得る常識あらば可なるべく、かゝる事務員長ならば、別に大岡氏の伎倆や黨歴を待たずして可なるべし。矧んや其學德人格を云々するに及ばんや。實を云へば文相に必らずしも偉大の人格を要せず、學德の如きは間に合せ出來合の安物にても毫も不都合あるべき理なし。小學校長にして偉大に田舍中學の教員にして文部省を指導し得る樣になりてこそ寧ろ健全なる國民の發達狀態とや云はむ。文相の人格を云々して神佛の如き人を要求し、學德双絕天神樣の如きを一つ橋に拜まむとするは是官僚萬能主義より出でたる意氣地なき陋見にして、自ら治め自ら進み自ら律するの力なきを自白すると同然也。國民は今少しく自覺自重して官僚崇拜の中毒を根治せんこと肝要也。

人誰か親任官の大禮服を着して呱々の聲を擧ぐるものあらむ。何事も何物も其職に居り其位に處すれば狂愚にあらざる限如何樣にか參るもの也。馬子にも衣裳といふことは此處確に千古の眞理也。大岡氏の貫目や教育宗教上の經驗閱歷など云々する輩は、餘りに御心配過にあらずや。

是の如し。記者は新文相の就任を尋常一樣の平凡事として別に意に介するに足る大事とも認めず。唯一片祝辭の禮を致し、併せて前大臣殿切角の御約束を反古にせず。否更に一層之を適切着實にして極力教育の積弊、宗教の腐敗を掃蕩し、特に教育宗教問題に出來得る限り親切周到の方針を取らむことを切望す。謂ふに教育宗教に全然素人の新文相は寧ろ此改善事業通り善くはあらざるか。而して特に切望する所は文部は國家國民文教の統管機關にして民心世道に最重大の關係あるは云ふまでもなく、勿論政友會の優待

◇淨土宗全書の完成

宗門の至大慶事に當りて、恰も『淨土宗全書』が多年の辛酸を閲みして、漸くにして完了を告げたるを見る。是祖意の期する所ありて、自ら然るを致せしが如きの喜なきを得ざるなり。宗門の慶福は東西に於ける拜戴奉迎の大典已外此學界の慶ありて、期せずして自ら更に宗門の威嚴を添へ來るの感なくんばあらず。宗典の刊行に關して畫策努力せる林野上椎尾等の諸師共編纂に與れる梶守中松濤高野千葉等の龍象而して此至難の事業を經營して蕭相國の位置に立ち有終の美を完うせしめたる傳通院貫主野澤師の功勞に至りては、闔宗は此一宗の至大慶事にあたりて大に感謝する所ありて可なるべし。而して此宗典刊行の完成は、獨り宗門の名譽のみにあらず實に吾國學界の光榮なり。記者は之を機會に、一宗の最大慶事と國家の至高なる大典に當りて我が『淨土宗全書』を各國皇室に奉呈し主要なる大學に寄贈する如き雄大なる美擧が、一宗恰好の記念事業として實行せられむことを切望して止まざる也。（大正三、三）

◇大岡文相の新任を評す

大岡育造氏新に文部大臣の印綬を帶びぬ。宗教團體の機關たる本誌として、教學專管の至高長官が就任を賀するは、固より當然の禮儀なるべく、而して又新任大臣に希望し、若くば之を論評すること亦當然の任務とや云ふべき。

大岡氏の新任に就きては世往々にして之に不滿を懷く傾あり。其學德を云々して鼎の輕重如何を論するものも亦少からず。甚しきは同氏が熱望十年漸くにして大願成就したるを嘲笑し、槿花一朝の榮華に得々の色あるを指彈するものすら之あり。此等紛々の世評果して酷ならざるか。就任方に其當を得たるか、記者は唯自ら其觀る所を以て、新大臣を祝し且之に望まむのみ。

記者とても理想通を露骨にすれば、大岡氏よりも他に數等優良なる文相適任者を認めざるにあらず。加藤弘之男や濱尾新男や、稍野次なれども三宅雪嶺氏や、其他尚數指を數へ得べし。而も現時此の如き人を推すことは到底出來ざる相談のみ、文相の椅子が奥田氏に依りて漸くにして威重

覺むる如何、曰く人物中心の宗門を再興する是のみ、眞正なる宗門教育の復起を圖る是のみ、世は今や黃金萬能の毒害に苦しめり、宗徒は此際起ちて大に弊害打破の先覺者を以て任ぜざるべからず。

『廓清』の氣運は今や行く處に滿てり、宗徒は自ら廓清せずんは、遂に外壓の廓清に迫らるゝに至らむのみ。廓清せよ、願くは擧宗一致の根基の上に大に現今の宗弊を廓清せよ、是當路者の方針たらさるべからず、而して擧宗一致の宗是たらざるべからざる也。

（大正三、五）

◇時言數題

巡教師の派遣、布教團の活動、特殊傳道の勵行、開教區の發展、大局より觀れば宗門の傳道は氣勢大に揚れるものゝ如し、而も此等外面の發展と相待ちて瞬時の忽緒に付すべからざるものは實に內面實力の充實と一致也、教會海外に發展し、新教會を臺灣朝鮮に見ると雖、內地寺檀の關係漸く浮疎となり、薄弱とならむか、剩除寧ろ其失ふ所あるを嘆せる已耳、南船北馬巡教に勞し、朝に夕に屋外に獅吼し、而して其檀信の教化甚擧らす、寺門の荒廢と檀越の怨聲とを博得せむが卽之を右に收めて直に左に失ふの愚たらざらむや、今の宗門は外面發展の奮勵と共に實に內面充實の覺醒あるを要す。

回教の祖、マホメツトは其教化の第一人として其妻に新福音を授け、妻よりして姻戚、姻戚よりして隣人、而して遂に天下を席捲するの偉蹟を樹てたり、記者は思ふ、現在宗門の巡教師、傳道家諸君が、其教壇に上る前、信徒に接する初めに先づ其妻室を教化して之を教家としての『最善の半身』たらしめならむには、其效果今に幾倍するものあるべく、而して所謂內面の充實一致は事甚だ易々たるべし。

教學講習會あり、講習支會あり而も此等より必要なるは寺院妻女信念養成、品性改善、技能收得の一機關也、東西本願寺に於ける坊守教會の如き、着實の機關也、宗門若し、公然此等の事業を經營し得ずとせば、宗內の老宿先輩は宜く此等の事業に着手し布教團以外に別に有力なる別働隊を得るを期せよ、而して此別働隊は箇人としても關係としても其效果必らず大に見るべきものあらむ。

僧妻問題は今は問題にあらずして良に事實の解決のみ、今の如き無教育、無信仰、無節度不規律の婦女を以て寺院

休憩所にあらざるを以て、公明嚴正一國の文教をして黨閥政爭の外に超然たらしめて堂に清淨無垢を保たしめ、斷じて之を××村の紛渦中に卷き込み、陋醜なる利害の繩張圏內のものとせざること是也。こは大岡氏が最近議會に於ける比較的公明正大の議長振に照らして、先々安心し得むか。

（大正三、四）

◇黃金萬能の惡夢

海軍腐敗問題の中心は唯錢なり、西本願寺事件の焦點も亦實に錢に過ぎず帝國の權威と光榮とを代表すべき軍人は銅臭の爲に蠹毒せられ、德教と感化とを看板となせる本山僧侶は黃白の爲に縲絏の辱を被れり、帝國に橫溢せる黃金主義は此二大事件に依りて遺憾なく其慘害と醜とを暴露せり。黃金萬能の奴隷爪牙となりて罪惡を傳播するもの之を官僚主義となす、維新已來蓄積し來れる官僚は二大醜事に依りて其一班を窺ふに足るべし。

黃金萬能主義の毒菌は官僚の惡瘡と相待ち膿血泥塗の醜を露呈したる上の如し、而も、其外に勃發せずして內に禍根を藏し病根を深くしつゝあるもの教育界に宗教界に枚擧何ぞ限らむ系統設備整然として而も滔々として不良少年を造る今の學校を見よ、宗教界の墮落敗穢の如きは寧ろ言ふに忍びざる也。

吾宗の如き今や比較的平靜の狀にあり、而も宗徒は今眼前に橫はる覆轍を見て、斷然黃金萬能の惡夢より覺むるを要す、官僚全能の卑劣なる惰性を泥棄し去るを要す卽宗徒の健全なる自覺と自治の大精神を奮起すべき最後の時は今實に來れるを覺悟するを要せる也。

事業も傳道も唯黃金之を能くすべし、訓示、布達、命令之を能くすべし、是宗門現在の哀むべき一大迷信也、多少の黃金あるものは寡婦孤兒を欺き取るの人、弱者低能者を虐げ奪ふもの、倘高僧として翺翔し、辛くも學校を出て識力闇昧操行下劣なるもの、苟くも黃金の豐なるあれば以て宗門の要務を占むるを得べし、而して學德の優秀の士若し淸貧自ら甘するが如くんば到底今の宗門に立つべからざる也、慨すべからずや宗門教育の振はざる是已耳、傳道の甚だ效果なき是已耳、老年も學者も傳道家も宗門何れの方面にも今や黃金病に罹れり、覺めよ、覺めずんば慘果は遠からずして西本願寺のみに非ず。

是最も男兒らしく紳士らしき擧なり、而して亦最も適當の方法なり。（大正三、七）

◇世界大戰を前にして

ヸエンナ宮庭の大慘禍は俄然歐洲の戰雲を捲き起し、多年武裝したる平和は今や猛獅巨鷲の爪牙を現じ、南歐の風雲頓に龍驤虎搏の變を呈し、北海の波浪忽に電擊雷轟の景を見る、文明の爲、人道の爲實に悲むべし。

而も夫の全獨逸主義の存在する限り、全スラブ主義の消滅せざる限り、二十世紀に於ける奈翁の虛榮と大帝の幻夢全く覺めざる限り、而して複雜痛酷なる野心怨恨恐怖嫉妬の歷史的事情蓄積醞釀して消失するに方なき限り、歐洲の大戰亂は早晩到底免るべきにあらず、問題は其爆發の遲速と慘禍の大小なりしのみ、而して今や墺國老帝百年の後を待たずして、早く大爆裂の世界を混亂の渦中に投ずるあり災禍の及ぶ所、今俄に豫期すべからず、勝敗の數また機運の甚端倪し難きあり、其結果の如何隨て固より之を判定すべからずと雖、平和克復の一日も速に兵氣銷へ復た日月の和光を仰ぐの希望は蓋し世界を擧げて一致する所ならむ。

此大戰に就きて、特に感ずるは夫の平和事業の前途尙甚遼遠にして、歐洲の宗教の如きは世界平和の爲に今や寸毫の權威をも有せざること是也、兵力萬能の前には上帝の全能全力既に存在せず、否、强者伏弱迭相呑噬の祈禱を八方より受けざるべからざる天上の偶像を思ふ、寧ろ其滑稽と不條理とに失笑なきを得ず。

謂ふに此大戰の慘害は、列强之を歐洲に止め延て東洋に波及せしむる如きは、其利害の打算より見ても、萬之なかるべし、然れども現代歐洲はナポレオン一世の覇業時代と異なり、ウキルヘルム一世の統一時代と異なり、一作一動の影響は單に歐洲に局限せず自然に東洋に多大の關係を生すべし、玆に於てか吾國は此大戰の經過と結果とに就きて實に其責任重且大といふべし、而して吾等佛敎徒は此際大に結束して國民を警醒すべき固より其所のみ。

吾國は由來東洋の平和を以て國是の大方針となす、日淸役も日露役も、日英同盟も其精神唯之のみ、而も假に不幸にして此西歐雲蒸風變の急に際し故に東洋平和を攪亂し若くは爲にすることありて、吾國が平和鎭護の行動を拘束し壓抑せむとする橫暴の擧あらば、吾國は宜く起ちて其面目

經營の内助者たらしむるは一種の風教問題たらずんばあらず、之を先解決せずして、外傳道に力むるも其效果は斷じて知るべきのみ。

去歳荻原雲來氏は梵語學の方面に於て單騎殆ど西京帝大の文科全體を敵として快戰したり、今夏亦椎尾辨匡氏は松本文三郎氏に對し佛教教理史上の問題に就き輪戰を開始せり西京の帝大由來新進氣鋭の俊才を以て充ち氣勢東大を凌がんとし、東大諸教授の如き默々其陣容を羨望するの觀あるのみ、他の佛教界の學者の如きは豈言ふに足らむや、此際宗教大學の教授諸士が常に之に當り堂々として常に攻勢にあるもの、獨り宗學の爲のみならず、東京學界の爲氣炎を揚ぐるものと云ふべき哉。

姉崎正治氏がハーヴートに於ける佛教講演は其說殆ど大小乘の全系に亘り、特に至難なる天台系統の學理を闡明したるの勞と功とは佛教界の感謝に價すべし、而も同氏の歸る教界寂として氏を迎ふる禮を執るものあらず、頗る哀むべき也。

姉崎氏の講演中日本佛教中確に最大潮流の一なる淨土教又淨土系統の學說教義の講目なきは記者の甚惑ふ所也、同氏が今秋の佛教倫理の講筵には必らず此缺陷の補足せらるべきを信ず。

（大正三、七）

◇海軍問題と口錢の處置

海軍問題の罪源たりしギツカース會社口錢の殘餘七十五萬圓を免囚保護に投ぜむとする三井の擧に就ては、賛毀相半するの狀あり谷田監獄局長の如は極力之を賛じて益斯業隆興の運を喜び、小川博士は之を二重贈賄とまで極罵して其僞善の擧なるを警告したり。

此罪源の黄白の爲に今や顯官貴紳富豪鐵窓に呻吟するの苦を嘗めんとす。三井の此擧は此點に於て甚しき皮肉のアイロニイたるの感甚深し、世の賛否は之を別として此等の既決未判の罪人大官懲役縉商をして、此擧を聞かしめば、其感果して如何ぞや、三井の擧は廣告なるか懺悔なるかアイロニイなるか茲に於て記者實に惑ふ。

三井にして若し此口錢の爲に其家名に瑕瑾を來し迷惑を吾國海軍に及ぼしたるの慚愧あらば若かず此口錢を悉く之を贈りたりギツカースに還附し不明を海の内外に陳謝してギツカースをして之に依り其爲すべきをなさしめんには、

し獨創發明の前途尙甚だ遠きを證するものにして、教家は特に此病現象につき愼重に思量し考察して國民の思想に雄大鞏固の獨立主義を樹立するの覺悟肝要也。「ベルグソンの如きオイケンの如き實大乘の域に至らずして旣に佛教にありては尋常茶飯事のみ」一部の識者階級が拜外思想奴隷思想を鞭韃すべき亦此時を宜しとす、教家夫吾國の學問の爲に思想の爲に大に奮はずや。（大正三、八）

◇世界戰禍に處するの道

教界各派は今や競ふて軍隊の慰問に力め、犒軍恤兵の事に奮ひ或は戰勝の祈禱を嚴修し或は布教師を派して軍に從はしめ、軍國忠勇の元氣、義烈の雄風を鼓舞振作するに於て、略教家の本分を竭しつゝあるが如し。而も此世界未曾有の戰亂、國家が將に大に伸張せむとする千載一遇の時機に當りて、戰勝祈願の修法已外、勸諭慰問袋已外、全く教家の能事之なしとせば、卽世道人心の指導を以て任ずる教家の威嚴と面目夫何處にかある。記者は今時局に對する教界各派の態度に觀て、玆に忡々の憂を禁ずる能はざるものあり。

第一に教界各派は單に目前の恤兵犒軍に汲々として、世界禍亂の由て來る原因、其關係と事態に就きて明確精透の識見に乏しく特に其重大なる宗教的意義に就きては何等深刻の思想もなく何等堅牢の觀念も存せざるに似たり。元寇に對する日蓮の熱烈なる戰爭觀は今方に之なかるべからず、グスタフ、アドルフの眞摯なる軍國觀は今確に之なかるべからず此根本の宗教意識あらずんば千百の時局行動は教家としては寧ろ附和雷同の嫌なきかを怕る。記者は實に此雄大なる時局に丁り各派の間に深く固き護法興國の誠火炎々として燃へ、平和と人道の爲に働く熱烈なる宗教信念が先大に發動せんことを法の爲國の爲祈りて止まざる也。

第二に教界各派は徒らに、外國威の發揚を助けむが爲に、慰問從軍に急にして、內重要なる大問題の討究を怠れり。卽內國運展開の基礎たる社會問題の解決を全く閑却し去れるが如し。而して是實に時局の進捗に伴ひて、邦家民人の處理すべき最緊急の問題にあらずや。借問す今教界戰時の失職問題に留意するもの幾人ぞ。海外貿易狀態の激變より來る生活の壓迫、特に下層醫療の困難を思ふもの幾人ぞ。若此等現實痛苦の問題にして解決する所なくんば、縱令國

を明にし東洋平和の確定は卽ち世界平和の至大擔保なるの實際を示すを要す、是國家の體面の爲也、國民の發展の爲也、正義と人道と平和との爲めに必らずなさゞるべからざる吾國の使命也。今此覺悟と決心とを國民に敎へよ。

時に臨みて悠然として起ち得るの準備を敎ゆるもの夫誰が任ぞや。

世界の大戰亂は決して對岸の火災にあらず、時運機の旋轉、眞に旦夕を計るべからず吾國の必らず立たざるべからざるの時亦豈急遽ならざるを必せむや、佛敎徒は玆に於て今より一大結束をなし、一大決心をなし大に備へ大に警しめて國民を覺醒するの準備を要す、――東洋の平和の爲に祖國の光榮と發展の爲に抑も人道と正義とを根本的に發揮せんが爲に。

全歐大戰亂の勃發するに及び、交通運輸の杜絕と共に、日用必需の物資、頓に價格の暴騰を來し、就中醫療藥品の如き、市價四倍乃至七八倍の驚くべき昂上を示せり、戰亂の慘毒延て之に及ぶ、眞に畏るべき也、謂ふに經世の事に從ふの士は、今何等かの方法を廻らして應急善後の大策を立つべき也、然らすんば中流已下の人民は到底疾病療養の方法を失し坐して死を待つの光景を生ぜむも未だ知るべからず、赤十字社の如きは此際宜く夫の濟生會等と力を協せ民間醫業の仁人と諜りて適當の方法を設くるを要す、而して敎家は此等の實際問題に就き卒先盡力する、蓋し刻下の急務なり。

有無相通じ彼此相携へて文明の惠澤に浴するは世界の大勢也、故に極端の輸入を唱へ、一切の物資を擧げて悉く自國の材料に取らむとするが若きは或は一笑に價せざるべし。而も生命保續に最必要なる醫藥原料の大部を外國に仰ぎ、一朝事あるに際して周章狼狽するが如き現狀は決して大國民の事といふべからず、國家の隆興之が爲に沮害せらるゝ夫幾何ぞや、國民は此現狀に見て、大に奮起すべきにあらずや、今に至りて此論ある、恰も兵に臨みて刀を鍛へ、渴して後井を穿つの類と雖、國民は此際眞摯に思量し慚奮するの好時機なるは言を待たず。

海外輸入品の杜絕は、一面また國民が無益の奢侈、無義の虛榮を戒飭すべき好機會たり敎家此所大に獅子吼して簡易質素の剛德を國民に敎ゆる良に時を得たり。

若夫洋籍歐書の輸入、特に獨逸書の渡來全く過絕したるが爲に、學界に一大恐慌を起すの狀あるを見るに至りては、吾國學問の獨立未だ全からず徒らに模倣飜譯の兒戲を事と

たり。

昔し元の忽必烈東洋の一隅に崛起するや、健馬長鎗、百萬の堅甲を擁して、直に歐洲を衝く。鐵蹄蹂躪する所、其屠殺の慘、血海屍山の愴は今尙歐人の戰慄する所也。獨人は二十世紀に於ける蒙古兵なり。　蒙古兵よりも暴虐也。蒙古兵は寺院を燒夷せざりき大學を破壞せざりき。ルーテル教會の君主兵士は二十世紀に於て蒙古兵已上の暴虐を敢行して之を得々として祖國の大勝として誇示しつゝあり。

此歐洲基督教國に於き、基督教民に對して酷虐殘忍なる獨逸兵は青島の一角に於ては道德あり、規律あり、禮讓あり、行動恒に文明の節座を越へざるが如し。若勢の屈する所、止むべからず、皇軍威壓の前、橫暴を逞くする餘地なしと評破し去らば已む。而も靑島獨兵が武人としての行動、重圍中の勇氣と態度大に感ずべきは終に認めざるを得ず。此の如くして歐西に於ける無道の獨兵は東洋に於ては道德ある武士也。基督教國に於ける殘忍の惡魔は、カイゼルが黃禍の災源としたる佛教國に於ては、制節あり禮節ある勇士也。是實に大奇觀にあらずや。吾等は此間に一種の感想なき能はず。

吾等此奇觀を見てカイゼルの黃禍論。此論に親緣系統を有する米國宣教師輩の非基督教撲滅論、基督教のみを以て文明の眞意なりと迷執する偏僻固陋の狂熱妄想が事實に於て根本より破壞せられたるを快とす、而して彼一神教の根底に橫はる猶太教式エホバ主義が其復讐、暴虐、殘忍を遺憾なくカイゼルに依り暴露したるを見て、世界宗教の一轉機が亦此大戰に依り必らず來るべきを默想して、我國教家の深秋靜に修養せむことを禱る。　（大正三、一〇）

◇宗教大學の佛教古經書畫展覽會に寄す

宗教大學は宗門高等教師養成てふ重大の任務已外別に少なくとも帝都佛教學の中樞たるの抱負と宗門思想趣味の指導者たるの自覺を有せざるべからず、隨つて絕えず學術社會との交際連絡を親善ならしむるの方策を講じ、且つ市內宗門寺院との良好なる關係をして一層緊密ならしむるの機會を作るべきは當事者の苦心の最も多き所ならむ、今回同大學の紀念式に際し開設せられたる佛教古經書畫の展覽會は頗る高雅に、遠大の抱負と宗門指導の天職の一端を窺は

威大に張り戰勝の光輝世界を照灼せむも內國運の發展は甚しく沮塞せらるゝを免れざらむ。起て、教家時局の活問題は實は卿等の脚下に存するを知らずや。

第三は卽思想問題の落莫也。生硬なる飜譯思想を以て半解の泰西學說を以て、得々たる憐むべき吾思想界にありて教家の地位は更に甚だ憐れむべし。特に戰時に入りて已來教門思想の寂寞は眞に廢屋空舍の如き狀あり。健全の思想なきものは必ず亡ぶ。今の教家が唯勝軍の祈禱、從軍教師の派遣に熱中して、大戰後の思想が如何に國家と教門に波及するか、戰亂の爲一時輸入を止めし歐西思想が戰後滔々として浸入するに對する要意如何、抑又今や吾國思想獨立の絕好時機に際して教理闡明の樣式如何、此等の根本問題に就きて聾の如く啞に似たるの恨あり。嗚呼夫其本を忘れて其末を紛飾せむとするの輕薄思潮教門を毒せざるか。嗚呼戰後必らずや生ずべき極端の世界主義、平和論及危激の新思想を禦きて護國扶宗の爲に教家が立つべきの準備は既に成れりや否や。

（大正三、九）

◇世界宗教一轉機の時

『基督教の文明にあらざるものは、假令善美なるものと雖之を絕滅破壞せよ』と是カイゼルが拳匪事件の當時遠征軍の元帥ワルデルセーに嚴命したる所にあらずや。今やカイゼルの復讐的の深酷殘忍は非基督文明を絕滅破壞するに滿足せず。更に基督教的の文明を破壞し絕滅し、其善なるものを灰燼となし、其美なるものを焦土と化し、老幼を屠戮し、婦女を虐殺し、獨旗の麾く所、滿野腥血、尺寸の靑草なからむとす。慘といふべき哉。

ルーバンの大學を破壞したるは誰ぞ。フランスの大寺院を燒失したるは誰ぞ。パリのノートルダムに爆彈を投下したるは誰ぞ。獨逸が現代に於て基督教の文明を破壞したるは既に十二分にあらずや。而してカイゼルは常に神と共にあるを說き、敬虔なる基督教王の代表者を以て任じ、ヲンデスキルへの至高教長として說法するにあらずや。基督教はカイゼルに由り、ルーテル教會の最高なる君主に依りてまた其醜陋慘酷の罪惡を二十世紀文明史上に血を以て印し

◇浦鹽開教と支那布教

　西本願寺は日露戰爭後よりして多年の懸案たりし、夫の浦鹽斯德布教問題の解決に成功し、今や露國官憲より教堂敷地下附の允許に接したりと聞く。是獨り西本願寺の爲にすべきのみならず、また吾國佛教全體の幸福となすべく、而して又吾國文化風教の體面上大に祝賀すべきを見る。露國政府及其教職寛洪の態度、自由の精神を以てよく西本願寺の正當なる要求に聽き吾國德教の權威を重じ、佛教傳道を部分乍ら公認したるものは日露親善の精神的意義より見て益欣喜すべき也。

　此成功は勿論日露兩國政府及兩國民が親善の關係に基くは疑なしと雖、兩國をしてかく其盡すべきの協議を盡さしめ以て公明なる今日の解決を見たるの效は、之を西本願寺の浦鹽傳道家が堅忍牢强の至誠に歸せざるを得ず。佛教界は玆に於て必らず二十年に垂むとするの苦辛を傳道の爲に味ひつゝある太田覺眠師の名を忘るゝ能はざるべし。謂ふ、日露戰役中孤影飄然本尊を奉負して敵地に同胞を慰問し、戰後十年の苦節を露土に忍びたるものは實に太田師なりき、此苦節卽ち今日の光榮あり。布哇に支那に若くは朝鮮に三年五年の起臥早く故山の寺門を翹望するが如くんば、開教の事業豈擧るを得むや。

　浦鹽開教の允許の報あるとき、恰も支那布教權問題あり露國は希臘正教を國教とし、基督教諸派と共に容易に之と相合ふを許さず、矧むや佛教をや。然るに浦鹽に於ける寛洪と自由の處置彼が如し。之を支那が法系法統相同じく、同文同教の親を以てして尙吾が佛教布教權を頑然峻拒すると比するに殆ど同日の談にあらざるなり。支那が若我と一層の親善を厚くせんと欲せば先自ら進みて布教權問題を解決せよ。是我佛教の爲と云はんより寧ろ支那啓發の利益なればなり。支那たるもの希くば浦鹽開教の允許に鑑みよ。而して政府も民間の政客も特に此問題に就き支那の覺醒を促すを當面の急務となすべき也。（大正四、六）

◇宗門布教退嬰萎靡の兆あり

　これを兵を談ずる者に聞く。勝敗の決する所は、唯其精

しむるを得て、珍什寶墨充實累積し、學界を裨補し宗徒を覺醒したること眞に尠少にあらず、單に其古寫經部の一室に見るも其量其質、遠く二週間前開會を見たる法書會を凌駕して遙かに上位を占むるを見る。望月學長及加藤、椎尾、今岡、大村、黑木、今津等の諸教授、梅崎、小林、鈴木、岩崎、小野等新進學匠が刻苦精勵黽勉晝夜を舍てずして、よく此空前の擧を企て多大の成功を收めたるに對しては、闔宗は之に感謝する所あつて可なるべし。

今回の如き展覽會は宗大としては第一次の試みのみ。其陳列の完美周到ならず、材料の精選嚴誡を缺ける、若くは研究的態度の更に一層を要すべきが如きは、固より深く咎むるに足らず、而して其齎らしたる效果に至りては蓋し見るべきなくんばあらず、學界貴重觀閲に就き、自由の門戶を開放したる是第一の功也。從來私學に對して貸與縱覽の例、殆んど之なかりし帝大印度學敎室及史料編纂珍藏の珍書を宗大展覽室に見るを得しが如き是大に慶すべきの一にあらずや、宗門寺院に對し、古史料古文書の珍重保存を敎へ、其藏帙祕軸の眞價を發揮して、散逸を禦ぐの道を開きし是第二の功勞也。今回の展覽會に由りて新に發見せられたる貴重文書、若くは寺傳已上の價値を確められし貴重の古經佛畫實に二三にして止らず、其之によりて社會に佛敎學資料の智識を普遍せしめ、宗徒の思想趣味を崇高に導きたると共に宗大に對する尊敬と親和を加へしめしの效は固より別に贅するの要あらざらむ。

東京帝國大學文科特に印度學敎室が、現今に於ては世界學界中、唯一品とも稱すべき楞伽梵文貝葉本を初めとして、許多の古貝葉經を些の猶豫慳惜なく最も自由に展覽會の使用を許したる寬宏の襟度と與學利人の遠大の精神に至りては、獨り宗大の爲に喜ぶべきのみならず、一般學界の爲に此新例を欣喜すべく各科の研究室に於ても此襟度と精神が盛に勃興して益々學術研究の進展を切望す。

宗大展覽會の效果に見て、官私立及各宗大學の學術的交際と研究的の連絡が更に一層を加へ、資料展覽と共に眞摯なる學會の公開を望む獨り記者のみならむや、而して一時宗門識者に研究せられし夫の宗寶保護の案、或は宗史資料蒐集の說の如きも今回の展覽會に際して、其必要を積極的に證明し得るに至れり、謂ふに宗大は展覽會の成功に誇りて得意小成に滿足するを止め、進むで外は學界に對して周旋する所あり、內は宗門に對して大に輿論を喚起し、一般の希望を滿足せしむるに奮勉すべき也。

（大正四、五

淨土宗の事業として大いに社會を動かすべき勢力の集中を闕けり、東京布教團の怠慢視せられ無能力者視せらるゝもの、實に之統一と連絡に着眼せず、勢力集中の根本方策なき菲に歸せずんばあらず。

東京布教團が奮躍綱紀を張り精鋭を盡して、健闘すべき最高の時は今至れり。而して此大戰鬪の策源として、まづ一面東京各種傳道事業の連絡を計るべき統一的の機關を具へ、他面には絶えず傳道開拓の新方面と新事業とを講究すべき調査機關を有する中央傳道講究會を起すべきなり、此の研究會に於いて摯實に講究し、熱誠に計畫し堅牢の精神を以て毎に勢力集中の方策を講じ、腹背呼應し首尾響きの如く答へて、一事一物必らず東京教學の全力を擧ぐるの戰法に出づるを要す。此の如きときは東京布教團の威力再び天下を動かすの時あるべき也。

布教團の誠實に反省すべき時は、今脚下に來れり、今にして振はずんば寧ろ此無益の虚名を撤廢するを宗門の利なりとす。基督教徒が芝公園に絶えず傳道を行ひて着々效を收めつゝあるを、對岸の火災視して寸毫も前進の意氣あらざる布教團は何時迄其熟睡を繼續せんとするにや。

（大正四、六）

◇外人の佛教新歸依

英國人ガーピー氏、去十一日、前圓覺寺管長宗演老師を師とし濟門佛祖正傳の古儀を乘りて得度の式を擧げ、貴紳學者及四五の外國貴女等之に隨喜し清規の嚴肅莊重近時稀に見る法筵なりしと云ふ、大教のためまことに慶すべく、枯槁衰廢、氣息奄々たる現時の宗教意識に對する一大警策として最其祝すべきを見る也。

帝國に來遊したる外客にして大教を尊重し正法に歸投したるもの、ラフカヂオ・ハーン、伯爵グーデンホーフ等、世の周知する處、優に五指を屈するに足るべし最近また久しく横濱に居住したる一英人が佛式の葬儀に由り送終の禮を執りしものあるを聞く、然れども正式の羯磨を受け三衣一鉢受戒入道して佛祖傳々の血脈を相續したるものは實にガーピー氏、其人を以て嚆矢とす、宗派老漢、門下法乳の恩に浴する濟々たる燕頭虎頭の中、個の堂々たる碧瞳朱髯の宗覺比丘あり、實に基督教國民第一の大乘佛教僧侶たり、而も此新比丘宗覺が元基督教の教職にありしと云ふを以て

銃を集中する巧拙如何に存するのみと、今や獨逸は腹背敵を受け、四圍の壓力勢を盡して繞り攻む、而も容易に屈するの色を示めさず、尺寸の地と雖、外敵の侵入を容すなく飛行船を放ち潜航艇を驅り往々にして聯合軍の心膽を寒からしむるもの、實に此精力集中の巧妙を極むるに歸せずんばあらず、其世界無比と稱する鐵道網を利用し西沒東湧、百萬の兵、手足の如く精密なる連絡と、嚴肅なる統一の見るに足るべきもの、之れ即ち獨逸が世界を敵として、動もすれば優勢を示めさんとする所以にあらずや。

一時燎原の烈火の如き勢ありし吾宗の傳道界、特に東京の傳道界が近時に至り、著しく退嬰萎靡の兆を示めせるは爭ふべからざる事實となさざるを得ず、一宗は東照公三百年の遠忌を期して多大の成功を東京布教團の活動に待ちたりき、而も愚劣なりし大名行列已上に何者か團旗に光彩を添へ得しか。人は基督教徒聯合大傳道の後、必らず何等かの反應が吾が東京の傳道界に强烈なる彈力を以て現るべきを窃に切望したりき、而も今に至るまで尙寂々として聲なきは抑も何故ぞ、京都に大阪に各地方に眞實の傳道運動の見るに足るべきもの、最近其例に乏しからず、東京布教團は如何なる行動を以つてか、此等の努力に對し模範教區の眞價を維持するの方法を取りたるぞ、資力地方より乏しきか、否、人物、地方より劣れるか、否、傳道の便宜と設備、地方に比して不足なる所あるか、否、而も萎靡不振之に至る果して何故ぞ。

一宗教學の策源、宗務教學部の存する所、最多數の實力ある寺院を有する大都市、教學方面最優の名士を網羅する所、宗教大學の存在する所、帝國文化政教の中心として刺擊切磋最强烈なるの地、而して傳道界の不振、彼が如し、無神經か、或は然らん、怠慢か、或は然らん、荒廢か、緩弛か、無能力か、或はそれ然るべし、而も東京布教團の振るはざるは更に一大原因あり、曰く勢力集中の方法甚だ拙劣なるにあり、整然たる統一と敏活なる連絡を缺くにあり、猛將謀士雲の如く、兵站給せざるなくして每に退敗の兆ある一に之に因る。

個人として、之を見よ。單一の教會講演事業として之を見よ、コドモの會に於ても、勞働者浮浪者の救護慰安に於ても、軍隊工場の講演に於ても、婦人青年の教化に於ても、東京は尙全國の模範たるを失はず、宗教大學生が、個人としての家庭傳道、公開布教の如き見るべきものなきにあらず、而も此等幾多の傳道事業には連絡なく、統一なく東京

箇の道心、箇の實修、光瑞君をして直龍たらしむる道なり、然らずんば其趣味の博、奇才の縱橫、徒らに大正の酒井抱一上人として了るに止まらんのみ。（大正四、九）

◇博士となれる椎尾辨匡氏

椎尾辨匡師、新たに文學博士の榮冠を頂けり、是摯實精勵の努力に對する必然の報酬として喜ぶべく、大材偉器を遇する適當の旌表として、更に甚喜ぶべく、而して敎界の學術、精彩なく、元氣なく、萎靡消沈、死に垂むとし、碩學巨匠又漸やく凋落衰殘して些の貢獻の學林を賑はすに足るものなき所、新進氣鋭、干鏌新に硏を發するが如く、縱橫該羅の學識、靑眼一世を空にする椎尾師の此旌表は、大に敎界の爲に氣焰を擧ぐるに足り、其奮躍興起を促すに足らむ、此事茲に於てか益大に其喜ぶべきを見るなり。

敢て全體を擧げて一抹黑殺せずと雖、今の博士號の授與が銓考の公正を缺き、推選の順序を誤り、情實に纒綿せられ、各科の均等を失し、間々濫選濫授の弊害あるは世間眼者の定論なり。學位の授與は此の如くして、百弊の蟠結する所、些の學術上旌表の意義あるなく、世の學位に對する尊敬と信用は漸次に冷却し來るの傾なきにあらず、此間學識に加ふるに精力の絕倫、椎尾師の博士號授與を見る、積弊茲に於てか稍一洗の緖に就くを見るべく、榮冠の榮冠たる所以と其榮位の尊重すべく信用すべき所以を證明し得べし、帝國學術の權威の爲此所亦頗る喜ぶべし。

謂ふに椎尾師は旣に久しく博士たり得べかりし人、今に至りて方めて師が價値と材力とを輕重高下するに足らざるや論なく、其論文の如きも旣に三四年の前に完成したるにあらずや。博士たると、たらざるとは椎尾師の人物に於て殆んど言ふに足らざるべし。即ち言ふに足らずと雖、此些事に由りて敎界に學者の敬重すべきを敎へ、人材の尊貴なる所以を覺らしめ、以つて興學眞摯の氣風を鼓吹するを得ば、即ち此事、豈大に喜ばさるを得んや。

然れども、人若し椎尾師が今回の榮をみて、之を學者として尊重するを知りて、宗敎家としての師を閑却し去るが如くんば、寧ろ椎尾師を累するものと云ふべし。滔々たる敎界、苟くも一技一藝あれば、法衣を脫して俗界に入り、俗吏たらむとし、敎員たらむとし、會社員たらむとし、汲々として唯其及ばざるを恐るるもの多くは是也。此間、吾

意義甚深重なり。

歐州基督教民にして佛教僧侶となりしもの尠からず、英國佛教會の中堅として活動しつゝある歡喜慈（アーメンダメツテーヤ）大比丘は、英國の教養ある紳士なりき。聖典の飜譯に、著作に、講演に、歐人に多大の感化を與へつつある智燈（ニヤーナチロカ）比丘は獨逸の學究なりき、此等歐人の比丘は其數今漸く增加し、英京ロンドンに於いては、新たに佛教會館就りて比丘の禮拜止住の僧堂を造り、伊端の境ルガノ湖畔には僧伽籃建立せられて修道安禪の淨侶あるを見る、而も此等の比丘は悉く錫蘭、若くは緬甸に於いて得度受戒したる僧伽にして南傳小乘律の人たるに過ぎず、大乘戒に依り大乘の教に歸して大比丘となりしは、實に吾宗覺比丘を開祖とす。

宗覺比丘の得度は所謂佛教西漸の決して一場の夢想にあらざるを確證するものとして實に喜ぶべし。而して之と共に日本佛教徒の自覺をして一層强大ならしむるは實に刻下の急務ならずんばあらず、特に精修密行、實地の力量を增大するに力め以て大教西漸の萠芽をして凉蔭四布の大菩提樹たらしむるに奮勉せざるべからず。

（大正四、七）

◇大谷光瑞師を評す

大谷光瑞師、いまや支那の補陀山に滯錫す、近時連りに雄麗の文章を國民新聞に寄せ、識見往々にして群流に卓出するを見る。最近其耶律楚材の詩を論じ、諸葛孔明の人物を評するを讀むに學問の該博、識力の超邁、官學教授輩の企及すべからざるものあり、而して其事をなす雄大、覇氣縱横、寒鶻の蒼空を撲つの慨あり、島國偏狹小量の邦人中、師の如きは蓋し異材なりと云ふべし。異材、師の如し、而して名門鉅族の出、彼が如し、而も海外に放浪して、本國教界の爲には甚しく師の指導に俟つもの少きは何ぞや。紛々たる日本の教界、果して師を容るるに足らざるか。師は百年後の天才にして現在を超越せるか。

光瑞師、遠大の雄圖は邦人としては眞に異數なり、其學問の該博、識見の越邁、氣力の充實、亦確かに群丘を拔ける泰嵩の如き觀あり。而も箇の好漢惜らくは一分の道心を缺き、一分の實修を足らずとす。是れ光瑞師が日本唯一の材たらんとして、尙、蟠龍の嘆ある所以にあらずや。

らば吝惜するなくして其資料の使用を公許して中央亞細亞學の發展を期せり。西本願寺の貴重の蒐集が此點より見て頗る遺憾なるを知る記者は、河口師の將來品か幸にホッヂソン蒐集の如く日東の學界を益し大いに『光は東方より』の實を世界に發揮せんことを切望して止まず。

（大正四、十）

◇大典參列と法衣着用禁止問題

流罪を朝恩なりと感謝して、邊土に信仰の普及するに欣悅の念禁じ難く、惡口罵辱、刀杖枷鎖の迫害も尙之を逆緣なりと悅びて、三寶値遇の勝因なりと甘受する。寛洪の佛敎徒は豈社會の之を待つの厚薄、國家が之を遇するの好惡に於て其道を二三にすべけんや。佛敎徒は唯上求下化の爲に自ら責め、自ら力めて奮進勇往するの外、他を責め、外に求むるの閑、まつたく之あるなし、法句經の中に善德の士を以て、萬朶芳芬の名花に譬ふ、名花は逆風にも薫じ、順風にも匂ふ、和風麗日と白雨黑風と共美、蓋し隨處に趣あり、逆風裡には荊棘となり、順風中に桃李たるが如きは、佛徒は決して爲さざる所なり、世の我を遇する必竟何物ぞ、國家の之を待つ要するに何の價かある。我々は唯道の爲に動き、世の爲に働き、人の爲に力むるあるのみ。

佛敎徒としての精神主張は實に此の如し、而も德敎の振作と文運の隆興とを以て任とするの有司、健全なる國民の精神の確立と、牢强なる國家觀念の統一とを以て、其根本方針と爲すべき爲政者は風敎の爲に之を遇すべきものは必らず之を遇し、之を待つべきものは、必らず相當の禮を以てすべきは爲政の大本にあらざるか、然るに近時、動もすれば官僚形式と一時糊塗の政策のために、此大本を忘却して國民の信念に動搖疑惧を生ぜしむるの傾向あるの憾なきにあらず、而して此遺憾は今回の大典に就き各種の方面に於て頗る露骨なるに似たり、是れ忠誠なる佛敎徒をして憂慮禁ずる能はざらしむる所、千載稀れに拜する盛典に際してこの事ある、洵に恐懼に禁へず、有司爲政家が之に對して反省熟慮し以て民心の不安を鎭定せんことは抑も刻下焦眉の急務なるべきか。

其一事を擧げば、夫の大典に參列すべき佛敎徒總代已外の僧侶及び各地方の大饗に御召の光榮ある管長已外の僧徒に對し法服を披着するを禁ぜしが如きは、蓋し此民心疑惧

が椎尾師が淨土宗の一僧侶として一小寺院の住職に甘じ、廢絶せる法會を復興し、檀越の敎化に力め、自ら身を屈して貧家矮屋に至るまで鄭重に法施を行ずるを見る。新文學博士が眞骨頭寧ろ玆にあり、昔は行誡和上、其歌名高く九重に達し、屢々法務の餘。御歌所に伺候すべきの恩命之ありき、和上曰く『俺は歌讀じやねえ』と、詠草奉進は時々之ありしと雖、足寸歩も宮内省に向はざりき。新文學博士の椎尾師も亦、必らずや昂然『俺は學者じやねえ』と獅子吼して敎界を警醒せられんか。

（大正四、九）

◇河口慧海氏の西藏尼波羅將來資料

河口慧海氏が西藏尼波羅及印度より將來したる物件は、聖典佛像佛畫法器の各種を網羅し、地質、鑛物、藥草、昆虫の末に至るまで、該羅捃拾殆んど遺漏あるなく、優に一箇の西藏尼波羅博物館を設くるを得べし。昔はブリヤン、ホートン、ホツヂソン、尼波羅國總領事として大に佛敎聖典の蒐集に力め傍らヒマラヤの地質、鑛物、植物の研究に從ひ多大の貢獻を學界に爲したり。河口師今回の成效は恰もホツヂソン氏と符節を合するが如し、是日東學術史の爲に一の痛快事を加へたりとせんか。帝國の學界は此堅忍不拔なる探檢家及學藝資料の蒐集者に對し適當の旌生を行ふを可とす。

數年前、大谷光瑞師は鉅萬の資を投じて中央亞細亞佛敎故址の踏査に從ひ多大の資料を得たり、其功勞は帝國學界の爲に夫のスタイン、グリコンヱーテル、ペリオ等に占斷を擅にせしめざる快榮を捧げたるもの、若し獨逸皇帝が、レ、コツクを伯林大學の名譽ドクトルたらしめ、英國がスタインにサーの榮稱を與へたるに比するに當時帝國の文部省は何等かの方法に依り大谷氏を推賞せざるべからざりしにあらずや、今や河口師歸る、文部省及帝國の學界は識らず、何を以つて此の雪嶺羅刹の蠻境に半生を送りたる稀有の功勞者を遇せんとする。

探檢家及蒐集家にありても、其貴重の資料を玩弄視骨董視せず、努めて之を眞理闡發敎育學恢興の活資料たらしむるは實に切要なり、ホツヂソンは其蒐集の梵本を英國佛國及印度の三所に分與して適材をして研究に從はしめ以つて今日梵學の隆盛を來しスタインの如き凡そ篤學の研究家あ

◇人口問題に於ける宗教的解決

人口問題は現時社會上の一大問題であることは申すまでもない。之が解決方法に付きても、或は經濟的の方面より、或は政治的の方面より、或はまた生物學醫學等の學術的方面から種々の研究も發表されつゝあるが宗教上から此問題を解決したらどうなるか。宗教は此問題解決にどれ丈の價値があるか。而してまた實際上から見て、宗教家は此問題解決者を以て任ぜざるべからざるものではあるまいか。これが本講の研究題目である。

　大體佛教に於ても基督教に於ても人口問題に對して積極的に說く所はない。また歐米にも之に關する成書は宗教移民に關する書中に多少其議論のあるのを除くと全くない樣だが今左の三方面から人口問題を解決することが出來やうと思ふ。

　第一には宗教の傳道的精神からである。佛教でも基督教でも初期の時代には厭世的であつて現在世界には餘り重きを置かぬ。然るに佛教の大乘、基督教の新教になると現實の世界を立派にして行くと云ふ積極的の思想が盛になつて來た。『莊嚴佛國』の大理想や、『神の國』の思想がそれだ。夫の法華に我此土安穩天人常充滿と說くが如きは最も積極的思想を說けるものである。その結果として愛人愛世の觀念が厚くなり、人口が激增して行く場合には宗教の傳道的精神、萬國的精神から人口稀薄な地に向つ移民をする。印度に佛教が起らざりし以前は吠陀の宗教では他國に行くを禁じて居つたが、釋尊滅後一百年を經て阿育王が印度を統一するや、盛んに宗教的移民を行ひ錫蘭島に今尙ほ佛教が盛に行はれて居るのは其結果である。其後ジヤワ、スマトラ等の今の蘭領印度に向つても傳道的移民が行はれた、此の如く宗教と移民とは最も密接なる關係があつて、手近い所で云ふならば、明治維新後北海道に於ける開拓の成功は北陸方面の眞宗の信徒が、多數移民したことか有力な原因一をなして居る。又宗教上の迫害を避けんが爲めに移民を亟す場合も少なからぬ。夫のモラビアン派の宗教移民や、な米利加の最初の淸教徒の如きは卽ち夫れである。

　第二には宗教上の博愛慈善の觀念から人口の減少を防遏することが出來る。凡て善良なる宗教には、慈悲博愛の觀

昭和大禮要錄ヲ見ルモ法服ハ認メラレザルガ如シ

の端を發するの一なり、僧徒が僧服を着して宮中其他の儀式に參することは光榮ある歷朝の實史を有し、且つ明治大正に亙る最近の慣例の存する所、國家の宗教に對する行政法理上の精神に見て、また必らず此の如くならざるべからず、然るに今回の大典に際し、特に此の如き內規を公示せられたるは、蓋し歷史上の光榮を奪ひ、最近の慣例を棄て、且宗教行政の根本精神に戾り、而して一般信徒の信念を攪亂すべき惡結果を來すべきものゝ事、決して小事と云ふべきにあらず、記者は此點に關して有司諸君が大に熟慮せんことを希望せざるを得ず。

伯爵大谷氏が、此內規の爲に伯爵總代としての參列を恐懼拜辭したるは最其道を得たり、蓋し大谷家の伯爵たるは王法爲本の宗義よりして國家に盡したる功勞を旌表せられたるものにして、夫の伯爵家祖先の一人が登極大典の資を献じたる如き其强大なる一因ならむ、卽法衣のため伯爵たりしもの、而して大谷伯の功勞は世の等しく認むる所、先帝特に賜ふに法衣を以てしたまへり、伯爵が先帝已來、常に此恩賜の法衣を着し參內して忠誠を必らずしも故に云はず、而も此の功臣に對し、此由緒ある伯爵家に對し、恩賜の法服を着するを得ざるを規定するか如きは、抑も當を得ざるの甚しきもの、常理を以てせば國家は隆々たる國運勃興の瑞たる今回の大典に當りて、この吾國の登極大禮史に特筆せらるべき法衣の伯爵家をして、まづ記念旌表して何等かの特別禮遇を與ふべきにあらざりしか、かの法服を着して職務を行ふ監獄教誨師の如き、勿論、其制服としての法衣被着大饗參列の光榮を荷ふべきもの、之に法衣を禁ずるが如きは、國家遷善改惡の職務を委任するの精神果して那邊にあるか。

維新當時の廢佛毀釋が如何に吾國の良風美俗を破りて、今日道義衰頽の因を作りたるかは有識者の公認する所、而して佛教僧徒を不淨扱となしたる愚昧乖理の迷信と偏狹陋劣の邪見とは、皇國の歷史に照らし世界の公道に覿て、大正の今日半文の價値なきもまた自明の理なり、賢明なる有司が法衣禁止佛僧冷遇等の事實の爲に誤つて這般の惡評を世界の識者に受くるが如くんば、實に大正聖代の不祥事にあらずや。

佛徒としては唯一つの四恩の道あるのみ、法衣の禁と不禁との如き亦何かあらむ、唯世道人心と世界に對する皇國の體面上、止むべきにあらず、卽ち一言して有司の反省を望む。

（大正四、十）

其主義に於て一致し、其結果から云ふと人口問題に觸れて居つて、適當なる人口制限の理に契つて居ると思ふ。

以上宗教の傳道精神、慈悲博愛の觀念、德義の實踐三方面から觀察して宗教の上から人口問題に對して或る程度迄の解決を與ふることが出來ると思ふ。近來米國に於ける日本人の移民問題に就いて基督教者が盡力して居るのは宗教の本義たる自由寛容公正の精神から考へて喜ぶべきことであつて、我人口問題に對する一面の宗教的解決を見ることが出來るが、何處までも自由寛容公正の精神の上からやらなければ折角の盡力が水泡に歸するのみならず却つて障害を齎す虞れがある。自由、寛容、公正の精神は宗派的の觀念とは氷炭相容れざるものであるから飽くまでも其間に於て宗派的觀念を挾まず、自由寛容公正の精神を發揮せんことを望まざるを得ない。（大正四、一一）

◇功勞者旌表の批議に對して

國家が大典に當り教育慈善の業に功勞あるものを旌表するに際し、世、往々にして基督教徒のみに厚く、佛教徒の之に超ゆる努力が寸毫も認められざりし偏頗を私語するものあるを聞く事、一應は御尤もなる愁訴ながら、再應之を考ふるに佛教徒は寧ろ此偏頗とも手落ちとも見ゆる所に滿足を感ずべき點あるを見ざるにあらざるべし。

凡そ世間の饗宴集會などの際、外來の賓客に上饌を供し家人は宴後、倖に殘肴剩酒に滿足する所に善き所あり。一千年の久しき國民精神の薫陶に母となり女房となりて、一方ならぬ苦勞を重ねたる佛教徒が新來の耶蘇教徒が晴の儀式に客扱ひの特別禮遇を得たりとて、之を恨むは家人として餘りに水臭く子供らし。嘗ては吾國を祖先崇拜の多神教の野蠻國とし、所有吾國の弱點と惡所とを列擧し、此の如き多神教の野蠻國を耶蘇教に改宗せしむる爲とて、叩頭百拜、外國より贏ち得たる輸入資金にて出來た學校、若しくは慈善事業、而して此外資輸入事業の番頭手代たりし日本人を旌表したる今の當局には夫々の氣苦勞もありしなるべく、またその宏量をも家人としては推諒すべきが當然ならん、而して此の野蠻國は、まだ耶蘇教に改宗せず、彼等が痛罵したる祖先崇拜が中心となり居る大典に彼等教徒を旌表し得るまでの隆盛と文化とを實現したるは家人としては實に痛快の情に堪へず、卽ち彼等が祖國を罵り辱めたる結晶の事業

念があつて、此觀念から棄兒や孤兒を救濟して保護を加へ、以て人口輕減の傾向を防ぐことは歐羅巴に於ても中世紀から行はれる所である。棄兒を收容するために特に設備をなして墮胎や避姙を避けしめた。此のために非難の聲をも招いたが、宗教上から棄兒の孤兒院を造つて博愛慈善の觀念の活動を現はした。我日本に於ても白河樂翁が領內の人民中に墮胎するものゝ多きを憂へ、之を防遏せんがために圓山應擧に地獄の繪を描かしめ、之を民衆に示して墮胎の罪の恐るべきを知らしむると同時に慈悲心を起さしめ、以て墮胎の弊害を去つたと云ふ事蹟がある。樂翁公のみならず古來宗教的觀念の上から人口の減少を救濟したる例に乏しくない。現今のフランスの如き、夫の二子制度の樣な文明的弊害の下に人口の減少して行く所に於て之を救濟せんには、佛國に於ける宗教は衰へて居るから古代の如く宗教の權威では直に之を防遏することは出來まいが、併し此性愛精神の上から形を代へて精神的哲理的の防遏方法を取つたら、此の法律的の勸懲的主義よりも遙かに良好の結果を見られるだらうと思ふ、

第三には宗教の道義的精神に基く德義の實驗によつて人口の濫造を防ぎ得ると云ふことである。人口問題に於て困

る問題は不道德の原因によりて出來る私生兒とか精神上の缺陷なるものとか、乃至一人前の精神能力を有せざる人間の屑が出來ることである。之に對しては最近學問として問題となつて居る「ユージエニツクス」の如きものに觸れて來るが、宗教上から見ると佛敎でも基督敎でも戒律なるものがあつて、或は酒を禁じ或は邪淫を禁じて德義を勵行すると云ふことが最も適當な人口の制限法となる。釋尊や基督は人口問題のために無妻であつたのではないが釋尊已前には多妻主義が盛んに行はれ放逸不道德の原因から人口の濫造を來たして居つたようである。精神界の方面に精力を傾注せんには物質界に對する精力を犧牲に供する必要がある。而して斯くすることが人類の幸福を增進することになると云ふ自信から釋尊でも基督でも無妻であつたのだらう思ふ。植物でも花を立派に唉かせようとするには實を結ばないようにすると花に充分の精を送ることが出來るやうなもので ある。然るにそれが後には佛敎でも基督敎でも禁欲主義となりて形式に陷り、中世紀のモンクや佛敎僧侶の生活が常軌を逸して居るようになつたので、釋尊基督を始め其弟子達が無妻を實行したと云ふのは形式的の禁欲主義から出たものでなくてカントやスペンサー等の無妻を實行したのも

宗祖の眞血尙同宗徒の間に枯渇せざるを證して甚痛快の事となす、謂ふに此問題は決して日蓮宗徒のみの閑問題にあらずして佛敎全體の懸案否宗敎の權威全體に亘る重要問題にして基督敎徒と雖尙生氣あらば必來りて一考せざるべからざるものなりとなす。

此二問題が佛敎各派中假令偏狹頑迷の譏あるも尙敎義の純潔と信仰の醇正を大に誇り得る、日蓮、本願寺二宗の間に生じたるは佛敎徒信仰生活の彈力今に全く緩弛せざるを示すに似たり。吾宗徒此間如何の觀をなす、

宗祖流罪の當時烈々たる主義と權威は、德川時代に入りて迎合となり阿附となり御都合主義となれり、明治を歷て大正に入りて宗門信念の生活は如何、權威あるか、主張あるか、鼎鑊にも畏れず、斧鉞にも屈せざる底の確信あるか、今の宗門が形式の整齋稍其所を得て、人材の世を導くに足るもの乏しき所以のもの此迎合阿附の病、骨髓に入るに由らざるなきや、否や。　（大正五、三）

◇宗大佛專卒業生を迎へて

二旬を出でずして吾人はまた宗敎大學及專門學校卒業の俊才を祝賀するの喜あらんとす。一宗は之に依りて宗學の兩面に淸新の勢力を加ふるの慶あるべく、社會は敎界人材を要すること大旱の雲霓を望むが若き時、諸俊才の利器快腕か如何に當面の盤根錯節を排開するかを刮目環視せん。

從來卒業生の赴く所は留學生にあらざれば開敎事業に局限せるが如し。篤學精巧の士は蓋一宗の至寶なり。吾人は必らずしも留學生に赴くの士を迂なりとせず。否、此等好學の靑年彌出でゝ彌多く、動もすれば學問を輕侮し學者を冷遇して敎學の大本を忘るゝ現代の宗弊を根絕せんことを切望するものなり。夫の開敎事業の如き稍適材を適所に用ひつゝあるに似たる觀あるも、之を帝國々民の發展力に照らし來るときは開敎使の頭數學校會堂の配置殆ど十が一にだも足らず。矧むや帝國の同化政策或は平和事業の上に觀ば現在開敎の貢獻は殆ど空零に近き憾なきにあらず。吾人此故に諸俊才の開敎事業を志望するもの益々多きを切望す。豈局限する所を以て諸俊才の行を壯ならずとせんや。

然りと雖、今の留學生が徒らに舊套窩を株守して、宗乘餘乘の訓詁的死研究の外、時代の思潮を思導し、宗學の大體を確立し、若くは民人の實際救濟に關する緊要の活學問

も今は毒藥却つて藥となりし御家の繁昌に大喜も致したく祖先崇拜の野蠻國が着々としてキリシタンを合化し遂には吾等と同じ樣なる忠良眞實の家人たるまでに至るべき野蠻國の勝利を心窃かに喜ぶべきにあらずや。

さるにても、基督教の教育慈善の業に當る經營者卽番頭手代の輩は、當局より功勞旌表の奏請ありしも、其御主人たる英米の資本家に光榮の及ばざりしは甚だ殘念と申すべし、實は救世軍の本部や、米國の傳道會社などに勳章にても贈るべきが正當にて、英米のためには何時も忠實との噂ある當局者は此方頗る共當を得たるやとも存ずるなり。

（大正五、三）

◇神社對宗教の問題

西本願寺を中心としたる、七五三縄問題卽神社及祭式と宗教との關係疑義、及日蓮宗の學者間に熱烈の論戰を生じ、信徒また之に響應して爭議頗る熾なる夫の本尊問題は、近時宗教上の大問題にして、事決して本願寺及び日蓮宗に局限すべき性質のものにあらず、各宗の識者が之に對する態度の甚だ冷淡を極め、教界の學者が摯實の言論之に及ぶもの寥々たるか若きは頗る奇怪と言はざるを得ず。

神社對宗教、若くは祭式對信仰の疑義は帝國の進運上必らず一度は解決を要すべき至大の問題にして、神社に對する當局及民衆の觀念頗る透徹を缺き、古來慣習の祭式と憲法上自由を保障せられたる宗教の信仰との關係に就きても、爲政者に確然たる概念なく、一般の民衆も亦之に就きて蕪雜混亂の頭腦あるのみ、是一に維新の際、頑陋無學の淺見よりして、强て所謂神佛の分離を妄行し、廢佛毀釋の暴擧を敢てして、混然として玉の如き國民信仰を破壞したる惡結果に出づと雖、今にして、何等かの解決を與へ、何等かの說明を與へずんば國民の精神生活上常に不快なる壓抑を餘すは勢免るべきにあらず、之が爲に生じ來る、帝國文化の壅塞は實に容易ならざるものあるべし。

日蓮宗の本尊問題は宗教對國家の問題信仰對俗權の重大なる問題にして、近時動もすれば宗教をして、唯國家の僕婢となし俗權の犬馬となさしめ、迎合阿附靡然として風をなし、王公に事へず其事を高尙になすてふ夫の俗儒の識見すら、佛徒間に見る能はざるの今時、偶此問題に由りて一部尙摯實の信仰と大乘爲法の精神依然として消磨せざるを見る、蓋し多少意を强うするに足るものあり、而して是日蓮

慘の結果にして、他は卽警察及司法の進歩改善の餘地あるを示すもの經世の。事に當り、言論を以て任ずるの識者は、此時に當り、充分愼重の硏究を行ひ、帝國隆興の光明面に、暗黑の汙點を投下する此等不祥事の絕滅を期せざるべからず。

世の論者往々謂らく、刄傷問題の如き、栲問事件の如き、小學法令の不備に歸し、警察制度の周到を缺くに原因すと。言ふ所良に可なり。而も今の小學令の繁重細瑣なる、幾條增加を行ひ、今の警察制度の複雜なるに更に屋上屋を架せんとするか若きは、要するに勞多くして得る所、甚だ僅少なるべし。記者は、此等法令制度の不備缺陷を責むるに先ちて、先づ小學校敎職員及び警察官吏の人格改善の問題を急務となさんと欲する也。

今の中小學の敎育家が、單に學藝の注入を以て能事了れりとし。毫も自家人格の修養に力を着けざるは甚だ悲むべき事實也。其方正謹嚴、名聲ある敎育家と稱するものも、形式規律を墨守して精神の感化を度外視し、酷吏が個人を監視するの態度を以て生徒に臨み、毫も生徒の人格箇性の尊重を知らざるもの甚多し。況むや其放縱無學、徒らに人の子を賊して口を糊するものに至りては實に言ふに足らざるなり。今の敎育は此の如し。其玆に至れるは、實に維新の當時宗敎を迫害凌辱し、頑陋なる反宗敎的の態度を以て敎育家の威嚴なりと迷信したる現罰のみ。

敎育勅語の捧讀を以て、形式的のものとなし、其精神根柢に至りては、毫も意に介するなく。設備も敎科も監督も渾て形式主義と、法令主義との外、何等感化薰育の意義なき今の敎育界は、要するに宗敎主義―人道と正義と全人格の修養とを基礎とせる宗敎主義を缺きたる結果に外ならず。殺伐慘忍動もすれば、血を見て快とするが如き惡德が在々可憐なる小學兒童の間に行はるゝに至るは、要するに仁慈博愛を旨とせる佛敎感化の漸く根絕せんとするの兆を示さずとするか。

警察官吏に於ても、一片人類相愛の心を藏し、所謂張華手菩薩心を以て、事に當らば必らずしも寃枉を出さず、必らずしも酷吏法を弄するの譏なかりしならん。囚人をして進むで自白するに涙を以てするに至らざれば酷法は決して法令の如何ともする所にあらず。寃枉豈また止むの時あらんや、警吏の修養なる哉、今の警官をして佛敎信徒たらしめば、斷じて世を驚かす寃罪問題、栲問事件は發生せざりしならむ。

に眼眸を轉ずるの人甚寥々たるは、蓋し一宗發展の爲遺憾尠からずといふべし。吾人因より絕對に夫の舊式の訓詁を不要となさず。而も思潮を思導し、大體を確立して宗學を現代に顯彰すべき活學は更に必要なるを思はざるを得ず。吾人は大處、高處、深處に眼睛を据へ、識力と創見とを倘ぶ慈雲普寂の如き學風を欣尙し、組織宗學、比較宗學、辨護宗學、の如き現代必要に起らざるべからざる新學問の確立の爲に精透なる研究生の出でんことを祝禱し、而して紛々たる日支群小古學僧の末註主義に趨るを避け、佛教學の基礎學科たる梵語パーリ西藏等の聖語に力を用ひて根柢ある深奥の學風起らんことを希はざるを得ず。錫蘭に緬甸に印度內地に苦辛學を修むる士各宗相踵きて多く、吾宗獨り之なきは、宗學の恥辱ならずとせむや。若夫の實際問題に至りては各國宗教法律。經濟諸科。傳道方法學。教會監督學、及び各種の社會事業の研究の如きは民衆救濟上焦眉の活學問にして諸俊才が此の如きの研究に從ふは獨り一宗の慶のみにあらざるなり。

開教事業に於ても諸俊才に依りて一新紀元の劃定せられんことは吾人の願也。從來の內地人中心主義は諸俊才によりて帝國の同化政策に貢獻し平和事業に寄與する士民の開化、白人との外交に當り得る對外方針に轉ぜざるべからず、即英語の熟達、朝鮮及支那語の練習を諸俊に薦めざるを得ざるなり、而して諸氏に由りて南洋に蒙古に宗勢の擴張せんことは獨吾人のみの希望にあらず、吾人此故に諸俊の中に露西亞語、蒙古語馬來諸語の研究家が必らず出づべきを豫想して止まず。

特殊傳道の方面は國運の發展と共に諸俊の才に俟つもの甚多し、軍隊に工場に諸氏が快腕を要するの天地甚廣し、諸氏希くば濶大の眼を開き大に人文の爲に貢獻せよ。謹で賀し、且祝す。

（大正五、三）

◇教育の欽陥とその責任者

最近社會の問題となりて、世の視聽を聳動したるもの二あり。一は學童刄傷問題、及び小學校に於ける傷害失踪等の不祥事件にして、小學教育の改善を促すの聲、漸く識者の間に喧し。他は寃枉者の續出と共に暴露せる拷問事件にして、人權の尊重上實に容易ならざる問題に屬す。

一は即帝國の小學教育に於ける缺陥不備より生じにる悲

り、特に大乘佛教原書出版會は露國學士院の事業として、既に幾多の經論を公刊したるにあらずや。英國に於ても、佛教の研究特に熾盛にして、夫のパーリ三藏出版會の主腦たるリスデヴィヅ翁がマンチエスター大學に於ける佛教講座の如きは世界學者の翹望を集むる所なり。特に露國の如きは留學生を東京に送り帝國大學及吾が宗教大學の加藤荻原諸學者に就きて倶舍唯識等の研究をなさしめつゝあり、海外の佛教研究の狀勢斯の如し、然るに帝國最高學府に於ける佛教の研究は僅に印度哲學の下に隷屬し、其振はざるや甚しく教鞭を執る碩學高僧を遇するの道の如きも、菲薄徒らに講師の賤職を與ふるに過ぎず。之を英露に比するに單に體面の一點よりするも、實に赧然たらざるを得ず。況むや帝國文化の責任より見るをや。更に況むや世道人心開發の點に照らすをや。此過去の恥辱と缺陷とは今漸くにして淨除せられんとす、假令佛教家ならざるも誰か之を賀せざるものあらん。

帝國は東洋平和の指導者たると共に、叉文化の啓沃者たらざるべからず。此意義に於て帝國大學に於ける佛教講座の開設は一面支那に對し、他面暹羅印度淸國に對し、頗良好の感を與ふべし。支那は嘗て楊仁山の如き篤信の居士あり、烏域散逸の古釋典を吾國に求めて、之を刊行し、道を本邦の名師に求むるものまた少からず。若佛教講座の帝大に設立せらるゝが若くんば、支那佛教信者及研究家の歡喜夫如何ぞや。其暹羅及印度諸國の民心に與ふる影響の如き蓋論せずして可也。卽此新講座の開設は東方平和の上に於ても實に甚深の意義を有する也。賀せざるを得んや。

佛教界にありては此新講座の開設を刺擊として益擊實精透の學風重厚典雅の氣象を興起し、以て夫の學問蔑視、學者冷遇の輕佻なる惡習を剪除し、善良にして眞摯なる研究的競爭の風が各宗の間に興り來り以て教學界の活氣を呈せんことを切望す。

（大正五、五）

◇宗教大學の三十年式典

宗教大學は、二週の後、盛大なる三十年記念の式典を擧行せんとす。鴨臺の新綠、薰風徐に動きて風光畫に似たる處、學苑の紅紫益芳英華を縱にして教學進展の祥瑞を示し以て宗光闡揚のために萬丈虹霓の元氣を橫ふるも今や目睫の間に逼れり。一宗の前途に對して誰か歡天喜地の情なか

茲に於てか思ふ。最近の戰慄すべき二大問題は其罪教育家にもあらず、警察官にもあらずして、其實は寧ろ之を教導し誘掖して人格の修養、精神の安立を完うせしむる能はざる、宗教家無能の罪のみ。宗教家は、此の二大慘事に對して、決して之を對岸の火災視せざらんことを。

子供の會、日曜學校、補習夜學等を經營する傳道者よ。警察講話に當る特志家よ。卿等が努力は今や一層の熾烈を立て前進すべき時方に至れり。吾等全國の布教團は、此二大問題を刺擊として、大に此等の新傳道を鼓舞し策勵して帝國文明の暗黠を淨除するに奮勉せんことを。

（大正五、四）

◇帝大佛教講座の設置

東京の富紳安田翁は村上老師の勸奬に從ひて、金五萬圓を寄附し東北の素封家齋藤氏もまた澤柳三好等諸碩學の慫慂を納れて、二萬の義金を喜捨し、東京帝國大學に於ける佛教講座の設置を茲に始めて成るを告げ、京都に於ても之に動かされて、篤志家の淨資を捧ぐるあり。東京と美を競

ひて、佛教學の新講座を北山の學府に見るの日、或は遠からざらんと聞く。教界のため、帝國文教のために、實に欣慶に堪へざる也。

由來帝國の最高學堂大小聖淨顯密の講座が存立すべきは、歷史の過去に顧み、研究の現勢に照らし、抑も亦外國學壇に對する體面に見て、業に旣に當然之あるべかりし所、其今に至るまで之を缺きたるは帝國文教の一大恨事にして、亦最高學府の一大恥辱と稱すべかりし也。然るに今や時漸くにして熟し、此多年の恨事と恥辱とは方に解決の途に就き來れり。豈一大快事と云はざるを得むや。而して帝國隆興の機運に當りて、實業家が單に商工業の直接貨殖の事業以外、斯の如き宏遠なる精神事業、風教振作の根柢に淨財を投ずるに至りしは、帝國文明の發展、人道の進步に見て、益其事の痛快なるを感ずる也。

其皇室は何等佛教に由緒なく、其國民は毫も佛教と因緣を有せず。其歷史の背景として佛陀の教義に負ふ所甚少き歐洲諸國にありてすら、佛教の研究は今や諸大學の重要學科の一となり、競ふて之が歷史教義の討究を公表しつゝあり。且く吾が親交國たる露國の一例に徵するも、大家にはヲルデンベルグ、チエルパトスコイ等著名なる佛教學者あ

ありては、必らずや、崇嚴の追悼式あるべきと信ず。特に荻原椎尾大島等内外教授の功勞者を旌表すると共に、學校創立者黒田師の遺弟に記念資金を與へ、若くは其墓碑香華の資を補ふが如きは報德の至情上、良好の影響を一宗に與ふべきを信ず。但金額は決して多きを要せず、唯學校としての誠意を表すれば足れり矣。

學生諸俊才が、出身先輩を勸募して記念式典の資を集め先輩諸氏亦快然應諾し出身者にあらざる有力者も頗る之に隨喜し、醵出の金額豫算に超過するに至るといふ。學生愛校の至情は校外先輩有志援護の義俠と相待ちて、近時の美談といふべし。

學生諸氏が此等の資金を以て各種の餘興を設け校室内外の裝飾に、意匠を凝らして、大に式典の光彩を發揮せんとする、衷情實に愛すべし。唯宗教學校は自ら嚴然たる宗教學校の特色あり。漫に愚劣俗悪の普通大中學の餘興を學びて、輕薄唾棄すべき醜状を一般に示すが如きは、風教上大に愼戒すべき所。健全なる餘興は多少可なりとするも、吾人は夫の俗曲、相撲、假裝行列以外に、學生記念大傳道を行ひ、記念コドモ大會を催し、或は廢兵老疾孤兒狂者囚人の記念慰問を行ふが如き何等かの傳道及び社會問題の解決に貢獻する方法を講ぜんことを切望せざるを得ず。是亦先輩有志が義捐に應ずる最善の道にあらずとするか。

（大正五、五）

◇タゴール翁の來朝

哲學も文藝も宗教も、一切の思索、一切の批評、悉く昏睡し沈滯し閉塞して、微塵も生氣なく活動なき時に當り、西天老詩人の來朝は恰も大旱に雲霓を見たるの觀あり。宰相大臣より貴族富豪學者に及び、佛教徒も基督教徒も藝術家も學生も婦人も萬口一齊、此吠陀時代の詩仙を現代に現したる老詞宗の風姿を讃美し、其信仰の一神たると汎神たると將た多神たり無神たるとを問はず、競ふて此一詩人に花環を捧げんとす。歡迎の盛、此の如くして外客を待つは近時其例なき所。教界に於ける地位と功業の偉大を以ては老詩人に優る數等の上にあるブース氏の來朝に際しても此の如くなる能はざりき。來らむマキシム、ゴリキー等に對しては固より之と比すべくもあらざるべし。

タゴール翁に對する此の如き熱烈の敬慕は、其原因蓋し

飛雨食肉萬里侯之相也

らんや。誰か二尊の照護列祖の冥祐に對して深厚痛切の感謝なからんや。

春雨秋風三十年。三十年の日月は決して短きにあらず、此間宗門最高の學府は芝より小石川に轉じ、小石川より現在の鴨臺に遷り其名稱の若きも宗學本校より高等學院、而して淨土宗大學、曰く何曰く何而して今の宗教大學の校名を冐すに至りたり。而も依處と名稱との變革は學校の進運を示すの表徴として終始一貫宗門の教學に貢獻する所甚深く、宗門に送れる人材は濟々六百餘名の多きに上り、現に教學實務方面に活動する人材十中の八九は悉く其出身者たり、貢賦豈尠少なりとせんや。而して今や單に宗門の爲に功業を樹つるのみならず、世界文教のために、帝國の學藝若くは感化救濟事業の爲に奮勵するの傑士、亦漸く出身者中に輩出するを見る。謂ふに宗大三十年の歴史は最近宗門史中尤着實にして勤勞多き部分ならん。此三十年の長日月を回想する時宗門現在進歩の根源は決して偶然ならざるを了すべきのみ。

此盛大の式典を迎へて、宗運の進歩を祝するとき、宗大今日の盛運を開拓し、宗門最高學府の根柢基礎を築きたる故黒田勸學の先見達識と其不磨の遺勳は今更の如く一宗の感激する所たらずんはあらず。勸學逝きて今や一百十餘日此盛典を迎へて、自ら無限の感慨あり。勸學の遺範を紹繼して、育英の業に當りたる歴代の學長、傳へて今の望月已講に至る。其苦心慘憺、幾多燕頷虎頭の好漢を打出したる功勞は、次てまた大に宗徒の感謝する所たり。

宗大三十年の式典は、斯の如くして意義極めて深長也。此意義を顯彰して、宗學の尊嚴を發揮せんが爲に、宗大當事者は頗る式典の差定に苦心し、周到審議、遺算なきを期するもの丶如し。就中、望月學長が、東奔西走、宗門の珍書名畫寶什を蒐集して、一大宗史展覽會を催すの擧の如きは、確に此記念をして意義あらしめ學校の權威を確立し面目を一新し以て一般教學の進展を促すの一大美擧にして、謂ふに是已上適當の方あらざるべし、其去歳の展覽會に比し、一段の驚愕と嘆美とを學界に與ふるは疑ふべからざる所なるべきか。

他の式典差定中、公開講演の如き教務勤勞者の旌表の如き、既に當事者の準備完きものあらん。故黒田學長を初めとし教職員及び出身者學生諸靈位の追悼法要の如きも、普通中學にありてすら式典の前後、必らず之を行ふを以て、追遠報德の模範となり、冥福作善の淸規を示すべき宗大に

佛教徒此際豈一部の父子相迎を詞宗に譯傳する人なきか。一部の碧巖錄を理解せしむるの好漢なきか。惠心の九百年來教界に大詩人なく大藝術家なくして、遠來の珍客に法華の所謂『大王膳』を供するなきを恨む。（大正五、六）

◇日露新協約と佛教

日露兩大帝國の新協約は、戰雲暗澹の間、突如一道の曙光を赫揚して、東洋の平和は爲に磐石の固きを加へたる喜あるとき、吾國民は此光榮あり禮讓あり權威ある美はしき國際關係に、一層の親善を增長せしめ、一段の情を促進すべき、二三重要の楔子を得たるを祝賀せざるを得ず。

其一は露國文藝の名流が近時漸く吾國を訪問するもの多く、觀風察俗、周到を得むと力むる珍客を迎ふるの喜是なり。第二は久しく吾大學に學びて一家をなし、現に露都帝國大學の日本文學講座に令名嘖々たるエリセーフ博士が、新夫人を携へて綠樹薰風、舊學窓に久濶を敍し、精討細檢、錦上更に花を加へんとするを聞く是なり。最後は則ペトログラード佛教研究の留學生として其頭腦手腕遠くはワシリエーフ、ミナエーフ等を凌ぎ、近くはヲルデンブルグ、チエルワトスコイ等の壘を摩せんとする偉才、ドクトル、ロオゼンベルグ氏は、多年東京にありて苦心研鑽したる效空しからず今や其佛教研究の第一部として浩澣精密の佛教辭典集成を公刊し餘力更に其創意に成れる驚嘆すべき、五段檢索の漢字典を著はし、錦衣歸北ペトログラードの學壇に新に光彩と權威とを添へんとする吉報實に是なり。

蓋し國家相互の親睦は、實に國民が深痛なる性情の理解に基かざるを得ず。日露兩大帝國は嘗て不幸なる事件の爲に端なくも互に對手の力量、手腕を認識敬重するの機會を得更に世界の大戰に際して、兩國間の義俠寬廣の誠意益發揮せられ、終に今回の新協約を見るに至れり。而も露國民の間には夫のガリシアの勇敢なる勝利にありては吾國の砲熕兵器の威力を稱贊すると共に、亦漸く日東の文藝宗教に憧憬を有するもの多く、國民性情の理解は益々兩大帝國の間に斷ずべからざる友誼の連鎖を結び來らんとす。此點に見るとき、露國文豪名優の觀光、其新進學者の來朝は、誠意ある外交、光榮ある使節と相待ちて雄大の貢獻を兩大帝國に致すもの。吾人國民は是に於てか、エリセーフ、ロオゼンベルグ等諸俊才の爲に、大に稱嘆感謝の言なくして可

佛敎家にありては彼が爲に燒香して駐車を迎へ彼を馬鳴龍樹の代表者として讃嘆し、此ブラモ、ソマジュの一詩人を待つに渴仰至らざるなし。佛敎徒が大乘寬容の精神を體して日東思想界のために夕翁歡迎のために奔走するとせば實に喜ぶべく、其佛耶を一致せしめ、藝術宗敎を總合せしめて翁のために――東洋思想開拓のために勞すとせば實に稱すべき也。而も佛敎徒は厭迄も夕翁に何物かを與へ、少くとも日東の地を踏みて、佛寺の鐘聲に耳を澄したる彼に佛敎の何物たるかを理解せしむるの責あらずや。佛敎徒は阿羅々迦羅々の二人の仙人が外道たるを知り、發心前の迦葉三兄弟が婆羅門たるを學べり。現代の阿羅々迦羅々たり。迦葉たるゴールは遂に大乘の正道に導入とべき大婆羅門大外道ならざるか。佛徒の夕翁を迎ふるは一面大乘寬容の精神と共に亦統攝誘導の見識主張あるを要す。此主張あり見識あり。甫めてよく夕翁を迎ふるの道を得たりとすべき也。而して夕翁の信奉する所のブラモソマジュ卽印度ユニアン敎は此大乘統攝融合の玄理を得て一層其根柢を固くし其活機を大にせむのみ。

東京に於ける複雜繁華の禮儀講演歡迎は今や一段落を告げて詞宗は海濤の涼風靜に詩想を五浦の閑地に養はむとす二三にして止まざらるべし。東洋偉人といふ點もあるべく親緣思想の復活を喜ぶもあらむ。而も其中核は吾思潮の涸渴より生ずる渴仰の念を發露したるに過ぎず。敎界に於ても學界に於ても新思想を求め、新指導を欲するの情は彼が如く甚しく、暗中摸索して何等をか捕捉せむとする煩悶は歷々見るべきあり。彼等は今や印度一老翁の詩に於て其煩悶を解決せんとし、其指導を無意識に仰がんとす。高處より之を見れば、帝國文運のために慚愧の情なきを得ざる也。

タゴール翁の說く所は、恰も故ベルツ博士が吾國ペスト豫防法に對して猫兒の飼育を勸誘したると同一筆法のみ。尋常一樣の事、達人の言に入りて別趣味を生ずといふべく其邦人を警策し奮起せしめるたるも亦尠少ならざるべし。而も此一老翁に由りて何物をか得むと欲したる吾思想界は今や却て此一詩人に何物かを與ふべき責任あるに至れるを自覺せざるべからず。幕府時代清韓の客來るや、當時の儒生は詩酒唱和日東文學の爲に其體面を保つを忘れざりしにあらずや。タゴールを待つ、能樂日本料理三曲を以て能事了れりとし、些も思想上の唱和なきが如きは決して帝國學者藝術家の名譽といふべからざる也。

種に屬する二大別當が、一善光寺を守るに當りて、其權限に於ても勢力に於ても自ら衝突を生ずべきは自然の勢にして、特に古來道義上相扶相成を主として嚴密なる法規約束の其間に存するなく、便宜唯信徒の揷得を主としたる兩者にありては、法治主義の今日に至り權義上に爭議を見るべきは寧ろ必然と云ふべきのみ。嘗て數十年の昔、兩者權義の間に大衝突を生じ、淨天兩宗當局者の間に困難複雜の折衝を重ねて今日の少康狀態を博得するに至れるを記憶す。今日の紛爭は要するに、十數年前の權義問題の再燃に過ぎず然く再燃に過ぎずと雖、今日此紛爭が信徒信仰の消長、山運發展の隆替に影響する所は從前に比して遙に痛烈を極むるものあるべく、世の同山に對する批評判次も、世運の進步知識の發展と共に、自ら前に比して嚴峻切實なるものあるべし。同山のために憂へ、教界の爲に恐るゝ所以實に玆にあり。

大勸進が橫暴なりや否や。大本願が屈辱せられたりや否や。大勸進が正當の權義を主張する根底ありや。其反對なりや。此等の解決に就きては記者は喙を此間に挿むの研究と準備あるなし。唯記者の希望する所は、問題の解決を道德的、信仰的となし、相扶け、相補ひ相待ちて山運を興隆せしむべき大方針に由りて、與ふべきは與へ讓るべきは讓りて高く相互永遠の利益と繁盛とに計畫するにあり。是善光寺に忠なる所以にしてまた教界に永く尊嚴を保つの道なり、然らずして權義問題、法律問題を主眼として解決せんとせば一敗一勝、一起一僵、到底紛擾の歸結を見る能はざるべし。是兩者並立の歷史上必らず然らざるを得ず。而して其結果は唯海內無二の靈境を衰廢せしむるに終らんのみ。

天淨兩宗の當局者にありても此教界の不祥事、風教上哀むべき重大事件を坐視せず。協議懇談、勸解調停に力めて圓滿解決の方法を講じ、能ふべくんば、兩者の權限分界、組織に就きて此際公正愼重の協約を成立せしめ以て禍根を永久に裁斷するの親切に出づるを要す。各宗協議會成立の今、諸派の宿老俊才驥交益加はり、互に胸襟を開きて大に教門の長計を畫策するの時、此種の調停勸解の如きは蓋し過大の困難を訴へざるべし。此不祥事を一轉して所謂雨降りて地盤の强固を來すも甚しく勞苦を要せざるべきか。天淨兩宗の要路諸賢教界の大勢に鑑み、風教の前途に見て、以て如何とする。

（大正五、八）

ならん哉。

藝術及び一般國文學に就きては今且く措く、帝國佛教の研究に於てはロオゼンベルグ氏の烱眼其近著『佛教研究名辭集』中に遺憾なく發揮せらる、曰く『蓋し眞に日本を了解せんとし、眞に日本の文學を知らんとせば其文明の根柢をなせる佛教を知らざるべからず』と、露國學界の意を佛教に致す深しと云ふべきなり。此露國學界も佛教との關係に就きては今簡單に一言を挾む要あるを覺ゆ。

露國と佛教との深厚なる關係に就きては過般ミハイロウイチ大公殿下の特派に際し、之を敍說し更に機會ある每に數回之を切言し、以て吾國佛教學者の注意を促したり。故に今は唯露國學者佛教の討究は吾國性情の理解上最有力なる效果を與ふべき中核にして、此研究が延て兩國民の親睦を增長する所以のものを明にせば足らん已耳。吾國の佛教學者は特に思を茲に致し、東歐に於ける猛烈なる阿鼻叫喚の戰鬪中、露都大學『大乘聖經出版會』の事業は尙着々として堅實の進步をなしつゝあるを忘却せざらんことを切望す。而して吾國の佛教學者の露國學壇との交際は兩帝國の親善に直接間接に寄與するもの極めて深く、之を大にしては東洋平和に至大の關係あることは特に佛教徒の造次顚沛大に奮勵すべき所にあらずや。露國は旣に新進の俊才を帝國に送れり。吾國に於ても教佛聖語の一として最新研究の祕鍵たる夫の回鶻語の爲に、若くは喇嘛教資料の討査の爲に露國の最高學府に學人を送ることは、政府とても必要なり、佛教各宗としても甚切要也。

（大正五、六）

◇信洲善光寺の係爭問題

海內無二の靈境を以て目せらるゝ、信州の名刹善光寺に於ては、今や大本願對大勸進の紛議頗る劇甚を極め。堅執固守、互に相讓らず、遂に曲直理非を法廷に爭ふに至り、江湖の新聞又之に關聯して競ひて種々の報道を傳へ、或は同寺沿革の巷說を載せて信仰攪亂の媒をなすものなきにあらず、各宗に亘りて信徒の崇敬極めて厚く、佛教徒としては一生一回必らず同山に詣でざるを恥とするが若き由緒と歸仰とを具備し、山運隆々として繁榮しつゝある同山に此事ある。風教上眞に哀むべく、教界全體に取りても大正昭代の一不祥事として痛嘆すべきなり。

所屬宗派を異にし、由緒成立を殊にし、組織性質全然別

殺を敢てし得るか。

狂爭熱競の經過は云ふまでもなく一宗財力濫費の悲むべき支出帳なり。今の宗門は一錢の微と雖、悉く之を教學振興の資源となすを要す。五千金一萬而して買ひ得る所は環視官民の嗤笑と嘲罵のみ。一宗體面の汚瀆のみ。本山法主威嚴と敬崇の下落のみ。是選擧運動費の買ひ得し總てのみ而して怨恨而して不平、而して醜態の暴露、剰餘錢として來るものは唯滅法衰宗の弊害のみ。而して見よ、一方に於ては九十の老法主極寒酷熱東西に移錫して大本山の再建尙前途遼遠の苦戰を訴へつゝあるにあらずや。滿蒙臺灣の開教區の如き教費の必需宗門の前途彼が如く切要なるにあらずや。抑も夫の競爭旋渦の中心に近き佛專校舍の如き彼が如く改築の急を逼りつゝあるにあらずや。此經濟必逼の秋に際し一宗は決して一本山法主の公選競爭の爲に、而も非宗教的非念佛的の俗惡醜劣の運動の爲に信徒の汗血を搾取し得たる淨財を濫費すべき時にあらざる也。一萬金を投じて法主を贏ち得たる人よりも寧ろ二千三千の淨財を轉じ抛ちて佛專校舍の急を救ふ人、今や方に國家と教界と一宗と信徒とが恩謝し敬崇すべき眞正なる精神的無位の法主たるを思はずや。

紙幅漸く盡きんとす。記者は黑谷本山後任法主公選關係の諸君に對して冀くは再考あらんことを切望す。念佛を勸め、念佛に由りて榮ゆべき大本山は、選擧卽傳道選擧卽念佛の助業たる清淨の信念なき名利紛爭の俗僧輩の前に斷じて爾の一票を容すべからざる也。

（大正五、九）

◇敎化洽及策とその中心點

古德先賢が、化敎洽及のために苦心慘憺の勞如何に深くし且つ大なりしかは、實に後人の想像已上に存するものあるを覺ゆ。後昆の兒孫多くは庸劣凡愚、徒らに安然として古賢苦心の跡に馴れて、之を活用し、利導し改善して、適時の教導に力むるを忘却する、比々として槪ね是なり。結緣五重の如き、授戒會の如き、今日の形式と淸規とに到達するまでには、多年刻苦の經驗實に筆舌の盡すべからざるありしなるべく。御忌の如き、盆會の如き、將また今や盛に行はれつゝある十夜法要の如き、季節布敎の確立と洽及を見るに到れる辛酸と忍耐とは如何ばかりの歲月を費せし

◇法主選擧の醜爭を誡む

黒谷大本山後任法主の一宗公選に就きては、江湖早く某々兩派の競爭激烈を極めつゝあるを報じ、且つ種々の醜閙怪事其間に横はるを傳ふ。苟くも旣に選擧あれば競爭の之に伴ふは必然の勢にして固より止むべからざることに屬すと雖、敎家の行爲は一言一行悉く風敎の補翼たるべき要意を忘却し、特に信仰の淵源崇敬の標的を以て居るべき大本山法主の推選につきて、狂爭熱競、勢の行窮まる所に任せ情の激する所を縱にし、目的の爲には手段を顧慮せず、惡竦醜陋、普通俗輩の尙唾棄せんとするものを敢行せんとするに至りては、切に一國風敎の爲一宗敎學の爲、本山崇奉のために切に鬪爭の渦中にある諸君子の警覺猛省を促さざるを得ざる也。

如何なる學德雙絶の高德と雖、熱競紛爭し怨憎忿嫉の結果推選せられしものは、縱令其高僧に寸毫の野心なく、唯一部末輩のために强要せられたりとなすも、尙天下の敬崇は俄然一半を冷却し、學德の損傷すること實に甚しく、自ら環視者の指彈する所となり、所謂贔負の引倒しを以て、敎界の僧寶を名山に生埋したりしもの、其實例決して少きにあらず、夫の永平本山前貫主の如き其經營の大功は近時洞宗稀に観る所、德量道力の常鱗凡介を超出したる禪門の巨龍たりしことも誰か之を拒まむ。而も其公選甚だ紛爭を極め、猛烈熾狂の競爭往々にして敎家の面目を缺くの擧ありしを傳へたるが故に、天下の默童禪師を見るや彼が如く之を一凡僧視一俗僧視して永く其眞價を認めず。幾萬の信徒また冷々焉として頗る之を師表と仰ぐを快とせざりしにあらずや。而して默童禪師が住山數月を出でず早く化を遷したるもの、また怏々の情、一宗に對する憂憤と相待ちて圓寂を闔宗の覺醒に供したるにあらざるなきを得むや。黒谷大本山の公選に狂奔怒號するの士、其情誼に於ては各之諒とすをべし。唯猛烈危激、退讓する所、妥協する所を知らずして妄に猪突するが如くんば、永く禍根を一宗に殘すのみならず。其汗血奔走纔に擧げ得たる新法主は、自ら默童禪師が贏ち得たる冷笑嘲罵指彈憂悶の苦痛を喫して官民信徒の凡僧視俗僧視の冷眼中に永遠に其學德の生命を虛榮の一本山法主の名の下に生埋し了らんのみ。熱爭紛競渦中の諸君子、尙よく此至愚を敢てし得るか。此冷酷の老宿虛

◇佛教護國團の成立に際し

現代教界の所謂老宿碩德を以て自ら任ずるもの、口を開けば卽ち政府が佛教を待つの冷々淡々を慨し、大官政治家等が勸說唱道する所に對して、馬耳東風、殆ど聽て而して相關知せざるが若きを憤り、之を以て天下風教の頽廢する弊源となし、之を觀て、而して、國民精神の尫弱危脆良に所以ありと論じ奮興蹶起、進むで而して此弊源を廓淸し、天下國家を指導して國民精神の歸趨を知らしめんと期す。其憤慨や實に吾人の感を同うする所、其蹶起に至りても、吾人また決して驥尾に付するの勞を辭するものにあらず然りと雖冷靜の思慮は必らず熱烈の慷慨と伴はざるべからず。勇奮躍進も洞觀の明畫策の密あらずんば、或は猪突以て溝壑に陷らずんば蓋幸のみ。今の教界の老宿が外侮に憤るも可也。外壓に備ふるも最可なり。政府の宗教政策の盲目を罵倒するに至て益善く、朝野の政治家士君子か、宗教思想の覺醒を促し得て痛快之より甚しきはあらじ、而も老宿諸君は何故に外侮の來る所以、外壓の生ずる原由、抑も亦政府の宗教政策の確立を得ざる根源、而して朝野の士君子が諸君の言ふ所を馬耳東風、一嘯に付し去るの基因、抑も何處てあるかを考察せざる乎。之を考へ之を察せずして、徒らに瞋拳怒罵し輕擧盲動せんとす。是無智の野人匹夫の行爲。決して智者の業にあらず、決して一世を指導するを以て任ずる人の言動にあらざるなり。

外を攻めんと欲せば、先づ内を省みよ。吾人は爰に內省と云ふ。蓋し必らずしも所謂老宿諸先輩の行履德操を摘發して風教上其廓淸を希望するが如き不敬を敢てするものにあらず。唯思想の根本に就きて、一言を容されんことを請ふにあるのみ。

今の教界の諸先輩は、佛教が過去の歷史に於ける光彩を回顧して、平安佛教を今に觀、德川佛教を再び起さんとするの意ありて、而して大正佛教の新抱負と新天職の那面に開拓すべきやを忘却せるにあらざるなき乎。佛教の鎭護國家は可なり。國民精神の興起も可なり。而も今の佛教は帝國の發展と進軍とに伴ひて、人文貢獻。人道普及。平和確立の三大方針に於て其雄大なる前途を有せざるべからず。之を是思はずして、消極的に帝國の前途を悲觀し偏狹なる國家主義を迎合して一種のショービニストの國體を造らん

か、此等季節布教を現代的に活用して古人苦心のある所を發揮し、この歷史あり由緒ありて、民心に深牢の根帶を有するものをして、適時の教化に有效ならしむべきの要は、二三年の前既に玆に一言したる所なりき。

基督教徒は今や此秋季を期して、特別の大擧傳道を行はんとし、既に其陣容の整々たるを示せり。吾宗徒は別に之に對抗する設備を要せずとも現に都市に行はれる十夜法要を摯實に且有效に利用せば、獨り外侮を禦ぐに足るのみならず、更に積極的に教線を擴張するを得むか。而して之をなす所以は、此美しき法要に存する傳道的意識を的確に發揮するに存するのみ。

秋光方に闌なる所、詩味俳味に滿ちて、而も一種の溫情と沈着を有するこの法莚の、考證若くは源流に至りては之を專門家の研究に讓らん。その之を彌陀成道の報恩法會と倣すが若きも、必らずしも深く歷史的或は教義的に其是非當否を論辨するの要なかるべし。唯記者は此秋のみのりの傳道意義に二つの極めて重大なる點あるを看過する能はず。而してこの二の要點は適時教化の極めて重大なる問題に觸れつゝあるを一言せば足れりとす。

第一の點は言ふまでもなく聖經の『於此修善十日十夜、務於他方、諸佛國中、爲善千歲』の眞義を發揮するにあり即ち淨土教の信仰を根底とせる積極道德の勤修なり。現代教化に於ては此道義的の意義特に重要なるを見る。秋風蕭索、人心漸く肅淸に向ふとき、此の强烈の道義を勸說して五痛五燒を絶滅し五善に就かしめ、善を以て惡を攻め之を彌陀救濟の根源に歸入せんとす。十夜法要の意義玆に於てか常に新に、常に大なる力用效果あるを見る。

第二の點は即この秋祭を、彌陀成道の報恩會となすと共に、農村に於ける收穫感謝の意義を結合し得べきこと是也。眞俗二諦是に於て融合し、世出世の功德斯くの如して統一し、敬虔なる信仰と、剛健の勞働とは表裏相應し、雄大なる興國的の法會として、大に民心を改善指導するに足るものあらむ。

第一は道義向上に對する宗教的努力也。第二に產業特に農村改善の信仰的力能なり。斯の如くして、此美はしき秋の法會は道德と產業の兩面に對し現代教化の根本問題に的確明快の解決を與へんとす、若之を活用して多少の新設備を加へ以て古賢苦心の存する所を發揚せば其傳道上の效果蓋し大に見るべきものあらん乎。

（大正五、一〇）

◇九十老法主の化導

増上寺老法主、伊丹及京都地方に於ける長期の巡錫を終りて歸山せらる。一路吉祥、太だ祝賀すべく、教門の模範誰か之を欽仰ざらんや。謂ふに荷風萩露、滿目の秋光に征途を視したる已來、楓紅既に褪し、蘿黄亦颯零し盡きて、半夜の霜氣、切々人に逼る時、茲に歸山を迎ふ。風雨健闘六十日、勸進利導、獅坐暫も暖なるなかりし勇猛精進を仰ぐとき、何ぞ感奮の涙なからんや。

老法主今回の化導は、宗門傳道の龜鑑を示し、九十の高齢、不惜身命の至誠は眞に天人を感動せしむべきものあり之を教門の側より見て教化の大範となすべきは固より論を待たず。勃々たる國運の伸張に伴ふ、國民雄大なる意氣の師表としても德教上最も尊崇すべきを見る。蓋し帝國々民現今の病弊は其職務に摯實忠誠を缺くを第一とし、苟安逸樂、小成に甘じて僥倖を希求し、着實向上の大志なきを第二とす。本山法主として宗教家として其職責に嚴格なる、教界の上下誰か老法主に匹敵するものぞ。巡鉢貧福を問はず。供養は貴賤を撰ばず。東西飛錫暫も寧處することなし凡そ勇猛進其志す所に熱烈なる斯の如きは各方面に亘り天下を通じて倫匹少き所なるにあらずや。老法主は實に國民の儀表として、身を以て教へ、不言實行、德教振作の根柢を築きたるものと稱すべきのみ。

宗政の革新已來、伊達黑田等の巨頭を以てして常に憂ふる所は東西乖離の傾向なりき。宗勢の伸張と共に延て今に至るまで宗門識者苦心の存する所、經綸に當るもの丶終始焦慮する所のもの、亦實に此東西感情の疎隔にありき。然るに老法主今回の巡教は、隆然たる德望の致す所、京都護法愛宗諸士の斡旋と相待ちて、東西渾融の實其固きを加へ、一宗統一の上に重大の意義と效果とを添付するに至りたり。是時勢の進運必らず是に至らざるを得ず、京都有力者の扶宗の誠意自ら此喜ぶべき快事を實現するに至れりとは言へ。其之をして迅速に且つ確實に茲に至らしめしものは、實に老法主勇猛精進の至誠、不惜身命の努力に歸せざるを得ず老法主不言實行の賜夫大ならずや。一宗の大局を觀ずるもの、希くは老法主血涙の迸出する所、此重大の意義を宗史に留めたるを忘るゝなからんことを。

老法主東奔西走の效果は斯の如く夫大なり。而して其之をして永遠に顯彰するの道は唯緣山大殿工事の速成にある

とするの傾あるは蓋し時代逆行の愚を學ぶものにあらずして何ぞや。

現代の淺薄なる政治家輩及び一種輕浮の實業家等が、動もすれば基督教に秋波を送るが如き傾あるものは、同教の現今が幾分にても此世界的の天職を完うし得るが如く見ゆるが爲ならずや。否彼教の學者先輩が之を標榜するが爲ならずとせんや。此の如き積極的大勢の趣向を察せず、大正の愛國心、大正の國民精神が必らず世界の平和、人道の治及帝國文化の宣傳を其要素となすべきを忘れて、思想萎縮、偏に舊歴史の殘壘に依りて偏狹の國家主義を夢みんとす。嗚呼是れ何等のアナクロニズムぞや、此の如くして朝野の士君子が我に聽かざるを責めんとす。責めらるゝもの否か、責むるもの却て夫否か。

宗教が國家鎭護の職責ある、誰か之を否まん。而も宗教には超國家の至大至厚の信念あり。此信念あり卽ち發してよく國家を護り愛國の根底を堅くす。所謂出世の至善は直に正道の大慈悲四恩十善を現する所以なり。未だ此超越の大信出世間の大法なくして、國家を導き世間を利するものあらざるなり。今の教界の諸老宿は此宗教の根本主義に就きて痛切に考慮するなく、唯汎漠に國家主義を說き國民精神を教へんとす。抑も其說く所は何者にして、教ふる所は果して何等ぞや。之を以て天下を導かんとす。天下の脊を向くるもの責夫何れにある。宗教の人を動かし世を導く所以は痛切の信仰のみ。聖法然も聖日蓮も聖親鸞も皆此の如くなりき。未だ權略を主とし政治技倆を誇り、教會政策の變幻出沒を以て世を動かしたるものを見ざるなり。今の老宿先輩は此點に於て少しく反省するの餘地なきや如何。

佛教護國團就らんとす。佛教が國を護り得ると然らざるとは、唯時代指導の洞見と、熱烈の信仰に由るのみ、然らずして固陋偏狹の時代錯誤（アナクロニズム）に陷り、若くは國宗迎合の卑俗の奴隷精神に縛せられて超越的純正の信仰の墮落を來さば、豈啻に國を護り得ざるのみならんや。寧ろ却つて國家に護られて、僅に形骸を維持すべき所護國被護團として終らんかな。

護國團、就らんとす、卽一言を該團成立關係の諸老宿に呈して、眞正護國の精神の確立を望み、同團が時代指導の積極的健全なる團體たるに至らんことを希ふ。

（大正五、十）

宗門には吾誌初め相應の言論開陳の機關もあり他に新聞などもあれば、まづ自己の宗政意見、教學の抱負を堂々と發表し、或は有權者を一堂に會して、辨論以て自家の主張を訴へ、己が材能學識辯才伎倆品格が、果して有權者の希望に副ふや否やを問ふを要す。有權者も今回こそは一切の情實請托を全廢し、眞に自己を代表するに足るべき快漢人材は神聖なる一票を投ずるを可とす。品格下劣なるもの、操行に非難あるもの、可否の數に辛して加はる外、木偶の如く議場に立ちて一言も意見を開陳し得ざるものゝ如きを、選出するとせば、是有權者その無學無智無慚無愧を態々國家社會教界の前に代表せしむると等く恥辱此上なしと云ふの外なし。されば何よりも有權者の自覺こそ今回半數改選の肝心要の事とすべきなり。候補者として立つ人も、また大に自己の如何を顧みて餘程の覺悟を以て逐鹿場に起たれたし。卽ち闔宗意見の代議員たるのみならず、また一宗品位操行の代表たるべき自覺あるを要す。例せば酒を嗜む癖ある人はせめて節酒にても一宗に誓約して打つて出づる必要なるべし。泥醉議員、放蕩議員、此位一宗の面目を代表的に破壞する代物はあらざるなり。此點は今回特に撰擧界の能所ともに宗教の自衛上、痛切の自覺あらんことを切望するものなり。而して宗務が行政事務の上に公明正大一絲紊れざる嚴重を期すべきは自明のことなるが、その高等政策、政務の側より大に一宗人材の活用を考へ自家への系統主義に反對する所謂在野の敵黨と雖、社會教界が認めて相應する材能者には思ひ切りて寛大の態度を示し、共助くべきものは寧ろ之を助くる迄にして、之を自家系統の防腐劑とし刺戟劑とせんことは、包容大量勇氣あり、改善あり、遠見ある賢明廣達の宗政家の仕事ならん、一言之も添へて論じ置く。　（大正五、十二）

◇矢吹氏の歸朝を迎ふ

大正六年の宗門は、何れの點より觀るも、希望洋溢し、自ら活力旺盛の潮勢を示さんとし、全體に於て、緊張努力の氣慨、教學の各方面に搖曳しつゝあるが若し。此の有望有爲の新春に丁りて、茲に矢吹慶輝氏の錦歸を迎ふ宗門は實に多大の歡慶なきを得ず。而して夫の洋々の希望は茲に於てか、寒梅一點、早く旣に現實の芳香を放ち來り、宗苑の元氣は、新春の劈頭、直に萬丈の光焔を此新歸朝の舌端

のや、縁山工事の竣功と否とは今や單に縁山一箇の問題にあらずして、帝國德教振作上の大問題となれり。一宗々運の大發展に死活を與ふべき重大の事件となれり。更に一宗統一、東西乖離の禍源を一掃すべき雄大の意義を有するに至れり。縁山大殿の速成と否とは茲に於てか一宗體面の保持と否と、生命の存續と否とに關する焦眉の急務として廣く天下に約束せらるゝに至れるなり。一宗は今や全力を盡し、あらゆる奮勵と努力とを以て、老法主の辛酸苦衷に酬ひ、不惜身命の躬行を空うせざるを要す。南條文雄師スエズ開鑿の詩に曰く『精神一到事皆成、無水之間舟可行』と今の淨土宗の現勢と信徒は決して無水の沙漠にあらざる也。而も九十の一老僧をして獨り血涙を搾らしめ風霜に勞せしむるは、夫れ精神の未だ到らざる所以にあらざるなきか。園宗夫奮起せよ。

（大正五、十一）

◇選擧即傳道

宗會議員半數改選の發令は、本日その公布を見たり『選擧即傳道』は一宗の公選ある毎に吾誌の呼號する所にして今更事新しく論辯を費すまでもなく、讀者は恐く亦例の御説法かとの嘲笑も之あるべきは豫想せざるにもあらざれども、念佛の何時にても有難きが如く、大道は何處迄も大道たるが故に、茲に特別に『選擧即傳道』の眞義を復び賢明なる一宗上下に訴へて一考を煩はすことは實に止むことを得ざる必然とも申すべし。特に現時帝國勃興の機運に際して、國家社會が宗教に期待する所の多大なるに想ひ到るときは、今回の半數改選には一層この『選擧即傳道』の意義が徹底すべき必要あるは勿論、宗教家が實踐躬行、身を以て風教の肅清振刷を敎へ、國民の儀表を以て任ずべきは言ふまでもなきことなれば、自家の存在の爲にも愈以て此重要の意義を熟考し且つ實行すべき場合となれり。尤選擧と云へば運動も伴ひ競爭も之あるべきは無論乍ら、其運動も紳士らしく宗教家らしく、公明正大を旨とし、超競爭の君子の爭として、禮節あり、品位あり、訓練ある眞面目の爭ならざるべからず。從來教界の弊として宗政の施設に關する意見や、宗門對教界對國家に關する抱負などは何等の發表もなく、其品位材能伎倆の如何などは一切棚に上げ、情實や叩頭や威嚇や黄金や酒食などを以て、自己を披露する馬鹿々々しくも亦愚劣極まる方法は、此際一切之を廢し、

る所といふ。眞に喜ぶべきの慶事と稱すべき也。此二十五年間の辛酸經營、苦戰惡鬪は固より特に言を要せずと雖、其堅忍の效果に於て今日の堅實なる基礎を築き得て、位置に於ても、校舍に於ても、設備に於ても訓練に於ても、また多數の生徒人員に於ても、漸にして帝都女學校中の第一列に班して遜色なきに至り、名聲隆々として校運の前途益有望に、新學年入學志望者の若きも、例年に比し二三倍を示すの盛況を齎らし得たる也。而して此二十五年間に出したる一千有餘の卒業生は、實に宗門が帝都の風教と文化とに於ける貢獻を明に證し得、而も此間に確實なる教化の勢力を各方面に扶植しつゝあるは特に喜ぶべしとなす。

　聞く、現時上流社會の家庭には、基督教を信奉するの淑女、比較的多數を占めつゝありと。是蓋し基督教が女子教育の效果漸く酬はれたるを示すものにして、維新已來、同教は良好の女子教育機關を備ふること多く、其努力の深重にして巨大なると、且つ上中流婦人のために、現代の切實なる社交的の學科と訓練とを授くるの便宜最多きとを以て、實に此好果を見るに至れるのみ。今日に於ても幾多優秀なる此等女子教育の機關は、信仰の如何を問はずして上中流家庭の信頼を博し、隱然として帝國女子教育界の一大勢力なるを見る。

　佛教徒が之に對する同種の設備としては、帝都には本宗の淑德の外、村上博士の東洋、故島地上人の遺業たる千代田、及び小林芳次郎氏の淑女の三校あるのみ、若し之に特殊の教育機關なる眞龍を加へ得るも、僅に五校を數ふるに過ぎず。基督教々化の周到に比して劣る所あるや實に甚し。然るに此五校中本宗の淑德が幸にも其員數及設備の點に於て最勢力あるを見ば、本宗の女學界に於けるの地位決して輕からず、貧弱なる佛教徒の女子教育の機關中に聊か意を强うすべき一角を荷負しつゝあるものとして慰むるに足るべき也。

　此故に本宗の寺院は我が淑德が佛教界に於ける位置斯の如く重大にして、吾宗が帝國德教上に於ける貢獻の同校に待つもの甚深くして且大なるを確認し、學宗一致、同校の外護となり、後援となり、其有力なる檀徒を勸奬誘導して、奮ふて其愛孃を同校に送らしめ、以て益同校訓育の效果を大ならしめ、學校寺院相應じ相待ちて、教化の徹底を期することを要す。今や同校の誇るべき記念式の內議あるを聞き、且つ新學年に臨めるを以て茲に數語を費して闔宗諸賢の注意を促すこと爾り。

（大正六、一）

に代表せしめて、以て多幸の前途を慶福せんとす。嗚呼何ぞ夫快なる哉。

　世界の大戰が帝國德教の根本問題に至大至重の意義を有するは論なし。佛教徒は之が爲に特に人材を派して精細に列强思想界の情勢を觀察せしめ、其政教の關係、宗教對社會の活動等を精査せしめざるべからず。而も教界徒らに内に力むるに急にして開戰已來此重任に就き、全く何等の設備計畫あらざりき。矢吹氏此間に立ち開戰の當時より、米國より英國に往き周密精到、凡そ事として究めざるなく、特に戰事社會問題及社會事業に就きては其精密の頭腦と、敏明の手腕は殆ど一切の資料を蒐集し、戰鬪なるに及び佛伊瑞西を訪ひ、更にスカンヂナビヤ諸王國に入り、露國諸大都にて、、幾多の苦辛を嘗め、以て親く戰時交戰國及中立國の思想問題と實題事業との要義を視察したり、其業績が戰中戰後の帝國に貢獻すべきの大は論ずるを待たず。之が爲に德教及思想諸問題に於ける有益の解決を期待すべき疑なき所なり、其幸慶は唯に宗門に留らざるなり。教界全體の福なり、延ひては則帝國德教界、思想界多大の慶事也。

　此憂國護法の俊才は思想實際の動的方面に其透徹の觀察をセーヌ、テームスの河畔に試みし側に靜にヲツクスフォードの學宗、大英博物館の深窖中、頭上のツエツペリンの西域學即中央亞細亞古學是なり。彼は西域發掘の大家サー爆音を聞きつゝ潜心に其本分の靜的研究に從へり。此研究は將來佛教歷史及教た理史の根基るべき最新の學問たる古スタインの信認を得て燉煌發掘の佛教古文書中、漢文古經の精査に從ひ、逸經珍籍の佛教學上重大の問題となるべきもの三十種を其間に發見したり。矢吹氏の殊勳は單に此點に於ても宗門の誇とすべき所、日東學藝の爲に大に旌表すべき功勳といふべし。

　矢吹氏は既に此多大の貢獻をなし、感謝すべき殊勳を樹てたり、此貢獻をして意義あらしめ、此殊勳をして其效果を空しからざらしむるの責は、擧て實に一宗にあり。闔宗の諸賢、希くは此佛天の冥示靈驗を仰ぎて、大に護國扶宗のために奮勉し以て此俊才をして快く其材能を揮はしめよ。

（大正六、一）

◇淑德高女廿五年記念式

　淑德高等女學校は今秋を以て方に創立二十五年に達し、其祝典の方法に就きても、今や當事者の審議を凝しつゝあ

然るに現狀を見るに寺院賃貸者は唯利の多きを是貪りて傳道上の要意を存するもの甚だ稀なるの憾なくんばあらず。堂々たる書院より基督教家族の讃美歌を聞くが如きは今は殆ど普通なり。崇佛敬僧の念絕無なる無信の小官吏會社員連に殿堂の神聖を蹂躙せられ、其放漫の醜態を逞うせしむるも往々にして見る所にあらずや。而して貸借者は寺僧が勤行供養に荒怠せるの狀、寺族の下賤卑陋の態に佛教を蔑視するの念を增長せしめ、寺院滯留の結果寧ろ風教を害し、無信仰をして愈更大ならしむるの風なきにあらず。是各宗當局者が特に精細の注意を怠るべからざる所、特に政府及社會が宗教に留意し來り、之が尊重の聲、漸くにして輿論となり來りつゝあるの際、當局者は此寺院の濫用惡用に對しては職務上大に警戒する所たるや論莫し。禮拜所布教場の體面を汚瀆し、其當然の作用を沮塞廢頽せしめ延て宗勢を失墜せしむるものに對する監督は何れの時と雖極めて切要と雖特に今時此取締を怠るが若くんば、當局が政府と社會に約する言責を如何とする。佛教徒にして若今に於て自ら之を監督し制裁する能はずんば、政府及社會は必らず這般の問題を提げて各宗に肉薄し來るの曉、恐らく必らず遠からじ。

而も事若下級賤階の寺院にして、唯一の資源を賃貸に仰ぐが若きは幾分尙之を恕すべし。資力財源旣に備はり經營維持の方法乏きにあらざる相當寺院にして、單に其逸樂驕奢の爲に、兒孫の生活の安固豐充を計らんが爲に大規模の賃貸をなし秋毫も布教傳道、佛祖報恩の至誠なく、私利を高等旅館と競ひ、私慾を下宿業者と共にせんとするが若きは、此際最も各宗當局者の留意を請はずんばあらざる也。

（大正六、二）

◇大學と風紀肅清運動

宗教大學の教授會は前月來の懸案たりし日曜學校の公開を可決したり。同校の大學擴張運動（ユニヴアシテエキステンション）が此擧により着實に効を收めんことは內外の切望する所にして、現代宗教學校の名實は斯の如くして初めて存在すべきか。但し學生が此等社會奉仕（ソシアルサーヴイス）の實現は他日教家として其寺院教會を現代化すべき切實の準備なるを忘れず、摯實の研究態度と精到の客觀批評の眼識を明にし、且つ身苟くも此等公益の事業に關與する已上は此等運動の源泉たる英學若くは米國の宗教學生と同じく、儉素節約、斷然禁酒禁煙を勵行し、身を以て率

◇夏季寺院の活用を期せよ

基督敎徒は特に天幕を白砂青松の間に張り、講席を樹下岩上に設けて、熱烈に傳道に怠らざるに、佛敎僧侶は弘敎宣道の大道場を避暑客に貸與し去り、時に本尊の寶前に絃歌湧き、戯笑起り、其秩序なく、制裁なきは寧ろ普通旅館已上の醜態を極めつゝあり。寺院創立の意義と、其存在の理由は斯の如くして、旣に半文錢の價だもなし、今や官民識者の聲たる夫の宗敎尊重の要の如きも、此現狀に觀ては寧ろ反對に此風敎上無用の營利事業たる間貸屋を撲滅するを至當となすに似たりと、是記者が識れる、佛敎外護の一高等官が洩したる痛憤なり。夏期來る毎に此痛憤は自ら之を發し、同憂のもの亦屢之を苦言するを聞くも、夫の佛敎聯合會の快擧ありて已來、其決議に成れる各宗管長の時局に關する訓示公布せらるゝの時、此痛憤は特に其刺激の熾烈なるに感ぜずんばあらず各宗にして今若し鐵鞭を執りて現に此宗敎尊重を裏切りつゝある、山間海濱の寺院を監督し鞭韃して、少くとも時局に對する寺院たるの體面丈なりとも維持せしむるにあらずんば、卽ち夫の訓示は殆ど一片の敗紙と等しきのみ。各宗が政府に對するの責任と權威と斯の如くして果して何れにありや。

現在の地方寺院が、都市の肉山福地に比して其經濟の甚しく缺乏せるものあるは、容易に認め得べき所、特に此地方寺院衰頽の慘狀は、各宗中、恐く淨土宗を以て其最となすべきに似たり。此故に夏期若干の期間を割きて賃貸以て財政上幾分の補給をなさんとするは、其情實に憐れむべきなきにあらず。而も其賃貸の方法の如きも、常に佛祖報恩の至情と、攝化利生の本懷とを忘れざるを要し。其賃借者の人格職業を調査し、能ふべくんば先づ本宗の檀信徒有緣の人を取り、次て佛敎の信徒を撰び、賃貸契約の際にも少くとも寺院宿泊の本旨を忘れず、佛陀恩光の下に棲息するの觀念を懷かしめ、佛舍不相應の放恣の行爲の如きは之が愼戒を乞ひ、以て風敎上及び信念の修養上全く無意義ならざらしめよ。斯の如くせば寺院の賃貸甚しく責むべきにあらず。否責むべからざるのみなず、之に由りて敎化の洽ねからざるを補ひ、傳道の一端に力を與へ得べく、其方法にして巧妙なるを得ば夫の歐米に於ける基督敎青年會傳道旅舍、若くは行旅慰安館の若きと效果を同うすべし。

にあらざらんや。今の敎界の經綸家學者事業家多くは此內面の最大病弊に着眼せず、否、滔々自ら濁流中に浮泛して形骸の粉飾を以て敎勢の皇張了れりとす。故に施設新にして弊害更に新なるを加へ、制度更改せられて紛擾益大なるの醜を見る。佛界今や缺けたるもの多し、而も其最大の缺陷は實に戒律精神の缺陷也。

加特力敎會が其敎義儀式の現代に適せざるを以てして、尙其勢威を維持し、信仰を保續するを所以は、其成功せる社會運動及び感化救濟事業の根柢として、嚴正なる戒律あれば也。僧侶家族論の浮薄なる議論が日本に上下せらるゝ時、加特力の僧徒は嚴として其嚴重の童貞主義を守り、特にジエスイツト、フランシスカン、ドミニカン等の僧團の峻嚴なる戒律生活は寸步も枉ぐる所なきを見る。新敎敎役者が嚴正の禁酒禁煙を勵行し。家庭の肅淸、倫常の純正身を以て人を敎ゆるの高きは、吾國に於ても新道德の樹立に少からざる貢獻を爲しつゝあるを見る。基督敎の戒律精神は現代指導の上に嚴として尙生命あり。規律の嚴明、訓鍊の透徹せる、蓋故あるなり、昔は朱文公一精舍に詣し、鐘皷讃唄各法あり、規矩整々として淸規一も紊るゝなきを見感歎して先王の禮樂佛寺に存するを慨せりといふ。今の佛徒は古佛の淨戒、先聖の淸規、範を名山大刹に失して却て之を洋敎の會堂に見るの嘆なき否や。

文華大に進みて文明病の生ずるあり、社會組織の複雜と共に社會疫自ら發す。之に對する救濟として新戒律の切要は論を俟たざる所、矧むや文化の發展は實に嚴正なる規律に待つもの多きをや。現代に戒律主義の缺くべからざるは積極よりするも消極よりするも必要の勢也。此大勢は世界大戰に於て著しく實現し、國家存立の上に於ても國民發展の上に於ても、如何に此戒律精神が至重至要兵食よりも大なるかを明にせり。特に米國に於ける禁酒州（ドライステート）の增加、禁肉節食制の勵行の如きは、隆々の勢ある同國が此新主義新精神に依りて健全なる國民の一大發展を試みんとする最大の努力を見るべきにあらずや。戒律主義は確に現代の大勢也。宗敎にして此大勢に乘じて嚴明の規律を以て風紀の肅淸、民族の健全發達に資するものは、將來の宗敎として存立し得べく、之に反して頽廢せる規律、節度なき訓鍊、宗敎本來の風格を失し、敎團の淸規衰廢せるものは到底亡滅の外なき也。現代の僧風を見寺院を見て誰か敎界の前途に樂觀するものぞ。

維新敎界の變に際し、佛門綱紀の頽廢累を爲して今日に

ゆるの覺悟あるを要す。然らずんば蓋し沐猴にして冠するの類のみ。記者は此學が大學の社會貢獻と共に、又大學共自身の風紀肅清の機會たるを喜ばんと欲す。　（大正六、二）

◇基督教徒の陋態

近時基督教徒の一角に、連りに佛教各派の運動を冷罵酷評し、漫に教派爭鬪の端を醸成して快となすの徒あり彼等は各宗の事大主義を嘲り、官僚迎合を笑ひ、固陋守舊を譏り、力を盡くして排佛の氣焔を基督教會に揚げんとするもの、若し、佛教徒より之を見れば、他山の石として切磋の料に資すべく、感らずしも其狹量猜忌嫉妬のヒステリ！的病態を讓めずして可なるべし。唯近時寛容自由の精神漸く佛徒の間に現はれ來り、慈善事業の如き佛耶親睦の端稍覯るべきに至りたる際、强て斯の如き矯激の言論を縱にするは、國運の發展、文化の進步に觀て切に彼等が淺見と無謀とを惜まざるを得ず。戰後世界の大勢が益寬自由の大道に向ひ、猶太的若くは獨逸主義の專制的一神教の凋落を示しつゝある際、自ら偏狹固陋、國民の協同運動を自覺せざる

彼等が自殺的の行動唯憫笑すべきのみ、彼等が佛徒の官僚迎合を責むるは可なり。而も外威迎合、外國崇拜の危險は官僚迎合よりも一層危險なり。佛徒の事大思想は甚だ陋とすべし。而も外資に依りて國民精神を買はんとし、外壓に依りて教化を强ひんとする、獨立心なく國民性なき傳道は更に更に大に唾棄すべき至陋至惡のものたるを了せば可也

（大正六、一二）

◇新戒律主義を提唱す

佛界の識者論客、教勢を討議するもの、每に佛教徒に進取奮鬪の意氣なきを慨し、其社會貢賦が基督教徒に比して甚しく遜色あるを指摘し、興學傳道の熱烈、著しく劣る所あるを痛言するを常とす。言ふ所眞によく時病に的中せり。而も佛教々團の規律制戒綏弛壞敗して外教に對し慚愧すべきもの頗る多く、其訓錬修行の淸規、漸く泯滅するに幾きを苦言し起ちて大に教界風紀の肅淸に力むるもの寥々として乏しきは何ぞや。佛教徒の社會貢賦の薄弱なるは其規律の放漫なるに由れり。其教學の施設に敏活を缺き、熾烈なるを得ざる所以のもの、一に嚴格なる訓錬を失へる結果

低能の兒孫を教界に殘したるは慄然として膚に粟を生せざるを得ず。教界肅清の第一歩、教門五十年百年の大計として法種增長の根基は、實に教界倫常の嚴格と其優良なる子孫を得るに存せざるべからず、是れ單に佛教全體の爲のみならず。國家全體の爲也。世界文化の爲なればなり。

新戒律主義は宗門の規律と節制とに全力を注ぎ、宗門に於ける禁酒禁煙節酒節煙若くは一宗潔齋日の勵行を主張す。是世界大勢の上と宗門經濟の上と、國民優生學の上と、信念修養の上より見て現今必需の急務なり。亡滅に幾き、回教徒より、劫盜の惡徒に至るまで猶豚肉を喫せず、全然飲酒を禁じつゝあるにあらずや。酒を嗜みて得々として五重授戒の高座に昇る宗門の布教師少しく省みる所なきや否や。

新戒律主義は嚴格なる教團の軍隊的訓練と規律とを主張す。布教規約の勵行格守、時間的の行動。機敏周到の作務、實に新戒律主義の生命なり。

新戒律經濟の要は、風紀上に於ける現代の指導にあり。教團の統一訓練にあり。教界の經濟的及優生學的の發展にあり。虚僞なく、欺妄なき公明正大の宗門制度の確立にあり。信念策進の根柢を定むるにあり。少くとも其蓄妻を祕密にし、其啖肉の口を掩ふて、自ら戒律淸淨を衒ふが若き罪惡を一掃するにあり。宗門の新家庭をして益淸健ならしめ之を國運勃興に際する國民の模範典型たらしむるを期するにあり。新戒律主義の上に立たざる、宗門教學の施設は、虚僞ならざれば衝突のみ。新戒律主義の節制と規律とに依らずして宗門の發展を望むものは石を抱きて鷄を得るよりも難し。現代の指導新戒律主義によらずして寸歩を進み得んや。社會問題の解決亦此主義を以て其樞鍵となすべきのみ。

（大正七、一）

◇時局傳道會議に際し布教家の自覺を促す

特命巡教師會及び布教團長會議は、其時日の短促切迫なりしに關らず、近時稀に見る摯實と精勵と緊張とを以て、時局に適切なる許多の傳道方針を審議策定し、國民精神の指導啓發の上に巨細一宗の執るべき南針を確立したり。其大なるものは夫の七條の宣教要件の如き卽是也。是豈單に一宗として適時の快擧たるのみならんや。亦實に教界全體に先じて、洪範を開き、淸軌を示したるの譽を負ふべき也。

至り、規律の混亂殆ど收拾すべからざるの狀にあり。新戒律主義は此混亂を匡正し、文明宗教として立つべき訓練を教ゆる所以、教學恢興の最大要件として今特に切要なり。戰時及戰後の教界に於て何等か最切要とすと云へば卽新戒律精神の確立也。卽寺院僧侶の品性風紀改善問題と、其嚴格なる教團的訓練是也。之なくんば豈此激烈なる思想界の混中に立ちて最後の戰勝者たるを得む哉。

×　×　×

右手を擧げては常に時代思想の應同を指示しつゝ、左手は直に復古主義の戒律を揚げんとす。夫れ何の錯誤ぞや。朝には社會問題の新解釋を殆ど生命となし、夕には既に舊教制の臥榻に高眠を傲らんとす。また何ぞ其撞着の大なるや。新戒律主義の內容、玆に於てか其解明に數語を費すの必要を生ず。

宗門に於ける一般信徒の僧伽に對する嚴格至純なる宗教感が依然として存する限り宗門が此崇奉歸依の上に其名山大刹を維持する限り、新戒律主義は嚴として祖山及他の名蹟の淸規の絕待維持を切望し、また之が一層の肅正嚴格を要望す新戒律主義は不規律と不節制とを以て大日比や獅ヶ谷の如き宗門虔信派の道場を破壞し、昔日の律院に妻兒輩肉の公然として行はるゝを宗門壞敗の衰兆として極力之が挽回を主張す。宗門に尙戒脉の存する間は新戒律主義は宗門に模範僧侶として律僧及特別修行者の一團を要求す。卽加特力教に於ける各種特別教團卽ヲルテンの聖フランシス、聖イグナチウス等の法系を承けて今尙至峻至嚴の戒律を持ち、同教決死隊の急先鋒として傳道に勵精する如く、關通、法道、無能、德本、普寂、等の法統を受け其主義精神を實行する嚴格なる一新教團の成立を要望す。戒律の精粗に於ては、佛教と日を同ふして語るに足らざる基督教にして、既に現に嚴峻なる古制を守るヲルデンありとせば、佛教にして之を成し得ざる理なし。之ありて本山の尊嚴、名刹舊蹟の眞正なる維持初めて達せらるべし。

新戒律主義は決して漸く效果を擧げんとしつゝある宗門の新家庭を咒咀するものにあらず。否、益之を健全ならしめ、模範ならしむるを精神とす。ヲルデン已外、一般上下教學者教役者に對しては社會一般の典型をして益其婚嫁を嚴肅にし、其家庭を淸淑端正ならしめんことを切望す。維新當時の教界風紀の緩弛に乘じて興れる倫常背乖、不正野合の醜行、及び性格教育家庭職業を擇ばざりし、虛僞節制の罪惡は、爾來延ひて教界の品位を墮落せしめ。幾多不良

× × ×

時局傳道會議が進言獻策したる一宗禁酒案は、速かに其勵行告示の發布を見んことを切望せざるを得ず、而して當局が鋭意至誠勵行の實績を擧ぐるに努力せんことは記者が、闔宗と共に疑はざる所なり。一宗にして若此一つだも實行する能はずんば、卽堂々たる宣言、嚴然たる會議必竟何の爲ぞ。記者は此際管長の嚴勵なる特別訓示の發布を以て最も『適宜の處置』なりと信ず。

× × ×

特命巡教師中に一宗教育の主腦たる人材少からず。大學傳道の曉、此等の人材を派するに當りて教育の荒廢緩弛を來さざるべき注意は極めて重大なり。椎尾氏の如き福島、大村二氏の如き矢吹氏の如き、育英養材の大任にあるの人。單に傳道に熱して一宗百年の大計を誤り、內外の子弟をして學業の進歩に一大沮害を來さしむるが如きは、蓋し大に心を用ゆべき所にあらずや。卽派遣時期及區域に就きては特に教育行政の當局者と愼重の協定を要すべき也。

（大正七、三）

◇尼僧活用の途

佛教界に於ける婦人問題に關聯して、忘るべからざるは傳道上に於ける尼僧活用の方策なり。その教育に於ても稍體形を具へ、その利用に於ても各宗に比して頗出色ある本宗は、今や一層この問題に精密の注意を拂ふべきにあらずや、布哇開教に於ける尼僧の貢獻は、蓋し教界に比類なき所、東京大阪愛知に於ける教育事業及び社會事業に尼僧の偉勳を傳ふるは、また最近本宗教會史の誇ならずんばあらず、一宗は今や此實力に覩て、之を內地傳道に活用して大に效果を收めしむるを期するを最も捷利の方策とす。

第一に尼僧をして婦女教化の機關として、一層組織的に、且つ有效ならしむる方法を取るを要す。尼僧に名門縉紳の出多き本宗にして、之を婦人教化に利導すること甚至らざるは遺憾といふべし。第二は社會事業に於ける尼僧の活動を一層熾烈ならしめ少くとも佛國に於ける加特力教會の尼僧が、或は孤兒院に或は救療院に或は救貧事業に、殆ど全體の社會事業に亙り活動しつゝある十分の一の奮勵を吾が

事固より管長猊下至誠憂國の至情、護法濟民の赤心に發し高德一宗の感奮を致せしは論なしと雖、當局が善謀良猷、敏活周到事に處したると、教學兩界の各家が共赤誠を傾け智囊を竭くして獻言提議したるの功、亦之を沒するを得ず。記者は此國民全體の思想界と精神界に對して煥發せる雄大なる開戰の宣言と及び其縝密巧妙の作戰の方略が、官民の稱讃と教界の驚異の間に、燦然として光を放ちしを觀て、特に闔宗の和協一致が益堅牢を加へ、其耐久持忍の力彌大ならんことを切望す。此一致の努力あり、此持久の勢能ありて方めてよく其雄大の宣戰を實あらしめ、其巧妙の方略に偉大の效果を齎らさん。現に世界の大戰に觀よ。此二者は實に最後の勝利を完うすべき最大最優の道なるにあらず。

今回の會議中、從來の布教會議と著く色彩を異にせるものは、第一に教學一致の精神着々貫徹し來り人物中心實力中心の勢力が隱然として傳道界を壓し來り、口舌技巧の舊式布教の必然的滅亡を豫告するが如き觀ある是也。是今回の會議の性質に依るべしと雖、雄谷、椎尾、矢吹、大村等の諸氏の言論が常に會議の中心を占め居るを見て、誰か傳道上の轉機既に茲に至れるを賀せざらんや。第二は卽ち傳道家の品性改善及一宗自覺の聲が夫の禁酒案等に依りて現實に發現し、夫の泥醉布教師、亂倫傳道者を一掃し、古來品性の陋劣を以て識者の顰蹙を買ひし所謂談義坊主說教坊主の積弊を革新せんとする第一歩に進める是也。この第二の傾向は固積弊宿瀆の洗刷と雖、又是新戒律主義の勝利清新なる國民警策の積極的新運動の開始にして、佛教が基督教に比し常に時代に遲るゝる嘆はこの點よりして稍面目を保を得るに至らんか。

一宗禁酒案の痛烈と相待ちて今回の會議中、傳道上の思想及び說述の大方針として婦人尊重の提案が大村文學士に依りて致されたるは特に佛教運動として清新適切なるを認め、歐米諸國が戰時婦人運動の大勢、及び將來帝國の道德的優生學的諸問題に照らして、今回の諸方略中最緊要なるものゝ一とすべし。寶積大集諸大乘經中婦人尊重の金文乏しからず、婦人の解放、婦人能力の發現に於ては阿含より法華に亙りて何れの教よりも徹底せる根底を有し、母の恩德權威を說く最上最大なる我が佛教の本旨を復活するは此際特に切要なり。國民精神の確立は此の如くして方めて根本的の解決に至らん。女子教育の專門家たる大村氏が其責を完うして此提案ありしは、教界誰か其職に忠なるを賛せざらん。

市の救濟事業を援護策勵し、之が爲に畫策し、奔走して、自治の健全と民衆の康福とを增大すべき也。是現時に於ける敎家が殆ど唯一の急務にして、又其地歩を確立し、品位實力を高め、敎化の洽及を圖る所以也。

記者はこの急務の一として各地布敎團が一層の努力を新にして細民の慰問と敎化とに從はんことを切望す。東京救世軍の細民調査表の精確が往々にして警察府市の報告に勝るを見つゝ、而も此等細民の多數が東京寺院の檀徒たるの事實に逢着するとき、布敎團の努力は必然の結論として生ずべき也。一週に一回、二回細民窟に大慈悲を說くの聲あらしめよ、精進を敎へ忍辱を勸むる法衣の影あらしめよ。大阪も京都も其他の地も『細民の友』として『細民の父母』として起つ、布敎團員あらしめよ。

細民敎化と共に此等辛酸生活の同胞を代表して敎家に請はんとする所は、葬祭法要の便宜を計るべきこと是なり、彼等の中には中心の悶々を押へつゝ一句の誦經だに聞かずして慈父愛妻を葬る人あるを知らずや。日本の細民は其祖先に對し亡親に對する追遠の純厚なる至情は、極端に人性を失せる歐米の細民の及ぶ能はざる所、此道德上の美點を利用せば細民改善の事業は蓋甚難からざるを見る。而して佛敎家として此種の事業は最簡最易となす所。敎界の諸賢何ぞ此易きものよりして、改善の徹底を期し來らざる。

（大正七、九）

◇宗大生に望む

荻露虫聲、秋燈の親むべきを告げて、青襟學徒の帽影再たび帝都に充てり、吾が宗敎大學も亦其意氣清新の校門を打開して靑俊を迎へんとす。記者は此等靑俊諸君が刻下の戰時精神に富めるを信じ、多難の時局、不詳の事變が如何に敎家に要請しつゝあるがを痛烈に銘記しつゝあるを信じ、而して之が爲に儉素節約、堅忍力行。未來宗門の中堅たるの抱負ある新戒律主義の實踐者たるを信ぜんと欲する也。金城や鎭西や洛陽や學期開始と共に開かるべき諸種の會合が信仰的精神的にして、其手より卑むべき酒盃やシガレツトが全く抛たるべきを豫想するを許せ。而して諸君が時局に切需なる信仰的社會事業的の大學殖民運動の最先端の戰士たるべきを豫想することを許せ。夫の贅澤悠長不生產的の對他校のベースボールやテニスやピンポンの如きは、細

尼僧界に見るべき努力を要す。夫の大阪の累德東京の淑德は稍彼等佛國尼僧の活動と比肩すべきものと雖、更に各種慈善救濟の事業が我國の尼僧に待ちつゝあるものにして足らず、例せば目下東京に大阪に急を告げつゝある托兒事業の如き、何れの病院にも缺乏を訴へ、且つ弊害に苦みつゝある看護婦の補充の如き、甚だ資力を要せず、而も偉大なる傳道成績を望むべきもの目に觸れて然らざるはなし。第三は東北地方を特に甚しとする無住地寺院の整理に尼僧を利用して荒蕪せる教田の開拓に從はしむべきこと是なり。

是等尼僧利用の傳道策を決行するとせば、之と同時に尼僧の教育と優遇に一層の改善を加へ、尼僧の爲に宗教大學を公開し、尼僧をして宗務及び其他の教務に當らしめ、進みて宗務教學部に尼僧課を別立するの準備をなし、尼僧の特命布教師を簡選して時局特別傳道中特に婦女教化を專擔せしむる等、其利用に遺憾なきを期せざるべからず、京都尼衆學校の新設の爲に巨費を投じたる、本宗の終に玆に至るべきや蓋し大勢上の自然ならんか。（大正七、七）

◇細民の父母たれ

東京府は過般不詳の事變に鑑戒して、鋭意細民地區改善の事業を計畫し、今や着々諸種の新設備に歩武を進めつゝあり。大阪府は事變の慘害、東京に比して甚大なるを以て、その平素の救濟經營を一新し、一層の奮勵を鼓して、斯業の調査と實行とに全力を傾注しつゝあるを聞く。其他の各府縣に於ても、災禍の痛酷なるに戰慄し切實に救濟事業の必須を味ひ來り、大小ともに改善の施設に焦心苦慮しつゝあるものゝ如し。

此等各府縣の救濟機關の新施設に關して、宗教家の同心協力に待つべきは論なき所、否宗教家は其本然の職員民衆教化の任務よりして、自ら進みて縣市の施設を援助し、拮据奔走、官民の仲介者として、周到の效果を實現するに至らしめざるべからず。東京に於ては近時教家漸く覺醒して、公私一致、官民合同の努力を以て、救濟事業に當る喜ぶべき傾向を生じたり。大阪に於ても京都に於ても、神戸名古屋等に於ても、教家は常に東京に遜色なき熱誠を以て、府

とし、而して寛容洪量の宗教主義が教育上重大の效果あることを確信す。而も此持論は宗教が國民精神と祖國觀念とに、確實の根柢を與へ、國民としての健全なる良心を育成する中心勢力たる本然の場合に於てのみ之を言ふのみ。或る宗教にして、祖國精神の壓抑を試み、國民性の發展を沮害するありとせよ。文部當局が勿論かゝる宗派までも尊重し、之を寛容し、之を教育上の補翼となすの必要なきは國民として誰か異議あらん哉。

（大正七、九）

◇原内閣に望む

原内閣は今や就れり。新政府が果して國民の輿望に副ひ、其要求する所のものを充實して、帝國が現に世界變局上に負ひつゝある、重大の使命を尅果し得べきや否やは、實に國民が刮目して其手腕を見んと欲する所。少くとも大勢一轉、民心一新の必要に逼られて、成立せる新内閣が何等か先づ弛緩せる民心を激勵し、倦怠せる士氣を鼓躍して、戰時精神の緊張と戰後經營の着實牢强の決意を促進すべき、大抱負を天下に公示し、局面の廻轉を期する、方に新政府の第一歩武たらずんばあらず。

今に至りて前内閣の施設を酷評するものは、是死屍に鞭つの無情のみ。而も其失敗の來る所の覆轍を示して、新政府に望む所以は亦必らずしも順次失せりとせず。蓋し寺内内閣の崩壊は一言にして言はゞその官僚的祕密主義と高壓方針に歸す。この國民と共に謀らず、國論を度外視したる結果民心の離反を見、輿論の憎惡を買へるのみ。政黨内閣の實ある現當局はこの點に於て、謂ふに必らずや前内閣と轍を異にするものあらん。其政黨内閣の惡弊として國民の禍害たるべき、黨募黨利に急にして、擧國一致の要ある今時、國民全體の慶福に乖くが如き妄擧は、先づ第一に戒愼を要すべし。若し『我黨内閣』の甘夢に狂喜して、縱行恣設、横暴を極むるが如くんば、其國民の公憤を博得し、輿論の蜂起を見る、前内閣に對するより猛烈に、其攻撃更に激甚なるものあらん。

前内閣は宗教に對して稍同情ある態度を有し、その尊重が國民精神振策に必要なる所以を理解するに似たり、而も其官僚的の祕密政策と高壓主義は、玆處にも其鋒鋩を露現し、宗派の自治に對して干渉を敢てするが如き妄擧一再ならざりき。是宗派が無智にして制御なく、放恣を極めて公

民食を缺きて泣くに涙すらなき今日抑も何事ぞ。

（大正七、九）

◇外資による教育事業の狂態

大阪の桃山中學は、基督教徒設立の認定中學中、最優秀なるもの丶一として推され、其校舍の完美、設備の充實、亦關西教育界の一勢力を以て居れり。此中學、國民精神と傳道主義との間に、多年重大なる支吾衝突を重ね暗流の欝結今春に至り、事に依りて潰裂し、生徒の憤激となり、父兄の奮起となり、之に對する學校の强壓は益す其反抗を大ならしめ、終に生徒代表の上京陳情となり、當局の警告となり、幾多の波瀾紛擾を反復せしが、今や學校長の辭職を以て、辛うじて其局を結ぶに至れり、而も學校經營の某國傳道會は、大勢斯の如きを見て其從來の方針を墨株するの不可能なるを曉り、又今回の事件が學校の名聲と信用に多大の打擊を與へたるを慮り、之を解散するか、若しくは他に讓與するの意志あるを傳ふ。蓋し是、教育對宗教の關係上、容易に看過すべからざる重大の件にして、特に國民教育と外國傳道會との交涉上、憂國家の頗注意を要すべきものたるや論寞し。

外資に待ち、外人の設立指導に藉れる教育事業若くは慈善事業が、一面に於て國際關係を良好親密ならしむる便宜あると共に、他面に於ては國家の體面と實力とに省みて、頗る考慮を要すべきものあるや言を俟たず。特に其經營者が單に宗派關係に重きを置きて、國民精神及び祖國觀念に何等の知識感激なく、寧ろ其傳習式形式的の教義儀禮を以て、炎々たる國民精神を壓服せんと試み、若くは强て無意義の外國習慣を杓子定規として勃々たる祖國主義を抑制せんと欲するに至りては、是國民の教育と感化に至大の害毒を流すもの。日露戰役後、帝國の隆運と共に、此種學校及慈善事業の當事者も稍覺醒する所あり、甚しき怪事を耳にせずと雖、倘動もすれば頑迷大勢に通ぜず、固陋國際間の禮節すら解せざる無智の宣教師之なきにあらず。桃山中學の紛擾も要するに、此偏狹固陋の形式的傳道主義と、國民精神勃發の衝突のみ。而して又事件の顚末は明かに、一部の舊式基督教主義の失敗を自白せるものと評價して可なり。

文部當局者は謂ふに今回の桃中事件に於て痛酷の實物指教を得たらん。記者は平素の持論の如く、文部の教育上に於ける宗教尊重を切望し、教育と宗教との相互補翼を理想

に切言する大處公處高處の達觀は此時良に切要なり。而して兩法主の碩德を揚げ得ると否と、丕績を顯はし得ると否とは實に一宗達觀の如何に依る。一宗は旣に大に兩法主の晋山に賀意を表したり。今や大に義天の鳳凰をして翔らしめ、德海の蒼龍をして躍らしむべきにあらずや。而も偏狹固陋なる私黨私福の情を逞うして、徒らに荊棘の門墻を築き、勢を驅り機を激して、權勢の占得に腐心し、若くは憎惡嫉視の甚執拗にして蝮蝎の如く、沙上偶語區々の批評を挾みて、强て德を毀け材を害するの愚を敢てする輩は、是れ共に兩法主を私して其大を殺ぎ偉を滅ぼし翔鳳をして死禽たらしめ、遊龍をして頑蛇に化する所以のみ。一宗は今や兩法主を大にし美にして宗門を莊嚴するのみならず之を教界の寶器とし天下の雄材たるに至らしめざるべからず。嗚乎何れの處にか金招牌に泥土を塗布して其商業の繁昌を見るの店舖あらんや。

黑雲去來、紛々の世評の後、漸くにして麗日和風の快を見たる兩山は、新法主の晋山を機會として、少くとも京都教界に一新生面を開くべき決意を示して兩山の威嚴を天下に示すべき也。佛界の碩學凋落し、各宗の學林今や一の旭雅なし、夫の京都帝大佛教科の如き低級卑俗殆ど言ふに足らず。此際に當つて大鹿新法主の獨特の講肆一たび玄溪に開けて、常に大小經論の深義を闡發するに至らば、各宗の學人翕然として集り、京都に於ける佛教義學の沈滯を救ふに於て大に力あらん、而し是玄溪を『高等町寺』より救ふ所以にして、亦大に宗門の權威を洛東に立つる所以にあらずや而して中島新法主の內容充實せる新式の布教は關西形式主義談義坊主の流弊を打破し從來傳道上甚しく振ふ所あらざりし百山をして新傳道の策源地たらしむることも、新法主の力量手腕を以てしては決して難事にあらざるべく。關西最高學府の青衿者教化の中心點となるも亦必らずしも望なきにあらず。中島僧正が終始唱道しつゝある寺庭改良策、禁酒勵行論の如きも、今や多數門末の師表たる地位を以て容易に一宗改善の端緒を擧げ得べきを信ずる也。

敢て黑谷末と言はず、敢て百末と稱せず、知末も淨末も、今や一致して兩新法主の得意の技倆を推尊して、隨喜贊襄共に力めて之を宗外に發揮するの法を講じ、協同の美を致さば卽ち其結果は單に兩山をして京都佛教界の權威たらしむるのみに止まらず、又自ら一宗の慶福を致して直接間接の福利を他本山に招致するを得べし。而して此兩新法主特色の協同推尊は卽ち一宗和協の存する所、之を外にしては

德を解せざる爲に、自ら招致したる禍と雖、政府當局者としての態度亦大に改善を要すべきものあり。宗教制度確立に關する祕密主義の如きは寺内内閣政策の愚拙なるものゝ隨一、現當路者が政黨を基礎とせる已上この愚を襲踏するを要せざるや論寞き所也。

現内閣員の多數は財界に經驗を有し、其狀勢に通曉する前内閣に比して確に長處あるに似たり。此内閣に對して國を擧げて國民的社會政策の確立を切望し、徹底せる國家經濟政策の實現を以て其第一事業に數ふるは固より其所のみ。農民黨なるが故に、米價調節に大策を缺くが如きの嘲笑は謂ふに之を單なる市井の妄言として葬り去るの遠からざらんことを望むや切なり。現内閣が寺内内閣の後を承けたる第一の責任は實に此國民的社會政策の實行にあるや言を待たず。

現内閣は斯の如くして財的要素の比較的に強大なるに比して其心的人物の甚寥落たるは教育宗教に關するものの稍危ぶむ所。財界の飛將軍を拉し來りて直に之を文教の局に當らしむるが如きは、多少滑稽の觀なきにあらず。而も閣員中床次内相の如きあり、國民精神の振作と、宗教尊重とに注意を懈らざる、前内閣に劣らざるべきは、吾人の固く信ぜんと欲する所。夫の議論ある中橋新文相の若きも、干涉と高壓との官僚的傳統の慣習の傾ける前相に比し、其純潔何等教育界の情實に拘束なき點、寧ろ大に文教刷新の實を擧げて文部省の痼疾なる形式打破官僚學風の掃滅に於て大に面目を革め得んか。而して教育宗教の關係問題、若くは宗教界積弊の打破の如き却て有利の地位に立つ便あらんか。國民精神確立問題に就きては他日筆を新にして更に之を申言せん。

（大正七、九）

◇大鹿中島兩法主晋山の意義

玄溪百嶺兩新法主晋山の盛儀は、既に了れり。一宗は陰欝頭を壓する秋霖の後に、長空一碧、煕々の快晴を喜ぶが如く、今や悉く暢適の感を覺ゆるに似たり。唯切望する所は此歡喜をして一時小康のものたらしめず、亦私黨激勵の機たらしめず、互に愼察警省して益々一宗の和協を堅くし、以て兩法主の德行を翼贊せざるべからず一宗は少くとも此慶事をして眞個に慶事たるの意義あらしめ、同入和合の堅實なる楔子たらしむるに全力を盡くすを要す『教報』が恒

卑近にして、而も簡便なる第二對策の實現する曉は、即ち目下宗門が全力を盡して建策しつゝある夫の戰後時局傳道の若きも其徹底周到の成績を擧ぐることを得、宗門道俗協同の團結力を自ら從前に異るべきを信ずる也。

此新運動とは何ぞ。曰く檀信徒家庭教會の普及之なり。現今に於ても東西兩京其他に於ける篤信の家庭は、寺院教會の法筵已外、定日その家庭に法話會を開き、其一族は勿論店員僕婢をも會して信根に培ひ處世の要道を學ぶもの少からず、今論ぜんとするは之を一宗事業、本山事業若くは教區事業として、此極めて適切有利の教化を洽及勵行せしめんと欲するに過ぎず。即本山若くは教區は寺院住職を勸奬督勵し、之と協商合議して、家庭教會を開かしめ、或は布教師派遣の便宜を計り或は文書頒布の方法を講じ、統一的に徹底せる教化を行ふにあり、若し寺院教會の布教を以て遂に敵陣に對する大砲の威力に比すべくんば、家庭教會は即直に敵壘に闖入して投ずる手擲彈の確實を見るべし。

且らく東京に就き之を見んには幕政時代の市區改正の名殘を留めて寺院の配布頗る偏在不便の狀態にあり、而して新教會の設立未だ甚だ容易ならず、基督教の會堂が市內重要の地點に其利を占めて教線を張るに便なるに比するに、陣勢既に佛教の不利を示すものあり。而も市內重要の地點其大屋巨店は概ね佛教信徒ならざるなきに想ひ到る時は即家々是道場店々悉く教會なるの實益を收め得べき利あるにあらずや。家庭教會の必要は即玆にあり。東京に於て最も多數の寺院を各宗間に占むる本宗は、又最も多數にして有力の檀徒信を有するものたるや、算定し易き所、若し此等幾十幾萬の檀信の有力なる商店工場家庭が十分の一、定日夜間の講話を實施すると假定せよ、即必らずしも麴町、神田京橋に於ける外教の會堂を羨むを要せずして、效果は寧ろ會堂已上たらんのみ。

今や一宗は戰後布教として國民思想の確立に奮勵し、夫の時局傳道をして有終堅實の成果あらしむべき時期に逢着せり、此際宗門は特命布教の如き外面的勢威を張ると共に內面的に家々に就き、戶々に說きて一宗としての戰後奉公の大精神を確立すべき要あるにあらずや。即ち家庭教會の勵行はこの時局傳道の最後にして而も最捷最利の方法たるや自明の理にあらずや。一宗も教區本山も今や着實に思考し行動して本年中に少くとも五百已上の家庭教會を各區に成立せしむるの決意を要する也。

家庭教會にして確立せば、殆ど無制限に擴張しつゝある

全く兩法主の入山を慶祝するの意義なき也。（大正十、十一）

◇美の京洛は信の淨土たれ

近時、京都に遊びて之を聞く、歐洲某國の詩人、遠く日東の名勝を訪ひて舊都の風光に觀賞するものあり。此詩人夙に吾が祖山景致の優を聞きて、一たび足を山門に入るゝや、忽ちにして之を世界第一形勝の伽藍となし、其朝靄の美、午時の麗、晩霞の幽、月夜の靜、時々之を賞して殆ど倥惚歸るを忘るの態ありしと。是實に大正藝苑の一美談たらん。蓋し祖山の勝を艷說し美を詠嘆して之を東山の第一勝となすもの、天下その人に乏しからず而もこの遠來の詩人の如く、雨奇晴好、朝吟夜詠、觀賞厭く能はざりしもの果して幾人かある。謂ふに祖山の美は此詩人の妙想麗筆を通じて廣く世界に喧傳し、彌其名を高くし、京都のサン、ピエトロとして外客の麕集、數倍の盛を見るあらんか。

形勝の美、伽藍の壯を以てして祖山は今斯の如くして世界憧憬の標的となれり。而も祖山が信仰の上に精神事業の上に、思想生活の上に、世界の景仰の中心となる能はずんば、百千の詠嘆、億兆の觀賞究竟何物ぞ。嗚乎、祖山は信仰の上に、思想の上に先づ京都の華頂たれ、日本の華頂たれ、終に世界の華頂たれ。思ふて玆に至る、祖山及其關係者が大處高處に眼を放て弛緩せる要部を緊縮し祖風扇揚の雄圖に不惜身命の至誠を捧げんことを望む、甚切なるものあり。見よ、天高くして秋は既に東山々頭に老んとせずや。（大正七、十）

◇寺庭家庭教會の設立普及を計れ

教報が新春に於ける兩箇の應急策として進言したる中その第一手の寺庭教會の設立は既に增上寺及東京教區の有力者に依りて、着々成立の步武を進めつゝありといふ。此事業の創設が、京阪に波及し、各地に響應して、到る所に寺庭教會の續出を見るに至らば、即ち宗門の教學は面目一新の快を見るべきや必せり。今提議せんと欲する第二策も亦寺庭教會と同じく迅速捷快に其實行を見て布教洽及の上に適切着實の效果を收めんことを切望して止まず。若しこの

の二大女史ありて、十年の前に遺憾なく、其先驅として、恥ぢざるを證せしにあらずや。而もその銳意の熱誠と獻身の努力とは、一に佛敎の信仰より激發したるを見ずや。而して顧みて現在の佛敎界を眺め、鬚眉の男子尙且つ大勢の推移に周章狼狽して爲す所を知らざるにあらずや周章狼狽する尙可、其甚しきものは大勢の何たるをすら知らずして惰眠を貪りつゝあるもの、比々皆是なるにあらずや、二大姉の記念事業時を同うして行はる。夫れこの哀むべき敎界の現狀に規箴する所あるか。

更に謂ふ敎界に於ける婦女、佛飯に衣食するもの何ぞ限らん。今に於て一の小奥村なく、小瓜生なきは佛恩報謝の至誠缺くる所なきにあらざるか。基督敎界に於ては故廣岡夫人あり、現に矢島揖子女史あり。各姓名を敎壇に馳せて救靈の道に盡せり。佛敎界の事情、固より基督敎に比し、異なる所ありと雖、夫の名門の力、社會の勢望を鍾め、敎績擧らんとして、早く旣に沙上の偶語を耳にするが若きは二大姉に對して抑何の顏かある。敎界に於ける婦人は、この二大記念に際して、其本分と佛恩の報謝に顧みて猛然として奮起すべきにあらざるか。二大女菩薩の旌德事業の時を同うせる豈偶爾ならんや。

◇兒童敎化事業の革新を期すべし

近時佛敎界に於て、兒童敎化運動漸く洽及の途に就き、各宗競ふて此方面に力を盡すに至り、就中西本願寺は日曜學校の計畫全國に亘りて、着々その整頓を加へ來るを傳ふ本宗もこの運動に於ては旣往十年、有志者の不斷の健鬪に由りて、今や著しく事業伸展の運に向ひ、東京に於ては熟練の敎導家と基礎强固なる集會の多數に於ては、優に各宗に一頭地を拔くの盛況を示しつゝあり。若し之を此運動の熾盛にして普及徹底の至れる米國宗敎界に比すれば、前途猶甚遠しと雖、一步を行くは、實に行かざるに勝れり。佛敎界の前途が現代敎化運動の二大對機たるべき勞働問題と兒童問題に其存亡を決すとせば、前者は尙殆ど着手を見る能はざるに、後者は兎も角その活動の端あり、乃ち益之を激勵し、彌其盛大を致さしむる、蓋し敎界、急務中の急務となす所なり。兒童敎化は或點より見ば、宗敎法案の如き問題よりも敎界使命として、確に重要なり。彼が若きは現

東京市外新開區の教會創立の基礎を得べく、而して又布教師の獨立活動の便をも得るの端を發すべし。其寺檀の關係をして親密ならしめ、寺院に對する尊崇を增長せしむる利益の如きは故らに言はじ、若夫、この適切の事業と宗門の社會運動とを連結せしむる方法の如きも、共實施と共に妙策泉の如く生ぜん。宗門の識者有力者、希くば此卑近にして而も簡易なる新運動に宗門の着實なる發展を遂げよ。此議數年前嘗て切言したる所、今焦眉の切需に對し、玆に之を再びす。（大正八、一）

◇一の奧村瓜生女史なき教界

愛國婦人會の創立者、奧村五百子女史逝きて旣に十有三年。今やこの女傑一生の心血を濺ぎたる婦人會は、全國に亙りて數十萬の會員を有し、女史の忌辰に際して東西相會して、莊嚴なる謝恩法會を建修せんとす。此時に當り恰も瓜生岩子刀自が、慈善救濟の記念たる四恩瓜生會の會館新たに成りてこの盛大なる落慶の式典を擧ぐるに會す明治時代に於ける佛教界否、帝國が世界に誇るべき二大女丈夫の報恩旌德の勝事、期せずして時を同うして行はる事偶然なるが如くして、その實自ら深意のその間に存するなからんや。

奧村女史は外國家經綸の大策に着目し、開教拓殖に盡し護國効教已れが任となし、炯眼早く民心の結合婦女の覺醒に意を注ぎ、其功績千古磨すべからざるものあり。現在の愛國婦人會が動もすれば女史創立の精神氣魄を忘却して、絕て熱烈摯實の氣なく、徒らに繁文縟禮に失して、何等報國利民に彰明の貢獻なきを見て、奧村女史を憶ふ益深きを禁ずる能はず。若夫瓜生女史は內に社會問題の解決に苦心し、勤儉力行を敎へ、疾苦の救護に力め、下層の敎化改善に寧日なく、その計畫する所は現在の救濟界の先をなして百年其功業に敬服すべきもの存す。大正の昭代、國運隆昌の時に會し、婬女奸婦、風敎を毒し、世道を亂るもの、紛々蟲蛆の如く出て、國家風敎に補ひある絕て二大女傑の如きを見ず。二大女傑旌德記念の擧、時を同うして行はるゝ、夫この現勢の滔々たるに針砭せんか爲か。

世界大戰の戰塵濛々の裡より現在の兵戈止熄の時に迨びたに成りて婦人の國家的覺醒としての社會問題に於けるの位置は益重大を加へんとす。而も見よ、我國に於ては既に、奧村瓜生

として見べきか、第六は卽ち各宗兒童教化事業の一層の緊密を計る是なり。是現在の國民性問題の解決として甚切要なるを認む。各宗當局の此重大運動に對する無識の覺醒は當然ながら、第七として特に終に數へ還らん。（大正八、二）

◇女子教育機關の充實を計れ

曩に開宗七百五十年記念事業の審議せらるゝや、委員は其諸種の計畫事業の中に、女子大學、設立を數へたりき。今や教學院は適時の諮詢案に對して、同じく女子大學の設立を可とすべきを答申したり。謂ふに此新事業は二重の裏書を得たりといふべき也。之を今期西本願寺宗會の女子大學設立の決議に比し來るに、其準備の具鈌氣魄の厚薄に於て、固より差階あるを免れずと雖、文教貢獻、社會承仕の氣運、漸次宗門に漲溢し來り、特に女子問題と宗教との關係に着實の言議計畫を見るに至れるは、確に慶賀に價すべきものならずとせず。

而も之を宗門の現勢と、國家教育の狀態とに照らし、宗門は女子大學設立を机上案頭に計畫する前に、寧ろ先づ實際の行動として實力ある教區に高等女學校若くは宗教女學校の設立を指導奬勵するを最も急務なりと信ず本宗の女子教育界に於ける勢力は、東京の淑德が近時著しく名聲を擧げ來れると共に、京都の華頂、家政の兩校が漸次發展の機運を示す外、之を西本願寺の東西兩京は勿論、各地に相當の女子教育機關を有するに比するに及ばざること尙甚だ遠し。況や此方面に優秀の勢力根柢ある、羅馬教若くは新教諸派に比較し來るに於てをや。中學の普及に於て、各宗に對し稍誇るに足るべき現勢を示しつゝある本宗は、女子教育に於ても斷じて現狀を以て甘ずべきにあらず、現狀を以てして直ちに女子大學案を夢みるが如きは、蓋し餘りに現勢に迂腐なるにあらざる乎。

私案に從ひて女子教育機關の新設せらるべき教區を示せば、大阪は第一に手を着くるを要す。神戸之に次がん最も有望なるは福岡なり、長崎亦設立を急とせん。中央線に於ては長野最も設立の便あり、名古屋も其方法宜しきを得ば設立必らずしも難事にあらず、東北は教區の敗政、關西に比し、豐ならずと雖、仙臺には必らず一校の設立を急とするは宗勢轉回の要あればなり。次で山口に廣島に新潟に漸次歩を進めて、少くとも十五の女子教育機關を本宗に於て

在のまゝにて或は害なからん。而も兒童問題を現在のまゝとせば、教家の亡滅踵を回らさずとして至るべし。

吾が宗教大學が、兒童教化に於て教界にその活動と熟練とを認識せられ、卒業の俊才はこの方面に於て地方に根柢ある教化的地盤を築きつゝあり。是宗門近來の慶なり。特に。近時兒童研究會の如き堅實なる討究機關を産みて學理と應用とに工夫を積むを見るは、實に一段の慶を重ねざるを得ず、而して一面に於ては東京各宗少年少女會の聯合提携は、花祭の如き共同運動と相伴ひて次第に濃密を益し、相互連絡研究の機關も微弱ながらも存在を見るの機運に達せり、大體より言へば、最近十年の佛界兒童教化の運動は、遲緩ながらも順調に發達したりと稱すべし。加之此運動が、各宗殆ど有志家の自發的行動に出で、獨立經營の結果、本山を動かし當局をして坐視するの暇なきに至らしめしは、其根柢の强固を證するにあらざるか。

而も今やこの運動に一期を劃して、斷然たる革新を加へ截然たる整理をなすべき時期に逢着せり、第一には研究態度の徹底にあり、各宗の帝大にあるもの若くは其他に專門討究に從ふものは、教界の現狀を見て兒童心理學及一新理論を發見し、兒童教育に一新方法を畫立し、米獨の飜譯時代を透過し基督教主義の先入見打破して、新日本に適合すべき新兒童學の確立に步々進むべく、研究諸會もまた此方針に從ひて、純批評的の冷却と純祖國的の熱愛あるを要す第二には從來の形式主義模倣主義無精神の技巧に換ふるに精神的信仰的の獨創主義內面主義を主となすにあり。現在教界の兒童教化は教化にあらずして寧ろ御機嫌取の弊に墮せんとせずや。佛教より見ば何等の信仰もなき俗士を講壇に立たしめて兒童を集むるに汲々たるが如き何ぞ夫俗に阿るの甚しきや、この輕薄の態度は今や一洗すべき要あるを見る。第三は地位の自覺也、今の兒童教化に、從ふもの其成敎せるもの、往々にして宗教家としての高遠熾烈の自覺を缺きて師範生氣質に落ち、講談師流の態度を好むの傾あるに憾む。此自然の傾向は今大に矯正すべきは論なき所、第四は則兒童教化事業と他の教學事業との連絡を明にする是なり、是なんば種を播きて穀を收めざるに等し、宗門にして之を言へば檀信徒の布教と兒童教化、中學及高等女學校の經營とコドモの會との諸問題の如き是也、第五は舊法式舊信仰の活用なり。俗間に於ても地藏祭と兒童教化に利用するあり、針供養を女子教育に復活するあり、吾宗に於ても夫の呑龍上人の信仰の如きは充分之を活用すべき一例

宗安寺を議場となせり、德川幕府の際、農村の寺院が常に領主村役人に對する、訴願運動、百姓一揆の策源地として利用せられしに對比し、大正勞資對峙の今日、都市の現情を思ふ。寧ろ其趨勢の自然なるに趣味なくんばあらず。

唯茲に稍怪訝に堪へざるは各宗當局者が此實狀に對し、寺院の職能權威體面に觀て、信仰上風教上若くは宗門行政の上より、何等の注意指示を末派に與へざる是也。聞說す各宗聯合會の幹部は、勞資協調會の評議員として德教の側より、同會を翼賛せんとすと。何が故ぞ。此適切なる寺院と勞働爭議とに關して速に各宗の協定をなし、之を中外に發表するの擧に出でざるや。聞く所に依れば、寺院は警察の態度が之に關して極めて曖昧模糊を極め、貸與の公許を言明せず、亦必らずしもその拒絕を指定せず、寺院住職にして自ら決する能はざるものは、今や宗制と法令と社會輿論との三大難關の間に彷徨し、殆ど適從する所を知らざるもの少しとせず。各宗當局が此等に對し、時勢に應じ大局を誤らざる指令を發して霧海の南針を與ふるは今極めて切要とせずや。

更に之を寺院に就き考ふるに、苟くも宣敎弘法の道場を貸與し、檀信公共の禮拜祭祀の淨域を自由に開放する已上少くとも之に對する確然たる主義と、嚴正の態度之あらざるべからず。寺院にして佛敎共濟饒益の根本義に依りて、勞資調和の精神より之を公開するとせば、實に可なり。又或は義俠自由の精神、時代の思潮、大勢の推移とを了解して勞働問題解決の貢獻を期し、勞働者の爲に計り、其友人として利益と向上とを目的とし力を致し、敢然官府の睥睨に屈せざる氣慨ありとせば、亦其勇と義とに於て痛快事たるを失はず。然るに若し寺院にして何等此種の問題に定見なく方針なく主張なく、單に席貸間貸流の滔々たる陋劣の對利行動に出でゝ其神聖の道場を蹂躙せらるゝを顧みず。若くは住職者としての權威なく確守なく、勞働者若くはアジテーターの爲に畏嚇せられ强制せられて其殿堂を開放すべく餘儀なきに至れりとせば、是卽死を賭して守るべき信仰の城廓を外侮の爲に占領せられ奪取せられたる者、住職者としての威信と體面と職責とは茲に至りて空零に歸したりとなすべき也故に住職者にして既に殿堂を勞働者に開放するとせば、徹頭徹尾寺院存立の目的と乖反せざる範圍卽信仰崇仰の神聖を害せざる程度に於て之を行ふべく、一步進みて言はゞ、純正なる佛敎主義國家主義に基き、その協調主義たると、對抗主義たるの何れにもせよ、親らその會合

經營するの曉、檀信徒の教養、風教の指導上稍宗門としての效果に於て見るべきものあるべく、淨土宗が教育上に於ける勢威も振ふ所あるべき也。

此等教育機關の新設は當該教區の有力寺院にして、奮起する所あり。之を其地の資産家、識者に說かば、設立必らずしも難事にあらざるべく、中央宗廳は之を促進すべき若干の創立資金を與へ、設立準備、教員の配給其他に盡力せば女子大學の創立の百分の一の勞力資金を以てして、而も着實の效果を收むる之に幾倍するものあらん乎、福岡の如き大阪の如き寺院にして一たび奮起せば、此樣の必須機關の設立を翹望しつゝある信徒は、所在響應して或は地所提供の便利を計り、或は設備に貢獻するもの少からざらん、長野の如き大本願の權威と信用と財力とを以てして、容易に市民を動かし得べく、長崎は大音寺にして現在の信用聲望を維持する限り、その創立は甚しく困難を感ぜざるべし。

各有力教區に於ける此種教育機關の設立は、國家報效風教貢獻の副産物として、各地に於ける宗門教學の中心機關を得るの利と、宗門適材の驥足伸展及人物配布の便を得ん東西兩京は大本山あり、大中諸學校あり、新人俊才等亦宗門に驥足を伸ふる餘地少なきを見て、往々官立學校に走りて宗門教學の用をなさゞるに至るも各地女子教育機關の設立は謂ふに此現狀を救ひて、宗門教學の革新に多大の裨補あらんか。淨土宗現在の教學發展は有志若くは私設の事業其基礎をなせり。宗門が公設事業として女子大學を計畫する前に、各有力教區に於ける私設若くは共同の女子教育機關は先づ其成立を見るべき順序にあらざるか。(大正八、二)

◇勞働問題の興起と寺院の對策

輓近勞働爭議及其對抗行動が、燎原の火勢を以て、熾烈を加ふると共に、畫策連絡の本營として、都市寺院の使用頗る多きを見る、現に漸く終局を告げたる夫の東京砲兵工廠事件の如きは、吾が傳通院を始とし西信寺等を屢集議場に充て他宗の寺院も小石川及び瀧の川方面に於て、其作戰對策の牙營たりしは人の知る所、三田、龜井戸其他の工場に於ける五十人百人の職工等が待遇と勞銀との問題の爲に時々此方面の寺院を利用して商議を凝しつゝあるは現に目覩の事實とす。鈴木文治氏の率ゆる友愛會もまた最近本宗の

障とに依りて殆ど幕政當時と同一の事態にあるを認む。然るに今日我國に於ける最近の寺院移轉は寺院の自由と相當の權利とを認め、强壓の命令、寺地を左右し得ざる法制あるを以て、皮相上に於ては舊來に比し大に寺院の爲に幸福を增進したるが若き觀あるも而も寺院住職者の公益扶宗の觀念甚しく低級に屬して私利私慾の奴隷たるもの少からず、檀信徒は教界の事情に通ぜず、寺院の情僞に明かならず。且往々にして此等の件に無頓着なるを以てし加ふるに所轄官廳の監督が單に形式手續の履行に留りて何等周到の調査なく、寧ろ寺院を厄介視し之を驅逐せんとする實狀にあるが故に、都市に於ける寺院移轉は教勢の衰滅となり、教線の撤退となり、檀徒の離散となり、宗門財産の消失となり、甚しきは之が爲に宗風を毀損し教權を失墜し、單に自宗自派を戕害するのみならず、延て佛教全體に損障を與ふるもの少らず、結局三寶公共の佛物を殘賊して徒らに奸僧惡比丘の私腹肥やすに止るに至るを見る、輓近に於ける都市寺院の移轉多くは哀むべき弊害に墮せり。

之を聞く東京某區に於ける某宗の寺院は其移轉跡に基督教の會堂を建てしめしものすらありき。某寺院にして假令直接外教徒に賣却を敢てせざるも二轉三轉外教徒の手に歸し得べきは可能の理のみ。而も某國の基督教徒は今や巨萬の資金を投じ一擧して東京の佛教界を覆へすべき計畫をなし空地ある每に孜々として其購入を怠らず、特に佛教寺院跡地の如きは黃金を惜まずして之を購入し、之を以て佛教を罵倒し佛教僧不信用の罪を江湖に鳴らす屈强の材料とし、佛教會あらざる市民住宅の寺院跡に在存するものも調査一々之を指摘して、佛教々勢の萎靡を嘲笑するの資となしつゝありといふ。是決して各宗當局者の輕々に看過すべからざる所、宗教法制定已前斯の如き醜態を頻々として盛行せしめ、監督行はれざるが如きは特に佛教徒の不利不便を自ら構成する所以、所謂、自ら陷穽を掘りて甘んじて之に投ずるの類のみ。

都市の發展上今の寺院は早晚改造を見べきは自然の趨勢也。唯此趨勢を善用利導して形勝の地は各宗嚴に之を保存し、之を都市有益の機關とし、會堂を設け學校を建て、兒童遊園、勞働者憩休所を設け市民の便益を計るの方針を取りて、寺院の活用を講ずべきのみ、基督教徒が小石川に麴町に三田に其他に銳意形勝の地を占領しつゝ都市のために公益事業を營むに對して佛教徒は少許の黃金の爲に盜現前僧物、盜三寶物の大罪を犯し、敵に糧を與へ、賊に鍵を與

に對して指導若くは批判の地位に立ちて、その會合をして廣義の佛教主義大乘運動たらしむるを要するなり。斯くの如くして方めて寺院公開の意義あり、公衆解放の精神隨つて闡明せられ勞働問題に於ける寺院の勢力、自ら重きを加ふるに至るべし。今の如き、無方針無主義無定見の公開、無理解無批判の受動的盲目的の態度を以てせば、寧ろ糧を敵に貸し、臥榻を冠讎に與ふるの悔あるや必せり。現に去月某大寺に於ける勞働者協議の演説中、基督教某がバイブルを壇上に開きて盛に佛僧を罵倒したる醜事を耳にせり。寺院たるもの其心を用ゐざると否と、其定見主張あると否とは、大教の興亡に關する大なる、此一例以て證すべきなり。豈大に留意奮勵せすして可ならんや。

謂ふに東京に於ける此寺院開放の狀勢は必らず延て各都市各地方に波及すべし。各宗當局者は猶之に對して何等意を用ゆる所なき乎。　（大正八、九）

◇都市の發展と寺院の將來

都市の發達殷賑と共に、寺院の移轉併合の行はるゝは、經濟史上自然の大勢なり。是獨り現代に於けるのみならず幕政時代に於ても屢々名藍巨刹の移轉あり、本宗に就きて言ふも大江戸の發展に伴ひ幡隨院誓願寺等は悉く中央地區より移轉したるもの、門末大小寺院の移轉は、各區に異觀を呈する所謂寺町を以て其跡を推すべし。獨り我國のみならず、外國に於ても亦この經濟的趨勢を見るべし、都市發展の最も急速にして、且つ富賑を極めたる、ライン沿岸の諸都市は特に舊教寺院修道院等の併合著しきを認む。エルフルト市の如き古圖に徴すれば全市殆ど寺觀修道院を以て充ちたりしもの、今日は其十中の八九は民家商店となりて寺院教會の存するもの唯由緒ある十數の大寺を除すに過ぎず是唯その一例のみ。

此都市經濟の大勢は今古東西異轍なしと雖、宗教界の事情と寺院の權限とに至りては大江戸の當時と現代と日本の今日と南獨の狀態とは著しき差異あるを見る。幕政時代には寺院に寺地移轉に關する權限なく自由なく、其併合も移轉も唯幕府の命令に依りしも、之と同時に重大の保護と周到の監督を缺かず。寺檀の關係亦切支丹嚴禁の餘澤に依りて、寺院との親善は參拜の便と不便とに影響せらるゝことあらざりき。南獨諸都市の事情も其强固の信仰と國家の保

し淺遇に滿足して精神的に將來の大國民を打出すもの勇氣あらざるか、靑年敎家は必らずしも性急に家族を造るを要せず、國家文敎の危急に際しては三十四五歳まで獨居奮勵の決意を有せば、卽ち中學敎育の效果を擧ぐる多大なるものあらん。一生身を癩病島に埋めて獨身傳道に力め、終身北漠、南阿の僻地に戒律を嚴守して唯神と人の爲に働きつゝある、奮起僧の尙多敎に存するを思へ。宗門の父兄は特に其子弟の爲に先此奉公の道に進ましむべし是豈獨り敎育界の危機を救ふのみならんや。又敎界恢興の一大長策也。

第三は文部大臣の切望したる中學增設案なり、敎界は夫の不完全なる中學林制度を改廢し時代の要求に應じて悉く之を公開中學となすの得策にして時宜に適するの法なるを覺らざるべからず。東京府の如き天臺日蓮曹洞等は優に公開中學たるべき形勝と實力とを具せり、時宗の藤澤中學が土地の信頼を得、相當效果を擧げつゝあるに想到せば各宗も宜く一番の刷新あるべきなり。各宗にして各此方針に依り、其寺院子弟と共に主として信徒家庭本位の中學を創設するに足らば、卽ち敎運の革新自ら成り、敎家の信用又增大なるものあらん。

第四は敎員待遇に關して敎家に深慮あらば宜しく寺院の一部を開放し付屬貸屋を利用して之を優遇の意義に於て中學敎員に貸與するの方法を講じ、敎界として寺院及其財產よりして敎育界に應分の寄與をなすの法を講ずるを可とす而して此優遇と共に敎員及其家族に對する宗敎的の訓練の行はるべきは言を待たざる所なり。

各宗にして現時苟くも中學敎育を經營するものは此敎育危急の時期に際し、其意義の重且大なるを自覺し、相當の考慮を重ね、適切の實施とを斷行し以て其效を擧げしむるべし。特に敎員優遇の如きは各宗は各私立學校に範を示すの態度に出づるを要す、單に私立經營の七轉八倒に雷同附和して月謝の誅求のみを以て足れりとするが如くんば、寧ろ宗立中學を閉づるに如かざる也。

現時佛敎經營に係る中學は本宗五、西本願寺四、東本願一、豐山、一智山一、佛敎主義二にして唯十四校を數ふるのみ而も全國府縣立中學校長にして佛敎家出身の文學士亦乏しからず各宗聯合會若くは佛敎護國團が是等中學敎育家を會同して敎育對宗敎問題の大本を議することは極めて切要なりしにも係らず、其擧なかりしは切に遺憾とする所各宗當局者及有志家は當に此等機會の利用につき敏活周到の準備あるを要す。

（大正八、十）

へて、その豚の如き妻子を養はんとす、此の如き奸僧の存在する限り、佛教は到底不振を免るゝ能はざるべし。

記者は特に宗務當局に切望す。都市形勝の地は斷然其賣却を許可せざる方針を確立せよ、而して之を各宗に告げて嚴に教勢頽廢の主因を防禦せよ。佛教各宗聯合會は徒らに浮疎の空理空論を擁して官權に趨るの愚を止め、先此等の實際問題につき、教界の威を保持するの方法を講ぜよ。

（大正八、十）

昭和六七年頃ハ教員ノ過剰ヲ来タシ（不景気ノ為ニ）高師卒業者ニシテ就職出来ザルモノアリキ

◇中等教育私見

最近東京高等師範學校に於て開會を見たる、全國中學校長會議は現代中學教育に於ける種々の重要問題を檢討覆審して主務省の諮問に應じ、侃諤の意見を開陳する所あり。文部及陸軍の兩大臣亦親く所見を披瀝して教育家に望む所ありき。其中教家の一考を煩はさんとするもの二三、存するを以て、略敍以て此方面に於ける奮起を促さんと欲す。

第一に時勢に鑑み中學訓育上特に注意すべき事項は當事者は教育上其本分より答申する所ありたるか、教家は宜く教育當事者と協力して精神の訓練、思想の陶冶に當り、所謂智德兼備の良材を育成するに力むるを要す。中學當事者も漸く舊來の形式主義の非と物質萬能主義の弊に反省して其答申中報恩觀念の敦厚を期するを必須とせるが若き以て時代の趨勢を見るべし。教家にして人格學識中學當事者の信頼を博するに足るものあらば各中學は喜んで其門戸を開放すべし。中學生は將來國家の中堅なり、教家は所謂戰後經營傳道、民力涵養講話の第二戰として今や此點に力を注ぎ來るべきにあらざるか。

第二は中學教員補充問題なり、從來官民ともに教育家を遇する菲薄を極め、其生活を保障するに足らざるの結果、今や府縣教員の缺乏は中學教育界に一大パニツクを起し、教員の爭奪戰は到る所に醜態を演じ、殆ど教育機關の運轉を澁滯せしむるの狀にあり、今回の會議は此難關に於て頗苦心したりしか若し、當事者の畫策する所、補充の實を擧ぐるに力あるべく、教員養成機關擴張の議も實行を見るべしと雖、青年教家特に中學にある學徒は今より此補充に當る決意を示し、全國中學の教壇の大分を教家に於て負擔するの獻身的精神を奮起するを要せざるか、教家は此教育上の危機に際し、自ら起ちて奉公犧牲の美德を示し、薄給に甘

く目下東京に於ける著名なる某醫家は其郷人故三星善應老師より、其在獨留學中、斷へず吾が「淨土教報」の送附を得て、大に羇旅の客情を慰する所あり。宗門の狀勢を知るの極、歸來終に有力なる外護者として猶教界宗門の爲に力を致しつゝあり「教報」は純然たる傳道雜誌にあらず、三星師また單に其近狀告知を主として、必らずしも牢强の教化傳道を主とせず、而も其大效を收むる斯の如し。若し純粹なる傳道文書と熾烈なる教化精神に依り、事に從はゞ教績の顯著言を待たざるべし。其費用勞力の如きも、各教區連合、各滯在留學の邦國分擔の制を取らば敢て至難の業にあらず。留學生滯外者の調査を得て其出身別を以て教區に分屬するも頗る人情に適したる方法といふべし。

第三は已上二箇の事業其他の適時傳道事業を熾烈にし其權威を增大せんが爲に、各布教團の新刊書籍研究會、宗書輪講會に類する讀書研究の切要を希望す。林講師の日蓮研究は小册子と雖、適時絕好の教材、而も之を購讀するもの日蓮宗の布教家學者に多く、本多日生師主管の統一閣信者の如きは一擧に六十部を購へりといふ。而して宗門の購讀者は之に對し殆ど言ふに足らず。以て教勢の消長を見るべきにあらずや。昔は學信上人勸學篇を造りて宗弊を痛言極筆して苦諫を一宗に薦む、其中宗門讀書の怠惰各宗第一にして西山派に對してすら顏色なきを憤慨したるを見たり。各布教團長は切に此古來宗門の怠癖に鑑みて時に其團員を痛誡せんことを。

（大正八、十）

◇人材の育成と宗門の將來

東本願寺の學僧、赤沼智善、山邊習學の二氏錫蘭及英佛に留學し、パーリ梵語專修の傍戰時及戰後の歐洲宗教事情を調査し、最近歸朝して大に同派の爲に光彩を添へたり。現にパリーに苦學しつゝある思想問題の研究家大住舜氏南條老師の學統を繼くべき泉芳璟氏の猶印度に研鑽を重ねつゝあるを迎ふるの日は、大谷大學は更に一段の重きをなし佛教聖語及思想問題の方面に一方の雄鎭として各宗を睥睨するの盛觀を示すべし。西本願寺も近く羽溪學士其他一名の佛教古學研究の爲渡英するあり。曹洞宗は一宗の篤學者としてパーリの聖語の造詣深遠なる立花俊道氏の錫蘭印度を經て、今英國に留まるあり、之に米國の二三大學に留學して社會事業其他に苦學勵精しつゝある俊才を加ふれば同

◇新傳道方策

各地布教團の緊急の事業が、青少年及び中流有識階級の教化を中心とすべきは、既に論莫き所なり。然るに從來の教導方法はその施設に、相當の考察と準備とを缺き、周到徹底の苦心なきの致す所、往々にして散漫に失し、機宜を過まり、新教田開拓の注意を缺き、勞して而して效を收むること能はざるの憾あり。少年布教卽所謂コどモ會の如き布教團直屬の事業として、統一連絡あるものは、各教區甚だ稀にして、多くは之を夫のコドモ專門の教導家に一任して、風馬牛相關せざる狀にあり。來聽者の種類の如きも從來の布教團に於ては甚しく考査する所あらず。其永續的教化方策も徹底を缺くの遺漏あり凡そ此等の缺點は新布教團長の就任と共に希くはその適當の改善を見んか。

此緊要教化事業の新方面として、記者は布教團の着手すべき三件を薦めんとす。第一は都市大學高等學校其他專門學校及高女其他諸學校の寄宿舍傳道なり。東京に於ては各舊藩主、競ふて其舊藩士の子弟の爲に學寮を設け、其數決して僅少にあらず女子公認寄宿舍の如きも四五を數ふべし朝鮮臺灣學生の宿寮も亦之あり。京都其他に於ても官設若くは私設の寄宿舍少きにあらず、此等宿寮に對し、絕へず簡易のトラクトを配布し訪問傳道をなし、教義上の質疑に應じ、煩悶の解決に任ずる極めて、有效の擧たり。宗立學校生を利用して此等の事に當らしむるも頗る其效を奏すべし。各寮の監督者に於ても布教團の爲す所にして、誠實周到ならんか。卽精神修養の爲に喜びて傳道家を歡迎すべし。記者は京都の某基督教の傳道會が絕へず、東京各中學の上級生に布教雜誌を頒布するの熱心を目覩して、玆に新布教團長の奮起を切望せざるを得ず。

第二は歐米各國に於ける派遣官吏商店員海外留學生に對する慰問文傳道事業なり。此等の人士は帝國に於ける智識階級に屬する上級を占むべきものにして、之が教導の力、效を奏せば卽ち教勢上多大の貢獻を見べし、凡そ海外にあるものは其鄕國の書簡通信を切望し、日本語の文書を見るを熱欲するの情は、小兒の甘菓に於けるが若し、此等に對し切懇に慰安の情を伸べし傳道用の簡單なる文書を發送し布教團との文書的交通を開始せんか、卽ち三年の後、五年の後、有力なる外護者を得るに至るべきや必せり。之を聞

全力を注ぐ能はずとせば信徒を說き有力者に賴り、肉山大刹力を協せて大に人材の陶鑄に力めば豈此急を救ふに足らざらんや。曹洞日蓮大谷派の遺外留學生の多數は概ね信徒の義金に就れり。凡志願ある所必らず剋果す。宗門學窓の青年は此大勢に見て何ぞ宏遠深固の精神を奮起せざる。一宗の長老も亦大に青年學徒を激勵して可なり。佛教聖語、泰西語學の如き、必須必要の科目を忌避して、其學識益低級に陷り、學界の大勢、改造の前途に脊馳せんとする薄志弱行、陋劣低能の學徒、不幸にしてあらば、斷然之を宗外に放逐して歸俗せしめ農桑の事に服せしむる寧ろ國家教界の經濟のみ。

一宗も亦絕へず、篤志獨立の海外留學生を保護し慰安するの法を取り、豫算の許す範圍に於て之を奬恤するの法を講じ、現に米各國地の大學に三四の自費研究生あるにあらずや。宗務にして此等に對し絕へず連絡を計り、奬勵の道を取るは現勢上甚必要也。現に最近一基督教家に歸俗婚嫁したる某尼僧の如き一宗にして早く之が奬恤慰安の道を取りしならんには、今や本宗の女子教育界に必らずや何等かの貢獻を見たるならん。過ぎたるは既に追ふべからず。唯將來に就きて特に當局の反省を切望す。官費留學生と常に宗門的連絡を保つが如きも固より當然のみ。（大正八、十）

◇我等に御名あり（新春の初光に浴して）

念佛に明け、念佛に暮れて、行住座臥に常憶常念の慈攝を仰ぐ吾等も、紅暾一たび鏡の如き蒼海の上に、新春の初光を漾はして、乾坤煦々祥輝に滿つる曉、無量無邊の慈光、清淨歡喜の恩光は、玆にその久遠の御影を示して、感奮渴仰特に新なるを覺へ、悠久の天地、滿城の松竹に瑞靄を籠めて、歡聲洋々、和氣靄々、雄大の回轉に新春の粧を呈する處、永劫常住の大壽不變現在の靈壽は、明に其妙用を現し來りて、嘆美稱歎、別して鮮かに力あるを認む。嗚乎、如何なるが此感奮渇仰ぞ、如何なるか、此全精神の嘆美稱歎ぞ。吾等に唯玆に一つの大なる御名あるを見ずや。御名ぞ、御名に明くる新年は、渾ての新年の中の最も雄偉に、最も莊嚴に、最も眞に、最も力ある新年なり。嗚乎吾等御名に活くるもの〻新年何ぞ然く幸なるや。

吾等はこの大恩光の下に新春を迎へ、此大靈壽の前に、今年の第一歩を履み。初春の岸頭に立ちて、來らむとする、

宗學界の未來は實に驚嘆すべきもの存す。況んや同宗の麒麟兒として將來學界の將帥を以て推されつゝある木村泰賢氏の新に官命を帶びて、留學の途に上れるをや。豐山派の增田慈良氏、日蓮の木村龍寛氏共に印度大學にありて、大に帝國佛教學の爲に氣焰を吐き、その佛教哲學に於ける研究必らずや、其派に偉大なる榮光を齎らすべきや必せり。各宗に於ける人材育成の盛なる見るべきもの存す、特に各宗共に佛教學研究の基礎學術に着眼し、咸くパーリ梵語の研究を主としつゝあるを見れば、其摯實にして根柢あるもの亦窺ふに足るべきなしとせず。

獨り怪む、吾宗が近時人材學者の輩出に於て各宗の羨望する所となり。學界に於ける地位も必らずしも低級に屬せざるに關らず、宗內が人材を遇し學者を待つの道、甚だ備はらず。曹洞日蓮諸宗の如き、學歷德行あるものは概其地を得せしめ、大山名刹に徒衆を領して、中央地方の敎化之に緣りて績を擧ぐるに反し、本宗は宗內に學者優遇、學匠尊重の風甚だ薄く、碩學巨匠をして居るに寺なき慘狀を示し、宗學皇張、學衆養成の機關を以て居りし檀林の如き、俗化し惡了し一種金閥權閥の巢窟となり、愚僧侶輩の妻兒を養ふ舍宅たらんとするの傾あり。而して夫の留學生規定の如き頗放漫を極め、近年留學生中より大派本派若くは曹洞豐山に見るが若き俊才は殆ど之を見るを得ざる現狀にあらずや而して一宗最高學府に學ぶの徒も遠大宏達の雄志、研究を志すもの少く、熱烈邁往の精神新事業開拓の意氣あるもの寥々たるは爭ふべからざる事實にあらずや。佛教聖語に於ては吾國殆ど匹敵なき荻原師ありて、一の赤沼なく一の立花なく一の木村增田の踵を次ぎて出づるなき吾宗は果して慶すべしとなすか。百年の後椎尾矢吹等學壇に名聲を馳せつゝある人材の去らん後、其後繼者は今全く宗門に跡を絕たんとする我宗門は夫何等の危險ぞや。一宗は今や着實に反省すべき時代に入れり。

一宗が學者の萬能を信じて、之を各方面に驅使して奔命に疲憊せしむるも、大に省察すべし。海外留學の制を廢して、人材育成の道に重大の阻塞を見たるも大に熟考すべし內地留學生を濫選して命ずべからざるを命じ、命ずべきを逸して其業績を嚴査せざるも亦特に審慮に價す。要するに一宗は今や各宗に對して一時代を後れんとする危機に立てり。各宗が新知識を海外より迎へて所謂文化改造に貢獻せんとき、呆然背後に恥を忍ぶべき宗門は何宗たる乎。一宗は今より大に之に留意せよ。一宗の財力にして人材育成に

吾等が積年鼓號せる新戒律主義は此新復古主義に不離の片翼隻輪なり。吾等は玆に禁酒禁煙の勵行を再たび切言し、僞善脊徳の敗倫漢の教界の嚴肅なる制裁に委せんことを提說し、此等を標準として至嚴の訓練を教界に叫ばんとす、祖道の復古は一に此新戒律主義に依りて生命あり。戒は是大法の慧命、今の教界の振はざる豈故なからんや。

永劫久遠の偏照の慈光に念々刹那の最新の創造攝取あり常在恒存の無量壽に寸時も閑なき最新の力用教化存ず。我等が復古の絕叫、亦この攝取と大用を仰くに過ぎず、嗚乎偉なる御名や。聖なるかな大なる御名や、吾等はこの改造の新年に當りて特に御名の御力を仰ぐ――南無阿彌陀佛。

（大正九、一）

◇二月廿七日を迎へて

明治大正の兩聖代に亘りて、一宗の存立上、最榮光に滿てる紀念日は遠からずして廻り來らんとす。皇恩の海嶽、重ねて之を仰ぎ、祖德の悠久、更に光輝を頒したる、夫の二月二十七日の一宗紀念日は、三週を出でずして、闔門の奮躍と感激とを新にし、道俗歡喜の中に、復た當年の追懷を深くせんとすなり。吾人此時に當りて豈一言なきを得んや。

勅賜加謚、宸筆重光の盛事ありてより、今や將に十年ならんとす。十年の歲月、決して短きにあらず、闔宗は此短からざる一期（デカード）の中に、果して何事をなしてか海嶽の皇恩に酬ひ、廣大の祖德に報したる乎。教學の施設が此間適當に進捗したるを辨ずるを止めよ、時局の指導、臨機の對應、特に力を竭したるを誇るを止めよ。祖廟の興隆、近古殆と比なき盛況と順調にあるに安ずるを止めよ。既往十年世界大勢の急轉、國內事態の急變は、一宗が一步轉するとき百步轉し、一局を變するとき千局を變ぜり。吾人は此間一宗維新の再轉を時局傳道の開始に切望し、闔門協力の決意を、戰後經營の宣教に力說し、一宗の全力集中の要を切論するや、一再にして止まらず。而も一宗集中力の緩漫たる依然として今の如く、大勢對應の方策、常に人後に落ち一宗教育の根本方針も、傳道の刷新も、開教區の改善も殆ど言ふに足るものを見ず、唯糊塗以て面目を保ち、彌縫以て破綻を覆ふの狀態に過ぎず、一宗の雄渾壯大摯實の氣魄殆ど消磨し盡し、闔門極ね消極、退嬰、安佚に傾き、毫も進取敢行精

激瀾怒濤の思潮を望み、動かんと欲する、黒風白雨、雷轟雷聲の雲氣を觀ず、外來思想の批判や、國民精神の確立や、勞資、生活の難關を主として紛糾せる社會各種の問題や、隱々閃々、前途に出沒往來して、覺へず、人をして逡巡戰慄せしむるもの存す。而も此恐怖や顧慮や、慈光の前に殆ど烈日の下、淺霖薄雪を見るに似たり。吾等は先づ、正道大慈悲の信仰が、何物をも消融し、何物を攝受すべきに安立し、御名の下に唯自信敎人信の白道を躍進せん。吾等の力何物をも爲す能はずと云ふ乎。吾等の力は卽大慈の力の發現なるを知らずや。吾等に御名あり。千萬人と雖、我行かん。

吾等此御名に依りて動く時、改造は卽ち復古なるを覺り、革新は卽還本なるを證し、新生命新思想の開拓は卽ち永劫不變の正道大慈悲の再現に外ならざるを知れり。吾等は今や改造の門戶に起てり。この門戶の鍵に强大なる祖道の復古あり。我等は革新の烽火を揚げんとす。玆に見よや。熱烈なる純正の信仰の火あることを。紛糾せる思想や複雜なる社會の問題や、一切の民、一切の社會求めて而して飢人の食、渇者の飮に於けるが如きもの、之を與ふに卽ち單直大信大悲傳化の躬行、炳として日星の如く立つを知らずや、吾等は此復古と、信念と躬行とに今年の全精力を集中し來らむ。而して是實に宗祖本懷の存する所なるを見ずや。

吾等は現在の敎界と宗門に改造の斧鉞を擧げて、其腐敗の末弊、大に祖意に乖り、其混亂の流俗甚しく祖訓に遵はざるものあるを斷々焉として掃滅せんと欲す。愚劣頑陋の階級、形式、法規、その本山その寺院、その敎育布敎、特に其僧侶悉く祖道復古の前に制裁料理を見べき自然の犧牲にあらずや。而して此革新は一に信仰の焰の劍の揮ふ所に待たざるべからず、無形式無階級、無僧俗無殿堂主義の祖道人格中心信仰中心の宗義に卽ち宗門の解放あり。豈獨り區々寺院の解放のみと云はんや。吾等は今や僧閥專權の婆羅門式、羅馬敎式の愚劣なる權道を去りて僧俗一致、諸上善人倶會一處の宗祖の宗門を再現せんことを力む。吾等は寺院解放法人設定の新改造を夢むる前に、先づ世尊僧伽の淸規、十方僧物の甚深なる聖戒に就きて敬虔の慚愧と信念とを痛烈に鼓號せんと欲するなり。此新復古主義の上に雄大の改造あり。此改造の大業には紛々たる儀式法規階級抑何物ぞ。況んや此末端の腐敗に釀生せる。虫蛆蟯蜋に似たる私の紛爭若きは自ら消盡死滅し去らんのみ。豈故らに牛刀を擧げて蠢動に臨むを要せんや。

大に上流女子の化導に備ふるあらんとす。蓋し最近教界に於ける稀有の慶事たるを失はず、又三氏の來朝に依り其與ふる所の影響、齎らす所の慶福も亦頗る大なるものあるを豫想するに難からず。

ニヤナ長老はパーリ三藏の造詣極めて深く增一阿含經全部を獨逸語に譯し、更に歐洲學者の最も困難とする論藏に手を下して南藏七論の隨一、『施設人論』を完譯し、更に那先比丘經の批判的全譯を出さんとす、其法句經の飜傳を初め經集拔萃、及幾多佛教に關する論文及著作十數部に上る。而して其戒律を護する極めて嚴正、日に自ら刀を把りて剃髮し、蚊虻蟲蟻の小物に對しても慈愍不殺の精神自ら溢れ、人をして覺へず襟を正うせしむ。謂ふに學德兼備の稱は長者の如き老宿に對して方めて之を用ゆるを得べきか。ワツポー師は虔信實修の大比丘、師に對する恭敬の美德、道を守る端肅の行儀、蓋し容易に求むべからず、エルゼ孃亦巾幗纖弱の女質を以て、產を傾け資を盡してニヤナ長老師弟を供養尊重し、淸白純潔の信行、實に佛教婦人の模範たるに足る。謂ふに此等三師弟の到着は大に一般教界を覺醒激勵するものあらん。特に學林に於ては此等有德の碩學高僧を迎へて、親しく其精學實修の風に接し、現に其虔信淨行の至れる驗せんものは大に感奮反省する所あるべく、頽敗亂雜の風紀は、之に刺激せられて自ら一新を見るに至り、堅實なる研究及び修道の精神隨て開發を見べく、特に學徒の雄大なる萬國的氣宇と、宏遠なる世界傳道の大志を育成するに於て、其功極めて大なるものあるべし。

聞くならく、嘗てニヤナ長老の門下にありて英人佛僧シーラチヤラ長老も亦帝國を訪ふの意あり、獨人佛僧にして嘗てニヤナ長老の會下に修學せる二三の比丘衆も、次で來朝修道の志を發せりといふ、謂ふに吾國は後來此等熱烈なる歐人佛教徒景仰の目標、修道研究の中心となるべく、之に踵を接して來至しつゝある基督教學僧及自由思想家の歐人佛教研究者を加ふるときは一層吾國及吾が教界が此方面に於ける有望の將來を約するを見るなり。

但し、現在に於て痛切に遺憾を感ずるは、此等遠來求法の大德を安ずるに足るべき、十方僧留錫の招提寺の制が全く其跡を絕てるにあり。淨行實修、規律ある僧伽藍律寺禪院の殆ど廢滅し去りて、淨行實修の外國僧伽をして甚しく失望せしむること是也。吾人玆に於てか國際的に止宿安息の便宜近代的に整頓せる夫の基督教青年會、若くは舊教修道院の規律を羨まざるを得ず。謂ふに各宗は此最近の切實

進の精氣の見るべきなきの事實あるを奈何せん此遊惰弛緩萎縮の鈍重なる大氣中、一二流星の如き光芒ある士あり、頽勢を支ふの觀あるも奔馳漸く疲れて、後勁之に次ぐなきの慘、將に近きにあるを見ずや、吾人將に二月二十七日を迎ふるに當り、切實に一宗上下の反省を希はざるを得ず。

言ふまでもなく現代の汪溢たる大勢、激瀾怒濤の若きを觀、その思想上生活上に前古類なき震撼を見たる今日に際して一宗が唯呆然なすなきの態、否寧ろ之を感觸せずして長袖大厦、別天地裡、特殊生活に安ずるを見て『二月二十七日』は果して此の如き宗徒に依りて迎へらるべき日なるや否やを恐懼せざるを得ず。全國の勞働團體、普選運動者等がソリダリラーの大旆下に合同叫喚せるを現に見聞しつゝ、而も尚東西均衡の如き愚劣拙陋淺薄無識なる舊惡夢に壓倒せられ一宗教育の統一確立すら一斷し得ざる、現在の宗門に、二月二十七日が如何なる意義あるや否やに、甚深の慚惶あるを如何せんや。

慷慨は野武士浪人の常事と嘲るを止めよ。慷慨激越する所、吾人はこの二月二十七日を以て東京を主として各地一齊に、「紀念大會」を開かんことを切望し、以て盛に一宗の氣魄を新にし、教學の一大改善を斷行し、集中力の强固を圖り、以て一宗改造の烽火を擧げ、積弊一掃の決意を示さんことを勸告す、此大會は特に一宗反省の大會奮激決意の大會たらんことを要す。傳道の如き此一大決意ありて方めて當日に力あらん。之あらずんば百般悉く虚僞の形式に終らん乎。

嗚呼、二月二十七日、一宗夫一齊に起たずや。此聖日の示す意義を闡明し其光榮を旺にせんが爲に、市に、町に、村に、一齊に一宗集中の大會を開かずや。　（大正九、一）

◇ニヤナチロカ長老を迎ふ

獨逸佛僧ニヤナチロカ長老は具に戰後流離の苦難を閱したる後、遂に安禪靜修の隱棲を吾が國に覓め、弟子ワツポー比丘及優婆夷ブツフホルツ孃を伴ひて來朝し、今や長老は吾が宗教大學に滯錫して、聖典飜傳、著作編述の事業を繼續し、之と共に日本佛教に就きて大に研究する所あらんとし、ワツポー比丘は笈を曹洞宗大學に下ろして、パーリ三藏の研鑚に伴ひ、金剛王三昧の妙境に悟入せんとし、エルゼ孃は淑德女學校に止りて、女生訓育の傍日本語を學び、

會は萎靡として僅に教室の一隅に殘喘を保つが如き狀にあり、勿論、基督教青年會が餘りに無批判無自覺の低級なる外國崇拜主義に墮したる結果、其輩出の人材に、動もすれば國民性歷史及國家常識に無學にして、日本人としての低能漢の唾棄すべきなきにあらずと雖、大體としては大勢順應と世界思潮の怜悧なるなる了解を有し、思想事業の兩面に新活動をなし得るは聊か頑迷固陋に失し、退嬰萎縮何事をも爲す能はざる佛教青年に比して世の注目を惹くに價ありと云ふべし。

今年秋期の世界日曜學校大會の如きも此國際主義利用の宣傳に過ぎず、彼の青年會事業も特に此國際的の背景を極度に利用せり、今の基督教にして若し此國際的背景を除外し去らば其殘る所は殆ど是なからん、是一面より云へば彼等が事大的屈從の怯懦なる弱點なると共に、亦其大勢利導轉外制內の强處なり、知らず佛教徒は何を以て之に當り得べしとなすか。

今の佛教徒が基督教徒に對して國際的位置の不利不便なるは論なし、而も之を以て直ちに國際的發展の地步及機會なしといふは短見たるを免れず。否、或點より見れば、基督教徒に比して自由に且つ淸新なる此方面の天地あるを見る第一は世界の識者が日本文化の研究に對する學術的援助の新事業也、第二は佛教の國際的聯合の新計畫なり、第三は世界改造に對する包容主義及協調主義の宣傳事業を起し宗教の國際聯盟の發言なり、第一に於ては帝大佛教青年、及其先輩が大に努力し、萬國佛教研究會の學術中心を造り、日本文化の根本研究は佛教に依るの要あるを覺らしめ、第二は各宗有識者の奮勵に依り先づ支那蒙古西藏等を初め、錫蘭暹羅緬甸其他の佛教徒の聯合を期し、尙英米佛獨に散在せる歐米佛教徒と絕へず氣脈を通じ共行動を助くるの策に出で、第三に於ては歐米の思想界が偏狹なる形式宗教に倦怠して、世界宗教の寬容精神に集注し來るに乘じ、積極的に、宗教の連盟を主張し、以て罪惡の橫行、危激なる反宗教主義の絕滅を呼號するにあり、而して此等は、實に佛教徒の基督教に比して、夐に吾國にありて利便を有する所、夫の祖國主義と世界主義との調和の如きも、佛教徒の此世界的覺醒と共に基督教に比して夐に、確實の地步を占め得べき新天地なりと信ず。佛教徒夫れ區々墻內の蝸角の兒戲を止めて、何ぞ此大局に向ふて其優越の地盤を固むるを欲せざる。

（大正九、五）

なる要求に見て、寺院改造の一面に四方遠來の學人止住の鑑摩を復舊するの要あるを認め、帝都に於て少くとも一二の國際的公共寺院卽招提寺の再建を見んことを切望して止まず。上野に於ける臺門の一二寺院を之に用ゐ、芝公園に存する、緣山支院兩三を之に宛つるが若き亦ならずや、遠客なき時は、之を大學專門學校學生の止宿及精神修養の學寮となし、且國際的語學の修練を主とする設備を施さば、內外共に敎界の爲に多大の利益あらん。各宗聯合會及び佛敎護國團等は此等國際的設備及事業につきて大に考究努力するを要す。而して此等の設備が、萬國佛敎聯合協會、萬國佛敎硏究本部の設立の實際的第一着手たるや固より論なし矣。豈啻に遠客慰勞の爲のみと云はんや。（大正九、五）

◇佛基兩敎徒と國際問題

佛敎徒と基督敎徒を對比するに、傳道方法に於ても、社會奉仕に於ても、日常の生活社交に於ても、著しき相違あるを見る、その優劣長短の如き、自ら一是一非、彼此互に涉入して、必らずしも輕々に評價を下すを得ずと雖、其國際

的たるの一事に至りては、則佛敎徒は遂に基督敎徒に對し一籌を輸せざるべからざるに似たり。佛敎徒は之に就き、國家的、歷史的の長處强處を以て相拮抗し得べき彈力を有すとなすも、現代の潮勢が、政治に經濟に思想問題に、駸々乎として國際主義に傾注する已上、基督敎徒に七分の勝味あるべきは、論を待たざる所にあらずや。

佛敎が吾國に東漸して已來、平安朝にも鎌倉にも、足利にも、下りて德川時代に於ても國際文化宣傳の能力と及び手腕とに依りて其大を致したるの跡は、必らずしも傳敎空海の入唐、鎌倉京都五山對外關係を數へず、蘗門の勃興を記せずして、早く旣に讀者の默會し得べきを信ず。過去佛敎徒の國際的優越は今基督敎徒の取りて代はる所となれり。古への唐宋文藝美術の傳播者は、今の米國文化の謳歌者と地位を轉ぜり。佛敎徒にして今大に此點に宏遠精細の注意を拂ふなくんば、其頹勢をして益悲慘なるものあらしめん。

試に之を東京帝大に於ける佛基兩敎の青年會に見よ、基督敎青年會が系統あり統一ある國際的組織の下に活動して着々として新人の打出に成效しつゝあるに反し、佛敎青年

然其本家の缺點を自白し去れり。哀むべからずや。

收賄無慚の高級軍人を出し、博士を出し、其慘酷に於てバルチザンに先たちたる學士を出せる吾が高級階級が、迷信に走るも寧ろ奇とするに足らず、今の日本の學者紳士將官は其専門の技術に於ては、一般民衆に比し、多少の飜譯的智識あるを誇り得ん。而も其精神的信仰的宗教的の道念修養に於ては實に僻邑邊陬の朴直忠實の農民に劣れり。彼等が稱號や學位は唯憐れむべき官僚學問の正札に過ぎず、其人格よりすれば空零なるもの滔々として皆然らずや。彼等にして邪教に走り、迷信に捕はれ、愚にせられて恥ぢず、狂とせられて悔ひざる又當然のみ阿呍婆羅婆の榮華、消へて後、飯野某の横行となり、太靈道が堂々として新聞廣告の費を得る間、何ぞ獨り大本教を怪まん。而も彼等の四五乃至十二十の少數低能者が大本教に趨くの故を以て、同教の不可思議を嘆じ滔々として之に走らんとする一般の民衆に至りては官僚萬能の蠢毒、學閥全盛の迷夢、膏盲に入れる現代に浩嘆なくんばあらざる也。特に青年指導の任にある教育階級が、此明白の理義に暗く、拱手爲すなき沒常識の多きに至りては、吾國教育の前途轉悲觀すべきもの多きを見る。

此帝國教育上の一大病根を見來るとき、同時に宗教感化の微弱にして、教家の奮勵甚だ至らざるに、誰か罪を數へざるものあらん。奇を好み、新に就くは人情の弱點、米國のクリスチヤン、サイアンス、獨逸のホメヲバチノ等の盛大を見る、太靈道大本教の流行亦現代文化の免るべからざる一つの變調と云はん乎。而も教家にして此の如き迷信を跳梁せしめて呆然たる如き何ぞ氣力なく精魄なきの甚しきや、吾國の教家は今や迷信邪教の流行につきて、特に帝國教育の不備を補ふの決意あると共に、撥亂反正の英氣を鼓し、捨邪歸信の大旆を飜して、精神界の惡疫驅除に當りて可なり。

（大正九、七）

◇學士院旌表不當問題を評す

權田雷斧阿闍梨を首とし、豐山の學僧諸師は、過般學士院賞を得たる、大村西崖氏の密教發達史に對し、其の內容が、眞言教學上、看過する能はざる幾多の暗點あるを指彈し、之が爲特に評論會を公開して是非を學界に問ひ、且學士院に抗議書を送りて其選賞の不當を訴ふべしといふ。蓋し是學壇に於ける近來の珍事、亦沈滯を極め、粗漏に陥り

◇迷信妖教の流行と教家の責務

最近內務省に於ては、夫の大本教が風教上弊害の少からざるを見、民心を蠹毒する迷信の看過すべからざるに驚きて嚴重の調査を勵行し、或は一大斧鉞を下すべきの說あり臺灣に於ては該教の殆ど生命たる、所謂、鎭魂歸神の施術に對し、既に斷然禁止を命じたりと傳ふ。而して、同教の流毒が今や種々の悲態慘事を上中流の家庭に出現せしめ、產を敗り、家を覆へす外、下層社會に於ては、之が爲に病兒を死せしめ、狂者を出だし、弊害滔々として極まる所なきや、一般の社會も漸く之に對して警戒の眼を轉じ、東京に於ける一二大新聞の如き之が公正の批評と、害惡の防止に就き一定の方針を立てつゝあるに似たり。

而も此の如き迷信妖教の流行に就きて其根源を究めず、其由來する所を明かにせずして、政府の法令若くは社會の制裁を以て之を禁遏せんことは、恰も流行病に際し其傳播系統の知識、充分の防疫方法なくして唯燥急に避病院に病者を强制すると同じ、其の結果は寧ろ所謂「殉教者」を出ださしめて、燃薪に油を注ぐの觀あらん、記者は玆に於てか內務省の調査に先ち宗教界の識者が同教に對する精確の調査を爲さゞりしかを訝り、一部心靈研究家の周到なる調査報告出で、新聞記者の往訪記事の公表に先だちて、何故に宗教家として、其調査あらざりしかを怪みて止まず。

大本教の若き文明人の常識として、殆ど思議すべからざる迷信が、二十世紀の今日、公々然として行はれ、而も智識階級に多數の信者を有すと云ふに至りては、一種の奇跡たるが如し。而も冷靜觀察せば、刻下思想混亂時代に於ける日本の弱點少くとも維新以來の錯誤せる教化方針の弱點を、正直に露出せる哀むべき自白に過ぎず。精神教育の方面殆と等閑に付せられ、頭のみありて腹なき、官僚教育、形式教育、試驗教育は實に、大正時代に再たび新天理教を現出せしめたり、否天理教よりも一層迷信に富み、愚劣蒙昧なる降神術、狐憑法を晴天白日の下所謂識者の間に行はしめたり。日本の所謂最高教育ある學者、高級高階の紳士官吏連が恥をも知らず、凡愚の妖巫の前に叩頭百拜する現狀に至りては何ぞ夫悲慘にして而も皮肉なる。見よ彼等は寒村僻邑の翁媼が奸譎なる狐使ひは催眠せらるゝを學びて、全

新機關を切要とす、大村問題の如き此根本改革ありて方めて決せんのみ。權田師の運動此に來らんか、卽徹底せん。

大村氏の著作がパーリ梵語及西藏原典の研究に於て未だ盡さゝる所あるは其世界的著作たるに於て尙餘裕を存する所、少くとも宗教特に聲字實相主義の眞言敎に於て重大なる聖典史方面に尙數步の研究を要するは論なし、其敎相事相の方面に於ける遺漏は謂ふに權田師等の批評を存せん。但し歷史と口決とは其範圍全く別也。宗教的信仰と科學的討究とは、其境界の各獨立せる、必らずしもカント、リッチヱルの舊套を學ばずして明也。記者は權田師等が此點に留意して自由討究と科學精神の獨立を忘れざるを切望す。

（大正九、七）

◇萬國日曜學校大會に寄す

今秋東京に開かるべき萬國日曜學校大會（實は米國基督敎日曜學校關係者大會）の準備は、着々其緒に就き、先發幹部諸員既に着京して、會場建設其他萬般の事務に多忙なるを見、吾國の縉紳富豪も三千餘名と號する大會參列者の爲に、國交上大に其待遇に評議を凝しつゝあるの報あり。新聞雜誌亦相應の注意を拂ひて大會の進行に就き報道を怠らざるが如し、謂ふに冷風一たび都門に動きて、內外上流の人士及知識階級の避暑地より歸京するの時、其氣勢は更に一層を加へんか。

此大會は刻下米國の一部に於て、排日の暴論甚しく猖獗を極め、狂熱の狀、殆ど吾人の常識を超過する者あるを以て、果して發表當時豫定の參列者を得べきや否やは、聊か疑なきにあらずと雖、同時に之に關らず、參會する諸士は、卽米國に於ける最も穩健公明にして平和と人道とに正義の熱愛者たるべきを以て、之が日米親善の楔子となり、動もすれば太平洋上に浮湧せんとする暗雲濃霧を一掃するに於て必らず有力なる效果を生ずべし、之と共に此大會を機會に我國に於ては猶甚幼稚なる日曜學校は、その發展と普及とに於て、强烈の刺戟と、多大の援助とを得べし、大會にして公明に且正當に其目的に直進せば、其結果は單に日曜學校の一小事業に終らずして、國交上、世界の平和を保維し、文化上、德敎の進展に裨補すること必らず尠少にあらざるべし。

謂ふに今回來京すべき米國の諸紳士は必らず、寛宏自由の襟度、廣く人道と文化の爲に奮勵し、日米間の誤解と阻

情實に纏縛せられ、名閥に拘束せられつゝある、吾が恥づべき夏日長眠の學界を警覺すべき、金剛鈴鐸たるべき乎。

大村氏の著作現はれしは去春に屬す、院賞の榮を見るに至る實に一年有餘の時日あり、此間野山東寺の二三俊才の辯難之なきにあらず、而も組織ある嚴正の批判は未だ公開を見るに至らざりき。若し此間新古兩義の諸大學匠が權威ある評論出で紕謬あらば匡善し、脫漏あらば補正するが如き親切ありしならば、或は今回の問題なくして止みしならん學士院に於ても其主查が推薦に先ちて、豫め眞言學匠の意見を徵する愼重の態度に出でしめば帝國至高學院が鼎の輕重を問はるゝ今日の苦境に陷らざりしならん。何れに於ても吾國學界の摯實を缺き重厚を失し、情實の爲に一時を糊塗し、事に臨みて徒らに周章狼狽するの傾あるを示したるは爭ふべきにあらず、記者は今回の事に見て、吾國に於ける學藝精神、科學態度の歐米に比し尙甚く遜色あるを惜まずんばあらず。

露骨に言へば今の吾帝國學士院に於ける佛教學の權威は法理工醫に比して著しく均等を缺けり。他の諸科に於ける碩學は各其專門に於て兎に角一方の代表者として其力量を認め得べし、然るに佛教學特に密教にありては薄弱殆ど言ふに足らず、此言ふに足らざる智識を以て、大村氏の著作を評定せんとす。其大膽と滑稽とは寧問はずして可也。若し大村氏が學界に於ける公刊事業其他前人開拓の功業あるが爲に其代表の一面として假に發達史を取りて旌表の標幟となすと解釋せば或は通ぜん。而も若し、嚴密なる審查公正なる批評に依りて、發達史の價値が、學士院に依りて定まれりとせば、天下の衆盲を欺くべくして、嚴明の學人は瞞し得べからず、權田師等の如き明白なる情僞を知悉して尙學士院を責むるが如きは蓋し兒戲に類せずや。權田師等學界の巨頭は今や超然として彼等官僚學閥を指導し敎化するを大任とすべし。豈其一擧一措に於て然く之を重大視し、紛々として其門に趨らんや。

故に若し今回の事件を導火として、帝國の情實學壇を改善し、今の學士院の如き老朽無能の朽廢機關を更革するの端を得ば甚だ善く、之に依りて公正を缺き、情實に纒せらる、吾國の學界に多少の警策を與へ、世人をして官僚學閥崇拜の迷信を斷除し得るの機會を與へば大いに可なるべし。實際を言へば今の學士院の如き學者の隱居所は、唯之を老朽者の優遇機關に止め、新に時代に應ずる官民合同の學術審查機關を設立するを可とす、佛教學術の如き刻下特に此

◇黄金散盡教歌舞

唐人詩あり、『黄金散盡教歌舞。留與他人樂少年』と。豪華の人、其財に驕り、樂に耽りて老境の漸く深きを識らず。金屋幾多の阿嬌を養ひて嫩紅嬌艷其美を競はしめ、之を教ゆるに時樣の曲新調の歌を以てし、以て終生の歡を縱にせんと欲す。而も年壽早く盡き、財寶散じ家門破れて、其教養し得たる、幾多の美姫麗人悉く他人のものとなり、苦心修錬せしめたる清歌妙舞は、徒らに他の張三李四の酒興を助くるの具となり了る。詩人の痛嘆、亦故なからんや。而も此痛嘆は實は幾多の寓意を藏しての痛嘆也。而してこの寓意が偶ま吾が教界のために哀むべき豫言となりたるを憾む。

比年教界は人材の必要に見て、其資を盡し財を傾けて、英俊の養成に力めたり。其苦心豈豪華老人が紅嫩嬌艷を教養するが若き無益の閑事ならんや。其支出する資財も亦頗困難を窮めたり。教界は斯の如くして、帝國の最高學府に絕へず五十人百人の學生を送りつつありき。今の帝大の文學部が尙文科大學と稱せし頃、一教授は其學生に教界出身の人多きを見て、戯に是文科大學にあらずして坊家大學なりと云ひき。然も此坊家大學の出身者文學士諸俊才が今果して幾許教界のために努力しつつありや。教界のために何事を貢獻しつつありや。否、此等の俊才は教界のために何事かを考へつつありや。彼等の多くは官吏教員として立つにあらずんば、走りて銀行會社の門を望まんとす。教界は玆に於てか夫の養成したる俊才をして徒らに他の用に供し他の爲に捧げ、而して其教勢は益萎菲し其文材は愈拂底を告げつつあり。實狀を云へば教界は此等學士連中自己の爲に甚だ怜悧に教界のためには背信忘恩とも罵られ得べき。小智識階級の輕薄者流よりは、寧平素所有ゆる冷遇と侮辱とを敢てしつつある所謂番僧逮夜坊主讃衆權律諸君の忠實にして熱心なる貢獻に感謝せざるべからざる實顚倒狀態にあり。稍奇異の事例乍ら、露國の末露が士官學校出身の高級軍人に利己偸安、賣國忘恩の徒多く、下級兵卒に護國の勞役を一任したると、或は萎靡頽廢の狀態を一にせずや。教界の現況此に至りて轉た慄然たり。

普門示現隨類化導は大乘の通則也。腰辨たると番頭たると村夫子たると苟くも道を傳へ得ば、何者にても、何の不

隔とを融會すべき平和の天使ならん。故に吾國の上下も深く之に留意して至誠を披きて、相隱すなく吾國の特秀長處を示し、歷史に習慣に風教に充分に我國の實狀を明にし、以て衷心の理解を得るに力むるを要す。夫の在米若くは在布の陋劣無學なる一部邦人基督教徒が、米人に阿諛して歡心を得るに汲々たるの極、漫に自ら日本を野蠻國視し軍國主義視し惡制國視して、諂佞欺瞞、唯糊口の爲にせんとするが如き醜狀は東京に於ては勿論之なかるべきも、動もすれば徒らに教勢を張るに汲々として、平生の教績を誇張せんが爲に、漫に他教を罵りて、回教的偏狹の不寬容に陷り、固有の特秀美點を隱覆するが如き輕薄の態度は一部基督教徒及外國心醉論者に反省を乞はざるを得ず。

吾人は勿論此大會が國交の親善と文化の進歩との外に無益偏狹なるジエスイツト式基督教の宣傳なるを疑ふを好まず、二十世紀の今日、排他征服の回教式傳道は如何なる形式に於ても舊式の迷信のみ、他の德教文化歷史を理解する能はずして漫に、之を異端視し蠻國視する猶太式の無學偏狹の運動は、如何なる場合に於ても專制宗教の死滅せる遺物に過ぎず、寬宏自由を主義とし人道正義に立脚する米人にして此の如く反時代反デモクラシーの宗教武斷主義の示威運動を行ひ、思想の攪亂衆愚眩惑の大興行式大興行を試みんとするが如きは吾等の信ずる能はざる所なり。蓋し此の如きは日本の今日不急にして又不用に、且其效果も頗不良なるや、論を待たざる所なればなり。

吾國の識者は深く之に留意し、誠意の歡迎熱情の優遇と共に正直の告白と中心の主張に吝なるなからんことを欲す、米人は直情徑行也、天眞爛漫なり、相互眞正の理解は阿諛諂佞、御馳走より生ぜずして寧ろ討議熱論男子の意氣より發す、日曜大會に聽くべきは謹で聽き、學ぶべきは大に之を學べ、而も說くべきは十分に說き、言ふべきは必らず之を言ふを憚る勿れ、日本人として愚劣なる排日論のために、公明なる、人種平等論のために、戒むべき、軍國的キャピタリズムの爲に、他事ながら、頻々たる黑人虐待の非宗教的慘事のために豈大會臨席の仁人義士に訴ふる所なからんや、敬して遠くる東洋流の虛禮僞善を廢して、愛して近くの現代主義の理解交際に就け、善にも惡にも唯「イエス」ある吾國の曖昧なる會話に時には力ある「ノー」を挿ましめよ、かくして眞正の理解生ぜんのみ、要は邦人が主張ある態度を以て此日米親善の好機を逸するなきを望むのみ。

（大正九、八）

せんとする排日及赤化運動の嫌疑ある不逞の外人、出沒往來するの流言あり、累を大會に及ぼす僅少ならず、一般の信用と敬重とは爲にその摯實熱誠に副はざるの憾少からざりき。大會が日本に於ける精神界に震盪を與へて、基督敎宣傳の一大時期たるを以て期したる一部の豫想と希望とは玆に於てか大に齟齬を來したるの觀なきにあらず。加之、一派の內面的嚴肅主義を抱持する內村氏松村氏等の淸敎的新敎徒連は大會のページェント其他の俗化運動に慊焉たらず。之に反對するの氣焰を揚げ、兒童敎化に於ては、其功績新敎に比して寧ろ堅實牢强と稱せらるゝ、加特力敎徒は全然之を對岸の火災視して相關與せず、今更乍ら其範圍益狹小となりたるの觀あり。事實を言へば大會は日本に來りて大に敎ゆる所あらんとし、大に威を示す所あらんとせしに對して、寧ろ反對の結果となれり。日本の社會民衆は大會を待つに禮を以てするを知り、人種宗敎に對する寬容の度量を示したる外、大會より學ぶ所のもの、甚少かりしを惜む。而して大會は非常の災後非常の會議を繼續して吾國民に對して必らず幾多の學ぶべき所ありしを信ず。少くとも大會は日本國民が事實に於て人道正義文化の爲には人類宗敎の差別なき所以を確實に了解されるを信ぜんと欲する也。

大會が會館燒失の慘禍後、兎も角、遺憾なく會議を繼續し、神聖なる餘興の如き寧ろ恰好の舞臺を得たるは、固より內外幹部諸君の努力に依らん。而も此救急處變の活手段は實は、儒敎を奉じ准佛敎徒として其興隆に力を致しつゝある澁澤子阪谷男諸氏及び其率ゆる後援會富豪團體の力にあらずや。澁澤子等は准文化の開展と人道の進步の爲に、國際親善の前途に、殆ど寢食を廢して大會の急を救ひたり今回の大會に最大の功勞者ありとせば、其救濟者の一人は確に此儒敎を奉ずる異敎徒のパトロンなりしことは頗る痛快にあらずや。眞正明眼の基督敎徒あらば、必らずや韓昌黎を學びて、儒名にして基行なる澁澤子等を讚し、而して偏狹固陋、無學讒妄、米國に布哇支那に吾が領土に徒らに吾文化を罵り、妄語讒誣、國交を害し、平和を攪亂しつゝある共同信の宣敎師等を貶して基名にして魔行なるを偏へに慚愧せん乎。

佛敎少年聯合團を中心とせる東京佛敎徒の大會に對する行動は亦大會參列者の驚異したる所ならん、日曜學校は基督敎の獨占と信じたる外來の珍客が、其數に於ても規律に於ても訓練に於ても態度に於ても、寔に基敎の日曜學校を

可あらん。大臣たり、代議士たり、大公使たるに至りて多々益辯ぜん。柳原仕入れの安洋服も時には紫緋已上の教化力を有する場合あればなり、基督教徒が滿鐵に、鐵道省に內務遞信に民間の諸會社に其地位を利用し便宜を活使して其傳道の爲めに盡し、其教勢の擴張に於て機會捕捉の努力至らざるなきを見よ。而して文教方面に比較的有利の地位を占むる多きボン科大學の出身諸君の現狀如何。其熱に於て信仰に於て基督教官吏會社員に遜色あるは實際の示す所、彼等は單に宣傳力なきのみならず、又其ボン科大學出身を隱慝し、故に宗教無關係を飾り、甚しきに至りては、熱烈教界の爲に盡力するものに對して、私かに冷笑私語を挿むものあり。後先坊主の中奴は浮世の喜劇、豚犬の如き妻兒の爲に老後の安全を計りて、渡世の怜悧振りを寺院買收に發揮し、三寶物に老朽無益の殘骸を托せんとする心がけよき御方は、實に此等髭と安洋服に坊主を隱すに汲々たる俊才先生諸君也。教界は玆に於て「黃金散じ盡くして歌舞を教へ、他人に留與して少年を樂しましむる」のみならず、又其辛くも教養し得たる驕婦髀女よりして勝手氣儘の自墮落を振舞はれつつある也。佛門は今や彼等が爲め寧ろ教勢の衰損を招きつつある也。

而も彼等をして玆に至らしめしは、一に教界先輩及當局者の罪のみ、彼等の教養は鶉主義也。無方針無經濟の產み放し主義也。彼等は學費の給與を知りて、俸給の支出を知らず、飼育を知りて活用利導を知らず、人材を優遇して之を留むるの道全く缺如せり。況んや黨弊情實の纒綿、往々人材を忌憚逆待するあるをや、更に況んや各宗各派、高明寬宏の人格者の青年指導の中心となるものを缺くに於てをや。復況んや各派當局概ね教育の頭腦なく宏遠の思慮を有せず、各方面の連絡統一指導の方法全く之なきをや、忘恩背信の徒を出すは其出すものの罪のみ、小智識階級の根性さも甚しきは之をしてさもしからしむるものの大にさもしきあれば也。戒むべき哉。（大正九、十）

◇萬國日校大會場の燒失。佛徒の大乘的態度

萬國日曜學校大會は開會に垂むとして、不幸にも假設會館を烏有に歸せしめ、著しく氣勢の沮喪を見、其出席者も最初の聲明に反して少數に過ぎず、次ぎて開會中之を利用

代に於ける斯の如き奇怪の事件は、要するに國民、特に所謂上中流族の宗教に關する、無智識、無理解、無修養を證するに過ぎず、維新已來の政治及教育が宗教に對する、物質論的無批判の態度と、開國進取の宏謨に於ける一部頑迷固陋の尙古的保守主義をば、偶戰後思想の動搖に乘じて、人心を混濁疾病に陷れ、妖敎の傳染に有利の病菌培養田を提供したり。謂ふに常識を以てしては噴飯にも價せざる、葦原將軍式誇大妄想狂、兒戲に等しき狂愚の豫言迷信に魅せられて、其前に跪拜して、恥を知らざる、幾多の高級軍人實業家學士連が此大正の今日現に存在し、妖教糾彈の後と雖、尙且愧ぢて過を改たむるさへ知らざる痴呆狂に陷れるもの累々たるを見て、帝國現代の文化は何を五大强國の一として誇り得るやを知るに苦む也。而して是實に政治家教育家が宗教に對して有したる既往半世紀の傳統的過失の結果のみ。官民上下は此不祥事件に錯愕する前に、先づ自ら其既往宗教に對する方針、否無方針の責罰の甚覿面なりしことを慚謝せざるを得ざるべし。

而も政府及教育者は此戰慄すべき事件の突發に際し、反省慚愧、大に對宗教の舊式態度を改め、民心の指導を圖るべきに關らず、彼の小學の歷史讀本に於ける傳教大師抹殺の如き愚擧を敢てして顧みず、其失態が識者の厚意忠告となり、言論の上に完膚なく批議せられ、終に議會の問題と爲りしにも關らず、今尙之に對して何等の反省する所なきは何事ぞ。僧侶參政權の問題の如きも、亦此際宜く公明の態度を以て政教相扶の眞義を發揮すべき時にあらざる乎。而も議會一たび終りて後沓として聲なきは何ぞ。帝國文化の恩聖として、史上唯一の大聖、上宮法王の奉贊事業の如きも、幸に萬衆の渴仰と遺德の廣大に依り、盛德益顯はれ、餘光は彌赫々として、從來偏黨固陋の邪說、不逞愚陋の無識を以て蔽へる朦雲殆ど一掃せらるるの觀あり。千載の下、更に慧日の大なるを仰ぐに至れりと雖、政治教育に關與するものは、特に意を加へて太子奉贊の擧に全力を集中すべきにあらざる乎。然るに存外に冷々淡々たるは何事ぞ。凡そ現代に於て國民思想を涵養し、祖國精神及文化の發揮を期する太子奉贊より善きはなし、然るに世の政治教育の職にあるもの、巨頭連にして、馬耳東風奉贊の誠意を表せざる亦之なきにあらざるは何故ぞ。甚しきは或は舊來太子に對する陋見を捨つる能はずして、新研究の成果に理解なきものを見る、是傳統的教育及政治の罪と雖、其無反省恥づべしとせずや。凡そ斯の如きは今回妖教の糾彈に際して裁

凌駕したる此の大會が突然二萬の大群を現して遠來の勞を謝したる處、其驚愕如何ぞや。而して此等の兒童が寛容自由の教練の下に外賓を遇する親切を盡し至情を致せるを見たるとき、其快感又如何ぞや。之を證せんとせば十數の代表者が衷心の歡喜と愉悅とを以て公正寛洪の祝辭を發したるに徵せよ。佛教少年大會は確に日本佛教が鎖國的保守的軍國的なりてふ、米國布哇に於ける無學無稽の讒誣中傷を一掃し得たるを德とせずんばあらず。其國際的意義豈僅少なりとせんや。而して大會と前後し聯合會の公正寛洪何等の私曲私心を藏せず、唯國際の平和と人道の徹底に力め、吾國の教化と文物とを理解せしむるに力めたる、其謙讓溫雅寛容包含の大乘精神と紳士態度とは、將來良好なる結實を隱々の裡世界平和の上に見得るや必せり矣。宜なり、世の有識者及憂國家奮ふて聯合團の爲に斡旋するを辭せざりし也。夫の紛々たる狹小俗惡の巷論の如き、固より一噱に價せず。

少年聯合大會は佛教文化に於ける全龍の一片鱗に過ぎず、而も此小事以て專門教家に教化の一班を示すに足らん。之と共に夫の佛教々化及文化事業の概說小冊子の刊行は、よく此實動の根柢ある所以を明かにし、吾國教化の現狀に於て必らずや大に外客を啓發したる所あるを疑はず。日本を野蠻視し其無宗教無教化を罵りて傳道費否寧生活費の爲に虛構したる無學荒唐の讒誣は少くとも大會參列者に限り、釋然迷夢を一掃したるべきを信ず。是國交上補ふ所僅小なりとせんや。

遮莫、大會の終局は、要するに寛容自由の勝利を示す形式名目の舊宗教を去りて、精神內容の改造宗教に至る一步として其意義あるを認めん。外教徒は之に依りて向外的の反省に入れ、佛教徒は之に激勵して內紛家醜を一掃すべき向內的の一大反省に至らば其效果方めて完からん。

（大正九、十）

◇大本妖教隱匿の暴露
（其の責何處に在りや）

希臘神話に見ゆる、妖魔パンドラの秘鑵一たび開けて、百魅千怪、紛々として四方群飛したりしが如く、夫の妖教大本の隱匿俄然天下に暴露せらるゝや、官民上下、愕然として色を失し、其罪惡滔天の重且大なるに戰慄したり。昭

思ふときは、其聲微と雖、其態小と雖、教界の前途に洋々の春あるを喜ばざるを得ず。

アレキサンドリヤの昔は問はず。近世學藝の隆興に見ても、パリ、國立文庫の三百萬卷は一時佛國をして學界の覇王たらしめ、伯林、ミユンヘン、ライプチヒ、ストラスブルグ等の大學が、獨逸新興の勢を驅りて二百萬百萬の圖書を整備し、最新科學の教ゆる所に依りて、最便最利の圖書館を起せし已來、獨逸の學界に於ける權威は戰前彼が如く旭日東天の勢を呈せり。且く之を東洋學、特に佛教學に就きて見んも、英佛米獨に於ける、圖書蒐集の整美は、一見實に驚くべきものあり。帝國に於ては僅に二三藏を數ふる、西藏一切經の如きも伯林は三部の異版を備へ、其中全部の寫經をも藏せり。此一以て他を例すべし。吾國は佛教學に於ては之を日本文化の精華として範を列國に示すべきに闘らず。圖書館事業は遲々として進まず教界に於て稍見るべきは、獨り西本願寺の圖書館あるのみ。而も其藏書に於ては台密兩宗、禪の五山、必らずしも貧きを訴へず。唯之が整理保存閲覽の方法に甚しく缺くる所あるのみ。

宗教大學の藏書は必らずしも多からず。但し故黑田勸學寄贈の圖書三千卷と共に島田蕃根翁の遺書珍籍二百餘部を中心として、近時購入せる西藏一切經前集全帙及び此十年已來鋭意蒐集したる購入寄贈保管の宗學餘乘に闘する圖書、其他新刊叢書類及び書庫新設の後供託を得べき、緣山會下其の他の珍籍奇書を合算せば優に十三萬冊に上るべし。若し之を整理し保管宜きを得て、閲覽の便、捷利なるに至らば、單に宗大に至大の利器を供給するのみならず、帝都に於ける異彩特色ある圖書館として、彼のギメー博物館が、小型乍ら、佛國宗教學の名物なるが如く、大に中央の學人を裨益するや疑なし。現に此年宗教大學に於て催さるゝ記念日の古圖書、古文書の展覽は中央學界の稱嘆を集め、學界の一名物として學者及び有識階級の同學に期待する所多きは目覩の事實にあらずや。宗教大學にして一たび圖書館の建設を見ん乎。學界を利し一般文化に裨補する所決して僅少ならじ。豈獨り、沈滯せる宗大の元氣を復活し、教學及社會事業に深牢なる根柢を置くに止まらんや。

各宗は今や競ふて所謂昇格運動に熱中し、之に依りて各宗勢の皇張に資するあらんとする。是必らずしも不可なるにあらず而も宗大が此各宗競進の中に立ちて、獨り先其根底を固め、大に圖書館の整理と共利用とに努力したるは、故黑田勸學が宗門教學の淵源として中央學界に宗門高等學

然として其態度と方針とを改變し、政教相扶の理に立ち、教育宗教相倚るの正道に復し、所謂大乘主義の王道、大乘主義の教化に覺醒すべきにあらざるか。政治教育の衝にあるもの、若今にして反省するにあらざれば更に第二の大本來り、第三第四の妖人妖巫續々として輩出すべきのみ。

政治家無識なるも、教育家無能なるも、宗教の職にあるもの、若し力量精魄あらば何ぞ千百の妖教の續出を杞憂せんや但し今の宗教家なるものは、其實大本の狂人妖巫よりも世道人心を毒する大なるものあり、其醜劣無恥の匪行、風教を紊ふるの大、また大本と大差なき少からず、特に其私利私福に汲々として、自己の贅肉ありて教門あるを知らず、大本の宣傳に力むる火の如く烈々たるに比して恥づべきもの比々殆ど是なるをや。妖教をして公行せしめし罪の重きは實は教界の不振に歸すべし。思ふて玆に至る、外政治宗教育家の反省と共に、教家此際の反省は十倍百倍を加へざるべからず、天台宗の遠忌は盛大に終り、日蓮宗の記念教化亦相應の影響を與へたる若し、本宗の開宗記念も今や此等と踵を接して教化の新開拓に從はんとす。而して此際妖教隱匪の暴露あり。識らず、此等の教派は何の記念事業を以て此パンドラ纊外の百魅千魔を降伏攝化せんとする。

（大正十、五）

◇宗教大學圖書館の起工

洪居士の菜根譚中、愛誦に價する文字極めて多し。其一に曰く、

萬籟寂寥の中に、忽ち一鳥の聲を弄するを聞けば、便ち許多の幽趣を喚び起す。萬卉摧剝の後に、忽に一枝の秀を擢つるを見れば、便ち無限の生機を觸動す。

と。近時教界の事、宗門の狀、停滯枯槁、萬籟寂寥の感あり。其教學振はず、事業萎縮して荒涼慘落を極むる、亦萬卉の摧剝、紅紫を閉し、芳翠を封じて、枯林蕭條の狀を呈すると同じ。此時に當りて、吾が宗教大學の圖書館起工式あり。是宗門文化を報ずる一鳥の聲にあらずとするか。是教學の生機を觸動すべき、亭々たる一枝の春を報ずるにあらずとするか。十二三萬の建設費は寧ろ愧づべき貧小の額のみ。巣鴨の僻陬、蕞爾の天地、一小文庫の新設は、亦其整美と壯大とを誇るを得ざるべし。而も此建設の根柢に存する磅礴たる意氣と、宗門教學に寄與すべき深牢の意義を

自治時代に入るべき教家の努力は實に此處に存する。實際の所、同化問題も親和問題も社會事業の宗教的精神に依らざれば寸歩も致すことの出來ぬことは現勢争ふべからざる所だ。長谷川君は研究家であるが、然し飜譯と字書の冷血の學者ではない。血のある憂國愛民の志士である。同君は經營家だ、然し商賣主義や賣名流の所謂社會事業屋とは全く選を異にして居る。同君としてその佛教界最初のセットルメンツ、ウオークが稍完成した後、眼を滿鮮に向けたのは決して偶然でない。剋實すると社會事業の眞の宗教的意義、人道的の眞諦は、內地よりも滿鮮に於て、寧ろ遙によく徹底もし、又開展もする。內地の斯業が第一義の目的そのものを逸して第二義の教會的政治的の方便に墮在する傾があるに比して、滿鮮は目的を目的そのものとして遂行し得る快味が存する。

長谷川君の行は恐く夫の開宗記念事業中で最も雄大で意義あるものゝ一つを一宗に否國家と世界とに貢獻するであらう。宗祖が跡を一廟に止めざる雄大宏遠の遺訓に對し、今までのプログラムはともすると餘りに形式的非現代的因襲的の區々屑々たるものである。闔宗は長谷川君の壯圖に見て今少し心膽を張開し、眼睛を潤開するがよからう。

（大正十、五）

◇中央佛教會館成る

神田に於ける中央佛教會館は、七裘葛を閲して漸くにして成れり。是れ佛教各宗聯合の運動として、成果を天下に示したるもの、僧俗一致の事業としても優に大正の佛教史に意義あらしむべき會館たるを失はず。將來協同事業の發展に於て此新會館の貢獻する所頗る大なるべきは、今より豫期するに難からじ。

從來佛教各宗協同の事業は常に失敗に陷り易き惡歷史を有す。この前科あるが爲か識者有力家等は協同事業と聞かば、每時早く嘲笑して殆ど顧みざる實狀にありき。而も時代は着々として連合協同の切要を促して止まず。一面には夫の教科大學聯合論が、其議の正大公明を以てして雲散霧消したるが如き、對壘角逐の割據主義を示せしと雖、他面各宗憂憤を藏するものゝ中には、社會事業及兒女教化の方面に着實なる、各宗聯合の實動を起し、佛教聯合會も僧參問題、宗教法確立、其他に就き政府に對する聯盟抗爭の必

府を開設せし已來の堅牢不拔の方針を護用したるに過ぎず。學府の生命は一に圖書館にあり。圖書館は實に學府の心臟なり。此の巢鴨の新『報恩藏』に於て宗學の精華と教化の淵源を見べし。此新『報恩藏』が、宗大に於ける世界的に貢獻ある、荻原矢吹望月椎尾等の諸學匠及び新進學者の努力に依りて、大英博物館、パリ國立圖書館ハーバート文庫と世界的に學術的の交際を開始するに至らば、宗大の昇格と否とは必らずしも問ふ所にあらずして其權威は早く世界に認識せらるゝに至らん。豈區々日本の小學界に昇格の如き官僚的名義を啜々するに足らんや。布教傳道亦着實堅牢の根底に立ちて現代教化の適切なる要求に應ずるに至らん。

昔はキヨーニグスベルヒの一小大學はカントあるを以て其權威世界を壓し。近時僅に人口二萬のエーナは一ヘツケル教授あるを以て其大學の聲名列國を震撼せり。鴨臺圖書館の小を憂ふる勿れ。要は意氣の充實と摯實精進の猛進にあり。此意氣を以て研究に從ひ、教化の源泉となす。紛々たる俗論愚說、眼前咫尺の爭ありて、百年の長計なき擔板漢輩の非教學非文化の盲動は曉風一吹、蚊虻飛散するが如く消盡せん。宗大の諸君夫大に振はずや。(大正十、五)

◇冬民長谷川君の滿鮮視察

マハヤナ學園の長谷川冬民君は、その病弱の身を提げて、渾身の元氣、滿鮮視察の途に上つた。彼が此行は言ふまでもなく、十年の心血を洒いて研究もし經驗もして居る、社會事業の調査のためだ。椎尾君や伊藤圓定君が滿洲の沿線に教化を布いたことはあり、朝鮮には故増上寺老法主や中島老師など元老の親教も行はれ、宗大學生の夏期傳道まであることだから布教の方面は敢て珍とするに足らぬが、社會事業では先づ彼が行を嚆矢とする。否、宅内だけでなく教界でこれが最初であるのみならず、一般斯業界でもずつと古い時代、大阪の小川博士が調査して已來、最近の調査としては長谷川君の此行を推さねばなるまい。斯業界が彼の行を重要視して居るのも、決して偶然ではない。

鮮民の同化と日支兩國民の親和、之は言ふまでもなく現經世家の最も苦心しつゝある問題だ。而して宗教家として盡くすべき社會事業の要諦は此處に存する。社會事業を政治的に利用した專制時代から、その宗教的本義を闡明する

の意義あると共に其成立後の効果は自ら之を推するに難からず。佛教各宗は之を寺院の前衛として利用し、道場に入る前の停車場として廣く檀信を攝化するの策に出で、新會館の効用を發せしむると共に、之が基礎の確立と、維持の方法に就きては、終始、援助保護を怠らず、檀信徒を勸誘して同館の爲に圖るべく、其第二期事業に對しても、亦同館の目的をして瞬時も迅速に完成を期せしむべし。新教に舊敎に救世軍に基督教各派の大會堂、各所に棊布して其敎田を開墾し特に地方遊學の青年男女の學生を吸收して着々として蠶食を逞くしつゝあるの際此佛教の新會館ある何等の偉力ぞや。卽ち中央會館は獨り東京教界のためのみにあらずして、實は地方教界の爲に偉大の牙營たり。地方教界の諸氏希くば玆に留意して、此新會館に對し援護と助力とを與ふるに吝なる勿れ。(大正十、十)

◇東西兩本願寺と大學の昇格

東西本願寺の大學は終に昇格に決せり。佛教が新文化の貢獻と新思想の指導とに於て、一段の展開をなすべき前途に見て教界全體として頗之を慶すべし。而も兩派が其重厚なる學問尊重の美風を今日に紹隆し教育のためには全派道俗の協同、一糸も紊れざる訓錬が與りて昇格の結果を見るに至れるに考へ及ぶ時慶意更に加ふ、教界の現時、輕佻浮薄動もすれば學術尊重の根底を忘れて徒らに事務の末節瑣事に汲々たる潮勢の中、此快事は亦自ら一種意を强うするもの存す。曹洞の如き、眞言の如き、其資力を以てすれば、必らずしも兩派に如かざるにあらず。而も大學昇格の熱望ありて未だ其實現を見る能はざるものは、學問尊重の敦風、協同努力の堅牢、猶遠く兩派に及ばざるの致す所にあらざるなき乎。

兩派の大學既に昇格せり謂ふに教界は之に刺激せられて此一兩年昇格熱は盛に各宗に昂騰するに至らむ。而も玆に特に注意すべきは昇格と否とよりも各宗は先其實力の有無に就きて着實に思料するを要する是也。昇格の美名に眩惑し虛榮を驅追するの愚を止めて、育英養材の上に實力中心主義を執持すべきは此際の急務也。但玆に實力主義と呼ぶは資力の充實、經濟運用の適當其一と雖其主とする所は眞に實力ある人材の養成に存す。今の各宗の昇格に熱中するもの單に資源の如何に苦心慘憺を極め、人材養成の方策に

要上、次第に舊來の交際遊宴の形式會合、若くは陽に相合して陰に相競ふ陰險なる勢力玩弄の外面機關たるの域を脱して、摯實なる協同意識と、對外行動の堅實なる歩調の整齊を見るの傾向あるに至れり。中央會館は蓋し此等の眞摯着實の機運を代表すべき、一の結晶として見るを得べし。其意義豈淺少なりとせんや。

謂ふに、會館の事業は僅かに第一期を完成したるに過ぎず。各宗協同運動の牙堡として提供せらるべき、各種事務所のビルデング建設は尚數年の後にあらん。然も此會館の成立に依りて、夫の佛教徒社會事業研究會若くは佛教少年聯合會等の聯合運動が多大の便宜を得べきは論なく、其行動恒に間歇的にして、最初の宣明に對し、甚しく緩弛の狀にある東京佛教護國團も此會館成立と共に、復活革新の運に向ひ、當初の氣勢を挽回するに至るべし。東京佛教界に於ける各種聯合運動が此新會館を中軸として共回轉を熾盛にし、思想善導社會教化に一新生面を開くに至るべきは誰か之を疑ひ得んや。

基督教に比して佛教の教勢が動もすれば一籌を輸するの憾ありしは、其原因一にして足らずと雖、其主要の一は僧俗一致の行動を缺くに依れり。佛教のなす所は如何なる事

業にても、僧主俗從にして、寧ろ檀信徒は事業教化の樞機に就き何等關與する所なきを常とす。之を基督教徒が全教會同一の歩調を以て、宣傳と活動とに於ては僧俗共に戰線に立ちて、其責任を分ち其義務を共にするに比するに新時代の教化に於ける成效と失敗と自ら素因の歴々たるを見ん。

之を聞く、中央佛教會館の建設事業の樞機に參ぜしものは日蓮、東西本願寺、曹洞、淨土の四五有志の僧侶にして、終始主腦として努力したるものは亦此等の中の二三に屬す。而も今日の効を收めしに至れるものは河瀨老居士の勵精と澤柳博士兒玉伯爵等の忠實懇切の援護、村井、神田、早川等の諸富紳が財的幇助に待つ甚だ多く、若し此等諸氏の一を逸せば新會館の今日あるまた知るべからず。特に兒玉澤柳諸氏の盡力は教界の人と雖、能くせざる甚大の勞力を吝まず。法人の設立に於ても亦其責を分ちて終始會館の爲に經營指導の任に當るべしといふ。此道俗一致、緇素共同の經營は從來未だ多く例あらざる所、教界は此新例に依りて、教界聯合の機運、益開きを見るの端緒を開き來り。僧俗共同事業の流行は、延て社會に及ぼす新勢力を生じ、其結果自ら從來と別樣の觀を示すに至るべし。

中央佛教會館は此の如き、大正佛教の開拓に就きて甚深

ざりしに存す、教家は此國民教育の危局に對し、宜く從來の逡巡苟合の怯惰を止め、勇猛に教育階級に痛悔を勸め、信仰を說くの態度に出でよ。而して之を行はんが爲に先づ大に反省して自己が世の師表たるべき强烈なる自信を造れ。是實に濟世の第一步也。（大正十一、五）

◇鮮人教化の急務

朝鮮總督府出張所の調査に依るに、現に內地に滯在する朝鮮人は今や方に十萬に達し月々門司に上陸するもの二千人に近いとの事である。東京に於ても二千五百を算し、深川區內のみにても二百人の多數を示して居る。

是等の中東京に於ける若干と京都其他の少數は學生であるが其他は悉く勞働階級に屬し、鄉土に於ける悲慘なる生活を幸福となすべく、內地に出稼に來た人々である。而して其最多數を收容しつゝある福岡縣で、東京も今は各工場に少からず鮮人の職工を見ることゝなつた。淺草や本所には現に朝鮮服の飴屋の外に、內地人同樣、印半纏や勞働服の金君や李君が、繩暖簾やバーに收つて御座るのが見られる樣になつた。

學生階級の鮮人の中には、間危激の思想を抱懷し、不穩の行動を敢てするものも少からず、亦彼等を助長し、煽動し庇護して、吾國の不利を圖る某國宣教團があるとの噂で、其筋の眼は絕へず此種所謂不逞鮮人の監視に向けられてあるが。勞働階級に屬する多數は概して朝鮮に於ける地方の農民であるが爲に、中央の煽動未だ之に波及せず、其思想は純朴で、唯正直勤勉に貯金することを考へ、政治的趣味を殆ど解して居らぬ穩健の人々である。

既に先入主となれる僻見に囚はれ、拗出した危激の謬想を有する學生の善導は其困難實に一通りではない。然し政治問題や思想問題に於ては全然白紙の如き右等勞働階級の教化は比較的に容易にして其効果亦頗る著しきものがある特に此等の勞働階級中十の八九は朝鮮に於ける教育機關が未だ內地の如く完備せざるが爲に、普通教育の素養を缺き、日本人として必要な國語は勿論、其母國の諺文すら全く讀むことも出來ぬものが頗る多い、故に此等の同胞に對して教育的の感化の有効なるは論を俟たずして明なることだ。而して此教化の衝に當るのは果して誰の責任であらうか。

近時佛教界に於ては鮮地に於ける動搖と騷擾に鑑みて、

於ては其意を勞する所甚だ薄きに似たり。是艦船兵器を造るに急にして之が生命たるべき將卒の育成に盲目なると同一の愚に過ぎず。東西兩派の如きも既に昇格の決定を見たる已上、宜しく此點に就きて三省し更に大に有力優良なる教授の充實を期すべき也。昇格既に成る而も自ら之を學術的に動かし、大學として文化貢獻の實を中外に擧ぐるなく、備兵雇役僅に其門戸を張るが如くんば寧ろ初めより昇格せざるに如かざる也。

謂ふに吾國自然科學の諸科に於ては、歐米に對して尙比肩すべき儆あるも、文化學科特に哲學宗教の學術に於ては依然後塵を拜して著しく遜色あるを免れず。此時に當り佛教學關係の語學、歷史、哲學、美術、文藝、考古學其他の學科に於ては佛教徒は其責任として自ら進みて、重擔を荷負し、此方面に於ては硏究の權威を日本に占むるの意氣ありて可ならずや。各宗此意氣の上に人材の育成に力め、各派世界に儆るべき四五乃至十數の學者を有するに至り、之をして自由に其手腕を揮ひて派內靑年の指導に當らしめば、昇格の有無は必らずしも問ふ所にあらず、而して眞實の昇格は自ら此間に實現せん。今の各宗が其派內の學者を優遇せず。之を酷使して其材を伸べしめず甚しきは之を派外に逸去せしめて平然たる今時、昇格を夢むる果して何たる厚顏ぞや吾宗亦此點に於て少しく反省する所ありて可なるを信ず。(大正十一、五)

◇教育界の醜狀

或は全級を敎室に檻禁して耻ぢざる敎員あり。或は言を身體檢査に托し、强て女生徒の衣帶を解きて、惡戯に耽る學校監督者あり。校長の職にありて情婦を携へて死を圖りしものあり。更に最近兩々相携へて妓樓に無錢遊興を試みたる校長を出せり。一部の醜狀を以て全體を律するは酷と雖、吾が國民敎育の上に今や頽廢腐亂の惡氣が漸次蔓延し來れるは此數證に徵して頗る寒心すべし。宗敎を度外視し、德敎を形式化し、機械化したる、模倣敎育の末路は必らず玆に陷らざるを得ず。

此危機に際して敢然として覺醒の聲を擧ぐるものは誰ぞ。實に是敎家の務にあらずや。敎家從來の態度は徒らに敎育家に迎合し若くは阿諛して其責むべきを責めず誡むべきを誡しめず、而して必らず敎ゆべく說くべきを直言する能は

◇青民と白嶺

原青民師逝きて今茲十有七年の忌に丁り、赤尾白嶺氏が西遊の後此年方に十三回の法莚を迎へた。青民師は終焉を湘南千手院の隱栖に取り、その徹底した教化、淳信の人を打出したのは多く由比が濱邊の松韻濤聲の間に於てした。晩年信仰問題に關する遺篇の多くも亦天照山の幽境に成つたのである。白嶺の死は東京であつたが、其名吟傑作は彼が湘南に病を養ふた間に出來た、鎌倉の地、教化漸く復興の兆を見るときに、此湘南の地に最因緣深き二俊才の遺業を懷想すると感慨實に限りなきものがある。

青民師と同時代同病の人で教界に功があつた人材には藤井宣正があり古川老川があり平子鐸嶺があつた。三俊と青民師とは常に往訪して道を談じた。佛教史や美術史では宣正鐸嶺が不朽である如く明治教界の評論壇に老川の名が歷史の一頁を飾ると共に、「青民遺書」は少くとも吾宗の教化史には特色ある一つのモニユメントとして永遠の生命を有する。彼は故辨榮氏の友で互に相資益する所があつたが、現時の光明教團の思想感情には青民に負ふ所甚だ多きを認めねばならぬ。這箇辨榮派の思想に於て著しき根柢を原師に感謝して居ることは遺著の「教理問答」一つ見ても分る。

彼は如何にせば現代的に淨土教を教ゆるべき、彌陀信仰を傳ふべきかに苦心した恐らく最初の人であつたらう。今は中島觀琇氏がある、椎尾辨匡君も居る、矢吹慶輝君も其人だ、伊藤中野吉原等の少壯布教家も之と伍すべきであらう。然し二十年前既に最も大膽に且つ率直に「教理問答」の如き殆ど革命的のカテキズムを書いて、中には基督教の術語さへ思ひ切りに活用した識見と勇斷とに至りては、今に其大なる力の躍々たるを仰がざるを得ない。彼は此教義上の新解釋を儀式にまで活用した。彼が苦心の「朝暮の祈り」や「懺悔」其他のリターギーが尚少年少女界に生命を失はぬ程、彼の努力と識材に今活きて居る。

識見の人は多くは實行を缺くものだ、改革家には熾烈なる熱情はあつても沈着な內省と奧深い行持が兎もすると缺けるものだ、青民師にはそれがあつた。之が彼の感化が少い乍ら狹い乍ら牢として拔くべからざる所以だ。又虔信派の人は直覺と純感にのみ活くるの尊ぶが爲に動もすると背理主義に陷り、迷信となり、誇大となり、非常識家となり、

朝鮮教化問題の研究は各宗有力者の急務とする所となり、各宗朝鮮協會も成立したが協會は成立日淺きが爲か其の事業としては調査研究と內地人（寧ろ教界）に對しての講演宣傳のみに局限せられ僅に鮮人の職業紹介と身上相談のみを唯一の事業として其他に積極的の施設としては見るべきもの甚だ少なかつた。然し現に前の如き教家に對しての重大な鮮人教化問題が橫りつゝある。協會として自ら此事業に指を染めずんば必然に指導し激勵して此焦眉の急に應ずべき最高の時機が今來着したのである。

此點に於て江東の勞働共濟會が何等一宗の扶助を受けず、獨力明照學園を開き佛教界に於ける內地最初の鮮人學校を造り勞働者教育の設備を創めたことは假令其規模が僅に五十人を容るゝに過ぎざるものなるにもせよ、特筆に價することゝ思ふ。而して此事業の開始と共に大に附近の勞働鮮人を集めて官民共同の懇話機會を與へたことなぞは、確に將來ある計畫と稱してよい。然し共濟會の事業は十萬人中の二百人僅一千分の一の教化に過ぎぬ、東京に於ても深川區の倍數已上の鮮人ある牛込區、其他は全く手が着いて居らぬ。況んや其他の地方に於てをやだ。鮮人多數の在留する地區は東京を初め宜しく共濟會の範を追ふて在所、勞働者教化の教育的設備を創立し、同胞親善の誼を盡し、人文開發の實を擧ぐると共に、遠くは以て國家百年の長計と教法宣布の根底を造るべき大策である。是開宗記念の事業として勞甚だ少く功頗る多き好箇の報恩行ではない乎。亦先進同胞として其兄弟に盡すべき當然の務ではない乎。

鮮民勞働教化事業の必要は、實に前の如し今回開會を見るべき全國佛教徒社會事業大會に於ては、之を教界全體の社會事業の急なるものゝ一として審議討論し、各宗其宜きに從ひて分責擔任の法を取つたら、解決は存外急速に運ぶかと思ふ。是亦一案として該會の當事者に進言する、此問題は決して一宗一派の私すべきものでない。

然し內は一宗に外は各宗に對して鮮人教化を勸むる先決問題として、第一に內地同胞が鮮民に對する態度を根本的に改善して仁愛正義の公道の上に、同胞的無差別觀の確立を教家の力に依りて的確に教養し、第二に教界從來の朝鮮開教方針を改新して鮮人本位の傳道事業に遷ることである。實の所、吾人は吾々の兄弟に對し尙內地人鮮人と云ふが如き差別的名稱を用ゐざるを得ざる現狀を哀むものである。日鮮融和なぞいふ套語は第一義から見ると餘りに水臭い。

（大正十一、六）

く、功業方に就りて安處時來れり。閑雲野鶴を伴とし、琴書逸吟自ら養ふも人誰か之を仰がざらんや。而も翁自ら驕間し安息を貪るを欲せず、兩眼の視力積年の研究の爲に薄弱に陷り、雙脚亦頗る行歩に便ならざるを顧みず、但世の蒙を啓き、國を憂を除かんが爲に、東西に獅吼し南北に奮鬪して、殆ど寧處なし、其高風眞に欽すべし。

翁去歳門生某醫學士の爲に月下氷人の勞を日比谷大神宮に執る。大神宮の結婚式は神酒を式中重要のものとなす人の知る所の如し。翁此故に先宮司と面し、人生最重の聖式が罪惡疾病の根芽たる毒液を以て初むべからざるを力說し、清酒に換ふるに無害なる甘酒卽ち神代のシロキを以てせんことを主張し。理義を盡すこと至明、典據を擧ぐること至正、殆ど間然する所なし。宮司教を聞き唯々諾々、答ふる所を知らず、終に甘酒を以て式を行ふことゝし。猶之を將來に及ぼさんことを誓へりと聞く。翁の力を盡すや、斯の如し、其氣慨の存する所は洵に宗教の開祖たるの風あり。欽すべきにあらずや。

最近之を同志高島米峰君に聞く、今夏翁は米峰君と共に岡山縣主催の夏季講習會に巡講し、往き往きて或る一驛を張る此町、全區酒造を以て成り、來會の青年は概ね酒造者の使用人或は杜氏にあらざるなし。司會者講に先ち竊に翁に之を告げ稍其說を寬にせんことを注意したり。翁聽かず。其壇に上るや酒害を說き酒毒を數へ酒失を論じ酒惡を責むる常の如く、變質心臟の標本を示し、罪惡疾病惡性遺傳の統計を指し、諄々として教訓を垂るゝ二時間、人の去ると倦むと全く意を介せず一意其主張する所を主張して講を終れりと。之をして所謂各宗の高僧學者たらしめば卽容易に妥協し容易に讓歩し一意聽者の意を迎ふるに急にして其主張に忠と不忠とは全く問はざりしならん。翁の尊ふべきは玆にあり。是法然上人が其弟子等の世の機嫌と人の注視を綏ならしめんが爲に一時念佛弘通の中止を乞ひし時『假令死刑に行はるゝとも、此事言はずんばあるべからず』と唱破せられたる凛然萬古を貫くの獅子吼と同一轍なり。今の教を說くもの其理を盡す巧ならざるにあらず。其辨を以てせば片山翁に數等を超ゆるもの比々是なり。而も其感化の殆ど見るに足るものなきは、眞人の聲と精神なき蓄音器との差あればなり。

江湖有道有識の士眞に世を憂へ國を思ひ躬を以て事に當る片山翁の如き上士は固より稀なり、然れども、酒害が興國の災禍となり文化發展の障碍となるに戰慄し、その宣傳

悖徳狂と化し、百弊續出するもので、辨榮氏の折角築き上げた民間教化にも一部分にはかゝる非難も存せぬではないが、青民師は一面は虔信主義の直覺派で、主情説の樣だが然し厭くまで合理的の態度を棄てず亦嚴重な道徳説に立脚して寸歩も超常識を許さない。此點が青民師の特に見るべき點と思ふ。教友の諸氏がこの十七年に忘れられんとする「青民遺書」を一たび繙くことは信念上にも思索上にも多大の裨益あることゝ思ふ。

白嶺氏の文才は天禀であつた。特に輕妙清新は彼の特色で、兒童教化の資料に全力を注いだ事は本宗教化史上不滅の業績であらう。彼は徹頭徹尾文藝を以て宗教を教へんと誓願した人だ。彼が數十篇の唱歌も戯曲も童話も皆之が爲だ。今の東儀鐵笛氏と身を挺して沙翁劇の舞臺に立つたのも之が爲だ。彼は今の兒童教化家の要する渾てを創作して今に其價値を失はず、彼は今の佛教家が切々として求めつゝ而も大に成效するに至らざる文藝藝術の根本宣傳に早く眼を着けた一人者であつた。

現時の少年教化を以て白嶺氏時代のそれに比したら組織に於て方法に於て將技巧に於て殆ど同日の論ではあるまい。然し其創作的の勇氣と建設的の信仰的大主張に於ては、今

の技巧の爲に信仰を賣り、模倣の極、全然創作革新の元氣のない人々に對して、實に鳳凰と群雀との感があるといふてよい。如何にせば兒童の心田に佛種を種ゆべきかの純眞な熱烈な大菩提心は、到底如何にせば兒童の歡心を買ひて、其涙を搾り哄笑を博すべきかとのみに苦心する輕薄者流が夢にだもすること能はざる所である。

現代應同の教義の新解釋と身を以て率ゆる如法の實修、藝術と文藝を通じた彌陀大慈の宣傳、法然主義の洽及、少年少女の徹底教化、之が夫の開宗記念事業中最も根本なるものであると思ふときに、大正の今日一人の原と赤尾は果して居らぬであらふか。(大正十一、八)

◇片山禁酒翁の志操に學べ

道友片山國嘉翁、廢酒宣傳のために酸心苦肝既に三十年、横説竪説、苟くも機會あらば諄々人を誨へて倦まず、其徹底の教訓、親切の指導殆ど日蓮の熱烈に加ふるにソクラテスの懇切を加ふるに似たり。翁や今齒徳共に高く醫學部隨一の先賢として、名聲世を蓋ひ、俊才の門に出づる雲の如

然し學問の方面で一世の歸仰を集めて居られる和上の如きは實に教界獨歩の碩德と云ふべきであらう。性相の研究を以て一時教界に睥睨した豐山大本山長谷寺は、この前學頭の老和上に由りて大正の今日、尙昔時の名譽を赫揚しつゝある。一國一人を以て興るといふが一宗も亦之と轍を一にして、一人の力で鼎の輕重が定まる。是は今和上の爲に言ふべき最も適當の贊辭であらう。

今回行はるべき權田和上の喜壽祝賀の延壽會は、實に學界の瞻望と一派の歸仰とを證明すべき最上の實現である。帝大を首め各宗大學は勿論、東洋大慶大早大及び美術學校等苟くも東洋の宗教學藝術に關係ある學者は其耆宿と新進とを問はず競ふて發起人に名を列し、豐山一派の碩德俊材も老壯を擧つて之を參加し、四百有餘の一大結衆、宛ら胎藏海會の諸佛菩薩龍天八部が中台の毘盧遮那を圍繞する盛觀を呈した。和上が嘗て教學兩界に盡された功勞は斯くして聊か酬ひられたりと云ふべきであらう。和上としては何等の問題でもないが、數年前、博士會が和上を候補の一人に推しつゝ、而も之に最至當なる榮稱を與ふるに慳吝に敎學兩界の恩人大內青巒居士と併せて之を一蹴し去りたる大失態と無識の無禮との如きも、今回の擧に於て幾分當時憤慨した人々を慰むるに足るであらう。

近時教界が學者を優遇するの途、甚だしく菲薄に失し、各宗碩學の末路、多くは坎壈蹭蹬に傾き、之を飾るに足る何等のものも殆ど之なき際、今回の延壽會は此流弊に對し、學問崇重の模範を各宗に示し、學者尊敬の實例を教界に教へたものである。權田老和上の延壽會は此意義に於て更に別様の喜を以て、之を歡迎し賞揚すべきであらう。

更に亦、近時教界聯合運動の機運大に熟し、教育聯盟、傳道聯盟の聲さへ所々に聞ゆるに闘らず、各宗漸く人材を私するの宗派根性を生じ、教界も亦其學問識力の一般的なるものをして強て之を一宗派に局屬せしめて、之が共同通有の價値を沒せんとするの傾あるは嘆ずべきの至りである。近く例を擧ぐれば立花俊道、木村泰賢、泉芳璟諸氏の如きは決して一宗局屬の學材ではない、然るに一般教界は此等新進學者に對し最近如何なる態度を取つたであらうか、學問に國境なきは天下の通理である。況んや區々の宗派に於てをやだ。權田老和上の延壽會は此近時の憂ふべき宗派的傾向に對して、頗る意を強くするに足るものがある。延壽會は此點に於て、學問の超宗派的權威を示す上に於て與りて大に力あるものと思ふ。

に忠なるものに至りては其人少からず。否、舊式粗豪の一類の人士を除きては禁酒は殆ど識者の輿論となれり此大勢の中、教界にありては各宗を通じ摯實に此問題を思考するものは猶比較的に乏しく、西本願寺の名和氏其他の識者を除けば酒害と風教の關係、酒毒と教化の將來を思ふもの猶甚寥々として殆ど此問題に對しては甚しく無頓着無反省無神の狀にあるを遺憾とせざるを得ず。而も假令若し積極的に廢酒運動に出づるなくも慚愧之に隨喜を表するの意あらば尙忍ぶべし。其多くのものも而も識者學者の階級に於てすら猶熱烈に禁酒運動に從ふものに對し冷笑を加へ嘲罵を放ちて何等恥づる所なきに至りては教界の前途殆ど知るべきの嘆なきを得ず。傳道布教、濟世利民斯の如くして能はゞ、酒狂酒亂の甚しきものをも管長たらしむべく、銘酊敗德の醉漢を將ちて本山貫主たらしめて可ならずや。教界は今や片山翁の躬行と信念に對して少くも恥を知るも決して不可ならじ。

聞く、佛教聯合會は幹部會を東京に開き教界振興の長策を議すと、傳ふる所の諸案は多くは機宜に當れり。而も亦希くは時代の要求する重大のもの且つ教界刷新の一方策として何等か禁酒運動に關して審議を盡さんことを切望す、而して之が範を示さんが爲に東京に於ける大小公式の饗宴は一切酒を使用せざらんことを切實に申言す、この形式及儀禮の上に於ける斷乎たる改善は事小と雖、以て教界改新の意氣を示すに足らんか。而して又聯合會が信を天下に得る所以なり。(大正十一、九)

◇權田雷斧和上の延壽會を慶して越智專明老師を偲ぶ

密門の碩學權田雷斧和上は今年七十有七の高齡に達した。博綜該羅の學問に加ふるに明快縱橫の機辯を以てし、且つ玲瓏天眞自ら人を推服する、この大學匠は、幾多の貴重なる業績と共に、非常に深く且つ廣い感化を學界に與へた。印度哲學に關係ある學者は勿論、思想界にも藝術界にも、文藝界にも考古界にも、和上の指導と誘發とに感謝すべき所が甚だ多い。近時教界に於て和上程廣い交涉を有する碩學は殆ど匹敵する人を見出し得ぬ。實修功積りて德望教界に比なき人には吾が山下現有上人も居られる。定力卓絕して識見一世に鳴る高僧には北野元峰禪師も現に健在である。

すら戰前を一〇〇とし戰時二三二迄昂騰したる物價は今や一三一まで値下して稍戰時と均しきに至りたるに拘らず、吾國は大正九年已來漸次に輸入の超越を見、正貨次第に減少を見つゝ而も其物價は毫も下降する所あらず戰時三四〇、約三倍半に騰りしもの近時僅かに二一四に下降し來れるに過ぎない。若し此の如き狀勢を自然に放置せんか、國家經濟の前途頗る戰慄すべきものあるは言を要しない。歐米諸國が極力人爲的に經濟の調節に苦心しつゝあるに對し、吾が國民が自然の成行に放任する無自覺と暗愚と危險とは官民有識の士をして一齊に消費節約の苦叫を擧げしめたのである。

現在の所、國家前途の財的悲境を豫防するの道は唯國民各自の自制に待つ消費量の縮少と貯蓄の勵行にあるのみである。是現在に於ける奢侈及無用の濫費に依る、不健全なる經濟現象に對して特に其必要を認むる所である。大正三年末酒に於て一人當り一年八升六勺であつたが八年に一斗一升に上り、煙草一人一四五本より三一七本に進み、九年十年續きて益上進を示しつゝあるは内務省統計の示す所である。二者既に然り、他の化粧品其他奢侈品の需要も年々增加を示し、不景氣に苦むの今日尙浪費の風が依然として持續せらるゝは必ずしも三越白木其他のデパートメントの繁昌を證據とするまでもあるまい。

由來敎家は佛祖聖訓の示す所、節約儉素を以て行持の根本とし、一針一芥、悉く白毫の恩德、信心檀越の淨施なるを思ひ、常に慚愧報謝の念に住し、無益の冗費を節し力めて奢侈の弊風を戒むべきは勿論であるが、特に右の如き現今の狀勢に立ち、國民一致節約を勵行すべき重大の時期にあるを以て、敎家は身を以て檀信を率ゆるの決心を固め、特に寺庭子女の服裝其他の如きは大に注意を拂ひて一般の模範を示すまでの堅實なる風紀を敎門に造りたきものである。吾宗に於ても開宗紀念の事業の一として節約貯蓄の美風を振興し之が爲に組内の申合せを作り、會合團體を起すが如きは最も適切の擧であると思ふ。敎家は今や宜く官民と同一の步調を取り、之が先鋒として大に國家前途の爲に奮戰すべきである。

一宗の冗費節約、儉素節制の美風は延ひては一宗公共事業の振興となり、敎學社會事業の發達に資益するであらう但し此際不幸にも若し名を節約に借りて私利私福を營むに汲々とし毫も一宗報效の意志なく單に其子孫の爲に營々たる無慚愧の守錢奴あらば、一宗は此際宜く何等かの方法に

宗外には權田老和上の延壽會に重々の喜あると共に宗內に於ては碩學越智專明老師の西往に就き、實に痛惜に堪へぬものがある。越智師の學は權田老師に比して頗る狹い、前者は普遍的であるが後者は特殊的である。彼は台密禪淨に亘り、此は唯淨土の一門に深い。但し學者としての業績功勳に至りては、越智老師は必ずしも權田阿闍梨に遜色ありといふことは出來ぬ。越智師は夙に宗史の硏究に着眼して三祖言行錄淨土宗年譜の如き不朽の好著を殘し、宗典に就きて幾冊の貴重な啓蒙的な註解を後學に傳へた。之は權田和上が密教々理や圖像や曼荼羅に就きての入門的の好著多く、亦「續紘祕曲」の樣な大著あると伯仲すると云ふてよい。權田和上が音羽の學林で幾多の鳳雛麟兒を育てた樣に、越智師は芝の第一教校で盛に人材を造つた。關東で、今の宗門の要路に立つ多數は概ね越智老師を校長と仰いだ人々である。權田師は七十七、越智師は七十を越ゆる僅に二三で逝いた。而も晩年は緣山の山務に關與し、不幸火災に逢ふて後病臥數年、また精刻の史筆、通暢の註解を試むることが出來なかつたのは權田和上と比して最も不幸の點であつて遺憾に堪へぬ所、天なり命なりとして嗟嘆するの外はない。但し越智師の宗史硏究の開拓と先驅は今や教理史に望月氏の如き巨匠を出し、教會史に於ては大島泰信氏を首とし今岡岩崎其他の諸氏の後勁を得るに至つたのである。越智師は其學風と硏究の範圍と境遇とが權田和上に比し著しく相違した爲大に世間は顯はるゝに至らなかつた迄である。權田和上の祝賀に關する一人として越智師に對する感は玆に於て最も深い。

越智師は生前、黑田神谷諸老の如く學匠として一宗の祝賀を受けずに西往した。今は唯、一宗の學者に越智師の爲に必らず盡すべき一の義務が殘つて居る丈だ、特に越智師の指導を受けた人々には此義務が最も深い筈だ。此等の人々には權田師の延壽會を見て、何故越智師の爲に起たないのか。（大正十一、十）

◇節約儉素慚愧報謝あれ

消費節約第一義、是方今官民を通じて切實に呼號せらるゝ必然に逼られたる絕叫である。歐米に於ては戰後漸次に生活費の低落を示し、戰時の利得吾國に十數倍し現時に於ては輸出に於て吾に比して夐に上位にある彼の米國に於て

あるまい。然し之が爲に多數黨と佛教徒との提携關係を生じ、若くは某黨と某派との親緣の成立を來して何事にも何物にも之と終始するが若き事情を發生するとせば、是實に佛教各宗に取りて、由々敷大事となるのを忘れてはならぬ。國民の精神の上に立ち、國民の信仰生活の上に强大の地盤を有する佛教が若しある特殊の黨派と結合するの曉は、卽ち自ら好むで全體の國民から棄捨せらるゝことゝなるのを豫め決心せねばならぬ。普通選擧の火の手は炎々として全國に燃へ上り、政黨改造の急は、議會の現狀よりして一般民衆の絕叫となつて來た際に、佛教徒は使節事件の開展として先第一に此點に就き特に愼重の考慮と公明遠大の智見とを必要とする。

　第二に考慮すべきは使節事件の發展として硏究を度外視した、偏狹なる教義上の議論、及び寬宏を缺く固陋なる鎖國的不寬容の言動が、動もすれば佛教界に生ぜんとするを防禦すべきである。這般の不寬容主義は現代の文化及世界平和の爲に最危險なる障碍にして、吾々が加特力教に對して慊らざる所以も主として玆にあるのである、吾々が取るべき態度は宜く大乘佛教の寬宏なる主張に依りて國民を指導し文運を進展せしめねばなるまい。

　第三には教化事業の充實である。佛教徒は吾國に於ける歷史上の根柢と、卓越せる教義上の强みは持つて居るが教化事業に於ては負に加特力教徒の努力に後れて居る。今回の事件に於ても學者や貴族の膚淺の人々は單に加特力教が教化事業の奮鬪を見て一も二もなく使節案に贊成したものさへあるではないか。且く東京に於ける貴族有識者の子女が輻輳する曉星中學を見よ、佛英和女學校を見よ、聖心女學院を見よ、更に上智大學を見よ。使節問題の將來の解決は實は歷史や教義でなくて此等の實際教化から來たらんとしつゝあることを佛教徒は深く考慮せずばなるまい。現に今回使節問題の根元は舊教の教育機關が生むだ一二の外交官軍人の手から出でたと云ふではないか。

　最後に將來大に開展すべき加特力教との觸接に就きては一層各宗聯合の强固ならんことを切望する。敵國外患なきものは國亡ぶといふが、旣往一ケ月夫の對議會の運動が絕頂に達し、外敵の襲來、教門興廢の秋と迄呼號した人もあつた時に一宗務長の選擧而も半歲前の選擧の爲に殆ど協同運動を度外視した宗派さへあつた樣だ。今後の重大なる運動に就きては此の如き陋態を去りて互に大處高處の洞觀に力めねばなるまい。（大正十二、二）

依りて大に之を戒飾し反省を促すべきことであらう。

（大正十一、十）

◇羅馬法王廳使節問題と教家將來の覺悟

羅馬法王廳使節駐派の外務豫算は衆議院に於て見事に削除せられて了つた。貴族院に於ても、同院が國論無視の識と、豫算不成立の責とを甘受せざる限り、勿論衆議院の削除に同意すべきを以て、此教界は一大波瀾を卷き起したる大問題も、先は落着したものと看做すも大早計であるまいと思ふ。但し議會に於ける此問題の終決と共に佛教の徒は之に對して頗る愼重の考慮を要すべき必要が生じて來たことを忘れてはならぬ。剋實して言ふと議會に於ける使節問題の勝利と共に、佛教徒は新に幾多の解決を要すべき問題を引受け、内外に對して種々重大な責任を更めて負擔したことになつた。謂ふに佛教徒としての眞正の使節問題、換言すれば宗教問題思想問題としての羅馬教對佛教の關係は實に今から始まるのである。佛教徒は使節問題を烽火として此最近宗教史に重大の記事を殘すべき佛耶兩教の觸接に奮鬪すべき實戰期に入つたのである。

此實戰は勿論、教理の研究、宣傳と教化事業の施設に由りて輸贏を決すべきものなるが故に一面には大に佛教界の覺醒を促すと共に、他面には此最近四五年間に醞釀し來れる各宗聯合運動に有利なる刺激を與へ、其結束を固くし協同精神を鼓舞するに與りて力あることゝならう。而も此の如き牢强なる自覺を與へて教界の弊害を一洗し、教學の各種施設に於て充分なる協同の效果を收めんとするには使節問題の前途に對し、政治運動より一轉して信仰運動に來らねばならぬ。政策運動より躍進して教學及社會教化の事業に出でねばならぬ。吾々は之が爲に下に二三の私見を述べて見たい。

議會に對する使節問題の解決に就きては勿論各政黨の了解を得るの必要があり、特に多數黨の向背如何が問題の運命を支配すべきものなるが故に出來得る限り此主力を動かすべきは當面の對策として止むを得ざることであつた。然し之を動かす所以のものは國家の前途國民の慶福の爲であつて政黨其物の利害のためでないことは自明の理であり、政黨と雖、亦第一義としては國家民人の爲に動いたに相違

は多くは是全然形式化した精神のないものである、虚僞の外觀を非現代的に粉飾して內容は殆ど空零のものである。熾烈な熱情を缺き、眞劍な嚴肅さに見るべき所のない無意義の行事に過ぎない。弊害の生ずる所は玆にある、敎界を硬化せしめ病化せしめ死化せしむる所の中毒の原因は全く玆にある。

本年の御忌には少くとも此點に充分の注意を拂ひて、夫の御忌をして徒らに紫緋金襴の無意義の行列や、殆ど現代的に生命を失した、何等の熱情も渴仰もない形式一遍の讀經讃唄を一轉して之に熾烈な傳道精神を注入すべきことである、當局の頭腦に若し傳道第一信念第一の覺醒さへ起り來り之を以て門末を律せば舊儀式の中に新生命は自然に躍動して來る。卽ち宗祖の本旨に歸り法要中別時の精神を以て特に禁酒禁煙を勵行し、至嚴至密の新戒律主義の態度を當局が親しく範を示すが如きは、確に共一であらう。本山の御忌中に享樂氣分、遊山氣分、接待氣分、商買氣分、甚しきは黨勢利用の氣分を以て終始する當局が萬一存在した曉は、卽ち中毒が益猖獗となり、病勢は彌慘憺を加へ來ることは論を待たぬ。

記者は此安價な猿芝居の如く社會の指彈を受け、識者の笑を增得しつゝある法要改善信仰復正の一策として諸大本山の御忌中少くとも一日は黑衣如來衣總出仕、道俗共行の平明簡易な勤行をなす聖日を定めんことを提議する。上は門跡法主より下は沙彌小僧に至るまで一切宗祖眞影の如く緇衣鼠袈を着用し如法に在家勤行式及念佛を修行したい。宗祖の廣大なる平等主義の宗風、萬機普益、階級融一の生命は玆處で幾分は復活するであらう、時代は今や敎界に對して之を古にして佛國革命の當時盛に高僧官僧を斷頭臺に送れる如く之を今にしては露國獨逸の過激主義者を仇敵とするが如く、其階級的な貴族的な、ブルジョアー的な風習儀式に對して極端の憎惡と反感とを表して居るを知らぬか、水平社が本願寺に對する態度は決して他門のことではないのである。御忌中黑衣如法日の制定は此點に於ても宗祖の本旨に依り時代を指導すべき一大英斷、一大先見である。當局者諸賢以て如何となす。闔宗の識者も若し意を同うせば來りて共に當局を鞭韃したらどうか。（大正一二、三）

◇東西諸本山の御忌法會を革新せよ

祖山並に東西諸大本山の今春に於ける御忌法要は、門末及信徒に對して、明年の開宗記念法要の準備、若くは宣傳の重大なる意義があるが故に、本山當局の苦心は非常のものであらう、隨て儀式に於ても傳道に於ても將又諸般の事務に於ても今春は例年に類きな緊張味を示すことゝ信ずる。

本山當局が對內的に右の如き緊張味を示すと共に對外的にも時代の趨勢を洞察し、現代思想の嚮ふ所を達觀して、本年の御忌を好機會とし之を來春の開宗記念に對する宣言發表の宣傳機關となし、之に依りて來らむ七百五十年の大會の最有數なる豫告を社會になすべきことは、畫策の上なるものであらう。記者は此二點に就きて聊か所見に付き當局の一考を煩はすことゝする。

開宗記念大會の問題としては、內、門末信徒に向ふては清新なる信念の復活と共に道俗の一大結束であり、外社會に對しては宗風發揚祖道振興の下に時代思潮の歸一と指導とに存することは、誰とて異論のない所と思ふ。而して此內外の切要に應ずる爲には、從來因襲的に教界を蠹毒し骨董化し死滅せしめつゝある、夫の儀式、中心法要萬能の弊風を一洗して教化中心傳道至上の祖意に復正せねばならぬ。佛教の首都として世界的となつた京都に流注する人々は今や享樂遊覩の眼を以て、都踊りや安價なる猿芝居に低級の眼を喜ばす意義に於て、紫緋錦襴の行列や、時代や時間を超越した夫の法要を見つゝある。然るに教界は猶滔々として、此低級なる法要の興行を得意とも、殆ど法要中毒の狀を呈しつゝある。東西本願寺の如き比較的に對社會的の新設備をなすに敏なる宗派さへも、亦此法要中毒の弊を脫する能はず、今や共開宗記念に際して共無意義の法要に淨財を濫費するを以て盛に識者論客の非難を受けつゝあるではないか。

斯く言へばとて、記者は絕對に法要を否定し儀式を撥無するものではない。現に行はるゝ法要には歷史もあり、慣習もあり、傳統もあつて、或度までは一つの教化事業、身業說法と見倣すべき理由も存するから、之が清新な信念の發露より出で之が傳道を中心として行はれた場合は固より、何等議論もないことである、去り乍ら現代教界の法要儀式

本山の現代化は其平民化から始まる、愚劣盲昧の繁縟の儀式、措辭時代錯誤の權式や儀禮は一切之を更革するの必要がある。本山の時代救濟は確に其卑俗佞媚、無識無學の弊風を根本より絶滅するを第一とする。而して本山は教學の根本道場であり、修養場であつて、刀筆事務の御役所や、集金係の宿泊所でないことを徹底方針となすことが正に其復活の第一歩とすることは誰とて論のない所であらう。而して道重氏の人格、精神、主義は、正に此大革新の爲に特に準備された樣にも見へる。雄大の本山經營とその光輝ある復興は此根本主義から源を發するであらう。宜なる哉、長老野澤氏が其當然の候補を固辭して一に道重氏を推したのは、同長老の德量と識見の大と共に亦よく一宗の聲を代表したものと有難く感ぜられる。

一宗は今や一切の舊套を打破して一の平民僧を本山まで押し上げた。此因習の打破が同氏の光榮ある當選と共に之を記念に益其勢力を驅り、夫の積年解けざる舊レコードの黨閥打破に及び、同志會も大成會も其他の宗政團體も潔く解體して渾然一に歸したら、實にレコードの破り甲斐も其時更に徹底し、擧宗一致は政策的にあらずして信仰的に始めて實現し得よう。

此の文は特に二十年の同志道重氏の人格を重むじ特に一の敬稱を用ゐず、師の字さへも一切略去して平民的に氏の字にした、矧んや位の「正僧正准司敎已講」といふが如き紛々たる愚劣の稱號をやだ。（大正十二、六）

◇盆會の盛行を期すべし

寺院と檀徒とが最も親密の關係を示し得るは七月である、吾國の習慣風俗の上に今も猶牢然として拔くべからざる濃厚な佛教的色彩を留むるも亦七月である。寺院に施餓鬼あり、家庭に精靈棚あり、棚經に忙しき僧侶は墓參に踵を次ぐ信徒と接し、草花に盆燈籠に此月は別樣の宗教味を都鄙に現出する。古來七月を佛月といふも尤のことである。佛教渡來已來一千餘年、怨親平等、法界一如の廣大な慈悲救濟の敎は、吾國の强烈崇高な祖先崇敬の美風を融化して、玆にこの特殊な佛月を今に殘し得るに至つたのである。かく考へ來る時、吾々は古來大敎傳持流通の先德の努力とその善巧方便の苦心の如何に深く且つ大であつたかゞ今更の如く痛感される。

◇道重信教氏の增上寺瑞世に際し

道重信教氏が擧宗一致を以て宗制更正新實施に際し、第一世の三縁山住職として就任を見るべきは、大勢の趨嚮から推せば開票を待たずして旣に決定の事實である。故に玆に同氏に對する推薦の辭を草するは勿論何等の必要もない所である。然し今回同氏が增上寺に瑞世せらるゝに就ては、單に安譽大僧正寂後、寺院も信徒も大旱の雲霓の如く待ちに待ち、憧れに憧れて居た、新法主の就任が優曇華の花芽出度開き三年にして漸く實現を見たといふ大なる喜の外に、今一つは道重氏の新任は縁山とし現代教化の新使命を尅果し、新生面を開拓すべき最適任者の隨一を迎へ得た大なる欣喜である。是闔宗が意識と無意識とに關らず、勢の窮まる所事玆に至つたので、一宗は單に擧宗一致の無競爭といふ消極的の協同の上に、更に同氏を推し得た大なる積極的の大意義を有することゝなるのである。

實を云ふと道重氏の縁山瑞世は大なる、レコード破りである。年齡門地を論じたら、野澤礫山に若かず、教導辯說を以てせば、勿論大門、岩井兩法將に及ばず、其學問は博涉と雖、望月の精にして斷に富む、荻原の深邃にして的確なる、椎尾の卓識博綜なる、悉く道重氏の壘を拔くに足るものがある。若し夫れ戒行の密、經營の才、社交の妙、風丰の卓、之を夫の六十餘の候補中に求めば幾多の道重氏に遜らざるの人物を看出すに決して困難を感ぜぬであらう。唯一つ天眞超俗の人格と萬人に親む寬宏謙讓の平民主義の美德と、熱烈にして親切なる教化の力用に至りては、一宗を通じ、各宗に涉りて恐く道重氏に匹敵し得るもの少きを認め得るであらう。是れ彼が華族にも看護婦にも篤信家を得、博士にも車夫にも信賴者を見出し富豪にも小作人にも崇拜する人々を得て衆生縁の深厚一宗に冠たる所以である。而して一宗が何等の理窟もなく靡然として此黑衣貧弱の一田舍坊主、山口邊陬の臥龍を起した所以である。僞らざる人格の力、倦むなき教導の老先生、萬人に城府を設けざる一平僧、是れ開宗記念前特に切要の人物である。而して增上寺の革新、否本山の革新に於て特に切要の人材である。一宗が渾てのレコードを打破し去りて、此一田舍坊主を推し來れる確に一の革新を意味するのである。

內を動かして此最有效に最貴重な宣傳機會を徹底的に運行驅使することを計るべきは蓋し開宗記念焦眉の對策としてこれ已上はあるまいと思ふ。（大正十二、六）

◇大震災の襲來

未曾有の大災禍は突如として帝都に襲來した。至烈至酷と稱せられた、最近世界大戰に於ける佛白諸都市の慘害も今回の大自然の暴虐、巨震大火の跳梁に比しては殆んど言ふに足らぬのである。唯見る、阿鼻叫喚の猛炎毒烟の中に、累々たる伏屍市街を埋め、啾々たる鬼哭は河川を堰ぎ、死者は二十餘萬に上り、建築物資の損害八十億に達し、帝都の三分二は倏然として茫々たる焦土と化し了つた。三百年の文化は今や何處ぞ、明治より大正に迨びて經營したる大平歡樂の俤は、今日如何の狀をなすか、帝都は實に九天の上より九地の下に下落し了つたのである。暴君ネロが焚燒したる古羅馬の殘骸大帝奈翁を苦めたるモスカウ全市の大火の跡は今や其慘狀を大にし其禍害を新にして、華麗富贍なりし東京の遺骨を無殘にも、秋天に横へつゝあるではないか。

天の爲せる禍は避くべからず。自然の下したる災厄は如何とも致方はない、然し此禍害の中に大なる國民の一大反省が喚起され、此大災厄を前に擧國の摯實な一大奮躍が激成されたならば、是眞に吾帝國を興隆し、革新する所以であらう。今回の大災厄は之を一大天譴と痛感して覺醒の實を擧ぐるも極めて切要である。之を一大試錬と諦觀して、國民の實力を厭くまでも發揮するは、更に急務である。災前に横行跳舞した、危激浮薄の思想、淫蕩驕奢の生活、私利貪欲安佚放縦の病毒、政黨の積弊實業家の腐敗其他社會幾多の害惡は大火と共に一掃せられ巨震と共に粉碎し去つて、國民の眞實なる自覺と努力、協同互助の大精神が勃然として焦土の中に萠したならば、日本は寧ろ其轉禍爲福の吉兆に欣喜せねばなるまい。此精神が帝都劫灰の間に發し靡然として全國に滿たば帝都の復興は存外に容易に成るであらう。吾々は玆に於て甚しく悲觀するを要しない。燒太りの東京、罪惡淫蕩を一洗したる精神的の新帝都の出現は寧ろ吾々の切望する所ではない。

此國民的の自覺と共に反省と同時に必然に生じ來るべきは市民の强烈なる宗教情操である。之を歷史に見、又之を

法界無遮、焰口津濟の施餓鬼會は絕大の人道主義と平等の物心兼濟を極度に徹微した聖儀であつて現時の飢餓、爭鬪の生活難及階級戰の時代に於て特に其意義の深遠なるを考へざるを得ない。之と聯關した盆會の儀式は功德七世の父母に及ぶ尊先尊祖の精神を徹底的進取的精神的に高潮したもので、動もすれば固陋頑迷に流れ形式迷信に陷らんとする素樸な祖先崇拜に深遠な合理的宗教解決を與へたものである。七月の佛月は斯くして世界思潮としての人道主義と國民精神としての歷史觀が渾然として大乘敎義の下に融化し玉成したものである。國家に對する堅實な祖國的忠愛、家族主義の根本精神たる孝敬の至情を盡すと共に、社會問題世界問題の根本主義に向ふて大膽な物心兩面の平等救濟の解決を示したものである。施餓鬼は古い盆會も實に持統天皇已來の舊慣である。然し此古き慣習の中に、現代煩惱不安の思潮に的確の藥石を施すべき新意義が躍々として今に光を放ちつゝあるを忘れてはならぬ。――佛敎社會事業の基調、思想善導の大本は實に此二つの儀式に於て力强く代表されて居る。

此二大儀式が念佛を中心として行はるゝとき、かの大慈救濟の深理は彌陀の悲願攝取を待て方めて其力用が開顯され、亦かの崇祖尊先の祭儀は三部聖典に力說する淨業正因たる孝養父母の敎旨で益其敎化の徹底するを認めて來る。昔し八事山の諦忍律師は一部の捉はれた學匠が施餓鬼盆會は雜行なるが故に淨門の人は之を行ふに及ばずとする謬見に對して頗正鵠を得た辨駁を加へられ、今は誰とてかゝる愚論をなすものもないが。實に此二つの特色ある佛敎儀式は寧ろ彌陀敎の精神の籠つた時に、始めて其眞義大用を發揚し得るといふてよい。斯く考へて來ると、開宗記念前に於ける七月は理論上に敎義宣揚の最も適當なる機會として之が利用の巧拙利鈍は來春の大會に的面の結果を來すのみならず亦實際上宣傳の好機會、好時期としては此七月を措いては唯九月の彼岸が一つ僅に殘るのみである。然も彼岸と盆會との輕重大小を較量すると盆會の絕好の機會を逸し去つた宣傳が、九月の彼岸に成效する希望は先あるまい。即ち此七月は唯一無二の開宗記念宣傳の機會である。施餓鬼に盆供に墓參に棚經に所謂る有效且有力の機會は殆ど無限に與へられ、檀信との接觸最頻繁に親密な時は此時期を外つして亦あるものでない。吾々は玆に於て今夏七月の利用活用に就きては、特に宗務本山を始め全國敎務所の熱烈な且つ周到な注意を切望せざるを得ない。その統一的の宗

しめ其方針を誤らしめず、其職責と權限とを嚴守せしむることが最急要である。聞く所に依れば、寺院住職にして一朝の變災に周章狼狽爲す所を知らず、悲觀絶望の極、街頭に飯を賣り汁を販きて恥づる所なく、甚しきに至りては酒を賣りて糊口の資とする教化師すらありといふ。災餘の窮狀實に憐むべきは勿論であるが、其職責に就き自覺なきは一宗として恥辱を負はぬ譯には行かぬ。寺院の燒跡に何等の考慮を拂はず、燒失檀越の慰問をも行はず、全然拋置の態度を取りつゝある人々の如きも、特に職責と權限の上から大に戒勗を要するものであらう。當局にして若是等につき緊急訓諭を發し應急の方策を講ずるに非ずんば一寺の衰滅は延いて一宗の衰耗となるであらう。

第二は第一の罹災寺院に對する方針指示と其生活安定の爲めには少くとも何等かの保障を必要とする。一宗は幸にも祖山及び關西寺院の深厚なる同情を基礎として、速に應急の方策を指示することが緊要である。東西本願寺が罹災百箇寺に對し各寺一千圓の下付金を爲したる機敏且鄭重の救護方法には一宗の現狀、急に之を模倣し得ぬとしても、或はバラック建築の實費を下附し或は生活費の月次低利貸與をなし、着々復興的の元氣を振作せしむる事が切實であらう。而して之をなすには、宗務に寺院復興局を置き若くは寺院相談所を設け、公平に各方面の人材を網羅して遺憾なきを期したい。若し此重大の事業を以て假りに之を私黨の擁護及利權の具に利用し、或は事を私黨の手中に專斷して公正を缺くの誡を招くが如くんば實に一宗の大不祥事である。現當路の公明と嚴正は特に信頼するが、其同志會の正系たる故を以て、其內外の大事往々同黨の所謂元老中老連に掣肘された歷史に鑑みて、一言の苦語も蓋し止むを得まい。

第三の大都市計畫に伴ふ一宗の根本方針に就きては更に大に當局の考慮を促したい。殆ど寺院の生命だつた墓地問題が東京市當局では震災を幸に最早着々其整理の計畫を傳へつゝある今日、一宗は何故に速に之が對策を講ぜぬのであるか、是其一部分であるが、全局の問題の解決に一宗の興亡の懸かる所、當局の奮起は此際特に切要であらう。第四として免災寺院に對する策勵指導も勿論今一歩を要することであらう。

要之、外面的の事業が如何に花々しからうとも內面の整理と復興に一大鐵案の存せぬ限り其施設に何で永遠の効果が認められやう、一宗は今や着實に考慮して前途を畫策すべき時代に入つた。（大正十二、十）

最近世界戰後の歐洲に徵しても疑ふべき餘地を見ない。敎家は玆に於て民心の指導に於て今や全力を集注せねばならぬ時が來た。動もすれば悲觀に傾き迷信に陷り、履むべき道を履む能はず、復興恢張の努力を沮害する心理傾向も此際特に敎家が示導を要すべき處である。帝都の復興は勿論經濟に待ち、政策に待て而も其根柢に於て强固不拔の宗敎情操と正大健全の信念が特に必要である。之なかりせば、如何なる巧妙周到なる政策も富贍適切の經濟も到底眞實に恢復の功を擧ぐることは出來まい宗敎家の奮起すべきは實に此時である。（大正十二、九）

◇大震災と宗門對策

今回の大震災に就きて、佛敎徒が相當に活動したことは誰とて認めざるを得まい。救護慰問も追弔も可成周到に行はれ、災餘必要な各種社會事業も小規模ながら、各宗ともに着々其計畫を見るに至つた。政敎關係に於ても災後寺院の復興問題を中心として、聯合會や護國團が時機を逸せず、苦心畫策する所がある樣だ。唯各宗の此種の運動が尙今に緊密且敏速な連絡と統一とが常に意の如くならざる爲と、活動するものは常に陣頭に疲れて後勁續かず、飛將謀士ありて、訓錬された精兵勇卒乏しき結果とは未だ大に天下を動かし、民心を一にするの功を收むることが出來ぬ遺憾がある。加之、事業の宣傳と報告とが機敏ならざる爲に、往往にして意外の不利益を招くことも尠少でない。要するに各宗幹部と寺院との呼應が今一層の緊密を見るに至らぬと、效果は甚しく減殺されることゝなるだらう。本宗に就て云はゞ、淺草江東其他の罹災寺院中には、相當手腕ある青年敎家も乏しくない樣である。此等の人々は勿論其燒失根據の復興に之日も足なぬのであらうが、幹部としては何とか此等の人々を動かして、一宗としての復興運動の手足とすることは出來ぬものか。是寧ろ彼等自ら復活する所以で、亦一宗に報効し得ることゝもならう。吾々は先以て各宗特に本宗が變局に際する寺院訓錬の尙未だ周到ならざるものあるを切に遺憾とする。

大東京の復興に就きて、吾が一百七十餘の燒失寺院を如何するか、此解決の如何は實に一宗興亡の分岐點であつて東京に於ける宗門勢力の如何は職として此解決の結果から生ずるのである。一宗の當路は第一に寺院の嚮ふ所を知ら

後の方策、復興の手段が東西本願寺は勿論、眞言、日蓮諸派に比してすら著しく遜色あるを免れず。隨て震災後帝都宗勢の如何は特に言を要せざる所なり。此一宗の危機に際して宗會が果して其職責を完うし得るや否やは、實に宗會の必要と不必要の分るゝ重大の基點にあらずや。宗務當局にして之に闕し責むべく詰るべきあらば完膚なきまで糾彈せよ、鞭韃策勵すべきあらば、徹底して之を呼號せよ。而して焦土に面し廢墟に向へる宗會をして內には宗を安じ、外には官民及教界に對して一宗の存在を嚴示せよ。流言にもせよ。宗會を京都に開くといふが如き、國策に盲目に宗是に無頓着に一宗の窮運に同情なく其危機に理解もなき呑氣千萬の利己思想が宗隅に尙存する已上、宗會の責任や此際實に大なりと云ふべし。勉旃。

宗會が徒らに李四張三の規則更正を弄び、宗會萬能の利己的逸樂に其特權を濫用するを喜ぶ間は、現代思潮の指導と民心の匡救に於て寸歩も致す能はざるは當然のみ。吾が宗會も之に鑑みて、大に現代指導の上に其職責の頗重きに感奮せよ。帝國前途の憂ふべき現代の如きは嘗てあらざる所、宗教家として起つべきの秋、實に今より急なるは莫し。此國家の危機に立ちて教學の刷新に何等の畫策なく寸毫の識見なしと言はゞ宗會は眞に無用の長物のみ。而して此畫策に對する一二としては宜く宗界萬能の迷夢より覺めて職制上に於ては宗務長一人のみの選擧に止めて機務の統一に利便ならしめ、審議院の如きは全部之を宗會より解放して自由に教學的人材の宗運に寄與するを得せしめよ。育英社會事業に闕する財團の如き亦專門家に多小管理の地歩を與へ事業上の便宜と社會の信用を大にするを得策とす。議員選擧法の如きも勿論普選の殆ど確定的大勢となれる結果苟くも讃衆已上の僧籍を有するものは男女を問はずして能所の選擧資格を與ふるを可とせずや。希くは思想指導の高處大處に立ちて一宗の進展を誤る勿れ。（大正十三、一）

◇開宗記念大會に寄す

開宗記念の大會は終に到來せり。太平無事の時に於ても、勿論宗祖立教の眞意義を現代に彰明して、廣大の德化を國家社會に光被すべき重責あるに今や此至重の好機開展と共に、一方には帝都未曾有の災變後、方に第一年を迎へ國民の痛烈なる宗教意識を覺醒すべき至切の時期に逼り、恰も

◇各宗派宗議會を評す

佛教各宗派議會の流弊は、實に其教化的の職能を抛擲したるに存す。宗會を以て教會の埒外に置きて、之を一種の特殊部落たらしめ、其言動を故らに宗教制裁に於ける治外法權として怪まざる是各宗議會の通狀にあらずや。現時各宗の腐敗は主として因を玆に發せり。恰も我が帝國議會の亡狀と品位の墮落が民心に多大の惡影響を及ぼしたると相類せり。實を剋せば宗會は卽ち教化、その議事は卽一種の宗教事務にして、會合が嚴肅、敬虔、品位あり識度あり規律あり協讓あり、その公明正大堂々たる規模は以て世を教へ人を導くに足るものならずんばあらず。形式ながらも、加特力教の大小各種の會議、英米新教諸派の集會は今に尙宗教會議として敬重に價するを見るにあらずや。然るに宗會と云へば紛擾を意味し、實は大に警策指導を與ふべき政府當局の厄介となり、翩々たる白面俗吏の前に叩頭して、兄弟肉を爭ふの醜を演じ、每に教門の恥辱を示し、每に法運の否塞を招きつゝある現狀を如何に見る。この弊風中に立ち我が開宗記念の宗會は、區々の模倣的末節、紛々たる傳統的流弊を斷然一洗し、信仰的、教化的の宗會、佛滅後に於ける夫の聖者の結集の意氣を以て、二祖國師の白河結衆の敬虔を以て先づ宗會をして別時念佛道場たらしむるの抱負あらしめよ、開宗記念の宗會は少くとも此教家本然の職責に反れるとき始めて實現せん。勿論呑氣なる地震見物の議員、バラツク料理店の惡酒に飽かんとする議員、埒もなき獵職のさもしき議員、腐敗靡亂の政界を眞似て小術策小權謀に得意狐の如く猫の如く信念と教學とに些の理解もなき議員等が假に不幸にして吾が宗會に跳梁するとせば、卽ち吾が宗會は寧ろ之を開かざるを以て、開宗記念の最上策と爲すべき也。

各宗宗會の缺點は、地理的差別の迷情に執はれ、利己的割據主義の弊に驅られて、大處高處の着眼甚だ低く、本末大小の別、殆ど存せざるに歸す。紛擾の禍因玆にあり、黨爭の災源また玆に存す。震害善後帝都の復興が帝國現時の最大國策たるは言を俟たず、隨て都門教勢の復興は佛耶の諸派を通じ目下教界の至急至要の問題たり。此際の宗界は宜く現代至切の問題と帝都に於ける宗門の興廢が直に一宗全體の運命の分岐する所以なるを痛感して、雄大且つ親切の對策を樹立するを要す。淨土宗が現時に於て執りたる善

出でば天下は何を以て大會を見ん。恐れ多き事なから、皇室は今春御慶事に際し億兆の誠衷益々盛ならんことを切望したるに關らず、災後宮垣の頽廢、宮門の崩壞そのまゝとして列國に例なき質素に生民の疾苦を憐察せられ中外瞻仰の大典を擧げ玉ひしにあらずや。記念大會は宜く此鴻範に顧みて、宗祖の行儀に反り、眞實に慚愧し眞實に反省すべきにはあらざる乎、孔子すら禮は驕らんよりは簡にせよと敎へたるにあらずや。

舊慣に依る儀式も法要も既に決したるものは必らずしも之を改廢せよと言はず。而も前記の精神に顧みて、幸には宗祖の恩德と、現門主の德化に依つて得たる淨財は出來得る限り無益の經費を節約し、無意義の事務的冗費を制限し法要中心の非敎學思想を止めて、之を宗門の敎育基金に須ち、次に之を各區の傳道及社會事業の基金に充てよ。關東寺院復興の如きは、社會事業及傳道施設の基本財源を提供するに於て頗る有益に其解決を告ぐるを得べく、宗勢の振興は之と共に必らず一轉機を劃するの幸を見むか。而して宗門が國家社會に奉公し其職責を盡すの道も此堅實なる方針より發せんのみ。之なくんば大會法要は唯國費濫費、宗財徒盡の惡事業に過ぎざる也。

各地開敎區に具さに困難と惡戰したる開敎使諸師を優遇し、一宗の敎育社會事業に闊達財利を求めず一身を宗門に捧げて一意其職に盡したる憂宗家を特待して特に其榮譽を旌表し金品を贈るが如きは大會の最大急務なり、宗敎大學の續淨土宗全書公刊の如き石塚龍學君が災餘出版に千辛萬苦しつゝある勅傳全部英譯の如き宗門敎學の基礎をなし宗光宣揚の先驅たるもの、何事を措いても之を第一に援護し完成せしむべき務なき乎。此等永遠の生命ある事業に一顧を與へずして、煙火の如く消ゆる無意味の舞樂の如きに巨費を抛つの盛は宗財の餘裕然く夫れ寛なるや。

開宗記念大會は終に到來せり。水平社の荊冠旗、隣區に飜り、血を吐く勞働歌洛中に氣を吐くとき依然たる朱紫長袖の行列、何ぞ宗門の太平なるや。眞に祖恩を思はゞ大會の一日せめては上は門主を始め下は小僧小尼に至るまで一列一體の黑衣の別時念佛を修して、眞に平等大悲の宗風を彰明するの快擧なきか。此一宗全體の慚愧報恩復古の精神ありて後、大會の大會たる所以、記念の記念たる意義、而して如上の報恩の利行、方めて實現せん。一日の黑衣主義すら實行を見ずして社會事業の大會を開かんとす、この會が餘興的、附錄的の付景氣たらずんは眞に幸なり矣。

宗祖出現當時の公火亂離の焦土廢墟は、今に其形狀を新にして・災餘半歳の今日尙其慘狀を目前に横へ、他面には國政の弛緩に乘じて、社會問題の糾紛、生活事態の困窮は益思想渦亂の暗流を汪洋たらしめ國史未曾有の不祥事は此禍機に際して、突如一大汚點を國民史に殘し、思想の糜爛險惡、殆と底止する所を知らず民心匡救、精神救濟の切にして更に切なる、大旱の雲霓も啻ならず、實に鎌倉時代の戰慄怖畏失望驚慌、依る所なかりし人心と髣髴たるを思はずんばあらず。內外の國難實に斯の如く國步の窘困また甚た悲慨すべし、而も此深酷なる國難と國民生活の行詰れる所、卽宗祖大敎の攝化正に力ある所なるを見よ。開宗記念は此國家の危局に際し、民心の險處に立ちて其神聖なる職責を盡さんとす。記念大會をして幸に此國家民人に對する至大なる責務を理解し、言々步々此責任を果すに全力を集中するあらは、卽ち宗祖の生命を現代に復活し得て、內外の渴仰を收め、宗運の進展を致すに足らん。若し然らずして、徒らに輕薄浮華の形式、虛僞紛奢の儀禮を追ふに汲々とし國家重大の時期に際して、徒らに御祭騷を演し紫緋錦襴の行列、時代錯誤の繁雜愚劣の法要に、大會の全部を捧ぐるが如くんば、吾が記念大會は寧ろ此重大期に際する有害無益の惡戲也、國に反き民を欺き、宗祖を恥しむる雜染虛假の邪行也、識らず近く開かれんとする大會は宗を興し國に奉ずる善美の會なるか、若くは祖を賣り國を欺くの醜會に終るか、記念と云へば均しく記念也、然も善良なる何物かを殘し得るか、永世拂拭すべからざる汚點を留むるか開宗記念は實に一宗泰否の分るる所也。

苟くも憂志の志あるもの、震後著く感ずるは宗勢の不振なり、開宗記念と稱して實は元氣の銷磨、精神の凋衰、感激の薄弱は終に覆ひ得ざる醜狀を示せるを見ずや。須く之を罹災寺院の復興事業に見るも、新設社會事業に照らすも、精神作興の傳道活躍に徵するも、吾宗が東西本願寺は言を待たず日蓮宗に比し曹洞眞言に比し遂に其背後に瞠若たらざるを得ざるは實に枉くべからざる現狀暴露にあらずや。開宗記念大會は實に此一宗凋落の際に其盛觀を示さんとす、大會にして有機的に一宗を觀るの明なく手足痲痺し胴腹痼疾根治を要するの際に立ち、徒らに其頭部を粉飾し、之に寶冠瓔珞の滿飾を施すが如き無知あらば卽如何。一宗記念の大會は卽ち一宗復興の大會たらさるべからず、此意義を度外視し、地方的、局部的に樂觀し高擧し慢心して、骨肉の窮狀に淚なく、獨り亂舞狂歌に傚らんとするが如き陋態に

代に生命ある所以にあらずや。故に宗派の教長が其德望の隆々として益熾なるに、引退閑に就きて新に新教主を戴くが若きは、歸仰の中心を二つにし、崇敬の標的を兩頭になすもの、困惑を道俗に及ぼし、時に混亂を宗派に見るの虞なきにあらず。吾が一宗に於ても此際若し門主の退隱を見るが若くんば、勢ひ崇信者の歸趣を二三ならしめ其極新門主の淸德に累を及ぼし、其教化の旺昌を妨ぐるが如き虞なしとせず。而も流言蜚語は往々にしてかゝる際に紛生するが故に、不幸にして新門主のために沙上の偶語を耳にするが如きに至らば、卽ち老門主至切の謙讓も寧ろ極めて一宗に不良なる結果を齎らすに至らんか。是一宗教化の上に熟考すべき所たるのみならず、亦祖山の隆昌のために大に思考すべき所にあらざる乎。

人或は曰く夫の釋尊無隱居論の行誡師は嘗て增上寺を辭退して深川隱士として悠々自適せるにあらずやと。而も誡師の隱退は、實に隱退にあらずして化導なりき。誡師の本誓寺の隱栖は、貴賤求道の士、門前日に市をなし、其盛、寧ろ緣山在職當時より盛なるものありき。謂ふに若し萬一老門主閑栖の曉は其結果必らず、誡師と同じかるべく、教化の繁は今に加ふるも滅することあらじ、桃李自ら蹊をなすは古今然り。老門主の隱棲は之を閑にする所以にあらずして寧ろ之を自由の忙地に置くの所以なるを察せよ。

開宗記念の後、一宗は國家内外の憂惧すべき情勢に立ちて益々責任の重きを加ふべく、思想の善導に教學の經營に全力を盡さゞるべからざる時期に入り、而して宗勢復興の切要は亦教運泰否の分岐點にあり、此際宗徒が教化の重責に堪へ、國家民人の期待に副ひ得るに足る唯一の自信は唯各宗に匹儔なき齒德第一の老門主を戴けば也。老門主にして一たび去らんか、激瀾怒濤に漂蕩するの孤舟に、老熟の船長を失せると等し、一宗元氣の沈滯と失望は推するに難からず。開宗記念に由りて漸く意氣の勃興を見たる一宗をして希くは此不祥事あらしめざれ。

兎角の世論は免れざるも淸浦首相は夫の頽齡を以てし尙且つ至難の政局を料理して國に奉ずるの自信を以て立てるにあらずや。經濟界に政治界に頽壽の人々の奔走するは獨り吾國のみならず、基督教に於ても矢島揖子女史は一婦人の身を以て高齡海外に往き、病牀猶後進を指導するの勇あるを見ずや。政治界を覺醒し實業界を指導し、範を一世に垂るべき教家として爲法不爲身の赤誠一矢島女史に劣ると言はゞ是吾が門主の盛德を知らざるの言のみ。宗務當局は

◇門主引退說の一掃を期す

（大正十三、二）

『大聖釋尊は嘗て隱居されたことは聞かねへ』と、是一代の大德福田行誡が、常に喝破せる痛快語にあらずや。吾が宗祖が流謫の受難は既に八十の頹齡を數へ、一生の慈訓は、橫說竪說寸時も寧處なく、聖迎前の一枚起請は今尙凛として生氣あるを見ずや。何くんぞ退隱の如き閑想の此間に存せんや。二祖三代より始め列祖等へ臨終の最後まで嚴かに敎綱を握りて化導唯及ばざらんことを恐るゝを仰がずや。蓋し法然門下の兒孫には還來穢國、自信敎人信の徹底を期するの志ありて、勿論敎化壇上より身を引退するが如き懈怠は斷じて之あらじ。

近時坊間傳ふる所に依るに、開宗記念の大會終を告ぐると共に、吾が門主の引退を見んとすと。謂ふに門主高齡、既に九十有三、敎學の諸務は耆壽を煩はすに餘りに繁瑣に、四衆攝化の勞は往々にして、道軀を累するに充分なるものあり。師弟の情より推さば、所謂功名就りて、勇退時佳なるの今日、門主平日林泉の遺志を完うせしめんとするの精神は、寧ろ其溫味甚だ掬すべく、親切慇重の至れるを見るべし。人皆淚あり。一宗誰か識者の心事に對して、惻々の同情なきを得むや、而も大法傳持の嚴なるや、斷じて區々の私情を以て動かすを容さず。國家宗門の大事に當りては婦人女子の胸懷に將ちて、大人の進退を律すべからざるは勿論なり。吾人は闔宗と共に門主隱退の浮說が、勿論架空の浮說として消失せんことを望み、且つ門主に賢に讓り能を推すの謙讓の誠志、若し萬一に之ありとせば、玆に謹で其現時に於て道俗歸崇の意に乖き、時運の趨勢に反し、一宗のためにも祖山のためにも極めて不利の結果を招致するを極諫して、其謙志の抑損に考慮を垂れんことを切望して止まざるなり。

事は稍異例に屬するも羅馬法王は一たび其寶座に登れば一生勇退の事なし。是傳燈の眞義として、萬民歸仰の標的たる已上洵に然らざるを得ざる所、各宗派の宗憲には敢て一宗首長の隱退を拒否するの明文なきも、之を宗政の樞機に當る宗務長其他の如く、選擧後の期限を付せざる所、卽其精神の那點にあるやを看取するに難からじ。人格中心の敎化を貴び、因人重法の實、兎も角尙存するは是敎界が現

の觀念のあるものだ。大局を知らず大勢に通ぜず、門墻中に蟄伏しつゝある連中は實に糞土の墻で、度すべからざるものであらう。消極主義、事勿れ主義の引込思案で現代に一宗が維持出來れば、日本は永く鎖國で桃源の夢溫かですんだであらう。糂太瓶にせよ、瘦羊にせよ、隣には兎に角立派にそれだけのものはあるのだ。教學の上に元氣も事業も殆ど空零に歸せんとしつゝある一宗は果して今何を羨まうとするのか。（大正十三、五）

◇教學週報創刊に際し

東亞佛教徒の聯合運動は古秋の東亞佛教大會を導火線として益其勢を大にし、大正一切經の出版、東西本願寺及淨土宗に於ける信仰歷史教義の極めて摯實なる飜譯述作及外字雜誌の公刊は更に此氣勢を高め、シヤム、ビルマ、セイロン等の佛教徒も、日に日に道交の親善を求むる機會を重ね政治上に於ても經濟上に於ても、彼の漸く堅實なる世界宗教聯盟運動、或は佛耶兩教徒の社會運動に親密なる關係交渉を加へ來れる世界の大勢とも併せ想ひて、此運動が彌助長して活潑に且つ深刻に進展すべきは信じて疑はざる所である。

此海外の新潮に策應し、一方內地の思想生活の混沌に對して佛教聯合會、佛教護國團其他の聯合機關が全力を捧げ、精鋭を盡くして其責務を果すべきは今日である。況んや內に宗教法案、普通選擧の如き刻下の大問題が橫りつゝあるをや、教界協同の如何は今や其死活を決すべき分岐點として嚴かに各宗各宗に臨むで居る。協同の精神協同の實動、是實に教界をして現代に活かしむる唯一の白道である。

協同か將滅亡か、此重大の秋に面し、世界の大勢、國家社會の要求に對して盲目昏蒙、徒らに私憤と私情とに驅られ兒戲の如き空名と小利とに執はれて、大處高處の達觀なく、無執公正の大度なくこの良材相殺し、この資財相蕩盡して奉公協力の精神なきものは此際天下の至愚至兇と稱してよい。『週報』は教團の全力を糾合し、全材能を集中し、一切の資力を擧げて、純ら此內外の大勢の上に、天下を救ひ國家を安じ、一切衆生に奉事して大安樂を與へんとする外、何等の目的を有せぬ。『週報』は之が爲に共に反省し共に慚愧し大慈大智の御名の下に上求下化の大誓願に活きんとす。『週報』は一切衆生の爲に時に一宗すら犧牲として悔

勿論、祖山の關係者は大に內外の狀勢に鑑みて全力を擧げて門主隱退說の如き一宗を混亂せしめ祖山を衰頽せしむる不祥の流言を速に一掃するに吝ならざれ。（大正十三、三）

◇『隣の糂汰（ジンダ）がめ』

（国）ぬかみそ

『隣の糂汰がめ』といふ諺は、日本ばかりでない。西洋にも『隣家の牝羊は自家よりも善く乳を出す』といふのがあるから、人情は何處でも同じと見へる。他宗の形勢が非常に隆盛に見へて、自宗が何時も萎靡、沈滯、不活潑の意氣地なく見へるのも或は此ありふれた心情に基くかも知れぬ。

西本願寺が百二十萬の復興豫算を以て一擧して東京に敎界の覇權を掌握せんとする壯擧に對して、淨土宗の復興の現狀はどうである乎。東本願寺が法嗣の華かな成婚式と共に、社會事業に一時期を劃せんとする意氣の盛なるに比して、一日の長ある吾宗斯業の現狀を何と見る、谷大龍大は論なく曹大も日大も大學認可となつた曉に昔は「宗教大學」てふ抱負を以て各宗を俯瞰した一宗最高學府の權威をどうするであるか。渺たる法相の一宗の管長は今や盧山の東亞佛教大會に大氣焰を呑吐せんとし、新義豐山派の權田老師は七十九の高齡を提げて遠く韓文公の舊蹟潮州に、秘密灌頂の再興に赴く。此等の壯擧に對して吾宗は、由來各宗には濟々の多士を以て推されつゝ、宿老と青年とを通じて元氣の銷磨は、開宗記念てふ大刺戟に遭ひてさへ、一向其振起する所を見ない。是果して敎界に對して面目ありといひ得やうか。

是等が若し『隣の糂汰がめ』の羨望のみとして輕々に看過され得ば甚だ幸福であるが、然し一宗が大局から見て、今や立遲れとなり、時代錯誤となり、落伍者たらんとしつゝあるならば、何とかして奮起激勵の方法を取らねばなるまい。若し本山は自己中心の前に僅々五六千圓の死金を擁して寄生蟹のように大勢に關係なく蟄伏團結し、青年も利己主義を楯に官學や役所の腰辨を光榮として、濟生利民の熱も護法扶宗の血も全く見られず、寺院も布敎師も唯利己のために其寺を美にし其生を安くして、井中の蛙たるに甘せんとするならば、是孟子の所謂、上下交も利を得て國危きもの、宜しく他山の石を以てガンと一つ喰はすは勿論其の麻痺し鈍重となつた神經の動くまで、すり剝がねばなるまい、『隣の糂汰がめ』の連中はまだ幾分か愛宗の熱と面目

ても勿論教界の感謝に價すべしと思ふ。而も此法案は其性質上國民精神及信仰に關する根本條規として重大のものたると共に、歷史的の事情と共に國際上の問題に於ても大に顧慮すべき幾多の重大問題を有し、朞月の間に輕忽之を定めて其効を急ぐが如きは頗る愼戒すべき所ではないか。當局は充分に議者の言論に聽き、輿論のある所を尊重し、民心の要望する所に隨ひて、新時代の進展に鑑み、漫に其立案を固執し、其條文を骨張するが如き執拗の態度に出づるなく、徒らに功を急ぎ遮二無二今議會を通過せしめんとするが如き無謀、且つ專制的の方針を執るなからんことを切望して止まない。吾人と雖も、勿論法文の制定を望むも、而も繁冗不完全にして寧ろ斷片的の舊條命に劣るものの出現を見ることは到底忍び得る所にあらず。もし親切に且つ熱心に誠意ある當局が將來の改定を豫想して、何を措ても至急之を揑ねあげんとするが如きあらば立法の精神と國家の將來に見て甚だ取らざる所、宗教法制定は將來國家の爲であるは論なく、誤りて文部當局の功績の爲め名譽のため學位論文的に法案を制定せんとするが如きあらば、古來功賞を求めんとして偏功を立て、無益の兵を動かした唐代の小人將軍連と大差はあるまいと思ふ。

佛教徒が宗教法案の干渉の甚しきを論じ、監督の過酷なるを痛言するは正理でないでもない。然し彼等は此干渉監督が自ら招致した惡因惡果であることを今日痛切に自覺するがよい。區々たる小寺院の問題すら自ら之を決せず直に宗教局に趨り、其醜劣卑陋なる選擧の爲に、黨爭の爲に事毎に一ツ橋を煩はしたることを幾回なりしやを知らず、この自制なく、羞恥を知らざる淺間しさは自ら求めて自ら願ひて干渉の御繩を頂戴し監督の桎梏を受くる所以ではないか、大正に脇坂寺社殿の出現を見、一ツ橋に『てんの革』の看板がかゝげられて坊主びつくりの將來も恐らく自業自得であらう。佛教徒は信仰と正義の上に徹底して宗教法の批判と修正とを國民に問ふと共に、先づ自覺し慚愧し奮興して健全なる自治能力を發揮するがよい、醜陋なる黨爭、無智無慚愧の本山議員の選擧等の大革新を斷行することが卽ち宗教法案の實行的解決の良法ではないか。(大正十五、八)

◇教學精神の實動を促す

教團に於ける教學の進展と、之に要する協同一致の努力

ひぬ大乘精神を有す。夫の片々なる主義なく理想なく何等信仰に基かざる烏合の團體の如き其名の何者なるにせよ、『週報』に於ては蚊虻にだも價せぬ。（大正十五、七）

◇宗教法案に對して文部當局及佛教徒に云ふ

　宗教法案に對する批判と評論とは、今や教界の各方面に萬丈の波瀾を揚げ來り、其大修正を要求するもの、其審議討究の匆輕忽卒を憂へて、之が延期を熱望するもの、或は法案の杜撰蕪雜を指摘して、之を不必要となし、其斷然たる撤廢を呼號するもの等、特別委員會の進捗と共に、議論百出、益其勢を高むるの觀がある。謂ふに秋風都門に及ばゞ、此等の諸運動は、それ〳〵全國的の輿論を誘致し又各團體の奮起と共に、寺院も信徒も漸次自家頭上の利害に就き明確の觀念を得、其所屬教派に對する熱情の如きも必らず一時に勃發を見るに至るであらう。識らず當局は此形勢を前に、如何の態度に出で、如何なる方針を取らんとする乎。

　吾人は吾が日本の宗教界の現状に就き、特に歴史的に特別事情を有する現在に見て、其實際上に於ける當局法案制定の苦心は、之を諒とせざるにあらず。隨つて此法案に對し、太政官の發令以來最近までの宗教條規の蕪雜なる大成以外、何等見るに足るものなしとする一般の批判の如きも或は止むを得ずとして見るべく、徒らに舊習舊慣に拘束せられて新時代の法文としての雄大自由の價値空零なるの議も亦一時或は之を忍ばざるを得ない。而も宗教に對する干渉監督の煩瑣にして、之に由りて一面宗教の自由なる發達を妨げ、寺社奉行時代の復活を大正の今日に見るが如き滑稽と、之が爲に中央地方の國務の上に非常なる手數と學力とを增して所謂緊縮時代の政務の精神に大分矛盾を藏することは萬人が萬人ながら、異存なき痛評であると思ふ、例せば地方長官の第一次監督の如きも現代の事情に於ては大なる得る所の利便に比して相贖ふに足らざるもの丶存するは、見易き道理である。

　文部當局は佛教聯合會などが法案制定の急務を其綱領の一として折衝したるに應じて、之を滿足せしめ而も大部分に於て聯合會の希望を納めたるものと稱するは、其親切の態度歡迎すべく、而も速に此法案を成立せしめて教界の慶福を增大し紛爭の禍根を一掃せんとする熱心と誠意に至り

斯の如し。斯の如しとせば、大慚奮は勢其所である、大奮起は必らず之なきを得ぬ所である、一宗協同の精神は烈々として火と燃えよ、擧宗全部の教學精神は汪洋として海の如く漲れ。

吾々の憤慨は徒らに宗派根性の勝他我慢からするものではない。吾々の痛言は單に他を羨み自らを賤じて不足不滿常に煩悶する小人女子を學ぶものでない。吾々は少くとも、吾が屬する教團として現代の國家社會に於ける有用の指導機關たらしめんことを欲する他何の意志もない、出來得る丈、其能率を大にし、其活動を敏にし、其實力を充盈せしめて、現代の世道人心に道德的の基礎を與へ眞生活の根本を敎ゆる已外、何等の偏執もない。現在の淨土宗に慨する所以は、其優越の地位の如何にあらずして無益有害の黨弊に沒頭し其教化能力の薄弱貧少なるにある。其社會の稱讃毀貶の如何にあらずして其餘りに私鬪、私利に汲々として實際の活動の空零に近からんとするにある。

吾々は玆に於て一宗教學精神の奮興の前に、區々の小情實小感情を一擲し去りて、擧宗協同の對外運動に、目覺めんことを力說する。外を觀よ。外に觀て紛々たる兒戲、小權勢賣弄のまゝごとの惡戲を遠離し宗祖の同一兒孫たる僧伽の眞生命に生きよと極言する。一宗は又確に國のために、人のために、抑亦一宗そのものゝ將來のために、猛然として一大轉向を要する。懺悔と信行との反省の秋は今や來た。此秋に臨みて、尙惡獸の如く毒蛇の如く、私利私欲小權勢に咆哮し、のたくり廻りつゝあるものは抑も何者ぞ。

此自覺懺悔奮興の一大目標として、教學實動の一大中心として、近く目睫の間に逼れる靜寛院宮五十回令忌は嚴然として一宗に臨み、遠く五年の後に報恩の徹底を約する、光明大師千二百五十年の遠忌は旣にその發令を見た。前者の國家的國民的教育的、事業的に宗門全體教學の大刷新を期する一大好機であると共に、後者は東亞大教の將來其民族の慶福及宗學恢弘のために奮起すべき一大轉回の樞鍵と稱すべきである。吾が教團は此二大目標の下に猛然として協同努力の新生命に躍進しやうではない乎。（大正十五、八）

◇日華佛教徒の親善と光明大師の遠忌

光明大師遠忌は目睫の間に迫り祖山は旣に其準備を開始

は、敎義信仰の實現として必然の責務に屬し如何なる場合に於ても宣傳敎化の上に斷じて之を忘るゝことは許されぬ。然し此の努力は、每に新なる目標を定め、活動の中心を確立することに由りて、最もよく敎團の協同力を新ならしめ、其敎化鑽仰の努力に大轉回を與へることが、有利に且つ力強く實現する。某派が其敎祖の記念祭を機として信徒の倍加運動に成功した如き、某宗が其宗祖の遠忌を捉へて敎學設備に一大刷新を加へた如き其實例殆ど枚擧に遑なしと云ふてよい。我が淨土宗に於ても、夫の記念傳道當時の旺盛な元氣と、烈火と燃えた擧宗一致の傳道精神に顧みて、現時の宗狀を思ふとき、誰とて今昔の感に打たれぬものはなからう。

吾宗社會事業は佛敎各宗の間に伍して一日の長があるのは定評の存する所である其人材自ら特別の地歩を占むるものが少くない。而も大震火災の後に一時に長足の進歩を遂げた、東西本願寺、淺草寺に比較し來る時、實際上果して何等の遜色なしと云ひ得るか。少年敎化事業も、嘗ては帝都に覇權を握り得た歴史を有し乍ら、現在西本願寺あたりの整然たる統制と新鋭の設備に對して、之を恥なしと誇り得るか。東京の工場布敎特殊傳道の大部分は曹洞宗に占有せられ、文壇の敎化は東西本願寺の手に握られ、熱烈な改宗的の民間傳道は日蓮宗の爲す所に一任するの現狀は、一宗として默して忍び得る所なるか、敎育は故黑田老勸學康存の時代、其抱負と實狀とに於て、隱然敎界を俯瞰した慨があつた。而も現時故勸學が社會に貽した學匠人材の齊々たるもの一たび凋落したと假定せよ。其後勁を望むに誰か中心の寂寞を感ぜぬものがあらう。學徒の氣魄精神の沈滯萎靡、統一的宗學精神の銷磨、堅實なる業蹟の發表甚だ貧弱なる、之を谷大龍大に比して如何の感がある。普通敎育事業は今や其整備と成功とに於て、稍敎派間に重きをなして居る然し一宗の文化事業に對する意識精神甚だ薄弱に其事業の發展基礎の確立に資すべき方針浮泛にして言ふに足るべきものがない。若し一二の有力の斯業從事者が、其犧牲的の地位より退去した曉は前途頗る危殆を覺へざるを得ぬ。天台曹洞が中學を昇格せしめ、智山の小宗派を以て尙新中學を興す時に一宗は少く顧慮を拂ふ必要がない乎。海外宣敎の事業に至りては、東西本願寺曹洞日蓮に比して全く慚愧の外はないと云ふてもよい、其一時優勢なりし布哇の如きに至りても、今は第三流に墮在したとの深慨苦言は、遠く太平洋の濤聲に相應するを耳にする。一宗敎界の現狀、

眞に兩君の爲に榮とし且賀する次第である。兩君は固より本宗を代表するもの、願くば大會に臨みて、大に光明遠忌の意義を闡明し、本宗の之に對する努力と計畫とを、宣明せんことを切望する。而して此宣傳に對して、祖山は特に兩君の爲に宣傳に關する出版は勿論其必要の費用を下附せんことを特に悃請する。(大正十五、八)

◇講習會の流弊を改むべし

從來の教學講習會の效果如何、之が宗門教學に貢獻したる實績は何もの乎の議論は多數宗門識者の口に上り、時に或は講習會廢止の極端論さへ耳に達するの狀にあり。予輩は固より一部の論者の如く、一切を功利的打算的に論定し、寧ろ悠久普汎の效策を望むべき性質の講習會を以て、飢者の食、渇者の飲の如く的面に實効を擧ぐるものとせんとする希望は聊か無理なる注文なるを信ず。而も現時の講習會が政府及府縣の講習會が陥りつゝある流弊と轍を同うし形式に固定し、清新の工風を缺き渾てに於て行きつまりを生じつゝあるは、何人と雖否定する能はざる所謂ふに今にして何等かの改善を斷行し、新生面を開拓する道に出でずんば或は怕る夫の講習會無用論が最後の勝利を占むるの日必らず遠からざるべきを。予輩は此故に今期の講習會をして少く共此革新的意義に由りて開かれ從來固定の形式定例の寸法已外に自ら範を官民教派に示し講習會の流弊中躍然として一道の清波を揚げ來らん事を切望して止まず。

講習會は勿論講習員の爲也。然るに府縣は勿論教派の講習は全く講習員を度外視して、官僚式に講師萬能主義を取り、而も時に低能陋識時代に通ぜざる死學者を中心として、毫も講習員の學識手腕を問はざるが若き是講習會が生命を喪失せる一大原因なり、講習會は長官の訓令にあらず管長の告諭にあらず。講習員の自由なる討究精神、鬱勃たる求道堅信の熱烈、卽ち講習會をして眞の講習會たらしむる所以にあらずや。予輩は少くとも此講習員中心の講習會、講習質問自發的自由の討究を樞軸とせる講習會、輪講及信念學説の發表を主腦とせる講習會、討論審議を主とし、講説を從とする講習會が現代の流弊を救ふべき唯一の道なりと信ず、要之、講師中心の講習會より轉じて講習員中心、講習員の學識手腕を尊重し、其自由精神に重點を置くの講習會ならしむること卽弊害救濟の第一步也。今や教育學界に

し、法式傳道に於ても大に調査する所あり。宣傳頌德の資料に關しても、今や盛に其蒐集に努力しつゝある樣に見受ける。祖山の勢威と、富力とを以てして、此宗史上、有意義の遠忌の精神を闡發し、之を擧宗一致の大轉回に向はしむることを得ば、其慶福は決して一宗の爲のみでない。

吾々は固より祖山の準備の完美周到を疑はぬ。其一宗に對する教學上の施設に至りても必ずや範を各宗に示すに足るものがあらう。然し吾々は光明遠忌に別に一つの大なる對外的意義の存する所あるを一言するを許されたい。

東亞佛教大會に瑞を兆して今や日華佛教徒の親善は着々として其輯睦を堅くせんとして居る。日本の佛典研究家、村上、高楠、前田の諸老、荻原、木村、望月、小野等諸匠の業蹟も常に支那學徒の注目を惹きつゝある。此際に當り淨土宗としては此大勢に應用して祖德酬答の用意を怠らざること、最も切要の務ではない乎。

之に對して、第一は大正大學に於て、特別にスコラーシップを設けて光明大師研究の學匠若干名を檢定募集するの擧である。其基金は祖山の下附若くは一宗特志の喜捨を仰ぎたい、このスコラーシップは大師に關する教理史教界史の兩面に亘り本文批評に思想發展に文藝に藝術に所有方面の研究を期するのだ。第二は世界に對する大師著作及コンメンターの解說及紹介である、日本に於ける紛々たる末註悉く之を世界に問ふの價ありとは言はぬ。然し少くとも其研究の種類潮流傾向を示すは最も學界の歡迎すべき所であらう。第三は宗門支那語學生の任命である。少くとも光明忌を記念して、北京廣東は論なし、出來得べくんば四川あたりまで決死の青年僧を送ることだ。日蓮宗の教義が既に着々として支那時文に著譯せられつゝある際支那と最も關係深く、而も最も支那の民心に投ずる光明の教義は日蓮に比して其宣傳の難易言を要せぬ所である。

記者は去年東亞佛教大會に聊か犬馬の勞を取り、其法相の熱誠なる研究家の翹楚と腕を把りて相談するの快を得た、三時學會の名に遍學三藏と同く彌勒信仰に活きつゝある此等の諸居士に對して、千福の群疑論を說きて、瑜伽對淨土の信仰に言及するとき、此等諸居士の肅然として襟を正しくしたのは今尙記憶に殘る、懷感より光明、唯一階の寶殿が今や中華の熱烈な信徒研究家に對し、廣く開かるべき時期が來た。

今秋の東亞佛教大會に於ては久家慈光、大野法道兩君共選にあたり、大に日華佛教親善の楔子を固くせんとする。

系に於ても重大の位置を占め、他面は性宗最高の寶典華嚴經の中心とも崇むべき十地經梵文が、和蘭の一俊才に由りて公刊せられたるは、更に佛教學界に一大慶事を加へたりといふべし。

此俊才は名をヨハンネス、ラーデルと呼ぶ。白耳義の佛教學者、ラ、クレ、プサン教授に師事し、研鑽多年各種の異本を集め終に此至難の校訂を完了し、之を其ドルトル學位の論文として提出し、其優良の成績學位最高の賞譽を荷ひ、今春其公刊を終へて之を學界に頒てり、ドルトルラーデルは此十地經の校訂と研究とに於て、吾が大正大學教授荻原雲來氏の不朽の業績たる、瑜伽論菩薩地梵文の寫本を利用して負ふ所極めて多く、之が爲に甚大の指導と便宜とを得たることは其論文中公に感謝を表する所、特に卷末に於て荻原教授の整理校訂したる前記論本の一部約三十頁を付錄として學人の參照に資したることは日東學界のために頗る意を强うするに足るべく、我が新しき大正大學の爲にも偶然ながら光彩を世界に發揮したる美ありと謂ふべき也。

世界に於ける佛教梵文學の研究は斯の如くして一は學界巨擘の老手、他は新進俊才の努力、自ら相呼應して學壇に貢獻するの趨勢を示しつゝあり。謂ふに此方面に於ては大乘佛教國の誇として、自ら世界學界の重鎭を以て任じ、其指導綜合の覇權を揩ふべき責ある吾國にして、常に一籌を歐州に輸するの觀あるに、學人の大に奮起を要すべき所にあらざる乎、西本願寺に於ては大谷光瑞氏の光壽會の梵文の出版及飜譯漸く基礎を作り、東本願寺の南條老師及其門下の英材泉教授等大谷大學の諸士が苦心精勵、楞伽經原文の公刊を終り、更に手を金光明梵本に染めんとするの快事ありて纔に世界學界に對する面目を支持すると雖、駸々として進むで止まざる斯界の趨勢に對しては更に大に力め大に奮ふ所なくして可ならんや。

大正大學は此新學期を以て堂々たる新教室の建築を終り、自ら新進の鋭氣を示して學界に飛躍せんとする勢を示せり。希くは先づ獨逸の範に倣ひて各學科のゼミナール組織を勵行し、其、第一着手として佛教々學の基礎學たる梵文學及印度學の研究室を設けんことを、世界梵學界に於て今に一方の雄たる荻原教授あり、大正大學の世界的發表として、斯界に誇るべき新進の增田慈良君の如き、亦大に大學を重からしめん、況んや今やレギ教授の下に孜々として研究を開始せんとする文學士高畠寛我君の如きあり、數年の後正大に一大偉力を加へんや必なり。大正大學の當局者よ、願

於ては小學校にありてすらダルトン案自發的教育の風潮方に重きをなし來れり。今の儘にして高等講習會を放置せば卽宗學に於ては卽夫の普通教習所と相距る夫れ幾何ぞ。

講習第二の弊は其遊蕩氣分の根絕にあり、講習會は東京見物にあらず、之を利用して黨人宴會にあらず、眞に嚴肅なる別時の敬虔精神に出でざるべからず。高等講習が夫の共生會、光明會に比し、內容常に貧弱に元氣何時も衰ふるもの源を玆に存す、新戒律主義の信念生活、禁酒禁煙勵行の克己凡そ此の如き警世精神の躍動せざる宗教的集合に果して何の價ありや、予輩は當局及講師講習員が特に此點に就きて奮ふて講習會の流弊を改めんことを切望せざるを得ず。

講目及演習（實地布教）視察に就きても言ふべき少からず、次回更に筆を新にして大方に問ふ所あらん。

（大正十五、八）

◇佛教梵文學の研究と巨匠の精進

佛教聖語學の巨匠として學梵漢に亘り、屢々世界の佛教國を歷訪して、其硏鑽の透徹、學識の深玄、毎に世界學界の尊敬を一身に鍾めつゝある、パリのシルワンレギ教授は、兩三年前再び尼波羅の首府、カートマンドーに入り、王室圖書館に於て圖らずも、佛教學究僅に五十葉に滿たずと雖、大乘佛教特に瑜伽佛教の硏究に於ては、一大彗星の光芒陸離、突如、黑暗の空中に出現したりしに似て學界の驚愕讃嘆、近時殆ど之に集中したるの觀あり。吾國に於ける法相の學壇は論なし、特に最近支那に於て極盛を極むる夫の章大炎を首とし韓哲武、陳鴻寶等の唯識討究の一派は之が爲に多大の刺激を受け、三性八識の學海に雲濤烟浪の一大壯觀を現し、延ては佛教學の全體に一大轉化を與ふるも謂ふに期待するに難からざらんか。レギ教授は此天下無二の珍材に周密の校訂と、鋭利の批判を加へ、去冬パリに於て之を公刊して世界の學壇に問へり。今やレギ教授の友人として、斯界の重鎭たる高楠教授之を我國傳來の學院に廻らし、遠からず其懇切明快の紹介を吾が佛教界に致さんとす。親しくレギ教授の原著を手をにする能はざるものも、高楠教授の紹介を通じて、近く此至珍重寶を賞翫するの便あらん。相宗最高の聖典三十頌及二十頌の刊行に續き、一面法相

の微妙に發したる宗教現象を示す。呑龍上人崇拜も云ふまでもなく亦之と轍を一にす而も上人が仁俠慈惠の篤行人を感ぜしむるとともに其一生の敎化最も密に且近く人世と交涉あるが爲に、其波及の感勢は觀音地藏の理想的超越的の大聖に比して、寧ろ大なりと見たるにあらざるか。現に各宗奉祀の諸佛明王諸天にして上人の崇拜の如く眞純にして且親しみあるもの稀なるを示すと實に因て來る所玆に有するを見るを得ん。

呑龍上人の信仰は既に斯の如くして淨土宗實際勢力の一たり。其民間に於ける根柢亦相應に大なるものを見る。卽ち理論上其是非正邪を論評する前に先づ實際的解決として其信仰の現代的意義を發揮し現代の智識と生活との上に其融合調和を試むるを切要とせずや。此の如きは實に呑龍上人の慈悲善巧に酬ゆる所以にして亦淨土宗が時代指導に於ける至切の急務をなす所なるを信ず。

解決の根本方針としては先づ現代社會問題の焦點とも云ふべき兒童保護の大精神の上に呑龍信仰を高潮するを要す。而して其方策としては一般信徒靡然として四來する「御弟子入」の幼童に對して、從來の敎化已外に更に新に敎育的衞生的の指導方法を案出し、特に兒童及父兄の精神に別に精正なる宗教信念を注入し誘發し開展せしむべき熱烈且細心の宣傳を切要とす。斯の如くして試に十年二十年を經よ呑龍信仰は宗門の上に教界の上に社會國家の上に更に大なる勢力となりて開展するの曉を見ん。

今や新田大光院に於ては學識を以て鳴る鈴木靈眞君新に其職に就き、深川靈巖寺に於ては敎壇の驍將伊藤圓定君、上人の三百年忌を盛にし其祠堂を修したり。兩君の如きは實に本宗革新の材なり。卽平生の所感を書して江湖に問ふ。（大正十五、九）

◇靜寬院宮奉讃法要と東京寺院

靜寬院宮奉讃法要の奉修は、既に一週の間に逼り來れり。增上寺が從來勤修したる大法要は最近一にして足らず。曰く開宗記念、曰く中興國師の報恩記念、其催す所、會毎に盛ならざるにあらず、江湖に與へたる影響も亦相當の効果を認むるを得べしと雖而も今日の如く偉大の反響を與へ、上下內外擧て奉讃の誠意を捧ぐるが如きは、實に未曾有の快事に屬す。

くば世界學潮の現狀に鑑みて雄大の方針と、遠觀遠識の計畫とを以て學界の趨勢に後るゝなく祖國のために、佛教新文化の建設に貢獻せよ。（大正十五、九）

◇呑龍信仰と兒童保護の精神

台密兩宗に於ては觀音、不動、歡喜天等の祀少からず。到る處、福壽安康を求め、成功榮譽を祈るの徒群をなすを見る。曹洞宗に於ても茶吉尼、三尺坊等の奉祠ありて、亦民衆の競ふて之に賽するあり。淨土宗にありては、其宗意固より厭穢欣淨に存するを以て、斯の如き現世祈禱の道場に乏しきは論を要せざる所なりと雖獨り上州太田大光院は自ら一種特異の風格を有し、其群衆參拜の殷賑なる成田と競ふに足り其祝禱祈願の隆昌、また淺草豐川と趣を同うするもの有す。大光院開祖然譽呑龍上人曠世の大德偉行、遺澤を現代に貽すの盛たる眞に驚嘆に價すべく、慈悲善巧の今日に及ぼすの影響、年を逐ふて益々深きを加ふるの觀あるが若きも亦大正時代に於ける驚異の一たらずんばあらず。

呑龍上人の崇拜は獨り其攝化示寂の遺蹟に止まらず。埼玉群馬等の諸縣苟くも其影像を安ずるの寺院は、寺門頓に繁榮を見て信徒の群參するを常とし、東京に於ても其奉安の祠堂には每に寺運の衰勢を挽回するの實あり。關東全部を通じて上人の信仰は今や俗信中最も勢力あるものゝ一に位し、其信奉者の數も單に淨土宗に局らず各宗を通じて數十萬の多數に上るの實狀を見る。上人の信仰が夫の教化醇正の本旨に觀て、果して之を許容し得るや如何、現代の進步せる文化の中に斯の如き信仰が成立し得るや如何。迷信掃蕩の議論教育家經世家等の間に喧しき今日堂々として猶其門戶を將來に張り得るや如何。凡そ斯の如き議論は且く之を他日に讓り、之が正義なるにせよ、不正なるにせよ、迷信なるにせよ、正信なるにせよ、上人の信仰が現に淨土宗の一大勢力として民衆の間に牢强の根幹を有するは實に爭ふべからざるの事實として認むべきにあらずや。

父母の其子を愛するや、水火尙辭せず、刀槍敢て畏れず、其至情何ものも能く比するものなし。宗教に於ては、此至情の機微に乘じて攝化の妙用を施すもの、東西古今其例に乏しからず。古代印度に於ける訶梨帝母（ハリテイ）卽鬼子母神の崇拜の如き支那本邦の子育地藏及觀音の如き天主教會に於ける聖母マリヤ及び兒童特殊の恩聖の信仰の如き、皆この人情

院は特に此鴻恩に負ふ所重しといふべし、寺院が今葬儀法要の勤修、舊例を追ふて衰へず、寺門の維持經營之に由りて安固なるもの、實に宮の遺澤に出づ、苟くも忘恩の業畜たらざる已上、朝に暮に、其恩德に感謝して心香を獻すべきは何ぞ言を要せん。卽東京寺院が率先し全力を奮つて今回の大法要をして眞に天下の期待に乖かざるに至らしむるこそ、眞に謝德報恩の一大責任なりと云ふべけれ。

東京寺院は旣に之が爲に至誠を盡して淨財の獻備に力め其額一萬に近からんとすといふ、震災の後、復興の途上眞に力めたりといふべし。希くは更に此眞情を大いに此熾烈の赤誠に一層の白熱を加へて、各組各部心を一にし力を協せて三日の大法要中競ふて奉贊の會坐に列し都門五百の寺院回を重ね席を再びして隨喜の至誠を表し嚴儀を盛にし眞に國民的祭典大東京市民報恩の大法要が內外環視の中に其名に負かざる一大模範的法要たるに至らんことを眞に至禱至祝に堪えざるなり。

一品內親王の御葬儀は當時の增上寺をして九地の下より九地の上に救ひたり。半世紀の今日、此大法要に依りて沈滯萎靡教運否塞の緣山は今や一躍して現代敎化に一大活動を試みんとする曙光を認むるに至れり。諸大本山の法主臺下各府縣の耆宿機運に應じ奮ふて報恩興宗の力を致さんとす。東京寺院諸君夫奮起する所なくして可ならんや。

（大正十五、九）

自家坊主頭の蠅を追へ

從軍僧の派遣、慰問品の募集、戰勝の御祈禱、忠死者の追弔、曰く何曰く何、此等は何れかと云はゞ寧ろ紋切形のことながら、兎に角、佛敎各宗は現在其相應に奉公の至誠に勵みつゝある樣なり。外見上實以て御役目御苦勞と申すの外はなけれど、扨々其實狀を見れば存外の事にて、實際今の所各宗は內部の統一整理が要中の要となり居り、此方如何程國家社會の爲か知れざる也。露骨に申さば各宗派が恤兵の慰問のと躁ぎ廻り、一角の忠義顏して御奉公振を見するよりも先々自家坊主頭の蠅を追ひてせめては苦々しき紛擾沙汰を此際奇麗に片附けたきもの也。喧嘩は何れの場處にも近處迷惑にて醜態此上もなきもの乍ら、特に大章魚小章魚の友食とありては其醜其穢眞に目も當てられしものにあらず。（大正三、十）

是實に宮の威德相俟ち、現代女子敎育界の適切なる要求に應ずる女學界の新女神新理想として遺德の現代に光被したるに依れり。故に其關する所は國民的敎化的に甚大に且廣く、一般敎化及敎育界に亘りて、影響極めて大なるが爲に、奉讃の聲洋々天下に充溢し、法會の盛大を豫想せしむる、固より其所なりといふべし。

此國民的の大祭典に際し、皇族の獻供、內閣總理大官縉紳の參拜旣に定まり、貴族名流の奉賛後援日に益勢を高め、都門三萬の女學生は衣香相接して靈廟に獻香し、各區の區長名譽職は奮ふて市民に參拜を勸誘し、總本山の特派四大本山法主親修の法要儀式次第全く確定し、新に完成したる緣山の大殿に於て未曾有の盛儀を展観せんとす。斯の如くして今や內外の視聽は全く三緣山頭に集中するに至れり。同山の上下は、今や之が爲に必ずや周到愼重の準備を怠らざるべく、報恩の赤誠、嘆德の至情、嚴肅を盡くし莊重を極めて、江湖の渴仰に答へ、內外の期待に乖くなく以て風敎振作信念興起の一大功績を擧げんこと、吾等が衷心切望に堪へざる所なり。

而も此大法要の奉修は、獨り緣山上下の能くする所にあらず。靜寛院宮と御緣故最も深く、其恩澤を被むる最も直

接なる東京寺院の援助協力は特に其有終の美を濟す最大の增上緣たるを信ぜずんばあらず。

東京寺院は大東京住民の代表として、大江戸を兵火の間に救濟し今日の盛を見るに至らしめし、最大恩聖が實に吾宗の信仰に由り吾が緣山の大檀越にいませしことの誇りと光榮との觀念を一層强烈にするを要す。昔は宗門の大史筆攝門上人、日蓮宗徒が紀州の養珠院夫人、加藤淸正公等の外護恩靈を崇拜して極力遺德宣傳に力むるに比し宗徒が動とすれば其外護の大勳功者に冷淡なるを憤慨したることありき。東京寺院は今や心を一にして奉賛に力む。斯の如きの慷慨は今や全く無用たるが如きも、而も東京寺院は今や一層の渴仰を奮起して、檀徒を敎へ、一段の努力を以て本宗婦人の本尊として宮の盛德を戶々に傳へ、今回の法要を盛なる上に盛らしむるは實に其務にあらざるか。

靜寛院宮は排佛毀釋の當時に當りて嚴然として佛式の送終の儀を遺命し玉へり。當時の緣山は事實上之が爲に復活したり。佛敎典禮の今日ある亦之に負ふ所甚大なるや論なし。高楠博士が宮を佛法再興、護法の女神として讃美至らざるなき實に確論と云ふべし。此興敎護法の大恩は、各宗悉く荷負すべきものと雖、增上寺門末としての東京本宗寺

感懷隨筆

東京府市に於ける

寺院墓地問題の現在

尊先崇祖は吾國德教の根柢であつて、苟も之れを缺くときは、吾が特色ある文化、光輝ある國體も、或は危殆に瀕するの虞なきを保することも出來まいと、存じまする、而して此尊先崇祖の基礎として、墳墓を大切にすることは、固より論を待たない所で、ありますも、即ち祖先墳墓の忌日、命日、の月參、年參等の美風が、どの位吾が國の特色ある國民性を培養したかは、寧ろ玆に改めて言ふの必要を認めますまい。

然るに吾國の都市行政に關する方面に於ては、單に都會の物質上の整美のために、此重大なる道德的根柢たる、墳墓を邪魔物扱にし、之を郊外に驅逐せんとするの、短見淺識の嫌も往々にして之れありました、將又墓地の管理に任ずる方面に於ても、亦墳墓を荒廢のまゝに一任し、其衛生的方面若くは崇敎に副ふべき、美觀風致に意を用ひざる向も、少からざりし爲めに、益々墓地驅逐の輿論を助長し來つた樣に考へられます、是れ實に吾國風敎のために慨嘆すべき至と言はざるを得ない次第であります、然し都市の計畫や整理から見ますと、墓地移轉と言ふことも、都市人口の稠密に伴ひ、勢止む可からざることゝなりますと、どうしても、一面に於ける都人の祖靈參拜の便宜、言を換ゆると、道德上宗敎上の必要との、矛盾が出來まして、何とかして之を調和せねばならない事と相成ます、其處で理想的とまで行かなくとも、夫の震災直後に於ける、佛敎護國團有志の建言及び奔走、區劃整理委員として中山理賢老師等の盡力に由り實現したる特設墓地設定の如きは先づ此矛盾を調和し得て寺院の安全を計ると共に市としての經營上には多大の利益を與へたものといつてよいと存じます。

拙者は固より微力取るに足らざるもので、ありまして、大方諸大德に申上るに餘りに僭越であるとは、平素慚愧して居りますが、夫の特設墓地の制定已來初めは東本願寺の熱心な信徒として、敎界の宿老田中舍身先生等の御援助を蒙り事業を起したる、故熊澤今太郎氏の下に愚直なる誠實を生命として、其事業を援助し、次で獨立して業務に從ひ、實に壹百有餘に上り、何れも御用命寺院諸大德の御滿足なる御賛辭を得て今日に至り聊か以て佛祖に對する御報恩の一分として、感銘致し居る次第であります。

然るに震災地區御寺院の特設墓地の大般も漸く全部の完成を見て一段落を劃すると共に、來る昭和九年を以て、整理の時期となるべき、免災地の御寺院方の墓地は今や正に整理の實行も漸く逼り來りたる際之れに罹災地寺院の特設墓地設定の規定を應用する事は寺院としても、我府市としても、大東京市の出現と共に、好都合のことであつて、急速に墓地問題を解決すべき唯一の良策であります。故に或は其の實現を見るとしても蓋し不可能にあらざるは識者の目下思考しつゝある所であります。否、之れは、積極的に其促進を期することが寺院の爲めに萬年の大策と信じまする、現に拙者が終始直接工事に當りたる小石川戸崎町念速寺の墓地改修は免災地區寺院に於ける最初の特設墓地であつて、此一例は恐く全部免災地區の寺院にも均霑すべきものと見ても差支ないと考へられます、其處で玆に御參考として先づ此の念速寺樣の一例を擧げ拙者事業が愚直忠誠、唯、大法、興隆、佛祖、報恩、の一念に存することを證明せんが爲に、此免災地破天荒の特設墓地工事寫眞、念速寺御住職秀嶺上人の御感謝狀、其他を發表することを御許を願ひ以て大方諸大德の御援助を仰ぐ次第であります。

(昭和七、八、廿五、有終會の爲めに作文)

感懐隨筆

感懐に同じき消息は特に此中に收めたるものあり。

◇壺中乾坤

「祇園精舎の鐘の音は諸行無常と響くなり」と書き出したる源平盛衰記の絶叫は、此書を一貫した深酷な佛教的世相の觀察である。生者必滅の理り、驕るもの久しからず、剛きものも終には亡ぶる、悲しく而も眞實の法則を美しき畫卷物として展開した此傑作は、單に源平兩家の一榮一枯の記録に止まらず、また吾が國民が佛教の無常觀を代表したるものとも見られよう。佛教思想が國民に與へた種々の感化の中で、無常觀は其の最も強く、且つ深いものゝ一つである。かくて通途佛教といへば無常、無常といへば必ず凋落、衰滅、死亡、鳥邊野の煙は昔、今は青山や染井の墓地に、免れ難き苦しき人間最後の運命を痛切に印象する語となつた。然し諸行無常の眞理はもつと廣い。無常の悲觀は唯だ楯の一面である。

× × ×

人世には定相なく、萬物は變化を免れない。定相がないから滅亡も死もあるが、之と共に發生も成育も出來る。變化流轉の法則嚴として存するを以て進歩あり、改造あり向上がある。大震火災は勿論大なる無常であつたが、着々として復興する現在の努力も亦無常であるからである。木枯の霜風に萬木蕭條として凋落する年の終りは、無常の大踏歩の片足であるが、梅花東風に笑ふ來らむ春は、直に此殘の片足であることを知らねばならぬ。葬式も火葬場も七五三の宮詣も結婚も、成功も總て是れ無常大海の一波瀾に過ぎぬ。無常觀に泣き、之がために厭世の涙に暮らす人は、亦無常のために奮起し、之がための精進努力することのあるを忘れてはならない。樂しき苦しきも、此變化流轉の無常を單に感情を以て處する時に凡人の世界がある。之を理智的に、其必然を觀照するときに科學があり哲學がある。更に之を良心と意志とに訴へて、其當爲を定め來たると、道德が生じ倫理がある。而して此生滅變化の世相の中に常

×　×　×

子女が疾病に惱むとき、その父母は可憐な患者以上に惱む。天下の憂に先だちて憂へ、國家の艱難を自家のものとして荷ひ、社會の病症を已れの惱として、その匡濟救濟に身心を碎くものは是卽仁人義士の誠である。大士維摩詰曰く「衆生病めるが故に吾病みぬ、衆生病治するとき吾病なし、菩薩の病は大慈悲より起る」と、社會の罪惡缺陷は常に止むことなく、衆生の苦難痛惱は日に益々甚だしいかくて聖者の病は長へに癒へない。

衆生の病を吾病とし、社會の苦惱に堪へ難き痛を覺ゆるとき「下化衆生」の聖者の心を心とした大慈悲の修行が進む、然し之と共に吾々は、「吾病むが故に衆生病む」といふ反省慚愧に猛然として自覺することが必要ではないか。吾一人の無自覺、罪惡、過失、懈怠がどの位社會を毒し之を累して居るか分らない。要するに吾一人の未成佛は實に衆生を誤つて居るのである。玆に上求菩提の大精進が火と燃ゆる。

×　×　×

惡風暴雨は天も碎け地も覆さんばかり、奔雷轟き疾電閃き、山河震動し林樹悲號して凄慘恐怖の限を盡した。惡魔の大軍が一たび潰散した後は、天地は復びもとの常暗に歸して一切衆生の自覺なきことを表する如く、群生は沈々として長夜の眠を貪つて居つた。

この大嵐の後、今や東天漸く曉を告げんとするとき、見よ、天際に煌々として明星ブッシャが嚴かに輝き出した。地に於ける大なる光が今や直に出現するを豫言するが如く。

果然として天地の何物も及ぶ能はざる大なる光明が輝き亘つた。是實に人類自覺の光であつた。釋迦族の王子は今や佛陀となつた。

人類が自然の威力に跪いて其救護を仰いたベーダの自然神敎は全く玆に滅し去つた。人性最高尊の大自在力を忘れて、創造の神、超人格の偶像吉凶禍福を始め所有宇宙を攝理する天界の暴君に甘じて奴隷となつて居た人間は玆に全く人性自由の尊嚴を見出した。佛陀の自覺は實に人間最大最高の凱歌であつた。

佛陀以前は人は神の下僕であつた。佛陀一たび出でて神は反對に人の爲に仕ゆべきものとなつた。如來の前には理智的創造攝理の神梵天も、情意的人格の神帝釋も皆白拂を執り寶座を拂ふ侍者に過ぎなくなつた。

住永遠の光明、長しへに輝き渡るを仰ぎ見るとき一起一伏、一高一低の千浪萬波は、必竟眞如海中の顯現に過ぎざるを體得し得て、無常卽常の至理を悟り來たるとき、玆に卽ち宗教がある。

×　×　×

哲人邵康節が天津感事の詩に曰く

水は流れてよし急なるも境は常に靜かに花は落ちて頻なりと雖も意は自ら閑なり。

忙中閑、閑處忙、動中に靜を見、靜裡に動を藏する工夫は、人間處世の祕訣であり、また修養の最も力むべき所である。然し動靜兩對して、全然差異した兩極の間に、調和を求むるに努力することは、妥協的にも見え、相互の制限とも考へられて、徹底した考へとは云へない。また實際此努力は可成りの苦痛でもある。

玆に於て動中靜、靜中動の修養は、一轉して動卽靜、靜卽動の徹底境にまで到達せねばならぬ。忙中閑、閑處忙の修養の精錬は、終に動靜兩極の不一不二、表裏隱現の別に過ぎぬことを悟了するに至り動靜一如の妙境に入るのである。

×　×　×

動中靜、靜中動の修養工夫は、通途の倫理、道德でもある程度までは出來よう。而し兩極一如の妙境を體得して、全生活の上に別樣の天地を築き、新光明を仰がんとするには、一歩進みて、宗教の領分に踏み入ることを必要とする。

宗教の要旨は、有限の生命の中に無限の光と力とを發見し、生滅轉變の世界の背景として、永遠絕對の基礎を確立するに存する。

人生の妙味と眞實の活動は斯くの如くして生じ、一切の矛盾を除き去つた平和と、調和の新生活はこの曉に顯現する。

×　×　×

宗教の領分に踏み入つて、何事に當つても無碍自在の力用を發揮し、如何なる場合に處しても、氣宇は王の如く綽々として餘裕あり思慮ある行動に出づることが出來る。電擊雷奔の間に、永劫の蒼空長しへに廣く、湛然不變の眞如の大海から、雲濤煙浪の大活機を躍動し出すのである。

動靜一如の極致は、人生動靜の兩邊である死生一體の徹底に迄進まずば止まぬ。玆に一切の哲學と、宗教の終點が嚴かに存する。人間としての眞實の面目と活動は、實は此處から生じ來るのである。

常心直に是大道だ。萬有の姿其儘に眞理の光を認めて、眞實生活に精進するとき共處に菩薩の修行がある。白玉蟾の詩に曰く。

花紅に柳綠なるは菩提の相なり、燕語り鶯啼くは般若の象ぞ。

更に去りて補陀山の上に覓めんか、烟濤雲浪は天風に捲くのみ。

政治も經濟も國防も敎育も一切の經綸、總ての運營、大乘の正信の上に發するものは無上大覺の光たらざるはない。治政産業、悉く是佛法にして、日常の事務生活の上に光明輝き天香薫ずるのだ。

勞働は固より此眞義から見て勿論神聖だ。資本もこの平等智慧の光に照され來るとき亦神聖たり得よう。眞言の曼陀羅では凶器の劍戟刀鎗剛杵などが、諸佛如來を代表した、三摩耶形として拜まれる。現代ではシヤベルや鶴嘴、帳簿や電話器などが、大曼陀羅の諸佛のシムボルであらねばならぬ。

× × ×

一切の衆生、觀ること自己の若し、四海は同胞、人類を離れて我なく、社會を別にしては自己は存在しない。實をいふと我卽ち衆生、社會卽ち自己である。平等の大慈悲、普濟利他の精神は、玆に於て人類最高の道德として、自然に太陽と共に輝く。佛陀は實に此最大最高の仁愛を體現されたものだ。諸佛如來は大慈悲を以て體とすといふのはそれだ。この「極愛一子」の慈悲、吾々の同胞に對してその愛兒に於けると同じき純な且つ深い愛を捧ぐることが吾々お互に心がけてなくてはならない。

吾々は共に如來の本質を有し、同じく大覺大自由の性格に生きる。故に吾々が互に敬し互に尊ぶべきは言を待たない。「一切の男子は皆是父。一切の女人は皆是母なり」といふのはこの相互尊重恭敬の精神を遺憾なく說破したものである。吾らは子としての愛と共に父母としての敬を同胞に致さねばならぬ、否未來の佛陀として互に合掌禮拜すべきであらう。法華經に說かれた常不輕菩薩の淨行は此大道の模範を長へに吾々に示す。

× × ×

共生共存が人類の本性である已上、共助共勵は隨つて社會必然の責務であり、而して共榮共樂はその目的である。斯の如きが故に苟も人を利し世を益すべき一切の善行美事

×　×　×

釋尊の成道は一切衆生の成道であつた。二千五百年の昔、菩提樹下に發した佛陀大覺の光明は、實にその當時から現代に亘り、更に未來の永劫を盡くして、吾々人類の大覺を代表するものであつた。

佛陀の成道に由りて、吾々は本質的に佛陀同等の大覺の尊を具有することが本來の眞理として、初めて明了になつた。吾々は最高最完最尊の人性として、平等に佛性ある身であることを、萬古の眞理であることを其時以來仰ぎ得ることとなつた。聞け「我は是已に成りたる佛にして、汝等は當に成るべき佛なり」てふ大獅子吼は今尙嚴かに響き渡つて居るではないか。人間は勿論何人と雖も平等だ否神とも平等だ。この佛性同等の自覺は人類ありて已來の、最も高く且つ大なる大自覺でなくて何であらう。最も深く且つ盡きぬ歡喜でなくて何であらう。この大自覺の新たに輝きたる日、この大歡喜が初めて世界に勝利を祝ひたる日、この人類が最高最大の自由を宣明したる日こそ即ち今日の「さとりの日」である。此日に當りて人間の勝利と誇りに讃美の聲を惜むものは實に自ら侮り自ら輕んずるものであらう。仰げば臘八の霜空に明星の光は覺めよと許り、尙下界を視つゝある。大覺その姿そのまゝの太陽は堂々として今に光明遍照の慈容に萬古不變の眞理を輝かして居る。

×　×　×

「己の欲せざる所は人に施す勿れ」とは孔夫子の敎「己の欲する如く他にも之を行へ」とは基督の說かれた所である。人或は兩者を比較して一を白銀律として他を黃金律となすも、畢竟は表裏止作の別に過ぎず。世を導き人を善くする上に於て何れにも自ら共適切の場合があらう。固より甲乙優劣など定むべきものではない。佛陀はこの二つを合せて「人として生を愛せざるはなし、己を以て喩とせよ」と諭さる。論語と馬太傳と法句經と、三聖の敎は時と處と隔てゝ自ら符節を合す樣だ。之を三幅對として新年の床を飾つたら、鶴龜松竹梅などの動植物で祝ふよりも遙かに理想的道德的で立派なことであらう。

法句經の聖句は蓋し大藏經海の一滴で人に對する己が如きは大乘諸經の通說。どの經文を開けても直に之に出逢ふ、手近い大無量壽經にも「一切衆生視ること自己の如し」と說かれてある。佛陀の敎は實に之に過ぎぬのだ。

×　×　×

道は邇きにある、日常生活の中に自ら大乘の行あり。平

として懇ろに勸說してある、其意義はもつと廣くもつと大きく吾々が現在の生活に於て最も適切を極めたものである。

吾々の日常の行爲、資生產業、如何なる職業にても正しき信念の下に行はるゝとき悉く是成佛大覺の原因たらぬものはない。何れも皆極樂世界を完成すべき莊嚴佛國の大行として價貴きものだ。吾々は之が爲假令如何なる微事小件と雖も、之に誠を凝すとき其一々は悉く國家人類の幸福に貢獻し得るものであることを痛切に感ずるに至る。門前の塵を拂ひ、階下の草を除くも皆此心がけでする時立派な菩薩行である。況んや正直の勞働、工場商店の經營、官衙會社の執務の如きに於てをや。此等は決して單に自己生活の爲のみでない、實は同胞人類の幸福のためなのだ。未來の子々孫々の爲一層正義幸福の社會を築き上ぐる準備であるのだ。かくて吾々の生活行爲の一つ一つを高遠の理想にふり向け、其各が至善大覺の究竟を成就すべき材料資糧であることを強く自覺し實行することが卽ち回向の眞意義である。

× × ×

「泰山は土壤を讓らず故に大なり、巨海は細流を擇ばす故に深し」

といふが、吾々の行爲の半沙一塵、微滴細涓は實に妙覺の須彌山を築き、眞如の大智海を爲すものとして一々皆貴きものだ。否、此一つが缺くる時、至善は完全ならず、圓妙具足せぬことにもなる。かくて晴耕雨讀、沐雨櫛風、悉是天下國家に繫り、人生宇宙に關するものなるを知るとき、「回向」の大道が自ら菩薩大人の必ず履むべきものなると了するであらう。而して自己の一善は他の萬善を發起せしめ、自作の微德は萬人の大德を激作し助長し完成して共に力めて更に大に更に完き善德に躍進し向上する熱烈の希望に燃え、眞劍の祈願に活くるのが卽ち回向の眞意義である。

回向はかくて三世を通じ十方に亘る廣大の祈りである。亡き人の冥福を祈るも此意義から見て極めて適切に貴いものだ「願はくは此功德を以て、平等に一切を施し、我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん」といふ佛教各宗を通じた回向の聖句は此意義を要約したものだ。淨土宗や本願寺諸派などでは此聖句の後半部を「同じく菩提心を發して安樂國に往生せん」と宗義上から唱へるが自覺覺他共存共榮の大圓覺の誓願に動き、自他平等の大安樂の理想に活くる回向の

は、吾々として互に推稱し共に援助して其完成に力むべきは勿論である。この他人が善を行ひ美を濟するを已れが事として溫かき心を以て共鳴し、その作美修德を、吾身にあて、衷心の歡喜を表して助力に吝ならぬ淨行を佛敎に於て之を「隨喜」といふ。大慈悲と恭敬尊重、卽ち共愛共敬はこの隨喜で極めて適切な實際的のものとなつて來る。夫の共助共勵もこの隨喜の香を得て、人間味の美しき花がさく。大乘諸經は之が爲に「隨喜」を力說し之を菩薩必修の行法として激勵して居る、寶積經や華嚴經などは特に之を說くこと丁寧親切を極める。三世十方凡聖一切の善根功德は悉く之に隨喜せよとは此等諸經の敎ゆる所である。慈悲（マイトラ、カルナ）より出づる同情、アヌカムパ（共に悲しむ）と對して隨喜アヌモーダナの一語は佛敎聖典の特色あるものの一つである。

× × ×

吾々の常情として他人の悲しみに同情し、その困難苦痛に惻隱の心が動くことは、寧ろ自然で且容易であるが他人の善行美事、幸福成効に對しては、兎角嫉妬、憎疾の反感を伴ひ勝で、之に冷笑惡罵を加ふることさへ少くない。リヒテルが「人の悲を悲しむは凡人と雖も之をよくす、その喜を喜ぶは天使にあらざれば能はず」といふたのは吾々の弱點を痛切に穿つたものだ。隨喜の大雲は憍慢我慾に煙むる利已主義の邪熱や、自他分別に燃ゆる偏見我執の毒炎に、公正と寬宏との甘雨を注ぎて火人の行くべき道を最も適切に敎ゆる、人と人との間に互に其美を濟す歡喜が湧き、階級と階級に各の長處美點を發揮して相助け相勵まし共に革新する快樂が漲り、國と國との關係として、各其獨特の歷史と文化とを進展せしめて有無相通じ、彼此相補ふ欣悅が洋々として起るとき、玆に人道と平和の光が完全に輝くことになる。階級と宗敎と人種との偏見我執の堅氷はかくて隨喜の春陽の前に全く消融し去らう「基督の文化にあらざるものは善美なりと雖も之を破壞せよ」と拳匪事件の直後ワルデルゼー元帥に勅命した黃禍論の神カイザーの言は彼が凋落と共に熱病の囈語として現代から葬り去られねばなるまい。

× × ×

通俗に回向といへば、亡き人に追悼の誠意を運び其冥福のため法事供養などを營むことになつて居る。これも無論「回向」の一分であるが大乘諸聖典に、吾々が必修の淨行

人生の歸趨とに思ひを凝らし考へを潛めて練り鍛へに鍛へ、吠陀より祈禱書次でウパニシャツドまで幾百篇の聖典を殘して、漸くにして直觀證悟し得たものは卽ち自我と大靈との一致、所謂、梵我一體觀であつた。而して此等聖典の奧妙深玄な千言萬語は要するに「之を知見しぬ。之と合一しぬ。卽自なりき」の三句に盡きる。而して佛敎教義も大體またこれで說明することが出來る。卽始覺、成覺、本覺の三覺一致の敎へがすんだ。

吾等が一朝佛陀と平等なりと大覺の慧眼始めて開くとき、が卽ち吾等の成佛である。而して見よ、吾等は本來既に如來であつたのだ、如來であるのだ。

（印度、古聖書の三句は、ヅージャサネイ書、三十一、一二に出づ、ドイセン氏「一般哲學史」、二九〇を見よ）

× × ×

知恩院の行誡上人は近世佛門の一大偉人であつた。上人の學德行解は一世を風靡し、當時の各宗門に重きをなしたのみならず、今に至るも其流風遺韻を渴仰するものも尙多い、飄逸脫俗の遺墨は斷簡零篇と雖、世競ふて珍重する。

上人の和歌は自ら一種の風格を具へ百世に傳ふべきもの二三に留まらぬ。「いたづらに枕を照らす燈火も思へば人の油なりけり」の一首がかしこくも明治大帝の御感に上つた佳話も殘つて居る。名篇佳什の人口に膾炙するものも可成りにあるが、あまりの人の知らぬ歲晚の歌を私は恐らくあらゆる年の暮を詠じた詩歌の中で最も雄麗莊嚴を極めたものとして常に愛吟する——「一年は名のみなりけり大御代を照す日影のはてしなければ」——

永遠無限の大慈光の下に社會國家に奉公の誠を盡す佛徒として、千代に八千代に金甌の無缺を讚頌する國民として、信仰の上からも道德の上からも、これほど立派な歲晚の歌は稀である。

× × ×

時には大臣大將ともなり、時には富豪碩學ともなり、壯士美人より少年少女まで、所有ゆる階級に身を現はし、緣に應じ機に隨ひて一切の衆生を濟度するのが、觀世音菩薩の大慈悲である。之を普門示現の妙力といふ、卽一切の時、一切の處、如何なる場合にも事情にも必要に應じ宜きに隨ひて身を現し敎化利益の妙用を施す意義である。法華經普門品に說く三十三身の說法がそれだ。此處で三十三身といふのは唯其著しき一例で實は大慈の現身で無量無邊である。

峻嚴なる法律で人民を治罰する專制君主、五熱に身をあ

眞意義に於ては毫も變りはない。

× × ×

大乘の修行は實に廣大で、且つ高遠の理想に立つ。卽ち無邊の衆生は之を濟度し、無量の法門は之を學得し、無盡の罪惡煩惱は之を斷盡し、而して無上の大覺を證得せんとするのだ。之を成就する爲に或は四攝法とか、六度とか種々の行を說き開いて、八萬四千といふ程の善德が敎へられて居るのだ。然しこの高遠廣大の行は、實に手近い三つの心を必要とするのだ。卽ち直心、深心、大乘心がそれだ。語を換ると至誠と信仰と奉公との三點の上に、萬善萬德のピラミツトが立つのである。

至誠は天地神明に通じ、信仰は大山をも動かし、巨海をも盡す。この二つを合せて、人に對し世に處し國に盡し世界に及ぼす時、卽ち奉公の大行となる。

三つの心は何れの時、何れの場所に於ても寸時も缺くべからざるものだ。特に重大の時に直面し、至切至大の場合に臨む際、最も必要だ。生命そのものは、直にこの三つであらねばならぬ。

× × ×

人はパンのみで生活し得ぬことは勿論眞理であらう。然

し人はパンなくては生活し得ぬ現實の更に確實な苦しい眞理を何としよう。

實際の所現在は人は人としてパンを取り得ぬものも少くない。地獄の毒炎に燃され、畜生の慘害にもがき、餓鬼の極苦に壓せられつゝ貪瞋痴の罪の食に悲き生を續くるものさへ其處此處に徘徊するではないか、否、今やパンは阿修羅鬪爭の諸物として人と人との間、階級と階級との前に血腥き爭奪戰を冷然として眺むる惡魔の樣に橫たはつて居るとも見える。

人はパンなくて生活し得ぬといふ敎は結局人をして人らしきパンを取らしむる敎に過ぎぬ。靈と肉、物質と精神の相離れざる救濟、卽財法二施具足の眞生活の上に大乘の道が存する。

かくてパンは單に人の正しき食物のみで終らない。その物が直に如來であり、濟行であるに至らねば止まぬ。物質そのものに智悲の光が輝き生活そのまゝ佛道を體現するに至りて玆に眞の道がある。卽ち人はパンのみにて眞に活くるに至りて徹底するのである。

× × ×

印度の詩人哲人が幾百年の久しきに亘り、宇宙の大本と

も大に最も力あり且つ最歡喜に盈てる新春を迎ふるを喜ばむ。

◇天上の薔薇

南無阿彌陀佛
（明治四五、一、一、淨土教報）

詩聖フリードリヒ、フォン、シルレルが『婦人の威嚴（ヴユレデ・デル・フラウエン）』を歌ふた名吟の中に、

婦人に榮譽あれ！
彼等は地上の生命に天上の薇薔を挿みまた幸福與ふる
愛の紐をも結ぶ、
優雅に衣被れる姿、神聖の織手もて、
美しき久遠の情の火をば
打守りつゝ熾然たらしむ！

何が天上の薇薔であらう、荒凉寂寞なる人世の殺風景を安慰する美しき慈善の花がそれではないか。

愛の紐とは何、不幸と苦惱に沈む人々に投げかくる救濟の綱が卽ちこれだ、婦人は幸福平和の家庭に勿論なくてはならぬ花である、されど雨風狂ふ荒凉の世に法句經の聖語の如く逆風に薰じて床しき香を放つ、父母に夫にはた子女にどんなに優しく愛の紐が婦人から結ばれるだらう、この紐なくば家庭は要なき扇の様に離散する、然しこの優しい紐は社會の苦惱に男子の及ばぬ强い力を持つ、優雅の姿、神聖の手、觀世音菩薩の様な、聖母マリアの様な、女の胸には常に慈惠の情が燃へて居る。

古今東西婦人の慈善事業に盡力した跡の多いのは玆に贅するまでもない。これが眞の婦人の威嚴であらう、この威嚴は近時、瓜生岩子女史に最よく鮮に現はれた。

飛行機が珍らしくなくなり、自動車の數が殖えて來れば來る程、吾國は婦人の溫い手と尊き感情を要求する聲が下層に聞へ出した、滿目荒凉たる霜枯が到る處見へて來た、酷薄殘忍の風が何處にも吹きまわす、此時是非天上の薔薇が咲いて呉れねばなるまい、愛の紐がなくては叶ふまい、日本は今や第二、第三の瓜生女史を要する時になつた、岩子刀自の信仰した觀音樣の様な婦人、社會病惱の看護婦や慈母が切實に必要になつた。

西隣のアメリカは兎に角幸だ、彼處には今盛に天上の薔薇が淸香を吐いて居る、アメリカの婦人は狂氣じみた女權

ぶり岩石に身ら投ずる苦行の大外道、天女あり、香水を賣る大商人航海に熟練な老船長、或は一笑百媚の春を賣る妖姬、此等が皆悉く大乘の妙理を敎へ菩薩の大行を示す指導者であつた。大乘願行の代表者たる善財童子は長き年月、遠き國々に此等を歷訪遍乘して普賢の大行大悲を開いた。之が華嚴經入海品の五十三善知識の說だ。この五十三の知識も實は法界萬有皆是師である大慧海の一滴を示しただけだ。

論語の中に觀音大慈悲の現身を拜し、四福音の說く所に普賢の大行大慧が字々句々に光を放つを見得るものが卽眞實大乘の大士といひ得る。（大正一五、讀賣新聞）

◇光壽無量の新春

東海曈として旭日昇る、光か光か、起ちて、量なく空間に滿ち溢るゝ夫の淸淨歡喜の大慈光を仰がずや。

新春生る、洋々の和、欣々の樂、天地今や祝福と希望盈つ、此美しき時、嗚呼此時、立ちて而して限りなく、時間を貫き覆へる彼の常住永恒の大靈壽を賛せずや。

此光此壽、卽是無上の御名にあらずや御名は何れの時も至大至聖至力なり而も此新春に當りて特に其大の益大に聖の逾聖に力の更に絕大なるを仰がずむばあらず。

南無阿彌陀佛

凡そ眞なるもの善なるもの美なるもの吾等が努力せむとする所奮勵せむとする所、愛國扶宗濟生利民、所有言論所有實行總じて此萬德は渾て御名にあり、新春努力に先ち奮勵に先ち實行に先ちて其第一に始むべきもの夫御名にあらずや。

南無阿彌陀佛

平和といひ一致といひ和協といふ、孰れか聖衆の俱會、諸上善人の一處より大なるものあらむ、而して是實に御名の賜也、一宗に今要する所のもの人材にもあらず、黃金にもあらず、唯鐵の如き一致なるや論なし、此一致は唯御名の力によりてのみ、飛舞する沙土をして動かざる泰山となすを得、闔宗俱會一處の同行者、願くは新年この御名に依りて四十五年の一致と和協が四十四年より堅きこと鉛の鋼に於ける如きを誓ひ來れ。

南無阿彌陀佛

讀者と吾等、旣に此御名あり、吾等は此御名によりて最

として殆ど毎時來り診し、左右憂色の慘たるものあるを見て、病稍重境にあるを覺りしのみ。一新聞紙上危篤を傳ふるに至り、窃に自ら所謂危篤の甚平易なるを笑ふ。而も之が爲に、先輩知友諸賢を騷がし煩はすことの多大なりしは實に慚汗に堪へざる所なりき。但し顧みれば人生誰とても一日として危篤ならざる時あらんや。

病間、枕頭牀側殆ど花を以て埋め、紅黄紫白燎亂として芳香馥郁たり。特に雪白楚々たる數盆の雛菊（マーガレット）は、南獨の郊外の平野を偲びて昔遊を思ふに足れり。華城君等至る。卽ち笑ふて之を指して曰く、此儘にして死す、更に棺側に花を要せず、亦可ならずやと長妹等左右苦笑して熱四十度の狂漢の戲言に快ならざるに似たり。自ら綺語徒らに人を惱ますを恥ぢぬ。

自己反省、大願渇仰の切實なる機會は惡戰の時、失敗の際、時に之なきにあらざるも、而も今回の如く痛快に自己の至弱、至小、至劣、醜惡の至極を鮮かに味ひ得、絕對孤獨の感を徹底して體得したるは年來未だ之なき所なり。二十九日、熱稍退けるとき、一友に送らんとせし書あり。書半ばに熱再四十度に騰り遂に之を綴るを得ざりき。殘稿今尙殘存す。

手術の後に候ひき。コカの局部麻睡漸々覺め來り、半面腐れる南蠻瓜の如く浮腫して疼痛、切々頭部より全身に漲り、强烈の熱は、怒濤の勢もて全身を猛炎に包むの感見之候ひき。閉目靜思すれば、自己は唯一片の敗葉が、底もなき黑漫々の深洞の中、唯一つ全く萬物と離れ、萬緣を絕して、行末も知らず、蠢動するを確かに認め得候。此時の痛烈の大寂寞（グロッサアインサムカイト）の感は、嘗て覺へざる徹底したるものに候ひき。而して毒熱の氣は、四方よりこの一孤葉を燒盡せしめんが爲に吹き捲くり、霜の如き銳利の刀風は、之に勢を添へて、葉肉骨格看る看る靡爛せんとするを、鮮かに觀申候時、自己が現象界に於ける眞相は身の毛の竪立する程、恐ろしく露堂々と映じ來り候。

此自己觀照の絕頂（クライマックス）に達せし時は殆ど未來など考ゆる餘裕無之候て、唯慄然として絕望に戰くこと瞬時に候ひしが、忽ちして『久しく我に依れる汝、此時に當りて、尙現象界の孤獨に恐れ、甘ずるや』と呼ぶ御聲の天の一方、遠雷の如く轟き渡るを意識致し、大慚大愧、至心に『彼』を念じ奉る時、今現在の大慈光は甘露の雨の如くに注ぎ來るを明了に拜し得て、枕上不覺

論者、鬼荊の様な一部英國の女とちがひ、盛に神聖の手を動かして、慈善事業に從事し、救濟問題に心配しつゝある、親ら忠實に事業に當る傍に親切な研究と精密の調査を絕えず發表する事を怠らぬ。

此等女流慈善家の初筆に書かれる、シカゴのジエーンアダムスの『博愛と社會進歩』は申すまでもなく、フヰラデルヒヤのメリー、リツチモンド孃の『貧民の間に友としての訪問』やメリー、コンニグトンの『如何に救濟すべきか』などは此例として多少にても此種の事業に關係する人の机上には必須の良書である、此他に女流慈善家の論文や著書を調べたら數限りもなからう、アメリカは此點だけでも兎に角幸だと云へる。

新しいとは何とか盤臺の魚の様な女が日本にも出來たとやら、かゝる手合を眞面目に働き、親切に社會の爲に活動しつゝある西隣の眞正の新しい女と比べると全然(まるで)御話にならぬ、日本は駄文學に中毒した婦人を養ふ様に裕福ではない。

天上の薔薇に今が咲くべき時だ、愛の紐、神聖の手、婦人の威嚴、これが大正の今日に切實に入用だ、勝鬘經の中に勝鬘(シリーコーラー)皇后が釋尊に告白された『貪利心なく、厭足心なく、限礙心なく、衆生を攝取する』婦人が眞に必要だ。

（大正三、一、一、精華）

◇病後漫錄

去月中旬喇嘛僧一行を送りて後、耳底變調あるを覺へ、時に激痛あり。友人長谷川國手を訪ふて、外聽道に兩顆の疔を生ぜるを知り切斷の手術を受く、爾來稍少康を得たるを以て、公私內外の事に當る、而も頑惡の腫毒、此間勢を積み、二十二日に至り、頽然として再び困臥せざるを得ざるに至れり。二十四日國手、三輪華城氏、豚妹等枕頭に鳩首し、入院治療を勸めて止まず。其意蓋し謂らく、貧院十數の書生輩ありと雖、悉く是木强野生の漢、到底孤獨の病僧を看侍するに堪へずと、乃ち之に從ひ、二十五日飄然として長谷川病院の客となる。百忙の人、是に於てか全く牀上無爲の一肉團となれり。

二十六日再び切開を受く。此間、丹毒を併發し、心臟及呼吸器また稍障害あるを見たり發熱は一週三十九度より四十度を上下す。而も自ら甚だ之を意とせず。唯國手の惴々

信仰で結ばれる、これは最も簡易な、最も眞直のもので、また最も近い一條の白道である。

信仰の線は唯一本だ、一本の線は彼此の二點が合一する、最も强い眞理そのものである。

私は佛を觀ることを自力で强て希望することは出來ぬ。乘佛願の吾等、一切を大慈悲の御父に托した上は觀せて下さる時が來たら、彼方から八十萬億の金光身は自ら現れて下さる。私は佛を觀るよりも、まづ私の罪惡をしみ〴〵觀たい。

佛を觀ること、否、觀る正しき方法すらも、知らぬ私なればこそ、本願に縋り得るのである。如來の大慈悲は觀佛の出來ぬものの爲に本願の大道を開いて下された。嗚呼、佛を觀得ざる者は幸だ。私は十惡五逆の私に呉々も佛光の深い有難きをしみ〴〵と感ずる。

謂はば全く盲の私には唯御名の聲、御名を唱へ得る聲で充分の御力を仰がれる――梅櫻程にも觀じ得られぬ妄想の觀念は實在の御名の力に比ぶべくもない。

（二）

葉は落ち草は枯れて、天地は死せるが若き冬となつた。嗚乎この凋落よ。私もまたこの天地の中で漸次に凋落して行くのだ。自然は實に此凋落、卽生滅遷流の運命に縛られて居る。私もこの大自然海の渺たる一粟たる已上はどの道、生滅變化の外には、如何なる事も出來たものでない。然し、待て。靈の世界は全く反對に進む。その葉は彌榮に榮へて、その草は常夏に綠を增してゆく。自然は時間に拘束され、空間に制限され、因果の鐵鎖に嚴しく縛りつけられて、寸步の自由もない時に、靈は、偶然として又超然として一切の時空や因果を事もなく嘲り進む。

自然としての私が生滅變化、恐しく身毛竪立するとき。其處に常住の御光がありありと現はれる、御名で現はれ、實在（リアリテー）は一切の時空因果を超へた彼方から、懷かしく、私を抱く。

逝く年に、凋落の老ゐさらばゆる孤身を失望と落膽で、情けなく顧み來るときに、御名の中から、盡きせぬ若き力が滾々として、天女の乳の如く流れ出づるを、しみ〴〵と喜ばずにはいられぬ。

年は今私を離れて行く。而して、私として是已上のものはない、肉體も何時かは離れて行く。那邊に何處に……

何物も離れ去れ。唯如何にしても私と離れ得ぬものが一つある。それは大願業力だ。嗚乎、何といふ强い力であら

熱涙の潸々として落下するを禁ぜず候ひき。二十六日苦惱不眠の半夜は、かくて近來になき自己の省察と、無限の感謝に明かし申候。……

約一ケ月の病臥、その半月は、顏面全部を氷塊に埋め、氷枕頭にあり、氷嚢耳を壓し、食餌診療の外は殆ど常臥三昧に入りぬ。此間宗門の時事、頗紛糾錯綜を極めたるもの多く、長老となく、沙彌となく、概ね兩山の問題を口にせざるなし。獨り病漢あり。全く時事に關はらず。二旬の淸閑。靜に平素怠り勝の佛名を念じ。常懺常欣の自らなる別時會、近來になく、甚だ稀有なるを喜びぬ。二絕あり。聊か此喜を記しぬ。

半月療痾絕萬緣。　殘紅嫩綠此間遷。
痛疼苦熱好稱佛。　蒲褥蒿牀是寶蓮。
臥病三旬何恨長。　不聽世事得兼喪。
蕭條蝸室半間榻。　自悅別時勝道場。

先輩友人内外の同志檀越等數來りて相慰し芝中の子弟等は日に切實の書を寄せて、快癒を祈り來る。眞情の流露實に感泣すべきものあり。田中舍身居士が長途の旅裝を解くや否や半身至痛の病軀を提げて來り、其自己が至烈なりし丹毒の經驗を說きて相勵せし如きは特に感激すべし、此間

最失笑を禁じ得ざりしは日日看侍の長妹を目して病客が妻と誤り做す訪友の甚多かりし事なり。應接の滑稽時に一場の喜劇を現ず。又是孤僧病中一種の消閑たり。

十一日に至り、外腫内患漸くにして殆ど治しぬ。卽ち輕裝獨り醫院を辭す。街頭楊柳の風、二旬禁錮病客をして頗る適意ならしむるものあり。車上一絕を得たり。

汗被垢衾半月空。　紫紅落盡艷陽終。
今朝一浴辭醫院。　瘦骨衣輕綠樹風。

（大正七、五、淨土敎報）

◇光りを仰ぎて

（一）

二つの點を結合する最短距離は唯一つの直線である。この線は唯一無二である。この唯一本しか何としても引かれぬ線は、卽ち如何なるものよりも短き距離である、何ものよりも最も近い一條の道である。

佛と吾等は彼此の二點である、時空を越へた彼方の實在と吾等とは相對した二つの點である、この二點は唯一つの

教は其を己が心に味はふ、即ち主觀的に體現するのである。又哲學は分解的であるが、宗教は綜合的に之を見るのである。哲學は解剖學者が人體を解剖するやうに、バラ〳〵にする。然し解剖する人には血も肉もない。宗教は解剖するのではない、人間の全體を見てそれを纏めて行かうとするものである。勿論一般の哲學にも此の傾向はある。之は理智より信仰へ到らんとする哲學であつて、希臘以來最も大いなる影響を示してゐるのはカントの哲學である。

（二）

カントの哲學の出發點は「純理批判」にある。之は人が物事の奥底を見究めてゆくことを研究したものであるが、その結果は人生の知識は到底宗教に云ふ「神の存在」「靈魂の不滅」「自由意志の發現」の三大綱領は、吾々が經驗して、行く知識とは別なもので、少しも解らぬ、と云ふ行きつまつた結論を與へたのである。

此の三大綱領の「神の存在」と云ふことは、基督教のみでない。佛教にもある。「靈魂の不滅」と云ふことも何處にでもある。「自由意志」と云ふのは、人々には自由無限に發展し得る意志が出來ると云ふ事之あるが爲めに成佛もあれば救濟もうけ得られるのである、佛教で云ふ佛心と修行とは、カントの所謂三大綱領に當るのであつて、佛教には卽ち之があるのであるが、カントの純理批判では之が說明出來ぬのである。

又カントの哲學には、十二の分け方があるが、その中の大なるものは、「空間」「時間」「因果」の三である。空間と云ふ觀念は、人が物を考へる時、必ず無くてはならぬもので、之なくしては物を考へる事は出來ぬ。青々たる山の姿、紅匂ふ花の麗しさも空間を否定しては考へることは出來ぬ。これをカントは先天性に云ふてゐる。時間も亦然りで之を否定しては又何事も考へることは出來ぬ。因果とは前後の關係である。春逝き夏來り、今年暮れて又明年來る。之れ實に否定すべからざる事實である。

然るに人間の一番大切な空間は、如何なるものを入れ得るが、宗教の上より絕對無限と云はるゝ神や、佛は理智の上から空間と全く別なものであるか、神や佛は空間の中にあるか、將た外にあるか。もし中にあるとすれば有限で肯定することは出來ない。然らば空間と云ふ觀念が眞實ならば、神は存在できぬ。何となれば、限りある空間に限りない神の存在は肯定出來ぬからである。

次に時間について見るのに、靈魂の不滅と云ふことは、

う。

(大正八、一一、淨土教報)

◇春が來た

春が來た、春が來たと、無邪氣に謠ふ、少女の聲が宵の樣にしとしとゝ降り注ぐ雨の間に、斷續に聞へる。柳の芽にも親草の色にも、春はもう近づいて來たのだ。錦の裳を霞に曳きて、百花の冠、鮮な春の女神ホルダの、美しい姿は、直に此世に現はれる。

春は來る。一雨また一雨、線は延び、紅は色づきて、櫻も桃も海棠も我劣らじと、美しさを競ふのも近からう。然し此の雨よ「花を催すの雨は是花を摧くの雨」だ。爛漫の百花が間もなく、嫉風妬雨に無殘に散り行く浮世の春は、何故にかくも果敢ないのか。

落花に春を惜み、殘紅に香を悼む悲は、此浮世の莊嚴の背景に久遠の春の光のあるのを知らぬからだ。散らぬ花、凋まぬ香の大慈悲の實在を仰がぬからだ。幻の春の背後に眞實の春のあるを明かに見よ。かくて春の喜は長く盡きぬであらう。あゝ麗しき春よ。我々は、光と壽の限りなき御佛の御力と御名に依りて、此宇宙の美しく平和な春の現はれを讚美しようではないか。否此御力と御名そのものが卽ち久遠の春そのもので、吾々の讚美は此の常住の春に生る唯一の證ではないか。

(大正一〇、三、東光)

◇理智より信仰へ

(一)

綠したゝる夏が過ぎて滿目肅條の秋を迎へると、その自然の風物に心はおのづと引きしめられてすべてが過去を振り返ると共に深く自らを考へるやうになる。そして其處には云ひ知れぬ暖さを持つ前途の春が想ひ出さるゝのである。つまり何ものも振ひ落した秋の淋しさは、卽ちうらゝかな春を迎ふる緒である。斯く自然がその飾りを落した所に春があるやうに、人生に於ける思想の行きづまりの上には、又理智より生るゝ信仰がある。

こゝに人間が天地自然を觀察する事に於て、哲學と宗教との異りを思ふのに、哲學はすべて、ものごとを第三者の地位に立つて卽ち客觀的に物ごとを觀照するのであるが、宗

切かと云ふと、「理想としては佛」「實行としては靈魂の永生」と云ふ事でもし理想が出來ると、絶對の理想、無限の理想、最上の理想が欲しい。之れ卽ち佛である之を實現するには一生二生では出來ぬ。其處に靈魂の永世と云ふ要求がある。カントは理論ばかりの力では神の存在、靈魂の不滅が證明出來なかつたけれども、こゝに至つて新しい天地が開けたのである。

これはカントのみならず、オイケンにも此の思想がある。オイケンは人の内面には理想があつて、之に超入するのであると云つてゐるが、此の「超入」と云ふ意味がカントには實行となつてゐる。人は理智ばかりでは生きられぬ。理智はオイケンの其れのやうに行きづまりである。然し行きづまりのそこに生れ來るものは實行である。或る程度までは理智が必要であるが、遂には之によつてすべてを解決することが出來なくなる。こゝに信仰が現れ來るのである。

（四）

こゝに於て佛教に於ける淨土敎について少しく考へるのに、淨土敎はすべての理智をすて、哲學に反對するものである。宗祖法然上人の一枚起請文に

もろこし我朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にも非ず、又學問をして念の心を悟りて申す念佛にも非ず。――

と卽ち學問や理智に反對して、淨土敎を立てられてゐるが、カントが理窟上の先天觀念や、議論を捨てゝ實行論に入るが如く、淨土敎が一切を否定し、之を捨てるのは惡いから捨てるのではない。偉大なるものゝために捨てるのである。議論や理窟や、不徹底なる學問は佛になるのには何の益にも立たぬから捨てるのである。卽ち解と信との二つに於て、淨土敎は解は勿論研究の意味で必要ではあるが、それがすべてではなく、その目的は信にある。つまり原因になるもの、大理想の楷梯であつて、その原因は因分と云ひ、之を理窟で說明するところから因分可說と云ふ。

次に信仰の方は絶對無限に對して之を體現し已れにとり入れるので之を果分と云ふ。その絶對無限とは佛である。之は證明の範圍でないから不可說であるとする。

卽ち人間自身の範圍は小さい（因）けれど、果は人間の見る範圍の倍々であるから、その全體は人間には解らぬ。されば人の知る理窟は理想の片影に過ぎない。之を淨土宗第七祖丁譽上人は佛敎全體について四種に分つてゐる。

靈魂が永遠に續くことで、之は宗敎の生命である。時間は人の定めたものであつて、從つてその點から云ふと時間は、その人の生れてから死ぬ迄のものである。故に時間の觀念のある間は靈魂の不滅を信ずることは出來ない。

次に因果について見るのに、之は無限に續くものである。すべてのものは皆約束から出來てゐる。四季の遷り變り、落花流水、之れ定まる規則である。人の心も亦然りで、記憶あり想像あつてそこに始めて心の働きが現はれるのである。

もし然らば人は成佛することも、救濟を受くることも出來ぬ。畢竟人間以上になることは出來ぬことゝなる。發展することが出來ぬとすれば、修行と云ふ自由意志はない。たゞに運命の繩に縛られて仕舞ふ。立つことも座ることも悉く約束とするならば、其所には宗敎としての自由はないことゝなる。

（三）

斯くカントは神の存在、靈魂の不滅、自由意志の證明の不可能なことを知り、更に一歩進めて、之れ觀念を擴げる「實行批判」（倫理論）を考へたが、これになるとその考へが大分變つてきて。神の存在、靈魂の不滅、自由意志に大なる働きを持つてきて、こゝに「自然法」と「道德法」との區別が出來た。

「自然法」とは宇宙の原則によつて科學の法則の如きもので必然の法である。太陽の輝ける、山の高き水の低きに流るゝ、之れみな必然である。これには當爲（斯くなさん）と云ふ精神がない。卽ちこれは自然的のものであるが、人間の道德法には「そうしやう」と云ふ意志がある。之を區別して見ると、

1、自然法　そうなつてゐる（必然）〔Must〕
2、道德法　そう爲やう　（當爲）〔Will〕

となる。

恰も人が眠くなつたから眠る、覺めたら起きると云ふことは自然である。けれども之は獸的、本能的の生活であつて、人は之れ許りではない。働かう、勉强しやう、朝も早く起きてやらう、と云ふ精神を持つ、之は卽ち人間の良心であつて、之をカントは無上命令、絶對命令と云ふてゐる。卽ち善に向つて進み理想を追ふて生活する處の命令を持つてゐる。言葉を換へれば、佛とならう、神に救はれやうと云ふ意志である。此の道德法の實行を必要とするところに、人に理想及び實行が出來るのであつて、こゝに何が適

の上から過ぎ來つた理智の境界を眺むるとき其處につきせぬ味ひがある。詩人が

　尋常一樣窓前月　纔有梅花卽不同

と云つた如く、信仰ある人の見た宇宙と信仰なき人の科學とは大に違ふのである。科學では人を分析し解剖して無味なものがあつたが、信仰の上から綜合的に眺むるとき、其處に偉大なる靈的な力を認めるのである。行きづまつた理智も信仰の上からは美しい理智となるのである。

　人生には絶えず苦痛もあれば、煩悶もある。けれ共これは理智の結果である。その上に信仰の樂園のあることを忘れてはならぬ。强大なる眞理の輝き、阿彌陀佛のつきせぬ慈光救濟を仰ぎつゝ、南無阿彌陀佛の御名呼ぶ實行を示しつゝ永恒の救濟に與らねばならぬ。　（大正一〇、三、東光）

◇法悅の春

○新春の天地――悅そのまゝの姿

新年は芽出度く明けた。曈々として豐坂のぼる初日の出に、先づ悅の色を鮮かに見せて、歡喜の光遍ねく世界を照らし亙り、四海波靜かな大洋は、蒼々と平和の色を湛へて、鏡の樣な水面に微かに起る細漣の音も悅の音樂を奏ずる如く聞ゆる。軒端を吹く北風も今日ばかりは何となう和かに、天地萬有が悉く新らしく歡喜に生れ出た樣な感じがする。『元日や晴れて雀のものがたり』といふ古い句は、可憐な小鳥の囁語にまで、この天地の大なる悅が現はれつゝあることを巧みに詠むだものだ――新年の天地は實に悅びのまゝの姿といふてよい。

○古い天地に新しい心――悅の心天地を純化す

　この樣に天地が歡喜に輝き、悅樂に滿つることは實に人の心の反映に過ぎない。太陽の光線を放射するものでもなく、大海原も元旦だから全く變つた水が入れ替たといふのでもない。風も小鳥もそのまゝで何等の變化もないのであるが、然し人の心丈は大晦日の昨日と、元旦の今日とは大分の差異がある。否、全然一變したといふてよい。元旦を喜ぶ心、新春を壽ほぐ氣分、御目出度く今年の生活を初めようとする元氣な而も平和な精神、誰も相互に敬愛する美しい情操が、古い天地を新しくしたのである。王半山が立春の詩の中に

　物は　終りをもつて　始めとし

聖道（理證）	解の解	物質的、科學主義		（小乘）
	解の信	理性的、表現主義	―理智	（三論 法相）
	信の解	唯心主義		（華嚴、起信論）
淨土（體現）	信の信	實行主義	―信仰	（淨土）

第一の解の解は 普通に云ふ 哲學で何處迄も 理窟は 通すが、對境がないから理想の發現もない。

第二の理性の宗敎は、一步進んではゐるが理論のみであるから又行きづまりを生ずる。第三は理想は持つても之を現はすのに理論を以てするので要するに以上の三は理智と離れぬ。然るに第四に來つては理窟は少しも用ひず絕對の信仰を以つて進むのである。果分の果分が佛と云ふものをそのまゝ受け入れてくる實行主義で、是れ卽ち淨土敎である。

（五）

然るに之には又その三つの楷梯がなくてはならぬ。法然上人は、淨土敎の信念を定めてそれを弘める迄には、實に此の三楷梯に對して惡戰苦鬪をやつたのである。上人幼少にして父を失ひ給ふてから、淨土開宗の曉に至るまで、あらゆる理智の修行をされたが、遂に之も信仰の前には捨てねばならぬ程行きづまつたのであつた。そこに上人の燃ゆる信念が湧き、血と涙のこもる念佛實修の矢叫びとなつたのである。上人の 信仰は理智を 學ばずしての 信仰ではなく、理智の行きづまりを悟られての上の大放棄であつて、今吾々は上人の千辛萬苦の遺物をそのまゝうけ入れるのである。

今日の青年にも此の傾向がある。理智の對境が進むと必ず實踐主義に入るものである。單なる解信にあらずして、信仰を信仰として眺める處に大なる力がある。上人の一枚起請文に、

たとひ一代の法をよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智の輩に同じうして智者の振舞をせずしてたゞ一向に念佛すべし

と仰せられたる、その愚鈍念佛より見たる宇宙は實に偉大である。念佛の眼を以つて見る處、世界に敵もなく仇もなく、悉く美しき人生として眺むることが出來る。卽ち淨土敎はあらゆる衝突と撞着とを圓滿ならしむるものである。

（六）

斯くの如く理智は信仰に入るものであるけれ共、一度信仰に入らば信仰の上から理智を救はねばならぬ。更に信仰

悅は一層の悅なり』と。吾々は玆で世間並の悅、唯御芽出度と無造作に考へて居る生存そのまゝの悅以外に、藝術の悅がある。詩や音樂の高尙な趣味の悅、人生に對する自覺した哲理觀照の悅の尊さ道德實行に目さめた嬉の嚴かさを見ることが出來る。屠蘇の醉で唯無性に深しく、何とは知らずに樂むだ淺墓な快樂の外に、別に悅び盡きぬ歡喜の世界が輝いて居ることが知られる。俗の悅は有限であるが此趣味、觀念、道義の悅は無限である。物慾の悅は性質が不純であり、粗野であるが、此詩の喜、哲學の悅、倫理の樂は眞純であり、亦極めて微妙である。然し何れにしても其立場は――『門松や冥途の旅の一里塚』といふ生滅變化の無常の人生であつて、花鳥風月一として變らぬものがない世界を相手にするものである。悲喜苦樂、是非善惡、吉凶禍福が、解けつ縺れつ、重なり合ひ攻め合つて居る生存が其對象であつて見れば、其趣味や思索が深くなればなるほど『悲劇の眞理』がひし／＼と味はれて來る。世界苦、生存苦の現實が、此趣味の悅が進めば進む丈、詩に生きる人、思想に希望を見出す哲人に逼つて來る。して見ると趣味感に外ならぬ。道德實行の悅にしても『人生讀書するは苦の始めなり』で、人は自覺する程、責任の苦しさを感ずる。義務の重荷と束縛の大なるに苦むものである。すると人生には此の『苦しい悅』寧ろ矛盾した悅の外に『悅の悅』ともいふべきものはないであらうか。苦樂相待の悅以外に絕待無上の悅が、果して吾々に持ち得ぬのであらうか。

〇『吾れ爾を助けて喜ばしむ』

吾々は小兒のように唯生存の悅に狂喜した。新年は人の心の反映だといふが、實は元日といふ時間の約束に動かされて、何とはなしに芽出度く悅んだ。然し目を開いて見ると此悅、此俗の悅は『苦しい悅』であると氣が付いた。かく『悲劇の眞理』に快感を味ひ、人間苦の責任に行くべき路を悟つた曉、人として甲斐ある尊さと强さとはよく判つたが、然し何とも賴りのない寂しい谷底に落ちた感じがする。そして無上の悅、悅の悅が必らず何處かにあるのではなからうかといふ、强烈な憧憬の念、欣求の心が自然に湧き出して來る。此時に天外に忽ちに聲あつて

吾爾を助けて喜ばしめん

と呼ぶものがある。此の親切の主は誰であらう。『助けてやる』といふからには救の主に相違ない。『喜ばしめん』と叫ぶ以上は、無上の喜、悅の悅を與へてくれるであらう。吾々は今まで自分で悶え求め、惱み尋ねて何事も獨りで解決

人はふるきよりして　新しきを得る

といふ句がある、が歌ひ得て妙である。この人心の純化、昨日までは鬼の樣になつて相爭ひ、阿修羅の如く可成りに棘々しく怨み憤り相罵つたその人々が、相互に御芽出度く相愛し、相敬する一新の精神が充ち溢れた所に『元日や神代のことも思はるゝ』といふ、清淨な平和な悅の世界が現はれて來る。佛陀が維摩經の中に『其心淨きが故に國土淨し』と御說きになつた通り、人々の平和な悅の心が天地を美しくしたのである。かくて新年は、天地が悅そのものゝ姿であるばかりでない。人々が誰れも彼れも悅の權化となつて居るのである。新年の芽出度さ。美しさは此處にある。

吾々はこの芽出度さをどうか永く續かしたい。この新しい清淨な平和な心で、今年は何卒押し通したいものだ。此の希望の强さが一層新年をして悅に輝かしめる。

○祝酒の醉は北風に醒め易し

然しこの希望を現實にするには少しく思考を要する。先づ第一に悅といふものが單に祝酒に醉ひ、歌ひつ舞ひつ遊び明かすといふ、肉の快樂、物質の歡喜、世間並の表面的のものであつて、唯呑氣に無邪氣に太平無事に暮すといふ丈けでは固より何の意義もないことで、かゝる悅は、シエークスピーヤが、悲と悅は時の遷るが如くかはる〴〵流れる」とヘンリー王の劇中に、グロースターをして言はせた通り、樂あれば苦あり、決して永續するものでもなければ亦幸福なものでもない。祝酒の醉は北風に醒め易く、笑ひ興じた松の內の歡樂は眞は束の間の一夢に過ぎぬ。而して其悅の性質が强烈なればなる程、結果は隨つて悲むべきものを持ち來す。『荒める悅は荒める結果を取る』と「ロメヲとジユリエツト」の悲劇に語られた如く、畢竟物慾の悅、酒池肉林の快樂、色聲香味觸の歡喜は苦樂悲喜相雜はる不純のもの、シヤボン玉の樣に消へる瞬間的のものである。

悅はその美しい翼で
一寸輕く吾等を抱けど
蜜蜂が甘露の花を味ふ樣に
ほんの僅に唇の端にだけ觸れる（マツテイスゾン）

俗の悅、物質の悅、自覺のない世間並の悅に、なんで永續の希望があらう。またこの樣な悅を押通したとて決して幸福ではない。吾々は玆で大に考へねばならぬ。

○生存の悅、生存を觀する悅、生存超絕の悅

詩聖ゲーテは敎へて居る。『生存の悅よりも生存を觀ずる

の尊とき御名で顯はれる。即ち念佛の生活で法悦が日一日と深くなり、進んで行く。念佛の生活は即慈光照護の下に於ける生活である。御名の聲のある所には必らず慈光がある。この慈光の中の美しい生活を聖經の中には極めて簡明に說いてある。

若しこの光りにあふものは三つの罪垢消へ滅びて、心
意柔軟に、歡喜し踴躍して善心生ぜん

吾々の有して居る、貪欲と瞋恚と愚痴の三大罪惡は人類の同情や平和や文化に全然相反するもので利己主義、爭闘、愚昧そのものであるが大慈悲の光に逢ふとき此罪惡の不淨は漸次に其影を潛めて惱や苦みや憤や恨は自然に去つて、人生と世界に對し常に躍り上り、飛び立つ程の悦に滿ち、萬善は力を費さず行ひ得られるに至るのである。言を換へると苦しい義務の重荷と思ふた道德、固苦しい拘束と考へた良心の責任は信仰の力で安らかに且つ堅固に而も常恒不斷に勞せずして行ひ得らるゝに至るのであつて、眼を擧ぐれば天地は別樣の光に輝き、手を下さば人世は唯愛と感謝に滿ちつゝあるのを知るのである。此生活は實に悦の中の悦であつて人生の至樂實に玆に盡きる。

〇『悦の中の悦』――『天に仰ぎ地に俯して喜べ』

此法悦の生活、念佛の生活こそ、實に無上の悦でなければならぬ。吾々が生滅の世界の中に此永遠の喜を看出したことは何等の幸であらう。泡の如く消へ幻の樣に滅する此世の快樂、喜悦の外に此至大至高至妙の悦に遇ひ得たことは眞に人として生甲斐あることゝ稱してよい。法然上人は此法悦の有樣を法語に御記しになつて、

受け難き人身をうけて、逢ひ難き本願にあひて起し難き道心を起しはなれ難き輪廻の里をはなれて生れ難き淨土に往生せんこと悦の中の悦なり……天に仰ぎ地に伏して悦ぶべしこのたび彌陀の本願にあふことを。

と仰せられてある。罪の世界より、救ひの世界に肉の生存から靈の生存へ、生滅不安無理想の無信仰な俗生活から、安定確固の理想ある信仰の眞實生活に進んだ所に、悦の中の悦があり、天に仰ぎ地に俯して悦ぶべき法悦の春が現はれる。

〇法悦の春を頌せよ――爾が念佛爾を永遠にす

新春の天地は悦びのまゝの姿である。元旦の心は神代ながらの清淨な平和な心である。此悦の天地の奥に法悦の盡きぬ光を仰ぎ、清淨平和の心の底に絕待永久の歡喜の大慈悲を認める時に、天地は無上の悦に輝き、人心は至大至高

がつくと思ふて、實に此聲の主、救ひの主があることを知らずに居たのであるが、それは果して誰であらう。生存以外に超越して而も永遠に生存の導きとなり力となり光となる佛陀でなくては誰であらう。我々の爲に眞の悅の源泉を指し示し、悅の中の無上の悅を親切に敎へ導く釋尊でなくて誰であらう。佛陀は三千年の昔、無量壽經の中に吾々を哀れんでかく叫ばれたのであるが、此敎への尊き御聲は永遠の導きであり、朝に夕に今現に叫ばれて居るのである。然らば其眞の悅の大道、法悅の泉は何ものであらうか。

○歡喜光の大慈父

この法悅の泉、眞實の悅の源は、限りない命と、量りなき光とを具へ、大慈父、大愛の父とし吾々を救濟しつゝある、阿彌陀如來である。如來は無邊の善と德とを具備して居り、至善至眞至美の本體であるけれども、ゲーテが『歡喜は萬德の母なり』と歌ふた如く、人間が幸福の初めとし、亦終りとして平和、淸淨、善美の上に起る最美しき感情である歡喜の一面を現はして、歡喜光佛として吾々を救濟して居られる。悅の源、法悅の泉の主として吾々に大慈悲の溫い手を垂れて居られるのである。吾々が眞の悅を獲得せんがために、此大愛の御手に抱かれた時、生滅無常、

罪惡矛盾の身心を大慈悲の懷に御任かせ申した曉に、其處に吾々は絕待の喜、眞實の悅を見出し、後の世も此世も何等の不安なき平和淸淨の法悅生活に入るのである。

○『悅ぶとき本願に乘ず』

されば吾々は何より先きに、此大なる法悅の源泉が眼前に汲めども盡きず現はれて來たことを發見し、眞實永遠の悅を與へる慈父の御手が眞に永い間、吾等の來るを待ちこがれて居たのが明かに知れたことを第一に喜ばねばなるまい。吾々が如來の助けで見出した此坦々たる法悅の大道は實に他人のためでない。唯吾等のために特別に設備されて、美しい花や列樹も、平かな快い路面も唯吾等のためであつたといふことを深く喜ばねばならぬ。亦吾々はこの場合にかく喜ぶより外に仕方がない。此喜が生じた時は卽ち吾等が救はれた時だ。之を法然上人が『悅ぶとき本願に乘ず』と仰せられたのである。吾々の法悅の全生活は實に此看出した喜、慈父に逢ふてから初まるのである。

○三垢消滅して善心生ず

吾々が救ひに逢ふた驚き、本願の有難さが明に了解された曉から、法悅の全生活は初まる。吾々の生活は玆に大慈父に對する、欣求、讃美、懺悔、感謝の總てとして光と壽

に東天に現出して、今や新たに大正十五年の大活動最初の威力を發揮し出した。

願與梅花俱自新

新年の詩歌には吟誦するに足るべきもの可成に多い。俳句にも人に膾炙したものも少くない。然し唐の盧同の「人日立春」の詩が何時も面白いと思はれる。

春度り春歸り限りなき春なるも
今朝こそ方に始めて人と成るを覺ゆれ
今より克己するも猶及ぶべし
願くは梅花とともに俱に自ら新にせん

新春に於ける第一事は反省と日新の工夫である。「元日や神代のことも思はるゝ」と吟じた名句の通り純な清淨な天地、平和と愛敬に充ち溢れた人世が、現るゝ元旦に吾々は人間らしく丈夫らしい氣分になつて、身心一新の努力に猛進すべきであらう。去年の吾々を省りみ、今年の吾に新らしい自覺を味ひ奮闘の決心を激勵することは新年に於ける青年の最も適切の心得であらう。

讀起春王正月章

確か山陽の元旦の詩だつと思ふ。「東の窓の机を拂ひて初日を迎へ、讀み起す春王正月章。」といふのがある。

言ふ迄もなく之は簡單に云へば春秋左傳を讀書初めとして繙いたといふ丈だが、同書中の「春王の正月」といふ芽出たい、太平の氣宇の現はれた、元旦恰好の文を利かして使つたのが此詩の名詩たる所以なのだ。

來る年も亦來る年も歷史開展の一段階である。悠遠長久の吾が歷史の流れに一年が更に長さを加へるのである。吾人の理想の進展として此一年丈又前進するのである。かく考へて「春王の正月」を吟ずると其處に盡きざる味がある偉大な敎訓がある。

吾が誇ある歷史は亦茲に新らしきページを開かんとして居る此來らむ歷史の頁數の中に吾々は少くとも有意義な何行か何字かを刻みつける決心があつてよい。

青年として假令其事業や功績は書かるゝに至らずとも、書かれんとする元氣と精神とを以て歷史の回顧をなす時、便ち書かれると同じ事になる。

發心の畢竟

佛敎の中に發心と畢竟といふ事を說く。而して二者は價値が同一であると敎へてある。發心は決心の第一で畢竟とは成功の曉といふ意義である。强固確實な決心は完全な成功を招致する基礎であるから、此の如く決心の第一歩を重

の樂に踴躍する。新年は實に芽出度い、然し法悅の新年は最も芽出度い、元旦は何とも歡喜に盈ちて居る。然し信仰あり理想あり眞實の希望ある元旦は何物よりも美く樂しく尊い元旦である。豐坂昇る永刧不變の大愛の御光を夫の初日の出に仰ぎ、無際無限の歡喜清淨の大靈の生命の水を、夫の波靜かな大海原に觀じつゝ、新しく出づる吾等が中心の無量壽の御名こそ實に人生として最上最大の悅の春を祝福する最も好い賀辭ではないか。吾等の春は來た。法悅の春は來た。この春は太陽の光の如く、大洋の水の如く、吾等が歡喜光裡の念佛生活と共に、日に新に亦日に新たに、彌盛に益々美はしく、更に樂しく何處まで進展して行く！

（大正十二、一、東光）

◇新春漫錄

最古最初

有史已來、人類の文化は頗る悠久である。吾が神代の昔は問はずもがな、ナイル河畔のピラミツドに今に豪華雄麗の記念を留むる埃及は勿論、七つの河の湊會交錯するインダスの流域から千古の神韻を遺した、吠陀讃歌時代の印度、抑も亦三皇五帝の古き譚、夏殷周の古い記錄の豐富な隣邦の支那、人類文化の歷史は其淵源實に久遠のものがある。而も此等の文華は春風二十四番の紅紫、到る所に千差萬別の美を呈してゐるが。何れも同一の太陽の下に咲き出たのである。太陽は實に古い。太陽の古い其太古なのは決して之に留らない。此等の文化の發達する前幾億萬年の昔、進化論に從へば生物が生長し發達し進化して以て現狀に到達するまで何時も其熾烈な光と慈愛の溫さを以て地球に臨んで居つた。嗚呼太陽は實に古い。

此最古の太陽は、また實に最新の創造を續け、何時も不斷に清新で何處にも生々の大活力を現はしつゝある、太陽は最も古い、而も最も新らしい。

本體としての最古の太陽は、活動としての作用が最も新しい偉力を現はす。

吾々は歷史を通じて自己の有する、國民精神の本質に雄大雄嚴の三千年の古きを仰ぐと共に其發現としての同化、革新融合、統攝の最も力強く、且最も鮮かな活用が同胞の上に嚴として存在することに目覺ねばならぬ。

見よ、曈々たる初日の出は千古萬秋不變の大光輪を見事

何れも教義や儀式と共に卍の紋を勿論印度から傳へて來たのである。印度の古語即ち梵語では卍を Swastika と稱する（支那では塞婆斯底迦といふ小面倒な字を此原語にあてる）。吉祥、慶福、幸運等の意義を有つ。歴史的に云ふと佛教徒は可成に古くから之を使用して居たが、然し佛教より以前にあつた婆羅門教でも之を尊敬し、印度教の有力な諸派は何れも之を使用する外、釋尊と殆ど同時代に起り、現に今印度南部に勢力を占めつゝあるジャイナ教などは、種々な卍字の變形を書いて、その教派の代々の祖師を表示する程である。斯の如くして印度に於ては卍字は諸宗教共通の標示となつてり、吾國や支那よりも一層汎な意義を見出す。

（三）

更に少し古代史や古物學の研究をすると、卍字の使用は非常に古く、また其の範圍が存外に廣いことに一驚せざるを得ない。エヂプトやフエニキヤの遺物には歴然として卍字が神聖のものとして刻鐫され、アラビヤ、ギリシヤの優秀な藝術品や武器にも屢、此紋を見出し中世の基督教藝術家も、また自由に卍を装飾的に利用した。

更に驚くべきは歐洲の文化未だ開けざる時代の、スカンヂナビヤや古ゲルマンの諸民族の間にも、卍字が神聖のものとして柱や碑石に彫りつけられたことだ。彼の樂聖ワグネルの四折大歌劇「ニーベルンゲンの指環」の最後の曲「諸神の黎明」はゲルマン古神話のワォタン大神、其他神々の天國ワルハラ神都の最後を歌つた雄大悲壯この上もない傑作であるが、この神都の背景には卍を刻んだ石柱や石碑の亂立した書割がもの凄く火炎の中に明滅するのを見せて居る。

古物學者の示す所に由ると、卍字の使用は更に更に古へに溯り得る。南佛や南伊の新石器時代に於ても、既に歴々としてその形の存在するのを見出すとのことだ。

かく悠遠の時代を通じ洋の東西に亘りて廣く用ゐられた卍字は其形に於ても千態萬狀の奇を極めた。此等を總稱して英語ではフイルオト Fylfot と呼ぶ、フキルフオトといへば西洋卍字といふことだ。この妙な語はアングロサクソン語の「四つの脚」から出て來たといふことだが、Fyl は four と關係あり、fot は勿論 Foot の古い形であることは直ぐに考へられることであらう。

此四つの脚即ち四隅の曲つた卍の脚は東洋流の曲尺の樣なのが普通であるが、蔓草の如きもあり、鉤形になつて居るのもあり、渦紋狀のもあつて、竪のもあれば、横のも斜

要視したのである。

「一年の計は春にあり」とは餘りに言ひふらした陳腐の語に聞えるが、然し眞理は何時も變らない。ファストステツプの大切なことは何事にもさうである。

元旦は青年に對して大決心を促す重大な囘轉の時期である。見よ、新乾坤は春風にも梅花にも見るもの聞くもの何れも既に青年の大決心、大發心を激勵して居るではないか。青年として此決心が確實に且つ堅固に出來得たものは、卽ち將來大成功の榮冠を戴くに足る好青年である。

（大正一五、一、芝中校友雜誌）

◇四つのL

（一）

雷門から仲見世を通り、觀音堂に向つて歩を進めると、例の大提灯が仁王門にぶらさがつて居るが、その赤く圓い胴腹に、黑々と書かれた卍の紋が、特別に眼に着く。これがお寺卽ち金龍山淺草寺の定紋であるかと思ふと實はさうでなく、上野の淸水堂でも、鎌倉の長谷寺でも、苟くも觀音樣を安置してある所、阪東西國は三十三番の靈場、文覺上人で有名な那智から、澤市お里の靈驗記で通つて居る壺坂までどの寺々に行つても卍の紋所に出合はぬ所はない。卍字が觀音樣を代表した標示であることは、玆で明かに判かる。

然し實の所、卍は觀音樣の專用の紋では決してない。都會から山奥まで大抵のお寺では屋根瓦や幕にもで此紋を使用する。恰も十字架が基督教を代表する。樣に卍字は佛敎を代表した記號とも言へよう。地圖や案內記に此記號でお寺を表することは小學校の生徒でもよく知つて居る。

卍字が既に佛敎を代表するものとなると、吾國にこの敎を傳へた支那や朝鮮ではどうかといふと、矢張此紋を神聖吉祥のものとして宗敎的に取扱ふことは少しも吾國と異りはない。否、支那では此紋を延喜のよいものとして吾が鶴龜松竹梅と同樣にお芽出度い場合に好んで之を用ひ、通常の衣服や器具にも盛に之を模樣とする。西藏や蒙古も支那と同樣で其使途は可成に廣いのを認める。

（二）

それならば、佛敎の發祥地、ヒマラヤ聳へ、ガンジス流るゝ印度ではどうである乎。吾國も支那も其他の佛敎國も

（五）

卍字は斯の如く現代生活の理想であり、また實際でありとすれば、教育も自然、卍字でなくてはならぬことゝなる。教育の目的とする所は言ふまでなく、人格の完成にあるのだが、その人格の內容としては第一には智德の養成である、精通明確の理智を啓發し崇高圓滿の德操を成就するために教育の努力が必要となる。理智は卽ち光明であり、德操は仁愛を基礎とする。智德の進步する丈、吾々の自覺は强烈となり、確實となる、その結果として前に意義あり充實した生活が輝き出す。而して此意義ある生活は完全な幸福を理想として日に日に新たに進步し改善されて行く。この完全の幸福とは卽ち自由でなくて何であらう。自由とは遵法と自治とが完全に融合し一致した、最高の文化と平和を稱したに過ぎない。吾々の智德進步の結果は自己の自由意志が自然に道德法に合する様になる、孔子が「心の欲する所に從つて矩を超えず」と言はれたのは卽ちこれだ。吾々は個人としては智德の修養に努力し自治の能力を充分に發揮して、自己の天分を出來得る丈進展せしめて獨立自尊の眞價値を示し、國家としては光榮ある獨立の誇の下に精勵勤勉經濟的にも學術的にも完全に獨立して外債や、模倣から解脫し去り、東西思想融合の大旆を揭げて新文化の指導者となり、世界平和の雄鎭を以て任ぜねばならぬ。之が卽ち吾々の理想とする最高の幸福であり自由であるのだ。卍字は實に之を吾々に敎へつゝある。

人格—┬知識（光明）┐
　　　└道德（仁愛）┘充實せる生活—高遠の理想（自由）

× × × ×

昭和五年の新春が來た。稿を終るに臨みて光明、仁愛、生命、自由の卍字でお芽出たう！

Swastika! 吉慶、祥福、幸運！

（昭和五、一、芝中校友雜誌）

◇塵餘殘筆

正月三ケ日

元旦。霜を踏むで舊門客印度人シーナ君來り賀す。門生等と共に雜煮を祝ひ、去冬のガンデイが働きぶりを語り、印度の將來につき氣炎頗る揚る、明日はボース君等と共に熱海に行くといふ、同君が漸く幸福の生涯に入れる現在を喜ぶと共に、その故舊を忘れざる志をめでたしと感じた。

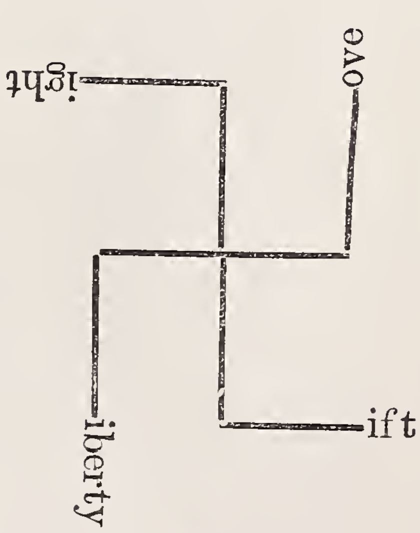
のもあり、細い針線を交へた様なもの、太くて棒を重ねた如きもの、簡單のもの複雜のもの、殆ど變化の限りを盡して、趣味津々として極めて面白い。

淺草の觀音樣で見た卍字は、かくて古今を通じ、東西に亘つた世界的の宗敎的記號であることが知れた。この樣な廣く用ゐられた紋所は卍字の外にはさう澤山はあるまい。

卍字の歷史や傳播に就いては可成り專門に硏究した書物もあるが、それは今略して置く。また古い佛敎學者の種々な解釋も書立てゝくると面倒でもあり際限もないから、一切之を止めとして、最も新しく且つ現代の理想と生活とに最も適切な卍の新解釋を一つ御紹介して見よう、之が卽ち四つのLの說である。

（四）

吾々の同胞は今や米領布哇の綠滴る樂園に六萬人以上も移住して頗る盛大を極めつゝある。隨て佛敎の各宗派は淨土宗、西本願寺、曹洞日蓮宗等から布敎師が派遣されて寺院や學校が全島を通じて少からず建設された。現今ではその敎化は次第に白人の間にも及び、米人は勿論歐洲からの移住民で、佛敎に歸入するものも少からざる狀態を呈して來た。此等白人改宗者の中で、某博士が卍字を非常に禮賛して卍字は宗敎記號として最高の表示たるのみならず、現代生活の規範として此位適切なものはないとまで賛美した。卽ち卍は四つのLが上下左右に組み合せられて成り立つたものである。四つのLとは Light, Love, Life, Liberty



である。光明と、愛と生命と自由は現代人の理想としてまた生活として誰とて是認せぬものはあるまい。また佛敎といひ基督敎といひ神道といひ、何れの宗敎、何れの敎義に於ても此四つを主眼とせぬものはない。卍字が佛敎の代表記號として適當であることは勿論、廣く各宗敎を通して之を標示としても決して差支ない、否之より已上適當のものは考へらぬといふのである。實に面白い說明でまた、よく卍の意義を說明し盡くした妙說であると稱してよい。觀音樣も實は此四つが完全無限に發達した靈體に過ぎぬ、否、觀音のみならず佛陀といふも神といふも畢竟、此四つが圓滿完全に成就された理想の實現を稱したものである。卽ち宗敎の全體は一の卍字で立派に表現されることに歸着する。

白馬寺の譚から始まり、吾國では上宮法王の甲斐の黒駒で開教の對幅が自然に備り、鎌倉佛教に來ると日蓮上人の馬好きに對して、熊谷蓮生坊の西に向ひて後見せぬ逆さ乘りでこれも面白い法華念佛の一對だ。かく三國の教史に馬の關係を述べ立てゝ來ると實に際限もないことゝならう。

教義としても佛身の三十二相中の馬陰藏相、轉輪王七寶の馬寶から、三乘を譬へた、象馬兎三獸の河渡りは素より、密部の馬頭觀音（ハヤーグリーバ）などは馬といふと直に御引合に出る。

然し餘り教壇の人々の注意せぬ教材として馬に關する最も面白いものが二つある。その一つは本生譚で童話などには最上の教材を與へ、他は經說の譬喩で修身談や信仰修養にうつてつけのものである。

第一はかの雲馬本生（ワラハツサジャータカ）だ。昔羅殺女共が寶を取りに來る男の血肉で活きて居たといふ寶の島の執師子國卽今のセイロン島へ印度の隊商が一獲千金の希望を抱いて航海して來たが、羅殺女の魅惑のために直に浮虜となり鐵城に押込められて、明日は爼上に上らんとする危機一髮の所を、菩薩が雲馬卽ち飛行する馬となつて現れて三寶の御名を呼ぶ信心深き商人も救ひ歸つたといふ美しい譚で、舞臺も大きく山も相應にあつて實に面白い話である。その爲かこの本生は印度で盛に行はれて各種の異本も出來、またセイロン島の起原史として玄弉三藏の頃にも盛に話されて傳はつたのだが、亦祕密佛教の中にも織込まれて雲馬は卽大慈大悲の觀世音の現といふことにあり、「ヲムマニ、パツトメー、フーム」の六字無上呪が玆で說かれるに至つた。是が卽ち夫の大乘莊嚴王經（カーランダビユーハ）の大筋である。此經は西藏では最上至高の經典として崇奉されラマ教正依の聖典になつて居る。かくて雲馬本生は聖典史的にも中々趣が深い。

次の譬喩の方では夫の上馬は鞭影を見て旣に走り、中馬は鞭の音で直ぐ走り、下馬は鞭を當てられて漸く走り出すといふ、有名な譬說はよく教壇人の使用する所だが、今一つ雜阿含の中に面白い譬があるそれは馬有三相經と馬有八態譬人經だ。第一は良馬の三種の美點を擧げて修行者の德を贊し、第二は惡馬の八種の狂態、人を嚙むとか、車を倒すとか、橫道に走り出すとかいふのを擧げて、之を佛教を聽聞せぬ未信の人々にあてはめてある實に面白い譬へだ。三種の美點や八種の狂態を玆に記すことは稍繁に渡るから略して置く。

（昭和五、二、教學週報）

二日。宮城の拝賀より退下して後ペツォルド博士夫妻の訪問を受けた。夫人までが來たのは聊か意外であつた。フランクフルトに於けるウィリアム教授中心の佛教會の近狀につき詳細の實狀を聞き、またハイデルワレーザー教授の佛教研究所の昨今をも知る事を得た。兩者と我日獨佛教協會との合同論が獨乙佛教徒間に相當有力で其一切の交渉をペ博士に一任して來たとの話もあつた。夫人からは此頃邦人の妻君となつてやつて來た若い一獨乙婦人が佛教研究に熱中して居るから、近日逢つて吳れとの相談もあつた。

三日。正大の民國佛教留學生陳君が其友李君と携へて年始に來た。去秋朝鮮の佛教大會で識りあひになつた仁山圓瑛の兩長老の噂をした。蔣介石と上海佛教團との面白い關係に就いても可成に穿つた觀察も聞いた。帝大に因明研究中の蘇君が旅から歸ると三人でまた來ると歸つて行つた。

第一日は日本語と英語との交りで會話、第二日は無論全然獨乙語がかり、第三日は筆談も不用で日本語だけだつた。

吾國の學者や宗教家には可成り達者に英獨佛語を話す人も少くないが之に支那語を兼ねたのは、一部の支那通已外には殆どないといふてもよい。吾國が東洋文化のリーダーとして立つには斯の如き有様では如何のものであらうか。

また精神的の日支親善もこれでは前途甚だ覺束なく感ぜられる。

フランスのジュリアヌは老境に入つてから奮起漢學を修めて七十に手が屆く頃、慈恩傳や佛國記のフランス譯を見事に完成した。高祖遠忌の報恩事業の一つとして宦語の一年生となるのも惡くはないことだらう。

馬

十二支の中で人類の文化に最も親しき關係あるものは恐らく馬に指を屈し得やう。宗教に於ても、東西古今に亘り、神話的に將た表徵的に馬は何時も重要の役目を演ずるのを認める。遠く印度に溯りて百匹の馬を犧牲にしたといふ馬祠(アスワメーダ)の血腥き吠陀の儀式を論ぜずとも、一寸町に出ると自動車用ガソリンの商標に、夫のペガサス（羽のある神馬）が使用されて居るのが、直ぐ眼に着くではないか。

佛教に於ても馬は可成りに多く教材として取扱はれて來た。否、佛教の歷史は馬で説明が出來るだらうと迄考へられる。先づ世尊の聖誕に五百の寶馬が生れたのを幸先に、御出家には犍陟(カンタカ)が御用を承はる。成道最後の聖弟子五比丘の隨一が馬勝(アッサジ)尊者で滅後傳教の祖師には何と云つても、馬鳴菩薩(アスワゴーシャ)を看過することは出來ぬ。大教東流、支那では先づ

嚴乎たる操持、決然たる意氣は威武權勢を認むること塵翳の如くであつた。信長の自尊心はひどく傷けられたかたちで、面白からざること夥しかつた。たまたま江州の太守佐々木義弼、すでに敗軍の將となり武田氏を賴つて府內に居つたが、ひそかに慧林寺に匿れ、次いで北國に落ちのびた。その事實が信長に知れたからたまらない。

「おのれ賣僧！　どうするか見よ！」

　短氣の親玉が癇癪玉を破裂させたのである。暴君の暴君ぶりが存分に發揮せられたのである。戰慄すべき狂猛な命令を受けた一隊の軍兵は阿修羅のやうに慧林寺に押しよせた。一山の大衆百餘人は悉く驅り立てられて、山門樓上に逐ひあげられた。グルリツと取り圍んだ兵卒の劍戟は秋の薄よりも繁く見えた。山門の下には薪が山と積みあげられた。やがて四面一時に火がつけられた濛々たる黑烟白煙、炎々たる焰の渦卷、悲愴言語に絕した光景である。

　樓上には快川禪師を正位に、寶泉寺雪峰存、東光寺藍田靑、長禪寺高山壽等の尊宿に次いで、他の隨徒それ〴〵法臘の位次てよつて坐し、みな威儀をそなへ、この烟焰裏に肅として木像の如く動かなかつた。

　禪師は從容として口を開き垂語した。

「諸人卽今火焰裏に向つて坐す如何が大法輪を轉じ去らむ。各々一轉語を着けて末後の句とせよ」

　一人一語、思ひ〳〵に吐露した。それが全部了るころには、火勢いよ〳〵盛に、毒蛇の舌のやうな烈焰が全衆に迫つて來た。而も一人として安住不動の姿勢を崩す者はなかつた。最後に禪師は力强い聲で高唱した。

「安禪は必ずしも山水を須ひん、心頭を滅却すれば火も自ら涼し」

　焦熱地獄そのものとも云ふべき最後の場面が刻々肉迫して來た。やがて凄まじい紅蓮の舌が法衣の袖を舐め始めた。が、恬として石像の如く動かず、つひに四大五蘊を一切空に歸したのであつた。時に天正十年四月三日。それから丁度三箇月の後、六月二日、本能寺も灰になつた。

（佛敎信仰實話全集第九卷三三四―三三六）

×　×　×

　吾々も一つ快川國師に倣つて「讀書何ぞ必しも山水を須ひん、心頭を滅却すれば暑も自ら涼し」と傲語しよう樣ではないか。

　快川國師の前約五百年ばかり、唐の大詩人白樂天が、恰も國師と同じ樣な事を歌つて居る。唯白樂天の場合は極め

◇消夏兩題

暑

「言ふまいと思へど今日の暑かな」といふ古句があるが、よく此頃の實際を穿つたものである。昨日は九十度、今日はまた二三度も昇つた樣だ。眼は眩む、汗は瀧の樣に流れる。海や山が頻りに戀しくなるのも無理のない所だ。

然しこれも考へ樣、氣の持ち樣で存外に辛抱も出來、凌げもするのだ、否、一歩進んで暑熱そのものを存分に征服することさへ出來るのだ。この暑中に軍艦や商船の機關部に地獄の釜の樣な高熱の中で、石炭を焚いてゐる火夫もある。印度の熱地に汽車を動かしてる運轉手もあるではないか。「寒時には闍梨を寒殺し、熱時には闍梨を熱殺す」といふ禪宗の語があるが、青年の意氣に燃ゆる熱で何物をも克服しよう。希望と努力の强烈な精神の火は何物をも燒き盡さうといふ元氣さへあれば日本位の暑さは何でもないことである。

夏の修養の材料としておきまりに出る、甲斐慧林寺の傑

僧快川國師の話は、何時聽いても炎熱征服の絕好のものであらう。幸ひ近刊の「佛教信仰實話全集」の禪宗篇の下卷に淸泉芳巖君が健筆を揮つたのがあるから、それを借用に及ぶことゝする。

×　×　×

信玄（武田）は天正元年四月、三河遠征の途より還つて病沒した。その子勝賴は剛腹にして宿將の議を容れず、奸臣を近づけたので、さしも金城湯地と謂はれた甲斐の勢力に、やうやく龜裂を生ずるに至つた。次いで越後の謙信も卒したので、機、乘ずべしと爲した織田信長は德川家康と聯合して一擧に進擊した。勝賴は一たまりもなく追ひつめられて、天目山の悲劇に武田氏滅亡の幕はおろされた。

叡山、高野、本願寺と、從來僧徒に對して思ひ切つた殘酷な態度を執つた信長も、淸淨な出家らしい出家に對しては、勿論些の害意もなかつた。特に國師號の所有者快川禪師の高德には、そゞろに尊敬を禁じ得ず、禮を致して陣に迎へようとした。しかし禪師は府內の禪僧を慧林寺に會し、議決して謂つた。

「太守すでに在らず、國土悉く奪はれ、法の外護全く失はる、何の面目あつてか他人に見えむ」

善財童子といふ少年の修行者が宇宙最高の眞理を求めんがために世界の到る處に（此中には勿論理想上の國もあるが）五十三人の先覺者を歴訪して最後に大悟徹底するといふのが此聖典の大要だが、善財童子は今や草鞋竹杖に巡禮の旅をつゞけめぐりめぐつて、印度河の海に入る所の海門國に來た、此處に海雲比丘といふ聖者が修行して居る。彼は十二年間何事をもなさず書物を捨て、修行さへ捨てゝ唯海ばかり觀て居つた。海は彼には父母であり、先生であり、亦愛人であつた。彼は海と共に起き出で、海に抱かれて睡つた。悠々たる此の十二年、一碧萬頃、紺碧の海の外には彼には何物もなかつた。かくして彼は終に海の祕密を看破して、終には海そのものになつた。――彼は彼の心が海であることを悟つた。海已上の最大最高の海であることを明かに悟ることが出來た。

其處へ求道の少年善財が訪問して來た。彼は彼が十二年間何をして來たかを說いた。彼は十事を以て大海の祕密を觀察したことを此の求道の少年に敎へた。

第一には大海の寛廣にして量り難きを觀じた。宇宙の眞理もその通りだ。

第二には大海が深くして底の知り難きを考へた。宗敎の奥旨もそれと少しも變らない。

第三は大海が何處に行つても同一の鹹味であることを考へた。眞理といふものは平等である、普遍である。

第四は大海は衆寶を出生することを考へた。吾々に利益を與へ滿足を與ふるのは、何れも眞理から出で來たものに過ぎない。

第五に大海が衆流を呑納することを觀じた。絶對の眞理は如何なる思想も傾向も、之を統一するものでなくてはならない。

第六に大海の水の色は種々に變化することを思惟した、紫の色、紺碧の色、時には黄金の色、名狀し難き種々の色彩の變化を考へた眞理は其發現に種々の相がある。

第七には大海が衆々の生物の生息する所であることを考へた。眞理の中に一切の生活がある、すべての生命は眞理に依らねばならぬのだ。

第八には大海は鯨などの巨大な動物をも、多數容受して少しも狹きを感じない。眞理は何物をも容れ得る、何物でも眞理の中には納められてしまふ。

第九には大海は如何なる豪雨も之を受け入れて何ともない。眞理の前には如何なるものが來ても之が邪魔なものに

て太平の時代で、其上事實も平凡で前の話の様な凄味はない。然し暑氣拂として吟詠すべき無二の詩と云ふて好い。詩は當時の高僧であつた恒禪師に贈つたもので、特に「苦熱に恒禪師の壁に題す」と斷つてある。

　人々暑を避けて走りて狂するが如し、獨り禪師の房を出でざるあり。是、禪房にも熱の到るなかるべけんや。

　但よく心靜かなれば卽ち身涼し。

　輕井澤とか館山とか、あの海、この山と夏になつて騷ぐのは古今も人情に變りはない。然し達人は世の爲、人の爲、そんな有閑階級の流行に追隨する必要もなからう、尤も增上寺だつて護國寺だつて、都である以上、相當暑いには相違あるまいが、其處に居る高僧の精神が水の様に澄み切つて居ればこの位の暑さは何でもない。身には常に萬斛淸涼の風が袂に滿ちて居よう——但よく心靜かなれば卽ち身も涼し！

海

　必ずしもバイロンや李白を說かずとも、海を詠じた詩や歌は、古今東西に亘りて數卷の詩集をなすに足る程もあらう。之に海を題とした繪畫を加へたら、藝術上海の占める範圍は可成に大きいものとならう。音樂や劇に於ても海に關するものは相當あるが、直ぐ記憶に上るのは、例のワグナーの歌劇「飛べる和蘭人（フリーゲンホルレンダー）」の初幕の荒海の情景だ。茫々たる人生、底もなく詛はるゝ懷疑と失望との運命、死を欲して死することを得ず、生きては罪の重荷に惱み、果もしらぬ流轉と漂浪に苦難の宿業を表徵した大海原は、よせてはかへす大波小波に悠久の惱を示して居る。其處に詛ひの魔として世人に怖れられつゝ血紅の帆を揚げて、目的もなくさまよふ船に幽鬼の如く歌ふ「南風吹け」の悲しき叫は、人間の絕望呪詛不安の深酷と幽鬱とを暗き海の一面として如實に語つたものではないか。海を詩材にしたことは同じでも同じ樂聖の「トリスタンとイゾルデ姬」の第一場に於ける姬を送つて敵の國に航すトリスタンの船では、果もない神祕の愛を大洋の廣さと深さに示さして居る。是もまた海の一面であらう。吾國の天竺德兵衛や碇知盛などに來ると、海の趣もその意義と共に大いに方向を變へて來る。

　宗教上の文學では佛敎ほど海に關する豐富な材料を有する經典は少なからう。眞如の海、本願の海、敎理そのものが海として顯はれて居る計りでなく、面白い譚や表示や譬喩が到る所に說かれる。今其一つとして華嚴經行願品の海の敎を一寸書いて見る。

板橋の殘月、曉沈々たり
風露は凄々として禁署深し。
城柳宮槐漫に搖落するも
悲秋は到らず、貴人の心に。

と歌つたように、秋が來ても葉が落ちても一向無頓着の人も少くない。回想もなければ、感慨もない、隨て勿論反省のあるべき筈はない、自覺の生ずべき何物も持たない、この兒童の樣な無頓着の有樣は、人として最も修養のない、精神のない狀態といふてよい。

老境に入りて、秋の實相の寂しさを味はつて、少壯時代の無頓着を回想したのにこうゆう詩がある。宋の楊萬里の作なのだ。

舊は秋を愁へずして唯秋を愛す
風中に笛を吹く月中の棲
今の如き、秋色渾て舊に似たるに
秋を悲まざらんと欲するも自由ならず。

唯秋を愛して、凋落の味も、遷流轉變の世相も知らず、淸風の裡に、興じ戲むれ、月下の歡樂を極めた無自覺の時代は何時かは痛切に感ぜらるゝ時が來る。

詩人や歌人は特に秋の悲を理解する

心なき身にもあはれは知られけり
鴫立つ澤の秋の夕暮

といふ歌は決して西行法師一人の心ではない。惡に惱む人、事業に躓たる人、別離に泣き不幸を喞ち、悔恨煩悶に苦む人々、少くとも世間に出でゝ人間と觸れた人々、何事も知らぬ御坊樣で最早ない人々には、秋の味が切々と身に浸みて來る。精神に受けた古痍も新らしい疼痛も、しとしと降る秋雨に、やるせもなく惱を增して來る。愁と云ふ字は秋の心秋の悲は玆で最も強く人間を壓迫して來る。秋の詩や歌や俳句に人を感ぜしめるのが多いのも一つはこの理窟から來る。

凋落する人生の眞實は秋が最も明かに示して吳れる。遷變無常の僞りない悲さは、秋が眼前に見せて吳れる。この人生の眞實、世界の轉變から、我々は眞面目に還へる。春陽三月、櫻に醉ふた榮華の酒も、水の樣な月光の下に眞面目に醒める。天外流落、親も忘れ妻子も捨てゝ、功名と榮華に憧れた人も、底もない懷しみを以て懷鄕の淚が、艸頭の露と共に止度もなく流れる。

夜に入りて秋風は井梧を舞はしむ
敗荷哀愁容をなす

ならない。

第十には大海は何時でも充滿して、增減といふ樣なことはない、かく觀じて絕對の眞理を思ふと眞理には由來一毫も增すことなく、また一毛も損することはない、千古萬古常恒に不變である。

彼はかく思惟して、世の中に海より深くして廣いものがあるか、海の樣に包容力が偉大で、永久に增減のないものがあるかと更に考へた。――眞理より廣くして深いものがあるか。眞理以上に包容力が偉大で且つ永久のものがあらうか。

彼はかく考へて、その眞理なるもの卽絕對の眞理なるものは、彼が思惟しつゝある心その物であることを確に悟り得た。心の廣さ深さ、其聖賢と同じき平等の性質、如何なる寶をも無盡藏に出し得て諸種の傾向矛盾を統一し、種々自在に活動し得、生命の根本として何物をも包容し得ることを悟了した。卽ち、永遠の實在は唯吾心そのものであることが的確に悟了することが出來た。

海には藝術があり、哲學があり、海には宗教がある、否海は藝術哲學そのものだ、宗教そのものだ。

（昭和五、七、芝中校友雜誌）

◇秋窓閑筆

白露の朝に、虫聲の夕べ、秋は日に日に、ひし／＼と我等に逼つてきた。一葉また一葉、昨日は今日と、凋落の慘めさを、次第に深く示しつゝ、散り去り散り來る、紛々たる落葉の間から、最後の華やかさを語るやうに黃金色の公孫樹や、楓槭の錦に、斷末魔の悲壯な色を見るのも、最早遠くはあるまい。老い行く秋よ逝かんとしつゝある秋よ、冷かな寂寥の手を擴げて、容赦もなく、我等を哀傷の鄕に引いて行くその蕭殺の姿の如何に寂しきよ。

然しこの物哀しき秋も、歡樂の美酒に醉ひて、權勢の黃金の前に舞踏する人には、何等の哀しさも寂しさもあるまい。少壯の元氣に驕りて順境に得意の人々には、月夜に杯を重ねる喜はあつても、さびれゆく虫の音に人生を味ふ丈に、心に修養と餘裕とが出來て居ぬ。彼等は頭是なき子供が、母親の死骸の前に捧げられた、美しい生花を喜びて、笑ひ戲るゝと、あまり違はない。人生と自然とに對しては無邪氣ではあるが甚だ無知である。

の融通の利かぬ道德先生の不平主義でもない。勿論不平の極、呪咀の結果、自暴自棄の人間を茶にした放蕩自墮落の獨善主義でもない。

我々は正しい眼で天地生滅の實相を見ると共に、更に正しい心でその生滅の依て來る所、天地の心の何物たるかを明に捉みたい。凋落し去り遷流し來る現象の彼方に、偉大なる常住の實際が炎々輝きつゝ、常に我々に何物かを與へんとして我々の取るに任せて天地の祕密を與へるものがあるのを明かに認めたい。

草木纔に零落すれば、便ち萠潁を根底に露はす、時序凝寒と雖も陽氣を飛灰に回へす、肅殺の中に生々の意、常に之が主となる、卽ち是以て天地の心を見るべし。

と古人が云ふたが、この天地の心を大觀して、秋の景色に面して行きたい。此天地の心が了解されたときに散る紅葉、白い菊花、皆共に樂むべく、愛すべく散るも咲くも皆この大なる天地の發現であることに限りもない尊さと美しさが考へられて來る、自然の觀察はこゝで眞純の哲學となつて、亦遂に純正の信仰宗教となつて來る。

（昭和五、九、教學週報）

◇獨有（荻原雲來氏）の歸鄕を送る

海上にはネルソンを凌駕する大英雄が出で、陸にはモルトケ何のそのと云ふべき大戰術家が現はれた今日の大日本帝國に、泰西の老學者輩と比肩して遜色なき樣な人物のまだ／＼甚少ないのは何とも殘念の次第ではないか、理科や醫科の方では大分研究が世界的になつて來て、世界の學壇に橫行濶歩して吾國の爲に氣焔を吐く人々も稍見受るが、哲學や文學と來ては實以て話にもならぬ憐れな有樣であるこの憐むべき吾國學界の寂寞を破らむ爲に、吾が親友獨有は、今歸朝するのだ、彼が六年の間、蘊蓄し精錬した學術を以て、吾國を莊らむ爲に今歸朝するのだ、吾宗はこの有爲な世界的の一學者を得たことを深く賀してよかろう、大に誇つてよいだろう、淨土宗大學の講堂は有體に言へば實に豚小屋同樣で、各宗や政府に對して之が大學で候とは何しても言へた義理ではない、勿論獨逸の坊主學校、例せばミュンステルやフライブルグの舊教學林に附屬して居る眞物の豚小屋は、もつと遙に立派なものだ、しかし此間獨有

蘭干立ちて斜陽の盡くるに至り
一片の御心は砌蛩に屬す——

我等は玆に人間が少年から進みて思慮ある壯年の進んだ人生の味を見る。玆に宗教の閃光がある。人生の愁や煩悶や苦惱や、渾てを如實に露骨に體現した蕭殺寂寞の秋に靜かな考察と反省が生れる、この反省の中に無限の慚愧もあれば、眞面目な悔恨もある。

今日となりて菊造らうと思ひけり

などいふのもこの秋風悔恨多き一面を告白したに過ぎぬ。

然し徒らに悲みて、漫りに感傷に耽る多感詩人のメランコリーが必ずしも秋に面する人間の眞實ではない。

失望と落膽と呪咀と厭世とを以て、秋に面する人々は、かくて猶人生の眞諦に觸れぬ。哀傷鄕に墮落して、その冷たい薄暗い味に、衰へ行き、痩せ行く人々には、別に天地の大道あるを知らぬのである。

悲しい人生遷り行く世相に、泣き哀み叫び狂ふ、馬鹿々々しさを見た一種の人秋に面してその凋落の眞相轉變の實狀に全然愛想をつかした一種の人は、浮世の人力の如何ともすべからざるものである丈にしかならぬものである。浮世三分五厘の哲理は、此處から生れて、見當違の達觀をすることゝなる。古い昔支那の竹林の七賢などは、此仲間の大將株である。人生を茶にし、否酒にして、ゆつくりとデカタンの氣分に漬り、勝手放題の氣儘生活を逐うとするのがこの手合である。つまり此思想は夫の自暴自棄の變態で、これに高慢自尊の氣分と、無責任の逃晦主義とを調合したのに過ぎぬ。母の喪に瓦を叩いて歌つたといふ老莊主義の慘めにも且つ絕對的の態度はこゝにも見られる。

希望もなく、努力もなく、落付きもない。この茶にした態度不眞面目の無責任の生活で秋に面する人々は果して幸福であらうか、强烈な超道德の酒で良心を暗まし、超世間の放縱な行爲で一時の悲愁を隱してゐても、酒いよ〱强くして愁いよ〱强く、行益々奇矯にして、苦益々加はつて來る。かくて彼等は眞實の秋をどうすることが出來やう、我々には玆處で今一步の轉進開出を試みねばなるまい。

凋落の天地に悲み仰ちて厭世の憂欝症となるのも困るが、また之が爲自暴自棄に陷り、一種の脊德狂と化するのも猶甚だ厄介である。玆處で我々はこの秋に面して最も正しい且つ最も幸福な態度を取りたい。詳しく言へば我々は、秋に無頓着な肉感主義、官能主義、物質主義でもなければ、また徒らに悲憤哀傷を事とする厭世的の文藝主義や神經質

しい學者的の品格が確に其原因となつて居る。

八月一日だつた、彼はロイマン翁が重ね重ねの勸告に從ひて、形式的に「ドクトル」試驗を通過することにした、彼と同時に試驗に應じた各科獨逸の受驗生等は、絹帽と燕尾服に嚴めしく身を固め、戰々兢々として試驗場に上つたのに、彼は獨り山高帽子に古きフロツクコートを著け襟飾さへ雜色のものを用ゐて茶會に招ばれた樣に「綠の卓子」(獨逸大學では試驗場に用ゆる卓子に綠色の布を掛けるのが古例だ)に着いたのだ、受驗も極めて無雜作で、宗教史の受持某老教授の如きは、日本の宗教や、佛教などのことを一寸彼に問うて「御蔭で大分有益な談話を聞いてありがたう」と言うたそうで、是も丸で茶會といふ風だつた。

其夜は久しぶりで沛然たる大雨だつた。連日の炎暑にこの雨で疲れきつて居る予が精神が蘇息した樣な所へ、獨有の受驗が大滿足を以て結了したので、余は何とも言へぬ愉快を感じた、其上吾がロイマン先生は特に其最愛の門生のために、此地在留の日本留學生は勿論、門生知己の人々を招いて、大學前の大料理店ゲルマニヤの別室で、盛に彼が爲に祝宴を開いてくれたのだから、予が喜悅は實に此上もなかつた、ロイマン先生は主客杯を擧ぐる間に、獨有が六年の精學と勤勉とを口を極めて賞嘆し、其上彼が「ドクトル」論文として提出した、瑜伽論梵文出版に關する顚末や、彼が積年の苦學薀蓄を親切に記した刷物を來會の諸客に配布し、また廣く之を歐州學壇の同僚に配布した、斯る厚意は固より特別の異例であつて、門弟の「ドクトル」收得を賀する厚き此の如きは何處にも比類のないことであつた、一體ロイマン翁は極めて勉强家で、學風も極めて綿密の人であり、輕々しく人に許さぬ側の人であるから、大抵の人はとても翁の賞嘆に價すると云ふことは出來ぬ、所が獨有に對しては殆ど全幅の同情と稱讚とを捧げて惜まぬのは、全く彼が苦學と勵精が非凡の爲である。

予は固より獨有の人物其物に對して親友として衷心の尊敬を捧げて居るので、學位とか稱號とか階級とかには何の意味を持つて居らぬ、が、吾々が佛教聖語の爲には父とも云ふべきロイマン先生が非常に喜ばれて、何とも云へぬ滿悅の色を浮べて愛弟の學位收得を祝せらるゝのを見ると、實に嬉しくてたまらぬ、彼が學位は歐州第一流の學者が至愛至敬の紀念として贈つた勳章と見てよかろう、篤學溫厚の老先生が賞讚と同情とを結晶せしめて衷心の喜悅から贈つた紀念品と見てよかろう、茲に於てか、予はこの特別の

は確に世界の學界に公表して恥かしくない完全な淨土宗大學の教授であることを忘れてはならぬ。

彼は勿論最初から「ドクトル」の學位などは眼中になかつたのだ、勿論こんな兒戲に類する看板が、眞正の學者に必要な筈もないのだ、實際の所、彼の力量は紛々たる獨逸の少壯「ドクトル」連に比して、どの位上だつたか知れぬのであつた、彼が獅子賢（ハリブハドラ）の大品般若釋論の研究の如き、彼の樣な明晰な頭腦と、完全なる大藏の智識がなければ、到底出來た仕事ではないのだ、稱友の倶舍釋論もそうで、論藏智識の皆無なる歐州學者には一紙も讀過することは出來まい、最も吾宗學の爲に祝してよいのは彼が瑜伽論の梵本を發見したことだ、是は確に佛教聖典史討究に一生面を開くべき大功績であると云ふても斷じて誣言ではない、特に其發見した梵本が現存梵本中、最古に位するもの〻一であるのだから、彼の功績は一層大さを加ふるのである、彼がケムブリツヂの圖書館で漢譯の瑜伽論と、一千年前の古貝葉とを對校して、驚くべき手腕を揮つて、梵本の缺損を補足し、難句を通し、亂雜に堆積せる葉片を整理した技倆に至りては、白眉皓髮の老大家も唯舌を捲て驚嘆するより外はなかつた、兜卒の內院で那伽の禪定穩かな瑜伽の飜傳者遍學三藏も、この古梵文の發見を洞見したら定めて一大欣笑を發せられたことだろう。

であるから、眼のある學者連は夙に彼を畏敬して、窃に老學者を以て彼を遇して居つた、「ケムブリツヂ」のベンダヲル博士や「ガン」のプサン博士や「ライデン」のスパイヤー博士などは、現時佛教梵語學の大關横綱とも云ふべき人達であるが、彼に對して頗敬服して、時々著書を贈つたり質問をよこしたりしたのである、ベンダヲル博士の出版した、近時の好書大乘集菩薩學論の序文や、附註を見るとこれがよく判る、吾がロイマン翁もまた彼を無二の愛弟とし、友人として彼が「ストラスブルグ」にあるのを窃に誇つて居つた樣だ、かくて彼は大學に一學生として籍を列ねて居たが、優に無位の一教授であつたのだ、彼にして若功名を欲することが急で、自ら賣ることが巧であつたならば、彼が名はとうに世界に知れて居たのであらう、然し彼は良賈の深く藏して賣らぬと云ふ流義であつた、十二分の力量を二三分しか露現せぬ人物であつた、茲が彼の大に貴むべき所で輕薄自ら賣ることの急なる今日、學者としての彼の品位は實に貴むべきものではないか、ロイマン翁が酷く彼を愛敬して居つたのは、無論彼が學問ばかりでなくこの奥床

たのである、但し茲で甚だ殘念であるのは予が亡笠原師の十分の一、百分の一に及ばぬ屑物であることである、一宗は予の爲に甚しく損失したことが多いだろう、然しこの代りに獨有の方で、二倍三倍の利益をして居るのだ。

一宗の上下は、今や一致協力、教學の恢興に盡力して、各方面に新智識の人材が活動して居るのは、各宗に多く其比を見ない今日、先輩の諸大德道果益圓熟し、新進の秀才西に東に萬丈の英氣を呑吐して武者振勇ましく打ちて出る今日、獨有の新に歸朝するのは丁度充實精鋭を以て威風世界を動かして居る東郷艦隊が英國あたりで新造された一大甲鐵艦を迎へるようなものだろう、泥船破れ船の予も、其中にはこの榮譽ある艦籍の末班に列りて、閉塞船位の御用を勤める時も、何時かは來るだろう。

（明治三八、八、六、淨土教報）

◇梅原融君の逝去を悼む

午下「東京朝日」を借讀して龍北の逝きたるを知りぬ。暗雲低迷、寒書窓に亂颾す。僕が東京を發するや、經緯會の同人神田の寶亭に集まれり。彼等聲言して曰へらく、僕を送ると、而も要するに快く喫ひ、快く語り、漠然として相對せしに過ぎず。龍北また固より座中にありき。

僕海外に放浪する旣に八年、野店の濁酒山家の寒衾、往々にして經緯會を懷ふことあり。智多星に似、入道雲龍に似、霹靂火黑旋風に類せる幾多の怪髑髏、紛々明滅眼前に横るとき、必らずまた一箇秀麗玉の如く、淸高溫雅の王孫柴大官現ぜざるなし。龍北是也。

僕去りて已來龍北の事業甚大なるものあるを傳ふ。知らむと欲して未だ其詳を得ざるや久し。龍北の文や詩や大瀑彩雲の奇、いよ／＼完きに近きを聞く。讀まんと欲する切にして、一も之に親むを得ざりき。而して今最讀むを欲せざる底を讀み、實に知るを要せざるものを知らざるべからざる時至れり。龍北の訃及其葬を讀で而して五百の子弟棺を護りて葬し、跪きて香を奠するに至り、拍案大喝、龍北の龍北たる昉めて之あり矣。

黃昏市に出で、白石竹數朶を購ひ、麥酒三壜を提げて歸り、机に對して且つ讀み、且つ念じ、且つ飲み、且つ思ふ。雲益暗、雨愈密、夜色旣に滿窓を壓し、龍北逝けるか我存

意味で、盛に彼が學位の收得を賀するのだ、かくて予は嬉しくてたまらぬので、衰弱した心身に害のあるのも委細かまはず、矢鱈にミュンヒネル麥酒の大杯を滿引し、數本のライン酒をも打ち倒した。

思へば永い間であつた、予は五年といふ年月、彼と起居を同じくして佛教聖語の攻究に力めたが、彼が精にして專に、力めて倦まざる非凡なる精力は、どの位予を警策したろうか、予は一時は近世の「ロマンチシズム」に醉ふてワグネルに熱中しグリルバルツエルを嗜むだこともあつた。一時は教界の實際問題に狂氣になつて、基督教牧師の家に屢宿泊したこともあつた、或は露國革命黨の健兒等と親み、社會黨の田舍政客と友達になつて、獨逸當時の親露政策に、螂臂を揮ふて役にも立たぬ正義と人道を呼號したこともあつた、或は自由思想家の群に投じて、彼等が基督教に對する不平不滿怨恨の大なるに乘じて、窃に佛教の傳道に腐心したこともあつた、こんな風に一面には覇氣、一面には野心、野次馬にして純一無雜ならず、學問の方では荒むことが甚しくて進境の頗遲鈍であつた予が、今日尚書卷を手にして、佛教古文學の前途におぼろげながら、尚一縷の光明を認めることの出來るのは、全く獨有の感化である、此點から見れば彼は親友である計でなくて確に一の良師であるのだ予が夜三更、田舍政客と論談し、亂暴なる露國學生と飮み、教界の不平黨とカツフエー店に氣焔を吐いて盛に專制的風潮を痛罵し、教權主義に憤慨して、歸つて來るときも「ニーベルンゲン」の大樂劇に恍惚として聲曲の妙に自らなるジークフリートの獨吟を禁ずることが出來ずに下宿屋の階上に昇り來るとき何時も、獨有の窓には靜に明かな書燈が點つて居るを見るのだ、此時、予が魂の底から明かに耳に響く聲がある「海旭汝も亦淨土宗の一學生ではないか。」と。

彼はかく學問の方面に圓熟したのみでなく、道德の方面にも非常に模範とすべき性格を、この六年の間に養ひ得た、彼が溫厚の風や、謙讓の德や、眞摯にして多く語らぬのが、幾多邦人の留學生をして君子人と呼ばしむるに至つた、玆で予は故大マツクスミユーラーが、ある書物で非常に南條老師と亡笠原師とを賞讃して、學問のみでなく、其操行が紳士養成の淵叢たるヲツクスフオードに於て、二人に比肩するものがない、實に好箇學匠の模範だと書いてあるのを思ひ出さずには居られぬ、南獨の現存せるマツクスミユーラーは其愛弟なる淨土宗の南條に對して同一の賞讃を捧げ

成り、佛譯亦世に行はれて、佛教の深遠なる道德漸く泰西人の味う所となれり。夫のショウペンハウエルの如きも、先生の羅句譯を其書集中に藏したりといふ。今や佛陀の慈光日に日に歐西の天に明かに、反抗怒號するもの歸依渴仰するもの頗盛に、佛典研究の隆昌は、大學の講壇よりして下山村の酒店に及ぶの勢あり。而して此の如きもの、一に其端を先生が摯實なる、パーリ聖典の公刊に發せる也。佛教徒たるもの、夫大に先生に感謝する所なくして可ならむや。宜なり、暹羅、緬甸、錫蘭等の佛教諸國に於ては、先生の名雷の如く振ひ、民人の崇敬、人の意表に出づるものあるや。嘗て之をフランクフルトの佛教詩人、アルツールプラングスト博士に聞く。丁抹某商船、南印度の某港に寄泊す。一暹羅人あり、來りて丁抹の旗影を認め、水夫等を揖して曰く。卿等はコツペーンハーゲンより來りしにあらずや。敢て問ふファウスボェール先生尙健在なりや否やと。

先生の閱歷功動に至りては、甲谷他出版の大菩提會雜誌(一千九百年四月號)に極めて謙遜なる自傳あり、今又前記プングスト博士椽大の彩筆を擧げてフランクフルト新聞(一千九百八年、六月十日水曜日朝板第二)の文藝壇上、大に先生の功勞を謳歌し、深痛なる弔意を表せり。今此兩者を參酌し、傍ら自家の知る所を補添して、故山の教家學匠と共に、先生が遺勳を頌し、以て薄か追悼の誠意を申述べんと欲す。

先生は一千八百二十一年九月二十二日、丁抹邊陬の一牧師の家に生れぬ。方に是邦曆の文政四年、伊能忠敬の日本實測圖の初めて出てたる時なり、稍長して、アルフース(丁國第二の大都)の羅句語學校に入り、六箇年間の苦學を積み、年十八にして甫めてコーペンハーゲン大學に籍を置き、主として神學を修め、十年の後、神學博士受驗候補生となりぬ。而も此間、先生の尤趣味を感ぜし所は、教典註疏の講究にあらずして、實に言語學に存せり。其一たび丁國の大言語學者ラスクの著書を繙きて、印度語學及文學を論ずるを見るに及び、決然ハムメルクヒ及びウエスターガルド兩教授に就きて、梵語を修め、研鑽約十年の長きに亘れり。次でパーリ語の學修に入りしが、當時此語を修むる、頗至難に屬し、指針に備ふべきもの、唯ビユルヌーフラツセン其他二三の著あるのみ、文法書の如きも、極めて不完全なるクローのパーリ文典一部を賴り、獨刀梵語の力に依りて、研究を大成し、遂にラスク教授が錫蘭より得たる、パーリ貝葉古寫經の解讀を試むるに至れり、奮勵此の

するか。淡夢々として唯幽馨素影の存するを見るのみ。

（明治四一、一二、新佛教）

◇ヴイゴー、ファウスボェール先生を哭す

今より二箇月の後、コーペンハーゲンに於て、第十五萬國東洋學會の開催の開催あり。各國の碩學鴻匠は之を機會に、東より西より、列星の光暈を爭ひ、群峯の峻峭を競ひて風光明媚の海島、ハフイニヤの古港都に雲集し、穠麗なるローゼンボルグの邊、雄壯なるクリスチナの埠頭、講演一たび開けて、園裡の百花、其芬芳を擅にする能はず、灣頭の濤波また其雄大を譲らむとす。盛觀雄景、蓋し今より想像するに難からず。而して此等の名流大家は、開會の劈頭、丁抹學藝の淵叢として、斗然北海の雄鎭たるコーペンハーゲン大學に對して、盛に其榮譽を頌すると共に、亦必ずや同大學の元老として東洋學の泰斗として、學徒の瞻仰する一老教授に、功勞旌表の辭を捧ぐる其參列目的の隨一に數へたりしや疑なし。然るに此老碩德は、盛典に先つ僅に十週、忽然として白玉樓中の客となれり。世界の學者は、洋々たる歡聲の裡、莊嚴なる式場に、雪白の頭上、月桂冠を受くるの人を見る能はずして、却て深痛なる悲を籠めたる花環を、新しき墓前に捧げざるを得ず。嗚呼是何等の遺憾、何等の恨事ぞや。一千九百〇八年六月三日ヴイゴー、ファウスボェール先生は、八十七歳の高齡を以て、溘然として遠く逝けり。

夫苟くも東洋學の一端を窺ひ、若くは宗教學の多少の知識を有するもの、誰かファウスボェール先生の名を耳にせざるあらむや。先生がパーリ語學に於ける、長に東洋學史の重要なる紙幅を充塡すべきもの。萬世に亘りて朽ちざる開拓の功勳に至りては固より永く學者の感銘すべき所たり。特に佛教徒にありては、先生が眞摯にして同情溢るゝが如きパーリ聖經の公刊に對しては、殆ど宣教弘法の大德使徒として尊敬を捧ぐるの責なしとせず。獨勉梵學の大祖アルブレヒト、ウェーバーが佛教倫理の寶函と讃揚したる、法句經の原文を、甫めて歐洲に公刊したるは誰ぞ。厖然たる本生經全集を出版して大に佛教聖語研究の根基を强固にしたるは誰ぞ。是我がファウスボェール先生にあらずや。先生が法句經の羅甸譯一たび出でゝ已來、英譯次ぎ、獨譯

の祝賀論文として、之に付き丁文の論稿を艸し。一千九百〇三年、一巻をロンドンに於て出版せり。又土俗學につきて大に趣味を有し、丁文數篇の著あり。其中丁抹古代夜警の俗謠を集めたるもの、廣く愛讀せられ、數版を重ねたりといふ。

先生の門下に二大俊才あり、一は故トレンクネル氏にして、那先比丘經を刊行し、パーリ雜纂の大著あり。人咸く、其夭折を痛惜す。恨事宛も大馬翁門下の笠原研壽師に相似たり。其苦心音寫したるパーリ法聖典今尙コーペンハーゲン大學に珍藏す。他は卽アンデルゼン博士なり。先生が本生經大集の總索引を作成し、法句經增訂再版につき、力を致すこと多く、常に先生を助けて後進を指導せり。其好著パーリ讀本は廣く歐洲各大學の教科書として採用せらる。先生退隱の後、衣鉢を襲ふてコーペンハーゲン大學の梵語教授たり。謂ふに先生が蒐集の資料及び遺稿は博士の手によりて大に學界を稗益せしむ。先生遠逝すと雖。此良資あり。學界以て慰むべく、丁抹の文運、亦其損害を補ふに足るべし。

プングスト博士の記する所に依るに、先生は終生一身を學術の講究に委し、家庭の淸福を享受するの外は、世の交遊を避けて、喧雜の生活を樂まず。夫人は英國の產なり。賢明貞淑の名高し。子女亦才藝に秀ず。長女某孃は永くグリーンランド都督の家庭教師たり。嘗てエスキモーに關する記事を、フランクフルト新聞に投じて、大に世の稱贊を博せり。

先生が佛教に對する至大なる同情は、法句經再版の題下に拈出せる、一基督教官立學校長の言に徵して充分に看取するを得べし。曰く『佛陀を考ふること愈深ければ愈深く彼を愛するに至る』—— "The more I think of Buddha the more love him"——是實に、先生が大慈世尊に對する告白にあらずや。夫の本生經大集の序文にも、將自傳の中にも、先生が大聖牟尼を愛慕し稱嘆して、其幽玄高妙の倫理に渴仰の情深かりしことは筆墨の外閃々として輝くものあるを見る。謂ふに先生が眞摯高潔の人格はパーリ聖典の研典の研究と共に益大に、法句經初版已來四十五年の後、再版の出づる頃には、性格益圓熟の境に入り、佛陀に對する觀念、更に一層の崇拜を加へ來りたるが如し。

予や先生の高足アンデルゼン教授と相識る。トレンクネル謄本に就きて、同教授の勞に負ふもの少しとせず。而も先生が童顏仙骨の溫容に至りては、夫の雄偉壯大なるスカ

如く、辛酸幾年。一千八百五十五年初めて法句經の原文を出版し添ゆるに忠實なる羅甸譯を以てせり。時に我安政二年。タルナーの摩訶洹婆公刊已來、歐洲に於けるパーリ聖典の批評的公刊實に之を嚆矢とす。

法句經の出版は學界に一大反響を興し先生の名漸く東洋古學の文壇に重し。爾來、先生は其一生の大業に從ひ、徐々に資料を蒐集し始めぬ。是卽本生經大集の出版也、大集公刊に先つ數年、四五の本生經抄を世に公にし、且つ其英譯をも出したりしが、一千八百七十七年に至りて、大集第一卷初て世に出で、二十餘年の後、第七卷就りて、玆に此大事業完結したり。其勤勉不撓の精力と忍耐とに至りては、常人の企圖する能はざる所ならずや。抑先生が此大業を成就すにつきては、障碍困難一にあらざりき、ロンドン其他の貝葉謄本魯魚の訛誤は甚多し到底先生の意を滿たすに足らざりき。此時にあたりて、錫蘭古代の正本につきて精確なる音寫を送り、始終偉大の補助を與へたる大學匠あり。錫蘭の高僧、須菩提師卽是なり。德孤ならず必らず隣あるものといふべし。先生は此恩を記せんが爲に、大集の第一卷を此高僧に捧げたり。公刊の費用に就きてはウエーバー教授の大に同情を寄するある。普國學士院を動かして、每

卷一千馬克の出版費を補助せしめ、丁國政府又大に之が爲に勵まされて、各卷二千クローネの下附を許せり。而も此寬大なる扶助は、五卷を超ゆるを得ずとの條件なりしを以て、第六第七兩卷の世に出づるに及びて、先生の苦心は實に非常なりき。然もプングスト博士が、フランクフルト新聞紙上の一大論文は大に學界の輿論を喚起し、優に此困難を解除し得て、丁普の兩國、再扶助を續け、一千八百九十七年、全部の刊行完く終を告げ。學界の至寶は玆に成りぬ。

本生經大集公刊の間、先生は又スッタニパータを出版し、之に精細親切なる字彙と釋義とを附したり。今尙學徒の珍襲する所なり、次々同經の英譯を東方聖書全集の第十卷に於て公にし。廣く世の宗教學者を裨益せり、また大英印度局に於けるパーリ古寫本の惣目錄をも作成したり。先生がパーリ語界に於けるの功勳は、此の如し、ヲルデンブルヒリスデヰド兩大守成の兩大守成の恩人に對しては、方に開拓者の榮位にあり。故フエール、ハーデイ等の諸勇將と比しては、實に宿師を以て推すべきもの。死に至るまで、居然パーリ語學の元老として、學界の尊敬を一身に鍾めたり。

先生また摩訶婆羅他に精通し、印度神話につきては、一家の見を持す、一千八百九十七年、コーペンハーゲン大學

するの意に出でたるか。

　教授が學識を傳へ、德業を讃する、日耳曼の諸大學、友寔に多く、門下また濟々の多士に富む。豈また後學黄口、予が如きもの〻筆を是借らむや。唯、日東の地、指を東洋古學の鼎に染め、西梵の學を修むるもの、必らずしも景仰の情を予と共にして、遠く哀悼を捧ぐる人なきを保せず。卽謹で、其傳歷を撮みて、憑弔の微衷を表せむと欲す。

　リヒヤード、ピッツシエル教授は、一千八百四十九年一月十八日、ブレスラウ市に生る。此地は實に北方日耳曼人氣慨の粹を集むるの地なり。市の聖マリヤ、マグダレナ中學を終つて後、ブレスラウ大學に入り、古文學及梵語を精修し、一千八百七十年 De Kalidasae Sakuntali iecensionibus（カーリダーサ、シヤクンタラーの、諸校本に就きて）の羅甸語論文を提出して、ドクトル、フキーロソフキーの學位を獲たり。此年七月恰も獨佛の平和破れ、翌月曼兵既にストラスブルグを圍み、普人與國の意氣天を衝くものあり。年少梵學者の新ドクトルが愛國の志も凛々としてまた儕輩に讓らず。直ちに劒を把りて砲雷彈雨の下に馳驅したり。翌年平和克復し、普魯西王國、全獨逸を統一するに及びて、教授は伯林に出で、大ウエーベル翁鉗鎚の下にありて、其百錬の精金をして、層々光輝あらしめぬ。次で教授は英國に趣き、牛津と龍動とにありて、主としてカーリダーサの戲曲を研究し、力を古謄本の繙讀に專にせり。千八百七十四年、郷里の大學に入りて始めて講師となり。幾もなくキール大學の聘する所となりて、助教授に擧げられ、次で正教授に陞進し、同八十五年に至り、ハルレ大學に榮進したり。一千九百二年、大ウエーベル翁逝きて伯林大學の梵學講座空席を生ずるに及び、推されて、この榮譽ある講壇を擔任し、普國のケハイメル、レギールングス、ラート（樞密顧問）の重職に叙し。又伯林學士院會院の會員となれり。學者としての榮譽、蓋至れりといふべし。かくて、氏は獨逸首都の學園に重鎭として、後進を薰陶し、時に精巧卓拔の報告を出して、學界の景仰を一身に鍾めたり。大英及佛國の亞細亞協會が、教授を名譽會員に推し、米國ニユーヘブンの東洋學會、また之に倣へるに見ても、教授が學會に於ける重望、推するに難からず。

　教授の得意とする所は、古印度俗語、卽プラクリツトにありき。晩年佛教の研究に力めて、頗有望の著作あり。グリユンヴエーデル博士、及ルコツク氏が高昌の故地を發掘して、巨多の佛教古文書の斷片を伯林に齎らし歸るに及び

ンデイナビヤの風光と共に、渇仰の情、寤寐徒らに馳せて、相接するの緣熟せず、小論文出づる毎に、之を呈して聊か景慕の情を慰めたるのみ。今や東洋學會の開催に當り、謁を取るの機方に至り、而して一朝顯幽に長く隔てゝ、また相遇ふの喜を失へり。痛恨何ぞ堪へむや。乃此一篇を草して追悼の意を表す。文や朴魯、辭や拙劣、豈夫の偉功大勳を盡したりと云むや。唯景仰の情を推して、故山同好の士同信の徒に、弔意を共にせむと乞ふのみ。北海洪濤、雲烟萬里、雄景空しく存して、講閣人空し、悲しい哉。

　白百合や過ぎにし夢に月宮を
　　かいまみしことありきとおもふ

（明治四一、六、東洋哲學）

◇リヒャード、ピッシェル教授を弔す

霜風客衣を透し、雪氣岑々たる降誕祭の翌日なりき。予は二人の友を携へて、恩師を訪ひ、茶を喫し棋を闘はしぬ。女王死し僧正殪れ、鐵馬蒼頭互に相亂れて戰方に酣なるとき、同門ドクトル、シユラーダーの恩師に寄せたる繪端書到りぬ。師と之を見るに文後蒼勁なる老筆、ピッシエルの名を署するを認む。蓋し、この伯林大學の老教授は、今や五印壯遊の途にあり。楞伽の埠頭、偶恩師の愛弟に邂逅して、歡談半日、雲箋を寄せたるなりき。玆に於てか、少時棋を止めて、談は多く老教授の上に遷り、その前途を祝し、その壯遊を羨みぬ。

この闘棋會の後、一週ならずして、一封の悲報は、伯林波蓮湖（ハレンゼー）の畔から來れり。曰く。普魯西王國學士會院會員、伯林大學教授、ドクトル、リヒャードピッシェル印度マドラス病院に於て重患の後逝くと。事惡夢の忽現し來りたるに似たり。謂ふ。嘗て日東梵學の青年、東溫讓を斃し、島地默雷を殺したる、獰猛なる風土病の竦手は、今やまた其毒爪を磨き、利牙を鳴らして、この老碩學をして、不歸の客たらしめしにあらざるなきを得むや。聞け。梨俱の諸神、大史詩の仙羣。爾等は、爾が榮光を讃じ爾が祖國の古文化を嘆ぜるこの老碩學を、何すれぞ爾が聖域の中に、守護する能はざりしか。抑爾等は老碩學の才學を此閻浮提に留むるを悋惜し、之を蘇摩長に薫じ、甘露常に流るゝ天闕に召し、以て爾等が仙籙を管せしめ、神典を誦らしめむと

一生の傑作といふべく、精核該博、今尙學者の龜鏡たり。第八、第十一、第十五はゲルドネル教授と共同の研究に就り。吠陀研究者の坐右缺くべからざる書なり。第六の聖尼頌は永くパーリ佛典研究家の用をなすべく。第十七の佛陀の生涯及教義は通俗を旨として著作したるものなれども、博綜該羅また學人の指針に供ふべし。此書は通俗學術叢書 "Aus Natur und Geisteswelt" の一編として出で、價僅に一馬のみ。獨文を解する佛徒には、特に此書を薦めまた特志家の之を邦譯せむことを希望す。最後の三編は中央亞細亞研究に關するものにして第十八、十九には雜阿含梵文の研究を收め、第二十には梵文法句經の斷片を論ず、是教授が絕筆なり。

教授人となり率直剛遇、普人の性格を最もよく發揮せり。千八百七十七年、ローレンツ氏の女エリゼを娶りて、三男を擧ぐ。長は法學のドクトルにして、普國政府の法官たり次は野戰砲隊の少尉を奉職し。少者は尙中學に學ぶ。教授常に胃患あり。謂ふに今回の事。また或は病因を此に發したるにあらざるなきを得むや。

予教授と相識る甚深からず。而も教授の稿出づる毎に、多く惠贈の恩を荷ひぬ。五年前、雜含の研究出でしとき、予は惠與を謝せむが爲に、黑田眞洞老師の「佛陀の光」英譯一部を呈したりしに、教授は懇に之を謝して、此書を賞讃し、且一二の評語を寄せられき。事實に昨夢の如し、而して教授旣に現世の人にあらず。去春來、予は于闐古經の證定に從ひ、檢出したる大小乘の經論、三十種に上れり。其中、阿含部に關する研究中には、特に教授が公刊したる梵文雜含を細論し、竊に教授が功を旌表するの一端となさむことを期しぬ。昨冬全體の序論漸く成りて、大英印度局の公刊近きにあらむとす。而して教授今や旣に存せざるなり。學人此間の悃悵、自ら他と異るものあるを覺ゆ。

日東東洋學を修むるもの、特に佛教の研究に志あるの人。長く教授の恩を荷ひ、其聖尼頌を誦し、そのプラクリット文典を讀み教授の慧命は東方大帝國の學壇にも、亦千載に亘りて滅せざるを思ふ時。希くは記憶せよ。この老碩學は六十の頽齡病弱の體軀を持ちて、炎熱燬くが如き婆羅他の故地に投じ。遠く共最愛の夫人と離れ、賢良なる兒息、俊秀の門下の看侍すら受くるを得ず。マドラスの病舍に卒然として獨遊客死したることを。

（明治四二、三、東洋哲學）

教授は主として之が研究に當り、佛教聖典史上、沒すべからざるの貢獻をなしぬ。乞ふ下に年代を追ふて、教授が著作を列記せむ。

（一）一八七四　De Grammatices Pracriticis.（羅甸文）
（二）一八七七　Kālidāsas Sakuntalā, the Bergalese Recension（英文）
（三）一八七七至七八　Hemacandra's Grammatik von Pracrit.（獨文）
（四）一八八〇　Desinawālā of Hemacandra.（英文）
（五）一八八〇　Assalāyana-Suttam.（プラクリット文校刊）
（六）一八八三　Theri gāshā.（パーリ文校訂）
（七）一八八六　Rudratas Sringāa tilakam,（梵文校訂）
（八）一八八九　Vedische Studien I.
（九）一八九三　Die Hofdichter des Laksmanasena.（獨文）
（十）一八九四　Beiträge z. Kenntniss d. deutschen Zigeuner.（獨文）
（十一）一八九七　Vedische Studien II.
（十二）一九〇〇　Grammatik d. Prakritsprachen.（獨文）
（十三）同　De Heimat d. Puppenspiel（獨文）
（十四）同　Katalog d. Bibliosche kd. C. M. G. I.（獨文）
（十五）一九〇一　Vedische Studien III.
（十六）一九〇二　Materialen sur Kenntniss d. Apabhransa.（獨文）
（十七）一九〇六　Leben und Lehre d. Buddha.（獨文）

此他に獨逸東洋學會雜誌中、幾多の研究論文を收め、又伯林學士會院報告中に、中央亞細亞佛教古文書斷片に關する極めて重要なる報告を公刊したり。其一二を拔かば

（十八）一九〇四　Bruchstück d. Skt-Kanons d. Buddhisten aus Idykutschari, Chiresisch-Tur Kestan
（十九）同　Neve Bruchstück d. Skt-Konons d. Buddhisten aus Idykutschari, Chiresisch-Turkestan.
（二十）一九〇八　Die Turfann-Recencionen d. Dhammapada.

已下列記したる中、第十二プラクリット文法は故教授が、

農婦のようにして仕舞つた。加之、其牧師の妻として、寧ろ無愛想にして口數の少きは、彼女をして彌益百姓女の丸出にした。然し此の如き彼女は實に牧師の妻だつた。

夫が十年の久しき印度の南部にあつて、ドラビダ族に傳道した時に、彼女は常に夫を助けて偉大の功を奏した。彼女が獨逸に歸つて後、印度から來る、茶や金屬性の食具類質朴な親切な手紙は、よくこれを證して居る。彼女が教育した幾百の女は今でも尙ベツヘル夫人を其母と思ふて居るのであらう。

彼女は其故か印度が大變好だつた。今一度夫と共に傳道に行かうといふのが彼女の本願だつた。ヨハンナを首に三人までの女兒は皆印度で出來たのだ。予は彼女の家で、小供等が食事に行儀よく聖書を讀み、その父母に對する愛情の厚きことを見て、彼女の感化を讃めずには居られなかつた。

ある休だつた、三日ばかり我友の家に宿泊したことがあつた。我は例の如く、小供等と花摘に出かけた。其路でソフヰといへる十歳の女兒が――我は多くの小供の中に、この一番麗しく溫良な女兒を最も好むで居つた。敢てヴヰカー、ヲブ、ウエークフヰールドのソフアイヤ孃を聯想したのではないが――我に、英語を知れるか、佛語を話せるか、印度語が出來るかなど聞くから、予はまだ外の語も知つて居る。犬の語も猫の語も知つて居ると諧謔に言ふてのけた。すると、この女兒が恐しく眞面目になつて、それは妄語である、妄語といふものは決して言ふてはならぬと母上が言はれたと我を責めた。我はこの眞率な堅固な宗教的の態度が、十歳の小供にまで不知不覺の間に出て來るのを見て深く其母たる人に敬意を表せざるを得なかつた。

モルスハイムは、昔はジエスイツト派大學のありし所、今も其名殘りに廣大なる舊教の女修道院あれど人口とては僅に四千に滿たず其六分の五は、悉く舊教を奉じて、新教徒は寥寥五百の少數である。而して南方獨逸の田舍に常に見る如く舊教徒が新教徒に對するは、犬猿啻ならざる有様である、我友が其教會維持の爲に慈善市を開催した時などは舊教徒は競ふて妨害した有樣だあつた、か丶る地にあつて教線を張る我友の苦心は一通りではなかつたが、夫人は舊教、教會內の女子を教育して、其感化は實に非常であつた。また其無言であるが親切で敬虔で、眞率の態度は初め兎角の言を弄した教會の翁媼も遂には敬服して、よく其教を奉ずる樣になつた。

◇牧師ベツヘル氏を想ふ

アルザスに於ける十年放浪の生涯は、今や黄粱一炊の夢と消え果てた。されど、櫻花殘りなく散り失せて、樹々の新綠漸く萠し、寶晋齋が「晝寢もしたし柳も見に出」たき此頃に、時々思ひ出されるものは、復活祭の頃から床しく薫るフリーデルの花である。坦々髮の如き都大路に、生生としたリンデの新綠である。而してこの花を垣にした庭園で、茶や麥酒を飲むだ友人、この麗しき樹の下に逍遥を共にした、人々の面影は、今何となく偲ばれてならぬ。

アルザスの小市モルスハイムの牧師ベツヘルは、確にこの面影の一つである。彼と余とは固より信仰を異にして。政治上の見解も學問上の研究方法も、丸で違つた地點に立つて居つた。されども、彼は余に肝膽相照らす心友の一人であつた。彼が親切の家の窓から夏の月を見ながら寢たことも幾度かあつた、雪の日に暖き爐邊に語り明かしたことも頗る多かつた。日露戰爭の時には彼は其貧しき教會衆を勸誘して、日本赤十字社に義捐をして呉れた。予も亦彼が爲めには、慈善市で働いたこともあつた。クリスマスの時、教會の小供等に菓子分配の手傳をしたこともあつた。あゝ麗しき五月の此頃はよく彼が家族等とブロイシュの河畔に花を摘みに行つたものであつた。而も我等はストラスブルグでは、時に大議論をした。ある時、圖書館の前で夢中に上帝の攝理と佛教の因果論を論じてそれを某孃に知られ、ある會で大に笑はれたことさへあつた。

彼は予が去る前にはあまり幸福の人ではなかつた。彼は其半身と賴む夫人を失ひて孤燈熒々五人の女子を撫育して居る。予が感應遲鈍な記憶にも、尙鮮かに殘つて居るが、クリスマスから一週ばかり後、恐しく寒ひ日であつた。フオクエーゼンの霜風はアルザス廣原の枯林を吹きて、積雪深き墓場の中で、我等は夫人の墓前に相擁して泣いたことがあつた。我が齎らした少き花環と、四誓偈、稱名一會の回向とは、友と予とをして、全く佛耶の異同や、人種の黄白を泯融し去つて仕舞つて、一齊に限りなき同情の下に涙と共に相抱いたのであつた。あゝ少しくこの亡き夫人につきて、我追想を書いて見ようか。

他の牧師の夫人の如く、我友の妻は決して麗はしき女ではなかつた。其思ひ切つた質素の服裝は、一層彼女をして

に灑ぐ悲あるを如何せむ、化導尙百歲を超へて盛に、教導更に幾歲に亘るを望みたる老師は去月泊然として圓寂の都に歸りぬ。

嗚乎法棟玆に折け、法幢方に折る、嗚乎此悲傷を如何せむ、嗚乎餘薫盆梅檀の香を吐きて圓生の巨樹旣に倒れ、遺編層々光を發し來りて大哲早く空し、嗟嘆に堪ゆべけんや、謹で訃を大方に報じて遺德を嘆ず、哀哉。

（明治四四、七、新佛敎）

◇薄伽梵歌譯主　戸松學瑛氏を紹介す

薄伽梵歌が印度哲學史上、至重至要の寶典たるは今贅せず。其現に印度實際信仰の上に於て至貴至尊たること基督敎徒が四福音に於けると同位置にある。亦世の遍く認むる所なり。吾邦佛教學者が之に一層の勞を取るべき豈今日にして其然るを知らむや。泰西諸國印度學者、夙に此書の價あるを認め英に獨に佛に伊に到る處其飜傳あるを見る。蓋故なしとせず。邦譯の出づる吾敎學界に於て多少の裨補なしとせむや。

譯者吾友戸松學瑛氏は數年前先輩荻原雲來氏に就きて梵學初步を修め、次で宗教大學にありて那羅王其他の梵文學を專攻すること三年力行篤學の人なり。今回公刊する所の飜譯は同氏が宗教大學を出づるに臨みて提出したる卒業論文の一部にして、薄伽梵歌批評、本文飜譯及索引の三中主部に位す。此中第三部索引の如きは精細刻苦一部の好字彙を作り頗る本歌研究者机右の友となすの價あるを認む。

この三編を合せて別冊公刊を企つる前に本誌新春號附錄として、譯者が尙未定の稿本をして匣底に深藏したるを强て梨棗に付するを勸誘したるものは、一面現今佛教學の研究上此書の飜譯が假令其拙速の譏を以てすと雖も、尙一日公刊の早きは一日研究者に利あるを思ふと共に、他面には遍く先輩諸賢の嚴密なる批評を乞ふて、他日別册公刊の完きを期する底本に供せむとする微志に過ぎず。讀者希くば其素朴未成、斧鑿完からずして玉成の境に達する遠きを責めずして可なり。

この飜譯を本誌の附錄として、出版を許したる新佛教徒同志會及新佛教編輯長田中治六氏に對しては、新進學徒を好遇して前境を開拓し指導するの宏量、誠意及自由討究の

この感化のよく現はれたのは、夫人の葬式であつた、夫人の棺は敎會內の小學兒童と兒女の手で墓場まで運ばれた。而も雨雪紛々たる十二月の寒空に。

僧妻問題とか云ふものは、今や討究でも議論でもなく、實に實際の問題であるらしい、而し實際問題として今の敎界を見ると、身敎壇に立ちて大悲の本願を說き、光明の攝取を敎へながら、其家庭――もし家庭と云へれば――の紊亂聞くに堪えぬのはありはせぬか、學徒を敎へ、宗學を說く人を內助する責にあるものが、徒に黃白を敎へ綺羅を飾るの外一稱の唱名も、半箇の信仰もなき婦人がありはせぬか、なければ實に幸だが、不幸にしてかくの如きものがあつたら、其敎壇に立つ前、學徒を敎ゆる前に先づ其家庭の改善からしてかゝらねばなるまいと思ふ。

僧妻問題は今方に實際問題である、而して之が光明ある解決の方法は唯一つだ、曰く、宗敎的の人格ある、わがベツフエルの如きものを敎界に得ることだ、否競ふてベツフエル夫人たるを期することだ。（亡友原靑民氏の墓參を終りて）

（明治四三、五、淨土敎報）

◇嗚呼マハテロ、スマンガラ師

其三藏の學殖深廣にして印度洋の水の如く戒行堅實は楞伽神山の寶珠に比すべく而して四衆化導の盛は夫の錫蘭滿林沛然たる甘露の雨よりも偉大なりしマハテロ、スマンガラ老師は八十五歲の高齡錫蘭の梵語大學興明學館に學徒を薰陶して世界東洋學者及宗敎學家の嘆賞と崇敬とを一身に鍾め南方一帶の佛徒之を拜する眞佛の如く吾國の興然大比丘宗演大禪師等法乳の恩に浴するもの幾十今に興明大學の一部に日本學徒寄宿寮ありて二三の比丘孜々として毘尼の硏修四舍七論の鑽仰に怠らず、老師の如きものは眞に法海の津梁長夜の巨燈なり。

老師が佛敎學に就きて歐洲の學者に敎ゆる所のもの甚多く資料を與へ指導を垂れたるもの枚擧に遑あらず、其校訂の三藏諸經疏釋音義の如き尙今學徒の南針たり宜なる哉歐洲學會及諸大學が老師を待つに敬を盡せしことを。而も楞伽の靈山尙生滅の雲起るを免れず佛牙の精舍無常の愁雨時

河瀬秀治、權田雷斧諸老の如きも種々の點で吾が米峰を相談對手とし、之が說に聞き之が助言を得たことも可成にある。學界の事業としても夫の一切經の宣傳と研究に貢獻した大藏會はに今尙彼の盡力と世話に感謝するのである。かかる例はまだ幾箇もあらう。後進推輓の功としては其營業を通し、今學壇の寵兒たる矢吹慶輝、本村泰賢諸君の學士時代に其處女作を算盤除きで出版したなどが、彼の精神を示す一端と見られやう。兩君より一寸先輩ではあるが荻原君の梵語字彙の出版なども此と關連して學界に對する彼の努力を買はねばなるまい。

吾が米峰が此の世話ずきの椽の下の力持となつて佛教界に一功績を殘した不朽の功業の一つは夫の聖德太子奉賛會の事業であらう。これは勿論太子の御盛德に依り、又黑板、正木、高楠諸老の熱心にも佐伯法隆寺貫首の高德にも歸するが、實は彼の畫策盡力の非常なものであるのを讃せねばなるまい。奉賛會の今日あるは彼が力と稱しても過言ではあるまい。故の奉賛會長德川賴倫氏が吾が米峰に傾倒して居たのも偶然ではない。

吾が米峰の頭は光澤々としてはげて居る。而も其內容は常に新思想と觸れて現代思潮に遲れない樣に機敏に動く。然し彼はある種の學者の樣に新を衒ひ、時代思潮に媚びて迎合を力める樣なことは毫もしない、彼の婦人觀は之を證する。彼は事業家として新天地を開拓すると共に思想家として嚴正に守るべき所を守りて直言直筆、忌憚なき批判を試みる。彼は專門的の學問としては大して深いものはないが、大局を見る正しき批評眼を有する通俗哲學者であり、事物の全體に對して最も發達した常識を有する敎育家として見ることが出來よう。

而も吾が米峰は單に口舌の士、議論の人ではない、禁酒矯風の運動に就き最も早く基督教徒と握手して、社會的にも國際的にも健氣に佛教徒を代表するのは彼だ。此點に就きては佛教徒よりも寧ろ安部磯雄君や山室軍平君等が吾が米峰をよく了解し其功勞の甚大なるを認めて居ると思ふ。此點に就て佛教徒が餘りに大勢に通ぜざる無智と、人道主義の爲に協同する度量なき偏狹さと、抑も其腐敗墮落、顧りみて他を言ふ怯惰無慚愧の中に立ちて吾が米峰の痛快な態度は實に見上げたものである。

彼が忠實よく各種の會合の爲に盡し、其誠意で一貫した周到敏活の世話振から敎會は勿論、學界にも文藝界にも、藝術界にも經濟界にも幾多の友人を有して居る。否、教界

爲に其需要の區域甚だ局る所あるが如き本譯の公刊を斷行して貴重の誌面を布施したる篤志に對して謹んで譯者と共に深厚の感謝を捧ぐ。

本譯がテラン、タギス、チツテルジ、ギルキンス等の英譯、ボツクスベルゲル、ロオリンゼル等の獨譯を參酌し、更にラツセン等の古譯に溯りて別樣の面目を以て更に諸君に見えむことは數閲月の後にあらむ。吾が邦譯の主はウパニシヤツトが歌ふが如く「常に動き常に働き常に作りつゝ」ある人なり。予は此已外に甚しく玆に譯者を紹介するを須ゐざるべし。

（明治四四、十二、新佛教）

◇吾が米峰

官位勳等もない、稱號學位もない、一切の肩書は奇麗にない。否假令あつても全く不用で、失禮ながら金も先づない方であらう。此現代の大無齋たる吾が米峰こそ眞に裸一貫で大手を振つて立ち得る男の中の男だ。肩書好の國民特に僧正、僧都、學士、博士などいふタワイもないものを名號や、題目よりも有難く崇め、その執着の醜さ、譬へ樣もない愚劣な教界の眞つ唯中に、赤裸々たる褌一つの小男が堂々として一家をなし、推しも推されぬ精神界の一人者として、其はげ頭の光明を放ちて、橫行濶步する雄姿は、何とも痛快の至りである。

吾が米峰の雄辯は旣に定評がある。教界の雄辯を數へたら加藤咄堂、山室軍平、窪川旭丈等十指を屈しても足るまい。而も其銳利深刻、骨を刺し肉に透り、周到明晰、輕快摧利の辯舌に至りては確に吾が米峰の特色である。秋水一たび揮ひて鐵をも斷つ、夏尙寒き正宗の切れ味は、彼が快辯に比へ得よう。後は此雄辯と共に實に摧利な健筆を以て鳴つて居る。彼が著作をくど〳〵しく玆に羅列しなくても最近の「思ふまゝ」一編を見ても判らう。熟達、平明、銳利、意到りて筆隨ひ、諸方面の問題につきて適切穩健な斷案を下す點は、一寸他の企及し得ぬ手腕を有して居る。

而も吾が米峰としてはこの所謂口八丁手八丁も其本領ではあるまい。彼が尊ぶべきは其隱れたる教界の功勞者として世話人として盡力家として事業家として、先輩の大を成し美を濟さしめ、後進の材を作り能を完うした點に存する。故大內青巒翁や、井上圓了氏なども吾が米峰に負ふ所の助が少くなかつたことは同志の識る所である。また村上專精、

して乳糜（牛乳で造つた米粥）には食用の後美容、勢力、壽命、快樂、辯舌の五つが得られると說てあるのは、食物の實益を說き盡くして殆ど遺憾のないといふてよからう。辯舌まで加つてあるのは面白いが、之は材能著しく能率といふ側の代表として擧げてあるらしい。

　獨逸といふ國は、佛國や英國に比較すると生活上では殆ど實益一方の質素の國風である。食物文化に就いて高尙で精練されてゐる佛國あたりから見ると、全然田舍漢の様にも輕蔑されても仕方があるまい。佛人は常に獨逸人を冷笑して腸詰喰ひと罵る。ソウセージの様な廢物利用の下等な食物が或點から獨逸の食物に對する考を代表してゐると言ふてもよい。凡そ世界各國中獨逸程ソウセージの種類の多い國はあるまい。大小長短精粗小指の様な可愛らしいものもあれば生々しいとぐろを卷いて隨分氣味の惡いのもある。

　然しこの實益一方で美とか色とかいふ考は微塵もない、ソウセージにさへ、之に親むで來ると一種の捨て難き野趣あるを覺へ、特に東洋特有の俳味禪味といふ種の興趣を發見することになる。獨逸の奈良と稱せらるゝバヾリヤの古都ニユルベルヒに遊びて古寺院の側にある純中世式の酒店を訪ひ、昔そのまゝの燒ソウセージの一皿を味ふといふことにすると此野趣の外に歷史的の深い懷想に墮ることが出來る、現代の背廣を着た人が、宛然平民詩人ハンスザックスや大畫家アルブレヒト、ヂュラーの古い時代の中世人となり濟して一杯の黑ビールに豆ソウセージを味ひ、自働車を飛行機を全く忘れ得る。

　此野趣を中心とした、獨逸の食物につき興味を感じた二つ三つを思ひ出るまゝに、書いて見る。先づ期節であるから五月の食物に關するものから感想しよう。ワグネルの歌劇タンホイゼルの中の五月の歌にある如く、獨逸の五月は實に美しい、此百花繚亂として野に芳草茂り、林には佳樹の綠洗ふに似たる裡に、マイボール卽ち五月酒の味は如何にも優雅で面白い。獨逸人が五月一日に現代的な盛な勞働者の示威運動や演說などやの目まぐるしい側に、五月酒の如き如何にも長閑な趣味のあるものが様々殘つて居るのが面白い。五月酒を作るには葡萄酒の淡いのを用ひる、モーゼル製の白酒がよいとしてある、之に砂糖を加へてその中にワルドマイスター（學名アスペルラ、ヲドラタ）といふ多年生の芳香のある藥草を浸すのである。この草は日本の防風の様な形をした可愛い奇麗な草で花の咲く前に特に葉に香が强いから此時之を採取して右の糖酒の中に十分か二

よりも寧ろ學術文藝の方面に彼の眞骨頂を理解する人々が多い樣だ。此點も亦教界に於て獨步の人といふてよい。

彼は幾多の眞友を有すると共に亦多少の敵もある樣だ。支那人は水清ければ大魚なしといふたが、世間では强て彼の缺點を求めて過情であることゝする。惡を憎み、僞を忌み、醜を嫌ふことの彼が奇麗ずきの性格が自然に直情徑行を生ずるに至ることに兎角の批評をする。實に彼は直言直筆、不都合の點は厭迄も追求せねば止まぬ。彼には惡に對し僞に對する寸分の妥協性もない。醉ぱらい僧正、呑助上人に對し寬假なく、痛棒を振ふのも之が爲だ。教界の腐敗墮落に憤りて、成立宗教に三下り半を渡して居るのも此處だ。然しこれは缺點ではなく寧ろ彼が眞骨頂だ。今の吾國は餘りに惡を納れ僞と合ひ、醜と共にするに急だ、淸濁倂せ吞むことは大であらうが、世を擧げて濁流を同化し、腐れ水と化合し、相率ひて御齒黑溝の腐臭に甘じて其本分を忘れて居る。此傾向は特に教會に於て甚しい。主義もなく節操もなく、主張もなく、目腐れ金に身を賣り、糞の役にも立たぬ事と呑氣な蠢動の醜さを示しつゝある所謂大小の政治坊主共、各宗幾多の不良老年不良青年は玆處で少し吾が米峰の爪の垢でも服藥したらどうだと思ふ。

（昭和二、十一、佛教思想）

◇趣味の食物と實用の食物

趣味と實益とは多くの場合必しも一致するものでないが食膳に於ては趣味は必ず實益で、實益のある所必らず一種の趣味が出て來るものである。鰻のすきな人が其所此所と庖丁を試みて廻る中に終には之に關する一種の趣味、詩味俳味といふものが出る。下等ではあるが居酒屋に簡單な料理にも屢行くと亦此言ふべからざる心の味が、舌の外に見られる樣になる。

印度の古い經典を見ると、可成に食物に、就きて注意もし訓誡もしてあるが、趣味と實益の問題に關しても、相當の研究が盡されて居る。食物の最上のものは必ず色（色彩と形狀）香と味との三つが完全に具備して而も調和を得たものでなければならぬとするのが印度に一般の定めで、斯の如き食物でなければ宗教上の供養品とすることが絕體に出來ぬとしてある。これなど食物趣味の最も高尙なもので藝術の制度まで踏むだものとも云へよう。食物の効用と

人を喜したのだと考へられる。邦人はあまりアスパラガスに就いては趣味を感ぜぬ、寧ろ新芋や初茄子程にも考へて居らぬ。然しゲーテの詩が讀まれ、獨逸文化の了解が深くなるにつけてアスパラガスを大王として味つた大詩人の食物趣味も漸次に研究されるとことゝなるだらう。

獨逸の夏の食物に就きては管々しきを略し、秋の田園趣味が最も豐で野趣の充分な食物一つ序に記して見よう。それは新酒と栗だ、葡萄酒が純粹の精酒とならず、また醱酵しつゝある期間のものを之を新酒といふのだ、丁度日本のドブロクといふ所であらふ。時々味が變つて行き混濁の葡萄汁がブツ／＼沸騰しつゝあるのを田舍の酒場で燒栗で飲むのである。芳烈で甘味は充分だが、飲み過ぎると苦しいものだ。都會でも之が出ると「新酒あり」などゝ有名な料理屋でも看板を出す。秋雨がしとしとゝ降つて、木葉が雨の如く散る所寂しい田舍の酒店に榾を爐中に投じつゝ、新酒と栗とを賞翫する興趣は禪味も充分俳味も充分だ。

埒もない走り書をしてもう止めたいが秋まで來たから、序に冬の變つた獨逸料理を一つ書いて御仕舞とする、クリスマスの七面鳥は誰れでも知つてゐるが、獨逸の胡椒兎（ハーゼンペッファー）の料理を平氣で食ふ邦人は一寸ない。況んや之を賞味するに至つては日本の鹽カラ同様餘程の通人でないと出來ないことだ。胡椒兎の製法は兎を一羽（日本風に）購つて、之をそのまゝ物干か何にかに吊つておくこと二週間位、兎肉は稍腐敗の臭を發し蟲などを生ずることがあるが關はず置いて、肉が黑色を呈する時を見計らい之をブツ切に料理して、赤葡萄酒と最上のバターで煎るのである。勿論隨分猛烈な惡臭がするから多量の胡椒を加へるのであるが、それでも中々臭いものだ。扨て出來上つた御料理はと云ふと赭黑色のドロ／＼した汁の中に形狀も何もない兎肉がブツ切に骨と共に入つてゐる。其臭は隨分惡いが、肉が豆腐の樣に軟かなことと汁の一種の甘味を帶びたことなど特有の美味である。印度式に云ふと第一色彩形狀がまるでドブ泥の中に瓦礫を投げ入れて攪拌した樣で而も第二に其香と來たら、チーズの臭ひよりも忍び難いのだから無論落第の食物であるが、然し鹽カラに美味と嗜好とを持つ東洋人はこの特殊の冬期食物にも相應に趣味と賞翫とが出來ると思ふ。然しこれが實益の方でどの位衞生上の價があるか、之で所謂美容勢力壽命快樂材能の五大實益が果して擧げられるか否かは專門の學者の敎を乞ふ外道はあるまい。

（大正十一、五、料理の友）

十分浸漬するのであるが、日本や支那の桃の酒が惡鬼を遮くる功能のあると同じく、此五月酒は魔女の咀や惡魔の害を遮けることとして家庭では之を喜んで之を用ひる。富める家では古風な銀製の酒壺に麗々しく之を納めて外銀内金の匙などで之を客に薦める。酒の味、習慣の古風何とも言へぬ興趣を生ずる。

五月酒に添へる料理はクリスマスの鵞鳥や、復活祭の卵の様に別に定つて居らぬ。然し御國風にサウセージの上等のもの、例せばフランクフルト製のものに山葵を添へて出すことが屡々ある。酸茶(パセリ)に蒸豚なども多く用ひるのを見る。上流の家庭になると、鵞鳥の肝が出る。この鵞肝に就きては多少吾國人に耳新しい點もないでもあるまいと思ふから一寸書いて置かう。

質素の獨逸人の間に此鵞肝丈は馬鹿に贅澤な食物である。それもその筈、これは元來アルサス州が佛領であつた時分、ストラスブルグの名物であつたのを、同州が獨逸に取られた後もそのまゝ名物繼續となつたからである。今は同州がまた佛國に復歸したから、この奇妙な名物もまた元通り佛國名物の一となつた。食物一つでも考へると國の興亡が見られて面白い。

鵞肝を製するには先春の初めから健康な鵞鳥を飼育して之を籠に入れて少しも運動をさせぬ樣にして食物丈は豐富に運むでやる。食はぬ時は嘴を開いて無理にも玉蜀黍や其他のものを押し入れる、此食餌には大分祕傳があると聞く。かくすること凡そ一年、冬になると鵞鳥肥滿して籠から出しても飛行も出來ぬ程になる、年を越して四月頃になると此飽滿した可憐な動物は其腹を割かれて肝を取られるのだ。肝は此一種口傳の飼育法で頗る大きく且つ白玉のものが出來る。之を截割して出しても汚點のない白玉の樣なのを最上とする。之をパステートにするか罐に詰めて王侯貴人の膳に上すのである。鵞肝に最良の葡萄酒といへば歐人特に佛人が最も適とし、且つ贅とするものである。隨て價が頗る高い。料理屋で鵞肝が少量でも出ると支那料理の燕巣と云ふ格で非常に客が珍重するものだ。日本ではまだこんな複雜な寧ろ慘酷な製法の食物はない樣だ。

五月を過ぎるとアスパラガスが南獨の名物として盛に市場に出る。フランクフルト附近は特に此蔬菜で名高い。大詩人ゲーテは非常にアスパラガスを愛用して之を蔬菜の大王と贊した程だ、ゲーテの此蔬菜を愛したものは其優雅な味の外に、高尚な色と香がアスパラガスの特色として大詩

◇香港より

五月五日、横濱を解纜以來、日を經ること十有二日、船內世と相去ること遠く清閑の天地自ら悠々として聊か道念を養ふに足る、一聲すれば窓外浩渺として碧波萬浪、時に巨浪の船體を搖がす秋の葉の如きありと雖、四海の風波は自ら此處に影を潜め滿船の乘客兄弟の如く日に談笑和樂洋々焉として小ユートピヤ（極樂淨土）の感あり眠食放談に日を暮らし時に慚愧の感なきにあらず。

佛陀の冥祐と諸老宿意念の力とは、此十有二日の間、玄海灘の巨浪も臺灣海の風伯も其威を逞するあらず、最も靜隱にして安眠の裡に通過し、今は香港埠頭の遊子となるに至れり、出帆の日は皐月の五日にして水天宮の賽日たり、船の名は讃岐丸にして海上守護の神たる金毘羅に緣あり、航海の前途は萬々歲と水夫の歌ふを聞くも亦これ乘船者の一興事たり、香港灣中に投錨の後、速かに上陸して處々を遊覽し、時に店頭に入りて船中の必要品購求するありたり。

當港の事情は屢々、新聞雜誌の通信に上り、之を報道するも、陳腐に屬するを免れず、然りと雖も當港の經營者たる英人が敢爲の氣象に至りては、洵に欣慕の至に堪へず、突兀、海面を壓して聳ゆるヴイクトリヤ峰頭に於ける兵營の一を觀望するも驚歎の至りに堪えず、其他道路、水道、運輸、等、整備して一の間然する所なし、渺たる香港の一埠頭にして此の如し、本國の隆盛思ふに餘りにあり、東洋の牛耳を取れると稱する帝國と雖も、尙ほ彼等の後塵を拜せざるを得ざるを想へば心中無限の感慨なきを得ず、其屹然として雲表に冲するセントジンの高塔に對して、基督敎の威勢が斯る强建牢固の精神を養成するに力あるかを觀じ、夫の牛の如く馬の如く轎を荷ひ、人力車を輓く支那人が福祿延壽前に叩頭して利已私慾の外一物を存さざるもの と對比して、其宗敎思想の關係に想到し空想に耽けること、之を久ふす、上陸の時、乘りし艀船の持主は小蒸汽船數艘を有するにも拘らず、自ら擢を行い艪を繰つり可憐なる最愛の一女一男をして蓬頭垢面、尙勞役に服せしめて其食を作るに汲々たる感ずるに堪へず、此の一船には支那人を代表する好個の模型とするに足るか。

夫のピークトラムウヱー（三百尺の急坂の上に電力を以て曳き上る香港奇觀の一）にてヴイクトリヤ山の第一峰に上り、四面濛々たる、烟波の間、層々の樓閣、重々の巒、參差重疊し、鏡の如き海上、巨船大舶稻麻の如くに列り輕舸小船矢の如く馳することも恰も一大パノラマを展開したるが如き、中に立てば脚邊の白雲漸やく深く水光山色隱見明滅するところ九龍の半島指呼の間に迫り、備灣の風光掬すべき絕好の風影實に『如此江山附大洋』の感、滂然として發生するを覺ゆ。

市街の狀況煩く報導する必要なきも歐米の紳士、骨格逞しき印度人、英人の巡査、支那人の行商、日本の婦人など絡繹旁平して

渡歐に際し告別す

薫風漸く至り紅紫老ひ盡して春光將に去らんとす、此多恨の景物の中にありて予輩は別を敬愛なる諸君の前に致さんむとす、感夫如何ぞや、春や其來る、艶麗の美彼が如く、其去るや、風光の優亦此如し、而して予輩の來るや慚を以て來り、其去る亦慚を以て去らんむとす落英繽紛として流水に隨ふ所、嗚呼予輩が無限の感を如何せん。

顧みれば予輩の來りて諸君に見へしは、實に彼第三公會の前なりき、再來第二臨時會を經、第一宗會を迎へ、年を閲する五、此間に於ける着實なる宗運の進歩は實に諸君が親く知る所、而して之に伴ふて起伏洶湧せし波瀾の大や、潮勢の急や、亦茲に贅說するを須ゐず、要之、この既往五年は淨土宗經綸の上に於て、實に光榮あり、名譽ある時期なりし也、予輩が此間に於て盡す所は宗運の際々に伴隨するに足らず、爲す所のものは實に經綸の萬一を補翼するを得ず、諸君が愛顧の榮に酬ゆるの道、洵に以て缺焉たるものあり、顧み來れば唯、無限の慚情之あるのみ而して諸君が寛洪の雅懷は此の如き不似不能の予輩をして惡筆を弄せしめ愚論を上下せしめて、延て以て今日に至りしを思ふ、更に亦一層の慚恥を益さざるを得ざる也。

予輩が無能は自ら信ず、予輩が至らざるも、自ら信ず、唯此他一の自ら大に信ずるあり、即公正、以て道を盡すにあり、既往五年、論拙と雖、言陋と雖、此事に至りては窃に自ら慚恥なきを諸君に公言せんとす、凡情俗慮其筆絡の横抹縦塗する所、矯激に過ぎ德を毀ふた罪其遺漏錯誤、人を傷ひ事を毀るの過、或は亦免るべからず、而も衷心に於て公に爲たるものは、終始佛祖に對して敢て恥づるなきなり、信仰の振作一宗の和協、是予輩全力を擧げし處、着實なる進歩主義、嚴然たる精神的方針、是予輩が片言隻辭と雖力めて怠らざりし所也、此點に於ては、淨土教報は予輩が半生の心血を灑ぎしもの、犬馬の勞は大宗に於て補ふ所なしとするも、犬馬は自ら、犬馬の至力を竭盡したるに於て、豈憫むべき所なしとせむや、予輩が陋と拙とに關せず、愛顧の號を加ふるに至らしものは或は諸君が予輩の哀情を憫むで而して然りしに非らざるなきを得んや、淨土教報の範圍は、實に一局部也、その讀者は僅に四千内外に過ぎず、而も此一局部四千の讀者は實に深厚の同情と至誠の友愛を予輩に有せらるるもの、予輩茲に於て豈去るに臨みて一滴の涙なからむや、豈其知己と同情とに對して滿腔の感謝を表するに涙なからむや、豈此眞知己と相別るにの離別の涙なからむや。

猊下大命の重きは猥りに辭するに地なく、内外先輩の勸誡警策は猥りに安を偸みて引退するを許さず、茲に於てか薄力駑駘に勉撻して渺々たる微身を教學の爲に捧げ、實に自ら揣らず、留學の大任を負ふて五月五日將に北歐の天に發せむとす、去るに臨みて諸君に捧ぐる告別は實に予輩の至大の光榮となす所、而して之と共に亦予輩が後任として青民原君を諸君に推薦するの光榮を得むと欲す、原君は予輩が、苦學十歳の親友、其堅忍不拔の志、純潔正大の行、掾大莊嚴の筆、識の卓拔、才の周到、一も間然する處なし、今や吾教報の爲に蒲柳の病軀を呵して、來りて諸君の前に其光炎萬丈の言議を開陳せんと欲す、同君を薦むる所以のものは、實に予輩が既往五ヶ年間、諸君に負へる多大の罪を贖ふに足れりと信ずるもの也、予輩が華なく鳥なく、荒涼の闘光間より、この備技景々たる果實を諸君に贈らんこと、豈無上の光榮にあらずや、嗚呼敬愛なる諸君、希くは大法の爲に健在なれ、却後三月已降予輩は天外萬里にありて時々諸君に接して、舊好を予輩が故郷淨土教報に認むるの快あるべき也、歐雨米烟萬里を隔つも大慈の光明中に於いては旦暮諸君と相對せむ、嗚呼諸君、この淸淨歡喜光の中に幸に大宗の爲に健在なれや、告別。

(明治三三、四、廿五、淨土教報)

有らて馬を驅り重を荷ふ馬來人印度人あり、支那人あり、暹羅人あり、此間ラフッルフレースの角店に日本品を手廣く買ふ宗商會の外二三の會社ある外は實に涙を洒がざるを得ざる可憐の婦人のみ。五百の同胞中其三分の一は醜業婦なりと聞かば誰か憫然として又慄然として更に吾國の爲に慨然たらざるを得んや。來れ本島のバレーロードに來りて光景を見よ、連ぬる軒は悉く此可憐の同胞が靈を失ひ肉を賣りて、臭骸を南天炎熱の下に露すものを、涙は實に彼等の爲めに流汗と共に酷なりき。

宗教の一班は新教に聖、アンドリユウ教會あり、一八六一年に建立せらる、ゴシック式の本堂は小と雖も威嚴あり、此他の小教會亦少なからず。アルメニヤン派に聖グレゴリー教會あり、舊教はセントペーター、ハウル、ジヨセフ等の教會を有し、猶太人の會堂回教の會堂亦存し、シンガポール河邊には支那の會堂あり、道佛混合の宗教的標式をなせり。而して吾國は西本願寺の教會堂馬來街の大通路にあり、閑雅の小教會、傍ら日本子弟の教養を行ひ日々學校を開き、夜學ありて青年及醜業婦を教ゆ、毎週兩回教會あり。兒童の校に上るもの三十、同島の日本人は皆其信徒なりと云ふ。主管は佐々木千里師にして師は濠洲及印度にありし人、今や勵精開教に從事す、前途大に有望ならん。此他曹洞の釋種梅仙師あり市街より七哩を隔つる日本人墓地にありて接心し、主に民間布教に盡す、居ること五年、道力頗る重しと、訪はんと欲して時なし、信を佐々木師に托して、其安きを問へり。

學校はラッフルス教校、クリスチヤン兄弟、英濤學校、ラッフルス女學校等あり。二三の校舍を墻外より望みて、其稍完全せるに感ぜり。圖書館は博物館と共に有名なる植物園を去る五丁の所にあり。古物學の資とすべきもの少なるは、失望せしも爬虫類、龜屬の珍なるものは吾國にては蒐集困難なるもの多し。圖書館は一萬八千卷計りの小ライブラリーなりと雖、博物學の書に付きては垂涎すべきもの多し、吾が携へし、英譯大乘佛教大意三部は永く此館中に留りて十年百年の間多少は結緣に法益を得るものもあらん。

植物園などの事は荻原老兄の通信悉しければ玆に筆を擱かん。終りに臨みて長程の航渡も大悲の恩光中事なく玆に其三分の一を經過せしを感謝し、炎々たる印度洋中の酷熱も、淸淨光明の中平和と歡喜とを以て終らんと思ふ更に限りなき感謝の情なきを得ざるなり。

二十四日讃岐丸にて新嘉坡タイムスを讀みて英國女皇八十二歲の誕辰祭の盛に擧行せらるゝを見つゝ

（明治三十三、六、淨土教報）

◇コロンボより

拜啓、船は彼南を發してより兩日の間蜒々たる馬來半島を右舷に望み、次てスマトラ島を左舷に見たる後は、漂渺たる印度洋の浩濤大波も幸に夢驚かず五月三十一日の

織るが如く、四層五層の高樓、兩側に屹立して盛觀人を眩す、日本郵船會社の支店の如きコンノートロードの第二階に事務所を設けありて、其借館料月に四百圓と言ふ三井物產會社は其隣地に獨力を以て事務所を新築しつゝあり、歐米人の宗教を貴ぶに反して日本人間に於ける宗教思想など實に憐むべきものにして洵に痛嘆の情に堪ずえ、暑熱は日下九十度に昇り苦熱尙一層激しきを思ふ、書外の餘事は新嘉坡より通信發送すべし、小弟無事息災船内に於て稱名相續佛陀の加祐を念ず、幸に安想を祈る。

（明治三十三、淨土教報）

◇新嘉坡より

香港を發してより航程兩日、七千餘噸の巨舶も宛ら一片の木葉の如く、漂渺たる南支那海に浮び、越て一日初めて靑髮の如きオランダ諸島を右舷に眺め、雄然大海の中に屹立して千古の俤を留むる一大巨岸パラドマの壯觀を賞し二十二日の夜、夕陽雲を染め海を彩る絕好の景中遙に馬來諸島の蜒々として連なるを見、翌拂曉海霧を拂ふて、吾が船は旭日の旗を新嘉坡の海面に立てぬ。

新嘉坡は英領海峽殖民地政廳のある所、一千八百十九年サー、スタンフオード、ラツフルス氏が彼の東印度會社の有力なる働手として、印度ジヤホーア王と條約の結果、英領となし同六十七年に至り、馬剌加、彼南、其他の海峽殖民地と共に印度政廳より、殖民省の管轄に移し、今は巍然たる殖民政廳のシンガポール市街に存在するを見る。

當港は長十四哩幅四哩、附近の小島を合せて僅に二百二十三哩の小島なりと雖も、東西交通の要港なるを以て輸出、一四一二〇九三三八弗、輸入一八九七〇七三三四七〇弗にして歲入五〇七一二八二、歲出四五九七三六七、（一千八百九十八年即一昨年の統計）なり、亦盛ならずや。而して其市街の繁華は之を香港に比して一歩を讓るあるも、物質の輻湊は多く彼に減ぜず、道路市街は到底彼に及ばざる遠しと雖も學校、寺院、新聞、病院、其他の組織は敢て比隣するを恥づるにあらざるなり人口は十年一回之を調査すと云ふ今より十年以前の統計（一八九一年）に依るに

通計　一八四五四四

にして其中支那人は一二一八〇八の多きを占め、馬來の土人之に次ぎて一六〇三五、タミール、ベンガル等の印度種一六〇三五、歐洲及アルメニヤ種五二五四此中一千有餘の軍隊を含む、三五八九〇の歐亞雜種一七七六のアラビヤ種、二八七の日本種、其他猶太暹羅等ありて實に人種の競進會と云ふべし。今や日本人は增して五百に達し、支那亦多大の增加をなし歐種や米種や航海の進步と共に益增加する有樣なれば現今の統計は更に之より大なるものあらん。

唯見る、街上綠樹影暗く、三層の大厦左右に連る所、車馬紛々たる間、得意に步する歐人あり、頭に赤色の巾を被り、古銅の如き膚を露し、爛々たる眼光、雪白の齒を

候、北方佛教の瑩に走りて戒定共に緩なるは悲むべき極に候へ共、南方佛教の丸きり慧を度外視するも、最大の遺憾と存じ候南北佛教の調和と申すことは無論書生の空論には可有之も、世界的潮勢の斯く迄汪溢し來れる上は何れの時か、馬鳴龍樹、天台、賢首、空海、法然を起すの時は可有之歟と竊に嘆を發し候も例の癖に候べき歟、アヌラダプラ其他摩訶洹沙にて承知の靈地は時間も金も無之先づは歸りと仕候。

サハレ錫蘭には本宗より常に一名位の留學生を置く所は必要に可有之、一年壹百留、即七十圓も有之候へば充分との事に付篤志者の進んで出でんことを希望候、米國の英國のと哲學や何かのみ吾徒の研むべきことには無論無之候。

何やら面白くも無之亂筆是にて御仕舞と可仕候、長途の航海も既に半を過ぎ三週の後には佛都巴黎より御通信可仕事に可相成と存じ候宗事目下如何相成候や、定めて園宗和協益堅く宗運彌隆盛の事と三千里外の孤客も竊に歡喜仕居候、草々

（明治三十三、七、淨土教報）

◇日想觀樓雜感

吾が南獨の僑居は、西向の一室で、大學植物園の枯池を眼底に瞰下し、枯樹千木重なり合へる中、天文臺と理化學の敎室とを隔て、遙に一百四十メートルのミュンステル大高塔を雲霧の間に望むのである。太陽が沒する所が宛かも塔の右側に當るので、夕空の美はしさは畫にも筆にも及ばぬ美觀なのだ。紺紫靑白色々の雲が綿紋の如く大空を彩る間に屹然として立てる古塔は黄金の光につゝまれて何とも言はれぬ崇高美妙の感がある。そこで吾が樓を日想觀樓と命名したのだ。――借得耶蘇天主塔、觀來樂刹妙莊嚴、乃公の兵法此の如しとでも申さうか。

朝から晩まで古梵經を讀む外には用もないので、之と言ふ珍談奇話はないのに限つて居るが、眼に見耳に聞くことの數々は、遠來の孤客に取りて、どんなに感情を起さすだらう。況してや、東亞の風雲暗澹たる此日頃むら〳〵と心頭に湧き出づる閑煩惱は、あゝ止めても止め難いことである。

獨逸が目下列國の間に占めて居る勢はどうじやろう。言はずとも諸君の方が疾に御存知の筈だ。また其商工業に於ける實力が着々英米を凌ゐで、至る所に破竹の勢で富の世界に恐るべき一種の威力を振ひつゝあるのも、一寸横濱や、神戸で御覽でも、直ぐ分るだらう。そこで、此素因は何に歸するだらう、一寸考へる價値は確かにあるだらう。

日本の文明は三十年で長足の進歩をしたとて歐洲人は隨分膽を冷して居る族もあるが、獨逸の威勢が世界に知れて、其商船が各國の港を横行して來たのも、普佛戰爭已來のことなのだ。どうしてこんな大進歩をしたのだらうと云ふ丈が野暮なので、夫れは教育を盛にした結果なので、獨逸と云ふと、あゝ學問かと云ふ様に非常に學問を奨

夕、海天漸く暮色に滿ちたる裡、初めて錫蘭島を認め、六月一日と云ふに初めて哥倫坡港の風光に接し候、港內築港の壯は言はずもがな、碇泊する英獨露の軍艦商船の中、嶄然として四本檣の大艦高く旭日旗を揭げ候吾船なれば、心地實に宜しく御座候。

錫蘭と申さば日本佛教徒の至りしもの今迄隨分多く、見聞の記事も乏しからざる事に候へば、一々市街其他の事は不申上候、小生も一日は有名なる善吉祥大僧正の宿坊マリガンダ伽藍に杖を曳きて幸にも皎髮仙顏の道容に接するを得、又日本僧釋戒寶師にも面し二日はカンデーの佛牙精舍に一日の長旅行を試み候、僧正今年七十餘近來少く病めるも一百五十名の僧侶を薰陶して日々梵語と巴利語の講筵を開き、暹羅緬甸より留學する實に盛に御座候、樓上に經藏ありて三藏の梵筴を安じ又圖書館の設ありて、佛教に關する圖書を集め候、小生は英譯大乘佛教大意二部を寄附し大衆に鑑蓮社の阿伽陀藥其他を供養致候、行儀の端肅は實に感ずべきことには候へ共教化と申す方面には何の感覺も無之、或人の化石佛教と申し候も尤と存候、其他研究など申す事は少しも不致爲め、カラ話しにもならず候、乍去、日本佛教徒の或人には一目此淸淨の伽藍を見せたくと感じ、隨て身の道業篤からざるは深く慚愧仕候、目下錫蘭にありて、道業を修錬する僧伽は

小島戒寶　向山亮運（眞言）　島家仁度（天台）工藤敬愼（淨土）

の四僧にて、何れも與然大比丘の弟子分として向井師外二名はガーレに小島師はマリガカニダに學を修め候事の由、小島師と島家師には面會致せしも工藤向山二師は不幸にも面會を得ず、護法の赤志此の如き人あるを思へば隨喜の至りに候。

カンデーは當港より七十哩の地、一千八百尺の山嶺を越へて行く事にて、道中箱根の如く高山流水に富み、椰陰欝々、田畦あり茶園あり、水牛山羊至る所に多く、奇花異草は芳香を吐き、雲雨脚下に起り、淸風面を撲ちて來るなど、汽車中瞥見の奇觀勝景實に名狀すべからず候、佛牙精舍はカンデー湖水の畔にあり地實に幽寂閑雅、寺は莊嚴美麗にて、流石に當地の日光とも可云名所と覺へ候、當所にも東洋圖書館の設け院內に有之候へば同く三部の佛教大意を寄附致候　歸途車中佛教篤信の錫蘭紳士と談じ、窓外に見ゆる彼處此處の殿堂の由來を聞き、某は高僧某は巴利經典の達人など承り候。

市街の有樣などは格別申し上げず、例に依りて例の如く候、基督教は隨分立派の會堂有之カンデーの舊教寺院の如く非常に宏大のものに候、其他教會の、至る所に存する、流石は手の屆きたるものに候、回教の寺も印度教の寺も亦不尠候、ペター湖水の畔には佛教靈智會の活版所あり、日本人は屢々世話に相成候事にて小生も一見し講義所付屬の圖書室に佛教大意を施し、二三の小册子を賚ひ受け候。南方佛教に候へば普通人の少しく智識あるものは英語を自由に話すと云ふ當地なるに係らず、餘程の高僧にあらざれば英語など話すものは無之、威儀嚴然、知事にも公使にも頭一つ下げぬ所は至りて有難きも智識の卑きは驚くべき所に

信じなさいだから、恐れるじやないか、佛敎の方が餘程哲學的だ』など云ふ體が先づ十の八九と致して、學者先生は哲學だとか、科學だとか新しい議論でドシ〳〵、十字架に攻擊をしては居るが、まだ其根は中々堅いものさ。之は宗敎の實際的事業がどうしても打破すべからざる力を具へ居るからじやね。

なる程宗敎に價値がなからう。神と云ふ奴、惠を施すどころか形もない空想ぢやらう。じやが其價値がない宗敎が、パンも吳れるじやないか。見離された貧乏人の對手になつて吳れるぢやないか。病氣の世話もして吳れる、小兒には智慧を授けて吳れる、これはみんな神樣の御惠ぢやと、和尙樣が仰せじやないか大學の先生が何と云ふても、哲學の書物にドーあらうとも論より證據、和尙樣の方が餘程己等に有難いから不思議ぢやないか。——社會に占めて居る宗敎勢力の素因は簡單なものさ。この簡單な所が歐米基督敎の生命なのだ。

病氣になる、錢はなし食物はなしと云ふ所に比丘尼が來て溫ひ柔ひ手で親切に世話をして吳れるだらう、これで動かぬ、感ぜぬものはない筈だ、時間だ、空間だ、大根だ午蒡だ、そんな小理窟をこねまわしても、實際上、人間に對して親切もなければ、淚もない、(あつても出して吳れぬ)哲學者學者先生は、實際上、人間の感謝を一文不知の比丘尼と爭ふ權利は先づ無い譯さ。

歐羅巴では宗敎が貧富の調和者となつて居る。貧民の友人となつて居る。社會が進むと貧富の度が甚しく隔たる樣になる。文明の恩惠を頂戴するはおかねのある人と計りとなつて仕舞ふ。今の社會はどうも悲しむべきことだがコーなるから仕方がないことだ。そこで、劣敗者、貧賤者、下層社會に敎育もすれば慈善もする生產も與へると いふのは宗敎者が先に立たねばドーしても出來ぬことだ、宗敎の信仰から來ぬとどうしても箇樣な崇高な實行や事業は出來ぬのだ。哲學者の親玉カントが、やれ神が證明が立たないとか、靈魂がどうだのと言つたが、ソンナラ、實行の道德問題はドーで御座ると來ると先生宗敎がその根本となると云はなければならなくなつたと學者の御話だ。日本の今日より將來を推すと、どうしても吾黨の士が一膚ぬいで、社會が健全の發育を遂げる爲國家に報効する爲、是非とも社會事業や、慈善事業に眼をつけて頂かねばならない。是が宗敎の社會に尊敬を受け、價値を維持する根本なのだ。

それから公德問題だ、時運の進むのと洋行歸りの人々が鼓吹した故でもあらう、大分吾國の言論で、此問題が八ヶ敷樣じやが、之は大に佛敎者が骨を折らねばならぬ所だらう。實際の所歐洲に社會道德の進んで居ることは君子國と看板かけたる我國が恥入る外、辯解の出來ぬことが澤山ある。少し小僧には出過ぎた話しだが、巡敎師諸君などはドーかかゝる活問題——國家社會に利益ある活問題の上に眼を注いで、世の先覺者となつて戴きたいのだ。佛敎は利樂有情じやの衆生恩じやのと云ふ他敎には類のない無類飛切の社會道德、公共道德の根基を有して居るでは御座らぬかな。

闘した結果なのだ。

獨逸の國民と云ふと有名の節儉な民だ。ある日本の學士が此地に來て「獨逸で學び得た有益の事の一は節儉と云ふ事だ。」と話したが、成程それに相違ない、それで學校の方はドーデ御座るな、何處の都府に行つても壯麗な大學があつて、亦世界知名の大學者を網羅して居るではないか、玆處ストラスブルグなども位置と云ひ、建築と云ひ、大學が市の中心とも云ふべき程に見られるのだ。是が獨逸の今日ある所由なのだ。外交でも內治でも商工業でも此樣に强大な根柢があるから、中々勢力があつて、活氣があるのだ。佛蘭西から、此地に來ると誰れでも人民の英氣が勃々として溢るゝ計りの興國の家が眼に映ずるのだ。教育と云ふ奴、實に今に始めぬ、偉大なるものである。

吾宗の上下もどうですな、上下節約なること獨逸の樣にして、教育を尊重することも一番日耳曼帝國を學むでは、今の僧侶生活にはまだ〳〵節儉すべき餘地があると小僧は信ずる。この餘裕を以て今一層完全の教育をしては大層よからうと常に信じて居る。社會に吾宗の勢力を振つてどし〳〵盛に進むで行かうとするには決して外に方便手段はないのだ然るに伽藍建立とか、儀式制度とか、ソンナこと計りに力瘤を入れて、教育を蔑視し、虛位や虛勢を張りて空威張に外計り美く敷かざり立つる。朱紫佛法、伽藍佛法では、それこそ垂死の悲境にある東洋二三の國家と運命を同じくすることに相成つて仕舞ふは、鏡にかけて見る樣だ。

國には國の體面がある。一宗には一宗の體面がある。列强と云ふ御仲間に日本は加入をして、兵隊は隨分赤鬚の膽を奪つたが、學問と來るとまだ〳〵仲々御談にはならない樣なこれでは國家としての品位體面は前途尙遠いかなだ。一箇人に教育のない奴は社會に齒されぬ樣なもので、國として立つには夫丈の學問を具へて居ねばとても馬鹿にされることを免れない。そこで、淨土宗といふ、一宗はどうですな、一宗で侯として立つて行く品格があるだらうか。體面があるだらうか。――吾宗は教育を偏重にするの、財政がどうだのとをつしやる方は先づ、之から御答辯が願ひたいて。

僕等小僧よりもズート老宿方の方が御承知じやらう。德川時代の吾宗だ。葵の御紋の御影で威張たのもあるが、亦當時吾宗の教育が新進の勢破竹の如く、學政の完美各宗に拔ゐで居たのが、其品位體面を保有した至大の原因じやと私は思ふが、ちがうかね。獨逸に來て驚くことは、何處の大學に行つても、直ぐに萬國學生會が組織出來ることだ。御國自慢で『フン巳のヲクスフオルドとケンブリヂ兩大學にも一寸來なさいな』など言ひたがる英國人も居るから、無論佛人も居る。ロシヤで御座れ、伊太利で御座れ、ズート遠い阿米利加で御座れ、天津の聯合軍そのまゝの有樣じやないか、これが日耳曼帝國が御鼻の高い所で亦威張られても仕方がない所なのだ。

宗教の實力を一寸申せとの事で御座るか、大學生なぞになると『耶蘇教は頭から

ト本が讀めたとて、實際的の活動のない奴は何の役に立つものか。

例の面白くもなく、埒もないざれ言恥づべき至りである。先づ此位で御暇を仕ろうかな。あゝこのざれ言が諸君の一笑を買ふ時には、宗會も美事濟むで、新らしい活氣が宗門に盈ち滿ちたる時だらうか。夫外の孤客は宗運の隆々を遥祝するのみだ。不祥の結果や、退縮萎靡は思へと言ふたてドーしたつて思へるものか。

（明治三十四、五、淨土教報）

◇濫讀半日（新著批判）

寒雨霏々たるこの日曜は、杖を郊外に引かむ勇氣あらず、カルニバル祭は明後日として、異形の服裝したる男女は階下を往きつ來つゝ此處も彼處も假裝舞踏の催盛なれど、之に就かむは吾稍老ゐて且囊底の甚輕きをや。いで爐火紅なる所、長く雙脚を伸べて一昨着せし日本の新刊書籍を讀まむ。全篇の精讀はかゝる時固より能くすべきにあらず、繙き來て一紙二紙三紙五六紙、或は開卷數葉に止め、或は中央幾節、或は結尾少許、手に載せて披き、披くに隨て濫讀す、讀み而して心頭に來去したる條々、記して世の讀者人に質す。

○

待ち受けし書のことゝて、那珂通世氏校訂の元史譯文證補は第一に之を披けり。直に感ずる所二つ、一は此書が豫期したるより價値の頗大なりしことにて、出版者が勞に謝する、感油然として生じぬ。二には校訂者が此重要なる珍書を重刊するに當り、何故に今少しく讀者に親切ならざりしやを訝りて、校訂の實が甚乏しきものあるを憾むこと深かりき。

此書開卷數頁、著書が本據としたりし阿剌比亞、土耳古の古書を列擧し、次で之を纂述したる泰西學者の名を掲ぐ、讀者は知らむ。淸人の外國名を音譯する頗る通讀に困難なるものあるを、之に羅馬字若くは假名を付するにあらずんば、惑はざるもの果して幾人かある。讀者は書中屢援引する阿剌比亞學者多桑を d. Ohsson と判讀し得るか、英人霍渥兒特の Howorth なること、獨人哈木耳の Hammer なること、豫め其名を知らずむば。之を了する亦至難ならずや。重刊者が少許の勞を玆に吝むは、讀者の憾とする所なり。

淸人の著者、簡淨を好むや、此書にも其癖を示して、泰西の纂述者の名のみを掲げて、其書名は一切是を略しぬ。讀者が之に緣りて參照の便を缺き、研究の途を妨ぐる亦大ならずや。校訂者は何故に此缺けたるを補ひて脚註若くは附註に之を示さゞりしか。

陸氏の序中、多桑（ドオツス）の書が英文なりしことを記するも、其法文なるは明なる所、著者淇氏は多桑の國籍明ならざる樣言へど、此人が佛人にして男爵（バロン）なりしことは霍渥兒特（ホウアルト）の書中に之を示せり。かゝる些少の錯誤は固より校するまでもなしとして。本文中玄奘を往々玄奬に作り、甚しきは元奬と爲すが若きは、訂正者が看過すべからざるもの

日曜日には耶蘇寺に行つて說教聽聞と出懸けるが、何だかやり方、口調、技術などの點から云ふとズート日本の和尙樣の方が御上手の樣だ。だが、其の品位のあることに至ると哀しいかな、碧眼和尙の方が十段も上の樣だ之れは學識にも依る、品行にも依る言行の一致といふことにも依る。實行上社會に盡して居るからにも依るたらう。サーコーなると、遣り方、口調、技術など計りで品位が拔きと云ふのは先づ藝人で御座るかな。それで社會に宗教者で御座ると威張るのは一寸御無理じやらうよ。每度小僧の言草だが、口舌計りの布教は今日の社會には糞役にも立たぬのだ。勸財的の布教、僞善的の布教に至りては寧ろ社會の害毒となる計りだ。

獨逸が學生を優待することは格別のものじや、大學生は立小便をしても、直に査公一寸來いを極めこむ譯に行かぬ位だ。病院でも劇場でも夫々の特權があつて中々日本なぞでは見られぬ優遇があるのだ。ソコデ學生も自ら重じ、日本の樣な墮落學生を出すことは先づ滅多にはない。(尤も弊害も數へればないことはないがね)學生の氣象は中々氣高く快活で溫和で未來獨逸の中等社會の健全さが思はれるのだ。

どうで御座るな吾宗でも今少し學生を厚遇しては、第一期の舊本校卒業生諸君、卽ち小僧が今で御厄介にあつて居る本宗教學各方面の先輩諸君が來校中は一宗の優遇が先可なりぢやつた。夫れで當時諸君の氣宇の高かつた事、自重の大ぢやつた事は今に記憶して居る。少しの事で學生の元氣も振へば昂々然たる自重の氣も勃發して來る。有眼の老宿方は小僧が言はずとも御存じだ。

それから學生の體育問題だ。肺病面で痩こけた人間では、コレからとても歐米人と世界の舞臺に立ちて雄を爭ふことはドーして出來るものか。歐人は體力が强健だ隨つて根氣もよいが、活力も長持がする。大きな仕事や面白い事業が出來るのも之だからだ。ドーか此方面には教育家諸賢が全力を奮ふて頂きたい。學者になる、同時に御葬式、才子だ役に立つ其で多病で御座ると來ては、遠大の經綸、有情利樂が如何して出來るものか。布教家の方でも、ドシ／＼公衆衞生を勸說して强壯の國民を造くる樣に盡力して頂きたいものだ。快活に强壯の念佛を申せる樣に教へて頂きたいのだ。二十世紀は黃白兩人種の一大競爭をせねばならぬと共に、佛耶兩教の劇烈なる戰爭があること今から一大覺悟をして貰はねばならぬ。

靑年僧侶の體力が强壯になる、隨つて氣宇が潤大になる。ソコデ支那內地に入るものもあらう。西藏や印度に出懸るのもあらう。爪哇スマトラあたりに回教徒と戰ふ人もあらう。蒙古滿洲に面白い傳道上の仕事をする好漢も出來るだらう。引込思案のコセ／＼然として、意氣銷沈、喪家の狗の樣な佛教靑年が累々然たるのは論より證據、佛教滅亡の兆ではないかな。消極的に靑年の元氣を壓へて、學校の設備、その體育上の問題などには之しも頓着がないと大金を投じて病人を製造する計だ。チットやソッ

は此等の書の二三行を讀みても直ちに了知せらるゝ所なり。文雄徹定等の淨土經籍錄中にも、僞妄の部に之を數へありしと覺ゆ。著者の烱眼何故かゝる僞書を臚列せしにや。こは著者の大作に輕重をなすべき程のことならねど、著書の確實と精明とを重ずる點より見、其品位を保持すべき方面より見ば、次刊には宜く斷然改削すべきなり。

密爭融和論者の巨魁として、近時八事山の空華諦忍あり。その念佛醍醐祕要藏（三卷？）の中に、往々前人未發の說あり。六字名號を五佛五智に配當せしなど、聽くべきもの少なからず、專精氏の博覽此を逸せる頗諦忍の爲に哀むべし。

○

前田慧雲氏の大乘佛敎史論は續て繙きしものなりき。著者が燃犀の眼光は、精緻の研究と相待ちて、書中往々人を服するに足るものあり、第一章遺敎結集の條下、現行の諸大乘經が、結集當時の直寫的筆錄にあらずして、質實素朴なる講話的のものなりしを、後時梵語に改めたりとなすが若き、何等の卓論ぞ事稍駢拇の譏を招くべきも、少しく自家研究の斷片を記して以て慧雲氏の說を確めん。

大乘佛敎の聖典が、其原始一種の俗語方言、卽所謂プラクリットの一種を以て傳誦せられ、時を經て梵語に改譯筆錄せられて、現在の形體をなせしものなるは、大乘聖典の原文を讀みし人の容易に首肯する所なり。蓋太乘聖典の中にはその梵語中、俗語方言の全然醇化せられずして殘留するもの多く、其文法の如きも往々にして雅語の常規を逸するものあり。諸聖典偈頌の部分に於ては此特點特に其著しきを見る。故に現時梵語々學史を論ずるもの、別に佛敎梵語の一目を設けて、之を他の純雅なる梵文學と別てり。而して此等醇化せざる聖典中の俗語方言、若くは其特異の文法は。明に其前身の如何なるものなりしやを示すに足るものにして、之に由りて大乘聖典が、源一種の方言に依りて傳持せられしを證する甚難からず。されど茲には且く其實際を指點するを止めて、更に尤も明白なる一證を提供せむ。そは佛敎梵語に於ける韻律の方則なり。

印度韻律の方則は、猶支那詩法の平仄律を分つと同じく、語韻の長短を安排して、其則を設く、而して短韻の母音の後、一箇の子音相重なる時は、該短韻は長韻と同價値となることは印度詩法の通則なり。然るに大乘聖典の韻文にありては、或る場合に於ては全く此方則に從はざるものなり。手近き一例として無量壽經偈頌中の一句を引かむ。（南條氏刊本の七十四頁）

Buddhāna（ブトハーナ） dharmesu（ドハルメーシエ） prasāda（プラサーダ） viditum（ヰヂツマ）

普通の梵語詩法にては、第二句 dharmesu の su が pr 二子音の前あるが故に長韻となるべき筈なり。然るに此頌にては明かに其短韻なることを許しをるなり。此等の例は大乘聖典中枚擧に遑あらず、而して是實に大乘聖經の原始的形體を知るべき其重要なる祕鑰なり。

プラクリットにありては正確なる梵語の pra, tya, dvi など語首に位して二箇の子

にあらずや、かゝること校せずむば校すべきもの何物ぞ。

少しく煩しきに似たれど、左の淇氏が引用したる西域書目に羅馬字を施し、且つ西人纂述の書名を列記し置かん。何日かは多少の參照にもなるべきを思へばなり。先づ西人の載籍より初めむ。

（一）多桑 d'Ohsson: Histoire des Mongols. Amsterdamm 1824.
此書四卷あり余が見しはその第二版なりき

（二）霍渥兒特 Howorth; History of the Mongols. London 1876—1888. 3vols.

（三）革而甫 Wolff; Geschichte der Mongoles. Bveslau 1872.

（四）哈木耳 Hammer
1、Geschichte der Goldenen Horde. pest 1840 （蒙古人が露國に於ける事迹を記す）
2、Geschichte der Ilchane. Darmstadt 1843 2vols. （蒙古人が波斯に於ける事迹を記す）

次に西域人の著書を記せむ。前記多桑の蒙古史序論の中に之を列記すれば、同書を見むんには贅事に屬すべけれど。

（一）拉施特 Raschid 西人は多く淇氏の脚註に記せる法在烏拉喝拉施特 Faoe-ullah-Raschid の書を用ふ、蒙古研究に重要なる祕書として札米伍特臺白兒力克 Jami ut Tevarikh あり。淇氏は露人貝勒津、哀忒欒二氏の譯ありと云ふ、前者は余未だ之を檢せず。後者 Erdmann は露國カザン大學の教授にて千八百四十一年同大學にて其譯本を出版したり。拉施特の小傳及著書は、多桑序論三十三頁、霍氏序論二十一頁に之を出す。

（二）阿拉哀丁阿塔蔑里克志費尼 Alai-eddin Atta Mulk Joveini （其著者の名及著者略傳多桑序論第十七頁にあり）

（三）瓦薩甫 Wassat 名阿卜圖拉 Abdoulla （多桑序論二十七頁）

（四）訥薩怖薩 Nessavui 生於訥薩 Nessa 地。故稱曰訥薩怖希哈潑哀丁膜罕默德 Schiat-ud-jin Mohammed 乃其名也……爲紀傳之書名西雷土斯蘇爾灘只拉兒哀丁忙果必而體 Siret-us-Sultan jelal-ud-jin Mongohirti （多桑序論十二頁）

（五）阿梨意本阿拉育勒體耳 Ali Ibn-ul-Ethir 西域毛夕耳 Mousoul 人……書名喀密兒伍脫臺白兒力 Kamil ut Tevar.kn （多桑序論十頁）

（六）阿卜而嘎錫 Aboul Gaji……書用突厥文名曰適直里意突而克 Shejerei Turik （多桑序論四十八頁）

○

次に村上專精氏の佛教統一論第二編原理論の結尾數葉を讀む。著者が綜合統攝の大手腕は頗る痛快を覺ゆ、研むる更に精に、論更に醇なるに至らば、世界の書とならむも亦望むべし。末段禪密淨の融合を論じ、法然上人の諸著を擧げて參考に資す。然るに此等の書中大原問答（之にも多少議論きにあらねど先づ宗學者多數の論に從ひて正作とし）を除きて、餘は悉く僞作なること

ぬ拙稿に對して、精讀の榮を賜ひしは、併せて深く之を謝するなり。

「依法不依人」は大敎の規範とか、正理莊嚴の爲ならば僞作とて必しも援引に妨げなき、村上氏の論寔に當れり、天台其他の章疏に見ゆる淸淨法行經などの例、事々しく列べむまでもあらじ。

されどこは「別意趣(アルクアンクラ)」の勸化善巧(アビプラーヤ)の方面にこそ面白けれ「依法相(ドハーマラクシャナ)」の哲學的思索の方面には稍如何にやとも思ふなる、僞作を引くことは第一に後學を惑亂するの虞あり、第二に自義に便するの弊を生ず、歷史的哲學的の精確なる硏究法には特に之を避くるを可とす、古賢のなしたることなればとて、危きは其顰に倣はざるに若かす、余は村上氏の辨を是とせざるにあらねど、かの短評を草せしときかく思ひ居たりしまゝ、一言之を記し置かむ。

村上氏曰く、諦忍の著は密敎家の位置にありて念佛の調和を試みしもの故、淨土敎家の位置にありて密敎の關係を論ずる條下には、これを引くこと當るべくもあらずと、當と不當と引と不引と、氏の炯眼自ら說あるべし、余亦何をか言はむ。

されど余初めかく思ひぬ、諦忍は密家の人なれども、其著者と行實とに照せば、純乎たる淨土門の人なりと、昌黎の語を借り來りて、之を言へば、密名にして淨行なるもの、書名は忘れしも、忍師は公家武人百姓町人所有る階級が念佛するに適したるを說きたる通俗の書あり、所說甚巧妙を盡せり。淨土門の傳道書の之に踰ゆるもの甚希なり、その善導法然兩聖に歸仰し居る（光明大師別傳纂註も忍師の著と記憶す）議論の常に光明大師を本據とせる、之を淨土家と云はむも誣ひたりとせず、人物に大小の差こそあれ、台門楞嚴院の先德を、吾々は淨土門の先達として仰ぎ居るならずや。

次に御風氏に一言甲し置くべし、御風氏は本誌の第五卷八號に余が金剛戒章を僞作とせしこと、鎭西一流傳說の執見に先入したる故なりといはれたり、氏の言甚簡、余頗惑ひなきを得ず。

氏は定めて淨土宗に種々の僞妄の書の出でしは何時頃なりしやを知り玉はむ、菩提流支の麒麟聖財論を初めとし、幾多の僞作が盛に宗門の典籍に援引せられしは、了譽聖冏の時代にありとす、人も知る如く、冏公は淨土宗中興の偉傑として學問の該博、思想の雄大、淨土宗史に希に見る所、一たび其「頌義」を披かむものは、公が英姿の颯爽として紙上に躍出するを見む、然れども英雄人を欺くの手段か、著書中、僞書の援引の盛なる頗る驚べし、謂ふに此等僞書の多くは或は冏公腦中の產物ならむか。

冏公出世已來、淨土宗學の勃興と共に、種々の儀式條目など生じ來り、白旗流義、鎭西流義など八ヶ釜しき正統主義(オルトドキシイ)を學林に見るに至りぬ、されば鎭西一流の傳說に先入したらば、却て寶戒章などを法然上人の眞作と崇むべき筈ならずや、僞書穿索の議論生ぜしは、大玄貞極など云ふ復古主義の學匠より初まれり、今も尙淨土宗にて純粹の正統主義を以て立つ頑固の人々は、此等の學匠を待つに異端を以てせむとす。御風氏の評はかくて何を詮じ居るにや、余には

音あるときは、短縮せられて pa, ca, di 等となるを例とす。大乘聖典の詩法が此等の語に限りて印度詩法の通則を適用せざることは、是等が源二子音を有したるにあらで一子音のものなりしこと、卽ち俗語なりしことの甚適切なる證にあらずや。

數年前中央亞細亞に發見したる、樺皮に佉盧文字を以て書したる法句經の斷片は、此立論を助くる甚大はるものなり。此經文は其語甚育王碑文の語と相類し、其內容は南傳の法句經に比して甚く增大する所あるを見る。大乘聖典の原始形體は凡そ此法句經の如き語を以て傳持せられたるものあらむ。(此經文斷片ば今パリス及彼得堡に分藏し、其一部は佛のセナール、露のヲルデンブルグ之を公刊したり)

○

次で近藤常次郎氏の仰臥三年を見る。此書一種の經典といふべく、一類の現身說法と見べし、澄淸潭の如き想、行るに溫籍春の如き文を以てし、摯實の氣、慈悲の情躍々として紙幅に溢る。宛として古賢と一堂に會するの思あり。その字々句々、直下に人の肺腑を貫き、心肝に入りて、慰藉を與へ、修養に資し、奮勵を促すの大は、遠く紛々たる宗教書に勝る。著者修證の深大なるにあらずんば豈よく此の如くならむや、今の世敎界の名士と稱して、講義を販き演說を賣りて得々たるもの、其言ふ所、多くは輕薄乾燥、毫も人を動すに足るものなし。此の如き輩宜く此書を讀みて、其修地證果の太だ劣れるものあるを慚愧して可なり。此書時に出して靜に之を讀まむ。

○

松本文三郎氏の佛教聖典結果にに至りては、參照の載籍甚乏しき吾國にありては、洵に感謝すべき賜といふべし。吾は氏が更に材を蒐集するの周備を願ふて、其後篇の續々公刊せられんことを欲す。

餘の二三の書は吾甚之を繙くに倦む。乃ち讀賣新聞を把りて、露伴の「天打つ浪」を讀む。此回登載僅に三回のみ、好友を訪ふて遇はざるの感あり。思へらく、世の天才を遇する寫字生の如く植字工の如く、時に幾行を賦し、日に何枚を課す、惡むべき之より甚しきはなし、吾惡くんぞ彼のハガキ集中の紛々者流に伍して作者を責め且怨みむやと、再たび思ふ、天才が新聞小說の如きものに筆を插むは、自ら脚を深泥に沒する所以にあらずやと。

(明治三十七、二、新佛教)

◇無用の辨

(新著批判の後に)

强ひては要もなき事なり、且つは少しく遲れたれど、拙稿「濫讀半日」に關して數行を「新佛教」の一隅に借らむとす。「そのまゝも佳けれど椽に散る楓」。

村上專精氏が拙稿に對する摯實なる文(本誌五卷七號)を讀みては、其人に服する深きを增しぬ、攻究に忠なる亦豈敬を致さゞるを得むや、非を飾り短を覆ふて强辨是事とする此地の學者には、氏が如き寬雅の風懷見るべくもあらず、一顧するだに足ら

かすのは、一つはこの信條の成立に付きて、此市の某僧正が非常に骨を折つたといふ因縁もあるのだらうが、今一つは此市が新舊兩教の劇烈な競爭地である爲、新教に對して示威運動をやるのが大目的だからなのだ、一體舊教の連中、近來カイゼルの弱點に付け込みて、勃々たる勢力を此地に振ひ出し、大學には神學科を設置させる、坊主を神學已外の教授に入れるなど丶、傍若無人の振舞をやつて居るが、今日も亦例の傍若無人主義を振り廻すに過ぎぬのさ。

何は兎まれ、こんな話にもならぬ馬鹿々々しき信條が、近世紀に成立したといふのさへ、頗不可思議なのに、二十世紀といふ今日、歐洲の眞中で、之が爲に全市が狂氣の樣に大騒をやらかすと云ふに至りては、それこそ不可思議の不可思議、摩訶不可思議、極東の異教徒には到底飲み込めぬ譯だ、こんな不可思議を現に眼の前に見るのだから、マリヤの不穢托胎なんぞの不可思議は何でもない、羅甸語の愚にも付かぬ面倒な證明よりも、こう考へたらすぐ片は附くのだ、アポロゲテックの教授連に、この有效な證明法を、祝祭の紀念として、一番進呈して置かうかな。

勿論、僕はマリヤ崇拜其物を根本的に惡くは言はぬ、猶太式の耶和華、間の拔けた赤ら顏の田舍代官の樣な神樣よりは、マリヤの方が幾何氣が利いて、人情に適して居るか知れない、磔刑の像も、宗教は死より生に入るものだと云ふ、崇高な表示と見たら、有難くないでもないが、これも刑罰か贖罪とか云ふ、野蠻酷薄な穢い法律思想が潛むで居るのを考へると、ウンザリする、其所へ行くと、マリヤは實に基督教の花といふてよい、精華といふてよい、至醇の愛といふものを母の姿で表示した所は、佛教の觀音が何だか取留のない樣なのに比して、人情に近く適切で面白い所がある、否面白い計じやない、眞面目に歸投し得る所がある、一體マリヤ信仰が羅馬教會に起つたのは人性自然の要求から來た樣に僕には考へられる、猶太的の神權思想と羅馬的の法律思想とで捏ね上げだ、冷酷無情な法王政治に、民心が堪らへ切れぬは知れたことだ、其所でマリア崇拜が出たのだ、イグナシウス、ロヨラの一派が、新教勃興の當時に出で、大にマリアを擔ぎで舊教の頽瀾を多少は廻すことが出來たのも、亦この人心の微妙を確かに捉らへたからであらう、此間の消息をよく漏して居るのは、ワグネルのタンホイゼルだらう。

ある極重の惡人があつて、羅馬法王の教權的法律的一點張の力では、如何しても救濟が得られぬ、得られぬ計じやない、教權や法律は中心の懺悔を排斥しようとする、此の惡人が至聖至醇の愛の力で初めて解脫が出來ると云ふのが抑此ヲペラ一篇の骨目で、ワグネルは曲中の端役ウオルフラムにOheiliger Liebe evige macht と云はせてあるが、この聖き愛の永久の力を實現して居るのが女主人公のエリザベット姫だ、深窓に人となつた可憐の姫君が、ワルブルヒの深林中、老い行く晩秋の夕暮に、昨日の綾羅に換はる白麻の行衣に身を責め、マリア祠前に身を捨て、タンホイゼルの罪障

全く解し兼ぬるなり、大體寶戒章などの書は少く事理を解する人には互に其僞贋を看破し得らるゝなり、こは村上氏の辨ぜられし通なり、傳說とか先入とか云ふものなくては解らぬ程のものにあらぬなり、御風氏は尙寶戒章に付き吾等に敎示あるべしといふ、有難きことなり。

　同じく第五卷の十號に出でたる三蔵生の梵語植字の正誤は多謝する所なり、こは或は余が寫誤なるやも知るべからず。同氏の南條氏が首路迦を最短の偈とせられしこと寄歸傳と合せずとの疑問に對しては、筆の序に下に數語を費さむ。

　南條氏は通途に就きて首路迦を最短といはれたり、通途の梵文學にありては是より短きものは皆無といふて可也、特に佛敎聖典には用例絕無なり、されど剋實して云へば義淨の言の如く 7×4 若くは 6×4 の如きもの亦希にはあるなり、吠陀に殘存せるガーヤトリの頌體は 8×3 なり、こは梨倶吠陀には珍らしからず。

（明治三七、十一、三十、新佛敎）

◇マリヤ祭の夜

（明治三十七年十二月十一日ストラスブルグにての事）

マリヤ論――タンホイゼル曲中のエリザベツト姫――自由思想家の家族夜會――非戰論者を罵る――モルモンの傳道者「聖母の不穢托胎」の信條が、羅馬敎會に成立してから、今日は其第五十年目。

　朝からガン〳〵ヂヤン〳〵大小寺院の鐘が市内に響き渡りて、行列。讃唄。說敎と、所有る宗敎的の儀式が、日の中は盛に行はれたが、夜はそれこそ觀物だつた、一百五十メートルの高塔は、暮方から瓦斯、電氣、燈油で、イルミネーションを始め、九時になると種々の藥品を盛に燃し立て、唯見る、壯大なる高塔は、或は赤く或は蒼く、或は綠に或は紫に、全體を燦然たる火燄に裹むで、殿堂其他の棟々一齊に彩火を點じ出したのだから其壯觀と云つたら蓋無類だつた、六七萬を數ふる信徒の家にも貧きは豆ランプ提灯、富めるは電燈瓦斯で、夫々相應な彩火粧點をなし、中には頗る美麗な聖母の像を店頭に飾つてある家も少くはなかつた。

　キリストが超自然的の托胎をして、人間の罪惡に穢れず生れ出たといふことは、誰でも知つて居ることだが、今日御祝をした信條は、つまり同一の筆法を母のマリヤに及ぼしたるに過ぎぬのだ、マリヤもキリストと同じく、其母のアンナの胎内に神祕的の受胎をして其降生たる全く浮世の罪惡に穢されぬのじやといふことが、この信條の要點なので、この說はマリヤ崇拜の勃興已來、隨分古くから羅馬敎會の神學者に唱へられたのだが、反對の議論も頗盛だつた爲に、漸く前々代の法王ピウス九世の時に信條として確定したのださうだ、ミユンヘンとかキヨルンとか云ふ舊敎凝り固りの都市でも、この信條の爲にこんなに御祭騷をやるのを聞かぬに、此市では去年のレオ法王登職二十五年祭と同じく、非常の騷をやら

う、だが眞理の太陽の前には何の價値があるか、羅馬教會の外形的の幻戯も吾々自由思想の太陽の前には其光輝は到底永く續くものでは斷じてない』勿論、滿場拍手大喝采。

次いで客員の某が「自由思想主義と無神論」と云ふ講演をやつた、一通歷史的で、意見も至極公平だつた、近時無神主義を以て一種の宗教條目を造り無神主義の法王政治を形成せむとする傾の或る方面に見らるゝのは自由思想家の大に警戒すべき所だとやつたのは確に一部會員の急所を突いた樣だ、これは新佛教の諸君にも一寸聞いて置いて頂きたいものだ。

講演がすむと、會員は此所に一團、彼所に一團、雜談に興じて居る中、鐵道の號笛手をやつて居る、一會員がガリレヲを頌した長篇の詩を吟じて、大に會員の喝采を博した、文學專門でないこういふ種類の人の詩は、一種の力と熱情とが字々に溢れて何とも嬉しく聞いた、兼て識合の露國革命黨の某も來て居て『旅順は中々落ちさうもなし、クロパトには增兵がどし〳〵來る、僕は心配で心配でたまらぬ、——何、日本が不利があるかと思ふて心配でたまらぬのだ』と言つたが、これは露國志士一般の聲だ。一部非戰論を主張する日本の社會主義者諸君、もし君等の同主義者尤も憐な露國の同主義を救ふとの義俠心と勇猛心があるならば、愚にも付かぬ非戰論を斷然廢止して、どし〳〵露軍を掃蕩するの一策を講ずべしだ、劍を揮ひ銃を擧げて進むで陣頭に立つべしだ。露政府の改新露國の新氣運は唯日本戰勝の力で開拓が出來ると信じて居る露國の同主義者を君等は何と見て居るのだ、社會主義といふものは死物じやないのだ、杓子定規で行くものでないのだ、丸呑の飜譯的社會主義が爪の垢ほども人道の助になるものかい。

僕はこの會場で、圖らず二つの面白い事實を發見した、其一つはモルモン宗の傳道者が會に二人も居ることだ、段々談をして見ると、モルモン宗では、目下瑞西のツューリヒに傳道本部があつて、どし〳〵傳道をやつて居るとの事、之には多少驚かざるを得なかつた、最も獨乙の上流社會、特に軍人連中には、實際的のモルモン信者も大分あるとの事だから、何も彼等が傳道に驚くにも及ばぬが、よくこんな宗旨を鐵面皮にも傳道に來たと其熱心には多少驚いたのだ、尤も當人の談では、モルモン特色の一條は最早實行もせず、重要なものでもないとしてある相だが、何しろ頗る奇異な感がした、僕は日本に來たモルモンの話などをして、少しは皮肉の事も毒附いてやつた、第二は獨乙の溫泉場として名の高ひウイスバーデンで、盛に舊教自由教團が運動をやつて居ることだ、今夜も僕は種々な印刷物を同會から頂戴したが、これは大に注意すべき現象だ。どうか着實の發達をして法王主義を根本から改めることが出來たら、それこそ舊教々會の爲計りでなくて、人類の社會の幸福だ、日本の各宗内にもどし〳〵こんな革新運動が起つて、本山主義法主神聖主義の根本的革新が是非して欲しい。

歸路に就いたのは最早十二時過、來た時

消滅を祈る所は、中心から人の涙を搾り取る幕だがこのエリザベット姫こそマリア其物と見てよいのだ、永久に淨く美はしく優しき白百合其物と見てよいのだ、元來ワグネルは愛を色々に寫して、晩年の作のトリスタンなどには、佛教の涅槃の思想に髣髴とするまでに愛を進めて居るが、タンホイゼルは純乎たる基督教的で、特にマリヤ思想が曲中に溢れて居る、マリヤ崇拜もこう考へると、決して嘲けるにも笑ふにも及ばない、否全幅の同情が其詩的な大乘的な、而も痛切な味がある所に注がれる、こう書いて來ると、一夏瑞西の山寺で、聖母の像前に、應以婦女身得度者、即現婦女身、而以說法と普門品を讀むで其德を頌したことが、今更の樣に思ひ出さるゝ。

だがこの美はしい信仰を教權で縛り付けて、不穢だの穢だのと法律的の條目を捏造して、法王が之に裁可を與へるといふに至りては、とても我慢が出來ぬ、元來信仰といふものは人生自然の自由に出づるもので、之こそ、人間の靈性の最大權利だ、之を法王など云ふものに法文で定められてたまるものか、羅馬教會の不都合千萬なのは此所だ、其腐敗や弊害も此所から出て來るのだ、彼等はこの惡組織を應用して、俗界の政治上に羽翼を伸しつゝあるのだ、殖民地に蠻行を行ひつゝあるのだ、貪婪なる國家の犬となつて居るのだ、法王政治、實にこんな二十世紀に於ける恥づべき馬鹿々々しき紀念は何所にあるだらうか、彼等の定めた信條なもど云ふのを擔ぎ廻つて、迷信の傳道をして居るエスイツトなどを考へて來ると、實にぞつとする、こう考へて高塔大殿は燦爛煌々と輝き燃えて居る彩火を見ると、無間地獄の火が地底から燃え拔けた樣に見える、讚唄や歡呼の聲は、叫喚大叫喚の號泣の樣に聞える、寺內の衆僧は、宛も是ミルトン失樂園の大魔王小魔王、幾多の魑魅魍魎が、民血を飮み人肉を啖つて、盛に腐敗頽落の計を講ずる樣にも自ら見へる。

此夜、自由思想家の家族夜會に招待を受けた。

夕飯を終つて某文學士と一緒に出かけた、高塔の彩火は今や其美の極點に達し、市街の燈火は目も眩む計りに輝いて居る、然しこの大祭の日に法王政治に根本的の反對意見を有する吾等の會合があるのじやないか、社會黨や、唯物主義や、原始基督教徒や、舊教改革黨や、所有る社會、所有る階級に今や羅馬教會に對する敵意が春潮の如く湧いて居るのじやないか、法王政治に對する痛切な攻擊書物が飛ぶが如く賣れるのじやないか、舊教に對する不平。不滿。怨恨今や最早蔽ふべからざる事實だ、同行の某文學士とこんな事を話し乍ら、不圖生覺への唐詩を思ひ出して、彩火の影で一寸吟じて見た『……唯知一曲、霓裳裡既有漁陽鼙鼓聲……』。

僕等が會場に着した頃は、會員も大抵揃つて其數凡そ六十人計、家族會といふので、妻君や娘連も大分來て居る、直に會頭の挨拶が始まり、次で副會頭の「マリヤの不穢托胎」に關する簡短な談話があつたが、結論はこうだ『美しい幻術（ツァウバー）の樣な彩火は一時無智蒙昧の風俗を欺くに力はあるだら

に獨逸社會教育の結果でもあらうが、新佛敎會も伊勢屋の旦那、勉强屋の番頭は勿論、車屋の八公も土方の熊公もドシ〳〵やつて來て、熱心に意見を吐く樣にならなくては面白くないじやないか、坊主上りや雜誌本や演說使の有藏無藏の面々、大天狗小天狗の鼻競らべに寄つてたかつて勝手氣儘の熱を吹きやつた所が、どれだけのことがあるものか。

奉天の大戰も猛烈になつた、明日か明後日は一大快報の號外だろう、浦鹽にもそろ〳〵手を出しかけた樣だが、何でもピシ〳〵やるべしだ、日本の自衛の爲に戰ふと云ふ觀念の外に、人道の爲文明の爲に奮闘すると云ふ自覺を盛に將士に持たせて、ウント自由平等博愛の大敵（これは此間の演說會に社會黨の某辯士が用ゐた語だ）を粉碎すべしだ、マホメツトが天國は兩劍相交はる間に存すと言たのは、ある場合では確に眞理だね、惡魔に對して戰ふ勿れと云ふ馬鹿が何處にある。

僕は此頃トルストイといふ老爺の根情が大分判らなくなつて來た、露國細民今日の窮狀はどうだい、其悲慘の狀、壓制の樣はどうだい、彼等が一齊に奮起した悲壯淋漓たる樣はどうだい、露人の話に依ると、老爺は今病氣だとの事だが何にしろ彼が身を挺して起つのは此時じやないか、ガツポンなんて希臘敎の坊主さへあの通りの驚天動地の大運動をやつたじやないか、トルストイとも云はるゝものが、今愚圖々々して居ると云ふのは何事だ、彼が白髮首一つをシユロツスベルグの獄中に投げ入れて見ろ、其結果は千百のガツポンよりもきつと大きいに違ひない。

君の音樂通には驚いた、境野君は角力通だと、之も紳士とか云ふものゝ資格の一つかね、僕も大學の御蔭で每週ヲペラの安見物が出來るから、少し棚下しでも初めやうかね、ナムカラタンノートラヤーヤーの梵カラでは一向初まらぬから、此所一番誰かの眞似をして餘り日本に知られて居ない新作ものを振り舞はしてハイカラ風を君の領分に吹き立てゝやろうかね、――桑原々々

田舍芝居に大根の多いのは仕方もないが、たまには伯林、ミユンヘン巴里あたりの本場から名優が來るので面白く見られるといふものだ、巴里のサラ、ベルナーはよく來るが佛蘭西語はカラ駄目の僕には仕樣がない、此間ソルマとアルノルドゾンが來たが、大抵は女優と定まつて居るのが可笑じやないか、何處でも女でなくては夜じやない、幕が明かぬと見へる、音樂や歌よりも所作や道具、所作道具よりも面と云ふのが御客樣の大部分ださうだがから仕方もないのさ、「新佛敎」でも女性記者があらせられる樣だから、大にもちやげ奉つて、御寫眞でも讀者に拜ませて見ろ、賣れる事受合だ、何、滔々たる俗惡の小說雜誌と一所にするなと、其下らぬ樂屋落の愚態は何だい。

昨日の晩から又熱だ、少しは咳も出る、こういう時には日本文のものに限るね。「新佛敎」の外に某君から「新小說」も來た、鏡花は僕が大好な奴だが、ああ千遍一律に出られるとウンザリする、嘲風君から「火の

見た高塔の彩火は此時最早電燈と瓦斯とを全く止めて仕舞つて、僅に殘つて居る隣なる燈油の火が二點三點、星の光に天を摩する計りに立つてる憂鬱な黒き大塔に晩秋の殘螢の如く消えては輝き、輝いては消えて、哀く閃いて居る、街上の人漸く影なくて、寂々たる夜にこの悲しくして而も大なる景に對するとき、起り來る沈痛な聯想は唯一つ――これや舊宗教の哀なる末路。

（明治三八、二、新佛教）

◇たん壺

米峰兄

民主黨と自由思想團の發起した、對露演說會も昨日で先々無事に片附いた、僕が自由思想團の一員で、民主黨の肝煎連にも二三の相識があるので、糞の役にも立たぬながら、多少は演說會のために野次らせられた譯さ、演說會はつまり露政府の暴虐と腐敗とを痛擊して、惡政に憤起した露國勞働者に對する同情の發表に過ぎぬのだ、其詳細は遠からず報道するとして（？）、先づ會も濟むで御芽出度とでもいふ譯が、昨日は發起人某君の家に、僕と二人の露國革命黨の大學生が珈琲の御馳走に招かれたのだ、この書生の一人は、兩三日の後、ペータースブルグに出發する、「僕等が大飛躍をやらかすのは今日だ、何、君、危險だと、そんな事は太平の氣樂屋の言ふことだ、昨日も今日も幾百と云ふ志士仁人がふん縛らるゝのに、僕一人位がどうなつたからとて、何でもなからうじやないか、首は飛ぶものと勿論覺悟はしてあるが、大抵はまた六月には逢へるだらう」是が彼の言草だが、何といふ沈痛な猛烈な凛々たる勇氣だらう、それ妻君の手紙、それ思鄉病、箱庭の樣な家庭の夢でも見て、御土産の詮索に罪のない日本の文部省留學生には、こんな氣慨の奴は恐らく一匹もあるまいよ。

町は斷肉祭（カルニバル）で大騷、飲む躍る、種々雜多の異形の假裝、コンフェッティ（細かく切つた彩紙）の投げ合、彼處も此處も假裝の舞踏會ではそれ盛なものだ、一昨々夜も演說會の後の第二次會だつた、僕の隣に居つた一醫者の細君が、僕にも是非翌晩の美術假裝會（！）に行かないかとの事だつたが、現今は戰爭に御座候とうまく逃げて仕舞たのさ、其實入場劵が十馬、入場してから花でも買つてシャパン一本を拔くと、四五十馬は一晩に飛ぶので此貧生斷肉どころか、斷食を實行するに立至るのを露悟らせられぬのは、こんな會合に來る女にも似合はぬと君は思ふだらうが、一體女と云ふ奴、何處でも先こう御芽出度出來て居るものと見へる。

「新佛教」の二號は今朝着いた、毎度乍ら御氣燄千萬のことだ、一體新佛教會と此地の自由思想團とは非常によく似て居るが、一つ違ふ所は、自由思想團では學者と云ふ側の人が割合に少くて、實業家が多數を占め、切符切とか、電鐵の車掌とか、乃至は郵便配夫とかいふ方面の人が可成に居つて、堂々と宗教や哲學や時事問題に關して熱心に意見を吐露することだ、これは確

培、道芽の灌漑その力を盡しさへ候へばラインの江畔に、祖山の御忌の鐘を打ち鳴らし、ベルリンの街邊にも緣山六時の禮讃を見むことも、必らず夢には之あるまじくと、今日も公苑蕭々の微雨の中、眩きばかりの菊花壇を廻りて、幾度か呻吟仕り候。

考へ候へば、今や獨逸に於ける、求道の聲、求佛の念は火の如く盛に燃ゑ來り候。衆々申上候獨逸佛教傳道會も、追々着實の進歩を致し、今はハレル市に支部設立の運にも至り、機關雜誌『佛教徒』も既に七號まで相達し候。前號には「リヒヤード、ワグネルと佛教」などいふ面白き題目も有之候ひき。誌中大體は南傳佛教の論文多く、吾々より見れば聊か物足らぬ様に候へども、佛教研究の順より申さば、從小入大と申すが順序に候へば、寧ろ喜ふべき現象と寒衲は喜居り候。

この佛教會は今の所、學理の高遠よりは實際の行履、談理考證の學者よりは熱心摯實の求道者を以て會を維持し、光顯し居る有様に候へば、實に前途は有望に候寒衲は吾宗内の諸大德に何卒この傳道會と交際せらるゝ様切に希望仕候、右に關する御用も候へば寒衲は出來る丈は盡力申上たく候、

かく佛教發揚の機漸く至ると共に、一つ面白き現象を獨逸の王室の內に相見るに至り候、そは獨逸聯邦の一つにて美術工藝を以て名あるヘッセン大公國の大公（現露國皇后の御父に在らせられ候）が、其宮苑の中に、巨大なる佛陀の聖像を建立有之しことに候、大公はもとより佛陀の聖教を御信仰あらせらるゝには無之候へども、四八端嚴の德相は明かに此美術國の大公をして、自ら渇仰の念を生ぜしめ候は疑ひなき事實に候、甚督教の側には之に付きて種々の議論有之候様子に候へども、要する所、こは疑もなく、佛教の漸く獨逸王侯の間迄追々威勢を與へ來り候事は、見るに難からざることゝ存申し候、

佛教傳道會と同じ目的にて、新宗教の創立に餘念なきは靈智會（テオソフイシエフエライン）に候、これには今ペーンダンの哲學とヨーガの神學を主とする印度的の靈智會と、ヤコブベーメを祖述する基督教靈智會と、二者の中間に立てる折衷派とも云ふべきものありて大別すれば三派に候が何れも見性悟道を主とし、現身三昧を成するを說き居り候。此會には頗る學者連も有之候。兩三週前、印度靈智會の某、寒衲の佛僧なるを知りて、態々ハイデルベルグより尋ね來り、佛教禪定の事に付種と質問被致候。この會に付きては寒衲はあまり極端ならずやとの意見も有之候も、兎に角其求道の熱心には感服仕居候、

カトリック教徒は何れの聯邦に於ても、聯邦會議の議員競爭に、社會黨と大奮鬪を致し、大抵は多數を占めし様子に候、彼等がかゝる政治上の運動の猛烈なることは兩三日前手にしたるたの諷刺畫にて御判じ有之べく候、

南獨はバイエルンの水呑百姓どもの亡者、唯今天國の門まで罷り出、老若男女、齡を限りに何卒門內に入れて〱と懇願致し候を、天門の守衞、聖保羅は嚴めしく、其方ども甚不信不屈に付、開門相成らぬと言ひ放ち候、すると、亡者共

柱」と「良人の自白」に「心の跡」が來た、小說の方は例の民主黨の記者先生に日本に於ける最新の社會主義の美文學とでもして嘶してやると、直にフライエ、プレッス（新聞の名だよ）の社說にならうといふものだ。

此所で止めやう、戶の外で跛犬がクン〳〵鳴て居るスリー、コム思ふ存分熱を吐きちらして少しは氣持もよいようだ、大天狗の面々にもよろしくでもあしくでも勝手に言ふてくれ、左樣なら。

（下に異形の服裝した男女が大騷ぎに騷いで笑ふ聲ウアハキ、、プ、、ハヽ、）。

（明治三八、三、　新佛敎）

◇ラインだより

ライン江畔の天長節は六たび玆に廻り來りて、貧衲の空齋も亦遙に奉祝の誠意を表し奉ることゝ相成申候、思へば千紫萬紅凋落して、初冬の光景太だ寂寞を極むる所、深く籠むるラインの寒靄の間、針の如きアルサス廣原の霜風の中に立ちて、凛々として秀芳を此地まで傳へたる我國の菊花こそ、此大なる佳節を祝し奉るに、太だ適當したる名花として、轉た嬉しく感ぜられ候事なれ、歐や米や、人道の花、平和の色、漸く凋落し來りて、往く所權謀と詭術、至る所腐敗と慘害、實に痛嘆此事に候ふ中に、獨り高く文明と正義と人道との爲に、日東新進國民の中心の渴仰を寶笏に集め玉ひて、允文允武日と彰かに天と丕なる、吾等が大君を祝し奉る、吾等ら幸の中の大なる幸に候はずや、

千代の色唯菊のみの世界哉

當日は拙寓に佐々木達、佐々木隆興、浦野文彥の三醫家、及び此地にて同じくこの佳節を祝し奉らむとイタリヤ壯遊の途次、立寄られし文科大學の村川堅固氏とを合せて寒衲とも同胞五名、數鉢の菊花の下、此地の玩具店にて求め來し數旒の旭日旗もて飾りし卓に、一同恭く聖寶の無窮、壽祚の永遠を祝したてまつり候、伯林は帝國公使の駐在有之所とて、奉祝の盛宴は年一年よりは盛に、今年はわけても盛大の事と承り候、同地に留學中の得痴道人（大谷派の瑩亮連枝）奉祝の佳什、來句有之、めでたく候まゝ、御報申上候『菊畑北にひろげし今年かな』。この菊畑、是吾等の大に栽培に力を盡すべき所に候、文明の傳播の爲、人道の擴張の爲。其大本として、大慈悲の正敎を宣布のために。

菊と申せば、此地にて菊花の栽培が一年は一年より進歩するは、實に驚くべき程に候、「大白山」「玉簾」など云ふ各種も本邦を壓倒するまでに美はしく見事に仕立て上げ候を見受申候、かゝる園藝の小技にも、獨逸國民の改良と進歩の實證はあらはれ居り申候、是等は、特に我國民が再省三省よく〳〵思ふべき事に候。

更に相考へ候へば、栽培其宜しきを得て、灌漑に怠り無之候ときは、本朝の各種、この獨逸の地に見事に秀芳を存して、薔薇さへ壓倒するの域に可達候、悉有佛性は何れの地をも隔てず候へば、佛種の栽

孃なぞが、親ら種々の自製品を賣り、麥酒カッフェーの給仕迄も致して、其賣上を一切窮民を賑すの料となさんとてに候。

吾宗の諸大德、願くば其檀信徒を說きて、時にこの如き趣味ある慈善事業を行ひ玉はむこと、切望の至りに候、東京には忠魂祠堂會館の好き會館有之候へば、甚だよき結果有之べきは期すべきことに候。

今年は氣候兎角不順なりし爲と、大暴風時に有之したために、南方暖地に行くべき燕の、途中より北歸したるもの多く、中には寒に堪へずして斃れたるものも有之候ひしが、人々はこの弱り衰へたる小禽を救ひ取りて、態々汽車便にてイタリヤ、スペインなどに送り屆け候、汽車の役員達も極めて親切に此等幾千の小乘客を保護して、目的地に送り屆け申候、美はしきことに候はずや。

此書、諸師兄課佛の餘暇に一顧の榮を得むときは、この記憶すべき大なる年も佛名の讚唄の聲と共に過去に落謝して、新なる希望と奮闘とを以て明治三十九年の新天地を迎へ玉ふ時なるべくはるかに諸師兄が大慈悲の恩光中に道福裕なるを奉祝上候。

來む年や日課日に〳〵新にて

（明治三八、一二、淨土教報）

◇殘雪點々

少く友「新佛教」に接せざりしに、今曉殘雪點々の窓前彼と相見ることを得て、窓外春光、更に一段の和味を加ゑたるを覺へたり、彼既にわがために語る所甚多かりき、吾また豈彼がために少く語らざるべきや。

寺本婉雅氏の「十萬白龍」の邦譯は頗る多謝すべきものにして、吾邦の宗教學者に新材料を與ふことも尠少ならざるべし。但し邦人の往々寺本氏始めてこの秘書を譯出したる如く思ふは、嘗て此ボン教の奇書を始めて歐洲の學界に紹介したるアントン・シーフネル次で精細の研究を此書に行ひて、批評的の獨譯を公にせしベーくラウフェルのために其氣の毒の感なき能はず。

アントン・シーフネル一苟くも西藏の宗教を口にせんと欲するものは、決してこの功勞著しき露國學者の名を看過する能はざるへし。彼が幾多西藏に關する資料を學界に寄與したる中に「十萬白龍」も其概要を抄出論評して報告せられあるを見る。

即今より二十六年前一八八〇ペータースブルグ大學紀要の中に “Über das Bonpo-sutra :, das weisse Nāga-Hunderttausand” ボン宗教典「十萬白龍」につきてと題するもの是也。十餘年の後、ラウフェル Laufer あり、芬蘭ヘルティングフオス大學に於て、盛に西藏の神話を研究し、好著頗多し。彼はシーフネルの報告したる「十萬白龍」の西藏原文撮要を一八九七伯林に於て公刊し、續て翌年フイン・ウイグル協會紀要 Mèmoir dela soc. finno-ougr. の第十一卷として右撮要の批評的飜譯を出し、之に有益なる序文及び字彙をも添へたり。

大聖保羅樣、今回丈は特別の取扱を相願たく。實の所は、吾々が死亡の砌、御仕持樣方は何れも議員選擧の爲に東西に御奔走にて末後の聖式を執行致すことが出來申さず候へば……

穿ち得て妙と可申候、かくカトリツク僧徒の政治運動は後來獨逸に必らず面白からぬ結果を來し可申、ルーテル出でし國の今日、轉意外の感に打たれ申居り候、

露國今日の有樣は、實に二十世紀の一大疑問に可有之、昨日も露人の親友兩名と膝を交へて大に目下の問題を苦談仕事候何れに落着候も露國が之より文明的の新生命に入るべきは疑ふべからざることに有之べく、此地に潜伏致し居候氣早の露國の有志家など至急歸國したる向も有之候、歐州の列强とか申すものが其暴慢を坐視し、其虐政を傍觀して、自由と人道の發達上、至大の惡魔たりし露國も、今や漸く文明の曙光に接し來り候、而して之も全く日露戰爭の御影に可有之、吾國民は玆に於てか大に世界史に誇るに足るべくと存じ候、乍去かゝる虐政と暴戾とをして、自由と正義の大權の下に屈伏せしめし、露國國民の氣魄は、吾々決して忘れては相成るまじく候、彼等がこの改新の爲に流したる血と積み上げたる骨とは今日の改新を見るに至りしに候、露人は決して侮るべき人種に無之、畏るべく敬すべき近隣の兄弟に候。

最近露國のヲデッサにて行はれし猶太教徒の虐殺は實に言語に絶し候、これが希臘正教とか云ふものを國教とする人民の所行ぞと思へば基督教の感化と申すものは如何なるものなるや太だ疎疑なきを得ず候。バートロミユーの虐殺已來、基督教徒が慘忍なるは玆にもそのよき例を示し申候、この慘忍の心、之を人道を愛し仁愛を旨とする自由の精神に立ち廻らせんこと、宗教に於ける涵容精神の養成と仁愛無我の大道のみ唯之をよくすべく候、世界人道の爲めに大敎の宣布は今や甚急を覺候、あー憐むべき猶太の民族、その手足を斷ぜられ拔舌剔眼、此世からなる地獄を露國に現じ、老幼婦女、生ながら焚かれ、煎らるゝもの三千餘と稱し候。歐州の基督教徒なるものは、この一大罪惡に對して、一人の起ちて懺悔を敎へ、公憤を洩すものなく、この無辜の老幼婦女に對して、一滴の淚さへ濺ぐものなきは、何等の譯合に候や。遙かなる支那や印度に傳道して、要もなき信仰を强ゆる彼等は近きヲデッサの火の中劍の間、焦熱地獄の裡に高く其仁愛の十字架を掲げて實地に基督教の主義を行ふべきが急務に候はずや。彼等は一ヶ月ばかり前の、バークの虐殺にも沈默を守り居り候ひき。同信の徒が回敎徒に虐殺せらるゝに公憤を發する者無之候ひき。彼等が世論を動すの力の漸く乏く相成候は見るに難からず候。獨逸の社會黨が露國の社會黨に種々の援助を與へ、同情を濺ぎ居り候に比するに基督敎徒の勢力基督敎全體としての勢力も今日の人道展開の上には。どれ丈のものなるや、先相分り可申候。

今日は散歩の途次、一寸新敎徒の慈善市をのぞき申候。寒氣漸く强く相成りたる今日貧家の薪炭の費の爲にとて良家の夫人令

例に徴して論じて曰く、佛陀は決して涅槃の實體を疑ひ、若くは之を否定したりしにあらず、唯實行方面の戒行（シーラ）を重むじて、之を解脱の要義として、涅槃の實體有無の如き哲學問題は之を見（ディチィ）として戯論として之に立入るを好まざりしのみならず、又弟子を誡しめて此の如き空論のために解脱の實行を懈廢するを禁じたりきと。彼の結論を見よ、

「宗教歴史とは神の人格否定の歴史なりてふスペンサーの語を眞とせば、則佛教は方にこの進行の自然的極度に達したるものといふべし、自然と超自然との間に全然絶對的の區別を認めしもの、佛教の如きものはあらず、佛教は其徒に超自然につきて云々することをさへ禁じたり、然れども決して之を否定しまたは懷疑をその存在に挿みしにあらず。」

豈公明正見の好漢にあらずや。

予は未識の友ザイデンスチユッケルの半生を詳にするを得たり。ライプチヒ佛教傳道會の中心として活動しつゝあるこの人の閲歴は必らず多大の感興を讀者に與へんか。

彼はサクセン王國の一村落の牧師の家に生れぬ、父なる牧師は地方教務監督として頗る勢力あり、彼は中學を終りて後、父の希望によりてライプチヒの醫科大學に入りたり、然れども彼が天與の宗教的性質は生體解剖の慘を行ふに忍びず、無辜の動物が種々の試驗の下に苦毒を嘗むるを見るを厭ひて、斷然學籍を文科に移し言語學の研究に入りたり、此の頃よりして彼れは漸く佛教の書を讀み始めて其妙味を解し、時々佛教に關する論文を公表し、進みて佛教に同情して之がために多少基督教徒の非難を招くに至り、事父の耳にする所となり數回の嚴誡を加へられたるも、彼が佛教に對する確信牢として動すべからざるものありしかば、牧師は斷然其子の學費を中止し、又罪惡を改悛せざる限りは再たび相見ることを許さず、家門に寸歩も足を踏み入ることを得ざる旨を嚴告し、玆に言語學科の大學生は其信仰のために自らパンを求めざるべからざるに至りぬ。爾來氏は文筆及語學の教授等によりて生活し熱烈なる信仰を以て漸く同信の士を得、ライプチヒ佛教傳道會の基礎玆になりて今や氏が主筆としての月刊雜誌「佛教徒」は十二に達し、月々の公開演說に討論會に、盛に新信仰を鼓吹して、頑陋なる舊耶蘇教徒等と惡戰しつゝあり、基督教の牧師等は今や氏を憎み氏を忌むこと實に蛇蝎の如きものあり、氏が父頽齡今や七十、尙峻然として父子相見るを許さず、信仰と主義のために甘じて人生最も悲慘の境に身を安く氏の心情や、誰か涙なからむ。　（明治三九、六、新佛教）

◇壺中乾坤

出山の如來に麥酒さゝけばや。（成道會の夜）ゲルランドの教授の講義甚面白し。此人既に七十の老學者、地質學の巨擘にて、兼て蠻族の宗教史に精通す。ポリネシヤの宗教に關しては、歐洲にて目下だれも教授

寺本氏の邦譯は右二學者の論文飜譯を對照參酌したるや、また獨立の飜譯なるや予之を知ることを得ざれども、兎に角予は「十萬白龍」を讀むものに前記二學者の功を沒せざらむことを望むや切なり。

ラウフェルの譯は甚だ得がたき書にあらず、價亦昨今五六馬內外と覺ゆ。

融希山氏の「宗教の研究沿革及その特性」は親切にして忠實なる譯なり。此の如き好譯は疎漏杜撰なる論文に勝ること億百萬倍といふべし。但し原著の中に宗教學研究の頗る盛なる、端西バーゼルの大學を逸したるは、玆に一言するの要あるを認む。

同大學にヲーレリ・バルトレー・サラシンの如き熱心なる宗教史家あることは玆に贅するまでもあらじ。同地々第二回の宗教史大會の地となりしも亦此等の關係あるに出でたり、ヲーレリーには一般宗教史 Orelli: Allgemeine Religionsgeschite 1899 の好著あり、約九百頁の大本にして記述極めて親切なり。甚だサウセーの宗教學教科書に讓らず。バーゼルには亦大陸にての模範的傳道學校と譽めらるゝ傳道學舍ありて、其講師にも頗る宗教史に熱心なる人多し。同舍の講師として嘗て「印度宗教史」を稿したるヴルム Wurm は、一昨年宗教史袖珍 Handbuch der Religionsgeschichte 1904. を著はしたり、稍取捨すべき所なきにあらざるも、簡にして明尤も學徒に奬むるに足る。

佛教古典研究の聲漸く吾邦に盛ならむとするとき、予は玆に歐洲に於ける一大佛教古典研究家を失ひたる悲報を傳へざるを得ず。一九〇六年三月十三日ケンブリヂ大學梵語教授セシル・ベンダウル氏逝きたり。

大雲請雨經の撮要公刊を初とし、今尚學徒の珍とするケンブリッヂ大學文庫佛教梵語聖典目錄等、自身の論文著書よりして三年前に完了を告げたる、大乘集菩薩學論原文出版の大作、その他がいかばかり佛教學者を稗益したりしやは呶々する要もあらじ。カウエル教授の後を襲ふてケムブリヂ大學教授の榮職につきしもその期未甚長からず、前途幾多雄大の計畫を殘して、一朝登仙の悲報を傳ふ、寔に痛惜慟哭すべきかな。嗚呼迨くばパーリ文學の明星バーデー教授を哭し、今亦この佛教梵語の棟梁を失ふ、佛教原文研究者の不幸も酷だ大なるかな、

友荻原雲來兄は特にベンドール教授と親交あり、同教授晩年の大作は漢譯藏經の方面よりして兄の力を藉りしもの頗る多かりき、余は教授の傳が遠からず兄によりて本邦の學界に公表せらるべき機會あるを信ず。

友ドクトル・シュラーダー今アドヤールにありてヲルコト大佐の管理するアドヤール文庫の司書となり、傍ら益印度哲學の奧を探らむとす。彼印度に去る前、涅槃に關する一論文を草して之をパーリ聖典出版會の雜誌に公にせり。涅槃に關する歐人の議論としては最新のもの也、玆に一端を抄出するも徒事にはあらず。

彼は先づパーリ三藏中の明文を縱橫に引證して、歐洲の學者輩の涅槃を空無寂滅のものとなす謬見を指斥したる後、進みて實

ること、十惡五逆よりも甚しきものあらむか、僕は斷じて卿等を待つに人間を以てせずして、邪鬼惡魔を以てせんのみ。

○

一曲のベートーベンは今終りぬ。是より蘇格蘭の俗謠歌はせむといふ、老夫人の言に、ツエロの絃まき直す子息、樂譜忙しげに搜す幼女、白絹の裳長く曳き、琴臺に隻手安きて、傍の一女と何事をか囁く娘、靜なるクリスマスの夜は、華かなる銀燭に更けて、微醺に染みし家翁の顏、怡然としてこの富みて美はしき家庭の淸福に笑破るゝとき、孤客の影獨悄たるも、亦自ら現前の和樂に攝し去られ、融し了はれて、旅情全く忘れて快く相語る。

「二月にはバイロイトに行きますかね。ワグネル宗の大本山、近世藝術のジエルザレムに是非御參詣なさいな。」「どうしてとても駄目です。四五日前ある人の談では、切符は一年も前から買占の競爭で、今では賴むようにして、ホテルから頒けてもらうのが、一枚百マルク已上の相場だそうです。先づ吾々は及びも付かぬと諦める外はありますまいよ。然しワグネルが理想に建てた檜舞臺で、選びに選むだ樂手や俳優が、懸命の腕を揮ふのですから、實にそれは見物でせうよ。……」「バイロイトの噺が出ると、何時でも思ひ出しますが、私の友人に氣の毒な人がありますよ。ミユンヘン・ドレスデンで鍛へに鍛へた腕は素晴しいもので、テノールでは今一二といふ名人で、ジークフリードなんか歌ふと實に申分はないのですが、どうです、此人は一生バイロイトの檜舞臺に上ることは出來ないのです。外でもありませぬが、此人の身長が少し低過るので、ワグネルの遺法に外れていますからさ。當人はどの位殘念に思ふて居ることでせう。……」

○

朝より五里ばかり先の牧師某君の家にあり。黃昏市に歸り、齒醫者某君の家を過ぎて晩餐を共にす。座上二三の婦人連あり。談話は重にW亭事件にて持切れり。吾この事件に就きて、略聞く所なきにしもあらざりしも、かくまで醜に、かくまでも腐敗したる、此市の上流社會を想像することは敢てせざりし。W亭は佛國料理を以て著名なり。贅澤ものは茲に來りて一品に十數マークを投じ、一擲に數十フランを投ずるを快とす。此處の給使長に、美人を客に進めて黃金を貪るものあり。近々事發覺して、豫審にあり。然るに何ぞ知らむ、その折柳攀花の徒、狂蝶痴蜂の輩、多くはこの市の顯官貴人にして彌檢し來れば惡多きを加へ、甲事は乙事を發き、某件は更に某件を生じて、展轉盡る所なく、醜陋腐敗の狀、人をして聞くに堪へざらむとは。去秋は某大公國の一司法大臣、毎に賭博を好みて、一給使の罪を得しものゝ口より、計らずも其素行を發訐せられしことありき。而して今また此の如き醜事を耳にす。上流社會の仕末におへぬ代物なること、猶黴の常に表面に跋扈する如きか。咄、黴の上流社會。汝等は常に下層の血と肉と精力に養はれて其不潔醜惡の榮華を縱にす。咄々黴の上流社會。

○

と比肩するものなし。

「寺院で女が脫帽せぬといふのは、女性が男性よりヱライからではないじや。特別の權利があるからではないじや。却てその反對じや。蠻民の間には勿論男は女よりも優勝であつた。ソコデ宗教の事なぞも、女が權利を有せぬ事が澤山あつた。人體の頭部は蠻民共が最神聖として居つたもので、ポリネシヤ宗教の術語で申すと、是が卽タ━ブじや。卽神聖なもので神の宿つたものじや。然し是は男に限りて居るので、女はこの神聖な特權はない。じやから神の前で女はその頭を露出することは出來ぬ。出せば勿論罰があたる譯じや。神の前ではこの不神聖な部分は隱覆せねばならぬ。この古い習慣が今に殘りて居るのじや、

獨逸の俚言に「若しも娘が口笛吹くと、天で天人が泣き出す」といふのがあるが、これも極面白い原人時代の遺物の一つじや。蠻族の間には、今でも口笛は神を呼ぶ呪として、最神聖なものゝ一つになつて居るじや。其處で勿論この大切なる秘呪は、神聖權のある人がやらねばならぬ譯じや。女はその資格がないから、口笛を吹くと、天人が泣くのじや。優雅な美しい花のやうな少女が、口笛のやうなはしたない眞似すると、天人が少女の美のために泣くなどゝいふ解釋は、無論近代の附會に過ぎぬじや。」

○

友某と禁酒大會に趣く。會幹事たる他の友某は極めて峻烈なる禁酒家也。毎に僕等の麥酒店に上るを憤りて、痛罵至らざるなし。此日僕等が同會を訪へるを得たり賢し、彼は伯林の某名士に紹介し、以て我々を彼が主義にまきこまんとす。僕愚と雖、さる小兒の如き計略にかゝるものならむや。旣にして名士の大演說了りて、討論に入る。共に行きし某口を出して曰く。先生說少し極端にして、この複雜なる社會には、どうやら適せざる樣なり。節酒とせば充分ならずやと、名士大喝して曰く。君また無主義の言論を弄すること勿れ、唯分別ある人のみ、節酒し得べきを知らずやと。吾友すかさず。されば、先づ分別ある人を育成する方、捷にして急ならずやと、僕は覺えず喝采せり。

ヲペラも合奏も、小說も詩も繪畫も、勿論自動車もテニスも、文明の娛樂といふもの悉て、果は哲學や道德や宗教までも、悉くある一階級の專用に歸し了りて、忠實なる勞働者には、些の娛樂も頒與せざる今日、勞働者が唯一の友たるもの唯一つの酒あるのみ。哀哉今や酒は貧民を慰藉し歡喜し緩和して、氣力を與へ健闘を勸むるの大功、確に遠く聖書の上にあり。況んや世態に通ぜず、人情を解せず、血もなく淚もなくして、蓄音機の如く敎壇に立つ、僞善坊主どもの說敎をや、卿等敬虔なる禁酒會長老諸先生。若し夫吾等が勞働者諸君より、この唯一の娛樂を奪ひ去らむとせば、願くば先づ與ふべきものを與へ、代るべき償を拂ふて、而して後、勝手に卿等の欲する所をなせ、然らずして徒らに吾等が辛酸苦闘しつゝある同胞諸君の一杯二杯の飲酒を罵

を呼びたり。「勿論です」吾々の間には面倒なる談判なぞあるべきやうなし。

「大分大騒ですね、御考はどうです」。「いや此所なぞはまだ静な方です。今朝商用でメッツから來た人の談では、それは大變です。銀行へは取附の人が雲の如く押かける。食料品の買占が始まる。女なぞはぶるぶる顫へて居ますとさ。何故こんなかといふと、ナンシーあたりの佛國民の氣の立つて居るのは非常なもんで、獨逸へ進めとか、大復讐とか、伯林を圍めとか、種々樣々の旗など立てゝ、大騒をやつて居る 新聞の論調といつたら、丸で躍起で、中には大勝利疑なしなぞ豫言する奴さへある位です。それですから國境の獨逸人はたまりませんや。騒ぐのも無理はありますまい。然しとても戰爭にはなりますまいよ」。「御同見です。

今戰爭する馬鹿が何所にあるものですか。談判は明日から始まるのですか、どうせ、いゝ加減の所で、折合うのが落でせう」。

「三十年前の戰爭は、丁度今度の日露戰爭と同じで、獨逸が是非やらねばならなかつた戰爭でしたが、今度は大分理窟がちがひますからね。軍人社會の方の氣込は知りませんが、國民のおびゑ方はどうです。……」脊後なる士官の定卓（スタムテイツシユ）には、佐官肩章燈下に鮮かに、兩箇相對して頻に吾等の談話を嘲り笑ふに似たり。

○

不圖したることより、獨逸人にて今商用のためロンドンに滯在する。佛教徒L君が民主黨員なるを知り得て、吾が此地に少なからず社會主義者に相識を有する由書き送りて已來、吾等が書翰の交は、一層の親を加ふるに至りぬ。

獨逸佛教會の連中は、民主黨員なるか、然らざるも、概、社會主義者也。而して基督教徒、特に舊教徒は、正に民主黨不倶戴天の仇敵なり。“Pfaff”, “Schwarz” などいふ語は、民主黨員が、無限の憎惡、輕侮、怨恨、嘲罵を含ましめて、坊主どもを呼ぶ名なり。

日本に於ける社會主義者には、基督教徒頗多きが如く、權貴に阿り勢威に佞するは佛僧の大に力むる所たるを認む。

東西の相反する、大に興味あり。

○

「人はパンのみにて生活し得べきものにあらず」。是宗教家が毎に人に說く所也。而も竊に怪む、彼等は「人はパンなくして生活し得べきものにあらず」てふ、大道理を全く忘却したるにあらざるなきかを。

○

「人はパンのみにて生活し得べきものにあらず」。然り。人は卿等の如く、パンの外に高樓大厦を要し、美酒粱肉を要し、甚しきは醜穢なる肉慾の充足をも要せざるべからざる乎。卿等肥滿豚の如く、酒澤棗より紅なる。長老和尚上人諸師、願くは卿等が新舊兩譯三部經を說法する前に、先この簡明なる一問題を解決せよ。

○

「Wから通信があるかね」。「此間Kと鰐屋（クロコデイル）からハガキを出した限です」。「それではまだ例の一件を知るまいから、一寸話さうか」

多休にWは少し閑が出來たので、コンスタ

四の海わが君が代の初日の出。（三十九年元日）「彌戰爭だぞ歩兵少尉で出陣だ」。「御同樣さ。然しアンナ（許婚の娘）が泣くよ」。「己れにも泣く奴があるが、然し隨分面白いぜ」。「君の論文はどうするのだ」。「何ベラボーめ。大學は無論閉校となるのさ」。僕と同卓の二大學生は既に開戰と合點し居るなり。氣早い哉。

○

昨夜テロ哀鳴して止まず。眠爲に甚穩かならず。床を出でゝ下婢に問へば同寓の士官某君の愛馬、急に發病して中尉は勿論從卒も、主婦も惣がゝりの大騷動なりといふ。此際吾飛出したりとも、糞の役にも立つべきにあらず。犬の友情を褒めて、駄菓子三つ四つ取らせたる後、吾は復び眠に就きたり。今日拂曉馬終に斃る。中尉が隊の兵士數名來りて、馬屍を運び去らむとす。テロ出でゝ哀吟し苦吠し、馬耳を啣へ、鬣を甜り尾を引きて、戀々の情、惻々然として人を動かす。主婦勿論泣き、士官泣き、兵卒ども泣き、吾もまた泣けり。

モツアルトのドン、ジュアンを聞に行く

午餐後、新聞を見しとき、不圖兩三日前に讀みし、モツアルト百五十年祭のことを思ひ出したれば也。二十七日にはまだ少しく間あれど、氣の向きし時こそ興の來らむ時ぞと、晩餐早くすましてヲペラを訪ひぬ。

初幕の後、食堂に出で一杯の麥酒に喉濕し、獨り興に入るとき、嘗て讀みし大樂師が慘憺の末路のさま、心頭に湧起し來りぬ。巨額の負債と病妻とを殘して永眠したるモツアルトの葬儀こそ、實に慘のまた慘なるものなれ、最下等の棺槨はこの大天才の遺骸を盛り、最略式の讀經は僅に式ばかりの最後の禮をこの曠世の大音樂家に供へしのみ。今やモツアルトの墳墓は、維那の中央の墓地に、ベートーベン、シューバルトと並び立ちて、壯麗雄渾巍然として偉蹟を千歳に傳ふるに足ると雖、其内容は空洞にして、墓碑建立の際には、大樂師の遺體は既に何れに存するかを知る能はざりきといふ。「魔笛（ツァウバーフローテ）」に「フィガロの婚禮」にまた今夕の「ドン・ジュアン」に萬世不朽の傑作を遺した曠世の大天才は、かくして葬られかくして未だ其遺體の存する所すら探り能はざるなり。天下慘なる孰れか是より甚しきものあらむや。沈思此の如く麥酒を仰げば、寒雨蕭々として雪を交ゆる十二月六日の午後（モツアルトは五日に逝きたり）、僅に四五の人々棺を護りて、悄々としてステファン寺院の門を出でゝ、聖マルクスの墓地に行くさまの幻の如く眼前に現れ來りて、また前後に賑かなる綺羅の群あるを覺えず、右に左に相應じて起る笑語や批評すら、暫く耳に上らずなりて、想は一人の友すら隨ひ行かざりしてふ、痛ましき聖マルクスの新墓穴を追ひぬ。

○

ハルレの藥劑師にて今龍敦にある某青年、其寫眞と手紙とを寄せ來る、中に曰く「龍敦に來りて已來、小生益世相の苦なるを染々悟り申し候。苦諦の眞理は今や小生を教へ居候。」

「どうです、一緒にお附合なすつては、」端西人にて寫眞器械の手代某君は背後より僕

なる、菫花を間隙もなく挿したるを持ち來る春淺き日の遊としては極めて優雅なるものといふべし。人物の調合を少し面白くしたらば、妙畫題とも好詩料ともなるべきにと考へ、例の藤四郎式駄句をならべ見ぬ

　千本の菫に更けぬ、春の夜や。
　從卒も千本菫、助けゝり。
　ショコラ召す、千本菫はてゝ後。
　淡雪や、千本菫贈る人。
　千本菫、摘みたる村の塔古し。
　千本の菫、千種の話かな。

○

　支那に於ける基督教徒虐殺の當時なりき伯林に於ける一支那武官は、「伯林日報」(ベルリーネルターゲスブラット)に一文を投じて、大に支那人のために氣燄を揭げ、歐洲傳道者が自國民の腐敗頽落を救濟するの力なくして、漫に支那を敎化せんとするの僭妄を笑ひ、傳道者の虐殺せらるゝは、必竟自ら之を招くにあると痛論したりき。今亦、拳匪事件の當時、獨逸軍に從ひたる、大軍醫ヘルデ氏、伯林に演說して、拳匪の亂は、傳道者の罪に歸することを極言したり。是ヘルデ軍醫一人の私言にあらず。獨逸具眼者の公論と見て可也。

　我見偏執の病、膏盲に入りて、寬容の精神なき傳道者は禍なるや哉。信仰を强い、改宗を逼りて、暴行惡德至らざるなき、狂信の傳道者は大なる禍なる哉。國家の走狗となり、探偵となりて、他國の民心を離反し、治安を擾亂するの僞傳道者は至大なる禍なる哉。

　獨逸にては新舊兩敎の競爭より生ずべき災禍を防がんがために、傳道上に法規を設けて、以て此等厄介なる傳道者共を取締る必要あるべし。これ人道と平和とのため也。

　吾國は正にこの原案の提出者たるべき位置にあり。而も怯懦にして、列强の鼻息のみ窺ふ吾が外交家が、淸國のためにそれ丈の、親切を盡すや否やは、固より怪しきもの也。

○

　W君は頗るの皮肉家である。彼は坐客に僕を紹介する每に、「日本の佛敎傳道者…」(ブッディスティツシェ、ミッショネール)とやらかすのだ。自由思想家の彼は、傳道者といふ語に、一種の厭惡すべき歷史的惡意味を響かせて居るのだ。僕そのたんびに曰くさ、「そうです傳道者です。寬容主義を傳道するものです。寬容主義が私の信仰ですからね。」自由と人道との發達に伴ひて、「傳道」てふ語も、確に新意味を持つ樣にならねばなるまい。

○

　法華の三十三身。華嚴の五十三位。

○

　佛經に二つの美しい語がある。一は Anukampā で他の悲に自己を類同せしむると云意味だ。悲と譯してあるが、實は隨悲と譯すのが正しい。之と對して、第二に Anumodanā 誰でも知つて居る。隨喜といふ譯字の原語がある。他の善や幸福を喜ぶのだ。

　第一は歐洲語にもある。獨逸語の同情 Mitleid なぞは、寸分も隙のないよい字だ英語の Sympathy は語原が同感の二字だから、寧ろ悲の方に重い意味があるが、悲喜ともに含めてあると見てよい。第二に相當する語は、僕の無學か知らぬが、まだ歐語

ンテイノープルまで出かけた。すると、其夜數名の警官が突然ホテルに踏込で、直ぐ御用だ。Wは何だか一切夢で、引かるゝまゝに警察に行つたが、嚴重な審問の樣子で見ると、彼は全く當時大分外國から入り込むだといふ、土帝暗殺者の一人としての嫌疑なのじや。――そら、あの恐しい面構と妙に沈着で、相變らずの粗服じやものだから、地から湧いた樣な、無實の災難に遇ふたのじや。彼も實に閉口したが、胡論のものでないのは、自分の主人に照會しさへすれば、直ぐ判然すると申し立てた。所が其主人といふのは、君も知つてる、あのバイルートの獨逸帝國總領事ドクトルSで、彼はその家庭教師といふのじやから、流石の土耳古警察も靑くなつて狼狽し、早速の放免の上に、土京滯在中は非常の厚遇で、歸ると間もなく、ヲスマニヤ何等かの勳章を頂戴した。奇談じやないか」。「先生の門下で、外國勳章なぞ、ぶらさげて居るのはWばかりでせう。而も拘留の功によりて、勳章とは實に妙ですな、……」

僕と僕の先生は、既に圖書館に來りて、各其勞働に就いた。

○

「タベルネ、アルサシアン」、是此地佛國崇拜のエルザス人共が常に集りて、獨逸特に普魯西を罵る古き料理店なり。

カルネバル祭の月曜なりき。彼等エルザス人は、此處に一大集會を開きぬ。三色旗は幾旒となく、天井窓などを飾り、マルセーズの歌は食堂も破るゝ計りに震ひ起り、座長はナポレヲン一世に扮し、坐客大抵は佛國の將校兵士を摸し、フランス語とエルザス語の外は、使用するを禁じて盛に反獨逸的の大怪談を吐きちらしたり。

偶純獨逸人の學生官吏などが、かゝることあることも知らず、麥酒旅行(ビーヤライゼ)の一驛として此料理店に入り込み來るものあるときは、門口に立ち居る一人は、いきなり佛人かエルザス人かと質問に及び、獨逸人と答ふるが最後、拳骨一つ頂戴して、戶外にたゝき出さるゝ也。かく門前拂を喫せし獨逸人其數甚少からず。其二三は甚しき侮辱を受け、同行したる娘さへ、頗る辛き目を見せられたるものありき。

勿論、こは市の一問題となり、兩三日の後、酒店は警察より閉店を命ぜられしが、此閉店命令は頗るエルザス人を激昂せしめ一時新聞紙及市會にての論爭甚盛なりき。

兩三年已來、此地の乖獨的感情は、大に勢を加へ來り、佛語の勢力次第に獨語を壓倒するの觀あり。而して夫のモロッコ事件は更に此勢燄を助長したり。今回のタベルネ事件は、實に此一暗流の小波瀾に過ぎず。

此日、予はエルザス人の有力者E君の家にありて、午餐の供を受けたり。夜は是非共日本服を着て、家族一同と麥酒旅行せよと勸められしも、若し諾したりしならば、タベルネの怪事も見られしものをと、あとにては稍惜しき樣なる氣もしたり。

○

昨夜、同寓中尉某君の發起にて、主婦下婦從卒總がゝりにて、千本菫(タウゼンドハイルヘン)作り上げたりといふ。何なるものか見せよと言へば、程もなく、皿に白砂を盛りて、其上にまだ稀

自由誌主筆P、ドクトルWなぞの面々、發起にて、ヲペラよりP君M夫人S孃の來り助くるあり。平民音樂會成立せり。而して勞働者及其家族の爲めに淸新にして趣味ある日曜日を供したり。

會場には絹服のするゝ音もなく、寶石の輝もなく、價高き香水の香もなく、唯五百にあまる素朴强健の勞働者及其家族の、肅然而も亦怡然として仙樂妙歌に攝せられつゝ、平素の奮闘を慰するに似たるを見る。吾之を見しときほど快を覺へたるは少なかりき、崇嚴を感じたるは稀なりき。

此會は今後引續きて尙時々開催せられ、文豪樂聖の大作を演奏せんといふ。

毎に之を思ふ。文學及藝術の自然美と共に、神聖にして淸淨なる所以のものは、其性質の萬國的なると共に、萬民的なるにありと、明月や淸風や、高山流水や、或る度まで、全く人爲の媒介を要せずして、萬國に均く恩惠を與へ、萬民に同く悦樂を得せしむべしと雖。文藝に至りては、人爲の媒介により、初めて其神聖と尊嚴とを普遍的に實現す、故に吾人は同胞のために、大にその媒介に力めて、眞性質の完全に社會に呈露するを期するを要す。

ゲーテの詩ワグネルの樂は斷じて一階級のために作られしものにあらずハムレットもワーレンスタインも、貧民の耳を蔽ひ、眼を塞がんが爲に書かれしものならむや。其普遍的なるべきや、明月淸風の如く然り高山流水の如く然り。

新佛敎の兄弟諸君、卿等願くは時に勞働者諸君のために夫の平民音樂會の如きものを設けて大にその美的音樂の媒介者たれ。今や美の專有は富の專有とともに頗る悲慘なるものあるを卿等は見ずや。

○

屢舊敎神學の講筵に列りしも、餘のスコラステイクなるに、根氣も興も盡き果てゝ何時も終まで聽講を續けしことはあらざりしに、今學期ばかりは、ツアン敎授の「宗敎（レリギヨン）と（ウンド）神祕（ミステイク）」を神妙にも傍聽し了りたり。

百五六十を容るらむ講義室に、平服のものとては、予と二三の舊敎篤信者のみ。餘す所悉是緇衣の學林僧。他科の學生は足さへ此處には向けず。黃人一匹、是に於てか特に目につきて學僧どもは、篤志の正敎信者とや、予を看做すらむ。豈料むや、這黃漢、敎室より直に自由思想團の集會に馳せ付け、民主黨の田舍政客と珈琲店に氣焰を吐き、閑あればライプチヒの佛敎傳道會と交通しつゝある、一大惡魔ならむとは。

一日敎授は精靈敎（スピリチユアリズム）と基督敎神祕の差異を說きて、精靈敎の神祕が手品師的のものなることを證し、其病的現象を痛擊し、該敎の迷信が、世道人心に害ある頗巨大なるを極言したり。

予は敎授より精靈敎の歷史、現況、及び特に其病的現象につきて、深刻犀利の批評を聞きたるを感謝し、且大に滿足しぬ。されど何故に基督敎の神祕が、獨り迷信ならざるやは、舊敎々會のドグマに半文の價を認めざる予には一向解し得られざりき。

他日敎授は聖者の三昧（ヴイジヨン）發得の話をなし、又時々修道者に現はれ來るといふ、「聖創」

中に見當らぬ。

第一も美しいが、第二は實に美の極だ。第一からは、厭世的の沈痛な倫理が生れるが、第二からは樂世的雄大な道徳が出來て來るだらう。

第二の丸で反對の語だが獨逸に Schaden-froh「他の害を喜ぶといふ字がある」實に厭な語だ。獨逸人は確に外國人にない各種の美德を有して居るが、此のシャーデンフローの感情がどうやら英佛人に比して强い様に見ゑるのが、實に厭だ。

○

「復活祭の月曜に、是非富籤を一枚買つて頂戴な。その籤は、屹度當るといゝますからね。私も一枚貴君にあげますよ。然し誰にも祕密よ……」主婦の妹Eが、吾に特に密談せんといふ用事は之に過ぎざりき。「よろしい月曜のカフエーにおいでなさい。私は籤は入りませんが、二萬マルクの一番籤が當つたら、半分は私のものさ、……何にするつて……ハハア」

此娘より、吾は獨逸梓巫の實驗談を聞き得たり。日本の梓巫は、女と極り居れど、獨逸のは大抵が男にて、而も夫婦ともかせぎ、妻君は助手として働く故、凄味は日本程なき樣なり。先づ導れて室に入れば、梓巫先生は客の向に坐しいざ之より藝當に取りかゝるとなれば、彼は概妻君の膝に凭れて眠るや否や、顏面顫ひ動き、齒齦恐ろしく、次で種々の事を語り出すといふ。

一件——卽一眠が一馬といふ相場にて、隨分實收もありとの事なり。馬鹿は日本ばかりに居らぬ也。

○

獨逸の梓巫と親類の樣なる宗敎團體、今英國にありて、頗る人を惑し、勢力も侮るべからざるものあり、Christian Science 卽是也。こはベーカー、エッデイといふ一婦人の起したる團體にて、今一百萬の信徒を有すと稱せらる。神と基督の力にて、萬病を治すといふが主意にて、「科學と治療」など云ふ書は毎月一千部づゝも賣れると云ふ勢なりと云ふ。詳しきことは書くに紙幅なけれど、先づイギリス天理敎の尊號を上り置かばよかんめり。

○

日本の貴紳等の發起にて、遠からず東京市には壯麗なる劇場の設立を見るべしと。新聞屋連中、之を賛して曰く、外國貴客等の東京に來るや、觀覽に供すべきもの實に少し。恥づべき至なり。此擧、稍市のために體面を維持するに至らんかと。

愚なる哉先生方。劇場などの贅澤は第二とし、先づ人間の歩かれ得べき道路を造り百病の根原たる汚穢極まる下水の仕末をして、而して後にヲペラなり、音樂堂なり、勝手に建立なされい。

如是、吾一老僧より聞けり。雪隱を見れば、其家の家風は判るもの也と。東京の下水便所、是有難き日本の文明的首府を代表せり。

今の東京市にヲペラを築き見よ。的是、沐猴にして冠するものゝみ。癩病の裸男に百圓のパナマ帽子を被するの類のみ。よき御考なる哉。

○

米峰の「理想的商業」之を評する唯三語。曰く、頗氣の利きし書也。よく氣のつきし書也。甚だ氣に入りたる書也。已上。

○

片山國嘉君來る。留る數日快談炎雲萬重の暑を消するに足るものあり。

「西洋でも髮を極短く刈りますかね……」

「刈らぬこともありませぬが、貴君ならば刈りても、刈らぬでも同じではありませぬか。」

片山君半禿、頭髮甚疎薄なり。予故に聊か嘲を加へしのみ。一坐之が爲に大に笑ふ予等同君との快談なるもの略此の如きのみ。禪を語らず、淨を論ぜず。日本飯をたきて胡瓜を嚙る。唯恨む所は同君稍酒を惡むて箇中の趣を了する頗薄きものあるを。

○

一夜一醫學士のロンドンから來るを迎ふ彼宗演老漢と各地を遊歷し、大に老漢攝化の巧なるを稱して、其襟度に服したるが如し。老漢歐洲遊歷の日甚短にして、萊江の邊、雄偉の道貌に接するを得ざりしは、憾甚大なりき。老漢が華盛頓地理學會に於て演說したる「大乘佛敎の根本」は既に獨逸佛敎會の機關「佛敎徒」に譯載せられたり。

同誌の主筆サイデンスチュッケルは、之を論評して、老漢が一神敎と佛敎との合一を說きたるに痛擊を加へ、涅槃の觀念は全く基督敎の神の觀念と正反對のものなることを說き歐洲に於ては、「神の死」近づき來り「神の危機」は到る所に叫ばるゝに、佛敎徒の却て之と合一を唱道するは不思議なる現象なりと嘲りたり。

謂ふに敎會的基督敎の神は、確に瀕死の危機にあり。其死や確に近づき來たる也。吾等は實に此厄介なる神の死を賀して止まず。而も進步したる自由基督敎、人道的基督敎の神は、千古萬古永遠の生命あるべし而して是確に眞如活動の一面法身の詩的寫象に相違なし。獨逸の佛敎徒は、今や實際方面に於ては舊宗敎の破壞に急にして、佛敎敎義實行の純正を期し、理論方面に於ては未だ眞如緣起の汎神觀と涅槃論との關係に明かならず、老漢の說を解す能はざるも宜なる哉。予は兩三語を同會に送りて、老漢の所謂神は敎會的基督敎の神にはあらざること、梵語の Deva 若くは Isvara にあらずして Paramātman（大我）とも云ふべきものなることなど、辯じおきたり。

○

朝に芋蟲を驅り、油蟲を除き、夕に水を灌ぎ、雜草を刈る。下婢大に喜びて其勞の大に減ずるを感謝し隣人共は日本人の下男吾が下宿に傭はれしと思ふらむ。而も恣に薔薇を剪み、苺を摘み、亞聲を出して漢詩を放吟するを見聞するに及びて、彼等は予の何者たるやを幾ど解する能はざるべし。客來れば忍冬纏れる小亭に卓を安して、茶を飲みカッフエーを啜る。木葡萄（スタッフエルベーレン）頗收獲ありて、壓して十大壜の果汁を製するを得たり。人あり、曰く、以て酒を醸さば芳烈三鞭の如しと。而も予未だ之を試むるの勇なし。唯毎朝果汁濃にして密の如くなるをパンに付して、日本茶の美なるを賞するのみ。吾病生活かくして甚しく苦を感ぜざりき。

卽基督磔殺の際の鎗痕が、明に高德の兩腕に印し出づるといふ、實見談をなして、之が科學の思議すべからざる一現象なるを縷陳したり。

其基督教已外に、此等の現象あらむか。教授は便ち直に迷信を以て之を斥けしならむ。ジェスイット教徒が、現時神水咒符其他の迷信を播布しつゝ、愚民どもを益愚ならしめつゝあるは、識者の等く認め居る所ならずや。此等は迷信の除外例なるにや。

○

スペイン皇帝大婚の盛典に、爆彈を投じたる凶漢ありき。吾邦の新聞も之が爲に少からぬ頁數を割きしことならむ。兩陛下の玉體、幸にも御安泰なりし故、勿論例の感謝祈禱會といふものマドリッドを初め各地の寺院に盛に執行せられたり。舊教徒謂らく、上帝の恩や威や、洋々乎として夫大なる哉と。然るに新女王陛下の御改宗に慊焉たらざる英獨の新教徒間には、この不吉なる慘事を以て上帝が赫怒以て改宗者を誡勗したるに過ぎずとなす(?)の徒少なからず。獨逸には公然之を說教したる一僧侶ありき。英國にても此說特に盛にし、當時トラファルガル附近にて沈沒したる一軍艦の災厄さへ之に連關せしめて、上帝の怒の偏頗ならざることを說きし僧もありき。驚くべからずや。夫天下何れの所にか芋掘坊主、馬鹿坊主なからむや。吾等は笑うて彼等が宗派的の偏狹を憫殺すべきのみ。然れども記憶せよ教會的基督教の神は必竟かゝる愚にして危險なる思想を生ぜしむに便なる神なることを。專制君主的の神は、時として暴虐桀紂の如き行爲あるべきは固より自然のみ。

○

慘は露國の今日より慘なるはなく、悲むべきは露國の現況より何れか大なるものやあらむ。而して見よ。彼の歐洲の敎家なるものを。各國民主黨の徒は大に其同主義者の爲に力めたり。猶太教徒は、其不幸なる同胞のために巨萬の義捐金を集めたり。而も何等敎家に一點義憤の血だも灑がず。一滴同情の淚すら流さゞるにあらずや。歐洲の宗教、算じ來れば、悲い哉、其活力今や零。露國此の如く、露民此の如し、何等の厚顏、何等の僞善ぞや。猶吾國に傳道費を投じて、漫に博愛人道を呼び、濟世利民を說くことや。

語を寄す、ニコライ主教猊下。予は切に猊下の歸國を不幸なる猊下の故鄕のために懇請せむとす。猊下の故山は今炎々たる地獄猛火の中にあり。猊下之を坐視するか。流血の海や、臠肉の丘や、寃魂遊鬼、啾々として哭聲國に滿つ。猊下猶之を傍觀するか。猊下が吾國に於ける傳道は、前途甚だ有望なるを認むる能はざる也。而して故山の危急彼が如しとせば、寧ろ今其祖國のために奮勵して、生民の疾苦を救助するを、智にして且つ當れりとせずや。

○

毛利柴庵の入獄は、新佛教史に特筆大書すべき一大功業也。第二世出で、第三世第四世之に續き、罪彌重く、刑益嚴なるに迨びて、新佛教の光彩方めて赫焉日の如く、寰宇を照灼せむ。ブラボー柴庵!

叱られし吠陀の某字、果は七八年の前深川の町寺に納所として塔婆書きたる時の佉字羅字など燦爛として、空華の如く閃光の如く現しては消え消えては現はれて千態萬狀を極むれど、肝心の阿字は中々に觀じ出されず。漸くにして、圓光中の一大阿字眼前に現し來りしもこは身の深川本誓寺に於ける行誡和上影堂の中にありて、その阿字の扁額を見つゝある時の幻影に過ぎざりき。かくて熱の苦はこの妄想の爲に全く忘れしも、阿字は其片點さへ吾に示さゞりき。謂ふ要するに散心念佛の徒なる哉。「發熱に阿字觀じ得で日の永き」。此夜下痢大に至り、五體綿の如し。此儘に死せば面倒なしと思ひぬ。「……埋骨萊江側、使芳醇益馨」。起承未だ出來ざるに、催眠藥の效早く現はれて曉まで困臥しぬ。

二日の後、熱少しく低下し、曉風特に快く覺ゆ、窓に垂るゝ蔓艸緩く動きて甚趣あり「熱さめて曉靑し窓の藤」。

漸く床を離れ得るに及びて、移轉のことあり。多くもあらぬ藏書の外長物なき予は左程の面倒もあらず。僅に机上の論稿を親ら整理したるのみにて餘は悉く主婦と友とを煩したり。吾友は書架の一隅に累々たる英獨各種無政府黨の新聞雜誌あるに驚きぬ此中獨逸にて嚴禁のものさへ一二種あり。予友に告げて曰く、安ぜよ君、僕は無政府黨員にあらず。否此等の新聞雜誌を僕に惠む、ロンドンのCとは、常に無政府主義につきて論爭しつゝある也。僕は佛陀中道の敎よりして、彼をして穩健なる社會主義者に轉ぜしめんと力め、彼は其熱烈なる理想主義よりして、僕をして無政府黨倶樂部の一員たらしめざれば止まざらむとす。吾等は人道の上に於ては親友也。而も主義に於ては今大に戰ひつゝある也。

友曰く君にして今何かの事件にて、獨逸警察より家宅搜索を受くるが如きことあらむか。則意外の寃を被るべきや必せり注意すべからずやと。予曰く、獨逸の警察は、日本の留學生を以て御坊樣と思ひ居るなり。少し許りの專門學の外には、政治などのことは丸で知識なき好人物とのみと思ひ居るなり。安ぜよ君、僕は警察の注意人物たる程、怜悧には見へ居らざるを。

片山君友の兩醫學士と共に日ならずして瑞西歷遊の途に上るべし。予もまた之より病餘飄泊の人たらむ、

「雲の峯あしたは何處の空に立つ」

○

曰く鐵十字、曰く聖ゲヲルギ、曰く何、曰く何、人は這箇玩具に似たる殺戮の紀念を、狂婦の如く胸間に飾り立てゝ、誇ること揚々然たり。俗流之を重じ、之を榮譽とし、競ふて之を得るに死を以てせむとす。

蠻族と稱する同胞あり。敵を屠り、仇を殺して、其爪髮を拔き、齒牙を取り、其骨片を摧きて、以て身を裝飾するの具とす。屠ること彌甚しく、殺すこと益盛にして、その裝飾また粉々として隨て多きを加ふ。

世は何故に彼等の天然の兒を痛罵して、その行の慘酷を責め、貶して之を野蠻の民となす乎。

今の世、舞臺以外に、服裝の燦然として金紫を輝かし、朱綠を煌かすもの、男子に

苺亦頗る穰々の富ありき。駄句數首出來たり。其中極めて獨逸的なるもの二つ、獨譯して友某に示す。左に彼が酷評を抄せむ。

白薔薇に添えてまゐらす苺籠

君はコントラストの所に苦心した樣だ、其處は買ふてやる。(予曰くビールは啻らないよ)。然し誰が受取るのか。女か男か大に明了を缺いて居る（予曰く天機不可洩）また苺籠の中には果して實が入れてあるのか、どうだか（予曰くこれは失敬だ）これも不明了さ。序に君も知つて居るだらう。獨逸で「籠をもらう（コルプベコンメン）」といへば、知れたことを肱鐵砲のことだから、一寸妙な感が起らぬでもない。但しこれは日本語じや無難として、やつと及第として置かう。

苺酒に君彈ぜずやトリスタン

また君のワグネル通か、ウンザリしてしまふ。東洋流の苺酒とトリスタンの毒酒とを利かした積だらうが、あまり有難くない。一體苺は小供らしい味だ、トリスタンの樣な深刻な愛に、苺じや下等だね何、その毒々（ギフテイヒ）しい所を見ろと。僕なら苺酒はズート輕いモツアルトの物か何かに配合するさ。それから絃に彈（スピーレン）といふ字があるが、一體何を彈ずるのだ、ヴイオリンかピヤノか、何だ。要するに、これは前よりは拙だ。及第覺束なしだ（予曰くこれは驚いた）日本の俳句は要するに丸で謎だ。不明了だ。君の樣な薄のろい頭にはよいかもしれぬが、僕の樣な哲學者にはだめだ（予曰くそれでも哲學者かい哲學者も麥酒は召上るものかね。）

尙日本式の數句あれど、今度は讀者より落第申付らるゝを恐れて、之を祕す。

漢詩に苺を詠じたるものありや否やは予知らず。和歌の題には多分之なきことならむ。俳句には隨分面白きものあるべきにや。一卷の歌集も句集も座右になき予には故人の感興を知るの幸なし。博雅の諸君敎示を賜へ。

○

英國の政治家にて、一時は某地の市長まで勤めし、ジアフエース、バルフォーアと云ふ人、故ありて獄に下り、出獄の後、其入獄中の記事をデーリーデイスパッチに連載しつゝあり。英國監獄の眞相、描き得て目覩するが如し。其一節に機械的幽鬱なる敎誨師の說敎及儀式よりも平和に愉快なる半日の休暇を囚徒に與ふる方心性の改善に利益あること大なるを說きたり。蓋名論也。

○

常に下痢と頭痛にて、半病人なりし予は亡月の終りに眞箇の病客となり終れり。一時は熱頗る高く、食し得ざること四日に及びぬ。予は初竊にチブスならざるやを恐れ兩友の醫學士は專門的に急性の肺炎ならざるやと甚焦慮しぬ。されど兩友の投劑偉功を奏して、今は平日の如く麥酒に味あるを覺ゆるに至れり。

熱甚しかりし時、不圖觀法して見たと思ひ、數息觀一時間ばかり修して大に快を覺えければ今度は大乘的に阿字觀を試みぬ。眼を閉ぢて、金色の阿字を觀し出さむと苦しみしも、或はケムブリヂの古謄本にて判讀に苦しみし某の梵字、ロイマン翁に痛く

集中しぬ。曰く彼は世界的の滑稽俳優也。曰く彼は世界の前に、最上乘の喜劇を演ぜりと。之を笑ふものは心より其巧妙なる諧謔を笑ひ、之を賛するものは、其伶悧にして天下を愚にするの膽を賞しぬ、而して人は彼が盜賊たるを忘れて、無害滑稽の老爺を以て遇せむとす。

彼が行爲は滑稽演劇の一幕ものとなりて、各地に大入を博しぬ。俚謠も出でき。戲畫も出でき。降生祭の玩具として飛ぶが如くベルリン、ミユンヘンの街頭に賣られたりき。大詩人ハウプトマンの名知らざるものもあらむ。名優マトコスキー、ファラーの名、耳にせざるものなきにあらざるべし。而もこの不思議にも全獨逸の人氣を負ふて立ちし大盜の名を知らざるものは、恐く一人も獨逸にあらざるべし。

而も彼が大喜劇に笑を發せしもの、獨り獨逸に止まらざりしなり。英も佛も伊も、環視の列國民、みな哄然として大笑を發しぬ。

彼がモアビートの未決檻にあるや、美酒珍味日に山積し、贈金凡そ六百萬馬克已上に達しぬ。其艶羨ひべきものに至りては瑞西一女塾の少女達が、手製になれる菓子、佛國某貴婦人の手づから縫ひた襯衣の如きものすら之ありき。彼が快活に笑て五年の重禁錮を諾したるも宜なるかな。

ハウプトマンの「ビーベルベルウ」諷刺の妙筆大に法官の無能を罵れり。彼はハウプトマンに比して其技一層妙趣あるを見る。

邦人は恐く未だキヨプニック大尉を大笑する能はざるべし。是幸也。

○

寺院の宏大莊麗、他國に其比を見ずして窮民の多きまた世界に冠たるもの、伊太利あり。

血を流さず、火を用ゐざる漫性の人（メンシュヘム）身御供（オツフア）は、現時法王といふものゝ存する國に行はれつゝある也。

○

薄暮山間の一停車場に靑車を待つ。頭を擧れば、美しき少女衣さへ亂れて、泣き崩れ居る圖あるを見る。怪みて熟視すれば、則萬國對少女賣買奮鬪同盟會の獨逸委員が不幸毒手に落ちし少女に對して、救濟の方法を說示したるものなり。大書して曰く。事急ならむときは、直に之を本停車場の吏員に訴へよと。

今やこの惡むべき慘毒は、漸く其勢焰を歐洲に高め來らむとす。去秋ヴイエンナに於けるリール夫人事件の如き、其慘實に言語に絕したりき。

窓外には肥大なるカトリックの和尙豚の如きが、外套㬋く身を包みて、のんきに行くを見る。

○

英國を崇ぶの友あり。予に語つて曰く。ジエントルマンの字、設し佛獨の語に存せむには、願くば之を聞かむ。況むや他の國語をやと。而も予は今甚しく此字を惡む。

蓋、此字絹帽とフロックコートと虛禮と體裁と僞善とを其必需の條件として、汝の汗と血とを以て、營々食を得つゝある忠良の民を分界せむとすれば也。上中流の社會

於て、唯軍人と僧侶あるのみ。

アメリカ印度人の軍裝、アフリカ土蠻魔術者の祭服、豈異ならむや。

○

予にして若し神の恩寵といふものを信ぜしならむには、吾國が償金を得能はざりし爲、ベルリン、パリ等に存する、愚にして恥を知らず、慘酷にして人間らしからざる勝戰塔、凱旋門の如きものを、東京におつ立るを得ざりしことを、第一に感謝したるならむ。

○

肉貴くして金の如し。民馬肉を喫して飽かず、次ぐに犬肉を以す。而して艨艟新になりて、日々幾萬マークの石炭を食ひ、兵丁いよ／＼多くして、紅綠の服裝、獨り寂寞の寒村に美を擅にす。而も、彼等軍隊は渺たる一小蠻族すら未だ征すること克はず。士官は腐敗し、士氣は頽廢し、賭博、賄賂、敗德、士卒の虐待、日に日に新聞に上り來る。

獨逸ビール醉ふべし。獨逸音樂醉ふべし。その學藝また或は醉ふべし。而も斷じてその陸軍萬能主義、海軍萬能主義に醉ふ勿れ。兵器を祭りて、餓ゑんことを強ゆ。嗚呼殆哉。

○

中尉某君、是我隣室に寓する一紳士也。操履嚴正、よく學を力め、頗る他の漁色無識の腐敗軍人と選を異にす。寓の下婢、靜脈瘤破潰したるとき、一番に馳せ來り、不潔臭穢を厭はず、應急の手當を施したるは彼なりき。而も彼が其從卒を叱咤し罵辱するの激烈にして酷薄なるは、我をして時々梵筴を抛ちて立たしめんとす。

溫厚にして謹嚴なる彼、尙如是、況むや他をや。

獨逸の士官は今や一種の誇大狂（グリーセンワーン）を病めり。彼輩妄想すらく。苟も軍人にあらざるものは、獨逸紳士にあらず、平民どもは、要するに我等の命令し驅使すべき奴隸に過ぎずと。彼等腐敗の病源茲にあり。彼等墮落の細菌（バクテリヤ）また實に茲に發生す。

忘るゝ勿れ。雨はライン河の兩岸にのみ降らざるを。

○

キヨプニック大尉事件。邦人は恐らく何等の趣味を感ぜず、此報を新聞紙上に讀過したるならん。記憶稍強き人にありては、或は伯林附近の小都市キヨプニックに於て陸軍大尉に扮し、十二名の近衛步兵を騙して、市役所を襲ひ、市長を檎にして、伯林に押送し、金四千馬克を奪ひたる、大膽なる盜賊ウイルヘルム・フオイグトを想起せむ。

而も邦人は其不敵なるに一驚する外、彼が「キヨプニック大尉」として空前の人氣を獨逸に得、名聲嘖々として、兒童走卒と雖、今其名を知らざるものなきの奇觀あるを、恐くは聞かざらむ。

彼は期せずして人心がサーベル主義に堪ゆるを得ず、重厚なる軍隊萬能の空氣に壓迫せられて、不平を漏す所なきに際し、無限の嘲笑と侮辱と滑稽とを、實行的に普魯西の軍隊に加へたり。此故に彼が惡むべき大盜なりしにも關はらず、同情は彼の身に

わが歐洲に於ける最後の降生祭との意をも寓して。

他日夫人は、坐客あるごとに、我を賞賛して止まず。大通の名R の家庭と、家客との間に高し。我頗る意外の感なきを得ず。

予實はR 家が大の佛蘭西崇拜なると、毎に古アルザス人を以て誇るを、毫も心付かで、偶然にもかの小匣を贈りたる也。

されど今は必ずしも大通の辭退をなす必要を認めず。時になほ油の如き古酒に醉ふを樂しまむ。

○

阿メリカと日本と戰爭の場合には、獨逸は何れに味方するやを論じたる一米字新聞あり。勿論、獨逸は星旗か日英艦隊のために、海上より驅逐せらるゝを坐視する氣づかひなしといふが、其結論なり。キヨルニツシエツアイツングが、滑稽的に之を飜弄したるは甚意を得たり。

但し獨逸新聞は、決してアメリカの同業者を冷かすの資格なかるべし。彼等の間には桑港に於ける小學兒童放逐事件のありしとき、日米の戰爭、端を之に發せむなど、豫言者めきたる論文を艸したるもの少からざりき。獨逸が日本を嫉視して、事あれかしと希望しつゝあるは、かゝる際に自ら洩れ來る也。

而も予は、玆に少しく邦人に警告し置かむとする事こそあんめれ。そは邦人が、目下頗る傲慢負高の傾を有し來り、平和着實に事を決するの注意を缺きて、動もすれば大言壯語、威張らすを以て大國民の能事了れりとなすやこれ。

桑港事件の當時、吾國の識者といふものにして、激越の調往々無政府黨員の檄に似たるを以て、邦人を煽て上げるもの之ありと聞きたり。虛名のために國民を語るなくんば幸なり。

○

熱田靈知氏、京都文科の印度哲學を擔任すると。予寡聞、未だ氏に如何なる業蹟あるやを知らず。而も吾知れる眼に於ては醫科に足立荒木の如き略世界に知られたる學者ある大學、必らず其名を辱しめざる適材を迎へたることなるべし。賀する所也。

英國の諸大學に於ては、就任前、外國諸碩學の推薦狀を得て、之に自家の業蹟目錄を添へ、就任の後に、之を學界に公表するを法とし。獨逸に於ては、就任の際、必らず就職演說(アイントリッツレーデ)をなして、在席先任者の質問批評に答へ、後之を印刷して、廣く天下の學人に問ふを規とせり。

第一の例は今既に遲し。而も予は熱田氏が、佛教の學者として、第二の例を學界に開かむことを希望して止まず。

○

瞿曇大聖主、憐愍說是法、悉斷一切見、我今稽首禮、——今や我はドクトル・ワレザー氏と机を一にして、氏が獨譯したる漢本中論四卷の證義と訂正とを終りたる也。日曜の極めて靜かなる朝、リンデの香帶べる微風の窓より入りて、石欄の雛菊美人艸など、種々の花に、露まだ重きに、何處に奏すらむ、幽なる軍樂の斷續響き來りて、靜趣一層味深きを加ふるとき、此最後の偈を講じて、聖龍樹の崇高なる信念を仰ぐ。

と、下層とに鴻溝を横ゑむとすれば也。

ジエントルマンを要求する彼等も、固より我同胞なり。之を呼びて、彼等を喜ばし得んに「予として必らずしもこの愚なる尊稱を、彼等に被すに吝ならじ、而も之がために他をワイルドマンと貶視するに至らむこと、予が斷々焉として應ずる能はざる所」

○

M、是我がゲルマニヤ酒樓の定卓に侍して、麥酒を進むる女也。我始めて此地に來るや、妙齡華顏、よく幾多の年少士官を惱殺せしめ、大學書生を飜弄して、嬌艶の名一時高かりき。今や色漸く衰へ、粉華凋落して、唯々の濤聲伎體に、立秋前の俤を留むるを見るのみ。時恰も降生祭に際して、百千の花燈彩燭、滿堂の翠葉綠樹と映發する所、蕭然渠に對して、稍司馬靑衫の感動く、再盞のピルスネル白泡沸々とて甚佳なるを取りて曰く「どうだ御祭に面白い事でもあるかね」「あ！可愛想（アハーアルメスメードヘン）に、また厭な降生祭が來ましたね」。肺肝より發せし此數語は、遂に予をして小琵琶行の主人公たらずんば止まざりき。「ミンナ老ひぬ、クリスマス酒寒くして」。

○

二十七日大雪の後なりき、予はアルザス山間の一小都市に、牧師B君を問ひぬ。新に夫人を喪へる吾友を慰めて、少ばかりの贈品を憐むべき四孤兒に賚らさむ爲なりき。

半日は友の書齋に且つ泣き且つ慰めぬ。四福音傳ふる友の、却て無常生滅の理、今更の如く身に泌みて、世は大夢にあらずやなど喞つに、苦空の理に安住する我の、天意の空しからざるを說きて、奮鬪の前途の重きを加へたるなど切にに慰喩しつ。

薄暮予と老牧師は共に亡人の墓に詣でぬ霜風凜々として卜溪連峯（ホクエーゼン）の間より起り、ブロイシュの流れ、半凍りて、寒鴉二三前林から力なく飛び來るとき、寂寞行人絕えて無言の我等には、雪を踏む靴音のみ幽なり。墓門を入りて紅紫さまざまの花の色未だ新なる新墓に雪深く埋めたるをかきわけつ、持ち來れる小なる花環をかけて、法句經を誦し、十念を微唱しぬ。

此時まで我傍に立ちて、靜に我が默禱に感謝の淚とゞめあへざりし老友は、聲を放ちて泣けり。彼は敎會衆の前にありて、幾度かこの忍び難き哀を忍びけむ。彼はこの降生祭の前後、其無限の愁を耐ゑて聖職に起すに勇なき身を力めたるならむ。今やこの包みに包み忍びに忍びたる淚は、極東の異敎僧の前に於て、洪水の堤を決したるが如く溢出したり。彼は聲を擧げて大に泣きぬ。

我等の淚は、基督敎と佛敎とを融し去りぬ。獨民と日人との區別を泯し了りぬ。成等は限りなき同情海中の人となりて、互に彼此の別さへ忘れて、融然として大に泣ける也。

○

路易五世式の縫物小匣、今の我には少からず囊底に苦痛を感ぜしめしも、常に我にボルドーの古酒を飲ましめ、雪白の鵝肝堂の如くなるを供して、甚だ吝まざるR家の少女十三なるに、奮ふて之を贈りつ。多少

露國のド・ヲルデンブルグ及ツェルバトスコエ、此兩學者の名は、日東佛學者の感謝を以て記憶すべき所也。

我は敗殘の露國に於ける「佛教文庫」出版の活動が着々として偉大の貢獻を世界文運の爲になしつゝあるを見、退いて日本學佛者の、舊に依りて徒らに胡盧を畫くを嘆じ、その學問の露國に後るゝもの、猶三千里なるの恨なくんばあらざる也。

臥榻の下他人の甘睡を容すなかれ。是我東洋古學のため、毎に佛教古學のために、日東學者の座右銘となさんと欲する所のもの。

○

池田照誓氏、印度にある三年、梵語を專攻し、業就りて歐洲に歷遊し、觀風察俗の途次、來りて我が寓を訪ふ。憾むべきは、同氏滯遊の時甚短く、遠來の珍客を待つの意を盡す能はざりしと雖、天外同好の士、特に金剛乘教の俊才に邂逅して、多少は我が祕教に關する研究の一端を洩すことを得しを頗喜びぬ。

淨嚴去り慈雲逝きてより幾歲、一時教界に梵學の正宗として立ちし眞言宗は、今や此獨特の方面に於て、稍寂寞の觀あるを免れず。氏歸るの後、希くは大に其材を揮ふて、頽綱を張り學燈を赫灼たらしむる快あるべきか。茲に氏が歐亞の各港より發せし芳信に謝して、並せて其歸山を祝するの意を表す。　（明治四十、一―五、新佛教）

◇「新佛教の」諸兄に寄す

（一）日本的ショーピニズムス

米峰から端書で諸兄が顏を合すと、いつも其方の噂が出る。イ、加減にして、早く歸朝候へとの、御諚であつたが、僕とても勿論こんな所に何時までも燻りこむで居る氣はない。實際、東洋大帝國の首府の泥道を、足駄で捏ねまわす方が、いくら面黑味があるか知れまい。何千萬斛ミュンヘン麥酒を仰つても、脊に羽を生じて、白日登仙するでもなし。ウイン河の岸を、毎日御百度を踏むだとて、とても人魚になれそうもないから、氣さへ向けば、明日にもロイドか、郵船の御厄介にならう。尤もシベリヤ通過といふ奴が、一番安直だから、露助の土百姓と三等の合乘なども、大に愉快かも知れぬ。此間シリヤのバイルートに居る親友Wに、こんなことを書いてやつた――。

「……もう彼是七年だ。的是氣の利かぬ、Fliegende Holländer といふものだ。但しゼンタの樣な理想的美人を探し廻つて、戀で解脫しようなんて、煩悶も苦悶――便利なる日本語だと、貧的の僕には此處で、一寸洒灑のめされるのだ、ゴツ〳〵の蠻的獨逸語では御生憎だ――もないし、さりとて、二十世紀のタンホイゼルと御座つて、艷魔嶼に酒池肉林、香閨粉陣の快樂に、歸るを忘ると云ふ樣な、色男では勿論ないのだが。是でも、多少は祖國學問の獨立のために、柄にもない馬鹿元氣を出して、コツ〳〵やつて居る迄さ。東洋學、就中（全く眞面目

いかでか限りなき法喜禪悦の快なかるべき。

我が極めて完からざる獨逸語が、よく八不中道の眞意を傳へ得べしとは固より信ぜず。羅什が簡潔にして而も含蓄多き妙譯を、自由に飜じ出さむ困難の至大なることも亦豫想せざりしにあらず。且つ病痿の客、精力甚缺け、爲すべきこと山積して、時間の常に乏しきを恨む身の、此至難の業に當らむこと、頗疑はしき處ありしかど、ワレザー氏が三年已來、獨力漢文を學びて、辛酸尅苦、邦人猶通讀を難しとする、この佛敎古典を譯出したる精力と精進とに感奮し、譾劣我が如きものにも禮を厚うして、來り問はんとの書を見ては、殆ど一切を忘れて、氏が爲に一臂の力を揮はむと決心しつゝ心窃に此業が多少は大法宣揚の因緣にもなれかしと祈りつゝ、同寓茲に此業に隨ふこと十有五日。漢譯藏經を右にし、觀自在の聖像を左にし、梵典洋籍、紛然として机上に堆き我狹く穢き書室には、偉大六尺の好漢、美髯亘腹音吐鐘の如き獨逸の學究と、短髮蒼顔、風采甚揚らざる日東の一佛僧は、終日兀坐相對して且つ論じ且つ說き、且つ書し且つ證す。空や有や、非空や非無や、梵語に次ぐに獨語を以てし、獨語に間ゆるに西藏語を以てす。傍人之を見れば殆ど兩者囈語を鬪はすに過ぎざる觀ありしならむ。

我は初め氏が獨譯の價を頗る疑ひぬ。謂らく全部或は訂正を要する處なきにあらじと。而してまた甚だ迷ひぬ。如何にして肯心甚強く、我執の病膏盲に入れるを常とする泰西哲學者に、中論の如き書の深旨を傳へむかと。而も我が憂慮は實に無益なりき。氏が靑目、月官等幾多梵語西藏の中論疏釋に通曉して、其大旨を得たるも、實に其素因なるべけれど、僅に一部のウイリヤムス華英字典の力を以てして、よく此の如き好譯を完うしたるかと疑はるゝまで、十中の八九は、驚くべき程適確に本文の意を傳へぬ。而して氏が永くクノー、フイッシャーに親炙して、新カント派の奧を極めたると、大にハルトマンに私淑して、研究多歲に亘れる哲學的の素養に加へて、數年を佛敎文學に費して獲得したる力量は、よく龍樹眞宗の妙意を體達して、非有非空の理、八不執を遣るの妙、多言を要せずして其大綱を提示することを得ぬ。

曰く心、心數法(新譯の心心所)。曰く見諦修道所斷。凡そ此等の術語に至りては、固より多少の解釋を施すの必要あり。難解の文、複雜の論點に至りては、稍困難を感ぜざるにあらざりしも、大體は急流轉舸を下すの勢を以て、二十有七章、凡そ二週を以て、その證義を了へぬ。

氏が中論の研究は、實に其起稿せむとする佛敎哲學體系の第二編の基礎材料たるもの也。氏今や去りて、白耳義のゲントにあり。佛敎哲學者として學界に雄視する同地の敎授、ラ・ヴレ・プサンと共に其論稿の材料を整理せむがため也。

氏が稿は、恐く此クリスマスを以て了らむ。的是、惰眠を貪りて、死せるが如き獨逸の哲學界に、必ずや多少の活氣を起し來るべきもの。

義の大敵なるカトリック坊主の勢力依然たるは如何で御座るだ。これが獨逸國民精神の精華なら、御自慢のルーテルや、ゲーテや、カントは其墓を發いて、屍を瑞西の湖中にでもたゝき込むがよかむべい。

（四）本願寺樣

獨逸に於ける加特力教萬歲にひきかへて、佛國じや見るも憐な有樣じやないか。クレマンソー內閣が、ビシ／＼法王を凹ます御手際は、何とも快心のことだ。この政教分離運動が、半死の墺太利に及び、西班牙葡萄牙あたりまで波及して、ドシ／＼法王の金箔を引剝す樣になれば、此等腐敗頹落の諸國も、幾分か新鮮な活氣を回復する樣になることだろうが。然しこれは、まだ中々の事ではあるまい。餘談はさて措き、目下佛國坊主共の窮境といつたら、維新當時の佛僧の樣が想起せられて、それは隨分可愛想さ。昨日の新聞を見ると、法王は目下每日數百通の書面を、佛國の坊主どもから受取さうだが、其多數は、彼等生活の困難を訴へ、教會內信徒の喜捨や、信施ばかりをあてにして居りては、到底やりきれ申さずとの、泣言が書いてある相だ。佛國々民も、最早無益の馬鹿坊主どもに、金を出して贅澤をさせて置く程、御人好でなくなつて來たらしい。本願寺樣、御要心……。

（五）修道院

なんて、無茶に加特力教の惡口を叩きながら、僕は近來ちよく／＼カフテイン派の修道院に遊びに行くのだ。――此派の一教父が心やすいので、町から電車で凡五十分ばかりの、女人禁制といふ嚴重な修道院によく行くのさ。――院內には七十餘名の修道僧と、百五六十の沙彌が居つて、食料品は勿論、衣服雜具の類まで、院內で調製し、ビールの釀造まで自家でやるので、畠もあれば、工場もある、隨分廣大な構で、全く社會と隔離して一城廓をなして居るのだ。僕はこの建築物から、器具から、洒掃應對の總てが、一切中世式で微塵も近世臭味がない別天地で、院製のビール――ミユンヘン某庵の直傳だといふ御自慢の――を飲み乍ら、罪もない話をして半日を消するのを非常に愉快に感ずるのだ。ゴチック式の廊下に出ると、香の匂が何處からともなく來て、苦行僧が本堂で誦して居る、聖母の羅甸禮讃が斷續に聞へる。庭を歩くと、古風な石十字架が寒林の間紅葉にからまれて、落葉堆き下から、小鳥が飛び出すなど、實に平日の俗氣を一洗して餘りありだ。若し宗教の感化力が、十のものとすれば、恐くこんな中世趣味、脫俗趣味も、その一二分は占めて居るのだらう。日本の禪宗が暗に、國民の高雅な精神を涵養して居るのは、頗る深いことだと僕は常に考へて居る。平凡な俗惡な門徒寺や、法華寺が大嫌の僕には、どうしてもこの脫俗趣味が、馬鹿に氣に入るのだ。チカゴかニユーヨルクの附近に、極幽邃な禪寺の二三軒をつ立てゝ、木魚でも叩いたら、ヤンキーのがら／＼根性も、多少は人間らしいものとなるだらうなどゝ、考へたこともあつた。然し我觀などは、こんな愚論には直ぐ反對と來るだらう。そうすると縱橫を賴むで例の「少し座つて見ろ」をやつてもらうのさ。

だよ）佛教古學の方面では、どうか、日本で事が足りる様にしたいと、書き出すと、貴様は、またそら例の日本的ショービニズムスが初まつたと、一々にけなしつけるだらう。……歸りに寄つて行けつて？ パリ——ストラスブルグ——ヴイエンナ——コンスタスチノープルといふ、東洋急行列車の便利なことも、御存知ないでもないが、そんな汽車は、僕などには彼側を向いて居るからね。……

先こんな體たらく、頗るの大俗氣と御座る。"Nirgend ein Grab, niemals der Tod!" なんて叫り死を、何處かの癲狂院で仕るのには、まだ少し脈が確すぎる。

（二）　獨逸の社會黨

獨逸の總選擧の詳報は、日本の新聞で先刻御存知だらう。社會黨の大失敗といつたらどうだい。一體獨逸現政府の掬撲外交の蹉跌——列强間の孤立。南阿殖民政の大味噌。大臣軍人の敗德と來て、軍備の擴張、食料品の騰貴といふのだからどう顚むでも、ビューロー親爺の成功する理窟は毛頭ないのに、意外なる哉、保守黨や、自由黨にまんまと多數を占められて、八十近ひ議席が、半分に減少とは隨分なさけない談じやないか。尤も政府が必死と、中立の良民を威嚇した痕跡もあるし。新しい黨派の出來たのも、確に大蹉跌の原因だらうが、要する所、首領株の驕氣と無能、其實行に乏しい口先政策が、今回の失敗を招いたらしい。特にだ、南獨逸やバーデンあたりで、坊主黨即中央黨と握手して、苦しまぎれに決選投票で、多少埋合も付け様と悶へた、醜態といつたら、平生の心懸も思ひやられて、嘔吐でも吐つけてやりたくなる。彼等 Denosse は黨略的の小刀細工から、不自然な黒赤同盟を結むで、平生の主義まで沒却し、其極、坊主黨の利益の爲に、自由主義の名士、キュプデ敎授やブルーメンタールの樣な人まで落選せしめたのだ。實に今回の社會黨の運動は、彼等が光彩ある歷史に掌大の黒點を印したのだ。——彼等が今回の大失敗は、要するにこんな黨略の爲に、主義まで犧牲とした、罪惡に對する相當の天罰だ。

（三）　獨逸の坊主黨

議會解散の際、各黨ともに、カイゼルの萬歳を三呼して、議場を去つたのに。社會黨ばかりは、七十餘名、何處に風が吹くかといつた樣な風に、勝手氣儘に退散に及むだのだから。今回の大敗が、いかばかり、カイゼル陛下の龍顏を斜ならずしたかは、分りきつた話さ。然し、獨逸國民の勝利。愛國的精神の發揚など、所有る御芽出たい文字を列べて、今回の選擧に恐悅して居る。ビューローは、遠からず、例の一百餘名の中央黨に、頭を下げて、御愛嬌を振りまかねばならぬのに、何故御氣が付かれぬのかしら。前門の虎なる社會黨の勢力は、祝賀すべく減殺したが。後門の狼、坊主黨の根柢は、一線も動かざるにあらずやだ。あゝ今回の選擧は、獨逸國民の勝利、國民精神の發揚、愛國觀念の成效だと？ 保守黨の華族素封家連。自由黨の銀行家や官學の敎授連は、先づ大目に見てよいとしても、夫の狂信、壓制、陰險、狹量、自由主

ーにこんな御面相も貧乏神のモデルに御入用ぢやごはせんかと罷り出づるのは、何時かしら！　雨峯と八年ばかり前の、護國寺の舊夢を話する機もあればよいが……

さつき病牀で考へた。歸つたら、破れ寺で一つ百萬遍でも催して、諸兄を請待し、我觀、黄洋の輩に、ウント嫌の念佛でも申させた上に、ドブロクと餅の接待でもしてやらうかと。この方が安西洋料理をパクツイて僕の大嫌な、玉突など餘興にやらかすより、よつぽどシヤレて居るだらう。――

また一張羅のモーニングの釦が取れた。今晩は久し振りで、病魔退散の御祈禱に、聞し召さうかしら。二階ではまたギオリンを初めた。何の曲だか知らぬが、僕は僕で一つ怒號てやれ。

Zuangvolles Piale!
Mühe ohne Zueck!
Das heite Schmert
d……a……s……i
ア……デ……ユウー――

（明治四十、二、新佛教）

◇滞獨雜感

米峰兄。四五日天氣加減減法によい。こんな事は冬中霧に閉鎖されてる此地では、實に珍らしい事だ。今日は獨逸の天長節とあつて、寓の前の軍隊教會では、今御說教の最中。お寺の周圍には、騎砲兵の小銃が列をなして組合されて居る。お寺の儀式がすむと直ぐ觀兵式となるのだ。新佛教は一昨日着。今度は頗早く出來た。編輯も先上乘の部。林君の盡力にお禮を申して置く。

お主が共同納骨所の議論は、實に僕の宿論であつた。三年ばかり前に、片山國嘉翁が此地に來て、暫時同寓した時、大體の意見を話して置いた。この事業は、一面、佛教徒に、教會經濟上の大利益を知らしむると共に、他面に、公衆に、火葬の衞生上の大利益を篤と飲込ませる必要もあるので、お醫者樣達の盡力も、是非賴まねばならぬと考へて、同翁と熟談したのだが、翁も非常に賛成して呉れた。其後火葬に關する歐洲の――特に獨逸の――現況も少し調べ、其漸次盛運に向ふのを認めたが、又一方、ある化學者が、學術的に、火葬の不利益（？）を主張するも讀み、頑固連の說も聞いて、多少の參考にしたが、歸國（？）してから、お主等とも實は相談しようと思ふて居つた所だ。去年は例の于闐古文書で、丸で夢の中であつた爲に、二人共仕事の方は、自然第二になつて仕舞つたのさ、今お主の說を讀んで、實に愉快に感じた。何時かお主の說に賛成を表する論文を書いて、これに多少集めた材料なども發表して見ようとも思ふ。何れにしても、こんな事は、少しでも同志の聲を高くして、健全に社會の輿論を喚起する樣にするに限る。

僕には學葬といふ考もある。學葬といふのは、井上圓了さんが死なれたら、東洋大學でおともらいを出す。黑田眞洞老師が往生すると宗教大學で葬式を持つといふ意味ではないので、死體を學問研究の材料にして仕舞うといふことである。僕も證文を書

（六） 新佛教の機運

新佛教も、彼是七年で、赤兒なら、既に小學校といふ年なのに、根から眼に見えた效果も擧らぬと、謙遜の樣な、自慢のような、黄洋の愚痴だつたが。精神的の事業は、そう燒酎をひつかけて、直ぐ千鳥足といふ樣に、手取最く行くものでは御座らぬで、黄洋が、また本願寺の小僧に平身低頭して、淚金有難頂戴といふ樣な卑劣な眞似（或る人はこれを成功といふさうだが）をも働かず。米峰が兎にも角にも、痩腕（有體にだ）一本で、ウント威張こむで居るなどのが、卽新佛教の命じやおはしまさないかい。ベラボーメ、喝堂、黄洋等が五六十囘、愚演説をつかつて、縱橫、我觀等が、七八十編惡文を揑ねまわした所が、それで天下が動いて、本願寺が潰れて（丸で地震だ）新佛教の囘教的會堂がをつ立つて、おたまりこぶしがあるものかね。實は、已の先祖の御釋迦だつて、經文に歷々と書いてある通に、たつた一度の御說教で、一切世間天人阿修羅等……歡喜信受作禮而去なんで、そう旨くは問屋で卸さなかつたに相違ないと、本文批評家の言ひさうなこつちやおまへんか。學林小僧の間に、兎に角、自由討究の考が起つて來て、頑固の天保和尚すら、涵容精神の何物たることが、多少は分りかゝつて來たのなどは、先づ手前味噌に、已等の力だと、自惚て考へたら、先滿足だろう！　何でも勇往さ。邁進さ。努力さ。奮闘さ。不斷の精進さ。――無盡の誓願さ。大乘修業さの本領は、玆處にあるぢやあるまいか。ルーテルが出た前に、幾多の小さい宗教改革の團體が存在し。幾多の志士が、火刑の煙と化し去つたのは、言ふにも及ぶまい。我等はルーテルよりも、實は此等宗教歷史に名も留めない、努力者に多大の尊敬を拂はねばなるまい。僕等は、實にルーテルよりも、是等無名の人――舒々と時運を育成して來た人々を學ばねばならぬのだ――日本では、偉人を呼ぶ聲が隨分高いが、實は偉人の出る樣に盡力し、努力せねば、ルーテルも、法然も、日本には出ては來ぬさ。澤庵一つ漬けてもさうさ。不斷の壓力と、奮闘でやつと食へる樣になるのさ、――言はずやだ、卵子を見て時夜を求むること勿れだ！

（七） 電報式俳句

泣顏に蜂で、病僧また四五日來インフルだ。此方に居ると、同國人の好といふので、未來の博士先生方の、ロハの御投劑さ。昨日之乏庵（片山國嘉親爺だよ）から、一緖に歸つちやとの、勸誘があつたが、こんなことには、至極不得要領の僕は、何時歸るか分らぬと斷つて、病牀駄句といふのを、三つ四つ書添た。新派でも舊派でもないツマリ考を、十七字に約めたといふのだから、電報式とでもいふのだらう。然し是でも黄洋や我觀などの無風流者より、幾分かタチがよいかも知れぬ。書いて見やうか――

殘る雪、麥酒と取らむ、風藥。
冬籠、嚏に、寫經汗したる。
「アスピリヌ」癒へむと、友の戲るゝ。
寢汗して、ストーブ斷へし、夜寒かな。

（八） ドブロクと緋

大分長手紙となつた。素明のアトリーエ

五日、ロンドンから出發、彌々歸國する。僕かへる、僕だつてまさか、何時までもこんな愚にして俗惡なるストラスの小天地に愚圖ついて居たくはないのさ……。

これから大學の祝賀式に行く。祝賀には、必教授の中から一人出て、其蘊蓄を披露に及ぶといふのが、嘉例になつて居るが、講題や講者の名は、彌々開講となるまで學長の外には祕密で、誰も知つて居らぬといふのも一寸奇だ。今日は誰だらう。

（一月二十七日）

○

昨日までは、例の于闐から出た、般若斷片の證定で、六百卷、片端から操るといや、隨分御苦勞の勞働をやつたが、かなり面白い結果が出た。今日の土曜は、春雨は降るし、頭は痛むしするから、圖書館はやめて、濫讀か濫艸に充てようとしたとき、朝風兄の書と「新佛敎」と、ルサックの目錄が來た。

手紙は十分ばかりで讀み、雜誌には約一時間半ばかりかゝつた。目錄は一寸手間どつた。誰が集めたか知らぬが、支那の經史雜書の非常な豐富なライブラリーだ。宋明板の珍物も隨分あるが、永樂大典の端本が二冊まで中にある。蒙古や西藏に關する書も垂涎すべきものも少くないが、全體でなくては賣らぬとの事だから、とても僕の御齒には合はぬ。永樂大典は翰林院にあつたものだから、多分拳匪の時誰れかの手に入つたのだらう。

大分報道したい事が溜つて居るから、まとめて五月か六月號に間に合ふように仕う。しかし一寸豫報だけは序にやつて置く。心臟が少し變だとの事だから、いつ御陀佛になるかもしれぬから。

第一は五月にロンドンで萬國佛敎會が開催される事だ。パリ語界では一方の驍將であるキャピテンロスト氏が萬事世話をして居り、リス、デギヅ敎授など有力な後援もあるし、歐人で緬甸派の大比丘となつた歡喜慈（アナンダマッテイヤ）や智三界（ニエーナテイロカ）など云ふ人々も非常な盡力であるから、極めて着實な右敎友會が成立するだらう。獨逸佛敎傳道會は例のサイデンステュッケル等大擧して參列するだらうし、瑞西や佛國の佛敎徒も之を機會に、大聯合の基礎を造るだらう。僕も是非行く。朝風兄もイタリヤから參列するだらう。大拙居士は恰もその當時ロンドンに滯在中の筈だ。

第二は去年の末にライプチヒで佛敎大討論會があつたことでサイテンステュッケルは衆多の自由派佛敎僧侶及學者の中で恒に善く戰つた。詳細の報知もあるし。機關雜誌の記事もあるから。少し詳く書いて送らう。

第三は目下舊敎神學界に於ける一種の暗潮だ。去歲法王ピウス十世が近世主義排斥の敎書を發して以來、各地大學の神學敎授にして法王の譴を蒙り、若しくは監督者の僧正等と衝突するもの多く、其餘波は法王に忠實の敎區の一に數へらるゝストラスルまで及び、僕も一度は講義を聞いた、エーブルト敎授も、ある事で大に法王の御覺を害し、座下高僧といふ榮職をも、褫奪せら

いて、死んだ體は京都大學の足立文太郎兄に獻上してある。これは勿論、一般には出來ぬ話だが、せめて僕等の仲間丈でも、やつたらどうかといふのだ。證文の下書が見附つたら、少し意見をかいて何かで發表して、お主の考も聞かう。

愛國的戯曲家であつた、フォン、ウイルデンブルーフは、突然死んだ。よいドラマもある。故大村仁太郎君などは、獨逸第一流の戯曲家だと大に擔いだものだ。なるほどよい所もあるが、ズーデルマンやハウプトマンなどの、最新の思潮に觸れた人々の傑作が出た爲に、末路は寧振はなかつた。ゲーテとシルレルの居つた詩聖城といはれるワイマールに、其遺骸は葬られた。

閑暇の時は、ちよい／＼と獨逸最近美術史の講義を聞きに行く。公開であるので、五六百はいる。講義室の半分は、女達である。士官や、教授や。實業家といつた樣な人の細君と娘で隨分きらびやかなものだ。講義は幻燈を使用して代表的の名畫を見せるので頗面白い。この月曜は例のメンツェルであつた。此人は歴史畫の名手であつて、宮庭の技藝官であつた。カイザーのお肖像もよく書いたものだ。其所で僕謂らく、カイザーのお誕生日の前ではある。先生人氣取に、此畫伯を擔ぎ出し、お仕舞にはカイザーの肖像を出して萬歳愛國を鼓吹するなど、窃に笑つて見て居ると、初は例のフレデリック大王に關する各種の名畫を見せ、次でイタリヤ旅行中の雜感畫其他で、最後に出したのは獨逸の最新文明の畫であるとて、工場の勞働者が錬鐵に從事して居る所を出して、こんな非美術的の奴に一種の精氣を吹き込むで、限りなき趣を得せしめた技量を嘆美した。僕は玆で思つた。獨逸大學の教授達はまだそんなに腐つては居らぬ、少くともまだ多少は健全な思想を確に持つて居ると。

新聞や雜誌も、近來は多くは見ない。珈琲か麥酒屋で、あれこれと拾讀する位のものだ。日本の加州議案に對する態度も、大分大人らしくなつて來た樣だ。桂内閣の議論の軍備に對する答辯も、四日ばかり前に讀んだ。雜誌では、例のシムプリシイズムスをよく讀むが、諷刺畫では先づ獨逸一だらう。一つ此中から受賣をしようか。ベルリンのフリードリヒあたりだらう。例の花笠の樣な流行の大ボンネットを被つた、先、魔性のものであらう。華族らしい若い男と、何れも高價な毛皮に包まれて、高慢な雪道を歩いて居る。其前に、勞働者が、外套もなく寒さうに走る。華族の君曰く、「此寒さに外套もなく歩く奴は、實に風紀紊亂といふべしだ」うまく穿つたね。

去年の冬から慘酷に財布が空だつた。然し錢がないと交際をする世話もなく、手紙を書く必要も生ぜず。酒を飲むことさへ全く入らず。一向三昧に古文に親しむことが出來て、自然に戒律を守れる。アブフルートに無錢だと、雲照和尚の一食の眞似などは屁でもない。何でも坊主や學者は錢なしに限る。

大分今度は、初の方が眞面目だつたが。段々壺月流のパラドックスが出さうだから。幕としよう。まつた、大拙居士は來月

本の害とならざるべし—獨乙に於ける國體對外教の實例—基督教對國體を樂觀す—基督教者に對する苦言—新基督教の必要—雜信數項

米峰兄

「新佛教」も「迷想的宇宙觀」も共に昨日着。後者の方は、今朝六時前から始めて、床中で讀了した。鋭利明晰なホレミックは、加藤老人御得意の伎倆と見へる。摯實な學者的態度にも、少からず敬服した。然し內容の御議論には、乍殘念、一向感服もせねば、成程とも思はぬ。ホイエルバッハやヘッケルでは、第一殺風景で滋味に乏しくて、頗面白くないと思うて居る僕には、加藤老人の議論が、どんなに正々堂々として立派でも、それ以上の感を與へないのは、どうも仕方がない。僕は、また一方ならず加藤君が憂國の至情に感奮したが、大體日本國民の膽量は、基督教位を消化出來ぬ程、薄弱な偏固な憐な者とは僕には考へられぬ。加藤君は基教の同化不同化といふ言を、教理的に大分重く考察して居る、客體の研究は、順序として御尤だが、然し一步進むで、主體の側から、日本國民が之に對する消化力如何といふ、民族的能力を一つ考へたら、存外樂に問題の解決はつくまいかとも思ふ。勿論、基教は今でも日本國民には隨分一種厭な臭氣のある、チーズ若くはバターの樣なものであらう。又是が必無ければ日本將來の文化がどうのかうのといふ代物とも僕は買被らぬが、歐西の科學や文藝のチキン、コテレツの後で、これを食ふて、相應の趣味と滋養とを攝取することは、國民の發達上、損ではあるまいかといふのは僕の考だ。實際今まで、日本の新文化に基教が貢獻したのは、事實であるぢやないか（尤も多分は科學や文藝と共通の點からなので、例せば慈善教育といふたような側からの貢獻だ、基教本來の精神からの貢獻は、どの位深いかまだ調がつかぬ、卽ちチーズの要素のカゼインが、直接、どの位、影響を人體に及ぼしたかといふ點が、まだ僕には判つて居らぬが—）加藤君はまた主として世界教と吾國特別の國體族父統治と不兩立のものである。天皇の上に上帝などといふ化物を安置するのは、國體上大危險であるといふ御考で、これが則新著一編の大精神であるが、大體加藤君は宗教の發達進化といふ點にあまり考察をされなかつたのでかゝる杞憂に終られたとしか考へられぬ。日本に若し後來基督教が地步を固めるとすれば、必らず我國民性に適應した、ある發達をしなければならぬ。英國や獨逸や墺國や露國や、何れも其宗教は各特別の國民的發達をして、今日まで來たので、何處も同じ基督教ではない。新教といふても、獨逸のランデスキルへと、英國のチヤーチ、ヲブ、イングランドとは國民的の發達に爭ふべからざる差異がある。それで日本で若し將來基教が儒佛と天下三分の勢になつた曉には、また儒佛が日本で受けた變化や發達も必然的に通つて來ねばならぬ。卽族父統治に衝突せぬ世界教となつて行はれなければならぬといふのが、僕の考へだ。一體世界的性質の教理上から明白で雄大で廣いのは基教よりは寧佛教の方にあるの

れた。これは大に注意すべき現象である。
　この他には、獨乙軍人の一部が頗る腐敗して居るといふ現象を具體的に說明すべき、種々の悲劇がある。アーレルスタイン事件なども其一つだらう。これは同地で頗る材幹のある一大尉が其上官少佐某の妻と不義の關係があつたが、其極クリスマスの夜、上官の宴に招かれて其家に宿泊したのを機會に寢室で少佐を射殺したことだ。此大尉は永く審理中であつたが、前週だつたか獄中で自殺してしまつた。軍人萬能主義は、往々かゝる弊に陥るものだと云ふ事丈、同胞が考へてくれゝばよいのだ。
　此市が次第に膨脹し、次第にパリ化するにつきて、此謝肉祭は非常の賑だつた。金がないからどの會にも、どのダンスにも行かなかつたが、最後の夜、即前の水曜に例の定卓で老壯の士官連中を對手に大に飲むだ。勿論「何事ぞ花見る人の長刀」と云ふ野暮ではなくて、何れもスモーキングか何かの平服で假面まで被つて居つた人もあつたので、大に愉快だつた、―十二大盃の麥酒は既に盡きて、以て聯普國士官の膽玉を奪ふに足りたるとき。時計はもはや三時を超して居た。
　此間ハウプトマンの新著「カール大帝の氣質」を讀むだ、よく書いてあるドラマで、頗神韻に富むで居る。最後の幕は最もよい出來だ。大意だけ抄譯して見ようと思ふたが止めてしまつた。
　一時伯林の皇立劇場で、空前の盛名を博した名女優バリーネ、ルツカも終に死むだ。ウイルヘルム老帝が非常に御贔負であつて種々な美しい逸話が殘つて居る。女優は幕合に一杯の紅茶を飲むのが例であつた。あるとき、ルツカは飾針を外套の預所に忘れて、侍婢を取りにやつた爲に、茶を飲むのが遲れようとした、この時恭しく銀盆に玫瑰盞を捧げて、女優の前に現はれたのは大皇帝であつたといふ話さへある。質朴な剛直な獨逸帝國の建設者と、この姿聲前古に比なしと稱せられた名花との對照は實に面白い。
　そろ〳〵問題外の駄話に入りそうだから、もう停止を喰ふてもよい時分だ。
　忘れた。病氣は罪惡だなんて、馬鹿なことを言ふたもんだ。最も病人は悪魔の魅いたものだと信じて、無暗に病人を苛責する宗教も、現に歐洲の眞中に祕密に行はれて居るが、君のは丸で義務狂とでも云ふのだらう。少し餘裕がある様にするがよからう。活動々々で、さう動きづめに動いてたまるもんかい。あまり無茶の事は少し注意するさ。この無茶こそ實に罪惡だ。
　どら雨も小歇になつた。フランス側の空は、だん〳〵晴れだして來る樣だ。亦公苑に行つて鹿でも訪問してやらう、此頃日本産の鹿が一頭きた。此奴の方がどうも僕より少し利口らしいから、頗る妙だ。あの利害得喪の外に超然として萬人に對する態度は、僕にはとても出來ない。

（明治四十一、三、新佛敎）

◇萊江雜信

「迷想的宇宙觀」を讀む―基督敎は敢て日

係は前に擧げた實例と略同一にならうと思ふ。否一方では日本ではランデスキルヘの敎長などいふものは存在せず、國家及其元首は全く信敎自由のものであり、他方では日本の基督敎徒は獨逸の舊敎徒よりはずつと愛國的、ずんと進歩的のものとなるだらうと思ふから、その關係が一層圓滿に行きはしまいかと僕は樂觀してる。何故ならば、今や新文明はどし〳〵吾國に入りて來る、國運はどん〳〵進むで東亞の覇權は握らむとしてる。といふ時に舊式のアーメンや、固陋のドグマでは、どうしても遣り切れたものじやない。茲で大變更が早晩基督敎會に來る。而してこの大變更は日本的新基督敎會の成立を意味するのだ。さもなければ基督敎會の前途にはあまり多くの希望は繋げまい。加藤老人もあまり此點では杞憂がない樣に御願申す。但茲處で筆序に、とくと耶蘇の御連中に聞いて置てもらいたいことがある。外では御座らぬが、元々非國民的だの、非富國壺だの、何だの蚊だとのといふ惡口が、兎角お主方の側にある樣だが、これは丸で原因のないことでもないかと考へるがどうじやい。小い下らぬ例は、馬鹿々々しいから僕は擧げぬが、大體御主等は偏固な融通の利かぬ敎會信條ばかり墨守して、宗敎の活作用といふことがとんと分らず、頑固で異敎呼はりをし基督敎民の外は犬か豚のやうに考へて不寛容極まる毛唐牧師の馬鹿げた所をよい事と心得、宗敎の適應性とか寛容とか無執とかいふことに、少しも氣のつかぬからして心にもない惡評を受けることになるのだらう。御主等だとて、强て露探同樣、非日本人といはれるのはあまり快くもあるまい。又こんな惡評が、敎勢伸張上に及ぼす惡影響も御氣がつかれぬでもあるめい。だから此所で一つ加藤老人の攻擊を有難い藥石（佛敎じや之を逆緣といふのだが御主等の方ぢや一寸こんな面白い術語はあるまい）と奮發して、偏固な敎會的のドグマや、不寛容な馬鹿根性をサラリと捨てゝ、毛唐牧師の御鬚の塵を拂つたり。外國の敎會に無心をいふことを止めて、少し眞面目に基督敎の前途を考へたらどうだい。露骨にいふと、敎會的傳說的の基督敎を捨てゝ、自由主義の基督敎に入れといふのだ。更に具體的にいふと新基督敎を立てぬか、日本的の新基督敎を立てぬか、といふのだ。弘法でも親鸞でも日本的の新佛敎を立てたればこそ、あれだけの成効をしたのだらう。御主等も日本のアウグスティンや、トーマスになる氣はないのか、少し小さく共、せめてはシュライルマツヘル位の腕を揮ふて、加藤老人の輩をアツト言はせてもらいたいもんじや。何時までもバタ臭いペンキの香の拔けぬ切支丹敎會では、此先兎辰の上る見込はないよ。因に餘計な御世話燒のやうだが、救世軍なども、兎角の評判がある山師親爺のブースから獨立して、もつと自由な氣狂じみぬ新敎會を起したがよし。舊敎の連中も。獨逸あたりの所謂近世主義者を提携して、一つ法王と手を切る勇氣はないかね。なんぼ貧乏でも、一等國といふのに外國の御惠金で、おめ〳〵慈善事業や、敎育事業をやつて居る樣では、當局のお主等も、あまり世間に

で、加藤君が佛教の同化的性質を許しながら、其教の方に酷なのは少しく僕には分らない。それから上帝の統治といふのは、宗教上道德上の話で、天皇の大權は政治上の事である。丸で範圍も性質もちがふもので、丁度自然法と憲法がよい例であらう。「神のものは神に還しカイゼルのものはカイゼルに還せ」といふのを、合理的に極めて自由に解釋したら、大した間違も起るまいと思ふ。且夫天皇の上に神があつて不都合であるといふが、自然法や道德律の前には、恐れ多いが上御一人も吾々も同一の支配を受けて居るぢやないか。こんな宇宙理法や倫理律の調和的に總合したるを、宗教的情操で活かして見たのが神で、所謂信と愛と望の源泉といふのが是だらう。さればかゝる大理想に活動して、それから力を得慰を得て、萬事やつて居たら、國民の資格に缺くる樣なことも、あまりなからうぢやないか。尤右はデーストや、ユニテリヤン、若くは獨逸自由神學者のように、頗大膽に神樣を見たので、教會信條に縛られてる牧師連中は、どういふか知らぬが、兎に角大體の所はそうぢやあるまいか。然しこれは理屈だから、一歩退いてチヤキ〳〵の教會的基督教につきて、事實を擧げて見ようか。今獨逸聯邦の覇權を握つて居る普國は、人の熟知してゐる通新教が國教で、その王樣(勿論獨逸聯邦の皇帝だ)は、所謂ランデスキルヘの教長である。所で其領內のラインランドのキヨルンは、有名な舊教の巢窟(大僧正が置いてある)である。ヘツセンのフランクフルト市は猶太人の本場とも云ふべき所である。一體普國の國體から考へて加藤君の筆法と、論理で、推すときは、羅馬法王の統治の下にある、舊教徒、頑固な民族教の信者の猶太教徒、是程普國の國體に害のあるものはない。危險のものはない。何故かといふに羅馬教徒は無論、基督が地上の代官として法王をカイゼルの上に置いて居り。猶太教徒は其、イスラエル族特別の神として、エホバを崇拜して居るからだ。其關係は加藤君が「天皇の上に神を置く」といふ純理的法理的なのからも現實的である。隨つて一層進むで居る丈、一層危險ではないか、將又ヘツセンやラインランドは、普國に對しては何百年といふ深厚な歷史的の關係もない是又日本の基督教徒と、日本の國家との關係とは凡て差異して頗る疎なものである。さり乍らこの恐るべき猶太教徒非國家的の舊教徒(加藤君の論法でだよ)果して普國の害になつたか、普國のために非國家的の惡行をしたかといふと、丸であべこべである。普國の財政は、一方ならずライン沿岸の酒造家に負ふて居る。フランクフルトの銀行に感謝して居る。それでかの海軍や陸軍も一方ならぬ進步をして居る。ライン舊教徒の皇帝に對する忠愛も、ユダヤ教徒の獨逸國の文化に盡して居るのも、伯林などの新教徒と少しもかはらぬではないか。僕は勿論日本の基督教徒が此所百年か五十年の間に、ラインランドの舊教徒の如く强大に多數のものとなるとは信ぜぬが(今の樣な手腕のない女性的な僞善で糊口に汲々たる牧師樣方の御力では)、然し若しそうなつたとすれば、關

黨の二新聞は、殿下の口頭試驗につき云々の評をなし、法科大學を隨分手酷く攻擊して便佞學者といつた樣なことまで論じ立てたので、大學の方でも默ては居らず、近々公判になるだらうが、一寸日本では見られぬ、事件だ。

伯林大學のパウルゼン博士も永眠された。日本でも大分其著書が讀まれて哲學者としては、二と降らぬ人だつたが、逝去の報なぞは、日本には傳らなかつたらう。かゝる側の人はあまり世間からやかましく言はれぬのが常だから。

ツエッペリン伯飛行船大成效、及其悲慘な大災厄は日本でも新聞屋連が、例のあて推量の愚報知をしたらうと思ふ。今は佛でも伊でも瑞でも、何れも飛行船の發明があつて、先四五年の所の人氣は、飛行船と極るだらう。此間ツエリツペリン伯に贈ると題して、ライプチヒの鹽谷溫君から七絕が一首來た「凌雲一擧駕長風。自在飛船渡大空。百折遭難技加熟。盛名齋仰老英雄。」流名はうまいものだ。僕の下手な次韻がある「巨大如鵬疾若風。御雲制氣劣悟空。羽船一蕘姓名擧。節白龍是萬國雄。」

連日雨秋にあつて來た。今年もまたライン河畔の落葉に寂しい夕日をながめねばならぬか。

（明治四一、九、新佛敎）

◇漫言數則

——米峯氏への私信——

（一） 雜誌の編輯

「新佛敎」四五日前に着。實に驚いた。僕の惡文の標題を圖抜けた大活字で表紙に刷り出したには實に驚いた。實際の所少し狂氣じみた眞似じやないかい、特に此號には黃洋、我觀、咄堂お、主などいふ新佛敎門閥の連中、顏揃の所に雪嶺翁の文まであるのだから、何とも冷汗が出たといふものだ。

一體僕は表紙の要目に二號と五號とで、所載の文に大小をつけるのさへ、甚面白くなく思ふて居るのだ。苟くも雜誌に載せた已上は、一首の俳句でも、三十頁の大論文でも、同一の待遇は當然であらう。まして美文と論文の目次を、大小に刷り分けるなんて仕方は、頗る面黑くない次第だ。その代りにだ。編輯會で嚴重に資料の精撰をやることにしたらよからう。あまり杜撰のなぐり書や、意味も分らぬ不忠實な反故論文（特に研究に關する）は、どし／＼處分して仕舞ふのだ。投稿家もそうである、必らず忠直な研究的及創作的良心に訴へて出來る丈、ベストのものを出して欲しいのだ。實の所、駄作や濫造の愚論惡文で「新佛敎」を草紙に使はれては甚閉口する。いくら新佛敎の寬容主義が美くても、かゝる點には、僕は寧極端の不寬容主義がよいと信ずる。

（二） 佛敎哲學者ワレザー

ドクトル、ワレザーがセツキンゲンからケールに榮轉して來たので、話相手が出來て頗愉快になつた。ケールといふとライン河一ツ越せば、直向ふのパーデン大公國の一小市で僕の健脚なら三十分で先十分、小奇麗な人氣のよい町だ。金曜日には梵學會で大抵やつて來る、圖書館でもよく遇ふ。土曜か日曜には此方から出か

意張てもあるけぬじやないかい。お主等は加藤君の攻撃に對して、頗る力めて居る、立派な議論もある、實際が加藤老人の稍偏局な野暮な議論よりも、御主等の方に見るべきものもある樣じや。然し筆や口やで愚圖々々言はずに、實際前云ふ通り、國民的の新基督教を立てゝ吳れてはどうだい。吳々もお主等に此機會を利用して忠告して置くが、異敎呼ばはりをしたり不寬容の言動をしたり、するのは二十世紀の今日、狂人より外にはないと考へるのが肝要だといふことだ。何だか無茶苦茶になつて仕舞つたが、「迷想的宇宙觀」を見た感は此の如し。評を致せとの御命令だが、第一加藤君の他の著書を參照することが出來ず、第二諸氏の之に對する諸評論の原著（抄錄したものでは不安心だ）を對比する便宜を缺きて居るから、精密な確實な批評は此種の著には出來たものぢやない　依りて御禮を申して、評の所は願ひ下げ。

「新佛敎」の方の愚稿の對合表は頗手際よく出來て大滿足、君にも御禮を言ふが、實は活版屋の植字工諸君に厚く御禮を申したいものだ。鐸嶺氏の說は同感である。咄堂の題撰びの巧なるも感心。君のぶちまけ主義も感心、二楞君の慕魄もよいが、書くならば少し骨を折つて、南傳の本生經を一應對比したらどうだつたらう、東京大學にもある、僕も一部淨土宗大學に托してあるはづだ。論文には骨惜は無用の事。

一昨日はカイゼルが第十五師團の閱兵を行ふため、第十四第十五兩師團の對抗大演習の後、此市に來られ、皇后皇太子を初め、他の皇族は勿論サクセン王其他獨逸聯邦の王侯、概參集し、高級の武官も多くやつて來て、町の裝飾は、僕が此市で未だ見ない大盛觀であつた。市は煮へかへるような大騷、夜のイルミネーションなどと來たら、實に振つたものだ。閱兵は棧敷（布團もついて居る屋根もある立派なものだ）が六圓五圓三圓五十錢といふもので、立見（丸でしばいのやうだ）でも五十錢は取られるのだから、雨は降るし貧乏の僕は行かなかつた。皇帝は今では伯林で近衞の閱兵中だが、明後日また此市に御出になつて、四五日滯在今度はアルザス土語の劇を天覽といふのだ。幕間にナポレオン時代から此地で有名な消防隊のフランス式音樂を御聽に達するといふのだが、隨分民心慰撫には御骨の折れたことだ！

此間アウグストヰルヘルム殿下のドクトル事件といふ珍事が大學に湧いた。同殿下は現皇帝第三の皇子だが、ボンと伯林で法學御修行の後、此地の大學で二學期の御積學といふので、學位の收得を大學から僅に四學期の御在學にも關らず（法科は六學期已上少くも在學せねば學位はもらへぬ）特別に御許し申したことにした。フレデリツク大王時代の警察制度といふものが御論文で、口頭試驗も驚くべき好成績。最優等で法學のドクトルを御受になつた。普國王室で學位を受けられたのは、殿下が嚆矢、此地の大學でかゝる高貴の方が受驗せられたのもまた殿下がいの一番であつたので、大學の側は勿論、王室の方でも目出度目出度しであつたが、好事魔多しか民主黨と急進

な貧力にあらずして寧其氣力を缺き精神を缺いた、教職員連だと思ふ。卽ち彼等の獻身的精神の缺乏であると考へる。ベルギーはあまり大國ではないが、其國の加特力教徒は――單に熱烈な信念のあるジエスイツト教徒だ――四五の大學を立派に經營して居る。本願寺大谷の兩派は勿論、曹洞の如き眞言の如き、決して貧弱な宗旨ではない。年に四五萬乃至十萬位の教育費は熱烈な教育家があつたら、大した力を費さずに集まると思ふ。或處で僕の熱烈な教育家といふのは新形のフロクコートを着むが爲に各宗大學の教授となる宗教家の文學士連。小ぽけな家庭とかいふもの丶爲に、月給目あてに働く宗教家の文學士連を言ふのではない。午後は托鉢しても午前は教務を取る舊式の舊佛教的の道心家を言ふのである。今加特力教の和尚のエックが帝大の佛文學教授として居るが、此人は其月給を、悉く自家の教會に出して其必要の分丈もらつて居るといふ話だ。少くともエックの精神のある教育家、月給の爲に働かず、道の爲に働く教校の職員、若くは教員が四五名あつて、其血と熱で學生を薫陶したり、自家の研究もしたりしたら、もつと活氣が各宗の學校に見られるだらう。僕は一ヶ月ばかり前に一友人からかういふ話を聞いた。ある大宗の秀才で文學士であるが、帝大を出ると直其宗の大學に高給で使はれる。非常に虛榮の強い當世風のハイカラ娘を妻にする。今は子が二人あるので、二人まで乳母を雇つて、頗る贅澤な暮をして居るとのことだが、こんな風な秀才の理想が若滔々として現代の學林小僧を風靡して居たら、卽夫が各宗學林の活氣のない衰弱する一大病因であらうと思ふ。僕は此點に於ては、十年前と同じく今も尙極端の舊式を守つて居る。特に宗教の局にあたるものの、自家犧牲の必要は加特力教徒の僧院や大學を訪ふて一層切々に感じて來た。宗教家はどうしても非現代的でなければならぬ、少くも俗惡な物質的な淺薄な虛僞な現代に對して超然として居なければならぬ、若くは憤然として之と戰はねばならぬ。今の宗教々育家には此氣魄が缺けて居るのではなからうか。各宗學林の小僧どもが祖師の着られた麻の法衣よりは、外國では下等の職工でも着る様な脊廣を有難く思ふて居るのも、實は無理もない談だ。

何だか手紙のような論文のような鵺的のものになつて仕舞にけりだ、何年たつても相變らずの書生論の所を笑つてもらふか。然し「當時諸葛亦書生」そう無責任な怪氣燄でもないのさ。

(四) 獨逸政界の近況

獨逸は議會で今相續稅否決のため、首相の辭表提出、その不裁可と來て、今は解散の低氣壓だ。社會黨は今度は珍らしく政府案に贊成し、自由黨、急進派其他と連衡して保守黨及加特力坊主の中央黨に當つたが敗れたのだ。要するに農民對商工業の戰鬪で前者が負けたのだ。社會黨は次期の選擧に多數を見込むで、解散を議會で叫むで居るが、どうなるか、財政の危機は日本も獨逸も同一と見へる。なんて氣樂を言ふと、何、御自分も危機所ではない。隨分其巳上

けて行く。今は西藏々經の一部を英國印度局と伯林大學から取寄せ勉强して居る。此間行つたら解脫軍の楞伽經疏と其他二三の大部のものが、机の上にあつた。中觀と瑜伽とに關する梵語、西藏の資料を集めた豐富なことは、實に驚く。高楠教授に賴むで縮刷藏經一部買込むだのでも、其遠大な熱心な研究態度が知れるだらう。今獨乙で佛教語學者は少くない。偉大の人物も此方面には隨分ある。然し佛教哲學特に大乘哲學者として、光輝ある未來を有するのは、先此人だらう。獨逸外でガンのプサン氏、露のチエルバトスコイ氏が大乘哲學者として知れて居る。特に前者は月稱の中論釋公刊、其他で先第一流の學者だが、プサン氏が舊教的なるに比し、ワレザー氏はクイ、フイッシヤーの高弟である丈、哲學的素養に强い所と公平な研究的の點がある。若し氏の梵語の造詣が今少し深くなり、之に支那藏經と閱する腕が凄へてくると、ブサレ教授より寔に優良な結果を同氏に望むことが出來るだらう。何は兎もあれ、僕には此人の酒好なのと無妻主義なのが、大に意氣投合した點だ。「花の屋」といふホテルに呑氣に城を構へ込むで、「君此所等の教員連と來ると、研究なんてことの解る奴は一匹も居ない。豚肉が上つたとか、馬鈴薯がよく出來たとか、家鴨の卵がどうだとか、丸で土百姓同然だ。情ない奴等さ」まあ、彼の氣焰はこんなものだ。

(三)「佛教學校の將來」に就いて

お主の各宗教育機關を、經濟的見地から合同しようといふのは、現時識者の公論を代表したものと見てよからう(勿論東洋大學を一時その間に合せに使用するといふ方外の愚論は眞平だが)僕も勿論此意見である。其方法も一二の友人に話したこともあるが、然し現時の教界の狀勢に照すと、直ちに現狀の破壞をやつた所が、まだ到底理想通の共同機關の出來る見込は絕望である。だから、今の所方法として折角成立した教育機關をなるべく活氣のあるものにし、なるべく特色のあるものにして、其間に學校の連絡と交通とを圓滿にし、他に大合同の準備を計る外はない。其手段としては、僕は各宗大學の教職員の懇談會、各宗大學を中心として定期學會の開設の二つを是非實行し、この他に各宗大學々生を會員とした一大俱樂部――僧道や娛樂の――をも興したい。一言すると各宗大學の連絡機關が、大合同の前には是非必要といふのだ、此次はお主のラデイサルなのに對し漸進論だから少し意見が違ふ。此の如き連絡機關の成立は、自然學校の間に善良公平な競爭を生ずるから、自然特色のある面白い發達が見られる。獨乙二十大學の中バーデン大公國は其國の小なるに關らず、二つも立派な大學がある。貧弱なサクセン・ワイマール侯國は豆大の領地なるにも關らず、歷史的のエーナ大學を立派に維持して哲學者のオイケン、進化論者の巨魁ヘッケルを其校の傲りとして居る。これは要するに、聯邦對立から來た善良な競爭の結果である。僕は此の如き競爭を各宗大學の間に見たいと思ふのだ。

大體僕が各宗大學に憂うる所は、其貧弱

詩藻文範

の破目に瀕して居るのさ。然し夫でも平氣の平左衞門で糞の役にも立たぬ古斷片をひねくつて居る。此所が先づ僕の命かね。呆れたものだ。

（五）歐洲の飛行機熱

歐洲は今殆ど飛行機狂に陷つて居るのだらう。昨日の新聞で見るとパリーの一富豪が飛行器研究として六十萬ばかりの資金をパリ大學に獻納し、尙年々鉅萬の研究費を出すとの事だが、獨逸のギョッティンゲン大學では、此春飛行機に關する講座を新設し、シャロッテンブルグ、ハンノーベル、ドレスデンなどの工科大學にも其講義と實習がある。ツエッペリンも此六週間ばかり前に大飛行に成功したが、今は伯林の陸軍部內の嫉妬で大不平の樣だ。卽普國陸軍では、パルゼアル、プロォスの兩軍人が各飛行機を發明し、相當の成績もあつて之が普國の飛行船隊の主腦となつて居るので、ツエリッペリン飛行船Ｚの第一、第二の二艘は所謂帝國空中飛行器となつたにも關らず、兎角繼子扱にされて居る。伯林に飛行船繋留所をツエッペリンが建設を願つたにも關らず、まだ愚圖々々になつてるのもこの暗鬪をよく說明して居る。ツエッペリンが伯林の附近まで飛行しながら飛行器修繕の必要といふ理由で、カイゼルに待ぼうけを喰はしたなども多少の面あての意味を持つてることとも考へられる。普國陸軍ではツエッペリンの大成功と其國民的の崇拜を承認しては居るが、尙理論上頑固に其固定式の不完全なのを主張してるのだ。此間一雜誌の諷刺畫に此間の消息を示した面白いのがあつた、空中でツエッペリンが其風船に騎してグロッセ及パルゼパルの二飛行船と惡戰して居る。カイザーは彼のライヒスアドラーに乘つてピストルをツエッペリンに擬する。すると下には大腹便々たるジョンブルが之を見物して曰く「やるべし〳〵、盛にやるべし」。旨い。

まだ書けば際限もないが此位にしやう、此週少し多忙なので、今度は論文は御免を蒙りたいものだ。九月には何か一つ書かう。

（明治四二、六、新佛教）

屍體贈呈の覺書

一　予が死後の屍體は之を足立文太郎君に贈る蓋同寓三載餘同君が學に力むるの至れるに感ずるあり予が衷心の尊敬を同君に表するの榮を得むことを欲すればなり予が親戚及朋友等は一切之に對して抗議するを得ず

一　予は吾骨骼軟部等の保存に關して毫も希望する所あらず之を粉碎するも燒棄するも一に同君の意志に任す屍體取扱の如きも斷じて特別の待遇を要せず窮民の遺體刑餘の殘骸と同一の取扱を得ば足れり

一　官機臟器骨骼等若し世に傳へて後學を裨益するに足るものあらば其保存因より之を妨げず之を外國の標本と交換するが如きも亦不可なし

一　屍體解剖の主任者は足立君が認めて適當となす人は何人にても同君より其權利を收得すべし屍體解剖の主任者若くは局部材料の使用者

一　足立君予に先ちて死亡したる時は同君が朋友若くは門下の中同君の意志に由りて此覺書の權利を承繼するを得此場合には該承繼者は其姓名を予に通知あるを要す

一　予は予が死後屍體の贈致と共に若干の金圓を之に添付せんとす少くとも石險一箇手巾一枚入浴費及醇良の酒三四合の代金を添付せんことを期す執刀事に從せし後入浴一番少く陶然たるの快あらんことを欲すれば也

明治三十六年十一月三十日足立君和蘭ライデン府を經て歸朝する前二日獨立エルサス州ストラスボルグに於て

渡邊海旭（印）

現住地東京市深川區御船藏前町十一番地西光寺

足立文太郎君

詩藻文範

◇寄永井祐誠氏

瑞氣籠香繞法壇。野僧亦得改年歡。慈光宛似春光遍。幾點早梅念佛安。

◇八木快運師入京、與自覺、說成、隨旭諸同人、來訪余寓居、痛飲談論時事、昂眉張目、極盡慷慨、夜深宿于寺焉、專才數月前已耳、而今聞其西邁、悲傷實長、賦一絕言志

蕭寺燈前豁醉襟。寧知一別哭寒林。即今禹域風雲急。西望奉天缺月沈。（大正二年）

◇送桑門僧正歸國

三月十四日、春雪後、與清光寺櫻雨、獨有、節堂及宗教大學淑德女學校教職員諸星、張別宴于大森海岸松淺樓上、餞桑門僧正歸國、主客痛飲、極盡眞情、宴將終、一詩成矣

殘雪村梅夜色清。送君東海故人情。酒盡歌休燈影寂。春潮也作別離聲。

◇馬關途上與櫻木龍瑞君

長日車窓客意閑。藝山防水半眠間。無端驛裡歡聲湧。林立檣帆是馬關。

◇訪福岡西方寺

來拜西方寺。堪歡心地開。聲聲稱佛裡。悉上紫金臺。

◇乙卯八月飯田講習會講後有作

湖海與山嶽。清風有所窮。胸間書萬帙。凉味傲王公。

◇西遊偶吟

村酒醉詩衲。晚秋老美人。杯中空與色。渾是大千塵。

其三

滿漢興亡夢一場。金人世閱幾桑滄。莫嫌貧院香華薄。尙是東瀛皷腹郷。

◇題菅笛（連環五首）

菅笛梶寶順上人法嗣、菅水勝道上座遺稿之名也

菅笛聲々轉易悲。荷風荻露憶君時。斷腸又說當年事。縷々香煙繞翠帷。

縷々香煙繞翠帷。誦經只合熄愁思。寶蓮上品人成果。殤折示津我導師。

殤折示津我導師。遺編拂涙幾回披。暮雲蕭寂江邊寺。唧々草蟲雨後滋。

唧々草蟲雨後滋。嘆嗟嚴父鬢毛衰。半生教養辛酸業。三尺新墳一卷詩。

三尺新墳一卷詩。殘紅無主滿蹊籬。今秋別有傷心切。菅笛聲々轉易悲。（大正五年）

◇大正六丁己試筆

寒寺校經不厭貧。東風四十六年春。一誠護法有心血。獨對梅花氣益振。

◇題芝中學卒業帖幷校旗

粲然豈啻自身誇。時散芬芳護國家。滿校春風旗影動。竿頭揭出日本花。

◇與櫻井生卒宗敎大學

春花秋月苦錐鑽。今日堪欣戴桂冠。報國扶宗君勿失。鎭西男子有忠肝。

◇攀植村壹國手玉礎

一隊探勝氣勢揚。不關山雨谷風狂。鬢班又伍舞雲旅。名敎之中樂地長。

◇遊鹿野山步植村國手高韻

翠嵐綠雨薄衣揚。山寺登攀吟欲狂。九十九溪如走浪。環洋遠望却平長。

◇贈小林正盛僧正爲眞言新義大本山長谷寺事務總長

金紫不嫌執寺綱。普門示現從浪滄。拂衣洗鉢自由處。長谷山頭萬斛涼。

◇謝馬關酉谷寺照眞、惠贈故文眞和上遺品赤間硯　（大正四年）

憂宗論策箇中生。紫石猶needs護法誠。遺愛磨來秋夕淚。先筆唱無量壽名。

◇大正五年九月祝戶松賢臺懸弧慶事

團欒慶宴恰秋晴。唯見祥光壁障生。松籟當門傳喜處。呱々高起興家聲。

◇次懿堂學長瑤韻

報國扶宗幾苦辛。毅然豪骨見天眞。十年心血鎮西溢。成育才俊千百人。

◇入深也馬溪

危巖嶮𡾊幾長程。神削鬼鑱難可名。山水促人歸不得。更尋深也馬溪行。

◇羅漢寺

同攀百尺翠微危。一士一僧若舊知。風雨滿天羅漢寺。唯誇健脚憶含師。

◇松園僧正大祥忌賦呈心法寺在禪上人

大祥香火素秋還。人去更知事業艱。最悅松園遺翠在。淸蔭留得護緣山。

◇沼津講習會席上偶作

砂白松青結講盟。殘炎不動晚風生。烟濤雲浪掀坤軸。八萬四千妙法聲。

◇賀芝中學卒業生入高等學校

既上登龍第一門。平生力學見深根。危巖急瀑天關遠。奮躍勿忘君父恩。

◇覺譽曉林淸新居士下炬

二十三年辛又酸。覺來一夢眼中寬。心身脫落淸凉地。八月曉林風露寒。

◇謝本誓寺實英上人贈西藏鑄像三首

其一

俗事紛々轉失眞。梵經蕃籍架生塵。相傳靈像藏深意。醒覺學窓懶惰身。

其二

西蕃何寺百年傳。四八端嚴妙相圓。半匣詩書狼藉上。奉安供得露紅研。

誘掖群盲上寶蓮。雄論卓説積成篇。大慈攝取靈山壽。永熄戲言後與前。

（大正八年）

◇和笠庵翠山兩詞宗詩韻却寄

節高笑斫柴。門徑雪深埋。風月隨心好。琴書情豈乖。浮鷗少俗友。閑鶴一詩懷。吟歩梅花早。淸香處々皆。

◇歳晩寄川口生、君精攻刀劍、時專究幕末刀工水心子之事、吾寺有此名工之墓

確説精論定是非。水心身後劍生暉。欽君胸裡藏干鏌。椽筆縱横紫電飛。

歳月匆忙夢裡遷。回頭明日是新年。高人不管世塵俗。半夜霜風把劍研。

◇山上氏香偈

貞淑溫容猶在眸。夢囘十有七年秋。上堂今曉以何薦。殘月淸風萩露迷。

◇贈袈裟爲芝中加行生

芝峯月花幾研攻。宗戒行圓果見功。粗服贈君々勿笑。鼠袈破衲大師風。

◇大正九年十二月二日大正大學校舍上棟式香語

正道大慈拔苦窮。佛心現處事何空。鴨臺秋月春風裡。建立常然濟世功。

◇送三界智長老跋阪（ワッポー）比丘之暹羅

豈説前程行路難。飄然杯渡海天寛。曇華祇樹何時會。吹袂濤風瘦影寒。

白雲滿衲兩頭陀。斷結不要別淚多。日暮港邊寒浪外。落暉笑指是暹羅。

◇弔鈴木豐善師

人去香臺轉寂寥。空庭枯葉朔風飄。窮冬客裡傷心事。冷雨凍雲新墓標。

（大正九年）

◇寄上條克己氏

痴慢貪瞋五十年。猶歡稱佛繫親緣。今朝紅旭輝殘雪。白道一條慈照圓。

◇悼安西覺順師遷化

◇題瓊浦大音寺

甞伏魔軍寰海淸。傳燈赫奕攝群生。崎陽第一風光寺。的是鎭西護國城。

◇偶作

波光如鏡泊千船。珠玉滿山夜燦然。時有海風梵聲曲。大音樓上未成眠。

◇發崎陽有作

崎陽曉發動離情。肥水筑山幾路程。白雨黑風三百里。長蛇車列吐雲行。

◇福岡佛敎講習會了歸京、寄同地諸老宿及大學敎授諸博士。

慚懼經論腹笥空。偏歡師友輓推隆。歸來都府煙塵裡。猶夢玄洋濤勢雄。

◇秋意

世事從來笑拙謀。誦經不管歲華流。下堂今曉袈裟冷。初覺僧家也有秋。

(大正六年)

◇大正戊午元旦應制

紅旭東瀛出。萬松海霧橫。曉風洋上到。與國有新聲。

◇大正戊午一月讀維摩經

屍山血海慘刀兵。世界病惱瞋毒生。誰倩維摩神醫手。如雷一默致昌平。

(大正七年)

◇櫻田烈士六十年墓前法要香語

鐵窓殉節笑成仁。積雪血洒報國振。今日昭明恩澤遍。堯天舜日墓門春。

◇芝岳團追弔會香語

講堂會衆弔先人。世事觀來夢歟眞。一抹香煙斷續裡。薰風五月涙痕新。

◇和小林雨峯見寄詩韻

風獵館庭葉紛飛。笑見白雲追雨歸。北馬南船秋老處。詩扃堆玉滿三衣。

◇步林歸堂三河行化之連環詩韻却寄

爲法酸辛山又川。回天氣節魯仲連。犬羊懾伏獅威下。誘掖群盲上寶蓮。

◇賀原田靈道君新婚

瓊莚華燭會佳賓。災後特歡瑞氣新。清豔水仙寒菊節。交枝先占復興春。（大正十二年）

◇迎大正甲子春

霜風雪氣悉鮮新。震後喜迎甲子春。五十三年清福足。國恩更荷佛恩淳。

◇開宗記念偶成贈出淵豐俊氏

菲々春雪黑衣斑。亦抱深憂上祖山。滿殿綺羅歌舞外。誰揚遺德滿時艱。

祖道由來重素誠。兒孫底事徒誇榮。春風人醉金緋外。不似廟前松柏貞。

◇謝井上胤文君贈其著『憧之里』蓋記同君嚴考之德、論孝道也、胤文君篤信基督教而説孝莫不至、其人可懷、詩用卷頭嚴考作五絶梅花之韻

和氣高風冠士林。名門累世植善深。佛耶儒敎東西學。寸冊收來大寶箴。溫厚如玉最詞林。斯父斯兒感更深。一穗秋燈垂淚讀。孝詮字字是千金。

◇淺草傳法院、江浙天童七塔、高僧二十八位、歡迎會席上作

江浙妙禪攝化昌。應請浮海事津梁。清風金錫慈悲韻。零露紫袈戒定香。呪水雨華茗谷畔。鳴鐘天樂墨江傍。嚴然二十八龍象。列宿聚奎照道場。

◇和旭聰國手瑤韻

其一

詩福仙居豈不平。倪黄懸得玉樓清。秋來何用吟行苦。四壁溪泉坐聽聲。

其二

書閣新成畫亦新。遠巒近樹自相親。美君詩卷仙爐外。烟嵐咫尺屬高人。

◇三縁山靈殿芝中學追悼會香語二首

其一

競技場裡有雷名。神足飛過何處行。十萬億邦今躍去。脚痕現出寶蓮英。

鎮西自有鎮西風。薰化一時教界雄。高臥廿年終不起。常山梅雪講臺空。

◇大正十年孟春二十三日高崎修養會講後次碩果、止舟、蜻洲三賢詩韻、

身是白雲任去留。講經來喜直心修。寒楳老栢長松寺。滿目青山古道悠。

◇大正十年首夏講習會席上作

春盡乘閑入上城。最歡求道衆賢誠。講經罷處青嵐發。滿目巒峯重翠淸。

◇日鮮人會合共濟會席上

瑞氣祥雲萬國春。日鮮況是弟兄親。滿堂和氣欣如海。現出人間極樂眞。

（大正十年）

◇三枝樹夫人小祥忌獻香偈

半卷壽經薦寶蓮。玉容髣髴水沈煙。暮雲密々蕭々雨。綠樹愁新亦一年。

◇大正十一年十一月、璽書相傳後、示倉島大音上人、

芝嶽鶴臺幾苦辛。多年講學勞精神。相傳徹底無餘事。渾在大慈六字眞。

◇雲晴院地藏尊開眼偈

六道能化。廣濟群生。金錫迷覺。寶珠信淸。淨願旣固。靈像方成。利益千載。長護法城。

（大正十一年）

◇大正十二年八月塔峯阿彌陀寺偶作

碧溪翠嶂古佛家。登高自覺發眞知。長松深處人如在。幽鳥啣華巖上飛。

◇九月一日震災後有作

江東災火燬無遺。幾萬喪妻亦哭兒。止說寒僧亡此苦。燒書卷萬若妻兒。

◇和小林雨峰僧正詩韻

精神寧是委寒灰。災後春光柳色催。最悅高僧思意切。一詩幾捷壯心來。

◇讀佛國品

講經半夜法堂秋。如是月明如是樓。螺髻梵王今在坐。華池寶閣豈須求。

四國東西豈別人。白毫光裡轉相親。春宵禪夜歡如海。渾是密嚴淨土身。

◇趣味講演十週年祝賀會席上卽事

從南枝法苑初伸。英氣旣見自絕倫。奇骨稜々風雨夜。仙姿凛々風雪晨。横斜現出人情妙。氷玉映來佛意眞。辛苦十年花馥郁。淸香占得四方春。

◇寄佐藤靈山師賀壽碑竣功

濟世苦辛幾十年。扶宗護法大功全。壽碑新就非徒爾。歯德共高鶴阜天。

◇二月一日緣山講經終了謝恩會席上有作

破裘敝葛四重年。慚愧講經多謬愆。環翠龍藏宗古道。布金香界集群賢。啞羊唯倚師尊杖。駑馬特憑檀信鞭。三帙講經春雪霽。芝峰普被大光鮮。

◇和竹淸居士詩韻

新晴天色碧琉璃。春淺寺留白玉枝。講拙慙多窮消雀。詩高調入上林鸝。金堂日照慈悲德。紺苑雪巷纒縛疑。談笑何唯芝岳地。長期俱會道場時。

◇贈安藤嶺丸師囘疾

其一

學得維摩現病憂。避寒臥蓐亦風流。百花祭近囘陽速。昆谷更看氣勢遒。

其二

藥爐窓外幾枝梅。一雨一風倍玉瑰。痼疾瘳時當不遠。春光旣動墨陀隈。

◇國士館安部秀助氏四十九日、追弔會席上有作、

淵博學風自絕倫。雄文長策資經綸。梅花雪後東風冷。空把遺編哭故人。

又

人心世道岌危哉。難局喪君亦可哀。國士館林埋國士。淸芬百載墓前梅。

◇哭印度國士冒須(ボース)夫人

契深日印至情圓。大志常存琴瑟歡。二十八年貞烈蹟。東風吹夢白梅寒。

又

藍毘春閑現威神。華雨香風天地新。从是萬生咸復

日能居士、早稻田大學疾走選手

其二

一遊是夢去無還。芝岳秋深淚自潸。二十四年南海忌。空留明月照人寰。

釋禪慧將遊南洋、志未就而夭、悲夫、

◇迎法隆寺定胤和上皈朝二首

定胤和上、法相宗管長、深通唯識教義、今夏應招臨支那盧山佛教大會、途次名邑大都、講述三性八識要旨、人莫不嘆服焉、蓋支那佛學者方今專研唯識、所以投機應緣也、惡詩故多用相宗典語、和上我道重信教上人親友、戒律最嚴、受一世歸仰

金錫破禹域臻。盧山復見遠公眞。三性明月西湖夜。八識澄泉東嶽晨。淨戒香薰千界覆。大悲華散一家春。頌功不盡無詩筆。黃菊迎君滌旅塵。

和平功業晉纓紳。自有高僧贊經綸。兩國雲晴遍計執。一誠月皓實性輪。講論燕市揚文化。禮塔金陵資友隣。楓錦滿山迎大士。燦然照映紫衣身。

◇寄桑原隨旭氏

災後咸談家國難。江湖豈莫蟄龍蟠。要知撥亂反正策。試入起雲軒裡看。

（大正十三年）

◇大正十四年乙丑元旦

宣威善政自超倫。彫像長傳惠教淳。顯晦有時金體隱。去來應現白毫伸。萬千門戶慈雲仰。百二都城法雨臻。崇信從今延不斷。光明遍照福斯民。

◇乙丑元旦

五十四回曆又新。春光到我水雲身。老松古栢環庵處。瑞靄滿山屬道人。

◇山色連天

坤輿群嶽各爭雄。雲氣雪光接大空。空相一圓無私覆。萬春齊仰古葱葱。

◇新年偶成

幽林獨臥病生安。數卷古經一鉢餐。此間貧衲新年事。曉把往生禮讚看。

◇恭和密林尊者、題四國驪會照相圖玉韻

◇偶成

大千可入。一枝自春。花晨月夕。逸無悠眞。

（大正十四年）

◇大正丙寅元旦

王道悠久日月明。恩波仁澤至今宏。源泉深遠三千歲。五十鈴河碧水清。

同

蘭若方成歲亦新。佛恩五十五回春。上堂打皷天猶昧。梅彩燈前破衲身。

◇勅題

旭照江山歲始更。霜華尚見氣力盈。日新不熄乾坤意。萬古長流河水淸。

◇寄題國士館

斷眠錐股幾酸辛。此日業成意氣新。滿苑錦楓存赤志。當門嶽雪見淸純。翔天雛鳳張文翅。跳海稚龍起玉鱗。從是三千世界路。休忘國士古精神。

◇偶成

三歲芝峯共苦辛。霜風留別恨何頻。偏期雲水悠遊足。玄海月明訪主人。

◇淸浦子爵母堂西邁香偈

貞慈純信世推賢。九十二年母德全。國老元勳孝子在。溫容笑上紫金蓮。

◇寄飯塚米雨氏

胸中萬仞山。一隻有心眼。禪後竹窓明。楞嚴古宋版。

◇將拒絕執綱就任有作

凌空千尺絕塵埃。積翠長吹天籟來。獨立亭々存本色。莫將山樹作盆栽。

◇祝鈴木靈眞僧正晋山

華幢雲蓋樂聲高。滿袂金風錦紫袍。教化從今亘百歲。廣開淨土樹星旄。

◇祝山田鐵郎氏華燭盛典

最歡君子配佳人。瑞氣滿堂別占春。貴冑仙娥蘭蕙質。名門俊傑琳琅身。玉樓宴樂松琴合。金屋華粧嶽雪新。從是赤繩維百歲。和鳴鸞鳳永彬彬。

◇小川銀次郎教授謝恩會席上次藤井上人玉

活。花紅柳綠百千春。

◇賀原田晶堂氏結婚

十年報國志雄哉。此夕婚成喜色催。新緣滿窓新屋好。名花紅白交枝開。

◇野田家三回忌辰賦之

流水行雲三閱年。又觀白露思悽然。上堂此日燒香處。一脈幽薰通寶蓮。

◇賀長岡氏還曆

黃菊紅楓高士家。秋來特覺瑞光多。主人吟處長杉在。稷々銀濤頌壽歌。

◇山口氏葬儀香語

篤學力行約大名。奈何宿業奪斯生。打開盤屈人間路。大道直通圓寂城。

◇臨國士館先亡諸氏追悼會有作

濟民憂國赤誠同。十歲經營學館崇。想見先賢辛苦跡。滿林秋寂錦楓紅。

◇示加行僧

求法酸辛盡至誠。霜林樓動念經聲。勿忘華頂廟前道。幾度祖鞋印雪行。

◇大鹿勸學一周忌香語

性相無人懷大賢。高風如在對遺編。牌前念佛秋蕭寂。紅菊黃楓亦一年。

◇澤村宗之助丈一週忌香語

忽卒一年風物遷。紫紅依舊易凄然。梵香髣髴音容在。寂々東風落花天。

◇隱岐雜詩三首（大正十四年八月六日於隱岐國海士村　後鳥羽天皇御火葬塚、）

潛龍不復跡茫々。濤影瀾光遺恨長。隱岐洋上一痕月。嘗照勝田宮裡廟。

◇大正十四年八月六日　隱岐國於黑木村　後醍醐天皇御行在所跡、

幾回讀史憤何禁。昭世拜啼遺蹟陰。三十六灣千萬浪。猶留嗚咽到如今。

◇大正十四年八月七日歸途有作

一灣過去又一灣。山影波光巖石間。後島訪祠前島寺。涼風滿舸載眠還。

學德由來教界雄。登壇唱導一宗崇。三緣山裡春闌處。錦紫映輝萬朶紅。

◇題密林師惠贈四國驪會寫照且次韻

華日獨乾一屋人。白毫光裡轉相親。春宵禪話歡如海。渾是密嚴淨土身。

◇祝原澂信君唱導師勤修

濟世育英積德功。甲南隱棲令名隆。登壇唱導春方好。法施高颺楊柳風。

◇半田生葬儀香語

芝岳勵精期立功。英才底事一朝空。薰風吹送綿綿恨。十有八年短夢中。

◇函嶺雜詩

其一

十日山居絕萬緣。谿花折得奉金仙。白雲滿寺無人到。時聽曉鶯與夕蟬。

其二

十日山居忘是非。閑雲過處鳥高飛。半天禽沒靑巒在。獨立依然對夕暉。

其三

屛風山下古禪居。臥見白雲自在舒。睡裡不知山氣變。谿風飜盡讀殘書。

◇望湖臺

其一

四面翠屛玉鏡開。芙蓉倒晃影皚々。大觀最見絕勝處。函山第一望湖臺。

其二

行人過寺幾徘徊。時問像經國寶推。默笑不酬指前岳。函山第一望湖臺。

◇長建寺法嗣七回忌香語

花月七年夢裡過。追想當日感何多。獻香誦偈秋風靜。八德流通墨水波。

◇鈴木生下炬香語

剛毅嚴正有純誠。孝子順孫家集英。六十八年禪榻夢。薰風滿岳覺來情。

◇玉井文彥君一周忌香語

篤學研精期立功。一朝底事悉歸空。雞林去歲綿々

韻

三十春秋夢裡遷。德光磨月見團圓。勳功敎界長傳世。撫育材英幾歷年。眞性香高黃菊馥。赤誠色灼錦楓然。勿言師道今亡滅。明照館中坐寶蓮。

◇大鹿法主小祥忌香偈

性相無人憶大賢。高風如在對遺編。牌前念佛秋蕭寂。黃菊紅楓亦一年。

◇時事

幽境高樓會群賢。革新論熱氣衝天。國情宗態危如此。歌舞何時復綺莚。

同

縱橫逸氣結新盟。三月梅花雨後情。玉椀珠杯高興處。春寒增上寺鐘聲。

◇加藤憲政會總務追悼會香語

君國元勛一代雄。經天緯地樹臺功。獻香擧偈春光寂。滿岳松濤仰德風。

◇和田氏追弔會香語

五十五年忠直身。至誠一轍憶斯人。東風一夜乘雲去。留得蕭條寂寞春。

◇澤村訥子丈告別式香語

六十八年風月身。雄姿颯爽逐年新。東風吹夢去何處。空見墨江寂寞春。

◇送密林曼珠兩師歸南支

青龍鈴鐸絕無聞。誰克中興續秘文。北越觀深三密雪。南支學博四曼雲。護摩壇上天華落。灌頂場中異馥薰。金錫去時春恰好。櫻雲滿市送宏勳。

◇澤村宗之助丈三回忌香語

三年風月夢中過。紅白花開感特多。上殿誦經春寂寞。數聲幽鳥爲誰歌。

◇田中家法要香語

積善有慶一家昌。孝子順孫聲譽芳。十有七年存德澤。春風滿屋百花香。

◇祝召田寬定師唱導師勤修

萬朶櫻雲映紫衣。東風吹動導師旂。多年積德在今日。增上山頭振法威。

◇祝鈴木靈眞師唱導師勤修

苦熱如燬涼不通。萬人避暑事何窮。山僧此處無他策。聲々稱佛起淸風。

◇別府溫泉

翠綠三面一灣平。沸々靈泉隨處生。千百樓臺朝暮舶。可知別府別仙鄕。

波影泉香仙客鄕。靑巒起伏一灣明。要知別府風情美。浴後乘涼暮夜行。

◇大正大學特別講座修了式後示諸生

熱炎烘暑役身形。流汗苦修懺悔庭。金口眞詮君知不。過三千火必聞法。

◇弔孤蝶女史

平生斂慧惜芳姿。十有四年薄命悲。一夜山村無限恨。秋風孤蝶去何之。

◇次德林上人韻贈岡本貫瑩君

講學不嫌萬里程。不須兒女別離情。秋光波動靑雲水。爽氣日鮮巴里城。藝苑積攻支竺美。翰林博涉古今宏。自存一貫硏磨志。歸錫欲加教界瑩。

◇高田愼吾氏追悼會卽事

攻學篤行自卓然。拓開斯道世推賢。秋風寂寞人何去。唯餘經國濟民編。

不覓顯榮唯愛眞。革新社會有精神。白雲明月秋深處。多事國家思此人。

◇寄塚本善隆君

最喜壯遊馳大名。宗光顯赫北京城。秋風白露君歸日。祖德報來盡至誠。

◇悼本庄良敎君

辛苦育英二十年。不求顯達至誠堅。秋風有恨空嘆息。一炷心香伴暮煙。

◇謝中村辨康氏贈葡萄

琅玕累顆玉光殊。靈液無比甘露腴。供佛龕前燈映發。現來淨土帝靑珠。

◇芝岳同窓會席上偶作

盟交芝峯十幾年。東鴻西燕各隨緣。此宵送友又迎客。秋滿帝城蘭菊天。

◇善導大師繪詞傳序詩

仰則彌高鑽益堅。平明叙述祖風全。由來通俗終南

恨。分付緣山綠樹風。

◇長瀨鳳輔君葬儀下炬香語

美玉玲瓏仰德姿。經綸滿腹萬人師。鳳鳴忽止朝陽寂。國士館林風色悲。

◇寄川端信之師

狂將殘筆報青衿。這箇浪禪一片心。得失是非吾何顧。青鞋布襪自在吟。

◇原田玄徹氏歡迎會席上

扶宗護法約民安。十有七年幾苦辛。教育恩深文化業。慈悲德及和平因。楓華月白講經夜。椰樹風清禪座朝。歸錫笑看芝岳景。紅楓黃菊賀斯人。

（大正十五年、昭和元年）

◇悼福見淚草氏令閨

蘭質蕙心壽不長。雪晨埋玉轉斷腸。艸堂孤寂將何薦。一卷觀經半炷香。

◇和法隆寺法主定胤和尚詩韻

化洽春風俗與僧。銷融結縛固於氷。最歡華甲隆名剎。香象青獅任所來。

超然脫俗異群僧。行戒妙觀凝似氷。六十年來行化遍。夜光奕々照千乘。

◇泊神苑

細雨無聲滌市塵。淺深樹色綠陰新。清氣古石幽情裡。滿坐補陁會上人。

◇豐島組滿鮮弔魂視察團留別

千里弔魂幾古城。由來敎化盡忠誠。繞身新綠紫衣映。拂面薰風金錫鳴。船上誦經濤影靜。車中念佛翠光清。平安一路歸京日。顯赫大宗度群生。

◇支那書畫家四氏歡迎會席上偶作

四哲同舟訪日東。畫書三昧玅何窮。隨緣揮洒百千幅。遺得善隣珠玉豐。

蘭菊竹梅會四賢。入神書畫各隨緣。墨江一夜陽關曲。想得西湖花月天。

◇及川智雄君追悼會香語

儒佛神耶自在通。超然逸氣道何窮。蘭盆今日弔君處。滿坐清凉一味風。

◇華頂山卽事

◇贈芝中卒業生加行成滿記念

芝岳鴨臺幾苦辛。相傳宗戒見精神。贈君微物請休笑。破衲鼠袈乃祖眞。

◇誕生寺漆間德定僧正歡迎會席上有作

八音四辨度群生。飛錫緣山化益宏。此夜迎君歡不盡。秋高墨水舊鷗盟。

◇新年 （昭和二年）

滿目祥光入初春。一天四海大平晨。紅暾照出乾坤廓。千岳萬山花悉新。

祥光仰得無量覺。和氣現來淨土人。念佛聲中年茲改。東山翠色特清新。

◇賀本多淨嚴叙正僧正

濟人仁俠挺斯身。護法愛山幾苦辛。豈啻江東盛大賀。一宗悉喜頌榮春。

◇賀加藤精神僧正勤修御修法大阿闍梨

鎭國瑜伽萬歲垂。傳燈榮職直盛儀。加持袞冕眞名滿。導御紫緋令譽馳。燔火曉紅祥鳳舞。鈴音夕動瑞龍隨。閼伽水結何辭昔。凜烈一誠護帝基。

◇北越訪雷斧老阿闍梨途上作

推讓求賢霽月胸。桃園友義結三宗。恢宏敎學純誠在。風雪越山起臥龍。

◇高橋生下炬香語

酬德報恩盡至誠。法宴今日會群英。獻香擧偈春光麗。一枝白梅世外淸。

◇哀悼九條武子夫人

貞純婉淑母儀全。四十一年何薄緣。香雪半宵消去處。空餘寒月影蕭然。

◇送小田原生歸鄉

螢雪鴨臺幾覓眞。講餘濟世幾苦辛。故鄉春色君歸日。領得湘南景物新。

◇祝田子添田守屋松田四氏代議士當選

議場新見四賢名。蘭菊竹梅各競淸。濟世利民無政黨。光風霽月大人情。

何論政友與民政。欲濟飢寒社會病。春色滿堂招四賢。黨情超越心如鏡。

意。顯赫宗光至百年。

精攻刻苦徹源泉。史筆不嫌通俗扁。普益萬機潤塵界。開來淨土幾金蓮。

◇次山本農相詩韻

滿畝黃雲映夕紅。勸農裕國政何空。經綸別見閑天地。收得詩囊美玉豐。

翠光藍影落欄前。高閣吟哦客欲僊。廊廟不忘山水趣。秋橫詩興自清鮮。

◇悼天臺座主

護法復興亘刹衰。教門等歎化西移。四明寂寞秋將盡。起續遺風果見誰。

◇贈祥雲伊東兩氏

艨艟歷海礮雷鳴。方外又蒙倍覽榮。歸路獻香諸嶽殿。別飄大旆護皇城。

◇贈伊藤道海師

白字淡風示赤心。紫雲臺拍有知音。宣揚乃祖禪風外。自有經營絕古今。

◇比叡山雜詩

僧房夜坐月如銀。談密論禪絕世塵。古柏老杉風息處。猿啼切々隔谿頻。

霜氣滿溪片月明。哀猿斷續夜三更。靈山千歲滄桑裡。幾個先賢聽此聲。

靈峰寂々月光淒。寒藹流霜所々溪。大哲古賢遙去後。哀猿唯依舊時啼。

◇坂本芙蓉園即事

溪莊園樹客來稀。雨後林泉落葉滋。薄暮閑園蕭寂裡。山茶花白映寶池。

◇送川北生歸米國

又突霜風向米洲。滿船明月思悠々。經綸自是男兒事。不識對誰說客愁。

◇衆議院議長官舍川上孤山師招宴席上有作

玉樓一夜會群賢。方是歲華欲盡天。三十餘年神交在。霜風深處發金蓮。

◇盛夏偶作

炎雲苦熱冷無通。避暑萬人百事窮。此處山僧存別策。聲々念佛起淸風。

浮世滔々追利名。教門未脱闘諍盛。秋深芝嶽快心事。棺底清風稱佛聲。

半生敎績世推賢。遁俗有時不辱先。五十五年殘夢覺。秋光滿月白雲天。

◇函山雜詩

林岳蕭々既晩秋。紅蘿黃葉易牽愁。今宵獨到僧房宿。月照函山古道場。

◇前田聽瑞君歸朝歡迎會席上

滿市霜風歲欲行。迎夜一夜盡心情。伯林明月龍城水。主客陶然笑談盛。

◇同

霜風雪氣托孤身。甲是乙非孰覓眞。人事多忙年欲盡。唯餘磊々一精神。

◇贈袈裟黑田成勝君

芝嶽赤門幾苦攻。相傳兩脈果全功。贈君微物君休笑。破衲粗衣乃祖風。

◇戊辰歲晩

塵緣業界托孤身。甲是乙非孰覓眞。滿面霜風年欲盡。唯餘磊々古精神。（昭和三年）

◇元旦試筆

雪氣霜風亦自新。寒僧迎得大平春。上堂打鼓天猶暗。梅影龕前破衲身。

◇賀山田氏嗣子誕辰

繞寺瑞光壽福伸。更歡盛會祝佳辰。滿堂賓客春如海。萬歲聲中瑞氣新。

◇悼坂田良弘氏長女貞子之死

茫々業海哭無情。婉順可憐薄命生。淅瀝霜風春淺夜。焚香唯唱願王名。

貞純敏慧一家歡。底事業風折玉蘭。半卷觀經和涙讀。凄涼斜月落梅寒。

◇梅窓院亡息香語

呱々求乳一家歡。底事夭殤追映瀾。遺恨青山蕭寂路。香煙斷續北風寒。

◇贈塚越丘次郎氏

達識高材一世雄。遺編數讀憶高風。經綸滿腹餘陰

◇送村上妙淸尼之錫蘭

纖弱別見護法心。南天聖蹟入雲尋。客途萬里山川話。笑對故鄉春色深。

◇玉置金八大人饗宴席上有作

奇葯妙方全譽囂。凌雪社運謙無驕。富榮元是精勤德。祥福由來積善標。歌舞極歡千客會。月花盡與萬金宵。滿堂和氣春如海。綺宴洋々慶賀謠。

◇賀杉山大運師勤修唱導師

三緣山上法旂揚。爛漫花明紫錦裝。唱導有榮春日麗。恢宏祖德炫宗光。

◇賀阿川貫達師勤修唱導師

多年學海有才名。唱導今瞻化益盛。芝岳春深花似雪。堂々祖德赫揭旌。

◇送林古溪之豫州

東風吹弱柳。別路隔山川。黃鳥出幽谷。落紅對舭船。渭城三重曲。湘水數聲絃。詩卷珠璣集。琴書拱璧旋。錦繡紫毫拂。龍虵鉞硯硏。姓名元藉甚。天下有誰捐。

◇書井上三次郎氏先考詩集後

講學勤王全晚年。杏林國士百詩編。昭代如今春色滿。幾吟家集落紅前。

積善累功永歷年。孝孫果見纂遺編。詩文三百溫醇筆。滿面春風玉檻前。

◇送禮美博士歸佛蘭西

義林鴻業布英芬。唯識莊嚴發祕文。綠樹薰風皈路泰。東西自仰不窮勳。

◇讀富田阿闍梨隻脚切斷記

休說災殃宿業存。瑜伽密意絕言論。布施隻脚曼荼會。威德現來六足尊。

大士願行豈偶然。六波羅密各隨緣。少林斷臂先賢在。施脚昭時拓福田。

◇函嶺偶占

冷然羽化翠巒間。雲氣滿衣霧撲顏。湖伯山靈笑迎我。淸風八月古函關。

◇月窓院信道和尚、有生葬之儀、亦是覺醒流俗善巧方便也、乃賦兩偈、表微忱

◇賀頌

多摩大昌寺杉浦演順上人、天資俊邁忠誠、當事化導莫懈、每扶翼宗運、與竭于國家宗門、又克致力於寺門經營、鍾檀信之歸仰、酸辛多年、建造大殿及書院、拮構宏麗、多摩勝景更加一新偉觀、其裨補世道人心之切豈尠少邪、宗光發揚之勳亦大矣、此日有慶讃供養之盛儀、寔不禁隨喜、便來獻香表喜、且呈賀頌一首、以布衷忱

精舍新成法鏡明。畫梁寶柱盡經營。多摩靈刹淸風滿。建立常然度衆生。

◇贈袈裟小俣眞誠君

講法誦經攝萬機　奉被常現大人威。紳纓已上濟世策。遺在福田忍辱衣。

◇賀頌竝序

廣船松谷君、傳承老師廣悅上人之衣鉢、新董寧樂淨國精舍、上人扶宗護法、齒德既高、淸譽充于一宗、君今以縱横才華與俊敏材、能茲續法統、謂紹隆之美、可期而待也、貧道與君因緣非淺、衷情欣嬉寔不能禁、卽客中草蕪詩一首、以表賀、希信行雙勵、二利莫懈、大輝前秀　是爲序

古都秋滿碧天澄。喜見俊材續法燈。湖海十年龍蟄伏。雲霞一齊鳳飛昇。丹楓排錦盛儀映。黃菊散香賀頌應。淨國山頭淸福足。和風麗日護眞乘。

◇寄飯堂上人

現疾十旬學古賢。藥爐茗椀好隨緣。白雲明月毘耶室。獨有高僧每住禪。

讀書常會聖兼賢。臥病悠々絕世緣。湯葯退時殘菊在。淸香一脈伴安禪。

山居不羨竹林賢。牀褥善權斷俗緣。冬日照霜年盡處。唯容寒雀訪晨禪。

園寺長松映碧甎。近門煙水泊虛船。初冬沼水風光好。相訪何時又語玄。

辛苦病餘洒硯甎。學洋欲泛大慈船。戒宗兩脈深宏義。研覈藉君拓妙玄。

德。傳得子孫福莫窮。

◇賀巢鴨專修院落慶

精舍方成薦故人。香雲華海祖風新。上堂誦偈春光麗。建立常然轉法輪。

◇今井氏老母香偈

七十四年母德全。貞順如玉事誠虔。東風吹夢人何去。寂寞春寒月獨圓。

◇祝五十嵐老上人勤修唱導師

萬朶香雲映紫衣。東風吹動唱導旂。多年積德功勳滿。增上山頭現法威。

◇寄題國士館

洋々活氣一天清。萬朶櫻雲滿帝城。國士館中春似海。開來爛漫國華精。

◇鶴岡氏饗宴席上

論詩談畫會佳賓。滿座幽情絕世塵。花落鳥啼春盡處。一家淸福屬斯人。

◇湖畔卽事

雲密風斜雨又晴。長虹明滅大湖橫。千重波白連峯暗。煙柳青々拂岸淸。

◇與勝田生

龍谷鹿溪幾苦辛。度生濟生自忘身。與君欲仰東山頂。明照光圓八百春。

◇贈笠木良明君

摩詰后身攝衆機。刷新道俗氣風微。落英似惜大人去。片々飛芳貼客衣。

◇呈華頂老門主

大慈善巧設眞詮。湯藥乳糜攝化緣。現疾綠雲華頂嶺。薰風榻下現金蓮。

誰將法藥濟群生。邪見貪瞋到處盛。世界疾時菩薩疾。拜瞻丈室臥床宏。

◇東洋大學新入生歡迎會席上有作

湊合東西意氣隆。愛眞護國學堂崇。鷄聲臺上薰風滿。迎得俊材七百雄。

◇小坪正覺寺青年聯盟夏安居卽事

湘南新見別行林。三祖遺芳仰德音。唱佛止時靈氣動。大濤如鼓覺禪心。

願力慈悲谷樣深。欲匡世道與人心。縱橫辨舌狻猊吼。絕妙詩偈鳳鸞音。般若影明臺上鏡。瑜珈薰徹海南沈。晉山有慶君知不。教俗咸登七寶岑。

瑞雲淑。滿山門氣須覺禎祥有德源。沐雨櫛風高麗地。晨霜夜雪筑肥村。振鈴出寺星千點。洗鉢上堂月一痕。濟世度生僧俗識。推尊永記扶宗恩。

勝見眞詮委濫吹。偏欣碩德濟傾危。栴檀林馥無荊棘。乳海波平絕穢屍。登坐既張學則緩。上堂欲補教綱虧。密門面目從今革。颺扇祖風答盛時。

◇贈桑原隨旭氏

凾山一夜凶音傳。苔石老松六十年。遺恨至今湍水咽。貞風依舊巨巖堅。人尊惠澤留碑碣。世頌德功設法莚。勝景嘗霑恩露地。誦經立盡晚秋天。

◇賀原田三千夫氏華燭盛典

天選嬋娟配俊良。前程多幸樂洋々。梅花紅白交枝發。淸馥先春見瑞祥。

◇山口教授喪愛兒作國歌十首、一讀悵然賦二絕、

茫々塵世恨何多。血淚凝珠十首歌。後苑梅開絃誦絕。向誰韶景剪綺羅。

掌中珠碎隔幽明。堪見慈親淚萬行。陰慘僧房殘雪夜。焚香唯唱願王名。

◇悼相馬文雄君客死于南米

魂隨春浪喚無還。遺恨空籠南米山。壯圖雄心留底事。梅花寒月照塵寰。

◇送堀定正君米國

劔執振慧伏魔軍。力學躬行別見君。雄志上船春滿海。東風吹浪映青雲。

◇贈大谷梅庵賀趣味講演十週年、并題中華僧普陀志圓所描梅花

橫從南枝法苑初伸。英氣既見自絕倫。奇骨稜々風雨夜。仙姿凜々雪霜晨。橫斜映出人情妙。氷玉現來佛意眞。艱苦十年花馥郁。淸香占得四方春。

◇宿天台比叡山

雪峰寂々月光凄。寒藹流霜所々溪。古哲大賢空去

散楓園裡碧苔皸。殘菊岸頭落葉船。暖日和風南沼寺。閑窓詩思更幽玄。

（昭和四年）

◇賀天上敎寺皆應正僧正勤修緣山唱導師

齒德倶高遍令聞、北邊法將世推君。登壇唱導天華落。緋錦映霞現紫雲。

扶宗護法幾多年。今日光榮豈偶然。天樂雨華增上寺。闡揚祖德發金蓮。

◇次長谷寺雨峯闍梨詩韻賀境野黃洋薦 文學博士

多年學界獨荷荊。雄辯高論護法城。博士何加涓滴大。堂々哲海本來名。

失意門前茂柴荊。乘時訪客若都城。先生冷眼無榮辱。笑受翰林學士名。

◇贈袈裟于栗本俊道君

晨禪夕講攝群機。披着常在大士威、濟世豈單冠冕業。功歸福德淨田衣。

◇鎌倉光明寺偶占

湘南名刹古檀林。拂暑濤聲伴梵音。夜半講終天似水。當門明月照禪心。

◇寄森田善因氏

山居十日絶塵緣。折得野花奉佛前。滿地白雲無拂處。唯聞曉鳥與夕蟬。

◇金子常全師像讃

護法扶宗盡赤誠。眞標高節至今淸。化風縝密精金美。心事公正玉鏡明。晦德陰功門有後。居謙積善寺餘榮。園松株々存遺愛。重翠鼓濤覆梵城。

◇昭和五年十一月十二日、恭次雨峰大僧正感懷七律五首瑤韻、謹賀瑞世於長谷總本山

名山祝篆豈無因。阿字心觀月布銀。芬馥尸羅香孰匹。澄淸三昧淨超倫。紅楓織錦莊獅坐。黃菊敷金待至眞。三十有三靈現說。人天今仰紫衣身。

紅樹絳林谷欲然。景光自似喜奇緣、溪聲和唄群龍象。松籟傳歡會俊賢。續燄法燈快運業。聯芳學苑淨泉禪。秋晴秀麗豐山寺。現出密嚴淨土天。

◇灌佛偈

藍毘降聖幾千秋。依舊春風滿五洲。甘露水香花爛漫。普天盡地悉無憂。

◇賀岩野詞兄積痾漸退

臥病九旬絶俗緣。世情人事付雲烟。清癯住定眞羅漢。避穀養精自洞仙。花影滿窓排葯石。鳥聲通室報快痊。離床大喝維摩詰。占斷香霞翠靄天。

◇稻岡大尉墓碑有感

鵬翼排雲萬仞天。功名空碎恨綿々。唯留報國犧牲骨。義烈凛然百世傳。

◇寄大石君

放浪江湖幾苦辛。高才大器孰知眞。却將縛虎擒龍手。薦客金龍鳳脯珍。

◇恭攀常盤榴邱博士瑤礎

春時傳厄幾銷魂。英氣今歡倍舊存。名哲推功揚美績。俊才頌德仰師恩。菊薰清節祥盈屋。楓織繡文瑞集門。欣慶寧留華甲壽。雄篇續出照乾坤。

鐵石心腸氷玉魂。衝天意氣病餘存。精攻史蹟資奎運。闡發眞詮報佛恩。花月五回振旦地。風霜卅歲杏壇門。江湖頌悳爭無故。偉業籠乾又蓋坤。

◇寄兼井恭一氏

萬里波濤落日邊。椰陰恰好閲書篇。天空海濶南洋島。日本男兒意氣全。

◇贈中山長政氏

俗情險涉千層浪。時事危登百尺竿。頼有西牕書萬架。暖風晴日閉門看。

◇善導大師遠忌賛詠錄其一

旌旗滿目旅程難。禹域何時鎭濁瀾。結衆欲探高祖跡。烟塵不見古長安。

其二

妙術成金轉瓦甎。敎人成上寶華船。遺文九卷君看取。偏說稱名不語玄。

◇贈寫眞荒川辨達上人

痴慢貪瞋墮獄身。錦衣堪笑示何人。雨華天樂東山下。偏喜佛名上枯脣。

◇去洛

後。哀猿唯作舊時啼。

◇百萬遍法主說音大僧正像贊

瓊玉慈容鐵石心。一生化導佛門箴。栴檀德樹薰遐邇。磐若明燈照古今。百嶺留芳榮法苑。諏湖貽惠福禪林。高風歷刧長無朽。遺影敎人自正襟。

◇送高田隆光氏滿洲

千里弔魂幾古城。由來敎化盡忠誠。繞身新綠紫衣映。拂面薰風金錫鳴。船上誦經濤影靜。車中念佛翠光淸。平安一路歸京日。顯赫大宗度萬生。

◇敬題常念寺餘光錄攀藤井上人玉礎

遺澤如春久煦溫。聯芳續燄法孫繁。十年編史彰功業。百世留傳報惠恩。蓮社齊崇師道渥。山門同仰孝風尊。可規澆末人心薄。卷裡宜觀大鑑存。

◇下郡山氏香偈

婉順貞淑托孤身。二十四年幾苦辛。一夢覺時春寂寞。梅花影冷照天眞。

◇澤村老夫人香語

六十五年風月淸。溫雅貞潔托斯生。湘南夢破梅花冷。波浪揚來實相聲。

◇歲晚

霜風雪氣送窮年。囊底不留半箇錢。唯喜佛名重大富。今朝旣算萬三千。

◇賀塚本善隆學士烏域壯遊

最喜壯遊馳大名。宗光顯赫北京城。秋風白露君歸日。祖德報來盡至誠。

◇寄上條克己氏　（昭和五年）

短髮加白六十春。唯餘念々佛名新。滿天霜氣殘星下。迎得昭和第六晨。

◇賀黑田成勝學士華燭盛典

天將淑媛配才良。瑞集家門福德長。瓊苑風和薰苣蕙。瑤池波靜宿鴛鴦。貞功欲倣休玲業。偉績須期一石光。恰好新春呈吉兆。梅花紅白交枝香。

◇成道會獻香偈

誰測世尊恩海深。天人龍思托慈陰。菩提華發三千歲。一點明星照古今。

◇寄高木藤太郎君

是非得失豈須論。氣魄尙盈乾與坤。雨後海棠春欲盡。落紅滿地弔英魂。

落紅滿地弔英魂。俠骨堪欣葬故園。蓋世雄才經國器。長留詩卷照來昆。

長留詩卷照來昆。亦見江湖思慕敦。傳事表忠誰最切。俊公遺姪義人存。

◇寄上野克巳君

半月療痾絕萬緣。殘紅嫩緣比間遷。痛疼苦熱好稱佛。蒲褥蒿牀又寶蓮。

臥病三句何恨長。不能世事得兼喪。蕭條蝸室半間榻。自悅別時勝道場。

◇寄三村清三郎氏

奇書寶玩積爲堆。中有主人藏大才。時事痛論驅鬼筆。世情憐見現蛇盃。傳神彭澤雛殘菊。遠韻孤山窓宿梅。迎歲先成憂國賦。新春齊後讀何回。

身隱紅塵萬丈堆。超凡鑑識貫三才。詩情任手珊瑚杖。禪悅隨心琥珀杯。淸福千竿榮古竹。高風一脈馥寒梅。新春喜讀仁人志。世道因斯見挽回。

◇昭和壬申孟春、丁洛東法林精舍讓譽上人二十有七回忌辰、現住良哉師、彫造上人眞像、設大法莚、以表報恩嘆德至情、隨喜何勝、輙作兩偈、恭捧龕前

恢弘既仰德行芳。二十七年恩澤長。眞像從今靈跡祐。三條法水百秋昌。

蓮門扶翼讃餘光。遺跡檀王舊道場。影像今成嚴似在。春風繞寺古梅香。

◇壬申孟春言志寄大木靈道師

六十一年無用氓。烟蓑雨笠托殘生。游魚水淺分齊粥。喜雀枝低伴唄聲。苦茗開爐亡酒累。寒棊當牖促詩情。僧房何厭風霜冷。自有春光別樣淸。

◇賀玉置源一郎君華燭盛典

春動祥光滿鳳幃。笙歌韻合瑞雲煇。交枝芳苑雙松茂。比翼晴空兩鶴飛。才德奉親連錦繡。貞順潤屋列珠璣。家門福樂天緣永。琴瑟相和頌國威。

◇次壬生雄舜僧正詩韻

東山如夢暮春街。曉色淡鎖鴨水涯。兩岸翠煙千樹柳。猶留雨氣擾歸懷。

◇次韻巽軒井上哲次郎博士喜壽所感

頌壽門人喜欲顚。高齡碩德達尊全。先生不老勁凌壯。矍鑠爲他說聖賢。

齡擬南山豈倒顚。雄才高節嘆雙全。百年不學人何用。獨有先生壽且賢。（百年不學法句經偈）

皇朝哲學玅門開。識綜先賢學啓來。訓育積年忘老至。滿堂子弟悉英才。

喜見書窗早梅開。天地亦爲獻壽來。海鶴蟠桃何用說。候門威鳳瑞麟才。

老來精力不凋零。積翠松陰獨鶴形。通妙闡幽忘歲月。江湖底事數仙齡。

慈教宛如甘露零。育成後進影隨形。翰林長老嚴然在。齒德雙高至百齡。

珠源星海仰文功。宛似芙蓉聳碧空。山斗聲名雲錦筆。祥光輝庭架長虹。

東西哲學括成功。韓子範疇般若空。四庫三藏存腹笥。杏壇時映彩華虹。

文營元帥大牙明。論陣堂堂極正平。老健伏波誇不得。壽躋百歲令書生。

垂功竹帛輔昌平。學貫三才達五明。聖代堪欣人瑞在。紫芝紅杏任叢生。

◇新年言志　（昭和六年）

其一

半生任教沒風塵。慈照恩深養幻身。朔北戰雲摩鐵錫。海東濁流憶梁津。稿書宜治文詮舊。破硯猶存志氣新。六十一年如是相。淸霜紅日小庵春。

其二

瓦鉢衲衣托此生。卷舒六十一雲程。遊魚水淺分齋粥。喜雀枝低伴梵聲。苦茗開爐無酒累。寒梅當牖促詩情。僧房何厭霜風肅。自有新春景物淸。

◇祝沼部淸君華燭盛典

新春重喜瑞盈堂。屏繡鴛鴦玉燭光。佳客錦莚歡溢處。梅花紅白交枝香。

◇鷲湖遊詩錄

雲密風斜雨又晴。長虹隱見大湖横。千重波白連峯暗。煙柳青々拂岸明。

◇贈渡邊女史將辭大乘學苑

苦心五歳母功宏。教育始終見一誠。新綠薫風君之處。長餘慈德百秋清。

◇過紀州高野山九度峪弔大德院殿淸和源氏惣社義忠公之墓

其一

千里弔來空斷腸。秋風吹老九度鄕。唯餘一片墳塋有。古竹林中低夕陽。

其二

劍戟相爭六尺身。威名尙記延元宸。秋風暮雨高野畔。來弔南朝義烈臣。

◇正覺院下炬香語

七十四年母德全。貞純如玉事誠虔。東風吹夢人何去。梅散春寒月獨圓。

(昭和七年)

若水をラインに汲みて寫經かな
(明治三十五・元旦、松濤賢定氏宛)

夢淡き芙蓉に遺篇誦せんかな
萩すすき阿蘭若は唯露茂し
蟲の音に談盡きて白し香一縷
(大正二、九、廿五、白川説適師手向の句)

薫風に蜜月の旅天靑し
(昭和五、五、十三、鹿兒島小橋麟瑞氏の成婚に際して)

酒に歌南無阿彌陀佛とし暮るる
十年の戀も無常もとしの暮
(大正五、歳晩)

いつはりの有る世なりけり呉竹も
花と見せたる今朝の淡雪

薰風解綬鳳眉伸。教海笑他弄釣綸。積翠金龍山上寺。一樓詩酒自由身。

清節扶宗法運伸。山門頌德仰經綸。功成勇退無留處。唯聽閑雲伴色身。

◇執綱任期滿了偶成

勤苦六年無寸功。扶宗唯誓盡愚忠。今朝任滿秋光美。徐步東山細雨中。

自覺袈裟別樣輕。六年風月奈何情。東山一夜銀燈下。秋滿高樓聽雨聲。

◇寄本多俊明上座

玉骨氷姿絶俗埃。江南老樹早春梅。休言水墨無清馥。幽韻藏香筆底開。

◇恭和小林豊山化主賀富田大僧正管長就任兼寄懷高韻、謹呈大僧正

其一

曇鉢妙華昭代出。擧宗欣躍拜人豪。天含瑞氣浮珠蓋。日布祥光映錦袍。表賀曼荼羅碩德。稱功海會悉英髦。殿前松籟和經唄。稷稷音清萬頃濤。

其二

持咒看經絶百非。書窓閑處白雲飛。霜梅有影慈悲室。雪竹時拂忍辱衣。學照慧燈輝一世。行澄定水攝群機。笑酬衆望登猊坐。從是眞風見發揮。

其三

巡遊百水與千山。護法扶宗寧有閑。進退應時觀泰否。行藏審運察循環。長成婦道創庠序。纂輯辭林開密關。別見功勳傳後世。縱橫史筆馬兼班。

其四

業海茫々覓要津。宗綱綜理了前因。雙肩既掛金緋貴。隻脚能全意氣新。九字五輪拯鬼畜。四曼三密福天人。唯今護國山頭景。顯現毘盧淨法身。

◇釋尊成道畫賛

覺樹華開欝翠陰。慈光德澤仰宏深。曉空依舊三千歳。一點明星照古今。

◇寄近藤瑞運氏

草木空存向日誠。長雲何處覓皇城。春寒橋下潺湲水。似聽當年嗚咽聲。

て化を遷せり是日予は終日君が側にありて相談せり、大笑すべき談ありき、大に泣きし談ありき、淡月薄暮、相辭して歸り、三星老師の棺前に一輪の月下に通宵唱佛せしときは知る旣に君が老師と歡然として寶池に握手したる曉なるを君畫を嗜み、和歌を能くす、贈らるゝ所數枚今尙匣底に藏す、豈料らんや之を君が遺稿となさゞるを得ざることを、君號を暮村といふ何ぞ知らんや、是淡月遠靄、君と寒村最後の別をなすの悪識をなさんとは、嗚乎哀哉。

（明治三十一、八、五）

◇奉悼明治天皇御崩御

誠惶誠懼　兹恭惟
大行天皇至聖至仁蒼天之高莫比盛德赫日之威曷倫
英武維新鴻範憲政章々百世仰大猷奎運蔚興歐
亞文藝淄澠一味渾融恩海開拓乾坤大旆烈々萬
代頌宏謨遼東之民雞林之人在々浴恵露所々歌
德風南卽綠天寶島北卽雪浪福海神威震六合聖
慈包八荒噫丕哉前古無匹東西唯一功德大業彈
述不能盡說何極　矧是大乘至道賴仁王之化育
攝化益振圓頓妙理仰聖帝之統治光闡更大徽號
加謚宗光發輝褒賞先德祖風扇揚　天恩特重聖
澤至大痛哉天下赤子之號泣難回　天日之永去
哀哉宇內萬衆之至誠莫奈　鸞輿遐登金輪遂摧
寶軸玉冠今掩明珠覆載陰暗烏兎無光慘雲罩空
悲風匝地
皇上皇后兩陛下至仁至孝宸忡是重
皇太后陛下坤德至貞尊憂太深百寮萬姓于朝于野慟
哭哀傷不知所爲嗚乎哀草莽微臣某々等慄々戰々
寔不勝哀苦哽噎之極也於是戒愼三業淸淨一心
讃唄念誦仰奉資
神力倍光威德增輝伏奉壽
皇上皇后陛下聖體萬安
皇太后陛下寶算無窮
微臣某々等泣血頓首敬白

（大正元、七、三十一）

◇「明照」勅額下賜の厚恩を拜戴す

（以下主に慶弔に關する文範）

◇嗚呼小島大然君

明治三十一年七月二十九日友人得業小島大然君武陽針ヶ谷廓信寺に於て寂す、越て三十一日、領家村の山中に火葬す、年を享る僅に二十有九、往西の本懷君に於て寧ろ履まんや、而も敎界材能を要する彼が如く甚し、指導師友を要する此の如く急なり、公や私や、思ふて到れば、泣然たるもの盡きざるなり、悵然たるもの亦實に止まざる也、嗚呼哀い矣。

予が師と識る、東京支校に於てす、爾來七年、窓を同して本校に學ぶ、此間師が篤實の資、熱誠の質、義俠の心、固く諸人の識る所となれり、而して坎㙮窮困頻りに君に逼まり病惱の犯す間歇あるなし、而かも君平然たり、本校を卒ゆる後、單身北海道の開敎を以て任じ天鹽に豊國寺を再建す、宏壯の敎會堂は今將に成らんとし、二百の檀信今に君が化を慕ふ、既にして加藤氏に推されて東北支校に敎授たり、育英の側大に師の事務を助けて頗る力る所あり、東北支校の今日ある君が功亦必らず其一に居らざるべからず、而して病惱益深く、軀幹彌累然たるを加へ、身肉脫落し、面色蒼然たり、而も其人にあへば厲聲凜々として慷慨の談口を衝いて出づるを見るのみ、云ふ所談ずる所、皆護法の事にあらざるなし、毎に曰く吾死や近し、唯其武田師の如くならざるを憾むと。

加藤師及荻原井原淺野の諸兄大に君が爲に計るあり、强請する多回本年六月漸く君をして東京に靜養せしむ、居る數日亡友仲谷氏の葬に遇ふ、乃病を力めて之に會し、慷慨の談玆より更に益甚し、後都門の黃塵紛々として稱名を妨ぐるを患ひ廓信寺に宿して或は村翁野媼に道を說き或は東京友人の訪問に快談して亦世事を談ぜざりき、此の如くするもの三週、終に去二十九日夜を以て溘焉とし

之を擴大して世界の平和事業精神事業の進歩の爲に、大に聖恩の廣大を賛揚すべき也。

宗徒にありても、また御筆恩賜が一寺一山一宗一派の私すべき恩惠にあらざるを思ひ、一面誠惶誠恐深慚至愧の熱情を以て、現今の宗門の狀勢と活動が御筆拜戴の光榮に相副はざるもの實に甚大なるものあるを自覺し、擧宗一致聖恩奉答祖風扇揚に全力を盡すと共に他面に於ては廣大の叡慮を奉體して其行動の世界的ならんことを欲し、一般的ならんことを期し、宗我偏狹の私情を撤廢して、度生津濟の大活眼を豁開して、大に祖國宗門の爲に其本分を盡すを要す。

臨時會も此盛典を記念するに足るべく、今や其善美の成績を擧げむとするもの丶如し、甚可なり、唯一利を起すは一害を除くに如かず、僧風の改善先最必要なり、布教師の陶汰亦最必要なり、教育機關の大改善亦甚必要也、而して其中心として祖風の復古は最必要なり。復古は革命なり、革新也。眞に盛典を記するに足るべきは此精神界革命已耳。

——大正三、二、廿七——

◇奉悼皇太后陛下御崩御

大行皇太后允貞允淑大和 大順巍然坤德中外齋仰盛
光純仁純慈至敏至明穆如母儀上下咸崇鴻範赫
赫明治偉業內助洵大救恤疾苦惠澤流四維章々
大正隆運慈蔭是賴愛育黎庶恩露沾六合矧亦叡
信玅法御寫蓮經興廢續絕莊嚴靈區徽音及禽魚
懿行亘草木噫悲夫光明檀林遂現無常鑾輿遐登
早追
先帝仙遊之蹤痛哉耶輸勝鬘亦示生滅椒宮永閉更逢
新陵欽定之悲日月戢輝乾坤失彩億兆慟哭內外
痛惜臣某々等寔不勝恐懼哀苦之極也　嗚乎景仰
遺德海枯石爛贊揚豈盡謹述偉行天老地荒惆悵
徒長于嗟悲哉恭捧蕪辭以表艸莽赤子之鄙忱臣
某々等誠惶誠恐　謹白

×

明治天皇は絕代の明天子也、神功大業前古比なく東西倫希なり。而て皇太后陛下曠世の明皇后として婦德完美母儀純圓內聰明の聖慧を赫して外端嚴の麗質を以てし穆

兩儀顯赫。乾德四維に盈ちて億衆咸く昭明の至治に浴し。七政炳曜。聖恩八紘を包みて、百世長へに章烈の奎運を頌す。嗚呼。大哉乾德。茲に高德旌表の鴻範を示し。　敎化津濟の功。德政裨補の勳。歷朝　先帝叡崇の聖蹟を明にし、登極大典の新春。紫闕の瑞雲、先づ恩露を　帝師明照の兒孫に傳へ。盛なる哉、聖恩。御筆龍飛、火輝を萬代に垂れ。宸翰鳳舞。中外悉く仁澤を仰ぎ、禁苑の梅柳祥霞方に動きて、今や殊遇を祖廟華頂の山門に賜ふ。一宗の道俗、眞に歡天喜地、慶賀抃舞措く所を知らざる也。恭く惟れば。　先帝無邊の叡慮、加諡の鴻恩を拜してより纔に三載。今や亦此至大の慶典に會す。方に是無價の瓔珞貫くに摩尼の明珠を加へ。金縷の天錦、挿むに鉢曇の名花を以てするもの。宗門の吉慶禧祥洵に之に過ぐるなし。時恰も青帝駕を廻らし、陽光舒に動き、和氣既に到る。東山の春色此時德澤に浴して翠光更に鮮に、天華紫雲、山門新に光彩を發し、芝峰の松柏此處慈風を傳へて瑞靄仙霞、宗運益遐邇に振はむとす。噫。聖德廣大。泰嵩と共に仰げば益高し。賛頌夫曷ぞ盡きむ。擧宗一致。純忠至誠。謹て報效を萬一に期すべきのみ。祖風深遠、溟渤と等しく俯して愈其長きを臨む。宣揚希くは道俗和合。努力奮勵せむ。謹で頌す。

×

『三服の帝師、德は當時に重く、四海の良導、行末代に應ず』是東山天皇が　圓光大師の徽號下賜の聖勅にあらずや。勅語嚴明、甚簡なりと雖、大師の偉德盡して餘蘊なし、眞に尊むべき也。今上の御筆、龍舞鳳飛して長へに無上の光榮を祖山の山門に留め玉ふ。決して偶然にあらざる也。

而も此御筆の恩賜は、單に之を淨土一宗の慶事のみとして仰ぐべきにあらず、苟くも德敎の扶殖、民心の指導を以て任ぜんものは、前に叡慮の廣大、一國風敎の興隆と敬虔なる信念の增長と高德雄材の旌表とに存するを拜して之れを小にしては佛敎興隆の爲に喜び、之を大にしては一般宗敎及敎育の進捗の爲に大に慶賀し、或は更に

恭しく惟れば皇德穆々、茲に萬世一系の神統を承け玉ひて、允に文、允に武、前烈を赫揚し、積功を恢興して、文化大に張り、憲章是正しく、皇國鞏固泰嵩と等しく、帝道蕩々新に千邦特尊の國體を統治し玉ひて、良に仁、良に義、締盟誼圓かに、修好事善に、拓殖内に盛に、産業外に伸び、國運隆々として溟渤の若し。

今や茲に萬象肅淸、百穀豐登の良辰に當り、東山紫明洛水澄淨の古都に於て曠古の大典は中外驩呼の中、禮儀長に皇朝獨有の森嚴を示し、惟祇惟祀の裡、式次良に神州特存の崇大を現し是尊是威聖、佛天影護、列聖照鑑し、空前の盛觀に遐邇處百神來り亨け兆民咸く拜す、巍々たる寶座の下、金枝玉葉は列國の冠冕に對し、肅々たる靈殿の中、百僚の金紫は玉彩の旛幢に映じ、萬歳の聲、雷轟大八州の山河を震憾して鷄林蓬萊の草木に亘り延て南溟北洋の蒼波に及ぶ、嗚呼大なる哉、盛んなる哉。某等洵に誠歡誠喜踴躍抃舞に堪へざる也。

竊に以れば、登極の大詔、炳として日星の如く、忠良奉公の旌表は聖恩古今に偏く、養老賑恤霑澤都鄙に洽し、至仁至慈、神人盡く泣く、赤子誰か感激せざらむや。

矧むや又先には則ち踐祚の初、先帝加諡の叡旨を繼ぎて、宸筆龍飛、祖山に勅額の事あり、近くは則一宗の法主、佛敎各宗を代表して大禮參列の光榮に浴す　聖恩の一宗に重くして且大なる、宗徒の誠恐誠懼、感佩措く能はざる所也、豈夙夜奢眷、旦暮孳々として昭代の德澤に答へ聖恩の涓埃を報するに精勵せざらんや。

希くは無量の光明長へに聖威に加はりて、永く本邦平和の重鎭を日東君子の祖國に見、東瀛樂浪の昭代に頌せむ。噫、希くば天下和順、日月淸明の金言、之を金甌闕くるなき聖世に謳歌して兵戈無用、崇德興仁の經訓、之を瑞穗穰々の大平に嘆美せむ、謹で頌す。

（大正四、十一、十）

穆として內助補佐の大勳を完うし玉ふ、眞に是日月を並べ懸けて乾坤を照らすもの、明治の史は嗚乎實に光あるかな、國民は一に此神父聖母を仰ぎて國運の隆昌を謳歌しぬ、而して先帝仙遊の後才かに二年、國民は亦國太母の鸞輿遐かに去るを奉送するの悲に會しぬ、嗚乎何ぞ夫不幸なるの甚しき。

國太母の盛德懿行は素より玆に盡すべきにあらず、近代泰西の后妃淑德濟々たる中之を奉比するを得るを覓むる亦甚難し、唯御性格の極めて相類せるを推さば、夫れ普國の皇后リイゼなるか、婦人の典型淑女の理想國民の母として獨逸國民が神母マリヤの如きに崇拜する此明皇后は吾が國太母の御盛德を說明すべき最も近き實例なるべきか。

花容玉質の麗、聰敏睿明の資天下比なく、烈々たる英斷意志、之を包むに溫柔婉順の婦德を以てし敬虔慈惠の深き、貞節天皇に盡すの至れる是リイゼ皇后の一生也而して是直に推して其國太母を賛すべきもの。

リイゼ皇后は普國が大那翁の蹂躪に苦める時に當りて千辛萬苦、唯國家國民の爲に勞し壽四十に滿たずして客中に崩じ他日獨逸の雄大なる勃興を見るに至らざりき、吾が國太母が終生維新の大業を補佐して大正の繼業に至らしめ國運の隆々中に大寢に登遐を示すに比する、國民は稍慰むる所ありて可なるべきか。

詩と歷史とに造詣深かりし、リイゼ皇后は其才藻傳ふべきものなきにあらず、特に其書信は繡錦綴花、文章の上乘とすべし、而も吾國太母の御歌五萬に上り、字に句々皆金鳴り玉振ふて比する。亦國民が大に慰する所あるに價せずや。

若夫敬虔の至情一生を神明に托して難艱溫屈せず、和平濶容常に國家國民の爲に勞したる、獨逸の賢皇后と奉佛寫經、慈愛禽獸に及びし吾國太母とを比する、信仰の人性を玉成するの至器にして、宗敎が人格の美をなす一日も忽にすべからざる東西共に鴻範を垂れたりと云ふべきのみ。

(大正三、四、十七)

◇奉頌登極大典

乾坤普く吉祥を鍾めて、景曜六合に光被して、
帝威の奕々たるを仰ぎ、海嶽徧に瑞麗を凝らして、
慶風四方に薰布して、聖澤の洋々たるを欽む。

ぞ知らんや、不幸に加ふるに不幸を以てし、痛嘆に續くに痛嘆を以てせんとは一宗錯愕、今や爲す所を知らざる也。

嗚呼、大本山百萬遍法主北條大僧正の示寂怵惕寔に深し、悲痛極まる所、豈多きを語るを得んや。

大僧正の盛德偉行は内外の齊しく仰ぐ所學術の深遠、文藻の蔚豐、機辨の縱横、亦百年長く宗史を嚴飾すべし、特に高義友誼、病を力め、身を忘れて緣山興隆の爲に奮鬪し玉ひ、山陰の僻地、化緣の間に溘焉として獻身犧牲の宏範を示現せられし若き、之を聞きて泣かざるものあらんや、噫、加茂の長江、今古恨を流すの逝波終に慈舟を歸へすなし。遺德唯益追慕哀嘆を深からしむるのみ、哀哉、虔で哀を擧げて、至愓至痛の眞衷を表す。

(大正七、三)

◇奉迎賀章

光盈四海。賀碵雷轟。御艦嚴還。瑞罩六合。歡呼潮湧。鵷鷺肅迎。嘻々。仁孝英明天資。肇開曠古雄圖。盛暉赫乎揚於萬邦。聯叡寬厚合德　完成絕代顯功。隆芳蔚然傳于百代。聖朝昌勢。方藉丕績　締盟友好。愈重親善。以築坤聖輿泰平之根基。昭世奎運。茲賴臺勳。現代進步。廣采精華。至恢寰宇文明之發展。某等臣民。慶躍欣舞。嗚呼曷極哉。至歡至喜。衷情寔不知所言也。恭惟既往一百二十有餘日。海則險浪怒濤。陸則烘熱瘴暑。處風土變。對慣習異、以九重天嗣。克閱千百勞苦。儀禮式典之密　賜謁臨宴之忙。居東宮之尊貴。悠然盡厥大任。加之、臺覽周到無寧日。高硏精緻莫寸隙。大示宏範于兆民。長乘大艦於千歲。中外等仰。遐邇共頌。穆々大空器度。昭昭蒼海識量。惠風恒被上下。德光每照左右。言々悉爲帝者之法。步々咸契王道之則。帝室之尊由以益尊。國家之堅歸而彌堅。昔者漢明帝爲太子時。庭臣奉頌四章、曰日重光。月重輪。星重輝。海重潤。嗚乎重光重輪之慶。國基方與芙岳泰。重輝重潤之喜。民心今仰麗日安矣。今茲恭迎鶴駕。謹拜

◇御大典奉祝文

皇威六合ニ溢レテ、烈々赫日ノ盛ヲ揚ゲ、坤輿ノ大半、擾々ノ戰禍ニ墮シテ黑雲妖氣四布密布スル時、日東ノ福地獨リ祥光瑞輝ニ滿チテ、茲ニ登極ノ大典ヲ中外歡呼ノ中ニ拜シ、皇恩四海ニ漲リテ、穆々ノ聖澤深ク且ツ大ニ、萬世一系ノ尊愈固ク、君臣一家ノ治益美ニシテ、和氣慶雲長ヘニ豐葦原ノ神州ヲ罩メ、國ヲ擧ゲテ方ニ聖代ノ萬歳ヲ頌ス。噫何ソ夫レ盛ナル。

噫何ソ夫幸多キ。謹デ鄙辭ヲ陳シテ衷心ノ歡喜ヲ表シ、忠誠ノ勞作、以テ昭代泰岳ノ文運ニ塵埃ヲ加ヘンコトヲ力メ、摯實ノ勤勉以テ聖治洪海ノ國勢ニ滴露ヲ致スニ奮ハン哉。

謹デ頌ス。

（大正四、十一）

◇授與法號之文

誠譽克己

佛陀以克己爲修道之大本、宗祖所敎還愚至訓、亦是克己己耳、而貫之唯有一誠字與、

（大正五、三、二十六）　海旭

◇北條大僧正を悼む

棟梁一たび玄溪に折けて闔宗深悼の涙未だ乾かず、紫雲山頭、四衆哀號の間、送終の嚴儀、僅に了らんとして、悲雲今や忽にして百山を陰覆し、慘風方に淨域に充ちて一大凶報の敎界を震駭するあらんとは、嗚呼一宗何ぞ夫れ不幸の劇甚なる此の如きや。殆ど同時二大本山の大殿に喪幡を懸くるの慘烈は、宗史ありて已來、其例乏しき所、淨門の憂愁豈筆舌の能く盡す所ならんや。

吉水大僧正の圓寂を示し玉ふや、擧宗痛哭、殆ど言ふ所を知らず、而も幸に北條大僧正の金錫到る所に妙響を發して、攝化の常に旺昌なるを拜して、尚大に心に慰むる所あり、竊かに意を强くして、百山の法輪長へに吉祥ならんことを祈れり何

性海浪平。　眞月影圓。
道光四輝。　覺樹萬榮。
　長示坤輿仁愛之大範。
　永垂宇內正義之宏鑑。
　　　　　　　　謹白。

◇原敬氏七々日忌追悼宣疏　（大正十一、六、十六）

經國大器。識略剛邁。統帥之偉。寔示宰相之宏模。
處世高節。廉直謹讓。孝義之盛。實爲布衣之淸範。
　廟堂立勳。一死奉公。至誠方顯。
　江湖種善。半生報恩。美風等仰。
　恭　惟
大慈寺殿逸山仁敬大居士。
　威信之重。精勵之大。
膺坤輿變局。勇斷電發。遠定和平之計。
際邦家隆運。明敏響應。克立匡濟之策。
　惜哉。龍驤虎奮。國要材切。棟梁俄折。空恨
　狂豎之毒刄。
悲夫。雲蒸風變。時求賢急。鱗鳳忽去。徒哭
北地之新墳。
國家喪失。民衆災厄。嗚乎曷盡哉。
　今　茲
大居士薨後。正四十有九日。
　遺勳益顯。痛嘆愈深。
　　於此乎。
立憲政友會諸賢。
　追懷功業。思慕恩義。
　仰中悼惜之情。伏捧奠供之誠。
積雪運純淨之志。遙拜大慈寺之靈域。
翠松表不渝之誠。方開三緣山之法筵。
　讃唄潮湧。禮誦動八功德池之瓊波。
　鐘鼓雷轟。讃嘆通七寶樹林之梵音。
　　百味供備。千種樂響。
霜氣浮妙香。淨薰至十方。
殘陽照寶華。芳影映三世。
　穆々威神如在。昭々靈儀方至。
　仰希依此一座之淨業。

靑蓋。鸞驂高嘶東京驛頭。金輅舒輾千代田大道。豈勝誠賀誠慶之至邪。某等學中學者。仰遵鴻模。砥礪切磋。荒怠嚴戒。奮期國家有用之材。伏奉令旨。鍛錬修治。學行必力。誓資國運進展之端。以終生記今日之盛事也。時維秋光初動。淸風滿都。綠門彩旗加一層之美。天意亦與國民同慶福。歡天喜地至幸至慶。嗚乎何盡。慶草蕪辭。以表至情之寸忱。謹白。

(大正十、九、三)

◇樋口便孝上人弔辭

樋口便孝上人。沈毅英敏ノ大材ヲ以テ、護法顯宗ノ赤誠ヲ懷キ、數次宗門ノ重職ニ居リ、敎學ノ闡揚偉勳ヲ仰グモノ甚多シ、就中上人ガ東京敎區ヲ統管セラルヽヤ、恰モ吾ガ芝中學校ノ設立ニ際シ、銳意熱誠殆ド寢食ヲ廢シテ開創ノ難事ニ當リ、遂ニ隆然タル校舍ノ新築ヲ見ルニ至リ、宗光ヲ內外ニ發揚シタリ、今ヤ吾校幸ニ官民ノ援護ト一宗ノ扶助トニ依リテ、聊カ昭代ノ奎運ニ貢獻シ、卒業生ヲ出ス既ニ一千ヲ超ヘ、前途益隆運ノ望アラントス、其源ヲ推シ、其基ヲ原ヌ、洵ニ上人辛酸ノ德澤ト云フベシ、今ヤ卒然上人ノ西化ヲ拜シテ、痛惜哀悼、嗚乎曷ゾ勝ヘンヤ、乃チ玆ニ全校ヲ代表シ、遺勳ヲ追懷シ、餘光ヲ景仰シ、恭ク香木ヲ捧ゲテ、酬恩ノ至衷ヲ表ス、哀哉。

(大正十、十、八)

◇阿苔爾(アタール)教授小祥忌香語

爲仁一死未誠凝。半夏夢過感豈勝。
高節凜然人悉見。雪山千古玉稜稜。

外國語學校敎授摩訶般底苔修利阿苔爾先生
義烈洒碧血。氷操拆白骨。
些雲悲重。洹水恨深。
在字啼血。一年早過。綠樹新愁。小祥方至。
日印同人諸君子。於玆。
供心香意華。捧淨飯妙供。弔英魂懷大節。
薰風散寶香。紅花動梵音。
仰希至誠感格。英靈納供。

淨土開祖圓光明照大師。
　十方諸佛。三世衆聖。
影向垂光。降臨來照。
　大居士英靈。
行願果滿。四智鏡明。
定慧證成。三身月圓。
　增上威力。倍增神光。
盡冥助手回運之復興。
致靈祐於帝圖之鞏固。

（大正十二、十一）

◇獅子谷佛定上人の西邁を悼む

大本山清淨華院法主大僧正獅子谷佛定上人ノ西邁ヲ悼ミ、恭ク深厚ノ弔意ヲ表シ、痛惜ノ至情ヲ捧グ。惟ミレバ老法主戒珠澄潔ノ唱導特ニ四衆ノ推服ヲ得、教陣ノ法將トシテ尊崇甚ダ高シ、其闔門ノ輿望止ムナクシテ淨華ニ瑞世セラルヽヤ、山運勃然トシテ面目ヲ一新シ、次テ管長候補ニ薦メラレテ、一宗ノ瞻仰ヲ鍾メラルヽ、今ヤ時方ニ開宗記念ノ令辰ニ會シ、法門ノ開闡、宗光ノ發暉、寔ニ法將ノ指導ヲ切要トスルノ際、卒然塵寰ノ化ヲ措キテ願王ノ召喚ニ應ゼラル、淸鑑仰グベシト雖、一宗豈洪嘆大息ノ涙止ムルヲ得ンヤ。卽茲ニ辭ヲ陳ベテ恭ク衷忱ヲ伸ブ。

（大正十二、五、三十）

◇開宗七百五十年記念式辭

淨土宗第廿四次宗會ハ茲ニ遇ヒ難キ開宗七百五十年ノ慶祥ヲ迎ヘテ欣幸ノ至リニ堪ヘズ、獻曝進芹ノ至狀ヲ馨リシテ、謹テ彰德ノ頌ヲ捧ケ、本宗管長知恩院門主大僧正山下現有猊下ノ慈鑑ヲ仰グ、恭ク惟レバ、猊下神襟淸遠、德宇宏深、溫雅ノ道標、塵俗ヲ拔キ、英明ノ眞氣、雲漢ヲ凌グ、教學ノ統制ハ綱維、嚴乎トシテ張リ、緇素ノ導御ハ典攬昭然トシテ圓カニ、順立兩門主ノ文藻器度、併セテ一身ニ鍾メ、鳳譽大僧正ノ興復、克ク大成ノ偉業ヲ完ウシ、高ク法燈ヲ輝カシテ四衆ノ攝化寧日ナキ今ニ二十有餘年、明治大正ノ隆運ニ跨リテ

無量壽如來。十方三寶。垂光慈照。
　圓鑑受誠。應現納供。
大居士英靈。增長威德。成滿妙樂。
　致冥祐于昭代之昌勢。永鎮皇圖鞏固。
　垂影護於現時之隆運。長資民福增益。
（大正十、十二、廿二）

◇原敬氏三回忌追悼宣疏

往事是夢。經綸雄材、一去。時遭災厄。變局艱難
追懷曷堪。現狀未幻。統卒大器方空、運膺遷移。
政界紛擾。思慕寔深。
　遺勳分竭、凜烈之死。益輝誠忠之光。
　流風莫體。蘊藉之情。更傳恩義之美。
　　恭惟。
大慈寺殿逸山仁敬大居士。
　重望處世。泰山巍々。萬衆咸服。
　勇斷現事。長江滔々。四方等歸。
功業何盛。擧世惜材。情誼是厚。每人頌德。
　悲風淅瀝。當年之慘。尙留舊淚。
　流霜凄涼。三歲之忌。早促新愁。
立憲政友會諸賢。
　會此大祥之正諱。
葵傾之誠、累年益厚。渴仰之念、重會愈切。
　　於是。
災餘萬障。拂去灰燼。焦土都裡嚴修報恩之妙。供
子三緣之大殿。禍後百忙。撥來瓦礫。曠厚市外這
捧酬德之心香於大慈之靈域。
　梵音動東海之秋潮。三部眞詮大薦法樂。
　讚唄振芝嶽之幽林。五種勝行具設妙供。
　　淨香颺金風。薰合樂境之紫雲。
　　寶華映寒空。色飾香刹之彩林。
菊花有芳芬郁埋庭。表夫淸德之遺馨。
楓葉辰紅照灼滿林。示此積誠之至丹。
　仰希。
　運斯萬善莊嚴之勝緣。
　捧此一心淸淨之淨因。
大慈大悲無量壽如來。

之情之機久矣。時哉。世界大戰後。寰有切望康平如大旱於雲霓。東亞大敎同信協力之雄擧。自應機運。

盧山烟霞　去夏新蓮社友盟
緣嶠風月　今秋敦俱會交情
　卽
朝野贊襄　宗派協同
　遵式巴連弗多先蹤
　追慕迦什彌羅遺風
茲開東亞佛敎大會
　高論雄議　審濟時之責
　善謀嘉猷　定匡世之策
　於是
騎鸞乘獅　迎大士于東瀛
伏虎降龍　勞應眞於帝京
菊花芬馥　擧國瞻仰示至忱之歡
楓葉照灼　咸人慶祝表衷情之丹
災餘禮遠客甚菲　白露唯寓眞心
　劫後遇大人極微　金風偏慚德音

伏冀。由此僧伽淸淨和合。藉夫曇摩微妙功德

三寶垂光　諸天洞鑑
此土安穩天人充滿　法華樞鑰
　刀山劒林　化成摩尼珠閣
兵戈無用崇德興仁　壽經要約
　鑊湯爐炭　變作芬陀瓊萼
　　改造世界　普現大慈佛身
四海一家　共逢福智莊嚴之春
　革新文化　洽轉正道法輪
百國同胞　齊邀壽樂無窮之晨

合掌和南

（大正十四、十一、一）

◇天台座主吉田大僧正弔辭

故天台座主慈是心院源應大僧正ハ戒珠一世ニ輝キ、定香四方ニ薰シ、溫雅謙讓、德化洽ク及ビテ能ク四衆ヲ攝シ、勤恪力行敎導倦ムナク大ニ宗風ヲ揚グ、名藍ノ衰頹ヲ興隆シ聖蹟嚴乎トシテ顯ハ

學ヲ興シ、敎ヲ布キ、大ニ祖風ヲ扇揚シ、勅諡徽號ノ榮典ニ次グニ、宸筆加賜ノ重光ヲ以テシ、宣化ノ廣、規模ノ雄、內外其ニ瞻ル、治山ノ久シキ、勳績ノ大ナル、近古寔ニ匹儔ヲ見ズ、耆壽旣ニ高ク、戒珠琳瑯光ヲ積ミテ、敎界一代ノ泰斗ヲ推シ、品望方ニ隆ニ、定香馡馥、遠ク布キテ釋門百世ノ師表ヲ仰グ、開宗記念ノ嚴儀ハ偉功ヲ藉リテ始メテ盛觀ヲ致シ、敎學更新ノ機運ハ景行ニ則リテ進展ノ緒ニ就リ、某等幸ニ英風ニ附シ、鴻範ニ從ヒ、叨リニ宗政ノ樞機ニ參ジ、聊カ駑駘ノ馳驅ヲ盡ス、今ヤ百載一遇ノ慶時ニ會シ、渇仰曷ゾ禁ゼン、卽恭ク頌ヲ獻ジテ、酬德報恩ノ微衷ヲ表ス、冀クハ壽泉吉水ノ清流ニ盈チテ、慈敎永ク萬衆津濟ノ淵源トナリ、瑞峯華頂ノ翠光濃カニシテ德化長ヘニ一宗慶福ノ柢柱タランコトヲ謹テ白ス、

（大正十三、三、七）

◇東亞佛敎大會歡迎辭

佛光遍照　萬邦讚頌康平
法雲普蓋　兆民謳歌昌榮
夫
鶴林月淨　仰至聖牟尼之休命
王舍花映　現大帝阿育之德政
勅集賢聖　闡揚三藏
廣布仁澤　傳敎十方
大王迦膩色迦　重完婆沙結集
文華康寧鬱蔚　興于罽賓都邑
清範垂千歲
宏模照百世
惟吾大日本國
自雞林傳金像朱軸。震旦高僧接踵來化。古有傳律鑑眞。近見興禪隱元。求法大師。赴請碩德。來往接踵。錫鉢相望。性相密淨蘭菊競秀。宋元刻藏。高麗勅刊。法寶完備。天下無比。東海寔爲法流朝宗。而未見東亞同敎會同一堂之快。世運進展。交通指呼之時。有志緇素。渴望謝荷負之恩。展提携

儀。
天潢直派。嫦娥降神。躬當艱難。匡濟是力。
金枝一條。王母現眞。幾閱辛苦。靖定賴恩。
婉順玉容。內包秋霜重威。義實千古典型。
溫潤麗姿。外施春水惠澤。仁寔百代儀表。
今　茲。
尊儀從仙遊。方五十年。
昭代追懷盛德。維新鴻業遺勳益彰。
聖世思慕景行。德敎大本餘德愈宏。
於此本月本日。
虔申奉讃至誠。伏捧奠供叓忱。
天恩賜香。縉紳星羅。
金風動芝峯。　德音普傳。
翠松護靈廟。　操色長存。
百味妙供。抽報恩素志。披三部眞經。
一心清淨。盡酬德赤誠。修種々正行。
金鈴響處。讃唄感天樂八音之妙響。
彩華散時。禮誦現曼荼六時之靈瑞。

香雲普覆十方。華海廣映三世。
仰　希。
運斯一會淨業。
大慈大悲無量壽如來。洹沙諸佛。塵數聖衆。
炳現無慈。靈鑑照誠。
淑靈尊儀。
三身金殿。煒煌增長。千葉寶蓮。莊嚴成滿。
致冥祐于照代隆運。永鎭皇基。
垂影護於現時昌勢。長資民福。
（大正十五、十、二）

◇靜寬院宮奉賛會御法要宣疏
浩漾五十鈴瓊流。恩波普潤萬春。
玲瓏千代田皓月。慈光遠輝千秋。
景行懿德。遐邇齊仰倫常之儀型。
徽績章功。中外共瞻德敎之典範。
恭　惟。
靜寬院宮贈一品內親王好譽和順貞恭大姉淑靈尊
儀。

レ、大法ノ廢絶ヲ恢復シテ教綱章然トシテ張ル、嘗テ寺門ノ基礎ヲ鞏固ナラシメテ雄範ヲ法苑ニ垂レ、今ヤ女學ヲ創設シテ宏模ハ奎運ヲ補フ、洵ニ是德教ノ山斗ニシテ眞俗ノ國寶ナリ。吾ガ大正大學幸ニ故座主大僧正ノ慈蔭ヲ被リ、高遠ノ指導ヲ忝フシ、去歲開校ノ式典ヲ擧ゲ、爾來日ヲ追ヒ月ヲ重ネテ益隆昌ノ運ニ向ヒ、聯合三派ノ同入和合亦大僧正ノ高德ヲ仰イテ摩醯三目相待チテ知德ヲ研磨シ、伊字三點相依リテ俊髦ヲ育成ス。毎ニ故座主大僧正ノ親化ヲ渴仰シ、親ク恩容ニ接シテ慈教ニ浴センコトヲ念願スル甚切ナリキ。何ゾ圖ラン、比叡ノ愁雲、忽ニシテ慧日ノ明暉ヲ隱シ、四明ノ悲風俄ニ梵輪ノ寶軸ヲ折リ、亦獅座ヲ教室ニ瞻禮スルノ機ナシ、浩嘆大息、嗚呼何ゾ勝ヘンヤ、乃チ去二十有七日大學講堂ヲ嚴飾シ、加藤豐山派管長修法ヲ主リ、恭ク理趣供養ノ秘法ヲ薦メ、全大學相會シ心香ヲ獻シ意華ヲ捧ゲ、肅ミテ故座主大僧正覺位金蓮ノ增輝ニ擬シ奉リヌ。今ヤ茲ニ送終ノ大禮ニ丁リ、教職員學生代表者某甲等校旗ヲ捧持シテ金棺ノ前ニ跪キ、至心合掌、衷心拜弔ノ微忱ヲ表シ奉ル、仰ギ希クハ故座主大僧正覺靈、高ク三身ノ明月ヲ輝カシ、嚴カニ四智ノ寶蓮ヲ開キ某等ガ虔誠ニ照鑑ヲ垂レ玉ヒ、學運ハ山運ト共ニ長ヘニ昭代ノ文化ヲ補翼スルニ至ランコトヲ、嗚乎、仰ギテ遺德ヲ頌スレバ、比叡靈峰千秋巍峩トシテ聳ヘ、俯シテ餘澤ヲ嘆ズレバ琵琶ノ大湖汒洋トシテ廣シ、贊揚止ムナシ、痛惜曷ゾ盡キム、哀哉、合掌和南、敬テ白ス。

（大正十五、六）

◇靜寬院宮五十年御法要宣疏

芙蓉萬瓊。瓊峰玲瓏。欽仰貞烈于永遠。
滄溟千丈。玉瀾瀲灩。瞻仰仁孝於悠久。
盛哉令德。鸞鏡澄瑩。眞是婦道之鴻範也。
丕矣懿行。龍珠圓照。豈非母儀之宏模耶。
恭惟。
靜寬院宮贈一品內親王 好譽 和順貞恭 大姉淑靈尊

ラシ、其一躍市會議員トシテ市會ニ重キヲナスニ徵シテ明ナルヲ認ム、同君ノ東堂山董職ハ必ズヤ圓滿ナル解決ノ下、積年ノ紛糾ヲ理メ、昔時ノ繁榮ヲ復シ故碩光師ノ志ヲナスヤ必セリ、一宗ノタメ又地方ノタメ眞ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ、卽チ茲ニ一言ヲ寄セテ祝辭トス

（昭和二、十一、二）

◇成島治平老甲府市長就任祝賀會祝辭

才藻富瞻。示白香山之神懷于今日。
信修醇厚。見張無盡之高風於現代。
謙讓剛直。桃李下自成蹊。
篤敬護法。祇林道方爲榮。
茲惟。
成島治平老居士。
喬木名家。陶朱箕裘。
剛毅嚴正。篤學通漢洋最長詩文。
忠篤誠實。研玄亘教禪特尊蓮乘。
淨寫聖經。金字玉軸。顯齒並度。
興隆寺門。畫棟彩梁。遠近等仰。
利濟之厚。四隣荷恩。種德之深。一鄕浴澤。
衆望潮集。咸推榮位豈無故邪。
全會雲應。擧撰顯職寔有故哉。
而老居士。
固辭再三。後尊重公議。不顧一身安危也。
謙讓數次。終隨順民意。敢辭半生勞苦耶。
進退之明。堂々如斯、固現代所希見焉。
推讓之美、雍々至茲、眞聖世之祥事矣。
於此乎當山親緣會。
仰思積年之指敎俯頌累歲之功勞、
香雲華海。虔修斯座之法要。
妙偈梵唄。恭擬一會之祝禱。
仰冀、
大慈大悲願王無量壽如來。
三世佛陀神光照臨、十方薩埵慈眼擁護。
吾老居士、
福智雙備風月更淸、壽樂共臻花雪益麗。

竹園琳瑯玉容。貞烈眞節。高顯當時國步艱難。
天潢縹緲仙姿。仁孝英標。遙照現代世道推移。
去歲既開令忌法莚。朝野雲集。賛揚無盡。
今年重結奉賛蓮社。官民潮應。頌美彌廣。
名公鉅卿。協力商議。大朔令德光被四方。
縉紳碩學。同心要約。奮圖惠澤流傳百代。
綱維方成。規模新成。
乃茲本月本日。
虔捧一會奉告奠供。恭修四衆報恩淨行。
九重賜香。三臺獻頌。
檀上菊花。芬馥傳德馨。
廟前松色。積翠存貞韻。
彩幡珠蓋。浮麗日鮮。鳳簫龍笛。澄金氣清。
五種淨行妙供。映七寶樹林之霞。
三部聖典梵唄。通八功德池之潮。
清風送香。妙薫動塵數之佛刹。
白露宿華。淨影浮恒沙之淨土。
仰　希。
西方願王無量壽如來。十方佛陀三世薩埵。
大悲降臨。大智照鑑。
淑靈尊儀。
四智鸞鏡。高輝靈威於眞如香海。
三身鳳輅。炳現神通于義空銀漢。
聖代奎運。影向永垂。帝道皇圖山斗維固。
昭世隆勢。冥祐恒存。國豐民安海嶽是長。
（昭和二、十、二）

◇東堂山晋山式祝辭

故田村碩光師堅忍ノ雄志ヲ懷キテ一意奮鬪、東堂山ノ恢復ヲ誓願トシ事漸ク成ルニ垂ムトシテ不幸凶刄ノ殪ス所トナリ、山運ノ前途轉タ望洋ノ嘆アリ、久米原修丈君此難局ニ際シ、宗命ヲ奉シテ起チ奮然東堂山恢興ノ爲ニ力ヲ致ス所アラントス、謂フニ君ハ器度寛宏ノ中勇斷果決能ク事ヲ處シ、大ニ心胸ヲ豁開シテ衆ヲ容レ、而モ中正嚴明、其力ムベキヲ力ム、其識見手腕ノ高キト德望信用ノ大ナルトハ、君ガ川越市青年團長タリシ功業ニ照

乃文乃武　惟神惟聖
仁孝英烈　睿哲明正
靑宮攝政　威望惠澤　兆民咸慶
鶴駕遠遊　令譽德風　列强盡敬
先旣傳承　神器　昭繼　天統　四海仰紹隆之丕基
今方遵式　帝範　嚴擧　大禮　八紘頌恢宏之盛儀
嘻　嘻
宸衷深遠　煥乎宣敎化之鴻模
叡慮廣大　炳然示民心之歸趨
紫宸寶殿　瑞光映照旌旛
春興神宮　靈氣罷罩幔門
威儀穆々衣冠星羅　尊嚴絕倫
祭祀肅々齊穀珠盈　嵩高自眞
丕哉　皇民一家之親　垂德敎之根基　遐邇讚美
盛兮　君國同致之固　示化育之淵源　中外瞻親
擧民欣躍　捧献芹之忱誠
盡國抃舞　致傾葵之衷情
臣　某々等
寔不勝誠懽誠憙至慶至賀之極也
卽恐懼惶悚　上頌
仰拜賀
聖德與天地昌
伏奉壽
寶算侔海嶽長
乾綱宏張　奎運炳蔚　千秋謳歌康平
天業熾揚　國威振興　萬春鼓腹昭明
臣　某々等
誠惶誠恐　頓首頓首　恭頌
（昭和三、十一、十）

◇佛前結婚式に關する文

其一　奉　告　文

南無本尊無量壽如來。大恩敎主釋迦牟尼世尊。十方三世一切三寶。大日本帝國大小神祇。照鑑護念。今茲何某與何某子宿世深厚。善因方成。熟現前吉祥良緣。茲滿足入爲××寺法嗣卽卜本月本日吉辰。嚴飾道場。具備淸規。一心淸淨。三業虔誠。受戒

大收丕績、補翼國光之赫奕。
盛立偉勳、毘賛世運之隆昌。
　全市文華、富盛永荅昭明之聖代。
擧民康寧、悅樂長酬協和之御世。
　　(昭和二、十二、十三)

◇戊辰殉難者追善法要宣疏

弘誓願海。深廣無涯。寧隔怨親之別。同仁乾德。崇高似天。誰乖覆照之恩。

　惟明治維新大業。是宏遠皇圖。揚其美于四方。國體精華示其秀於八紘。偉勳盛功。古今絶倫。東西無比。當于此時。普天王臣誰不思皇化之翼賛。卒土赤子誰不力國威之發揚。唯材器自有通局。所處不免中邊。勤王佐幕。順逆異途。攘夷開國左右分流。刀鎗殞命。刑辟授首。骨肉靡亂。肝腦塗地。慘何勝言耶。嗚呼回天偉業。振古遺勳。固雖出帝德廣大。亦實忠臣義士殉難死節之所致。勇憤壯烈。殺身成仁之賜已耳。而此間失方向。迷去就荷汚名死無榮者。其事

雖誤。其心寔可憫。嗚呼昭代燦爛之文化。是當時烈士碧血所染出。國基之牢强。豈非義人碎骨所築成。今茲戊辰甲子一周。三拜改元。皇威方大揚。國運茲盛伸。天恩既及枯骨。仁澤今無親疎仰遺勳。俯見餘光。追懷何堪。卽茲卜維新恩聖。靜寛院宮奉賛法要之後一日。普會朝野名賢十方檀信。恭修建一會之法要。以擬維新報國殉難諸烈士之冥福。金風滿山。浮所獻淨香。妙馨漲塵數佛刹。白雲徂來。映捧來百花彩影遍亘沙淨土。檀上忠烈節義之靈位。法樂增上。威德倍加。願海深裡怨讎長亡。萬春共鎭護帝國。皇恩厚處。彼此齊仰。千秋同資助國運。謹疏。
　　(昭和三、十、三)

◇御大典賀頌

萬世一系　寶祚　日月重麗華　恩光遠照
千歲不磨　鴻典　麟鳳鍾禎祥　景雲普燿
　恭　惟
天皇陛下

茲ニ本日ノ盛典ニ參列シ、衷心ノ欣賀慶祝ヲ表スルト共ニ來會ノ諸賢ヲ代表シテ、佛祖神明照鑑ノ下ニ謹ミテ新郎新婦ノ誓約ヲ證明ス。希ハ此誓約日ニ彌堅ク。月ニ益新ニシテ、和樂歡喜ノ家庭ヲ完成シ。同棲多幸。一生ヲ貫キ以テ榮譽福德ノ將來ヲ實現セラレンコトヲ。

其四　訓　諭

佛祖ノ照鑑ヲ仰キ四衆ノ證明ヲ得テ今ヤ方ニ結婚ノ典ヲ擧グ。蓋シ國家ノ隆興宗門ノ昌榮必ス才良ノ賢夫淑德ノ貞婦相待チ相扶クルニ賴ル。內助完カラズンバ外丈夫ノ才能ヲ發スルニ妨グ。家室齊ハス何ゾ男子報效ノ志ヲ伸ブルコトヲ得ンヤ。爾等兩人ノ婚儀自ラ世俗ト殊ナルモノアリ。從今已往互ニ相愛シ相信シ相重ンシ金石ノ契松柏ノ操一生必ス變ハルナク、至誠ノ信行ヲ策勵シ、常ニ慚愧ヲ懷キ。本分ヲ重ンジ、華奢ヲ去リ、勤儉ヲ力メ、自信敎人信ノ聖訓ヲ忘レス、以テ世ノ配偶者ノ模範トナリ、終生相扶ケテ國家宗門ニ力メ終ニ一蓮ノ樂果ヲ得ルヲ期セヨ。特ニ訓諭ス。

其五　終　式　奉　告

茲ニ吉祥滿足式ヲ終了スルニ當リ。恭ク新郎新婦兩位ノ誓約書及ビ來賓代表ノ證明文ヲ寶前ニ納メ奉ル、伏テ冀クハ、大慈照鑑ヲ垂レ、大智威神ヲ廻ラシ、神慧康壽。信行和樂、長ヘニ新郎新婦ノ上ニ存シ、來會ノ諸賢モ、亦恩光ノ慶福ヲ分タンコトヲ。恭ク白ス。

（昭和四、十一、廿五）

◇相馬文雄氏葬儀香語

昭和五年一月十六日南米アマゾンに於て客死せる相馬愛藏氏次男文雄氏の葬儀に際し

魂隨走浪喚無還。遺恨空籠南米山。壯啚雄心留底事。梅花寒月照塵寰。

惟

春濤院汪譽文雄居士。

凜々凌空。浩氣落々。貫虹大志。

孤劍去國。雙鞋柘地。

立誓。嚴擧成婚之式。原夫乾坤兩儀。合其德。百物成育。陰陽二元正其位。萬類生長。菩薩大行依以立焉。淨業正因取以固矣。是故正華燭大禮。示倫常之大本。設笙歌之嚴儀。明道義之根抵。豈莫佛陀之冥護。神明之加祐邪。希新郎才德益高。新婦貞淑彌美。夫唱婦隨。示家庭之淸範。內助外勤。輔國運之昌隆。偕老有壽。信行必固。福智共進。雙棲多幸。鸞鳳和鳴。永頌文華之隆盛。琴瑟偕調。長歌昭代之旺昌。

謹白

表白文（在俗信徒の場合）

謹テ極樂化主彌陀如來、本師釋迦善逝、遍法界諸世尊、八萬四千淸淨聖教、塵刹賢聖僧伽淨土三國傳燈列祖、特ニ宗祖圓光東漸慧成弘覺慈教明照大師、當山開山大和尚ノ靈鑑ヲ驚カシ申シテ白サク、茲ニ何某何某子ト宿世ノ善緣圓熟シテ偕老ノ約成リ、今月今日ヲトシ照鑑ノ下冥護ヲ仰キテ嚴カニ華燭ノ盛典ヲ擧グ、惟ミルニ行業果報實ニ不可思議ニシテ行果悉ク攝取ノ光ニ浴セザルナク、家室眷屬畢竟念佛ノ助業ニシテ人々終ニ引接ノ正因ヲ結ブ、希クハ照明ノ本尊本師等一座ノ丹誠ヲ知見シテ長ク慈光ノ照益ヲ賜ヒ、尊前ノ兩人琴瑟相和シテ永ク特留此經ノ德音ヲ贊頌シ、鸞鳳双飛シテ高ク萬機普益ノ教運ヲ扶翼シ一蓮托生ノ堅誓終生渝ルナク以テ國家法門ノ忠臣良婦タランコトヲ、

謹テ白ス

其二　誓詞

茲ニ佛祖恩光ノ下。媒妁及親戚友人ノ證明ヲ仰キ。戒ヲ受ケ誓ヲ立テ、嚴カニ成婚ノ式ヲ完了ス。希クハ嚴戒慈訓ノ示ス所ヲ遵奉シ。今日ノ心ヲ以テ終生ノ心トナシ。偕老同穴ノ契、斷ジテ變ズルコトナク。異體同心ノ約、年ト共ニ益固ク。相愛シ相敬シテ。共ニ信行ヲ策勵シ。互ニ勵マシ。互ニ慰メテ。同ク德操ヲ錬磨シ。和樂孝順。誓ツテ寺庭ノ淸範ヲ示シ。勤勉精勵必ラズ國家宗門ニ報效スルコトヲ期セン。謹ミテ誓フ。

其三　證明文

（昭和五、五）

◇箱根內原君三尊像點眼記

內原君出於蘆湖舊家。奉仕函嶺離宮工作之役者多年。去歲有宮殿修補之命。君亦蒙工務之榮。恪勤精勵。今夏竣厥功焉。卽請得殿柱之殘材。同家弟相山君。謹彫上宮法王聖像一尊蛭子大黑神像兩位。以永記光榮。敎子孫不忘報効。可謂。用心深且厚矣。恭惟。上宮法王皇國文代之聖聖。與夫憲章德敎。至百工技藝。咸仰其叡智仁慈。蛭子大黑兩神。列管領產業。司福宰祥。家門鎭護。執善。加之。內原君崇奉太子偉德。培養淨信。策勵德操。益致力於業務。信敬兩神肅淸家門。蓋其志已身今茲點眼之儀旣畢。熟拜各尊。力法精美。慈容福相。藹然。滿目不覺使人瞻仰。謂相山君亦非尋常薄德之人也。可謂此兄而有此弟矣。希益策進道義。長養信行。則壽樂祥慶自臻也。是爲記。頌曰。

憲章之祖。德敎之宗。法王聖德。慈恩萬重。
携魚勸漁。擔米力農。蛭黑兩尊。產業現容。
威光廣大。至心信從。神功無際。晨昏禮恭。

（昭和五、八、二十三）

◇表白文

日出高等女學校長小林芳次郎氏夫人追悼の爲め無遮大會を修するに際し

原　夫

慧日高輝大聖現世恩光遠被照灼貫于三世
慈雲蔚興眞敎導衆法雨普汪潤澤及於十方
　功德無上怨親齋躋七重樓閣之華臺
　利益究竟順逆共登八功德池之寶船
茲今
日出高等女學校長優婆塞小林慈雲居士
夙信樂三界矜哀之大願
　復精勵二利成備之勝行
輙設無遮之大會廣資恒沙有無兩緣
方開普門之盛儀大福塵數顯幽二界
　私則永記內助貞功補還來度生誓願
　公以廣感師友好意振平等一切回向

三歳艱辛。一誠當事。
　哀哉。
鵬翼未張。早見挫折。
梁木將朽。旣從毀滅。
　嗚乎。
阿莫孫永長。痛恨無終。
西流坡林深。浩嘆何窮。
　遮莫。
碧血不消。傳創業之名。
俠骨常芳。輝先覺之明。
　雖天殤堪傷。
激作同胞。護國存靈。
　容犧牲甚悲。
奮起後昆。淸範維馨。
　送終有偈。
千里碎骨。眞身不壞。巨嶽大江。獨領法界。
南無阿彌陁佛

（昭和五、一、十六）

◇題袈裟箱

昭和五年三月十四日、不肖以居宗務執綱之職、不揣丁祖山高祖遠忌法事讃唱導、慚愧寔深焉、荒川辨達上人、不捨平素道情、惠贈佳品、賀之不勝感銘也、卽茲呈微物、永記芳誼、

（昭和五、三、十四）

◇古銅文殊師利菩薩像記

癸亥災後、帝都復興工事、各區相次而起焉、及日本橋某町發堀、土工偶出此像於地中、沙泥膠着不辨其爲何、林國手異之、購得拂淨、卽蒼然奇古、風趣可掬、來示余觀之、其爲文殊師利大士無疑也、手法不凡、從蓮坐及御師、檢之、不似邦風、或是淸初之作乎、蓋足貴重、惟文殊大士大乘諸菩薩上首、智慧廣大、福德無量、國手得之謂、是平生種善之餘慶已耳、宜珍藏百襲、永爲家寶、特瞻禮、供養香華、崇敬靈威、以端心正行、則益慧增福、家門禎祥、當有其驗、若夫徒賞弄秘翫、恐乖天授、審之哉、

大慈汪溢して普く群生を度し、皓々たる華頂の秋月、妙智は照徹して弘く衆機を接す。今や祖山門主上人白壽の賀會を迎ふるに當り、眞に誠歡誠喜、抃舞、述ぶべきの辭なく、雀躍、陳ずべきの言なきを如何にせむ。

惟みるに吾が知恩の祖山、維新已來俊傑相承け、高徳化を接し、各宗稀に見るの盛觀を呈せり。名譽學天師、經營の材、報國の志を懷きて、維新の變革に處して一山安固の基を定めしより、大材偉器松翁の名を教界に振ふあり、次ぐに一生の大徳寒林尊者を以てし、靈瑞師の獻身中興の端を開くと共に運海師の謹嚴之を承け傳へて吾が門主上人に至る。猊坐に登り綱維を執持するもの四十年、祖山繁榮は前古比なきの隆なるを見、宗門教學の進展、其誇るべきもの悉く功を上人威望の恩徳に收め、一宗の光榮吉慶も亦皆上人統治の下に其美を內外に發揚したり。一門道俗の上人を仰ぐ眞佛の如きも蓋し故なきにあらず。歷代俊哲の道徳功業之を集成したるもの、夫れ上人か。其化導信望、之を湊會したるもの、夫れ上人か。清高深遠、寒林の風格旣に上人に就て之を見るは言はず、其詞藻亦松翁に比して洗錬の精亦之に當るに足る。是豈其金龍の片鱗にあらずや。若し夫れ陰功晦徳、淵默化を垂るゝ若きは大徳多しと雖、其匹儔を見る甚多からず、祖山歷代を問はず、宗門列祖中上人の如き高齡を見ざる、亦積徳累功の自ら超然たるを仰ぐべきのみ。

希くは上人の壽更に高きを加へて長へに教門の瞻仰を受け、清福彌豐かに永く法城の重鎭たらんことを。

嗚乎。蟠桃海鶴、何ぞ壽を拜すに足らんや。大椿靈芝、亦終に兒戯に屬す。無量壽光中、華頂祥雲、獨り千秋昭代徳教の瑞をなさんのみ。

合掌百拜

（昭和五、十、十五）

◇葵堂白壽會賀頌

其甚志之宏深　其事之盡功實
可此爲德教淸範、　足將見信樂龜鑑
謹惟此日卽是拜
明治大帝之大葬于十有九年之昔靑山原頭　神威赫々
照臨億兆猶在叓懷乃木大將與夫人殉忠之忌辰義烈
凜然千秋照世
恭頌
聖德如天一視同仁日月齊光而不磨此振作周遍法界
廣度衆生之善根追憶將軍夫妻忠誠貞烈天地爲哭鬼
神皆泣顧激勵愼終追遠報本反始之至情
便此一會之本旨深而遠焉
斯勝業之趣意廣且大矣
其補翼敎化豈尠少邪
其扶持道義何徒爾也
今　方
莊嚴旣備　供儀具陳
百八摩尼珠映滴露　三衣羅紋色輝秋花
錦風颯々吹動香雲遍到十方淨土
草蟲喞々隨伴梵聲遠通三世幽界
仰　冀
法界如來　塵沙賢聖　降臨道場　照鑑護念
眞如大空　一碧高澄　無隔親疎　星宿並光
群靈森羅共證俱會一處常樂
法性巨海萬頃遠連莫論善惡波瀾合響
衆生和融齋昇同入圓覺妙果
冥祐歸處　德敎大振　和樂福國
幽功到時　文化熾起　昭明利民
敬　白
（昭和五、九、十三）

◇山下管長白壽賀頌

一世の師表、內外齊しく德功の隆なるを仰ぎ、百代の典型、遠近咸く道風の豐かなるを崇む。是豈獨り淨土一門のみと云はむや、實に大法の長老、敎界を擧げて誰か推尊せざらむや。鶴齡旣に一百に垂むとして、戒香は彌々栴檀の妙馨を傳へ、定水は益々寶池の淸澄を湛ゆ。澤々たる吉水の春潮、

◇智照院引導香語　（昭和五、十、十九）

貞純敏慧一家歡。底事一朝玉拆嘆。
殘雪香臺湘水寂。梅花空落碧空寒。

惟。
新圓寂。智照院明譽珠光大姉。
蕙心固豐、溫雅之性。芳姿亦富、婉順之行。
去歲見華燭盛典。和氣滿堂爲全家之喜。
今春重桑弧慶事。歡聲溢屋加一門之福。
豈料。花顏玉容。倏忽隨無常業風。
何期。明眸皓齒。唐突委幻夢世相。
亨年僅二十有五。
湘南海晤。波餘綿々之恨。鎌山月冷。影留切々之悲。
雖然。
塵界蕣花。金蓮今開常樂之彼岸。
穢土埋玉。寶臺直飾莊嚴之妙相。
唯見。
翠閉紅鎖。四大識浪。轉成眞如智海。
粉消香盡。六根情雲。化現本覺義空。
遮莫方今。
上品華臺。新迎仙魂曉。
十地樓閣。現蒙授記時。
如何是送別一句。
佐紀汰々婆、遠久留々比等遠、
摩知也世舞、波奈乃宇天那爾、
那加波乃古志天、

◇足達家靈簿序　（昭和六、二、十九）

尊先崇祖、寔倫常根幹、酬恩報德、豈非道義柱礎邪、以故祭祀烝禋、國基慈堅、愼終追遠、民德歸厚、吾國振古醇此美風、培此良俗、國體之尊、冠絕于世界、從大教流傳三藏玄旨、特明回向之法、顯幽普濟、五部秘軌、別設薦供之則、存亡兼利、慧日煦溫、民心慈雨、灌漑人情、以迨于今、苟爲

仁慈廣大、人仰高風、天壽旣躋、南山之隆、
行修深遠、世賛顯功、清福自瞻、北斗之崇、
恭　惟、
淨土宗管長知恩院門跡孝譽大僧正猊下、
一世師表。內外齊服。道德寬洪。
百代典型。遐邇共嘆。化導滋豐。
蓮社至大師父。思慕浴恩。獨啻淨門。
敎界最高長老。賛美推尊。普通法圜。
鶴齡旣垂一百歲、戒香芬馥搖優鉢羅華妙馨、
獅坐久臨三十年、定水燈淨堪阿耨達池淸冷、
皓々吉水春潮、大悲充盈、普濟有情、
洋々華頂秋月、妙智照瑩、廣度衆生、
大功偉勳、敎學補翼、咸藉厥力、
重榮仰光、宗門嚴飾、皆歸其德、
叙旨往年旌表丕績、見錦袈拜受之命、
天恩去秋褒賞盾德、拜金杯下賜之慶、
門葉欣躍、誠意豐沛、春光呈祥、一宗皷應、奮
起白壽勝會、
兒孫渴仰、和氣芳靄、秋景示瑞、四方雲集、大
樹朱旛賀頌、
原　夫、
沙門固無賀壽施設、久住轉輪眞、是奉敎要訣、
僧伽宣從念死經說、現世護念、寧不乘願法悅、
謹　謂、
壽命甚難得、恭誦梵筌、佛世亦難値、虔繙眞編、
積德宏摸、取之于吾道御、供養難得福田、
眞佛觀想、鑑是於我師父、歡喜難値善緣、
嗚　呼、
古柏大椿、蓋是俗事、無量壽光千秋爲瑞、
蟠桃海鶴、亦徒兒戲、常住樂刹萬春無墮、
仰　冀、
佛日輝照益光輪、諸天現擁護威神、
仁山長靜、雲嶺一白、昭代瑞鳳、仙壽豈百常存、
眞俗柱石、
德星恒明、曉天太白、明時祥麟、禪悅更積永住、
德敎木鐸、

從泊然歸寂、別離涙未乾、綠樹白雲、烏兎忽改、茲會一百日之忌辰、追懷情切、思慕更深、輙茲虔開一會道場、奠供醍醐法味、嚴薦追孝之至誠、仰希廻茲功勳、資助覺靈、莊嚴玅果、法雲寶閣、改輝四智之慧燈、上品金蓮、更薫六度之德香、慶及家門、增長福智、恩布子孫、壽康無極、謹疏、偈曰

翠影露華夢裡還。忌迎百日切思賢。
長江峻岳遺功在。覺月卽今照大千。

（昭和六、八、三十）

◇澁澤子爵追悼法要宣疏

山崇海涵、惠澤普及、中外信服偉德、
日朗星高、慧鑑遠徹、遐邇贊頌偉勳、
行仁而富貴、名聲振于一世、
有道以壽福、功業垂於百代、
恭惟、
泰德院殿仁智義讓靑淵大居士靈位、
興朝瑞龍、盛代祥鳳、
明敏勇斷、開拓福利、翼贊維新鴻圖、
寬宏達識、振興文化、資財三代奎運、
祖述先聖仁愛之深。慈雲洽及宇內。
誘導後進信義之厚。威望逈伸海外。
財界長老、產業經濟、莫不賴其力、
江湖師表、德敎文藝、稀不待其恩、
萬人達尊、旣具其三上下、永禱壽山之不崩、
江湖善果、國有內外、齊望長春之無渝、
悼哉、東亞變局、龍奮虎驤、國要統帥之材急、棟梁俄折、
悲文、坤輿事態、雲蒸風變、時覔指導之賢切、山丘忽崩、
今茲、
大居士、薨後二十有一日、
遺德愈彰、痛嘆益深、
於是乎、
靜寬院宮奉贊會、曁國士館專門學校、
追懷恩義、思慕敎導、

國民者、誰付之忽緒耶、宜恪遵前憲、陶冶性情、補翼昭代之奎運也、足達氏出大職冠鎌足公遠裔經小野田三郎兼廣、至中祖遠元、初冒本姓、其孫遠政、住丹波國、後棄轉和歌山、仕桑山氏、其宗族移封大和新在、隨之、世々任家老職、天和年間、主家有事歸田、移於同國三島、子孫綿々相傳及于今日、當主重右衞門君、篤厚勤恪、尊奉淨敎、崇敬祖先、莫不至、尊供薦福、具極慇懃、人推爲鄕黨之淸範、今新製靈簿、以明家門追遠之規矩、可謂當世稀見人也、近時世態險惡、人情澆漓、所謂人心是危、道心是微、皇國之美風、良俗幾拂地焉、原其禍因、莫不由世忘報德之誠、人失酬恩之道、可勝深慨乎、當此時、足達君之所爲、事雖小、非無補世道人心、靈簿成矣、徵予其序、卽記平素所感、以題卷端、足達君以此心治家、推此誠處事則家門之淸福、子孫之昌榮、自可期已耳、可慶哉、冀春風秋雨、瞻仰供養、花晨月夕禮讃同向、增上信根、長養聖胎、成滿二世大願、謹序、

（昭和六年三月彼岸日）

◇望西樓了慧上人六百囘遠忌頌德偈並序

護法傳持誠恪絕倫貽惠澤於百世祖訓編纂內外齊仰其光扶宗宣布精勵超羣垂偉勳于千載疏釋撰述古今擧稱厥功嗚呼靡上人則宗祖遺文或歸散佚湮滅末世永失慧燈有上人故記主精義普及洽流遐代猶浴慈潤今茲上人示寂方六百年施化遺跡繁榮福智俱備所創山門隆昌敎學共振開祖之盛德可謂宏大矣貧道幸有善緣亦得列遠忌報恩法要感銘莫極鑽仰何歇卽奉拙偈一首以表衷忱

大哲西遊六百年　傳燈今設報恩莚
東山凝翠眞標古　鴨水流芳惠澤鮮
新綠頌功聯錦筆　薰風仰德集玉編
獻香九拜靈龕下　愚拙堪歎有宿緣

（昭和六、五、十六）

◇久米民之助翁百ヶ日疏併偈

恭惟

空々軒玄々如泡居士

卽今笑登千葉座。唯餘幽遠鐘鼓淸。
恭惟
靈輪大和尙
溫雅德風。實踐淸鑑。攝生篤實。興隆竭力。
住於幽遠精舍殆四十年。
檀越仰之。猶若慈父。僧伽尙之。以爲長者。
護法赤誠。幾閱艱難。與年益熾。
扶宗至情。屢經曲折。重臘彌堅。
復興功成。超然曉仰紫雲。
造營事竣。悠々夕觀落日。
不啻江東首座長老。
亦實都門隨一耆宿。
何圖
一朝現病。笑應大悲願王迎召。
於老師卽雖本懷可喜。
在有緣茲有痛惜無限。
今茲老師示寂。早會初七日之忌辰。
法嗣靈信師。盡追孝誠。致報恩志。
普招部內大德有緣道俗。恭嚴修一坐法要。
以表酬德追懷至衷。
凉風送香煙。繞上品華臺。
彩華搖芳影。莊法雲寶閣。
貧道有宿緣。忝老師道交者四十年。
今列法莚。感慨甚深。
嗚　乎。
殘炎彌天。白蓮淸香空散。
苦熱滿地。寶甁智水茲盡。
痛嘆不止。思慕何禁。
輙恭頌一期功績。虔仰半生德行。
所望還來本誓不空。速泛慈航于迷津。
唯希普賢弘願圓滿。早轉法輪於敎界。
（昭和七、八、二十六）

◇動物供養祭宣疏

大慈恩海攝羣萠。遵敎爲仁盡至誠。
鱗甲羽毛咸解脫。芝峰秋老碧天淸。
恭惟、愛物布恩、致惻隱情、是聖賢要道也、憐生

恭表悼惜之至情、伏捧奠供之赤誠、
霜風送心香、虔拜寛永寺靈域、
菊花薰意華、方開三緣山法莚、
三部妙典、禮誦、通七重寶林之梵聲、
五種正行、讃嘆、度八功德池之法音、
鳳笙龍笛、妙響伊全、滿山松籟、德韻永存、
玲膳上供、法味騰涵、滿林殘陽、惠風長仰、
昭々靈儀如在、穆々靈儀方格、
伏冀、依此一會之淨業、
本尊西方願王阿彌陀如來、十方諸佛三世薩埵、
照鑑納至誠、應現受供養、
大居士英靈、
義空高輝三身之覺月、香海廣湛四智之眞水、
增長威神、倍增法樂、
冥祐垂福祉於萬秋、
加護致寧康于千春、
長鎭帝圖鞏固、永資民福伸張、謹疏。
（昭和六、十二、二）

◇淨林院追悼香語

敏明貞淑世推賢。內助多功母德全。
四十八年花月夢。霜風畫處發金蓮。
惟。
資性聰敏 貞純奉事。敎養子女。幾閱苦辛。內助收功。寺門經營。藉其力甚多。惜哉。世緣不長。一朝臥病。正念西逝。寔可痛惜。豈勝哀悼邪。雖然。業繫茲斷。常樂華開。惑障今盡淨境。智火燒有鳥幼身金剛妙體。長顯現甘露。洒生滅殘骸。法界智身義成滿又可以慰哉。遮莫卽今上品華臺莊嚴既備處。法雲金殿寶飾具足時。如何是送別一句。
先だゝば遲るゝ人を待やせむ
花の臺に半殘して
南無阿彌陀佛
（昭和七、二、二十三）

◇倉靈輪大和尚初七日忌宣疏

興隆攝化盡精誠。七十五年護法情。

化之深亞功默軒宜稱諏訪聖人者也 夫諏訪湖勝景與琵琶湖秀色雙鳴於天下 唯憾鷲湖隱君子其人無傳巳耳其人誰邪曰岩垂今朝吉先生是也 先生諏訪人胷襟海曠廉直爲性識見高邁學術精深長經理之材 而不求顯榮任小學校長兼中學校敎諭 至高等女學校長純誠一貫致力于薫毓三十有餘年子女崇仰獨如 慈父又能釋紛解爭輔導利濟爲鄕黨謀莫不至蒙先生 之敎成家立身者洵不尠少吾三如會 荷恩惠最厚矣先生逝而十年遺德日彰流風餘澤追慕益切卽人先生 行樂之地立碑以表甘棠存愛之志銘曰。

岡見山秀　淸高其志　鷲湖水麗　洪量可比。
臥龍一生　眞是大器　貞珉百秋　功德永誌。

(大正十五、七)

◇畔柳久五郎氏建碑選文

仁俠剛邁當難不辭見義必行嘗投政界 慷慨時弊奔馳國事旣而卜店舖於神樂坂 經營氷仲買業防遏私曲矯正綦利勇斷勵精定協同共營之基 釋紛治爭致力公益莫不至焉信望鐘于一身交遊遍於天下嗚乎 如畔柳久五郎翁其績永可傳也 翁以文久三年十二月十二日生於三河國碧海郡安城町四十年前出鄕其凜烈氣節明敏才幹略如何記 而資性仁慈有春風之懷其人眞如美玉仁及禽獸翁今名望彌高 德行益顯過華甲巳五年自建壽碑以爲埋骨之計超凡之風足見修證之深也謂積善所致壽康躋于百秋夫何疑乎碑成 卽刻杉浦重剛先生贈翁詩代銘詩曰。

八面玲瓏有高節　神州男子尙明決。
試將天產比其操　不二峯頭千古雪。

(昭和三、九)

(以下序文)

◇「行誡上人傳」序

洋々たる和風、德聲十方に滿ちて、玆容春よりも溫に、凜々たる高行、道標一世に重くして、仙骨秋よりも淸し、學識や蒼溟の廣きに似て、自他悉く容れ、敎化は沛雨の洽きが如し、善く上下に及ぶ、春花秋楓の美、似て詞藻の豐富なるに比し、月白風淸の高、以て氣宇の洒脫なるに譬

記功、慰無告哀豈非德敎大本邪、信及犬豚人情、以敦仁被雉兎。民風故美。聞說理化學研究所鍾最近研鑽精粹、窮世界學術、蘊奥裨補國運、增進民福、功績寔多焉、而當其粲爛成果、收顯赫發見也、無辜禽獸洒膏血、割骨肉、甘資攻究之材料者、實數千萬、思之則誰無哀情惻々之念邪、嗚呼闡幽發微、攝養人生、其功洵歸此等無告犧牲、益世利人、增進文化、其力固賴斯類可憐貢獻、謂慘苦無限實驗、亡身痛楚百端、考查殞命、其事眞可悲、其死何勝悼、研究所諸賢夙念之、旣有動物慰靈之議、玉置合名會社代表玉置金八君、聞之奮起淨願、期活素發表第拾週之佳辰、恭請研究所諸賢、暨遠近佳賓、茲啓建此一會、法莚、香雲華海、薦研究所學用動物一切羣靈追福、讚唄簫鼓、韻搖霜氣、陳大悲普益德音、幢幡珠蓋、影飄金風、布悉有佛性眞詮、紅楓織錦、現七寶樹林、芳菊聯英、映八功德池、伏冀、本尊大慈大悲阿彌陀如來、十方三世一切三寶、覆護昭鑑、檀上所讚、研究所學用動物一切精靈、共享妙供、齊浴恩光、同脫苦輪、咸離業縛、覺路茲開、慧眼方明、第一義空、金翅一任飛翔、最勝法苑香象自在、遊步彩鳳、玉麟吉兆、應昭代盛運、靑龍玄龜禎祥副民人慶福、謹疏。

（昭和七、十一、十二）

（以下碑文）

◇唐澤山上三助會記念碑文

長野縣上諏訪町土橋源藏、武川又兵衞、飯田太金次三氏の三助會の記として作れるもの

神交金鐵。義比桃苑。道情芝蘭。誼契虎溪。不啻鼎足相約。報答國恩終生渝。三心互勵誓願。樂果盡劫莫變。貞石容崩。友盟永存。品蓮常榮。必證妙覺。此三眞友誰哉。土橋野水。武川寒月。飯田濤聲。

◇岩垂先生頌德碑文

（大正六、十）

昔中江藤樹 高蹋歸田寒村授學德風遠及近江聖人之名嘖々于今焉而人未知近朋治大正 之間韜光晦績敎

法を此山に傳ふ。滿山の松風積翠を凝して、梵音と和し、數峯の櫻雲晩に彩霞を織りて、香煙を帶ぶ。靈地勝區、岳を負ひ、海に臨みて、直に冠絕す。而して、幕府奕世崇重の盛なる、畫棟彩梁輪奐の美、朱紫映發し、侯伯豪族より市民に至るまで、渴仰の誠を運びて、香雲華雨、四時絕ゆるなく、名德高僧、累代法燈を掲げて、四衆を攝し、今に至りて、猶縉紳名門の崇奉を鍾めて、護山保勝の力、頗至れるを見る。茲を以て稀器珍什、庫藏に充溢して、高僧の手澤墨痕尙存し、名寶異物籍冊堆くして、

王公貴紳崇奉の大なるを證す。之を例するに、夫の宋元高麗三大藏の如き、眞に寰宇唯一の至寶なり。而して劫火の嫉む所、祝融時に暴威を逞しくし、維新已來、囘祿の災至高る兩囘、寶器珍什、烏有に歸して痛惜すべきもの間々之なきにあらずと雖、其大部は天龍神鬼の呵護する所、靈佛祖像、千古に法驗の新なるを示し、黄卷朱軸、名什妙墨、秀を百代に傳ふ。嗚呼夫れ偉ならずや。茲年、宗祖滅を示し玉ひしより方に七百年。

叡旨深厚、新に加諡の鴻恩を拜し。祖德赫々として光を萬世に垂る。一宗感喜、聖恩を奉答し。祖德を光揚せむとするの至情、實に熾然として燃えんとす。三緣山亦茲に於てか、一七日の御忌大會を虔修し。某

宮庭伶樂を下賜し、梵唄潮湧、供養雲海の盛を極む。某等此優曇靈芝難遇の祥時に遭逢して、歡喜踊躍措く能はず、乃ち簿冊を閲し、寶庫に就きて、群英の粹を拔き、萬華の芳を聚める凡そ三十、撮影剞劂具に愼重を盡して、之を世に公にし、題して緣山聚芳といふ、斯する所は、丹靑鸞鳳舞ひ、墨痕龍蛇躍る所。

聖帝名將護法興隆の篤きを仰ぎ、名德傑僧、敎化傳持の跡を鑑み、六三信行策勵の一助となして、

朝恩奉答、祖德發揚、愛山護持の赤誠を砥礪せむとするにあるのみ。若夫將りて以て東洋美術の粹を窺ひ、史上與廢の痕を硏むるの資に供せば、文運と世道とに於て、豈少補なしといはむや。宗祖德澤慈雨の涓滴、希くは是の如くして報ずるに幾からむか。謹で序す。

（明治四十四年四月大師七百年御忌日）

◇「現代と淨土宗」序

知見に透徹を缺き、敎導に熱誠を存せざる學佛の徒、動もすれば漫に佛法の超現代を口にし、現代と宗敎との關係を論じて、救世濟民の力能を說くを見ては、一槪に之を排

ふ。誠公の大德偉蹟、固より筆舌の玆に盡すべきにあらざる也、公寂を示してより旣に十年、法苑薝蔔の香畫き、栴檀の影空しく、佛界闃寂として龍象方に寥たり、此際に及むで誠公の德を思ふ、豈國亂れて、忠臣を思ふの感なからむや、世人益公を渴仰して道價年に倍し、半片の斷簡零墨と雖、珍藏百襲する夜光の如くなるに至る、亦宜なる哉、小僧宿緣甚深し、童時公に謁する兩三回、生得の愚蒙、猶介爾の善心を發して、法林を探り性海を航せむと志したる。悉皆公の賜に出づ、爾來十數年、紛々たる妄想雜起し、名利の念、心内に搖ぐ每に、瞑目公を思へば、當年の、慈顏皓眉、彷彿眼前に現じて、且喩し、且戒むるが如し、嗚乎、江湖、公の法澤を蒙りて、慈恩に浴する小僧の如きもの、洵に尠少なりとせむや、道友寶順師、頃日公の垂示數則を輯め、挿むに詩歌を以てし、且二三の逸話を錄す、編纂頗る巧妙を極む。來り示して曰く、子深く誠公を渴仰す、盍ぞ一閱の勞を取らざると、乃諾して之を見る、篇々章々、悉く公が高懷慈涙の溢るゝ所、春風洋々筆端に生じ、秋水冷々墨下に漲り、或は淵博の學識海の如きを認め、時に香雲丹霞、風淸月白の好趣に接す、編する所一として道を履み、行を潔くするものゝ、龜鏡たらざるはなし、苟も之を讀む一過すれば、假令未だ公の高風を識らざる者と雖、心裡忽ち一場の和風を扇ぎ、冷々たるもの、自ら塵腸を洗ふて、杳然俗寰を遠ざかるが如き感あらむ、況や、平素公を信じて、其高德を渴仰して感を今日に深ふするものに於てをや、寶順師の志亦觀るべきかな、剞劂成るを告げ、且其因緣を書せよと迫るに會す、乃ち謹で一言を題す。

誠公舊棲の地東都礫川處靜院の西窓下に於て

（明治二十九、十二）

◇「緣山聚芳」序

吉水の淸流一たび源を東山に發してより、德澤忽に遐邇に布きて、灌注の益羅に普く、慈雨長に群生を沾して、濕潤の恩、十方に及ぶ、而も、祖風壯に智願海の洪濤を鼓して、汪洋の偉觀を盡し、遺影圓に功德池の鏡光に映じて、浩瀚の雄景を極め、教綱章然、丕に張りて、法苑風を慕ひ、精舍林の如く海内に滿ち、法威赫乎、盛に揚りて、教界に雄視し、龍象雲の如く、天下に溢るゝに至りしもの、實に三緣山增上寺の開創を以て、其根基となすべきを見る。斯靈山や創立以來玆に三百年、淸規整然として、一宗の綱格、範を此山に仰ぎ、講學藹然として、列祖の玄旨、

を得せしむるに足るものを求めば、猶幾多の遺憾自ら此間に存せり。今岡教授、愛宗の志、玆に慨然として動き終に其積年の蘊蓄を注ぎ、其周到の史筆を驅り的確の資料に據り、繁を去り錯を正し平明簡易、通俗の、高祖傳を編成し、挿むに舊傳古雅の繪圖數十面を以てし、童幼も自ら祖德に親しむを得せしむ、其心を用ゆるの懇切、筆を着くるの周到、眞に推賞するに足る。通邑大都より山村僻邑に及び、此編が萬機普益の功を收むるの大なる、誰か之を疑はむ。加之、平明の間、精確なる宗史學の根基を横へ、簡易の裡、深遠なる宗義學の源泉を湛ふるを以て布教に從ふもの、講壇に立つるもの之を講本とし、教科書として、段を追ひ、章を重ね詳に祖風を扇揚せば、其利便亦極めて大ならん。其頁數甚だ多からずと雖、精を盡くし粹を擇ぶ、所謂寸璧萬金に價するもの、眞に適時の好冊子たると認む。今や良著公刊近くに當り一言を徵せらる、卽至心隨喜所感を錄して衷心之を江湖に推薦し、添ゆるに、拙偈二首を以てす。

仰則彌高鑽益堅、平明贊述祖風全、由來通俗終南意、顯赫宗光至百年。

專攻刻苦徹源泉、史筆不妨通俗編、普益萬機輝祖德、開來淨土幾金蓮。

（昭和二年十月十五日函山望湖臺十夜）

◇「求道の栞」小序

亡友青民上人の一生に、吾等同行の典型として流澤洵に百世を潤すものあるを覺ゆ。上人が摯實なる求道得信の精進、其嚴肅端正なる操守、その勁烈正大、主張する所畏るるなき、其溫容詢々人を教へて病を忘るる、此等の一尙以つて世の師表たるに足る、矧んや之を具ふる事をや、上人逝きしより二十有三年、教界の近狀に見、宗門の現態に考へて、亡友を思ふの情極めて切實なり、亡友もし存せばの嘆豈獨り吾のみならんや。

今や遺弟正定寺善久師、上人の齋忌を修するに當りて癸亥の災餘求むるに難き『青民遺書』の要文を纂輯し十方の師友に頒ち其志の厚きは論なし、世を益し、人を利するの大、豈亦言を待たんや。四十年前、淺草の精舍、春花秋月幾回か亡友と苦談したる追憶、新刊を得て自ら眼底に新なりて、感慨何ぞ堪んや。教界宗門の士、亦幸に此小冊子に由りて上人の面目を偲び反省を得、決意を固めて、其警世度生の精神更らに大に振ふに至らば卽ち亡友の志亦伸ぶる

して阿附と罵り、迎合と嘲り、毫も適時敎導の誓願を思はざるもの亦之なきに非ず。蓋宗教の超現代を、本質とせるや、猶其超國家を理體となすと同じ。而も本質理體は必ず廣大の力用と相待つ。此大用に於て國家の補導文化の翼賛あり。現代の適化亦玆に於てか其大能として存せざるを得ず。此大用大能なき所、宗教なき也。佛法なき也、此廣大の誓願化導を離れて、徒らに空虛の理體に執せんとす、惡平等の邪見にあらずんば、二乘自調の退墮のみ、是れ世尊の大に戒むる所に非ずや。見よ、赫日煌々として、天空にあり。超勝獨妙、高く萬衆に絕す。而も其照明煦溫の力能、億物其惠を被らざるはなし。佛日無垢輪亦實に是の如し。此毘盧遮那遍照の大能を沒して太陽を論ずるもの、何ぞ其見の僻にして、志の淺き甚しきや。

淨土敎は由來大慈悲等流の眞諦、最も時機の相應を高唱し、末法萬年、餘敎悉く滅する時、獨り攝化の大用を留むるを尙ぶ。大師華天密禪の諸敎に對し、「機根くらべには源空勝ちたり」と斷ぜられし深意蓋玆にあり。現代適化の妙用は、玆に於てか至處に達し、此に來りても最も活潑々地の大能を縱にす。是故に現代敎導を離れて、何の處にか淨土敎あらんや。現代人生の解決、現代文明の淨化已外、豈大悲本懷の對機を求むべけんや。這箇の活機を體得する能はずして念佛を說き、淨土を談ずるのは、抑も佛祖の本懷に暗きものと云ふべきのみ。

弦月桑原君は至誠護法の士なり。常に、道を傳へて倦まず、四方に奔走して、坐席暖なるに暇なく、軍隊に病院に監獄に、詢々として、眞乘の大能大用を闡顯す。其知見の博、教導の誠、良に適時の敎家として恥ぢざる所なり。

今や其著「現代と淨土宗」新に成るを告ぐ、是渴者の淸泉、饑人の珍膳として現代求道者の熱望を醫するに足るべし。之を江湖に推薦するに於て、豈其急先鋒たるを辭せんや。乃ち平素の懷ふ所を書して序文に代ゆと云爾。

（大正五年十一月下旬東京江東僧院蕃蔡殘紅處）

◇「善導大師繪詞傳」序

大正大學教授今岡達音師、精攻苦討宗史を研め、學徒を陶冶する多年、其勞苦の多きに倦まず、其功績の少からざるに傲らず、專意力むべきに力めて殆んど世事と相關せざるが如し、今や吾が宗高祖の遠忌を迎へ、報恩大會の準備漸やくにして進み、鴻德鑽仰の好著續々として出づ。而も廣く之を民間に流布し、童蒙に至るまで光明の眞風を仰ぐ

益攻究の熾烈を加へ、意氣更に新たに、精力彌集中して世外に超然たる學風の崇高なる、學徒仰がざるなく、圓熟精錬の義燈、高く光を放ちて隱然として斯學一方の雄鎭たるの大をなせり。

惟ふに、吾國維新文運の蔚興と共に、梵文學の開祖たる譽を荷ふべきもの、誰か指を南條文雄老師に屈せざらん。老師が堅實の創業を紹隆するに博洽雄麗、光彩一世に陸離たる高楠順次郎博士あり。梵學の建設普及、其功、マツクス・ミユーラーの衣鉢を傳へ、之を兼ぬるに養材育英、濟々の多士を其門下に輩出せしめし經綸、方に大ウエーベルの力量を以てす。吾が荻原師之を承けて、博きを求めず、多きに走らず、専にして精、深にして確、究むる所微に入り、細に至らずんば休まず。探る所、源に達し、底に徹せずんば捨てず。孜々汲々、一に心を潜め力を竭くして、唯佛敎梵語の開拓を以て己れが任となす。聖經に所謂「窮深盡奧、究㆓其涯底㆒」の金言、借りて以て師の爲に贊すべき乎を思はしむ。斯の如くして、今や師は啻に古國に於て斯學の專攻其右に出づるものなきのみにあらず、歐米の學界に於ても亦其嚴密精核の批判に畏敬し、師の一顰一笑も之に注目するの觀あり。南條老師は之が爲に其梵本楞伽の出版に際して、特に師の說に聽く所甚だ多く、レギ敎授も其計畫稱友の俱舍釋論の公刊を師に一任したるが如き、實に之を證すべきにあらずや。試みに師が世に問へる「飜譯名義大集」の校註、安慧「唯識釋論」の評譯等を把りて見よ。師が精彩光輝の潑溂として、自ら群流を拔くものあるは、直に之を了するに難からざらん。最近南條文雄老師不朽の大著英譯明藏目錄の再版に當りて、之に添付したる是正補遺の索引の如きも、亦よく師が精透の片鱗を窺ふべきにあらずや。

荻原師既に其專一の攻究の爲に、早く帝國大學講師の職を去り、唯大正大學梵語學敎室の主任を以て甘じ、今や其不撓精進の全力を傾倒し、其蘊蓄を集注し、平素の造詣を揮擢して現觀莊嚴論、稱友俱舍釋論等の校訂の難事を完成するに幾く、更に其畢生の本願たる瑜伽菩薩地の公刊も遠からずして大乘敎學の研究に無盡不磨の寶藏を開展して一新時期を斯界に劃せんとす。而も荻原師は更に今其綽々たる餘力を驅りて、吾國梵語學界の名流俊傑を會同し、漢譯對照梵和大辭典の編纂に力め、佛敎界に於けるベートリングトロオトとして至難至高の創業に從はんとす。學壇が其完成を翹望する大旱の雲霓の如し。

と見んか、謹で序す。

（昭和三年七月明照會館樓上）

◇「荻原教授還暦記念祝賀論文集」序

淨土宗正僧正勸學ドクトル・フヰロゾフヰエー文學博士荻原雲來師は、明治二年二月十日和歌山縣に生る。幼にして嚴父を喪ひ、慈母に伴はれて上京し、當年布教興學の大德として淨土宗の重鎭たりし荻原雲臺上人の門に入りて薙染し、稍長ずるに及びて其嗣子となれり。師は夙に英語を修めて寧馨兒の名高く、淨土宗本校に學びて大小兩乘及び哲學諸科を研め、別して倶舍大毘婆沙を精攻し、明治三十年優秀の成績を以て其業を卒ゆ。同三十二年選ばれて第一回の淨土宗海外留學生の命を受け壯遊の途に上り、當時の獨逸國ストラスブルグ市、カイザー・ウヰリヘルム第二世大學に入り、教授ロイマン博士に師事して梵語學を專攻すること六星霜に亘り、精勵刻苦、其大材偉器を玉成す、師は斯の如くしてよく恩師が精透深密の學風を傳へ、加之、漢譯大藏の博渉該羅、梵本の對校的確を極めて佛教梵語の特色を闡發する獨特の手腕を示すを以て、其名漸く歐洲の學壇に顯はれ、特に故ケムブリヂ大學教授セシル・ベンドール博士の大乘集菩薩學論を「佛教文庫」に公刊するに當り、終始一貫、多大の援助を與へ、其功を成さしめしに由り、リスデギッヅ教授夫妻、ヘルンル、ブサン、リュウデルス等の諸大家頗る此極東の青衿一學僧を敬重するに至り、ケムブリヂ書庫の珍什たる夫の漢譯瑜伽論菩薩地の梵本を貝葉中に發見し、其對校の結果、梵筴の整理を完了したる功績は、師が梵學界に於ける地位をして居然として終に動かすべからざるに至らしめたり。恩師ロイマン教授は、玆に於てか、謙讓韜晦の荻原師を強ゐて、此貴重なる貝葉公刊の豫報を草せしめ、之を學位論文に宛て、以てストラスブルグ大學梵學教室の誇となせり。

荻原師は此學界に於ける隆々の聲譽を荷ふて歸朝するや、殆ど何等世に求むる所なく、一切の塵事を抛擲して、主一無適、佛教梵語研究の外、何者をも顧みず、或は帝國大學の講師として或は宗教・豐山・立正諸學院の教授として、緻密精嚴の鉗鎚を提げて、懇親篤切、學徒を提撕し、手法實に恩師に髣髴たるものあり。時偶、癸亥大震の災禍俄然として襲來し、帝都の大部烏有に歸し、師も亦積年蒐集の資料、刻苦輯錄の手記と共に、一切の藏書を盡して悉く之を灰燼に委せり。師此間に處して、毫も屈する所なく

を期せり。而も或は多少の過誤、雄篇を累するを怕る、慚惶實に甚し。且切に寄稿諸賢及讀者各位の諒恕に待つ所、公刊の期日も、去秋荻原師の就蓐の爲と、關係同人が公私の繁忙とに妨げられて、計らずも歳餘の遲延を生じたるが如き失態に陥れり。是亦偏に大方各位の高察に愬へて、寛宥を仰ぎて止まず。唯某等有志の希ふ所は、此記念出版に由りて斯學の國際交驩、益親睦を加へて日新宏張の機運を激作し、萬國の博同講究、彌緊密を重ねて、光顯振興の美、更に盛なるを致し、延いて以て世界文化の進展を莊嚴し、其康寧和樂の基礎を培ふを得て、長に荻原師の學德を傳へ、永く内外贊襄資助諸賢の恩義の美を貽すに至らんことを、謹で序す。

（昭和五年四月）

◇「正朔要覽」跋

我國維新已前、歴朝數々改元の事あり。民間亦私に年號を用ゆるもの出で、國史を學ぶに當り、學徒その繁絮複雜に困惑するもの蓋し少しとせず。編者玆に見るあり。三十餘年の精力を傾け、博綜該羅書史記傳に渉りて、正朔の大系を撮み、繁を袪り簡を擇びて、專ら正確を旨とし、悠遠紛糾の年次を整頓して本書を成し、一目掌果を覩るの觀あらしむ。其苦心の深くして努力の大なる編者報國の素志と相待ち人誰か之を贊美せざらんや。本書が便益捷利學徒を裨益するの大なるは論莫し。

之に藉りて國史の大綱を了得し、延て以て國民精神の振作に資するの功亦見るべきあり。

卽ち之を國民必須の寶典と云はむも亦誣ひたりとせじ。特に精攷審覈、年號の典據を明瞭にし、其勘文者を精査し、且つ改元の詔勅を謹輯したるが如きは、編者宮本和一氏の心を用ゆる決して尋常にあらざるを知るべし。寔に敬服に堪へざるなり。書成る、卽ち數言を贅して跋に代ゆといふ。

（昭和五年七月蘭盆）

◇「和語燈錄」序

吾が三祖記主禪師、超倫の學德を以て、大に祖風を光闡し、法幢を湘南に樹立したまふや、化風盛に振ひ、四來の俊英、山門常に市をなし、達識宏辨の士、濟々として桃李芳を競ふ。就中、良曉・尊觀・慈眞・性眞・禮阿の諸高足は自ら群を抜き衆を挺で各々一方の雄鎭として、化を當時

今や荻原師、齒德正に高く、學界の宿老として世の敬重彌加はり、去昭和四年正に還曆の喜を迎ふ。年壽を賀するが如きは、固より僧家の法にあらずと雖、歐洲の學界が學位受領の二十五年を祝し、五十年を慶して學人の業績を旌表し、講究の振起を圖るに準じて、邦俗に遵ひ以て荻原師の功業を光顯し、之を機會に斯學の發展に資する、亦所謂菩薩々般若の勝方便たるを失はざらん乎。友人、同志某々等、此に於てか去昭和三年四月十七日、荻原師が震災後淨財を抛ちて再建を助けたる芝公園明照會館に會して、賀壽記念公刊の議を協定し、幸に大正大學學報出版部關係諸賢の贊同を得て、邦文及歐語の論集を刊行するの計畫成り、不肖等有志者の名を以て、廣く之を內外斯道の泰斗に訴へ、雄篇の惠贈を勸請したり。喜しい哉。吾等が微學は荻原師の信望の存する所、內外碩學の深厚なる芳情高誼と、斯學興隆の盛意とに容れられ、朞月を出でずして、遠く海外金玉の大作、姚黃魏紫の美を聯ねて雁信相次ぎ、吾國學壇の宿將の亦精銳を盡くして之と相應じ、玆に吾國梵學の壇場未だ嘗てあらざりし一大雄景を展開したり。唯見る、論は皆未だ世に出でざりし大觀精攻の傑作、文は悉く新に研を發せる闡出發微の至筆にあらざるなく、其一篇と雖、學界の視聽を聳動するに足る。況んや數十篇を星羅して珠璣互に映じ蘭菊相薰するの盛觀を極むるに於てをや。講學授敎、分陰の至貴なるを割き、祕奧を傾け蘊蓄を注ぎて毫も悋む所あらざりし大家諸哲の道情の崇高深厚なるに至りては、某等欣躍の極、何の辭を以て之に當るべき乎を知らず。唯衷心の至誠を披き、至高の敬意を捧げて、諸大家の恩義を銘記せんのみ。

吾が大正大學經營の天台宗・新義眞言宗豐山派及淨土宗の宗務廳及有力の諸大德が、或は補助金を交附し、淨財を醵出して、刊行の資源に充て、或は畫策奔走、力を竭くして事業の促進を計り、以て此擧をして終に今日の成就を見るに至らしめたる護敎興學の盛意に對しても、吾等が感激措く能はざる所、夫の內外碩學、廣大の法施はかく此無所得清淨の財施と相應じて、玆に圓滿具足の功德を實現したるもの、吾等は佛祖恩光の下に、唯不可思議の勝因勝緣を讃嘆して、諸大德の至誠に酬ひん乎。

某等有志は玆に、終りに臨み、本集編纂に就きて數言を費すの聽許を大方に請はんとす。本集編輯の大作雄篇は、和洋兩文共に其序次、一に玉稿拜收の次第に由れり。印刷の校正に就きては、某等關係者精力を竭くして其遺憾なき

謂ふに現代の教家に求むる所は徒らに高遠空䟽の理義にあらずして切實簡明。通暢易解の實踐にあり。この要望に叶ふべきの宗書は第一に吾が和語燈錄を推さゞるを得ず。良哉師の美擧、是に於て益ゝ意義の深切なるを認む。嗚呼誰か之を讃せざらんや。公刊就るに近く一言を徵せらる。愚蒙また何ぞ縛草の請なからんや。卽ち平素の所懷を記して恭く衷心の隨喜を表すといふ。

（昭和五年佛名會前七日）

◇「周易對照觀音籤新釋」序

印度は吠陀時代の昔から、實に呪術と卜占との祕密の國土であつた。然し釋尊が一たび出世して新しき正道を宣布するに及び、一切の卜占や呪法は嚴重に之を禁止して了つた。蓋し斯の如きものは、恐るべき幾多の罪惡を生み、また愚昧なる迷信に昏睡せしむる流弊を認められたからであらう。

然るに佛陀の滅後、其教は東洋を風靡して希臘の一部までも三寶の德音を仰ぐに至り、西域に支那に大慈の光明が赫々として輝き渡るに隨ひて、阿含諸經の中に旣に萠芽を有した。眞言陀羅尼が大乘諸經に缺くべからざる一要素として發展し、敎化の善巧方便と、包容該雜の教理とに基きて、廣大なる眞如海中には、卜筮の長江も呪術の大湖も納めて餘す所なく、遂には宿曜經や梵天火羅九曜の樣な占星の經典や、占察經、梵天神策經の如き專門の卜占聖典が支那に譯出さるゝことゝなつた。

支那の龜卜や占筮は可成に古い。王室に大卜の官が嚴然として存し、天像地變は勿論公私に亘りて、卜占の盛であつた事は左傳一つ見ても判ることである。其處に印度式の卜占法が渡來したものだから、佛教信仰と固有の支那卜占との親密なる關係を生じ、而も特色ある發達をしたのも怪むに足らむ。

此等の混合占法は可成り古くから記錄に見ゆる、然し神策經から發達した、竹籤の占法は、唐あたりから其方法が次第に備つて來た樣で、或は一百籤或は一百參拾籤の存在したことが古書に見へる。而して此等は悉く觀音大士の信仰と、結合したもので、觀音の妙智力、其廣大な功德から、人事の吉凶泰否が至誠なる歸仰を通して籤に現はるゝ信仰の流行となつた然し支那は觀音籤ばかりではない。關帝籤などもあつたから、尙他の佛仙菩薩の籤法が存在したことも容易に想像される。

に布けり。

了慧道光上人亦此等、錚々たる諸法將と雁行英を聯ね、連轡雄を馳す。師蠻禪師の僧誌上人を傳するに、之を三祖門下の上首を以て推て特に智辨の縱逸なるを賛す。以てその聲譽が如何に教界に重かりしかを見るに足らんか、而して其深遠の解行を寂後廣濟和尙の勅謚ありしに徴して知られ、其の文藻に富み、編者の雄材あるは、入宋訪師の傳必ずしも謬にあらざる事を證すべきにあらずや。

學者往々上人の宗義を目するに師傳に順はず、正源と支ゆる所なきにあらざるを評す。その大醇小疵の指摘、或は當らざるが如きも、而も上人實踐の尊き、祖德顯揚の赤誠は宗風發揮の摯實なると相待ち、深重なる報恩の願行は幾編の著作に躍動して宗徒をして長へに淸範宏模を仰がしめ、其の學説の是非を贖ふて餘りあるの觀あり。特に夫の和漢兩語燈錄、苦心の編纂は眞に是蓮門不朽の一大偉勳にして、苟くも元祖を崇奉し遺敎に浴するものは、宗門の自他を論せず、流派の正傍を問はず、等しく此寶典を座右に安じて、共に永く上人の恩惠に感謝すべきや論なし。傳を案ずるに道光上人攝化度生の遺跡、著書講說の道場に華藏悟眞の兩寺あるを記す。後寺は上人教化の大半を費したる靈場として知られ、其の流派の本山たりしことは三條流の名、之を證すべきが如し。應仁の大亂、悟眞の堂宇、一朝灰燼に歸してより、三條流派之と共に堙滅して其の傳を失し、碩學義山の講錄まだ其の遺跡の覓むべからざるを慨せり、而も近世の大德袋中良定の檀王法林寺を建立して、廢絕を復興し遺跡を新にするあり、其の名更まると雖も、今や上人を追崇して開山とし、袋中師を尊びて中興となし、法燈を紹隆し、堂宇を盛にして、大に遺風を顯彰し、上人不朽の功業と共に、又其祠堂を不朽に傳へんとす。上人の盛德洵に孤ならずといふべし。

現住信ケ原良哉師は篤實護法の士なり。夙に開山の偉德を鑽仰し、寺門の興隆に力め、酬德報恩を以て己れが任となす。蓋し宗門稀に見るの人なり。師今やこの趣旨に由りて、江藤澂英君等の學匠と圖り、先づ開山不朽の遺業、和語燈錄の公刊を發願し、元亨の古板に由りて、嚴密周到の校訂を行ひ、以て廣宣流布を期せんとす、蓋し開山が元祖及辨然兩祖に奉ずる酬恩の赤誠と相通ずるものあり。洵に景仰の至りに湛へざるなり。矧んや師の淨願は、此の勝業に由りて自信敎人信の聖訓を體して宗運顯揚に資せんとするの深きを副ゆるをや。其篤志唯感銘を益すのみ。

（以下趣意書）

◇大正新修大藏經刊行趣旨

上下三千載、光華限りなく乾坤に盈ちて、粲爛たる文化は東西適き所に百花の芬芳を發き、縱橫幾萬里、德澤遍く群萠を津濟して、甘露の法雨は到る所、億兆の生靈を滋潤す。仁愛の至道、圓妙の極理、十方に通じ、三世を貫き、一切を包攝し、萬有を該羅す。大聖釋迦牟尼の眞敎、蕩々乎として夫大なる哉。而して此至大絕妙の遺敎を傳持宣揚するもの、實に吾が大藏經あり。是卽ち八千餘卷、一億有餘萬語の一大叢書にして、その中宇宙の眞諦を說き盡し、人生の歸趣を示し極め、百科の知識は悉く綜會融合して餘す所なく、修德信證を敎ふる、奥を究め深を盡して至らざるなし。眞に是人類智德の源泉にして、世界の一大寶庫たり。大藏の名ある洵に宜なりと云ふべし。此中藏する所の寸珠片璧も、皆よく世を濟ひ人を利するに足る。若全部の摩尼夜光を擧げて、遍く天下に公開し、その勝妙無上の大功德を、廣く世間に彰明せんか卽ち內には刻下沸鼎魚爛の慘狀を呈する思想界の動亂を戡定して、莊嚴の文化を昭代に建設し、雄大堅實の人心を確立するに足り、外には以て世界に寬宏公明の大道を擴充して、平和を增進し福祉を倍加せん。而して能く之が闡發宣布に當り得るもの、吾が日東學佛の徒を措いて誰ぞや。弘通の責務は一にその雙肩に懸れり。況や又世界大戰の後、求道探眞の切要に促されて、佛敎の討究は、益歐米の天地に其潮勢を高め、博涉深獵、漢譯の聖典を蒐索するの學者、亦尠少にあらざるを見るをや、吾國佛學者の任務、玆に於てか更に重くして且大なるを痛感せずんばあるべからず。

然るに此千古の一大寶藏は、憐むべし、今や巨刹名藍の高閣に祕襲せられて、徒らに蠧魚を肥すの具となり、若しくは單に獻香供華の對象として崇奉せられ、その眞價久しく埋沒し、至寶空く匣中に朽ちて、世を益し人を濟ふの大能、全く顯現せざるの憾あり。且その刊行の舊き、黃卷朱軸、漸次散佚湮滅して學徒の之に接する頗る難く、縱令之に接し得るも八千餘卷の尨大、之を獲る實に容易の業にあらず。見よ、鐵眼禪師の黃檗板は現に其梨棗を宇治の祕庫に留むるも、廣大の容積、屋を埋め、棟に充ち、剞劂旣に至難の業たり。明治年間の縮藏、卍字藏は稍繙讀に便なり

吾國に觀音籤が何時傳つたかは不明であるが、現在一百番のそれは元三大師即ち叡山の良源僧正を以て其開祖して居る。然し籤の偈文即五言四句の吉凶の說明は大師の自作であつたか、或は支那傳來のものをそのまゝ大師が襲用されたかにつきては猶少しく的確な研究も要らう、然し偈文の措辭押韻其他から見て先づ後者であるとしても差支はないようだ。傳には元三大師が信州の一寺院から觀音籤を相傳されたといふ話もある樣だ。

かくて此一百番籤は淺草の金龍山をはじめ、到る所の觀音奉祀寺院で目下盛に行はれて居る、但し籤の偈文の錯誤や、解釋の矛盾、讀み方の亂雜なのが可成りにあつて、折角の至誠を凝して疑を斷じ迷を決せんとする信仰も、之が爲に冷却せしめられ、或は却て迷路に導き疑網に追ひやらるゝが如き遺憾さへ生じ、寺僧の無關心と無學に寧ろ啞然たらしむるものさへ甚だ少くない。

道友江守錄輔翁は篤學力行の士で經史の素養甚だ深きに加へ、特に易理に通曉して、詩文も頗る見るべきものがあり、佛教教理に於ても其概要に亘つて居る。坊間觀音籤に關する俗書が甚だ杜撰にして、用をなすに足らざるに加へて、名藍古刹の印籤にも前記の如く甚しく本來の旨に乖くものあるを慨して、平素の蘊蓄を傾け其讀方の過誤を訂正し、文句の錯亂を更改し、平明周到、籤偈の意義を說示して眞に鄭寧親切を極めて居る、加之、之を易理と比較研究し、六十卦の各卦を取りて之を一百籤の各偈に配し、間ま前人未發の說をも見受けるのである。觀音籤の說明書としては恐らく空前の名著であらう、觀音籤も恐らくこの書を以て眞實の功力を發するであらう。

言ふまでもなく易斷の根本は實に至誠に存する。觀音籤も亦此至誠が根底である、天地山澤、風雷水火、一毫も僞なき天則の上に眞正の至誠が感通して人事自然の未知を測るのが易であり、如來の眞性一誠大慈の發現する所に至心歸命の誠ある時、自ら因果謬らざる、人事天象の未然が現はれ來るのであらう、易と佛教は決して別のものでない。この東洋精神の重點を捉へ得た江守翁の勞力は頗る多とするに足ると信ずる。

今や此平易にして而も奥妙に、通俗にして雄大の哲理に富む快著の校訂漸く成らんとする時、計らずも江守翁から一言を徵せられた。仍て筆に任せて平素の懷を書し。翁の快著を世に薦む。

（昭和七年歲盡前十日　東京佛教倶樂部樓上にて）

圖らんとす。凡そ斯の如くして略時代の要求に應ずるに足らんか。

唯怕る、事既に難中の至難に屬し、某等の爲す所、固より全きを望むべからず。錯誤遺漏隨て必ず多からん。前程を望むに迢々として遠く、險山萬里、途を塞ぐの感洵に深し。然れども弘傳の愚忠、幸に佛意に順ずるか、各宗の當局協同一致して事業を援護し、激厲策進至らざるなく、學界の碩德、名門、貴紳齊く贊襄を一にし、之に加ふに外には列國の碩學熱烈に資助を與ふるあり。資料の蒐集、今や潮集し、校勘の事業方に着々としてその途に就くの喜を見る。大正新修の機運玆に於て旣に熟し、各宗一致、列國協調の一大平和事業、絕好の文化活動は斯くの如くして洋々の希望の間に、昭代の奎運を莊し偉觀を添へんとす。乃ち玆に一切を發表して廣く江湖の協贊を仰ぐ。四方篤學精攷の君子、虔信實修の大人、希くば奮ふて此淨業に援助を吝むなく、此勝事をして迅速成就するに至らしめ、內は隆昌の國勢に應じて民心啓沃、文教翼贊の功を收め、外は坤輿の和平に貢獻して、永へに萬邦慶福の春を謳歌せんことを。謹で白す。

（大正十二年四月八日）

◇教學週報發行趣意書

謹啓時下炎暑之候益々御清祥之段宗幸之至、欣賀此事奉存上候。陳者、目下政界內外の狀勢は旣に高鑑の如くに有之、これに對應策動すべき、宗門政界の一大刷新に就きても、其痛切の急務は是又殆ど贅辭を挿むの餘地無之乎と存ぜられ候。

此時に際し、嚴明なる宗運の指導、公正なる宗事の批判と共に、一宗全體の公機關として、周察敏速と報道を提供し、教學社會事業の連絡を親密切實ならしむることは、闔宗刻下の要望止み難く、新思想問題の概要智識現代教化に資すべき教材提供の如きも屢各方面の要求、高聽に達し居り候事と存候、而して是等各方面の要望の近時湊合大成せられしものか、前月來各方面より頻に新雜誌發刊の御相談に接し、或は激勵勸奬の過分なる御書面頂戴致し居り、目下財界の慘況にも關らず、匿名の淨財御提供の御申込を受け、創刊に關する資金の如きも何時にても準備成れるの御通知を忝ふし、加之從來何等の宗政團體に屬せざる學者布教家の奮ふて同人として、編輯に從ふを吝まれざる幾多不請の大士も不少、各方面の御親切なる純志同情義俠は翕

と雖、その本今甚乏しく千金猶之を得る能はざるにあらずや。而してまた幸に之を得て一たび經本を手にするの快に逢ふも、その編纂舊習を襲ひ、古傳に從ふが爲に、錯雜混淆、通覽の便を缺き、講究殆ど望洋の嘆あり。その校訂の如きも、時代の進運と共に大に改善を加ふべき餘地少からず。之を現代學界の切實なる要求に照らすに、充分の滿足を與ふるに足らざるや言を俟たざるなり。東西の識者、玆に於てか何等かの方法に依りて、時代適應の新刊藏經を見んことを熱望する、比年、大旱の雲霓を臨むの觀あり。某等不敏自ら揣らずして、玆に大正新修一切經公刊の大業を發願したるもの、豈止むを得んや。

某等既に此大業を發願す。竊に望む所は、之を以て聊か昭代の文化を裨補し、大教の宣傳に補翼し、希くは以て、『大正新修』の名を辱しめざらんことを。卽ち新修の骨目として、五大特色を擧げ、之を本刊の標幟となさんとす。第一は卽嚴富博涉の校訂なり。蓋し最近二十年、中央亞細亞の發掘事業踵を接して盛に泰西に起るや、于闐、燉煌、龜玆、高昌等の諸古國、廢墟の下、千年の珍籍を出し、石崛深き所、驚異の祕庫を發き、六朝の古經、唐宋の手寫、續々として江湖に現はれ、佚經奇書今や英佛の書庫に累々山積するに至る。某等は先此古本に就きて現行本との至嚴の校讐を行はんとす。是獨り大正の昭代に於て能くし得べき所、夫何等の慶福ぞや。某等は之に加ふるに正倉院勅封の天平寫經拜觀の允許を得、之に參酌するに、大山巨刹名門貴紳の祕藏古經を以てし、所有內外の資料を盡くして周到の對校を行ひ、現行一切經の紕繆を是正せんと欲す。第二は周到淸新の編纂之に次ぐ。某等は公正嚴明の學術基礎の上に、根柢より從來の混雜せる經本の排列を更新して、系統組織を明確齊整ならしめ、逸經を探り祕本を覓めて、悉く之を編入するの外、更に研鑽信修に切實なる章疏を加へ、大藏內容に錦上華を添へ、充實周密、間然するなきを期せんとす。第三の梵漢對校は某等の竊かに東西最近の研究を綜合し、平生の講究を江湖に薦めんとする所。凡そ梵語巴梨その他苟くも原本あるものは、力を竭くして之を對照し、經題品目は勿論、經中の人名地稱學語等、一々之に原語を付して語原を明にし、以て研究に便せんとす。第四は經典の內容索引を製し、藏經諸刊本の對照表を造り、且つ內外現存の梵本及古寫本目錄を加へて、討究の大成に資せんとし、第五は此新藏經をして經本の携帶を利便ならしめ、頒價を低廉するに全力を注ぎ、大に聖典の洽及流布を

譬ふべき信行の芬芳と共に、百難の雪を經て、益崇高を加へ給へり。此間偶維新の大變革に際會して、宮は纖弱の一身を狂瀾怒濤の中に投じ、朝幕の間に苦節を嚴守し、卓然として大義名分を力說し、無用の干戈を避けしめ、德川の社稷を一髮の危機に救ひ江戶百萬の生靈を兵火の厄より免れしめ給へり。其大功偉勳は、眞に百世に亘りて仁德貞烈を欽仰し奉るべき所、婦道の儀表夫れ何人か宮に匹ふべきものあらんや。

昨秋、宮の五十年令忌に丁り、三緣山增上寺に於て、法要奉修の擧あるや、海內翕然として報恩歎德の聲に滿ち、朝野官民競ふて群參し、延きて海外に及び、遺德を贊するもの少からず。其盛況緣山創立以來未曾有と稱す。特に滿都數萬の女學生が、赤誠の想華を廟前に捧げ、接踵連袂、肅々として獻香拜禮したる壯觀に至りては、如何に令德の廣大なるかを證すると共に、女子敎育界が、多年求めんとして得ざりし最高理想の女性を、宮に於て窺ひ奉り得たる渴仰歡喜の表示ならずとせんや。謂ふに世界各國各理想の女性あり、英のナイチンゲール、佛の聖ジャンダーク、獨の女王ルイゼの如き其最たるものなり。然るに宮は夫等にもまして適切深厚なる感化を吾が國民に與へ給ふ最高最大の靈格を示し給へり。

吾等は國民として將又東京市民として、宮を永久に禮讃し記念し奉るべき重大の理由と責任とを感ず。第一婦人の最高典型として、第二國難匡濟の女神として、第三東京市の大恩人として、而も皇室の直宮として、これを肉體の上より見、これを道德の上より見、これを東京市の上より見むとき、豈一遍の奉讃講說、一時の法要儀禮に止むべきものならんや。宜しく永久奉贊の方法を講じ、令德普及の方途を案ぜざる可らず。吾等こゝに於て靜寬院宮奉贊會を設立し、報恩謝德の至誠を致すと共に廣大の令德を宣揚して婦道の刷新を圖り、女子修養の龜鑑を示し、以て現代の急務に應ぜんとす。冀くは滿天下の淑女縉紳、擧つて本會に加盟し協力同心速かに所期を達成せんことを。

（昭和二年十月二日）

◇日佛佛敎協會趣意書

歐洲近代の初頭に立ち、學術文藝の山斗として、典雅豐麗の盛觀、居然覇を寰宇に唱へしもの誰か佛國を推さざらんや。その燦爛の歷史は今に芬芳を傳へ、光彩を鮮かにして、パリをして猶依然として世界文化の雄鎭たらしめつゝ

然として今や新雜誌の上に集るの觀有之、拙生頑魯不敏と雖、之に對しては唯々感激の外なく、玆に、幾回同志と諮り、

宗祖の御忌日を期し『教學週報』第一號を創刊

仕候間、此段平素の御芳情鳴謝しかたがた、謹で御報申上候、謂ふに現今國家經濟の狀態に見ても、宗門雜誌に可然統一整理を斷行すべき場合に有之、屋上屋を架するの愚擧は相愼み度、尙目下宗界一部の事情は或は新刊雜誌に就き多少の誤解も無之にあらざるべくとも杞憂候も此等は得て「教學週報」自身の上に、諸賢の公明の御批判相願ふことゝ仕り不遜なる釋明などは相避け度衷情御酌取願度候。「教學週報」は斯の如く物質上、全く純正なる愛宗護法の結晶に有之、不適不材なる拙生として此公機關運營代表に當るは到底覺束なき儀と深慚深愧の至りに候も、一時乏しきを承けて共主宰の任を瀆し、出來得る丈の御奉公仕り度、同人一同、空拳赤手最善を盡して內には目下宗門の狀勢に幾分の貢獻を致し、外には宗門の輿論と實情とを教界社會に御披露申し、宗勢の社會的基礎を固くするに資したく何卒平素の御道愛を倍し、同人同樣特に御援助奉願度此段一同を代表して御繁忙中を顧みず、御高鑑願上候也。早々拜具。

（大正十五年七月二十五日）

◇靜寛院宮奉贊會趣意書

天壤無窮の大宗家として、上に皇室を奉戴し、文化の淵源德敎の典型を此に仰ぐは、是れ吾が國體の一大特色にして、歷朝の龍子神孫は躬を以て民に先んじ、治に當りては奎運を開き、亂に臨みては國難に殉じ、以て鴻範を遐代に垂れ給へり。その芳躅偉蹟は、史上昭々として千載を照らすものあり。

恭く惟れば、靜寛院宮親子內親王は、生を竹の園生に享け、妙齡にして柳營に降嫁あらせられ、金枝玉葉の御身を捧げて公武合體の楔子となり給へり。その「一女子ノ身ヲ以テ、國難ヲ匡濟スルノ用ニ供スルコトヲ得バ水火ノ中ニ投スルモ辭セズ」と奏上し、遠く東關に下向し給ひし當時凜烈の御衷情を拜察し奉らば、誰か感激の淚なきものあらん。かくて宮は一度德川の御一人とならせ給ふや、全力を主家に捧げ、純孝義母に事へ、貞淑夫君を助け、仁愛臣僕に臨み、婦道の完備、宛も皓月の圓かなることを仰ぐが若し。而も將軍中道にして薨去の後、松栢の節操は梅花にも

る夫れ遠からざれ。

日佛佛教協會の本願とする所は略前に示しぬ。而も少しく之を詳說せんか、其の期する所は日佛人の佛教の教學、歷史、言語の根本的共同研究を主眼として、或は比叡高野の學園に佛國の碩學を迎へ又はソルボンヌの講壇に吾國の高僧を送り、或は經典諸跡を飜傳釋明し、時に論文著作を公刊抄錄し、或は資料を蒐集し、圖書を蓄積して以て斯學の大成を圖らんとす。而して此等の事業の中心としてパリに其の根本道場を築き、日佛及各國學人の止住に便にし、講說の學壇を興し、研究の部室を開き、是に附屬するに精美の文庫を以てし、綜合佛教研究所の實を擧げんとす。而してこの研究所は內面の充實と共に外觀に於ても日本佛教藝術の精美を集め七堂伽藍の古樣式に則り、以て現代の法隆寺をパリの一角に現出せんと欲す。佛國の有志は之が爲に單に淨財を抛つのみならず、又福地を相し、淨域を選み、政府は此の國際的快擧を喜び、其要望に應じてパリ形勝の幽境サンクルーの附近に於て廣濶の勝地を卜し之を下附したり。佛人高誼の純美なる夫斯の如く、其朝野を擧りて熱烈なる誠意亦彼の如し。吾同胞たるもの誰か感奮せずして可ならんや。吾等は微力を顧みず佛國寺の建設を發願したるもの實に之が爲なり。

謂ふに今や吾國財界の窮迫に際す。此窮時に當りて鉅萬の費を遠く天外萬里の地に投じて、寺院の建立をなすが如き、或は不急無用の嘲罵を受けん。而も吾國歷史の精華と文化の特秀とを世界に闡明するは今方に要中の要なり。學藝の國際進出、亦國運進展の上に觀て急中の急に屬す。而して之をなすの道、世界觀光の中心たるパリより利なるはなし。況んや友國の高誼に答へ其至誠に酬ひて、吾が精華を薦め吾が長所を供するは是れ國際上必然の責務たるに於てをや。

百萬の費決して僅少ならずと雖、此の根本の道場に賴りて、國際上の吾國の優秀なる文化地位を彰明し、日佛兩國親善の强固たる楔子として平和確保の基礎を與へ、佛國に學ぶ吾同胞學徒の講究に利便を與ふると共に、其品位責務を崇高强烈ならしめて、吾學界に多大の裨益を與へ、遠くは以て東西思想融合の策源たると共に、吾が歷史、藝術、文藝、宗教を紹介する結果、亦彼我貿易の上にも良好なる結果あるや疑ひなし。卽ち其の得る所の大、投ずる所に比して果して如何ぞや。聞く米人の如きは箇人尙よく鉅費を投じて外國に圖書館を寄附し、教堂を建立し、學校病院を

あるにあらずや。就中支那學及佛教を經緯とせる東洋學にありては、佛國は實にその開基として千古不磨の榮譽を有せり。試に思へ、彼の梵學界の英材ビュルヌーフ出でず、漢文學の巨匠ジュアンなかりせば、歐洋東洋學の今日ある未だ知るべからず、七十餘年前早くセイヌの清流に源を發せし梵文法華經の飜譯、佛國記慈恩傳の研究は、實は今英獨に流注し、蘭露に瀰滿して汪洋たる東洋學海の雄景を成じたるを見ずや。この開創の大業、之を繼承するにセナール、シャヴンヌ等の大材偉器を以てし、守成紹隆の功勳よく先哲を光影し後賢を育成し、之を大成するに現にシルヴン、レギ等の碩學あり、世界の秀材雲の如く其門に集り、吾國亦同氏等に負ふ所甚多く清譽內外に布く。佛國現代の文運其の誇るべきもの一にして足らずと雖、東洋古學の如きは其の隨一にして、而も特に偉秀なるものたるや論莫し。

此の東洋古學に就て、佛教が思想上歷史上其樞軸の地位を占むる、猶歐洲文化史の中心實に基督教に存すると相類す。而して佛教教學の體系完全に傳承して而も進展の跡著しく、經書典籍の整美を極め、堂塔像畫の豐富なる獨り其秀を吾國に推さざる得ず今や東西思潮融合の希望は世界先覺の理想となり、此の理想の下に萬邦平和の實現を念願し、文化の新建設に力めんとする識者彌多きを加ふるに至り、英に獨に露に米に世界の耳目漸く吾國に集注し來れる特に怪むるを須ゐず。此の時に當りて、東洋學の因緣最も深くして且つ親しく、而も東洋思想の理解に於て通徹歐洲の先驅たり、東洋藝術の鑑賞に於て常に範を列國に示せる佛國が、先づ吾國と提携して佛教の共同研究に力めんとする蓋し偶然にあらず。その大宦碩學、藝苑の巨星、財界の先進所有ゆる名流が其の齒德を忘れ其の尊長を屈し、在佛の吾が青年學徒と手を握り、膝を交へて驩會談笑の中、パリに於ける日佛佛教協會の一擧して成るを告げたる固より自然の勢にして眞に慶賀すべきなり。而も此歡喜と祝賀とは獨り佛教の爲のみならんや。佛國名流のこの純美の感情と崇高の思想とは、國際の親善と文運の進展の上に寄與し貢獻する所實に限りなきものあらむ。

吾國に於ても旣に此佛國名流の美擧を覩る。義として實に止むべからず。盛事に激勵せられ、壯圖に感奮するもの、同志相會して日佛佛教協會を設立し、東西相應じて左提右携、以て目的の達成に力めんとす。東臺の櫻雲、三綠の楓錦、希くは遠くサンクルの翠光、ヴェルサイユの勝景と相映じて終に華嚴一會の大觀を見るの喜の吾等の前に展開す

牘箋消息

開設するも實に少からずと。吾國九千萬の同胞は措て論ぜず、其中八千萬を數ふべき佛教徒諸君一たび奮起せばパリの大伽藍も一擧手一投足の勞にして成らむ。希くは十方の同志、世界文化の發展と平和の促進との爲に、且吾が祖國の光榮の爲に、奮つて吾等が發願を極力援護贊襄せられんことを。

（昭和五年四月）

◇葵堂白壽賀會趣意書

今秋十月十九日は、舊曆八月二十八日に當り淨土門主知恩院門跡孝譽大僧正猊下第九十九回の誕辰を迎へさせ給ふに逢ふ、有緣の道俗誰か祝意を表せざらんや。

猊下管長在職三十年に垂んとし、道輝一世を掩ひ、化導四方に普く、仁風齒德類ひ古今に稀れなり、淸節篤行畏くも天聽に達し、殊遇の恩を拜せらるゝ一再にして止らず、昭々の道績と赫々の偉業とは、祖德の高風と共に將に光譽を千載に傳ふべく、一宗の隆運今日あるもの、素朴自ら奉じ、範を内外に示し玉ふ猊下慈懷の賜ものたらずんばあらず、是を以て擧世景慕齊しく師表と仰ぎ、慈父の禮を致して敎へを膝下に請ふ者日に多きを加ふるを見る、洵に故なきにあらざるなり。

時維れ淸秋菊花放香の好季節、末弟等偶々猊下の白壽をことほぎ奉るの勝緣に會する、誠歡誠喜何ぞ勝へん、遠近心を協せ相倶に慶祝の至情を展べ、聊か謝恩の微衷を表するなくして可ならんや、下名等の不敏敢て自ら揣らず、玆に葵堂白壽賀會を發起し、則ち三章の淸規を揭げて廣く同感の士女に諜るところあらんとす、大方の諸賢幸に贊同を賜へ。謹で白す。

（昭和五年七月吉祥日）

布敎家は讀書の時間なしとして其新材料の空乏を辯護するものあり。以ての外なり。近時石惺齋の續菜根譚を讀むに

餘りあるを待ちて人を濟はゞ、途に人を濟ふの日なく、暇あるを待ちて書を讀まば必らず書を讀むの時なし。

此語千古の確言なり。之を服膺すべきもの單に布敎家のみかは！

（大正三年十月）

牘箋消息

獨逸より

拜啓、當地は目下九十度以上の熱度にて閉口至極の事に候。當地の生活は室代二十五馬より三十馬（一馬Markは五十錢）食料朝飯五十片（一馬の半）晝飯一馬半、晩食一馬は如何しても免れず、其他雜費中々相嵩み候。是でも獨逸中最勤儉の風ありと極稱せらる、當地の日本留學生の費にて伯林あたりは月々四百馬は相かゝり候由、況や龍動をや況や巴里をやに候。荻原君が此中に辛抱して既に五百馬以上の珍本を購入致され（中には大學圖書館にも見難き珍書有之候）候は小弟の頗る感服する所に候以て當地の生活如何を御察し被下度候。

當地の日本留學生は醫學士三名、理學士一名あり皆勤儉力學の人にして末頼もしき人々に候博士ロイマン氏は實に親切なる人にて萬事善く世話致し呉れ學者として忠實なるは感心の至りに候家は內室と可憐の幼童二人と下婢一名、極く質素なる生活をなし、常に材料の蒐集に怠らず、淸貧力學の狀人をして奮起せしむ。毎火曜日の夜は大學前の酒店に梵學生相集り博士と共に麥酒を飲みて大に談ず、而して毎夕消する所二十錢位に過ぎず、淸興此事に候。

小弟の家は夫のミユンステル高塔の直下にありナイル河畔に臨みたる一小古屋にて目下大洋病院長たりし望月醫學士も同宿致居り來月下旬より荻原君と共にロイマン博士の家に移轉する筈に候。

（明治三十三年九月十五日淨土教報社宛）

○

拜啓、久敷御無沙汰に打過ぎ候、氣候は段々温く相成柳芽を吹き、行々子鳴き渡ると云ふ景色、大學は目下春季休業と相成候、乍去ロイマン博士は隔日態々生等の室迄來られ懇切に種々指揮致され候、篤學後進を提撕するの厚き感服の外なく候小弟此間例の如くぼつ／＼梵學の研究罷在候、下宿樓上、宗教社會の觀察なんど思ひもよらず、喝破碧眼兒に日本の大乘教を知らせやり候事など何時の事なるにや、實に意氣地のなき次第に御座候、時に食卓上の豚肉に對して、自身亦徒らに豚肉の如きかを嘲りしことも有之候、荻原兄は種々大乘經の梵漢譯を試み居られ現に英國龍敦大學の教授セシル、ペンダウル (C. Bendell) 博士と、露國首都にて出版せられし佛教文庫のある梵本大乘經に付考證の議論を闘はし居り候、其結果は追々當地の東洋學會雜誌に現はるべき事と存ぜられ候、宗學の爲いさゝか心強く相感じ私に喜び居り候、別封餘白も有之候はゞ御場所ふさげ許し被下度候　頓首

（蘇杜拉城にて、明治三十四年三月十九日、淨土教報社宛）

說と出據とを御高敎を乞候、遠地聖敎に乏し之のみ不便に候。

古にしては高辨、近くは鳳潭、何れも淨土反對家なり、四十華嚴に付きて何か說ありや否や。

明日より又去歲の避暑地に行き申候。

（三十五年八月廿三日土川善澂氏宛）

○

六週の客を終へて歸れば貴書及惠贈の珍本あり旅裝を釋かずして拜披、御厚志今に始めず感佩の事に候、此上に唯精勵硏鑚師兄の恩に可報候。

數日の中英國より四十華嚴の梵文到着可仕硏究彌面白く可相成候、一寸御厚志御禮まで寸箋如此候。

此の圖は彼マルチンルーテルが宗敎革命の根底とも云ふべき古城の一室にして彼がバイブル飜譯の大業は此室にて成れり、机、寢臺、椅子、書床皆當時のまゝを存すれば此地を訪ふて感慨實に深く有之候。記念の爲バッハ氏の筆になれる此室の石板を座右に呈し候。

（卅五年十月九日長、日本東都東山知恩院山内淨土宗第五敎校長、土川善澂氏宛）

○

御返信申上候ひし已來、目下慈雲手寫の梵本を對校中に候、同和上及其門下が當時苦心講學の跡は此一卷にても歷々相知られ候、生等今日材料充分、硏究法完美の世にありて一もなすなきは大慚此事に候。

さて高示の中「慈雲律師が何等の原本によつて三經を印せしかは粗三經の各末尾に記せり」と、然るに過般惠贈の本の最後の紙他紙を以て補へる痕ありて其文を見ず、御面倒ながら御序に右御一報を乞ひ、其全文を侍者をして謄寫せしめられんことを乞ふ、印刻の年代も小生の本にては未詳なり之も御一報を乞ふ。

材料購入郵稅等にて多分の御費用と恐縮此事に候、自坊若くは宗務より多少の御送金可申上とも存じ居候。

（明治卅四年三月五日）

○

每度雲箋拜受特に玉作感銘此事に御座候却說生駒兄病狀日を逐ふて佳良に熱もほとんど平熱に復し、食事も通常の如く痰中に血も漸く止り來り候平信の往復も今は身體に障害を與へざるべく御閑暇の節は面白き通信など時々御送り被下候はゞ大に病間の無聊を慰すべきかとも存じ候。

右一寸御報まで（同年三月十日午下）

○

眞性自絕有空邊。禍福由來若夢然。
朝海江河水惟一。捲潮溟渤濤三千。
禪觀靜處身無苦。煩惱休時心不遷。
我把此言慰病友。白雲一片在靑天。

右三重押韻。徒軔宰□□。無此二幡□。右體格風調。素論外已耳。至蔬宵之氣滿扁。則特爲可厭。咀欲□□大兄之噗笑。豈有他邪。呵々。

○

拜啓、其後御疎濶□□は海涵是祈り候。生駒兄は爾來經過非常に佳良（一時は腹

○

拜啓、五月末已來兎角喉頭面白からず、腦の工合も比較的に健全ならざる故、「教報」にも、しばらく通信を絶ち候、其中「宗粹」にも何か書くつもりに候。

惠與の普賢行願贊梵文は學術上非常に價値あることはロイマン先生も稱し居られ候過般同先生の厚志には英國劍舞利地大學珍藏の同贊異本の全帙寫眞原版を得候に付、兼ての御厚配に聊か酬ゆる爲、研究濟次第、一部を老兄に可進呈仕候、右は貝葉の古本にて頗る珍とすべく候、されど其梵文の古韻を存するは日本梵文に不及候、今更ながら慈雲律師の梵學に苦心せしは可驚事に候。乍御面倒左の件々御報を乞ふ。

華嚴行願品（般若譯）の末書の名。

四十華嚴と八十華嚴とを花嚴宗の人は如何に取扱ふ歟。

十善法語の傳釋にある慈雲尊者の傳は誰の筆になりしか。

右の件々願くは法錄大至急に奉願度、尚慈雲律師が何處の原本によりて梵本三經を印刻せしか、其原本は尚現在するか、其傳來の年代如何（之は中々面倒の事なりと存ず）出來れば御しらべ奉願度候

（明治卅五年七月十六日、京都市東山知恩院御山内淨土宗第五教校長、土川善澂氏宛）

○

本日英國ケムブリヂ大學教授ベンダル氏より吾師に宛てたる書にて、四十華嚴の原本中に同く普賢行願贊の梵文を含有することを知り候（是れ弟がわざ〳〵吾師を經てベン博士に問ひ合せし所なり）、同贊の研究も彌々面白く相成候、ロ翁は亦露國より蒙古版の行願贊を借り受るの約有之、彌面白き結果に可至と、老兄が日本版を惠與ありしを今更の如く感謝候、就ては過日願ひし條々何卒御回答高示奉願度候。

友より紀念はがきを得、拙惡見るに堪えす、東洋の美術國今少しく奮ふを要す。

弟　海旭

古來華嚴家にて四十華嚴が八十華嚴より一品多きに付議論ありや否や、若有之ば其

【雲箋小片】

△森岡常藏氏宛

拜啓生駒君爾來の熱は二十五日三六・二二十七日三七・二、二十八日三六、三月一日三六・五、三月二日三六・七なれば其快境に向へるは知るべき已耳、咯血も漸く止まり痰中實に僅かの紅色を見る計に候、食欲も進み氣分も快活に轉じ、快癒も一旬か二旬の中と思へば意氣春陽に富みたると共に何となく喜ばしく候。

當地も大學は大抵學科休業となり、小生の方も本日限にて先は之より命の洗濯を致すべく存じ居り候。

左記、放笑の材料にもと存じ候

蘇城看生駒感兒之病、

雪壓蘇城寂四邊。玻窓陰沈轉蕭然。
無何故國遠三萬。不息客愁亂百千。
爐火燈光夜徒永。鐘聲鳥語日空遷。
却喜枕上減湯藥。笑約同遊烟柳天。

久しく韻書を手にせず、平仄などは如何なるにや、「別乾坤閑日月」の如き神來の玉韻に對して唯益慚已耳矣。

一つは亦僕が宿契甚だ薄くして箇の近代の才と相識るを得ざりし遺憾の情を慰めむが爲なり、一月前新佛教の高島氏に托して少許の畫を贈りぬ、尙此種の者財嚢餘裕あるとき、時々君の机邊に呈するを得む、僕去歳某の急を救はむが爲少しく盡す所なり、爲に今は君が事業に多くを致す能はざるを恨む。

……………………

獨逸が此回の戰爭に對する態度は君も察知するに難からじ、黃色の恐などを振り廻し新興國に憎嫉の念熾なるカイゼル、僞基督教主義、羅馬教主義を以て終始するこの偏癖の獨逸政府が露國に同情するも怪むる足らず、今はアフリカの殖民地に一揆を先じて五千の將卒彼處にあり西部たる蠻族の一揆尙今に平定を得ず、想ふに獨逸軍人の腐敗之を致すにあらざる也、一昨は普魯西に露國書生十四名の追放事件ありき、露國に阿ねるが爲に、反露政府黨の壯士に保安例を行ひたるに過ぎずと雖、其愚は甚憐むべにあらずや、此地――一たびは佛領となりて那翁三世を謳歌し今は獨逸のライヒスランドを以て誇り居るエルザスの亡民等はパリス崇拜昔に異ならず、之にカイゼルの排黃主義にあるを以てし、常に露國を黨して日本を惡むこと甚し、新聞の如き純たる露の御用新聞なり、日本海軍大敗の圖、日本の偵察士官曝首の圖など掲げ居る、プチイハリジアンなど云ふ雜誌は彼處にも賣行盛なり、然れども稍教育界、社會は頗る公平なる意見亦有るも少からず、例せばハイデルの教授某が露國が日本の旅順攻擊を國際公法に戻れるとしたるを辯護して堂々の議論を公にしたるが如き其一例也。

憐むべきは波蘭、芬蘭の諸國及び露國に住する猶太の民族なり、彼等は今や盛に排露を唱へ日本の勝利を希望して時に集合などを催し爲に桎梏羈絏に鎖鏈益緊し、露國學生の中にも盛に日本の勝利に由りて壓制政府の覆滅せんことを欲し、之縁りて已れが理想を遂行せむと欲するもの甚多し吾が知れる一芬蘭の教授某あり其妻や妹など僕の一面識なきに、吾國の勝報至るごと時々

選之、兄見之、放吟夫甚句一番邪否、昨夜麵碁麥犬食之、快甚矣、恨欠兄、足立君以十五日當發美雲□也、

△松濤賢定氏宛

拜啓爾來頗る御疎濶多罪此事に御座候小弟も依厚庇例の如く起居罷在候儘御靜慮奉願候。

當地も目下日々大霧濛に陰雨凝りて散せず、頗る不快の天氣に候此間流石軍國のことて日日軍隊が鐵笛の嘹々として響き馬蹄の霜を踏みて横行するなど東洋の形勢も思はれ感慨百端の事に有之候。

當地は獨が佛に對する外交上、大學初め建築物は都て國力を盡して經營することとて獨逸中にても市の小なるに比して建物は他に見るを得ざる莊麗を極め候。

大學教授の給料も他大學に比し宜敷と申す事に候、其故、各科中に世界有數の學者を網羅致候、數學のウェバー公法學のマイヤー、解剖のシュワーベ、神學者のホルツマンなど中々學名高きものに候、ロイマン

之は獨逸の耶馬溪とも云ふべき索遜瑞（ザクシシエシユ）西（ワイツ）の隨一と云はるゝバスタイ岩にて、下を流るゝはドナウ川に候、松多く、巖石の奇なるは他には類なし。

（卅五年十月十三日土川善澂氏宛）

徹定上人の蓮門經籍錄の中、行願品の末書を書きあらざるか。

○

君が心を籠めし手書は二週の前に着し稍後れて君が亡樗牛氏の爲に大光燄を吐出したる「妙宗」の二册を受け、本日亦君が辛酸の筆を揮へる「時代思潮」を見るを得たり、エルザスの平野霜漸く消して藍の如き長丘の彼方シュワルツワルドの連山が雪尙深きに對し、此等の諸編を讀むとき、轉た梵魂の君が新寓ショウペンハウエルの像前に至りて君と半夜を語るの心ならしむ。

「時代思潮」のベックリンは僕が其好む所のもの、想ふに此原因は君か書齋に瞑想を助けて友なきを慰むるものならむ、ベックリンの畫は其想の幽遠と其手法の精鋭なる外、其天與とも云ふべき色彩の妙あり、此圖の如きも着色の優を以て美を近世畫史に擅にするもの、吾國の色彩版が尙此の如き藝術の千萬分の一だに其俤を忍ばしむること能はざるは遺憾の外なきなり、表紙は例のジーグフリードならむ憂氣充分なり、苦氣亦可なり、唯此の深憂刻苦の外奮ふべからざる、强健雄大の氣あるを要す。君は表紙の畫に此趣なりとは認むる能はじ「時代思潮」の文字稍俗なり、其紅花亦僕の趣味に合はず、但し此の如きもの必竟此地の人の能く云ふなる Geschwack-Sache のみ、幸に放言を恕せよ、僕の駄句の插入に至りては實に冷汗脊に滿つ、素人の横好に入は哄笑せしむるの具ともなりて誌上に滑稽を添ふるを得ば可なり。

…………………………………

樗牛會の事業は僕甚だ之を賛ず、一つは君がこの友道廢し交誼紙よりも薄く、葬に會するの歸途、死人を罵るが如き世にありて造圖の擧の如きは之を優雅と呼ぶ外僕に辭なし、優雅に事業を與して亡友に篤く、世の輕薄者流を戒むるを欽仰してなれど、

膜炎を並發して大に危みたりしも）目下は病院外約二三丁此所までは散策を試み得る樣に相成、床上にあることは至て少く、多くは雜談と散歩とに費し候、此分なれば來月にも相成退院の吉報を老臺に致すを得んかと竊に喜び居り候、右一寸御報まで如此候。

（同年五月十八日正午）

○

生駒氏病氣全快祝句

さみだれの晴れて嬉しき今日の月

（同年六月廿二日）

（生駒氏病氣全快祝賀會にて松浦、荻原足立氏等と寄書して森岡氏に宛てたるもの）

○

三十五季七月盂羅盆　壺月

濤客如何、此地炎帝之熱、酷極猖獗、曉起晩步、菩提樹香、與喈々之鳥語、止少慰悶已耳、至夫綠陰河畔、麥酒之冷、浣心洗腸則圖不須言也、

角報至矣、乃寄之焉、謂兄既見之、或不過俗諺所謂鬪后之棍、然思兄之喑之太甚、試

山に送りて後バーゼルの第二回萬國宗教史會に臨み、歸路少しくバルヌの高地に入りて少女峯の雪を嚙みルッエンを過ぎて再たび此地に歸りぬ。アルペンの山上その雄大なる雪景に對して駄句數首を得たり。

　連れる雪の峯々、摩竭魚の
　　玉の鱗の逆立つ脊（ヒレ）
久方の天の大宮、頽れ落ちて
　　玉磊々のアルプスの峯
千葉の玉の蓮の臺あれど
　　去りて幾劫、摩訶吠盧沙那
罪の世の興亡、何ぞ
　　唯獨り冷に觀る雲の峯々峯々
峯々は似たりぬ人の菩提質多
　　御空競ひて立てり、純白に

五首之を歌と云はむは僣越なるべし、唯吾は吾が辭と想盡くるまでを盡くして、この偉大の山を讃したるに過ぎず、君が嘗て觀たるアルプスには如何なる感がありし。

　旅中の志興と大會の雜事とは一々故國の師友に報ずるの煩を省きて之を淨土教報に投じぬ、野味その中に君が味豊なる膳に上るの時もあらむか、少しく時間あらば更に詳く大會の記事を君にも送らんと念ひ居たり。雜合に關してはロイマン、荻原その中之に關する研究を公表すべし、レヴイは小篇を刊行したれども完と云ふを得ず。

　宗教大會にて頗る多く君の知人に會しぬ、グーデンホーフ伯の如きは終始相往來して大に相談じたり、キリストリーブにも會したり、ドイセン先生は其講を終るの後直にバーデンワイヤーの避暑地に去られたるを以て開會一日を後れて行きたる僕はケムピンスキーの舊夢を温めて君の近時を話する能はざりしを深く遺憾とせり、ガルベ、シュレーダー、シーベク、ギメー等は何れも勃々たる元氣なり、神學者の有名なるものも頗多く、ゾエダーブロム、ディテリヒ、ジエレミヤの如き人々にも會するを得たり、印度諸教及佛教に關する講演は甚少く、セミティク部門の講談と基督教に關する談說の多かりしは現今の學界の潮勢を見るべし、各地に傳道したる熱誠なる傳道者にも數人會合したり、其信仰の力の深大

循誘師今行誠和上の舊居寒林精舍を守る書極めて精妙、古美術に精しく、端嚴の品行、頗る敬すべきの人なり。

（三月廿二日）

○

バーゼルにて開會の萬國宗教大會を終りて、少しく瑞西の山地に遊び、昨日はユングフラウの峯頭に萬古の雪を嚙みたり。今少しく此地に留りルブエルンを經て再たびシスラスに歸らむ。大會の事君に語るべきこと多し、バーゼルにて或は君に書き送らむ。

（卅七年九月八日）

○

當市は尙舊教が勢力を有する土地丈、カーネワルも非常に盛大にて火曜の夜なぞは一徹宵種々の行列有之、酒店などは至る所立錐の餘地なき迄に有之候、小生は當時、此地の邦人某肺結核にて病居るを看病する爲に行列に加はることは止めに致し候、昨日まで一週の餘降雪ありし爲目下頗る寒く有之候、先は一寸御返事まで。

高吟面白く拜讀致候。（九月廿二日）

察致したる書端を以て賀辭を送り來る、此の如きもの其一端を推知するの料となるべし、吾國の奮鬪は實に人類の爲なり、文化の爲なり、君が主幹の誌が此際國民を鞭撻して堅牢に奮鬪を續けんことを教ゆるは正に是此時にあらずや、意味雄大なる此の大戰の際、君が「時代思潮」の出現せしは僕が衷心欣喜に勝へざる所なり。

僕他事なし、寫經讀書全く世を隔つ、唯時に寒村田翁と其にライン酒を擧げて、故鄕の梅花を想ふに過ぎず、昨夜はテルの一百年祭ありき、友にシラー崇拜の人ありて共に市の劇場に行きて半宵をこの高潔の文士と凛烈たる殘人の追憶に消せり、この紙は、ワイマールに終て最初興行の際の番附を復版したるもの、甚趣味の大なるを覺ゆ君に寄する所以なり。

時黄昏字甚だ惡し、幸に判讀せよ、北堂令閨健なりや。

(明治三十七年三月十八日姉崎正治氏宛)

○

七月二十九日及び同じく三十日華葉は二週の前に瑞西の旅より歸りて之を讀みぬ、爾來少しく忙しき事ありて君に復すること甚だ遲れたり、先づ喜ぶ所は君が家に小天使の降臨したるにあり、此書着せむ頃は天使が庭前の菊花に嬉々として笑を發する顏の麗くて燈前爐邊に手を鳴らして相樂む君が俤も想はれ愛孫を抱きて滿足の慈顏豐かな君が北堂の樣さへ心頭に浮動し來るなり僕にも許せ滿幅の慶賀を捧げて君の家に淸福を大に祝するを。

エーゼンドンクに與へしワグネルが書牘集はこの書と共に座右に致せり、吾等が樂聖偉人のショーペンハウエルに對する思想も佛教に對する志も歷に彼が心腹を發きて此書に現はる、君が彼に對する深き同情を以て秋風深き燈下この書に對せばその感興や必ず津々として盡きざるものあらむ。君が彩毫を借りて吾國何れの雜誌にこの多趣の書の介せらるゝあらば、蕭索枯槁の吾讀書界に麗はしき春の野を現することならむ。僕は八月の二十九日より兩三日を黒森

氏もマックスミューラー死しウェーベル老たる此時、先づ第一流の梵學者に候、時下寒氣幸に祈自重。

新年には別にお祝辭を上ぬ考に候尚小林老兄にお序の節宜敷御聲言預り度候。

(明治卅四年十二月十一日)

△姉崎嘲風氏宛

年前に書きむとす老兄の感興此處如何、今日は寒雨蕭々として爐火力なきが如し、窓下悵然として悠久なる天地の靜かに過ぐるを思ひて我念願の甚小なるを嘲ける。

逝く年や
寒山獨り靜かにて

(明治卅四年歲盡前三日)

○

本日亦雪あり、遙に老兄を憶ふてこの書を寄す。

此箋は故行誠和上の高弟循誘師の態々母國より送り來りしものゝ一つなり。當地の畫に比して雅趣頗る掬すべし。卽ち一葉を呈す。

軍人の偉大を見るたびに日本外交家の怯懦にして暗愚なるを憤慨するを禁ずる能はず。

學問の方面に於ても此際吾國の學者今少く烈々たる功名心あらむことを欲し萬國的に有爲の志を憤興せむことを熱望して止まず野蠻の露國無智文盲の露國人これ現時吾國民が妄言し居る所ならずや、知らず歐洲學界に於ける勢力は日本尙微々として露人の下にあるを。

京都大學は君の如きあり荒木君の如きあり堂々歐洲學壇に馳驅して赤髯者流を驚倒するの快を見る願くば此際吾國の學者が奮勵小成に安じ桃源の小天地に眠を貪るの陋習を脱して學問上に於て大に露國を征服するの大決心あらむことを、この人類出現以來破天荒の快事を見て日本に大詩人もなく大哲學者もなく大科學者も出でざるが如きは日本の恥辱にあらずや僕はかく書いて來りて益君を思ふ（中略）

僕は七月中旬以來身體甚疲勞したるを覺ゆ過度に發汗し時に發熱あり君が實驗室の机上に赤裸々として横はるの時も或は來らずなきを保せず、然れども安ぜよ食欲減ぜりと雖酒味猶我隈を排するに足るあり、本月の下旬は「バーゼル」の萬國宗教史會に出席せむ日本人は今迄の所僕一人のみ盲人蛇を恐れず吐出し得む怪氣燄はドシ〳〵吐出せむ總會と部會にて一文づつの大安賣をせんとす。

松浦望月諸兄健なりや僕一月以來甚書を作るに懶くなれり時々快談の〇〇なるを羨む荒木君亦益雄大の氣燄あらむ幸に僕が敬意を致せ。

「ゲルマニヤ」にて二杯のピルンネルハこの長文をして一氣呵成に書かしめたり、日本人御付の「ミナ」猶其手腕を士官學生の間に揮ひつゝあり、三年半の永き彼が姿容漸く老ゐ我學亦頗停滯荒凉を覺ゆ燈下酒興來るとき觀じ來りて悵然たるものなきにあらず。

令閨によろしく君と屢連名の書を呈したるストラスの腥坊主の名は猶令閨の記憶に存するや否、君が令息等の益腕白ならんこ

爲利衆生故
示現有滅盡
世尊不思議
妙體無滅相
爲利衆生故
現種々莊嚴

（錄金光明經偈）

〇

午前大柢古經を寫し、午後は濫讀す。頃日ウーランドの詩集を手にす。ウェルテンベルグの月桂詩人調捨難きあり。自然の景を歌ふ特に佳なるを覺ゆ。

講壇彌辭多きや、此夏は僕此地に留りて何れへも旅行せざりき、朝は花に洒き夕は林間を歩す。

曉風白薔薇を吹くとき、片月林間に出沒するとき殘暑全く忘る。

君が家既に定まらば乞ふ一報せよ。

（九月十日）

〇

寒菊はいつも宗祖忌に備へて床しき花なれど此地之なければ水仙數枝を市に求めて爐邊靜に圓光大師傳を讀む室外雲低く風荒

なるは感ずべき至なれど學問の力の乏しきは驚くの外なし、西藏に十數年ありし某は西前經典何物なりやを知らず、支那に十五年傳道したる某に佛經を多少讀みたりしやと問ひしに予はその答の意外に愚なりしに失望したり。

此地も今は秋風漸く蕭條たらむとす、今日は秋晴甚だ散策するに適す、之より吾等が小狗を携へて萊茵の河畔に至らむと思ふ。

日本國民が旅順の未だ陷落せざるに燥急怒を發しつゝありとの報を昨日讀みたり、此の如き輕浮なる民心何ぞよく一事を遂行し得むや、君が叱咤勵精この際甚切要なり。

此地も些の奇事なし四五日前吉田君と共に歌劇「ウォルムスの鍛兵士」を觀る、樂麗く劇巧ならざるにあらずと雖、古劇は到底古劇たるを免かれず、トリスタンの深玄リングの雄大を好むの吾は感興甚動かざりき吉田君今切りに美術文學を愛好す亦大にカントの倫理に就き精巧を重ねつゝあり、荻原は倶舍原文に忙し猶何か書かむとして書くこと既に盡くこの冬は能ふべくんばイタリヤに遊らんむと思ふ、されど財嚢輕き僕の果して然し能ふや否やを知らず、來年の春には君を訪ふて三年の舊夢に一夜を語り明すことならむ。

（明治三十七年九月十一日姉崎嘲風氏宛）

○

此書は君が歸朝以來僕が始めて君に送るもの、疎漫の罪は幸に之を寛恕せよ君が數囘の尺牘雲箋は僕等をして親しく君が面貌に接して酒間氣焔を聞く想あらしめたり最近の京都發書箋三葉昨日着す。

獨逸國民は識者も無識者も今や靡然として我國に對して同情を表するに至れり然れども獨逸政府の狡猾にして曖昧なる政策と獨帝の先天的親露主義は（寧ろ先天的憎日主義）時に礙に障ることなきにしもあらず毎に謂らく伯林に敏腕快手の外交家ありてこの獨逸の國民的の潮流を利用して大に國論一變せしめ○○獨逸政策の變更を見るも至難にあらざるべきをと、戰爭も外交も勇氣と敢行となくんば到底駄目なり僕は日本

○

久しく信を恩兄に絕ちぬ。僕業緣尙消せざるにや、アルザスの霜に故國の梅花を夢み、萊江支流の氷上に步しては徒に落暉の色鮮たるを仰いで東海の浪今如何にと偲ぶのみ。

恩兄と別れて今やまた一年の幻過ぎむとす。永劫の刹那、刹那の永劫、人事箇の如くに過ぎて法界嚴住の眞性に渇仰するの念轉深し。恩兄はこの書を抑如何に見る。

嚢底數空にして法爾に戒律を守り得るの快を味ひ債鬼門に肉迫して人情の妙なるを觀ずること長し、ここに忍辱の波羅密あり精進の勤修あり。

講壇定めて濟福多からむ。昨冬一小篇ありて印度局に送りぬ。

鈴木大拙久しからずして京都にあるべし而して弟尙此地放浪す。笑ふべき哉、而して去歲大に恩兄を勞したる二月はまた環り來ぬ。

佛不槃涅槃
正法亦不滅

かりき、君若し彼と會合の時もあらば告げよ彼がライン河畔の友は常に忘れざる涙を以て彼が爲に祈りつゝあるを、カーリダーサの名曲も頗る巧に傳祕の妙を極めたり、文字も濃艶にてよく可憐なる印度の少女を描くに適す、唯第二ヅシヤンタが僧院に留まりて座主の座を占めたる如く譯したるは誤れりこは刹帝利の弓の力にて降魔、守護となりたりしに過ぎざる言ふまでもなし。

昨夜吉田氏等と共にジーグフリード見に行く幾囘見ても心氣の淸爽を覺ゆるはこの雄大にして氣魄滿てる曲なり、君と共に見たらば更に面白かるべしなど思ふ、ワグネル專門の樂長L某とて多少英國にも名を知られ居る人は今キヨルンに去りてあらずジーグフリードに扮してテールのよきS某といふ靑年俳優もミユンヘンに榮轉せるかは樂長と俳優には少しくあき足らぬ感ありしも名曲はどこまでも名曲なり、君は尙序樂の美しさと第三幕の糸のみの魂を奪われき顏とを記憶するならん、あゝ偉なるかな、吾々の樂聖や。

此地にも面白きことなし、萬國會議のよくありし年なり、社會黨會議、婦人會議、宗敎歷史會議などは日本にても知られたる會なるべし、自由思想家（フライデンカー）會といふが羅馬にありたり、舊敎徒の爲に蹂躪せられたる如し、自由思想家といふものには僕此地にて四五の友人を有せり、少し許り「新佛敎」に其こと記したれば內狀もそれにて多少洞見せらるべし、其中悉く書きて君に送る時もあらむ。

一昨日は此地より半時間計の小村に友人の牧師某を訪いて其慈善市に聲援を與へたり、人口四千はかりの小村落に五百に足らぬ新敎徒を結合して舊敎徒の憎惡の中に眞實に傳道し居る、吾友に吾は出來る丈の力を假すを吝まず、友は印度に十年も傳道して、寬容主義のよき僧なり女兒十一を初として四人あり吾は特に六つのエミリヤを愛す信徒惣代とも云ふべき植木屋の娘、荒物屋の老婆、汎神敎といふことを知らざりし小學校の先生皆此地に於ける僕の親しき友人なり、音樂會のときは常に來てソプラノに巧僕に送りし哲學雜誌の論文を引證する榮を得べし。般若の證定は六百卷の中より幾個の小斷片を摘出することとて困難少からざりしが漸く昨を以て一切を了れり悉く二萬五千頌般若なりき唯斷裂せる金剛般若の一葉を除きては。町は謝肉祭とて漸く狂し來らむとす、鶯歌蝶舞の天地冷眼に看去り香閨粉陣の乾坤一笑に付して靜に書を讀む僕は、人それ何とか見む　…

（二月廿七日）

○

ロ翁は秋中神經痛にて惱み居たるが今は快方なり。相變らず勉强にて世話の燒すぎに聊閉口なり。三年餘所地にありて細かき町の名も熟知掌を見るが如くなるに至りしかば、今は市全體吾家の 如き心地するなり。

北堂令閨によろしく、荻原は此年末ケムブリヂに去らむ、——瑜伽論の梵本を寫し倶舍を校訂する爲に—僕は囊底の都合尙此地にあらむ。

滴仙の恨琴か秋の濤

とを祈る。

君が「廣袖の俗衣」を見むも其中ならむ京都醫科の元老諸君と一夜大に飲み明さんも遠からじ、さらば……

手紙の亂暴にして穢きこと吾艾口の訥辯を聞くと苦痛何れが大なる。

（明治卅七年八月九日足立文太郎氏宛）

○

故國には黄葉紅樹の間に累々たる柿の實の熟して洌々たる秋水に大根洗ふ野趣の深き時今や至りしならむ、此地は昨日も霧深く今にも亦濛々として朝より陰寒の氣人を襲ふ、村徑落葉を踏みて獨り行く時悲しきが如く樂しむが如し、甘き悲など云へる語吾感に適したらむか。

漢の詩は秋を悲むと秋を樂しむとあれどかゝる感を表出したるはなし、日本の歌は悲みの方多きが如し「澁柿の靜に秋を送りけり」といふ句は吾が庸く愛する句なれど今出す沈痛の味を持たせたき感何時もしたる。

君が家に小天使の降れる吉報に次ぎて時代思潮と文錄堂の美はしきはがき六葉一昨日接手しぬ、別封の梵詩は其時より稿を起して今漸くになれるもの、同じく梵土の神韻を味へる君が至福を祝せむは假令其辭の拙くて傖夫のざれ歌よりも惡俗ならんとも、好める道に君も許さんかと思へばの兒童らしき考よりなく和譯も亦此上なく拙なりされどこは北堂令閨が秋の夜の燈下に半刻の嬉笑を博せむが爲也、詞藻豐なる君が令閨には此等の惡詩ことは恥かし、されどこれも親しき友には却て心打ち開きてよきことなりと僕は信ずる也。

梵詩は韻律に縛られて思ふ樣には行かず首路迦（シュロカ）と云へば最易き韻律なれどこれさへ思ふまゝには行かぬなり。

時代思潮に君がワグネルの譯文を見る、簡潔にして字々皆力と氣なる彼が文字はこれにて聊かは其俤を傳へ得む、牧野啓吾といふ人は僕と同船して歐洲に來りし人なり此人眞摯にして神に忠ならむとする心切なり其熱烈なる情操は一時人に過られて不幸なる時々を消せしを僕は毎日哀れむこと深

れて雪將に至らむとすれど吾机邊には古聖の恩容字々の間に動きて恍として春の如きを覺ゆ。

昨淨土敎報得て君が小石川の學林に宗祖忌の休暇を廢したるを誡むるを知り君の深き志を喜ぶや切也。

（卅七年一月廿五日）

○

胃痛はいかに、陰寒雨濛々たる時切に加養を乞ふ。

別封佛敎雜誌一部座右に呈す、多少獨逸に於ける運動を卜知し得べけむか、二八二頁の下に記したる佛耶論の記面白し、佛敎者が起ちて基督敎傳道者の亡狀を訴へたる特に快を覺ゆ、友プングスト嘗て僕に曰へり、曰く、嫌なるもの二つ酒精と傳道者なりと、兄の考如何。

昨例の干闐古經の斷片中より中阿含優波離經の小片一つ證定し得たり喜び少からず右を嘗て發見したる長雜兩含の斷片凡七葉を合して「梵文の阿含」の題下に一小篇を艸すべし。此篇中中含を論ずる下に老兄の

人道の軍戰へは克つ
滿韓の域々旭旗雲と揚りて
海軍到る處凱歌潮と湧く
　きみが兒此時　あれ出でぬ
　『軍神(*クマラ)の出生』そのまゝに
（*は印度詩聖カーリダーサが不朽の名篇）

（三）

**常闇の民の思想に
輝き初めぬ解脱の光
荒れさびし砂漠のこの世
開きなむとす信仰の華
紛々たる群邪の徒　上求の菩提心芽(マザ)して
五欲放逸の輩　やゝ下化の大悲心動くこの
希望海にも似たる時と世に
あれませる兒ぞ歡喜の瑞兆(シシ)
　***正覺の前の　弗沙宿(ブシヤ)
　****ユダヤの原の　星のかげ

（**　日本現代の心界のさま）
（***　佛所行讃その他に見ゆること）
（****馬太傳第二章の初そのほか）

（四）

*****花も紅葉も月の影も
法性法のすがたそのまゝ
眞諦の外には宇宙なく
大地唯正見の發現
　正見の眼火と輝きて
　正道踏破すこの兒の未來(スヱ)の
　あなめでたく　うるはしや
（*****慈雲律師十善法語不邪見戒の下
　にこの思想いとたふとし。）

（五）

劒の峯も火の海原も
正見の前に恐やはある
鬪へ此兒勇氣凜々と
汝が未來(ユクスヘ)の嗚乎いさましや
　******正見の劒ひつさげて
　堂々天地に恐なく
　人間の師子火中に立てり
　萬古の勇士ジーグフリード
（******ワグネル、ニベンルンゲンの第
　二の二幕已下）

（六）

正見ぞ永遠の光明(ヒカリ)
無盡なる萬德の泉

村落君が同情の涙や永く同君の靈を吊するに餘りあらん。

○

四月も將に盡きむとす、菩提樹下に陽炎立ちて鹿苑に花紅柳綠の相現する此頃いかに、老兄の沈思が得意ならんかなぞ思ひ續く、春愁よ、弟萊茵の晩風に立ち盡して稍此味を知りぬ、閑煩惱休むなき□□ふが如きものは春水の酒になる聲のみ。

（明治卅四年四月廿一日）

○

此の週に入りて雨甚だ多し、綠樹陰森たる處自らさみだれの趣も有之候、此間シヤクンタラを初め候、鉤章棘句に頭を痛むる事少なからねど又情趣津々として捨世味も有之候、此一年も半既に過ぎ、此夏は師に從ひてシユワルツワルドの山中に村翁と語らんか、ミユンヘンよりウインまで行んか、などと考へ何れにも決せず。

○

兄が去りし夜朝日奈知泉君來蘇し、兄と共に快談するを得ざりしを遺憾に思はれ

なるある物持の娘某は美はしけれど、僕甚だ好まず、あまりに都市の風に習れるにや。

東洋學の方はセミトロギーの旺盛に比してインドロギーの氣慨甚揚らず、ロイマンは印度音樂に關する古き謄本を手に入れたり、これは面白さうなり、一寸ロイ翁夫人の之をピアノにのせたるを聞きたることあり、友人某ミリンダの獨譯を完了す、僕その乞に應じてパーリと漢譯との比較をなしたりパーリの現行本はどうも漢譯に比して新しき樣なり其中君の教を乞はむ。

下らぬこと順序もなく書き立て、而も筆路さへ殊の外讀みにくし恕し玉へ、下らぬ話に一種の味あると共に、用もなき手紙にも悠々の趣あらずやなど辯護する迄もなし。

北堂にも令閨にも何卒僕が限りなき祝賀の意と歡喜の情を傳へ玉へ、想ふ明年櫻花散りて新緑うるはしき君が礫川の家に君が愛兒の美し豐なる頰を撫せん日のいかに樂しきよ。

壺月

嘲風兄

ワグネルの書牘集は此書着せむ頃には既に君が机上に藏りてあらむと思ふ、僕は二週ばかり前之を發送したり。

文錄堂のハガキ美なり唯其價の稍高きを恨む、此地にて三十ペニ已上のハガキは先づ希なり。

（明治三十七年十月廿一日、姉崎嘲風氏宛）

〇

（一）

金風天地を探かし來りて
薫る籬の黃菊白菊
紅葉山河を錦につゝみて
心も膚も淸き初秋
　きみが兒此時　あれましぬ
　あらたに出たる　月のごと

（二）

百雷にとゞろく天の譴
千電にきらめく人の義憤
正義の戰攻れはとり

（卅六年八月五日）

〇

此地も春風漸く立ちそめて柳青く杏花白し。

犢牛を哭したる君が深き感想を讀みて、靑襟の涙を禁ずる能はざりき。

君獨り春の寂しき夕かな　　壺月

五印の地、古聖の跡、健脚いよ〳〵健に、淸睟益々冷なる君を賀し且つ甚だ羨む。

〇

一週の前林彥明師より來信ありて大西君の郷里岡山に永眠せられしを聞き未だ其人を識らざりしも愁傷の心禁ずる能はざりしが今亦老兄の書を得て轉た悵然たるものあるなりされど思ふ、群小の虛涙は以て志士を哭するに足らず、五千里外に熱涙を灑ぐ老兄の如きあり、一人以て吳を吊するに足らむか、惡詩あり、唯老兄に示すのみ。

霜雪籬邊菊一根。孤芳勁節絕塵紛。
今朝拆去君無間。歎吊大西學士魂。

黃昏東に向ふて才人の逝くを悼めば愁雲綿々として散ぜず、海烟深く鎖すキールの

此の如しとせば、罪の存する所は夫當局の緩漫にあるか。

　金光明經の梵文は一八九八、カルカッタにて一部分公刊せられたり、勿論秕謬少からぬ出版にて吾等が他日再訂を要するは論なしと雖、大體は引用に適せざるにもあらず。（以下梵文略す）

　爾時妙幢巳下我靈鷲山の頌は梵本之を缺く、曇無讖の譯にも之を缺くが故に、こは最古の本にはなかりしものならむか。

　機を得ば、ロンドン若くはケムブリヂのMSSを見て、更に君が引用の部分に相當する本文をかき送らむ。

× × ×

　君がハムブルグにて逢ひたる、エドモンド、ハーデーも遂に萊菌河畔の寓居に寂せり、一度フライブルブ大學を去りて巳來、偏狹にして度量なき獨逸の官學は一面頑迷なる舊教主義と他面には猜疑嫉妬に滿てる新教徒の爲に、この學界の偉大を納るゝに吝なりしかど、彼は靜に其盡すべきことを盡し爲すべきをなして孜々として倦まず、一生を佛教聖語の爲に犧牲として寂然として彼岸に趣きぬ、彼が遺産五萬マークなり彼遺命して盡く之を佛教研究の爲に分配すべしといふ、何ぞ其の高きや、獨逸東方學の老儒等も彼と親交あるもの甚少なり、ヤコビは同じくボンに居りしも彼に就きて甚多きを識らず彼は法句經の象喩品の偈の如く閑林に獨棲せる象生を以て終りたるなり、僕今や彼が傳を譯して日本に送らむとす。

　ハーデーの母今マインツにあり、僕其住居を知るに苦しむ、兩三日の中に之を披索し得ば少しく彼に付きて精細を知るべく、彼が寫照亦吾手にならむ、かくて拙稿成らば寫照と共に君に寄せむ、佛教を信し之に崇敬を有する人は彼に對して至深の尊敬を表せざるべからず、彼の寂の美はしきは、愚劣老廢の佛教管長等の死に比して甚偉大なり。

　君も願くはこの學界の偉大のために、吾學界に其計を公にせよ、子孫の爲に美田を

義の爲に祝するや大なり、唯本國の同胞が猶甚輕佻浮草なるものなるを憾むもの大に慨するもの深し矣。（卅五年五月十五日）

○

　秋も彌々闌となりぬ、君が曉の茨も淸かるべしなど思ふ。

　君がラインフェルデレに到るの日、弟も淸遊を共にしたしとの念却らず、去歲割愛して去りレバーゼルの美術を再び訪ふて、必ず君を靈泉沸々たる所に見む、フェルデンに到るの日希くけ一報を賜へ。

（卅五年九月十八日）

○

　此地もリンデの實堅くなりて大楓樹漸く秋風を生ぜんとす、君と急風疾雨ラインの長江に亂颭して、滿天の墨雲バーテンの連山を閉す所、ゲーテを語りて故樗牛氏に聯書したるも二載の夢たらむとす、先月の初め君が芙容峯下よりの書を得て痛切なる感の秋に入りて益深からんことを想ふ。

（卅六年九月一日）

○

善といふ善之よりぞ増長し
古聖悉く之に頼りて安住す
君が兒の光榮あゝ未來　明に其名示しぬ
正見(マサミ)はよき兒　正見(マサミ)はよき名

（嘲風老兄が愛兒『正見』を擧げ玉ひしを賀する梵詩首路迦十有四韻の邦譯明治三十七年十二月十三日ストラスブルグにて姉崎氏宛）

○

雲箋及び「時代思潮」「現身佛と法身佛」一週の前、既に接手したり、高誼は書毎に厚を加へ、芳情信毎に深きを益す、幾度か君が書をくりかへし讀みては謝意の甚深きものあり。

一昨既に雪あり、昨日まで斷つては降りて今日は甚寒し、爐火紅なる處に長榻引き寄せて惠贈の書を讀む、雲海萬里を隔てゝ故人と語る思あり、思潮は毎號其精彩の益々煌耀たるものあるを喜びて國民を鞭撻し策進するの勞を謝す、佛身論は君が年來の攻究更に再三精讀の後を待ちて或は愚見を披陳せむ。

此地の學者が此種の研究を行ふや、往々にして枯談に陷り乾燥に流れ、解剖微を極め、比校精を盡くして、而も生氣全く紙面を去り、鈎玄彌深くして蠟を嚙むが如き感も隨て深し、エーバーの書は此弊稍々見るべし、其末流に浴玄、後塵を拜する徒に至りては固より言を待たず、君が書はよくこの弊を擺脫して一面には客觀的の對究の見るべきものあると共に他面に躍動する閃々たる光明を存して史を斷し理を說くと共に亦人心の歸趣を際にせり、是僕が甚君が多とする所なり、所謂客觀的研究といふものゝ弊は君が著により多少は校療せらるゝことあらむ。

序文に資料の運用日本にて充分ならぬの由見ゆ。ミューラーの文庫は君が獵涉索捜に資するものなかりしか、同文庫の整理が未だ充分ならずして君が討究に便を與へざりしか、同文庫の日本に至りし已來歲月短しとせず而も君をして不自由を感ぜしむるた、昨夜同君と大にゲルマニヤに飲みかの三十年戰爭古戰場の踏査談を聞きた、小弟足立氏と寓を共にすることに決した、左れど一年の舊寓何となく去り難き思も有り。

（三十四年十月十四日）

○

フリーダー色褪せて煙の如き新綠の間に牡丹の花火の如し君が窓前の興趣を思ひて新たに就りし詩聖の像を寓す、像の左右に詩と音樂の女神あり、臺の圖は一面ゲーテがヘルデルヒミユニステルに上りて故鄕にライン酒を祝ひしを表し他にはゼーヤニハイムの花園にフリードリケと話する圖を出す、今ヘルデルの側にて半面のあらざるは聊悟るべし。

スタンレー、ヨーカイ、レーンハバは近時逝きし偉大なる人の名なり、故國にも其の話しありしならん、ベートリンクの死に至りては未だ或は人知るもの多からず其中に悉く君に報するの期あらむ。

吾軍向ふ所、勢、大河を破すが如く枯草を燃すが如し痛快極りなし、人道の爲に正

ワグネルの感化は日に日に此地に偉大となり行くを見る、彼が百年祭の爲に各大都市の委員等は其準備を始めつゝあり。

尙書けば盡きざるべし、此囘は玆に筆を擱かむ、君がギーターの講壇益幸多きを祝す。

愛息正見君、定めし麗しく生立ち玉ひしならむ。君が爐前の樂や知るべし。

北堂にも令閨にも願くは僕が祝言と敬意とを致せ。

（明治卅七年十二月二日、嘲風兄宛）

○

君が手書は去臘のクリスマス前に着し次に樗牛會報の第一を得て再び君が亡友の心血を披瀝したる大文字を讀みぬ、此篇嘗て之を帝國文學にて讀みしが、彼が如き雄篇は何囘見るも興味の唯深きを益し行くを覺ゆるのみ此感はワグネルなどを見る時にも屢起り來ると同じ、僕ニーベルンケンを見る全局既に三囘最後の曲は四囘之を聞きしかど一囘は一囘より趣味興會の淋漓として增大するを知るのみ他日鎌倉の濤聲を聞きて更に後錄を見なば、一層の感あるべし。

今年に入りて繪曆二つ美葉五拾枚に添うに時代思潮の惠贈をも得たり僕獨り君の賜を專にするも惜しければ繪はバーゼルの老女友とウィンの一新婦に贈り繪はがきは此地士官集會所の番人たる曹長某が其同僚及部下を勸誘して少からぬ義金を吾等が祖國に致したるを感じて大部分を之に寄せ尙殘餘は知己の友人にして君が惠を霑はしむることを得ぬ、厚意洵に大なり謝辭盡くる所あらず。

令息益健なるよし大賀之に過ぐるはなし東風君が軒端に薫じて梅花の香鶯の歌を和するとき君が家の淸福夫如何ぞや。

僕去歲已來稍四大の安靜を缺く去臘は不眠症を病みて夢穩ならず、今年に入りて攝氏零下十四度の寒は僕にイルフルエンザを惠みて今尙爐火の兎角親しきを覺ゆ、衰弱せる弊軀を霜雪の間に露せむと無謀なり、特に囊底近時頗る輕ければ、靜に家にありて書燈に對するを快とす、歸期も未だ決せざれど北春は再たび故山の花に吟ぜむと思

（卅六年五月）

○

日露風雲如何に思召す、どうせ一度は文明史の順序より見ても開戰必然ならむ、日本民族の運命裡に存せば願くは剽劊羅の橫暴を東方に壓するを得む。

○

唐人は晴好雨奇など申し候へども、雨中の旅行はあまり面白しも無之候、同寓者黑瀨、山中より歸來、此頃は普通の生活と相成候、此地も秋冷衣寒く相成候、ライン酒に松茸なくて秋寂し、何時もイヂのきたなき事に候、□□□にて拜眉を約して一年の餘と相成候、此間、□□敎坊主の酒呑み居る畫はかきに照して同寓者に導し、御覽に入れ候、獨處高梅第幾層、寫經快這笑炎風、醉來辯說酒香美、酷似畫裡葷肉僧と一週前はこんな生活にて候ひき。（卅六年九月）

○

淸容如何、小生去月二十九日、此地にあり萬國宗教大會に列席し大法螺を吹き立て候、日本人は小生一人のことゝて馬鹿談說

贖ふに汲々として一生を官學に朽了して人文の開發、人心の醞釀に些も益する所なき吾國の俗學者輩亦之に依りて多少反省する所あらむ、ヲクスフオードのマクドネル Brihad-Jevata を公刊したり、吠陀神話の唯一の材料とすべく近來の好出版なり、氏はこの出版を吾師ロイ翁に捧げたり、ハーバート、ヲリエンタル、シーリースの中とて其美本の割に價貴からず。

ウルム氏 Handbuch der Beligionsgeschte を出す、小册子なり、概要を知るに便なり、學問上の價は認むる能はざるも、學林に讀ましむるには適せり。

× ×

昨夜一醫人より文部省が留學生全體を召喚するの內意ありとの報告を得たり、事實ならば當局者の暗愚驚くべし留學生の召喚は大局の財政に些の影響するを見ずして、戰後の經營には一方ならぬ損害を與ふべし、遠大の眼識あらば多少の苦痛を忍びても、工藝、醫學、其他に留學生を増派するこそ今日の急務なれ、之が召喚といふが如きは以ての外のことゝ云ふべし、況むや、現時、各國の新聞が日本の事物に注視するの際、一時に留學生を召喚するが如き擧は、實際あらざる日本財政の困難を暴露して市場の信用を失墜するの虞あるをや、事實ならば願くば君が誌上に於て痛論切言其極めて愚劣の策なるを說け、文部の愚役人共は往々にして天下の大事を談るもの少しとせず、政府の俗吏の眼光淺短なるは言ふまでもなし、此處切に有識者の苦言を望む。

僕が贈りたるワグネル書牘は着せしや、此便と共にベルリンとワグネルとの評論を寄す、新年の書懷、君が興會を惹くを得は幸甚なり。

一昨夜再たび「ゲッテルデムルング」を見る、此曲一たび此地歐洲を去りては聞くべからず、君は尙ジークフリードの吊の曲を記憶するや、萊茵河畔烈々たる火焰の前に立ちて獨吟するブリコムヒルデのよきを記憶するや。

五月下旬、予在黑林山、黃昏偶見翁媼禱聖母塚、惻々動人、實如此圖、就問之曰吾兒、從軍在南阿、潜々淚下、嗚乎吾國現時如此翁媼者、亦非少也、賦惡詩寄嘲風、焉

山村拜日落、歸犢後林鳴、翁媼禱何事、吾兒遠出征。

（卅七年六月二十日）

△大谷瑩亮氏宛

佛於無量劫。勤苦爲衆生。云何諸衆生。能報大師恩（花嚴行願品）

明治三十六年四月八日獨逸にありて三たびの聖誕日は來りぬ、萊茵河上春風漸く動きて桃紅李白の間、百鳥の和鳴する所獨都に華嚴を讀みて、君と大悲の光中歡喜の充ちたるとを喜ぶ。

（明治三十六年四月、ベルリンにて）

○

秋風漸く客衣に冷に木葉繽紛雨よりも甚しき時如何に御起居にや、野衲無事、來れば出て紅蘿蔓葉の村を訪ひ一盞の新酒に田翁と語るを樂む、唯最も快らざるものは罪なき野禽を擒するにあり。

爲政者と看做すことを得ず、政府は宜しく社會主義なるもの丶何たるを研めて之を利用し一面舊社會の惡風、例せば藩閥主義の如きもの官尊民卑の如きもの敎育に於ける官臭貴族臭の如きもの、來らむとす、武族の跳梁、御用商人の奸などを掃蕩するの方針を取て他面には之を指導して新氣運の拓開に備ふべきにあらずや。

獨逸の講壇社會主義の如きナウマンを首領とする自由社會主義の如きを見よ、其精髄決して吾國の憲政を扞格すべきものにあらず「民の富めるは卽朕の富めるなり」との仁德帝の聖語は今日に於ても吾國憲政の大義として不磨の光あるものにあらずや、獨逸は歷史的に社會主義者を利用し之を調和して國運の進捗を計るの考を缺きし爲今も尚社會主義者と軋轢して果は舊敎黨の如き仕末に終へざる頑黨と結托せざるを得ざる醜體を演じつ丶あるにあらずや。

然れども茲に一言すべきは日本に社會主義と名乘りつ丶あるものも多少の誤なきや否や社會主義の精神は社會の健全なる發達にあり、必らずしも非戰論を唱道するを以て其本領とはせず必らずしも人民の意志に反して極端の理想主義を唱導するを要せずシルレルのマリアス、チュワルトに女王の忠僕某がマルアが獄中正式の舊敎式の敎儀を擧ぐる能はざるを訴へしとき、「宗敎は語にあらずして精神」なりと喝破せし茲なり、舶來の信條其まゝ、獨逸なり佛國なり果亦露國なりに出來たる社會主義の信條を飜譯して特に定規に日本に當嵌めんとするが如き傾が、日本の社會主義者にはなきか、例せば非戰論なり、今や日本の社會が健全なる發達を遂ぐるに此戰程必要なるはなし、自家の防衞の爲にも權利の伸張の爲にも此戰は必然的に爲くてはならぬにあらずや、彼等にして之を考へば何ぞ其主義の爲に進むで陣頭に立たざる、トルストイの論は露國にありてこそ價あれ、吾等が國には實際上半分の價もなし、戰の根本的にあしきは三尺の孩嬰も知らざるはなく唯吾人は涙を以て時に戰ふべき必要あるを如何せんや、自箇の足が地上を踏み居るを忘れて議論す

初雪に麥酒の寒き夕かな
　栗やきて古經讀む夜の雪

など下らぬ寢言をならぶ、漢堡の通信もまだ何處へも出さず、懶甚し、此日芝の宗務所より御叱りの書面に接す。

二週の中には家を擧げて轉宅すべし、今度の家は、電燈もあり、出來たての家で、公園には近く、値段は今通りと云ふので女主人は大得意なり、近來の懶自分ながら呆るゝのみ。

（十一月廿八日）

○

獨逸の美術界に近來日本風潮の滔々入り來れる證據に（花鳥のヱハガキ）こんなもの一葉御目にかけます。

弟例の如く愚圖ついてゐます。西洋でたれる糞尿はすれども糞の役にも立たざる馬鹿々しき次第恥ぢ入つた次第です。

（卅五年二月八日）

○

おはがき拜見御繁昌との事大慶の至りだ、此地も馬鹿に不順の天候で兩三日前には煖爐を用ゐた位だつた、今日も蕭々たる

ふなり。

旅順の陷落は大慶の至なり日本にても既に報ありしならむが、歐洲新聞の論調は之を機會に平和を締結するの可を露國に勸むるもの多し佛字新聞特に其論旨鋭く其聲甚大なり、蓋し露國の益爐坑に墮落して之が爲に自國財政の恐惶を見むことを憂憂しての事ならむ、同國の內閣も今や大危機に瀕せり、一部人士の說に由れば目下佛國の革政熱漸く炎を擧げ來りたりと云ふ、獨帝が旅順の攻守兩將に普國の最高勳章を贈與したるが、彼が性格の餘りに歷々として見へ透くが如き心地して可笑し、獨逸も今はエッセン鑛山の大ストライキありて其騷擾を極む、民主黨の爲に壓せられて悲境に沈み居りし自由黨近時大に氣を高め來れる色あり、其派の如きは民主黨と接近し來りて之を連合せんとする傾も見ゆ、今年はシルレルの一百年祭とて各大學及大劇場は孰れも式祭の準備に汲々たり、之が爲めにシルレルに關する著書など多く出づ。

吾國の旅順陷落後に於ける民心は如何、識者は此際益剛健の意志と着實の自覺とを國民に訓ゆるの責あり。

而してこの千歲一遇の好機を社會に於ける弊風改善の爲に利用せむことは世を經綸するものゝ一日も忘るべからざる所にあらずや、「時代思潮」の健在茲に於て甚必要なり——切に其雄大なる發達を祈る。

君が書に依り日本の政府が社會主義者に對する酷薄なる態度あるを知り又高島圓等の書束にて一層其實狀を知れり僕切に日本政府の爲に之を惜む。

第一、政理として今の日本がかゝる壓抑主義を取るべからざるは論なし、自由言論の尊重、國民自覺の獎勵是政府が發達すべき大日本の前途に向ふて根本に置くべき政理なり。

政府の無學者流は少しく社會主義の何物たるを研究するを要し、明に其吾國の政體民情に適するや否やを知るを要す、社會主義と聞きて一も二もなく無政府主義の如く蛇蝎魍魎の如くに考ふは其度量の小と眼識の淺きとは到底大國民の發達を促進すべき

も大持てに御座候、一寸お伺まで草々。

（卅七年九月）

△高島米峰氏宛

御結婚のよし、天外萬里、祝莚に列するを得なかつたのは實に殘念である。此日ライン河畔でアルサス酒で大に御祝ひ申し、駄句一首を御送りまうす。

瀧添へて高山の奇五千秋

紅白の薔薇、僕が歸る頃には可憐な數朶の蕾さへ、添えて美はしき兄が家庭の花園を見るだらう、萬歲！

別封蘇城名勝帖新婚記念の贈品として進呈する、幾久しく兄が溫き家庭に愛を得ば實に幸だ。（明治卅四年九月十八日）

○

今朝は朝より腦の工合甚だあし、圖書館に行きて例の華嚴梵本を對校するも甚だ懶うし、此所惠贈の小册にあり、長榻に臥して讀み且つ笑ふ、よくもかく下らぬ雜誌が編纂出來たもの也、一昨々日降雪ありて已來頓に冬げしきとなりぬ。

暴壓大なるときは針小棒大の報歐洲に傳はり之が爲に露人に乘ぜらるの恐も存するなり。

此等は單に政治上よりの愚見なれど人文上より見ば政府現今の行爲は甚だ毒害を思想界に流すもの、識者は之に警策を加ふるを至當なりとす、學問の自由及其獨立漸く兆したる日本に政府の暴壓あるは甚國運の前途に氣づかはし。

× × ×

柄にもなき政治論憤慨の餘りに發したれば是より少しく學術上の報道を試みむ、雜含の面白き發見が中央亞細亞にありしことは君に報じたりと覺ゆ、今亦金光明經の斷片及び漢傳に有せざるトハルマシヤリラストフ法身經（ドハルマシャリラスートラ）といふ小經の研究報告ありたり文字はブラフミー體にして言語は頗困難なる方言なり、伯林の學者は今や全力を此等中央亞細亞發見の古經斷片に集中し之が爲に西藏語なども講を聞くもの頗多しと云ふ、今他に尙數十枚の支那文の斷片あり皆唐代の佛經なりあまり價のあるべしとも思はざれど僕は之が解讀と考證に當り且つ梵文の方にも漢譯よりする智識を用立てんことを申しやり、且つ斷片の貸與をロイ翁と共に請求したるも右の研究は伯林大學及人類學博物館の專賣として勿論材料貸出の如きは固く許さず尤も僕にして伯林に來らば材料の觀覽を許容せむといふ右古經斷片の研究成績に付きては多少本國佛教史家の資補ともなるべきを思ふが故に近日其概略を記して兄まで送り何れかの雜誌に公表を乞はむと思ひ居るなり。

東洋學の方面にはセミテイクの勢燄非常にてサンスクリット方は稍之に壓せられし觀あり、ドイセン先生なども相手にもせざる T. bant の吠檀多經英譯第三出でたる事は兄も知らるゝなるべし商羯羅の註を傍として羅摩拏闍に據りしを特色とす「阿育王」を著したる少壯考古學者

Smith は Early History of India, We-
lnding Alexander Campaigus. 8 vol 4s.
Oxford Crorendor Prep.

の新著あり本日之を龍敦より買ひたり精巧を嫌ふ、此中には往々下らぬ杜撰極まるものの多きに慊焉たらざればなり。成るべくは會報に一度に出したし、東哲にはハムブルグ東洋學會の記事を送らむ。

（卅五年八月廿四日）

○

拜復バルチック艦隊全滅は此地でも意外に成効の大なるに驚いた、毛唐の奴どもの驚き方は非常のものだつたよ。

此地も前週は佛蘭西と今にも兵火相交ゆる樣で、兵隊の大輸送もあり兵營では非常の準備をしたが危機はもう去つた樣だし、あゝつまらぬ。

金四十二馬餘も一週間ばかり前にたしかに入手したよ、用事はしかと受合つたから、一週間の中には何とか返事をするよ、船は八月十五日イタリヤのジエネバを出るのだ。

（七月三日夜）

○

先御目出たう、——御互に高の知れた人足だが兎に角人道のために何とか蚊とかでこれまわして居るのだから御目出たいと云

る論者は先づ靜に其脚痕に注意するを要す、彼等をして今一層着實ならしめよ、穩健ならしめよ、實際的ならしめよ。

卽政府と雖妨に檢束加ふもの他なからむ、社會主義者は日本は卿等の本國が定めし二大信條國敎の如きこと、學校に宗敎に盲を强いざること丈は卿等が本國に誇るべき所ならずや何ぞ少しく眼光を大にし着實の思考を以て國運の進捗と民の福祉とを計らざる、時々聳動する奇論と志士仁人を模して白眼天下を睨まむとするの痴態とは卿等尙天下の同情を買ふ能はざる原因にあらずや。

大政策として政府が社會主義を妄壓することは僕の領解するに苦む所なり、(第一)政府は之によりて歐州識者間の同情を失ふの恐あるべし、蓋し人の露を惡み吾を美するは其原因一にして足らずと雖要之露の壓制主義に對して吾が自由主義なること其一大原因ならずんばあらず之を是察せず些に力もなき會合團體に暴壓を加ふるが如きは大誤にあらずや(第二)獨逸に於ける社會黨の歡心を失するは日本の爲に不利なること、獨逸政界の消息に通ずるものは僕の言を待たずして今の政府がビスマーク已來ヒユーローに傳來し來りたる親露政策を取りて識者國民の輿論と常に相反するに對し、極力日本に黨して日本の勝利を謳歌するに獨逸社會黨にあらずや、彼等が數十の新聞と八十の議員とに由りて鼓吹せらるゝ日本の利益は蓋し尠少にあらじ、日本の政治家に敏腕快手の人あらば、彼等を陰に使嗾して獨逸全體の國論を動し、獨逸の現在政策に根本的に改ためしむるも不可能にはあらず、今夫、日本政府が社會主義に對す暴壓を彼等が聞くとせよ、其日本に對する同情の冷却は論を待たず、日本は毫も益する所なくして是雄大なる一大味方を失ふにあらずや、政府者の眼識なき驚くに堪へたり、(第三)露國革命黨の希望に背くこと是も固より言を待たざる所なり(第四)國論の不統一を海外に發表するの不利なること、社會主義者の如きもの僅々十數人其團體の如きも甚大なるにあらず、而して檢束甚しく

雨ありて春寒甚し、南歐の樂天地である五月も之では滅茶々々のことだらう、

例の如く「死語の研究」三昧なので面白い考も出ない、出た所が、碌なものでもないから當今は失敬仕ること丶願ひたいのだ。此地では五月には深林の中に生ずる香氣のある一種の草を酒に浸してマイボールと云ふ奴をこしらへるが、本國の粕飯にあたるかね、昨日先に住んでゐた家の婆から一瓶もらつたから、之で君の令聞の壽を祝さう。

(卅五年五月廿四日)

○

弟目下山間の僻地にあり、篁茸を摘み野蜜を集めて悠然一夏を送らむとす、此間ほしきものは會心の友のみ、而も兄等と相去ること九千里！

別封論文は帝國東洋學會の會報に投ぜむと欲す。會報は讀者に僕と同好の士多きを思へはなり、而も其出版急ならざれば、寧ろ新佛敎にても東洋哲學にても貴意に任せて紙面を借らむと思ふ、但し東哲の紙面恩借を得る場合には甚だ雜纂中に投ぜらるゝ

修養なる哉藝術の神は唯膽を烹、腕を折り、心血を注ぐ人にのみ其靈を宿さむ已耳。

ワグネルに關して昨年暮までに二種の新著ありたり。

1) Houston Stewart Chamberlain : Richard Wagner, Munchen 8 M

2) With Kievgl. xlie gesaurt-kunst des XIX guhrh-Richĕrd Nagner Müncuen 4 M.

第一は英譯も御譯もある程故好著なるべし著書は歴史なるにも好著あるを見たり器用の人なるべし。

第二は澤山に挿繪あり書き方少しクダクダしけれども好著なり僕昨日これを買ひぬ此人ワグネルの高弟として作曲家なり、僕その「僧院の夕暮」を聞きしことあり、ハルフェに少しギオリンを混ぜた限りにて他の樂器なき所至りて僕の趣味に適したりき。ワッツに關する小冊子も „Kiinster Monographien" の中に出でたり、未だ之を見ざるも從前同シーリスの作に照らすにまとまり居りて便利の書なりと考へる。

露國の內亂は猶鎮定せず、莫府の總督セルギウス太公もプレーブと同一の運命に遇ひたり獨逸にてはエッセンの大ストライキ漸く鎮定したり、兩三日前膠洲灣の防備論議會に出でたる樣なり、人氣的の議題に過ぎざるべし社會黨の人々は之を冷罵し居れり。

惠美君成氏今囘時代思潮の編輯に關して東上すとの報同氏よりして到りぬ、君が士を愛し材を惜むに餘惠に沾ひたるものならむと窃に君が仁に謝す、惠美氏才華頗凡ならず、文才亦儕輩を拔くものあり、幸に後來君が力を借りて其材を大に伸べしめんことを、君が厚志を謝し且つ同氏が後來の爲更に懇願す。

僕が歸朝尚確定せず、飄々浮萍の如くして未だ此地を去るを得ず。

北堂令閫に僕が敬意を致せ、正見君には特に僕が未だ識らざる熱き愛を。

此日尙寒し、今寂しく晝餐を終ぬ、窓外天低く垂れて雪を孕み爐火爆々として時に飛ぶ、此書至らむ時、軒端の梅花を散して

病氣はどうだい、其方肺病、此方は金病、何處も同じ秋の夕暮れとでも云ふのだらう。而し夕暮でも曉でも隨處に興趣を見てゐる中は僕の生命はまだある。君もまだ急にはくたばるまい、一寸御見舞だ。

クレヲソートのヤスパー丸といふ奴がある非常に飮みよく出來て居る、試みないか、多分日本にも來て居るだらう。

僕の于闐研究が「新佛教」に出たら其號を僕の名で西本願寺法主に一部上げて吳れ、それから僕にも二部餘計に吳れぬか。

春中馬鹿に寒くて春寒の麥酒に嚏(クサイ)二つ三つなんて奴をやつたが、今朝床の中で初めて前林の鶯を聞いた。そうだ今日は五月一日だつた。

〇

はがき着す、僕も去年の冬少し馬鹿な目にあつて一月已來大困却だ、而し弱つた顏をするのもいやだから例の通にはやつて居るが、實の所は一通の困り方ではなかつた。何とか方法は付くだらうが、何しろ文なしで色々の事に金はいると云ふのだから

なる圖數葉ありて觀古の粹とすべく間所見ありて氣燄も亦大なり。

兄が講室に未だ之なくんば一部は必らず備へ給ふを可とす。

× × ×

雜文亂艸、稍長くなりぬ是にて筆を擱かむ、一昨已來風雪、滿街皚々として奇寒骨徹をす、雪窓の爐火此書を艸して送る兄を思ひ切に法安を祈る。

（明治卅八年一月十八日、風兄窓前宛）

○

君が書二通と「喜劇旅順の陷落」を得て喜特に深し、拙詩醜を世間に露すは慚の極なれど君が愛兒の爲に喜をなすを得ば慶之に過ぎず旅順陷落中に洋樂を挿むこと極めてよし、純然たる歌劇の成立する前には正劇に名家の曲を挿むこと得策なるべし僕はゲーテのエグモンドを見て其幕毎にベートベンの樂あるを非常に面白く感じぬ君が作中にタンホイゼルマルシュの存するは甚意を得たり、但し僕は開幕エレチヤギヌの出る前に極靜なる音樂を欲しきなりワグネルにてもモツアルトにても幾多の作曲中必ず適當するものあらむ、次に李翁少しく威嚴なきに失せずやと思ける、其白（シラフ）も亦少しく漢文めかしたる句を適當とせずやと思ふなり一面に支那の傲倨尊大の俤をも李翁に見せずは引き立ぬことなるべしエレスチヤギンは甚よく出來たり一辭の贅すべきなし、誤植少しあり、左に記せむ、六頁の七段、四一行南山不落は難攻不落なるべし七頁一段二三行閻魔の朝は廳なること勿論なるべし僕は切に君が劇が獸の如く狂奔し思の如く跳梁する、戰爭を知つて正義博愛を忘るゝ國民を警告するの切頗多きを疑はず。

日本劇界の事時に之を日本より來れる新聞にて見るも今少し俳優の修養に目を付けざる中は何事も到底駄目なるべし条八の如き女が女優の明星として威張り居る中は日本の劇界も知れたものなるべし前週アグネスツルア來りぬ、その「沈鐘」のラウテンデラインを扮するを見てこの感特に深し來週はアルノルドソンを見ることを得べし、

ふてもよからうじやないか。

歸らうと思ふと錢がなくなるから不思議だ。鷄聲堂の二階で、豆腐でも食はしてもらうのも出來るかどうか。

三つ原稿を書いた、一つは新佛教の諸兄へ御年始の積りだ、例の如く下らぬものだが中に少しは諸兄に何とか思はす點もあるかも知れぬ。（マヅイと思はすことはうけ合だが）一つは商賣の方であるが、新佛教があまり繁昌で空地がなかつたら、姉妹雜誌の東哲でもよい。一つ（平井氏の分）は六號で出してほしい。何れも二度書き直したのだ。半病人にしては大仕事だ、活版屋に讀よい樣にするのも一種の人の書いものに矢鱈に喙を容るるのは馬鹿げた事だ。本邦の學者が他人の說に無頓着に不親切であるのに多少の反省を與へる積りだ、尙ドシ〳〵書くから、出せる丈だして吳れ玉へ、これも神經過敏といふ病的現象かしらむ、クタバルかもしれぬよ。　（一月二日）

○

ぎたるなし、天この對魔の大任を吾國に與へて血を以て世の罪を洗はしめんとす、吾國民は益この大なる任務を自覺して區々たる國民的の志情を去り、自由の爲に博愛の爲に止むを得ずして劍を揮ふて魔を降すの大菩提心を增長せざるべからず。

別封故ハーデー師の小傳一册、兄に寄す、師に對して同情の深かりし兄の如きは恐く獨逸にあらざらむ、舊敎の頑固よりは異端として忌まれ、官學の連中よりは舊敎僧として斥らる、然も自由なる講究と淸肅なる戒律とは終身渝らず、悠々として圓寂に入りしもの何の高潔ぞや、佛僧幾萬、彼が如き好漢幾人ある、小傳の作者は僕一面識あり不日其家を訪ふて飜譯に及び寫眞複寫の權を得むと欲す。

ハーデーガシヤーのスピヤ通なりしこととは彼が人格の一層の高さを益す。

新聞切拔一つ、僕が大ワグネルの未亡人と其血を傳へし、バイロイトの樂師を此市に見し喜びを分たんが爲に君に呈す、滿市は之が爲めに狂せん計なりき、總督ホーヘンツォルレン公爵を初め市の上下は悉く劇場に集ふて、雷の如き熱烈なる尊敬と感謝の喝采を二人に捧げぬ。

シルレル祭も遠からずして至るべく、此祭を終へて後僕は船に上べきか、吾國にても獨逸文學に好を有するもの相會してシルレル祭を擧行せば美しからずや、君が樗牛會及び同好の諸士相議して、この自由と淸操の大詩人の爲に感謝を捧げ玉はずや、之には、二三言「新佛敎」に書き送りたり叱覽を乞ふ。

この頃インドロギーに就きては面白き書もなし、アールブルグ敎授某氏の梵語文典出でたり、希羅諸語を對照しある所、博言學者には便利なるべし、伯林のフランケと巴里のレヴイと佉沙と云ふ語には劇しき論爭あり、荻原は之が解決の爲一文を公にすべく力めつゝあり。

……………………

北堂令閨に僕が祝福の意を致せ、特に君が愛兒に、異域識らざる叔父（ヲンケル）のありて彼が爲に切に福を禱りつゝあるを告げよ。

○

新佛敎着す、縱横と別れてから旣に四十日だ。今や彼は其玩具の樣な懷中時計や蓄音機で大に同人間を跋扈して居ることであらう、而して僕尙依然たりだ。

昨夜は人類學大會の夜宴に二三の邦人と共に出かけ、ベルッ博士と大分種々の談をした。同氏の觀音談など中々面白かつた。實に多面の趣味を有して居る好學者だ。來年は再び日本に歸るとの事だ。

此間恩師の勸告で此地の大學から學位をもらつた。實に愚な譯だが、彼是云ふ程のことでもないから其儘にして置いた。

愚稿少し兩三日中に送らう。

（明治四十年九月十五日）

○

哲學館主の退隱は此の間新聞で見て驚いたあまり突然であるので一時は何か事情でもあるのじやあるまいかと思ふたが、そんな事もあるまい。此地では七十八十まで講義もやれば論文も書くと云ふ風だ、日本の學者はどうもいけないと云ふのは、實は酷

君が詩興ます〳〵大ならむ。

繪畫兩三葉別封して呈す、多少は君が雜誌の材料ともなり座右に寓目ともなりなむかと。

(明治卅八年二月廿日、嘲風兄宛)

○

トリスタンのクルヴェナル、タンホイゼルのヴォルフラム、嗚乎天地の間に友情ほど麗く高きものありや。

天外に放浪する短きにあらず、盃酒の外、利害の餘には眞情を披きて僕を慰むるものゝなきに飢たる身は君が書を得るごと君が賜を受くるごと心は不盡の喜あり、尙江氏の社會小說二部は先づ着し次で「心のあと」賜ひ英文小說一部吉田氏に充てたる小說一部を得ぬ、重々の厚志、何を以てか謝せむ、惠與の書皆深き興味と同情を以て讀み、惠を同寓の同胞にも頒ちたり。

豚妹より時々送り來れる讀賣紙上にて露伴氏の「天打つ濤」を讀み其神品に感ぜし僕は出處に一層の隨喜を表しぬ、露伴氏彼は確に紛々たる群小文學者にあらず、彼をしてせめて露國にても生れしめば、彼がゴルキー一輩を凌駕する幾等ホリレヤを知るべからず、願くは獨英の文藻に秀づるの士、この天下有數の文人を世界に鼓吹して其美を坤輿に鳴さんことを。

讀賣記者の兄に對する惡罵は僕頗之を不快とす、兄が樗牛氏に對する盡ざる友情を冷評惡嘲して呶々の狂語を臚列する如き、何ぞ其品性の陋にして人情の薄きの甚しきや、思ふ、吾國猶彼が如き愚文字を喜び見て吻々として自ら喜ぶの徒多き今の如くんば、卽ち人心の危機も察するに難からず、吾人は唯宜く此點に深く眼睛を着けて、着實に國民品性の改善と趣味の向上とを期すべきのみ、彼が如き醜文字畢竟何するものぞ、兄も亦之に對して唯驕兒頑童の惡戲として怒らむよりは寧ろ之を憫れみしならむか。

奉天の大捷捕虜五萬といふ、日本に同情ある此地の友人等は切なる祝賀を昨日來頻々として僕に寄せ來りぬ、暴虐、壓制、不正の政策と政府とを懲すの快は快の此に過

たまらないじやないか、夫でも麥酒も飮むし勉强もやつてゐる、實際はこんな時に面白い學問上の結果も出る樣だ、一月已來一つ二つ掘出しものをしたから其內新佛敎の一隅でも拜借しやう。

日本の鐵道も國有となつた樣だが、結構だ、但し役人顏をすることをどし〳〵攻擊せねばいけぬ。

健にして貧ならまだよいが、僕は貧にして稍病だから申分はあるまい。

菫一朶麥酒の債に添えてけり

○

新佛敎着す、兄はよく駄文愚文を作れど——時事亂評をさすのだ——今回の文は確に快文なり、雄文なり、苦熱今日雷雨のために洗はれし時この文を讀む、頗る天下の快事也。

駄文一つ送る、以て哲海縱横素明等の舊友に一々束するの煩に代えむとす、雜誌餘白あらむ時一隅を與へしめよ。

病未だ佳ならず、而も狂態依然たり、可笑。

(卅九年九月十七日)

ぎぬ、字々に溢れたる同情の酌み句々に漲れる友誼を味へる孤客の歡喜は此間如何に深く且大なりしか。

但しこの十間は殆ど寸暇を有せざりき――師のために大集經諸部の內容目次を作り之が麗藏と他の三大藏に於ける差異を明にし、無盡意經の梵漢對照をも存し且つは常盤井氏の論文につきて少しく訂正を要すべき業ありき、今や事略了り師と僕が共同研究に就れる于闐の古文書も其一部は結末を告げしかば茲に漸く滿心の誠を表して老兄が至大なる友誼に謝せむとす。

先づ願くば問ふことを止めよ何故少しく早く歸東して母を省せざりしかと資金の缺乏や攻究の緊切や固より之が解となるべくもあらず矧むや此他吾が身邊に歸東の阻碍となるべきもの當時一も之なかりしをや而して寸斷の膓を抱き九裂の心を撫して歸る能はざりしもの唯胸間に藏する一の祕密あるに由れるのみこの祕は今吾至親の師ロイ翁にも告げず至密の友荻原にも明さず尙今は何人にも開く能はざる極祕なり、老兄にして齡漸く高く所作已に辨じ行業既に圓かに幾多の俊秀を講壇に養ひ得等身の大作を天下に遺し正見、種世等の愛兒乃父を辱しめざる偉大の好漢となりて天下を濶歩せむを白髯を撫でゝ喜び見るの時あるべし此時にあたりて僕猶餘生を空山の廢寺に托して修禪誦經するの幸ありとせよ乃ち願くは一夜月明に乘じ來りて僕を叩け僕或はこの胸間の祕を洩して靜に大寂の近くを待たむ或は思ふ僕此七八年の間多少宗門に愚忠を竭して後跡を雲水に托し荒野亂艸の裡老病蕭然として故人を思ふ時あらむ乃ち或は此祕を老兄に書して之を僕が最後の書となさむ、嗚乎老兄希くはまた問ふ勿れ、而して亦此の如きを老兄に書したるを逝じて他に語らざれ。

老兄がカーン氏に計りて僕が苦難を津濟せむとするの俠義と友愛に至りては感泣の外辭の出づべきなし乞ふらくは一に老兄の慈懷に賴らむ。

實を剋して之を言へば僕は既に幾囘か此事を提げて老兄の高義に訴へむと考へたる

○

頂戴して惡口をたゝいてはすまぬが、俗惡の文藝界と閨秀文壇ありがたう。ありがたいのは日本の俗惡趣味がどこまで到達するかを觀るに便なる爲の御禮だよ、僕が俗惡の繪端書で御禮とするのも仕方があるまい。此間シルレルの百年祭のある所で「シルレルと日本」と云ふキワ物を一つ出してやつた、要する所はシルレルの道義觀念と日本の武士道とをコジツケたものさ、其中窃に君に見せよう。

昨夜自由黨の一醫者に招ばれて、來週此地の衞戍監獄を見せてもらふことに約束をしたうまく總督が許して吳れると其記事は新佛敎の一頁位はふさげることが出來やう。

（五月廿四日）

○

拜啓去歲長逝したるウエーバー敎授の遺書全體を通じて競賣せらるることゝなりたり、生は何卒彼のマックスミユーラー翁の文庫と同じく、之を吾國に留めたし、之を吾敎界に留めたくと存じ、業に拙宗にも之

（明治卅八年三月十四日、風兄宛）

○

十日ばかり前に、君宛に、「新佛教」に、例の通りの駄文を送つたが、御用に立てば何よりだ。姉崎兄の所に、少し眞面目の文を一つ送つて置いたから、何處かに出たら、君のお目玉を頂戴しようか。

近來、眠られぬに少し閉口して居るが、例の如く、駄法螺も吹くし、麥酒も飲む、本も讀めるから、先づ〳〵命には別條はあるまい。

近頃、一露友のために、モスカウ横死者の大音樂會の世話をして居るのだ。今日、一銀行員から、五十馬（マーク）、右のために寄附をうけた。所が、銀行員曰くさ、其中より、日本の東北飢饉の爲に、御割きに相成りても、よろしくとの事だ。向うでは、氣を利かした積りで、有り難い譯だが、其所が痩我慢で、皆音樂會の方に出して仕舞つた。日本が御厄介になるのは、まだ間があると言つてやつた。

感心なのは、僕の露友だ、彼は、化學者だが、コルサコフの高弟で、ピヤノは黒人ほどやるのだ。外に一人の醫學生と、法學生とが、まづ今回の立役で、チヤイコフスキーを驚かさうといふのだ。あとは、此地のヲペラから、後見旁、女優男優が四五名くるのだ。日本人には、まだこんな藝當は出來ぬが、しかし出來ぬ方が、……バンカラの方が、國のためにはよいかも知れぬ。

此はがきを書いて居た所へ、例の露友がやつて來た、五十馬を渡すと其喜といふものはなかつた。

彼は、化學教室の教授某君を依賴して、無理押に教室の人々に、切符を買はせたとの評だつた。

面白い談もないが、同人は皆無事か、其うちには、僕のドモリを、法兄怪談の中に見ることが出來るだらう、よろしく言つて呉れ。

（明治三十九年四月一日高島米峯氏宛）

○

空谷の跫音にも比すべく大魃の甘雨にも似たらむ老兄が書を得てより既に十日を過

で、要するにあまり用事を多く引受ける罪からだらう。

日本人は僕とも目下三人、あとは醫者だ、毛唐の奴らに多少知り合ひが出來たので、寧ろ毛唐共の方が談が合ふ樣になつて來た同人諸兄も大分大まじめになつた樣にはるかに見受け奉るが疎犯例の如く空想妄想例の如き僕は君等に逢つて大いにびつくりするだらうと窃に考へて居る。

昨日は外套なしでラインの河畔に散歩出來る天氣、今日は雨雪紛々、たまつたものじやないよ。

同人諸君によろしく。日本に歸るのが近くなつて嬉しいような、又嫌な樣な氣がするよ、頭をさげて、足を曲げて、馬鹿げ切つた口條を百萬だら述べねばならぬ機が近づくと思ふと實にぞつとするよ。

教界にもあまり面黒い議論もない樣だ、ロシヤの革命も下火だ、春眠の近いせいだらうか、日本にも何か面黒い談もないかい、先づこの位にしよう、サヨナラ。

（二月十九日）

せむ。

老兄が歸朝の後約一年の後なりき僕は華嚴諸部の梵漢對照の業と夫の浩瀚なる謄本臨寫とを修り直ちに祕密佛典の硏究を開始しぬ資料はロンドンの亞細亞協會ケムブリッヂ大學甲谷他文庫よりして頗る寛大に供給せられぬ、僕はこの材料に依りて硏究の大綱を二大時期に別ち第一は原始的祕密經とし第二を成熟したる祕密經となしたり第一の代表者としては孔雀王經を撰み主として祕密經と四阿含との關係及兩大史詩との連鎖を討究し之に他の原始時代に屬する密經を湊合集中しぬ、第二は其中心として金剛智金剛經若くは如來三業祕密經の如き原本の現存するものを撰定して之に漢譯諸部の後代祕敎を按排せんと欲す、第一の硏究は其骨子既に一年の前に就り其材料も略具足して殘る所は唯ケムブリッヂに門外不出として珍藏する二種の古貝葉經を既に校定したる甲谷池本と對比するに過ぎず。

僕は此殘業を理むるの傍第二期の硏究に入らむとして資力極めて乏しく且多少の債を負ふて此地を去る能はざるに至りしを以て第二の硏究を廢して之を荻原に計り若干を得て一先皈東せむ愚考なりしも之すら意の如く充分ならざりしがため此地に留り窮を忍び困乏を耐へて師と共に專心于闐硏究に從ひぬ、卽ち中央亞細亞古文の硏究及其亡滅せる古語の討究にして十月已來漢譯の助によく證定し得たる古經斷片三十餘種に上りぬ此討究は實に僕が困厄の間至大の慰藉たりしのみならずまた僕に新しき聖典史の智識と材料とを與へたり、僕が言ふにも足らざる漢譯藏經の頭腦も古經を證定する必要に逼られて稍博大を加へし感なきにあらず。

かくして僕は終日兀坐藏經を讀み古文を翫び古文字の漂滅消磨して腐蝕甚しきも苦讀しつゝ今に至れるなり、先月の末より今月始なりしが師はこの硏究のために僕が盧に來り訪ひしこと一日五囘餘なりしことすらありき今尙日に一二囘は師の訪問を受けざるを得ずかくして僕がこのストラスブルグに於ける最後の半歲は吾師との最密最深

皆寫眞のみに候。頂戴ばかりして義理あしく相成候もその內何かの畫帖差支度候家中總出にて避暑やら旅行やらに出かけ小生と今一人の日本少年にて面白くやり居り候昨日はビステキを作り大失敗、肉の黑燒出來候.今日は豚肉燒うまくやけるかと案じ候。黃洋兄にもよろしく、同兄の編輯は元老網羅主義にて社の經濟の方からは確かに成効したるものと奉賀候。　（八月十八日）

○

四五日來下痢にて四肢綿の如し、十月分の原稿は腹案あれど材料の整理之が爲めにまだ出來ず。ツエッペリン伯の空中飛行船は無殘の最期を遂げた。大成効の前大悲劇あり、一面諸行無常の雄大なる眞理を觀ずると共に他面には老伯が此の大打擊に屈せず七十の頽齡更に再造を企てし勇氣に感服す、獨逸國民の同情は非常なり、災後僅に數日義捐金五十萬に上る。

行願讃の方もしばらく執筆出來ず、但し興來らば一氣呵成にやりつけ申さん。

（明治四十一年九月五日）

也而も此の如きは嫚に老兄の友誼に狎れ俠義を濫用するの責重きを思ひて常に筆を擱きぬ、然るに今何の不幸や老兄の先づ之を僕に諭すあらむとは思へらく老兄深厚の友情は僕が憫れむべぎ微願と相感じ相通じたるなきを得むか願くば下に胸間に藏せしを老兄に呈露せしめよ。

　僕嘗て此地に於て久しく交際したる醫科の一老敎授よりしてカーン氏の愛人を聞き其富を散じて學藝を勵ますの宏度を知りまた日本を愛好する頗大なるの雅量を詳にし其人と相識らむとするの念熾なりき旣にして同氏が東京大學に巨費を獻じて老兄等を歐西に招聘したる美擧を耳にし其普通の富豪が自然學に偏に實利の學藝にのみ常に資を給さること類を異にし、宗敎學法理の如きに重きを置くの識度稍風俗を抜くものあるを感じて景仰の情轉た深きを加へたり、而して當時僕衣食の資漸く乏きを告げ、研究之がために障碍を被るもの少からざるに當り或は一たび書をカーン氏に呈して資を仰がむかとも考うるに至りぬ、蓋僕此地にある短きにあらず交はる所また少しとせず、一二資産ある家にも今尙相往來す而も此等は要するに僕が窮を訴へて資を仰ぐべき人にあらず、僕にして若し今此等の門に首を垂れ膝を屈して憐を乞はむには或は資を得むも難きにあらざるべし、而も今に苦節を守り窮を忍び揚々として、人後に立たざるものは學術を重ずること黃金を重ずるが如くならざる風俗者流に叩頭するを恥ぢて已耳カーン氏に依らむと欲したる所は實に玆にあり。

　但し僕は直ちにカーン氏に書を呈する頗禮を失するものたるを慮り一に老兄の指導と紹介とを煩はして老兄にして事決行する可なるを告げむには卽書を裁して同氏の義俠に依らむと思ひぬ、而して老兄儀が此祕を打開せざるに先ちて思命愍ろに僕を諭するある僕の歡喜夫如何に大なりしか。

　事就るや否やは固より豫期し得べき所にあらうと雖、老兄が此高論を讀みしとき、僕には再生の思ありき。先づ高論に從ひて略して研究の目的と歸朝豫定の時期とを記

を勸告したるも目下の微力或は購求の事就らざるやを憂ふ、よつて更に西本願寺の薗田君にも書を發して同派にて購入のことゝなるべきやう勸告致し更に高楠博士にも右の趣申送りしに、然れども更に考ふれば、之を各宗合同にて購入する樣なることゝなれば至極妙なるべしとも思ふ。此邊御考あらば何とか御奔走願い度、佛敎靑年會、新佛敎社主動となりて右の書を永く本邦に留め、敎界の東洋學庫を造るに至れば非常に諾學上利便なるべしと存ず、遺書の「目錄」「購入方法」は高楠氏に發送し、且つ委細は同君に申上置たれば御主が「新佛」「東哲」にて一番大吹に吹かば効力大なるべしと思ふ。

（七月十一日）

○

　博文館版の寫眞畫報本日着、面白く拜見、直にロイマン夫人に送り申候廣業の畫多く候へども中には見られ候ものも有之候何故に日本のエカキは木偶を寫すを知りて活きなる人間を描くを知らぬにやなどゝ思ひ候。此地にも大分戰爭に關する畫帖現はれ

實僞摯の研究的態度を取り、而も忠實なる加特力敎の一僧として淨戒を守り寂然として書齋に圓寂したる彼は僕が最近の模範なり、妻孥なく兒孫なく麻衣綿服一生を送了せむと誓ひし僕には歸東の後は費を要すべきものあらず而してこの五年の間は多少檀越の僕を助くるものも出で來るべくカーン氏に對して責を果さゞることは必之あらざるべしと信ず。

ワグネルは曠世の偉材也而も其パリに苦しむや愛犬を葬むるの資さへ乏しきを訴へたりと聞く鈍駑僕が如きもの困厄に縮るは固より怪むに足らず悶々の情時に起りて研究の熱漸く冷ならむとするときは常に此等偉材が難を排し苦を忍びて大業を就したるを思ひ自ら奮ひ自ら力めて勇猛精進の志を振起するのみ、僕は固より至愚の惡材なり而も僕は老兄に於てヹーゼンドンク夫妻の如き美しき情と材を愛するの高懷とを認めて窃に歡喜に堪へず奮精の情精進の念は之に由りて幾層を益しぬ。

僕が老兄の慈懷に縋りて一たび高義に訴へむと欲したる所は略玆に盡く老兄が至厚の恩誼に依りて半歳已胸間に欝結蟠屈したる大塊は今僕悉く之を老兄の前に呈露し了りぬこの外は唯老兄の憐察と高助に一任する已耳。

謹で種世の生誕を祝す、慶事の遠からずして老兄が家にあるべきことは吉田兄より聞きぬ老兄願くば僕が至深の祝福と慶賀とを受けよ。

僕も一昨年已來漸く舊敎僧と交はること深きを加うるに及びぬ時にクロイスターに行き塵世を外にせる外天地に僧團の生活の純潔なるを愛す、舊敎につきては老兄に書すべき少しとせず、次便となさむ、唯一語之に添えしむ上僕は日本の佛界の日に日に俗化し來り近世化し去らむとするに至大の不平と憤慨とを有するもなることを。

師ロイマン翁は老兄を見て其去歲已來の于闐研究を語りスタイン及ヘルンルの送れる珍奇の斷片を老兄に示さんといへり、外封は四五日已前師が老兄に發送せむことを托したものなり、一讀願くば高評を師に送れ。

× × ×

去十一月、淨土宗に宗會あり議員等は椎尾を擧げて宗學部長とし未だ歸朝も決せざる僕をも布敎部長とかいふものに選びたりといふ。僕は言ふに足らず椎尾の材は尚大に用ゆるに所あるべし、僕は愚なる宗會の人材を濫用して之を葬むるに類するの擧を憤れり、僕は來らむ牛津の宗敎史大會に黒田眞洞翁と椎尾とを淨土宗より派遣せむことを今當路者に建議しつゝあり。

(明治四十一年一月廿九日、嘲風老兄宛)

○

過日來屢老兄を煩はしたる一條につきて昨日午前遂に百事をロイマン翁に打開し了れり老兄が此件につきて僕に忠言を與へ僕が爲に盡さむとする友誼の厚きをも殘る所なく語り盡しぬ。

但し僕恩師に對しては老兄に對して胸間の祕を露呈し自家の驢事馬耳を悉く語るとは稍異たるものありき去春已來惡戰したる薪米の苦の如きは今に猶之を知らしめず唯

の學術的交際に依り、憐れむべき吾が日誌に多少の色彩あらしめぬ。

若しカーン氏にして幸に僕に資金を給するの恩に出でむか僕は來月乃至三月上旬までに于闐研究を結了し、右につきて牛津のヘルンル氏及印度政廳に送るべき報告を艸し了り、直ちに目的の如く第二の研究を續行せむがために劍橋に行き約二月餘を費して材料の整理に力め業了れる後少しくロンドンの亞細亞協會にて働き閑あらばパリに出で二三英國に存せざる密教謄本を抄寫し再たび此地に皈り伯林を經て其處に豐富なる中央亞細亞の古經斷片及古佛像を見モスコーを過ぎて皈東せむとす計るに大約七月の上旬とならむか。

僕は實に此費をカーン翁に借らむことを欲したる也、僕は勿論同氏の俠骨に依りて其恩に俗するを恥とせず、而も徒らに恩惠に甘じて此資を乞ひ得むことは僕の喜ぶ能はざる所なり僕は實に同氏の義に由りて約五ヶ年の年限と極めて低率の利子とを以て之を恩借せむと欲したる也金額は概算して邦貨金二千五百圓あらば足るべしと信ず、即獨貨五千馬佛貨六千法餘なり、僕は極めて節約に就き此中にて此地にての殘債をも理め歸朝の旅費も此中にて支辨せむとす。

カーン氏の恩に浴せんとするものは已上の條件にて僕に貸費するにある也、即ち法律的の貸借にあらずして道義的の貸費に依り經濟的の追利にあらずして恩惠的の給費たらむことを希望するに過ぎず、僕が研究に對する同情と僕が佛僧としての信用に依り證人を要せず低當を要せず一佛僧渡邊海旭の名によりて恩借を快諾せられんことを欲するにあるのみ。

老兄願くばカーン氏に對して僕を紹介し――君が知る限りに於て――僕が誠實なる一佛僧として愚直なる一研究者として偏にカーン氏の德を慕ひ其義と恩とに由りて九仭の功を一簣に缺くの慘なく多少の新材料と新研究を日東に賚らし皈り他日その文運のために涓滴の微動を致すべきものなるを推薦し、希くば貸費の快諾を得て僕をして再生の幸あらしめよ。

金額につきては老兄より直接之をカーン氏に計らるゝも可、僕より別に書を同氏に呈して細目を伸べむも可なり、何れにしても僕は老兄がカーン氏に計られたる後書を同氏に呈せむ、師は僕がために喜びて、僕が既往約八年の材料蒐集と研究の成績につき推薦狀を書し吳るべく、また僕が如何なる性格にて如何に此八年間を送了したるやも喜むで之をカーン氏に證明し吳るなるべし。

老兄また願くばカーン氏に對し僕が歸朝の後相當の寺院を董職し多少の寺産を繼承しまた多少は宗門に於ける有力の位置をも得べく隨て貸與の費は必らず辨償の責を果さるべきを明言せられむことを。

僕が今管理者に委したる西光寺は米穀の牧入約一年一千八百に上り之に寺院の普通收入を算し來れば年額二千七八百に上るべし、僕にして歸來再住し多少の整理を加へば一年七八百の金を支出するは極めて容易なるべし、僕が一生故エドモンドハーデーの如くなるべく、極めて進歩せる思想と忠

就らざりしは僕に於て固より些の遺憾あらず。

老兄に對しては此際唯無限の感謝と慙愧の念あるのみ、昨秋來胸間に鬱積したる磊塊語るに友なきに當りて、老兄の同情に促され一切之を打開し次で之を恩師に語り、それに既に僕に取りては一のエントラスツングにして快の甚だしきもの況むや之に就きての老兄が深厚の同情と煩勞とを博得せるをや、僕は今些も遺憾なし。

僕は固より今成算といふものを有せず、窮乏亦茲に於て殆ど極に達しぬ、而も一舌兩腕尙用ゆるに足れり如何なる方法かに依りて一道の活路を開きて期する所を達せむ老兄願くば甚しく僕に就きて憂へざれ。

坪谷氏に關しての厚志寔に感佩に堪えず、僕老兄が此種の人にまで僕が爲に勞を取りたるを萬謝す。

カーン氏に會するの機あらむ。只願くば僕が敬意を傳へ頗る氏を煩したるものあるを謝せよ不幸にして僕が攻究は氏の意と合はずと雖、氏が好意の書はよく之を諒しぬ。

黒田椎尾兩氏派遣の事につきては大に宗内の輿論を喚起するの要あり、之につきては老兄が有力なる助を借るの時あらむ、但し之と僕が事とを關聯せしめむは寧ろ事を破るの處あるべし。

書外再信に讓らむ蕭々の寒雨時に來る、破窓枉げて寂寞たり。

（明治四十一年二月廿二日、嘲風兄宛）

○

ボルドーよりの雲箋に接して座に老兄の淸遊を思ふ、春潮雨淡く古寺鐘濤きあたり想や深かるべく思や幽なるべし。

此地春寶に厭ふべし一昨も昨も淡雪ありて爐邊尙去り難し、師は今パリにありフエールの目次したる西藏經を對照せむが爲去る日曜飄然として此地を發せり夫人は事の甚急なるに驚きたる樣なりき二十四五日には再たび此地に歸らむ。

僕は恐く來週に女主人に從ひ居を移すべし今の家僕には過ぎたれど入口の狹く闇きために新しき家に移るなりといふ、新寓は一階今より高けれど淸潔にして快適なり空晴れたるときは我好める黒森の連峯も指呼の間に望み得べし浴室は明くして極めて佳なり。

老兄此地に來らむ時は願くは僕の寓に投ぜよ縱に雙脚を伸し自由に胡坐かきて家にあらむ如く百事遠慮なく長旅の積鬱を一洗せよ、供するに美味なく薦むるに芳醇なけれど日本飯を飽食して快く起臥せむことはホテルに勝るものなしといふべからず同寓者二人あり共に醫學士なり一人は鷗外氏の家にありて稍獨逸文學をも解す語るには極めて無害の人々なる。

僕も老兄の來らむまでには一切の硏究を一先づ切り上げ多少の資をも得て、快く老兄と數日の休暇を取らむとす、一日相携へて杖を黒森山に引かむなどと思ひつゝありフリーダーの花のその頃さかむことを望む、大拙居士は今ロンドンにあり昨書を得たり老兄の動靜につきて問ふ所ありしかば今これを答へ了りぬ。

今週は般若のみ讀みたり、五大部般若の對合表を作らむが爲なりき初は一二日の業

後來研究上資を仰ぐの必要上カーン氏に對して一臂の力を借らむことを懇請したる已耳言ふにも足らざる僕なれども此間に横る一種の苦衷は願くは老兄の高諒に委せむ。

師は快く僕の請を納れ大老兄が友情の濃にして材を愛するの至れるもを嘆美しこの事の滿足に局を結ぶの幸あらむことを祝福しぬ、而してまた僕のために右につきて種々の助言を惠むに吝ならざりき。

師が僕の爲に艸したる兩道の書は今朝就りぬ師は親ら之を僕に賚し猶種々の忠言と注意とを與へぬ。

一通は此書と共に直接レギ教授に發送したり恐く一便遲れて同氏の手に入るなるべし蓋此書は最急便に托し他は通常便なればカーン氏に對して僕が直に書を戴することは師の好まざる所なりき且つ師がカーン氏に宛したる書は老兄を通じてカーン氏に呈するを最も適當にして且つ最も禮を盡すの道なるを諭しぬ、僕は一に師命を奉りぬ、而して前に之を同封して老兄の過大なる盡瘁を煩はす。

貸費或は給費には一にカーン氏の意に任すべしとの事も恩師の言なりき、是老兄が僕の意を諒してカーン氏の意に任せ適當提議すべきものなるを語りぬ、僕また之に從ひり是固より僕が最初思考したる所なれば也。

老兄にして前便の如く目下の事情上親らカーン氏に當るの面白からざる點あらむには願くば高見の如く先づレギ氏とも議して適當の妙案を取らむことを懇願す。

今は唯一に老兄の方寸に一任し速に事の就らむことを切望するのみ。

事就らむか僕には再生の思といふべし憂悶に限り煩勞に瞑せる身の再たび起ちて嗚乎日嗚乎光と呼ばむことブルユメヒルデの如くなるべし就らざらむか僕一も憾あるなし僕が最も愛敬して一生道を語り文を論ぜむと心に誓ひし老兄を終生忘るべからざる恩ある吾が師、之に平素景仰欣慕せる一同勞者の僕が爲に盡して而して就らずんば是命なるのみ、僕は旣にこの盡力とこの恩情にして充分の慰藉と光榮を有せり、豈他を望まむや。

壺月

嘲風老兄

兩三日來暖春の如し江氷唯岸に殘り堤畔嫩艸害しサン、クルーのあたりは景稍整ひ來れるならむ。

昨來また寶積を讀み傍ら入諸佛境界經の英譯に從事す。

明日はギョッテルデムルンクの開演あるべし、この雄大悲壯の曲は幾度見幾度聞くも飽かず、往きて見ばやと思ふ。

昨夜靴を捨て了りぬ三年來僕に事へたもの多少の感あり駄句三つ就る。

雪どけに夕破れ靴あはれなる
破靴嘆ず棄てりぬ雪どけに
やぶれ靴煙側意を負ふ馬將軍

（明治四十一年二月十四日、姉崎氏宛）

○

事は必らずしも期すべからざる事也、かけし希望の實現を必せむこと誰か始よりして待ち得べき、老兄の至らぬ限なき盡力あり恩師の力に訴へレギ氏までも煩はして事

りしかば。
切に惜む、時甚乏しく資も頗裕なるをを缺くる身の君とサンクルーあたりの枯林に相語る能はざることを。

書すべきことは次便に書せむ、今は唯兄が安かに着し玉へる吉祥を心より賀して一書を寄するのみ。

（明治四十一年四月八日、嘲風老兄宛）

〇

「紫風全集」到着仕候。

到着の時は、恰午下にて候ひき、同寓の兩醫學士と、食後日本茶喫しつゝ、直ちに包を開き、先づ卷頭の故人小照に、僅に一囘の會見ながら、飄々仙の如く、洒脱淵默の面影、ありありと心眼に映じ來り候。一醫學士は、故人と同じ中學にありしとの事にて、見し事もありし樣なりと申され候。斯くて吾々の談は、故人の印度に於ける辛酸逸事等にて持切候。

三時過、恩師來られ候、午前に續きて、金剛智の理趣般若の譯を筆受せられんために候。覺束なき獨逸語にて、小衲譯すを、師は之を正雅なる獨逸語にて寫得せらるゝに候。譯全く了りたる後かの遺稿を示し、故人の事何くれとなく語り申候。小照及びベナレス大學朶士林の畫など相示し、且其遺稿の一なる七佛通誡偈梵文と共に讀みて、互に泫然たるもの有之候、ウエンッエル、フート、トレンクネル等、中道摧折せる師が友人の上を語られ候ては、今昔の感深く有之樣に見られ候。

願くは、此理趣獨譯の淨業、廻して故人が莊嚴報土の點滴に捧げたく、師と心をこめて讀みたる通誡偈も、願くは自受法樂の一分にもと存候。越て二日、雪窓靜に全編の通讀を終り候、老兄及高島兄が編纂に關しての御盡瘁は、何とも感謝の外なく候。故人の志、故人の心血、之れによりて永く後學に奮勵を與へ、長へに有情を饒益せん事と有がたく存じ候。

別紙ほ、遺稿を閲して氣付きたる一に候。元より、かゝるものは、世に公にすべきものには無之老唯臺と高島兄の、內披に供へんのみに候。

師と合作のヱハガキ一枚封入、島地老和上に拜呈の積に候。一寸見失も候まゝ、めつけ次第、郵便にて御許までさし上可申、歐西の老碩學と、日本の一沙彌が、遺稿よみて記したる感は、多少和上の老懷を慰する料にもと存じ候。

右遺稿御惠贈の謝辭まで如此候、高島兄に御出合の節、よしなに御鳳聲奉願上候。

草々拜具

（明治四十一年四月三十日、島地大等老兄宛）

〇

ミユンヘンよりの雲箋ライピチヒよりの一信を得今亦パリより朶雲に接してロンドンに再遊の快を知り每に君が諠金の如くなるを味へりヘルプ著の佛陀論も惠贈を恩を荷へり永く書せざりしは君の東西雲遊の際信書の達せざりしを思ひてなり幸に之を恕せよ。

佛陀論は旣に之を讀みたり偏見狹量此書の如きはアポロゲテソクの常とは言へ寧ろ好笑の資也但し佛敎の傳播西歐に炎々の勢

ぞと思ひしに存外時を費しぬ昨漸く業了りぬ此夜は少しく通信を淨土教報のために艸せむと思ふ。

般若の中二大事を說くといふ文に曰く觀一切法空曰く不捨一切衆生なり此二句よく大乘の敎義を詮して妙味の盡きざるを覺ゆ前一に執するときは卽頑空後一に着するときは唯我執のみ歐西の哲學と宗敎も執を離れ着を捨つるものは甚少し文學も美術も無所着の趣味に安住せるものは我甚だ多く之を見ず。

萬國佛敎會に就きては未だ詳報を得ず老兄來らむまで百事を確め置かむ。

僕無事近來少く視力の近くなりしを覺ゆ。

報ずべきこと極めて乏し、此地の佛國崇拜の極に達せるは州會にて小學に佛語を公課とせむとするの願書出でたるに知るべし「エルサスの血」といふ新しきドラマも多少この消息を洩せり、曇る、陰寒。

（明治四十一年三月十九日、風兄宛）

○

ルエノビウムに宛て端書を發したる後兄が美しき雅箋ルガノ勝景を載せて至れり、桃に李白は琉璃を溶かしたる大湖に映し白銀の屛風に似たるアルペンの連峯之を匝るの地、兄の道懷いよ〳〵豐なるを加ふべく兄の趣味益深に入り幽に通ぜむ賀すべき哉、此地天猶曇りて雨又風郊外の野艸摘むべくもあらず、朝市に出でゝ石竹兩三朶雪鈴子四五莖金雀花少しを購いて聖像を飾りぬ基督の生誕には雪深からざれば、興甚至らず、佛陀の降生に柳暗く花明に鶯歌ひ燕舞はざれば頗る寥寞の感を惹くを如何せむ。

十二日はよき會なるべし、道を好み心を磨して塵世を忘るゝの士は往々瑞西佛蘭西の邊に出づ、獨逸には今はかゝる人出でず、理智は人をして殺風景ならしむるものと見へたり。

此週は少しく起艸急ぐものあり來週より大品般若の梵漢對照にかゝらむ、此業稍時を要すべきも奮ふて之に從ふべし。

曹洞宗の大森禪戒といふ人今牛津にある由友より聞きぬ、兄の門下なるにや。

雨漸く收り西天薔薇の色をなし來りぬ而して聖日旣に了らむとす。

（明治四十一年一月十日嘲風兄宛）

○

何時よりか兄に音信を絕ちけむ、兄は再たび鵬翼を西歐の天に搏ちて胸間蘊蓄の虹霓を吐き來らむといふに僕は猶この萊江の舊艸盧に斷簡零墨を硏めて漸く將に世と乖かむとす。

此三歲の間母を喪い亡師を哭し心に百憂を懷き身に疾病の苦を受け衣針常に乏しく薪米の資も缺くる所多かりしも些許の信念と介爾の硏究とは日に慰藉と生命を援けて、病殘の衰軀尙大に爲すべきの自覺あらしめぬ、硏究と信念は僕をして狂せしめぬ、而も此狂也僕が生命にして僕が安住する至大の樂地なり。

兄がパリに着かむ日は心に之を待ちたりき、之を榊君に聞くに及びて我喜こそ幾何なりしぞ、君に書して胸中の祕を發き且つは兄が指導に待たむと期せしことも頗多か

しも未だ確答に接せず、嚢中頗る困難を極む老兄には曩に一方ならざる辛勞を煩し今亦厚誼に訴へんことは恥を知らざるに似たれど若し今餘裕あらば應急の策とし八月上旬まで英貨十五磅乃至一時恩借叶はざるや若し大橋氏老兄の話の如く今會ば實に幸なり、老兄東西に電馳して、南船北東の暇なく資も無論餘裕の存することはあらざるべし、されど老兄の信用と名とに於て如何とか方法存すべきかとも考へ高慮を煩すことゝしたり特に懇願す。

幸にして高諾を得ば正金銀行に令して十四五日頃までに廻送を勞したし二月の分と合せて先に記したる期限までには必らず返濟の務を完ふすべし。

昨日師の筆に就れる一小册子を呈せり僕が多少の幇助をなしたる所は文中自ら明なるべし、一二輕薄の人僕を嘲りて曰く徒らに人の爲に犬馬となりて滋味は他の喫する所となる天下の至愚なりと然も彼等は師弟の誼の何たるを知らず佛徒が饒益有情莊嚴法界のためには唯働くを知りて自宗の何たるは念頭に存せざるを思はざる可憐の輩なり深く意に介するに足らず——遙に健康を祈る。

（明治四十一年七月八日、嘲風兄宛）

○

四阿含研究艸稿燒失の慘事を聞きて心痛むこと甚し、學人にありては愛妻を哭し愛兒を悼むの哀にも比べるべし、老兄の心事洵に同情に堪へず、然も此際は老兄の言へる如く忍耐の方便として寧ろ心地の修養に資するの意あらば慘事の幾分亦慰藉を得べきか、行誡老師嘗て芝の大學林燒けたるとき來りて學徒を喩し一絕を賦しぬ、前句は忘れたるも後句に、

……不識諸行無常實、亦是學生汚學問の語あり、老兄艸稿が猛火の三昧に入りたるもまた正に此觀をなすべきか。

昨之をロイ翁に語りたるに十四年前にも同樣の慘事ありしを語られたり、當時ハーデー、ファウスボェールの貴重の珍本皆雨丁童子の食となり了れりといふ、此二名家今や此世の人にあらず、老兄の稿も同じく同種類のパーリの研究なり、何かの因緣もあるべきにや。

大學の經費支出に吝なるは惜むべきことなり、世に活くる金と死する金あり、大學が役にも立たぬ死金には費を惜まず、今回の如き有益にして邦家の學藝を紹介する機會を逸するを惜むなり、老兄心事の齟齬の爲に痛むと共に亦帝國大學のために頗る哀む。

第三の件につきても世事の轉意の如くならざるを思ふ、老兄の言の如し、但し大村氏と雖、事の大小と利害とに敏ならむには、恐く老兄の請を斥けじ、願くは幸ある結末に終らむことを望む、切に望む。

老兄の財事の內容を洩さるゝに及びて弟は頗る老兄を煩はせしこと過大なりしを悔い且つ恥ぢぬ、大橋氏にして老兄の意に充たらむ程の俠を示さゞる限りは願くば再たび僕に對して貴意を勞せざれ、何とか都合して此難關を逸脫する工夫つくべし。

老兄の事情此の如しとせば、彼の五磅の方も至急に辨債を終るの責を切に感ず、今

を逞うし來らば此の如きの著は爾來雨の如く多かるべし、靜思淨修して眞諦を觀ずる人にありては佛たり神たるを問はず如是の戯論は遠離すること百由旬なるを可とすべし法句經も四福音も法華も默示錄も聖胎長養の資としてこそ眞の宗教に志す人の面目にあらずや、無我の大道なるかな無執の眞理なるかな基督敎の僧侶之に缺くるあるや久し、君は基督敎聖徒の傳を讀みて何處にか透徹せざるが如き感はあらずや。

僕今劍橋より古寫經數帙の送致を得て之を于闐の古經斷片に對校しつゝあり、文珠般若は極めて希なる聖典なる故數日を消して全部を寫了し、大品般若は全帙を漢譯と對比して一の表を表し今金光明經の古本を取りて文を印度刊本に比す、同刊は其粗雜驚くべし、歐人が往々にして印度刊の梵典を信用せざるも確に一の理由はある也、蓋し印度人の梵典を刊するや吾等が雜誌の原稿を校訂すると等し、其力餘りあるが爲に寧ろ粗雜を招くのみ老が大著中に此れを引きたる所ありと覺ゆ、其部分丈は校訂終りたる後寫して送致せむ、この寫經は十六世紀位のものにて紺紙金泥宛として本朝奈良都時代の古本を思はしむ字體また凡ならず展覽頗る神を慰するものあり。

パリに藏する梵典目錄二週ばかり前に購ひぬカバトン氏の著なり、佛典は一百六十五種四十花嚴の如きは四部あり金光明も三部を藏す、但し何れも十九世紀の新寫本にして劍橋若しくはＲＡＳ如き古代に屬するものなし以て甚だ貴しとなすに足らず、然し此著皆ビュルヌーフが手譯の存するものなるを思ふ時一度は通覽したき思も生ず。

ファウスボエールの遠逝は老兄恐くライプチヒにて聞きたるなるべし、アルツールプングスト去十日のフランクフルト新聞に翁の傳を艸し盛に功業を頌せり僕又日本に於ける同好者のために翁を傳し之を「東洋哲學」に投じ置きたり、コオペンハーゲンにて今や此の如し一切の行は如何にしても無常也。

此地にては縣會議員の總選擧にて頗猛烈の競爭ありき市にては自由黨と中央黨の連合てふ面白き現象あり爲に悉く民主黨の議員を殲滅し了れり、大學の側よりは例のスパーン氏出で、チーグレル翁に代れり一時舊教僧を自由なる大學の講座に入るゝにつきて紛々の洩を發せし、此地の教授連は今餘り昔日の言論を忘れ果てたるに似たり、政府といふものは何處にても萬能のものと覺ゆ。

ロイマン翁は例の如く于闐死語の講究に多忙也、ペータスブルグにより更に多數の材料來りぬ、其中舍利弗陀羅尼丈は既に證定を了れり他は今、ヲックスフォードとコッペンハーゲンに出さんと思ふ小論文のために事に託して證定を怠り居れり。

僕も都合してコオペンハーゲンに行きたしと考へ今國許に照會中なり荷物の都合上ロンドンより歸ることゝなれば宗教史會の方にも一寸顏を出し得べし、然し是等何れも希望だけなり、宗務の方は例の御役人を辭退し了りたれば出金は許すまじ他にてどうか都合つくべしと考ふ。

右の申出と共に旅費其他をも請求しやり

のだから、その生國も西遊記に出て來る國々の名と同然。何もかれこれ捜索する程のこともあるまいが。而し香至といふ名は、健陀羅をある人が香行國と譯したのから思ひ付いた虚構な名ではなるまいか。香行といふのも隨分無理な譯だが、行と至とは一寸意味も似て居る。香字を梵字に宛てたのは、今迄少しは對譯のものも見たが、まだ見あたらぬ。それから高桑君の訶陵を羯陵伽としたのは、今學界が定つて居ることで、高楠君の寄歸傳英譯にも、そうしてある。ツヤツンヌの求法高僧傳はどうであつたか今一寸手許にないから、手紙には書けぬが多分同じくそうであつたらうかと思ふ。無論地名の一致はそれでよいのだが、然し義淨は、決して訶字をKaに使用したことはない、淨師の一番對譯字を多く使用したのは孔雀王經であるが、甞てその例がない、且對譯家として嚴密に音寫をして居るのは、淨師に不空、玄奘などが其最たるものだから、勿論羯陵伽に訶陵といふ樣な字を使ふべき筈がない。そこで、梵音の伽陵伽を南海音で訶陵と轉じたのを、そのまゝに寫したとする方が穩であらうか。こんな轉音の例はいくらもある。だから平子兄の義淨肉筆などと、力むにも及ぶまじと思ふが、どうだい。その證據には、訶陵國を波陵國と書いた所も傳記の中に見へる。彼字は訶と同じ價値に使うた所はまだ見ないが、兎に角、訶陵を直に羯陵伽にするのは、少し調べた上でなければ、危險ではあるまいかと思ふ。何れにしても高平二君の眞面目に論戰して居る態度は感服の至りである。

伯林大學のピッシエル教授は去冬の二十七日、ボンベイの病院で歿せられた。二十六日、師のところにドクトル、シラウーダーと連名でコロンボからのハガキが來たのを見て色々の噂をしたが、その四五日後には悲むべき黒枠の報知がベルリンの留守宅から來たのだ。實に何とも惜しいことをした。多分猛烈な風土病にやられたのであらう。何所にか、ネクロログを書して、弔意を表しよう。去年の秋の末に出た高昌發見の法句經梵本研究が、最後の仕事であつたのだ。

ケルム先生と南條老師と、共訂の法華梵文、第一册が露都の「佛教文庫」から出た全體は、今三册位で終るだらう。申し分のない刊本である。何とも喜しい事だ。唯、プサン教授や故ペンドール氏の校訂した、聖教には、西藏譯を對照してあるが、南條老師の校訂で漢譯の對照が缺けて居るのが、少し惜いが、これは結尾に付くことゝ信じて居るから、不平も申さぬ。

悉曇阿彌陀經につきて、少しく書いて見たいとも、思ふたが、この頃とんと氣が乘らず。今少しは濫讀の方に費すつもりだ。

メシナの地震はどうだい。大なる哉乾坤破壞の力やだ。ロオマ法王が十萬リーラ罹災者に出したのを昨日讀むだ。少しは大和尚の罪も亡びるだらう。

この位にして置かう。忘れたこれが即新年の賀狀のつもりだつたのを。縱横の所謂年間坊主は、ちがつたもんじやらう。昨夜又々下劑。粉々として降る雪に對して、主婦と更に小犬一匹をもらうべきか、もらう

少しく盡力中なり、願くは少しく之を寛にせよ。

×　×　×

昨、鈴木大拙氏より支那天台山に存する貝葉の寫眞を得又其模寫二葉を得ぬ。寫眞は惡撮拙寫餘低暗黑にして甲乙なすべくもあらず、模寫の方は梵語知らぬ人の手になりたる乍ら聊か勞を用ゆるときは解讀し得べし、僅に一枚のものながら最後の葉のこととして

白蓮尊者造、眞諦論、破六宗了の文あり、宇體はR・A・Sの四十華嚴甲谷他の孔雀經と同じ鈎體の梵文には十世紀より古からず、十三世紀より新しからぬものなり、漢譯藏中に存せず、全帙を見る能はざるを惜む、支那にも尚此種のものありと思へば一生雲水の志望唯益堅し、此地は今蕭々雨あり甚暑からず、同寓日本人弟とも五人となりて稍靜思に適せざるを覺ゆ而も此間こそ靜思の工夫を要すべきにと考へ迄せり、コペンハーゲンに出さんと思いし稿も事に障へられて未だ終らず、終らずして、終るやも知れざる也、何れにしても甚しく意を勞せず。

×　×　×

金光明梵文對照中、義淨の譯の中摩訶婆羅多と直接の關係あるべきと思はるゝ文一つ見出したり、但し古譯にもなく梵文にもなければ餘り嬉しくはあらざりしも、兎に角、此方面（史詩と佛教）は次第に資料の增し來るを喜ぶ、其中閑ならむとき稿を起して老兄に示さむ。

×　×　×

甚しく憂へざれ、憂來らむときは古書に對して聖賢と語らば可なるべく、弟四年來百憂を懷き心に萬瘡を包みて尚生き得るものは此方法に依れる賜なり、荷物となるの恐さへなければ法然傳にても送らむか。

×　×　×

黑板氏に君の會したるも知りぬ、エスペラントなどは最早口にせざるに至りたらむと思ふ、同氏はコペンハーゲンに行くにや

（明治四十一年七月十七日、嘲風老宛）

○

米峰兄——無暗に寒い元日だつた。午餐にRの家に行つたが、窖に貯藏してある、ミネラル、ウオーターが大分氷結した爲に、壜の破れた奴も四五本もあつたとの話だつた。なる程卓上のアポリナリスを見ると、壜の中に、美しく氷の柱が立つて居つた。エルザス酒で大分暖になつて歸つて來ると、高田君とチユービンゲンから來た高安醫學士が「忠度」を謠ふて居る。十二月の新佛教はこのときに着いたのだ。

その夜は鈴木醫學士の誕生といふので、同君の寓で大分騒いだ。「壺坂」が出る、劍舞が始まる、詩吟やら、俗謠やら、隨分賑なものだつた。無藝大飲の僕は、大飲の外には仕方もなかつた。二時半に、五人の同胞同君の家を飛び出して、華氏零下二十度の雪後の寒さをものともせず、二三軒ブンメリたる末に、あるカツフエーで高安君とチエースを二面やつた。無論僕の勝。これが四十二年の元旦と御座い。平子兄と高安君の論戰も、大分華がさいて、面白くなつて來た。一體達磨和尚が、空中樓閣らしい

駄哲學駄句に洒がむ下痢三斗

狂僧の下痢する時や雪の鐘

殘雪の下痢に俗腸尙安し

末の妹も母親となつたとの報を得た。而して僕はまだ依然として味噌すり坊主の放浪漢である。「落魄江湖載酒行」の方は、どうやら今の境遇だが。とても「楚容纎細掌中輕」といふ様な、眞似は柄でもない。十年一覺萊江夢と來ると、あとは果して何物を贏ち得るであらうか。

お主も少しは工合がよからう。新宅建立とは豪氣だね、然しこの頃のお怜悧ものゝ様に厭味たつぷりの建築をするなよ。此所、何處までも江戸式に行くに限る。

（明治四十二年三月五日、高島米峰氏宛）

○

麗しく霽れたる昇天祭の朝なりき窓前滴る如き七葉樹の綠に鮮なる日光映じ雄大なるヲルゲルの軍隊敎會に高く低く起りつ絕ゆるを聞くその絕ゆる間に靜に澄める天に鳥の囀くを聽取し得べし、君が惠贈此時至れり、何等の祝福ぞや。

多大の辛勞も深固の精進とは唯此種の業に辛くして幸ある汗の味を覺へしものぞ之を知るらめ、學界に資することの廣くして大なる後輩を饒益することの洪なる贅せんまでもあらじ、四含對照の業の就れるは確かに南北兩傳研究の指針となり、聖典史研究の一隅に强牢の礎石を据ゆるもの、君の勞苦に對する衷心の尊敬と感謝は拙き筆の記し得べき所にあらず。

昨夜大作を披きて所々を讀みぬ、心附きし點も少からず、西施の嬌面に枉げて黑子を點ぜむ議はあらむとも他日二三の贅語を記して君に呈すべし。

その一つ五二頁の脚註「鷄山」は是正しく「鷲山」の訛刊なるらし Gijjhakūṭa を「鷲山」と譯すは古飜の常なれば、五二頁鸚鵡經の別飜中、N 七三九、及七八三は其大體に於ては中含の鸚鵡經と同本なれども、實は中含の同經を擴大して大乘的の經典となしたるものなれば一應之を斷り置く必要あらざりしかとも思はる、此經典の斷片于闐から出でたり、五七頁の Kala udāyi は君の飜譯誤なし、此聖者を黑烏陀夷と譯せし所、諸經に見ゆ。

他は他日閑を待ちて再淸を瀆煩さむ、大作中尤價あり尤光彩あるはスッタニパータの研究なり、大作每紙隨珠明玉を以て充盈す、而も此一篇は千珠中の大摩尼とや云はむ、眞に敬服の至りに堪ゑず、四阿含中に於ては雜含の研究嶄然として傑出するものあるを覺ゆ。

×　×　×

僕班足王（梵字略す）（Pāli : Sutasomajātaka）に關する小研究を艸しリスデギヅ夫人の囑により三ヶ月前之をパーリ聖典出版會の年報に投じぬ校正來る數日の中にあるべし、大斧を乞ふと時も近かるべき乎、此研究は一面南北兩傳本生の關係を論じ他面に佛典と、吠陀、史詩及富蘭那の交涉を究めたるものなり、于闐斷片の證定報告も今刊中にありといふ、餘白あらば、四阿含證定の脚註に兄が大作を注出する榮を得べし、哲學雜誌の中含研究報告は之を記し置きたり。

べからざるかを議論して居る。
當分は原稿の實の入つた奴は書けさうもない、七月には又新佛教的、非常識的、迷信的の大悪文字を書いて少し今の如き御主のような病人にばかり書かせて大頭は何をして居るか判らぬ樣な不熱心不活潑の醜態の新佛教並に某雜誌にどんと拳骨を入れてやらねばなるまい、お主は一體、それまで生きて居るかい。

（明治四十二年一月三日、高島米峰氏宛）

○

大洋兄――何とも嬉しかつた。情の籠つた故人の文字は、ラインの古酒のように、寂寞たる人の肺腑に浸み渡つた。道灌山で兄が狂暴な醉書生を降伏したことなども、思へばあゝ十年以前の夢となりにけりだ。
左の方が達者なら、先々兄も安心だ。萬事が顚倒して居る獨逸では、右でビールを仰ぐことに極つて居るが、僕は大抵は左でうんとピルスネルの大盃を擧ぐるのが例だ。左道とはこれよりぞ始まりにけるかな。此頃二週間ばかり止めてるが、イザとなれば、チヤンカラの兄なぞは、なんでもあるまい。歸りにシベリヤに是非よる筈だから、奉天あたりで二晩か三晩飲み明かして積る話でもしようかい。
二月央は無茶な暖氣で、北獨逸では出水で、大騒をやつたが、今月になつて又々毎日降雨、氷滑もまだ出來るといふ氣候だ。小さな町で、珍談も奇談もない。千九百十二年に內國勸業博覽會が、此市にあるので、今は土地の選定で、市會では、大に火花をちらして喧嘩して居る樣だ。閑人にはそんな事はどうでもよい。それより早く前の林で鶯でも啼いて吳れればよいと思ふて居る。
神經が衰弱したか、何だか、そんな事はどうでもよいが、兎に角、兄と會合して吹き合ふのは實に樂みだ。はるかに兄の健康を祝す！。

短夜を君と醉舞にあかさばや

米峰兄――南條老師の還曆は、何かの新聞で一寸見たが、お主の考は至極隨喜の至りと御座る。僕は御馳走や、お祭騷は全然廢止して、歐洲の碩學の慶賀に用ゐる所謂「祝賀論文」Festschrift の編輯が最もよいと思ふ。老師の學德を景仰してる人々は、論文と印刷費とを出して之を編輯し、一部の書として老師に捧げるのだ。故大ベートリングの祝賀も之でやつた。ケルム先生のも之であつた。近時、此地のシユミーデへルグ教授（毒物學の開祖といはるゝ）にも立派な祝賀論文を知己門下が編輯して、贈呈した。日本からも一二の門生が論文を出して居る。どうだ、お主一つ發起人として働いて吳れては。門生も少からず、學德を慕つて居る人も多いから、結果は永遠に老師を頌する立派なものが出來ると思ふ。僕も貧しい腦と財布から、出來る丈のことはして老師に對する平生崇仰の微意を表しよう。秋にでも祝賀の會がある樣だと、僕も或は下足番位の御用を勤めらるゝことゝなるかも知れぬ（？？）
少し徹夜でもして書きものをすると直下痢といふので、下痢の句を四五唸りだした。

下痢十度窓に横斜の影もなし
下痢の昏ぬつと立ちたる夜寒かな

時代の親友に石炭屋の番頭さんが居つたが、何しろ市勢膨脹の今日、古いことであるから一寸は其人の住居も知れなかつたのを、二人してやつと捜しあてゝ見ると、矢張り從前の通りの番頭さんで、裕福に氣樂に町はづれに別莊みたいの家に住むで居た。細君は高橋君の出發する少し前に來たので來年は銀婚といふ御めでたい談もあつた。僕は此主人の頗面白い氣象が馬鹿に氣に入つて。飲友達が一人增したのと大に喜むだ。――何一千九百のキルシュを惜氣もなく呑ましたといふのでないのだが。

高橋君が來たのでこれまでストラスに居た、日本留學生の總數が急に調べて見たくなり、調べて見ると、中々面白い。千八百七十八年大澤謙二翁を開山にして今まで七十一人ある、醫界の元老連が、大分此から出て居るのは知つて居たが、穗積八束、富谷鉎太郎、高木豐三、井上密なんて法律界のチヤキ〳〵が居たのは少しも知らなかつた。一歩進むで、此先生連の逸話、即失策談などを調べ出すともつと面白からうがまあそんな時間はありさうもない。

（明治四十二年五月廿日高島米峰氏宛）

○

「新佛教」着。雲照大和上入寂の弔詞何とも嬉しく。此眞摯の態度と雅懷がある內は哲海坊が圖ぼらで「わすれぼとけ」とならうとも、お主が和洋混合のペンキ塗をおつ立てやうとも、新佛教の前途は先々有望であらう。有難い譯だ。

黃洋の「京都行」で谷本君と雪嶺翁との間の葛藤を頗面白く讀むだ。雪嶺といふ親爺も隨分小供らしい惡戲をやらかすね。愉快なことだ。梨庵（今は谷本君は此號を使はぬかしら）君とは、此地では隨分ハガキの交換もしたが、この頃はとんと御無サタだ。

坊主どもが敎育の話とか、哲學の事とかを聞くなら、谷本君などを賴むもよからうが、南無の解釋に態々佛敎には大した智識・もない、先生連を引ぱり出すにも及ぶまいじやないか。東京でも西京でも、何かといふと、かうゆう連中を擔ぎ出す癖が坊主連にあるが、僕にはどうも彼等の氣が知れない。

大洋兄の所には是非厄介になることに極めて置く、呑氣な僕だから、ことによると五日か六日食潰して、コンソン閣下を驚かし奉るかもしれない。隨分の困つた人物だ。

風呂に入つて馬鹿に蒸しあつい爲、重くなつた頭も少し輕くなり、小犬を序に洗つてやつてソフアーの上に大の字になると、非常の雷雨だ。天下此位の快事はない、雷を見ながら、三本のヴルストで日本飯を喰つて此手紙をかいた――忘れた。第二版、實におめでたう。――

薔薇風、君にもり歌譯さばや。
若竹や、薰風や、君がうば車。

（明治四十二年五月二十五日、ストラスブルグ發米峰氏宛）

歸朝後

肅啓、艶陽之花季風雨特に多く時候兎角不調之砌愈御淸穆御化導被遊候御儀爲大法幸慶此事奉存上候陳者今囘祖山及緣山に於

× × ×

願くは遠からずして君と東海の天地に相語るの時甚遠からざるべきを、今や囊底甚輕し窮殆骨を削らむとす交友玆に於て漸く減じ往來する所また寂寞たり唯机上の典籍と榻下の狗兒敢て我が黃金の有無に拘はらず二つなき至情を以て僕を慰むるを喜ぶのみ、天下夫何れの所にか古書の如く逾披にきて逾狗兒の如く忠良愛すべきものあらむや。

× × ×

友ドクトル、シユラーダー今アドヤールの司書として盛に古謄本を印度の各地に集む昨夏の蒐集は頗好成績にてアンキユエテイルテユペロンのアウプネチヤット中に譯する所にして永く原本あらざりし數種のウパニシヤット又彼が發見する所となりたり蓋彼はドイセン翁に次ぎてウパニシヤット研究の巨擘たる未來を有する如し。

× × ×

昨秋出でしドイセン氏哲學史の一、三去月閑を偸みて讀了しぬ、豁明曠達、天下の快書といふべし末段、日本と支那の哲學を括論としたるまた簡にして要を得たり、或は君が助なるなからむやとも思ひぬ。

× × ×

恩師は今哲學科の學長として俗務多端なるが如し、去歲逝きたるシュブシュマン氏の後任としてギーセンのバートレメー氏就職しぬ、バイロイトの生れにて熱烈なるワグネルの崇拜者、シュンヘンビールの嗜好者なり、前週金曜恩師等と例のゲルアニヤに酌みて甚快を覺へぬ、今晩また會あり、僕は眞摯にして學生の如きバ氏の來らむを心に望み居れり。

× × ×

正見坊愈健にして愈惠なるべし萬福之に過ぎず、願くば北堂と夫人とに僕が衷心の敬意とグルッスとを傳へよ。

× × ×

故鄉は今新綠漸く黑く躑躅火の如く新茶薰ずる時ならむ、謹で君が講壇の大吉祥を祈りて、餘は次便に期せむ。

（明治四十二年五月廿一日、嘲風恩兄宛）

○

米峰兄

五月だといふのに、雪が降つたり、雨雪が來たりして、一時は老人連は暖爐まで焚いたといふ騷だつたが、此頃は牡丹が開く、藤が咲く朝晩は鶯が啼く好風光になつた。獨逸——特に南獨逸では、この二三週間が眞のパラダイスであらう。

日本では增上寺が火ける、雲照和上が入寂するなんど、大事件があつた樣だが、小さな町は至極太平なものだ。僕の友人の公園の大鹿（エーデルユルシユ）が往生した位が、まづ報道の價があるだらう。一ヶ月前に大分弱はつた樣子が見へて、眼色などが尋常でない。段々に衰弱する勢が見へた。四五日前に行つて見たら、先生居らぬから、園丁に聞くと馬鹿に苦むから、一昨日お情に銃殺してしまつたとの事だ。その肉を、今鷲や梟などが喜むで啖ふて居る。うむざりするね。

二十五年前、此地に居つた高橋茂といふ一等軍醫正がやつて來て、色々昔話を聞き大分面白かつた。此人が書生をして居つた

章よりも此方が先決問題に候。

先は右迄。

（大正九年九月二日、三輪政一氏宛）

○

拜啓、霜風雪威猶勢力を逞しく候砌益々御淸康欣賀此の事に存上候陳者創業百事お多忙之際特に高志を勞せられ候貴譯拙生共迄お贈與の榮を忝なうし感銘此儀と相悦び申候教職御多忙中這箇明快忠實之完譯相成候事何とも敬服の次第絕倫之御勢力敬仰之至に御座候在獨當時翫讀之書、著者逝去により貴譯を見て感慨無限に候、先は右迄多用中亂染御禮如此候。拜具

本日は大正五年芝中燒失之日に有之風霜舊の如く雪餘感慨頗る深く佛恩世恩津々として輕身に徹するを覺え老臺當時之御奮鬪に對しても、猶昨日の如きを覺え候、唯校風大に振はず阿蒙舊に依りて胡蘆を描くのみに有之慚愧之至に候。

芝中四年修了若くは卒業生にして靜高志望者多數有之幸にして其中二三の入學者在出し居り候へば特にお指揮奉願置候。

（大正十二年二月九日、川瀨光順氏宛）

○

肅啓、春光麗明之候益御淸康御法務之段欣喜此事奉存候、陳者今回東京御門末道俗の熱望を幸にも御採納被成下唱導師御就任之御義實に本敎區寺院一同之面目不過之何とも幸慶之至欣賀此上も無之候特に本日は春風麗日近來稀なる好天候に有之。佛祖の御加祐も平素護法之御篤志に御加へ相成候事とも伺はれ如何にも吉祥至極と歡喜一層に御座候、小衲も御部內御始多數御來集之末班に列し御隨喜申上度心得候處布敎團之要務殊の外多忙に有之候まゝ、門下宗大硏究科卒業生山本龍海を代理として末班拜姿御許し相給りたきに付宜敷御執斗奉願度尙別封甚乍輕微寸志相表度御笑納奉願度先は御祝辭迄如斯候。敬具

（大正十二年四月十五日、眞田孝全氏宛）

○

肅啓、晚春之砌益御淸康奉賀上候震災後公私殊之外多忙を極め災餘之窮子百般之經營に寧日なく常に缺禮に打過居候段海涵願上候、今回は臨時門末會に就き過般之社會事業大會等の仕末之爲入洛致候、兼て一二要件有之は拜眉を期し候處急件を生じ今夜歸京候に付御無沙汰御詫旁敬意を表し兼て今回之門末會に付特に高配を煩はし度拙筒拜呈仕候。

未曾有之盛況を以て終了仕候、今回の開宗記念大會は其結末之處理に付御存知之如く頗る官民社會之注視を惹き居候に付可相成此場合祖山之名聲を揚げ百年之長計を立つるの雄斷に出度右に付社會事業の振興に就きては既に相當提案も有之候も、之と共に宗門敎育振興之爲に記念事業として適當の方法を講ずべき事は祖山の體面上官民の期待に對し江湖の注目に答ふべき最適切有利之學に可有之、右に付一二愚見を當局に申上置候、瀧川議員殿にも右懇々申述置候に付何卒右御聽取之上尊臺之熱烈摯實之御援助御賛同を得て大局上宗光發揮山運隆榮之基礎を定め度幾重にも切望仕候拜鳳之上右申上度く存居候處前記急速歸京の事と相

て御催之大清淨業に付拙弟共に迄御案内を忝し感銘良に此事に御座候宗門現在之發展を見其源泉に溯り尊上人御始護法大德不惜身命之赤誠を思念し奉る時感慨無量而して扶宗之尊宿大德多くは邁往之素懷を被爲逐闔宗の兒孫其大功を記するもの寥々たる時尊上人之高擧は唯々感涙之外無之何とも衷心隨喜此事奉存上候當日は萬障さし繰必ず末席に列し申度尙當日御用も有之候はゞ何卒何なりとも御下命之程被仰下度仰高教候

敬具

（大正五年四月十六日、鷲尾量瑞氏宛）

○

拜復御書面關西地方より歸京後拜見仕り廿一日歸寺の豫定なりしを大阪に於ける例の米騷動後の設備及實際の民心等多少なりとも視察いたし度少々遲引歸東候まゝ折角の御立寄も失禮仕候、歐州戰後には世界にも眞摯の厭離穢土の求道心發現可仕幾分にても眞面目に上求下化の精神發し候へば百萬の枯骨鉅債の實貨全くの空しき犧牲のみに無之歟とも近時切〻相感じ申候要は正直の努力誠意の實行是丈が今後の解決に可有之歟。

農村改善の爲乍毎度非常の御熱心何とも敬服の至り敬虔深信は饒々の嘉と共にいよ〳〵御增上何とも床しき御事、千萬景仰に奉存候病後大慈之加被力格別の事も無之、緣に任せて出來る丈の御奉公仕居候御安意願度先は右御返事まで。

（大正七年十月二十九日、上條克老居士宛）

○

拜啓其後御無沙汰申上候、さて世界日曜學校大會一條既に着々御進捗の事と芳勞感謝仕居候へ共經濟問題の方は特に愼重の御考察申上度佛教各宗の方は餘り多くの期待を置き難き事情あり精々一千圓內外出來候へば先づ好結果に候故に過般も申上候通り大部分は澁澤男其他有力者の手に依り別に三千乃至五千の資金を調達するの必要有之此義は拙生最初より痛切に申上候通りに御座候呉々も違算なき樣相願度事業の成効と否とは實は此資金の如何に候此點には拙生に安心出來難き所有之候呉々も御考察願度

候。

次に佛教各宗聯合の準備は明日中重立ちたる方面は訪問するなり電話をかけるなり致して精々四日の出席を慫慂する樣致度此は既に岩野君にも申上候へ共、從來の聯合團の方針よりして今回の出席には餘程の努力を要することに有之到底あのまゝにて出席人員如何甚案ぜられ候、特に聯合會幹部窪川其他（特に弘津）護國團幹部（安藤柴田）佛教靑年會（木山藤岡）其他は是非共十分の了解を得置く必要有之明日は岩野君其他とも御談合必死の御準備願度候。

先は右如此に候、新聞の發表は各宗聯合相談會の後の方得策と存候、但し既に發表のものは仕方無之此上は聯合の堅き勢を添ゆる各種の方法を取り度候。

少年聯合團幹部の內一萬位は責任を負ふ位の腹のある人あらば格別左もなき時は餘程の努力必要に候。

英文册子印刷の方は其半分でも三分の二でも廣告で勘定の立つ樣三越や白木、高島屋、丸善あたりに精々運動肝要に候實は文

外拜凰萬々可申述候。

霜風雪氣外鮮新。震後喜迎甲子春。
五十三年澆福足。國恩更荷佛恩淳。

（大正十三年一月七日、千野學誠氏宛）

○

拜復、八月十一日附貴翰に對し早速御返事可申上處、月初來山陰地方の旅行に浮き水村山郭に放浪し其間少恙を得て懶臥を貪り漸く昨今歸校候仕末にて自然答艸遲引に相成失儀海涵願置候。

一、大正一切經中金光明對譯梵語の件

1右は拙生對校の國譯大藏經中金光明の對譯梵語其儘を採用したり。

2故に現在梵本（現在梵本と漢譯との對照表は國譯大藏經金光明序文中に概要表示せり）の缺けたる部分にも、或は一定せる學語或は他經より檢出し得たる語、若くは蕃藏に依り、補へる原語等之あり、但し毫末も想定のものなし。

3之が爲、他經に比し、對譯稍繁縟を見るに至り特に蕃藏に由る Dhāraṇī の如きは寧蛇足に類すると思ひしも輯纂會議の結果そのまゝ放置したり。

4原本闕如の部分梵語の挿入は往々讀者を迷はしむる怕あるは一應貴說の通りなり、科學的なるや然らざるやは知らず、唯同經所收大正一切經經集第三卷の卷首目次に現在梵本と漢譯との對照表を擧げあるを以て、多少具眼の士には、原本缺けたる部分の原語が、公定のもの、若くは檢出のものたる位は、他の歐洲にての出版の例に徵しても知らるべく、大した弊害も之なしと考ふ。

二、宗大所藏蕃本の件

大體レオン、フエーヤの目錄に依りて其函號通りに存在したるものを參考となしたるに過ぎず、內容もフェーヤの記する通、梵本（現在梵本とは出入あるべし、精查の暇を缺く）と義淨漢譯の重譯との二部を收む、貴問第三の現在梵本と吻合するものは之を缺く、版はナルタン板なるべし、精本といふを得ず、丁數其他今少し精密の報告を艸したけれど、右蕃本は大震災當時不幸にも多の二三の祕密軌本と共に、拙生私書庫の中に搬出研究中のため劫灰に歸せり。

右大略御返事迄、拙生嘗て金光明印度板の杜撰粗雜紕繆甚しきを患へRASのMSを底本とし傍ら印度本其他を對校し友人ハイデルベルグのマクス、ワレーザー敎授よりケムブリヂ本の善美なる寫眞一具をも得更に貝葉殘缺の寫眞をも添へて大體校訂を終り、或時機公刊の腹案なりしも材料校本とも十年の苦心を刼火に委し候、諸行無常何の恨む所も無之、資料の蒐集、對校の勞苦他日を期すべき望なきにあらざるも、貴答に際し、稍閑煩惱の不覺湧起するを免れず候、凡情可笑亦可憫の至に候。草々。

年末筆硯益御清祥、御考究愈精美、中心祝禱申候拙生震災後殆ど學業を廢し、奔波放浪の生活深慚深愧の至に候。

（大正十四年八月二十七日、櫻部文鏡氏宛）

○

拜啓本日北越風雪の旅行を終り歸坊御惠贈の佳品及配篇一部拜受仕り候御芳志拙生

成亂筆御願迄如此候忽々拜具。

（大正十二年四月二十六日、藤井赫然氏宛）

○

拜復お見舞を忝なうし御厚情何とも感佩之至に候。

住寺は芝中學出勤中に全部燒失圖書寫本一萬二千册程原稿資料五十點計り灰燼仕り候は聊か遺憾に候も身體丈は頑健に幸學校の燒失を免れこれを根據として救濟事業などにお手傳申上居候身體も至極頑健に有之頗る呑氣に起居仕居候住居は主として芝中學に候も深川の方にも假寺務所出來候につき時々見廻り居候右不取敢お近事迄重てお厚情奉謝候にも宜敷奉願度其中入洛拜顔を得度存居候。

（大正十二年十一月十一日、足立文太郎氏宛）

○

拜啓霜風連夜御精勵の甲斐ありて災後諸方面を通じて最大の運動の畫策に寸滴も洩すなき周到の成案を得御盡力唯々感謝の至に御座候特に布置按排の整然巧妙老雄兵を指揮するが如く善棋石を點ずるに似て乍毎度御手腕敬服の至に候拙生御別已來二十六日上野に行き午前中は兎に角私用を濟ませ午後は同志者と中華民國佛教濟日團代表歡迎に働く積の所四十度已上の高熱にて海外の佳賓を接するに適せざるのみならず百事倦怠同志者にも相濟まぬと存じ演説や歡迎文も其儘にし直に病軀を兩妹の看護に委せ候『風邪に御注意』の大獅子吼を爲さんと意氣込居候ひし身が此の體タラクいや早何とも慚愧の外なく將又今回大運動の機務に付尤も重大の時機を逸し多少とも尊臺の御助申上ることの出來兼候は何とも遺憾の事に候學校の職員使丁等もよく拙生の旨を體して尊臺の手足となりて働きつゝありや否や百事につけ充分の御便宜を計り居るや否や心配致居り候本日熱計は尙三十八、五を示し居り候も元氣は稍恢復候二日には何とかして回復して出席致度先は右感謝やら近狀の御報やら如此御座候。

丸の内の何處か一ヶ所に臨時救護所を置くの要なきか或は當日丈け宮城前赤十字の出張所に交渉し便宜を計りもらふ方法にても取るべきか御意見如何。

病氣は大した事も無之愛甥愛姪等ハーモニカを吹いたり覺束なき童謠など謠ひ慰め呉れ兎に角慈光照護の中漸次輕快に向ふを喜居候。

（大正十二年十一月二十九日、伏島孔次氏宛）

○

肅啓

先以甲子興復之新春に際し。尊堂各位萬祥御迎陽之御儀欣賀拜祝不過之候舊年震災後は種々御芳情千萬厚く一回拜趨御禮申上度處公私多用未任其意缺禮仕居候茲に新春に當り賀辭拜上旁謹て御厚禮迄如此候合掌拜具。

尙舊年十月中旬粗末のバラック自坊燒跡に建設十一月下旬更に增築致し寺務罷在乍憚御安意奉願度居候。

御寄贈

御本尊は其内檀家共と同行奉迎仕度書

決定仕り候はゞ如何様とも方法講ぜらるべき儀と存候景光殿あたりにて會合するもよろしいかと存じ候其内親しく御面談申度候御芳勞千萬感謝申候。

辻氏は京都にて其父三省君に面會と記憶し大島徽水老と入懇と存じ候故福原隆成師にも歸依いたし居られ候。

立石氏同心の業も漸次取運られ度小生も誕生寺參拜之節其決心仕候但し此儀は騒なる時は事を破るに至るべくこれも御面談に讓り候先は御返事迄合十。

（昭和五年六月六日、坂田良弘氏宛）

○

拜啓雪氣陰森、本年も最早殘少なく相成候節、益々御淸康教化御旺盛の段欣賀之至奉存上候扨今回は慈眼普照貧衲共迄、南國上人五十回遠忌御記念の公刊御惠贈之榮に浴し御芳志何とも感銘の之至奉存上候、上人之大德陰功並に維新當時之絕海義堂に被爲在候事は緣ねて拜承仕り景仰仕り居り候處、塵事多忙永く盛德を詳にする能はざる恨有之候處、御惠贈に依り金玉の雄篇と共に日常之規箴と可相成宏範拜讀仕り寔に有難御厚禮申上候、詩にありては弘經寺梅痴上人、歌にありては緣山行誡和上と御交友不淺儀拜承仕り一層御高層に感佩仕候、詩風は拙衲共申上る迄もなく精錬縱橫、就中僧院螢火の如き之を贏奎津髓中に挿むも其の上乘を以つて拜讀可仕もの乎と謹で拜誦仕り候右御禮まで不敢取如斯霜風淅瀝何卒御自重奉願候合掌再拜。

逸傳第十三頁「濟海寺と云へるは禪宗」は淨土宗の寫誤か今友人島村春道老住持致し居り候、十六頁「竹詩」は無論竹枝に可有之尙他に氣附候もの有之候も其中詳細可申上候。

（昭和五年十二月廿四日、中山理賢氏宛）

○

拜啓昨夜は塵事百忙中、近來になき淸宴御催し下され、御蔭にて頗る愉快を覺へ、何とも有難く感銘の事に存候。

昨夜も一寸愚懷申述置候通、來會諸星の御懇情は何とも感謝の至りに候之丈にても光榮の儀に候に之を空しうするが如き愚見を申上候は甚不本意千萬乍ら、何卒拙生の平素の信念主張を御酌取の上拙生に關する祝賀（還曆祝賀のこと）の儀は一切御取止の程偏に懇願仕置候。

大體僧門には賀壽の法無之、明末淸初法運の澆漓に乘じて諂諛好事の倣俗行事多少は名山大刹にも行はれ來り、先哲の苦言も有之候事と覺へ居り候拙生平素の師と仰ぐ慈雲、普寂、貞極は勿論、近世の行誡和上にもあの御高齡にして嘗て賀壽の儀無之、此等諸大德とは同架は出來候はねども拙親教師、西光寺十五世海定も同寺としては功績多く檀徒の歸仰も特に重く拙生の今日あるも全く海定の遺德に候も、是又賀壽の儀無之候、拙生等精神上及事實上の師尊を模範として進む已上、假令、破戒汗行言ふに足らざるも尙且僧門たるの眞骨頂丈はあくまでも保持致し度候、折角御厚志にて行はるべき賀壽の儀も右樣の次第にて寳蓮台上諸大德の彈訶の恐あるのみならず、現時にても一人や二人、山林に德を隱して古道に親しむ好漢も有之べく、千人の稱讃より此等明

共に迄御心添之程感銘の次第に御座候其中拜眉御厚禮可申上存候へ共不取敢御挨拶迄如此候合掌再拜。

讀

十方寺良弘上人新編

謝德報恩發至純　闡揚祖道有精神
蕭條寒寺霜風夜　亦把雄篇淚濕巾

壺月浪禪錄

（昭和三年一月十三日、坂田良弘氏宛）

○

拜復尊臺誠忠之御赤誠終に貫徹相成り堂々侃諤の正議最後の美を致され候快報拜承仕り寔に以て近來之一大慶事今回之御盛典に付隨一の御忠勤御切勞と衷心景仰仕候先輩某官及一二大官より豫め右之事薄々拜承致居御親書に接し何とも感謝欣躍に御座候先は右御返事迄書外其内拜訪萬般高見謹聽可仕候。

宗事御警告拜承仕候一字片々の私事論ずる迄も無之事と存じ居候唯公明を推し慚愧に依り共に坊主らしく仕りたく存居のみに候拜具。

（昭和三年十一月六日、坂田良弘氏宛）

○

拜啓、昨夜函嶺駿海の旅を終り皈京本日宗務に出勤仕り重ねての御惠贈拜受仕候。御芳情とも拜謝此事に候。

二十日前便申上候如く御殿場に高楠博士訪問「三寶章」を贈呈仕候同翁も意匠の高雅製作の精妙なることに感嘆致され側の老夫人も切りに其藝術的及宗教的の優秀品なるを賛美され、拙生も贈呈甲斐ありしと嬉しく相感申候。

但し同博士の之に對する忌憚なき意見も有之御參考迄に申上置候、人各有所見、學德同翁の如き人の意見も取るべきあり、然らざるもあり、之は取捨御自由に願度候。

一、此章を終始携帶するとすると少々重過ぎ大きすぎはせざるか――此章の目的は携帶本位か安置本意か。

二、三寶章と銘打つて三寶の記號何處にもなきはちと變なり、法輪の下へ銘文の空地にサンチーやアマラヴチーあたりの三寶記號等を鐫むたらどうか。

三、今少し金質を薄手にし、形を少し小さくして、廣く實用に適する樣にしたらどうか。

四、法輪の描出は甚だよく大體法輪記號は卍字記號に比し佛教的に純に且つ特色あるものとして廣く佛教に知らせたし。

五、說明の梵文に誤植あり、之は人を誤るもの故訂正を要す（之は拙生と同意見）

×　×　×

右迄御挨拶を兼ね重ねて御禮申上候。

合十

（昭和四年八月廿四日、須賀隆賢氏宛）

○

拜復初夏とは乍申冷暑兎角不調之候各御淸康願上候。

芳翰拜讀每度ながら扶宗護法之御赤誠感佩之外なく候。

宗祖御血統立石家御一門と御會合之件至極結構之事に候宗務にても綠山にても御催

敢以寸楮衷心甚深く御哀悼表し上度一昨朝も深川貧寺佛龕前にて御供養手向け候へ共近日拜參御牌前に御燒香申上度心得に御座候、弔詩三篇甚だ拙劣衷心のみ御供奉申上度候、泣拜。

一

悵寒春淺覺悲傷　此夜間君哭北堂
想見綿々純孝涙　幾枝梅發暗恨長

二

春寒剪々繞靈林　一脈哀深寶鴨香
怵惕我同風樹嘆　亦開燈下古經筐

三

慈容一別隔幽明　堪見孝順涙萬行
春淺僧房萬寂夜　焚香唯唱願王名

（昭和七年三月十一日、笠木良明氏宛）

○

拜復昨夜は花祭用供養品種々御届を忝し乍毎度御厚情千萬奉拜謝候新聞之奉祝文は一昨日一寸日々誌上にて拜見何とも有難嬉しく奉存居候處八日迄連續御登載の御覺召を承り何とも感激之次第に候。

花祭唱歌及其他之佛敎聖歌之吹込二枚文部省內佛敎音樂協會より取寄候に付拜呈仕候御家庭にて花祭之際御使用相願はれ候はゞ幸慶に存候。

尙竹製誕生佛は鳥取之一知人工夫いたし製作候ものにて彫刻色彩其他尙改むべき點も有之存候も一寸の思付に付一つ御贈り申上候。

右御禮まで其中拜承萬々可申上候。

印度名香每度ボース樣より頂戴有難候丁度時期に付其一分を分ち日比谷の花祭にも相分ち申度存居候。合掌再拜。

（昭和七年四月四日、相馬良一氏宛）

○

肅啓、先日は法務御繁用中推參仕り非常に御手數相かけ候已耳ならず、過分の御優遇を忝うし何とも感銘の至りに御座候、御蔭に依り多年の宿願と爲し候、芳山之巡拜を了り老杉大松之間山雨溪風之中感謝特に深く寔に生涯の思出と可相成御芳情何とも深謝此事に存上居候、唯旅程匆忙を極め山房に御淸談拜聽之時極めて乏しかりし事は遺憾と存候も、名山佳友實に近事の一大快事を覺へ候事は、何よりと相喜居候。

拜別の後、夜十時に近く大阪に入り小林君の新書院に一泊、一昨歸京仕候に付御靜慮給はり度先は不取敢着狀を兼ね御禮迄如斯候、令夫人にも乍末筆宜敷願上候、合十

同封甚だ輕微內金壹圓吉水院拜觀御立替の中に御加へ奉願度、金貳圓は過般自動車にて負傷被致し旅館の若き方に御序の節見舞金として御屆迄願度、暑中にも有之吳々も大切に致さる樣遙に快癒の程祈居候事御傳願上候

（昭和七年八月八日、加島諦忍氏宛）

○

拜啓、秋光日に琴瑟を加へ來り候節益々御淸康賀上候京都にて拜前は夫の宗務交替の一件にて公私共思の外多忙に有之、加之本日より開會の各宗懇話會の爲、彼是御左右缺禮仕候昨夜は右につき佛聯の會合に出で歸途學士會館の結婚式をすませ小寓燈前御惠贈の佳品に接し乍毎度御芳志感銘仕候明晩は少々閑暇も有之候に付目黑に持ち行き大島家族共と秋風一夜打寛ぎ拜味仕り度

眼篤行の人の嗤笑がまことに考ふべきものと存じ候、但し拙生が親友荻原の爲に主として賀壽の事に與りしは、其本意全く學術的の國際親善を期するに存し、荻原氏の大材偉器を世間に光顯して其功績に感謝すると共に之に依りて吾が大正大學の世界的使命を覺醒せしむるに存じ、隨て賀壽の僧家の法にあらざることは拙生序文の中に特に力強く書き殘し置候。特に目下財界の事態は御存知の通りの儀に有之、必須缺くべからざるもの、必然行はざるべからざるもの迄も尙之を節し之を止めて辛抱を重ね居候際に有之、此時にあたり、行はでも相濟むべきもの、行ひて寧ろ有德有識者の笑を買ふべきものは勿論取り止むることが宜しかるべき事と愚信仕候況んや拙生目下、宗務所に關係有之、一身上の催の爲に宗內の各位を煩はすことは、德義上嚴に之を遠慮すべき責任あると共に、內には親戚法縁の中にて財政の整理寺門の經營等相當苦心を重ね居候ものも有之、此等にも祝賀に出り迷惑と奔走とを累はしむることは實に氣の毒にて何とか之を避けたき儀と存じ候に付此點は乍私事御諒察願上候要之、祝賀の件は世間に迷惑をかけ手數をかけ、時間を浪費せしめて自損損他の外は何等の得る所も無之儀に有之、何卒御取止の程更に賢考煩し度候。

昨夜も申上候如く拙生としては六十囘の懺悔同志知人の御方に佛恩報謝佛讃仰の御隨喜にても相願ひ、親しき人に限り二三十人の小人數にてマハヤナなり、共濟會なり増上寺なりで、定食オデン位の會合にても爲し度此場合は御供養は拙生より可仕多人數大人數は何卒眞平御免の儀に願ひ度候、「若し衆を樂ふものは諸の惱を受く」とは大聖の至訓に候內輪の靜かなる集りになし度懺悔と讃嘆との道場を仕りたく候。

文集出版などは無益の事に候、良寛でも行誡でも生前には一つの歌集一つの詩集無之、これが僧家の面白味に候。念々無常今年か來年死亡の後に集めてよろしきものは集むが宜しく、これも勿論無益の事に候も、物ずきの御方々の御骨折にまで死人は口出は出來申すまじくと存じ候。

右申上度、御厚志と御懇情は何とも感激仕候滿頭の白髮も之によりて新しき喜びと可相成候、乍去どうせ御厚志を仰ぎ御懇情を頂く上からは何卒拙生の迷惑とならぬ樣拙生が之が爲に德義的にも職務上にも煩累苦惱の生ぜざる樣乍勝手特別に御願申上候。卽ち一切の祝賀の御催は此場合截然斷然として御取止の程結尾に臨み、甚だクドク候へ共重ねて御願申上謹で諸星の寛容なる芳情に訴へ同時に御厚情を衷心感謝仕候。

早々

（昭和六年壹月三十一日、長谷川良信
中西雄洞、三輪華城三氏宛）

○

謹啓御北堂樣御長逝之悲報兩日前今成劍峯君より拜承仕り御悲傷之程嘸々拜察仕り何とも御同情の至奉存上候、早速拜趨御弔辭可申述愚存之處目下淨土宗會中に加へ新舊學年交錯之時にて公共非常に多忙を極め居不本意乍ら今に缺禮仕居候、依りて不取

し、主任醫師の嚴重なる指定と極度の疲勞の爲、今一週位親愛なる諸君を見るを得ざるべし、諸君夫れ宜く教職員の指教に從ひ、更生一新の堂々たる元氣を以て邁奉自治の大精神を徹底せよ。

一、特に五年の諸君にありては全力を奮ひ背水の陣を布きて前進の大難關を粉碎せよ、病床特に諸君前途の成效を祈りて止まず。

（昭和八年一月十七日、芝中生徒監宛）

○

親愛なる芝中全生徒諸君に告ぐ。日々各級代表諸君の懇篤なる慰問狀に接し眞に感激に堪へず、殊に諸君目下拙生就褥中の故を以て嚴に言行を愼み學業に精勵し芝中精神の發現を期し克く教職員諸先生の指導を遵奉する事は拙生の最も欣快とし且つ滿足する處なり。

諸君希くば益々努力奮鬪し此嚴寒に際して特に衛生上自重せん事を祈る。拙生病狀は今や殆んど快癒の狀態に在り、食事の如きも昨今漸く床上に起坐して之を攝るに至り、食慾亦漸く平時に復せんとす、諸君願くは靜慮せんことを、但し全身の衰弱尚未だ全く恢復するに至らず、主治醫も尚四五日の臥床を必要とするを以て諸君を見るの期間尚旬日を要するあらむ、諸君願はくば自重自勵せよ。

殊に五年級及び四年內一部の諸君は全力を傾倒して皇軍勇士の意氣を以て猛然として難關を突破せよ。

玆に諸君の懇切なる誠意を感謝し最近の病狀を述べて一々返信を呈するに代ゆ。

（昭和八年一月二十日、芝中生徒一同宛）

○

芝嶽と鴨臺の昔を偲び才人の夭殤を痛惜するの情甚切なり、此日殘雪舊緣の地に同人諸賢の温かなる追悼會の催さるゝを聆き床上感慨を禁ずる能はず、仰臥筆を執りて獻香の意を表す。

殘雪に君の遺骨の小寒さよ

（昭和八年一月廿三日、正大芝岳會田中芳全君追悼會宛）――絕筆。

▽普選と僧侶參政權につき

肅啓霜威凛烈の候、益々御淸穆、爲邦家御勵精之段　欣慶感謝洵に此事に奉存上候陳者豫而御高配の普通選擧案も國論の歸する處、終ひに議會の上程を見るに至り、今や尊臺御初委員諸賢之公明周到なる御審査を仰ぐ事と相成り候儀憲政一段の進步に有之切に尊臺多大の御奮鬪と不容易御芳勞に感銘罷在候、我等佛教徒も過般之が爲に大會相開き其宣言決議等既に御手許迄拜呈致候右淸鑑に供し候旨趣幸に御高見に合し候へば何卒右充分貫徹候樣宜敷御配意奉煩度、特に普通選擧之徹底に就き必らず撤廢を要する夫の不合理不公平なる被選權の職業制限就中僧侶參政權之點に就きては御多端之審査御進行中甚乍恐縮風教指導民心振興之爲積年の切望を被覺召特別御留意之上、幾重にも公明正大之御執斗之程千萬至禱懇願之至に御座候右は拜趨の上愚見申述御指教可仰候へ共不取敢御繁用中を煩はし御悃願迄如斯候早々　拜具。

（中西雄洞氏所有）

相樂居候。

先般京都拜訪一二駄作出來候に付、二日の淸和會慰勞會席上蠻聲を弄し餘興がはりに御挨拶に代へ候まま序にお笑草に供へ上候十九日夜には佛聯總會の爲入洛可仕候拜眉萬々可申上候拜具。

（昭和七年十月六日、江藤澂英氏宛）

〇

拜啓、秋景旣に蕭瑟を極め候節、講壇益御淸康欣賀此事奉存上候、小拙も去九月末を以て俗務の牢獄より解放相成候も何かと心忙しく未だ落着て讀書の氣分にもなり切れ不申窃に自ら笑ひ居候。

扨甚乍突然貴大學藏書中 Hoernle 氏遺書御珍藏と承り候に付左記の書有之候はゞ尊臺御名前にて一週か十日位拜借願度或は公式に大正大學より借證差入候も可然何卒宜敷願上候。

I Suśruta Caleutta edition 1877 (or other edition)

II Chakradatta edited by Kabirāj Tyari Mohan Sengufta Calcutta

小生も來十九日夜出發京都に參るべく宿所は四條寺町下ル淨敎寺小林圓達君方に候二十日朝到着二十二日頃迄は滯在可仕候拜芝を得ば難有候。

御願申上候書物は其迄に御都合願置携帶歸京するも便誼と存候或は其前に御送致を得ば尙結構に候右迄草々。

（昭和七年十月十四日、泉芳璟氏宛）

〇

謹啓寒氣酷烈之際益御淸康奉賀候。御慶事は玆一兩日に相迫り千祥萬福之事と存じ候扨拙生去年末二十八日已來臥床仕り、本年に入り局部性陰性的之肺炎を發し、持病の腹脊に於ける極めて劇烈なる神經痛之に伴ひ甚困脚却候。幸に親友長谷川博士の必死の努力にて、肺炎も一局部にて防止し得神經痛の方も目下稍小康を得て九日以來平熱に復し、食慾も平常と相成候に付、十五日には強いても拜趨仕度存居り候處、何分にも極度の疲勞と長谷川君の今三四日絕對安靜の嚴命にも有之、心中焦躁遺憾千萬に候も、何卒右事情御憐察之上、缺禮之段折入て御願申上候。

實は今回の御慶事は、拙生一期の思出として、全幅の心血を灑ぎ、一切の精力を集注して奉仕致し、一は嚴父老僧正平素の御道誼に多少の微意をも表し、貴臺にも拙生衷心の至誠と熱情相捧げ度、實は春來窃に相樂居候。右樣の業病にて其も相叶ひ難く千恨萬憾の次第衷情御憐察に相任せ候。

別封粗末千萬乍ら中心祝賀の印迄御笑納願度候。嚴父老僧正臺下に別に呈書不仕、右は何卒愚書御披露之上宜敷奉願候。

床上仰臥執筆、辭句亂蕪、失禮之儀御判讀願可申候。

歡慶の日、吉祥日、祝福の日の、曉の光る如く、刻一刻明に且朗かになり行くを、床上中心の喜に盈ちつゝ。

（昭和八年一月十三日、岡本貫瑩氏宛）

〇

榊致諭

御序の節左記の件生徒に御訓示を乞ふ

一、校長病氣今や全然危險の區域を脫し、平熱に復し、食慾も亦大い良好なり、但

附錄

而も印度神代誌上二者其顯現（マニフエステエシヤン）を異にす、語義又自ら別對譯亦樓陀羅の字あるあり、或は之に從ふを可となさざるか、而も此等少かに一字に拘々の子子の言のみ、固より深く大觀の甚だ偉なるを害せず、

新年の玉章亦昨入手、大に君の仁に感ずや厚し矣。

忙間書を作る惡筆書法を愼まざる所更に惡し亦書窓倦を解くの材とならむか。

梅花漸やく開かむとす一夕黄昏君を訪ふの意甚だ切なり情緣熟する時は自ら存ぜん。

敬具

上六　江東塵寰中

僧　海旭

無涯老兄

硯北

◇學生時代の書簡

——明治廿六年一月六日

中谷在禪氏に宛てたもの——

先新年を御賀申上候

高姿未だ謁せず、雄談未だ聽かず、而して新年の賀狀に及ぶ一種の快味此間に汪放たり、梅花離底客漸く去り氣少しく暢る處如是君か、遠山の眉を想ふ如是君か、電眼桃唇巨手鐵脚を觀ず、妄像幻像の人は緣熟し期到りて相見て一笑するの時何等の差かあり、何等の同かある。書し去りて覺えず浩然たり。客臘の雄篇二此春に至りて接手しぬ、萬丈紅塵の中錐心出血の文に克く拙隔弟が如きもの、俗氣を容れて些も慳惜するなきの雅量唯酬身の想ある已耳、其塵間靈筆奔流の如く趨り一氣流注大江の如きものに至りては固より一語の贅贅を此處に挿むべきにあらず、嗚呼降三世を讀みて略君が氣慨と道念とを知れり矣、顧みて君に慚づる者三百許利心の事已耳

鎚槌の一篇亦大に君が博雅に服す、韋陀、優波尼沙土等を讀みて筆を下す君が如きもの今數人あらしめば詩界亦今日の紛々のみならむや君乞ふ益精なれや。唯詩材中のヴイシユヌ古へ韋紐毘紐拏等の對譯あるあり、如かず此等の品を用ゆるの古雅ならむには、伊沙那を以てルードラとす根本義に依つて可ならざるなし、

傳記

正六位勳六等、贈大僧正、准司教、勸學、ドクトル・フイロソフィー渡邊海旭氏は、資性英邁にして、內に深遠の學殖を蓄へ、外に高潔の行履を磨き、寛宏の襟懷、暢達の才識を以つて時代指導社會教化の爲に貢獻せる雪中梅花の如き不世出の宗教家にして、また獨身童貞の生涯を貫き、特に同情と俠氣に於ては稀れにみる偉人なりき。

氏は明治五年一月十五日、東京府平民渡邊啓造氏の長男として東京市淺草區田原町に呱々の聲を擧げたり、擧措活潑敏捷、磊落不羈、幼にして嚴父を亡ひ、慈母兩妹を離れて博文館に小店員となる。偶々、頴悟の質を當時小石川淨土宗源覺寺に在りし西光寺前住端山海定和尙に見出され、十四歲にして和尙の室に入り薙髮得度す。和尙、氏の英才を愛し二ケ年の間、教養甚だ懇切を極め、氏また知遇の恩賚に感奮勉勵し、十六歲の春、淨土宗學東京支校に入り在學二年、早くも全科通試を突破して更に宗學本校に進む、研鑽七年、この間、圓轉滑達の才、純情熱血の識は能く敎師僚友間の畏敬信賴を集め、望月信亨博士、荻原雲來博士等と雁行し正科、高等科ともに優秀の譽れ高く、卒業に際しては學生總代として答辭を讀み、榮ある管長の賞を受くるに至れり、師僧海定和尙の歡喜、慈母兩妹の欣涙、まことに所以ありと云ふべし。學窓を出づるや、直ちに淨土宗第一敎校敎師を拜命し、また推されて宗門言論の最高峯たる淨土敎報主筆となる、弱冠なほこの時二十四歲なり。爾後四十年に涉る氏の颯爽たる木鐸の筆陣、ここに始れり。氏、漢詩を好み文章を能くし、著想の妙、句節の美、語學の暢達は當時、旣に信夫恕軒翁、菅虎雄氏比して嘆賞措かざらしめたり、氏、はじめ號を蝸堂と唱へ呵雷狂史とも稱し後に壺月と號す。後年、其文藻さらに爛熟の域に達し、思潮一たび至れば千言萬章、たち處に成り、敎界各般の企圖計畫にして其文筆に囑彩せられたるもの甚だ多し。廿五歲、選ばれて淨土宗內地留學生となり專ら比較宗敎學を研討し、其成果は屢々雜誌『佛敎』紙上に發表せられ敎學界に大いなる示唆を與へたり。廿七歲、師僧隱棲の後を承け、西光寺第十六世の法燈を繼承す。師父に敬愛に、慈母に深孝に、知己僚友に至誠なる氏が、師恩に銘じ檀信徒の敎化指導に丁寧親切を盡して歸仰を一身に集めたる元よりその處なり。然もまた出でては佛敎界の不振と弊風を慨し時處

イーの學位を獲得するに至れり。然も氏の謙讓枯淡なる、これを以つて特別の介意あることなく單に留學所管の淨土宗務所への形式報告に止め絶えて吹聽する等の事なかりき。宜べなるかな、溫謙典雅のヂェントルマン・ロイマン教授も、氏を遇するに殆んど其情愛、骨肉父子の觀ありしと云ふ。然し乍ら氏の深く所期せる願求は、斯る事業の上に其全幅を置けるに非らず、つねに宗教家としての自覺と自信に於て內省修養し、閑暇あれば各地を巡遊して人情風俗宗教行事古聖の行蹟を尋ね、人格陶冶に資することを怠たらざること、まことに後年、一代の文豪德富蘇峰氏をして『現代的佛者なり、行誠以後の第一人者なり』と嘆ぜしめたるに據つても、その一班を窺ふに足るべし。されば、在獨留學生に對する氏の慈心の溫かなる、困乏の者には學費の調達歸朝旅費の貸與等、諸般斡旋の親切なる、それを德とする者、いまに頗る多し。嘗つて京大より留學せる足立文太郎博士と同居すること三年、その別離に際してこれに一札を與へて、自身死後の肉體を解剖し醫學研究の資に供せんことを以つてす。死屍解剖を嫌忌せる當時の風潮を啓蒙する其警策、死して尙、學界に捧げんとする其至誠、氏の眞面目、ここに躍如たりと云ふべし。

明治四十三年春、愈々歸朝の準備を完了す。顧みるストラスブルグの春風秋雨十有二年、慈教春の日にも似たる恩師ロイマン教授等、ここにあり、アルサスの秀麗、ラインの長江、いまにして更らに親しき風色なり、然も攻學半途にして慈母の訃音、師僧の遷化を聽く、人こそ知らね傷心斷腸の想出なり、故國に歸るの日、蓋し氏の胸中萬感眞に無量のものありしを想ふべし。

同年三月廿二日、神戶着の伊豫丸にて無事歸朝す、氏、三十九歲なり、直ちに宗教大學、東洋大學等の教授に招聘せられ次いで、再び淨土教報主筆として迎えられたり。之より學壇に、講壇に、評壇に、多年研磨の英才を伸べて、蘭菊の芬香を競ひ、研究論叢の貴重なる發表は學界に寄與すること多かりき。いま其輝しき雄績を分類記述すれば大略左の如し。

◇ 教育方面

明治四十四年八月宗立芝中學校長に就任以來鋭意校風の刷新に志し、大正十四年武道教育充實の目的を以て道場を新設し、又從來の十八學級を二十學級に增設すると共に理化學、博物學の教室を擴張し機械標本等の設備を充實した

所縁に應じて啓蒙是正の鞭をあげ、さらに高島米峰、小林雨峰、境野黄洋、杉村楚人冠、結城素明、安藤正純、田中治六等の諸俊秀とともに、同憂の士を求めて勇躍、新佛教徒同志會を起し、機關誌『新佛教』を發刊し、論策縱横、奇警百出、專ら教會の彈正臺を以つて任じ、濁流の淸波、能く當代の僧俗を震撼せしめたり。

偶々、淨土宗々會に於て、海外留學生制度の議案可決され、其任を擔ふべき宗門の鳳雛を選擇するや、闔宗の囑目は、忽ち氏に集り荻原雲來博士と共に拔群の選に入る。宗恩想ふべく、その期待やまた大なり、かくて荻原氏より遲るゝこと半年、其間一意、大史詩の英譯に專注之を完了して明治卅三年五月、二十九歳の若葉薫る頃、淨土宗第一期海外留學生として、無限の憧憬と希望を讃岐丸に乘せ、波濤萬里、遙けき佛教原典淵叢の地、獨逸の天を指して發足せり。發するに先立ち送別の會合實に十有餘の多數に上り、早くも多彩なる氏の活動振りを想望せしめたり。

獨逸に入るや、ストラスブルグ大學に入學し、斯學のオーソリチー、教授ロイマン博士に師事し、まづ梵藏巴の佛教各語を研究、これを基礎に比較宗教學の研鑽に年を重ね、さらにグランド教授に就きて精討を盡し、受講攻究通計十二年の長きに及べり。これを分類すれば、前六年は多く象牙の塔に籠り專心自己の研究に沒頭し、後六年は漸やく對外的活動にも進出しカイザーウイルヘルム第二世大學を始め各大學及び傳道學校等の招聘に應じて、佛教哲學、印度學の教壇に立ち、外國人に對し東洋文化普及の先驅を爲せり。またハンブルグに於ける東洋學會、瑞西バーゼルに開かれたる世界宗教大會等に出席、多年の蘊蓄を敷衍し其學殖を認められ、或は獨逸東洋學會、巴利本文協會雜誌、英國巴利聖典協會雜誌等の外國語雜誌を始め、當時、我國教學界に於ける權威ある雜誌と稱されし『佛教』、『東洋哲學』、『新佛教』、『宗教界』、『宗粹雜誌』、『淨土教報』等に送稿して隨時貴重なる研究論策を發表し、先人未到の學力推理は、峻烈なる筆鋒と相俟つて學界絢爛美を添へたり。特に密教發達論、孔雀王經、毘沙門天王經、駮足王等の研究の如き、該博なる智識、精細なる討究、犀利なる見解は專門學究の徒をして駭目せしめたり。或はヘルレン教授の東洋古文書の解釋に力を借し、或はワレザー教授の中論獨譯に其漢譯を擔當解說せり。また原典の研究としては普賢行願讃諸本の比較研究あり、獨逸譯を附して刊行され、この論文により明治四十年十月、三十六歳の秋、ドクトル・フイロソフ

るもの十餘名の多きに及べり。獨逸人ニヤナ・チロカ及バツポー兩氏の八年間西光寺に滯在せるとエルゼ・ブツホル孃の尼僧たらん事を希ふて止まざりしが如き共一例に過ぎず。同師歸朝後夙に亞細亞民族を糾合せんとする大亞細亞主義を提唱したる爲め印度、支那、西藏、ビルマ等より來りて西光寺に投ずるもの甚だ多し。バデーイベル、ケービー・シナ、ビハリ・ボース等の知名の士あり。又駐日前獨逸大使ゾルフ氏、駐日英國大使エリオツト博士等と結び精神的結合に斡旋する所あり。特にソルボンヌ大學教授レヴイ博士と共に日佛協會を創しペツオルド教授を援けて日獨佛教協會を創す。露西亞人ローゼンベルグ氏を助けて佛教辭典を著はし、英國ブリンクレー氏と締盟して日英佛教協會の創立を企劃しつゝあり、また日印協會理事たり。上海の王一亭氏狄平生氏密林氏等と結んで日支間の融和親善に努め、滿洲國の一先和尚を督して世界佛教大同協會の創立を助け之が完成を期せり。昭和二年東亞佛教大會の東京に開催さるゝや各宗の同志と共に此の會を主催す、又世界日曜學校大會に英文「大乘佛教と兒童教化」なる一小冊子を刊行し會衆に頒布す。昭和六年五月同志と謀り日本青年會館に於て、日本宗教大會を主催し、世界宗教大會の準備に資せり。

◇學界方面

大正二年荻原博士と共に『翻譯名義大集』原本全部を寫了す。昭和四年京都龍谷大學森川智德教授と共に、東西兩都の關係大學教授を中心とせる佛教學協會を創立、昭和七年八月高野山大學に於て原始密教學を創唱し學界の新分野を開拓す。昭和七年五月大正大學に於ける日本宗教學大會に於て「孔雀王經の研究」を發表す。是より先獨逸留學中、東洋學雜誌に日本所傳普賢行願讃梵文批判的校刊及序論(獨文)を、英國巴利聖典協會年報に佛教本生經發達史資料、駿足王譚研究(英文)を發表し、共に歐米の東洋學界に於て、賞讃を博せり。大正七年『歐米の佛教』菊判約二百頁の單行本を丙午出版社より刊行す、氏の著述としては、之れ生涯中の唯一のものなり。大正十一年五月高楠博士と共に大正新修大藏經の刊行を發願し其都監となり、昭和七年五月正續全八十五卷を完了し歐米各國の主なる圖書館に贈る。また大藏出版株式會社の創立を發起し、成立後顧問となり兼ねて繼續事業たる大藏經別卷圖像部の都監たり。暹羅皇帝及現皇帝卽位の兩度に亘り同皇室より紀念發刊の暹字大藏經を賜はる。思想善導、文化洽及の目的を以て佛教

る爲め、在學生數の增大と共に現在に至る迄の卒業生概數三千餘名を數ふるに至れり。是れより先、大正十二年九月の關東大震災に際し芝中學校が幸ひにもその慘害より免れしを以て、同師は府立第一中學校長等と協力して數次會合を重ね全市に亘る罹災各學校長を集め復興案に就て連日協議を凝らし貢獻する所甚だ多し。財團法人大阪上宮中學校理事長として、昭和三年十月鐵筋コンクリートの校舍三階建千三百坪餘の增改築に着手し、同四年十一月工事完く落成したり。各宗聯合大學の創設を提唱し財團組織を完成し、推されて理事長となり、大正十四年四月大學の創設を完成し教授を兼ねたり。爾來卒業生を出すこと約千餘人。大正十三年、門下長谷川良信氏等の創立せる巣鴨家政女學校に併せて、新に財團法人大乘學園の設置を援け、昭和六年四月、甲種四ケ年制の巣鴨女子商業學校を開設し、校長に推さる。昭和二年淨土宗執綱として、校長石塚龍學氏を督し名古屋市東海中學校財團組織の促進、御大典記念事業として、八百有餘坪の大講堂建設を援護す。大阪市小西久兵衛氏を勸めて大阪女子商業學校を設立せしめ、同地に於ける女子實務敎育に資する所あり。また東京府岩淵家政女學校長に推さる。東京小石川淑德高等女學校の校舍增築を援け評議員としてその隆盛に力を效せり。大正十四年東洋大學財團維持委員となり經營の樞機に參劃し、昭和元年十月大正大學財團理事長となり、佛敎聯合大學の隆興に盡す。

大正二年芝中學校出身柴田德次郞氏の國士館を創立するや、栗野愼一郞、小村欣一、澁澤榮一の諸氏と之を援け國士の養成に資する所あり。同館の理事として最近滿洲國に於ける最初の高等敎育機關鏡泊學園の總長に推さる。同師は夙に一種の俊才敎育に着眼し自ら衣鉢の資を割き二十數名の靑年と自宅に寢食を共にし薰化敎養に從事す。又有爲の貧しき靑年學生に對し、私に每月補助を贈りて其の成業を後援しつゝあり。

◇ 國際方面

明治三十三年五月より同四十三年に至る十一年間の獨逸留學中、前半は自己の研究に專せしも後半の六年間はカイザーウイルヘルム第二世大學其他の招請に應じ佛敎哲學、印度學の敎壇に立ち外國人に對し東洋文化普及の先驅をなせり。又同師留學中日本よりの留學生に對し懇切斡旋に力めたり。更に獨逸人にして指導を同師に受け、同師歸朝の後を追つて我國に來朝し起居寢食を共にして研究を續けた

浄土宗執綱在任二期八ケ年、專ら公僕主義を提唱實踐し、此間、宗政界稀れにみる靜穩淨化の實を擧げ、令名全教界を風靡す。其他帝大佛教青年會、淺草傳道會堂を始め各種の講習、講演には普化衆生の本旨より努めて出席するを例とせり。

大正十二年九月、關東大震災により住職地深川西光寺燒失す。藏書萬卷、心血を注げる幾多貴重の研究論策の未だ世に出でずして一切を烏有に歸す。當時、氏は芝中學に在り遥かに江東の猛火を望み、毅然として非常時の校務を處理し、諸般の救急運動に大童べの活躍を續け、あえて身邊を顧みるの餘裕なし。『江東災火燬無遺幾萬喪妻亦哭兒止說寒僧亡此苦燒書卷萬若妻兒』とは、氏、災後の咏嘆也。昭和六年、氏の還曆に際し、氏が多年教學界に盡せる勞に獻酬せんが爲、各方面より賀壽の盛苑を張るべしとの議起り企劃着々として進むや、之を耳にせる氏は大いに驚き、百方其中止を懇請して止まず、遂には門下の中心に長文の書を與へて、言々句々、情理を盡し典範を擧げ、戒愼の衷情を吐露して見る者をして、其謙虛なる高風に泣かしめたり。昭和七年師走廿七日、インフルエンザにて發熱し自坊西光寺に臥床す、悲劇の扉は玆に開かれぬ。越えて一月元旦早曉病を押して、佛前賀春の作法を嚴修し、さらに車を驅つて芝中學校四方拜に臨む、侍者等愕然として是れを止むる再三なり、氏、卽ち聲を勵まして云ふ『僧侶として自坊新正の恭敬を盡し、校長として拜賀の式を宰す、當然の責務なり病勢何ものぞ、可憐、一千子弟の訓育を如何にせんや』と、かくて悲壯、式典の後に講壇に倒れ病勢頓に惡化し、廿四日夕刻、俄然發熱し昏迷一晝夜、療養及ばず、注射効なく廿六日午前八時、世壽六十二歲をもつて、嗚呼、一生不犯の潔き其生涯を終る。まことに惜みても尚あまりある高僧の遷化なりき。傍人曰ふ『正月廿五日は淨土宗祖法然上人の祥月命日也、事實、先生は奇しくも廿五日に息絶えたるもの、廿六日朝迄の脈博はただ注射の作用のみ』と。訃報至つて所在に哀惜の聲滿つ。廿七日遺骸を東京帝大にて解剖の結果死因は『敗血症』と決定されたり。同日、西光寺に於て密葬荼毘式執行、次で二月一日、本山增上寺にて本葬儀執行、教界空前の盛觀を極めたり。氏遷化の趣き、天聽に達するや、一月卅一日、畏くも特旨を以つて正六位に敍せらる。聖恩海嶽の如し。また淨土宗管長は使僧を派して特に大僧正を追贈せり。榮光、死してなほ斯の如し。

譯一切經の發刊を監修し濟美の効を收む。

哲學の民衆化を計り、國譯大藏經、現代意譯佛教聖典、國

◇社會事業方面

明治四十四年の五月淨土宗勞働共濟會を創立し、勞働者宿泊所、職業の紹介所、簡易食堂及授産等の各事業を經營して勞働者の保護改善指導教化に貢獻す。更に法律人事の相談部を開きて細民の利便に資し、又深川商業學校を勞働共濟會内に設立して商工徒弟の實務教育を行ひ、且つ實費診療所、幼兒晝間保育等の諸事業を擴張して隣保的効果を收む。從來の救貧事業が防貧的社會事業に轉化せんとする過渡期に於ける指導機關として、明治四十五年五月佛教徒社會事業研究會を創立し聯絡、調査、研究、指導等に資す。感化、救濟、慈善事業等の内容を表示せるは是を以て嚆矢となす。左に同師が逝去の節現に關係せる社會事業的團體名と就任せる役員名を擧げん。

中央社會事業協會、淨土宗勞働共濟會副會長、マハヤナ學園監督、四恩瓜生會評議員、慈光學園顧問、上宮教會理事、少年信愛會名譽會長、大阪四恩學園顧問、佛教少年聯合團團長。全日本私設社會事業聯盟、日本禁酒同盟理事、借地借家調停委員、交通道德會理事等。

大正十四年以來社會事業關係功勞者或は宗教團體代表者としての特別の思召により、觀櫻觀菊御會に殆ど每年御召の光榮に浴し、又　今上天皇陛下御卽位の大典にあたりては、忝くも賜饗に召され、諸種の業績顯著なるを嘉せられて勳六等に敍せられ瑞寶章を賜はれり。

◇教界方面

大正四年秋、東京佛教護國團理事たり。淨土宗に於ては大正九年東京教區布教團長に推され、增上寺顧問となりまた椎尾辨匡博士と並んで教監となり日曜講演を擔當して講莚年餘に渉れり。中央佛教會理事、佛教音樂協會理事、佛教聯合會理事、東京佛教俱樂部理事、佛教研究所所長、東京寺院墓地有終會顧問等を兼ね、立案計畫の中核たり。特に神佛基三教の連絡提携を圖り日本宗教懇話會を設け、更に之を日本宗教協會の組織に進め理事として久しく盡瘁せり。大正十五年、淨土宗々政界は未曾有の混亂に陷り園宗の草廬三顧遂に輿望默し難く、同宗執綱に就任せり。當時、氏が拜辭の感懷を『獨立亭々存本色、莫將山樹作盆栽』云々の一詩に賦したるは、教界好個のトピックたり。

諸家の哀悼文

各方面の新聞雑誌等に掲載されたるものゝ中主要なるものを收錄す。

渡邊君の逝去を悼む

文學博士　椎尾辨匡（文）
文學博士　荻原雲來（辭）

君は昭和八年一月廿六日逝去して教學兩面に甚大なる衝動を惹起した。六十二歲でもその元氣と學殖とは將來の貢獻に甚大なる期待が懸けられて居たからである。今本誌に回顧の一篇を草する筈であつたが、幸ひ君の莫逆の友荻原君の弔辭最も詳なるを以て一切を之に讓り、唯一つ宗教研究の態度に就て申添へたい。

宗教研究にも種々の態度方法があつて差支ないが、人類學的言語學的方法は材料の蒐集や文獻の解說を與へるだけで宗教そのものには皮相外廓に觸るゝだけである。社會學的方法が外的關係價値で、心理學的方法が多くは低級なる種々相であり、哲學的方法が獨斷なる理念に馳せ歷史的方法が好事的掘寄せに傾く、唯文化史的方法に最大なる期待あるも、未だ立派なものはない。過去研究者の學績を輕んずるのではないが宗教研究には身讀體驗する重大なる方法がある。それはある修行であり實踐であると云ふが、併し禪の研究が單に坐禪工夫にありとするは門前に躊躇するもの、念佛の味識が但稱多念にありとするは稱業に偏注するもので、未だ禪念佛の宗乘に達するものでない。況や宗家の語錄念佛の法語を羅陳糊

素描集

逸話材料提供者——藤井赫然、高野海音、漆間德定、藤田涙子、神谷吉五郎、高島米峰、鹿野久恒、中山忠顯、大河內貫静、小林雨峰、三瓶憲章、赤尾光雄、稻葉誠一、淺田一、其他諸氏。

×

初め呵雷狂史、蝸堂とも稱されたが、其後の「壺月」と云ふ號は、教學本校時代に竹石耕善、望月信亨、漆間德定などの諸氏と共に『壺』の字を頭字にした雅號を附けることになり、抽籤の結果は先生は、壺月となつたもので、當時の公會(宗會)の開會に際し何か制度上の問題に就て、本校學生が主となり約二十名許りが匿名で、山口支校で發行されてゐた『轉法輪』紙上にズラリと論文を掲げ、これを公會議員へ配布したが、その匿名の頭字には殆んど全部が『壺』の字を冠してをつたそうで、そのときの匿名の雅號を一貫して用ひられたのは、先生の

法號を無量光院明蓮社諦譽上人善阿壺月海旭大和尙と云ふ。氏に二人の令妹あり卽ち長妹つる子氏は大正大學教授大島泰信氏に嫁し二男一女あり、次妹かめ子氏は稻門出身の文才故白嶺氏に嫁して西光寺現住赤尾光雄氏を生めり。其他撫育の門下錚々の聲名を馳するもの多し。遺弟として小石源覺寺現住三好海祠氏、本鄕潮泉寺青柳貫孝氏等あり。

發病より本葬まで

昭和七年十二月廿七日、流行性感冒にて住職地西光寺に臥床す。越えて昭和八年一月元旦、病中を强いて西光寺及芝中學校に於ける新春拜賀式を主宰し遂に式場に倒る。歸寺後、高熱來潮し肺炎を侵さる。主治醫長谷川基博士の努力により漸次快方に向ひ一月十五日頃に至りては起床、自ら食事を喫するまでの元氣を回復せり。爾後、西光寺にて專ら療養に手を盡し一月十七日より廿三日までは體溫殆んど平熱に近く、食慾また常態に變らざるの觀を呈せるも、廿四日夕刻、俄かに發熱し高速度を以つて上昇し、馳せつけたる長谷川主治醫の診斷は肺炎の再發と發表され、看護療法、萬般百方の手を盡したるも、廿五日正午に至るや意識全く不明に陷り、午後四時、長谷川主治醫は病狀の絕望を告げ、午後六時、特に來診を乞へる東京帝大醫學部の眞鍋嘉一郎教授も既に危篤の狀態なりと斷定す。かくて刻々の容態さらに好轉の徵なく暗雲の一夜は明けて廿六日午前七時五十分、長谷川主治醫、『臨終』を宣し、午前正八時遂に遷化せらる。訃報は卽日ラヂオ及新聞によつて全國に傳はり、夕刻既に弔問者二千を超へ弔電數百を算せり。遺骸は翌廿七日午前九時東京帝國大學醫學部にて三田村篤四郎博士執刀足立文太郎、長與又郎、小金井良生、眞鍋嘉一郎、林春雄、河合直次、並に主治醫長谷川基等の諸氏立會の下に解剖され、其結果、

死後の體重五十四、六瓩、腦皺頗る微細にて、頭腦の緻密なるを見せ、常人より腦味噌重く、腹部の腹皮は厚くて約一寸の脂肪層あり、內臟器管は特別に惡い箇所は見當らず、若年の砌肺結核を患ひたりと云ふも、全然その症狀なく完全に治癒して些の異常も認めず、脾臟が常人の倍大で中から特殊の汁出で、左肺が背部に密着し、その場所から約百八十グラムの血汁に近い水溜れり、卽ち肺炎は全快し、病原は「敗血症」と決定されたり。

同日、鈴木在念、藤田寬隨兩氏、正副委員長となり、荻原雲來氏、導師の下に午後二時西光寺に於て密葬荼毘式執行、畏くも東伏見宮家より御獻供及御代拜を賜はる。式中、德富蘇峰氏の追弔談、足立文太郎、長谷川基兩氏の遺骸解剖の經過報告等あり、獻供會葬する者二千餘人、弔電六百餘通、獻供の花輪樒等五十餘に及べり、午後三時半式を終はり、桐ヶ谷火葬場にて荼毘に附し、遺骨は本葬迄の五日間西光寺本堂に安置して近親、知友門下等により逮夜誦經念佛の勤行に護られたり。

二月一日、葬儀委員長高楠順次郎、副委員長荻原雲來、委員望月信亨、椎尾辨匡、鈴木在念、矢吹慶輝、大村桂巖、常盤大定、下村壽一、安藤正純、高島米峰、副島八十六、玉置金八、杉村楚人冠、境野黃洋の諸氏を擧げ、芝增上寺大殿に於て本葬儀を執行す。同日正午、長蛇の車輪を連ねて靈柩車まづ西光寺出棺、肅々豫定の順路行進、途中芝中學校に立寄り、職員生徒の燒香禮拜を受け、午後一時增上寺着、午後正二時法皷梵音を縫ふて增上寺法主大僧正道重信敎氏、衆僧を率ひて昇殿親しく下炬し、佛敎聖歌隊の追弔合奏等あり、會葬者は內外朝野各方面の人士を網羅して八千と註せられ弔電八百花輪樒百基弔辭五十八に上れり式後、遺骨を西光寺歷代墓所に埋葬す。尙三月八日、關係各方面團體聯合の下に增上寺に於て大追弔會を催し、眞宗木邊派管長男爵木邊孝慈氏、文學博士高楠順次郎氏、代議士安藤正純氏等の追悼講演あり、また同日景光殿に於て遺墨の展觀をなせり。

の固陋を慨き奮然新佛教徒同志會を組織し、盛に佛教の自由討究批判を高唱し、機關雜誌新佛教を發行せり。明治三十二年小生の外遊するや小生の少しく和譯したる大史（英譯）の續譯を完了せらる。半年の後獨逸に留學を命ぜられ爾後六年間共にロイマン先生に師事し梵語巴利語を學修し傍ら宗教學、哲學を修め、時々新佛教に研究論文を寄送せらる。密教發達論、孔雀王經の研究、毘沙門天王經の研究の如き何れも該博なる知識、精細なる討究犀利なる見解、人をして驚異の眼を睜らしむ。原典の研究としては普賢行願讃諸本の比較研究あり獨逸譯を附して刊行せらる。又た駮足王の研究等の諸篇は巴利本文協會雜誌に發表せられたり。又翻譯名義大集（マハーヰユツトバツトイ）の原本全部を寫了せるが如き學界の慶事と言はざる可らず。或はヘルンレ教授の東洋古文書の解釋に力を假し、ワレーザー教授が中論の獨譯を作るに際し其漢譯を擔當解說せるが如き、又はバーゼルの萬國宗教學會に廣長舌を揮へるが如き、學界への貢獻頗る偉大なるものあり。されど是の如き學的方面は未だ君が本領を發揮せるものに非ず、曾てロイマン教授が得意然として小生の言語學上の一論文を提示して門下生等に紀念の署名を求められしに、君は「吾人の天職豈に是の如き區々たる小事業ならんや」と記し大笑せられしが如き實に君の抱負の偉大なりしを伺ふに足る。又君は旅行を好み暇ある時は歐洲各地を巡遊し風物を賞玩するのみならず、基督教徒布教の實際を調査し、宗教的視察を怠らざりき。

君が本領は實に教界に於ける活動にあり、在獨十年歸朝後幾何も無くして芝中學校長となり今日に至る。敬虔の信念を培養し、堅實の思想を扶殖し、華に流れ

先生が獨逸へ留學される時は素晴らしい人氣で、送別會が十五回も開かれいまの宗務所樓上での淨土宗の送別會には宗門各方面の代表僧侶達が百五十名も參會し會費寄附の剩餘金壹百圓を餞別に贈呈したほどの盛會で、埼玉の松原英治氏と云ふ先生とは一面識もない信者や、ドクトル井上豐太郎氏等も出席し、僧俗の區別がハツキリし過ぎてゐた當時としては、右二氏の出席はスツカリ珍らしがられたとのことで、その時の教報誌上で春風生と云ふ人が『なんと凄まじい人氣ぢやないか、勿論、仲々の才物であつた爲もあらうが、自分の視る所では至誠と親切これがアノ男の本領であつたらしい、だから人は何んでも正直が肝心じやわい』と評してゐる。尙、横濱乘船のときは紋附羽織袴で出かけられたさうである。

×

先生が在獨中は、大のビール黨で餘暇には必ず陶然の氣を、これで養はれたらしい、彼のワツポー師なども、『佛教研究者は來れ』と云ふ新聞廣告をみて訪ねてみると、

塗するものが宗教研究としての本質に遠きは云ふまでもない。禪が如何に業事精進となるか、念佛が如何に平常人生となるかが大切である。渡邊君には顯密相關や古梵文などの獨特壇場あるが、殊に普賢行願の研究として發表されたる學績よりはその全生の業功は大菩薩行で、菩薩行願の大進步でないか。行く處、賴まれること、誠實翼贊し、見る處、學ぶ處、眞を求め法を擇び、寛宏よく異宗異教を包容し協力し超異の大道を開くもの、眞に佛子たり菩薩たるもの、又誠に宗教の研究者と云ふべきである。その發表されたる論文以外に君の人格生涯を菩薩の發現として倣學し、その身證體讀の研究法こそ眞の研究とすべきものと考ふる次第である。

弔辭

君少くして博文館の小店員となり幾何も無くして深川西光寺海定上人に就て薙髮得度せられ明治十九年淨土宗東京支校に入學せらる、君時に十六歲是れ小生が君を識る初めなりき。擧措極めて活潑敏捷遙に群を拔く、越て二十一年淨土宗學本校に入學、豫科五年本科二年、芝より小石川に轉じ、机を並べて勉學す。君が性質磊落不羈小事に屑々たらず、圓轉滑達の才は夙く已に文章中に顯はれ、着想の妙、語句の美は時の先生恕軒翁をして嘆賞措かざらしめたり、自ら呵雷狂史と稱し、後に壺月と號す、後年詩を作り文藻更に爛熟の域に達し思潮一たび至れば千言立ろに成る。故宰相原敬翁の弔辭の如き、人天下の名文と稱す。是すら一夜の思索にて成れりと君自の言ふ所なり。

明治二十四、五年の頃高島米峰、境野黃洋、田中治六、平子鐸嶺等と舊佛教徒

みであると云はれてゐる。

×

淨土宗學本校時代には先生の學友間には「シッペ」を賭けるトランプが流行し、先に物故した安西覺順師などは、よく先生をヤッつけた方で『渡邊の奴、元は丁稚で車引きなどやつたもんだから、手の平が堅くて、「シッペ」をくれるときには、割が惡かつたよ』とコボしてゐたと。

×

先生が宗學本校正科卒業の時の席次は二番であつた、一番は望月信亨博士、三番は荻原雲來博士である、高等專門科へ進んでからは、一年の時に先生が三番で、荻原博士が二番になり、卒業のときはやはり先生が二番、荻原博士が三番になつてゐる、望月博士は終始一番になつてゐて正科卒業の時は同博士が生徒總代で答辭を讀み、高等科卒業の時は先生が學生總代で答辭を讀んでゐる。尤も年齡では先生は兩博士より三ツ年下であつた。

×

既に是の如し況んや內地人に於てをや、君は獨身生活を續け、食客恒に十人を下らず、愛撫すること實子の如し、門生咸な德に懷く、宜なるかな君が瞑目の日交友、書生、僕、婢、一門の住者歔欷流涕慟哭して止まざりしこと。

君が在獨中有時解剖學の泰斗足立文太郎博士に約して曰く「僕先に死せば五體を解剖して君が研究の資料とせよ、君先に死なば吾れ引導を行はん」と、而して今や君不幸にして先に逝き、幸にして醫學界に貢獻せらる、死して尙ほ世を益することを忘れず、これ磊落豪放の性を伺ふに足る。

更に君が生活の一面を見れば、有時は零丁樹下微醺蹣跚高歌放吟して吞公に誡しめられ、或は橙園に散策して麥酒の滿を引きて歌樂に鬱を散じたるが如き、歸朝以後尙ほ將棋、洋棋、牌戲、麻雀敢て辭せざるが如き洵に英雄胸中閑日月あるを證す。

更に又君が一生を通じて最も顯著なる美德は「功を他に讓る」と云ふことにあり、隱密に立案し、交涉し、助言し、畫策し、指揮し、敢て自ら表面に出でず、而して成功の曉には自ら關與せざる者の如くす。是れ實に君が性格の最も偉大なる所とす、故に不言の間に君に信服せる者甚だ多し。これ全く菩薩の大行と言ふべし。

小生君と相識ること四十七年、同情の深き、友誼の濃なる唯だ敬服の一あるのみ、最近君が病に臥すや小生亦病院に在り、一杯の氷果、一椀の菜羹、頒つて一一病院に持參せしめられ、自身病蓐に苦むを顧みず、小生の病狀を憂ひ、安否を訊ねらる。而して今や憂へられたる者恢復し、憂へたる者逝く、痛恨何ぞ勝ん。

のと姉崎博士とも相談の上、獨逸時代のどんな論文でもよいから提出するやうにそうすればすぐ得られる、と頻りに勸めたがどうしても書かない。そこへ舊學位令による最後の敎授會推薦會が行はれた投票の結果一票違ひで榮冠は常盤井氏（眞宗高田派法主男爵）に落ちた。もし本人に少しでもなりたい意志の表示があつたら誰かそれによつて運動でもしたら立派に當選したわけ、出席者一同此の結果を見て一樣に殘念がつた。次は貴族院議員だ、その恩命に接するのも近しと云はれてゐたので、德富蘇峰氏などもその推薦者の一人で、非常に殘念がつてゐた。

×

先生の禁欲生活は、まつたく驚異とされてゐる、何しろ菜食嫌ひで、殊に果物など殆んど手に觸れず、肉類が大好きで、普通禁欲生活者の型を破つてをり乍ら然も亘然たる體格をしてをられたが、これは先生の偉大な精神生活の一面を語るもので、晩年『沙門としての生活の完成』と云ふ事を自身

ず、怯に墮せず、輩出せる健兒其數幾千、遂に公立中學を凌ぎ芝中の名聲隆々たるものあり。同時に大正大學、東洋大學に印度宗教史を講じ、門弟の私淑するもの甚だ多し。

更に又た選ばれて布教團長となり、同謀畫策頗る肯綮に當り、或は毎朝増上寺に勝鬘經、三部經等を講じ青年男女欽仰の的となる。其他感化救濟等の社會事業に至りては師の指導援助せし所枚擧に遑なし、昭和三年君が此方面の功績遂に天聽に達し勳六等に叙せられ瑞寶章を賜はるに至れり。

君が經營の才幹は天授なるものあり、六年間淨土宗執綱として宗政の樞機を握り、諸般の施設宜を得、今日の宗運を來し、同時に各種團體の或は理事、或は協議員、或は評議員に擧られ君の參與せし所のもの〻數莫大なるものあり、大正年間高楠博士と共に新脩大正大藏經の發刊を企圖するや、博士と倶に都監として其中堅に立ち、特に財政方面に於ては君の助力を須ずんば企圖全く畫餅に屬せしなり、其效績や偉大なりと言ふべし。

君の性格は威ありて猛からず、特に同情と俠氣とに於ては稀に見る偉人なりき。在獨中本邦留學生の困乏を憐み率先して學費調達の途を講じ或は歸國の旅費を與へたり、歸朝後は益々其本性を發揮し朝野の志士名士來往漸く繁く、獨逸の長老比丘にして巴利有數の學匠ニヤーナチローカ其弟子ヴツポーの如き歐洲大戰の時錫崙の地より追はる〻や直に君の許に赴むき、エルゼ、ブツフホルツの如きは君に私淑して君の入室の弟子たらんことを乞ひたるが如き、印度の志士亡命客を犒ひ勵まし、又は漢、滿、韓の耆宿學匠にして君の門を敲くもの少なからず、外人

それがバーでの飲み仲間の一人である渡邊さんであり、『なんだ、君か！』と奇遇？を悦んだなぞと云ふ話もある、歸朝後は感ずる處あつて、斷然ヤメられたもので、その頃の萬朝報には、その記事が物珍らく掲載されてゐる。

×

先生の母上は、獨逸留學中に死去されたが『僕にはモー母がない、朝來の仕事で大分疲れた、母が夢に來て呉れれば、一層に甘い眠りになるが……』と述懐されたハガキ等があり、なにかの會合のときに先生一つ餘興でも……と云はれてけふは母の命日だから勘辨してくれ！』と斷はつたこともある。

×

先生は渡獨後八年目にドクトル・フイロソフイーの榮位を與へられたが、當時の高島米峰氏の私信には『實に愚かな譯だが、かれこれ云ふ程の事もないから、そのままにしてをいた』と云つてをられた位で、歸朝後高楠博士など是非博士號を得させたいも

が論文を發表される度毎に、自分は夫を拜見もし切拔して保存し何かにつけてはそれを參考させて頂いた、自分としてもまた書いたものゝ中には先生の說を拜借したものも實際にある。先生が獨逸から皈られてから始めて先生にお目にかゝり直接に話をきかして頂いた。いつも先生の所へ行くと、西光寺の書齋でお目にかゝると、さうした當時、先生は「淨土敎報」主筆を兼ねられ、週刊新聞の編輯をやつて居られ、先生の書齋には夫等の原稿が狼藉してゐることと同時に縮刷藏經と、その外洋書類（佛敎關係）が開かれてあつた。その頃、自分としては佛敎美術の方面の硏究を始めて居つた。先生は梵語印度哲學等を專攻して居られ、趣味として佛敎の神話關係並に美術關係の資料等も可成り集めて居られた、お目にかゝるたびにそういふ書物を見せて頂き尙拜借させて頂いたことも屢々あつた。自分が「佛敎の美術及歷史」を出版したときその挿畫等については大分先生の指導を仰ぎ且つ材料を使用させて頂いたのであつた。その後大正十一年になつて高楠先生と御一所に大藏經の出版を始めらるゝことゝなつてからは先生と自分との關係は特に密接となつた。此の大藏經の出版についてはその校合の大體方針として先生は芝閱藏亭に於ける增上寺の三大藏の校刊について監修して下されることになり、高楠先生は聖護藏宮內省圖書寮其他全般の監修をして下さる順序で刊行遂行されることゝなつた。兩先生の熱心な御監督により昨夏此の事業が芽出度完結することとなつた。其間自分として編輯の末席を汚して居たため絕えず先生の謦咳に接し其事業に携はることを得た。

一水四見といふが、夫々人により先生に對する考へも違ふが、私の目に映じた先

ものではあるがその咄辯に一種云ふべからざる魅力があつて、どこか人を引きつける力のあつたことも有名である。然し、一度、經文讀誦や英獨語などを話す時は生れ代つたやうにスラ〳〵とやつてのける、先生の學生時代に敎へた一高の當敎授などは『渡邊君は、獨逸語が素晴らしく出來た』と云つてゐた。嘗て獨逸から新歸朝の當時ある講演の壇上に立つたが、その話の筋がさつぱり判らないので、みるに見かねた荻原博士が立つて通辯の勞をとつたこともある。

×

先生は活動好きだけに自坊にゐてもいつもあちこち歩いて許りゐる。談話中にも絕えず部屋を出たり入つたり、二三人で何か話しでもしてゐると「エ何、何？」とやつて來られる。日本硏究家として有名な米國のメーソン氏の學士會館に於ける慰勞晩餐會の時なども『椅子に腰かけてゐるよりも何か仕事をしてゐる方がよろしい』と云つて、受付の手傳に一生懸命に働かれ、みんなを恐縮さしたものだ。

君の經歷と性格の一端を錄して謹んで英靈を弔ふ。（宗敎研究）

現代佛敎學界に於ける輝やく脚跡

文學博士　小野玄妙

先生の人格の圓滿であり、學問の造詣深く、實際に多岐方面に向つて活躍されたことに就ては今更改めて言ふまでもなきこと乍ら、斯るときに先生と自分との關係などに就て述べるのも甚だ心苦しいが、古い事に遡つて話せば、自分としては直接に先生の御講義を聽く機會がなかつた。それは先生が獨逸へ立たれた年に自分が第一敎校に入つたのでその後十年以上獨逸に居られたから共間お目にかゝることは出來なかつた。所が、どういふ因緣か當時まだ敎校を經て高等學院に入つたばかりの自分に對して遙かに獨逸から、自分の非常に粗末な書いたものに對して特に二三回に亘つて論文などを書かれそれには色々な自分の書いたものに對する有益な注意をして下さつたり、又指導して頂いたのであつた、勿論その間お目にかゝることはなく直接に伺ふことはなかつたわけだが、然し私自分として其學生時代に興味を以つて讀んで居つた、その時分一番印象の深いものは先生が雜誌佛敎に發表された諸論文、ラマ敎に關係したもの、或はラーマヤナに關した研究論文もあつた。自分が其時分に佛敎の研究に興味を持つに至つたに就ては先生の書かれたものに啓發されることが非常に深いものがあつた。その後先生は獨逸に居られて、新佛敎、東洋哲學、宗敎界等に澤山な有益な論文を載せられた。先生

に向つて頻りに自誡し、克己修養の念は寸刻も離さなかつた。

×

先生の世話好きは有名なものだが、獨逸時代は大體の留學生は先生の世話になつたもので、今日六十歲前後の有名な學者には學の如何に拘らず親交のある人が非常に多い。死後先生の解剖をした足立博士などもその一人。

×

當時はオールバックの大のハイカラで、そのハイカラ和尙が歸朝したと云ふので姉崎博士が二三の友人と或る日西光寺を訪れると折柄法要中、暫く待つてゐると出てきたのが頭をつる〱に剃つた法服姿の海旭和尙で之にはさすがに驚いたと。

×

先生は常に語つて云ふには『女房を貰つて貧乏する位ならその金で學生の世話をしたい』と云つて居り且つ之を實行してゐた。

×

先生の咄辯は敎界名物の一つに數ふべき

一番殘念に思ふ。先生の御發表になつた論文としては明治三十年頃から大正初年に亘つて一番多い、先生は論文を書かれるのに自分のほんとうの研究の範圍に然も何等か新らしい發見がなくては決して筆をとられぬ從つて御發表の論文は一つ一つ何ものかを教へられて居る(一つ一つが金玉の論文で駄論文は一つもない)。兎にかく不朽の研究論文のみである。先生の纒まつた書物として發表されたのは「歐米の佛教」一丈である、歐米の佛教がいかに斯方面に於ける名著であることは世間の識者が賞讃するところ。その後最近に餘り研究論文を發表されてゐない、然し先生が所謂書齋人として一日も研究を捨てられぬ證據は震災後忽ち震災で亡くされたものを再度御買集めになつたことでも分る。他の人々は如何に見らるゝか知らぬが先生を學問以外のみに見られるが、然し私のお會ひした先生はいつも書齋人として藏經や原典やらを見てゐられたことは、最近も二十年前も少しも變らない。先生が御存命であつたとしたら、益々學問以外の方面でお働きになつたことも多かつたであらうと思ふが、先生としてかねての宿願「孔雀王經の研究」の出版とか、全學界の待望せる、「歐米の佛教」の補行とかは必ずなさつたであらうと思ふ。何かと過去現在及將來を考へて萬感胸にせまり痛惜の至りに堪えない。

(教學週報)

人間ばなれのした自然兒

文學博士　姉崎正治

壺月海旭君が危篤だとの報に接したのは一月二十五日深更、次の朝は既に亡き

免を蒙つて、果物は一切手にも觸れぬ、晩年メロンを少しく口にした位。大好物は支那料理で、宴席ではいつも「こいつはうまい〱」と箸をとりながら、說明役に當る。氷砂糖を入れたラオチユウをなめながら、之は酒ぢやないよと斷る所も面白い。

敗血症の遠因は果物野菜嫌ひのせいだらうと專らの評判。「先生はおそばが好きです」と西光寺の書生さんが云ふた事のあるのを聞いた。先生の曰く「そばなんか好きなもんか、歸つたつてめしの仕度をする者もなし、仕方なしにいつもそばで我慢するのだ」と云ふ位で、遠慮深く思ひ遣りがあつて街頭の新聞賣子や占賣等のコドモ達にはよく五錢十錢と惠まれてゐた。特に妹思ひで旅先からは、いつもお便りを缺かさず、ロクセの樣にそれを云ふて居られた。

×

娯樂としては昔は碁、將棋など相當やられたやうだが、此の三四年は麻雀を可なりやられた。宗務所をやめられてからの佛教倶樂部では毎日一風戰やらないと氣が濟ま

生は決して所謂宗政とか事業とかいふやうな方面の人でなくして徹頭徹尾學窓の人であつたと考へられる、夫は私が先生にお目にかゝるのが主に書齋であつたといふ關係かも知れぬが然しどれ丈先生が學問に親しまれてゐたか、獨逸時代の勉强が惜しい事に震災で燒けて了つたが、先生の所持された縮藏の汚れ加減によつても判り先生の所有された手垢だらけの藏經は全體によごれて、いかに先方で使はれたか分る。その使ひ方については例のロイマン博士等を助けて梵本の証訂をなされた爲めであらう。我國の學界で梵語の泰斗として高楠、荻原、榊先生と共に先生の行績については誰知らぬ人もないが自ら諸先生の得意とする所が違つてゐる、例へば高楠先生はベーダ、優波尼沙土印度の古典文學、荻原先生は倶舍其他佛敎獨特の梵語について蘊奥を極む。が先生は夫等諸先生の畠以外とも云たい又言葉をかえて云へば兩者の中間を行つたやうな印度文學としてはラーマヤナ、マハバラタ殊にプラーナ方面に注がれ、佛敎としては勿論華嚴の方面もやられ、以外に密敎特に儀軌の研究に非常に興味を持たれてゐた、特に孔雀王經の研究に心血を注がれて居られ震災前に夫等の研究理趣經の研究も合せて原稿も出來出版するといふ話も出てゐた。同じ佛敎の研究中でも孔雀王經の研究といふことなどは顯密二敎と並びに婆羅門敎方面への關係も密接で十分に佛敎經典に對する知識が、又原語の方面から云つても印度文學の方面から言つても各方面の豐富なる知識がなくては出來ない最も重要性を帶びた所で、先生でなくては出來ないものでありその研究が出來てゐたのがつい發表を見なかつた、若し夫が既に發表されて居たなら我々後學の爲に稗益する所あつたと思ふ。突然の訃音に接し自分として夫が

×

或る女連が先生の寺で一所に會食をした時の話し「先生は御飯中に便所へ行つたり庭へ出たりした」と面白さうに話してゐたが、元來先生の食事はかつこみ主義で非常に早い、相手のつき合をするために途中で息ぬきをやるので、此の邊に天眞爛漫なおつき合ひ振りが見え全くほゝえましい。面白い話しだと心から笑ふ。あの年輩の、あれ程の人で、その笑ふ姿は全く子供のそれとそつくりだ。メーソン氏から帝國ホテルのクリスマスの夜會に招待されたときなど最先に食卓に飾られた、色々のオモチヤを手にして、紙帽子を冠たり、風船玉をあげたり、ハモニカを鳴らしたりまるで幼稚園のコドモのやうになつて打興ぜられたと。

×

先生の嫌ひなものは、貧弱なもの、くど〳〵しいこと、愚痴つぽいこと。好きなものは從つて此の反對で、威儀堂々たる法要が好きだつた。

食べ物では肉類萬能だ、野菜は大ていの御

得ぬかも知れぬ。但し、それは外面事功の上から見ての事で、恐らく壺月君自身の心では一貫したものがあつたと思はれる。その一貫は何かと云へば人情味である。一面、超越脱俗、如何にも人間ばなれのした自然兒又は詩人肌で、而かもその詩魂にも學識にも、又活動にも事業にも、壺月君ほど人情味の豐な人は珍しい。その點で增上寺の行誡師をしのばしめるものがあり、少年時に於けるその感化にも負ふ所はあつたであらうが、根本に於ては生れつきの性格、つまりその人格であつたと思はれる。

學者として壺月君の研究は梵漢の古典であり、ストラス在學十年は多くその方に沒頭した譯である。然し如何なる古典も壺月君の手にふれては單に古典でなく字句文書の研究の中にも人情味の光がさし、溫味が加はる。普賢行禮讃は卽ち佛徒行願の光と熱とを示し、一角仙人の物語を典籍の間に探つては、そこに仙と人との交渉が見える。或時（一九〇一年）の書信に曰く、

此間シヤクンタラを初め候餉章錬句に頭を痛むる事少なからねども、又情趣津々として捨て難き味も有之候。

君の古典研究に於ける心持は、つまり此にあつたので、古書を比べ章句を尋ねつつ、その間常に人情の微妙な階調が心に響いて來たのである。されば、その心が交友に對しては友情となり、社會に對しては熱情となり、三寶に對しては虔信となつて動いたのであらう。其等の點を一々玆に物語る要もなからうが、學者として惜むべき壺月君を失つたのは、又深味と溫味のある希有の人間者を失つたので、追慕盡きない。記したい事は澤山あるが終に一つ、それはストラスで別れて

此の部で、三輪君述懷して曰く、「全く每朝野つ原に寢てゐるやうな氣がしたよ」

×

先生は大てい三四時間しか眠らず朝の內短時間書見やら、執筆やらをして居られたらしい、そして七時には寺を出られる。自宅で會ふ人は必ず七時迄に行かねばならぬと云ふので、全くの大骨折り。藤田浪子氏（現芝中校長夫人）が、在阪時代に先生が泊まられ、お目の醒めぬ中にと思つて朝の四時頃にソツト二階へ火鉢を持つて行くと、モー机に向つて三四枚の原稿を書いてゐられたと云ふ位で朝早いのだけは晩年迄同じであつた。

×

先生が靑少年の訓育に如何に心を碎かれたと云ふことは芝中に於ける先生の態度によつて窺はれる、先生は決して生徒を叱責しないが、亂暴な生徒の仕業などに對しては、あの大きな眼で、ぢつとその顏を見つめる、いつか三四年の先生の修身の時間に、生徒等が雀のさえづりの樣にガヤ〲

人であつた。一月二十五日は呼名の上で（卽ち暦は現行暦と違ふが）法然上人の忌日である。自分としては壺月君の最後を法然上人の忌日と聯ねて考へる。明治三十七年一月二十五日附でストラスから來たはがきは左の通りである。

寒菊はいつも宗祖忌に供へて床しき花なれど、此地之なければ、水仙數枝を市に求めて爐邊靜に圓光大師傳を讀む。窓外雲低く風荒れて雪將に至らんとすれども吾机邊には古聖の恩容字々の間に動きて、恍として春の如きを覺ゆ。

昨淨土敎報を得て、君が小石川の學林に、宗祖忌の休暇を廢したるを誡むるを知り君の深き志を喜ぶや切也。

いつも多くは壺月と署名してあるのに、此には海旭と本名を記してある。宗祖忌に對する敬虔の一端であらう。「小石川の學林」云々は、元の淨土宗學本校が宗敎大學と改まつて後、宗祖忌を廢した。それを僕がよくないと云つた事を指すのであるが、右の書信から二十九年で、その法然忌の夜を堺にして、幽明相隔てるに至つた。四十年に近い交を追憶すれば、想は雲の如く湧き、思出はストラスの寓居やスイスの山川、遊を共にした跡を追ふて盡きない。

壺月君の人物性格又活動事業は實に多方面であつた。學者であり詩人であり、信心の人であると共に事業の人であり、梵漢の古典に入りたると共に又書生の世話をやき社會の事にも奔走した。その他數へ來れば色々あり、又多くの人もその事實を知つてゐた。その死につゞく葬送等の參會者の數と種類とは、壺月君の一生接觸の多かつた事を如實に物語つた。多方面ではあるが、何れも輕く觸れるのでなく深くつき入つて仕事をした人、其爲に一生の活動に統一があつたとは云ひ

ぬ、トランプでも麻雀でもさうだが、負けると益々本氣になつていつ迄もやる。勝つとさも嬉しさうに手を叩いて喜ぶ、歸りの自動車の中などでも「何、あれはあゝすればよかつたのだ」と色々な手を繰返して考へてゐるなど何處迄も童心そのもの。

×

時には音樂もやられたと見えて、オールバックの姿でセロをひいてゐる寫眞があるが、それをどう手に入れたか米峰居士が持つてゐた、所が數年前文部省內に佛敎音樂協會が出來た時、米峰それを持參して「渡邊君はセロがうまい位だから音樂には趣味があるよ」とやつたので、海旭和尚ビックリして、「ソ、ソレは困る」と早速顏の所をひきむしつて仕舞つたとは面白い。

×

七八年前迄は大てい朝四時には起きて自ら戸をあけ放つておつとめを始める。書生連中は頭をひつこめて高いびき、いまこそ錚々の聲名を馳てゐる、二十年程前の長谷川、三輪、中西、桑原なんどの豪傑連は皆

伍した社會事業の建設に當り、佛教徒社會事業の先驅を勤め指導の任に當つた。從つてその業績は廣く各方面に認められ不朽に輝くものがある。それ故に政府關係や府市主催で社會事業の會合でも開かれた際は、常に佛教徒の代表として招かれたものである。例へば米騷動の場合は時の東京府知事井上友一氏は、これが解決の一策たる米の廉賣を開始するに當つて、救世軍の山室軍平氏とともに佛教側からは渡邊氏を招いて懇談した如きその一例である。飜へつて學界に於ける渡邊氏の存在を語る一例は曾て自分が再度の歐米漫遊の際彼の地に於ける東洋學者の間で屢々質ねられた人物は實に渡邊氏であつた。人も知る如く同氏はあゝ言ふ性格とて著述に依る業績を殆ど示さなかつたにも關らず、その名聲は大著述をした學者と同等に或はそれ以上に認められてゐる、更に同氏は獨逸のドクトルの稱號を有してゐたゞけで吾が國の學位を持たなかつたけれども、その聲價は博士以上に評價されてゐた如き、固より同氏の人格識見にも依るが、一面同氏は平常學問を放擲してゐたやうでその實常に周到な研究を怠らなかつたことは、何時でも研究發表し得るだけの題目とその研究を持つてゐたのである。その他學界への足跡を顧みたならば、社會事業に於ける貢獻と敢て劣らないものがある。

（教學新聞）

現代的佛者渡邊海旭師を弔す

徳富蘇峰

武藏野に草は品々多かれど、摘菜にすれば、さても少し。我邦に宗教家は桝に

於ける先生の叱責の唯一のものであらうと云はれてゐる、またカンニングを友に敎へてやつた生徒の父を呼んで『校長として申譯なしお許し下さい』と、涙に咽んで、先生の方から詫びを云はれたとの事である。

×

先生は病臥中、見舞に訪ねられた人々に對し、全く苦痛を外面に現さず、平素の調子で、泰然自若として應接され、臨終の三日前には「僧侶には僧侶の意氣がある危篤だからとて、看護婦や醫者などを周章てゝ呼ぶことは御免蒙むる』と云ひ、また周圍の人達が先生に無斷で病院行の自動車を迎えて來たときは、非常に機嫌を損ぜられたそうで、病勢惡化の元となつた芝中學の元旦拜賀式の臨場にも『校長として元旦に缺席しては新正の儀式の意義を無くするし、また一年中、生徒の意氣が擧らないから」と述懷されたが、元旦早曉西光寺本堂の勤行の時には既に平素の聲量も朗らかさもなく脇息にもたれて低音僅かに口より洩れる程度であつたと云ふ。

僕が歸朝後、長男が生れ正見と命名したのについて、壺月君は大に喜び、三十偈ばかりの梵詩を賦し、それをデバナガリで書いて祝つてくれた。その書も詩も火事で亡くなつたのは如何にも惜しいが、梵語學者たる壺月と友の爲に喜ぶ友人壺月と、而して正見といふ名に於て特に佛徒の考を寄せた僧壺月とが、此の一詩にこもつてゐたのである。死に先つ一ヶ月、發病の前二三日、相會した時、その事を話し、今度は聖德太子憲法の第二條だけでも梵譯して貰へまいかと賴むだが、「大分むづかしいが、考へて見やう」といふ事であつた。それを考へて見る前に君は病にかゝり、而してその考は壺月君の手では果せたくなつた。嗚呼。

（宗教研究）

社會事業の先驅者

文學博士　矢吹慶輝

今日佛敎の戒律を規定の通り遵奉するものはゐないが、これを現代に生かして實踐したるものは卽ち吾が渡邊海旭氏である。この點は全く異數に屬する。

渡邊氏の活動は多方面に及び、延いてその功績も亦多樣に亘つてゐるが、特に忘れることの出來ないのは、社會事業に先鞭をつけ、その啓發に努力したことである。同氏が歐洲から歸朝した當時の佛敎界否吾が國の狀勢は猶慈善とか積善とか乃至感恩等の觀念のもとになされた、所謂慈善事業の範圍を出でなかつた。だが、歐洲に於て斯の方面の知識をも得て來た同氏は夙に慈善事業から社會事業へと發展すべきものとの考へから、淨土宗勞働共濟會を中心に、時代に卽し大衆に

騷ぎ乍ら講堂へ入つて行つた、先に行く生徒の話聲が水に落した墨汁の如くスーッと消えてシンとなつて行つた。卽ち當の先生が講堂の入口に腕組して、いつも伏眼勝ちのあの大眼をカッと開いて入口を睨らんでをられたのである、然し五分と經たない中に講義が始つたが、その語氣態度には少しも怒つてをられるものは感ぜられなかつたそうだ。また生徒等が植木鉢を火鉢の代用にして敎室の一隅に大穴をあけてしまひ、もう十中八九は退學ものだと流石の豪傑連も意氣銷沈してゐると、先生が來られて『危ないから止めたらいいです』と唯一言云つたきりだつたと。

×

一時、芝中にも大分カンニングが流行したことがあつて、こんな事を極度に嫌忌される先生は一日遂に全生徒を講堂に集め身を巖に語氣を勵まして『純眞なるべき學生が、この破廉恥を良いと思つて居るのか！わからなければ天に問へ！　天帝に問ひ奉れ！』と痛嘆されたそうで、これが芝中に

於ての教育家であつた。別語もて云へば社會改善家であつた。所謂る佛法を王法に寓し王法を佛法に託し、最古の思想を最新の事體に應用す。師の如きは獨り淨土宗のみならず、又た佛者中のみならず、凡有る宗教家中の典型的人物に庶しと云はねばならぬ。

更らに師が一生不犯の獨身生活をなし、恒に學生と寢食を共にし。葬儀に請ぜらるゝに際しては逆に香奠を持參したと云ふが如きは、獨り師に於て見る可きもの。我等は返すがへすも行誡上人以後の一人として、追慕の情に禁へざるものがある。

（東京日々新聞）

無慾の哲人的老書生

法學博士 松井茂

君は六十二歳を以て卒然として此世を去られたが知人は何れも一人として其の死を悲まざるものはなかつた。畢竟君の高德は餘りに高く何れの方面より見るも、處として可ならざるはなく、殊に其の關係せられたる事業の、夥しく多方面に亘れる事は眞に驚くの外はない。蓋し君は何れの事業に對しても、一視同人的に熱心以て事に當られたるが爲めに、君を主催者とせる團體は、何れも皆其の長としての君に對し心の底より敬服して居つた次第である。殊に君は久しき間淨土宗の執綱として其の難局に當り、從來大に紛糾し來りたる狀態を、君の崇高なる人格と、敬服されたる德望とに依り、一朝にしてよく之が解決を見るに至つたも

の本還寺、毎年此の數年來、夏の二三週間を必ず其處に送り、そして奇麗な庫裏も建てた。門前に「函嶺第一勝望湖臺」と自ら書いて標示した。

×

明治四十五年先生が主唱して佛教徒社會事業研究會と云ふのを創設したが、之が日本で社會事業と云ふ名稱の生れた最初である。それまで慈善事業とか、感化事業とか救濟事業とか、防貧事業とか云つたやうな言葉が用ひられてゐた。

×

先生が國士型の人であつたことも名高い話だがとくに古くから大亞細亞主義を提唱して、印度、支那等の各國の志士と往來して居つたことも著名な話柄の一つである。印度の志士ボース氏などは生佛のやうに崇拜してゐる。

×

先生が詩文の達人であつたことは云ふまでもないことではあるが、興湧けば直ちに詩作朗吟し、斯道の一人者、小林雨峰大僧

て量るほどある。けれども我等の尊敬する宗教家は、幾許かある。その中に於ても、渡邊海旭師の如きは、學德兩ながら高く、然も佛教の奥旨を、日新の世相に應用し、佛法王法兩ながら其宜しきを得可く、身を忘れて、盡瘁したる、良とに極めて稀なる一人と云はねばならぬ。然るに今や其人にして逝く。宗教界には確かに、大なる缺陷が出で來つた。

師は明治五年一月生れであれば、本年は滿六十一歳。古の人生五十を過ぎる十一年なるも、現代に於ては五十六十は、働らき盛りだ。然も師は明治三十三年獨逸に留學し、四十三年歸朝。足掛け十二年滿十一年を海外に送りたれば、其の活動の期は、寧ろ六十以後に俟つ可きものが多かつた。

記者は師と深交と云はざるも、亦た世俗の所謂面交ではなかつた。師が學者として如何なる造詣あるかを詳にせざるも、梵語學、哲學諸科、宗教學を修め來れる經歴に徵して、佛徒中有數の學者であつたことは、云ふ迄もない。

けれども記者が師に敬服したるは、其學問よりも、宗教家として、特に現代の宗教家として、其の宗教的感化を、世間に普及せしめたる點である。師は學者よりも、寧ろ教育家、教育家よりも、寧ろ世相改善家であつた。

師は大正大學の教授たり。明治四十五年以來、芝中學校々長たり。大正八年以來國士館評議員として教授を兼ねた。而して近くは滿洲に於ける鏡泊學園總長の重任さへも引き受けた。而して師が不起となりたるも芝中學校長として、新正の儀式に病を力めて、禮服を著け其務を果したる爲と聞く。

然も師は單に學校の教育家たるばかりでなく、大なる意味に於て、廣き意味に

×

先生は襟卷と手袋は一切用ひず。煙草は勿論のまず、手持無沙汰の時は大てい詩を口づさんでゐた。講義の時にはいつの間にか黒板と向ひ合ひになつて、聽衆や生徒の方へ尻を向けて仕舞ふ。「先生見えません」と云ふと「そうですか、そうですか」とあわてゝ向き直つて今度は机の上を頻りになでながら下を向いてやり出す。正に處女的はにかみ。

×

外國の新著や雜誌は斷えず見て居られた斷えず知識が豐富であつたのも此の邊にもよるので、人知れぬ刻苦勉勵も窺はれる。簡にして要を得る主義だけに名づけ親としても名高い。その結婚戒師による夫婦の數程多勢子供の名づけもある。一般向で有名なところでは、慈善事業への「社會事業」、「カルピス」、「大東出版社」などはみんな先生が名づけたものである。

×

自然を喜ぶ先生の一番好かれたのは箱根

人間何人も死を免がれるものはないのであるが、君の如く死後に於て各方面より痛惜哀慕されたものは、特に今日の如き澆季の世に於ては、いと稀に見る所である。聞く所によれば、君は始終獨身生活を營み、眼中貴賤もなく、又貧富もなく、宛然無慾の哲人的老書生とも稱すべきものであつた。友人高楠博士が一朝にして其の最も親しき悌友たる君を失ひ、大に落膽されたのも偶然ではない。

頃日、芝中學校同窓會員多田野俊彥君は、余に對し特に故人に對する所感を需められたので、余は前述の關係上誼に於て辭すべからざるものがあるので感を述べて聊か哀悼の意を表したる次第である。

（芝中校友雜誌）

大乘佛教興廢に關する問題

宗教局長　下村壽一

現今の政治界官界或は佛教界學界等の諸方面には、所謂偉大なる人は少くないと雖、ほんとに自然と頭の下る樣な人物は極めて稀有である。

渡邊海旭師に一度でも接觸したものは、皆感を同じくするに違ひないと思ふがその人格は圓滿無碍、純眞崇高で、いつも春風駘蕩たる中に、毅然として何物をも凌すことの出來ない樣な氣魄をもつておられる樣で、自然と敬慕の情にかられる。渡邊師には色々優れた點があると思ふが、この人格の偉大さ氣高さには、自分は平素からうたれてゐた。

これは渡邊師の天稟の素質によるであらうと思ふが、師の信奉してゐた大乘佛

て世話になつて居た。そこでいつか誰云ふとなく先生の住職地深川の西光寺のことを國際テンプルと云ふ樣になつてしまつた。

×

先生は教學に對する關心が鋭敏で、時事論説の大半は、是れに費されてゐる位であるが、世界的名著と稱されてゐる彼の南條文雄博士撰述の英譯大明三藏聖教目錄の再刊に就ては補正索引編成方針等は、多く先生の考案に成り、自ら本緣並に補正等數十部を引受け、また出版費等の援助等もされてゐた。『密教發達史』を著して學士院賞を受けた大村西崖氏が、それが爲に恩師權田雷斧大僧正から破門的な面責に遭つた時なぞ問題を其處迄に至らせない爲に先生が蔭にあつて人知れず苦心されたことは非常なものであつたし、海外留學生の相談や世話などは、まつく痒ゆい處へ手の屆く親切振りで、大いに此の點を德とされてゐた。

×

先生は一面に非常に細心な注意力を具へて居られたが、大膽、無頓着であり風彩な

のである。又君は高楠博士等と共に世界的大事業とも稱すべき浩瀚なる大藏經の刊行を完成したのであつた。而して余の始めて君を知るに至つた動機は、昔年余の四男が芝中學に入學したる關係上余は其父兄として校長としての君を熟知するの機會を得たのであつたが、當時の余の君に對する直感は君は單に校長としての職にあられたものと見たのであつた。然るに一たび君の逝去されたる跡を鑑みるに如何に君がそれぞれ自己の關係せられたる方面に對して熱心であつたか、眞に敬服の外はない。余は其の後財團法人中央社會事業協會や交通協會等に於ても、君に見ゆるの機會に接した事も少なくなかつたが、余の眼に映じたる君は玲瓏玉の如く淡水の如き人物であつた。又君は何れの人に對しても毫も之を疑はず、眞に稀に見る美質の持主にして、流石に佛法の眞理に大悟徹底せる超然的人物と稱すべきものであつた。而して君は夙に種々の大志を抱き、殊に晩年に於ては新滿洲國の教化事業や歐米最近の精神界の視察や、君の造詣深き宗教學方面に於ける研究上の發表等明かに之を推知し得る事が出來たのである。然るに國家多難の此の時に當り、一朝君の如き偉大なる人格者を失ひたる事は、實に國家の一大損耗と云はざるを得ないのである。

余の舊友京都帝國大學醫學部名譽教授足立文太郎博士は、曾て獨逸に於て君と相約し「自分が早く死なば、君に讀經を乞ふべく又君が余に先だつとせば、余は君の爲めに解剖の勞を取るべし」と互に相誓つたのであつた。然るに足立博士は君よりも高齢なるに關はらず博士は終に之が約を果すこととなつたのであるが、博士によりて君の病名も判然するに至つたと云ふ事である。

正などはつねに、激賞してゐる。とくに原敬氏遭難當時増上寺に行はれた同氏の追悼會に渡邊氏の讀み上げた追悼文が非常に有名なものとなつて、政友會長老望月圭介氏などは「あんな名文で讀まれるなら、俺も死んでみたい」とまで云はれ、また小田原の某女學校ではこれを教科書の一節に採用したと云ふ。また『大正新修大藏經刊行趣旨』や『荻原教授還暦記念祝賀論文集序』などは天下の名文範と稱されてゐる。

×

現にドイツ領の錫崙に居るエルゼ・ブッフオルッ孃と云ふカイゼルの遠縁に當ると云ふ婦人が、はるばる獨逸から尋ねて來て是非弟子にして尼さんにさせてくれと、云つてせがんで止まないのを、なだめ、斷るために餘程先生も手古摺つてゐた。

世界各國の人々が先生を頼つて寺へやつて來れば喜んで世話をしてゐたが、獨逸の佛教僧ニヤナチロカ博士とか同博士の弟子のワツポーとか又露西亞の佛教徒ロセンベルグの諸氏の如きはほとんど兄弟の様にし

獨、英、米等の佛教界關係の集中點となり、右の各國の亡命志士などが頼つて來て世界的梁山伯といつた形だつた、有名な獨身主義で、その代り年中お寺には十數名の書生を養つてゐた多忙な身を以つてなほ研究を怠らず、先年帝大を始め佛關係各大學を連繫して佛教協會を主唱創立したのも君であつた。著書には「歐米の佛教」或は高楠博士と共に刊行した「大正新修大藏經」など代表的なものであるが、師を失つたのは淨土宗ばかりでなく、佛教界更らに日本の宗教界のために惜しみても餘りある事である。

宗教界に於ける雪中の梅花

神道管長　神崎一作

畏友渡邊海旭氏が長逝せられた。君を失ふことは眞に哀惜に堪へない。同君の存在は單り一宗一派に於ての存在でなく、全宗教界の現況に顧みて眞に損失である。

君は宗門の大學を出て永く獨逸に遊び、眞摯なる學者であつたと同時に、實際の社會事業家であり、一面重厚なる教育家であつて、又一宗の行政事務家でもあつた。終身獨棲を守り、淸廉にして恬淡、篤實圓滿なその人格は神、佛、基の各宗教を通じて事に當つて克く協調を保たしめた。

曾て米國の移民に關する人種差別問題に就き、我が各宗教家が蹶起して組織した日本宗教家懇話會を前身とする日本宗教協會の如き君は當初から理事として盡力され、協會が主催して昭和三年に開いた日本宗教大會も同五年の世界宗教平和會議の準備大會も、君は常に三教者の間に立つて佛教五十六派を協和披導し、世界の平和と日本の教化とに盡瘁されたことは、宗教界に對する一大業績でなければならぬ。

現代の宗教界には學者も思想家も理論家も評論家も多々ある。併し文字通り言に訥にして行に敏なる君の如き人は蓋し又まれであらう。今や斯の宗教界に於て雪中の梅花の如き高潔なる君の風丰を看ることの出來なくなつたことは啻に佛教界の損失たるばかりでなく、汎く宗教界の損失であり一大痛事であると謂はねばならぬ。

（讀賣新聞）

渡邊君の追憶

高島米峰

渡邊君が獨逸に留學したとき丁度吾々の新佛教の雜誌の

敎の精神が師の全身全靈を通じて現れたものに外ならないと考へる次第である。

畢竟ずるに大乘佛敎と云ふものが、渡邊師に依つて表現せられたものに外ならないと思ふ、名門利德に恬淡として世のため人のために、不惜身命に盡されたことも亦大乘佛敎精神の發露にすぎないと思ふ。

渡邊師の遷化は如何に考へても、師一代の存在の問題でなく、我國に於ける大乘佛敎の興廢にも關する問題である。延いては現今の精神界に於ける大損失と云ふても決して過言ではないと思ふ。

かへすがへすも遺憾の極である。然し斯くなる上は最早歎いても詮なきことである故に、何んとかしてこの偉大なる損失を補塡する樣にせねばならぬ譯で、それは師の直接の薫陶を受けられた門弟の方々、更に大にしては淨土宗門全體の方々、又更に大にしては全佛敎徒に向つて、師の志を承繼して、師が終生の念願とせられてゐた大乘佛敎の擴充普及と云ふことに、努力精進して下さることを切望して止みません。如何に葬儀は盛大に擧行され樣とも、後々にこの損失を補塡し承繼する人が出なければ、眞に師に對し報恩感謝すると云ふことにならないと考へるから、是非とも皆樣の奮起を熱望して止まぬ次第です。（敎學週報）

八面六臂の人

文學博士　常盤大定

渡邊君は八面六臂の人で、學界、敎育界の外、音樂方面、或は滿、支、印、佛、

どもキチンとしてゐるクセにドコか一つ拔けてをられ、カフス釦を落して紙捻りで間に合せそれで講演されたり、座談などに實が入つて來ると、着物の膝でもなんでも突いて穴があくのも平氣でやつてゐたり、見てゐる方がハラ〳〵することが多い、大きく細心といふ諺は一見パラドックスのやうだが、先生の性格には完全にあてはまる。

×

先生は『渡邊の安請合』と云はれる位に、何んでも人からの依賴を引受ける、そして忘れることも多い、よく先生から海苔を送つたからとか、オモチヤを送つたからとか云ふ手紙を貰つた人々で、その品物をうまく受取た者はタンとないと云はれてゐる。

×

先生が入洛されると、何を措いても先づ知恩院に登嶺。執事長室に落付くが早いか直ぐ黑衣の上に如法衣をかけて、扇子手にして老管長に謁見を待たれる、そして謹嚴な面持で脇目もふらずさつ〳〵と鶯張りの廊下を通つて老管長のお部屋へ行かれる。

氣がさしてゐるのではないかと、誰も考へていた處であるが、右の兩君が西光寺を訪問したとき本堂ですばらしい聲でお經が讀まれていた。まさか洋行歸りの渡邊君であると、思いもよらなかつた兩君は頗る驚いたと云ふ事である。これはあたり前の事である樣だが、燃へる樣な信仰のあるものでなければ到底出來ない仕事であると考へる。

爾來今日に至るまでの渡邊君の行動經驗は、信仰の發露で信火が内に燃へて、行煙外に現はると云つた樣なものであつた。そこに渡邊君が萬人から景仰せられ、敬慕せられ、尊信せられた所以があるのだ。

又彼は日本佛教界に於ける安全瓣であつた。寄ると觸ると議論だほれになつて、なに一つ纏まらない、日本佛教各宗の間に立つて、ともかくも何事か片附けいつたと云ふことは、眞に渡邊君の力であつた、彼の居る所そこには平和が伴つていた。

淨土宗内に於いてもかなり政爭の激しい時代もあつたが、一度渡邊君が顏を出す時、その醜い政爭も平和な姿に立ちかへることであつて、宗内と云はず、宗外と云はず日本佛教界は渡邊君によつて、しば／＼危きを救はれたと云ふてよいのである。

又渡邊君はたんなる安全瓣だけではなかつた。彼は佛教界の指導者であつた。彼の多方面なる知識。それは全佛教徒の進むべき機會と道とを、指示してくれたのであつた。これに依つて佛教徒が内に於いて何を爲さねばならなかつたか、他に向つて何をなすべきであるかと云ふた樣な場合、いつも履み迷はずに前進することが出來たのは、渡邊君の力があづかつて甚だ大きいと云はねばならぬ。

佛教が國際的に若干の進出をなしたとするならば、それも勿論渡邊君に負ふ處が多いのであり、國際的に何を爲さねばならぬかを知り得たとするならば、それも渡邊君に負ふ所が多かつたのである。

渡邊君の性格は實に八面玲瓏であつて、全く敵の存在を許さなかつた。一度渡邊君に接する者は皆その德に服し、一度も渡邊君に接せずして然も彼を敬慕すると云ふた樣な者も甚だ少くなかつたことは、畢竟彼の八面玲瓏の性格がしからしめたものと云はねばならぬ。

ひとり佛教徒間に於いて、その德が慕はれていたと云ふのみならず、神徒の間にも、基督教徒の間にも渡邊君と云へば、眞に日本佛教徒代表者であると信ぜられてゐたのであつて、

來ていた時で、彼が出立にのぞんで十圓會へ寄附して、その時僕は生涯結婚をしないつもりだから生活が簡單に行くから仕事に金を出すことは幾らも出來る、ともかく十圓おいて行くと云つて十圓寄附して出立した。

海外へ出掛けるものが出立に際してはたとへ一圓でもより多く持つて行きたいと云ふ場合だのにそして吾々友人から餞別もろくにしなかつたのにその時の拾圓と云へば相當の金額なのに、それを自分の獨身生活に結付けて、投出して行つたと云ふことは、彼が吾々志士の運動に如何に同情をもつていたかと云ふことが分るが、それよりも彼がその當時終生獨身で暮すのを決心していたことを知ることが出來る。

十二年振りで獨逸から歸つて來て、僕は色々の點から考へて、彼の獨身主義に相當の危險あるものと思つたから、先づ第一に結婚しないかと、勸告したものであつた。然るに彼が云ふのに結婚はしない、少くとも寺院の中で生活してゐる間は斷じてしない。と彼は極めて嚴肅なおもむきで斷つた。僕はその時限り再び結婚の問題を提出することをしなかつたのである。

寺院の生活をしてゐる限り結婚しないと云ふ一言の中には、頗る多量の意味が含蓄されてゐると思ふけれども彼はそれを凡ての僧侶に強要しない。

たゞ彼は自己の信ずる處を自己が行つた。そこに彼の面目を見ることが出來る。

此の如くして彼は終生親たらずして終つたのであるが、然し彼は世間の普通の親達よりは、遙に多くの子を生み育てたのである。彼の青年を愛すること、眞に親の子を愛するが如く、實に行屆いたものであつた。西光寺は一種の學生寄宿舍であり、青年佛教徒のクラブでもあつた。集り來る青年は皆彼を師として尊敬し、親としていたゞいてゐた。

今日本の佛教界で中堅となつて働いてゐる人材は多く彼の弟子であり、彼が親しく育てた子である。彼の獨身主義は寧ろ彼をして偉大なる親たらしめたことになるわけである。

彼は又信仰の人であつた。彼が學者であることはもとより云ふまでもない。が彼に最も優れた點は、信仰の人であると云ふことである。獨逸から歸つた二日目か三日目の時と思ふが、高楠、姉崎兩君が彼を西光寺に訪ね、十二年も歐洲にいて歸つたのであり、長い間異鄕に學生生活を續けた彼であるが故に、佛事法事と云ふ樣なことには、寧ろ嫌

眞に敬服致しました。

これが神佛のものは一物もそまつにせず、弟子を親が子供を愛する様にするお方と思つた。

後から聞いたことですが、毎朝經をあげるとき、燈明にあかしをつけ、蠟燭をとぼすときなど、弟子達が二本を續けてマツチを使ふことを、惜しまれたと云ふことである。マツチを惜むその中には、多數の學生を養ひ、外國人などを世話してやり、多額の金を出してその面倒を見てやるなどされた。

今のあらゆる社會を通じて全く類例のないことであつて、これは理想的な沙門であると痛感し、敬慕する所以であります。

（教學週報）

愛國者で人道主義者

印度志士　**ラス・ビハリ・ボース**

私は渡邊先生に始めてお目にかゝつたのは、今から十二三年前からだと思つた、勿論その前から先生の高名をうかゞつていたが、私の政治上の事情があつて、約十年間ばかり隱れた生活をせねばならなかつたのでそれまでは公然と先生とおめにかゝれなかつた。

丁度當時東京外國語學校の印度語教授の印度人アタール氏が非常に熱心な愛國者なる故に、英國大使館からあらゆる强迫されて遂に自殺するに至つた。その時渡邊先生が同情し、のみならず葬儀に關し費用なども持ち、その遺骨をわざ〳〵先生の門下生青柳君に印度のアタール氏の親戚の處まで持つていつてもらつたことがある。その時であるがある坊さんが、此の如き事情の下で自殺したのであるから、青柳君が印度へ行けば英國の官憲に必ず判る。その結果として青柳君は縛られるかもしれないから、青柳君は印度へ行かない方がよいと云ふたことがあつて、其の事を聞いた先生は、吾々は佛の使である、吾々の恐れる所は釋迦より外に誰れもない。吾々としては正義人道の爲に命をかける事が出來なければ、眞のお坊さんになれない。故に吾々は正當のことをするには、どんなに强迫されても迫害されても死刑にされてもこの使命を果たさなければならない、と。

これに依つて渡邊先生がたつた一つだけ恐れることは、釋迦の前だけで、世人に恐れることは一つもなかつた。又これに依つて自分の生命よりも正義人道を重じて居られたことが證明されるのである。

眞に佛教界たゞひとりの僧寶と云ふべきであつた。

日本佛教界に於ける社會事業の如き、又渡邊君の指導啓發に負ふ處が多かつた所は、云ふまでもない。

明治以後の社會事業が一時殆んど基督教徒によつて獨占せられたかのうらみがあつたのだが、渡邊君が歸朝して以來、貧弱なる社會事業に對し淸新にして且力强い指導を與へてくれた爲めに、次第に發達して、今日では基督教徒に比べて遜色ない位で、寧ろ一歩先んじてゐる狀態となつた。此の如きも眞に渡邊君の功績として讃歎せねばならぬ一である。

それは要するに渡邊君は、六十年の生涯を殆んど人のために世のために生き通ほしたと云ふべきである。かるが故に世の滅せざる限り、人の滅せざる限り、渡邊君は永遠に生きて働いてゐることになる。

（教學週報）

信者の一人として

中村屋　相　馬　愛　藏

渡邊先生が學問があり、國際的に非常に働きのある、お方であつたことは申すまでもありません。ただ私が先生におめにかゝつた中に、一つ二つそれこそ模範的理想的の沙門であると思つたことを御話致します。頭山滿翁と先生と私と三人で、私の婿のボースの處へ、三周忌の墓參りに行きました。頭山翁と先生とは初對面でした。車中頭山翁が先生に御子さんがあるかと尋ねられました時先生は、私は家内をもちませんから、子供がないと云はれましたので、頭山翁はこれは珍らしい、ではあなたのお經は一段と有難たいと云はれました。

先生は謙遜に面倒くさいから家內をもたない、とこともなげに云はれました。私は沙門ですから賞めて頂くには及ばないと云ふ態度で話されました、普通なら「私は沙門ですから」と云はれるのですが。總理大臣でも子供位に思つておられる、頭山翁もそれから感服せられて尊敬しておられます。ですから頭山翁との御交際は幾くらでもありません。

私の處でお經をあげていたゞいた時、折辨當をとつて食事代りにしました。その時先生は折箱についていた所の一の米粒までも奇麗に洗つた樣に召上り、お惣菜は大部分殘し、それを丁寧に紙で包んで、これを家に持つていつてくれ、寺の若い者にやりたいからと云はれました、御志には

渡邊海旭上人弔歌

土井晩翠

昭和八年　一月の末、
五蘊の集り　ほどけ行き、
聖衆　來迎の　紫の
　雲に　乘り行く　海旭師、
　諦譽上人　高く去る。

五天の昔　跋提河、
岸邊に　近き娑羅双樹、
二千年前　大聖の
　滅度　悲む　有情の群、
　波間に　楫を　折る如く――

理は　寂光を慕へども、
情は　煩惱の暗に　泣き、
たゞ　惘然と　茫然と
　我を忘れて　測りなき
　天のあなたを　仰ぎけむ。

今はた　こゝに　東海の
旭日の　邦の　佛門の
子ら　英靈の　別れより
　恩愛の　焔　胸を熬り
　無明の　涙　眼に滿つ

思は深し　深川の
淨刹、君の　西光寺、
都門の塵は　深くとも
　妙境　別に　風淸く
　月も　澄みけむ　西光寺。

室に　脂粉の　香を絕ちて
夜半の　窓に　襟正し、
梵文　貝葉　秘を開き
　幽を　探りて　學海の
　底に求めし　玉光る。

其の時私は始めて先生は眞のお坊さんであることが分つたので先生を今日迄敬服して來た。印度のことに付政治上、或は個人的印度人のことに付いて、先生に相談した時は必ず援助をしていただいた。單なる印度のことでなく、世界人類のためになることがあつた時は、必ず渡邊先生は出來る限り御援助を與へてくれた。渡邊先生は個人的に印度人、ビルマ人を多勢世話をしたことは、一般に知られて居ないが、印度人ビルマ人のみならず、獨逸人セイロン人でも其の他の國の人々でも、先生は出來る限り援助してゐたのである。

一昨年も丁度アタール氏の十周年に當つたので、私は先生の所に行き（淨土宗務所へ行き）十周年の法事をしたいと思ふと云つたら、大いに喜こばれて、あなたは一向心配しないでくれ、私が準備をするし、費用も持つ故、アタール氏の知人友人に知らせて連れて來てくれと。實際私は此の言葉を聞いて感激に耐へなかつた。丁度此の日に西光寺へ行くと先生自から費用を出して置いてくれたのみならず、すつかり準備がしてあつた。

此れを見て先生が單なる人格者であるのみならず、すぐれた所の坊さんであり、坊さんの本務をつくして居られると、私ばかりでなく其の式に參列していた者は思つたことであらうと思ふ。

悟りを開くには三のことが必要である。一は知識的、二に信仰的、三に實行的でなければならない。

先生は此の三の道にすぐれていた知識的にも獨逸語梵語其の他のことは申すまでもなく、信仰的には朝早くおつとめをせらるゝことは勿論だが、今度の主なる原因は、病氣にも不拘、元旦に學校へおつとめに行つてから、安心して床につかれた。實行的に優れておられることは日本人ばかりでなく、外國人まで認める。

坊さんは世にざらにある。衣を着たら坊さんになれるものと云ふ考が澤山ある。心の坊さん、知識的にも信仰的にも行爲的にも、ほんとうの坊さんは先生のみであつたと思ふ。先生は單なる佛教徒のみならず、熱心なる愛國者であり、人道主義者であつたと斷言して憚らない。人道主義であつた上に、その釋迦の敎の善い所を理解し悟つて、實際生活に毎日應用しておられたので、佛教界ばかりでなく、日本のみならず、全世界の損失であることは云ふまでもない。

（敎學週報）

わが海旭師　今あらず。

學あり　信あり　德ありて
更に　稀世の　才を兼ね、
六十餘年　塵の世に
　宿せし　四大　その本に
　歸れど　英靈　永く生く。

三千の子弟　共に哭く
敎の庭の　芝蘭の香、
流芳　遠く　百年の
　末に及びて　大乘の
　道に盡さむ――君は生く。

日輪　西に傾きて
懸鼓の如く　大空に
燦爛の光　放つとき、
　紫磨黃金の　おほひなる
　影に伴ふ　師を思ふ。

「娑婆の　往復　八千度」
その美はしき　本生の
譚にこもれる　不朽の眞理、
　極樂　莊嚴の　鄕よりぞ
　君また　穢土に還るべく。

「衆生無邊誓願度
煩惱無盡誓願斷
法門無量誓願學
　佛道無上誓願成」
諦譽上人　永く生く。

渡邊海旭師を悼む

文部督學官　森岡常藏

かをり高き　寒梅一夜　折れにけり

思ひ出や　獨逸の冬を　唱和の夜

世界の上に　斯の道の
ひとつの權威──君ありて
西歐に　蒔く　大乘の
　種ぞ尊き、幾何の
　春秋の後　結ぶ實か。

マロニの葉影　繁り合ふ
セイヌのほとり、──リンデンの
街も等し、更に今
　狂妄　無慙の　空ながら
　ネワの岸邊も　縁あらむ。

更に　隣邦　中華の郷、
江南の梅　薫るほとり、
誠ひとしき　敬信の
　群と結べり　道の上。
　（夢の　一時の　亂れなぞ）

雪山　恒河　ダーヂリン、
夢寐に　忘れぬ　五天竺、

印度の　志士に　一掬の
　熱き涙を　そゝぎけむ、
　アタール　逝けど　ボースあり。

大陸の風雲　次第に動く
昭和の　春に　慨然と、
亞細亞聯盟の　おほいなる
　理想を　胸に　描きたる
　熱き血　日本の子なりけり。

『連迷』四十餘　認識足らず、
盲は　盲の　手を引きて、
東亞百年　平和のもと
　愛親覺羅　發祥の
　滿洲を　知り得ざる時──

その滿洲の　教化の基、
「鏡泊學園」の　長として
盡くすべかりし　明日の命、
　天か　塵界の　縁盡きて

略年譜（主なる著作論文を附記したるは研究道程の參考に資する爲）

◇渡歐前

明治五年	一	〇一月十五日、東京市淺草區田原町に生る。（渡邊啓造氏長男）
十七年	一三	〇博文館小店員となる。
十八年	一四	〇小石川區初音町源覺寺端山海定師（西光寺前住）の室に入りて得度す。
二十年	一六	〇淨土宗學東京支校に入學。
二十二年	一八	〇淨土宗學本校に進轉す。
二十八年	二四	〇七月、淨土宗教學本校全科卒業、淨土宗第一教校教諭拜命、淨土教報主筆就任。
二十九年	二五	〇二月、淨土宗内地留學生を命ぜられ比較宗教學を專攻す。
三十年	二六	〇三月、「女性崇拜教と（Sektism）及其祕密佛教との關係」（佛教一二四號）
三十一年	二七	〇五月、「師僧隱退の後を受けて西光寺十六世住職となる。 〇五月、「婆羅門教と佛教の混合」（佛教一三八號）
三十二年	二八	〇七月、「拉摩教の分派其發達」（佛教一五二號）〇新佛教徒同志會同人となる。

◇滯歐中

明治三十三年	二九	〇五月、第一期海外留學生に選ばれ獨逸に渡る。〇爾來ストラスブルグ大學に於てロイマン教授グランド教授に就き梵藏巴の佛教各語を研究し、それを基礎として比較宗教學を研鑽す。カイザーウイルヘルム第二世大學其他の招請に應じて佛教學を講じ兼ねて自己の研究の完成に努む。又屢々獨逸東洋學會雜誌、英國巴利聖典協會年報等に研究を發表す。普賢行願讚、孔雀王經、較足王の研究其他密教に關する各種の研究論文あり。
明治三十五年	三一	〇十一月、「普賢行願讚の日本梵文に就いて」（東洋哲學九卷一一號）
三十六年	三二	〇二月、「拙稿普賢行願讚の日本梵文に就いての補遺」（東洋哲學一〇卷二號） 〇六月、「華嚴經の梵名に就きて」（宗粹雜誌七卷六號）
三十七年	三三	〇四月、「一楞學人に寄す（于闐迦濕彌羅の佛教に關し）」（宗粹雜誌八卷四號） 〇五月、「濫讀半日、元史譯文正補佛教統一論、大乘佛教史論、佛教聖典結集の評」（新佛教五卷五號）

昭和八癸酉一月念六日、道友壺月渡邊海旭上人遷化、仍賦七律五首、奠之、

雨峰　小林正盛

聞訃猶疑夢歟眞。迷川從是失梁津。嘗航歐土探淵藪。將入滿洲施惠仁。吐鳳文章興後進。呑牛意氣感明神。溘然君逝招難得。寂寞空山洗鉢人。君生前、有滿洲鏡泊園學長就任之報、遂不果、

林苔巖曰、辭旨温雅、讃允當、

其二

屋梁落月思依依。隔斷幽明事已非。遺詠鏘鏗金玉響。溫容髣髴霧煙微。交游卅歳同泡電。事業終生關樞機。還暦二篇爲絶筆。驂鸞直向帝鄕飛。

又曰、主客交出、面目躍然、

其三

海內叢林誰拔群。赤髭白足獨推君。秉心堅確淸於雪。處世明澄淡似雲。夙養英材開活眼。新修聖典見豐筋。今朝擗踊懷亡友。涕涙滂沱意緒紛。

又曰、君子不壽感慨係之、

其四

春寒移疾臥柴荆。四壁蕭然暝色橫。雲影低迷天帶涙。水聲嗚咽地含情。渺茫塵海失舟筏。慘澹紺園無啓明。慨世傷時感何限。藥爐火燼夢難成。

又曰、有情有景字字涙痕、

其五

奈此空門寂寞秋。巨星落地涙頻流。群邦劔戟積年礪。絶塞風雲隔海愁。除却伊人射蛟手。爭行斯界失津舟。緣山埋骨招魂夕。遙望東天登客樓。

又曰、眞俗幷叙、析理入微、

又曰、據實攄揚、嘔心傷悼、五律無一泛響、無一堆垜、非老手不能、讀畢闇然、

年	年齢	事項
		一九巻五號） ○五月、各宗有志と共に佛教徒社會事業研究會を起す。 ○六月、「于闐發見の大品般若斷片」（宗教界八巻六號） ○八月、「摩咥哩制吒讃佛頌の原文」（宗教界八巻八號）
大正二年	四二	○一月以降荻原雲來博士と共編に成る翻譯名義大集を宗教界に連載す。 ○九月、「大佛教の社會的基礎」（宗教界九巻九號）
三年	四三	○十二月、「大藏會所感」（新佛教一五巻一二號）
四年	四四	十一月、佛教護國團理事となる。
六年	四六	○四月、「京都百萬遍知恩寺什寶多羅葉梵篋に就いて」（宗教研究一巻四號）
七年	四七	○十月、義淨譯金光明最勝王經開題（宗教界一四巻一〇號） ○「歐米の佛教」刊行（丙午出版社）
八年	四八	○國士館教授となる。 ○マハヤナ學園監督となる。
九年	四九	○十月、「大乘佛教と兒童教化序」（無碍光一六巻一二號） ○淨土宗東京教區布教團長となる。
十年	五〇	○二月、深川商業學校長となる。
		○四月「伊帝曰多伽の漢譯に就いて」（無碍光一七巻四號） ○四月、「漢譯佛典に於ける最古のラーマヤナ書」（無碍光七巻四號） ○五月、「バワー文書に對する漢譯の適合書」（無碍光一七巻五號） ○門下生の手になる現代意譯佛教々典叢書を監修す。
十一年	五一	○二月、「祈禱を要せざる宗教」（無碍光一八巻二號） ○五月、高楠博士と共に大正新修大藏經の發刊を發願し都監として編修に努力す。 ○七月、「法然上人の選擇主義」（無碍光一八巻七號） ○九月、中央佛教會理事となる。 ○借地借家調停委員となる。
十二年	五二	○四月、增上寺教監となり、早朝日曜講演二ヶ年に及ぶ。 ○五月、「羯磨沙波陀物語幷に印度文學中に於ける其發展」（無碍光一九巻五—七號） ○九月、關東大震災に際し住房西光寺燒失す。爲に心血を濺いで完成し出版を前にせる「孔雀王經の研究」「理趣經の研究」等の原稿を初め書籍什物すべて烏有に歸したり。
十三年	五三	○六月、日本宗教協會理事となる。 ○十月、日印協會理事となる。
十四年	五四	○四月、大正大學の創設せられ教授に就

		○九月、「陳那及び其出現の時代」（東洋哲學一一卷九號） ○九月、バーセルに於ける萬國宗教史大會へ出席。
三十九年	三五	○五月、「眞言祕教の起原及び發達の實例」（哲學雜誌二三一、二三二號） ○七月、「三楞學人の「婆沙結集の疑義」につきて」（新佛教七卷七號） ○十一月、「樺皮の古寫經」（新佛教七卷一一號）
四十年	三六	○三月、「聖菩提樹考」（新佛教八卷三號） ○九月、師僧海定和尚の遷化に逢ふ。 ○十年、「古于闐及珍貴の古物」（新佛教八卷一〇號） ○十月、ドクトル、フイロソフイーの學位を受く。
四十一年	三七	○一月、「現存漢譯祕密聖典の原本」（新佛教九卷一、五號） ○四月、「新に發見せられたる西域古語聖典の研究」（新佛教九卷四號） ○七月、「大般若經概觀」（新佛教九卷七號） ○十月、「天台山珍藏の古梵本に就きて」（東洋哲學一五卷一〇號） ○十二月、「梵文普賢行願讃渡來年時」（新佛教九卷一二號）
四十二年	三八	○二月、「新發見の阿含諸經梵文」（新佛教一〇卷二號） ○三月、「天台山の古梵本に就きて」（東洋哲學一六卷三號）
		○三月、「大般涅槃經梵文斷片」（宗教界五卷三號） ○四月、「大般若經概論をよむ」（新佛教一〇卷四號） ○四月、「漢代佛教古經典の發見」（宗教界五卷四號） ○五月、「普明王本生に就きて」（宗教界五卷五號） ○七月、「大般若經の傳來」（新佛教一〇卷七號） ○十一月、「閱藏百談」（宗教界五卷一一號）

◇歸朝後

明治四十三年	三九	○三月、歸朝。直ちに宗教大學東洋大學教授となる。淨土教報主筆に復す。 ○十月、「囘訖語佛教聖典に就きて」（宗教界六卷一〇號）
四十四年	四〇	○五月、深川區西平野町に淨土宗勞働共濟會を設立す。これ佛教徒社會事業の嚆矢たり。 ○七月、「祕密聖典と摩訶婆羅多」（新佛教十二卷七號） ○八月、芝中學校々長に就任、爾後校舍を改築し校風を一新し以て今日に至る。 ○十一月、「馬鳴菩薩造の佛教脚本」（新佛教一二卷一一號）
四十五年（大正元年）	四一	○一月、「密教の發達及其原文」（東洋哲學一九卷一號） ○五月、「印度の二大革新教」（東洋哲學

感謝錄

本全集刊行に際し故人の遺墨又は寫眞所藏の方にて特に御高配を賜りし方々の芳名並に轉載を得たる雜誌及所藏圖書館書肆等を玆に錄して深く感謝の意を表する。（次第不同敬稱略）

常盤大定　姉崎正治　高楠順次郎
大谷瑩亮　泉　芳璟　小林正盛
眞溪涙骨　金子全應　松濤賢定
中谷在禪　ラス・ビハリ・ボース　出淵豐保
高島米峰　三輪政一　横井徹山
安田秀文　高木藤太郎　小林芳次郎
岡村琴仙　吉水琢磨　吉水大哲
岩間天海　植松壽樹　吉川昌堂
桑原隨旭　加藤朝鳥　魚尾晃瑞
赤平寛導　荻原得定　片桐鎌三郎
甲文二郎　倉島大音　野木沼經善
佐藤良智　佐藤密雄　栗本俊道
榊　隨純　坂田良哉　塚本善隆
友松圓諦　田中玉子　佐藤賢順

伏島孔治　所　金藏　櫻部文鏡
掬池哲雄　石上皆應　稻岡重雄
杉浦良善　井上賢順　古川哲淵
花輪忠男　佐々木利正　召田大定
山上誠一郎　御園圓應　小俣眞誠
宇都宮康賢　竹中堯猷　鈴木積善
加島諦忍　裏辻倫道　泉　敬常
日向稻三　羽淵貞良　杉浦濱順
須賀隆賢　宮原祐山　川崎俊藏
永井高義　上野法雄　荒川辨達
信ヶ原良哉　藤井赫然　上條克己
飯田太奈次　土橋圓祥　塚本善隆
前田聽瑞　當麻定信　柴田玄鳳
三星與市　江上秀靜　松岡行覺
青島照瑞　山本念龍　平川賢純
玉置源一郎　山田鐵郎　石川學純
鈴木淨海　正本實乘　江守錄輔
蓮池德音　中山理賢　兼子達門
田中海應　筒井春香　森田善因
水野梅曉　壬生雄舜　佐藤貞次郎

		任。 ○東洋大學財團維持員となる。 ○是歳以來社會事業功勞者として觀櫻、觀菊御宴御召の光榮に浴す。
十五年（昭和元年）	五五	○「寺院の將來」（中外日報第七八九二號） ○七月、教學週報を創刊其代表となる。 ○十一月、淨土宗執綱に任ぜられ、引續き二期に亘りて重任し昭和七年十月勇退す。 ○大正大學財團理事長となる。 ○佛教聯合會常任理事となる。
昭和二年	五六	○各宗同志と共に東亞佛教大會を主催す。 ○世界日曜學校大會に於て英文「大乘佛教と兒童教化」なる册子を會衆に頒布す。 ○十二月佛教少年聯合團長となる。 ○交通協會理事となる。
三年	五七	○五月、巣鴨家政女學校長となる。 ○十月、大阪上宮中學校理事長として同校の改築增築の事に當り功成る。 ○十一月、國譯一切經の監修となる。 ○佛教音樂協會理事となる。 ○十一月、今上天皇御即位大典の御賜餐に召され、勳六等瑞寶章を賜はる。
四年	五八	○森川智德教授と共に東西の佛教關係の大學教授を中心とせる佛教學協會を創立す。 ○日佛佛教協會理事となる。 ○日本禁酒同盟理事となる。
五年	五九	○岩淵家政女學校長となる。 ○日獨佛教協會理事となる。
六年	六〇	○四月、巣鴨女子商業學校開設、校長に推さる。 ○五月、同志と共に日本青年館に於て日本宗教大會を主催す。 ○東京佛教倶樂部理事となる。
七年	六一	○五月、大正大學に於ける日本宗教學會に於て「孔雀王經の研究」を發表す。 ○六月、大正新修大藏經全八十五卷完成。 ○七月、大藏出版株式會社の創立を發起し、同社成立後引續き顧問として兼て繼續事業たる大藏經別卷圖像部の都監たり。 ○十月、佛教研究所長となる。 ○十一月、滿州國鏡泊學園總長に就任。 ○十二月二十七日インフルエンザにて發熱臥床す。
八年	六二	○一月一日、芝中學校四方拜に列席す。爲めに病勢惡化せり。 ○一月二十六日午前八時、敗血症にて逝去。 ○一月廿七日、屍體を解剖す。 ○一月卅一日、正六位を賜はる。 ○二月一日、大僧正追贈せらる。

昭和八年十二月十六日印刷
昭和八年十二月廿三日發行

壺月全集 下卷
定價金參圓
（上下兩卷にて金五圓五拾錢）

編輯兼發行者 壺月全集刊行會
東京市芝區芝公園地七ノ一〇
右代表者 岩野眞雄

印刷所 萩原印刷所
東京市牛込區山吹町一九八
印刷者 萩原芳雄

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番（大東出版社内）
壺月全集刊行會
電話芝二一一六番
振替東京三四二六七番

（兩角製本所）

岡　弘毅　今井又治郎　石澤久五郎
三好海昶　武田慧宏　上田貞雄
今岡信一良　高瀨承嚴　清水谷恭順
竹內良說　糸山篤恂　飯塚米雨
富田斅純　境野黃洋　岡本貫瑩
原田三千夫　沼部　清　日高源太郎
菅沼靖之　川瀨光賢　黑瀧了雲
笠原彥三郎　西村隆信　三島海雲
藤井實應　原　由利　近藤瑞運
竹內可吉　增田見成　淸水觀碩
古田正平　宮本良善　豐岡博道
黑田成勝　原　善久　窪川旭丈
櫻木龍瑞　三藤佳一郎　小橋麟瑞
藤井草宣　坂田良弘　原田靈道
戶松學瑛　大野法道　大木靈道
倉　靈信　鹿野久恒　相馬愛藏
田中海應　山崎息耕　鈴木靈眞
漆間德定　松谷廣船　中村了達
永井祐誠　鎌田良賢　中谷梅子
大西信道　長谷川基　江藤澂英

山本恭之　名越隆成　藤田泯子
宇野圓空　神谷吉五郎　小林大巖
長谷川良信　中西雄洞　副島八十六
林　春雄　安田善次郎　森　竹五郎
中山忠賢　三枝樹貫道　高田隆光
村上運梢　中山長政　乘井恭一
奈良柱藏　三村淸三郎　笠木良明
森岡常藏　荻原雲來　足立文太郎
箱根町　內原氏　同　井出氏　高野海音

交通協會々誌、淨土宗學友會々報、淨土敎報、敎學週報、勞働共濟、日本國民禁酒同盟、東光、哲學雜誌、佛敎思想、宗粹法話、佛敎年鑑、東洋哲學、宗敎界、芝中學校友會誌、宗敎研究、無礙光、增上寺日曜講演集、大正新修大藏經、廓淸、中外日報、社會思想と宗敎、傳通、秘鍵、新佛敎、佛敎、哲學研究、國譯大藏經、讀賣新聞宗敎欄、明敎、觀音經の研究、敎育と宗敎、活佛敎、精華、料理之友、マハヤナ時報、婦女界

大正大學圖書館、東洋大學圖書館、豐山大學圖書館、大谷大學圖書館、日印協會、佛敎思想社、交通協會、國民禁酒同盟、日本宗敎協會、芝中學同窓會、丙午出版社、甲子社書房、安田同人會、淺草寺、日佛佛敎協會





